

履修ガイド2018

履修の手引き・シラバス

人間生活学部



藤女子大学

目 次

はじめに — 履修ガイドを使う前に —	2
人間生活学部	
ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー	5
・人間生活学科	
ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー	5
・食物栄養学科	
ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー	8
・保育学科	
ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー	10
人間生活学部 学科課程	
・履修要項	15
・履修の手引き	
人間生活学科	33
食物栄養学科	44
保育学科	48
・教育課程表	53
・シラバス	
大学共通科目・共通科目	101
外国語科目	155
人間生活学科専門科目	269
食物栄養学科専門科目	447
保育学科専門科目	571
教職課程	
・教職課程	723
・シラバス	
教職科目	729
図書館情報学課程	
・図書館情報学課程	765
・シラバス	
司書に関する科目（司書教諭に関する選択科目を含む）	767
司書教諭に関する科目	786
学校図書館司書に関する科目	790

はじめに

—履修ガイドを使う前に—

はじめにこの履修ガイドを使う前に、あらかじめ知っておいていただきたい5つの点（1 履修ガイドとは何か、2 シラバスとは何か、3 科目とは何か、4 授業形態、5 不明な点があれば）について説明します。これらは、いずれも15ページ以降の「人間生活学部履修ガイド」本編の内容を把握するために必要な基本情報です。

1 履修ガイドとは何か

「履修ガイド」は、大学でどのように学ぶか、そして4年間の計画をどのように立てるとよいかの目安になるように「履習要項」、学科毎の「履修の手引き」、「教育課程表」と授業毎の「シラバス」とからなっています。

まず各学科のディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）とカリキュラム・ポリシーは、その学科で学ぶとどのような人材になって社会に貢献できるか、ということと、そのためにどのような教育が提供されるかを明示したものです。これらをしっかり意識して大学での学びを充実させてください。

「履習要項」は、卒業要件等のルールを説明しています。

「履修の手引き」は、各学科で学ぶ『カリキュラムの概要』と『〇〇学科で取得可能な免許状・資格一覧』及び『履修モデル』からなります。

『カリキュラムの概要』は、各学科カリキュラムの特徴を示したものです。

『〇〇資格一覧』は、取得できる資格等を示しています。

『履修モデル』は、所属する学科で学び、大学を卒業するために最低限取得しなければならない必要単位を示した学士取得モデルと、その他の各種資格を取得して卒業する場合にさらに必要となる単位を示した資格取得モデルが示されています。

「履修の手引き」によって卒業までにどのような科目を選択すればよいかを考え、計画的に学ぶように心がけて下さい。

2 シラバスとは何か

「シラバス」は、学生の皆さんへの約束として教員が科目毎に作成・公表した授業計画のことです。「シラバス」を学生の皆さんに明示する目的は、授業の内容について事前によく認識してもらい、計画的・体系的に授業科目を選択し、授業に積極的に参加する姿勢を身につけてもらうことです。

「シラバス」の具体的内容は、「授業のねらい」、「到達目標」、「授業方法」、「授業計画」、

「成績評価の方法」、「履修にあたっての注意」、「教科書」、「教科書・参考書に関する備考」、「参考書」、「参考ホームページ」で構成されています。学生の皆さんには、あらかじめ受講する科目のシラバスをよく読んで概要をつかみ、必要な予習をして授業に臨み、復習することによって授業の理解を深めるよう努力することが求められます。

3 科目とは何か

大学を卒業（学士号の取得）し、また、その他の資格を取得するためには、それぞれ定められている単位数を取得する必要があります。この「単位」に換算される学習活動を「科目」と言います。単位は、週の授業時間数のことで、講義科目1単位は週45分（自習時間90分）、2単位は週90分（自習時間180分）です。演習・実験・実習科目1単位は週90分、2単位は週180分です。

「科目」に割り当てられた単位数は「科目」によって異なります。

「科目」は、卒業、あるいは教職やその他の資格取得のためには必ず修得しなければならない「必修科目」と自分の意志で選択可能な「選択科目」に分けられます。

「科目」には、開設される学年の指定があります。

人間生活学部で開設される「科目」（それぞれに固有の科目 No があります）は、3学科の学生を対象とした「教養科目」、「外国語科目」と、原則として各学科の学生を対象とした「学科専門科目」（「人間生活学科専門科目」、「食物栄養学科専門科目」および「保育学科専門科目」）と、教職課程の履修者を対象とした「教職に関する科目」に分けられています。

「学科専門科目」は、他学部及び他学科の学生による履修が無条件でできる科目（教育課程表の「他学部・他学科受入れ」に○で表示）、科目担当者の事前の承諾があれば他学部及び他学科の学生による履修が可能な科目（△で表示）、他学部及び他学科の学生による履修ができない科目（×で表示）に分けられています。

「学科専門科目」は、「区分」によってグループ毎の分類がなされています。

「科目」には卒業に必要な科目と単位数、特定の資格取得のために必要な科目と単位数が指定されています。

なお、国が定める大学設置基準では、2単位の講義科目の場合、週90分の講義の他に週180分の自習時間（予習・復習）が必要とされていますので、計画的にこの時間を確保して充実した大学生活になるよう計画してください。

4 授業形態

授業形態は、大きく「講義」、「演習」、「実習」、「実験」、「実技」に分かれます。「演習」

(名称に演習とついていない演習科目もあります)、「実習」、「実験」、「実技」という名称のついていない授業は「講義」です。他に各学科共、研究活動の結果を卒業論文や卒業制作にまとめることを目的とした「卒業研究」という科目があります。

5 不明な点があれば

科目の内容について不明な点があれば、担任、学科主任、あるいは学科のそのほかの専任の先生にも積極的に相談するようにしましょう。卒業のための、あるいは資格取得のための要件など規則上のことで不明な点があれば教務係に遠慮なく質問しましょう。手続きミスにより不利益が生じることをないように適切に行動してください。

人間生活学部 ディプロマ・ポリシー (学位授与の方針)

本学部の教育目的を達成するため、ディプロマ・ポリシーを次の通り定める。

1. 生活の質・生き方の質向上という共通の目標を目指して、基礎的知識を総合的・横断的に用いつつ、各学科の専門分野の知識、技能を修得し、それらを応用できる。……………(知識・理解)
2. 多角的視点と広い視野に立って物事を理解し、様々な生活課題を解決するために、柔軟な発想と論理的思考力によって、他者と協力できる。……………(コミュニケーション、問題解決能力)
3. 自立した人間として常に人格的成長を求め、自分が置かれた具体的な場で、各自の専門的知識、技能を生かし愛と奉仕の精神をもって他者を支援しつつ社会的責任を果たすことができる。……………(志向性、社会的責任)
4. 学修や実習等を通じて培われる総合的経験や横断的な思考力を生かし、国際的視野をもって地域社会の諸問題に取り組むことができる。……………(総合的な学習経験、創造的な思考力)

人間生活学部 カリキュラム・ポリシー

本学部の教育目的に基づきディプロマ・ポリシーを実現し、QOL 向上に資する女性リーダーの育成をめざし、次の通りカリキュラム・ポリシーを定め、教育課程の編成をカリキュラム・マップによって示す。

1. 豊かな教養と広い視野を身につけ、主体的に行動できる人格形成を促すために、共通科目を設置する。
2. 世界の人々との共生と相互理解に欠かせないコミュニケーション能力とグローバル化時代に適した国際的な視野を育成するため、必修を含めた英語科目を設置する。
3. 英語以外の言語圏の人々の多様な文化・価値観を受け入れられる姿勢を育成するため、その他の外国語科目としてドイツ語、フランス語、中国語、コリア語等を配置する。
4. 専門領域における生活の諸問題に対処するため、それぞれの学科専門領域の講義、演習、実習をバランス良く配置し体系的に学修できるカリキュラムを構成する。
5. 専門分野の枠を超え、関心のある科目を履修できるよう、他学部・他学科受け入れ制度および他大学との単位互換制度を設ける。
6. 大学における学修の総仕上げとして、個々の学生の興味・関心に沿ったテーマを深く探究し、その成果を具体化するための「卒業研究」を配置する。

人間生活学科 ディプロマ・ポリシー (学位授与の方針)

1. 多様な生活を取り巻く社会的事象の現状と課題について、人間と環境の相互作用を、科学的にかつエコロジカルな観点から説明できる。……………(知識・理解)
2. 日常生活で直面する課題を的確に把握し、多様な価値観をもつ他者とともに行動できる能力を身につけて、暮らしやすい社会への変革に貢献し、生活の質の向上に向けて実践できる。……………【汎用的な能力】
3. 現代家政専修においては、人間の生涯発達における生活課題を考え、解決するための能力を身に付け、生活の質の向上に貢献することができる。……………(専門的な能力)
4. 社会福祉専修においては、個人をとりまく社会環境との不適合に対し、社会福祉の各分野の制度・サービスに関する知識・相談援助技法を活用することができる。……………(専門的な能力)
5. プロジェクトマネジメント専修においては、立場の異なる他者との協働の中で考え方を整理し、プロジェクトを企画・運営・評価することができる。……………(専門的な能力)
6. 高い学習意欲と共生的な視座を備え、困難な状況にもしなやかに対応し、課題に向き合う姿勢をもって多様な価値観を受け入れることができる。……………(態度・志向性)

人間生活学科 カリキュラム・ポリシー

本学科の教育目的に基づきディプロマ・ポリシーを実現するために、次の通りカリキュラム・ポリシーを定め、教育課程の編成をカリキュラム・マップによって示す。

1. (カリキュラムの体系性及び順次性)
 - ・ 1年次は大学共通の教養科目・外国語科目、及び学科共通の基礎的な知識や技能の修得を目指す学科共通科目を配置し、〈出会う〉〈深める〉〈彩る〉〈究める〉の四つに区分する。
 - ・ 2年次以降には、人・社会・生活に関する知識・技能を修得するための科目〈出会う〉と、この修得した知識・技能から課題を発見しさらに探究を続けていくための科目〈深める〉、並びに創造・体験・連携を重視した科目〈彩る〉を配置する。
 - ・ なお、専修への配属は、学科共通科目を参考にしつつ2年次に決定されるが、3・4年次には各専門領域を深める演習や卒業研究〈究める〉を配置し学修成果を総合的に位置づけていく。
2. (教養・外国語教育)
 - ・ DP各項目の基盤形成に資するために、1年次に全学的な幅広い教養科目を偏りなく履修することにより幅広い視野や多角的な視点の獲得を促す。
 - ・ 多様な価値観を尊重する教育活動の一環として、外国語教育科目を主として1・2年次に配置して、個々の関心に応じた柔軟な履修を促す。
3. (専門教育)
 - 現代家政専修には、自らと社会の生活の質向上に貢献できる実践的能力の育成を目指して、1年次に、人間の生涯発達における衣・食・住生活、生活経営・家族に関する基礎的な知識の修得を目的とした科目(学科共通、専門基礎)、2・3年次には、家政学の専門的知識を深めることを目的とした講義科目と演習・実習科目、3・4年次には、家政学の各専門領域の内容を総合的に捉え、多角的な視点から生活課題を解決する能力を培うことを目的とした科目(総合)を配置する。
 - 社会福祉専修には、1年次(学科共通)に、ソーシャルワーカーを目指すための関心・意欲を高めるための「入門・概論科目」、2年次以降の専門科目群には、利用者及び制度・サービス、地域社会のしくみについて理解を深めるための「各論科目」及び「応用・発展科目」、さらにソーシャルワーカーに必要な専門的知識、高度な相談援助技術・能力を体得するために段階的に履修する3年間にわたる実習・演習のアクティブラーニング科目を螺旋的に配置する。
 - プロジェクトマネジメント専修には、1～3年次に①自らの考えを論理的に整理し表現する力を修得する「学びの技法科目」、②他者と協働して新たな考えを創出する力を修得する「ワークショップデザイン科目」、③社会の課題を発見する力を修得する「ソーシャルプロジェクト科目」を配置する。そして、①～③を通して得た知識や技能を学外実践活動で活用し、経験を深めていく「プロジェクトマネジメント科目」を2～4年次に継続的に配置する。
4. (キャリア教育)
 - ・ 卒業後をも見据え、学科の学びとキャリア形成との関わりを認識するために、1年次からキャリア教育科目を必修とし、社会で活躍してきた方々から学ぶ選択科目を2年次に配置する。
5. (学修の方法と評価)
 - ・ 共生的な視座で高い学習意欲と主体的な態度を身に付けるために、能動的学修の要素を取り入れた授業を提供し、学生が主体的に社会に関わる演習・実習を通して、困難な状況にもしなやかに課題に向き合い対応する機会を設ける。
 - ・ 評価は、明確な評価基準による理解度や達成度を学生自身に確認させようという姿勢で行う。

〈2017年度以前入学生〉

人間生活学科 ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

本学科の教育目的を達成するため、ディプロマ・ポリシーを次の通り定める。

1. 生活科学、社会福祉、地域環境の3分野について基礎的な知識を修得し人間の尊厳を大切にせずさまざな学習テーマに取り組むことができる。……………(態度・志向性)
2. 他者の理解や、状況の把握、あるいは生活課題をとらえたり、解決策の検討や実施のためのコミュニケーション・プレゼンテーション能力を身につける。……………(汎用的技能)
3. 衣食住を基本とする生活の形成や、生活上の困難・障害を有する人びとへの支援、条件を違える人々がともに地域づくりや環境づくりに寄与する専門的知識と技能を修得し、それらを応用できる。……………(知識・理解)
4. ライフスタイルをデザインし、ヒューマンライフをサポートする実践力を培い、個人や社会の生活の質（QOL）の向上に貢献できる。……………(総合的な学習経験と創造的な思考力)

人間生活学科 カリキュラム・ポリシー

本学科の教育目的に基づきディプロマ・ポリシーを実現するために、次の通りカリキュラム・ポリシーを定め、教育課程の編成をカリキュラム・マップによって示す。

1. 初年次に、生活科学・社会福祉・地域環境の3区分の専門科目群を学ぶうえで必要な学習方法と、自らのキャリア選択に求められる基礎的な知識・技能や多様な見方・考え方について導入教育を行う。また、コミュニケーションに関する演習や講義を通じてコミュニケーション能力を涵養する。
2. 区分「生活科学」の専門科目群では、衣食住をはじめ、家族関係や生活経営、消費者問題などの学習を可能にする。大量の情報が行き交い価値観が多様化する現代社会の「生活」を、着実・安全で豊かなものにするために必要な知識・技術の習得を促す。
3. 区分「社会福祉」の専門科目群では、児童福祉・障害者福祉・高齢者福祉をはじめ、支援を必要とする人々とともに生きる社会をサポートする福祉マインドの学びを可能にする。さまざまなニーズの理解や体験学習を通じて、共生社会を担うための知識・技術の習得を促す。
4. 区分「地域環境」の専門科目群では、地域社会の成り立ちや、環境、文化などを理解し、地域の特性や課題の捉え方の学習を可能にする。地域の俯瞰・踏査に基づくフィールドワークや、生活科学を基礎とする生活のデザイン力、社会福祉で培う対人支援能力を集成して、地域づくりに貢献するための知識・技術の習得を促す。
5. 区分「総合」の専門科目群に配置された3年次のゼミでは、生活科学・社会福祉・地域環境のいずれかの分野、または分野横断的に知識および技能の深化・総合化を図る。そして、卒業年次には卒業研究を必修とする。その過程で、自らのキャリアを意識したライフスタイルをデザインし、日常・社会生活をサポートする実践力や課題・問題の解決能力を育成する。
6. 家庭科・福祉科の教員免許、社会福祉士国家試験受験資格の取得に関する授業科目を配置し、中学・高等学校の教員や社会福祉士の養成に寄与する。

〈2018年度入学生〉

食物栄養学科 ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

本学科の教育目的を達成するため、ディプロマ・ポリシーを次の通り定める。

1. 食と栄養に関する国内外の情報を収集・処理でき、論理的に分析し提示することができる。
.....（情報リテラシー）
2. 科学的根拠に基づき、食や健康に関する諸問題を主体的かつ論理的に分析・思考し、解決手段を導き出すことができる。.....（思考力・問題解決能力）
3. コミュニケーション能力を基礎として、良好な対人関係を構築できる。（コミュニケーション能力）
4. 管理栄養士として必要な基礎知識・技術を有し、人の健康を栄養と食の面から支援し、保健・医療・福祉、教育、食品開発・製造などの場で、社会に貢献できる。.....（専門能力）

食物栄養学科カリキュラム・ポリシー

本学科の教育目的に基づきディプロマ・ポリシー（以下 DP という）を実現するために、次の通りカリキュラム・ポリシーを定め、教育課程の編成をカリキュラム・マップによって示す。

- 1.（カリキュラムの体系性および順次性）
 - ・1年次に大学共通の教養科目・外国語科目および学科の初年次教育科目・専門基礎科目を通して大学における学修の基盤形成を図る。
 - ・2年次以降、専門科目を講義形式と実験・実習形式で段階制をもって体系的に配置する。
 - ・3年次から臨地実習を配置し、管理栄養士業務の実際を学び、専門職としての視点と実践的スキルを養う。また、「卒業研究」に向けて段階的に取り組んでいけるよう卒業演習（ゼミ形式）を配置し、合わせてコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力等の汎用的能力や実践力を養成する。
 - ・4年次には、卒業研究および将来のキャリアを視野に入れた選択科目を設け、DP に掲げる諸能力の統合を図る。
- 2.（教養・外国語教育）
 - ・DP 各項目の基盤形成に資するために、幅広い教養科目を偏りなく履修することにより広い視野や多角的な視点を養成する。
 - ・食と栄養に関する国内外の情報を収集・理解できるよう、科学英語能力等を養成する。
- 3.（専門教育）
 - ・管理栄養士学校指定規則に従い、専門科目を配置する。
 - ・専門知識の基礎を養うため「社会・環境と健康」、「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」、「食べ物と健康」領域の科目を配置する。
 - ・専門知識を身につけるため「基礎栄養学」、「応用栄養学」、「栄養教育論」、「臨床栄養学」、「公衆栄養学」、「給食経営管理論」領域の科目を配置する。
 - ・臨地実習・総合演習で管理栄養士として必要な専門的知識と技術を統合する。
- 4.（キャリア教育）
 - ・学科の学びとキャリア形成との関わりを認識できるように導入科目を設け、早期から管理栄養士としてのキャリアデザインを考える機会を提供する。
 - ・卒業後のキャリア形成を見据えた学科独自のキャリア教育として、学外実習や実践的な学習機会を提供する。
 - ・栄養教諭の教員免許取得に関する授業科目を配置し、児童・生徒およびその家族の生活の質の向上に寄与するための力や考え方を養成する。
- 5.（学修の方法と評価）
 - ・講義・演習・実験・実習の別に関わらず能動的学修の要素を取り入れた授業を順次提供し、DP に掲げる能力を統合的に磨き完成段階の卒業研究へと効果的に導く。
 - ・「授業科目の履修要項」における成績評価基準に従い評価を行うが、その評価の妥当性は必要に応じて学科会議で協議し、公正に評価が行われる。

〈2017年度以前入学生〉

食物栄養学科 ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

本学科の教育目的を達成するため、ディプロマ・ポリシーを次の通り定める。

1. 管理栄養士として必要な知識・技能を有し、それらを統合して応用できる。……………(知識・理解)
2. 栄養や食に関する問題を科学的根拠に基づいて論理的に思考し、解決できる。
……………(思考方法・問題解決能力)
3. コミュニケーションを基礎として、良好な対人関係を構築できる。……………(コミュニケーション力)
4. 修得した知識・技能をもとに人の健康を栄養と食の面から支援し、保健・医療・福祉・教育などの場で、社会に貢献できる。……………(社会的責任)

食物栄養学科 カリキュラム・ポリシー

本学科の教育目的に基づきディプロマ・ポリシーを実現するために、次の通りカリキュラム・ポリシーを定め、教育課程の編成をカリキュラム・マップによって示す。

1. 管理栄養士受験資格ならびに栄養士免許と栄養教諭教員免許取得に関する授業科目を配置し、管理栄養士・栄養士、栄養教諭の育成に寄与する。
2. 初年次教育として、共通科目では大学における学びの基本的姿勢やグローバルな視点を身に付ける。また、導入科目を設け、早期から管理栄養士としてのキャリアデザインを考える機会を与える。
3. 専門基礎分野では、「社会・環境と健康」、「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」、「食べ物と健康」において、講義および実験実習を行い、専門知識の基礎を養う。専門分野では、講義および実験実習により、「基礎栄養学」、「応用栄養学」、「栄養教育論」、「臨床栄養学」、「公衆栄養学」、「給食経営管理論」を配置する。さらに、総合演習を経て、3年次の臨地実習で専門的知識と技能を統合する。
4. 「卒業研究」にむけて、段階的に取り組んでいけるよう、3年次から卒業演習（ゼミ）形式の授業科目を配置し、あわせてコミュニケーション力やプレゼンテーション力等の汎用的能力や実践力の養成につとめる。さらに、4年次には、将来のキャリアを視野に入れた選択科目を設け、卒業後に役立つより高度な専門的能力と実践力を養う。

保育学科 ディプロマ・ポリシー (学位授与の方針)

本学科の教育目標を達成するため、ディプロマ・ポリシーを次の通り定める。

1. 乳幼児期から青年期までの子どもの成長・発達を支援し、子どもや子どもを取り巻く人々の生活の質の向上に寄与するための専門的知識を修得する。…………… (知識・理解)
2. 社会が抱える複雑な問題を包括的な視点で分析し、保育・教育場面で生じる課題に対処できる論理的思考力と問題解決へと導く能力を身につけることができる。…………… (汎用的技能)
3. 保育・教育を通して社会的責任を果たしていくことのできる態度・倫理観と、生涯にわたり主体的に学びを深める態度を身につけることができる。…………… (態度・志向性)
4. 地域社会とかかわるさまざまな社会経験を通し、広い教養の涵養と子どもにかかわる多様な問題に対処できる幅広い視野と創造的思考力を身につけることができる。…………… (総合的な学習経験と創造的思考力)

保育学科カリキュラム・ポリシー

本学科の教育目的に基づきディプロマ・ポリシーを実現させるために、次の通りカリキュラム・ポリシーを定め、教育課程の編成をカリキュラム・マップによって示す。

1. (カリキュラムの体系性および順次性)
 - ・本学科のカリキュラムは、専門に関する学びを得るために、教育という視点からアプローチする「子ども教育専修」、生活という視点からアプローチする「子ども生活支援専修」、各種実習や専門研究法などを学ぶ「共通」の各科目群で構成し、子どもとそれを取り巻く人びとを支えるために必要な学びを多角的に捉える力を養う。
 - ・1、2年次には教養科目・外国語科目ならびに学科の専門科目のうち基礎科目を配置し、大学での学修や専門的な学びの基盤形成を図る。
 - ・3年次以降では、各種実習を配置し、大学で学ぶ理論や技術と保育現場での経験を関連付けながら専門に関する学びを深め、多面的な視点で子どもや子どもを取り巻く環境を捉える力を育成する。
2. (教養・外国語教育)
 - ・ディプロマ・ポリシー各項目の基盤形成に資するために、1、2年次に幅広い教養科目を偏りなく履修することにより、広い視野や多角的な視点の獲得を促す。
 - ・異文化理解の一環として外国語科目を主として1、2年次に配置し、個々の関心に応じた柔軟な履修を促す。
3. (専門教育)
 - ・1年次には、保育・教育・福祉の原理、人の発達の道筋など、子どもの成長・発達を支えるための基礎的な知識を習得する。
 - ・2年次には、保育・教育・福祉の内容や技術に関する科目を配し、実際の保育・教育場面をイメージしながら、子どもの成長・発達を支えるために必要な具体的な内容について理解する。
 - ・3年次以降は、これまで習得した知識や技術をさまざまな実習によって体得していく。また現代の子どもを取り巻く環境を分析し、子どもの生活の質に関する問題解決に向けた実践や子どもを取り巻く人びとを支える力の基礎を育むために、社会の構造、対象理解の方法、問題解決の方法論などを多角的に学ぶ。
 - ・4年次には、それぞれの興味・関心に基づいたテーマを追究する卒業研究を通し、社会の諸問題に研究的にアプローチする方法や、論理的思考を身につける。
4. (キャリア教育)
 - ・卒業後を見据え、学科での学びとキャリア形成との関わりを認識するために、1年次からキャリア教育科目を必修とする。
 - ・幼稚園教諭一種免許状、特別支援学校教諭一種免許状、保育士資格、児童厚生1級指導員資格取得にかかわるカリキュラムを通し、障がいのある子どもを含むすべての子どもおよびその家族の生活の質の向上に寄与するための力や考え方を身につける。
5. (学修の方法と評価)
 - ・主体的に学ぶ態度や広い視野で物事をとらえる思考力を獲得するために、能動的学修の要素を取り入れた授業を提供する。
 - ・大学で学ぶ理論や技術を基盤とし、保育・教育現場および地域との連携を密にとり、学生が主体的に教育・保育現場にかかわる演習や実習を通して、子どもと子どもを取り巻く人びとの支援者としての役割の総合的な理解を深めるようにする。
 - ・学生が自分自身の理解度や達成度を確認し、その後の学びの在り方の手がかりを得ることができるよう、客観的で的確な評価を行う。

〈2017年度以前入学生〉

保育学科 ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

本学科の教育目的を達成するため、ディプロマ・ポリシーを次の通り定める。

1. 子どもについての全人的理解、保育の営みに関する理解、子どもを取り巻く社会問題についての理解に関する広範かつ高度な専門的知識の修得と、これらの専門的知識・理解の成果を現場で応用できる。……………(知識・理解)
2. 子どもの内面にふれ心の動きを察知する力を身につけると同時に、子どもを取り巻く社会環境を多面的に把握することで、子どもや保護者が抱える諸課題に対応する力を身につける。また、保育現場で遭遇するさまざまな問題に対処できる論理的思考力と問題解決へと導く能力を身につける。……………(汎用的技能)
3. 他者を理解し援助するため、また、他者と協働するために必要な人格形成をめざし、保育を通して社会的責任を果たしていくことのできる態度・倫理観を主体的に身につける。さらに卒業後においても自学自習できるような自立性をもった人間となるように学習を深めていく。…(態度・志向性)
4. 実習、卒業研究、ボランティア活動、地域社会と関わるさまざまな社会経験を通し、社会が抱える複雑な問題を包括的な視点で分析し、汎用性のある論理的・抽象的思考力を身につける。広い知性と新たな発想で対処可能な創造的思考力が養われ、具体的で個別の問題に適切に対処できる。……………(総合的な学習経験と創造的思考力)

保育学科 カリキュラム・ポリシー

本学科の教育目的に基づきディプロマ・ポリシーを実現するために、次の通りカリキュラム・ポリシーを定め、教育課程の編成をカリキュラム・マップによって示す。

1. 本学の建学理念の一つである「愛と奉仕」の精神は、子どもを取り巻く人的環境の重要な要素であることを理解するために、「キリスト教保育」を置く。
2. 就学前の子どもたちの生活や教育を支える人材を育てるため、保育に関する専門的な科目を、「保育の理論」、「児童の理解」、「障害児の理解」、「保育内容」、「保育の基礎技能」、「実習」、「専門研究法」の7区分から系統的に配置する。
3. 卒業後、保育界に寄与できるように、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格の取得を可能にする。
4. 障害のある子どもやその養育者（保護者・保育者）を支えるための専門的知識や技術についての科目を配置し、特別支援学校教諭一種免許状の取得も可能にする。
5. 家庭や地域での保育事情を理解するために、子育て支援についての科目を配置する。
6. 保育・教育現場及び地域との連携を密に取り、学生が主体的に保育現場へかかわる演習や多様な実習を通して、保育事情の総合的な理解を深める。

人間生活学部 学科課程
履修要項

授業科目の履修要項

1 卒業の要件

人間生活学部では学生が卒業の認定を受けるためには、下記の条件を満たす必要がある。

(1) 所定単位の修得

人間生活学科

〈2018年度入学生に適用〉

人間生活学科の学生は、教養科目の中から必修 11 単位、外国語科目の中から必修 2 単位、選択必修 4 単位以上、学科専門科目の中から必修 20 単位、選択必修 40 単位以上を含めた合計 127 単位以上を修得しなければならない。

授業科目区分 単位区分	大学共通科目		人間生活学科 専門科目
	教養科目	外国語科目	
必修単位	11 単位	2 単位	20 単位
選択必修単位		4 単位以上	*40 単位以上
選択単位	50 単位以上		
卒業必要 単位数合計	127 単位以上		

2 年次からは、「現代家政専修」、「社会福祉専修」、「プロジェクトマネジメント専修」の 3 専修のうち、選択した専修の条件に従って履修する。

*人間生活学科専門科目の選択必修単位は、所属する専修が指定する科目から 40 単位以上修得する。

その内、次のとおり専修ごとに定める科目の単位を必ず修得すること。

- ・現代家政専修の場合、12 単位。
- ・社会福祉専修の場合、10 単位。
- ・プロジェクトマネジメント専修の場合、20 単位。

※他学科専門科目は、12 単位まで選択単位として算入できる。

※教職に関する科目は、指定された科目のうち 12 単位まで選択単位として算入できる。

※他学部学科専門科目及び協定校修得科目（本学教育課程表外の科目）は、合せて 12 単位まで選択単位として算入できる。

※他大学等で修得した単位は、12 単位まで選択単位として算入できる。

〈2015～2017 年度入学生に適用〉

人間生活学科の学生は、大学共通科目の中から必修 11 単位、外国語科目の中から必修 2 単位、選択必修 4 単位以上、学科専門科目の中から必修 26 単位以上を含めた合計 127 単位以上を修得しなければならない。

授業科目区分 単位区分	大学共通科目	外国語科目	人間生活学科 専門科目
必修単位	11 単位	2 単位	26 単位
選択必修単位		4 単位以上	
選択単位		84 単位以上	
卒業必要 単位数	127 単位以上		

※他学科専門科目は、8 単位まで選択単位として算入できる。

※教職に関する科目は、指定された科目のうち 8 単位まで選択単位として算入できる。

※他学部学科専門科目及び協定校修得科目（本学教育課程表外の科目）は、合わせて 8 単位まで選択単位として算入できる。

※他大学等で修得した単位は、8 単位まで選択単位として算入できる。

食物栄養学科

〈2018 年度入学生に適用〉

食物栄養学科の学生は、教養科目の中から必修 11 単位、外国語科目の中から必修 2 単位、選択必修 4 単位以上、学科専門科目の中から必修 90 単位、選択必修単位 4 単位以上を含めた合計 127 単位以上を修得しなければならない。

授業科目区分 単位区分	大学共通科目		食物栄養学科 専門科目
	教養科目	外国語科目	
必修単位	11 単位	2 単位	90 単位
選択必修単位		4 単位以上	4 単位
選択単位		16 単位以上	
卒業必要 単位数	127 単位以上		

※他学科専門科目、他学部学科専門科目、教職に関する科目（指定科目）及び協定校修得科目（本学教育課程表外の科目）は、合わせて 8 単位まで選択単位として算入できる。

〈2015～2017 年度入学生に適用〉

食物栄養学科の学生は、大学共通科目の中から必修 11 単位、外国語科目の中から必修 2 単位、選択必修 4 単位以上、学科専門科目の中から必修 90 単位、選択必修 4 単位以上を含めた合計 127 単位以上を修得しなければならない。

授業科目区分 単位区分	大学共通科目	外国語科目	食物栄養学科 専門科目
必修単位	11 単位	2 単位	90 単位
選択必修単位		4 単位以上	4 単位
選択単位	16 単位以上		
卒業必要 単位数	127 単位以上		

※他学科専門科目、他学部学科専門科目、教職に関する科目（指定科目）及び協定校修得科目（本学教育課程表以外の科目）は、合わせて 8 単位まで選択単位として算入できる。

保育学科

〈2018 年度入学生に適用〉

保育学科の学生は、教養科目の中から必修 11 単位、選択必修 8 単位以上、外国語科目の中から必修 2 単位、選択必修 4 単位以上、学科専門科目の中から必修 12 単位を含めた合計 127 単位以上を修得しなければならない。

授業科目区分 単位区分	大学共通科目		保育学科 専門科目
	教養科目	外国語科目	
必修単位	11 単位	2 単位	12 単位
選択必修単位	8 単位以上	4 単位以上	幼児指定科目から 30 単位以上
選択単位	60 単位以上		
卒業必要 単位数合計	127 単位以上		

※他学科専門科目、他学部学科専門科目、協定校修得科目（本学教育課程表外の科目）及び他大学等で修得した科目は、合わせて 8 単位まで選択単位として算入できる。

〈2015～2017 年度入学生に適用〉

保育学科の学生は、大学共通科目の中から必修 11 単位、選択必修 8 単位以上、外国語科目の中から必修 2 単位、選択必修 4 単位以上、学科専門科目の中から必修 14 単位を含めた合計 127 単位以上を修得しなければならない。

授業科目区分 単位区分	大学共通科目	外国語科目	保育学科 専門科目
必修単位	11 単位	2 単位	14 単位
選択必修単位	8 単位以上	4 単位以上	幼児指定科目から 30 単位以上
選択単位	58 単位以上		
卒業必要 単位数	127 単位以上		

※他学科専門科目、他学部学科専門科目、協定校修得科目（本学教育課程表外の科目）及び他大学等で修得した科目は、合せて 8 単位まで選択単位として算入できる。

(2) 修業年限

4年以上在学すること。ただし8年を超えてはならない（休学期間は在学年数には含まれない）。

2 授業科目及び履修方法

人間生活学部の授業科目は、大学共通科目、外国語科目、学科専門科目及び教職に関する科目に区分されている。

(1) 大学共通科目

a. 大学共通科目（2015～2017年度入学生）、教養科目（2018年度入学生）の必修科目及び単位数は次のとおりである

聖書学概論	2単位
キリスト教学	2単位
人間学概論	2単位
情報処理	2単位
女性とキャリア	1単位
運動の実践A	1単位
運動の実践B	1単位
合計 7科目	11単位

b. 保育学科の学生は、その他から8単位以上を履修しなければならない。

c. 教育職員免許状の取得を希望する場合、「日本国憲法」2単位と「情報処理」2単位「運動の実践A」1単位「運動の実践B」1単位を必ず履修しなければならない。

d. 社会福祉士国家試験受験資格の取得を希望する場合、「心理学」2単位と「社会学」2単位を必ず履修しなければならない。

(2) 外国語科目

a. 「Academic Communication I」1単位と「Academic Communication II」1単位は必修である。そのほかに4単位以上、合計6単位以上を履修しなければならない。

b. 教育職員免許状の取得を希望する場合は、「Academic Communication I」「Academic Communication II」「Interactive English A」「Interactive English B」「Academic Speaking & Discussion」「English for Global Communication」「CLIL English」「ドイツ語演習 I」「ドイツ語演習 II」「フランス語演習 I」「フランス語演習 II」「中国語演習 I」「中国語演習 II」「韓国語演習 I」「韓国語演習 II」のうち、いずれか2科目2単位以上を必ず履修しなければならない。

(3) 学科専門科目

a. 各学科専門科目の必修単位数と選択必修単位数は以下のとおりである。

	人間生活学科	食物栄養学科	保育学科
2018 年度入学生	必修 20 単位	必修 90 単位	必修 12 単位
	専修が指定する科目から 40 単位以上選択必修	臨地実習 3 科目から 4 単位選択必修	幼免指定科目 30 単位以上選択必修
2015～2017 年度入学生	必修 26 単位	必修 90 単位	必修 14 単位
		臨地実習 3 科目から 4 単位選択必修	幼免指定科目 30 単位以上選択必修

b. 教員免許状、資格取得を希望する場合は、別項にそれぞれ指定された科目を履修しなければならない。

c. 学科専門科目の履修については、教育課程表および履修ガイドを参照すること。

(4) 教職に関する科目（人間生活学科・食物栄養学科）

〈2018 年度入学生に適用〉

a. 教職に関する科目は、教育職員免許状の取得のために開設している科目であるが、指定された科目のうち、人間生活学科は 12 単位まで、食物栄養学科は 8 単位まで、卒業要件の選択単位に含むことができる。算入できる単位数は次頁の表を参照すること。詳しくは p.91 の教育課程表を確認すること。

b. 教育職員免許状の資格取得を希望する場合は、教職課程履修要項に従って免許状取得に必要な単位を履修しなければならない。

〈2015～2017 年度入学生に適用〉

a. 教職に関する科目は、教育職員免許状の取得のために開設している科目であるが、指定された科目のうち 8 単位まで、卒業要件の選択単位に含むことができる。算入できる単位数は次頁の表を参照すること。詳しくは、p.92～93 の教育課程表を確認すること。

b. 教育職員免許状の資格取得を希望する場合は、教職課程履修要項に従って免許状取得に必要な単位を履修しなければならない。

(5) 他学科専門科目・他学部学科専門科目・協定校修得科目及び他大学等で修得した科目

これらの履修については、次頁の表のとおり選択単位として卒業要件に算入できる。履修についての詳細は、それぞれの教育課程表および履修ガイドを参照すること。

選択単位として卒業要件に含まれる単位数

	人間生活学科		食物栄養学科	保育学科
	2018年度入学生	2015～2017年度入学生		
教職に関する科目	12単位まで	8単位まで	合わせて 8単位まで	合わせて 8単位まで
他学科専門科目	12単位まで	8単位まで		
他学部学科専門科目	合わせて 12単位まで	合わせて 8単位まで		
協定校修得科目				
他大学等で修得した単位	12単位まで	8単位まで		

3 学 期

学期は前期（4月～9月）と後期（9月～3月）の2学期とし、各学期は、15週を原則とする。

4 授 業 時 間

授業は次の時間割によって行われる。

講 時	時 間	時 限	時 間
I	9：00～10：30	1	9：00～ 9：45
		2	9：45～10：30
II	10：40～12：10	3	10：40～11：25
		4	11：25～12：10
III	13：00～14：30	5	13：00～13：45
		6	13：45～14：30
IV	14：40～16：10	7	14：40～15：25
		8	15：25～16：10
V	16：20～17：50	9	16：20～17：05
		10	17：05～17：50

5 単 位

各授業科目の単位数は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とする。

- (1) 講義及び演習については、15時間から30時間の授業をもって1単位とし、科目によってその基準は異なる。
- (2) 実験、実習、実技については、30時間から45時間の授業をもって1単位とし、科目によってその基準は異なる。

- (3) 卒業研究の授業科目については、学修の成果を評価し所定の単位を授与する。

6 単位修得の要件

- (1) 所定の履修登録を完了すること。
- (2) 欠席時（回）数が総授業時（回）数の1/3を超えないこと。
- (3) 試験またはレポート等による成績が合格点（60点以上）であること。

7 既修得単位の認定

- (1) 既修得単位の認定の申請ができる者は、本学または他の大学を卒業または中途退学し、新たに1年目に入学した者に限られる。
- (2) 本学が教育上有益と認めるときは、学則第19条の4第1項及び第2項の定めるところにより、既に修得した単位について、60単位を超えない範囲で本学において修得した単位として認定することができる。
- (3) 既修得単位の認定を受けようとする者は、所定の申請書に卒業証明書および成績証明書を添えて、新年度の履修登録期限前に申請することができる。教職課程の科目について既修得単位の認定を受けようとする者は、さらに単位修得証明書も添えること。

8 協定校における修得単位の認定

協定校とは、本学と協定を結んだ海外留学協定校、国内の学生交流協定校及び札幌圏大学・短期大学間単位互換協定校のことをいう。

協定校及び認定方法については、次の通りである。

(1) 協定校一覧

【海外留学協定校】

アメリカ：セント・エリザベス大学、ベネディクティン大学、マリアン大学

イギリス：ケント大学、リーズ大学、ニューカッスル大学、

ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ

オーストラリア：オーストラリア カトリック大学、グリフィス大学

カナダ：カルガリー大学、マキュワン大学

韓国：韓国カトリック大学、明知大学

台湾：輔仁大学

中国：上海外国語大学

【学生交流協定校（国内留学）】

上智大学

【札幌圏大学・短期大学単位互換協定校】

札幌学院大学、札幌国際大学、札幌大学、東海大学札幌校、北星学園大学、北翔大学、北海道科学大学、酪農学園大学

札幌国際大学短期大学部、北星学園大学短期大学部、北翔大学短期大学部

(2) 認定方法

協定校で修得した科目の成績は、「認定」と表示される。

なお、留学等により単位認定された科目は、卒業に必要な単位として認められても、免許・資格に関わる科目の単位としては認められない。

免許・資格に関わる科目の単位の認定については、次の表のとおりである。

免許・資格の種類		卒業必要単位	免許・資格取得の単位
教育職員免許状	教科に関する科目	認定可	教職課程のない他大学で修得した科目から本学の「教科に関する科目」へ読替認定した場合は可
	教職に関する科目	卒業要件に含めることが出来る科目のみ認定可	不可
社会福祉士国家試験受験資格		認定可	一部可
認定スクール（学校）ソーシャルワーク資格		認定可	一部可
社会調査士		認定可	不可
管理栄養士国家試験受験資格		認定可	不可
栄養士免許		認定可	不可
食品衛生管理者・監視員		認定可	不可
保育士		認定可	指定保育士養成施設の場合は可（30単位以内）
児童厚生1級指導員資格		認定可	不可
司書となる資格（必修科目及び選択科目の「図書館に関する科目」）		認定不可	不可
司書教諭		認定不可	不可

① 「読み替え」による認定

協定校で修得した科目は、本学で開講されている科目と内容を照らし合わせた上で、読み替え可能であると判断された場合に、その該当する本学の授業科目として認定される。

② 外国語科目「海外語学研修」への認定

協定校留学時の語学科目や短期語学研修は、外国語科目の「海外語学研修」として認定することがある。その際は、卒業要件区分の「外国語科目」とはみなされず、「自由選択単位」に算入される。

- ・協定校留学時の語学科目……前述①の読み替えにより認定できない場合（当該外国語科目が修得済になっていたり、本学に設けられていない外国語科目の場合な

ど)に、「海外語学研修」として認定する。

- ・短期語学研修……認定科目は「海外語学研修」とするが、本学の外国語科目の中の当該言語の科目（既修得・履修中を除く）で認定することもできる。

③ 「協定校修得科目」としての認定

上記の認定①②が不可能である場合、協定校で修得した科目名のまま本学の卒業要件として認定することがあり、これを協定校修得科目という。

ただし、認められる単位数の上限は、学科によって異なる。

協定校修得科目の認定可能上限単位数

- ・人間生活学科……他学部学科専門科目と合わせて2018年度入学生は12単位まで、2015～2017年度入学生は8単位まで選択単位として算入できる。
- ・食物栄養学科……他学部学科専門科目、他学部学科専門科目、教職に関する科目（指定科目）と合わせて8単位まで選択単位として算入できる。
- ・保育学科……他学部学科専門科目、他学部学科専門科目と合わせて8単位まで選択単位として算入できる。

(3) 単位認定の上限

単位認定は、留学年度に在籍している本学での学科・学年の履修登録上限単位数を限度とする。

ただし、短期語学研修と札幌圏大学・短期大学等单位互換での単位認定は、認定年度の履修登録上限単位数には含まれない。

札幌圏大学・短期大学単位互換制度（Green Campus）による単位互換認定

- (1) 札幌圏大学・短期大学単位互換制度（Green Campus）に、「単位互換履修生」として履修できるのは、2年生以上の学生である。
- (2) 「単位互換履修生」は、本学で開講されていない科目について年間10単位まで履修することができる。修得単位は卒業要件（選択単位）として算入することができる。算入できる単位数は別に定める。
- (3) 「単位互換履修生」は、各大学・短期大学の図書館を利用できる。
- (4) 「単位互換履修生」は、学費の負担はない。ただし、実験・実習・演習費については徴収する場合はある。

※ 本学では、人間生活学部人間生活学科、保育学科が対象となる。

実際の手続きの詳細については、2年次以降のガイダンスにて説明するので、その指示に従うこと。

9 履修登録

入学年度の教育課程表および履修ガイドを参考に卒業までの履修計画をたて、その年度に履修するすべての授業科目について、履修登録をしなければならない。

(1) 履修登録についての注意事項

- ① 教育課程表により配当されている所定年次（学科・クラス指定のある科目は指定クラス）の授業科目を履修しなければならない。
- ② 履修登録した科目でなければ履修することはできない。
- ③ すでに単位を修得・認定された授業科目の再履修は認められない。
- ④ 同一時限に2科目以上の履修は認められない。

(2) 履修登録単位数の上限

履修登録をした授業科目の履修にあたっては、単位修得に向けて最善の努力をしなければならない。

自学自習の時間を考慮し、卒業要件を年次配分し無理なく履修計画を立てた場合、年間40単位前後の履修で、3年次までに卒業要件の総単位数（127単位）は修得できることになる。

人間生活学部では、卒業要件と同時に資格取得等を考慮し、年間履修登録単位の上限を下記のとおり定めている。

〈2018年度入学生に適用〉

履修上限単位

学年	1年	2年	3年	4年
単位数	49	49	49	49

- ※ 人間生活学科、食物栄養学科、保育学科の上限単位の中に、大学共通科目のうち、女性とキャリアは含まない。
- ※ 人間生活学科、食物栄養学科の上限単位の中に、教職課程科目、図書館情報学課程科目を含まない。
- ※ 保育学科の上限単位の中に、図書館情報学課程科目を含まない。
- ※ 食物栄養学科の上限単位の中に、学科専門科目のうち、はじめての化学、文章表現演習Ⅰ、文章表現演習Ⅱは含まない。
- ※ 人間生活学科では、編入生、転部・転科生に上限を超えて履修を認めることもある。
- ※ 食物栄養学科では、編入生に上限単位を超えて履修を認めることもある。
- ※ 保育学科では、編入生に上限単位を超えて履修を認めることもある。

〈2017年度以前入学生に適用〉

履修上限単位

学年	1年	2年	3年	4年
単位数	49	49	49	49

- ※ 人間生活学科、食物栄養学科、保育学科の上限単位の中に、大学共通科目・共通科目のうち、女性とキャリアは含まない。
- ※ 人間生活学科、食物栄養学科の上限単位の中に、教職課程科目、図書館情報学課程科目を含まない。

- ※ 保育学科の上限単位の中に、図書館情報学課程科目を含まない。
- ※ 人間生活学科の上限単位の中に、社会福祉士受験資格に関する科目のうち、社会福祉論Ⅱ、高齢者福祉論Ⅰ、児童福祉論Ⅰ、ソーシャルワーク論Ⅰ、ソーシャルワーク論Ⅱ、ソーシャルワーク論Ⅲ、ソーシャルワーク論Ⅳ、ソーシャルワーク演習Ⅰ、ソーシャルワーク演習Ⅱ、ソーシャルワーク実習指導Ⅰ、ソーシャルワーク実習Ⅰは含まない。
- ※ 食物栄養学科の上限単位の中に、学科専門科目のうち、はじめての化学、文章表現演習Ⅰ、文章表現演習Ⅱは含まない。
- ※ 人間生活学科では、編入生、転部・転科生に上限を超えて履修を認めることもある。
- ※ 食物栄養学科では、編入生に上限単位を超えて履修を認めることもある。
- ※ 保育学科では、編入生に上限単位を超えて履修を認めることもある。

(3) 履修登録の期間

4月11日(水)～19日(木)

〈ただし、後期開講科目については、9月19日(水)～21日(金)の期間に修正登録することができる。〉

10 試験

試験は、授業期間中（補講期間含む）に担当教員の指示によって行われ、レポート、作品等の提出の場合もある。

- 追試験 (1) 追試験は、下記の理由で試験もしくはそれに準ずるものについて欠席した者が、「追試験願」を提出して、受験が認められた場合に行う試験である。
- (2) 追試験を願い出る者は、定められた期日までに下記証明書等を添えて「追試験願」を教務課に提出しなければならない。
- (3) 追試験の受験資格と提出書類及び受験料は以下のとおりである。

	理由	提出書類	受験料 (1科目につき)	備考	
1	就職試験	受験票写 本学指定の就職試験 応募証明書	500円		
2	公共交通機関の遅延	該当交通機関の発行する遅延証明書			
3	病気・けが	医師の診断書、またはこれに準ずるもの			
4	交通事故	事故証明書			
5	公認欠席	公認欠席届*	免除	教育実習・介護等体験等の学外実習	
6	特別欠席	公認欠席届（特別欠席）*		忌引き（二親等まで）	〈Ⅲ 諸願・届〉の「5. 欠席届B公認欠席届」の項（p. 378～379）を参照
7	出席停止	公認欠席届（出席停止）*		学校保健安全法施行規則第18条第一種～第三種による学校感染症	
8	その他やむを得ない理由	その事由を証明するもの	500円		

*公認欠席、特別欠席、出席停止の場合は、所定の手続きを行った上で「追試験願」を教務課に提出すること。

※	上記の理由以外について追試験を認めることがある。	1,500円	合格した時の試験の点数は60点とする。
---	--------------------------	--------	---------------------

- (4) 追試験を願い出た科目の再試験は受験することはできない。
- (5) 前期追試験はおおむね9月、後期追試験はおおむね2月に日時を定めて行う。

- 再試験 (1) 再試験は、成績の結果が不合格になった者に対して行う試験であり、1回に限り行うことがある。
- (2) 再試験を実施する科目は、事前に発表する。

- (3) 再試験を願い出る者は、定められた期日までに「再試験願」を教務課に提出しなければならない。
- (4) 再試験の受験料は1科目1,500円とする。
- (5) 再試験に合格した場合の最終成績は、全て60点とする。
- (6) 前期再試験はおおむね9月、後期再試験はおおむね2月に、日時を定めて行う。
- (7) 再試験の追試験は行わない。

試験に関する注意事項

試験受験の際には学生証が必要です。学生証が無ければ試験は受験できません。(期間外試験も同様です。)

学生証を忘れた場合は仮受験票を発行しますので教務課へ来てください。

1. 受験にあたっては、監督者の指示に従うこと。
2. 遅刻者の入室は、試験開始後25分以内とする。
3. 試験期間中は長机(3人掛け)の真ん中の席は使用しないこと。
4. 特別に持ち込みを許可されたもの以外は、机の上においてはならない。
5. 不正行為は絶対行わないこと。不正行為を行った者は、
 - (1) 該当科目を不認定とする。
 - (2) 学則及び懲戒に関する規程による懲戒処分対象となり学籍原簿への記載がなされ永久に記録される。
 - (3) 処分内容は、保証人へも通知される。

11 成績

1. 成績の評価及び基準は次のとおりである。

評価基準

	点数	評価		基準
		2016年度 以降入学生	2015年度 入学生	
合格	100～91	A+	優	授業の到達目標を完全に満たしているかまたは超えている
	90～80	A		授業の到達目標を十分に満たしている
	79～70	B	良	授業の到達目標を満たしている
	69～60	C	可	授業の到達目標を最低限度満たしている
	—	認定	認定	点数による評価を行わず単位認定のみとするもの
不合格	59～0	F	不可	授業の到達目標を満たしていない
	—	不認定	不認定	単位認定の基準を満たしていない。(点数による評価を行わない科目)
放棄	—	放棄	放棄	試験を欠席(レポートを未提出)し、追試験の願い出がない。 欠席が1/3を越えている。

※ 2018年度入学生においては、大学共通科目「女性とキャリア」、保育学科専門科目「教育実習(幼稚園)」「教育実習(特別支援)」「児童館実習」「保育実習Ⅰ(保育所)」「保育実習Ⅰ(福祉施設)」「保育実習Ⅱ(保育所)」「保育実習Ⅱ(福祉施設)」「保育実習Ⅱ(児童館)」、協定校留学終了者及び短期語学研修の単位認定科目、編入生及び既修得単位の単位認定科目の成績は点数での成績評価は行わず「認定」とする。

※ 2015～2017年度入学生においては、大学共通科目・共通科目「女性とキャリア」、保育学科専門科目「幼稚園実習Ⅰ」「幼稚園実習Ⅱ」「保育所実習Ⅰ」「保育所実習Ⅱ」「福祉施設実習Ⅰ」「福祉施設実習Ⅱ」「障害児教育実習」、協定校留学終了者及び短期語学研修の単位認定科目、編入生及び既修得単位の単位認定科目の成績は点数での成績評価は行わず「認定」とする。

※ 不合格、放棄の成績は、成績証明書には表記しない。

2. 履修科目の成績は、前期及び後期の所定の日によりポータルサイト「F-Station」を通じて、各自に通知する。

成績発表

前期	9月14日(金)	全学年
後期	3月1日(金)	全学年

在学生の保証人(親・学費負担者)に、前年度成績及び当年度履修科目を5月中旬に、前期成績及び後期追加履修科目を10月上旬に通知する。

3. GPA について〈2016 年度入学生から適用〉

GPA とは、Grade Point Average の略で、授業科目ごとの成績評価を段階で評価し、それぞれの評価に対応するようにグレード・ポイント（GP）を付与して 1 単位あたりの平均値を算出したものをいう。学修成果を客観的に評価することができる。

GPA は、ポータルサイト「F-Station」を通じて通知するほか、成績通知書、成績証明書にも記載される。

履修登録した科目の履修を途中でやめると「放棄」となり、GPA の計算に含まれてしまうので、履修登録のときにシラバスをよく参照するなど熟慮すること。

(1) 計算方法

それぞれの科目の成績評価を右表に示す GP に置き換え、単位数を掛けた数の合計を履修登録総単位数で割る。

成績評価	GP
A+	4.0
A	3.0
B	2.0
C	1.0
F、放棄	0

再履修した科目は、初めに履修したときの成績も含め、全ての成績評価と単位数が対象となる。

①成績評価が「認定」の科目は対象外とする。

②卒業要件に含まない科目は対象外とする。

ただし、卒業要件に含まれる科目のうち、次の科目は対象外とする。

- ・食物栄養学科専門科目の区分が臨地実習の科目及び「対人関係トレーニング」
- ・教職に関する科目
- ・他学科専門科目、他学部専門科目

(計算式)

$$\frac{(4.0 \times A + \text{の修得単位数}) + (3.0 \times A \text{の修得単位数}) + (2.0 \times B \text{の修得単位数}) + (1.0 \times C \text{の修得単位数})}{\text{履修登録総単位数 (不合格・放棄の単位数を含む)}}$$

(2) GPA の活用方法

GPA は、教員が客観的に履修指導するための参考資料とする。

- ・学期ごとに 1.0 未満の学生は、クラス担任等の履修指導を受けなければならない。
- ・2 学期以上続けて 1.0 未満の場合は、学科主任の履修指導を受けなければならない。また、保証人にも履修指導について報告する。
- ・3 学期連続で 1.0 未満の学生については、学生及び保証人に対して学部長が退学勧告も視野に指導を行う。

このほか、奨学金や協定校留学等の選考基準、就職活動の学校推薦等の選考基準

にも利用する。

12 進級に必要な単位数

	人間生活学部		
	人間生活学科	食物栄養学科	保育学科
卒業要件 単位	2年次終了までに50単位以上を取得しておかなければならない。	2年次終了までに50単位以上を取得しておかなければならない。 3年次終了までに90単位以上を取得しておかなければならない。	2年次終了までに49単位以上を取得しておかなければならない。

※国内・海外留学協定校に留学した（もしくは留学中の）学生には適用しない。

履修の手引き

人間生活学科

1. カリキュラムの概要

人間生活学科は、広く共生社会の実現に貢献する女性を育成するディプロマ・ポリシーを実現するために、以下の4つの学びの段階を設定して、カリキュラムを配置しています。

〈出会う〉人・社会・生活関連の知識・技能を習得し、視野を広げる科目

〈深める〉既存の知識・技能から課題の発見・探求し続ける科目

〈彩る〉学内外の実習・実験など、創造・体験・連携を重視した科目

〈極める〉各専門領域の深まりを基盤とした学修の総合的成果としての科目

これらの学びの順序の中で、学科共通科目と3つの専修の専門科目が配置されています。

1年次の学科共通科目は、「共生社会への招待」「衣食住生活のルーツ」「社会福祉論」「プロジェクトマネジメント入門」の4つが必須科目です。そのほかに、自分の興味や関心を問わず基礎的な知識や技能の修得を目指すために、「ボランティアと学び」「生活環境基礎」「現代の生活経営」「ソーシャルワーク入門演習」「子どもと福祉」「高齢者福祉論」「ソーシャルワーク論Ⅰ」「対人コミュニケーションの技法」「プロジェクトマネジメント基礎演習」が、3専修の専門科目から配置されています。この学科共通科目9科目の中から学びたい科目を選んで履修します。これらの科目をもとに、2年次からの専修を選択することになります。

2年次以降には、「女性リーダーシップ論」「課題発見フィールドワーク」「ライフステージと社会保障」が、つぎの3専修の科目群から学科共通科目として配置されています。これらの科目は、興味や関心にしたがって幅広く学ぶ、専門性を深める、あるいは卒業後の志望進路に沿って、自分で学びたい科目を選んで履修します。

『現代家政』

自らと社会の生活の質の向上(QOL)に貢献できる実践的能力を育成する専修です。家政学の専門知識を深めるために、「衣・食・住生活」及び「生活経営」「生涯発達」科目群を配置して、被服、食物、住居、生活経営・家族にかかわる内容を歴史・文化的な背景や自然科学的な視点を取り入れて多角的に学習します。また学んだ知識を実践するための、実習、実験、演習、プレゼンテーション等の科目が多く配置されています。多くの科目が、教員免許(家庭)取得に必要な科目と重なっています。

『社会福祉』

“自分自身”を活用し、社会福祉の専門性を基盤として、他者に寄り添い、自己実現を支援するソーシャルワーカーを育成する専修です。そのために、社会福祉に関するサービス・制度や専門的な方法について、実践的に学びます。

初年次（学科共通）に、ソーシャルワーカーを目指すための関心・意欲を高めるための「入門・概論科目」を配置します。専門科目群には「各論科目」及び「応用・発展科目」を配置し、利用者及び制度・サービス、地域社会のしくみについて、理解の深化を目指します。

『プロジェクトマネジメント』

多角的・多様な視点からプロジェクトを企画・運営する技能と経験を積むことができる専修です。論理的な考えを整理・表現する力を習得する「学びの技法科目」、他者と協働する力を習得する「ワークショップデザイン科目」、社会の課題を発見する力を習得する「ソーシャルプロジェクト科目」が配置されています。さらに、これらの科目で獲得した知識や技能を学外実践活動で活用する「プロジェクト・マネジメント科目」をとおして得た学修経験を、一般企業や公務員や教員、社会的企業活動など多彩な職業で活かします。

これらの3専修の科目群のほか、3年次に「チームビルディング演習」、4年次に「ライフマネジメント」が、3専修の専門科目から学科共通科目に配置されています。「人間生活学研究演習」と「卒業研究演習」「卒業研究」は後述します。

3つの専修の専門科目は初年次から配置されていますが、1～2年次の学習は、大学共通科目の教養科目や外国語の科目群から多く履修しなければなりません。

こうした科目群は、本学建学の精神を理解し、大学生としての教養を深め、外国語の修得や実用化を図るものです。

また、本学科では、次項に示す免許状・資格が取得可能です。取得を希望する場合、これらに必要な科目群の多くは1年次から履修が始まるので、可能性を閉ざさないよう熟慮した履修計画を立ててください。

このほか、他学科の科目や、札幌圏大学・短期大学単位互換制度（通称：グリーンキャンパス、2年次以降対象、23ページ参照）の科目、あるいは教職に関する科目も、上限はありますが卒業単位に含めることができます（15ページ参照）。他学科で開講される科目を履修する場合は、受け入れの可否を各学科の教育課程表で確認して下さい。

なお、1年間に履修登録できる単位数の上限は49単位です。ただし、資格取得に必要な科目は上限単位の中に含まない場合があるので該当するかどうかを確かめて履修登録して下さい（24ページ参照）。2年次終了までに50単位以上を取得していない場合は3年次に

進級できないので注意して下さい（30 ページ参照）。

2 年次から自分が選択した専修が指定する「選択必修単位」を履修し、3 年次からは教員ごとに開講されるゼミを選んで所属します（3 年次「人間生活学研究演習」、4 年次「卒業研究演習」）。3 年次に進級する際、学習したいテーマや指導してほしい教員について複数の希望をとり、ゼミが 10 名弱の少人数になるよう調整します。ゼミでは、担当教員と学生とが対話的なプロセスに基づいてテーマを設定して学習します。

3 年次のゼミは担当教員の指導のもとで実践的・応用的な課題に取り組み、4 年次の「卒業研究演習」では各自が研究テーマを設定して学習を集成し、さらに「卒業研究」に取り組んで、4 年間の学習の成果を卒業研究へと結実させます。

2 人間生活学科で取得可能な免許状・資格一覧

- ・ 中学校教諭一種免許状（家庭）
- ・ 社会福祉主事任用資格
- ・ 高等学校教諭一種免許状（家庭、福祉）
- ・ 司書となる資格
- ・ 社会福祉士国家試験受験資格
- ・ 司書教諭
- ・ スクールソーシャルワーカー
- ・ 社会調査士

3 履修モデル

ここに示す履修モデルは、人間生活学科の卒業要件をもとに、3 専修の特徴と各種の資格を取得するための要件を加えた標準的な例にすぎません。各自の学習目的によって異なりますので、担当教員の指導をもらいながら、これらを参考にして自らの履修計画を立ててください。

なお、* 指定科目とは、[教職に関する科目] のうち、「教育実習 I A」、「教育実習 I B」、「教育実習 II」、「教育実習 III」、「介護等体験」、「教職実践演習（中高）」を除いた科目を指します。

(1)人間生活学科を卒業するための必要単位

モデル1 (現代家政専修基本モデル)

		1年	2年	3年	4年
大学共通科目	教養科目	聖書学概論 必修2単位 キリスト教学 必修2単位 人間学概論 必修2単位 情報処理 必修2単位 女性とキャリア 必修1単位 運動の実践A 必修1単位 運動の実践B 必修1単位			
		選択科目 (☆)			
	外国語科目	「Academic Communication I」 必修1単位 「Academic Communication II」 必修1単位 選 択 必 修 4 単位以上			
		選択科目 (☆)			
学科専門科目	学科共通科目	共生社会への招待 必修2単位 衣食住生活のルーツ 必修2単位 社会福祉論 必修2単位 介護と福祉入門 必修2単位 現代の生活経営 専修必修2単位		人間生活学演習 必修4単位	卒業研究演習 必修4単位 卒業研究 必修4単位
		選択科目 (☆)			
	現代家政専修	選択必修科目：2年次から選択した専修の条件にしたがって <u>40単位以上</u> 履修する。 現代衣生活論 専修必修2単位 子育ての比較文化 専修必修2単位 家族と社会 専修必修2単位 現代食生活論 専修必修2単位 現代住生活論 専修必修2単位 このほか、現代家政専修が指定する選択科目(含む：学科共通科目「生活環境基礎」)から、 <u>28単位以上</u> を修得すること			
		選択科目 (☆)			
	他専修	選択科目 (☆) 他専修の科目群の中から、履修可能な専門科目を選択すること。			
☆他学科専門科目	他学科開講科目のうち、12単位まで選択可				
☆教職に関する科目	* 指定科目のうち、12単位まで選択可				
☆他学部学科専門科目及び協定校修得科目(本学教育課程表外の科目)	合わせて12単位まで選択可				
☆他大学等で修得した科目	12単位まで選択可				

【留意点】 選択科目は、選択科目 (☆)、並びに、☆から選択し、計 50単位以上履修すること。

モデル2（社会福祉専修基本モデル）

		1年	2年	3年	4年
大学共通科目	教養科目	聖書学概論 必修2単位 キリスト教学 必修2単位 人間学概論 必修2単位 情報処理 必修2単位 女性とキャリア 必修1単位 運動の実践A 必修1単位 運動の実践B 必修1単位			
		選択科目（☆）			
	外国語科目	「Academic Communication I」 必修1単位 「Academic Communication II」 必修1単位 選 択 必 修 4単位以上			
		選択科目（☆）			
学科専門科目	学科共通科目	共生社会への招待 必修2単位 衣食住生活のルーツ 必修2単位 社会福祉論 必修2単位 カシオパナソニック入門 必修2単位		人間生活学演習 必修4単位	卒業研究演習 必修4単位 卒業研究 必修4単位
		ソーシャルワーク入門 専修必修2単位 子どもと福祉 専修必修2単位 高齢者福祉論 専修必修2単位 ソーシャルワーク論Ⅰ 専修必修2単位			
		選択科目（☆）			
	主専修	選択必修科目：2年次から選択した専修の条件にしたがって <u>40単位以上</u> 履修する。 ソーシャルワーク論Ⅱ 専修必修2単位			
		このほか、社会福祉専修が指定する選択科目（含む：学科共通科目「ライフステージと社会保障」）から、 <u>28単位以上</u> を修得すること 選択科目（☆）			
他専修	選択科目（☆） 他専修の科目群の中から、履修可能な専門科目を選択すること。				
☆他学科専門科目	他学科開講科目のうち、12単位まで選択可				
☆教職に関する科目	* 指定科目のうち、12単位まで選択可				
☆他学部学科専門科目及び協定校修得科目（本学教育課程表外の科目）	合わせて12単位まで選択可				
☆他大学等で修得した科目	12単位まで選択可				

【留意点】 選択科目は、選択科目（☆）、並びに、☆から選択し、計 50単位以上履修すること。

モデル3 (プロジェクトマネジメント専修基本モデル)

		1年	2年	3年	4年
履修の手引き	大学共通科目	聖書学概論 必修2単位 キリスト教学 必修2単位 人間学概論 必修2単位 情報処理 必修2単位 女性とキャリア 必修1単位 運動の実践A 必修1単位 運動の実践B 必修1単位			
		選択科目(☆)			
	外国語科目	「Academic Communication I」 必修1単位 「Academic Communication II」 必修1単位 選択必修 4単位以上			
		選択科目(☆)			
学科専門科目	学科共通科目	共生社会への招待 必修2単位 衣食住生活のルーツ 必修2単位 社会福祉論 必修2単位 プロジェクトマネジメント入門 必修2単位 プロジェクトマネジメント発展 専修必修2単位	女性リーダーシップ論 専修必修2単位	人間生活学演習 必修4単位	卒業研究演習 必修4単位 卒業研究 必修4単位
		選択科目(☆)			
	マネジメント専修	選択必修科目：2年次から選択した専修の条件にしたがって40単位以上履修する。 論理的思考の技法 専修必修1単位 ワークショップデザイン 専修必修2単位 ワークショップデザイン基礎演習 専修必修2単位 デザイン思考の技法 専修必修1単位 プロジェクトマネジメントI 専修必修2単位 プロジェクトマネジメントII 専修必修2単位 ワークショップ入門 専修必修2単位 議論の技法 専修必修1単位 プロジェクトマネジメントIII 専修必修2単位 プレゼンテーションの技法 専修必修1単位			
	他専修	このほか、プロジェクトマネジメント専修が指定する選択科目(含む：学科共通科目「対人コミュニケーションの技法」「ボランティアと学び」「チームビルディング演習」)から、20単位以上修得すること 選択科目(☆)			
☆他学科専門科目	他学科開講科目のうち、12単位まで選択可				
☆教職に関する科目	*指定科目のうち、12単位まで選択可				
☆他学部学科専門科目及び協定校修得科目(本学教育課程表外の科目)	合わせて12単位まで選択可				
☆他大学等で修得した科目	12単位まで選択可				

【留意点】 選択科目は、選択科目(☆)、並びに、☆から選択し、計 50単位以上履修すること。

(2) 人間生活学科の各資格を取得するための必要単位（主専修モデル+教員免許）

モデル1：卒業+教員免許取得（中一種〈家庭〉・高一種〈家庭〉）

		1年	2年	3年	4年
大学共通科目	教養科目	聖書学概論 必修2単位 キリスト教学 必修2単位 人間学概論 必修2単位 情報処理 必修2単位 女性とキャリア 必修1単位 運動の実践A 必修1単位 運動の実践B 必修1単位			
		選択科目（☆） このうち、教員免許取得のためには、「日本国憲法」（2単位）が必修			
	外国語科目	「Academic Communication I」 必修1単位 「Academic Communication II」 必修1単位 選 択 必 修 4単位以上			
		選択科目（☆）			
学科専門科目	学科共通科目	共生社会への招待 必修2単位 衣食住生活のルーツ 必修2単位 社会福祉論 必修2単位 カジェコマサキト入門 必修2単位		人間生活学演習 必修4単位	卒業研究演習 必修4単位 卒業研究 必修4単位
		選択科目（☆） このうち、教員免許取得のための「教科に関する科目」（家庭）20単位以上を含めること また、2年次から選択した専修が指定する条件にしたがって、必要な選択科目（☆）を履修すること。			
	主専修	選択必修科目：2年次から選択した専修の条件にしたがって40単位以上履修すること。 そのうち、次のとおり専修ごとに定める科目の単位を必ず修得すること。 現代家政専修：12単位 社会福祉専修：10単位 プロジェクトマネジメント専修：20単位			
		選択科目（☆）			
	他専修	選択科目（☆） 他専修の科目群の中から、履修可能な専門科目を選択すること。			
☆他学科専門科目	他学科開講科目のうち、12単位まで選択可				
☆教職に関する科目	*該当教科の指導法を含めた必修単位				
☆他学部学科専門科目及び協定校修得科目（本学教育課程表外の科目）	合わせて12単位まで選択可				
☆他大学等で修得した科目	12単位まで選択可				

【留意点】 選択科目は、選択科目（☆）、並びに、☆から「教科に関する科目」（家庭）20単位を含めて選択し、計 50単位以上履修すること。

モデル2：卒業＋教員免許（中・高一種〈家庭〉＋高一種〈福祉〉）

		1年	2年	3年	4年
大学共通科目	教養科目	聖書学概論 必修2単位 キリスト教学 必修2単位 人間学概論 必修2単位 情報処理 必修2単位 女性とキャリア 必修1単位 運動の実践A 必修1単位 運動の実践B 必修1単位			
		選択科目（☆）			
	このうち、教員免許取得のためには、「日本国憲法」（2単位）が必修				
学科専門科目	外国語科目	「Academic Communication I」 必修1単位 「Academic Communication II」 必修1単位 選 択 必 修 4単位以上			
		選択科目（☆）			
	学科共通科目	共生社会への招待 必修2単位 衣食住生活のルーツ 必修2単位 社会福祉論 必修2単位 プロジェクトマネジメント入門 必修2単位		人間生活学演習 必修4単位	卒業研究演習 必修4単位 卒業研究 必修4単位
選択科目（☆）					
このうち、教員免許取得のための「教科に関する科目」（家庭）20単位以上と「教科に関する科目」（福祉）20単位以上を含めること また、2年次から選択した専修が指定する条件にしたがって、必要な選択科目（☆）を履修すること。					
主専修	選択必修科目：2年次から選択した専修の条件にしたがって40単位以上履修すること。 そのうち、次のとおり専修ごとに定める科目の単位を必ず修得すること。 現代家政専修：12単位 社会福祉専修：10単位 プロジェクトマネジメント専修：20単位				
	選択科目（☆）				
他専修	選択科目（☆） 他専修の科目群の中から、履修可能な専門科目を選択すること。				
☆他学科専門科目	他学科開講科目のうち、12単位まで選択可				
☆教職に関する科目	* 該当教科の指導法を含めた必修単位				
☆他学部学科専門科目及び協定校修得科目（本学教育課程表外の科目）	合わせて12単位まで選択可				
☆他大学等で修得した科目	12単位まで選択可				

【留意点】 選択科目は、☆、並びに、選択科目（☆）から「教科に関する科目」（家庭）20単位・（福祉）18単位以上を含めて選択し、計 50単位以上履修すること。

モデル3：卒業＋社会福祉士国家試験受験資格

		1年	2年	3年	4年
大学共通科目	教養科目	聖書学概論 必修2単位 キリスト教学 必修2単位 人間学概論 必修2単位 情報処理 必修2単位 女性とキャリア 必修1単位 運動の実践A 必修1単位 運動の実践B 必修1単位			
		選択科目(☆) このうち、「社会学」「心理学」の2科目4単位必修			
	外国語科目	「Academic Communication I」 必修1単位 「Academic Communication II」 必修1単位 選 択 必 修 4単位以上			
		選択科目(☆)			
学科専門科目	学科共通科目	共生社会への招待 必修2単位 衣食住生活のルーツ 必修2単位 社会福祉論 必修2単位 加江カマサシメ入門 必修2単位		人間生活学演習 必修4単位	卒業研究演習 必修4単位 卒業研究 必修4単位
		ソーシャルワーク入門演習 専修必修2単位 子どもと福祉 専修必修2単位 高齢者福祉論 専修必修2単位 ソーシャルワーク論I 専修必修2単位			
	選択科目(☆)				学科共通科目「社会福祉論」及び専修必修科目、専修選択必修、専修選択のうち、社会福祉士国家試験受験資格取得のための「指定科目」32科目60単位必修
	社会福祉専修	選択必修科目：2年次から選択した専修の条件にしたがって <u>40単位以上</u> 履修する。 ソーシャルワーク論II 必修2単位			
		このほか、社会福祉専修が指定する選択科目から、 <u>28単位以上</u> を修得すること			
他専修	選択科目(☆) 他専修の科目群の中から、履修可能な専門科目を選択すること。				
☆他学科専門科目	他学科開講科目のうち、12単位まで選択可				
☆教職に関する科目	* 指定科目のうち、12単位まで選択可				
☆他学部学科専門科目及び協定校修得科目(本学教育課程表外の科目)	合わせて12単位まで選択可				
☆他大学等で修得した科目	12単位まで選択可				

【留意点】 選択科目は、選択科目(☆)、並びに、☆から選択し、社会福祉士国家試験受験資格取得のための「指定科目」を含めて計 50単位以上履修すること。

モデル4：卒業＋社会福祉士国家試験受験資格＋＋スクールソーシャルワーク認定資格取得

履修の手引き

		1年	2年	3年	4年
大学共通科目	教養科目	聖書学概論 必修2単位 キリスト教学 必修2単位 人間学概論 必修2単位 情報処理 必修2単位 女性とキャリア 必修1単位 運動の実践A 必修1単位 運動の実践B 必修1単位			
		選択科目(☆) このうち、「社会学」「心理学」の2科目4単位必修			
	外国語科目	「Academic Communication I」 必修1単位 「Academic Communication II」 必修1単位 選 択 必 修 4単位以上			
		選択科目(☆)			
学科専門科目	学科共通科目	共生社会への招待 必修2単位 衣食住生活のルーツ 必修2単位 社会福祉論 必修2単位 プロジェクトマネジメント入門 必修2単位		人間生活学演習 必修4単位	卒業研究演習 必修4単位 卒業研究 必修4単位
		ソーシャルワーク入門演習 専修必修2単位 子どもと福祉 専修必修2単位 高齢者福祉論 専修必修2単位 ソーシャルワーク論I 専修必修2単位			
	選択科目(☆)				学科共通科目「社会福祉論」及び専修選択必修、専修選択の科目うち、社会福祉士国家試験受験資格取得のための「指定科目」32科目60単位必修並びにスクールソーシャルワーク認定資格取得のための「指定科目」4科目6単位必修
	社会福祉専修		選択必修科目：2年次から選択した専修の条件にしたがって40単位以上履修する。 ソーシャルワーク論II 必修2単位		
			このほか、社会福祉専修が指定する選択科目から、28単位以上を修得すること		
他専修		選択科目(☆) 他専修の科目群の中から、履修可能な専門科目を選択すること。			
☆他学科専門科目	他学科開講科目のうち、12単位まで選択可				
☆教職に関する科目	*指定科目のうち、12単位まで選択可				
	このうち、スクールソーシャルワーク認定資格取得のための「指定科目」として「教育原理」「教育制度論」の中から1科目以上並びに「教育心理学Ⅰ」「教育心理学Ⅱ」の中から1科目以上必修				
☆他学部学科専門科目及び協定校修得科目(本学教育課程表外の科目)	合わせて12単位まで選択可				
☆他大学等で修得した科目	12単位まで選択可				

【留意点】 選択科目は、選択科目(☆)、並びに、☆からスクールソーシャルワーク認定資格取得のための「指定科目」を選択し、社会福祉士国家試験受験資格取得のための「指定科目」を含めて計50単位以上履修すること。

モデル5：卒業＋社会調査士認定資格取得

		1年	2年	3年	4年
大学共通科目	教養科目	聖書学概論 必修2単位			
		キリスト教学 必修2単位			
	人間学概論 必修2単位				
		情報処理 必修2単位			
		女性とキャリア 必修1単位			
		運動の実践A 必修1単位			
		運動の実践B 必修1単位			
		選択科目(☆)			
外国語科目	外国語科目	「Academic Communication I」 必修1単位			
		「Academic Communication II」 必修1単位			
	選択必修 4単位以上				
		選択科目(☆)			
学科専門科目	学科共通科目	共生社会への招待 必修2単位		人間生活学演習 必修4単位	卒業研究演習 必修4単位
		衣食住生活のルーツ 必修2単位			卒業研究 必修4単位
	社会福祉論 必修2単位				
	プロジェクトマネジメント入門 必修2単位				
	プロジェクトマネジメント発展 専修必修2単位	女性リーダーシップ論 専修必修2単位			
		選択科目(☆)			
プロジェクトマネジメント専修	プロジェクトマネジメント専修	選択必修科目：2年次から選択した専修の条件にしたがって40単位以上履修する。			
		論理的思考の技法 必修1単位	ワークショップデザイン 必修2単位	ワークショップデザイン基礎演習 必修2単位	
	デザイン思考の技法 必修1単位	プロジェクトマネジメントⅠ 必修2単位	プロジェクトマネジメントⅡ 必修2単位	プロジェクトマネジメントⅢ 必修2単位	
	ワークショップ入門 必修2単位	議論の技法 必修1単位	プレゼンテーションの技法 必修1単位		
	このほか、プロジェクトマネジメント専修が指定する選択科目(含む：学科共通科目「対人コミュニケーションの技法」「ボランティアと学び」「チームビルディング演習」)から、20単位以上修得すること				
	選択科目(☆)				
	このうち、社会調査士認定資格取得のための科目を含めて選択すること。				
	他専修	選択科目(☆) 他専修の科目群の中から、社会調査士認定資格取得のための科目(含む：「社会福祉調査」と、学科共通科目「課題発見フィールドワーク」)と履修可能な専門科目を選択すること。			
☆他学科専門科目	他学科開講科目のうち、12単位まで選択可				
☆教職に関する科目	* 指定科目のうち、12単位まで選択可				
☆他学部学科専門科目及び協定校修得科目(本学教育課程表外の科目)	合わせて12単位まで選択可				
☆他大学等で修得した科目	12単位まで選択可				

【留意点】 選択科目は、☆、並びに、選択科目(☆)から選択し、計50単位以上履修すること。

食物栄養学科

1 カリキュラムの概要

(1) 学科専門科目のカリキュラムの概要

食物栄養学科の学科専門科目のカリキュラムは、管理栄養士養成施設の指定基準に基づいて構成され、専門基礎分野と専門分野とから成り立っています。

専門基礎分野と専門分野は、それぞれ3つと8つの区分(教育内容)から成り立っています。

専門基礎分野の3つの区分は、「社会・環境と健康」・「人体の構造と機能および疾病の成り立ち」・「食べ物と健康」です。

専門分野の8つの区分は、「基礎栄養学」・「応用栄養学」・「栄養教育論」・「臨床栄養学」・「公衆栄養学」・「給食経営管理論」・「総合演習」・「臨地実習」です。

「社会・環境と健康」では、人間や生活についての理解を深めるとともに、社会や環境と健康の関わりについて理解します。

「人体の構造と機能および疾病の成り立ち」では、人体の構造や機能を系統的に理解し、主要疾患の成因、病態、診断、治療等についても理解します。

「食べ物と健康」では、食品の各種成分を理解し、食品の人体に対する栄養面や安全面等への影響や評価について理解します。

「基礎栄養学」では、栄養とは何か、その意義について理解します。

「応用栄養学」では、身体状況や栄養状態に応じた栄養管理の考え方を理解します。

「栄養教育論」では、健康・栄養状態・食行動・食環境等を総合的に評価・判定する能力を養い、実践的な健康・栄養教育の理論と方法を修得します。

「臨床栄養学」では、傷病者の病態や栄養状態の特徴に基づいた適切な栄養管理の方法について修得します。

「公衆栄養学」では、地域や職域等の健康・栄養問題を総合的に評価・判定する能力を養います。

「給食経営管理論」では、給食運営や関連の資源を総合的に判断し、栄養面、安全面、経済面全般のマネジメントを行う能力を養います。

「総合演習」では、専門分野を横断して、栄養評価や管理が行える総合的な能力を養います。

「臨地実習」では、学外の実践活動の場(病院、保健センター、自衛隊給食等)での課題発見、解決を通して専門的知識および技術の統合を図ります。

学科専門科目は、全て互いに関連しています。貴女の好き嫌いに関係なく、その

都度確実に理解しながら、1年次から4年次へと進むように心掛けることが大切です。

(2) 外国語科目について

外国語科目では、「Academic Communication I・II」各1単位が必修で、その他に4単位を取得する必要があります。

英語以外の言語としては、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語が開講されています。新たな外国語を履修する場合には、1年間4単位のみよりは、2年間8単位学ぶことが望ましいでしょう。

新たな外国語ではなく、英語をさらに学ぶことも有意義です。例えば、インターネットを使うにも必要です。就職または進学した所で、研究のためや最新の情報を得るにも必要です。なぜなら、これらの情報は、英文で書かれていることがほとんどだからです。

なお、本学科のカリキュラムは、1年次に「Academic Communication I・II」(必修)を履修し、2年次に「科学英語」(選択)で理系の英文を、3年後期には「卒業演習I」(必修)を、4年次に「卒業演習II」(必修)で英語論文を読む機会があり、4年間英語を学べるように組まれています。

(3) 選択科目について

大学共通科目の選択科目

「数学」は、自然科学に属する分野が主となる本学科において、その基礎になる数学的な考え方を会得するために重要な科目です。大学の「数学」では、数学の技術を学ぶのではなく、考え方を学びます。

その他の科目は、大学を卒業する者として、広い教養をもつために必要な科目です。特定の分野に片寄らず、広く学んでおくことをお勧めします。

学問は分野によって考え方の基礎に違いがありますから、それぞれの分野の考え方を学んでおくことは重要です。

学科専門科目の選択科目

学科専門科目の選択科目は、学科専門科目を学ぶための基礎科目と、将来の進路によって選択する科目があります。

「はじめての化学」は、学科専門科目の、食品学・栄養学・生化学などに関する科目の基礎となります。高等学校の「化学」や「生物」と重複する部分もありますが、実験に必要な知識を学ぶ科目ですので、しっかり身につけておく必要があります。

「栄養統計学」は、公衆栄養学や栄養指導など、その基礎に統計の知識が必要な科目のために、学んでおくことがよいでしょう。

専門知識を学ぶ時も職業活動をする時も、知識・情報の伝達手段として文章表現が最も重要です。食物栄養の知識を吸収し、社会で生かすためにも「文章表現演習Ⅰ・Ⅱ」で基本からしっかり学んで下さい。

3年次後期には「卒業演習Ⅰ」（必修）、4年次には「卒業演習Ⅱ」（必修）が開設されており、各人が一人の食物栄養学科専任教員を選び、その指導を受けます。このとき同時に「卒業研究」（選択）が開講されており、同時に選択することを強くお勧めします。

2 履修モデル

(1) 卒業＋管理栄養士国家試験受験資格取得のためには

	1年	2年	3年	4年
大学共通科目	「聖書学概論」 必修2単位 「キリスト教学」 必修2単位 「人間学概論」 必修2単位 「情報処理」 必修2単位 「女性とキャリア」 必修1単位 「運動の実践A」 必修1単位 「運動の実践B」 必修1単位			
外国語科目	「Academic CommunicationⅠ」 必修1単位 「Academic CommunicationⅡ」 必修1単位 選択必修： 4単位以上			
学科専門科目	卒業必修：90単位 卒業必修を除く管理栄養士必修：11科目20単位 (資格必修科目については教育課程表の「資格 管理栄養士」欄を参照) 管理栄養士選択必修：3科目から2科目4単位選択必修 (「臨床栄養学実習Ⅲ」「公衆栄養学実習」「給食経営管理実習Ⅱ」の3科目から2科目選択必修)			
選択科目	他学科専門科目、他学部学科専門科目、教職に関する科目(指定科目*)、および協定校修得科目(本学教育課程表外の科目)は、合わせて8単位まで選択単位として算入できる			

* 18、19、20ページ参照

※上記、科目を履修することにより、食品衛生監視員・食品衛生管理者任用資格も取得可能となる。

(2) 卒業＋管理栄養士国家試験受験資格＋栄養教諭一種免許取得のためには

	1年	2年	3年	4年
大学共通科目	「聖書学概論」 必修2単位 「キリスト教学」 必修2単位 「人間学概論」 必修2単位 「情報処理」 必修2単位 「女性とキャリア」 必修1単位 「運動の実践A」 必修1単位 「運動の実践B」 必修1単位 「日本国憲法」 免許必修2単位			
外国語科目	「Academic Communication I」 必修1単位 「Academic Communication II」 必修1単位 選択必修： 4単位以上			
学科専門科目	卒業必修：90単位 卒業必修を除く管理栄養士必修：11科目20単位 (資格必修科目については教育課程表の「資格 管理栄養士」欄を参照) 管理栄養士選択必修：3科目から2科目4単位選択必修 (「臨床栄養学実習Ⅲ」「公衆栄養学実習」「給食経営管理実習Ⅱ」の3科目から2科目選択必修) 栄養に係る教育に関する科目：「学校栄養教育Ⅰ」2単位、「学校栄養教育Ⅱ」2単位			
教職に関する科目	24単位以上 (学生便覧の「教職課程履修要項」を参照)			

※上記、科目を履修することにより、食品衛生監視員・食品衛生管理者任用資格も取得可能となる。

(3) 卒業＋栄養士資格＋食品衛生監視員・食品衛生管理者任用資格取得のためには

	1年	2年	3年	4年
大学共通科目	「聖書学概論」 必修2単位 「キリスト教学」 必修2単位 「人間学概論」 必修2単位 「情報処理」 必修2単位 「女性とキャリア」 必修1単位 「運動の実践A」 必修1単位 「運動の実践B」 必修1単位			
外国語科目	「Academic Communication I」 必修1単位 「Academic Communication II」 必修1単位 選択必修： 4単位以上			
学科専門科目	卒業必修： 90単位 選択必修： 4単位 (「臨床栄養学実習Ⅲ」「公衆栄養学実習」「給食経営管理実習Ⅱ」の3科目から2科目選択必修)			
資格取得に必要な選択科目	共通選択科目(「環境と化学」)、学科専門科目(「はじめての化学」、「食品化学A」、「食と安全論B」)の中から1科目選択必修			
選択科目	共通選択科目・学科専門選択科目より15単位以上 (他学科専門科目、他学部学科専門科目、教職に関する科目(科目指定*)、および協定校修得科目(本学教育課程表外の科目)は、合わせて8単位まで選択単位に算入できる)			

(4) 卒業＋栄養士資格＋フードスペシャリスト資格認定試験受験資格取得のためには

	1年	2年	3年	4年
大学共通科目	「聖書学概論」 必修2単位 「キリスト教学」 必修2単位 「人間学概論」 必修2単位 「情報処理」 必修2単位 「女性とキャリア」 必修1単位 「運動の実践A」 必修1単位 「運動の実践B」 必修1単位			
外国語科目	「Academic Communication I」 必修1単位 「Academic Communication II」 必修1単位 選択必修： 4単位以上			
学科専門科目	卒業必修： 90単位 選択必修： 4単位 (「臨床栄養学実習Ⅲ」「公衆栄養学実習」「給食経営管理実習Ⅱ」の3科目から2科目選択必修) 選択：フードスペシャリスト資格認定試験受験資格取得に必要な7科目 14単位			
選択科目	共通選択科目・学科専門選択科目より2単位以上 (他学科専門科目、他学部学科専門科目、教職に関する科目(指定科目*)、および協定校修得科目(本学教育課程表外の科目)は、合わせて8単位まで選択単位として算入できる)			

* 18、19、20ページ参照

保育学科

1 カリキュラムの概要

保育学科のカリキュラムは、学びの体系を示す「子ども教育専修」と「子ども生活支援専修」の2専修で構成されています。保育学科の学びの基礎となるのは、子どもそのものの理解です。子どもについての理解を基盤として、「子どもの学び」と「子どもの生活」という視点から、子どもやその周りの人々を支えるための知識や技術を4年間で学びます。

各専修は、それぞれいくつかの領域に区分されています。「子ども教育専修」の領域は、「保育の理論」「児童の理解」「障害児の理解」「保育の内容」「保育の基礎技能」の5つ、「子ども生活支援」は、「保育の理論」「児童の理解」「保育の内容」「保育の基礎技能」の4つに区分されています。また2専修の他に、両専修に共通した学びを得る「共通」をおいています。「共通」は「実習」「専門研究法」の2領域に区分されています。各区分の内容は以下のとおりです。

「保育の理論」では、教育、保育、社会福祉の基礎理論を学び、保育者として必要な保育に対する考え方、保育技術の基礎となる理論的知識を習得することを目指しています。

「児童の理解」「保育内容」では、対象となる乳幼児・児童の心理学、保健、栄養、音楽、美術といった視点から学ぶと同時に、保育内容の理論と実践の基礎を習得します。

「障害児の理解」には、特別支援学校教諭免許取得科目群を配し、障がい児の心理的側面、生理的側面、病理的側面からの理解と、障害児教育・保育実践のための理論と方法を学びます。

「保育の基礎技能」では専門的な保育技能を習得すると同時に感性豊かな人間性を追求し、生き生きとした保育を展開する実践力の習得を目指します。

「実習」では、それまでに修得した基礎理論の理解と基礎技能の習得を踏まえ、2年次には同じ学園の藤幼稚園と本学の実習協力園である羊丘藤保育園にて実習を行い、その後、学外の保育所（10日～20日）、福祉施設（10日～20日間）、幼稚園（4週間）で実習を行います。さらに児童厚生1級指導員資格取得希望者は児童館（20日間）での実習、また人数は限られますが、特別支援学校教諭免許の取得希望者は特別支援学校での障害児教育実習（2～3週間）を行う事になっています。

「専門研究法」では、保育現場で役立つ、より高度な専門技術や保育研究を構築するための知識・技術等が配置されています。4年次の「保育・教職実践演習（幼）」では、3年間の学びを確認し、実践者に必要な意識や実践力を各自深められるような演習となっています。また、「保育学研究演習」「卒業研究演習」は、主に演習形式で、保育学科の専任教員によるゼミナールに所属し、各自の問題意識に応じて研究を深める場となります。3年次

の「保育学研究演習」ではより深い専門知識を習得すると同時に、研究を進めるための基礎的トレーニングを行いません。履修前に深めたい分野を絞っておくことが望ましいでしょう。「卒業研究演習」及び「卒業研究」は各自テーマを設定し、4年間の学修成果を論文や卒業制作としてまとめます。選択科目ですが履修することが望ましいでしょう。

本学科では、幼稚園教諭一種免許、保育士資格、特別支援学校教諭一種免許、児童厚生1級指導員資格の全ての資格取得が可能なようにカリキュラムを構成してあるため、開講科目が多くなっています。

以上のように本学科では、理論と実践科目を密接に配置し、実践能力を高め、優れた観察力、洞察力をもった保育者養成を目指します。そのため、学内における基礎理論の習得と同時に学外における実習が大きな比重を占めています。

この学科で何を学ぶのかは皆さん自身にかかっています。卒業後の進路を模索しつつ、充実した大学生活であるようにと教職員一同願っています。

2 履修モデル

モデル1：卒業＋幼稚園教諭一種免許取得＋保育士資格取得

	1年	2年	3年	4年
教養科目	必修：11単位			
	「日本国憲法」2単位必修			
外国語科目	「Academic Communication I」1単位必修 「Academic Communication II」1単位必修 選択必修：4単位以上			
学科専門科目	幼稚園教諭一種免許を取得するために定められた、「教科に関する科目」、「教職に関する科目」を履修			
	保育士資格取得のための ・必修：「告示による科目」57単位・「保育実習Ⅱ」2単位・ 「保育実習指導Ⅱ」1単位 ・選択必修：「告示による科目」のうち6単位以上			

モデル2：卒業＋幼稚園教諭一種免許＋特別支援学校教諭一種免許取得

	1年	2年	3年	4年
教養科目	必修：11単位			
	「日本国憲法」2単位必修			
外国語科目	「Academic Communication I」1単位必修 「Academic Communication II」1単位必修 選択必修：4単位以上			
学科専門科目	・幼稚園教諭一種免許を取得するために定められた、「教科に関する科目」、「教職に関する科目」を履修 ・特別支援学校教諭一種免許を取得するために定められた指定科目を履修			

モデル3：卒業＋幼稚園教諭一種免許＋特別支援学校教諭一種免許取得＋保育士資格取得

	1年	2年	3年	4年
教養科目	必修：11単位			
	「日本国憲法」2単位必修			
外国語科目	「Academic Communication I」1単位必修 「Academic Communication II」1単位必修 選択必修：4単位以上			
学科専門科目	・幼稚園教諭一種免許を取得するために定められた、「教科に関する科目」、「教職に関する科目」を履修 ・特別支援学校教諭一種免許を取得するために定められた指定科目を履修			
	保育士資格取得のための ・必修：「告示による科目」57単位・「保育実習Ⅱ」2単位・ 「保育実習指導Ⅱ」1単位 ・選択必修：「告示による科目」のうち6単位以上			

モデル4：卒業＋幼稚園教諭一種免許＋特別支援学校教諭一種免許取得＋保育士資格＋児童厚生1級指導員資格取得

	1年	2年	3年	4年
教養科目	必修：11単位			
	「日本国憲法」2単位必修			
外国語科目	「Academic Communication I」1単位必修 「Academic Communication II」1単位必修 選択必修：4単位以上			
学科専門科目	・幼稚園教諭一種免許を取得するために定められた、「教科に関する科目」、「教職に関する科目」を履修 ・特別支援学校教諭一種免許を取得するために定められた指定科目を履修			
	保育士資格取得のための ・必修：「告示による科目」57単位・「保育実習Ⅱ」2単位・ 「保育実習指導Ⅱ」1単位 ・選択必修：「告示による科目」のうち6単位以上			
	児童厚生1級指導員資格を取得するために定められた指定科目を履修			

教育課程表

1 大学共通科目・共通科目

〈2018年度入学生に適用〉大学共通科目（人間生活学部開講科目）

(1) 教養科目

ディプロマ・ポリシー

①知識・理解 ②思考方法 ③コミュニケーション ④志向性 ⑤態度 ⑥国際意識・人間力

シラバス ページ	科目 No.	区分	授 業 科 目	単位数	開講学年・週時数								クラス	担 当 者	ディプロマ・ポリシー						備 考		
					必修	選択	1		2		3				4		①	②	③	④		⑤	⑥
							前	後	前	後	前	後			前	後							
101	40041	的キ 世界 観 キ リス ト 教	キリスト教学	2	2							人間生活	木村 晶子	○					○	○			
102	40042					食物栄養	阿部 包																
101	40043					保育	木村 晶子																
103	40011		聖書学概論	2		2							人間生活	阿部 包	○		○						
	40012						食物栄養	阿部 包															
	40013						保育	阿部 包															
	40021		聖書学（新約）		2			2					阿部 包	○		○							
	40031	聖書学（旧約）		2			2					阿部 包	○		○								
104	40491	形キ 成キ ャリ ア	女性とキャリア	1		2							人間生活	村・田中・細			○	○		○			
105	40492						食物栄養	中河原俊治															
106	40493						保育	大室 道夫															
107	40431	情 報	情報処理	2	2							人間生活 a	行方 常幸	○		○							
108	40432					人間生活 b	中山理智恵																
107	40433					食物栄養 a	行方 常幸																
108	40434					食物栄養 b	中山理智恵																
107	40435					保育 a	行方 常幸																
108	40436					保育 b	中山理智恵																
109	45121					運	運動の実践 A	1	2							人間生活	寺岡真知子	○		○			
111	45122	食物栄養	田中 昭憲																				
			田中 一徳																				
113	45123	保育	木本 理可																				
			寺岡真知子																				
			本間 裕二																				
			木本 理可																				
			田中 昭憲																				
			田中 一徳																				
115	45131	動	運動の実践 B	1	2							人間生活	寺岡真知子	○		○							
117	45132					食物栄養	田中 昭憲																
							中井 明美																
119	45133		保育	木本 理可																			
				寺岡真知子																			
				本間 裕二																			
				木本 理可																			
			田中 昭憲																				
			中井 明美																				
121	40501	自然・ 科学	生物科学 A		2	2						増田 隆一	○	○									
122	40511		生物科学 B		2	2						増田 隆一	○	○									
123	40521		環境科学 A		2	2						江口 久登	○	○									

共
通
科
目

ディプロマ・ポリシー

①知識・理解 ②思考方法 ③コミュニケーション ④志向性 ⑤態度 ⑥国際意識・人間力

シラバス ページ	科目 No.	区分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								クラス	担 当 者	ディプロマ・ポリシー						備 考
				必 修	選 択	1		2		3		4				①	②	③	④	⑤	⑥	
						前	後	前	後	前	後	前	後									
125	40051	科学 と 人 間 生 活	人間学概論	2	2								人間生活	堀 雅彦	○		○					
126	40052					食物栄養	木村 晶子															
125	40053					保育	堀 雅彦															
127	40381		心理学	2	2								人間生活	今泉 明子	○	○						
	40382					食物・栄養	今泉 明子															
128	40421		数学	2	2									木村 信行	○							
129	40441		統計学	2	2									原林 滋子	○							
131	40451	環境と化学	2	2									江口 久登	○		○	○					
132	40461	寒冷地生活文化	2	2									的場 澄人	○	○		○					
133	40071	社 会 と 文 化	哲学	2	2								多田 圭介	○	○							
134	40081		倫理学	2	2								宮野晃一郎	○								
135	40131		日本国憲法	2	2								人間生活・ 食物栄養	真鶴 俊喜	○		○					
136	40132					保育	菅原 寧格															
137	40141		法学	2	2								真鶴 俊喜	○		○						
138	40321		民法	2	2								内田 博	○		○						
139	40331		経済学	2	2								内田・金上・八森	○		○						
140	40341		社会学	2	2								清水 香基	○		○						
142	40091		文学 A	2	2								高橋さおり	○						日本文学		
143	40101		文学 B	2	2								英 美由紀	○						外国文学		
144	40111		芸術 A	2	2								杉浦 篤子	○			○			美術		
145	40121		芸術 B	2	2								相原 啓寿	○			○			音楽		
146	40371		文化人類学	2	2								岡庭 義行	○	○							
147	40351		日本史概論	2	2								上田 哲司	○		○						
148	40361		外国史	2	2								渡邊 浩	○								
149	40471	国際理解教育	2	2								李 桐直	○	○	○	○						
150	40481	異文化間コミュニケーション	2	○								御手洗昭治	○	○	○	○						
			計	11	52																	

共通科目

〈2017 年度以前入学生に適用〉 共通科目

ディプロマ・ポリシー

- ①知識・理解 ②思考方法 ③コミュニケーション
④志向性 ⑤態度 ⑥国際意識・人間力

シラバス ページ	科目 No.	区分	授 業 科 目	単位数	開講学年・週時数								クラス	担 当 者	ディプロマ・ポリシー						備 考		
					必 修	選 択	1		2		3				4		①	②	③	④		⑤	⑥
							前	後	前	後	前	後			前	後							
全 学 開 講 科 目	40041	的キ 世 界 観 ト 教	キリスト教学	2	2								人間生活	木村 晶子	○					○	○		
	40042					食物栄養	阿部 包																
	40043					保育	木村 晶子																
	40491	形キ 成 キ ャ リ ア	女性とキャリア	1	2								人間生活	木村・田中・細			○	○		○			
	40492					食物栄養	中河原俊治																
	40493					保育	大室 道夫																
	40431	情 報	情報処理	2	2								人間生活 a	大室 道夫	○	○	○						
	40432					人間生活 b	中山理智恵																
	40433					食物栄養 a	行方 常幸																
	40434					食物栄養 b	中山理智恵																
	40435					保育 a	行方 常幸																
	40436					保育 b	中山理智恵																
	45121	運 動	運動の実践 A	1	2								人間生活	寺岡真知子	○		○						
	45122					食物栄養	田中 昭憲																
田中 一徳																							
木本 理可																							
45123	保育					寺岡真知子																	
			本間 裕二																				
45131	運動の実践 B		人間生活			木本 理可																	
						田中 昭憲																	
						田中 一徳																	
						寺岡真知子																	
		本間 裕二																					
45132	食物栄養	木本 理可																					
寺岡真知子																							
本間 裕二																							
45133	保育	木本 理可																					
田中 昭憲																							
		中井 明美																					
40501	自然・科学	生物科学 A	2	2								増田 隆一	○	○									
40511		生物科学 B	2	2								増田 隆一	○	○									
40521		環境科学 A	2	2								江口 久登	○	○									

共
通
科
目

ディプロマ・ポリシー

①知識・理解 ②思考方法 ③コミュニケーション ④志向性 ⑤態度 ⑥国際意識・人間力

シラバス ページ	科目 No.	区分	授 業 科 目	単位数	開講学年・週時数								クラス	担 当 者	ディプロマ・ポリシー				備 考		
					必修	選択	1		2		3				4		①	②		③	④
							前	後	前	後	前	後			前	後					
	40011	的キ 世 界 下 教 観	聖書学概論	2			2					人間生活	阿部 包	○	○						
	40012				食物栄養	阿部 包															
	40013				保育	阿部 包															
151	40021		聖書学（新約）	2			2						阿部 包	○	○						
152	40031		聖書学（旧約）	2			2						阿部 包	○	○						
	40051	科 学 と 人 間 生 活	人間学概論	2	2							人間生活	堀 雅彦	○	○						
	40052					食物栄養	木村 晶子														
	40053					保育	堀 雅彦														
	40381	と 人 間 生 活	心理学	2	2							人間生活	今泉 明子	○	○						
	40382					食物栄養・保健	今泉 明子														
	40421	社 会 と 文 化	数学	2	2								木村 信行	○							
	40441		統計学	2	2									原林 滋子	○						
	40451		環境と化学	2	2									江口 久登	○	○	○				
	40461		寒冷地生活文化	2	2									的場 澄人	○	○	○				
	40071		哲学	2	2									多田 圭介	○	○					
	40081		倫理学	2	2									宮野晃一郎	○						
	40131		日 本 国 憲 法	日本国憲法	2	2							人間生活・ 食物栄養	真鶴 俊喜	○	○					
	40132						保育	菅原 寧格													
	40141		法学	2	2									真鶴 俊喜	○	○					
	40321		民法	2	2									内田 博	○	○					
	40331	経済学	2	2									内田・金上・八森	○	○						
	40341	社会学	2	2									清水 香基	○	○						
	40091	文学 A	2	2									高橋さおり	○							
	40101	文学 B	2	2									英 美由紀	○							
	40111	芸術 A	2	2									杉浦 篤子	○		○					
	40121	芸術 B	2	2									相原 啓寿	○		○					
	40371	文化人類学	2	2									岡庭 義行	○	○						
	40351	日本史概論	2	2									上田 哲司	○	○						
	40361	外国史	2	2									渡邊 浩	○							
	40471	国際理解教育	2	2									李 炯直	○	○	○					
	40481	異文化間コミュニケーション	2	○									御手洗昭治	○	○	○					
			計	11	52																

日本文学
外国文学
美術
音楽

共通科目

2 大学共通科目・外国語科目

(2018年度入学生に適用) 大学共通科目 (人間生活学部開講科目)

(2) 外国語科目

ディプロマ・ポリシー

①知識・理解 ②コミュニケーション、問題解決能力 ③志向性、社会的責任

④総合的な学習経験、創造的な思考力

シラバス ページ	科目 No.	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								担当者	ディプロマ・ポリシー				備 考
			必 修	選 択	1		2		3		4			①	②	③	④	
					前	後	前	後	前	後	前	後						
155	47201	Academic Communication I	1	2														★ ※ Academic Communication I・II を必修とし、このほかに、4単位以上選択必修。 ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★
156	47202																	
157	47203																	
158	47204																	
159	47205																	
161	47206																	
162	47207																	
164	47208																	
166	47209																	
167	47211	Academic Communication II	1	2													★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★	
168	47212																	
169	47213																	
170	47214																	
171	47215																	
173	47216																	
174	47217																	
176	47218																	
178	47219																	
179	47221	Essential Vocabulary & Grammar		1 2														
	47231	Interactive English A		1	2												★ ★ ★ ★	
	47232																	
	47233																	
	47234																	
	47241	Interactive English B		1		2											★ ★ ★ ★	
	47242																	
	47243																	
	47244																	
180	47251	Practical English A		1 2														
181	47261	Practical English B		1 2														
182	47271	Academic Listening & Note-taking		1 2														
183	47281	Academic Speaking & Discussion		1 2													★	
	47291	Academic Reading I		1		2												
	47292																	
	47301	Academic Reading II		1			2									★		
	47302																	
184	47311	Skills for the TOEFL I		1 2														
186	47321	Skills for the TOEFL II		1 2														
	47331	English for Global Communication		1		2											★ ★	
	47341	CLIL English		1			2											
188	47401	初級ドイツ語 I		1 2														
189	47411	初級ドイツ語 II		1 2														
	47421	中級ドイツ語 I		1		2												
	47431	中級ドイツ語 II		1			2											
	47441	ドイツ語演習 I		1		2											★ ★	
	47451	ドイツ語演習 II		1			2											
	06481	上級ドイツ語 I		1				2									□	
	06491	上級ドイツ語 II		1					2								□	

外国語科目

シラバス ページ	科目 No.	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								担当者	ディプロマ・ポリシー				備 考				
			必 修	選 択	1		2		3		4			①	②	③	④					
					前	後	前	後	前	後	前	後										
190	47501	初級フランス語 I		1	2																	
191	47502																					
192	47511	初級フランス語 II		1	2																	
193	47512																					
	47521	中級フランス語 I		1		2																
	47531	中級フランス語 II		1			2															
	47541	フランス語演習 I		1			2														★	
	47551	フランス語演習 II		1				2													★	
	06581	上級フランス語 I		1					2												□	
	06591	上級フランス語 II		1						2											□	
194	47601	初級中国語 I		1	2																	
195	47602																					
196	47603																					
198	47611	初級中国語 II		1	2																	
199	47612																					
200	47613																					
	47621	中級中国語 I		1		2																
	47631	中級中国語 II		1			2															
	47641	中国語演習 I		1			2															★
	47651	中国語演習 II		1				2														★
	06681	上級中国語 I		1					2													□
	06691	上級中国語 II		1						2												□
	06701	中国語実践演習 A		2			2															□
	06711	中国語実践演習 B		2				2														□
202	47701	初級韓国語 I		1	2																	
203	47702																					
205	47703																					
207	47711	初級韓国語 II		1	2																	
208	47712																					
210	47713																					
	47721	中級韓国語 I		1			2															
	47731	中級韓国語 II		1				2														
	47741	韓国語演習 I		1				2														★
	47751	韓国語演習 II		1					2													★
	06821	上級韓国語 I		1						2												□
	06831	上級韓国語 II		1							2											□
	06841	韓国語実践演習 A		2				2														□
	06851	韓国語実践演習 B		2					2													□
	46611	海外語学研修 A		2	○		○		○		○											*
	46621	海外語学研修 B		2	○		○		○		○											*
	46631	海外語学研修 C		2	○		○		○		○											*
	46641	海外語学研修 D		1	○		○		○		○											*
	46651	海外語学研修 E		1	○		○		○		○											*
	46661	海外語学研修 F		1	○		○		○		○											*
		計		2	62																	

*協定校・指定校短期語学研修による認定は1～3年生のみ対象。

★教職履修者は、いずれか2単位以上選択必修

□北16条キャンパスにて開講

〈2017年度以前入学生に適用〉外国語科目

ディプロマ・ポリシー

①知識・理解 ②コミュニケーション、問題解決能力

③志向性、社会的責任 ④総合的な学習経験、創造的な思考力

シラバス ページ	科目 No.	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								担 当 者	ディプロマ・ポリシー				備 考				
			必 修	選 択	1		2		3		4			①	②	③	④					
					前	後	前	後	前	後	前	後										
	47201	Academic Communication I	1	2											K. Litton	○	○	○	★ ※ Academic Communication I・II を必修とし、このほかに、4単位以上選択必修。			
	47202																	C. W. Cartney				
	47203																	R. Atkins				
	47204																	C. B. Simons				
	47205																	D. W. Quinn				
	47206																	北間 砂織				
	47207																	湯浅 恭子				
	47208																	高橋 博				
	47209																	山田 晃子				
	47211	Academic Communication II	1	2											K. Litton	○	○	○	★			
	47212																	C. W. Cartney				
	47213																	R. Atkins				
	47214																	C. B. Simons				
	47215																	D. W. Quinn				
	47216																	北間 砂織				
	47217																	湯浅 恭子				
	47218																	高橋 博				
	47219																	山田 晃子				
	47221	Essential Vocabulary & Grammar		1 2											山田 晃子	○	○		★			
212	47231	Interactive English A		1	2										K. Litton	○	○	○	★			
213	47232																	C. W. Cartney				
214	47233																	R. Atkins				
215	47234																	C. B. Simons				
216	47241	Interactive English B		1	2										K. Litton	○	○	○	★			
217	47242																	C. W. Cartney				
218	47243																	R. Atkins				
219	47244																	C. B. Simons				
	47251	Practical English A		1 2											D. W. Quinn	○	○	○				
	47261	Practical English B		1 2											D. W. Quinn	○	○	○				
	47271	Academic Listening & Note-taking		1 2											C. W. Cartney	○	○					
	47281	Academic Speaking & Discussion		1 2											C. W. Cartney	○	○	○	★			
220	47291	Academic Reading I		1	2										D. W. Quinn	○	○	○	★			
222	47292																	C. W. Cartney				
223	47301	Academic Reading II		1	2										D. W. Quinn	○	○	○	★			
225	47302																	C. W. Cartney				
	47311	Skills for the TOEFL I		1 2											高橋 博	○	○	○				
	47321	Skills for the TOEFL II		1 2											高橋 博	○	○	○				
226	47331	English for Global Communication		1	2										高橋 博	○	○	○	★			
228	47341	CLIL English		1		2									高橋 博	○	○	○	★			
	47401	初級ドイツ語 I		1 2											杉浦 康則	○	○	○				
	47411	初級ドイツ語 II		1 2											杉浦 康則	○	○	○				
230	47421	中級ドイツ語 I		1	2										杉浦 康則	○	○	○				
231	47431	中級ドイツ語 II		1	2										杉浦 康則	○	○	○				
232	47441	ドイツ語演習 I		1	2										阿部 和夫	○	○	○	★			
234	47451	ドイツ語演習 II		1	2										山藤 顕	○	○	○	★			
257	06481	上級ドイツ語 I		1				2							清水 誠	○	○		□			
258	06491	上級ドイツ語 II		1					2						清水 誠	○	○		□			
	47501	初級フランス語 I		1 2											三浦なつみ	○	○	○	★			
	47502																					

外国語科目

シラバス ページ	科目 No.	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								担当者	ディプロマ・ポリシー				備 考		
			必 修	選 択	1		2		3		4			①	②	③	④			
					前	後	前	後	前	後	前	後								
	47511	初級フランス語Ⅱ		1		2							三浦なつみ	○	○		○			
	47512												櫻井 典夫							
235	47521	中級フランス語Ⅰ		1		2							三浦なつみ	○	○		○			
237	47531	中級フランス語Ⅱ		1		2							三浦なつみ	○	○		○			
238	47541	フランス語演習Ⅰ		1		2							櫻井 典夫	○	○		○	★		
239	47551	フランス語演習Ⅱ		1		2							櫻井 典夫	○	○		○	★		
259	06581	上級フランス語Ⅰ		1				2					小澤 卓哉	○	○			□		
261	06591	上級フランス語Ⅱ		1				2					小澤 卓哉	○	○			□		
	47601	初級中国語Ⅰ		1	2								楊 志剛	○	○		○			
	47602												張 阿金							
	47603												日野杉匡大							
	47611	初級中国語Ⅱ		1	2								楊 志剛	○	○		○			
	47612												張 阿金							
	47613												日野杉匡大							
240	47621	中級中国語Ⅰ		1		2							楊 志剛	○	○		○			
241	47631	中級中国語Ⅱ		1		2							楊 志剛	○	○		○			
242	47641	中国語演習Ⅰ		1		2							日野杉匡大	○	○		○	★		
244	47651	中国語演習Ⅱ		1		2							日野杉匡大	○	○		○	★		
263	06681	上級中国語Ⅰ		1				2					胡 慧君					□		
264	06691	上級中国語Ⅱ		1				2					胡 慧君					□		
246	06701	中国語実践演習 A		2		2							森若 裕子	○	○		○	□		
248	06711	中国語実践演習 B		2		2							森若 裕子	○	○		○	□		
	47701	初級韓国語Ⅰ		1	2								松田 由紀	○	○		○			
	47702												金 昌九							
	47703												金 京愛							
	47711	初級韓国語Ⅱ		1	2								松田 由紀	○	○		○			
	47712												金 昌九							
	47713												金 京愛							
250	47721	中級韓国語Ⅰ		1		2							金 昌九	○	○		○			
252	47731	中級韓国語Ⅱ		1		2							金 昌九	○	○		○			
253	47741	韓国語演習Ⅰ		1		2							松田 由紀	○	○		○	★		
254	47751	韓国語演習Ⅱ		1		2							松田 由紀	○	○		○	★		
265	06821	上級韓国語Ⅰ		1				2					金 昌九					□		
266	06831	上級韓国語Ⅱ		1				2					金 昌九					□		
255	06841	韓国語実践演習 A		2		2							宗 美蘭	○	○		○	□		
256	06851	韓国語実践演習 B		2		2							宗 美蘭	○	○		○	□		
	46611	海外語学研修 A		2	○	○		○		○									*	
	46621	海外語学研修 B		2	○	○		○		○										*
	46631	海外語学研修 C		2	○	○		○		○										*
		計		2	62															

*協定校・指定校短期語学研修による認定は1～3年生のみ対象。

★教職履修者は、いずれか2単位以上選択必修

□北16条キャンパスにて開講

〈2017年度入学生に適用〉

ディプロマ・ポリシー

①態度・志向性 ②汎用的技能 ③知識・理解 ④総合的な学習経験と創造的な思考力

シラバ ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数				担当者	教免区分		資格 社 会 福 士	ディプロマ・ポリシー				備 考				
						必 修	選 択	1		2			3			4		福 祉	家 庭		①	②	③	④
								前	後	前	後		前	後		前	後							
	514011	○	○		家族と社会	2					2				木脇奈智子	○	○	○						
294	514111	○	○		生活と経済	2			2						飯村しのぶ	○			○					
	514211	○	○		生活と法律	2						2			正木 浩司					○				
	514311	○	○		生活経営論	2		2								◎		○	○					
	514411	○	○		消費者問題論	2				2					飯村しのぶ	○		○	○					
295	514521	×	×		生活学研究	2			2						飯村しのぶ					○				
	514611	○	○		衣環境論	2	2									○				○				
	514711	×	×	生	衣環境実験	2					4				長尾 順子	○				○				
	514811	○	○		衣生活学	2	2									◎				○				
	296	514911	×	×	被服構成学実習 A	2			4						長尾 順子	◎				○				
	515011	×	×		被服構成学実習 B	2				4					長尾 順子	○				○				
	515111	○	○		食環境論	2	2									○				○				
	515211	○	○	活	食物の科学	2	2									◎				○				
	515311	×	×		食物学実験	2				4					岡崎由佳子	○				○				
298	515411	○	○		食生活栄養論	2		2							岡崎由佳子	◎				○				
299	515511	×	×		調理学実習	2			4						岡崎由佳子	◎				○				
	515611	○	○		住環境論	2	2									◎				○				
300	515711	×	×		住居計画	2		2							田中 宏実	◎				○				
301	515811	×	×	科	居住環境デザイン	2		2							岡本 浩一	○				○				
	515911	×	×		住居計画演習 I	2			2						田中 宏実	○				○				
	516011	×	×		住居計画演習 II	2				2					田中 宏実	○				○				
	516111	○	○		生活技術論	2			2						井上 祥史	高◎				○				
	516211	×	×	学	ユニバーサルデザイン	2					2				外崎 由香					○				
302	516311	○	○		生活と健康	2		2							鈴木 眞弓					○				
	516411	○	○		子どもと生活	2	2									○				○				
	516511	×	×		保育と健康	2			2						中村 裕二	◎				○				
303	516611	○	○		発達と心理	2			2						中村 裕二	○				○				
304	523211	×	×		日常生活活動	1			1						朝日まどか	◎				○				
305	523311	×	×		加齢と障害	1			1						浅野 葉子	◎				○				
	516711	○	○		生活と宗教	2					2				阿部 包					○				
	516811	×	×		生命倫理	2				○					堀井 泰明					○				
	516911	×	×		カウンセリング論	2			2						新川 広樹					○				
	520111	○	○		社会福祉論 I	2	2									◎		◎	○	○				
	520211	×	×		社会福祉論 II	2				2					若狭 重克	◎		◎	○	○				
	520311	×	×		児童福祉論 I	2	2									◎		◎	○	○				
306	520411	×	×		児童福祉論 II	2		2							齊藤 晋	○		◎	○	○				
307	520521	×	×		障害者福祉論	2		2							梶 晴美	◎		◎	○	○				
	520721	×	×		高齢者福祉論 I	2	2									◎		◎	○	○				
308	520821	×	×		高齢者福祉論 II	2		2							中田 雅美	○		◎	○	○				
309	520921	×	×	社	地域福祉の理論と方法 I	2			2						小沼 春日	○		◎		○				
	520931	×	×	会	地域福祉の理論と方法 II	2				2					小沼 春日			◎		○				
311	520941	×	×	福	社会福祉調査	2			2						遠山 景広			◎	○	○				
313	520951	×	×		権利擁護と成年後見制度	2			2						佐久間 仁			◎		○				
	520961	×	×	社	福祉行財政と福祉計画	2					2				丸山 正三			◎	○	○				
	521011	×	×		社会保障論 I	2					2				内田 博	○		◎	○	○				
	521111	×	×		社会保障論 II	2					2				内田 博	○		◎	○	○				
	521211	×	×		公的扶助論	2				2					大友 芳恵			◎		○				
	521321	×	×		介護福祉論	2				2					梶 晴美	◎		◎		○				
314	521421	×	×		医学概論	2		2							鈴木 眞弓	○		◎		○				
	521611	×	×		精神保健福祉論	2				2					守村 洋	○				○				

人間生活学科専門科目

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								担当者	教免区分		資格		ディプロマ・ポリシー				備 考			
						必 修	選 択	1 前	1 後	2 前	2 後	3 前	3 後	4 前	4 後		福祉	家庭	社 会 福 祉 士	①	②	③	④					
	521711	×	×	社 会 福 祉 学	医療福祉論	2					2				黒澤 直子	○		◎			○	○						
315	521721	×	×		就労支援論	1					1					橋本菊次郎			◎				○					
316	521731	×	×		更生保護論	1					1					橋本菊次郎			◎				○					
	521921	×	×		社会福祉運営管理論	2									2	松本 剛一			◎	○			○					
	522021	×	×		ソーシャルワーク論Ⅰ	2	2										◎		◎	○			○	○				
	522121	×	×		ソーシャルワーク論Ⅱ	2		2									○		◎	○			○	○				
317	522221	×	×		ソーシャルワーク論Ⅲ	2			2							中田 雅美	○		◎	○			○	○				
318	522321	×	×		ソーシャルワーク論Ⅳ	2				2						丸山 正三	○		◎	○			○	○				
	522331	×	×		ソーシャルワーク論Ⅴ	2					2					石崎 剛			◎	○			○	○				
	522341	×	×		ソーシャルワーク論Ⅵ	2						2				橋本菊次郎			◎	○			○	○				
	522421	×	×		ソーシャルワーク演習Ⅰ	2		2									○		◎				○	○				
	522422																											
	522423																											
319	522521	×	×		福 祉 学	ソーシャルワーク演習Ⅱ	4			4						若狭 重克	○		◎	○			○	○				
	522522																黒澤 直子											
	522523																吉田 修大											
	522531	×	×		社 会 福 祉 学	ソーシャルワーク演習Ⅲ	4				4				小沼 春日			◎	○			○	○					
	522532																尾形 良子											
320	522621	×	×				ソーシャルワーク実習指導Ⅰ	4			2	2					小沼・若狭・丸山・船木	○		◎	○			○	○			
322	522721	×	×		社 会 福 祉 学	ソーシャルワーク実習Ⅰ	2				○				小沼・若狭・丸山・船木	◎		◎	○			○	○					
	522821	×	×				社 会 福 祉 学	ソーシャルワーク実習指導Ⅱ	4					2	2		小沼 春日	○		◎	○			○	○			
	522822																		丸山 正三									
	522823																		若狭 重克									
	522921	×	×				社 会 福 祉 学	ソーシャルワーク実習Ⅱ	2					○			小沼 春日	○		◎	○			○	○			
	522922																		丸山 正三									
	522923																若狭 重克											
	523021	×	×		地 域 環 境 学	ソーシャルワーク実習Ⅲ	2							○	小沼・若狭・丸山	○		◎	○			○	○					
	531021	○	○			都市環境論	2		2														○	○				
	531111	○	○			自然環境論	2		2														○	○				
	531151	×	×			地域環境デザイン	2								2	外崎 由香							○	○				
324	531211	×	×			コミュニティ論	2				2					船木 幸弘							○	○				
326	531311	×	×	日本の生活と文化		2				2					宮本 花恵								○					
327	531411	○	○	世界の生活と文化		2			2						青木麻衣子								○					
	531511	×	×	社会的環境と心理		2						2			杉山 成								○					
	531611	×	×	人間関係と心理		2						2			船木 幸弘								○					
	531711	○	○	生涯学習論		2				2					鳥居 一頼							○	○					
328	532811	×	×	ボランティア論		2			2						鳥居 一頼							○	○					
	531811	○	○	地 域 環 境 学		女性と労働	2				2				内田・金仁								○	○				
	531911	○	○				女性論	2					2				木村 晶子								○			
	532011	×	×				地域と女性	2				2					村上 明子								○			
	532111	×	×				開発とジェンダー	2							2		内田・木脇								○			
	532151	×	×				社会的起業論	2					2				正木 浩司						○	○				
	532211	×	×				地域経済論	2					2				李 炯直						○	○				
	532321	×	×		地域と行政		2					2				正木 浩司						○	○					
	532411	○	○		経済と社会		2				2					金 仁子						○	○					
	532911	×	×		国際経済論		2						2			池見 真由						○	○	○				
	533011	×	×		開発援助論		2							2		渡部 淳						○	○	○				
	533411	×	×	社会情報論	2		2													○	○							
330	532511	×	×	地 域 環 境 学	フィールドワーク入門	2			2					船木・和田・外崎						○	○							
332	532551	×	×		フィールドスタディ	2				2					船木 幸弘						○	○	○	○				
	532621	×	×		フィールドワーク A	2					2				船木 幸弘						○	○	○	○				
	532721	×	×		フィールドワーク B	2					○				内田 博							○	○					

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								担当者	教免区分		資格 社 会 福 祉 士	ディプロマ・ポリシー				備 考
						必 修	選 択	1		2		3		4			福 祉	家 庭		①	②	③	④	
								前	後	前	後	前	後	前	後									
	540011	×	×	総 合	スタディスキルズ	2	2											○	○	○				
334	540111	×	×		キャリアデザイン	2			2						内田・船木・ 和田・外崎				○	○	○			
335	540211	×	×		プレゼンテーション	2			2						船木・和田・外崎				○	○	○			
	541031	×	×		対人コミュニケーション	2	2												○	○	○	○		
336	541131	×	×		グループコミュニケーション	2			2						船木 幸弘				○	○	○	○		
	541201	×	×		プロジェクトマネジメント	2					2				内田・和田				○	○				
	541211	×	○		ボランティア活動	1	○												○	○		○		
	541411	×	×		テーマ研究 A	2						2			田中 ^中 ・岡崎・ 木脇・長尾				○	○		○		
	541511	×	×		テーマ研究 B	2						2			小沼・丸山・若狭				○	○	○	○		
	541611	×	×		テーマ研究 C	2						2			内田・阿部							○		
	541711	○	○		テーマ研究 D	2						○			伊井 義人				○	○	○	○		
	541811	×	×		テーマ研究 E	2						○			小沼・丸山・若狭				○	○	○	○		
	541911	△	△		個別課題演習	2	2															○		
	541921	×	×		人間生活学概論	2		2											○	○		○		
338	541931	×	×		人間生活学基礎演習	2				2					内田・岡崎・小沼・ 木村・木脇・田中 ^中 ・ 長尾・船木・松田・ 丸山・若狭・和田				○			○		
	54194-	×	×		人間生活学研究演習	4				2	2				専任教員				○	○	○	○		
	54201-	×	×		卒業研究演習	4						2	2		専任教員				○	○	○	○		
	54211-	×	×		卒業研究	4							○		専任教員				○			○		
						計	26	205																

◎：教免・資格必修 ○：教免・資格選択

*他学科受入れについて

○：受入れ可 △：担当者の事前の承諾があれば可 ×：受入れ不可

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数 必修	開講学年・週時数								担当者	教 育 区 分		資格 社 会 福 祉 士	デ プ ロ マ ・ ポ ジ ー				備 考
							選 択	1 前	1 後	2 前	2 後	3 前	3 後	4 前		4 後	福 祉		家 庭	①	②	③	
	521721	×	×	社	就労支援論	1				1							◎			○			
	521731	×	×		更生保護論	1				1								◎			○		
	521921	×	×		社会福祉運営管理論	2							2	松本 剛一			◎	○		○			
	522021	×	×		ソーシャルワーク論Ⅰ	2	2								◎		◎	○		○	○		
	522121	×	×		ソーシャルワーク論Ⅱ	2		2							○		◎	○		○	○		
	522221	×	×		ソーシャルワーク論Ⅲ	2			2						○		◎	○		○	○		
	522321	×	×		ソーシャルワーク論Ⅳ	2				2					○		◎	○		○	○		
357	522331	×	×		ソーシャルワーク論Ⅴ	2					2			石崎 剛			◎	○		○	○		
359	522341	×	×		ソーシャルワーク論Ⅵ	2						2		橋本菊次郎			◎	○		○	○		
	52242	×	×		ソーシャルワーク演習Ⅰ	2		2							○		◎	○		○	○		
	522521	×	×	ソーシャルワーク演習Ⅱ	4			4								○		◎	○	○	○		
	522522																						
	522523																						
360	522531	×	×	ソーシャルワーク演習Ⅲ	4					4			尾形 良子			◎	○		○	○			
	522621	×	×	ソーシャルワーク実習指導Ⅰ	4			2	2					○		◎	○		○	○			
	522721	×	×	ソーシャルワーク実習Ⅰ	2				○					◎		◎	○		○	○			
	522821	×	×	ソーシャルワーク実習指導Ⅱ	4					2	2					○		◎	○	○	○		
362	522822																						
	522823																						
	522921	×	×	ソーシャルワーク実習Ⅱ	2					○						○		◎	○	○	○		
364	522922																						
	522923																						
	523021	×	×	ソーシャルワーク実習Ⅲ	2							○	小沼・若狭・丸山	○		○		○	○	○			
	531021	○	○	都市環境論	2		2												○	○	○		
	531111	○	○	自然環境論	2	2														○	○		
	531151	×	×	地域環境デザイン	2							2	外崎 由香						○	○	○		
	531211	×	×	コミュニティ論	2				2										○	○	○		
	531311	×	×	日本の生活と文化	2			2												○	○		
	531411	○	○	世界の生活と文化	2				2												○		
366	531511	×	×	社会的環境と心理	2					2			杉山 成								○		
367	531611	×	×	人間関係と心理	2						2		船木 幸弘								○		
368	531711	○	○	生涯学習論	2					2			鳥居 一頼							○	○		
	532811	×	×	ボランティア論	2			2												○	○		
370	531811	○	○	女性と労働	2						2		内田・金仁								○		
371	531911	○	○	女性論	2						2		木村 晶子								○		
372	532011	×	×	地域と女性	2					2			村上 明子								○		
	532111	×	×	開発とジェンダー	2							2	内田・木脇								○		
373	532151	×	×	社会的起業論	2						2		正木 浩司							○	○		
375	532211	×	×	地域経済論	2						2		李 炯直							○	○		
376	532321	×	×	地域と行政	2						2		正木 浩司							○	○		
377	532411	○	○	経済と社会	2					2			金 仁子							○	○		
	532911	×	×	国際経済論	2							2	池見 真由							○	○		
	533011	×	×	開発援助論	2							2	渡部 淳							○	○		
	533411	×	×	社会情報論	2		2													○	○		
	532511	×	×	フィールドワーク入門	2			2												○	○		
	532551	×	×	フィールドスタディ	2				2											○	○		
378	532621	×	×	フィールドワークA	2					2			船木 幸弘							○	○		
	532721	×	×	フィールドワークB	2						○		内田 博							○	○		
	540011	×	×	スタディスキルズ	2		2													○	○		
	540111	×	×	キャリアデザイン	2				2											○	○		
	540211	×	×	プレゼンテーション	2				2											○	○		
	541031	×	×	対人コミュニケーション	2		2													○	○		
	541131	×	×	グループコミュニケーション	2				2											○	○		

2018年度開講せず

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								教免区分			資格 社 会 福 祉 士	ディプロマ・ポリシー				備 考			
						必 修	選 択	1		2		3		4		担当者	福祉	家庭		①	②	③	④				
								前	後	前	後	前	後	前	後												
379	541201	×	×		プロジェクトマネジメント	2						2							○	○							
	541211	×	○		ボランティア活動	1				○										○	○						
	541411	×	×		テーマ研究 A	2						2								○	○						
	541511	×	×		テーマ研究 B	2						2								○	○	○	○				
	541611	×	×		テーマ研究 C	2						2															
	541711	○	○		テーマ研究 D	2							○							○	○	○	○				
	541811	×	×		テーマ研究 E	2							○							○	○	○	○				
	541911	△	△	総	個別課題演習	2	2			2																	
	541921	×	×		人間生活学概論	2			2											○		○	○				
	541931	×	×		人間生活学基礎演習	2				2										○		○	○				
380	541941	×	×		人間生活学研究演習	4						2	2							○	○	○	○				
381	541942																										
382	541943																										
383	541944																										
385	541945																										
386	541946																										
387	541947																										
388	541948																										
389	541949																										
391	54194a																										
393	54194b																										
395	54194c																										
396	54194d																										
	54201-	×	×		卒業研究演習	4						2	2							○	○	○	○				
	54211-	×	×		卒業研究	4							○								○	○	○	○			
					計	26	205																				

◎：教免・資格必修 ○：教免・資格選択

* 他学科受入れについて

○：受入れ可 △：担当者の事前の承諾があれば可 ×：受入れ不可

<2015 年度入学生に適用>

ディプロマ・ポリシー

①態度・志向性 ②汎用的技能 ③知識・理解 ④総合的な学習経験と創造的な思考力

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								担当者	教免区分		資格		ディプロマ・ポリシー				備 考		
						必 修	選 択	1		2		3		4			福祉	家庭 社会 福祉士	①	②	③	④					
								前	後	前	後	前	後	前	後												
	514011	○	○	生 活 科 学	家族と社会	2					2						○		○	○					家族関係学及び 家庭経済学を含む		
	514111	○	○		生活と経済	2				2								○				○					
398	514211	○	○		生活と法律	2									2	正木 浩司										○	
	514311	○	○		生活経営論	2		2										◎		○	○						
	514411	○	○		消費者問題論	2						2						○		○	○						
	514521	×	×		生活学研究	2				2								○				○					
	514611	○	○		衣環境論	2	2											○						○		○	
	514711	×	×		衣環境実験	2						4						○						○		○	
	514811	○	○		衣生活学	2	2											◎						○		○	
	514911	×	×		被服構成学実習 A	2			4									◎						○		○	
	515011	×	×		被服構成学実習 B	2					4							○						○		○	
	515111	○	○		食環境論	2	2											○						○		○	
	515211	○	○		食物の科学	2	2											◎						○		○	
	515311	×	×		食物学実験	2					4							○						○		○	
	515411	○	○		食生活栄養論	2			2									◎						○		○	
	515511	×	×	調理学実習	2				4								◎						○	○			
	515611	○	○	住環境論	2	2											◎						○	○			
	515711	×	×	住居計画	2			2									◎						○	○	製図を含む		
	515811	×	×	居住環境デザイン	2			2									○						○	○			
	515911	×	×	住居計画演習 I	2					2							○						○	○			
	516011	×	×	住居計画演習 II	2					2							○						○	○			
	516111	○	○	生活技術論	2					2							高◎						○	○			
400	516211	×	×	ユニバーサルデザイン	2						2				外崎 由香								○	○	家庭電気・機械を含む		
	516311	○	○	生活と健康	2			2															○	○			
	516411	○	○	子どもと生活	2	2											○						○	○			
	516511	×	×	保育と健康	2					2							◎						○	○	実習・家庭看護を含む		
	516611	○	○	発達と心理	2				2								○						○	○			
	523211	×	×	日常生活活動	1				1								◎						○	○			
	523311	×	×	加齢と障害	1				1								◎						○	○			
402	516711	○	○	生活と宗教	2									2	阿部 包								○	○			
	516811	×	×	生命倫理	2					2													○	○			
	516911	×	×	カウンセリング論	2					2													○	○			
	520111	○	○	社会福祉論 I	2	2											◎		◎	○	○			○	職業指導を含む		
	520211	×	×	社会福祉論 II	2	2											◎		◎	○	○			○			
	520311	×	×	児童福祉論 I	2	2											◎		◎	○	○			○			
	520411	×	×	児童福祉論 II	2			2									◎		◎	○	○			○			
	520521	×	×	障害者福祉論	2			2									◎		◎	○	○			○			
	520721	×	×	高齢者福祉論 I	2	2											◎		◎	○	○			○			
	520821	×	×	高齢者福祉論 II	2			2									◎		◎	○	○			○			
	520921	×	×	地域福祉の理論と方法 I	2					2							◎		◎				○	○			
	520931	×	×	地域福祉の理論と方法 II	2						2						◎		◎				○	○			
	520941	×	×	社会福祉調査	2			2										◎	○	○	○			○			
	520951	×	×	権利擁護と成年後見制度	2				2									◎					○	○			
403	520961	×	×	福祉行政と福祉計画	2							2			丸山 正三			◎	○	○			○	○			
405	521011	×	×	社会保障論 I	2							2			内田 博	○		◎	○	○			○	○			
406	521111	×	×	社会保障論 II	2								2		内田 博	○		◎	○	○			○	○			
	521211	×	×	公的扶助論	2						2						○		◎				○	○			
	521321	×	×	介護福祉論	2						2						◎		◎				○	○	介護技術を含む		
	521421	×	×	医学概論	2			2									○		◎				○	○			
	521611	×	×	精神保健福祉論	2						2						○		◎				○	○			
	521711	×	×	医療福祉論	2					2							○		◎				○	○			

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数 必修	開講学年・週時数								担当者	教 育 区 分		資格 社 会 福 祉 士	デプロマ・ポリシー				備 考	
							選 択	1		2		3		4		福 祉	家 庭		①	②	③	④		
								前	後	前	後	前	後	前										後
	521721	×	×	社 会 福 祉	就労支援論	1				1							◎			○				
	521731	×	×		更生保護論	1				1								◎			○			
407	521921	×	×		社会福祉運営管理論	2							2	松本 剛一			◎	○		○				
	522021	×	×		ソーシャルワーク論Ⅰ	2	2									◎	◎	○		○	○			
	522121	×	×		ソーシャルワーク論Ⅱ	2		2								○	◎	○		○	○			
	522221	×	×		ソーシャルワーク論Ⅲ	2			2							○	◎	○		○	○			
	522321	×	×		ソーシャルワーク論Ⅳ	2				2						○	◎	○		○	○			
	522331	×	×		ソーシャルワーク論Ⅴ	2					2						◎	○		○	○			
	522341	×	×		ソーシャルワーク論Ⅵ	2						2					◎	○		○	○			
	52242	×	×		ソーシャルワーク演習Ⅰ	2		2								○	◎	○		○	○			
	52252	×	×		ソーシャルワーク演習Ⅱ	4			4							○	◎	○		○	○			
	522531	×	×		ソーシャルワーク演習Ⅲ	4					4						◎	○		○	○			
	522532																							
	522533																							
	522621	×	×		ソーシャルワーク実習指導Ⅰ	4			2	2						○	◎	○		○	○			
	522721	×	×		ソーシャルワーク実習Ⅰ	2				○						◎	◎	○		○	○			
	522821	×	×		ソーシャルワーク実習指導Ⅱ	4					2	2				○	◎	○		○	○			
	522822																							
	522823																							
	522921	×	×		社	ソーシャルワーク実習Ⅱ	2					○				○	◎	○		○	○			
	522922																							
	522923																							
409	523021	×	×			ソーシャルワーク実習Ⅲ	2						○	小沼・若狭・丸山	○	○	○		○	○	○			
	531021	○	○	地 域 環 境	都市環境論	2		2											○	○	○			
	531111	○	○		自然環境論	2	2													○	○	○		
411	531151	×	×		地域環境デザイン	2							2	外崎 由香					○	○	○	○		
	531211	×	×		コミュニティ論	2				2									○	○	○	○		
	531311	×	×		日本の生活と文化	2			2												○			
	531411	○	○		世界の生活と文化	2				2											○			
	531511	×	×		社会的環境と心理	2					2										○			
	531611	×	×		人間関係と心理	2				2											○			
	531711	○	○		生涯学習論	2					2									○	○	○		
	532811	×	×		ボランティア論	2			2											○	○	○		
	531811	○	○		女性と労働	2						2									○	○		
	531911	○	○		女性論	2						2										○		
	532011	×	×		地域と女性	2				2												○		
413	532111	×	×		開発とジェンダー	2							2	内田・木脇								○		
	532151	×	×		社会的起業論	2						2								○	○			
	532211	×	×		地域経済論	2						2								○	○			
	532321	×	×		地域と行政	2						2								○	○			
	532411	○	○	経済と社会	2					2									○	○				
414	532911	×	×	国際経済論	2							2	池見 真由						○	○	○			
415	533011	×	×	地 域 環 境	開発援助論	2						2	渡部 淳						○	○	○			
	533411	×	×		社会情報論	2	2													○	○			
	532511	×	×		フィールドワーク入門	2			2										○	○				
	532551	×	×		フィールドスタディ	2				2										○	○	○		
	532621	×	×		フィールドワークA	2					2									○	○	○		
	532721	×	×		フィールドワークB	2						○									○	○		
	540011	×	×	総 合	スタディスキルズ	2	2												○	○	○			
	540111	×	×		キャリアデザイン	2				2										○	○	○		
	540211	×	×		プレゼンテーション	2				2										○	○	○		
	541031	×	×		対人コミュニケーション	2		2												○	○	○		
	541131	×	×		グループコミュニケーション	2			2											○	○	○		

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								教免区分		資格	ディプロマ・ポリシー				備 考	
						必修	選択	1 前	1 後	2 前	2 後	3 前	3 後	4 前	4 後	担当者	福祉	家庭	社 会 福 祉 士	①	②	③		④
	541201	×	×		プロジェクトマネジメント	2							2						○	○				
	541211	×	○		ボランティア活動	1				○									○	○		○		
417	541411	×	×		テーマ研究 A	2							2		田中幸・岡崎 木脇・長尾				○	○		○		
418	541511	×	×		テーマ研究 B	2							2		小沼・丸山・若狭				○	○	○	○		
419	541611	×	×		テーマ研究 C	2							2		内田・阿部								○	
420	541711	○	○		テーマ研究 D	2							○		伊井 義人				○	○	○	○		
421	541811	×	×		テーマ研究 E	2							○		小沼・丸山・若狭				○	○	○	○		
	541911	△	△		個別課題演習	2							2										○	
	541921	×	×	総	人間生活学概論	2		2											○		○	○		
	541931	×	×		人間生活学基礎演習	2				2									○		○	○		
	541941	×	×		人間生活学研究演習	4					2	2							○	○	○	○		
423	542011	×	×		卒業研究演習	4							2	2	阿部 包				○	○	○	○		
424	542012														伊井 義人									
425	542013														内田 博									
426	542014														岡崎由佳子									
427	542015														小沼 春日									
428	542016														木村 晶子									
429	542017														田中 宏実									
430	542018														長尾 順子									
431	542019														船木 幸弘									
433	54201a														若狭 重克									
435	542111	×	×	合	卒業研究	4							○		阿部 包				○	○	○	○		
436	542112														伊井 義人									
437	542113														内田 博									
438	542114														岡崎由佳子									
439	542115														小沼 春日									
440	542116														木村 晶子									
441	542117														田中 宏実									
442	542118														長尾 順子									
443	542119														船木 幸弘									
444	54211a														若狭 重克				○		○	○		
					計	26	205																	

◎：教免・資格必修 ○：教免・資格選択

* 他学科受入れについて

○：受入れ可 △：担当者の事前の承諾があれば可 ×：受入れ不可

4 食物栄養学科専門科目
(2018年度以降入学生に適用)

ディプロマ・ポリシー

- ①知識・理解 ②思考方法・問題解決能力 ③コミュニケーション能力
④社会的責任

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	専修	区分	授業科目	単位数	開講学年・週時数								クラス	担当者	資格				ディプロマ・ポリシー				備考
								必修	選択	1 前	2 後	3 前	4 後	1 前	2 後			3 前	4 後	管理栄養士	栄養士	食品衛生管理監視員	フードスペシャリスト	①	②	
447	60041	×	×		社会・環境と健康	食生活論	2		2							菊地・池田・大西・小山田・岸・隈元・高橋・田中・中川・中河原・藤井・松坂・三田村・村田	○	○				○	○			
448	60101	△	△			公衆衛生学 A	2		2								小山田正人	○	○	○			○	○		○
	60111	△	△		公衆衛生学 B	2		2								小山田正人	○	○	○			○	○		○	
	60121	△	△		高齢者健康論		2							2		藤井 義博	○					○		○	○	
449	60501	△	△		人体の構造と機能及び疾病の成り立ち	有機化学	2	2							a	崎浜 靖子	○		○			○	○			
	60502					生化学 A	2		2						a	大西 正男	○	○	○			○	○			
450	60701	△	△		生化学 B	2		2						a	大西 正男	○	○	○			○	○				
	60711	△	△		解剖生理学 A	2	2							a	藤井・濱田	○	○	○								
	60712				解剖生理学 B	2		2						a	藤井 義博	○	○	○								
451	61011	△	△		疾病医療学 A	2								a	藤井・濱田	○	○					○	○			
	61012					疾病医療学 B	2			2					a	藤井 義博	○	○	○							
452	61021	△	△		解剖生理学実験	2				4				a	藤井・濱田	○	○					○	○	○		
	61022					疾病医療学 C	2				2				b	小山田・藤井	○	○	○							
	61031	×	×		運動生理学・スポーツ栄養学	2							2		小山田・沖田							○	○	○		
	61032				代替医療としての栄養学	2							2		藤井 義博							○		○	○	
453	62091	△	△		食品化学 A	2	2							a	松坂 裕子	○		○	○			○	○			
	62092					食品化学 B	2			2					a	中河原俊治	○	○	○				○	○		
	62101	△	△		食品成分分析実験	2			4					a	松坂 裕子	○	○	○	○			○	○			
	62102					食品加工学	2				2				a	松坂 裕子	○	○	○	○			○	○		
	63131	×	×		食品学基礎実験	2	4							a	中河原俊治	○	○	○	○			○	○			
	63132					食品機能論		2			2					中河原俊治	○		○	○			○	○		
	63141	△	△		調理科学	2	2								菊地 和美	○	○		○			○	○			
	63142					調理実習 I	2	4							a	菊地 和美	○	○		○			○	○		
454	63241	×	×		調理実習 II	2		4						a	菊地 和美	○	○		○			○	○			
	63242					微生物学	2	2							a	池田 隆幸	○	○	○				○	○		
455	63171	△	△		食と安全論 A	2			2					a	池田 隆幸	○	○	○	○			○	○			
	63181	×	×			食と安全論 B	2	2					2			池田 隆幸	○			○			○	○		
	63182				食品衛生学実験	2		4						a	池田 隆幸	○	○	○				○	○			
456	63191	×	×			食品開発論		2					2			池田・中河原・小宮山・中川・八十川・吉川							○	○		
457	63192													b	池田 隆幸											
458	63201	△	△																							
	63202																									
	63211	△	△																							
	63212																									
	63221	△	△																							
459	63231	△	△																							
	63232																									
	63251	△	△																							

食物栄養学科専門科目

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	専修	区分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								クラス	担当者	資 格				ディプロマ・ポリシー				備考				
							必修	選択	1		2		3		4				管理栄養士	理学士	食品衛生管理者・監視員	フードスペシャリスト	①	②	③	④					
									前	後	前	後	前	後	前	後															
460	63341	△	△	管	理	基礎栄養学 A	2		2					a	三田村理恵子	○	○	○		○	○										
	63342									b	三田村理恵子																				
	63351	△	△				基礎栄養学 B	2			2						a	三田村理恵子	○	○	○	○	○	○							
	63352								b	三田村理恵子																					
	63361	×	×				栄養生化学実験	2								4	a	大西 正男	○	○	○		○	○							
	63362								b	大西 正男																					
	63371	△	△				分子栄養学	2									2	原 博	○			○	○								
	63401	△	△				応用栄養学	理	応用栄養学 A	2			2					隈元・小山田・坪田・八島	○	○	○		○	○							
	63411	△	△								応用栄養学 B	2			2						隈元・岸・八島	○	○	○	○	○	○				
	63421	×	×						応用栄養学実習	2				4					a	岸・八島	○	○			○	○	○				
	63422										b	岸・八島																			
	63431	△	△						栄養管理論	2			2						a	八島 絵美	○	○			○	○	○				
	63432										b	八島 絵美																			
	63441	×	×						栄養管理実習	2			4						a	三田村・八島	○	○			○	○	○				
	63442										b	三田村・八島																			
461	63501	△	△	専	修	栄養教育論			2	2						隈元 晴子	○	○			○	○					○				
	63511	△	△				栄養教育論Ⅱ	2				2						隈元 晴子	○	○			○	○	○	○					
	63521	×	×				栄養教育論実習	2				4					a	隈元 晴子	○	○			○	○	○	○					
	63522								b	隈元 晴子																					
	63531	×	×			対人関係トレーニング	1					2				柑田・隈元・田中・高橋・杉浦	○	○			○	○	○	○							
	63651	△	△			栄養カウンセリング論	2						2			中川 幸恵	○	○						○	○						
	63551	△	△			臨床栄養学 A	2			2						a	中川 幸恵	○	○	○		○	○								
	63552							b	中川 幸恵																						
	63561	△	△			臨床栄養学 B	2				2					藤井・中谷	○		○				○				○				
	63571	△	△			臨床栄養学 C	2			2						a	中川 幸恵	○	○			○	○								
	63572							b	中川 幸恵																						
	63581	△	△			臨床栄養管理論	2						2			a	中川 幸恵	○				○	○	○							
	63582							b	中川 幸恵																						
	63631	×	×			臨床栄養学実習Ⅰ	2			4						a	田中 洋子	○	○			○	○	○							
	63632							b	田中 洋子																						
	63671	×	×			臨床栄養学実習Ⅱ	2			4						a	田中洋・中川幸	○				○	○	○							
	63672							b	田中洋・中川幸																						
63681	×	×	実践臨床栄養学	2						2			中川 幸恵							○	○	○	○								
63701	△	△	公衆栄養学 A	2			2						岸 知子	○	○	○		○	○	○											
63711	△	△			公衆栄養学 B	2				2					岸 知子	○	○	○		○	○	○									
63721	×	×	地域栄養学実習	1				2					a	岸・奥村	○				○	○	○										
63722					b	岸・奥村																									
63731	×	×	地域栄養学	1					1				岸 知子							○	○	○									
63801	△	△	給食経営管理論	理	給食経営管理論Ⅰ	2			2					村田まり子	○	○			○	○	○	○									
63821	×	×					給食経営管理論Ⅱ	2				2					a	村田まり子	○	○			○	○	○	○					
63822					b	村田まり子																									
63811	×	×			給食経営管理実習Ⅰ	2				4					a	村田・石田し	○	○			○	○	○	○							
63812							b	村田・石田し																							
63841	△	△			給食経営管理論Ⅲ	1						1			村田まり子							○	○	○	○						
63831	△	△			食品流通経済論	2							2		佐藤 信					○	○	○									
63851	×	×			給食経営管理実務演習	1								2	村田まり子							○	○	○	○						
63852							b	三田村理恵子																							
63901	×	×			総合演習 A	1					2				田中幸・岸・隈元・中川幸・三田村・村田	○				○	○	○	○								
63911	×	×	総合演習 B	1					2				田中幸・岸・隈元・中川幸・三田村・村田	○				○	○	○	○										

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	専修 区分	授業科目	単位数 必修 選択	開講学年・週時数								クラス	担当者	資格				ディプロマ・ポリシー				備考
							1		2		3		4				管 理 士 栄養士	栄養士	食品衛生 管理者 監視員	フード スペシャ リスト	①	②	③	④	
							前	後	前	後	前	後	前	後											
	63971	×	×	臨 地 実 習	臨床栄養学実習Ⅲ	2					○				田中 ^中 ・中川 ^中 ・泉・ 永洞・野原・西條	○	○			○	○	○	○	3科目 から2科目 選択必	
	63931	×	×		公衆栄養学実習	2					○					岸・隈元・飯田	○	○			○	○	○		○
	63941	×	×		給食経営管理実習Ⅱ	2					○					村田・菊地・三田村	○	○			○	○	○		○
	63961	×	×	管 理 士 の 専 修 他	管理栄養士実務実習	1						○			三田村・田中 ^中 ・ 中川 ^幸 ・村田					○	○	○	○		
462	64011	×	×		はじめての化学	1	2							a	堀川 伸			○		○					
	64012							b	堀川 伸																
	64201	×	×		栄養統計学	2						2				小山田正人					○	○			
	64321	△	△		科学英語 A	1			2							中河原俊治					○		○		
	64331	△	△		科学英語 B	1			2							松坂 裕子					○		○		
463	64341	△	△		文章表現演習Ⅰ	1	2									山本 貴昭					○		○		
464	64351	△	△		文章表現演習Ⅱ	1	2									山本 貴昭					○		○		
	64411	×	×		学校栄養教育Ⅰ	2			2							菊地・今野・三塚					○		○	○	
	64421	×	×		学校栄養教育Ⅱ	2				2						菊地・隈元・村田					○		○	○	
	64451	△	△	フードコーディネイト論	2						2				篠原 ミツコ					◎	○		○		
	64461	×	×	の	フードスペシャリスト論	2						2			菊地・池田・中河原・ 松坂・村田・森重					◎	○		○		
	64511	×	×	他	管理栄養士演習Ⅰ	2						4			菊地・池田・大西・ 小山田・岸・隈元・ 田中 ^洋 ・中川 ^幸 ・ 中河原・藤井・松坂・ 三田村・村田・八島	◎				○		○			
	64521	×	×	管理栄養士演習Ⅱ	2							4			菊地・池田・大西・ 小山田・岸・隈元・ 田中 ^洋 ・中川 ^幸 ・ 中河原・藤井・松坂・ 三田村・村田・八島	◎				○		○			
	64611-	×	×	卒業演習Ⅰ	0.5						1				専任教員					○	○	○	○		
	64621-	×	×	卒業演習Ⅱ	1.5						2	1			専任教員					○	○	○	○		
	64701-	×	×	卒業研究	6							○			専任教員					○	○	○	○		
					計	90	61																		

◎：資格必修 ○：資格選択

*他学科受入れについて

○：受入れ可 △：担当者の事前の承諾があれば可 ×：受入れ不可

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								ク ラ ス	担 当 者	資 格					ディプロマ・ポリシー				備 考												
						必 修	選 択	1		2		3		4				管 理 士	栄 養 士	食 品 衛 生 管 理 士 監 視 員	フ ー ド ス テ ィ ア リ ス ト	①	②	③	④														
								前	後	前	後	前	後	前	後																								
539	64511	×	×	そ の 他	管理栄養士演習Ⅰ	2								4		菊地・池田・大西・ 小山田・岸・隈元・ 田中・洋・中川・幸・ 中河原・藤井・松坂・ 三田村・村田・八島	◎					○	○	○															
541	64521	×	×		管理栄養士演習Ⅱ	2									4		菊地・池田・大西・ 小山田・岸・隈元・ 田中・洋・中川・幸・ 中河原・藤井・松坂・ 三田村・村田・八島	◎					○	○	○														
511	64611	×	×		そ の 他	卒業演習Ⅰ	0.5								1		池田 隆幸					○	○	○	○														
512	64612																小山田正人																						
513	64613																菊地 和美																						
514	64614																岸 知子																						
515	64615																隈元 晴子																						
516	64616																田中 洋子																						
517	64617																中川 幸恵																						
518	64618																中河原俊治																						
519	64619																藤井 義博																						
520	6461a																松坂 裕子																						
521	6461b																三田村理恵子																						
522	6461c																村田まり子																						
542	64621	×	×														そ の 他	卒業演習Ⅱ	1.5								2	1	池田 隆幸					○	○	○	○		
543	64622																												大西 正男										
544	64623				小山田正人																																		
546	64624				菊地 和美																																		
547	64625				岸 知子																																		
548	64626			隈元 晴子																																			
549	64627			田中 洋子																																			
550	64628			中川 幸恵																																			
551	64629			中河原俊治																																			
552	6462a			藤井 義博																																			
553	6462b			松坂 裕子																																			
554	6462c			三田村理恵子																																			
555	6462d			村田まり子																																			
556	64701	×	×	そ の 他	卒業研究	6									○	池田 隆幸																	○	○	○	○			
557	64702															大西 正男																							
558	64703															小山田正人																							
559	64704															菊地 和美																							
560	64705															岸 知子																							
561	64706															隈元 晴子																							
562	64707															田中 洋子																							
563	64708															中川 幸恵																							
564	64709															中河原俊治																							
565	6470a															藤井 義博																							
566	6470b															松坂 裕子																							
567	6470c															三田村理恵子																							
568	6470d															村田まり子																							
計						90	61																																

◎：資格必修 ○：資格選択

* 他学科受入れについて

○：受入れ可 △：担当者の事前の承諾があれば可 ×：受入れ不可

5 保育学科専門科目
(2018年度入学生に適用)

ディプロマ・ポリシー

- ①知識・理解 ②汎用的技能 ③態度・志向性
④総合的な学習経験と創造的な思考力

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	専 修	区 分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								ク ラ ス	担 当 者	教 免 区 分	資 格	ディプロマ・ポリシー				備 考				
							必 修	選 択	1		2		3		4						幼 稚 園 教 諭	特 支 論	保 育 士	児 童 厚生 員		①	②	③	④
									前	後	前	後	前	後	前	後													
571	70201	△	△		保 育 の 理 論	教育原理	2	2							白水 浩信	◎	◎												
572	70231	△	△			保育原理	2	2							吾田富士子	◎	◎												
	70741	△	△			教育方法論		2		2					姫野 完治	◎													
	70761	△	△			保育者論		2			2				吾田富士子	◎	◎												
	70251	×	×			キリスト教保育	2					2			大達・渡邊・田中・辻			○					○						
	70731	○	○			教育制度論		2				2			岡部 敦	◎					○		○						
	70811	△	△			教育・保育課程総論		2				2			吾田富士子	◎	◎												
	70821	△	△			発達小連携特論		2						2	吾田・高橋・駒形	○							○						
	70801	×	×			園経営論		2						2	大室・東・吉田行	○							○						
	71011	△	△			教育心理学Ⅰ		2				2			青木 直子	◎													
	71021	△	△			教育心理学Ⅱ		2						2	青木 直子	○													
573	71031	△	△			児 童 の 理 解	発達心理学Ⅰ		2	2						青木 直子	◎	◎											
	71041	△	△				発達心理学Ⅱ		2				2			青木 直子	○												
	71711	△	△				保育の心理学		1			2				a	吾田・高橋真		◎				○	○					
	71712	△	△		b											吾田・高橋真													
	71731	△	△		教育相談特講			2						2	小山 和利	○													
574	75651	△	○		障 害 児 の 理 解	特別支援教育総論	2	2							今野 邦彦	◎													
	75661	△	△			特別支援教育実践論		2						2	今野・原田	○													
	75751	△	△			知的障害児の心理・生理・病理		2			2				原田 公人	◎	○												
	75761	△	△			肢体不自由児の心理・生理・病理		2			2				a	鈴木真知子	◎	○					○	○					
	75762	△	△												b	鈴木真知子													
	75771	△	△			病弱児の心理・生理・病理		2				2			三野 絵美	◎							○	○					
	75781	△	△			知的障害児教育		2				2			今野 邦彦	◎								○					
	75791	△	△			肢体不自由児教育		2				2			今野 邦彦	◎								○					
	75801	△	△			病弱児教育		2						2	前野 哲重	◎								○					
575	75812	△	△			知的障害児教育総論		2	2						渡辺 隼人	◎								○					
	75821	△	△		肢体不自由児教育総論		2				2			今野 邦彦	◎								○						
	75841	△	△		視覚・聴覚障害児の心理・生理・病理		1					1		原田 公人	◎	○							○						
	75851	△	△		重複・発達障害児の心理・生理・病理		2					2		鈴木真知子	◎	○							○						
	75861	△	△		視覚・聴覚障害児教育総論		1					1		原田 公人	◎	○							○						
	75871	△	△		重複・発達障害児教育総論		2						2	今野 邦彦	◎	○							○						
576	76003	△	△		保 育 の 内 容	保育内容総論	1	2						a	高橋真由美	○		◎				○	○						
	76004	△	△											b	高橋真由美														
	76241	×	×			保育内容（環境と健康）	2			2					a	山田・能條	◎	◎					○	○					
	76242	△	△												b	山田・能條													
	76251	△	△			保育内容（言葉と人間関係）	2		2						a	高橋真由美	◎	◎					○	○					
	76252	△	△												b	高橋真由美													
	76351	×	×			保育内容（表現）	2		2						a	新海・稲實	◎	◎					○	○					
	76352	△	△												b	新海・稲實													
	76601	△	△			児童文学		2				2			久保田知恵子	○							○	○					
	76321	×	×			総合表現		1					2		金田一仁志	○								○					
	76411	×	×			障害児保育	2			2					a	小山 和利			◎					○	○				
	76412	△	△												b	小山 和利													
	76281	△	△			保育内容の研究（健康）		2					2		木本 理可	○								○					
	76291	○	○			保育内容の研究（人間関係）		2					2		齊藤美恵子	○								○					
	76301	○	○			保育内容の研究（環境）		2					2		高橋真由美	○								○					
	76311	△	△			保育内容の研究（言葉）		2					2		青木 直子	○								○					

保育学科専門科目

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	専修 区分	授業科目	単位数		開講学年・週時数								クラス	担当者	教免区分			資格		ディプロマ・ポリシー				備考
						必修	選択	1		2		3		4				幼稚園 教諭	特別 教諭	支 障 児 育 士	児 童 生 員	①	②	③	④		
								前	後	前	後	前	後	前	後												
577	77141	×	×	子 保 育 の 基 礎 専 修 能 力	保育表現技術（音楽表現活動）	1	2								a	鷹木真理子	○	◎	○	○							
	77142														b										鷹木真理子		
578	77151	×	×		保育表現技術（造形表現活動）	1	2									a	稲實 順	○	◎		○	○					
	77152														b	稲實 順											
	77161	×	×		保育表現技術 （身体・音楽・造形・言語活動）	1					2					a	金田一仁志	○	◎	○	○	○					
	77162														b	金田一仁志											
579	77171	×	×		ピアノ基礎演習	1	2									a	新海・相原・石橋・ 石田・佐藤・須藤・ 曾根崎・鷹木・辻	○		○	○	○					
		77172														b										新海・相原・石橋・ 石田・佐藤・須藤・ 曾根崎・鷹木・辻	
	77571	×	×		幼児歌曲伴奏法	1				2	2					a	新海・相原・相原・ 石橋・大高・小杉・ 佐藤・須藤・曾根崎・ 辻・若狭	○	◎	○	○						
	77572														b	新海・相原・相原・ 石橋・大高・小杉・ 佐藤・須藤・曾根崎・ 辻・若狭											
	77581	×	×		器楽表現法	1					2	2				a	新海・相原・相原・ 石田・石橋・大高・ 佐藤・須藤・辻・ 道下・若狭	○	◎	○	○						
	77582														b	新海・相原・相原・ 石田・石橋・大高・ 佐藤・須藤・辻・ 道下・若狭											
	77591	×	×		器楽表現演習	1								2		a	新海・石橋・大高・ 須藤・曾根崎・辻・ 若狭	○		○	○	○					
	77592														b	新海・石橋・大高・ 須藤・曾根崎・辻・ 若狭											
	77601	×	×		造形基礎演習	1				2						a	杉浦 篤子	○	○	○	○						
	77602														b	杉浦 篤子											
	77671	×	×		造形技術演習	1				2						杉浦 篤子	○	○	○	○					○		
	77631	△	△		造形表現法	1						2				稲實 順	○	○	○	○					○		
581	77681	△	△		幼児体育 A	1	2									木本 理可	○	○	○	○					○		
582	77691	△	△		幼児体育 B	1	2									木本 理可	○	○	○	○					○		
583	70441	○	○		社会福祉論	2	2									鈴木 幸雄		◎	○	○	○						
584	70701	○	○		子ども家庭福祉論Ⅰ	2	2									小川 恭子		◎	○	○	○						
	70721	○	○	社会的養護	2			2							小川 恭子		◎	○	○	○							
	70831	×	×	児童館・放課後児童クラブの機能と運営	2			2							未 定			◎	○	○							
	70841	○	○	特別支援教育と福祉	2				2						小川・吉田孝	○			○	○	○						
	70751	△	△	カウンセリング論	2					2					小山 和利	◎	○	○	○	○				○			
585	71931	×	×	運動の科学	2	2									木本 理可	○	◎	○	○								
586	71721	△	△	臨床心理学	2	2									小山 充道		○	○	○	○							
	71941	×	×	精神保健	2				○						糸田 尚史		○	○	○	○							
	71981	×	×	家庭支援論	2			2							小山 和利		◎	○	○	○							
	71741	△	△	子どもの保健Ⅰ	2				2						市川 正人		◎	○	○	○							
	71751	△	△	子どもの保健Ⅱ	2				2						佐々木浩子		◎	○	○	○							
	71761	×	×	子どもの保健Ⅲ	1					2					a	佐藤 洋子	◎		○	○	○						
	71762													b	佐藤 洋子												
	71771	×	×	子どもの食と栄養	2						2				a	隈元・岸・石田	◎		○	○	○						
	71772													b	隈元・岸・石田												

保育学科専門科目

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	専修	区分	授 業 科 目	単位数	開講学年・週時数								ケ ラ ス	担 当 者	教免区分			資 格	ディプロマ・ホシ				備 考				
							必 修	選 択	1		2		3		4			幼 稚 園 教 師	特 種 教 育	支 援 教 育	保 育 士 厚 生 員	①	②	③	④					
									前	後	前	後	前	後	前			後												
588	76581	○	○		保 育 の 内 容	子ども文化論	2	2								駒形 武志			○		○	○								
	76401	○	○			乳児保育	2			2						a 小林 美花			◎		○	○	○							
	76402															b 小林 美花														
	76561	△	△			子 ど も 生 活 支 援 専 修	社会的養護内容	1				2				a 小川 恭子			◎		○	○	○							
	76562																b 小川 恭子													
	76611	△	△			保 育 の 基 礎 技 能	遊びと生活	2						2		大室 道夫	○		○					○	○					
	77201	×	×				児童館 放課後児童クラブの活動内容と指導法Ⅰ	2			2						未 定				◎	○	○	○						
	77211	×	×				児童館 放課後児童クラブの活動内容と指導法Ⅱ	2						2			未 定				◎	○	○	○						
	77651	△	△				保 育 の 基 礎 技 能	相談援助	1						2		a 尾形 良子			◎				○	○					
	77652																	b 尾形 良子												
	77661	△	△				保 育 の 基 礎 技 能	保育相談支援	1				2				a 小野 実佐			◎		○	○	○						
	77662																	b 小野 実佐												
	77701	×	×				子育て支援	2				2					品川ひろみ							○	○	○				
	78511	×	×				実 習	幼児理解と援助	1		2						吾田・高橋真	◎						○	○	○	○			
	78521	×	×					乳幼児・障害児実習	2			○						吾田・高橋真	○		○				○	○	○	○		
	78701	×	×					児童館実習指導	1				2					小川 恭子					◎	○	○	○	○			
	78711	×	×					児童館実習	2				○					小川 恭子					◎	○	○	○	○			
	78721	×	×					保 育 実 習 指 導 Ⅰ （ 保 育 所 ）	保育実習指導Ⅰ（保育所）	1				1	1			a 吾田富士子			◎				○	○	○	○		
	78722																		b 吾田富士子											
	78731	×	×					保育実習Ⅰ（保育所）	2					○				吾田富士子			◎				○	○	○	○		
	78741	×	×					保 育 実 習 指 導 Ⅰ （ 福 祉 施 設 ）	保育実習指導Ⅰ（福祉施設）	1					2			a 小川 恭子			◎				○	○	○	○		
	78742																		b 小川 恭子											
	78751	×	×					保育実習Ⅰ（福祉施設）	2					○				小川 恭子			◎				○	○	○	○		
	78761	×	×					保 育 実 習 指 導 Ⅱ （ 保 育 所 ）	保育実習指導Ⅱ（保育所）	1					1	1		a 吾田富士子			○				○	○	○	○		
	78762																		b 吾田富士子											
	78771	×	×					保育実習Ⅱ（保育所）	2						○			吾田富士子			○				○	○	○	○		
	78781	×	×					保育実習指導Ⅱ（福祉施設）	1						1	1		小川 恭子			○				○	○	○	○		
	78791	×	×		保育実習Ⅱ（福祉施設）			2						○			小川 恭子			○				○	○	○	○			
	78801	×	×		保育実習指導Ⅱ（児童館）			1						1	1		小川 恭子			○	◎			○	○	○	○			
	78811	×	×		保育実習Ⅱ（児童館）			2						○			小川 恭子			○	◎			○	○	○	○			
	78821	×	×		教育実習指導（特別支援）			1						1	1		今野・原田			◎				○	○	○	○			
	78831	×	×		教育実習（特別支援）			2						○			今野・原田・矢野			◎				○	○	○	○			
	78841	×	×		教育実習指導（幼稚園）	1								2		高橋真由美	◎						○	○	○	○				
	78851	×	×		教育実習（幼稚園）	4							○			高橋真由美	◎						○	○	○	○				
	79041	×	×		専 門 研 究 法	文章表現法		2					2			駒形 武志							○							
	79111	×	×			研究調査法		2				2					青木 直子							○						
	79061	△	△			臨床発達検査法		2					2				小山 和利	○		○				○	○					
	79071	×	×			保 育 ・ 教 職 実 践 演 習 （ 幼 ）		保育・教職実践演習（幼）	2						2		a 高橋真・大室	◎		◎				○	○	○	○			
	79072																	b 高橋真・大室												
	7908-	×	×			保育学研究演習		2					2	2			専任教員							○	○	○	○			
	7909-	×	×			卒業研究演習	2							2	2	専任教員								○	○	○	○			
	7910-	×	×			卒業研究	2								○	専任教員								○	○	○	○			
						計		12	160																					

◎：教免・資格必修 ○：教免・資格選択

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数	開講学年・週時数								ク ラ ス	担 当 者	教 諭	分 支 教 諭	資 格 保 育 士	ディプロマ・ポリシー				備 考			
							必 修	選 択	1		2		3							4		①	②		③	④	
									前	後	前	後	前	後						前	後						
	76001	△	△	保 育 内 容	保育内容総論	1				2				a	高橋真由美	○		◎	○	○							
	76002				b	高橋真由美																					
	76241	×	×		603	保育内容（環境と健康）	2				2				a	山田・能條	◎		◎	○	○						
	76242					b	山田・能條																				
	76251	△	△		604	保育内容（言葉と人間関係）	2				2				a	高橋真由美	◎		◎	○	○						
	76252					b	高橋真由美																				
	76261	×	×		605	保育内容（音楽表現）	2				2				a	新海 節	◎		◎	○	○	○					
	76262					b	新海 節																				
	76271	×	×		607	保育内容（造形表現）	2				2				a	稲實 順	◎		◎	○	○						
	76272					b	稲實 順																				
	76281	△	△		保 育 内 容	保育内容の研究（健康）	2						2			木本 理可	○		○	○	○						
	76291	○	○				保育内容の研究（人間関係）	2						2			齊藤美恵子	○		○		○	○				
	76301	○	○				保育内容の研究（環境）	2						2			高橋真由美	○		○	○	○					
	76311	△	△				保育内容の研究（言葉）	2							2		青木 直子	○		○	○						
	76321	×	×				総合表現	1						2			金田一仁志	○		○	○	○	○				
	7640-	○	○				乳児保育	2		2										◎	○	○	○				
	76411	×	×			608	障害児保育	2						2		a	小山 和利			◎	○	○	○				
	76412						b	小山 和利																			
	76561	△	△			609	社会的養護内容	1						2		a	小川 恭子			◎	○	○	○				
	76562						b	小川 恭子																			
	76571	△	×				子どもと表現	2						2			新海・杉浦	◎		○	○	○					
	76581	○	○				子ども文化論	2	2											○	○	○					
	76601	△	△			608	児童文学	2						2			久保田知恵子	○		○	○	○					
	76611	△	△					遊びと生活	2							2		大室 道夫	○		○			○	○		
	7714-	×	×			609	保育表現技術（音楽表現活動）	1	2											◎	○	○					
	7715-	×	×					保育表現技術（造形表現活動）	1		2										◎	○	○				
	77161	×	×	609		保育表現技術 （身体・音楽・造形・言語活動）	1						2		a	金田一仁志	○		◎	○	○	○					
	77162															b	金田一仁志										
	7717-	×	×			ピアノ基礎演習	1		2										○	○	○	○					
	77571	×	×	610		幼児歌曲伴奏法	1				2	2			a	新海・相原啓・相原真・石橋・大高・小杉・佐藤・須藤・曾根崎・辻・若狭	○		◎	○	○						
	77572															b	新海・相原啓・相原真・石橋・大高・小杉・佐藤・須藤・曾根崎・辻・若狭										
	77581	×	×	610		器楽表現法	1					2	2		a	新海・相原啓・相原真・石田・石橋・大高・佐藤・須藤・辻・道下・若狭	○		◎	○	○						
	77582															b	新海・相原啓・相原真・石田・石橋・大高・佐藤・須藤・辻・道下・若狭										
	77591	×	×	610		器楽表現演習	1							2	a	新海・相原啓・石橋・佐藤・曾根崎・辻・若狭	○		○	○	○						
	77592															b	新海・相原啓・石橋・佐藤・曾根崎・辻・若狭										
	77601	×	×	612		造形基礎演習	1					2			a	杉浦 篤子	○		○	○	○						
	77602														b	杉浦 篤子											
	77671	×	×		造形技術演習	1					2				杉浦 篤子	○		○	○								
	77631	△	△		造形表現法	1							2		稲實 順			○		○	○						
	77681	△	△		幼児体育 A	1	2											○		○	○						
	77691	△	△		幼児体育 B	1		2										○		○	○						

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数	開講学年・週時数								ク ラ ス	担 当 者	教免区分		資 格	ディプロマ・ポリシー				備 考			
							必 修	選 択	1		2		3				4			幼 稚 園 教 諭	特 支 教 諭	保 育 士	①		②	③	④
									前	後	前	後	前	後			前	後									
	77651	△	△	保育の基礎技能	相談援助	1						2	a	尾形 良子			◎		○	○							
	77652				b	尾形 良子																					
	77661	△	△		a	保育相談支援	1						2	a	小野 実佐			◎	○	○	○						
	77662				b	小野 実佐																					
613	78511	×	×	実 習	幼児理解と援助	1			2					高橋 真・吾田	◎			○	○	○	○						
614	78521	×	×		乳幼児・障害児実習	2			○					吾田・高橋 真	○		○	○	○	○	○		(学外幼稚園)				
	78531	×	×		幼稚園実習Ⅰ	5				○				高橋真由美	◎			○	○	○	○		(学外幼稚園)				
	78541	×	×		幼稚園実習Ⅱ	2						○		高橋真由美	○			○	○	○	○		(学外幼稚園)				
	78551	×	×		保育所実習指導Ⅰ	1						2		a	吾田富士子			◎	○	○	○	○					
	78552				b	吾田富士子																					
	78561	×	×		保育所実習指導Ⅱ	1						2		a	吾田富士子			◎	○	○	○	○					
	78562				b	吾田富士子																					
	78571	×	×		保育所実習Ⅰ	2						○		吾田富士子			◎	○	○	○	○		(学外保育園)				
	78581	×	×		保育所実習Ⅱ	2						○		吾田富士子			◎	○	○	○	○		(学外保育園)				
	78591	×	×		福祉施設実習指導Ⅰ	1					2			a	小川 恭子			◎	○	○	○	○					
	78592				b	小川 恭子																					
	78601	×	×		福祉施設実習指導Ⅱ	1						2		小川 恭子				○	○	○	○						
	78611	×	×		福祉施設実習Ⅰ	2				○				小川・矢野・吉田			◎	○	○	○	○						
	78621	×	×	福祉施設実習Ⅱ	2						○		小川 恭子				○	○	○	○							
616	78631	×	×	子育て支援Ⅰ(演習)	2			4					吾田・駒形						○		○						
617	78641	×	×	子育て支援Ⅱ(演習)	2			4					高橋 真・小川						○		○						
	78651	×	×	障害児教育実習	3						○		今野・原田・矢野			◎			○	○	○	○					
	79031	△	△	専 門 研 究 法	社会調査法	2		2												○							
	79041	×	×		文章表現法	2					2			a	駒形 武志						○						
	79042				b	駒形 武志																					
618	79051	×	×		心理学調査法	2			2					青木 直子						○			○				
	79061	△	△		臨床発達検査法	2				2				小山 和利	○			○	○	○							
	79071	×	×		保育・教職実践演習(幼)	2						2		a	高橋 真・大室	◎		◎	○	○	○	○					
	79072				b	高橋 真・大室																					
	7908-	×	×		保育学研究演習	2				2	2			専任教員						○	○	○	○				
	7909-	×	×		卒業研究演習	2					2	2		専任教員						○	○	○	○				
	7910-	×	×		卒業研究	2						○		専任教員						○	○	○	○				
					計	14	165																				

◎：教免・資格必修 ○：教免・資格選択

*他学科受入れについて

○：受入れ可 △：担当者の事前の承諾があれば可 ×：受入れ不可

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数	開講学年・週時数								ク ラ ス	担 当 者	教 育 者	分 区 支 教 論	資 格 保 育 士	ディプロマ・ポリシー				備 考		
							必 修	選 択	1		2		3							4		①	②		③	④
									前	後	前	後	前	後						前	後					
638	76001	△	△	保	保育内容総論	1					2					a	高橋真由美	○		◎	○	○				
	76002						b	高橋真由美																		
	7624-	×	×	育	保育内容（環境と健康）	2				2								◎	◎	○	○					
	7625-	△	△		保育内容（言葉と人間関係）	2			2										◎	◎	○	○				
	7626-	×	×		保育内容（音楽表現）	2			2										◎	◎	○	○	○			
	7627-	×	×		保育内容（造形表現）	2			2										◎	◎	○	○				
639	76281	△	△		保育内容の研究（健康）	2					2						木本 理可	○	○	○	○	○	○			
640	76291	○	○		保育内容の研究（人間関係）	2					2						齋藤美恵子	○	○	○	○	○	○			
641	76301	○	○	育	保育内容の研究（環境）	2				2						高橋真由美	○	○	○	○	○	○				
	76311	△	△		保育内容の研究（言葉）	2					2						青木 直子	○	○	○			○			
642	76321	×	×	育	総合表現	1				2						金田一仁志	○	○	○	○	○	○				
	7640-	○	○		乳児保育	2	2												◎	◎	○	○				
643	76411	×	×	内	障害児保育	2						2			a	小山 和利			◎	◎	○	○				
	76412						b	小山 和利																		
644	76561	△	△	育	社会的養護内容	1				2					a	小川 恭子			◎	◎	○	○				
	76562						b	小川 恭子																		
645	76571	△	×	容	子どもと表現	2					2					新海・杉浦	○		○	○	○					
	76581	○	○		子ども文化論	2	2												○	○	○					
	76591	△	△		絵本論	2			2										○	○	○		○			
	76601	△	△		児童文学	2			2										○	○	○	○				
	76611	△	△		遊びと生活	2							2				大室 道夫	○	○				○	○		
	7714-	×	×		保 育 の 基 礎 技 能	保育表現技術（音楽表現活動）	1	2										○		◎	◎	○	○			
	7715-	×	×			保育表現技術（造形表現活動）	1		2										○		◎	◎	○	○		
	7716-	×	×			保育表現技術（身体・音楽・造形・言語活動）	1			2											◎	◎	○	○		
	7717-	×	×			ピアノ基礎演習	1	2											○		◎	◎	○	○		
	7757-	×	×			幼児歌曲伴奏法	1			2	2								○		◎	◎	○	○		
	77581	×	×	保 育 の 基 礎 技 能		器楽表現法	1					2	2			a	新海・相原 <small>音</small> ・相原 <small>音</small> ・石田 <small>音</small> ・石橋・大高・佐藤 <small>音</small> ・須藤 <small>音</small> ・辻 <small>音</small> ・道下・若狭	○		◎	◎	○	○			
	77582				b			新海・相原 <small>音</small> ・相原 <small>音</small> ・石田 <small>音</small> ・石橋・大高・佐藤 <small>音</small> ・須藤 <small>音</small> ・辻 <small>音</small> ・道下・若狭																		
	77591	×	×	保 育 の 基 礎 技 能	器楽表現演習	1							2		a	新海・相原 <small>音</small> ・石橋・佐藤 <small>音</small> ・曾根崎・辻 <small>音</small> ・若狭	○			○	○	○				
	77592						b	新海・相原 <small>音</small> ・石橋・佐藤 <small>音</small> ・曾根崎・辻 <small>音</small> ・若狭																		
648	7760-	×	×	実 習	造形基礎演習	1				2							○		○	○	○					
77671	×	×	造形技術演習		1					2						杉浦 篤子	○		○	○	○		○			
77631	△	△	造形表現法		1							2				稲實 順			○	○	○	○				
77681	△	△	幼児体育 A		1	2												○		○	○	○				
77691	△	△	幼児体育 B		1	2												○		○	○	○				
77651	△	△	相談援助		1								2		a	尾形 良子			◎	◎	○	○				
77652					b	尾形 良子																				
77661	△	△	保育相談支援		1								2		a	小野 実佐			◎	◎	○	○				
77662					b	小野 実佐																				
78511	×	×	幼児理解と援助		1				2									◎			○	○	○	○		
78521	×	×	乳幼児・障害児実習	2				○									○		○	○	○	○				
649	78531	×	×	習	幼稚園実習Ⅰ	5						○				高橋真由美	◎			○	○	○	○			
	78541	×	×		幼稚園実習Ⅱ	2							○			高橋真由美	○			○	○	○	○			
78551	×	×	保育所実習指導Ⅰ	1								2		a	吾田富士子			◎	◎	○	○	○				
78552				b	吾田富士子																					

(学外幼稚園)

(学外幼稚園)

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数 必修 選択	開講学年・週時数								ク ラ ス	担 当 者	教免区分 幼稚園 教諭	特支 教諭	資格 保育士	ディプロマ・ポ ジション				備 考	
							1 前	1 後	2 前	2 後	3 前	3 後	4 前	4 後						①	②	③	④		
	78561	×	×	実	保育所実習指導Ⅱ	1							2	a	吾田富士子			◎	○	○	○	○			
	78562						b	吾田富士子																	
	78571	×	×	実	保育所実習Ⅰ	2						○			吾田富士子			◎	○	○	○	○	(学外保育園)		
	78581	×	×					保育所実習Ⅱ	2						○			吾田富士子			◎	○		○	○
650	78591	×	×	実	福祉施設実習指導Ⅰ	1					2			a	小川 恭子			◎	○	○	○	○			
	78592						b	小川 恭子																	
	78601	×	×	実	福祉施設実習指導Ⅱ	1						2			小川 恭子			○	○	○	○	○			
651	78611	×	×					福祉施設実習Ⅰ	2				○					小川・矢野・吉田			◎	○		○	○
	78621	×	×	実	福祉施設実習Ⅱ	2						○			小川 恭子			○	○	○	○	○			
616	78631	×	×					子育て支援Ⅰ(演習)	2				4					吾田・駒形						○	○
617	78641	×	×	実	子育て支援Ⅱ(演習)	2					4				高橋真・小川						○	○			
	78651	×	×					障害児教育実習	3						○			今野・原田・矢野		◎				○	○
	79031	△	△	専 門 研 究 法	社会調査法	2			2												○				
652	79041	×	×					文章表現法	2				2			a	駒形 武志								○
	79042												b	駒形 武志											
	79051	×	×	専 門 研 究 法	心理学調査法	2			2												○		○		
653	79061	△	△					臨床発達検査法	2				2					小山 和利	○		○	○	○		
	79071	×	×	専 門 研 究 法	保育・教職実践演習(幼)	2						2	a	高橋真・大室	◎		◎	○	○	○	○	○			
	79072														b	高橋真・大室									
654	79081	×	×	専 門 研 究 法	保育学研究演習	2					2	2			青木 直子					○	○	○	○		
655	79082																	吾田富士子							
657	79083																	稲實 順							
658	79084																	大室 道夫							
659	79085																	小川 恭子							
660	79086																	駒形 武志							
661	79087																	小山 和利							
662	79088																	今野 邦彦							
663	79089																	新海 節							
665	7908a																	高橋真由美							
666	7908b																	木本 理可							
667	7908c														原田 公人										
	7909-	×	×	専 門 研 究 法	卒業研究演習	2						2	2		専任教員					○	○	○	○		
	7910-	×	×					卒業研究	2						○			専任教員					○	○	○
					計	14	167																		

◎：教免・資格必修 ○：教免・資格選択

*他学科受入れについて

○：受入れ可 △：担当者の事前の承諾があれば可 ×：受入れ不可

〈2015年度入学生に適用〉

ディプロマ・ポリシー

- ①知識・理解 ②汎用的技能 ③態度・志向性
④総合的な学習経験と創造的な思考力

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授業科目	単位数		開講学年・週時数								クラス	担当者	教免区分資格			ディプロマ・ポリシー				備考
						必修	選択	1 前	1 後	2 前	2 後	3 前	3 後	4 前	4 後			幼稚園 教諭	特支 教諭	保育士	①	②	③	④	
	70211	△	△	保 育 の 理 論	教育原理Ⅰ	2			2								◎	◎	○	○	○				
	70221	△	△		教育原理Ⅱ	2					2							○	○	○	○	○	○		
	70231	△	△		保育原理	2	2											◎	◎	○	○	○			
	70251	×	×		キリスト教保育	2					2								○	○				○	
	70261	○	○		社会福祉論Ⅰ	2					2								◎	○	○	○			
	70271	○	○		社会福祉論Ⅱ	2				2									○						
	70701	○	○		子ども家庭福祉論Ⅰ	2	2												◎	○	○	○			
	70711	○	○		子ども家庭福祉論Ⅱ(障害児)	2				2								○	○	○	○	○			
	70721	○	○		社会的養護	2				2									◎	○	○	○			
	70731	○	○		教育制度論	2							2					◎		○	○	○	○		
	70741	△	△	教育方法論	2				2								◎		○						
668	70751	△	△	カウンセリング論	2								2		小山 和利	◎		○	○		○	○			
	70761	△	△	保育者論	2				2								◎	◎			○	○			
	70811	△	△	教育・保育課程総論	2					2							◎	◎			○	○			
	70781	△	△	子育て支援Ⅰ(理論)	2					2											○	○			
	70791	△	△	子育て支援Ⅱ(理論)	2							2									○	○			
669	70801	×	×	園経営論	2								2		大室・東・吉田行	○		○	○				○		
	71011	△	△	教育心理学Ⅰ	2				2								◎		○	○	○				
671	71021	△	△	教育心理学Ⅱ	2								2		青木 直子	○		○	○	○					
	71031	△	△	発達心理学Ⅰ	2	2											◎	◎	○	○					
	71041	△	△	発達心理学Ⅱ	2					2							○		○	○	○				
	7171-	△	△	保育の心理学	1				2									◎	○	○	○	○			
	71721	△	△	臨床心理学	2	2												○	○	○	○				
	71731	△	△	教育相談特講	2					2							○		○	○	○				
	71741	△	△	子どもの保健Ⅰ	2					2								◎	○	○	○				
	71751	△	△	子どもの保健Ⅱ	2					2								◎	○	○	○				
	7176-	×	×	子どもの保健Ⅲ	1					2								◎	○	○	○				
	7177-	×	×	子どもの食と栄養	2					2	2							◎	○	○	○				
	71931	×	×	運動の科学	2	2											○	◎	○						
	71941	×	×	精神保健	2				○										○	○	○				
597	71961	△	△	生活経営論	2								2		飯村しのぶ	○		○	○						
	71981	×	×	家庭支援論	2				2									◎	○			○			
	75711	△	○	障害児教育総論	2	2											◎	○	○	○	○				
	75721	△	△	障害児基礎理論	2						2							○		○	○	○			
	75731	△	△	障害児養護実践論	1					2								○	○	○	○				
	75741	△	△	障害児臨床心理学	2					2								○	○	○	○				
	75751	△	△	知的障害児の心理・生理・病理	2	2												◎	○	○	○				
	7576-	△	△	肢体不自由児の心理・生理・病理	2					2								◎	○	○	○				
	75771	△	△	病弱児の心理・生理・病理	2					2								◎			○	○			
	75781	△	△	知的障害児教育	2					2								◎			○	○			
	75791	△	△	肢体不自由児教育	2					2								◎			○	○			
673	75801	△	△	病弱児教育	2							2			前野 哲重		◎			○	○	○			
	75811	△	△	知的障害児教育総論	2				2									◎			○	○			
	75821	△	△	肢体不自由児教育総論	2				2									○			○	○			
	75831	△	△	病弱児教育総論	2					2								○			○	○			
674	75841	△	△	視覚・聴覚障害児の心理・生理・病理	1								1		原田 公人		◎		○	○	○	○			
675	75851	△	△	重複・発達障害児の心理・生理・病理	2								2		鈴木真知子		◎		○	○	○	○			
676	75861	△	△	視覚・聴覚障害児教育総論	1								1		原田 公人		◎		○	○	○	○			
677	75871	△	△	重複・発達障害児教育総論	2								2		今野 邦彦		◎		○	○	○	○			

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数	開 講 学 年 ・ 週 時 数								ク ラ ス	担 当 者	教 諭	免 許	区 分	資 格	ア イ ジ ン	ロ マ ン	ポ ジ ション	備 考		
							必 修	選 択	1		2		3												4	
									前	後	前	後	前	後											前	後
	7600-	△	△	保	保育内容総論	1					2					○	◎	○	○							
	7624-	×	×		保育内容 (環境と健康)	2					2					◎	◎	○	○							
	7625-	△	△		保育内容 (言葉と人間関係)	2					2					◎	◎	○	○							
	7626-	×	×		保育内容 (音楽表現)	2					2					◎	◎	○	○	○						
	7627-	×	×		保育内容 (造形表現)	2					2					◎	◎	○	○							
	76281	△	△		保育内容の研究 (健康)	2								2		○	○	○	○		○					
	76291	○	○		保育内容の研究 (人間関係)	2								2		○	○		○	○						
	76301	○	○		保育内容の研究 (環境)	2								2		○	○	○	○		○					
678	76311	△	△	育	保育内容の研究 (言葉)	2								青木 直子	○	○	○	○		○						
	76321	×	×		総合表現	1					2					○	○	○	○	○	○					
	7652-	○	○	内 容	乳児保育Ⅰ	1	2									◎	○	○	○							
	76531	△	△		乳児保育Ⅱ	1								2	a 小林 美花 b 小林 美花		◎	○	○	○						
	76532																									
	7654-	×	×		障害児保育Ⅰ	1					2						◎	○	○	○						
	7655-	×	×		障害児保育Ⅱ	1					2						◎	○	○	○						
	7656-	△	△		社会的養護内容	1					2						◎	○	○	○						
	76571	△	×		子どもと表現	2					2					○	○	○	○							
	76581	○	○		子ども文化論	2	2										○	○	○							
	76591	△	△	絵本論	2					2					○	○	○			○						
	76601	△	△	児童文学	2					2					○	○	○	○								
680	76611	△	△	遊びと生活	2								2	大室 道夫	○	○			○	○						
	7714-	×	×	保 育 の 基 礎 技 能	保育表現技術 (音楽表現活動)	1	2								○	◎	○	○								
	7715-	×	×		保育表現技術 (造形表現活動)	1	2								○	◎		○	○							
	7716-	×	×		保育表現技術 (身体・音楽・造形・言語活動)	1					2					○	◎	○	○	○						
	7717-	×	×		ピアノ基礎演習	1	2								○	○	○	○								
	7757-	×	×		幼児歌曲伴奏法	1					2					○	◎	○	○							
	7758-	×	×		器楽表現法	1					2	2				○	◎	○	○							
	77591	×	×		器楽表現演習	1								2	a 新海・石橋・大高・須藤・曾根崎・辻・若狭 b 新海・石橋・大高・須藤・曾根崎・辻・若狭	○		○	○	○						
	77592																									
	77601	×	×	造形基礎演習	1					2					○		○	○	○							
	77671	×	×	造形技術演習	1					2					○		○	○		○						
682	77631	△	△	造形表現法	1								2	稲實 順		○		○	○							
	77681	△	△	幼児体育 A	1	2								○		○	○	○								
	77691	△	△	幼児体育 B	1	2								○		○	○	○								
	77651	△	△	相談援助	1								2	a 尾形 良子 b 尾形 良子		◎		○	○							
683	77652																									
684	77661	△	△	保育相談支援	1								2	a 小野 実佐 b 小野 実佐		◎	○	○	○							
	77662																									
	78511	×	×	実 習	幼児理解と援助	1				2					◎			○	○	○	○					
	78521	×	×		乳幼児・障害児実習	2					○					○		○	○	○	○					
	78531	×	×		幼稚園実習Ⅰ	5										◎		○	○	○	○					
685	78541	×	×		幼稚園実習Ⅱ	2								○	高橋真由美	○			○	○	○					
	78551	×	×		保育所実習指導Ⅰ	1								2	a 吾田富士子 b 吾田富士子		◎	○	○	○						
686	78552																									
	78561	×	×		保育所実習指導Ⅱ	1								2	a 吾田富士子 b 吾田富士子		◎	○	○	○						
687	78562																									
688	78571	×	×	保育所実習Ⅰ	2								○	吾田富士子		◎	○	○	○	○						
689	78581	×	×	保育所実習Ⅱ	2								○	吾田富士子		◎	○	○	○	○						

シラバス ページ	科目 No.	他学部 受入れ	他学科 受入れ	区分	授 業 科 目	単位数 必修	開講学年・週時数								ク ラ ス	担 当 者	教免区分 幼稚園 教諭	特支 教諭	資格 保育士	ディプロマ・ポリシー				備 考			
							選 択	1 前	1 後	2 前	2 後	3 前	3 後	4 前						4 後	①	②	③		④		
	7859-	×	×	実 習	福祉施設実習指導Ⅰ	1						2						◎	○	○	○	○					
690	78601	×	×		福祉施設実習指導Ⅱ	1							2		小川 恭子				○	○	○	○	○				
	78611	×	×		福祉施設実習Ⅰ	2						○							◎	○	○	○	○				
691	78621	×	×		福祉施設実習Ⅱ	2							○		小川 恭子				○	○	○	○	○				
	78631	×	×		子育て支援Ⅰ（演習）	2				4											○		○				
	78641	×	×		子育て支援Ⅱ（演習）	2				4												○		○			
692	78651	×	×	障害児教育実習	3							○		今野・原田・矢野	◎				○	○	○	○					
	79031	△	△	専 門 研 究 法	社会調査法	2					2											○					
	79041	×	×		文章表現法	2					2												○				
	79051	×	×		心理学調査法	2			2														○				
	79061	△	△		臨床発達検査法	2					2								○		○	○					
693	79071	×	×		保育・教職実践演習（幼）	2							2	a	高橋真・大室	◎			◎	○	○	○	○				
	79072						b	高橋真・大室																			
	7908-	×	×		保育学研究演習	2				2	2											○	○	○	○		
694	79091	×	×		専 門 研 究 法	卒業研究演習	2						2	2	青木 直子								○	○	○	○	
696	79092							吾田富士子																			
698	79093							稲實 順																			
699	79094							大室 道夫																			
700	79095							小川 恭子																			
701	79096							駒形 武志																			
702	79097							小山 和利																			
703	79098			今野 邦彦																							
704	79099			新海 節																							
706	7909a			高橋真由美																							
707	7909b			木本 理可																							
708	7909c			原田 公人																							
709	79101	×	×	専 門 研 究 法				卒業研究	2						○		青木 直子								○	○	○
710	79102				吾田富士子																						
711	79103				稲實 順																						
712	79104				大室 道夫																						
713	79105				小川 恭子																						
714	79106				駒形 武志																						
715	79107				小山 和利																						
716	79108				今野 邦彦																						
717	79109				新海 節																						
718	7910a				高橋真由美																						
719	7910b			木本 理可																							
720	7910c			原田 公人																							
					計	14	171																				

◎：教免・資格必修 ○：教免・資格選択

* 他学科受入れについて

○：受入れ可 △：担当者の事前の承諾があれば可 ×：受入れ不可

6 教職に関する科目
 (2018年度入学生に適用)

シラバス ページ	科目 No.	区 分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								担 当 者	備 考		
				必修	選択	1		2		3		4					
						前	後	前	後	前	後	前	後				
729	96001	教職の意義等に関する科目	※ 教師論		2	2									大矢 一人	必修	
	96011	教育の基礎理論に関する科目	※ 教育原理		2			2							伊井 義人	必修	
	96111		※ 教育心理学Ⅰ		2			2							新川 広樹	必修	
	96121		※ 教育心理学Ⅱ		2				2						新川 広樹	必修	
	96211		※ 教育制度論		2				2						伊井 義人	必修	
730	96311	教育課程及び指導法に関する科目	※ 教育課程研究		2	2									松田 剛史	☆	
732	96312	目 (教育課程に関する科目)													松田 剛史	*	
	96411		※ 中等家庭科教育法Ⅰ		2				2						飯村しのぶ	該当教科の指導法について4単位必修	
	96421		※ 中等家庭科教育法Ⅱ		2				2						飯村しのぶ		
	96431		※ 中等家庭科教育法Ⅲ		2					2					田中安・岡崎・木脇・長尾		
	96441		※ 中等家庭科教育法Ⅳ		2						2				岡崎由佳子		
	96511		※ 福祉科教育法Ⅰ		2						2				加藤 聖子		
	96521		※ 福祉科教育法Ⅱ		2							2			加藤 聖子		
	96711		※ 道徳教育		2						2				大矢 一人		中一種必修
	96712														大矢 一人		* 後期後半
	96811		※ 特別活動		2					2					松田 剛史		☆
	96812														松田 剛史		*
	96911		※ 教育方法論		2					2					大矢 一人	☆	
733	96912						2								大矢 一人	*	
	97011	生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目	※ 生徒指導		2					2					中田 貢	☆	
	97021		※ 生徒指導 (栄養教諭)		2					2					中田 貢	*	
	97111		※ 教育相談		2						2				中田 貢	必修 後期後半	
	97311	教育実習	教育実習ⅠA		1						2				伊井 義人	☆ (事前指導)	
	97321		教育実習ⅠB		1							2	○	伊井 義人	☆ (事後指導)		
	97331		教育実習Ⅱ		2								○	中田 貢	☆		
	97341		教育実習Ⅲ		2								○	中田 貢	中一種必修		
	97411	栄養教育実習	栄養教育実習Ⅰ		1					1					菊地 和美	*	
	97421		栄養教育実習Ⅱ		1						○				菊地 和美	*	
	97611	教職実践演習	教職実践演習 (中・高)		2							2			伊井 義人	☆	
	97621		教職実践演習 (栄養教諭)		2							1	1		菊地・豊元・村田	* (隔週)	
	97711	教科又は教職に関する科目	介護等体験		1						○				大矢 一人	中一種必修	
			計		49												

☆印 = 家庭・福祉必修
 *印 = 栄養教諭必修

※印の教職に関する科目は、8単位まで卒業要件の選択単位として算入できる。

〈2016・2017 年度入学生に適用〉

シラバス ページ	科目 No.	区 分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								担 当 者	備 考	
				必 修	選 択	1		2		3		4				
						前	後	前	後	前	後	前	後			
	96001	教職の意義等に関する科目	※ 教師論		2	2									大矢 一人	必修
734	96011	教育の基礎理論に関する科目	※ 教育原理		2			2							伊井 義人	必修
735	96111		※ 教育心理学Ⅰ		2			2							新川 広樹	必修
736	96121		※ 教育心理学Ⅱ		2				2						新川 広樹	
737	96211		※ 教育制度論		2				2						伊井 義人	必修
	96311		教育課程及び指導法に関する科目（教育課程に関する科目）	※ 教育課程研究		2		2								松田 剛史
	96312			松田 剛史												*
738	96411	※ 中等家庭科教育法Ⅰ			2				2						飯村しのぶ	該当教科の指導法について 4単位必修
739	96421	※ 中等家庭科教育法Ⅱ			2				2						飯村しのぶ	
740	96431	※ 中等家庭科教育法Ⅲ			2						2				田中 _家 ・岡崎・木脇・長尾	
	96441	※ 中等家庭科教育法Ⅳ			2							2			岡崎由佳子	
741	96511	※ 福祉科教育法Ⅰ			2						2				加藤 聖子	中一種必修 * 後期後半
	96521	※ 福祉科教育法Ⅱ			2							2			加藤 聖子	
742	96711	※ 道德教育			2						2				大矢 一人	
743	96712														大矢 一人	
744	96811	※ 特別活動			2					2					松田 剛史	☆
746	96812														松田 剛史	*
748	96911	※ 教育方法論		2					2					大矢 一人	☆	
	96912						2							大矢 一人	*	
749	97011	生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目	※ 生徒指導		2				2						中田 貢	☆
750	97021		※ 生徒指導（栄養教諭）		2					2					中田 貢	*
751	97111		※ 教育相談		2						2				中田 貢	必修 後期後半
752	97311	教育実習	教育実習ⅠA		1						2				伊井 義人	☆（事前指導）
	97321		教育実習ⅠB		1							2	○		伊井 義人	☆（事後指導）
	97331		教育実習Ⅱ		2								○		中田 貢	☆
	97341		教育実習Ⅲ		2								○		中田 貢	中一種必修
753	97411	栄養教育実習	栄養教育実習Ⅰ		1					1					菊地 和美	*
754	97421		栄養教育実習Ⅱ		1							○			菊地 和美	*
	97611	教職実践演習	教職実践演習（中・高）		2								2		伊井 義人	☆
	97621		教職実践演習（栄養教諭）		2								1	1	菊地・豊元・村田	*（隔週）
755	97711	教科又は教職に関する科目	介護等体験		1						○				大矢 一人	中一種必修
			計		49											

☆印＝家庭・福祉必修
*印＝栄養教諭必修

※印の教職に関する科目は、8単位まで卒業要件の選択単位として算入できる。

〈2015 年度入学生に適用〉

シラバス ページ	科目 No.	区 分	授 業 科 目	単位数		開講学年・週時数								担 当 者	備 考		
				必修	選択	1		2		3		4					
						前	後	前	後	前	後	前	後				
	96001	教職の意義等に関する科目	※ 教師論		2	2											必修
	96011	教育の基礎理論に関する科目	※ 教育原理		2			2									必修
	96111		※ 教育心理学Ⅰ		2			2									必修
	96121		※ 教育心理学Ⅱ		2			2									
	96211		※ 教育制度論		2			2									必修
	96311		教育課程及び指導法に関する科目（教育課程に関する科目）	※ 教育課程研究		2	2										
	96321	※ 教育課程研究（栄養教諭）			2	2											*
	96411	※ 中等家庭科教育法Ⅰ			2			2									該当教科の指導法について 4単位必修
	96421	※ 中等家庭科教育法Ⅱ			2			2									
	96431	※ 中等家庭科教育法Ⅲ			2				2								
756	96441	※ 中等家庭科教育法Ⅳ			2					2				岡崎由佳子			
	96511	※ 福祉科教育法Ⅰ			2			2									中一種必修 * 後期後半
757	96521	※ 福祉科教育法Ⅱ			2					2				加藤 聖子			
	96711	※ 道徳教育			2					2							☆
	96721	※ 道徳教育（栄養教諭）			2					2							*
	96811	※ 特別活動			2				2								☆
	96821	※ 特別活動（栄養教諭）			2				2								*
	96911	※ 教育方法論		2				2								☆	
	96921	※ 教育方法論（栄養教諭）		2	2											*	
	97011	生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目	※ 生徒指導		2				2								☆
	97021		※ 生徒指導（栄養教諭）		2				2								*
	97111		※ 教育相談		2					2							必修 後期後半
	97311	教育実習	教育実習ⅠA		1					2							☆（事前指導）
758	97321		教育実習ⅠB		1						2	○	伊井 義人			☆（事後指導）	
759	97331		教育実習Ⅱ		2							○	中田 貢			☆	
760	97341		教育実習Ⅲ		2							○	中田 貢			中一種必修	
	97411		栄養教育実習	栄養教育実習Ⅰ		1				1							*
	97421	栄養教育実習Ⅱ			1					○						*	
761	97611	教職実践演習	教職実践演習（中・高）		2						2	伊井 義人			☆ 必修		
762	97621		教職実践演習（栄養教諭）		2						1	1	菊地・隈元・村田			* 必修（隔週）	
	97711	教科又は教職に関する科目	介護等体験		1					○						中一種必修	
			計		57												

☆印＝家庭・福祉必修
*印＝栄養教諭必修

※印の教職に関する科目は、8単位まで卒業要件の選択単位として算入できる。

7 図書館情報学課程に関する開設科目
(司書に関する科目)

シラバス ページ	科目 No.	科目分野	授業科目	単位数		開講学年・週時数						担当者	備 考			
				必修	選択	2年		3年		4年						
						前	後	前	後	前	後					
767	j0201	基 礎 科 目	生涯学習概論	2		2						塚田 敏信				
768	j0211		図書館概論	2		2						平井 孝典				
769	j0221		図書館制度・経営論	2			2					下田 尊久				
770	j0231		図書館情報技術論	図書館情報技術論	2		2					谷川 靖郎				
771	j0232							2					平井 孝典			
775	j0241					図書館サービスに関する科目	図書館サービス概論	2			2				下田 尊久	
776	j0251						児童サービス論	2				2			新田 裕子	
782	j0031		情報サービス論	2						2		下田 尊久				
783	j0261		情報サービス演習A	1							2	谷川 靖郎				
784	j0271		情報サービス演習B	1							2	平井 孝典				
772	j0281		図書館情報資源に関する科目	図書館情報資源概論	2		2						下田 尊久			
773	j0291			情報資源組織論	2			2					平井 孝典			
777	j0301			情報資源組織演習A	1				2				平井 孝典			
778	j0311			情報資源組織演習B	1					2			下田 尊久			
779	j0401	図書館に関する科目	図書館基礎特論		1			2		2		下田 尊久	2018年度開講 [隔年開講]			
	j0411		図書館サービス特論	図書館サービス特論	1			2		2		下田 尊久	2019年度開講 [隔年開講] 文学部			
	j0412								2		2		下田 尊久	2019年度開講 [隔年開講] 文学部		
780	j0421		図書館情報資源特論	1				○		○		蟹瀬 智弘	2018年度開講 [隔年開講]			
	j0431		図書・図書館史	1	2		2					前)下田尊久 後)平井孝典	2019年度開講 [隔年開講]			
774	j0441		図書館施設論	図書館施設論	1	2		2				下田 尊久	2018年度開講 [隔年開講] 文学部			
	j0442							2		2			下田 尊久	2018年度開講 [隔年開講] 文学部		
	j0451		図書館総合演習	1				2		2		下田 尊久	2019年度開講 [隔年開講]			
	◎		コミュニケーションに関する科目	コミュニケーション概論 a	2											
	◎			コミュニケーション概論 b	2											
	◎	法学特講A-a (コミュニケーションと法)		2												
	◎	法学特講A-b (コミュニケーションと法)		2												
	◎	情報文化論		2												
	☆	人間関係と心理		2												
	☆	異文化間コミュニケーション		2												
	☆	国際理解教育		2												
	☆	対人関係トレーニング		1												
781	j0461	資料に関する科目		アーカイブズ論	2				2		2		平井 孝典	文学部		
	j0462		アーカイブズ論	2				2		2		平井 孝典	人間生活学部			
	◎		日本語学演習 I A	4									「図書館に関する科目」2科目 2単位を含む 3単位以上 選択必修			
	◎		日本語学演習 I B	4												
	◎		日本文学演習 I A	4												
	◎		日本文学演習 I B	4												
	◎		日本文学演習 I C	4												
	◎		日本文学演習 I D	4												
	◎		日本文学演習 I E	4												
	◎		日本文学演習 I F	4												
	◎		日本文学演習 I G	4												
	◎		漢文学演習 I	4												
	◎		時事英語講読 A-a	1												
	◎		時事英語講読 A-b	1												
	◎		時事英語講読 B-a	1												
	◎		時事英語講読 B-b	1												
	◎		英語学演習 B-a	4												
	◎		英語学演習 B-b	4												

シラバス ページ	科目 No.	科目分野	授業科目	単位数		開講学年・週時数						担当者	備考
				必修	選択	2年		3年		4年			
						前	後	前	後	前	後		
	◎	資料に関する科目 選 択 科 目	古典語A-I		4								
	◎		古典語A-II		4								
	◎		古典語B		4								
	☆		生活と宗教		2								
	☆		科学英語A		1								
	☆		科学英語B		1								
	☆		子ども文化論		2								
	☆		児童文学		2								
最低修得単位数				22 単位	3単位 以上	◎印は文学部学生対象読み替え科目 ☆印は人間生活学部学生対象読み替え科目							

※ 司書教諭選択科目としては、2012年度以降入学生が履修可能

〈司書教諭に関する科目〉

シラバス ページ	科目 No.	科目分野	授業科目	単位数		開講学年・週時数						担当者	備考
				必修	選択	2年		3年		4年			
						前	後	前	後	前	後		
785	L0011	必 修 科 目	学校経営と学校図書館	2		2						新田 裕子	
786	L0021		読書と豊かな人間性	2				2				塚田 敏信	
787	L0031		情報メディアの活用	2					2			平井 孝典	
788	L0041		学校図書館メディアの構成	2					2			平井 孝典	
789	L0051		学習指導と学校図書館	2						2		塚田 敏信	
最低修得単位数				10 単位		司書に関する科目のうち、上記必修科目と重ならない科目はすべて選択科目として受講可能。							

〈学校図書館司書に関する科目〉

〈2017年度以降入学生に適用〉

シラバス ページ	科目 No.	科目分野	授業科目	単位数		開講学年・週時数						担当者	備考		
				必修	選択	1年		2年		3年				4年	
						前	後	前	後	前	後			前	後
790	L0061	必 修 科 目	学校教育概論	2					2				塚田 敏信		
最低修得単位数															

シ ラ バ ス

大 学 共 通 科 目
共 通 科 目

授業のねらい

この授業においては、キリスト教の基礎知識を学び、西欧文化の根底に流れている世界観をよりよく理解することを目的とする。それによって西欧の芸術や文学、言語、生活習慣等を東洋の文化と比較し、東西の根本的な相違を理解する。

さらに、宗教と日常生活とのかかわりについてあらためて考える時間としたい。

到達目標

1. キリスト教に限らず、人間本性と宗教とのかかわりを自分なりに考察できる。
2. 宗教に対する偏見を持たず、文化の多様性を考慮できるようになる。

授業方法

講義の終わりに次回の内容を知らせ、事前に関係個所に目を通しておくように指示する。
聖書や関連する映像・絵画等を通して、キリスト教の世界観を具体的に紹介する。
各回、学生の要望を聞き、質問を受けるようにする。

授業計画

- 第1回 インTRODククション
- 第2回 キリスト教の歴史(1) キリスト教の成立
- 第3回 キリスト教の歴史(2) 東方教会と西方教会
- 第4回 キリスト教の歴史(3) カトリックとプロテスタント
- 第5回 キリスト教の歴史(4) 世界への宣教 修道会の役割 (フランシスコ会・イエズス会・トラピスト会等)
- 第6回 現代のキリスト教 全世界におけるキリスト教の状況
- 第7回 旧約と新約の意味
- 第8回 天地創造について (被造物の意義・原罪)
- 第9回 回勅『ラウダート・シ』から学ぶ
- 第10回 新約 (イエスの教え) の中心思想 (神の愛・アガペー)
- 第11回 新約 (イエスの教え) の中心思想 許し (放蕩息子のたとえ、罪をおかした女の例など)
- 第12回 キリスト教文化と生活
- 第13回 キリスト教美術
- 第14回 キリスト教音楽
- 第15回 総括 Q & A 各自の振り返り

成績評価の方法

最終試験 (60%)、小テスト (20%)、受講態度 (20%) により評価する。

履修にあたっての注意

基本的に講義形式であるが、質問する、あるいは異なった意見でも発言するなどの学生の積極的な態度が求められる。宗教・文化の多様性を意識して、いろいろな考え方を聴く姿勢を養ってほしい。私語を慎むこと。

教科書・参考書に関する備考

教員が作成したプリント等を必要に応じて使用する。

参考書

マイケル・コリンズ『キリスト教の歴史』(BL 出版、2001、ISBN : 4892387835)
『聖書』(日本聖書協会)

参考ホームページ

カトリック中央協議会 <http://www.cbcj.catholic.jp/>(カトリックについて理解するために役立つ)

授業のねらい

伝統的な社会においては、地域や民族・部族ごとに宗教も異なっていました。しかし、文明の誕生によって、人々は地域や民族・部族の相違を超えてより普遍的な宗教を求めようになりました。この授業では、そのような普遍的な宗教の具体例としてキリスト教を取り上げ、その特徴について他の諸宗教との共通点や相違点の比較をとおして説明し、その普遍的な価値と限界を含めてキリスト教の基礎的知識を身に着けることを目的とします。

到達目標

- ・キリスト教と他の諸宗教との共通点と相違点を理解し、寛容な姿勢を養うこと。
- ・キリスト教の世界観・人間観を学ぶことをとおして、自分の考えを広げ深めること。

授業方法

この授業では、人間がそもそも宗教的動物であるという事実の確認から始まり、諸宗教におけるキリスト教の位置づけ、そして、キリスト教を特徴づけている世界観や人間観などを、聖書やキリスト教の歴史を参照しながら検討し、現代におけるそれらの普遍的な意味を考えます。

授業計画

- 第1回 イントロダクション：人間はどのような動物か
- 第2回 キリスト教はどのような宗教か：諸宗教との比較を参考に
- 第3回 聖書はどのような書物か
- 第4回 分派から独立へ：ユダヤ教、イエス、キリスト教
- 第5回 創造という思考：科学的世界観は創世神話の世界観を撃破したか
- 第6回 被造物という思考：アダムと楽園追放の神話
- 第7回 愛という思考：エロースとアガペー、隣人愛
- 第8回 神の国という思考：神の国から天の国、そして天国へ
- 第9回 キリスト教の教え：キリスト教徒は何を信じているのか～信条と祈りについて
- 第10回 キリスト教の教え：「世の終わり」、天国と地獄、そして煉獄の誕生
- 第11回 キリスト教の教え：罪のゆるし、体の復活、永遠の命
- 第12回 キリスト教の教派：東西分裂、東方教会と西方教会
- 第13回 イエス・キリストとキリスト教の聖人たち：アシジのフランチェスコ、マザー・テレサほか
- 第14回 キリスト教徒の宗教生活：教会暦、秘跡ほか
- 第15回 全体の総括と展望

成績評価の方法

授業への積極的な参加（40%）、レポート課題（60%）によって総合的に評価する。

履修にあたっての注意

教科書（聖書）を必ず持参して受講すること。

教科書

『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』（日本聖書協会、1987～、ISBN：978-4-8202-1202-7）

教科書・参考書に関する備考

必要な参考文献については授業中に紹介する。

参考書

山我哲雄[編]『図解 これだけは知っておきたいキリスト教』（洋泉社、2011、ISBN：978-4-422-24084-6）
宇都宮輝雄・阿部包[共著]『面白いほどよくわかるキリスト教』（日本文芸社、2008、ISBN：978-4-537-25602-4）

参考ホームページ

日本聖書協会 <http://www.bible.or.jp>
Laudate <http://www.pauline.or.jp>（女子パウロ会ホームページ）

授業のねらい

聖書は、アジアの西端の地域で生まれた書物ですが、それは後にギリシア思想と共にヨーロッパの文化・文明の形成に不可欠な役割を果たしました。また、聖書が描く世界観・人間観は、一神教と総称される宗教（例えば、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム）の根幹をなしています。

この授業は、このような聖書が描き出す世界観・人間観を理解するための基礎的知識を提供します。

到達目標

- ・旧約聖書の基本的な考え方を概略的に説明できる。
- ・新約聖書の基本的な考え方を概略的に説明できる。
- ・旧約聖書と新約聖書の関係を概略的に説明できる。
- ・イエスの思想と活動の特徴を概略的に説明できる。

授業方法

この授業では、(1)聖書という書物の特徴（構成、成立、聖書とユダヤ教・キリスト教徒の関係など）をまず確認し、次に(2)旧約聖書の中心的内容を抽出しながら、そこに示された世界観・人間観を理解する。そして、それを基にして(3)新約聖書が伝えるイエスの思想と活動および彼が目指したものを歴史的文脈の中に位置づけて理解する。聖書箇所が指示されている回はその箇所を事前に読んでおくことが望ましい。

授業計画

- 第1回 イン트로ダクション：聖書とユダヤ教・キリスト教、ヘブライ・イスラエル・ユダヤの関係を含めて
- 第2回 聖書の成立と構造およびそれらが書かれた言語と地域
- 第3回 創世記が描く神・世界・人間（創世記1～11章）
- 第4回 神は名もない者を選ばれる：アブラハム物語～信仰と契約（創世記12～22章）
- 第5回 イスラエルの民の起源と苦難（創世記25～50章）
- 第6回 民の解放体験と律法（出エジプト記）
- 第7回 定住を目指して（ヨシヤ記、士師記）
- 第8回 王国の成立と分裂（サムエル記、列王記）
- 第9回 捕囚体験と預言者の思想、ユダヤ教の萌芽
- 第10回 イエス誕生前夜のユダヤ社会：政治的なメシア待望、抑圧と抵抗運動、多様な活動
- 第11回 イエスの思想と活動①：貧しい人々と共に歩む人
- 第12回 イエスの思想と活動②：譬え話から（ぶどう園の労働者、善いサマリア人ほか）
- 第13回 イエスの最後の歩み（最後の晩餐・裁判）と死および弟子たちの復活体験
- 第14回 イエス亡き後：イエスをめぐる伝承の成立と残された者たちの活動（パウロを含めて）
- 第15回 授業全体の総括と展望：聖書から受け止めたいこと

成績評価の方法

授業への積極的参加（質問など：40%）、レポート課題（60%）により総合的に評価する。

履修にあたっての注意

教科書（聖書）は、授業に当たって必ず持参し、教員が指示する箇所を確認すること。

教科書

『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』（日本聖書協会、1987年～、ISBN：978-4-8202-1202-7）

教科書・参考書に関する備考

「参考書」欄に記載されたもの以外は授業中に適宜紹介する。

参考書

阿部包【監修】『5分ですっきり読める聖書物語<旧約篇>』（成美堂出版、2011、ISBN：2011,978-4-415-40162-1）

参考ホームページ

日本聖書協会 <http://www.bible.or.jp>

Laudate <http://www.pauline.or.jp>（女子パウロ会ホームページ）

授業のねらい

卒業後を見据え、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度等を確実に身に付けていくための意識形成をめざす。

到達目標

以下の意識を形成することができる。

- ・卒業後も視野に入れたキャリアデザインの視点から、自らの大学生活を位置付ける。
- ・学士号取得までの自分なりの目標に向けて、どう取り組んでいくか考える。
- ・基礎的なコミュニケーション能力と社会性を身に付ける。
- ・自分のキャリアについて考え、女性としての生き方に関心を持つようにする。
- ・リアクションペーパーに自分の意見を短時間でまとめることができるようになる。

授業方法

担当教員が毎回コーディネーターとなって進行する。

7～14の回は、講師を招いて授業を行う。

4～14の回は、順番が変更になることがある。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション：この授業の趣旨、到達目標 意欲的に大学生活を過ごすために（木村・田中・和田）
- 第2回 人間生活学科で学ぶ(1)：大学で学ぶ意義と目標 “大学入学後の自分”と社会参加への道（木村・田中・和田）
- 第3回 人間生活学科で学ぶ(2)：大学で学ぶ意義と目標 “大学入学後の自分”と社会参加への道 グループディスカッション（木村・田中・和田）
- 第4回 大学で「学ぶこと」と社会で「働くこと」(1)：先輩による講話(1) 一般企業（木村・田中・和田）
- 第5回 大学で「学ぶこと」と社会で「働くこと」(2)：先輩による講話(2) 社会福祉関係（木村・田中・和田）
- 第6回 大学で「学ぶこと」と社会で「働くこと」(3)：先輩による講話(3) 教員・一般企業（木村・田中・和田）
- 第7回 社会と女性(1)：社会情勢への関心、現代社会と職業（働くことの意義）（木村・田中・和田）
- 第8回 社会と女性(2)：社会における女性の立場（共同参画・ジェンダーなど）（木村）
- 第9回 コミュニケーションについて(1)：理解したことをうまく伝える（「伝えた」と「伝わった」の違い）（田中）
- 第10回 コミュニケーションについて(2)：(1)を意識して実践しましょう！（さまざまな表現方法）（和田）
- 第11回 自己分析(1)：大学生としての自分を知る（木村・和田）
- 第12回 自己分析(2)：社会から求められる自分（田中）
- 第13回 社会と私～社会性を身に付ける(1)：社会性とは？
社会のルール・マナー・言葉使い（木村）
- 第14回 社会と私～社会性を身に付ける(2)：グループワーク（和田）
- 第15回 大学生活と将来の進路（和田）

成績評価の方法

授業への参加状況と最終レポート提出により単位認定する。(100%)

履修にあたっての注意

講師等の都合により、時間割が変更する可能性があるので注意すること。

教科書・参考書に関する備考

参考書：必要に応じて授業の時に指示する。

授業のねらい

卒業後を見据え、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度等を確実に身に付けていくための意識形成をめざす。

到達目標

以下の意識を形成することができる。

- ・卒業後も視野に入れたキャリアデザインの視点から、みずからの大学生活を位置付ける。
- ・学士号取得までの自分なりの目標に向けて、どう取り組んでいくか考える。
- ・管理栄養士としての職種の多様性とその各々の役割を理解できる。
- ・管理栄養士取得までの自分なりの目標に向けて、どう取り組んでいくか考える。

授業方法

担当教員が毎回コーディネーターとなって進行する。

7～14の回は、講師を招いて授業を行う。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション：授業の趣旨、到達目標 大学で学ぶことの意義 将来ビジョン
- 第2回 管理栄養士の全体像：栄養士制度と歴史的背景 求められる管理栄養士とは（限元）
- 第3回 管理栄養士に求められるもの：管理栄養士に求められる専門領域、臨地実習における3分野について（臨床栄養分野、公衆栄養分野、給食経営管理分野）（限元）
- 第4回 先輩による講話(1)：病院、事業所 全体討議（限元）
- 第5回 先輩による講話(2)：学校、行政 全体討議（限元）
- 第6回 先輩による講話(3)：企業、研究職 全体討議（限元）
- 第7回 社会と女性(1)：社会情勢への関心、現代社会と職業（働くことの意義）
- 第8回 社会と女性(2)：社会における女性の立場（共同参画・ジェンダーなど）
- 第9回 コミュニケーションについて(1)：理解したことをうまく伝える（「伝えた」と「伝わった」の違い）
- 第10回 コミュニケーションについて(2)：(1)を意識して実践しましょう！（さまざまな表現方法）
- 第11回 自己分析(1)：大学生としての自分を知る
- 第12回 自己分析(2)：社会から求められる自分
- 第13回 社会と私～社会性を身に付ける(1)：社会性とは？ 社会のルール・マナー・言葉遣い
- 第14回 社会と私～社会性を身に付ける(2)：グループワーク
- 第15回 大学生活と将来の進路：本授業を通してどのようなことを学べたか。（菊地）
グループワークおよびレポート

成績評価の方法

授業への参加状況と最終レポート提出により単位認定する。（100%）

履修にあたっての注意

講師等の都合により、時間割が変更する可能性があるので注意すること。

教科書・参考書に関する備考

参考書： 必要に応じて授業の時に指示する。

授業のねらい

卒業後を見据え、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度等を確実に身に付けていくための意識形成をめざす。

到達目標

以下の意識を形成することができる。

- ・卒業後も視野に入れたキャリアデザインの視点から、みずからの大学生活を位置付ける。
- ・学士号取得までの自分なりの目標に向けて、どう取り組んでいくか考える。

授業方法

担当教員が毎回コーディネーターとなって進行する。

7～14の回は、講師を招いて授業を行う。

4～14の回は、順番が変更になることがある。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション：キャリアデザインと大学での学びについて知る（今野）
 ・キャリア及びキャリアデザインとは
 ・保育学科学生としてのキャリアデザイン
- 第2回 卒業後の進路(1)：OGによる講話を聞く（保育園、幼稚園）（吾田・高橋）
 ・現在の仕事の内容
 ・大学での学びと仕事とのつながり
- 第3回 卒業後の進路(2)：OGによる講話を聞く（福祉施設、児童厚生）（青木・小山）
 ・現在の仕事の内容
 ・大学での学びと仕事とのつながり
- 第4回 卒業後の進路(3)：OGによる講話を聞く（一般企業・その他）（新海・稲實）
 ・教員の現在に至るまでの道のり
 ・大学での学びと仕事とのつながり（保育以外OG）
- 第5回 卒業後の進路(4)：保育の視野を広げる（JICA・その他）（小川・原田）
 ・諸外国における子どもの生活
 ・教育制度、生活文化、経済事情、ボランティアなど
- 第6回 大学での学び：4年生から大学での学びについて聞く（駒形・木本）
 ・各学年で取り組むべきこと
 ・実習などを経験した感想
- 第7回 社会と女性(1)：社会情勢への関心、現代社会と職業（働くことの意義）
- 第8回 社会と女性(2)：社会における女性の立場（共同参画・ジェンダーなど）
- 第9回 コミュニケーションについて(1)：理解したことをうまく伝える（「伝えた」と「伝わった」の違い）
- 第10回 コミュニケーションについて(2)：(1)を意識して実践しましょう！（さまざまな表現方法）
- 第11回 自己分析(1)：大学生としての自分を知る
- 第12回 自己分析(2)：社会から求められる自分
- 第13回 社会と私～社会性を身に付ける(1)：社会性とは？
 社会のルール・マナー・言葉使い
- 第14回 社会と私～社会性を身に付ける(2)：グループワーク
- 第15回 大学生活と将来の進路：本授業を通してどのようなことを学べたか。

成績評価の方法

授業への参加状況と最終レポート提出により単位認定する。（100%）

履修にあたっての注意

講師等の都合により、時間割が変更する可能性があるので注意すること。

教科書・参考書に関する備考

参考書：必要に応じて授業の時に指示する。

授業のねらい

現代の情報化社会で有用となる情報リテラシーの獲得に役立つことを射程に、Windows が搭載されたパーソナルコンピュータを、受講者が1人1台ずつ利用することにより Windows 上のソフトウェアの操作方法に慣れることをねらいとする。一般的説明の後、「習うより慣れる」に従い、与えられた具体的な演習用の練習課題を各自がコンピュータ上に作成する。その際、練習課題の構成要素を説明し、実際にコンピュータを操作した時に遭遇する疑問に答えることにより、練習課題の構成要素を理解しそれらを実現するための操作方法の理解を深める。今後のレポート作成、卒論作成に必須の内容であり、出来栄の良い文書等を作成できるようになる。

到達目標

レポートや卒論を書く時に必要となる文書を作成するためのワープロソフト、数値で得られたデータから有用な意味を導き出すために、表形式で数値を整理し目的に応じて集計し視覚的に表示する表計算ソフト、自分の意思を他人に伝える時に、他の人の視覚に訴えることにより効果的に考えを伝えるためのプレゼンテーションソフト；これらのソフトウェアの基本的な事柄（具体的な内容は各回の授業計画を参照）を理解し、自分で実現することが出来るようになる。

授業方法

基本的な操作方法を記したプリントに加えて、演習用の課題（8課題程度）もプリントまたはファイル形式で配布する。

具体的な授業の進め方：各課題毎に、課題の焦点及び作成方法の説明後、受講生が各自でその課題を作成する。作成過程で生じる質問には可能な限り対応する。

本授業で紹介するすべての事柄をすべての受講生が習熟しなければならないことはない。各自の必要度に応じて取捨選択し、自分が必要と思う事項（基本的な事項）に関しては、不明ならば授業中、または、授業後に質問し、授業後に納得のいくまで復習することを希望する。

授業計画

- 第1回 この科目の概要、及び、情報リテラシーとは？
- 第2回 Windows に関する基礎事項：パーソナルコンピュータ用の OS である Windows の基礎的な操作方法
- 第3回 Word に関する事項(1)：文書を作成する時に利用するワープロソフトである Word の基礎的な操作方法
- 第4回 Word に関する事項(2)：段落のインデント、段落番号の利用、テキストボックスの利用
- 第5回 Word に関する事項(3)：表の利用、図表の配置、図表番号と相互参照の利用、描画キャンパスの利用
- 第6回 Word に関する事項(4)：セクションの利用、段組の利用
- 第7回 Word に関する事項(5)：横書き縦書きの利用、スタイルの利用
- 第8回 Word に関する事項(6)：数式エディタの利用、フィールドコードの利用
- 第9回 Word に関する事項(7)：見出しと目次の利用、脚注・ヘッダー・フッターの利用
- 第10回 Excel に関する事項(1)：表形式で与えられた数値から様々な特性値を計算し視覚に訴えるグラフを描くことを支援する表計算ソフトである Excel の基礎的な操作方法
- 第11回 Excel に関する事項(2)：グラフの利用、様々な関数（データベース関数を含む）の利用
- 第12回 Excel に関する事項(3)：相対参照と絶対参照の利用、オートフィルタの利用、条件付書式の利用
- 第13回 Excel に関する事項(4)：Excel のデータを Word の文書で（または、Word の文書を Excel で）有効に利用する方法
- 第14回 PowerPoint に関する事項(1)：卒論発表時等、自分の考えを他の人に伝えるときに利用するソフトウェアである PowerPoint の基礎的な操作方法
- 第15回 PowerPoint に関する事項(2)：アニメーションの利用

成績評価の方法

(1)授業中に与えた指定課題の提出（2回または3回）と(2)内容を各自で考える自由課題（1回程度）のレポートの点数、及び(3)授業への参加状況の合計で評価する。
点数の配分は(1)指定課題の提出（30%）、(2)自由課題のレポート（40%）、(3)授業への参加状況（30%）である。

履修にあたっての注意

授業中には受講者の不明な点及び質問に可能な限り個別に対応する。不明な点は躊躇せずに質問すること。しかしながら時間の関係上すべての質問に答えることは不可能なので、疑問の解消で得た知識は周りの人と共有して欲しい。

授業のねらい

現代社会に於いて、コンピューターはあらゆる場面で使われており、もはや必要不可欠な社会基盤である。この授業では、パーソナルコンピューターを利用した情報収集やオフィスツールの操作方法を的確に学び、完成度の高いドキュメントやプレゼン資料を作成できるテクニックと情報セキュリティなどを含めた幅広い知識を修得し、社会に出てからも活用できる実践的なスキルを身に付けることを目指します。

到達目標

1. レポート作成や卒論など大学で必要となるコンピューターを駆使したドキュメント作成の基本的知識を修得する。
2. 基礎知識をしっかりとマスターし、様々な例題に応じたドキュメントを独力で作成するための判断力と思考力を身につける。

授業方法

アプリケーションごとに操作技法を説明し、各回で説明した内容に対応した練習問題と指定課題を出題して、修得状況を確認していきます。修得状況によっては、その後の授業内容を工夫しながら進めると共に、アプリケーションごとに作成した操作ガイドを参考資料として授業内で配布し、課題作成時などに活用してもらいます。操作上の疑問点などは、授業内で解決出来るよう適宜対応します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：授業の進め方、留意事項
- 第2回 Word による文書作成(1)：文字書式、段落書式、罫線作成
- 第3回 Word による文書作成(2)：スタイル登録、アウトライン設定
- 第4回 Word による文書作成(3)：インデント・タブ設定、段組み設定
- 第5回 Word による文書作成(4)：コメント設定、図表番号の設定、脚注設定
- 第6回 Word による文書作成(5)：SmartArt グラフィックと図形の挿入、表紙の挿入
- 第7回 Word による文書作成(6)：セクション設定、ページレイアウト設定、印刷設定
- 第8回 Word による文書作成(7)：目次作成、ヘッダー・フッター設定、ページ番号設定
- 第9回 PowerPoint によるプレゼンテーション資料作成(1)：基本操作
- 第10回 PowerPoint によるプレゼンテーション資料作成(2)：応用作成技法
- 第11回 Excel によるデータ処理(1)：効率的なデータ入力と表作成
- 第12回 Excel によるデータ処理(2)：関数を利用した計算と四則演算
- 第13回 Excel によるデータ処理(3)：グラフの作成、条件付き書式の設定
- 第14回 Excel によるデータ処理(4)：データベースの整形と活用、ピボットテーブル
- 第15回 総括：Word・Excel・PowerPoint の横断的な活用方法

成績評価の方法

到達目標 1 として Word 操作と PowerPoint 操作に関する指定課題 (50%)
 到達目標 2 として Excel に関する小テスト (30%)
 授業への参加状況 (20%) により評価する。

履修にあたっての注意

指定課題は、成績評価と修得状況を把握する上で重視するので提出期日を守り忘れずに提出のこと。

教科書・参考書に関する備考

アプリケーションごとに作成した独自の操作ガイド（プリント）を授業内で配布する。

授業のねらい

○軽スポーツ A

軽スポーツや健康づくり運動、レクリエーション活動の実践を通して自らの体力の維持増進を行い、生涯にわたる運動・スポーツ・レクリエーションの習慣化を図ることをねらいとする。

○テニス

人間生活の基本としての健康・体力および身体運動の重要性を実践を通して認識し、生涯にわたる運動ならびにスポーツの生活化の習慣をはかることをねらいとする。授業の展開はゲームを中心に、チームワークの重要性や協調性などを養いながら、技術の向上を目指していく。

○バレーボール

- ・走る・跳ぶ・打つといった基本的な身体運動を通し、各種体力の維持・増強を図る。
- ・ゲームを通じ、協調性・フェアプレイの精神・マナー等の社会性を養うとともにゲームの楽しさを知る。
- ・生涯スポーツの習慣化を図る。

到達目標

○軽スポーツ A

軽スポーツや健康づくり運動、レクリエーションのルールやマナーの理解および実践上の戦術を学ぶことができる。

○テニス

基本技術の確認と習得、ゲームを通じての戦術習得。空間認知ならびに巧緻性を向上させる素地を養う。

○バレーボール

- ・個人…サーブ・レシーブ・スパイクなどの基本的な技術の習得。
- ・チーム…ゲームにおいて、レシーブ・トス・スパイクの三段攻撃がある程度でき、皆でゲームを楽しむことができる。

授業方法

○軽スポーツ A

屋内外において、軽スポーツや健康づくり運動、レクリエーションを実践的に行う。勝敗が分かれる種目については、ゲーム中心に展開する。ただし、天候や履修学生数により、内容を変更することがある。

○テニス

各自のその日の体調に合わせてながら基礎から徐々にメソッドのレベルアップを図っていきます。

○バレーボール

- ・出来るだけ早くチームを編成し、グループの中で基本的な技術を身につけながらチームワークの醸成をはかる。
- ・チームの編成に際しては、中高時代の運動系の部活経験者等を参考に均等なグループをつくり、ゲームの回数に比例して、チームの完成度アップを目指す。
- ・ゲームはリーグ戦方式とする。

授業計画

○軽スポーツ A

- 1 ガイダンス、種目選択、種目別ガイダンス、軽スポーツの理解
- 2 トレーニングの基礎（トレーニング機器の使用法）
- 3 トレーニングの実際（目的にあったトレーニング）
- 4 健康づくり運動の基礎（アイズプレーキング、仲間づくり）
- 5 健康づくり運動の展開1（ストレッチ、身体のひずみチェック）
- 6 卓球の基礎（ルールの理解、サーブ、ラリー）
- 7 卓球の展開（リーグ戦1）
- 8 卓球の展開（リーグ戦2）
- 9 ウォーキングと自然観察
- 10 パークゴルフの基礎（ルールの理解、ゲームの進め方）
- 11 パークゴルフのゲーム1
- 12 パークゴルフのゲーム2
- 13 健康づくり運動の展開2（ボールを使ったゲーム）
- 14 健康づくり運動の展開3（伝承遊び）

15 総括と振り返り

○テニス

- 1 ガイダンス、種目選択、種目別ガイダンス、基本技術
- 2 基本練習(1)：グリップ、グラウンドストローク（フォア・バックハンド）
- 3 基本練習(2)：グラウンドストローク、サーブ、レシーブ、ボレー
- 4 基本練習(3)：グラウンドストローク、ドロップ、スマッシュ
- 5 基本練習(4)：グラウンドストローク、ロブ、ネットプレー
- 6 応用練習(1)：フットワーク、ボレー対ボレー
- 7 応用練習(2)：フットワーク、サーブアンドボレー
- 8 応用練習(3)：フットワーク、ダブルスのコンビネーション
- 9 試合1：試合の進め方、ルール説明、シングルス
- 10 試合2：シングルスリーグ戦
- 11 試合3：シングルスリーグ戦、ダブルスペアリング決定
- 12 試合4：ダブルスリーグ戦
- 13 試合5：ダブルスペアリング再編成
- 14 試合6：ダブルスリーグ戦
- 15 総括 試合の反省、授業の反省

○バレーボール

- 1 ガイダンス、種目選択、種目別ガイダンス、基本技術
- 2 ストレッチ、ボールに慣れる、パス（アンダー・オーバー）、ボールを打つ
- 3 チーム編成、チームで基本技術の練習、各種サーブ&サーブカット
- 4 チームで基本技術の練習、トス&スパイク、簡易ゲーム
- 5 一次リーグ戦(1)
- 6 一次リーグ戦(2)
- 7 一次リーグ戦(3)
- 8 チームのフォーメーションプレー
- 9 二次リーグ戦(1)
- 10 二次リーグ戦(2)
- 11 二次リーグ戦(3)
- 12 二次リーグ戦(4)
- 13 ミニバレー(1)
- 14 ミニバレー(2)
- 15 ミニバレー(3)、アンケート

成績評価の方法

身体運動の自主的・合理的な実践に主眼を置く
実践態度（80%）、技能（20%）

履修にあたっての注意

遅刻は、欠席扱いとなる場合がある
服装は運動を妨げないものを着用すること。（ジーンズは禁止）
靴は運動靴のみ（踵の高い靴、サンダル、スリッパは禁止）

授業のねらい

○軽スポーツ A

軽スポーツや健康づくり運動、レクリエーション活動の実践を通して自らの体力の維持増進を行い、生涯にわたる運動・スポーツ・レクリエーションの習慣化を図ることをねらいとする。

○ストレッチメソッド

様々なストレスにさらされている現代、健康で充実した毎日を過ごすためにはまず基本となる自分自身の身体の調整を図り、さらに体力をつける運動を定期的に行うことが精神的にも肉体的にも重要です。この授業では、生涯に渡って運動を継続的に実践していけるように、体の柔軟性を高める、心身をリラックスさせる、筋肉を鍛える等の方法習得を目指します。

○テニス

人間生活の基本としての健康・体力および身体運動の重要性を実践を通して認識し、生涯にわたる運動ならびにスポーツの生活化の習慣をはかることをねらいとする。授業の展開はゲームを中心に、チームワークの重要性や協調性などを養いながら、技術の向上を目指していく。

到達目標

○軽スポーツ A

軽スポーツや健康づくり運動、レクリエーションのルールやマナーの理解および実践上の戦術を学ぶことができる。

○ストレッチメソッド

体の各部位が意識できるようになり、それぞれを伸ばす、整える、鍛えるための基礎的な方法を身につけ、体を動かす爽快感を味わうことができるようになる。

○テニス

基本技術の確認と習得、ゲームを通じての戦術習得。空間認知ならびに巧緻性を向上させる素地を養う。

授業方法

○軽スポーツ A

屋内外において、軽スポーツや健康づくり運動、レクリエーションを実践的に行う。勝敗が分かれる種目については、ゲーム中心に展開する。ただし、天候や履修学生数により、内容を変更することがある。

○ストレッチメソッド

個別に用意されたマットを使用し、その上で各自のその日の体調に合わせてながら基礎から徐々にメソッドのレベルアップを図っていきます。学んだストレッチを日常生活に取り入れ、授業に臨んで下さい。

○テニス

各自のその日の体調に合わせてながら基礎から徐々にメソッドのレベルアップを図っていきます。

授業計画

○軽スポーツ A

- 1 ガイダンス、種目選択、種目別ガイダンス、軽スポーツの理解
- 2 トレーニングの基礎（トレーニング機器の使用法）
- 3 トレーニングの実際（目的にあったトレーニング）
- 4 健康づくり運動の基礎（アイスブレイキング、仲間づくり）
- 5 健康づくり運動の展開 1（ストレッチ、身体のひずみチェック）
- 6 卓球の基礎（ルールの理解、サーブ、ラリー）
- 7 卓球の展開（リーグ戦 1）
- 8 卓球の展開（リーグ戦 2）
- 9 ウォーキングと自然観察
- 10 パークゴルフの基礎（ルールの理解、ゲームの進め方）
- 11 パークゴルフのゲーム 1
- 12 パークゴルフのゲーム 2
- 13 健康づくり運動の展開 2（ボールを使ったゲーム）
- 14 健康づくり運動の展開 3（伝承遊び）
- 15 総括と振り返り

○ストレッチメソッド

- 1 ガイダンス：種目選択、種目別ガイダンス（ストレッチの方法と効果について）
- 2 体を伸ばす(1)：仰向けの姿勢で縦に伸ばす、捻じる、反る
- 3 体を伸ばす(2)：コアを自在に操作する
- 4 体を伸ばす(3)：筋肉の構造特性に合わせる
- 5 体を伸ばす(4)：基部を固定する
- 6 体を伸ばす(5)：楽な姿勢でゆっくり伸ばす
- 7 体の芯をほぐす(1)：脊柱を動かしてほぐす
- 8 体の芯をほぐす(2)：骨盤を動かしてほぐす
- 9 体の芯をほぐす(3)：肩甲骨周りを動かしてほぐす
- 10 体の芯をほぐす(4)：股関節周りを動かしてほぐす
- 11 部位別メソッド(1)：首、肩、腕、手首
- 12 部位別メソッド(2)：胸、腹、体側
- 13 部位別メソッド(3)：背中、腰
- 14 部位別メソッド(4)：膝、太もも、脹脛
- 15 まとめ：体全体のつながり

○テニス

- 1 ガイダンス、種目選択、種目別ガイダンス、基本技術
- 2 基本練習(1)：グリップ、グラウンドストローク（フォア・バックハンド）
- 3 基本練習(2)：グラウンドストローク、サーブ、レシーブ、ボレー
- 4 基本練習(3)：グラウンドストローク、ドロップ、スマッシュ
- 5 基本練習(4)：グラウンドストローク、ロブ、ネットプレー
- 6 応用練習(1)：フットワーク、ボレー対ボレー
- 7 応用練習(2)：フットワーク、サーブアンドボレー
- 8 応用練習(3)：フットワーク、ダブルスのコンビネーション
- 9 試合1：試合の進め方、ルール説明、シングルス
- 10 試合2：シングルスリーグ戦
- 11 試合3：シングルスリーグ戦、ダブルスペアリング決定
- 12 試合4：ダブルスリーグ戦
- 13 試合5：ダブルスペアリング再編成
- 14 試合6：ダブルスリーグ戦
- 15 総括 試合の反省、授業の反省

成績評価の方法

身体運動の自主的・合理的な実践に主眼を置く
実践態度（80%）、技能（20%）

履修にあたっての注意

遅刻は、欠席扱いとなる場合がある
服装は運動を妨げないものを着用すること。（ジーンズは禁止）
靴は運動靴のみ（踵の高い靴、サンダル、スリッパは禁止）

授業のねらい

○軽スポーツ A

軽スポーツや健康づくり運動、レクリエーション活動の実践を通して自らの体力の維持増進を行い、生涯にわたる運動・スポーツ・レクリエーションの習慣化を図ることをねらいとする。

○テニス

人間生活の基本としての健康・体力および身体運動の重要性を実践を通して認識し、生涯にわたる運動ならびにスポーツの生活化の習慣をはかることをねらいとする。授業の展開はゲームを中心に、チームワークの重要性や協調性などを養いながら、技術の向上を目指していく。

○ストレッチメソッド

様々なストレスにさらされている現代、健康で充実した毎日を過ごすためにはまず基本となる自分自身の身体の調整を図り、さらに体力をつける運動を定期的に行うことが精神的にも肉体的にも重要です。この授業では、生涯に渡って運動を継続的に実践していけるように、体の柔軟性を高める、心身をリラックスさせる、筋肉を鍛える等の方法習得を目指します。

到達目標

○軽スポーツ A

軽スポーツや健康づくり運動、レクリエーションのルールやマナーの理解および実践上の戦術を学ぶことができる。

○テニス

基本技術の確認と習得、ゲームを通じての戦術習得。空間認知ならびに巧緻性を向上させる素地を養う。

○ストレッチメソッド

体の各部位が意識できるようになり、それぞれを伸ばす、整える、鍛えるための基礎的な方法を身につけ、体を動かす爽快感を味わうことができるようになる。

授業方法

○軽スポーツ A

屋内外において、軽スポーツや健康づくり運動、レクリエーションを実践的に行う。勝敗が分かれる種目については、ゲーム中心に展開する。ただし、天候や履修学生数により、内容を変更することがある。

○テニス

各自のその日の体調に合わせてながら基礎から徐々にメソッドのレベルアップを図っていきます。

○ストレッチメソッド

個別に用意されたマットを使用し、その上で各自のその日の体調に合わせてながら基礎から徐々にメソッドのレベルアップを図っていきます。学んだストレッチを日常生活に取り入れ、授業に臨んで下さい。

授業計画

○軽スポーツ A

- 1 ガイダンス、種目選択、種目別ガイダンス、軽スポーツの理解
- 2 トレーニングの基礎（トレーニング機器の使用法）
- 3 トレーニングの実際（目的にあったトレーニング）
- 4 健康づくり運動の基礎（アイスブレイキング、仲間づくり）
- 5 健康づくり運動の展開 1（ストレッチ、身体のひずみチェック）
- 6 卓球の基礎（ルールの理解、サーブ、ラリー）
- 7 卓球の展開（リーグ戦 1）
- 8 卓球の展開（リーグ戦 2）
- 9 ウォーキングと自然観察
- 10 パークゴルフの基礎（ルールの理解、ゲームの進め方）
- 11 パークゴルフのゲーム 1
- 12 パークゴルフのゲーム 2
- 13 健康づくり運動の展開 2（ボールを使ったゲーム）
- 14 健康づくり運動の展開 3（伝承遊び）
- 15 総括と振り返り

○テニス

- 1 ガイダンス、種目選択、種目別ガイダンス、基本技術
- 2 基本練習(1)：グリップ、グラウンドストローク（フォア・バックハンド）
- 3 基本練習(2)：グラウンドストローク、サーブ、レシーブ、ボレー
- 4 基本練習(3)：グラウンドストローク、ドロップ、スマッシュ
- 5 基本練習(4)：グラウンドストローク、ロブ、ネットプレー
- 6 応用練習(1)：フットワーク、ボレー対ボレー
- 7 応用練習(2)：フットワーク、サーブアンドボレー
- 8 応用練習(3)：フットワーク、ダブルスのコンビネーション
- 9 試合1：試合の進め方、ルール説明、シングルス
- 10 試合2：シングルスリーグ戦
- 11 試合3：シングルスリーグ戦、ダブルスペアリング決定
- 12 試合4：ダブルスリーグ戦
- 13 試合5：ダブルスペアリング再編成
- 14 試合6：ダブルスリーグ戦
- 15 総括 試合の反省、授業の反省

○ストレッチメソッド

- 1 ガイダンス：種目選択、種目別ガイダンス（ストレッチの方法と効果について）
- 2 体を伸ばす(1)：仰向けの姿勢で縦に伸ばす、捻じる、反る
- 3 体を伸ばす(2)：コアを自在に操作する
- 4 体を伸ばす(3)：筋肉の構造特性に合わせる
- 5 体を伸ばす(4)：基部を固定する
- 6 体を伸ばす(5)：楽な姿勢でゆっくり伸ばす
- 7 体の芯をほぐす(1)：脊柱を動かしてほぐす
- 8 体の芯をほぐす(2)：骨盤を動かしてほぐす
- 9 体の芯をほぐす(3)：肩甲骨周りを動かしてほぐす
- 10 体の芯をほぐす(4)：股関節周りを動かしてほぐす
- 11 部位別メソッド(1)：首、肩、腕、手首
- 12 部位別メソッド(2)：胸、腹、体側
- 13 部位別メソッド(3)：背中、腰
- 14 部位別メソッド(4)：膝、太もも、脹脛
- 15 まとめ：体全体のつながり

成績評価の方法

身体運動の自主的・合理的な実践に主眼を置く
実践態度（80%）、技能（20%）

履修にあたっての注意

遅刻は、欠席扱いとなる場合がある
服装は運動を妨げないものを着用すること。（ジーンズは禁止）
靴は運動靴のみ（踵の高い靴、サンダル、スリッパは禁止）

授業のねらい

○卓球

様々なストレスにさらされている現代、健康で充実した毎日を過ごすためには、定期的な運動を実施することが精神的にも肉体的にも重要です。この授業では卓球についてその基本的技術を習得し、さらにゲームを通して皆と運動を楽しむ経験を積み重ねることにより、生涯に渡って積極的にスポーツに取り組む意欲を養います。

○軽スポーツ B

人間生活の基本としての健康・体力および身体運動の重要性を実践を通して認識し、生涯にわたる運動ならびにスポーツの生活化の習慣を図ることをねらいとする。

授業の展開はゲームを中心に、チームワークの重要性や協調性などを養いながら、技術の向上を目指していく。

○バドミントン

- ・シャトルコックの特性を知り、クリアー・ドライブ・スマッシュなどの基本的フライトをいろいろなストロークで打ちこなすことができる。
- ・ゲームを有利に進めるためディセプションやアンティシペーションなどの技術を身につけながら、ゲームの楽しさを知る。
- ・ハードな運動量をこなしながら、各種の体力の維持・増進を図る。
- ・生涯スポーツの習慣化を図る。

到達目標

○卓球

卓球の基本的な技術（フォアハンド打法・バックハンド打法・ドライブ打法など）およびゲーム（シングルス・ダブルス）の進め方を習得する。

○軽スポーツ B

基本技術の確認と習得、ゲームを通じての戦術習得。数種類のスポーツ経験によって、その面白さの再発見から、生涯スポーツの動機づけを行う。

○バドミントン

- ・シングルスゲームでは、ゲームを有利に進めるため、相手の体勢を崩しながらエラーを誘う積極的なプレーができる。
- ・ダブルスゲームでは、ペアと協力しながらうまくコートをかバーし、積極的にポイントするゲームの組み立てができる。

授業方法

○卓球

基本技術習得のため、前半はテーマを決めて練習方法を提示し全員で取り組みます。

シングルス、ダブルスのゲームルールの説明後はゲーム中心に授業を展開していきます。試合結果を毎週記録します。自己分析を行い、自らの目標を設定して授業に臨むこと。

○軽スポーツ B

各自のその日の体調に合わせながら基礎から徐々にメソッドのレベルアップを図っていきます。

○バドミントン

- ・シングルスは受講生が多い場合は実施しないこともある。
- ・ダブルスは抽選でペアを決め、一次リーグの結果により二次リーグも行う。
- ・団体戦は4チームを編成し、ダブルス・シングルの勝ち数で勝敗を決める。
- ・団体戦はトーナメント方式とする。

授業計画

○卓球

- 1 ガイダンス：種目選択、種目別ガイダンス（卓球と生涯スポーツについて）
- 2 基本姿勢：ラケット選択とグリップ、基本姿勢
- 3 基本的打法(1)：フォアハンド打法
- 4 基本的打法(2)：バックハンド打法
- 5 基本的打法(3)：ドライブ打法
- 6 基本的打法(4)：つつつき・カット打法
- 7 シングルスゲーム(1)：ゲームルール説明

- 8 シングルスゲーム(2)：スムーズなゲーム運び
- 9 シングルスゲーム(3)：ゲームのかけひき
- 10 シングルスゲーム(4)：様々な相手と楽しむ
- 11 ダブルスゲーム(1)：ゲームルール説明
- 12 ダブルスゲーム(2)：スムーズなゲーム運び
- 13 ダブルスゲーム(3)：ゲームのかけひき
- 14 ダブルスゲーム(4)：様々な相手と楽しむ
- 15 試合結果：最終結果を自己分析

○軽スポーツ B

- 1 ガイダンス、種目選択、種目別ガイダンス、パークゴルフの基本技術
- 2 パークゴルフ：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 3 バレーボール：基本練習（パス・トス・スパイク・レシーブ・サーブ）
- 4 バレーボール：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 5 バレーボール：ゲーム（リーグ戦）
- 6 バスケットボール：基本練習（パス・ドリブル・シュート）・簡易ゲーム
- 7 バスケットボール：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 8 バスケットボール：ゲーム（リーグ戦）
- 9 バドミントン：基本練習（クリアー・ドライブ・スマッシュ・ドロップ・ヘアピン）
- 10 バドミントン：ルール（シングルス・ダブルス）・ゲームの進め方・シングルスゲーム
- 11 バドミントン：ゲーム（ダブルスリーグ戦）
- 12 ミニテニス：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 13 ミニテニス：ゲーム（リーグ戦）
- 14 ドッチボール：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 15 総括：実施したゲームの反省、授業の反省

○バドミントン

- 1 ガイダンス 種目選択 種目別ガイダンス 基本技術
- 2 ストレッチ グリップの種類 ラケットに慣れる 各種フライト
- 3 サーブ・スマッシュ・ネットプレー
- 4 シングルスルール説明・審判法 シングルス簡易ゲーム
- 5 シングルスリーグ戦(1)
- 6 シングルスリーグ戦(2)
- 7 ペア編成 ダブルスルール説明 ダブルス審判法 ダブルス簡易ゲーム
- 8 ダブルス一次リーグ戦(1)
- 9 ダブルス一次リーグ戦(2)
- 10 ダブルス一次リーグ戦(3)
- 11 ダブルス二次リーグ戦(1)
- 12 ダブルス二次リーグ戦(2)
- 13 ダブルス二次リーグ戦(3) 団体戦チーム編成
- 14 団体戦 一回戦
- 15 団体戦 決勝 3・4位決定戦 アンケート

成績評価の方法

身体運動の自主的・合理的な実施に主眼を置く
実践態度（80%）、技能（20%）

履修にあたっての注意

遅刻は欠席扱いとなる場合がある
服装は運動を妨げないものを着用すること。（ジーンズは禁止）
靴は運動靴のみ（踵の高い靴、サンダル、スリッパは禁止）

授業のねらい

○卓球

様々なストレスにさらされている現代、健康で充実した毎日を過ごすためには、定期的な運動を実施することが精神的にも肉体的にも重要です。この授業では卓球についてその基本的技術を習得し、さらにゲームを通して皆と運動を楽しむ経験を積み重ねることにより、生涯に渡って積極的にスポーツに取り組む意欲を養います。

○軽スポーツ B

体力および身体運動の重要性を実践を通して認識し、生涯にわたる運動ならびにスポーツの生活化の習慣を図ることをねらいとする。

授業の展開はゲームを中心に、チームワークの重要性や協調性などを養いながら、技術の向上を目指していく。

○バドミントン

- ・シャトルコックの特性を知り、クリアー・ドライブ・スマッシュなどの基本的フライトをいろいろなストロークで打ちこなすことができる。
- ・ゲームを有利に進めるためディセプションやアンティシペーションなどの技術を身につけながら、ゲームの楽しさを知る。
- ・ハードな運動量をこなしながら、各種の体力の維持・増進を図る。
- ・生涯スポーツの習慣化を図る。

到達目標

○卓球

卓球の基本的な技術（フォアハンド打法・バックハンド打法・ドライブ打法など）およびゲーム（シングルス・ダブルス）の進め方を習得する。

○軽スポーツ B

基本技術の確認と習得、ゲームを通じての戦術習得。数種類のスポーツ経験によって、その面白さの再発見から、生涯スポーツの動機づけを行う。

○バドミントン

- ・シングルスゲームでは、ゲームを有利に進めるため、相手の体勢を崩しながらエラーを誘う積極的なプレーができる。
- ・ダブルスゲームでは、ペアと協力しながらうまくコートをかバーし、積極的にポイントするゲームの組み立てができる。

授業方法

○卓球

基本技術習得のため、前半はテーマを決めて練習方法を提示し全員で取り組みます。

シングルス、ダブルスのゲームルールの説明後はゲーム中心に授業を展開していきます。試合結果を毎週記録します。自己分析を行い、自らの目標を設定して授業に臨むこと。

○軽スポーツ B

各自のその日の体調に合わせながら基礎から徐々にメソッドのレベルアップを図っていきます。

○バドミントン

- ・シングルスは受講生が多い場合は実施しないこともある。
- ・ダブルスは抽選でペアを決め、一次リーグの結果により二次リーグも行う。
- ・団体戦は4チームを編成し、ダブルス・シングルの勝ち数で勝敗を決める。
- ・団体戦はトーナメント方式とする。

授業計画

○卓球

- 1 ガイダンス：種目選択、種目別ガイダンス（卓球と生涯スポーツについて）
- 2 基本姿勢：ラケット選択とグリップ、基本姿勢
- 3 基本的打法(1)：フォアハンド打法
- 4 基本的打法(2)：バックハンド打法
- 5 基本的打法(3)：ドライブ打法
- 6 基本的打法(4)：つつつき・カット打法
- 7 シングルスゲーム(1)：ゲームルール説明

- 8 シングルスゲーム(2)：スムーズなゲーム運び
- 9 シングルスゲーム(3)：ゲームのかけひき
- 10 シングルスゲーム(4)：様々な相手と楽しむ
- 11 ダブルスゲーム(1)：ゲームルール説明
- 12 ダブルスゲーム(2)：スムーズなゲーム運び
- 13 ダブルスゲーム(3)：ゲームのかけひき
- 14 ダブルスゲーム(4)：様々な相手と楽しむ
- 15 試合結果：最終結果を自己分析

○軽スポーツ B

- 1 ガイダンス、種目選択、種目別ガイダンス、パークゴルフの基本技術
- 2 パークゴルフ：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 3 バレーボール：基本練習（パス・トス・スパイク・レシーブ・サーブ）
- 4 バレーボール：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 5 バレーボール：ゲーム（リーグ戦）
- 6 バスケットボール：基本練習（パス・ドリブル・シュート）・簡易ゲーム
- 7 バスケットボール：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 8 バスケットボール：ゲーム（リーグ戦）
- 9 バドミントン：基本練習（クリアー・ドライブ・スマッシュ・ドロップ・ヘアピン）
- 10 バドミントン：ルール（シングルス・ダブルス）・ゲームの進め方・シングルスゲーム
- 11 バドミントン：ゲーム（ダブルスリーグ戦）
- 12 ミニテニス：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 13 ミニテニス：ゲーム（リーグ戦）
- 14 ドッチボール：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 15 総括：実施したゲームの反省、授業の反省

○バドミントン

- 1 ガイダンス 種目選択 種目別ガイダンス 基本技術
- 2 ストレッチ グリップの種類 ラケットに慣れる 各種フライト
- 3 サーブ・スマッシュ・ネットプレー
- 4 シングルスルール説明・審判法 シングルス簡易ゲーム
- 5 シングルスリーグ戦(1)
- 6 シングルスリーグ戦(2)
- 7 ペア編成 ダブルスルール説明 ダブルス審判法 ダブルス簡易ゲーム
- 8 ダブルス一次リーグ戦(1)
- 9 ダブルス一次リーグ戦(2)
- 10 ダブルス一次リーグ戦(3)
- 11 ダブルス二次リーグ戦(1)
- 12 ダブルス二次リーグ戦(2)
- 13 ダブルス二次リーグ戦(3) 団体戦チーム編成
- 14 団体戦 一回戦
- 15 団体戦 決勝 3・4位決定戦 アンケート

成績評価の方法

身体運動の自主的・合理的な実施に主眼を置く
実践態度（80%）、技能（20%）

履修にあたっての注意

遅刻は欠席扱いとなる場合がある
服装は運動を妨げないものを着用すること。（ジーンズは禁止）
靴は運動靴のみ（踵の高い靴、サンダル、スリッパは禁止）

授業のねらい

○卓球

様々なストレスにさらされている現代、健康で充実した毎日を過ごすためには、定期的な運動を実施することが精神的にも肉体的にも重要です。この授業では卓球についてその基本的技術を習得し、さらにゲームを通して皆と運動を楽しむ経験を積み重ねることにより、生涯に渡って積極的にスポーツに取り組む意義を理解し、意欲を養います。

○軽スポーツ B

人間生活の基本としての健康・体力および身体運動の重要性を実践を通して認識し、生涯にわたる運動ならびにスポーツの生活化の習慣を図ることをねらいとする。

授業の展開はゲームを中心に、チームワークの重要性や協調性などを養いながら、技術の向上を目指していく。

○バドミントン

- ・シャトルコックの特性を知り、クリアー・ドライブ・スマッシュなどの基本的フライトをいろいろなストロークで打ちこなすことができる。
- ・ゲームを有利に進めるためディセプションやアンティシペーションなどの技術を身につけながら、ゲームの楽しさを知る。
- ・ハードな運動量をこなしながら、各種の体力の維持・増進を図る。
- ・生涯スポーツの習慣化を図る。

到達目標

○卓球

卓球の基本的な技術（フォアハンド打法・バックハンド打法・ドライブ打法など）およびゲーム（シングルス・ダブルス）の進め方を習得する。

○軽スポーツ B

基本技術の確認と習得、ゲームを通じての戦術習得。数種類のスポーツ経験によって、その面白さの再発見から、生涯スポーツの動機づけを行う。

○バドミントン

- ・シングルスゲームでは、ゲームを有利に進めるため、相手の体勢を崩しながらエラーを誘う積極的なプレーができる。
- ・ダブルスゲームでは、ペアと協力しながらうまくコートをかバーし、積極的にポイントするゲームの組み立てができる。

授業方法

○卓球

基本技術習得のため、前半はテーマを決めて練習方法を提示し全員で取り組みます。
シングルス、ダブルスのルール説明後はゲーム中心に授業を展開していきます。試合結果を毎週記録します。自己分析を行い、自らの目標を設定して授業に臨むこと。

○軽スポーツ B

各自のその日の体調に合わせてながら基礎から徐々にメソッドのレベルアップを図っていきます。

○バドミントン

- ・シングルスは受講生が多い場合は実施しないこともある。
- ・ダブルスは抽選でペアを決め、一次リーグの結果により二次リーグも行う。
- ・団体戦は 4 チームを編成し、ダブルス・シングルス勝ち数で勝敗を決める。
- ・団体戦はトーナメント方式とする。

授業計画

○卓球

- 1 ガイダンス：種目選択、種目別ガイダンス（卓球と生涯スポーツについて）
- 2 基本：ラケット選択とグリップ、基本姿勢
- 3 基本的打法(1)：フォアハンド打法
- 4 基本的打法(2)：バックハンド打法
- 5 基本的打法(3)：ドライブ打法
- 6 シングルスゲーム(1)：ルール説明

- 7 シングルスゲーム(2)：スムーズなゲーム運び
- 8 ダブルスゲーム(1)：ルール説明
- 9 ダブルスゲーム(2)：スムーズなゲーム運び
- 10 ダブルスゲーム(3)：他の種目選択者とゲームを楽しむ
- 11 ダブルスゲーム(4)：他の種目選択者とゲームを楽しむ
- 12 シングルス・ダブルスゲーム(1)：リーグ戦を楽しむ
- 13 シングルス・ダブルスゲーム(2)：対戦希望相手とゲームを楽しむ
- 14 シングルス・ダブルスゲーム(3)：対戦したことのない相手とゲームを楽しむ
- 15 試合結果：最終結果を自己分析

○軽スポーツB

- 1 ガイダンス、種目選択、種目別ガイダンス、パークゴルフの基本技術
- 2 パークゴルフ：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 3 バレーボール：基本練習（パス・トス・スパイク・レシーブ・サーブ）
- 4 バレーボール：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 5 バレーボール：ゲーム（リーグ戦）
- 6 バスケットボール：基本練習（パス・ドリブル・シュート）・簡易ゲーム
- 7 バスケットボール：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 8 バスケットボール：ゲーム（リーグ戦）
- 9 バドミントン：基本練習（クリアー・ドライブ・スマッシュ・ドロップ・ヘアピン）
- 10 バドミントン：ルール（シングルス・ダブルス）・ゲームの進め方・シングルスゲーム
- 11 バドミントン：ゲーム（ダブルスリーグ戦）
- 12 ミニテニス：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 13 ミニテニス：ゲーム（リーグ戦）
- 14 ドッチボール：ルール・ゲームの進め方・ゲーム
- 15 総括：実施したゲームの反省、授業の反省

○バドミントン

- 1 ガイダンス 種目選択 種目別ガイダンス 基本技術
- 2 ストレッチ グリップの種類 ラケットに慣れる 各種フライト
- 3 サーブ・スマッシュ・ネットプレー
- 4 シングルスルール説明・審判法 シングルス簡易ゲーム
- 5 シングルスリーグ戦(1)
- 6 シングルスリーグ戦(2)
- 7 ペア編成 ダブルスルール説明 ダブルス審判法 ダブルス簡易ゲーム
- 8 ダブルス一次リーグ戦(1)
- 9 ダブルス一次リーグ戦(2)
- 10 ダブルス一次リーグ戦(3)
- 11 ダブルス二次リーグ戦(1)
- 12 ダブルス二次リーグ戦(2)
- 13 ダブルス二次リーグ戦(3) 団体戦チーム編成
- 14 団体戦 一回戦
- 15 団体戦 決勝 3・4位決定戦 アンケート

成績評価の方法

身体運動の自主的・合理的な実施に主眼を置く
実践態度（80%）、技能（20%）

履修にあたっての注意

遅刻は欠席扱いとなる場合がある
服装は運動を妨げないものを着用すること。（ジーンズは禁止）
靴は運動靴のみ（踵の高い靴、サンダル、スリッパは禁止）

40501

生物科学 A

担当教員：増田隆一

2 単位 前期

授業のねらい

◎生命現象を探る～分子から細胞へ

生物学は、生物の基本単位である細胞やその構成要素である生体分子について全生物に共通する現象を調べる「分子・細胞生物学」、そして、からだの構造機能や集団、種レベルの進化や生物多様性を調べる「多様性生物学」に大きくわけることができる。本授業では前者の分子・細胞生物学を中心に学ぶ。

到達目標

私たちのからだの中で生じている生命現象を、分子レベルでの反応、細胞レベルでの増殖や機能、遺伝様式などを通して理解できる。さらに、これらの基本的な生命現象の理解は栄養学、保育学の基盤となるのに加え、新型インフルエンザ、花粉症、エイズなどの疾患や遺伝子組換え食品、再生医療、放射能の生物への影響など、私たちの身のまわりで起きている種々の現象を正確に理解し判断する基礎となる。

授業方法

1 回につき下記の 1 項目の内容を取り上げ、主に講義形式により授業を進める。基礎から生物学を学べるように授業を進めるが、高校で生物を学んだ人も学ばなかった人も、予習と復習により積極的に取り組む必要がある。

授業計画

- 第 1 回 ガイダンス～生命とは何か？
- 第 2 回 細胞の構造
 - (1) 原核細胞と真核細胞
 - (2) 真核細胞の構造～細胞小器官
- 第 3 回 細胞の化学成分
 - (1) 水
 - (2) アミノ酸とタンパク質
- 第 4 回 細胞の化学成分
 - (3) 核酸 “DNA と RNA”
 - (4) 糖質
 - (5) 脂質
- 第 5 回 細菌とウイルス
- 第 6 回 生体内の化学反応
 - (1) 酵素反応
- 第 7 回 生体内の化学反応
 - (2) 同化～光合成
- 第 8 回 生体内の化学反応
 - (3) 異化～呼吸
- 第 9 回 細胞分裂～体細胞分裂と減数分裂
- 第 10 回 メンデルの遺伝の法則
- 第 11 回 染色体と遺伝子
- 第 12 回 遺伝情報の担い手 DNA とその複製
- 第 13 回 遺伝子の発現
- 第 14 回 遺伝子組換え技術、突然変異
- 第 15 回 細胞生物学のまとめ

成績評価の方法

毎回授業のはじめに、前回の授業で学んだ基礎的内容の理解を確認するため簡単な小テストを行う (50%)。また、生物学への興味を深めるための課題レポート 1 つ (50%) に取り組む。それらを合わせて総合的に評価する。期末試験は行わない。

履修にあたっての注意

さらに生物学の理解を深めるため、後期の「生物科学 B」(内容は多様性生物学) も履修することが望ましい。

教科書

高畑・増田・北田『生物学 [カレッジ版]』(医学書院、ISBN : 978-4-260-01704-6)
鈴木孝仁監修『視覚でとらえるフォトサイエンス 生物図録』(数研出版)

教科書・参考書に関する備考

生物学の基礎的内容を理解するため、上記の教科書を必ず準備してください。なお、教科書の前半を生物科学 A において、その後半を生物科学 B において使用します。

参考ホームページ

北大理学研究院遺伝的多様性研究室 <https://www.sci.hokudai.ac.jp/grp/lgd/genetics/index.html>

授業のねらい

◎生命現象を探る～個体から集団・種・生態系へ

生物学は、生物の基本単位である細胞やその構成要素である生体分子について全生物に共通する現象を調べる「分子・細胞生物学」、そして、からだの構造機能や集団、種レベルの進化や生物多様性を調べる「多様性生物学」に大きくわけることができる。本授業では後者の多様性生物学を中心に学ぶ。

到達目標

生物の生殖や器官機能、動物の行動、進化の多様性、生態系における生物相互の関係や自然環境との関係の多様性を理解できる。さらに、これらの生物多様性の理解は、栄養学、保育学の基盤となるのに加え、環境保全、絶滅危惧種の保全、地球温暖化、放射能の環境や生物への影響など、私たちの身のまわりの環境において起きている種々の現象を正確に理解し判断する基礎となる。

授業方法

1 回につき下記の 1 項目の内容を取り上げ、主に講義形式により授業を進める。基礎から生物学を学べるように授業を進めるが、高校で生物を学んだ人も学ばなかった人も、予習と復習により積極的に取り組む必要がある。

授業計画

- | | | |
|--------|-----------------|-------------------------------------------------------------|
| 第 1 回 | ガイダンス～生物多様性とは何か | |
| 第 2 回 | 生物の生殖 | 無性生殖と有性生殖 |
| 第 3 回 | 動物の受精と発生 | (1) 動物の配偶子の形成
(2) 動物の受精のしくみ |
| 第 4 回 | 動物の受精と発生 | (3) 動物の発生と細胞分化 |
| 第 5 回 | 動物の器官と機能 | (1) 恒常性の維持
(2) 呼吸系
(3) 消化系 |
| 第 6 回 | 動物の器官と機能 | (4) 循環系
(5) 免疫系
(6) 排出系 |
| 第 7 回 | 神経系と情報処理 | (1) 神経系のはたらき |
| 第 8 回 | 神経系と情報処理 | (2) 受容器 |
| 第 9 回 | 神経系と情報処理 | (3) 効果器 |
| 第 10 回 | 動物の行動 | |
| 第 11 回 | 進化と多様性 | (1) 生命の起源
(2) 進化のしくみ |
| 第 12 回 | 進化と多様性 | (3) ヒトの進化 |
| 第 13 回 | 生物と環境 | (1) 個体群の変動
(2) 異種間の関係
(3) 生態系、食物連鎖、物質循環 15 多様性生物学のまとめ |
| 第 14 回 | 地球環境とヒトとの共存 | |
| 第 15 回 | 多様性生物のまとめ | |

成績評価の方法

毎回授業のはじめに、前回の授業で学んだ基礎的内容の理解を確認するため簡単な小テストを行う (50%)。また、生物学への興味を深めるための課題レポート 1 つ (50%) に取り組む。それらを合わせて総合的に評価する。期末試験は行わない。

履修にあたっての注意

この授業は、分子・細胞レベルでの生命現象の理解に基づいて進めるので、前期の「生物科学 A」(内容は分子・細胞生物学) を履修しておくことが望ましい。

教科書

高畑・増田・北田『生物学 [カレッジ版]』(医学書院、ISBN : 978-4-260-01704-6)
鈴木孝仁監修『視覚でとらえるフォトサイエンス 生物図録』(数研出版)

教科書・参考書に関する備考

生物学の基礎的内容を理解するため、上記の教科書を必ず準備してください。なお、教科書の前半を生物科学 A において、その後半を生物科学 B において使用します。

参考ホームページ

北大理学研究院遺伝的多様性研究室 <https://www.sci.hokudai.ac.jp/grp/lgd/genetics/index.html>

授業のねらい

私達は、大気圏、水圏、地圏という環境に囲まれているが、人類活動により大気汚染、水質汚濁、土壌汚染といった公害問題や地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨といった地球環境問題が生じている。また外来生物や野生生物の保護といった生物圏の問題もある。このような種々の環境問題の現状と問題点を講義し、環境保全、自然保護についての知識を養う。

また、環境保全の取り組み、環境に配慮した生活を学び、社会の一員としての責任を自覚させる。

到達目標

- 1 人類活動による公害の歴史や現状及び対策について、実例をあげて論述することができる。
- 2 地球環境問題についての現状や対策について、実例をあげて論述することができる。
- 3 環境に配慮した生活、環境にやさしい暮らしを実践できるとともに地域のリーダーとして活躍することができる。

授業方法

毎回、資料を配布してその内容についてスライドや板書を使って講義する。ビデオ等の映像を利用する場合がある。授業計画の欄に「 」のキーワードを記す。新聞記事を利用した最新の環境に関する話題も取り入れるので、シラバスに多少の変更の可能性はある。小テストの実施により、時間の配分を変更することがある。

事前学習：「 」に記したキーワードについて、書籍などにより言葉の意味を調べて欲しい。

事後学習：授業の最後に課題を出す場合は、次回に提出してもらいます。

授業計画

- 第1回 イントロダクション（環境にやさしい暮らし）
「環境」とは、「環境科学とは」「公害（典型7公害）」とは、「地球環境問題」とは
- 第2回 大気圏（空気）
「大気の組成」、「大気の構造」、「空気の重さ」、濃度の単位（ppm など）
- 第3回 大気の世界
「一酸化炭素」、「二酸化硫黄」、「二酸化窒素」、「PM2.5」、「ダイオキシン類」など
外国の大気汚染都市
- 第4回 水圏（水質汚濁）
「足尾鋇毒事件」、「水俣病」、「人の健康の保護に関する項目」「富栄養化（赤潮、青潮）」、地下水汚染
- 第5回 水圏（上水道と下水道）
「飲み水の水質基準、硬水と軟水」、「おいしい水」、食品の「pH」、「イタイイタイ病」
- 第6回 化学物質
「洗剤」、「殺虫剤」、「化学繊維」、「農薬」
- 第7回 地圏（土壌汚染、地盤沈下）騒音・振動、悪臭
「土壌汚染物質」、音の単位 dB)、いやな臭い「悪臭物質」
- 第8回 食品や飲料水の汚染
「カネミ油症事件（PCB）」、「ヒ素ミルク事件」（東南アジアの井戸では？）
- 第9回 地球環境問題(1)
地球温暖化、砂漠化
「温室効果ガス」、「気候変動枠組み条約」、「京都議定書」、「パリ協定」
- 第10回 地球環境問題(2)
オゾン層の破壊、酸性雨
「ウィーン条約」、「モントリオール議定書」
- 第11回 自然環境関連(1)
美しい自然「自然公園」、嫌われる「外来生物」と保護される「絶滅危惧種」、「鳥獣保護法」
- 第12回 自然環境関連(2)
「生物多様性とは」、「ワシントン条約」、貴重な湿地「ラムサール条約」
- 第13回 エネルギー問題
「我が国のエネルギー構成」、「新エネルギー」（太陽光発電、風力発電、地熱発電、水素など）
- 第14回 廃棄物、ごみ問題
「一般廃棄物」・「産業廃棄物」、「各種リサイクル（自動車、家電、容器包装、食品など）」、「環境ラベル」、「SDGs」
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業の取り組み方（30%）、到達目標1及び2並びに講義キーワードに関する小テスト（50%）、到達目標3に関

連するレポート（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

第1回目の講義には必ず出席して下さい。
受講者自らが家庭生活、学校生活、地域社会の中で、どのような環境問題があるか興味をもってほしい。
新聞、テレビ、雑誌などによる環境関連ニュースなど環境情報に興味をもってほしい。

教科書・参考書に関する備考

毎回プリントを配布します。

参考書

都留重人『世界の公害地図』（岩波新書）
富永 健『地球が汚れている』（日本放送出版協会）

参考ホームページ

環境省ホームページ

授業のねらい

様々な授業を通して人間生活の多様な側面について学ぶ皆さんにとって、自らの内なる人間観を一貫性のあるものとしてゆっくりと深め、養うことはとても重要です。

この授業では、「人間」という存在を、その基本的な営みに照らして根本から捉えなおすことで、皆さんが自分なりの人間観を問いなおし、今後の学習と生活に活かすためのヒントを提示します。

到達目標

- 1) 「人間」についての従来の前提が今日、大きく揺らいでいる現実をふまえつつ、なお人間的であるとはどういうことかを問いなおす姿勢を獲得すること。
- 2) 人間社会の未来について、過度の楽観や悲観にとらわれることなく、厳しい現実の中で希望を紡ぐために何が必要かを主体的に考える思考態度を養うこと。

授業方法

講義形式を中心としますが、適宜、挙手や発言を通して授業に参加してもらいます。

また、毎回、授業の終わりに手短な感想やコメントを書いてもらい、それを次回の冒頭で紹介することで、問題関心の共有をはかります。

授業計画

- 第1回 序論
- 第2回 「人間」の境界線を問いなおす(1)人は本当に動物よりエライのか
- 第3回 「人間」の境界線を問いなおす(2)ロボットは人間になれないのか
- 第4回 衣食住の人間学的考察
- 第5回 仕事の人間学的考察
- 第6回 遊びの人間学的考察
- 第7回 祈りの人間学的考察
- 第8回 映画で学ぶ人間学(1)
- 第9回 ディスカッション(1)
- 第10回 戦争と平和の人間学的考察
- 第11回 共生と排除の人間学的考察
- 第12回 愛と孤独の人間学的考察
- 第13回 映画で学ぶ人間学(2)
- 第14回 ディスカッション(2)
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

レポート(60%)、授業への参加状況(40%)により評価する。

教科書・参考書に関する備考

授業の中で推薦図書を紹介します。

授業のねらい

この授業では、キリスト教的人間観を中心として、人間の内面性や命の問題等について考察してゆき、特に、現代の様々な社会問題を通して、家族関係のあり方や人と人との関わりを各自が見直し、人間らしく生きること、真の幸福、平和についてなどについて考えてゆく。

到達目標

1. 生きる目的をしっかりと持ち、社会の一員としてその役割を果たしてゆく意識を持つようになる。
2. 自分の能力を他者や自分の地域のために役立てることを学ぶ。
3. 価値観の構築や自立した人間になってゆく過程を意識し、自分らしさを追及する。

授業方法

講義の終わりに次回の内容を知らせ、事前に関係個所に目を通しておくように指示する。

また終了時に、その日の内容について確認する。

1回につき一つのテーマで講義を行う。そのテーマに関するビデオ・DVD等の資料やプリントを使い、進めてゆく。

授業計画

- 第1回 序論
- 第2回 人間関係について：映画などを使用して具体的に良い人間関係について考察する
- 第3回 人間関係について：自分について再考察することによって自分の傾向を知る
- 第4回 人間関係について：なぜ人間関係がうまくゆかないのか
- 第5回 人生を肯定的に生きるとは：絶望しないためには
- 第6回 カルトについて
- 第7回 愛について：愛の本質とは何か
- 第8回 自己を高めるためには
- 第9回 命の尊厳について
- 第10回 幸福とは何か
- 第11回 戦争問題について：アウシュビッツについて
- 第12回 戦争問題について：日本とアジアの諸外国との関係について
- 第13回 差別の問題について：ハンセン病患者の問題など
- 第14回 平和について考える：紛争の原因を探る 多様性について考える
- 第15回 まとめおよびQ & A
レポート提出

成績評価の方法

レポート（60%）、授業への参加状況（40%）により評価する。

履修にあたっての注意

授業に対して積極的に臨んでほしい。各自が問題意識を持ち、意見を述べること。私語を慎むこと。

教科書・参考書に関する備考

教員が作成したプリント等を使用する

参考書

- ミッチ・アルボム『モリー先生との火曜日』（NHK 出版、2004、ISBN：4140810076）
- V. E. フランクル『それでも人生にイエスと言う』（春秋社、1993、ISBN：4393363604）
- エーリッヒ・フロム『愛するということ』（紀伊國屋書店、1991、ISBN：4314005580）
- エーリッヒ・ショイルマン・岡崎照男訳『パパラギ』（立風書房、1981、ISBN：4651930077）

授業のねらい

心理とは、心の動きや変化、状態のことをいいます。私たちは、日常いろいろなことを感じたり考えたりしながら行動しています。そこにいつも心は関わってきますが、心は実際に目で見ることや触ることはできません。心理学は、実際に身体などで確認しにくい人間の心理や行動について科学的に研究する学問です。実験やデータを用いて客観的に考えていく態度が必要です。この授業では、まず、心理学の歴史をはじめ、さまざまな分野、領域を取り上げ、基礎的な知識を身につけていきます。その中で心理学的な見方や考え方を理解し、日常生活においての自分や相手の気持ちや行動の背景、そして社会のあり様を考える手がかりとして活用できることを目指します。

到達目標

心理学の基礎的な用語について理解、説明することができる。またそれについての自分の考えを述べるができるようになること。

授業方法

スライドや動画を示しながら主に講義形式で進めます。ワークや簡単な実験を取り入れることもあります。

授業計画

- 第1回 ガイダンス・心理学の歴史
- 第2回 認知・知覚 1
- 第3回 認知・知覚 2
- 第4回 行動・学習 1
- 第5回 行動・学習 2
- 第6回 人格・性格 1
- 第7回 人格・性格 2
- 第8回 社会・集団 1
- 第9回 社会・集団 2
- 第10回 発達 1
- 第11回 発達 2
- 第12回 発達 3
- 第13回 臨床 1
- 第14回 臨床 2
- 第15回 まとめ・テスト

成績評価の方法

試験（70%）、毎回の小レポート（30%）により総合的に判断します。

履修にあたっての注意

講義の中で適宜参考文献を紹介したり、ワークや簡単な実験を行うことがあります。積極的な取り組みを希望します。

教科書・参考書に関する備考

特に指定しない。資料は適宜配布します。

授業のねらい

人間生活学科、食物栄養学科、保育学科のいずれの学生であろうとも、日常生活において物事を数学的あるいは論理的にとらえることはとても重要です。授業では、日常的に現れる幾つかの数学の基本事項（事象）について解説し、数学の本質である論理的な思考法に慣れ、さらに論理的思考力を身につけることを目的とします。また、必ずしも生活には密着してはいないけれど、楽しめる「数独」や、数学的内容を実験的に興味深く確認できる「トポロジー」なども取り入れます。補足として、就職試験によく使われる SPI の問題演習も取り入れます。

到達目標

1. 日常的に、物事を数学的あるいは論理的にとらえて、理路整然と事象の説明が出来るようになる。
2. 各種の場合の数を計算することが出来、結果として各種の確率計算を自分の力でできるようになる。
3. 命題と論理、および各種証明法を学び、ある命題が正しいことを証明することが出来る。
4. 新しい数学、興味深い数学に触れて、難しいという先入観を持たずに数学に親しむことが出来る。

授業方法

主として、PC の画面をプロジェクターに投影して解説する講義形式により行います。

毎回、数学的基本事項の説明および例題の解法を解説し、授業の最後 20 分程度は、演習課題の解答演習の時間とします。演習課題への取り組み結果は成績評価に使われます。次回の講義の初めに演習問題の解答解説をし、その解答資料も配布します。その他、復習用演習課題（所要時間 45-90 分）も出されるのでやっておくこと。復習問題の模範解答資料は次回の講義の初めに配布します。

前半のまとめ小テストの答えは採点後に返却し、解答解説資料を配付しますが、後半のまとめ小テストについては試験終了後に解答解説資料を配付します。

授業計画

- 第 1 回 ガイダンス、数学的〔科学的〕なものの見方（歴史）
- 第 2 回 集合（部分集合、集合の演算、集合の要素の個数）
- 第 3 回 場合の数（「順列」および「組合せ」の計算法および応用）
- 第 4 回 確率(1)（「確率」の計算法および生活の中の確率）
- 第 5 回 確率(2)（条件付き確率など多少入った確率の計算）
- 第 6 回 命題（必要条件、十分条件、逆、待遇）
- 第 7 回 命題と論理（論理演算、真理値表）
- 第 8 回 前半のまとめと補足、小テスト
- 第 9 回 2 進数とブール代数（10 進数と n 真数の変換）
- 第 10 回 方陣（「魔方陣」、「数独」など）
- 第 11 回 証明法（3 段論法、背理法、数学的帰納法など）
- 第 12 回 SPI (1)（就職試験で問われる数理、方程式、集合、論理、確率など）
- 第 13 回 SPI (2)（就職試験で問われる数理、統計、推理、命題、図形など）
- 第 14 回 位相幾何学（トポロジー、メビウスの帯 = 折り紙と糊を使った実験）
- 第 15 回 講義全体のまとめと補足、小テスト

成績評価の方法

毎回の演習課題への取り組み結果（12 回分 60%）、主として到達目標 1 と 2 を測定する前半の小テスト（20%）、主として到達目標 3 と 4 を測定する後半の小テスト（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

高校までの数学履修履歴に強く影響を受けないように、これまで数学が苦手だった人にも興味を持てる内容にしたいと思います。

成績評価では毎回の演習課題を重要視するので、欠席をしないように。休んだ場合は、次の回に前回の授業資料と演習問題を受け取り、後日演習の答えを提出すること。なお、欠席は 3 回を超えると失格となります。

教科書・参考書に関する備考

毎回、授業資料をプリントして配布します。

授業のねらい

統計学は、

- ・ 取得したデータに基づいて集団の特徴や傾向を数値化する
- ・ 少数のデータからその背後にある膨大なデータを確率に基づき推測する

学問である。

たとえばスーパーで売られている野菜を高い・安いと判断する、天気予報を見て傘を持つかどうか考えるなど、私たちは日常的に統計に基づいた判断をしながら生活している。まずは統計が身近なものであり、種々の選択や決定に重要な役割を果たすことを理解してほしい。

統計は実験・研究分野はもちろんのこと、品質管理、生産管理、売上管理、成績管理などあらゆる実務分野で用いられる。また、ビッグデータブームの影響もあり、データ分析のできる人材への養成が高まっている。

しかし、統計学で扱われる複雑な数式は学生にとって興味を持ちにくく、時に学習意欲を減退させる。このため本講義では数学的な解説よりも、解析の目的を理解すること、結果の解釈ができることに重点を置く。統計計算については自習しやすいように Excel を利用する。

到達目標

1. 統計について理解し、Excel を用いて基本的な統計処理ができる
2. 統計結果の基本的な解釈ができる
3. 解析結果について適切な言葉や図で人に伝えることができる

授業方法

座学と、PC を用いた実習を並行して行う。

Excel 操作を行うので、入力、セルのコピーや移動などの基本操作、四則演算や基本的な関数計算（平均、最大値、最小値の算出）はできるようにしておくことが望ましい。

操作に時間がかかる場合は自宅での復習を推奨する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
授業の進め方、アセスメントチェック、統計学とは
- 第2回 データを見やすくまとめる
～度数分布表とヒストグラム
- 第3回 代表値とばらつき
～アベレージ、メジアン、モード、範囲、分散、標準偏差
- 第4回 Excel 操作
アベレージ、分散、標準偏差の計算
- 第5回 相関と回帰(1)
～多変量データとは、相関とは、相関係数と求め方、意味
- 第6回 相関と回帰(2)
～回帰直線とその意味、Excel でのデータ解析
- 第7回 確率・確率変数・確率分布
- 第8回 正規分布(1)
～正規分布の特徴と意味、標準化
- 第9回 正規分布(2)
～標準正規分布からわかること
- 第10回 ここまでの復習
- 第11回 母集団と標本集団
区間推定
- 第12回 t 検定(1)
～母平均・母比率の検定
- 第13回 t 検定(2)
～対応のある t 検定・対応のない t 検定
- 第14回 総復習と発表準備
～プレゼン準備
- 第15回 プレゼン発表会

成績評価の方法

到達目標 1、2 を測定する試験（50%）、到達目標 3 を測定するプレゼンテーション（25%）、授業への主体的参加状況（25%）により評価する。

履修にあたっての注意

休まずに出席してください。
授業中、Excel 操作でわからないところは遠慮なく質問してください。

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作製したプリントを使用。授業時に（もしくは本学ポータルサイトの「講義連絡」等を通して PDF 形式で）配布する。

参考書については必ずしも入手する必要はないが、興味があれば手にとっていただきたい。

参考書

景山 三平『事例でわかる統計シリーズ 教養のための統計入門』（実教出版、2016、ISBN：978-4-407-33284-1）

高橋 信『マンガでわかる統計学』（オーム社、2004、ISBN：978-4274065705）

西岡 康夫『単位がとれる統計ノート』（講談社サイエンティフィク、2004、ISBN：978-4-06-154457-4）

参考ホームページ

ハンバーガーショップで学ぶ楽しい統計学 <http://kogolab.chillout.jp/elearn/hamburger/>

授業のねらい

元素や化学物質などの性質についての化学的基礎を講義する。日常生活において、種々の元素や化学物質が利用されていることを意識させる。

化学物質の利用が我々の生活に利便性をもたらす半面、環境に影響を与えている場合があることを認識させる。エネルギー（電池など）や食品加工の分野でも化学の役割を認識させる。

化学の得意でない受講者にも理解できるように身近な事例を示しながら講義する。

到達目標

- 1 周期表のある元素について、その物質の性質や特徴を説明でき、我々の生活にどのように利用されているか具体的に説明できる。
- 2 食品加工において、化学がどのような役割を果たしているか具体的に説明できる。
- 3 我々が使用する化学物質などが環境にどのような影響を与えているか具体的事例をもとに説明できる。

授業方法

毎回、資料を配布してその内容について、スライドや板書を使って講義する。ビデオ等の映像を利用する場合もある。

授業の欄に「 」のキーワードを記す。新聞記事を利用した最新の話題も取り入れるので、シラバスに多少の変更の可能性はある。小テストの実施により、時間の配分を変更する場合がある。

事前学習：「 」に記したキーワードについて、書籍などにより言葉の意味を調べておいて欲しい。

事後学習：授業の最後に課題を出す場合は、次回に提出してもらいます。

授業計画

- 第1回 「環境」と「化学」のイントロダクション（私達の生活と化学）
「周期表」、「化学の日」、「紫外線」、「赤外線」
- 第2回 原子の構造
「水素」、「ヘリウム」、「核融合」、「空気の成分」、「大気構造」
- 第3回 酸性、アルカリ性と香り（臭い）
「pH（水素イオン濃度）」、「酸性雨」、「濃度の単位（ppm）」、「吸着」
- 第4回 燃料と燃焼反応
「炭素」、「窒素」、「酸素」
- 第5回 金属類
「金」、「銀」、「銅」、「鉄」、「アルミニウム」、「クロム」、「鉛」、「亜鉛」
- 第6回 生活必需品
「フッ素」、「ナトリウム」、「塩素」、「りん」、「マグネシウム」
- 第7回 化学結合と染み、浄水方法と水道水質基準
「化学結合」、「染み」、「沈殿」、「凝集」、「ろ過」、「水道水質基準」
- 第8回 公害病と食品公害
「イタイイタイ病」、「水俣病」、「カネミ油症事件（PCB）」、「森永ヒ素ミルク中毒事件」、「生体濃縮」、「食物連鎖」
- 第9回 化学物質
「フロン」、「ハロン」、「合成洗剤」、「農薬」、「虫除けスプレー」、「VOC とシックハウス」
- 第10回 食品、食器にはこのようなものが
「イオウ」、「カリウム」、「カルシウム」、「ヨウ素」、「ホウ素」、「チタン」
- 第11回 地球環境問題
「地球温暖化」（CO₂、CH₄、N₂O、SF₆、HFC、PFC）、「オゾン層の破壊」、「砂漠化」、「生物多様性」
- 第12回 エネルギー
「日本のエネルギー構成」、「新エネルギー（太陽光発電、地熱発電、風力発電など）」、「原子力（核分裂）」、「ウラン」
- 第13回 電池
「リチウム電池」、「アルカリ電池」、「マンガン電池」、「水銀電池」、「鉛バッテリー」
- 第14回 廃棄物と都市鉱山
「焼却処理とダイオキシン類」、「3 R（Reduce、Reuse、Recycle）」、「都市鉱山」
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業の取り組み方（40%）

到達目標 1 及び 2 並びに講義キーワードに関連する小テスト（40%）

到達目標 3 に関連するレポート（20%）により評価する。

教科書・参考書に関する備考

毎回プリントを配布します。

参考書

田中春彦『環境と人にやさしい化学』（培風館）

授業のねらい

寒冷地の生活に主に関わる、寒さと雪や氷の本質を理解すること。また、これまで培われてきた寒冷地の生活や文化を学習し、寒冷地でより快適な、より楽しい生活を送ることを考える。

到達目標

寒冷地での寒さ、気候、環境の仕組みを理解する。寒冷地での生活に関わる事象について知り、寒冷地で、より快適な、より楽しい生活を送るアイデアを考えることができる。

授業方法

講義形式で行う。具体的な事象については、映像や模擬実験を通して解説する。
また、授業内で理解度を確かめるための小テストを行う。
授業中にレポート課題を出す。レポートの内容について、授業終盤でディスカッションをする。
資料等は適宜配布する。

授業計画

- 第1回 講義の概要の説明、寒冷圏とは何か？
- 第2回 寒冷圏の気候と地球環境問題 1
札幌と北海道の気候と環境
- 第3回 寒冷圏の気候と地球環境問題 2
地球の気候の仕組み 1 水の惑星「地球」
- 第4回 雪と氷と生活 1
世界の気候と寒冷圏の気候風土
- 第5回 雪と氷と生活 2
寒冷地の住宅
- 第6回 雪と氷と生活 3
寒冷地の衣料
- 第7回 雪と氷と生活 4
グリーンランドの生活と社会
- 第8回 雪と氷と生活 5
雪氷災害と対策
- 第9回 雪と氷と生活 6
雪と教育、雪を楽しむ
- 第10回 雪の観測とフィールドワーク 1
氷河上での生活と観測、グリーンランドの村を尋ねて
- 第11回 雪の観測とフィールドワーク 2
氷河でのフィールドワークとジェンダーの関わり
- 第12回 寒冷圏の気候と地球環境問題 3
地球の気候の仕組み 2 地球温暖化とは何か
- 第13回 寒冷圏の気候と地球環境問題 4
地球の気候の仕組み 3 地球の環境変動史
- 第14回 寒冷圏の気候と地球環境問題 5
日本や世界でおきている環境変化
- 第15回 寒冷圏で生活すること
レポートの内容についてディスカッション

成績評価の方法

授業への参加状況（40%）、授業内容の理解度（小テスト）（30%）、授業中に課題を出すレポート（30%）

教科書・参考書に関する備考

授業で紹介した内容を、更に詳しく知りたい人のための参考書を授業中に紹介します。

授業のねらい

アリストテレスが「すべての人間は生まれつき知を欲する」と述べたように、哲学とは「知」を「愛する」営みです。哲学が求める知は、必ずしも実用的な知や娯楽や気晴らしなどの何かの役に立つ知ではありませんが、深く知ることによってそういった日常的な思考に変革が生じるような知です。本講義では哲学が求める「知」の主要なトピックをいくつか取り上げ、それについての哲学者の説を紹介し、受講者の皆さんの身近な問題と関連させつつ自由にディスカッションしたいと思います。

到達目標

- ・哲学が扱う問題が世界や人間についての根本的な知であると同時にそれが私たちがごく身近な問題でもあることを理解する。
- ・自分の身近な問題や日頃素通りしている当り前の事柄を改めて批判的に再考することができるようになる。
- ・自分の考えをできるかぎり正確に言葉にできるようになる。

授業方法

講義形式です。

毎回の復習に1～2時間程度、期末レポートの作成に10～15時間程度を要すると思われる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 哲学と人間学
- 第3回 哲学と人間学(2)
- 第4回 哲学と論理学
- 第5回 哲学と論理学(2)
- 第6回 哲学と自己－自分って何？
- 第7回 哲学と自己－自己と他者
- 第8回 哲学と倫理学
- 第9回 哲学と倫理学(2)
- 第10回 哲学と性差－男女平等って何？
- 第11回 哲学と幸福－幸福って人それぞれなの？
- 第12回 哲学と自由
- 第13回 哲学と自由(2)
- 第14回 哲学と社会
- 第15回 哲学って何してるの？

成績評価の方法

毎回のリアクションペーパーの記入（20%）、授業への参加（20%）、期末レポート（60%）

履修にあたっての注意

授業で感じた疑問はなるべく授業中に質問すること。

授業で感じた疑問点をなるべく早い段階で明確にし期末レポートに備えること。

履修にあたって哲学やその他学科の予備知識は必要としません。

教科書・参考書に関する備考

資料はコピーして教室で配布します。参考書等はそのつど教室で指示します。

授業のねらい

この講義では、倫理学の代表的思想家を取り上げ、それぞれの立場や意義を紹介し、「倫理的に生きる」とはどのようなことかについて、各人が自分なりの考えをもつことを目指します。

到達目標

1. 倫理学の基本的な理論について、知識を身につけ、説明できるようになること。
2. 具体的な倫理的問題について、自分の考えを述べられるようになること。

授業方法

毎回配布するレジュメと資料にもとづいて、それぞれの倫理学者の学説を古代、近代、現代の順で取り上げ、講義形式で説明していきます。

毎回の授業の終わりに、自分の考えや質問を書いた小レポートを提出してもらいます。また、前回の授業内容を復習し、不明な点も質問してください。参考文献をそのつどの講義で紹介するので、自分でも参照するよう努めてください。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：倫理学とはどのような学問か
- 第2回 ソクラテス：「善く生きること」と幸福
- 第3回 プラトン：善のアイデアと哲人政治
- 第4回 アリストテレス：「共同で生きること」と幸福
- 第5回 シノペのディオゲネス：世界市民の理想と奴隷制批判
- 第6回 エピクロス：快樂主義
- 第7回 ストア派：禁欲主義
- 第8回 ホッブズ：欲望と自己保存
- 第9回 ジョン・ロック：所有と統治
- 第10回 ヒューム：共感と黙約
- 第11回 アダム・スミス：共感と「公平な観察者」
- 第12回 ルソー：自由と一般意志
- 第13回 カント：自由と義務
- 第14回 ベンサムとJ・S・ミル：「最大多数の最大幸福」
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標1を測定する期末試験（70%）、到達目標2を測定する小レポート（30%）により評価します。

履修にあたっての注意

板書を多用するので、ノート、筆記用具を忘れずに。

教科書・参考書に関する備考

教科書は使用しません。講義中に適宜プリントを配布します。

授業のねらい

複雑・多様化する社会において、人間社会の最低限のルールとしての憲法やその中核をなす人権の基礎知識を身につけることを目指す。本講義では、憲法を基礎とするわが国の法制度の中で、現代に起きている様々な「人間」ないしは「個人」が問われる問題を扱いつつ、上記の目的を達したいと考える。

到達目標

日本国憲法の基本理念—立憲主義、個人主義について理解する。

授業方法

当授業は講義形式で進める。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 憲法概念と立憲主義(1)－「憲法」とは？
- 第3回 憲法概念と立憲主義(2)－さまざまな憲法と立憲主義
- 第4回 立憲主義と現代の諸問題
- 第5回 憲法改正問題
- 第6回 人権とは
- 第7回 人権の種類
- 第8回 人権の制約
- 第9回 人権の享有主体
- 第10回 人権の私人間効力(1)－公法としての憲法・人権
- 第11回 人権の私人間効力(2)－「公序良俗」と人権の間接適用説
- 第12回 人権の本質と新しい人権(1)－新しい人権とは（内容、例、要件）
- 第13回 人権の本質と新しい人権(2)－新しい人権が内包する問題性
- 第14回 まとめ
- 第15回 試験とまとめ

成績評価の方法

授業の内容や進度に応じて、適宜課題を課す。この課題は、授業で学んだ基礎知識の理解度を問う、いわゆる小テスト形式のもの、授業で扱う諸問題やテーマについての各自の意見や感想を問う形式のものなどを予定している。

これらの課題を平常点（20％）とし、期末に考査をおこない考査の成績（80％）に加味して評価する。

履修にあたっての注意

講義形式ではあるが、受け身で臨まないこと。必要以上に難しく考える姿勢を廃し、まず、講義内容を素直に聞き取ることが心がけるとよい。その上での批判や質問を歓迎する。

参考書

葛生栄二郎他『平和と人権の憲法学』（法律文化社、2011年）

授業のねらい

日本国憲法に関する基礎知識を習得することによって、憲法をめぐる基本的な問題についての理解を深めること、現代社会の法的諸問題に対する一定の視座を獲得することを目指します。

到達目標

講義後に参考テキストを読み返して大まかな内容が独力で理解できるようになること、憲法に根ざした法的思考力を養うことが目標です。

授業方法

受講生には毎回配布する質問票と自身のノートを同時に作成しながら聴講することが求められます。代表的な質問については、次回の講義の冒頭で可能な限り紹介・応答し、双方向的なコミュニケーションを重視した授業を行います。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 なぜ憲法を学ぶのか
- 第3回 〈法〉とは何か
- 第4回 民主主義とは何か
- 第5回 立憲主義とは何か
- 第6回 憲法を支える諸価値について
- 第7回 前半のまとめ
- 第8回 憲法が保障する人権とは何か
- 第9回 憲法は私人間において効力をもつのか
- 第10回 自由権とは何か
- 第11回 憲法と宗教をめぐる問題について
- 第12回 表現の自由はどこまで許されるのか
- 第13回 憲法が保障する経済的自由と財産権について
- 第14回 後半のまとめ
- 第15回 これまでのまとめ

成績評価の方法

毎回配布する講義についての質問票（30%）及び試験（70%）によって評価をします。

履修にあたっての注意

覚えようとするのではなく、理解するように心掛けること（インプット）、理解したことを言葉として表現するよう心掛けること（アウトプット）を心がけてください。なお、授業計画は進度の目安です。受講生の問題関心や理解度に応じて適宜進度調整を行い、柔軟に対応していく予定です。

教科書

岡田信弘『憲法のエチュード第3版』（八千代出版、2012、ISBN：978-4842915869）
池田真朗・宮島司・安富潔・三上威彦・三木浩一・小山剛・北澤安紀『法学六法「18」』（信山社、2017、ISBN：978-4797257489）

教科書・参考書に関する備考

教科書・参考書を補う「法の力」を理解するための視聴覚資料として、周防正行監督・脚本による映画、『それでもボクはやってない』をお勧めします。

参考書

田村理『僕らの憲法学—「使い方」教えます』（ちくまプリマー新書、2008、ISBN：978-4480687760）
笹田栄司・原田一明・山崎友也・遠藤美奈『トピックからはじめる統治制度』（有斐閣、2015、ISBN：978-4641131880）

授業のねらい

法概念と基礎理論の習得をする。具体的には以下のとおり。

- ・法の観念について学び、法学の基本的視点にとって必要な考え方を把握する。
- ・社会生活における法的作用や役割について現代社会において特に重要であると思われる事項に触れる。
- ・憲法を基本としたわが国の法の基本価値を視野に入れ、民法及び行政法等の国法の重要なポイント等に触れる。

到達目標

法の観念や法学の基本的視点にとって必要な考え方を把握することができる。

授業方法

当授業は講義形式で進める。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 法とはなにか
- 第3回 法概念と種類(1)－法と強制
- 第4回 法概念と種類(2)－法源、法律の概念など
- 第5回 法の歴史(1)－古代～中世
- 第6回 法の歴史(2)－近世・近代
- 第7回 法の歴史(3)－現代の法
- 第8回 大陸法と英米法
- 第9回 公法と私法(1)－概説
- 第10回 公法と私法(2)－各論
- 第11回 諸法をめぐる現代的な諸問題(1)－裁判と法
- 第12回 諸法をめぐる現代的な諸問題(2)－メディアと法
- 第13回 諸法をめぐる現代的な諸問題(3)－その他
- 第14回 まとめ
- 第15回 試験とまとめ

成績評価の方法

授業内容や進度に応じて、適宜課題を課す。この課題は、授業で学んだ基礎知識の理解度を問う、いわゆる「小テスト」形式のもの、授業で扱う諸問題野テーマについての各自の意見や感想を問う形式のものなどを予定している。

これらの課題を平常点（20％）とし、期末に考査をおこなう。考査の成績（80％）に加味して評価する。

履修にあたっての注意

講義形式ではあるが、受け身で臨まないこと。法学に関しては初学者の人が多いと思うが、必要以上に難しく考える姿勢を廃し、まず、講義内容を素直に聞き取ることを心がけるとよい。その上での批判や質問を歓迎する。

教科書・参考書に関する備考

ただし、必要に応じてプリントを補足教材として配布することがある。

授業のねらい

民法は、日常生活のルールを法として定めたものです。まず人とは、行為とは何かを定め（民法総則）、財産に関するルール（物権、債権）を定め、家族に関するルール（親族・相続）を定めています。この授業では、民法総則から人、行為、契約に関する部分に簡単に触れ、そのあと家族の問題について話を進めます。総則の部分では、日常生活に関する基本ルールを理解することを目指します。家族の部分では現在の家族問題を考える上で必要な知識をえることを目指します。

到達目標

生活の基本ルールを身につける。
家族問題を考えることができる。

授業方法

基本的には講義形式で進めます。受講生の数によっては、討論形式の授業を取り入れます。FSTATIONを通して事前にファイルを配信するので、授業前に該当する部分を読んでおくこと。

授業計画

- 第1回 ガイダンス（民法とは、民法の基本原則）
- 第2回 人（権利の主体）
- 第3回 民法という行為とその問題
- 第4回 契約とは何か
婚姻契約
相続契約
- 第5回 家族とは何か
- 第6回 夫婦の成立
- 第7回 夫婦の破綻
- 第8回 子ども
- 第9回 親権、扶養義務など
- 第10回 親子関係をめぐる問題
- 第11回 相続とは何か
- 第12回 相続（効力など）
- 第13回 相続（遺言など）
- 第14回 相続をめぐる問題
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

出席率によって受験資格を認め、有資格者に対してはレポート試験で評価する。(100%)

40331

経済学

担当教員：内田 博・金 仁子・八森美穂

2単位 前期

授業のねらい

この授業では、現代社会の経済的側面について理解を深めるとともに社会や経済を見る眼を養うことを目指す。

到達目標

自分の生活を労働、収入、消費といった経済的な枠組みで理解できる。
原子力や環境といった生活から離れた領域も、生活と関らせて理解できる。

授業方法

第1部～第3部の進行に応じて、高校に近い授業形式から大学の授業形式に移行する。
第1部：講義形式を中心にコメントシートの作成を求める
第2部：講義形式、毎回の講義の最後にワークを行う
第3部：講義形式

授業計画

- 第1部生活経済
第1回 ガイダンス
第2回 経済のしくみを知る：資本主義と市場経済
第3回 さまざまな経済主体：政府・企業・家計
第4回 家計を知る(1)所得と労働
第5回 家計を知る(2)消費
第6回 家計を知る(3)貯蓄：保険と年金
第7回 生活経済のまとめ
第2部原子力経済
第8回 マンハッタン計画と「原子力収容所」と原子力の平和利用
第9回 核燃料サイクル構想とプルサーマル計画の現状
第10回 石油危機と地球温暖化と原発依存
第11回 3.11と脱原発の展望；青森県六ヶ所村＝「核のゴミ箱」を考える
第3部環境経済
第12回 環境と経済：環境経済学の誕生と考え方
第13回 開発と環境：地球環境の変化と経済活動
第14回 環境と情報：環境をめぐる情報公開とその課題
第15回 持続可能な社会の構築と経済学

成績評価の方法

- 第1部 授業態度 40% + 小テスト 40% + レポート 20%
第2部 ワーク 50% + レポート 50%
第3部 レポート 100%

履修にあたっての注意

他の学生の授業参加の障害となるような行為は厳禁

教科書・参考書に関する備考

資料を用意する

授業のねらい

この授業は、社会学的研究に関心を持つ人を対象に、これまで社会学という学問領域で蓄積されてきた基本的な知識を紹介・解説していくことを通じて「社会学とは何か」「社会学ではどのようなことが問題とされているのか」「社会学ではどのような方法で社会現象を分析するのか」といったことについての理解を深めてもらうことを目的としています。それらは、社会学的研究において必要な知識・知的技能の一部であり、いわば「大学で社会学を学ぶ」ということの「入り口に立つ」と言い換えることもできるでしょう。

また、この授業は社会福祉士国家試験受験資格取得に必要な科目（社会福祉士法に定められている指定科目「社会理論と社会システム」に対応）でもあり、上記の資格取得を希望する人も対象に含まれます。したがって、国家試験の受験へと向けて、各々で今後の自学自習を進めていく上で、最低限必要となる知識を習得してもらうことも重要な目的の一つとしています。そのため、授業の中では特に社会学で用いられる「用語の意味」や、その「用法」についての解説に重点を置きながら進めていくことを予定しています。

到達目標

到達目標 1：

以下の諸項目について、社会学の領域においてどのような社会現象が問題（issue）として取り上げられているかを把握し、そうした社会現象について議論が展開される際に用いられる基本的な用語の意味や用法を理解する。

(1). 基礎的な社会理論と現代社会の捉え方

（キーワード：社会の概念、社会システム、社会変動、人口、社会階層、規範、価値、地域及び都市、社会集団、組織、機能）

(2). 日常と社会の関係

（キーワード：ジェンダー、家族、ライフコース、地域社会、集団と個人との関連性）

(3). 個人と社会の関係

（キーワード：社会的行為、社会的役割、相互行為、社会的ジレンマ）

(4). 社会問題の存在とその背景

（キーワード：貧困、差別、格差、犯罪、自殺、児童虐待、逸脱行為）

到達目標 2：

現代における様ざまの社会現象について、授業で学んだ視点や用語を用いながら説明を与えることができるようにする。

授業方法

講義の進め方について：

本講は、基本的に講義形式で進めていきます。各回に設定したテーマについて授業担当者が資料を準備し、それを用いて講義を行うというかたちをとります。

各回講義の課題とフィードバックについて：

各回授業の最後に、それぞれのテーマに合わせた問題（社会福祉士国家試験の過去問などを使用）を出題し、それを事前・事後課題（それぞれ5～10問、所要時間60分程度）として課します。各課題で出題された問題については、授業内で口頭で解説を行い、必要に応じて適宜資料を作成・配布することとします。

また、上記課題の成果、および講義内容の理解度を確保するという目的から、授業時間内に計2回の小テストを実施することを予定しています。

最終課題のレポートでは、授業担当者の提示した社会現象の中から、各自関心のあるものを1つずつ取り上げてもらい、授業で学んだ視点・知識を用いながら考察に取り組んでもらいます。具体的なレポート課題の詳細については、早い段階（6月中）に告知し、その後、各自のペースで執筆を進めてもらうこととします。執筆の方法・内容にあたっての質問・相談がある場合については、オフィスアワーを利用して個別に相談してもらい、最終提出へと向けた準備に取り組んでもらいます。

授業計画

- 第1回 社会学とは何か
- 第2回 日常と社会システム
- 第3回 人口変動と社会変動
- 第4回 ジェンダーの概念
- 第5回 家族理論と現代の家族
- 第6回 社会生活とライフコース
- 第7回 都市と地域社会
- 第8回 社会的行為と役割
- 第9回 経済・労使関係
- 第10回 日本社会
- 第11回 社会集団と組織
- 第12回 社会問題の捉え方

-
- 第13回 グローバル化以後の新しい社会現象
第14回 社会学理論のまとめと補論
第15回 過去問研究と期末課題に関する質疑応答

成績評価の方法

授業時間内に実施する小テスト（「到達目標1」に対応、評価全体の40%に相当）、学期末のレポート課題（「到達目標2」に対応、評価全体の30%に相当）、および授業への参加状況（評価全体の30%に相当）を総合し、最終的な評価を行います。

教科書

社会福祉士養成講座 編集委員会『新・社会福祉士養成講座3 社会理論と社会システム（第3版）』（中央法規出版、2014、ISBN：978-4-8058-3930-0）

教科書・参考書に関する備考

参考書については、授業で直接使用することはありません。しかし、講義内容の理解を深める上では、事前・事後学習用に購入されることをお勧めします。

参考書

櫻井義秀・飯田俊郎・西浦功編著『アンビシャス社会学』（北海道大学出版会、2014、ISBN：978-4-8329-6793-9）

授業のねらい

文学作品に内包された時代性や生活背景に注目しながら読むことを通して、文学作品を読むことが自らの生活や価値観に結びついていることを理解する。文学作品を身近なものとして親しむ態度を身に付ける。

到達目標

- ①文学作品を自らの生活と結びつけながら読むことができる。
- ②文学作品を通して、現代につながる個人の価値を考えることができる。

授業方法

講義形式を中心としながら、一部、グループ学習を取り入れる。事前に読んでおくべき作品については、随時指示をする。

授業計画

- 第1回 ガイダンスー作品を読むことの楽しみ
- 第2回 「桃太郎」(1)ー民話としての「桃太郎」
- 第3回 「桃太郎」(2)ー教科書・教材としての「ももたろう」
- 第4回 「おおきなかぶ」(1)ーロシア民話「おおきなかぶ」にみる生活
- 第5回 「おおきなかぶ」(2)ー教科書に掲載される2つの「おおきなかぶ」
- 第6回 二葉亭四迷「浮雲」(1)ー作品の読み取り
- 第7回 二葉亭四迷「浮雲」(2)ー挿絵、言文一致
- 第8回 樋口一葉「たけくらべ」(1)ー作品の読み取り
- 第9回 樋口一葉「たけくらべ」(2)ー明治期の女性作家
- 第10回 泉鏡花「X 螻蛄鉄道」(1)ー作品の読み取り
- 第11回 泉鏡花「X 螻蛄鉄道」(2)ー明治期の生活と女性の生き方
- 第12回 角田光代「空中庭園」(1)ー作品の読み取り
- 第13回 角田光代「空中庭園」(2)ー「空中庭園」にみる家族
- 第14回 角田光代「空中庭園」(3)ー文学作品と映像表現
- 第15回 まとめー近代社会の成立と文学

成績評価の方法

最終レポート(70%)、授業への参加状況(30%)により評価する。

教科書・参考書に関する備考

授業時は適宜、資料を配付する。参考書についても授業時に指示する。

授業のねらい

英語圏の（短編）小説 2、3 編を読むが、そこで検討の対象となり得る事項を概観することから始める。その他にも、英米でよく知られている小説やテキストの一部を紹介することで、様々な作品に触れるきっかけとなるようにする。

到達目標

1. 小説を読む際、ストーリー以外にどのような事柄に目を向けることができるかを学ぶ。
2. （短編）小説 2、3 点に焦点を当て、それを 1. との関連において考察する。
3. 英米の作家や作品を幅広く知り、2. の他にも関心を広げる。

授業方法

小説で用いられる技法とその例を中心に、以下の予定にそって講義を行います。
事前事後学習に要する時間の目安は週 1 時間未満ですが、コメント・シート提出時はその作成に 2～3 時間以上を要します。代表的なコメントは授業時に紹介し、フィードバックを行います。

授業計画

- 第 1 回 オリエンテーション
- 第 2 回 小説の歴史
- 第 3 回 リアリズム、モダニズム、ポストモダニズム
- 第 4 回 小説のサブジャンル
- 第 5 回 タイトル、書き出し
- 第 6 回 構成
- 第 7 回 登場人物、名前
- 第 8 回 語り(1)
- 第 9 回 語り(2)
- 第 10 回 視点
- 第 11 回 イメージ・シンボル
- 第 12 回 結末、テーマ
- 第 13 回 アダプテーション
- 第 14 回 批評的なアプローチ
- 第 15 回 コメントの紹介とフィードバック、及び小テスト

成績評価の方法

到達目標 1 については通常の授業への取り組みと小テストの結果（70%）、2、3 についてはコメント・シートの提出（2 回、30%）により、総合的に評価します。

履修にあたっての注意

単位の修得には一定以上の出席率を要します。（欠席は 3 回以下であることが望ましい。また遅刻 2 回で欠席 1 回とみなします）

教科書・参考書に関する備考

毎週プリントを配布します。

参考書

Jeremy Hawthorn 『Studying the Novel (7 th ed.)』 (Bloomsbury、2016、ISBN : 978-1472575111)

授業のねらい

『ルネッサンスから現代アートまで』

イタリアで興ったルネッサンスは世界の芸術の基盤となり、現代のアートを創りだした。私たちの身の回りには世界的なアートが案外気づかれず存在し、また生活と密着したアートも多く存在している。知らなければ何も見えない、少し関心を持つだけで、素晴らしいものが見えてくることに好奇心が持てるように。

到達目標

美術に関心を持ち、世界の歴史、文化とどのように芸術が影響しあって成り立ってきたのかを知る手がかりとなる事を目標とする。美術館やいろいろな展示、生活に密着した美などに気づき、楽しめるようになることを目指す。

授業方法

講義：毎回資料を配布、テーマに添った説明、解説をする。必ず映像資料を使用し、より理解しやすいように配慮しながら進める。テーマによっては予習として外部の下調べをすることもある。事前にシラバスを確認し、下調べをしておくとう理解が深まる。(30分程度)

授業計画

第1回	美術を楽しむ	美術を楽しむために ルーブル美術館の取り組み
第2回	パブリックアート	身近にあるアート 札幌駅・ステラプレイス探検
第3回	地球を彫刻する	イサム ノグチ モエレ沼公園とは？
第4回	アートを演出する	キュレーターという仕事
第5回	誰もがカメラマンの時代	時代を写す カメラマンの仕事
第6回	ファッションにおけるアート性	日本人ファッションデザイナーが築いたもの
第7回	絵本は小さな美術館 I	絵本の中の美術 色彩の仕組みから見る絵本
第8回	絵本は小さな美術館 II	多様化する絵本表現、これも絵本？
第9回	爆発をアートする	プロジェクト化するアート
第10回	美の基準を変えた男	ピカソを知る
第11回	祈りの形（教会建築）	サグラダ・ファミリア教会 日本にもある祈りの形
第12回	受胎告知と聖母子像	ルネッサンス 3大巨匠の果たした役割
第13回	ディズニーと宮崎	白雪姫、千と千尋を例に
第14回	Is this art?	アートって何？ 生活に結びつくアート
第15回	まとめ	試験としてのレポート作成

成績評価の方法

毎回のレポート、授業への取り組み 50%と最終レポート 50%

15回目は、14回の中からアートについてのテーマを出題、その場でレポートを作成する。

履修にあたっての注意

1回、1テーマ、アートを自分のものと感じてみることの積み重ねをしますので考え方、感じ方を重視する。一回ごとに簡単な感想を書く、後の資料となるので、留意して書くこと。時には美術館へ、街中へ行ってもらうこともある。

授業のねらい

なぜ楽譜は 5 本線で記されているのか？ どうして「ト音記号」と呼ぶの？ ドレミファソラシド・・・はこの国の言葉？ など、普段から何気なく使用されている音楽に関する疑問や一般常識を、わかりやすく検証・考察することで、音楽への興味や考えをより深く豊かなものにした。

到達目標

音楽についての基礎知識を身につけ、＜クラシック音楽＞に興味を持って、率先して聴けるようになる。

授業方法

講義形式で行う。前半（第 7 回まで）では音楽に関する基礎知識について、後半（第 8 回以降）では音楽史の流れを紹介すると共に、普段あまり観ることのない「オペラ」について鑑賞しながら考察する。

授業計画

- 第 1 回 ガイダンス
- 第 2 回 楽譜についての考察(1)：楽譜に関する基礎知識
- 第 3 回 楽譜についての考察(2)：需要や記譜法の変化
- 第 4 回 楽譜についての考察(3)：エディション研究
- 第 5 回 楽器の進歩とオリジナル演奏について(1)：楽器の紹介と演奏形態について
- 第 6 回 楽器の進歩とオリジナル演奏について(2)：楽器の進歩と改良
- 第 7 回 楽器の進歩とオリジナル演奏について(3)：オリジナル演奏について
- 第 8 回 オペラについて：オペラとはどんなもの？
- 第 9 回 バロック音楽について(1)：バッハ、ヴィヴァルディとその時代について
- 第 10 回 バロック音楽について(2)：オペラ誕生とバロック・オペラ
- 第 11 回 古典派音楽について(1)：ベートーヴェンとソナタの時代
- 第 12 回 古典派音楽について(2)：モーツァルトのオペラ
- 第 13 回 ロマン派音楽について(1)：ロマン派音楽の特徴と聴取スタイルの変化
- 第 14 回 ロマン派音楽について(2)：グランド・オペラと国民オペラ
- 第 15 回 近・現代の音楽とオペラ：19 世紀後半から現代へ

成績評価の方法

目標を測定するレポートを 70%、授業への参加状況を 30%、により評価する。

教科書・参考書に関する備考

教科書：なし。プリント資料を配布する。
参考書：なし。

40371

文化人類学

担当教員：岡庭義行

2単位 前期

授業のねらい

文化人類学 (Cultural Anthropology) は、かつて「文化の科学」と呼ばれ、これまで多くの人類学者が世界のさまざまな地域へフィールドワーク (現地調査) に赴き、浩瀚な文化理論を生み出してきました。この講義は、文化人類学の歴史と理論に関する体系的理解を深めるとともに、事例の分析や解釈を通して、人類学的思考を身につけることを目的としています。特に今年度は、世界各地の事例をテーマとして、異文化理解における同時代的課題の発見とその解決に向けた手がかりの探求を目的とします。

到達目標

1. 事例分析に基づき文化人類学の歴史と理論について説明することができる。
2. 自己の生活文化を人類学的思考に基づいて捉えなおすことができる。
3. 自文化を理解し異文化を実証的に説明することができる。

授業方法

- ・映像、スライド等の視聴覚資料を可能な限り活用しながら、フィールドワークから得られた個別事例の解説と分析を試みる。
- ・事前学習：講義中に指示する次回講義のテーマに基づき世界の多様な文化の課題項目について事前に学習整理しておくことが望ましい (30分程度)。
- ・事後学習：講義で提示する事後課題について各自で課題整理を行うことが望ましい (30分程度)。
- ・講義内で実施する小課題 (ミニレポート、クイズ等) については、返却後、関連資料を配布し解説する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 文化人類学の考え方：人類学的思考とは何か
- 第3回 文化とは何か：人間の営為と暗黙知の次元
- 第4回 フィールドワーク論：参与観察と「主観」の問題
- 第5回 進化主義の功罪：人類学の誕生とエスノセントリズム
- 第6回 理論と方法(1)：機能主義の理論と方法
- 第7回 理論と方法(2)：文化相対主義の理論と方法
- 第8回 理論と方法(3)：構造主義の理論と方法
- 第9回 理論と方法(4)：拡張する人類学理論
- 第10回 事例研究(1)：通過儀礼・仮面儀礼と境界理論
- 第11回 事例研究(2)：親族と交換理論
- 第12回 事例研究(3)：呪術と信仰
- 第13回 事例研究(4)：トリックスターと神話
- 第14回 事例研究(5)：アイヌ神話を読む
- 第15回 総括

成績評価の方法

レポート [到達目標 1] (50%)、授業への参加状況 (30%)、講義中の小課題 [到達目標 2、3] (20%)

履修にあたっての注意

文化人類学に接続可能な領域や身近な課題を発見しようとする姿勢で取り組むことが望ましい。

教科書・参考書に関する備考

講義中にプリント等を配布。参考図書については、各テーマに基づき適宜講義中に指示する。

参考書

- 波平恵美子『文化人類学 (カレッジ版) [第3版]』(医学書院、2011、ISBN：978-4260013178)
綾部恒雄・桑山敬己『よくわかる文化人類学 [第2版]』(ミネルヴァ書房、2010、ISBN：978-4623056965)
山下晋司・船曳建夫『文化人類学キーワード (改訂版)』(有斐閣、2008、ISBN：978-4641058866)

授業のねらい

日本史全体の流れを踏まえた上で、北海道・東北地域の歴史を理解することを目的とします。
この地域は、歴史的に、アイヌ民族や、ロシアなど諸外国と深いつながりがあります。
この地域の歴史を理解することで、民族問題・外交問題への理解も深めてください。

到達目標

日本史全体の流れを踏まえた上で、北海道・東北地域の歴史を説明できるようになる。

授業方法

プリントを配布し、講義を進めます。
必要なことは適宜メモに取るようにしてください。

授業計画

- 第1回 律令国家と征夷
- 第2回 武士の登場と前九年・後三年の役
- 第3回 院政・平氏政権と奥州藤原氏
- 第4回 蒙古襲来・白土土城・津軽安藤氏
- 第5回 戦国の動乱とコシヤマイン戦争
- 第6回 鎖国体制の成立と松前口
- 第7回 近世の知行制度と松前藩における商場知行制・場所請負制
- 第8回 幕藩制の確立とシャクシャイン戦争
- 第9回 幕藩制社会と東北アイヌ
- 第10回 田沼意次の政策と蝦夷地開拓論
- 第11回 寛政の改革とクナシリ・メナシの戦い
- 第12回 開国と対露問題
- 第13回 幕藩制社会の崩壊と箱館政権
- 第14回 明治維新と北海道開拓政策
- 第15回 明治における老農の活動と北海道稲作

成績評価の方法

試験（70%）、リアクションペーパー（30%）

履修にあたっての注意

特になし。

参考書

- 浪川健治『アイヌ民族の軌跡』（山川出版社、2004）
- 榎森進『アイヌ民族の歴史』（草風館、2007）
- 桑原真人ほか『北海道の歴史』（山川出版社、2010）
- 小口雅史ほか『青森県の歴史』（山川出版社、2012）
- 関口明ほか『アイヌ民族の歴史』（山川出版社、2015）
- 田端宏ほか『北海道史事典』（北海道出版企画センター、2016）
- 関根達人『モノから見たアイヌ文化史』（吉川弘文館、2016）

授業のねらい

古代から現代にいたるヨーロッパの歴史を、時代を追いながら概説的に学ぶ。より発展的な学習を念頭に、随時基礎的な文献の紹介も行う。

到達目標

現代世界の成り立ちにヨーロッパ世界の歴史が果たした役割を理解できる。

授業方法

- ・レジュメを配布し、講義形式で進める。
- ・指摘された参考文献を読むために、毎回 1 から 2 時間程度の予習を要する。
- ・小テストやリアクションペーパーにより、授業内容の理解を助ける。

授業計画

- 第 1 回 ガイダンス
- 第 2 回 古代オリエント世界
- 第 3 回 地中海世界の形成
- 第 4 回 地中海世界の三世界への分裂
- 第 5 回 西ヨーロッパ世界の成立と展開
- 第 6 回 キリスト教世界としてのヨーロッパ
- 第 7 回 ヨーロッパ世界の膨張
- 第 8 回 近代文化の誕生
- 第 9 回 主権国家の成立
- 第 10 回 二重革命の時代
- 第 11 回 革命後のフランスとウィーン体制
- 第 12 回 アメリカ合衆国の発展
- 第 13 回 帝国主義と第一次世界大戦
- 第 14 回 ヴェルサイユ体制と第二次世界大戦
- 第 15 回 まとめ

成績評価の方法

授業への取り組み (30%)、試験あるいはレポート (70%)

履修にあたっての注意

授業を 3 分の 1 以上欠席した者は、放棄したものと見なします。

参考書

『世界の歴史』編集委員会『新 もう一度読む 山川世界史』（山川出版社、2017 年、ISBN：978-4-634-64090-0）
『世界史リブレット シリーズ』（山川出版社）

授業のねらい

グローバル化の現在、世界諸国の様々な分野について学習し、日本との違い、類似点、関係性など、多様な視点から豊かな人間形成に役立つ幅広い教養と国際理解の能力を身につけること。

到達目標

グローバルな活動を担うための世界各国に関する基礎的な知識を習得すること。国際社会における社会システムや文化について、他の学生の前で自身の意見を表現できる能力を養うこと。講義で取り上げた題材をもとにして、国際社会の在り方に対する自分なりの考え方を主張できること。

授業方法

講義内容は主にパワーポイントを用いながら解説し、東アジアの隣国である韓国の事例を中心に取り上げながら、ディスカッション及びプレゼンテーションを実施する。また授業内容に関連するDVD視聴覚教材も適宜活用する。

事前・事後学習としては、英語の講義資料を使うので、今回の講義資料を毎回事前に読んで予習すること。また今回の講義テーマに関するディスカッションノートを作成することが必要である。復習課題も適宜出題する。さらに国際社会の動きに関するニュースを日頃から意識的に読むことを勧める。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション及びアンケート実施
- 第2回 世界諸国の伝統文化の理解及びディスカッション
- 第3回 世界諸国の政治制度の理解及びディスカッション
- 第4回 世界諸国の食文化の理解及びディスカッション
- 第5回 世界諸国の教育制度の理解及びディスカッション
- 第6回 世界諸国の若者文化の理解及びディスカッション
- 第7回 海外映画を通じた異文化の理解及びディスカッション
- 第8回 海外映画から見える現代社会の理解（映画視聴及び感想文作成）
- 第9回 世界の中の日本（映像視聴及び感想文作成）
- 第10回 国際紛争から見える現代世界の理解（映像視聴及び感想文作成）
- 第11回 アジア諸国の政治・経済・社会・文化に関する自由研究調査のプレゼンテーション及びディベート
- 第12回 ヨーロッパ・オセアニア諸国の政治・経済・社会・文化に関する自由研究調査のプレゼンテーション及びディベート
- 第13回 北アメリカ・中南米諸国の政治・経済・社会・文化に関する自由研究調査のプレゼンテーション及びディベート
- 第14回 中東・アフリカ諸国の政治・経済・社会・文化に関する自由研究調査のプレゼンテーション及びディベート
- 第15回 総括、期末試験

成績評価の方法

- 映画・映像感想文：12%（3回×4%）
- ディスカッションノート：18%（6回×3%）
- 自由研究調査のプレゼンテーション：25%
- 研究調査発表者のプレゼンテーション内容に対するディベートレポート：20%
- 期末試験：25%

教科書・参考書に関する備考

必要な講義資料は配布する。

授業のねらい

ローカルとグローバルが近くなった時代に必要なのは、生活文化、食文化、芸術・伝統文化を他の異文化に紹介できる人材、すなわち「異文化間コミュニケーション」です。このコースでは(1)「異文化理解」とは？、それに(2)「異文化をつなぐ要素」とは何か？等についてを探り、(3)「異文化コミュニケーション」に必要な素養、戦略、対人コミュニケーション能力も身につけてもらいたい。北海道の食文化・生活文化に興味を持っている異文化の人々に、北海道の良さ、日本の魅力などを、どう伝えるのか？国境を超えるトランスナショナルな視点で日米をモデルに探ってみよう。異文化の架け橋であったハーバード大学の歴史学者で元駐日大使で、ケネディ政権で活躍したエドウィン・ライシャワーの異文化理解と問題解決をはかる交渉方法も探ってみよう。

到達目標

「食や音楽は、世界を結ぶ共通語＝コミュニケーション」と言える。いかにすれば、あらゆる生活における自分の得意分野で「異文化コミュニケーション」になれるのか？について探ってみよう。

授業方法

テキストに基づくパワーポイントや映像を通して「異文化コミュニケーション」のコンセプト、また「異文化コミュニケーション」を目指すための知識、スキル、それに素養を学んでもらうため、毎回、キーワードを示し、授業の感想を200字程度にまとめ提出してもらう。

授業計画

- 第1回 「ガイダンス」文化とは？コミュニケーションとは？異文化とは？について考える。
アメリカのNIKEの女性副社長の仕事と役割。キャロライン・ケネディ駐日米大使の捉える日本の伝統文化・文学・審美性のケース・スタディ「アメリカのニューイングランド地方の伝統料理と日本の「和食の美味み」の食文化の異文化交流史
- 第2回 異文化コミュニケーションの歴史とその分野のパイオニア達について
なぜ、異文化コミュニケーションが必要なのか？
- 第3回 2017年1月まで駐日アメリカ大使であったエドウィン・O・ライシャワー、英国の女性探検家で北海道にも縁のあるイザベラ・バードその他。
- 第4回 異文化間の架け橋であった人物たちに迫る。例：津田塾大の創設者であった津田梅子、のアメリカ留学。ハーバード大学の歴史学者で元駐日米大使であったエドウィン・ライシャワーの視点で梅子の人生を追ってみよう。
- 第5回 日本における国際交流の流れとマルチ・カルチャーを探る。例「ベースボール」対「野球」ヒルマン監督と日米野球文化の類似点と相違点を探ってみよう。テキサス生まれの道産子の意味。
- 第6回 「文化摩擦」とその解消法を探る。言語と文化とコミュニケーションの関係を探る。「音楽は国境を超える」を考える。ジャズ・ロック・クラシック・ラテン音楽、民謡の多様性。加えて、「吹き替え文化」を考える。例：異文化間の歌詞をどう翻訳するか？
- 第7回 外交の食卓とネゴシエーション（交渉）の関係を探る。
- 第8回 多文化適応と対人コミュニケーションの見えないルールとは？
- 第9回 時代が求める「異文化とのネゴシエーション」とは？
- 第10回 グローバル化とその種類を探る。「マクドナルド」と「スターバックス」の異文化ビジネス戦略。
- 第11回 多文化との交流ネットワーク：道産品が世界のブランド品になるための異文化ビジネス時代の到来の例のケース・スタディ（食文化の視点）。
- 第12回 コカ・コーラ（Coke）の異文化ビジネス戦略とサンタクロースの歴史（Coke 本社を紹介）
- 第13回 ハーバード大学の学生と日本教材と日本紹介。
- 第14回 アップルパイとアメリカ文化価値。感謝祭の食材とグローバルゼーション
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

出席率50%と最後の日のエッセー式クイズで、講義で印象に残ったこと、参考になった点、今後、活用してみたいテーマを「～について」を自分で選び、250～300字で自由に記述してもらう。
また、テキストからも2題問題を選ぶ。ただし、テキストのみ持参を「可」とする。（50%）

履修にあたっての注意

4日間の講義のスタート時間は、10:40a.m. からとする。

教科書

御手洗昭治・小笠原はるの『グローバル・異文化交流史』（明石書店、2018）

授業のねらい

新約聖書のメッセージをより深く知るために、主として共観福音書（イエスの説教と譬え話ほか）とパウロの主要な手紙（「ローマの信徒への手紙」、「ガラテヤの信徒への手紙」ほか）を取り上げ、イエスのメッセージとパウロのメッセージの特徴と相違を読み取る。

到達目標

- ・イエスの譬え話の二つ以上を関係させて、彼のメッセージの際立った特徴を説明できる。
- ・パウロの「信仰」についてのメッセージのポイントを押さえて、説明できる。
- ・イエスの特徴とパウロの特徴を比較して、両者の違いを説明できる。

授業方法

イエスとパウロをそれぞれの背景の中に位置づけて、イエスが伝えようとしたこと、そしてパウロが伝えようとしたことの違いを、授業計画に従って解説する。授業で参照箇所を指示するので、理解を深める為に復習を必ずすること。毎回、必ず何らかの質問を用意して臨むこと。

授業計画

- 第1回 ユダヤ人イエスーその世界と時代
- 第2回 イエス登場の背景を探る：抑圧された社会と各種の運動
- 第3回 イエス運動と病気直しの意味：預言と成就ということ
- 第4回 山上の説教と平地の説教：マタイ5章3～12節、ルカ6章20～26節、ほか
- 第5回 神の支配（神の国、天の国）：神の意志の実現こそ最重要課題
- 第6回 イエスの譬え話(1)：ぶどう園の労働者の譬え話（マタイ20章1～16節）ほか
- 第7回 イエスの譬え話(2)：善いサマリア人（ルカ10章25～37節）ほか
- 第8回 イエスの言葉と行動の特徴：神の意思を体現して生きることと現実世界のギャップほか
- 第9回 過越祭の食事、十字架刑、弟子たちの復活体験
- 第10回 イエス運動の迫害者パウロの召命：使徒言行録とガラテヤ書の比較からほか
- 第11回 パウロの思想(1)：ピステイス（信仰）とは何か（ローマ3章21～26節ほか（新共同訳の誤り）
- 第12回 パウロの思想(2)：わたしの中でキリストが生きておられる（ガラテヤ2章20節）ほか
- 第13回 パウロの思想(3)救いの歴史におけるパウロの使命（ローマ9～11章）
- 第14回 パウロの思想(4)時代認識と信徒の生き方（1テサロニケ、1コリントほか）
- 第15回 まとめ：イエスとパウローユダヤ世界から異邦世界へー

成績評価の方法

授業への積極的参加（質問など：40%）、4回的小レポート課題（60%）によって総合的に評価する。

履修にあたっての注意

教科書（聖書）を必ず持参して授業に臨むこと。

教科書

『聖書 旧約聖書続編つき』（日本聖書協会、1987～、ISBN：987-4-8202-1202-7）

教科書・参考書に関する備考

参考書については適宜、授業中に紹介する。

参考ホームページ

日本聖書協会 <http://www.bibile.or.jp/>

Laudate <http://www.pauline.or.jp/>（女子パウロ会ホームページ）

40031

聖書学 (旧約)

担当教員：阿部 包

2単位 前期

授業のねらい

旧約聖書は、ユダヤ教徒およびキリスト教徒が生きる基準としてきた書物群です。古来、旧約聖書は原型的なエピソードや物語の宝庫として多くの読者を獲得してきました。

この授業では、信仰の有無にかかわらず、そもそも人間が生きていく上で役立つと思われる種々の内容を取り上げ、紹介・解説します。

到達目標

- ・旧約聖書が描く二つ以上の神話的物語の意味を概略的に説明できる。
- ・十戒と律法の諸規定の中から人間の普遍的な問題を読み取って説明することが出来る。
- ・旧約聖書の種々のエピソードが提示する内容を自分の言葉で語り直すことができる。

授業方法

旧約聖書の全体像を把握するために重要なポイントを、具体的な聖書箇所を引用しながら、授業計画に従って解説します。聖書箇所が指示されている回については、予め読んでくると理解が深まる。授業で説明するポイントについて関係する聖書箇所を復習するとさらに理解が深まる。かならず何らかの質問を用意して臨むこと。

授業計画

- 第1回 旧約聖書とは
- 第2回 創造物語：創世記1～3章
- 第3回 ノアの物語（洪水伝承）：同6～9章
- 第4回 族長の物語(1)アブラハム：同12～22章
- 第5回 族長の物語(2)イサクからヤコブ（イスラエル）へ：同23～35章
- 第6回 ヨセフ物語：同37～50章
- 第7回 モーセと出エジプト：出エジプト記1～15章
- 第8回 契約と十戒：同19～24章
- 第9回 律法：同25～31章、レビ記11、19章、申命記6章4～9節、ほか
- 第10回 カナン侵入と定住：ヨシヤア記、士師記
- 第11回 王制導入—最後の士師サムエルと最初の王サウル：サムエル記上1～13章
- 第12回 ダビデとソロモン—統一王国とその分裂の影：サムエル記上16章～列王記上11章
- 第13回 王国分裂と捕囚：列王記上12章～列王記下
- 第14回 詩編とイザヤ書、知恵文学ほか
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業への積極的参加（質問など：40%）、レポート課題（60%）によって総合的に評価する。

履修にあたっての注意

教科書（聖書）を必ず持参して臨むこと。

教科書

『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』（日本聖書協会、1987～、ISBN：978-4-8202-1202-7）

教科書・参考書に関する備考

必要な参考文献については授業中に紹介する。

参考書

阿部包[監修]『5分ですっきり読める聖書物語〈旧約篇〉』（成美堂出版、2011、ISBN：978-4-415-401621-1）

参考ホームページ

日本聖書協会 <http://www.bible.or.jp/>

Laudate <http://www.pauline.or.jp/>（女子パウロ会ホームページ）

外 国 語 科 目

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. More specifically, they will learn the basics of pronunciation and listening skills, study basic vocabulary and grammar, and work on critical thinking through various engaging tasks and activities designed to facilitate their learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking, Listening, Reading, Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication I では、発音・リスニングの基礎、コミュニケーションのための基本的語彙・文法項目の習熟、キャンパス等のアカデミックなシーンで必要となるコミュニケーションの基礎スキル、大学での学びにおいて大きな意味を持つクリティカル・シンキングの基本などを扱う。

到達目標

At the end of the term, students should be able to:

- speak intelligibly about familiar topics
- understand short talks and lectures given in simple language
- understand main ideas in basic readings as well as basic structures of academic texts
- understand the basics of paragraph writing and write short reports
- think critically about issues that are of interest to them

授業方法

This class will utilize interactive class activities, group work, and discussion to help students develop fluency and confidence in their ability to use English for meaningful communication. Reading and writing assignments will complement the students' classroom learning. Students will have access to additional online activities.

Students will improve their fluency and ability to use English for real communication through group work, discussions, and interactive class activities. Students will increase their listening ability through both classwork and online listening activities. Students will also be encouraged to use the DVD-ROM supplied with the textbook.

授業計画

- 第1回 Introduction
- 第2回 Unit 1: making friends
- 第3回 Unit 1: simple present tense; too and either
- 第4回 Unit 2: talking about interests
- 第5回 Unit 2: verb forms
- 第6回 Unit 3: encouraging conversation
- 第7回 Unit 3: simple present and continuous.
- 第8回 Unit 4: celebrations
- 第9回 Unit 4: talking about the future
- 第10回 Unit 5: growing up
- 第11回 Unit 5: talking about the past; self-correcting
- 第12回 Unit 6: Around town
- 第13回 Unit 6: talking about locations
- 第14回 Unit 6: checking information
- 第15回 Review

成績評価の方法

Active participation and assignments: 50%
Midterm test: 25%
Final test: 25%

履修にあたっての注意

Each student's success depends on her active participation in class.

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

MacCarthy 『Touchstone Book 2 2nd Edition Student Book』 (Cambridge)

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. More specifically, they will learn the basics of pronunciation and listening skills, study basic vocabulary and grammar, and work on critical thinking through various engaging tasks and activities designed to facilitate their learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking, Listening, Reading, Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication I では、発音・リスニングの基礎、コミュニケーションのための基本的語彙・文法項目の習熟、キャンパス等のアカデミックなシーンで必要となるコミュニケーションの基礎スキル、大学での学びにおいて大きな意味を持つクリティカル・シンキングの基本などを扱う。

到達目標

At the end of the term, students should be able to:

- speak intelligibly about familiar topics
- understand short talks and lectures given in simple language
- understand main ideas in basic readings as well as basic structures of academic texts
- understand the basics of paragraph writing and write short reports
- think critically about issues that are of interest to them

授業方法

This class will follow the text book (Touchstone 2) and complete a unit approximately every 2 classes. In addition to completing the book activities, students will be required to complete the teacher's own worksheets (that I will grade between classes) that will help ensure the students have acquired the learning aims in each unit. These worksheets typically involve pair work (or small group work) and usually contain communication activities that apply the grammar and vocabulary learned in each unit. Students are to understand that these worksheets influence their grade and active participation in the class is therefore needed. This is not a lecture course.

授業計画

- 第1回 Introductions, explaining of the class rules and grading system.
Unit 1 Lessons A and B; making friends, simple present tense, too and either.
- 第2回 Unit 1 Lessons C and D; starting a conversation, reading and writing exercises on conversation and social skills.
- 第3回 Unit 2 Lessons A and B; verb forms, class survey, object pronouns.
- 第4回 Unit 2 Lessons C and D; saying 'no', Using 'really', reading and writing exercises on websites.
- 第5回 Unit 3 Lessons A and B; present continuous, talking about health
- 第6回 Mid term test (Units 1 and 2), Lesson C and D; encouraging people to talk, talking about ways to relax.
- 第7回 Teacher's additional lessons. Counting and using large numbers. Imperatives and how to give instructions. Natural English pronunciation.
- 第8回 Unit 4 Lessons A and B; future tense using 'going to', talking about special days.
- 第9回 Unit 4 Lessons C and D; vague expressions, talking about cultural traditions.
- 第10回 Unit 5 Lessons A and B; simple past tense, determiners, talking about school days.
- 第11回 Mid term test (Units 3 and 4), Unit 5 Lessons C and D; correcting things you say, talking about teenage years.
- 第12回 Unit 6 Lessons A and B; directions, requests with 'can' and 'could'.
- 第13回 Unit 6 Lessons C and D; checking information, talking about favorite places.
- 第14回 Review lesson
- 第15回 Mid term test 3 (Units 5 and 6)
Teacher's additional lessons.

成績評価の方法

Class participation and activities: 50%

Mid-term quizzes: 50%

履修にあたっての注意

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

McCarthy M, McCarten, J and Sandiford, H 『Touchstone level 2 second edition students book』 (Cambridge University Press, 2014, ISBN : 9781107681736)

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. More specifically, they will learn the basics of pronunciation and listening skills, study basic vocabulary and grammar, and work on critical thinking through various engaging tasks and activities designed to facilitate their learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking, Listening, Reading, Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication I では、発音・リスニングの基礎、コミュニケーションのための基本的語彙・文法項目の習熟、キャンパス等のアカデミックなシーンで必要となるコミュニケーションの基礎スキル、大学での学びにおいて大きな意味を持つクリティカル・シンキングの基本などを扱う。

到達目標

On completion of this course the students should be able to:

- form and answer questions, react to statements and give opinions
- initiate and hold conversations
- understand instructions, conversations and short talks.
- understand main ideas of readings and academic texts
- do basic research and give presentations based on this research
- think critically about everyday issues and write reports on these

授業方法

This class will follow the text book (English Firsthand 1) and complete a unit approximately every 2 classes. In addition to completing the book activities, students will be required to complete the teacher's own worksheets (that I will grade between classes) that will help ensure the students have acquired the learning aims in each unit. These worksheets typically involve pair work (or small group work) and usually contain communication activities that apply the grammar and vocabulary learned in each unit. Students are to understand that these worksheets influence their grade and active participation in the class is therefore needed. This is not a lecture course.

授業計画

- 第1回 Introductions.
What to do when you don't understand.
Talking about yourself, what are you interested in?
- 第2回 Unit 1 It's nice to meet you.
- 第3回 Unit 1 It's nice to meet you.
Continued
- 第4回 Unit 2 Who are they talking about?
- 第5回 Unit 2 Who are they talking about?
Continued
- 第6回 Unit 3 When do you start?
- 第7回 Speaking Test 1
- 第8回 Presentation 1
- 第9回 Unit 4 Where does this go?
- 第10回 Unit 4 Where does this go?
Continued
- 第11回 Unit 5 How do I get there?
- 第12回 Unit 5 How do I get there?
Continued
- 第13回 Unit 6 What happened?
- 第14回 Speaking Test 2
- 第15回 Presentation 2

成績評価の方法

Class participation and activities: 30%
Speaking Test 1: 15%
Presentation 1: 20%
Speaking test 2: 15%
Presentation 2: 20%

履修にあたっての注意

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

Marc Helgesson, Steven Brown & John Wiltshier 『English Firsthand 1』 (Pearson Longman)

47204

Academic Communication I

担当教員：C.B.Simons

1単位 前期

授業のねらい

Students in this course will further develop their listening and speaking skills. Students will also look at culture and effective intercultural communication.

到達目標

Students will improve their fluency and ability to use English for real communication through group work, discussions, and interactive class activities. Students will increase their listening ability through both classwork and online listening activities.

授業方法

This class will utilize interactive class activities, group work, and discussion to help students develop fluency and confidence in their ability to use English for meaningful communication. Students will have access to additional online listening activities.

授業計画

- 第1回 Introduction to course
- 第2回 Asking for information - unit one
- 第3回 Asking for information - continue unit one
- 第4回 Describing things - unit two
- 第5回 Describing things - continue unit two
- 第6回 Making requests - unit three
- 第7回 Giving instructions - unit three
- 第8回 Giving instructions - continue unit three
- 第9回 Test on covered units
- 第10回 Asking for permission - unit five
- 第11回 Asking for permission - continue unit five
- 第12回 Giving opinions - unit six
- 第13回 Giving opinions - continue unit six
- 第14回 Role play challenge
- 第15回 Semester test and review

成績評価の方法

Active participation and assignments: 50%
Midterm test: 25%
Final test: 25%

履修にあたっての注意

Each student's success depends on her active participation in class.
外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください
40人を目標に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

Wilson/ Barnard 『fifty-fifty Book Two』 (Pearson/ Longman、2007、ISBN : 13:978-962-00-5666-6)

授業のねらい

This course is designed to equip students with the necessary grammar functionality to express opinions, give advice, structure arguments, and present supporting evidence. Each unit will include the teaching and modeling of a key grammar point followed by student discussion activities designed to allow them to apply it in a real world context. Additionally each unit includes a culture discussion point that challenges students to apply critical thinking skills to the topic at hand. The course is punctuated by a special class focussed on argument structure and followed by student verbal/visual presentations.

到達目標

- ・ speak intelligibly about familiar topics
- ・ understand short talks and lectures given in simple language
- ・ understand main ideas and supporting details in basic readings
- ・ understand basic structures of academic texts
- ・ think critically about issues that are of interest to themselves
- ・ do basic research about academic topics
- ・ discuss important topics in simple language
- ・ give effective presentations based on their research
- ・ analyze issues and situations critically to help find solutions to problems

授業方法

The class follows the text in which units focussing on Speaking/Listening and Reading/Writing are studied in alternative weeks respectively. There is combination of lecture, teacher led discussion, and student led discussion.

授業計画

- 第1回 Introduction. Goals, Expectations, Class Style and key Culture Points for Japanese learners of English.
- 第2回 Unit 1 . Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Simple Present, Too, Either.
- 第3回 Unit 1 , Lesson D. Reading and Writing.
Giving Advice
- 第4回 Unit 2 . Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Verb Forms, Object Pronouns.
- 第5回 Unit 2 . Lesson D. Reading and Writing.
Emails
- 第6回 Unit 3 . Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Simple Present and Present Continuous.
- 第7回 Unit 3 . Lesson D. Reading and Writing.
Asking Advice
- 第8回 Special Class. Non -Text.
Identifying a Topic or Question for Research, Gathering Evidence, Structuring an Argument, Citing Evidence. Presentation Preparation. Forming Pairs.
- 第9回 Pair Verbal/Visual Presentations.
Teacher Feedback.
- 第10回 Unit 4 . Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Future Tense, Indirect Objects
- 第11回 Unit 4 . Lesson D. Reading and Writing.
Invitations, Formal and Informal forms.
- 第12回 Unit 5 . Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Simple Past
- 第13回 Unit 5 . Lesson D. Reading and Writing.
Interview formats and Questions
- 第14回 Unit 6 . Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Is and Are, One and Some, Offers and Requests
- 第15回 Unit 6 . Lesson D. Reading and Writing.
Guides and Directions

成績評価の方法

Attendance and Participation 20%
In Class Discussion Activities 30%
Verbal Presentation 30%
Vocabulary Notebook Homework 20%

履修にあたっての注意

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

McCarthy, McCarten, Sandiford 『Touchstone Level 2』 (Cambridge University Press, 2005、ISBN : 9780521666053)

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. More specifically, they will learn the basics of pronunciation and listening skills, study basic vocabulary and grammar, and work on critical thinking through various engaging tasks and activities designed to facilitate their learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking、Listening、Reading、Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication I では、発音・リスニングの基礎、コミュニケーションのための基本的語彙・文法項目の習熟、キャンパス等のアカデミックなシーンで必要となるコミュニケーションの基礎スキル、大学での学びにおいて大きな意味を持つクリティカル・シンキングの基本などを扱う。

到達目標

At the end of the term, students should be able to:

- speak intelligibly about familiar topics
- understand short talks and lectures given in simple language
- understand main ideas in basic readings as well as basic structures of academic texts
- understand the basics of paragraph writing and write short reports
- think critically about issues that are of interest to them

授業方法

Students will engage in various pair/group/classwide activities as well as tasks focused on particular areas, such as pronunciation and vocabulary. Authentic materials will be provided wherever possible to help students think about the issues at hand in real-world contexts. Students are expected to review what they learned in the class for about one hour. Occasionally students need to prepare for the writing assignments for about one hour before the lecture.

授業計画

- 第1回 Introduction and Orientation
- 第2回 Chapter 1 . Kramer vs. Kramer (1) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第3回 Chapter 1 . Kramer vs. Kramer (2) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第4回 Chapter 1 . Kramer vs. Kramer (3) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第5回 Chapter 2 . The Devil Wears Prada (1) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第6回 Chapter 2 . The Devil Wears Prada (2) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第7回 Chapter 2 . The Devil Wears Prada (3) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第8回 Current Topics Read and/or watch current topics found on the internet
- 第9回 Chapter 3 . Super Size Me (1) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第10回 Chapter 3 . Super Size Me (2) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第11回 Chapter 3 . Super Size Me (3) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第12回 Chapter 5 . Notting Hill (1) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第13回 Chapter 5 . Notting Hill (2) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第14回 Chapter 5 . Notting Hill (3) Reading Comprehension, Writing and Grammar
- 第15回 Final Review

成績評価の方法

Active participation in class activities 30%, Small assignments and quizzes 50%, Final assignment 20%

履修にあたっての注意

Students are required to prepare and review each class material. In addition to the assignments the lecturer gives, they are expected to carry out work on their own. Students are expected not to be late for the class. 外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

Flora Wall Minami 他『映画で味わう食文化』（朝日出版社、2015、ISBN：978-4-255-15559-3）

授業のねらい

この授業は、映画の会話と料理を学びながら、英語の基礎的な力を習得することを目標にします。

声を出した会話の練習、料理方法を英語で読解しながら、英語の基本的四技能、読む、聞く、話す、書く力を伸ばすことを目指します。主人公の気持ちを想像しながら料理の意味を考えることは、文脈を読み取る重要な要素になります。英国の作家トルキンの『ホビットの大冒険』3部作のDVDを視聴しながら、英語の総合的な力を習得していきましょう。

到達目標

ファンタジー映画『ホビットの大冒険』の楽しさだけでなく、食生活を通して英国の社会と文化を理解することができます。英語の原文の音読練習（ペア・レッスン）や、覚えた英文をクラスの前で発表するレシテーションを通して、英語の基本的な4技能の話す・読む・聞くための練習方法を習得することができるようになります。他者と協力しながら行うペア・レッスンは、コミュニケーション能力の上達につながります。毎週予習・復習をしっかり行うことによって、英語の辞書の使い方と、英文の読み方の基礎力を習得することができるようになります。

授業方法

小テスト（10分）、英文講読（30分）、映画視聴（15分）、音読＋演習（30分）、アンケート（5分）

授業計画

- 第1回 J.R.R トルキン・『ホビットの冒険』上1 DVD 視聴＋ドワーフと魔法使いとのお茶会
 第2回 『ホビットの冒険』上2 DVD 視聴＋ホビット・ビルボの二度目の朝ごはん
 第3回 『ホビットの冒険』上3 DVD 視聴＋巨人トロールの羊のBBQ
 第4回 『ホビットの冒険』上4 DVD 視聴＋半エルフの夕食とケーキ
 第5回 『ホビットの冒険』上5 DVD 視聴＋ゴクリの卵の思い出
 第6回 『ホビットの冒険』上6 DVD 視聴＋熊人ビヨルンのハニー・ケーキ
 第7回 「ホビットのよい食べ物」について復習＋レシテーション
 第8回 『ホビットの冒険』下1 DVD 視聴＋森エルフのワイン
 第9回 『ホビットの冒険』下2 DVD 視聴＋たての湖の歓迎パーティ
 第10回 『ホビットの冒険』下3 DVD 視聴＋ドラゴンの洞穴とツグミ
 第11回 『ホビットの冒険』下4 DVD 視聴＋トーリンとよい食べ物
 第12回 『ホビットの冒険』下5 DVD 視聴＋ビヨルンと半エルフのもてなし
 第13回 『ホビットの冒険』下6 DVD 視聴＋よい食べ物があるホビットの人生
 第14回 「ホビットのよい食べ物」について復習＋レシテーション
 第15回 作者トルキンの国イギリスの料理

成績評価の方法

小テスト 10%＋出席 10%＋レシテーション 20%＋定期試験 60%＝100%

履修にあたっての注意

- * 毎回授業に参加することを重視します。
- * 小テスト提出で出席の確認をします。小テストを受けないと欠席になります。小テストを受けないと欠席になります。
- * 無断欠席の場合は、プリントは無配布。
- * 英日の英語辞書（電子辞書も可）は毎回持参してください

教科書

- トルキン 『『ホビットの冒険』上』（若波少年文庫、2000、ISBN：10: 4001140586）
 トルキン 『『ホビットの冒険』下』（若波少年文庫、2000、ISBN：10: 4001140594）

教科書・参考書に関する備考

- * 本文の抜粋のプリント（英文）と料理のレシピ（英文）を前の週に配布します。
- * 資料を保存するために A 4 ファイルを各自用意してください。

参考書

トールキン『指輪物語』（評論社、2005）

トールキン『妖精物語について:ファンタジーの世界』（評論社、2003）

コリー・オルセン『トールキンの「ホビット」を探して』（kadokawa、2014）

コーリン・ドゥーリエ『トールキンとC・S・ルイス友情物語』（柊風舎、2011）

Chris-Rachael Oseland『An Unexpected Cookbook: The Unofficial Book of Hobbit Cookery』（Kitchen Overlord、2014、ISBN : 10: 0990818802）

参考ホームページ

Center for the Study of C.S. Lewis & Friends <https://www.facebook.com/pg/cslewiscenter/posts/?ref=notif>

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. More specifically, they will learn the basics of pronunciation and listening skills, study basic vocabulary and grammar, and work on critical thinking through various engaging tasks and activities designed to facilitate their learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking, Listening, Reading, Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication I では、発音・リスニングの基礎、コミュニケーションのための基本的語彙・文法項目の習熟、キャンパス等のアカデミックなシーンで必要となるコミュニケーションの基礎スキル、大学での学びにおいて大きな意味を持つクリティカル・シンキングの基本などを扱う。

到達目標

At the end of the term, students should be able to:

- speak intelligibly about familiar topics
- understand short talks and lectures given in simple language
- understand main ideas in basic readings as well as basic structures of academic texts
- understand the basics of paragraph writing and write short reports
- think critically about issues that are of interest to them

学期終了までに、以下のスキル・能力の獲得を目指します。

- 知っているトピックについて、他者に伝わるように話すことが出来る
- 複雑ではない短いトークや講義を理解することが出来る
- 基本的な内容のリーディングの主旨を把握したり、学術的な文章の基本構造について理解出来る
- パラグラフ・ライティングの基本を理解し、短いレポートを書くことが出来る
- 興味のある問題について批判的に思考できる

授業方法

Students will engage in various pair/group/classwide activities as well as tasks focused on particular areas, such as pronunciation and vocabulary. Authentic materials will be provided wherever possible to help students think about the issues at hand in real-world contexts.

- ペア、グループ、全体での様々なアクティビティを行い、同時に発音や語彙などの特定の分野についてのタスクをこなします。可能な限り学習者用に加工されたものではないオーセンティックな教材を使い、実社会の文脈で諸問題を現実的に考えることが出来る工夫をします。
 - 基本表現に関しては、実際に使えるかどうかを授業内で定期的にチェックするパフォーマンス評価を行います。
 - 事前課題として与えられた基本表現の意味と発音を練習して (少なくとも1時間程度) 授業に望み、クラスでそれを使ったタスクを実際に行い、授業後は事後課題としてそれらの表現を使った短い文章を書くなどの課題 (少なくとも1時間程度) をこなすこととなります。
 - 英語表現をチャンク (かたまり) で覚え、それを知識として理解するだけでなく、すぐに口をついて出てくるまで練習を繰り返します。その際には、しっかりと意味の伝わる明瞭で正しい発音にも重点が置かれます。
- <課題へのフィードバック>
- 小クイズ・テストについては、授業内での自己採点と確認が主になります。
 - レポート等の提出物に対しては、提出後2週間以内にコメントを添えて返却します。
 - 英語の運用能力に関しては、授業内でのタスクに対するフィードバック (出来たか出来なかったか) に加えて、期末時に行う英語での個人面談の際に到達点、これからの課題等についてコメントします。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 発音の基礎：英語の子音(1)
英語のしくみ：基本文型、主語と動詞(1)
基本テーマと表現：出会いの場面(1)
- 第3回 発音の基礎：英語の子音(2)
英語のしくみ：基本文型、主語と動詞(2)
基本テーマと表現：出会いの場面(2)
- 第4回 発音の基礎：英語の母音(1)
英語のしくみ：基本文型、名詞句表現(1)
基本テーマと表現：キャンパスライフ(1)
- 第5回 発音の基礎：英語の母音(2)
英語のしくみ：基本文型、名詞句表現(2)
基本テーマと表現：キャンパスライフ(2)
- 第6回 発音の基礎：弱形変化(1)

- 英語のしくみ：基本文型、名詞句表現(3)
基本テーマと表現：キャンパスライフ(3)
- 第7回 発音の基礎：弱形変化(2)
英語のしくみ：基本文型、副詞句、その他
基本テーマと表現：教育について(1)
- 第8回 発音の基礎：弱形変化(3)
英語のしくみ：パラグラフの基礎(1)
基本テーマと表現：教育について(2)
- 第9回 発音の基礎：弱形変化(4)
英語のしくみ：パラグラフの基礎(2)
基本テーマと表現：教育について(3)
- 第10回 発音の基礎：イントネーション(1)
英語のしくみ：より複雑な表現へ
- 第11回 発音の基礎：イントネーション(2)
ポスター・プロジェクト(1)：ブレインストーミングと役割分担
- 第12回 ポスター・プロジェクト(2)：リサーチ結果の共有、レイアウトやデザインについてのディスカッション
- 第13回 ポスター・プロジェクト(3)：見る人を引き付ける言語表現とは
- 第14回 ポスター・プロジェクト(4)：英語表現の工夫と確認
- 第15回 ポスター発表と投票
学期末のまとめ・振り返り

成績評価の方法

アクティビティへの参加態度 (15%)、小課題・クイズ (20%)、基本表現パフォーマンス・テスト (20%)、ポスター・プロジェクト&プレゼンテーション (30%)、期末課題 (15%)

履修にあたっての注意

学生主体の授業 (student-centered class) なので、受け身の姿勢ではなく、自分の学びに対して能動的に取り組む姿勢を高く評価します。
外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書・参考書に関する備考

適宜教材を配布します。

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. More specifically, they will learn the basics of pronunciation and listening skills, study basic vocabulary and grammar, and work on critical thinking through various engaging tasks and activities designed to facilitate their learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking, Listening, Reading, Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication I では、発音・リスニングの基礎、コミュニケーションのための基本的語彙・文法項目の習熟、キャンパス等のアカデミックなシーンで必要となるコミュニケーションの基礎スキル、大学での学びにおいて大きな意味を持つクリティカル・シンキングの基本などを扱う。

到達目標

At the end of the term, students should be able to:

- speak intelligibly about familiar topics
- understand short talks and lectures given in simple language
- understand main ideas in basic readings as well as basic structures of academic texts
- understand the basics of paragraph writing and write short reports
- think critically about issues that are of interest to them

授業方法

- ・一斉学習のほかに、学習内容に応じてグループワーク・ペアワークを取り入れた授業を行います。
- ・テキストだけではなく他の様々な教材も用いて、英語に対する苦手意識を取り除き、英語そのものや英語圏の文化・社会もより身近なものにできるようにしていきます。
- ・中高で学習した文法事項を復習し、つまずきや疑問を解消しながら、さらに聞く、話す、読む、書くという英語の4技能を学習します。
- ・前週に学習した内容の理解度及び定着度を測る小テストを毎回実施します。
- ・視聴覚教材を適宜使用します。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション、リスニング演習など
- 第2回 Unit 1 (1) be 動詞の現在形と過去形
- 第3回 Unit 1 (2) That's Ashley Brown
- 第4回 Unit 3 (1) 現在形と現在進行形
- 第5回 Unit 3 (2) Sorry Tom
- 第6回 Unit 5 (1) 過去形と過去進行形
- 第7回 Unit 5 (2) Lunch at Karen's Place
- 第8回 Unit 6 (1) 過去形と現在完了
- 第9回 Unit 6 (2) I'm Really Excited
- 第10回 Unit 7 (1) 時を表す前置詞
- 第11回 Unit 7 (2) Here I Am
- 第12回 Unit 9 be going to と will
- 第13回 Unit 10 (1) 助動詞
- 第14回 Unit 10 (2) Just Relax and Have Fun
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定する小テスト (50%)、授業への参加度 (30%)、課題 (20%) により評価する。

履修にあたっての注意

- ・毎授業始めに小テストを実施しますので、遅刻をしないように気をつけてください。遅刻や欠席のための追試は行いません。
- ・毎回の授業に必ず英和辞書を持参すること (電子辞書も可、ただし携帯電話の辞書機能の使用は認めません)。
- ・外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。
- ・プリントを保管するこのクラス専用のクリアブックかクリアファイルを用意してください。

教科書

Robert Hickling、大崎さつき『English Upload』(金星堂、2013、ISBN : 978-4-7647-3949-9)

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. Academic Communication II is intended to be theme-based, and it aims to expose students to authentic materials. This course will be structured to promote project-based learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking、Listening、Reading、Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication II では、特定のテーマにもとづいて (theme-based)、オーセンティックな素材 (authentic materials : 学習者用に作られた人工的な教材ではなく、実際に社会で発表・活用されている素材) を多用しながら、グループで協力してリサーチしたり、調べた内容をポスターやプレゼンテーションにして発表したり、その結果を簡単なレポートにまとめたりといったプロジェクト型学習 (project-based learning) を目指す。

到達目標

At the end of the term, students should be able to:

- do basic research about academic topics
- discuss important topics in simple language
- give effective presentations based on their research
- write short reports in line with basic academic conventions
- analyze issues and situations critically to help find solutions to problems

授業方法

This class will follow the text book (Touchstone 2) and complete a unit approximately every 2 classes. In addition to completing the book activities, students will be required to complete the teacher's own worksheets (that I will grade between classes) that will help ensure the students have acquired the learning aims in each unit. These worksheets typically involve pair work (or small group work) and usually contain communication activities that apply the grammar and vocabulary learned in each unit. Students are to understand that these worksheets influence their grade and active participation in the class is therefore needed. This is not a lecture course.

授業計画

- 第1回 2nd semester orientation. Unit 7 Lesson A and B; infinitives, talking about trip preparation.
- 第2回 Unit 7 Lesson C and D; responding to suggestions, recommendations.
- 第3回 Unit 8 Lesson A and B; possessive pronouns, talking about your home.
- 第4回 Unit 8 Lesson C and D; asking politely, agreeing to requests.
- 第5回 Unit 9 Lesson A and B; past continuous tense, talking about accidents.
- 第6回 Mid term test 4 (units 7 and 8) Unit 9 Lessons C and D; reacting to a story, talking about good experiences.
- 第7回 Teacher's additional lessons. Tag questions, Experiences (present perfect tense)
- 第8回 Unit 10 Lessons A and B; comparative adjectives, using the telephone.
- 第9回 Unit 10 Lessons C and D; interruptions, E-communication.
- 第10回 Unit 11 Lessons A and B; describing people, verb + ing and prepositions.
- 第11回 Mid term test 5 (units 9 and 10) Unit 11 Lessons C and D; remembering words, talking about fashion.
- 第12回 Unit 12 Lessons A and B; future with will, may and might, present tense verbs with future meaning.
- 第13回 Unit 12 Lessons C and D; offers, talking about life in the future.
- 第14回 Checkpoint 10-12: Pages 127-128
Quiz on Units 11 and 12
- 第15回 Free Talk: Pages 129-135
Role Play

成績評価の方法

Student grades will be based on:
Class participation and activities: 50%
Mid-term quizzes: 30%
Final test (1 per semester): 20%

履修にあたっての注意

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

McCarthy M, McCarten, J and Sandiford, H 『Touchstone level 2 second edition students book』 (Cambridge University Press)

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. Academic Communication II is intended to be theme-based, and it aims to expose students to authentic materials. This course will be structured to promote project-based learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking, Listening, Reading, Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication II では、特定のテーマにもとづいて (theme-based)、オーセンティックな素材 (authentic materials : 学習者用に作られた人工的な教材ではなく、実際に社会で発表・活用されている素材) を多用しながら、グループで協力してリサーチしたり、調べた内容をポスターやプレゼンテーションにして発表したり、その結果を簡単なレポートにまとめたりといったプロジェクト型学習 (project-based learning) を目指す。

到達目標

At the end of the term, students should be able to:

- do basic research about academic topics
- discuss important topics in simple language
- give effective presentations based on their research
- write short reports in line with basic academic conventions
- analyze issues and situations critically to help find solutions to problems

授業方法

This class will follow the text book (Touchstone 2) and complete a unit approximately every 2 classes. In addition to completing the book activities, students will be required to complete the teacher's own worksheets (that I will grade between classes) that will help ensure the students have acquired the learning aims in each unit. These worksheets typically involve pair work (or small group work) and usually contain communication activities that apply the grammar and vocabulary learned in each unit. Students are to understand that these worksheets influence their grade and active participation in the class is therefore needed. This is not a lecture course.

授業計画

- 第1回 2nd semester orientation. Unit 7 Lesson A and B; infinitives, talking about trip preparation.
- 第2回 Unit 7 Lesson C and D; responding to suggestions, recommendations.
- 第3回 Unit 8 Lesson A and B; possessive pronouns, talking about your home.
- 第4回 Unit 8 Lesson C and D; asking politely, agreeing to requests.
- 第5回 Unit 9 Lesson A and B; past continuous tense, talking about accidents.
- 第6回 Mid term test 4 (units 7 and 8) Unit 9 Lessons C and D; reacting to a story, talking about good experiences.
- 第7回 Teacher's additional lessons. Tag questions, Experiences (present perfect tense)
- 第8回 Unit 10 Lessons A and B; comparative adjectives, using the telephone.
- 第9回 Unit 10 Lessons C and D; interruptions, E-communication.
- 第10回 Unit 11 Lessons A and B; describing people, verb + ing and prepositions.
- 第11回 Mid term test 5 (units 9 and 10) Unit 11 Lessons C and D; remembering words, talking about fashion.
- 第12回 Unit 12 Lessons A and B; future with will, may and might, present tense verbs with future meaning.
- 第13回 Unit 12 Lessons C and D; offers, talking about life in the future.
- 第14回 Review lesson
- 第15回 Mid term test 6 (Units 11 and 12)
Teacher's additional lessons and review.

成績評価の方法

Student grades will be based on:
Class participation and activities: 50%
Mid-term quizzes: 30%
Final test (1 per semester): 20%

履修にあたっての注意

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

McCarthy M, McCarten, J and Sandiford, H 『Touchstone level 2 second edition students book』 (Cambridge University Press, 2014、ISBN : 9781107681736)

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. More specifically, they will learn the basics of pronunciation and listening skills, study basic vocabulary and grammar, and work on critical thinking through various engaging tasks and activities designed to facilitate their learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking, Listening, Reading, Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication I では、発音・リスニングの基礎、コミュニケーションのための基本的語彙・文法項目の習熟、キャンパス等のアカデミックなシーンで必要となるコミュニケーションの基礎スキル、大学での学びにおいて大きな意味を持つクリティカル・シンキングの基本などを扱う。

到達目標

On completion of this course the students should be able to:

- form and answer questions, react to statements and give opinions
- initiate and hold conversations
- understand instructions, conversations and short talks.
- understand main ideas of readings and academic texts
- do basic research and give presentations based on this research
- think critically about everyday issues and write reports on these

授業方法

This class will follow the text book (English Firsthand 1) and complete a unit approximately every 2 classes. In addition to completing the book activities, students will be required to complete the teacher's own worksheets (that I will grade between classes) that will help ensure the students have acquired the learning aims in each unit. These worksheets typically involve pair work (or small group work) and usually contain communication activities that apply the grammar and vocabulary learned in each unit. Students are to understand that these worksheets influence their grade and active participation in the class is therefore needed. This is not a lecture course.

授業計画

- 第1回 Unit 7 I'd love that job
- 第2回 Unit 7 I'd love that job
Continued
- 第3回 Unit 8 What's playing?
- 第4回 Unit 8 What's playing?
Continued
- 第5回 Unit 9 What are you going to do?
- 第6回 Speaking Test 1
- 第7回 Presentation 1
- 第8回 Unit 10 How much is this?
- 第9回 Unit 10 How much is this?
Continued
- 第10回 Unit 11 How do you make it?
- 第11回 Unit 11 How do you make it?
Continued
- 第12回 Unit 12 Listen to the music
- 第13回 Unit 12 Listen to the music
Continued
- 第14回 Speaking Test 2
- 第15回 Presentation 2

成績評価の方法

Class participation and activities: 30%
Speaking test 1: 15%
Presentation 1: 20%
Speaking test 2: 15%
Presentation 2: 20%

履修にあたっての注意

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

Marc Helgesson, Steven Brown & John Wiltshier 『English Firsthand 1』 (Pearson Longman)

47214

Academic Communication II

担当教員：C.B.Simons

1単位 後期

授業のねらい

Students in this course will further develop their listening and speaking skills. Students will also look at culture and effective intercultural communication.

到達目標

Students will improve their fluency and ability to use English for real communication through group work, discussions, and interactive class activities. Students will increase their listening ability through both classwork and online listening activities.

授業方法

This class will utilize interactive class activities, group work, and discussion to help students develop fluency and confidence in their ability to use English for meaningful communication. Students will have access to additional online listening activities.

授業計画

- 第1回 Talking about the past - summer
- 第2回 Comparing things - unit nine
- 第3回 Comparing things - continue unit nine
- 第4回 Talking about experiences - unit ten
- 第5回 Talking about experiences - unit ten continue
- 第6回 Inviting - unit eleven
- 第7回 Inviting - continue unit eleven
- 第8回 Making predictions - unit twelve
- 第9回 making predictions - continue unit twelve
- 第10回 Test on covered units
- 第11回 Travel English - dining out
- 第12回 Travel English - transportation
- 第13回 Special lesson - translation
- 第14回 Role play challenge
- 第15回 Semester test and review

成績評価の方法

Active participation and assignments: 50%
Midterm test: 25%
Final test: 25%

履修にあたっての注意

Each student's success depends on her active participation in class.
外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください
40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

Wilson/ Barnard 『fifty-fifty Book Two』 (Pearson/ Longman、2007、ISBN : 13:978-962-00-5666-6)

授業のねらい

This course is an extension of Academic Communication I . It is designed to equip students with the necessary grammar functionality to express opinions, give advice, structure arguments, and present supporting evidence. Each unit will include the teaching and modeling of a key grammar point followed by student discussion activities designed to allow them to apply it in a real world context. Additionally each unit includes a culture discussion point that challenges students to apply critical thinking skills to the topic at hand. The course is punctuated by a special class focussed on argument structure and followed by student verbal/visual presentations.

到達目標

- ・ speak intelligibly about familiar topics
- ・ understand short talks and lectures given in simple language
- ・ understand main ideas and supporting details in basic readings
- ・ understand basic structures of academic texts
- ・ think critically about issues that are of interest to themselves
- ・ do basic research about academic topics
- ・ discuss important topics in simple language
- ・ give effective presentations based on their research
- ・ analyze issues and situations critically to help find solutions to problems

授業方法

The class follows the text in which units focussing on Speaking/Listening and Reading/Writing are studied in alternative weeks respectively. There is combination of lecture, teacher led discussion, and student led discussion.

授業計画

- 第1回 Introduction. Goals, Expectations, Class Style and key Culture Points for Japanese learners of English.
- 第2回 Unit 7 . Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Infinitives, Advice
- 第3回 Unit 7 . Lesson D. Reading and Writing.
Travel and Personal Communication Style
- 第4回 Unit 8 . Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Possessive Pronouns, Order of Adjectives
- 第5回 Unit 8 . Lesson D. Reading and Writing.
Routines and order of events
- 第6回 Unit 9 . Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Past Continuous, Reflexive pronouns
- 第7回 Unit 9 . Lesson D. Reading and Writing.
Newspaper style, Letters to the Editor of a website.
- 第8回 Special Class. Non -Text.
Identifying a Topic or Question for Research, Gathering Evidence, Structuring an Argument, Citing Evidence. Presentation Preparation. Forming Pairs.
- 第9回 Pair Verbal/Visual Presentations.
Teacher Feedback.
- 第10回 Unit 10. Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Comparative Adjectives
- 第11回 Unit 10. Lesson D. Reading and Writing.
Advantages and Disadvantages, Comparisons of Findings.
- 第12回 Unit 11. Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Describing People, verb + ing, Prepositions
- 第13回 Unit 11. Lesson D. Reading and Writing.
Trends
- 第14回 Unit 12. Lessons A, B, and C. Speaking and Listening.
Grammar Point: Future with will, going to , may. Present Continuous for the Future
- 第15回 Unit 12. Lesson D. Reading and Writing.
Predictions

成績評価の方法

Attendance and Participation 20%
In Class Discussion Activities 30%
Verbal Presentation 30%
Vocabulary Notebook Homework 20%

履修にあたっての注意

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

McCarthy, McCarten, Sandiford 『Touchstone Level 2』 (Cambridge University Press, 2005, ISBN : 9780521666053)

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. Academic Communication II is intended to be theme-based, and it aims to expose students to authentic materials. This course will be structured to promote project-based learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking, Listening, Reading, Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication II では、特定のテーマにもとづいて (theme-based)、オーセンティックな素材 (authentic materials: 学習者用に作られた人工的な教材ではなく、実際に社会で発表・活用されている素材) を多用しながら、グループで協力してリサーチしたり、調べた内容をポスターやプレゼンテーションにして発表したり、その結果を簡単なレポートにまとめたりといったプロジェクト型学習 (project-based learning) を目指す。

到達目標

At the end of the term, students should be able to:

- do basic research about academic topics
- discuss important topics in simple language
- give effective presentations based on their research
- write short reports in line with basic academic conventions
- analyze issues and situations critically to help find solutions to problems

授業方法

Students will engage in various pair/group/classwide activities as well as tasks focused on particular areas, such as pronunciation and vocabulary. Authentic materials will be provided wherever possible to help students think about the issues at hand in real-world contexts. Students are expected to review what they learned in the class for about one hour. Occasionally students need to prepare for the writing assignments for about one hour before the lecture.

授業計画

- 第1回 Introduction and Orientation
- 第2回 Chapter 7 . No Reservations (1) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第3回 Chapter 7 . No Reservations (2) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第4回 Chapter 7 . No Reservations (3) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第5回 Chapter 8 . Dear Frankie (1) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第6回 Chapter 8 . Dear Frankie (2) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第7回 Chapter 8 . Dear Frankie (3) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第8回 Current Topics Read and/or watch current topics found on the internet
- 第9回 Chapter 9 . Seabiscuit (1) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第10回 Chapter 9 . Seabiscuit (2) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第11回 Chapter 9 . Seabiscuit (3) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第12回 Chapter 10. Charlie and the Chocolate Factory (1) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第13回 Chapter 10. Charlie and the Chocolate Factory (2) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第14回 Chapter 10. Charlie and the Chocolate Factory (3) Reading Comprehension, Writing, Grammar
- 第15回 Final Review

成績評価の方法

Active participation in class activities 30%, Small assignments and quizzes 50%, Final assignment 20%

履修にあたっての注意

Students are required to prepare and review each class material. In addition to the assignments the lecturer gives, they are expected to carry out work on their own. Students are expected not to be late for the class. 外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

Flora Wall Minami 他『映画で味わう食文化』(朝日出版社、2015、ISBN: 978-4-255-15559-3)

授業のねらい

この授業は、ファンタジー映画の会話と料理の作り方を学びながら、英語の基礎的な力を習得することを目標にします。声を出した会話の練習、料理方法を英語で読解しながら、英語の基本的四技能、読む、聞く、話す、書く力を伸ばすことを目指します。主人公の気持ちを想像しながら料理の意味を考えることは、文脈を読み取る重要な要素になります。アイルランドの作家 C.S. ルイスの『ナルニア国物語』3部作の DVD を視聴しながら、英語の総合的な力を習得していきましょう。

到達目標

ファンタジー映画『ナルニア国物語』の楽しさだけでなく、アイルランドの社会と文化を理解することができます。

英語の原文の音読練習（ペア・レッスン）や、覚えた英文をクラスの前で発表するレシテーションを通して、英語の基本的な4技能の話す・読む・聞くための練習方法を習得することができますようになります。

他者と協力しながら行うペア・レッスンは、コミュニケーション能力の上達につながります。

毎週予習・復習をしっかりと行うことによって、英語の辞書の使い方と、英文の読み方の基礎力を習得することができますようになります。

授業方法

小テスト（10分）、英文講読（30分）、映画視聴（15分）、音読+演習（30分）、アンケート（5分）

授業計画

- 第1回 C.S. ルイス・ナルニア国物語 1-1 『ライオンと魔女』 DVD 視聴+フォーンのお茶会
- 第2回 『ライオンと魔女』 1-2 DVD 視聴+魔女のターキシュ・デライト
- 第3回 『ライオンと魔女』 1-3 DVD 視聴+ビーバー夫妻のディナー
- 第4回 『ライオンと魔女』 1-4 DVD 視聴+サンタのお茶会
- 第5回 『ライオンと魔女』 1-5 DVD 視聴+戴冠式のワイン
- 第6回 ナルニア国物語と良い食べ物について復習+レシテーション
- 第7回 『カスピアン王子の角笛』 2-1 DVD 視聴+ペベンジー兄弟姉妹のサンドウィッチ
- 第8回 『カスピアン王子の角笛』 2-2 DVD 視聴+アナグマのスープ
- 第9回 『カスピアン王子の角笛』 2-3 DVD 視聴+森の大宴会
- 第10回 『朝開き丸東の海へ』 3-31 DVD 視聴+ドラゴン島のロースト山羊肉
- 第11回 『朝開き丸東の海へ』 3-2 DVD 視聴+コリアキン島の英国式ランチ
- 第12回 『朝開き丸東の海へ』 3-3 DVD ラマンドゥ島のビュフェ
- 第13回 『朝開き丸東の海へ』 3-4 DVD 視聴+子ひつじ島のブラックファースト
- 第14回 その他のナルニア国物語 4冊と良い食べ物について+レシテーション
- 第15回 C.S. ルイスの国アイルランドの料理

成績評価の方法

小テスト 10% + 出席 10% + レシテーション 20% + 定期試験 60% = 100%

履修にあたっての注意

- * 予習：毎回配布の予習プリントをしっかりとしてください。（テキスト本文中の知らない単語や熟語を調べ全体の意味を理解する。訳文をノートに書く。音読する。）
- * 予習時に自分の辞書にない単語は、internet や図書館の辞書を使用し、事前に調べてください。
- * 復習：授業の初めに小テストを行います。前回の授業の内容から出題されますので、学んだ事例を確認し、テキスト本文を読み返して、理解を深める。音読する。

教科書

C.S. ルイス『ナルニア国物語2 ライオンと魔女と衣装だんす』（光文社、2026、ISBN：10: 4334753469）

教科書・参考書に関する備考

- * 本文の抜粋のプリント（英文）と料理のレシピ（英文）を前の週に配布します。
- * 資料（A 4）を保存するファイルを各自用意してください。

参考書

- C.S. ルイス『別世界にて』(みすず書房、1991、ISBN : 10: 462201176X)
Dinah Bucholz『The Unofficial Narnia Cookbook』(Sourcebooks Jabberwocky、2012、ISBN : 10: 1402266413)
Douglas Gresham. 『The Official Narnia Cookbook』(Harper Collins、2013、ISBN : 0062245775)
C.S. ルイス『魔術師のおい』(光文社、2016、ISBN : 978-4-334-75340-5)
C.S. ルイス『銀の椅子』(光文社、2017、ISBN : 978-4-334-75367-)
C.S. ルイス『カスピアン王子』(光文社、2017、ISBN : 978-4-334-75356-6)
C.S. ルイス『馬と少年』(光文社、2017、ISBN : 978-4-334-75349-8)
C.S. ルイス『ドントレットター号の航海』(光文社、2017、ISBN : 978-4-334-75362-7)

参考ホームページ

Center for the Study of C.S. Lewis & Friends <https://www.facebook.com/pg/cslewiscenter/posts/?ref=notif>

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. Academic Communication II is intended to be theme-based, and it aims to expose students to authentic materials. This course will be structured to promote project-based learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking, Listening, Reading, Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication II では、特定のテーマにもとづいて (theme-based)、オーセンティックな素材 (authentic materials: 学習者用に作られた人工的な教材ではなく、実際に社会で発表・活用されている素材) を多用しながら、グループで協力してリサーチしたり、調べた内容をポスターやプレゼンテーションにして発表したり、その結果を簡単なレポートにまとめたりといったプロジェクト型学習 (project-based learning) を目指す

到達目標

At the end of the term, students should be able to:

- speak intelligibly about familiar topics
- understand short talks and lectures given in simple language
- understand main ideas in basic readings as well as basic structures of academic texts
- understand the basics of paragraph writing and write short reports
- think critically about issues that are of interest to them

学期終了までに、以下のスキル・能力の獲得を目指します。

- 知っているトピックについて、他者に伝わるように話すことが出来る
- 複雑ではない短いトークや講義を理解することが出来る
- 基本的な内容のリーディングの主旨を把握したり、学術的な文章の基本構造について理解出来る
- パラグラフ・ライティングの基本を理解し、短いレポートを書くことが出来る
- 興味のある問題について批判的に思考できる

授業方法

Students will engage in various pair/group/classwide activities as well as tasks focused on particular areas, such as pronunciation and vocabulary. Authentic materials will be provided wherever possible to help students think about the issues at hand in real-world contexts.

- ペア、グループ、全体での様々なアクティビティを行い、同時に発音や語彙などの特定の分野についてのタスクをこなします。可能な限り学習者用に加工されたものではないオーセンティックな教材を使い、実社会の文脈で諸問題を現実的に考えることが出来る工夫をします。
- 基本表現に関しては、実際に使えるかどうかを授業内で定期的にチェックするパフォーマンス評価を行います。
- 事前課題として与えられた基本表現の意味と発音を練習して (少なくとも1時間程度) 授業に望み、クラスでそれを使ったタスクを実際に行い、授業後は事後課題としてそれらの表現を使った短い文章を書くなどの課題 (少なくとも1時間程度) をこなすこととなります。
- 英語表現をチャンク (かたまり) で覚え、それを知識として理解するだけではなく、すぐに口をついて出てくるまで練習を繰り返します。その際には、しっかりと意味の伝わる明瞭で正しい発音にも重点が置かれます。<課題へのフィードバック>
- 小クイズ・テストについては、授業内での自己採点と確認が主となります。
- レポート等の提出物に対しては、提出後2週間以内にコメントを添えて返却します。
- 英語の運用能力に関しては、授業内でのタスクに対するフィードバック (出来たか出来なかったか) に加えて、期末時に行う英語での個人面談の際に到達点、これからの課題等についてコメントします。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、前期の振り返り
- 第2回 ライティング・スキル(1) 英語と日本語の違い、話し言葉と書き言葉の違い、表現するということ
- 第3回 ライティング・スキル(2) 基本的な構成を理解しよう
- 第4回 ライティング・スキル(3) パラグラフを書いてみようー Topic Sentence とは
- 第5回 ライティング・スキル(4) パラグラフを書いてみようー Supporting Details の役割
- 第6回 ライティング・スキル(5) パラグラフを書いてみようー Signposting Language の重要性
- 第7回 ライティング・スキル(6) Draft 1 の Peer Review/Feedback、Revising について
- 第8回 ライティング・スキル(7) Draft 2 の 発表・共有・振り返り
- 第9回 スピーキング・スキル(1) Personal Views を発信しようー典型的な構成を理解しよう
- 第10回 スピーキング・スキル(2) Personal Views を発信しようー Main Point と Organizing Indicator
- 第11回 スピーキング・スキル(3) Personal Views を発信しようー Reasons を提示しよう
- 第12回 スピーキング・スキル(4) Personal Views を発信しようー Examples and Details について
- 第13回 スピーキング・スキル(5) Personal Views を発信しようー Transition Words を上手に使う

-
- 第14回 スピーキング・スキル(6) Personal Views を発信しようー Performance Test と Feedback (1)
第15回 スピーキング・スキル(6) Personal Views を発信しようー Performance Test と Feedback (2)
Final Review

成績評価の方法

アクティビティへの参加態度 (15%)、小課題・クイズ (30%)、Peer Review & Feedback (10%)、Performance Test (30%)、期末課題 (15%)

履修にあたっての注意

学生主体の授業 (student-centered class) なので、受け身の姿勢ではなく、自分の学びに対して能動的に取り組む姿勢を高く評価します。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書・参考書に関する備考

適宜教材を配布します。

授業のねらい

In this course, students will work on the four skills (speaking, listening, reading, writing) necessary for college-level studies. More specifically, they will learn the basics of pronunciation and listening skills, study basic vocabulary and grammar, and work on critical thinking through various engaging tasks and activities designed to facilitate their learning.

大学レベルの学術的なコミュニケーションに必要な4技能 (Speaking, Listening, Reading, Writing) の基礎力を総合的に養成する。Academic Communication I では、発音・リスニングの基礎、コミュニケーションのための基本的語彙・文法項目の習熟、キャンパス等のアカデミックなシーンで必要となるコミュニケーションの基礎スキル、大学での学びにおいて大きな意味を持つクリティカル・シンキングの基本などを扱う。

到達目標

At the end of the term, students should be able to:

- speak intelligibly about familiar topics
- understand short talks and lectures given in simple language
- understand main ideas in basic readings as well as basic structures of academic texts
- understand the basics of paragraph writing and write short reports
- think critically about issues that are of interest to them

授業方法

- ・一斉学習のほかに、学習内容に応じてグループワーク・ペアワークを取り入れた授業を行います。
- ・テキストだけではなく他の様々な教材も用いて、英語に対する苦手意識を取り除き、英語そのものや英語圏の文化・社会もより身近なものにできるようにしていきます。
- ・中高で学習した文法事項を復習し、つまずきや疑問を解消しながら、さらに聞く、話す、読む、書くという英語の4技能を学習します。
- ・前週に学習した内容の理解度及び定着度を測る小テストを毎回実施します。
- ・視聴覚教材を適宜使用します。

授業計画

- 第1回 後期オリエンテーション、Unit 13(1) 場所と移動を表す前置詞
- 第2回 Unit 13(2) Did You Bring the DVD?
- 第3回 Unit 14(1) Wh-疑問文
- 第4回 Unit 14(2) Meat, Corn, Fruit and Drinks
- 第5回 Unit 17(1) 能動態と受動態
- 第6回 Unit 17(2) Are You Free on Monday?
- 第7回 Unit 19(1) 動名詞と不定詞
- 第8回 Unit 19(2) For Your Legs and Heart
- 第9回 Unit 20(1) 形容詞の比較級と最上級
- 第10回 Unit 20(2) My Dad's Old Desktop
- 第11回 Unit 22(1) 従位接続詞
- 第12回 Unit 22(2) I Just Hope We Get There
- 第13回 Unit 23(1) 関係詞
- 第14回 Unit 23(2) Let's Get Over There, Quick!
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定する小テスト (50%)、授業への参加度 (30%)、課題 (20%) により評価する。

履修にあたっての注意

- ・毎授業始めに小テストを実施しますので、遅刻をしないように気をつけてください。遅刻や欠席のための追試は行いません。
- ・毎回の授業に必ず英和辞書を持参すること (電子辞書も可、ただし携帯電話の辞書機能の使用は認めません)。
- ・外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。
- ・プリントを保管するためのこのクラス専用のクリアブックがクリアファイルを用意してください。

教科書

Robert Hickling、大崎さつき『English Upload』(金星堂、2013、ISBN : 978-4-7647-3949-9)

授業のねらい

中学・高校を通して英語が不得意である、苦手意識がある、基礎からもう一度英語を学びたいと思っている学生対象のコースです。語彙に関しては「語と語の慣用的な結びつき」のコロケーションを学習することにより、日常に必要な語彙力を身につけていきます。また中高で学ぶ基礎文法の重要事項を確認し、練習問題をこなしていくことによって、英語理解や表現力の基礎を固めていくことを目的としたコースです。

到達目標

1. 基本の語彙力を身につけ、それらを用いてある程度の実際のコミュニケーションや英文の理解ができるようになる。
2. 基本的な文法の構造や規則を確認していき、ある程度の英文を理解し、構成することができ、さらに今後の英語学習の土台となる力を養う。

授業方法

- ・講義形式の授業のほかに、学習内容に応じてグループワークやペアワークを取り入れます。
- ・英単語テストを授業のはじめに実施します。
- ・各文法事項学習後に文法テストを実施します。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、Unit 1 英語表現の基本：主部と述部、節と句、目的語、補語
 第2回 Unit 5 話し手の視点：能動と受動(1)
 第3回 Unit 5 話し手の視点：能動と受動(2)
 第4回 Unit 7 動詞のさまざまな形Ⅰ：不定詞(1)
 第5回 Unit 7 動詞のさまざまな形Ⅰ：不定詞(2)
 第6回 Unit 8 動詞のさまざまな形Ⅱ：分詞(1)
 第7回 Unit 8 動詞のさまざまな形Ⅱ：分詞(2)
 第8回 Unit 9 動詞のさまざまな形Ⅲ：動名詞(1)
 第9回 Unit 9 動詞のさまざまな形Ⅲ：動名詞(2)
 第10回 Unit 11 修飾の表現：関係詞(1)
 第11回 Unit 11 修飾の表現：関係詞(2)
 第12回 Unit 12 程度の表現：比較(1)
 第13回 Unit 12 程度の表現：比較(2)
 第14回 Unit 14 主観を反映する表現：助動詞
 第15回 振り返りとまとめ

成績評価の方法

到達目標 1 及び 2 を測定する英単語テストと小テスト (60%)、授業への参加度 (30%)、課題 (10%) により評価する。

履修にあたっての注意

- ・英単語テストと文法テストは、授業の始めに実施するので、遅刻しないように気をつけてください。(遅刻・欠席のための追試は行いません。またテストだけを受けて、早退することは認めません)
- ・毎回の授業に必ず英和辞書（電子辞書は可、ただし携帯電話の辞書機能は不可）を持参すること。
- ・プリントを保管するためのクリアブックかクリアファイルを用意してください。
- ・40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。
- ・外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。
- ・プリントなどを保管するクリアブックかクリアファイルを用意してください。

教科書

一杉武史『改訂版 TOEIC TEST SCORE 500』（アルク、2016、ISBN：978-4-7574-2858-4）
 藤岡克則 大岩秀紀『基礎からの英文法』（三修社、2010、ISBN：978-4-384-33398-5）

教科書・参考書に関する備考

高校で用いた英語参考書

授業のねらい

This course aims to help students develop confidence in speaking English in common everyday practical situations and to do so without fear of making mistakes. There is a clear focus on verbal communication which is supplemented with extensive listening and minor reading tasks. Students are expected to use English only in the classroom where that is practical and learn how to use the specific grammatical objectives in group and/or pair verbal presentation projects. The classes will follow Units 1 - 6 of the textbook plus additional materials.

到達目標

The students will be able to perform functional conversations for everyday situations, listen to and comprehend simple real-world listening passages, and conduct discussions on everyday topics.

The students will be able to create and perform verbal short presentations and role-plays.

授業方法

The aim of this course is to create a student-centered learning environment. Therefore the students will be responsible for producing content through question and answer sessions. Additionally, listening passages will be used to facilitate topic based discussions. There will also be individual and group projects where the students work to make a number of solo and collaborative works.

授業計画

- 第1回 Introduction and course explanation
- 第2回 Meeting People. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第3回 Describing People. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第4回 Daily Activities. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第5回 Describe Locations and Household Objects. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第6回 Units 1 - 4 Review and Activities
- 第7回 Verbal Speech or Role-Play Preparation 1 . Deciding Topics and Approach.
- 第8回 Verbal Speech or Role-Play Practice 1 . Refining the Topic and mastering the language.
- 第9回 Verbal Speech or Role-Play 1 .
- 第10回 Giving Directions. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第11回 Past Activities. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第12回 Units 5 - 6 Review and Activities
- 第13回 Verbal Speech or Role-Play Preparation 2 . Deciding Topics and Approach.
- 第14回 Verbal Speech or Role-Play Practice 2 . Refining the Topic and mastering the language.
- 第15回 Verbal Speech or Role-Play 2 .

成績評価の方法

Students will be graded on classroom Attendance and Participation (30%), Verbal Speech or Role-Play 1 (30%) and Verbal Speech or Role-Play 2 (40%).

履修にあたっての注意

Students should bring a dictionary and A 4 notebook to each class.
40 人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

Marc Helgesen, Steven Brown, and John Wiltshier 『English Firsthand 1』 (Pearson)

授業のねらい

This course aims to help students develop confidence in speaking English in common everyday practical situations and to do so without fear of making mistakes. There is a clear focus on verbal communication which is supplemented with extensive listening and minor reading tasks. Students are expected to use English only in the classroom where that is practical and learn how to use the specific grammatical objectives in group and/or pair verbal presentation projects. The classes will follow Units 7-12 of the textbook plus additional materials.

到達目標

The students will be able to perform functional conversations for everyday situations, listen to and comprehend simple real-world listening passages, and conduct discussions on everyday topics.
The students will be able to create and perform verbal short presentations and role-plays.

授業方法

The aim of this course is to create a student-centered learning environment. Therefore the students will be responsible for producing content through question and answer sessions. Additionally, listening passages will be used to facilitate topic based discussions. There will also be individual and group projects where the students work to make a number of solo and collaborative works.

授業計画

- 第1回 Introduction and course explanation
- 第2回 Jobs and Careers. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第3回 Entertainment. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第4回 Future Plans. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第5回 Fashion and Technology. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第6回 Units 7-10 Review and Activities
- 第7回 Verbal Speech or Role-Play Preparation 1 . Deciding Topics and Approach.
- 第8回 Verbal Speech or Role-Play Practice 1 . Refining the Topic and mastering the language.
- 第9回 Verbal Speech or Role-Play 1 .
- 第10回 Processes and Order. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第11回 Opinions and Music. A combination of teacher-led language exercises, student interactive speaking activities, and listening exercises.
- 第12回 Units 11-12 Review and Activities
- 第13回 Verbal Speech or Role-Play Preparation 2 . Deciding Topics and Approach.
- 第14回 Verbal Speech or Role-Play Practice 2 . Refining the Topic and mastering the language.
- 第15回 Verbal Speech or Role-Play 2 .

成績評価の方法

Students will be graded on classroom Attendance and Participation (30%), Verbal Speech or Role-Play 1 (30%) and Verbal Speech or Role-Play 2 (40%).

履修にあたっての注意

Students should bring a dictionary and A 4 notebook to each class.
40 人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

Marc Helgesen, Steven Brown, and John Wiltshier 『English Firsthand 1』 (Pearson)

47271**Academic Listening & Note-taking**

担当教員：C.W.Cartney

1 単位 前期

授業のねらい

This course is designed to help students become confident and efficient listeners and note-takers by providing practice opportunities to use strategies for listening to academic talks and lectures and taking effective notes.

到達目標

At the end of the course, students should have developed skills in the following areas:

- Listening comprehension: predicting lecture content and organization, recognizing cues, understanding main points vs. details, and evaluating information
- Note-taking: deciding what to take notes on and what not to take notes on while listening, using symbols and abbreviations to save time as well as reorganizing notes for later use
- Strategy use and self-awareness: becoming aware of own use of strategies for listening and note-taking.

授業方法

The class will use the textbook *Contemporary Topics Introductory*, which comes with a DVD that features college lectures from several academic disciplines. The textbook is designed to prepare students for the challenge of college lectures with practice in a wide range of listening, speaking, and note-taking skills and strategies. Students will connect the given topics to their personal experiences and beliefs, build their vocabulary on those topics, learn strategies for listening actively and taking clear notes, listen to relevant lectures by using those strategies learned, and talk about the topics in small groups. After each unit, students will take a small test for review purposes.

授業計画

- 第1回 Introductions, meeting classmates, explaining class system
- 第2回 Unit 1 a Archeology: What Can We Learn from the Past?
- 第3回 Unit 1 a Test & Unit 1 b Archeology: What Causes a Society to Collapse?
- 第4回 Unit 1 b Test & Unit 2 a Anthropology: Culture Shock
- 第5回 Unit 2 a Test & Unit 2 b Anthropology: Third Culture Kids
- 第6回 Unit 2 b Test & Review (Units 1 & 2)
- 第7回 Unit 3 a Health Sciences: New Diets
- 第8回 Unit 3 a Test & Unit 3 b Health Sciences: Food Addictions
- 第9回 Unit 3 b Test & Unit 4 a Business: High- and Low-Context Communication
- 第10回 Unit 4 a Test & Unit 4 b Business: Managing International Business Meetings
- 第11回 Unit 4 b Test & Review (Unit 3 & 4)
- 第12回 Unit 5 a Economics: Five Tips for Your Financial Future
- 第13回 Unit 5 a Test & Unit 5 b Economics: Microcredit: Changing Lives
- 第14回 Unit 5 b Test & Review (Unit 5)
- 第15回 Final Review

成績評価の方法

Class participation and activities(50%)、Unit tests(50%)

履修にあたっての注意

Students are expected to come on time, have done the assignments, and be ready to participate in class activities.

They are also strongly encouraged to engage in regular listening practices outside of the classroom, using various materials, such as talks and lectures available online, news reports, movies and TV dramas.

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

J. Clement, C. Lennox & M. Rost 『Contemporary Topics Introductory: Academic Listening and Note-Taking Skills』(Pearson Longman, 2009、ISBN : 978-0-13-207517-6)

47281

Academic Speaking & Discussion

担当教員：C.W.Cartney

1単位 後期

授業のねらい

This course is designed to help students become confident and effective speakers in academic situations. The specific focus is on group discussion skills and presentation skills essential for successful communication and meaningful interactions at the college level.

到達目標

At the end of the course, students should have developed skills in the following areas:

- Group discussion skills: Learning how to formulate and give an opinion, showing agreement and disagreement, summarizing others' opinions, leading a discussion, reporting on a discussion
- Presentation skills: Choosing a topic, organizing a presentation (introduction, body, conclusion), questioning a speaker, giving feedback to peers, self-reflection and self-assessment
- Strategy use and self-awareness: becoming aware of own use of discussion and presentation strategies

授業方法

In each class meeting, students will learn new skills and then actually try them out in discussing familiar and gradually more challenging topics as well as in preparing and giving small group presentations. Students will be given ample opportunities to practice what they have learned in pair and group activities.

授業計画

- 第1回 Introductions, meeting classmates, explaining class system.
Introduce brainstorming
- 第2回 Learning how to organize a presentation. Start preparing for Cool Japan project
- 第3回 Research and organize Tourism in Japan project
- 第4回 Practice and receive advice from the teacher.
- 第5回 Learning to use PowerPoint to show information. Make teams and write questions for a class survey
- 第6回 Interview your classmates using your prepared survey questions.
- 第7回 Collate data and write up the team presentation. Teachers check and advice.
- 第8回 Present data and opinions to the class.
- 第9回 Exchange opinions with class
- 第10回 Pacing a talk and connecting with an audience.
Choose a team project related to students major.
- 第11回 Exchanging ideas and researching / preparing the project
- 第12回 Presentations. Teacher and peer feedback.
- 第13回 Giving opinions and making a point. Disagreeing and making a persuasive speech.
- 第14回 Small group presentations 2
- 第15回 Self-reflection, peer review, self-assessment

成績評価の方法

Active class participation(20%), Group discussion reports(30%), Small group presentation(30%), Self-assessment(20%)

履修にあたっての注意

Students are expected to come on time, have done the assignments, and be ready to participate in class discussions and presentations.

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書・参考書に関する備考

Handouts will be provided

授業のねらい

TOEFL (Test of English as a Foreign Language) は、主にアメリカなどの英語圏の大学・大学院への留学希望者が、授業についていけるだけの英語力の基準に達しているかを測る目安として使われる英語能力テストですが、近年グローバル人材の育成が叫ばれる中、「世界標準の英語力」を示すのに有効な尺度としても内外で大きな脚光を浴びています。本コースでは、単に TOEFL のスコアを上げるテクニックを学ぶのではなく、EAP (English for Academic Purposes: 学術目的の英語) の基礎力を身につけることを主眼としています。

到達目標

- Vocabulary: アカデミック・ボキャブラリー (学術上必要な語彙力) を大幅に増強する。
- Reading: アカデミックな英文のパラグラフ構造や論理構成の決まりを理解し、新しい文章を読む際に応用できる。
- Listening: 短い会話文のやり取りの大意を理解し、発言の内容・意図すること・言外にほのめかしている意味などを把握できる。また、英語でのある程度まとまった長さの講義やディスカッションをノートを取りながら聞き、要点や論理の流れを理解することができる。
- Speaking: 特定の問題について自分の立場を簡潔に論理立てて説明したり、相手の意見や簡単な講義内容を自分の言葉で要約することができる。
- Writing: パラグラフ・ライティングの基礎を身に付け、簡単な Academic Reaction Paper を書くことができる。
- TOEFL: 最終的に ITP で 460 点、iBT で 50 点以上を取れる実力を目指します。

授業方法

- TOEFL は英語圏の大学レベルで学習する準備が出来ているかを測るテストですので、アカデミック (学術的) な内容に対応できる高度な英語運用能力を試されます。そのための基礎としてまず語彙力を徹底的に鍛え、それと並行して reading, listening, speaking, writing の 4 技能を段階的に高めるための実践的なエクササイズをふんだんに行います。
 - この前期の授業では、リーディングとリスニングに重点を置き、一部にスピーキングとライティングの訓練も加えます。
 - 授業時間は限られているため、授業外での自主学習にどれだけ真剣に取り組めるかが目標達成の重要な鍵となります。クラスサイトの設置や個別指導を通じて、そのためのサポートを充実させます。
 - 基本的な流れは、毎回の授業の前に特定分野 (例: 歴史、生物学、など) についてのボキャブラリー・リーディング課題のプリント (所要時間 1 時間程度) を完成させた上で授業に参加し、クラスでペア・グループワークを通じて理解を確認しあい、授業後に復習と振り返りをする (少なくとも 1 時間) 次週の小クイズに備える、という形になります。週によってはリスニングの課題を出す場合もあります。
- <課題へのフィードバック>
- 小クイズ・テストについては、授業内での自己採点と質疑応答が主となります。
 - ライティングやミニ・レポート等の課題については、2～3 週間以内にコメントを付けて返却します。
 - プラクティス・テスト (模擬試験) 形式の課題については、採点結果と共に詳細な解答を付けて返却します。

授業計画

- 第1回 Introduction
- 第2回 Vocabulary Building/Reading Skills 1: Visual art and architecture
- 第3回 Vocabulary Building/Reading Skills 2: Literature
- 第4回 Vocabulary Building/Reading Skills 3: Music and dance
- 第5回 Vocabulary Building/Reading Skills 4: Comparing and contrasting
- 第6回 Vocabulary Building/Reading Skills 5: Biology
- 第7回 Reading & Listening Skills 1: Medicine
- 第8回 Reading & Listening Skills 2: Animal behavior
- 第9回 Reading & Listening Skills 3: Opinions
- 第10回 Reading & Listening Skills 4: History
- 第11回 Reading & Listening Skills 5: Business and economics
- 第12回 Structure 1: Agreement, subjects and verbs, noun-verb confusions
- 第13回 Structure 2: Word order, word choice, parallelism
- 第14回 Structure 3: Comparatives and superlatives, singular and plural forms, pronoun errors
- 第15回 Final Review & Practice Test

成績評価の方法

Small Quizzes & Assignments (60%), Practice Tests (20%), TOEFL ITP (20%)

履修にあたっての注意

- 学内 TOEFL ITP の受験が必須となります。
- 授業参加の最低条件として、与えられた課題を授業前に終わらせておくことは必須です。授業は飽くまで自分が取り組んだ学習のアウトプットや確認の場と考えてください。
- 毎回の授業に必ず辞書（英英が望ましい）を持参してください（電子辞書可）
- TOEFL は簡単ではありませんが、正しい努力をすれば結果として大幅なスコアアップの達成につながります。目的意識を持って参加する人を歓迎します。
- 40 人を目途に履修者の調整を行う場合があります。
- 外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書・参考書に関する備考

授業ごとに教材を配布します。

授業のねらい

TOEFL (Test of English as a Foreign Language) は、主にアメリカなどの英語圏の大学・大学院への留学希望者が、授業についていけるだけの英語力の基準に達しているかを測る目安として使われる英語能力テストですが、近年グローバル人材の育成が叫ばれる中、「世界標準の英語力」を示すのに有効な尺度としても内外で大きな脚光を浴びています。本コースでは、単に TOEFL のスコアを上げるテクニックを学ぶのではなく、EAP (English for Academic Purposes: 学術目的の英語) の基礎力を身につけることを主眼としています。

到達目標

- Vocabulary: アカデミック・ボキャブラリー (学術上必要な語彙力) を大幅に増強する
- Reading: アカデミックな英文のパラグラフ構造や論理構成の決まりを理解し、新しい文章を読む際に応用できる
- Listening: 英語でのある程度まとまった長さの講義やディスカッションをノートを取りながら聞き、要点や論理の流れを理解することができる
- Speaking: 特定の問題について自分の立場を簡潔に論理立てて説明したり、相手の意見や簡単な講義内容を自分の言葉で要約することができる
- Writing: パラグラフ・ライティングの基礎を身につけ、簡単な Academic Reaction Paper を書くことができる
- TOEFL: 最終的に ITP で 480 点、iBT で 54 点以上を取れる実力を目指します。

授業方法

- TOEFL は英語圏の大学レベルで学習する準備が来ているかを測るテストですので、アカデミック (学術的) な内容に対応できる高度な英語運用能力を試されます。そのための基礎としてまず語彙力を徹底的に鍛え、それと並行して reading, listening, speaking, writing の 4 技能を段階的に高めるための実践的なエクササイズをふんだんに行います。
 - 前半は前期に引き続きリーディングとリスニングに重点を置き、後半はスピーキングとライティングの訓練も加えることで、iBT 形式に対応できる基礎力を養成します。授業時間は限られているため、授業外での自主学習にどれだけ真剣に取り組めるかが目標達成の重要な鍵となります。クラスサイトの設置や個別指導を通じて、そのためのサポートを充実させます。
 - 基本的な流れは、毎回の授業の前にボキャブラリー・リーディング・スピーキングいずれかの分野の課題プリント (所要時間 1 時間程度) を完成させた上で授業に参加し、クラスでペア・グループワークを通じて理解を確認し合ったりスキルを訓練した後、授業の復習と振り返り (少なくとも 1 時間) をすることで次週の小クイズに備える、という形になります。週によってはリスニングの課題を出す場合もあります。
- <課題へのフィードバック>
- 小クイズ・テストについては、授業内での自己採点と質疑応答が主となります。
 - ライティングやミニ・レポート等の課題については、2～3 週間以内にコメントを付けて返却します。
 - プラクティス・テスト (模擬試験) 形式の課題については、採点結果と共に詳細な解答を付けて返却します。

授業計画

- 第1回 Reading & Listening Skills 6: Sociology and archeology
- 第2回 Reading & Listening Skills 7: Cause and effect
- 第3回 Reading & Listening Skills 8: Technology and computers
- 第4回 Reading & Listening Skills 9: Climate and environment
- 第5回 Speaking & Writing Skills 1: Basic patterns of speaking tasks
- 第6回 Speaking & Writing Skills 2: Making outlines of responses
- 第7回 Speaking & Writing Skills 3: Talking about your own interests and preferences
- 第8回 Speaking & Writing Skills 4: Taking sides in simple arguments
- 第9回 Speaking & Writing Skills 5: Stating your positions clearly
- 第10回 Speaking & Writing Skills 6: Identifying problems and solutions in conversations on campus
- 第11回 Speaking & Writing Skills 7: Summarizing main problems and options; stating your own opinions through paraphrasing
- 第12回 Integrated Skills 1: Understanding basic components of academic lectures, taking effective notes, and summarizing main ideas
- 第13回 Integrated Skills 2: Writing critical responses on issues presented
- 第14回 Review 1: Important speaking and listening strategies
- 第15回 Review 2: Toward more spontaneous interactions

成績評価の方法

Small Quizzes & Assignments (60%), Practice Tests (20%), TOEFL ITP (20%)

履修にあたっての注意

- 学内 TOEFL ITP の受験が必須となります。
- 授業参加の最低条件として、与えられた課題を授業前に終わらせておくことは必須です。授業は飽くまで自分
が取り組んだ学習のアウトプットや確認の場と考えてください。
- 毎回の授業に必ず辞書（英英が望ましい）を持参してください（電子辞書可）
- TOEFL は簡単ではありませんが、正しい努力をすれば結果として大幅なスコアアップの達成につながります。
目的意識を持って参加する人を歓迎します。
- 40 人を目途に履修者の調整を行う場合があります。
- 外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与え
られた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書・参考書に関する備考

授業毎に教材を配布します。

授業のねらい

ドイツ語を学び、最終的に自らの専門分野に活かすことができるようになれば、これほど望ましいことはありません。しかし、そのようなレベルに到達することは容易ではなく、大学での授業に参加するのみならず、自ら興味を持ち、学ぶ姿勢を身に着けることが必要となります。この姿勢を身に着ける前に躓かぬよう、授業ではドイツ語を聞き、読み、話し、書く練習を、ていねいに幅広く行います。将来飛躍的にドイツ語力を伸ばすための基礎を固めることがねらいとなります。

到達目標

1. ドイツ語の基礎文法、基礎語彙を習得することができる。
2. 基本的なドイツ語を聞き、読み、話し、書くことができる。
3. ドイツの文化、生活、ドイツ留学などの新たな分野、可能性に興味を抱き、意欲的にドイツ語学習に取り組むことができる。
4. ドイツ映画や音楽などを通じて、自らドイツ語に触れる機会を作ることができる。

授業方法

- ・ドイツ語の基礎文法・基礎語彙を学びます。
- ・一つの単元に三回の授業を当てることで、学んだことを確実に身に付けていきます。
- ・新出単語を自ら調べて、授業の予習をすること（15分）、そして授業内容を定着させるために復習をすること（30分）が必要となります。
- ・単元ごとの対話を参考にして独作文に取り組み、添削後に返却します。間違えた個所に気付いてもらい、ミスが繰り返されないようにします。
- ・ドイツ語を意欲的に学ぶことができるよう、ドイツの文化や生活の様子などについてお話しし、ドイツ映画や音楽を紹介しします。

授業計画

- 第1回 ガイダンス・アルファベート・発音
動詞の現在人称変化(1) — 文法、対話文読解
- 第2回 動詞の現在人称変化(2) — 練習問題
- 第3回 動詞の現在人称変化(3) — 練習問題、作文
- 第4回 名詞の性・冠詞の格変化(1) — 文法、対話文読解
- 第5回 名詞の性・冠詞の格変化(2) — 練習問題
- 第6回 名詞の性・冠詞の格変化(3) — 練習問題、作文
- 第7回 不規則変化動詞・命令形(1) — 文法、対話文読解
- 第8回 不規則変化動詞・命令形(2) — 練習問題
- 第9回 不規則変化動詞・命令形(3) — 練習問題、作文
- 第10回 定冠詞類・不定冠詞類(1) — 文法、対話文読解
- 第11回 定冠詞類・不定冠詞類(2) — 練習問題
- 第12回 定冠詞類・不定冠詞類(3) — 練習問題、作文
- 第13回 複数形・人称代名詞(1) — 文法、対話文読解
- 第14回 複数形・人称代名詞(2) — 練習問題
- 第15回 複数形・人称代名詞(3) — 練習問題、作文

成績評価の方法

到達目標 1 および 2 を測定する期末試験（40%）、授業への参加状況（60%）。

履修にあたっての注意

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。
外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

上野成利 本田雅也『パノラマ 初級ドイツ語ゼミナール（三訂版）』（白水社、2018、ISBN：978-4-560-06420-7）

教科書・参考書に関する備考

参考書：下記など、独和辞典を一冊用意してください。

参考書

根本道也『アポロン独和辞典 第3版』（同学社、2010、ISBN：978-4810200065）
在間進『アクセス独和辞典 第3版』（三修社、2010、ISBN：978-4384012347）

授業のねらい

ドイツ語を学び、最終的に自らの専門分野に活かすことができるようになれば、これほど望ましいことはありません。しかし、そのようなレベルに到達することは容易ではなく、大学での授業に参加するのみならず、自ら興味を持ち、学ぶ姿勢を身に着けることが必要となります。この姿勢を身に着ける前に躓かぬよう、授業ではドイツ語を聞き、読み、話し、書く練習を、ていねいに幅広く行います。初級ドイツ語Ⅰに引き続き、将来飛躍的にドイツ語力を伸ばすための基礎を固めることがねらいとなります。

到達目標

1. ドイツ語の基礎文法、基礎語彙を習得することができる。
2. 基本的なドイツ語を聞き、読み、話し、書くことができる。
3. ドイツの文化、生活、ドイツ留学などの新たな分野、可能性に興味を抱き、意欲的にドイツ語学習に取り組むことができる。
4. ドイツ映画や音楽などを通じて、自らドイツ語に触れる機会を作ることができる。

授業方法

- ・ドイツ語の基礎文法・基礎語彙を学びます。
- ・一つの単元に三回の授業を当てることで、学んだことを確実に身に付けていきます。
- ・新出単語を自ら調べて、授業の予習をすること（15分）、そして授業内容を定着させるために復習をすること（30分）が必要となります。
- ・単元ごとの対話を参考にして独作文に取り組み、添削後に返却します。間違えた個所に気付いてもらい、ミスが繰り返されないようにします。
- ・ドイツ語を意欲的に学ぶことができるよう、ドイツの文化や生活の様子などについてお話しし、ドイツ映画や音楽を紹介します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス、初級ドイツ語Ⅰの復習(1)
 第2回 初級ドイツ語Ⅰの復習(2)
 第3回 初級ドイツ語Ⅰの復習(3)
 第4回 前置詞の格支配(1) — 文法、対話文読解
 第5回 前置詞の格支配(2) — 練習問題
 第6回 前置詞の格支配(3) — 練習問題、作文
 第7回 形容詞の格変化(1) — 文法、対話文読解
 第8回 形容詞の格変化(2) — 練習問題
 第9回 形容詞の格変化(3) — 練習問題、作文
 第10回 話法の助動詞・未来形(1) — 文法、対話文読解
 第11回 話法の助動詞・未来形(2) — 練習問題
 第12回 話法の助動詞・未来形(3) — 練習問題、作文
 第13回 分離動詞・接続詞と副文(1) — 文法、対話文読解
 第14回 分離動詞・接続詞と副文(2) — 練習問題
 第15回 分離動詞・接続詞と副文(3) — 練習問題、作文

成績評価の方法

到達目標 1 および 2 を測定する期末試験（40%）、授業への参加状況（60%）。

履修にあたっての注意

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

上野成利 本田雅也『パノラマ 初級ドイツ語ゼミナール（三訂版）』（白水社、2018、ISBN：978-4-560-06420-7）

教科書・参考書に関する備考

参考書：下記など、独和辞典を一冊用意してください。

参考書

根本道也『アポロン独和辞典 第3版』（同学社、2010、ISBN：978-4810200065）
 在間進『アクセス独和辞典 第3版』（三修社、2010、ISBN：978-4384012347）

授業のねらい

フランス語で簡単なコミュニケーションができるようになることを目指します。

そのために必要な基礎文法を学びながら、日常よく使われる自然な表現を少しずつ身につけていきます。それと同時に、フランス時事問題やサブカルチャーなどを含めた社会的・文化的背景の理解も合わせながら、さまざまな方面からフランス語に親しんでいきます。授業で使用する教科書では、日本好きのフランス人が主人公です。フランスで日本文化がどのように受容されているかも併せて楽しむことができるでしょう。

到達目標

1. フランス語で簡単なコミュニケーションができるようになること、自己紹介ができるようになること。
2. 後期終了時には、実用フランス語検定試験 5 級合格レベルの文法力を身につけること。

授業方法

教科書、教材 CD・DVD を用いながら、発音・文法学習・会話練習をバランスよく行っていきます。

教科書の例文にならってロールプレイや、応用でフランス語で自分のことを表現する練習をします。また、各課終了ごとに練習問題の宿題が出されます。さらに、別途 Civilisation の機会を設け、フランス文化紹介や DVD 鑑賞を行います。宿題プリントや提出物は添削して返却し、授業内にて解説します。

毎回の授業終了時に次回の学習箇所を指示します。また、ほぼ毎回配布する宿題プリントを学習することが予復習となります（所要時間目安 30～45 分ほど）：所要時間はあくまで目安です。初回授業時に具体的に説明します。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、0 課：フランス語の音と文字～フランス語のアルファベット、あいさつ、つづり字
- 第2回 1 課：二人の出会い～主語人称代名詞、etre の活用、国籍の言い方(1)
- 第3回 1 課：二人の出会い～国籍のフランス語、多民族社会フランス
- 第4回 2 課：自己紹介をする～規則動詞の活用、形容詞の性・数の一致、名前の言い方
- 第5回 2 課：自己紹介をする～言語のフランス語、フランスの日本語学習
- 第6回 3 課：好きなものを言う～名詞の性・数と定冠詞、母音で始まる動詞の活用、疑問文
- 第7回 3 課：好きなものを言う～好きなもの(国、趣味・物)、日本のマンガ・アニメ
- 第8回 中間テスト、DVD 鑑賞
- 第9回 4 課：これは何ですか？～疑問代名詞 que、不定冠詞と指示代名詞 ce、形容詞の位置(1)
- 第10回 4 課：これは何ですか？～形容詞の位置(2)、日常生活でよく使う物
- 第11回 5 課：ここはどこ？～否定文、疑問副詞 ou、il y a の表現、量の表現
- 第12回 5 課：ここはどこ？～街で見かける建造物、場所の前置詞、パリのカルティエ
- 第13回 6 課：年齢の話～動詞 avoir、職業を表す名詞、疑問形容詞 quel、動詞 faire
- 第14回 6 課：年齢の話～数字のフランス語、年齢の表現
- 第15回 前期のまとめ、前期試験

成績評価の方法

以下の基準で成績を評価します。

宿題・プリントなどの提出物、発音練習やペア・グループ作業などの授業への参加態度：25%

中間テスト、期末テスト：75%（主に文法力・読解力・聞き取り力を測定する筆記によるテスト形式）

履修にあたっての注意

出席と、授業への参加態度を重視します。「一緒に」頑張りましょう。

40 人を目標に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

藤田裕二『パリのクール・ジャパン』（朝日出版社、2011、ISBN：978-4-255-35211-4）

教科書・参考書に関する備考

辞書や参考書は授業にて紹介します。

授業のねらい

○フランス語の基礎を学ぶ

授業の前半では、日常で使える便利な会話表現をゲーム感覚で身に着けることを目標とします。

授業の後半では、解説によって得られた知識を活用しながら様々な問題を解くことで、基本的な文法の習得を目指します。

会話や練習問題を通じて、フランス語をより多く使ってみることがこの授業のねらいとなります。

到達目標

教科書の内容の完全な理解を目指します。そうすることで、簡単な会話や文章を理解するための基礎的なフランス語力が身につくものと期待されます。授業外学修としては、予習よりも復習を重視し、理解が不十分だと感じた箇所については、次回の授業で質問をしてください。

授業方法

授業前半では、ペアになったの会話練習を行います。

授業後半では、講義形式で文法事項についての簡単な解説を行ったうえで、各自練習問題にチャレンジしてもらい、その後に答え合わせと注意点の解説を行います。

平均3回の授業で各課を終えていく予定です。

授業計画

- 第1回 ガイダンス、Bonjour !
- 第2回 アルファベ、カード作り
- 第3回 Qu'est-ce que c'est?
- 第4回 Qu'est-ce que vous avez?
- 第5回 Qu'est-ce qu'il y a...?
- 第6回 不定冠詞、定冠詞、部分冠詞
- 第7回 主語として使う人称代名詞、er 動詞
- 第8回 否定形、疑問形、avoir
- 第9回 être
- 第10回 指示形容詞、所有形容詞
- 第11回 形容詞の位置、形容詞の女性形、名詞・形容詞の複数形
- 第12回 aller, venir
- 第13回 choisir, prendre
- 第14回 命令形
- 第15回 まとめ、練習問題

成績評価の方法

試験（70%）、授業への参加状況（30%）により評価します。

履修にあたっての注意

仏和辞典は各自必ず持参してください（電子辞書も可）。

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

斎藤 昌三『ル・フランセ・ファシル』（白水社、ISBN：978-4-560-06069-8）

授業のねらい

フランス語で簡単なコミュニケーションができるようになることを目指します。
 そのために必要な基礎文法を学びながら、日常よく使われる自然な表現を少しずつ身につけていきます。それと同時に、フランス時事問題やサブカルチャーなどを含めた社会的・文化的背景の理解も合わせながら、さまざまな方面からフランス語に親しんでいきます。授業で使用する教科書では、日本好きのフランス人が主人公です。フランスで日本文化がどのように受容されているかも併せて楽しむことができます。

到達目標

1. 前期で培ったフランス語基礎力を活用し、フランス語の力を多方面からさらにレベルアップさせていきます。具体的なシチュエーションを想定したロールプレイ、簡単な会話文作成などができるようになることを目標とします。
2. 後期終了時には、実用フランス語検定試験 5 級合格レベルの文法力を身につけることを目標とします。

授業方法

教科書、教材 CD・DVD を用いながら、発音・文法学習・会話練習をバランスよく行っていきます。
 教科書の例文にならってロールプレイや、応用で自分のことをフランス語で表現する練習をします。また、各課終了ごとに練習問題の宿題が課されます。さらに、別途 Civilisation の機会を設け、フランス文化紹介や DVD 鑑賞を行います。宿題プリントは添削して返却し、授業内にて解説します。
 毎回の授業終了時に次回の学習箇所を指示します。ほぼ毎回配布する宿題プリントを学習することが予復習となります（所要時間目安 30～45 分ほど）：所要時間はあくまで目安です。初回授業時に具体的に説明します。

授業計画

- 第1回 前期の復習
 第2回 7 課：日本料理店に行く(1)～部分冠詞、冠詞のまとめ
 第3回 7 課：日本料理店に行く(2)～定冠詞の縮約、動詞 aller/vouloir
 第4回 7 課：日本料理店に行く(3)～食べ物と飲み物のフランス語、パリのレストラン
 第5回 8 課：布団が好き(1)～所有形容詞、人称代名詞の強勢形、動詞 dormir/dire
 第6回 8 課：布団が好き(2)～家族のフランス語、家系図、日本の生活様式
 第7回 予備日、DVD 鑑賞
 第8回 中間テスト、Civilisation
 第9回 9 課：店で買い物をする～指示代名詞 ce、vouloir の用法、日用品のフランス語、パリで出会う日本のもの
 第10回 11 課：天候の話(1)～非人称構文、天候・時間の表現、曜日・月
 第11回 11 課：天候の話(2)～女性形容詞の特殊な形、動詞 partir、フランスの気候
 第12回 14 課：ユミの帰国(1)～近接未来、単純未来、感嘆文
 第13回 14 課：ユミの帰国(2)～季節のフランス語、未来の表現、フランスと日本のバカンス事情
 第14回 予備日、DVD 鑑賞
 第15回 前期のまとめ、前期試験

成績評価の方法

以下の基準で成績を評価します。
 宿題・プリントなどの提出物、発音練習やペア・グループ作業などの授業への参加態度：25%
 中間テスト、期末テスト：75%（主に文法力・読解力・聞き取り力を測定する筆記によるテスト形式）

履修にあたっての注意

出席と、授業への参加態度を重視します。「一緒に」頑張りましょう。
 40 人を目的に履修者の調整を行う場合があります。
 外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

藤田裕二『パリのクール・ジャパン』（朝日出版社、2011、ISBN：978-4-255-35211-4）

教科書・参考書に関する備考

辞書や参考書は授業にて紹介します。

授業のねらい

○フランス語の基礎を学ぶ

解説によって得られた知識を活用しながら様々な問題を解くことで、基本的な文法の習得を目指します。会話や練習問題を通して、フランス語をより多く使ってみることがこの授業のねらいとなります。

到達目標

教科書の内容の完全な理解を目指します。そうすることで、簡単な会話や文章を理解するための、基礎的なフランス語力が身につくものと期待されます。授業外学修としては、予習よりも復習を重視し、理解が不十分だと感じた箇所については、次回の授業で質問をしてください。

授業方法

講義形式で文法事項についての簡単な解説を行ったうえで、各自練習問題にチャレンジしてもらい、その後に答え合わせと注意点の解説を行います。

平均3回の授業で各課を終えていく予定です。

授業計画

- 第1回 前期の復習
- 第2回 形容詞・副詞の比較級・最上級
- 第3回 faire, partir
- 第4回 目的補語
- 第5回 devoir, pouvoir, vouloir
- 第6回 代名動詞
- 第7回 過去分詞、複合過去形、過去分詞の一致
- 第8回 半過去形
- 第9回 受動態
- 第10回 代名詞 en, y
- 第11回 単純未来形
- 第12回 強調構文
- 第13回 非人称構文
- 第14回 PAUSE LECTURE
- 第15回 まとめ、練習問題

成績評価の方法

試験（70%）、授業への参加状況（30%）により評価します。

履修にあたっての注意

仏和辞典は各自必ず持参してください（電子辞書も可）。
40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

斎藤 昌三『ル・フランセ・ファシル』（白水社、ISBN：978-4-560-06069-8）

授業のねらい

初めて中国語を学ぶ人を対象とし、中国語の発音とその表記法（ピンイン）の読み方と綴り方正しく把握する。特に日本人の難関である①巻舌音、②二つの「u」の判断、読み、③ [e] の読み、④三つの [i] などを繰り返す読み聞くによって、慣れるようにすること。簡単な文の基本構造と基本文型および違う場面における簡単な表現方式をまなび、簡単な会話および挨拶語ができるようになること。基礎単語 400 個～500 くらい（簡単字を正しく書けること含め）把握するようにすること。

到達目標

目標

1. 中国語検定試験準 4 級～ 4 級合格に必要な言語能力、あるいはそれに準ずる能力を取得すること。基礎文法事項を理解する、正しい発音が安定になること。
2. 中国語で自分の日常生活を簡単に説明し、簡単なスキットを視聴できるようにする、中国語の幼児用絵本程度の文章を読み理解できること。

授業方法

基本的に教科書に沿って進んでいくが、必要に応じ補充教材やビデオなどで紹介する場合もある。積極的な発音訓練により、基本的な会話能力を身に着ける。スマホの発音機能を利用して、自分の発音をチェックする。一言だけでも良いが、中国人観光ブームを利用し、中国人観光客に話かけるなど中国語を活用する宿題を出す予定です。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
中国語の発音(1)
- 第2回 中国語の発音(2)
- 第3回 中国語の発音(3)
- 第4回 第1課 お元気ですか
- 第5回 第1課 文法：1 人称代名詞 2 形容詞述語文 3 副詞
- 第6回 第2課 あなたはどこへいきますか。
- 第7回 第2課 文法：1 動詞述語文 2 疑問詞のいろいろ
- 第8回 復習とテスト
- 第9回 第3課 私たちはご飯を食べましょう。
- 第10回 第3課 文法：1 連動文 2 語気助詞「吧」
- 第11回 第4課 こちらはどなたですか。
- 第12回 第4課 文法：1 指示代名詞 2 名詞述語文 3 構造助詞「的」
- 第13回 第5課 部屋の中にパソコンがありますか。
- 第14回 第5課 文法：場所を表す言葉
- 第15回 復習と試験

成績評価の方法

到達目標 1 を測定する試験 (50%)、到達目標 2 を測定する小テスト (20%) 授業への参加状況及び態度・姿勢・意欲 (30%) で評価します。

履修にあたっての注意

履修者は積極的な準備及び復習が必要である。小テスト含め、事前準備の必要な内容や課題などについては、教員から随時に指示する。粘り強く取り込むことが大事である。

40 人を目的に履修者の調整を行う場合がある。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

邢玉芝『ほあんいん 中国語（会話篇）』（郁文堂、2017、ISBN：978-4-261-01879-0）

教科書・参考書に関する備考

参考書：参考資料は授業でプリントによる配布。

辞書：指定しないが、できるだけ用意すること。（電子辞書あるいはスマホの関連アプリなどをおすすめ。）

47602

初級中国語 I

担当教員：張 阿金

1単位 前期

授業のねらい

中国語の正確な発音を身につけ、実用的な日常会話を学びます。中国語の表現力を高めることを目指し、中国人のものの考え方及び表現を理解する。

到達目標

正確な発音を身につけて、自己紹介など簡単な日常会話をできるようになる。

授業方法

外国語の学習には、何よりも正しい発音の学習が欠かせません。まず中国語の基本的な発音を身につけるために、しっかりと発音練習をします。次に簡単な文法が含まれている短い構文を題材にして、実用的な日常会話を学びます。学生同士による対話練習を中心とした授業で、中国語を「話す」機会を多く設けます。また、ビデオやDVDなどを使って、中国の風俗習慣などを紹介します。

授業計画

〈前期〉

第1回 ウォーミングアップ（「中国」という国、そして「中国語」とはどんな”ことば”）

第2回 発音Ⅰ 声調「四声」

第3回 発音Ⅱ 「単母音」と「子音」

第4回 発音Ⅲ 「複合母音」、発音の復習と総合練習

以下、一課についておよそ二時間をかけて授業を進めます。

第5回 第1課 人称代名詞、動詞〈是〉の文、〈ま〉の疑問文

第6回 第1課 会話文と文法練習

第7回 第2課 動詞が述語になる文、指示代名詞、疑問詞疑問文、〈的〉

第8回 第2課 会話文と文法練習

第9回 第3課 形容詞が述語になる文、副詞〈也〉と〈都〉、所有を表す〈有〉、時を表わす語の位置

第10回 第3課 会話文と文法練習

第11回 第4課 場所を表わす代名詞、存在を表わす〈有〉、省略疑問文〈ne〉、反復疑問文

第12回 第4課 会話文と文法練習

第13回 第5課 数詞、量詞、〈幾〉と〈多少〉、所在を表わす動詞〈在〉

第14回 第5課 会話文と文法練習

第15回 期末試験、まとめ

成績評価の方法

テスト（60%）、小テスト（10%）、授業への参加状況及び態度・姿勢・意欲（30%）で評価します。

履修にあたっての注意

テキスト付属のCDを繰り返し聴いて、予習復習をしてください。

40人を目的に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

緒方昭・小林光孝・胡慶華『中国語1年め』（白水社、2013、ISBN：978-4-560-06928-8）

教科書・参考書に関する備考

辞書：上野恵司『中日辞典』『日中辞典』（白帝社）

「電子辞書（Casio・XD-R7300、SEIKO・SR-T5030など）」もあります。

参考ホームページ

中国語基本音節表 http://www.ch-texts.org/contents_onsetsu.html（関西大学中国語教材研究会による発音独習コンテンツ）

Eテレ「テレビで中国語」 <https://cgi2.nhk.or.jp/gogaku/chinese/tv/>（授業と併せて見れば、学習効果倍増。ラジオ講座もあります）

中国語検定協会 <http://www.chuken.gr.jp/>（学習のペースメーカーとして。年3回受験可能）

授業のねらい

この授業は、一から中国語を学び始める人を対象にしています。はじめに、中国語の発音とその表記法（ピンイン）をひとつとおろおろさせ、その後は、中国語の基礎的な文法と語彙を少しずつ学習します。併せて、名前や年齢、日付、時刻など、ごく簡単なやりとりが中国語でできるようになることを目指します。授業では、とくに音読の繰り返しを通じて、中国語のメロディーとリズムを体得することを重視します。また、言語の背景にある中国人の文化や生活についても適宜紹介し、理解を深めていきます。

到達目標

1. 中国語の発音とその表記法（ピンイン）をおおよそ理解し、運用することができる。
2. 中国語のごく基礎的な語彙や文法、表現法（中国語検定準4級程度）を理解し、運用することができる。

授業方法

- ・ 授業は、基本的に教科書に沿っておこない、おおよそ2回で1課進むペースで展開します。1課の学習は、説明編と練習編に分かれます。説明編では、「ポイント」で新しい表現を学習しながら、3コマの「マンガ」を読み進めます。練習編では、「チャレンジ」を使って知識の定着をはかります。さらに、必要に応じて、プリントを使って身の回りのことを表現したり、短い文章を読んだりする練習もおこなう予定です。
- ・ 語学学習においては、習ったことを反復して体に覚え込ませることがもっとも大切です。事後学習として、お手本の音声に合わせて発音練習を繰り返し、教科書を丸ごと暗記するように努めてください（1日10分の練習を毎日行なうことが望ましい）。学習のペースメーカーとして、1課が終わるごとに、小テスト（習った単語や文章の聴き取り。10問程度）をおこないます。
- ・ 小テストのフィードバック：答案を返却するとともに、解答と解説を配布する。
- ・ 発音テストのフィードバック：採点の詳細と当日の録音を開示する（希望者のみ）。
- ・ 筆記テストのフィードバック：解答と解説を配布する。また、採点の詳細を開示する（希望者のみ）。

授業計画

- 第1回 ガイダンス／イントロダクション：声調
 第2回 第1課：母音
 第3回 第2課(1)：子音
 第4回 第2課(2)：声調変化、あいさつ、自分の名前
 第5回 第3課(1)：説明（中国人留学生）
 第6回 第3課(2)：練習 / 第4課(1)：説明（コンビニ）
 第7回 第4課(2)：練習 / 第5課(1)：説明（学食）
 第8回 第5課(2)：練習
 第9回 第6課(1)：説明（午後の予定）
 第10回 第6課(2)：練習
 第11回 第7課(1)：説明（小説それとも漫画？）
 第12回 第7課(2)：練習
 第13回 第8課(1)：説明（サッカーの試合）
 第14回 第8課(2)：練習
 第15回 まとめ／発音テスト

成績評価の方法

- ・ 筆記テスト（学期末に実施。到達目標1、2を測定する）（50%）
 - ・ 発音テスト（学期末に実施。到達目標1を測定する）（25%）
 - ・ 小テスト（1課終了ごとに実施。到達目標2を測定する）（25%）
- によって評価します。

履修にあたっての注意

外国語の上達には、語彙と基本例文のストックを増やすことが欠かせません。授業であつかった単語や例文は、基本的に暗記するものだと心得てください。

40人を目標に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

依藤醇監修、工藤真理子著『ここから中国語』（白帝社、2017、ISBN：978-4-86398-259-8）

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてプリントを配布します。

参考書

中国モダニズム研究会『中国現代文化 14 講 (ドラゴン解剖学 登竜門の巻)』(関西学院大学出版会、2014、ISBN : 4862831672)

中国モダニズム研究会『中華文化スター列伝 (ドラゴン解剖学 竜の子孫の巻)』(関西学院大学出版会、2016、ISBN : 486283227X)

守屋宏則『やさしくくわしい中国語文法の基礎』(東方書店、1995、ISBN : 4497944387)

榎本英雄・古屋順子『ゼロから始める「中国語の発音」徹底トレーニング』(アルク、2009、ISBN : 4757415710)

参考ホームページ

中国語基本音節表 http://www.ch-texts.org/contents_onsetsu.html (関西大学中国語教材研究会による発音独習コンテンツ)

Eテレ「テレビで中国語」 <https://cgi2.nhk.or.jp/gogaku/chinese/tv/> (授業と併せて見れば、学習効果倍増。ラジオ講座もあります)

中国語検定協会 <http://www.chuken.gr.jp/> (学習のペースメーカーとして。年3回受験可能)

授業のねらい

初めて中国語を学ぶ人を対象とし、中国語の発音とその表記法（ピンイン）の読み方と綴り方正しく把握する。特に日本人の難関である①巻舌音、②二つの「u」の判断、読み、③[e]の読み、④三つの[i]などを繰り返す読み聞くによって、慣れるようにすること。簡単な文の基本構造と基本文型および違う場面における簡単な表現方法をまなび、簡単な会話および挨拶語ができるようになること。基礎単語 400 個～500 くらい（簡単字を正しく書けること含め）把握するようにすること。

到達目標

目標

1. 中国語検定試験準 4 級～4 級合格に必要な言語能力、あるいはそれに準ずる能力を取得すること。基礎文法事項を理解する、正しい発音が安定になること。
2. 中国語で自分の日常生活を簡単に説明し、簡単なスキットを視聴できるようにする、中国語の幼児用絵本程度の文章を読み理解できること。

授業方法

基本的に教科書に沿って進んでいくが、必要に応じ補充教材やビデオなどで紹介する場合もある。積極的な発音訓練により、基本的な会話能力を身に着く。スマホの発音機能を利用して、自分の発音をチェックする。一言だけでも良いが、中国人観光ブームを利用し、中国人観光客に話かけるなど中国語を活用する宿題を出す予定で

授業計画

- 第1回 第6課 私はパンが2つほしいです。
 第2回 第6課 文法 1. 多少 2. 数詞 3. 金額の言い方 4. 助数詞
 第3回 第7課 私は11時に寝ます。
 第4回 第7課 文法 1. 時間と時量 2. 離合動詞 3. 時量補語 4. 前置詞
 第5回 第8課 私は4回本文を読みました。
 第6回 第8課 文法 1. 主述述語文 2. 動態助詞と語気助詞の「了」 3. 動量補語
 第7回 第9課 私は運転できます。
 第8回 第9課 文法 1. 助動詞「会・能・要」
 第9回 復習とテスト
 第10回 第10課 私は新幹線に乗ったことがあります。
 第11回 第10課 文法 1. 動態助詞「过」
 第12回 第11課 私は読んでわかりません。
 第13回 第11課 文法 1. 可能補語 2. 動詞の重ね型 3. 方向補語
 第14回 第12課 彼が昨日行ったのです 文法「是…的」構造
 第15回 復習と試験

成績評価の方法

到達目標 1 を測定する試験（50%）、到達目標を測定する小テスト（20%）授業への参加状況及び態度・姿勢・意欲（30%）で評価します。

履修にあたっての注意

履修者は積極的な準備及び復習が必要である。小テスト含め、事前準備の必要な内容や課題などについては、教員から随時に指示する。粘り強く取り込むことが大事である。

40 人を目的に履修者の調整を行う場合がある。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

邢玉芝『ほあんいん 中国語（会話篇）』（郁文堂、2017、ISBN：978-4-261-01879-0）

教科書・参考書に関する備考

参考書：参考資料は授業でプリントによる配布。

辞書：指定しないが、できるだけ用意すること。（電子辞書あるいはスマホの関連アプリなどをすすめ。）

授業のねらい

中国語の正確な発音を身につけ、実用的な日常会話を学びます。中国語の表現力を高めることを目指し、中国人のものの考え方及び表現を理解する。

到達目標

基本的な日常会話を身につけて、中国語検定試験準4級レベルに到達する。

授業方法

外国語の学習には、何よりも正しい発音の学習が欠かせません。まず中国語の基本的な発音を身につけるために、しっかりと発音練習をします。次に簡単な文法が含まれている短い構文を題材にして、実用的な日常会話を学びます。学生同士による対話練習を中心とした授業で、中国語を「話す」機会を多く設けます。また、ビデオやDVDなどを使って、中国の風俗習慣などを紹介します。

授業計画

- 第1回 前期の復習
 第6課 日付・曜日の言い方、時刻の言い方、助動詞(1)〈想〉・〈要〉、語気助詞の〈ba〉
 第2回 第6課 会話文、文法練習
 第3回 第7課 前置詞(1)〈在〉・〈從〉・〈離〉、動作の完了を表わす〈了〉、動詞の重ね型
 第4回 第7課 会話文、文法練習
 第5回 第8課 助動詞(2)〈会〉・〈能〉・〈可以〉、経験を表わす〈過〉、動作の回数・時間の長さの表わし方
 第6回 第8課 会話文、文法練習
 第7回 中国映画鑑賞
 第8回 第9課 様態補語、前置詞(2)〈給〉・〈gen〉、連動文
 第9回 第9課 会話文、文法練習
 第10回 第10課 結果補語、動作の進行を表わす〈在〉、主述述語文
 第11回 第10課 会話文、文法練習
 第12回 第11課 方向補語、比較の言い方、選択疑問文の〈還是〉
 第13回 第11課 会話文、文法練習
 第14回 後期の総復習
 第15回 期末試験、まとめ

成績評価の方法

テスト (60%)、小テスト (10%)、授業への参加状況及び態度・姿勢・意欲 (30%) で評価します。

履修にあたっての注意

テキスト付属のCDを繰り返し聴いて、予習復習をしてください。

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

緒方昭・小林光孝・胡慶華『中国語1年め』（白水社、2013、ISBN：978-4-560-06928-8）

教科書・参考書に関する備考

辞書：上野恵司『中日辞典』『日中辞典』（白帝社）

「電子辞書（Casio・XD-R7300、SEIKO・SR-T5030など）」もあります。

参考ホームページ

中国語基本音節表 http://www.ch-texts.org/contents_onsetsu.html（関西大学中国語教材研究会による発音独習コンテンツ）

Eテレ「テレビで中国語」 <https://cgi2.nhk.or.jp/gogaku/chinese/tv/>（授業と併せて見れば、学習効果倍増。ラジオ講座もあります）

中国語検定協会 <http://www.chuken.gr.jp/>（半年学習時で準4級、1年学習時で4級が目安です）

授業のねらい

この授業は、すでに「初級中国語Ⅰ」を履修した人を対象にしています。引き続き、中国語の基礎的な文法と語彙を少しずつ学習しながら、買い物や自己紹介などの簡単なやりとりが中国語でできるようになることを目指します。授業ではとくに音読の繰り返しを通じて、中国語のメロディーとリズムを体得することを重視します。また、言語の背景にある中国人の文化や生活についても適宜紹介し、理解を深めていきます。

到達目標

1. 中国語の発音とその表記法（ピンイン）を理解し、運用することができる。
2. 中国語の基礎的な語彙や文法、表現法（中国語検定準4～4級程度）を理解し、運用することができる。

授業方法

- ・ 授業は、基本的に教科書に沿っておこない、おおよそ2回で1課進むペースで展開します。1課の学習は、説明編と練習編に分かれます。説明編では、「ポイント」で新しい表現を学習しながら、3コマの「マンガ」を読み進めます。練習編では、「チャレンジ」を使って知識の定着をはかります。さらに、必要に応じて、プリントを使って身の回りのことを表現したり、短い文章を読んだりする練習もおこなう予定です。
- ・ 語学学習においては、習ったことを反復して体に覚え込ませることがもっとも大切です。事後学習として、お手本の音声に合わせて発音練習を繰り返し、教科書を丸ごと暗記するよう努めてください（1日10分の練習を毎日行なうことが望ましい）。学習のペースメーカーとして、1課が終わるごとに、小テスト（習った単語や文章の聴き取り。10問程度）をおこないます。
- ・ 小テストのフィードバック：答えを返却するとともに、解答と解説を配布する。
- ・ 発音テストのフィードバック：採点の詳細と当日の録音を開示する（希望者のみ）。
- ・ 筆記テストのフィードバック：解答と解説を配布する。また、採点の詳細を開示する（希望者のみ）。

授業計画

- 第1回 ガイダンス／イントロダクション：前期の復習
 第2回 第9課(1)：説明（テレビゲーム）
 第3回 第9課(2)：練習
 第4回 第10課(1)：説明（アルバイト）
 第5回 第10課(2)：練習
 第6回 第11課(1)：説明（水泳）
 第7回 第11課(2)：練習
 第8回 第12課(1)：説明（王先生の家）
 第9回 第12課(2)：練習
 第10回 第13課(1)：説明（中国行き）
 第11回 第13課(2)：練習
 第12回 第14課(1)：説明（買い物）
 第13回 第14課(2)：練習
 第14回 第15課：説明（自己紹介）
 第15回 まとめ／発音テスト

成績評価の方法

- ・ 筆記テスト（学期末に実施。到達目標1、2を測定する）（50%）
 - ・ 発音テスト（学期末に実施。到達目標1を測定する）（25%）
 - ・ 小テスト（1課終了ごとに実施。到達目標2を測定する）（25%）
- によって評価します。

履修にあたっての注意

外国語の上達には、語彙と基本例文のストックを増やすことが欠かせません。授業であつかった単語や例文は、基本的に暗記するものと心得てください。

40人を目的に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

依藤醇監修、工藤真理子著『ここから中国語』（白帝社、2017、ISBN：978-4-86398-259-8）

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてプリントを配布します。

参考書

中国モダニズム研究会『中国現代文化 14 講（ドラゴン解剖学 登竜門の巻）』（関西学院大学出版会、2014、ISBN：4862831672）

中国モダニズム研究会『中華文化スター列伝（ドラゴン解剖学 竜の子孫の巻）』（関西学院大学出版会、2016、ISBN：486283227X）

守屋宏則『やさしくくわしい中国語文法の基礎』（東方書店、1995、ISBN：4497944387）

榎本英雄・古屋順子『ゼロから始める「中国語の発音」徹底トレーニング』（アルク、2009、ISBN：4757415710）

参考ホームページ

中国語基本音節表 http://www.ch-texts.org/contents_onsetsu.html（関西大学中国語教材研究会による発音独習コンテンツ）

Eテレ「テレビで中国語」 <https://cgi2.nhk.or.jp/gogaku/chinese/tv/>（授業と併せて見れば、学習効果倍増。ラジオ講座もあります）

中国語検定協会 <http://www.chuken.gr.jp/>（学習のペースメーカーとして。年3回受験可能）

47701

初級韓国語 I

担当教員：松田由紀

1単位 前期

授業のねらい

近年は K-POP やドラマなどで韓国語を聞く機会が多いと思います。語順も日本語とほぼ同じで、漢字由来の言葉も多く私たちには学びやすい言語といえるでしょう。しかしハングルは文字数も多く最初は覚えるのに苦労すると思います。

初級韓国語 I ではまずハングルのすべてを読めるようになりましょう。そのためには自宅での復習が必要となります。そして自己紹介文やあいさつ文を暗記したり、「～は～です」というような簡単な文の作り方を学びます。

到達目標

ハングルがすべて読めるようになる（一部不規則的発音を除く）、自己紹介する

授業方法

教科書やプリントを使ったハングルの学習。2週に1回は小テスト。

授業計画

- 第1回 イントロダクション、自己紹介文を覚える
- 第2回 第1課（基本母音）
- 第3回 第2課（基本子音）
- 第4回 第3課（激音）
- 第5回 第4課（さまざまな単語を読む）
- 第6回 基本子音のまとめ
- 第7回 第5課（濃音）
- 第8回 第6課（複合母音）
- 第9回 第7課（下につく子音）
- 第10回 下につく子音を読む練習
- 第11回 第8課（連音）、第9課（鼻音化）
- 第12回 第10課（辞書の引き方）
- 第13回 第11課「私は学生です」
- 第14回 第11課「私は学生です」
- 第15回 前期のまとめ

成績評価の方法

授業への取り組み方（30%）、小テスト・口述テスト（20%）、定期試験（50%）により評価します。

履修にあたっての注意

ハングルの文字数は多いので、復習を中心に文字の習得に努めてほしい。辞書は6月以降毎回必携。欠席は4回まで。遅刻3回で1回分の欠席にカウントする。

40人を目的に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

高島淑郎『書いて覚える初級朝鮮語』（白水社、2002、ISBN：978-4-560-00581-1）

油谷幸利ほか『ポケットプログレッシブ韓日韓辞典』（小学館、2013、ISBN：978-4095061429）

授業のねらい

初めて韓国語を学ぶ学生を対象としたクラスです。これからの韓国語学習に必要な基礎的知識を身につけることを目標とします。具体的には、韓国語の文字の読み書きに始まり、基本的な行為に必要な、日常生活でもよく使われる文法事項、語彙・表現を学びます。この授業では特に「話す」「聞く」「読む」力を養うことに重点を置きます。

到達目標

1. 韓国語の文字（ハングル）を習得し、韓国語の読み書きができる。
2. 身近なものを表す単語や、短い文の意味が読んでわかる。
3. 自分に関する基本情報（名前、趣味、好き嫌い等）を尋ねる質問に答えることができる。簡単な語句を用いてそれらを伝えることができる。
4. 韓国の社会・文化についての基本的な知識を持っている。

授業方法

教科書に沿って進めます。基本的な文法・語彙は Web（10 分）で各自で事前学習してもらいます。授業では、事前学習で学んだ文法や表現を定着させるためのパターンドリルをはじめ、その日のテーマと場面に沿ったペアワークや小グループ活動を中心に行います。授業は主に韓国語で行います（一部日本語）。

授業計画

- 第 1 回 ①オリエンテーション(授業の概要・自己紹介)
②韓国語の文字 (=ハングル) の紹介
③挨拶表現 1
- 第 2 回 ①母音 1 練習
②子音 1 の練習
③挨拶表現 2
- 第 3 回 ①小テスト 1
②母音 1・子音 1 の復習
③子音 2 の練習
- 第 4 回 ①小テスト 2
②子音 1・2 の復習
③母音 2 の練習
- 第 5 回 ①小テスト 3
②母音 2 の復習
③子音 3 の練習
- 第 6 回 ①小テスト 4
②子音 3 の復習
③母音 3 の練習
- 第 7 回 ①小テスト 5
②母音 3 の復習
③母音 4 の練習
- 第 8 回 ①小テスト 6
②母音 3・4 の復習
③終声子音 (=パッチム) の練習
- 第 9 回 ①ハングルのまとめと短文読み練習
②文字の確認テスト
Unit 1 . 自己紹介②
・ 語彙:自己紹介関連 (国・言語等)
・ 文法・文型: 「～は～です (か)」
- 第10回 Unit 1 . 自己紹介①
・ 語彙: 「国籍」「言語」
・ 文法・文型: 「～は～です」「～ですか」
- 第11回 Unit 1 . 自己紹介②
- 第12回 Unit 1 . 自己紹介③
Unit 2 . 職業①
・ 語彙:職業名・職場
・ 文法・文型: 「～ではありません」「～も」
- 第13回 ・ 小テスト 7 (Unit 1 の語彙・文法等)
Unit 2 . 職業②

第14回 ・小テスト8 (Unit 2の語彙・文法等)

Unit 2 . 職業③

第15回 ①学習内容のまとめ

②期末テスト

成績評価の方法

「到達目標」の1～3の達成度を測る試験の結果(50%)、小テストの結果(40%)、授業への参加状況(10%)、により評価します。

ここで言う「小テスト」とは、①事前学習内容に関するテスト、②単元テストのことです。

履修にあたっての注意

①授業は主に韓国語で行います(一部日本語)

②会話が中心となる授業なので、積極的な授業参加が求められます。

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

金昌九『テーマで学ぶ韓国語』(駿河台出版、2018、ISBN:978-4-411-03117-4)

参考書

イ・ヒジャ『韓国語文法語尾・助詞辞典』(スリーイー、2010、ISBN:978-4-88319-519-0)

参考ホームページ

金先生の韓国語_初級 <https://quizlet.com/class/4429424/>(語彙練習サイト)

ハングル学び舎 <http://learning.hangeul.go.kr/letters> (ハングル学習サイト)

授業のねらい

この授業では、前半に簡単な会話練習を通じて、特に韓国語の発音およびハングル文字を修得してもらいます。たくさん口と手を動かすと同時に、韓国の文化・社会・歴史に関するトピックも紹介していく予定です。特に韓国の現代若者文化についても、時間をかけてお話ししたいと思っていますので、新たな韓国を知る機会になると思います。

到達目標

- ・ ハングルのしくみを理解し、文字を覚える。
- ・ 正しい発音練習を通じて、相手に通じる韓国語を身につける。
- ・ 韓国語の仕組みを理解するとともに、韓国文化についての知識を深める。

授業方法

この授業は、1年かけてしっかり韓国語の基礎を身につけるといった時間にしたと思います。そのため、前期では文字を修得しつつ、正しい発音ができるよう、ひとつひとつ丁寧に説明していきます。また、その週に学習した内容はその週に覚えるようにしたいと思いますので、毎回練習用のプリントを配り、授業の最後または宿題として翌週に提出してもらいます。

授業計画

- 第1回 ・ オリエンテーション：韓国語の概略をつかむ
 ・ 基本母音（10個）およびハングルについて
- 第2回 ・ 子音について：平音・激音・濃音について説明および発音の練習をします。
 ・ 基本母音と子音との組み合わせ(1)
- 第3回 ・ パッチムについて：韓国語の文字と音について、特に初声と終声にくる文字の発音の違いについて説明します。
- 第4回 ・ パッチムについて：発音の練習
 ・ 基本母音と子音との組み合わせ(2)
- 第5回 ・ 合成母音（11個）について
 ・ 文字の組み合わせ、単語の発音
 到達目標：「ハングルの文字を覚える」、「韓国語の音の仕組みを理解し、正しくきれいな発音を修得する」
- 第6回 ・ 発音の規則（その1）：有声音化〈1〉
 ・ 日本語のハングル表記について
- 第7回 ・ 辞書の引き方：辞書を用いて実際に韓国語の単語の意味を調べます。
 ・ 既習項目のまとめ
 到達目標：「韓国語の意味を辞書で調べることができる」、「自分の名前および日本の地名をハングルで書くことができる」
- 第8回 ・ 中間試験
 ・ 韓国の文化・社会・歴史、または K-pop に関するトピックを取り上げ紹介します。
- 第9回 ・ 第1課 アンニョンハセヨ。
 ・ 発音の規則（その2）：連音化
 到達目標：「韓国語で自己紹介ができる」
- 第10回 ・ 用言について：動詞・形容詞・指定詞・存在詞の説明
 ・ 指定詞の活用：肯定・否定の練習
 ・ 第2課：指定詞の応用
- 第11回 ・ 発音の規則（その3）：有声音化〈2〉
 ・ 存在詞の活用：肯定・否定の練習
 ・ 第3課：存在詞の応用
 到達目標：「韓国語の用言について理解し、日本語の用言との差異がわかる」
- 第12回 ・ 第4課 略待上称形(1)
 ・ 陽母音と陰母音の説明
 ・ 動詞の活用について（語幹のパッチムがある場合とない場合、縮約パターン1）
- 第13回 ・ 第5課 略待上称形(2)
 ・ 動詞の活用について（縮約パターン2）
 到達目標：「動詞・形容詞の活用および基本形に戻すことができる」
- 第14回 ・ 発音の規則（その4）：激音化
 ・ 既習文法の整理・まとめ
 到達目標：「辞書を引きながら、韓国語で簡単な作文ができる」、「用言の活用ができる」など
- 第15回 期末復習試験・まとめ

成績評価の方法

中間試験・期末試験（60%）、平常点（授業参加度・課題提出・小テストなど）（40%）を基準に総合的に評価します。

履修にあたっての注意

興味をもって積極的に取り込む姿勢がもっとも大事だと思います。一度忘れても、何度も何度も覚えなおせばいいのですから、諦めず、焦らないで、楽しく学んでいってください。

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

金菊熙・李順蓮・安蕙蓮・李旼映『いよいよ韓国語』（朝日出版社、2018、ISBN：978-4-255-55656-7）

教科書・参考書に関する備考

辞書は、指定のものでなくてかまいませんが、韓日・日韓が両方ひけるような辞書を用意してください。なお、辞書は第5回目以降の授業から必要になりますが、指定のものを購入するつもりの方は早めに購入するのがいいでしょう。またテストの時には辞書を持ち込み可とするので、なるべく購入することをお勧めします。

参考書

油谷幸利ほか（編）『ポケットプログレッシブ韓日・日韓辞典 第2版』（小学館、2013、ISBN：978-4095061429）

47711

初級韓国語Ⅱ

担当教員：松田由紀

1単位 後期

授業のねらい

初級韓国語Ⅰで学んだハングルをもとに、基本的な文法、会話文を学んでいきます。
初級韓国語Ⅰでは復習中心でしたが、Ⅱでは予習することが必要となってきます。

到達目標

簡単な文が作れる、数詞をマスターする。

授業方法

グループでの会話文の暗記、問題練習。2週に1回は小テスト。授業内に口述試験も行う。

授業計画

- 第1回 イントロダクション、前期の復習
- 第2回 第12課「私は学生ではありません」
- 第3回 第12課「私は学生ではありません」
- 第4回 第13課「3年生です」
- 第5回 第13課「3年生です」
- 第6回 ヒアリング練習
- 第7回 第14課「何と言いますか」
- 第8回 第14課「何と言いますか」
- 第9回 第15課「今、何時ですか」
- 第10回 第15課「今、何時ですか」
- 第11回 ドラマ鑑賞、ヒアリング練習
- 第12回 第16課「どこ行くのですか」
- 第13回 第16課「どこ行くのですか」、口述試験の準備
- 第14回 口述試験
- 第15回 後期のまとめ

成績評価の方法

授業への取り組み方（30%）、小テスト・口述テスト（20%）、定期試験（50%）により評価します。

履修にあたっての注意

テキストの文をスムーズに読めるよう、予習してほしい。辞書は毎回必携。欠席は4回まで。遅刻3回で1回分の欠席にカウントする。

40人を目標に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

高島淑郎『書いて覚える初級朝鮮語』（白水社、2002、ISBN：978-4-560-00581-1）

油屋幸利『ポケットプログレッシブ韓日韓辞典』（小学館、2013、ISBN：978-4095061429）

授業のねらい

『初級韓国語Ⅰ』を学んだ学生を対象としたクラスです。『初級韓国語』で学んだ基礎的知識を発展させ、様々なコミュニケーションの場で用いられる、より多様な表現を身につけることを目標とします。この授業では特に「話す」「聞く」「読む」力を養うことに重点を置きます。

到達目標

1. 身近な話題について平易な韓国語で書かれたテキストを読み、理解することができる。
2. ごく身近な話題であれば、基本的な表現を使って質疑応答することができる。
3. 自分に関する基本情報（名前、趣味、好き嫌いなど）について、簡単な語句を使った文章を書くことができる。
4. 韓国の社会・文化についての基本的な知識を持っている。

授業方法

教科書に沿って進めます。基本的な文法・語彙は Web 動画（10～20 分）で各自で事前学習してもらいます。授業では、事前学習で学んだ文法や表現を定着させるためのパターンドリルをはじめ、その日のテーマと場面に沿ったペアワークや小グループ活動を中心にを行います。授業は主に韓国語で行います（一部日本語）。

授業計画

- 第1回 ・ガイダンス
・前期の復習
- 第2回 Unit 3 . 家族①
・語彙:「家族の名称」「固有数詞1 (1-5)」
・文法・文型:「～がいます・あります」「～がいません・ありません」
・文化:「ウリ・オンニ・イモ」
- 第3回 Unit 3 . 家族②
- 第4回 Unit 3 . 家族③
Unit 4 . 家①
・語彙:「家周辺の場所名」「位置名詞1」
・文法・文型:「家はどこですか」「～にいます・あります」
・文化:「オンドル」
- 第5回 ・小テスト1 (Unit 3の文法・語彙など)
Unit 4 . 家②
- 第6回 Unit 4 . 家③
- 第7回 ・小テスト2 (Unit 4の文法・語彙など)
Unit 5 . 部屋①
・語彙:「家・部屋の中にある物」「位置2」「固有数詞2 (6-10)」
・文法・文型:「いくつ」「～と」
・文化:「韓国の「部屋」文化」
- 第8回 Unit 5 . 部屋②
- 第9回 Unit 5 . 部屋③
Unit 6 . 誕生日①
・語彙:「各種行事」「行事にすること」「漢数詞1 (1-30)」
・文法・文型:「～がいつですか」「～です・ます1」
・文化:「行事に関するクイズ」
- 第10回 ・小テスト3 (Unit 5の語彙・文法など)
Unit 6 . 誕生日②
- 第11回 Unit 6 . 誕生日③
- 第12回 ・小テスト4 (Unit 6の語彙・文法など)
Unit 7 . 日課①
・語彙:「日課」「時間 (固有数詞3 (1-12))」
・文法・文型:「～です・ます2」「～に行く・来る」
・文化:「韓国人大学生の日課」
- 第13回 Unit 7 . 日課②
- 第14回 ・小テスト5 (Unit 7の語彙・文法など)
Unit 7 . 日課③
- 第15回 ①学習内容のまとめ
②期末テスト

成績評価の方法

「到達目標」の1～3の達成度を測る試験の結果（30%）、小テストの結果（50%）、授業への参加状況（20%）、により評価します。

履修にあたっての注意

- ①授業は主に韓国語で行います（一部日本語）
 - ②会話が中心となる授業なので、積極的な授業参加が求められます。
- 40人を目標に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

金昌九『テーマで学ぶ韓国語』（駿河台出版、2018、ISBN：978-4-411-03117-4）

参考書

イ・ヒジャ『韓国語文法語尾・助詞辞典』（スリーエー、2010、ISBN：978-4-88319-519-0）

参考ホームページ

金先生の韓国語_初級 <https://quizlet.com/class/4429424/>（語彙練習サイト）

授業のねらい

この授業では、前期（初級韓国語Ⅰ）で修得したハングルを利用し、前期同様簡単な作文や会話の練習を行うとともに、文法が日本語とほとんど同じであるということを生かしてどんどん文法にチャレンジしてもらい、全15回の授業でできるだけ多く韓国語の文法を身につけてもらうことを目標とします。

到達目標

- ・動詞の活用などの文法事項を修得し、韓国語の仕組みについて理解する。
- ・会話練習および作文の時間をできるだけ多く設け、自然な韓国語に近づけることを目指す。

授業方法

後期でもたくさん口と手を動かすと同時に、ただ覚えるのではなくその仕組みを理解し、修得した文法事項をまた新たな文法にどんどん生かしていくようにしてください。また、前期と同様にその週に学習した内容に関して毎回練習用のプリントを配り、授業の最後または翌週に提出してもらいます。

授業計画

- 第1回 ・ 前期（初級韓国語Ⅰ）の復習
・ 疑問詞のまとめと練習
到達目標：「疑問詞を用いて簡単な質問ができ、その質問に答えられる」
- 第2回 ・ 第5課 略待上称形(3)
・ 動詞の活用について（辞書を使い基本形に戻す練習）
- 第3回 ・ 第5課 上称形
・ 「ハムニダ体」と「ヘヨ体」の説明
・ 動詞および形容詞の活用について
・ 「ハムニダ体」を基本形に戻す練習
- 第4回 ・ 発音の規則（その5）：鼻音化
・ □音と鼻音について
・ 漢字語数詞と固有語数詞について
・ 第6課 数詞（漢字語）
- 第5回 ・ 第6課 略待上称形(4)
・ 形容詞の活用について
到達目標：「辞書を使い「ハムニダ体」と「ヘヨ体」の文の韓日／日韓翻訳ができる」
- 第6回 ・ 個別の口頭試験（ハングル読み試験）を行う。
・ 発音の規則（その6）：濃音化
・ 既習文型の整理、および確認練習
- 第7回 ・ 中間試験
・ 韓国の文化や社会事情に触れることができる映像などを見る。
- 第8回 ・ 第7課 否定表現(1)
・ 否定形 + 動詞および形容詞
・ 指定詞、存在詞の否定形（復習）
到達目標：「用言により異なる否定形を修得し、否定文を作ることができる」
- 第9回 ・ 第8課 数詞（固有語）
・ 否定表現(2)
・ 動詞および形容詞 + 否定形
- 第10回 ・ 第8課 過去形(1)
・ 縮約パターンの説明
- 第11回 ・ 第8課 過去形(2)
・ 過去形を基本形に戻す練習
- 第12回 過去形を用いた文型の練習
・ 過去形の否定表現
・ 「ハムニダ体」と「ヘヨ体」への活用練習
到達目標：「辞書を引きながら、韓国語で過去形を用いた文の韓日／日韓翻訳ができる」など
- 第13回 ・ 韓国の映画を鑑賞する。
・ 個別の口頭試験（ハングル読み試験）を行う。
- 第14回 ・ 既習文法の整理・まとめ
・ 発音の規則（その7）：hの弱化について
・ hの発音について整理（激音化、弱化または消失する場合）
・ 発音の規則（その8）：流音化
- 第15回 ・ 期末復習試験・まとめ

成績評価の方法

中間試験・期末試験（60%）、平常点（口頭試験・授業参加度・課題提出・小テストなど）（40%）を基準に総合的に評価します。

履修にあたっての注意

興味をもって積極的に取り込む姿勢がもっとも大事だと思います。一度忘れても、何度も何度も覚えなおせばいいのですから、諦めず、焦らないで、楽しく学んでいってください。

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

金菊熙・李順蓮・安蕙蓮・李旼映『いよいよ韓国語』（朝日出版社、2018、ISBN：978-4-255-55656-7）

教科書・参考書に関する備考

辞書は、指定のものでなくてかまいませんが、韓日・日韓が両方ひけるような辞書を用意してください（初級韓国語 I で使用したものを引き続き使用できます）。なお、辞書は指定のものを購入するつもりの方は早めに購入するのがいいでしょう。またテストの時には辞書を持ち込み可とするのでなるべく購入することをお勧めします。

参考書

油谷幸利ほか（編）『ポケットプログレッシブ韓日・日韓辞典 第2版』（小学館、2013、ISBN：9784095061429）

授業のねらい

Students in this course will further develop their listening and speaking skills. Students will also look at culture and effective intercultural communication.

到達目標

Students will improve their fluency and ability to use English for real communication through group work, discussions, and interactive class activities. Students will increase their listening ability through both classwork and online listening activities.

授業方法

This class will utilize interactive class activities, group work, and discussion to help students develop fluency and confidence in their ability to use English for meaningful communication. Students will have access to additional online listening activities.

授業計画

- 第1回 Introduction-Orientation
- 第2回 Unit 1: greetings/subject-verb agreement review
- 第3回 Unit 1: extended self introduction, stress in country names and everyday words
- 第4回 Unit 2: personal information questions, open vs closed questions, relatives
- 第5回 Unit 2: adjective opposites, reading US currency/prices, ordering from a menu
- 第6回 Unit 3: using simple present to describe lifestyles, occupations
- 第7回 Unit 3: describing occupations, telling the time using various time expressions
- 第8回 Review, Midterm - conversation practice/delivery
- 第9回 Unit 4: describing and asking about routines, leisure activities
- 第10回 Unit 4: describing seasons, climate, seasonal activities, health habits
- 第11回 Unit 5: using adjectives of place to describe objects in rooms, singular vs plural
- 第12回 Unit 5: describing special features of a place, using prepositions to describe places on a street map
- 第13回 Unit 6: discussing abilities, simple past vs simple present
- 第14回 Unit 6: homonyms, addresses, short telephone conversations
- 第15回 Review, semester final - conversation practice/delivery

成績評価の方法

Active participation and assignments: 50%
 Midterm test: 25%
 Final test: 25%

履修にあたっての注意

Each student's success depends on her active participation in class.

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

Liz and John Soars 『American Headway 1』 (Oxford)

授業のねらい

Interactive English will build on the English language foundations the students have already acquired and apply them to real life situations and realistic conversations.

The course will focus on communication activities so active participation will be required.

到達目標

The goal of this course is that through enjoyable and relevant exercises the students will be able to raise their level of English so as to be able to carry out meaningful conversations with native English speakers and second language speakers from around the world.

授業方法

The class will use the textbook Four Corners level 2 . The book is an integrated 4 skills text with an emphasis on communicating on high interest topics and developing oral (speaking) fluency.

In addition to completing the book activities, students will be required to complete the teacher's own worksheets (that I will grade between classes) that will help ensure the students have acquired the learning aims in each unit. These worksheets typically involve pair work (or small group work) and usually contain communication activities that apply the grammar and vocabulary learned in each unit. Students are to understand that these worksheets influence their grade and active participation in the class is therefore needed. This is not a lecture course.

授業計画

- 第1回 Introductions, meeting classmates, explaining class system
Unit 1 My Interests, free time, simple present tense review.
- 第2回 Unit 1 Sports and exercise habits, Intonation in 'Wh-' Questions.
- 第3回 Unit 2 Talk about people's personalities, Say if they think something is true or not
- 第4回 Unit 2 Describing your own personality and appearance
- 第5回 Unit 3 Talk about the weather and seasons, ask for and give opinions
- 第6回 Unit 3 Talk about what they would like to do, adverbs of intensity and quantifiers with verbs.
- 第7回 Mid term test (Units 1 and 2)
Class project (group presentation topic to be decided)
- 第8回 Unit 4 Ask and answer questions about their home, make and accept requests, quantifiers before nouns (How many / much)
- 第9回 Unit 4 Talk about chores, seperable phrasal verbs.
Work on Presentation
- 第10回 Unit 5 Give and follow instructions, say how they feel, imperatives, intonation in requests
- 第11回 Mid term test (Units 3 and 4)
Unit 5 Talk about managing stress. Pronunciation - reduction of 'and'.
- 第12回 Unit 6 Talking about TV and giving opinions. Verb + infinitive or gerund.
- 第13回 Unit 6 Agreeing and disagreeing with an opinion, describing future plans.
- 第14回 Review of first term classes.
Mid term test (Units 5 and 6)
- 第15回 Presentation of students final project.

成績評価の方法

Class participation and activities: 30%

Mid-term quizzes: 50%

Final exam 20%

履修にあたっての注意

40 人を目的に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

Jack Richards and David Bohlke 『Four Corners student's book 2 with self study CD-ROM』 (Cambridge University Press、2012、ISBN : 978-0-521-12716-5)

授業のねらい

Interactive English will build on the English language foundations the students have already acquired and apply them to real life situations and realistic conversations.

The course will focus on communication activities so active participation will be required.

到達目標

The goal of this course is that through enjoyable and relevant exercises the students will be able to raise their level of English so as to be able to carry out meaningful conversations with native English speakers and second language speakers from around the world.

授業方法

The class will use the textbook Talk a Lot, Book One. The book is an integrated 4 skills text with an emphasis on communicating on high interest topics and developing oral (speaking) fluency.

In addition to completing the book activities, students will be required to complete the teacher's own worksheets (that I will grade between classes) that will help ensure the students have acquired the learning aims in each unit. These worksheets typically involve pair work (or small group work) and usually contain communication activities that apply the grammar and vocabulary learned in each unit. Students are to understand that these worksheets influence their grade and active participation in the class is therefore needed. This is not a lecture course.

授業計画

- 第1回 Introductions.
What to do when you do not understand
Talking about Yourself
- 第2回 Unit 1 Getting to know each other
- 第3回 Unit 1 Getting to know each other
Continued
- 第4回 Unit 2 Talking about Interests
- 第5回 Unit 2 Talking about Interests
Continued
- 第6回 Speaking Test 1
- 第7回 Presentation 1
- 第8回 Unit 3 Talking about family
- 第9回 Unit 4 Talking about People
- 第10回 Unit 5 Talking about Work
- 第11回 Unit 5 Talking about Work
Continued
- 第12回 Unit 6 Talking about Past Experiences
- 第13回 Unit 6 Talking about Past Experiences
Continued
- 第14回 Speaking Test 2
- 第15回 Presentation 2

成績評価の方法

Class participation and activities: 30%

Speaking test 1: 15%

Presentation 1: 20%

Speaking test 2: 15%

Presentation 2: 20%

履修にあたっての注意

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

David Martin 『Talk a Lot Book One』 (EFL Press、2003、ISBN : 4580244420117)

授業のねらい

Students in this course will further develop their listening and speaking skills. Students will also look at culture and effective intercultural communication.

到達目標

Students will improve their fluency and ability to use English for real communication through group work, discussions, and interactive class activities. Students will increase their listening ability through both classwork and online listening activities.

授業方法

This class will utilize interactive class activities, group work, and discussion to help students develop fluency and confidence in their ability to use English for meaningful communication. Students will have access to additional online listening activities.

授業計画

- 第1回 Introduction
- 第2回 Unit 1: preparing for an overseas trip
- 第3回 Unit 1: continue...making reservations
- 第4回 Unit 2: Asking about facilities, location, hours
- 第5回 Unit 2: continue...getting around the campus
- 第6回 Unit 3: Directions
- 第7回 Unit 3: continue...giving directions using a map
- 第8回 Review...midterm
- 第9回 Unit 4: eating out
- 第10回 Unit 4: continue...ordering, asking for description
- 第11回 Unit 5: vacation activities
- 第12回 Unit 5: continue...renting, purchasing
- 第13回 Unit 6: public transportation
- 第14回 Unit 6: continue...asking about times, locations, costs
- 第15回 Review...semester final

成績評価の方法

Active participation and assignments: 50%
 Midterm test: 25%
 Final test: 25%

履修にあたっての注意

Each student's success depends on her active participation in class.

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

Gershon, Mares, Walker 『On the Go』 (Pearson Longman, 2012、ISBN : 978-962-00-5254-5)

授業のねらい

Students in this course will further develop their listening and speaking skills. Students will also look at culture and effective intercultural communication.

到達目標

Students will improve their fluency and ability to use English for real communication through group work, discussions, and interactive class activities. Students will increase their listening ability through both classwork and online listening activities.

授業方法

This class will utilize interactive class activities, group work, and discussion to help students develop fluency and confidence in their ability to use English for meaningful communication. Students will have access to additional online listening activities.

授業計画

- 第1回 Introduction, review
- 第2回 Unit 7: regular verbs vs irregular verbs - past and present, open questions for past events
- 第3回 Unit 7: reading analysis, asking past questions about a story, verb-pairs, noun-noun pairs
- 第4回 Unit 8: past negative, 1 st and 3 rd person
- 第5回 Unit 8: analyzing passages describing past events, names of special events and common words for time
- 第6回 Unit 9: describing food, count vs noncount nouns, food shopping
- 第7回 Unit 9: discussing food habits, analyzing a passage about food habits in different countries, dinner-table expressions
- 第8回 Review, Midterm, conversation practice and delivery
- 第9回 Unit 10: adjectives to describe people, clothing, pronouns (subject, possessive)
- 第10回 Unit 10: analyzing a song, analogy, describing feelings
- 第11回 Unit 11: using future tense to express intentions, using comparatives and superlatives to describe places
- 第12回 Unit 11: analyzing passages about extreme activities, weather expressions
- 第13回 Unit 12: using past perfect to describe experiences, everyday activities vs special activities
- 第14回 Unit 12: analyzing passages about extreme experiences, travel related vocabulary
- 第15回 Review, semester final,

成績評価の方法

Active participation and assignments: 50%
 Midterm test: 25%
 Final test: 25%

履修にあたっての注意

Each student's success depends on her active participation in class.

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

Liz and John Soars 『American Headway 1』 (Oxford)

授業のねらい

Interactive English will build on the English language foundations the students have already acquired and apply them to real life situations and realistic conversations.

The course will focus on communication activities so active participation will be required.

到達目標

The goal of this course is that through enjoyable and relevant exercises the students will be able to raise their level of English so as to be able to carry out meaningful conversations with native English speakers and second language speakers from around the world.

授業方法

The class will use the textbook Four Corners level 2. The book is an integrated 4 skills text with an emphasis on communicating on high interest topics and developing oral (speaking) fluency.

In addition to completing the book activities, students will be required to complete the teacher's own worksheets (that I will grade between classes) that will help ensure the students have the learning aims in each unit. These worksheets typically involve pair work (or small group work) and usually contain communication activities that apply the grammar and vocabulary learned in each unit. Students are to understand that these worksheets influence their grade and active participation in the class is therefore needed. This is not a lecture course.

授業計画

- 第1回 Second semester orientation. Talking about the holidays.
Unit 7 Comparative adjectives Role play bargaining.
- 第2回 Unit 7 Discussing fashion and shops. Pronunciation of linked sounds.
- 第3回 Unit 8 Giving and asking for recommendations, adjectives to describe cities.
- 第4回 Unit 8 Superlative adjectives, Discussion of possible things to do.
- 第5回 Unit 9 Talk about people from the past, express certainty and uncertainty. Pronunciation of -ed endings.
- 第6回 Mid term test (units 7 and 8)
Unit 9 Describing people they admire and people who have made a difference.
- 第7回 Unit 10 Talking about food, using the present perfect to talk about experiences.
- 第8回 Unit 10 Ordering food and checking information. Using articles.
- 第9回 Unit 11 Talk about their movie opinions, ask and give suggestions.
- 第10回 Unit 11 Talking about music, , using so, too, either and neither.
- 第11回 Mid term test (units 9 and 10)
Unit 12 Give reasons for personal changes, reacting to good and bad news.
- 第12回 Unit 12 Talking about future predictions. Infinitives of purpose, 'will' for predictions 'may' and 'might' for possibility. Pronunciation - contraction of 'will'.
- 第13回 Unit 12 Talking and writing about dreams and aspirations.
- 第14回 Mid term test (units 11 and 12)
Review lesson
- 第15回 Review and final testing

成績評価の方法

Class participation and activities: 30%

Mid-term quizzes: 50%

Final exam 20%

履修にあたっての注意

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

Jack Richards and David Bohlke 『Four Corners student's book 2 with self study CD-ROM』 (Cambridge University Press、2012、ISBN : 978-0-521-12716-5)

授業のねらい

Interactive English will build on the English language foundations the students have already acquired and apply them to real life situations and realistic conversations.

The course will focus on communication activities so active participation will be required.

到達目標

The goal of this course is that through enjoyable and relevant exercises the students will be able to raise their level of English so as to be able to carry out meaningful conversations with native English speakers and second language speakers from around the world.

授業方法

The class will use the textbook Talk a Lot, Book One. The book is an integrated 4 skills text with an emphasis on communicating on high interest topics and developing oral (speaking) fluency.

In addition to completing the book activities, students will be required to complete the teacher's own worksheets (that I will grade between classes) that will help ensure the students have acquired the learning aims in each unit. These worksheets typically involve pair work (or small group work) and usually contain communication activities that apply the grammar and vocabulary learned in each unit. Students are to understand that these worksheets influence their grade and active participation in the class is therefore needed. This is not a lecture course.

授業計画

- 第1回 Unit 7 Talking about Sports
- 第2回 Unit 8 Talking about Other Countries
- 第3回 Unit 9 Talking about Experiences
- 第4回 Unit 9 Talking about Experiences
Continued
- 第5回 Unit 10 Talking about Places
- 第6回 Speaking Test 1
- 第7回 Presentation 1
- 第8回 Unit 11 Traveling to Hawaii
- 第9回 Unit 12 Talking about Japanese Things
- 第10回 Unit 13 Talking about Future Events
- 第11回 Unit 13 Talking about Future Events
Continued
- 第12回 Unit 14 Talking about School
- 第13回 Unit 15 Travelling to Thailand
- 第14回 Speaking Test 1
- 第15回 Presentation 2

成績評価の方法

- Class participation and activities: 30%
- Speaking test 1: 15%
- Presentation 1: 20%
- Speaking test 2: 15%
- Presentation 2: 20%

履修にあたっての注意

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

David Martin 『Talk a Lot Book One』 (EFL Press、2003、ISBN : 4580244420117)

47244

Interactive English B

担当教員：C.B.Simons

1単位 後期

授業のねらい

Students in this course will further develop their listening and speaking skills. Students will also look at culture and effective intercultural communication.

到達目標

Students will improve their fluency and ability to use English for real communication through group work, discussions, and interactive class activities. Students will increase their listening ability through both classwork and online listening activities.

授業方法

This class will utilize interactive class activities, group work, and discussion to help students develop fluency and confidence in their ability to use English for meaningful communication. Students will have access to additional online listening activities.

授業計画

- 第1回 Introduction
- 第2回 Unit 8: Hotel check in activity
- 第3回 Unit 8: Hotel check in activity (continued)
- 第4回 Unit 9: Shopping situations
- 第5回 Unit 9: continue...shopping situations
- 第6回 Unit 10: Airport situations
- 第7回 Unit 10: continue...airport situations
- 第8回 Review...midterm
- 第9回 Unit 11: Talking about family and hometown
- 第10回 Unit 11: Talking about family and hometown...continue
- 第11回 Unit 12: Deciding on and choosing activities
- 第12回 Unit 12: Deciding on and choosing activities...continued
- 第13回 Unit 16: Talking about future plans
- 第14回 Unit 16: Talking about future plans...continued
- 第15回 Review...semester final

成績評価の方法

Active participation and assignments: 50%
Midterm test: 25%
Final test: 25%

履修にあたっての注意

Each student's success depends on her active participation in class.

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

Gershon, Mares, Walker 『On the Go』 (Pearson Longman、2012、ISBN : 978-962-00-5254-5)

授業のねらい

This course teaches an extensive range of reading skills and strategies in order to prepare students for college reading. The course has a strong focus on vocabulary-building and key comprehension issues such as contrast, cause and effect, exemplifications, collocations, chronological timelines, and identifying main ideas. The course also has an emphasis on critical thinking and increased reading speed. This course utilises Units 1 - 4 of the Textbook.

到達目標

Students will be able to:
 Identify paragraph topics.
 Identify and comprehend use of exemplification.
 Identify and comprehend use of cause and effect.
 Identify and comprehend use of contrast.
 Predict and infer meaning from context.

授業方法

The course follows the path set by text book supplemented by teacher-led interactive discussion. At the outset of each unit, students are presented with and practice key reading and vocabulary-building skills. As students read the texts following these sections, they apply these skills by completing exercises in boxes in the margins of the readings, so that students literally have to apply the newly-learned skills 'while reading.' In class group and pair discussion will be undertaken to develop critical thinking skills. Students will be expected to read the required texts as homework in preparation for the next week's class in order to maximise the time devoted to classroom analysis.

授業計画

- 第1回 Orientation for the Course. Introduction of assessment, expectations, and homework.
- 第2回 Topic: CROSSING BORDERS
Skill: Finding the meaning of words.
Reading 1 .
- 第3回 Topic: CROSSING BORDERS (cont.)
Skill: Finding the meaning of words. (cont.)
Reading 2 .
- 第4回 Topic: CROSSING BORDERS
Skill: Finding the topic of a paragraph.
Reading 3 .
- 第5回 Topic: NAMES
Skill: Noticing parts words.
Reading 1 .
- 第6回 Topic: NAMES (cont.)
Skill: Noticing parts words. (cont.)
Reading 2 .
- 第7回 Topic: NAMES (cont.)
Skill: Finding the main idea of a paragraph.
Reading 3 .
- 第8回 In-class Reading Activities and Test for Assessment I.
- 第9回 Topic: FOOD
Skill: Collocations
Reading 1 .
- 第10回 Topic: FOOD (cont.)
Skill: Collocations (cont.)
Reading 2 .
- 第11回 Topic: FOOD (cont.)
Skill: Finding supporting details.
Reading 3 .
- 第12回 Topic: TRANSPORTATION
Skill: Phrases
Reading 1 .
- 第13回 Topic: TRANSPORTATION (cont.)

-
- Skill: Phrases (cont.)
Reading 2 .
- 第14回 Topic: TRANSPORTATION (cont.)
Skill: Contrast
Reading 3 .
- 第15回 In-class Reading Activities and Test for Assessment II .

成績評価の方法

20% Attendance and Participation. 20% Homework and Reading Preparation 30% In-Class Assessment I 30% In-Class Assessment II .

履修にあたっての注意

40 人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

Pakenham, Williams, McEntire, Wiese, Vittorio 『Making Connections: Skills and Strategies for Academic Reading Level 1 .』 (Cambridge University Press, 2013, ISBN : 9781107683808)

授業のねらい

This class is designed to help prepare students develop solid academic reading skills.

Ample opportunities will be provided to practice the other three skills (speaking, listening, and writing) as well. Lessons will include various exercises and group activities that utilize video clips and other supplementary materials.

As part of the reading focus, extensive reading will also be introduced at the beginning of the course to help students improve reading fluency and, above all, learn the joy of reading in English.

到達目標

At the end of the course, students should be able to:

- understand basic academic vocabulary in context
- understand basic structures of academic texts
- understand basic paragraph structures
- find main ideas in a text
- find supporting details for main ideas
- scan for specific information
- use the library and online resources to research issues of interest
- synthesize research results to help start forming and expressing one's ideas

授業方法

The course follows the textbook but is also supplemented by teacher's own resources (specifically reading texts either sourced from topical news stories or topics considered to be of interest and relevance to the students). In addition students will practice weekly speed reading exercises to improve their ability to scan for specific information.

Furthermore students will be expected to keep a reading journal that will form the basis for group discussion and to encourage self study on materials that they have chosen themselves. This journal will be monitored and graded by the instructor.

授業計画

- 第1回 Orientation and introductory reading exercise 'Coffee Culture'. Speed reading exercise 1
- 第2回 Unit 1 Crossing borders
Reading 1
- 第3回 Unit 1 Crossing borders (continued)
Reading 2
- 第4回 Teachers supplementary text
- 第5回 Unit 2 Names
Reading 1
- 第6回 Unit 2 Names (continued)
Reading 2
- 第7回 Teachers supplementary text
- 第8回 Unit 3 Food
Reading 1
- 第9回 Unit 3 Food (continued)
Reading 2
- 第10回 Teachers supplementary text
- 第11回 Unit 4 Transport
- 第12回 Unit 4 Transport (continued)
- 第13回 Students to introduce readings they found from media outlets (as homework) and introduce to the class
- 第14回 Teachers supplementary text
- 第15回 Teachers supplementary text
Review of the semester

成績評価の方法

10% Class participation, 40% Reading Journal, 50% class exercises (quizzes and assignments)

履修にあたっての注意

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

Jessica Williams 『Making Connections Level 1 Student's Book Skills and Strategies for Academic Reading』
(Cambridge University Press, 2013, ISBN : 9781107683808)

授業のねらい

This course teaches an extensive range of reading skills and strategies in order to prepare students for college reading. The course has a strong focus on vocabulary-building and key comprehension issues such as contrast, cause and effect, exemplifications, collocations, chronological timelines, and identifying main ideas. The course also has an emphasis on critical thinking and increased reading speed. This course utilises Unit 5 - 8 of the Text.

到達目標

Students will be able to:
 Identify paragraph topics.
 Identify and comprehend use of exemplification.
 Identify and comprehend use of cause and effect.
 Identify and comprehend use of contrast.
 Predict and infer meaning from context.

授業方法

The course follows the path set by text book supplemented by teacher-led interactive discussion. At the outset of each unit, students are presented with and practice key reading and vocabulary-building skills. As students read the texts following these sections, they apply these skills by completing exercises in boxes in the margins of the readings, so that students literally have to apply the newly-learned skills 'while reading.' In class group and pair discussion will be undertaken to develop critical thinking skills. Students will be expected to read the required texts as homework in preparation for the next week's class in order to maximise the time devoted to classroom analysis.

授業計画

- 第1回 Orientation for the Course. Introduction of assessment, expectations, and homework.
 第2回 Topic: SLEEP
 Skill: Finding the meaning of words.
 Reading 1 .
 第3回 Topic: SLEEP (cont.)
 Skill: Finding the meaning of words. (cont.)
 Reading 2 .
 第4回 Topic: SLEEP (cont.)
 Skill: Finding causes and Effects.
 Reading 3 .
 第5回 Topic: MUSIC
 Skill: Noticing parts words.
 Reading 1 .
 第6回 Topic: MUSIC (cont.)
 Skill: Noticing parts words. (cont.)
 Reading 2 .
 第7回 Topic: MUSIC (cont.)
 Skill: Chronology and Organising Notes in Timelines.
 Reading 3 .
 第8回 In-class Reading Activities and Test for Assessment I.
 第9回 Topic: NATURAL DISASTERS
 Skill: Collocations
 Reading 1 .
 第10回 Topic: NATURAL DISASTERS (cont.)
 Skill: Collocations (cont.)
 Reading 2 .
 第11回 Topic: NATURAL DISASTERS (cont.)
 Skill: Organising notes in Outlines.
 Reading 3 .
 第12回 Topic: LEISURE
 Skill: Phrases
 Reading 1 .
 第13回 Topic: LEISURE (cont.)
 Skill: Phrases (cont.)

-
- Reading 2 .
第14回 Topic: LEISURE (cont.)
Skill: Reading Quickly and Skimming
Reading 3 .
第15回 In-class Reading Activities and Test for Assessment II .

成績評価の方法

20% Attendance and Participation . 20% Homework and Reading Preparation 30% In-Class Assessment I 30% In-Class Assessment II .

履修にあたっての注意

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

Pakenham, Williams, McEntire, Wiese, Vittorio 『Making Connections: Skills and Strategies for Academic Reading Level 1 .』 (Cambridge University Press, 2013, ISBN : 9781107683808)

授業のねらい

This class is designed to help prepare students develop solid academic reading skills. Ample opportunities will be provided to practice the other three skills (speaking, listening, and writing) as well. Lessons will include various exercises and group activities that utilize video clips and other supplementary materials.

As part of the reading focus, extensive reading will also be introduced at the beginning of the course to help students improve reading fluency and, above all, learn the joy of reading in English.

到達目標

At the end of the course, students should be able to:

- understand basic academic vocabulary in context
- understand basic structures of academic texts
- understand basic paragraph structures
- find main ideas in a text
- find supporting details for main ideas
- scan for specific information
- use the library and online resources to research issues of interest
- synthesize research results to help start forming and expressing one's ideas

授業方法

The course follows the textbook but is also supplemented by teacher's own resources (specifically reading texts either sourced from topical news stories or topics considered to be of interest and relevance to the students). These supplementary texts will also include opportunities for group discussion and listening practice.

In addition students will practice weekly speed reading exercises to improve their ability to scan for specific information.

Furthermore students will be expected to keep a reading journal that will form the basis for group discussion and to encourage self study on materials that they have chosen themselves. This journal will be monitored and graded by the instructor.

授業計画

- 第1回 Teachers supplementary reading materials and 2nd semester orientation
- 第2回 Unit 5 Sleep
Reading 1
- 第3回 Unit 5 Sleep (continued)
Reading 2
- 第4回 Teachers supplementary text
- 第5回 Unit 6 Music
Reading 1
- 第6回 Unit 6 Music (continued)
Reading 2
- 第7回 Teachers supplementary text
- 第8回 Unit 7 Natural disasters
Reading 1
- 第9回 Unit 7 Natural disasters (continued)
Reading 2
- 第10回 Teachers supplementary text
- 第11回 Unit 8 Leisure
- 第12回 Unit 8 Leisure (continued)
- 第13回 Student project
- 第14回 Teachers supplementary text
- 第15回 Teachers supplementary text
Review of the course

成績評価の方法

10% Class participation, 40% Reading Journal, 50% class exercises (quizzes and assignments)

履修にあたっての注意

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

Jessica Williams 『Making Connections Level 1 Student's Book Skills and Strategies for Academic Reading』
(Cambridge University Press, 2013、ISBN : 9781107683808)

授業のねらい

このコースは、グローバル化が進む世界で国際社会の一員として、地球規模で重要な意味を持つ諸問題について客観的かつ論理的に思考し、自分自身の言葉で意見を述べ、文化・社会的背景や考えの異なる人々と意義のある対話をするための英語力と批判的思考スキル (critical thinking skills) のしっかりとした基盤を作ることを目的としています。従って、英語「を」学ぶのではなく、英語「で」あるいは英語「を通して」、日常生活に影響を及ぼす諸問題について学び、考察し、議論し、提案し、評価する、一連のプロセスを最重要視します。

到達目標

コース終了までに、以下のスキル・能力の向上を目指します。

- 与えられたテーマあるいは自分で重要だと考えるテーマについて、必要な情報収集とリサーチを主に英語で行い、専門家の視点や考察を正確に理解した上で批判的に吟味し評価する力（リーディング力、リスニング力の涵養を含む）
- 適切なリサーチに基づき自分自身の意見や考えを構築し、それを英語で他者に効果的に伝わるように対話、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなどで発信するスピーキング力の基礎
- リサーチに基づいたディスカッションや対話を踏まえて、特定のテーマに関する議論の内容を整理・要約したり、それについての自分の意見を簡潔にまとめたり、具体的なトピックについて短いレポートを書いたりするライティング力
- 自分と考えの異なる他者と協同的に議論や課題に取り組み、円滑な意思疎通をはかり、相互理解を深めることのできる総合的コミュニケーション力

授業方法

- テーマ主導型の授業 (theme-based class) であるため、こちらで設定した主要テーマについて、各自が情報収集とリサーチを能動的に行い、その結果に基づいたディスカッションや発表の機会を設け、最後に自分の考えを文章にまとめる、という一連のプロセスが基本です。
 - 学期後半からは、さらに履修者が自分自身の取材したいテーマを決め、それがなぜ重要な問題なのか、どのような議論がこれまでなされてきたのか、それについて自分がどう評価し、自分自身として読者に伝えたい点は何か、といった内容を検討し、実際に取材とリサーチを行った上で、英文で記事を書いてもらいます。
 - 事前学習 (所要時間 1～2 時間程度) としてリーディング課題を読んで自分の意見のある程度まとめた上で授業に参加し、クラスでグループ・ディスカッションを通じて意見交換をし様々な観点や見方に触れた後、事後学習 (1～2 時間程度) としてディスカッションの振り返りやトピックの再まとめなどを行います。
- <課題へのフィードバック>
- 提出してもらった短い英文の課題には簡単なコメントをオンラインで閲覧できるようにします。
 - 取材の準備と記事の執筆の際には、授業内で個別に相談する時間を設けます。
 - 最後に提出する英文記事については、詳しいコメントをオンラインで閲覧できるようにします。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 ニュースの読み方：Headlines について
News of the Week (1)
- 第3回 ニュースの読み方：Lead とは
News of the Week (2)
- 第4回 ニュースの読み方：逆三角形の情報構造とは
News of the Week (3)
- 第5回 ニュースの読み方：Perspective (大局観) とは
News of the Week (4)
- 第6回 ニュースの読み方：情景の描写と動的表現について
気になるニュースの紹介(1)
- 第7回 ニュースの読み方：情報のソースについて
気になるニュースの紹介(2)
- 第8回 ニュースの読み方：ニュースと文化について
気になるニュースの紹介(3)
- 第9回 自分たちの新聞を作ろう：テーマについてのブレインストーミング
- 第10回 自分たちの新聞を作ろう：リサーチの共有と取材の準備
- 第11回 自分たちの新聞を作ろう：取材結果の共有と編集会議
- 第12回 自分たちの新聞を作ろう：ニュースの書き方(1)
- 第13回 自分たちの新聞を作ろう：ニュースの書き方(2)
- 第14回 自分たちの新聞を作ろう：ニュースの書き方(3)
- 第15回 自分たちの新聞を作ろう：新聞を発行
Final Review

成績評価の方法

テーマに関する情報収集・リサーチ（15%）、テーマに関するまとめ（10%）、アクティビティやディスカッションへの参加態度（15%）、取材とニュース記事執筆・編集（60%）

履修にあたっての注意

- 学生主体の授業（student-centered class）なので、受け身の姿勢ではなく、自分の学びに対して能動的に取り組む姿勢を高く評価します。
- 授業で使う主たる言語（main classroom language）は英語ですが、日本語の使用を禁止する訳ではなく、必要に応じて使い分け、学習の最適化を図ります。
- 40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。
- 外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書・参考書に関する備考

適宜教材を配布します。

授業のねらい

このコースは、専門の入り口となるような内容を英語で学びながら知識を身につけ、同時に、そうした内容について説明したり議論したりする英語力の基礎を養成することをねらいとしています。すなわち、内容（専門分野の基礎知識）と言語（英語を使うスキルや能力）の両方を主眼に据えた（dual-focused）学習を目指しています。それが、CLIL（content and language integrated learning）の基本理念です。従って、単純に英語でのコミュニケーションスキルを身につけるのではなく、知的関心を引くようなテーマやトピックについてある程度体系的に学びながら、ディスカッションや対話を通して新たな発見をしていく中で、自分自身の価値判断や行動の基準枠（frame of reference）を英語という言語を媒介にして広げていくプロセスを最重要視します。

到達目標

- コース終了までに、以下のスキル・能力の向上を目指します。
- 関連トピックの専門的情報を主に英語で理解し、その知識を具体的なケースへ応用する力
- 自分が既に持っている知識、技能、態度、興味、経験を主に英語を使って応用する力
- 特定のジャンルにおける具体的な伝達機能を果たすために必要な英語の言語形式と語彙についての知識を獲得し応用する力
- 短めの文章を英語で読んでまとめたり、それについて議論する力
- －自分と考えの異なる他者と協同的に議論や課題に取り組み、円滑な意思疎通をはかり、相互理解を深めることのできる総合的コミュニケーション力

授業方法

- テーマ主導型の授業（theme-based class）であるため、こちらで設定した主要テーマについて、各自が情報収集とリサーチを能動的に行い、その結果に基づいたディスカッションやプレゼンテーションの機会を設け、最後に自分の考えを文章にまとめ、という一連のプロセスが基本です。
 - 学期後半からは、さらに履修者が自分自身のテーマやトピックを決め、それがなぜ重要な問題なのか、どのような議論がこれまでなされてきたのか、それについて自分がどう評価し、自分自身として訴えたい点は何か、といった内容をプレゼンテーションとして発表し、互いに意見交換し合う機会も設けます。
 - 事前学習（所要時間1～2時間程度）としてトピックに関する主に英語によるリサーチを行い、それに対する自分の意見のある程度まとめた上で授業に参加し、クラスでグループ・ディスカッションを通じて意見交換をし様々な観点や見方に触れた後、事後学習（1～2時間程度）としてディスカッションの振り返りやトピックの再まとめなどを行います。
- <課題へのフィードバック>
- 提出してもらった英文の課題には簡単なコメントをオンラインで閲覧できるようにします。
 - プレゼンテーションについては、クラスメイトからのピア評価と、ルーブリックを使った自己評価、実際のプレゼンテーションに関する教員からのコメントにより、良かった点、さらに改善できる点を伝えます。
 - レポート等の提出物に対しては、提出後2～3週間以内にコメントを添えて返却します。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、授業の進め方の説明、自己紹介、アイスブレイカー（打ち解け合うためのアクティビティ）
- 第2回 テーマ(1) Japanese pop music 1: Sharing your research, discussing your findings（リサーチ結果の共有とそれについてのディスカッション）
- 第3回 テーマ(1) Japanese pop music 2: Understanding others' views, synthesizing and evaluating ideas（他者の見解を理解し、それらの考えを統合・評価する）
- 第4回 テーマ(1) Japanese pop music 3: Small group discussions（小グループでのディスカッション）
- 第5回 テーマ(1) Japanese pop music 4: Individual presentations and reflections（個人プレゼンテーションと振り返り）
- 第6回 テーマ(2) Japanese authors 1: Sharing your research, discussing your findings
- 第7回 テーマ(2) Japanese authors 2: Understanding others' views, synthesizing and evaluating ideas
- 第8回 テーマ(2) Japanese authors 3: Small group discussions
- 第9回 テーマ(2) Japanese authors 4: Individual presentations and reflections
- 第10回 テーマ(3) Japanese nonverbal communication 1 - Preparations for reading
- 第11回 テーマ(3) Japanese nonverbal communication 2 - Cultural themes
- 第12回 テーマ(3) Japanese nonverbal communication 3 - Propositional survey
- 第13回 テーマ(3) Japanese nonverbal communication 4 - Individual presentations and reflections
- 第14回 テーマ(3) Japanese nonverbal communication 5 - Case studies
- 第15回 Final review

成績評価の方法

テーマに関する小課題 (20%)、アクティビティやディスカッションへの参加態度 (20%)、プレゼンテーション (45%)、期末課題 (15%)

履修にあたっての注意

- 学生主体の授業 (student-centered class) なので、受け身の姿勢ではなく、自分の学びに対して能動的に取り組む姿勢を高く評価します。
- 授業で使う主たる言語 (main classroom language) は英語ですが、日本語の使用を禁止する訳ではなく、必要に応じて使い分け、学習の最適化を図ります。
- 40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。
- 外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書・参考書に関する備考

適宜教材を配布します。

授業のねらい

ドイツ語を学び、最終的に自らの専門分野に活かすことができるようになれば、これほど望ましいことはありません。しかし、そのようなレベルに到達することは容易ではなく、大学での授業に参加するのみならず、自ら興味を持ち、学ぶ姿勢を身に着けることが必要となります。この姿勢を身に着ける前に躓かぬよう、授業ではドイツ語を聞き、読み、話し、書く練習を、ていねいに幅広く行います。初級ドイツ語に引き続き、将来飛躍的にドイツ語力を伸ばすための基礎を固めること、そして問題演習を行うことで応用力を付け始めることがねらいとなります。

到達目標

1. ドイツ語の基礎文法、基礎語彙の習得に加え、応用力を身に着けることができる。
2. ドイツの文化、生活、ドイツ留学などの新たな分野、可能性に興味を抱き、意欲的にドイツ語学習に取り組むことができる。
3. ドイツ映画や音楽などを通じて、自らドイツ語に触れる機会を作ることができる。

授業方法

- ・一つの単元に三回の授業を当てることで、学んだことを確実に身に着けていきます。
- ・新出単語を自ら調べて、授業の予習をすること（15分）、そして授業内容を定着させるために復習をすること（30分）が必要となります。
- ・単元ごとの対話文を参考にして独作文に取り組み、添削後に返却します。間違えた個所に気付いてもらい、ミスが繰り返されないようにします。
- ・ドイツ語を意欲的に学ぶことができるよう、ドイツの文化や生活の様子などについてお話しし、ドイツ映画や音楽を紹介します。
- ・短期、長期ドイツ留学のきっかけとなるよう、留学に関するテーマなども取り上げてお話しします。

授業計画

- 第1回 ガイダンス、初級ドイツ語の復習(1)
 第2回 初級ドイツ語の復習(2)
 第3回 初級ドイツ語の復習(3)
 第4回 zu 不定詞、再帰代名詞(1) — 文法、対話文読解
 第5回 zu 不定詞、再帰代名詞(2) — 練習問題
 第6回 zu 不定詞、再帰代名詞(3) — 練習問題、作文
 第7回 聞き取り問題演習(1) — 対話の内容 I
 第8回 動詞の3基本形、過去形(1) — 文法、対話文読解
 第9回 動詞の3基本形、過去形(2) — 練習問題
 第10回 動詞の3基本形、過去形(3) — 練習問題、作文
 第11回 聞き取り問題演習(2) — 対話の内容 II
 第12回 現在完了形、非人称表現(1) — 文法、対話文読解
 第13回 現在完了形、非人称表現(2) — 練習問題
 第14回 現在完了形、非人称表現(3) — 練習問題、作文
 第15回 読解問題演習(1) — 物語読解 I

成績評価の方法

到達目標1を測定する期末試験（40%）、授業への参加状況（60%）。

履修にあたっての注意

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

上野成利 本田雅也『パノラマ 初級ドイツ語ゼミナール（改訂版）』（白水社、2015、ISBN：978-4-560-06414-6）

教科書・参考書に関する備考

参考書：下記など、独和辞典を一冊用意してください。

参考書

根本道也『アポロン独和辞典 第3版』（同学社、2010、ISBN：978-4810200065）
 在間進『アクセス独和辞典 第3版』（三修社、2010、ISBN：978-4384012347）

授業のねらい

ドイツ語を学び、最終的に自らの専門分野に活かすことができるようになれば、これほど望ましいことはありません。しかし、そのようなレベルに到達することは容易ではなく、大学での授業に参加するのみならず、自ら興味を持ち、学ぶ姿勢を身に着けることが必要となります。この姿勢を身に着ける前に躓かぬよう、授業ではドイツ語を聞き、読み、話し、書く練習を、ていねいに幅広く行います。中級ドイツ語Ⅰに引き続き、将来飛躍的にドイツ語力を伸ばすための基礎を固めること、そして問題演習を行うことで応用力を付け始めることがねらいとなります。

到達目標

1. ドイツ語の基礎文法、基礎語彙の習得に加え、応用力を身に着けることができる。
2. ドイツの文化、生活、ドイツ留学などの新たな分野、可能性に興味を抱き、意欲的にドイツ語学習に取り組むことができる。
3. ドイツ映画や音楽などを通じて、自らドイツ語に触れる機会を作ることができる。

授業方法

- ・一つの単元に二回の授業を当てることで、学んだことを確実に身に着けていきます。
- ・新出単語を自ら調べて、授業の予習をすること（15分）、そして授業内容を定着させるために復習をすること（30分）が必要となります。
- ・単元ごとの対話文を参考にして独作文に取り組み、添削後に返却します。間違えた個所に気付いてもらい、ミスが繰り返されないようにします。
- ・ドイツ語を意欲的に学ぶことができるよう、ドイツの文化や生活の様子などについてお話しし、ドイツ映画や音楽を紹介します。
- ・短期、長期ドイツ留学のきっかけとなるよう、留学に関するテーマなども取り上げてお話しします。

授業計画

- 第1回 ガイダンス、中級ドイツ語Ⅰの復習(1)
 第2回 中級ドイツ語Ⅰの復習(2)
 第3回 中級ドイツ語Ⅰの復習(3)
 第4回 受動態、比較表現(1) — 文法、対話文読解
 第5回 受動態、比較表現(2) — 練習問題
 第6回 受動態、比較表現(3) — 練習問題、作文
 第7回 聞き取り問題演習(3) — インタビューの内容Ⅰ
 第8回 関係代名詞、関係副詞(1) — 文法、対話文読解
 第9回 関係代名詞、関係副詞(2) — 練習問題
 第10回 関係代名詞、関係副詞(3) — 練習問題、作文
 第11回 聞き取り問題演習(4) — インタビューの内容Ⅱ
 第12回 接続法(1) — 文法、対話文読解
 第13回 接続法(2) — 練習問題
 第14回 接続法(3) — 練習問題、作文
 第15回 読解問題演習(2) — 物語読解Ⅱ

成績評価の方法

到達目標1を測定する期末試験（40%）、授業への参加状況（60%）。

履修にあたっての注意

40人を目的に履修者の調整を行う場合があります。外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

上野成利 本田雅也『パノラマ 初級ドイツ語ゼミナール（改訂版）』（白水社、2015、ISBN：978-4-560-06414-6）

教科書・参考書に関する備考

参考書：下記など、独和辞典を一冊用意してください。

参考書

根本道也『アポロン独和辞典 第3版』（同学社、2010、ISBN：978-4810200065）
 在間進『アクセス独和辞典 第3版』（三修社、2010、ISBN：978-4384012347）

授業のねらい

ドイツ語はきちんと法則にしたがって構成されていますので、とても学びやすい言語です。1年次で得た技能に磨きをかけ、ドイツ語のコミュニケーション能力を高めていきましょう。またドイツ語圏の社会や文化について理解を深め、広い視野から世界を眺める力を伸ばしていきましょう。

到達目標

1. 場面に応じたコミュニケーションのための語彙を習得する。
2. ドイツ語による読み・書きの基礎的な力を身に付け、ドイツ語のホームページ等からの情報収集が可能になる。
3. ドイツ語圏の社会や文化についての知識を増やし、食文化、環境問題、戦争と平和、欧州連合といった多岐にわたるテーマを論じることができるようになる。
4. ドイツ語検定 4 級程度の文法知識を身につける。

授業方法

- ・教科書の 1 課分を講義 2 回で消化するペースで進む。具体的には、文法説明→各課の本文全体練習→本文ペア(グループ)練習→本文グループ発表という流れになる。本文中の登場人物のロールプレイングを積極的に行っていく。
- ・文法事項等の理解度確認のために事後課題(所要時間 30 分程度)の提出をほぼ毎回課する。
- ・教科書付属の動画・映像資料を活用し、場合によっては補助教材・資料等を配布する。

授業計画

- 第 1 回 発音の復習と簡単な聞き取り
・ドイツ語独特の発音を復習する
・初歩的なドイツ語を聞き取る
- 第 2 回 アルファベートと発音、人称代名詞
・英語の発音との相違点について
・アルファベートの発音と単語の発音との関連性
- 第 3 回 発音その 2、動詞の現在人称変化
・子音の発音・英語との語彙の類似性
・動詞の語尾変化の基礎
- 第 4 回 初歩の独作文と語順のきまりについて
・日常的な挨拶と 0~9 の数を言うことができる
・自己紹介の練習・動詞の位置と語順について
- 第 5 回 様々な形容詞
・形容詞を中心とした語彙を増やす
・疑問文を使った言い回しができる
- 第 6 回 名詞の性、重要な動詞
・名詞の文法上の性について
・重要な動詞の現在人称変化・ドイツの大学と教育制度について
- 第 7 回 格変化その 1
・冠詞や名詞の変化の基本
・ドイツにおける環境問題と買い物事情について
- 第 8 回 これまでのまとめ
- 第 9 回 名詞の複数形
・名詞の複数形を使い分ける
・辞書を引く際のテクニック
- 第 10 回 格変化その 2
・日本語の格助詞「は、の、に、を」に相当する変化を使いこなす
・ドイツの食文化について
- 第 11 回 格変化その 3
・様々な冠詞ごとの格変化
・冠詞の仲間はすべて変化する
- 第 12 回 数詞
・数詞の発音と聞き取り
・ゲーム形式で 99 までの数を練習し、習得する
- 第 13 回 不規則動詞
・不規則な動詞の現在人称変化
・ドイツ人の余暇の過ごし方と観光について

-
- 第14回 人称代名詞の格変化
・英語の I, my, me, …に相当するドイツ語を用いる
・知っておくと便利な表現
- 第15回 総復習

成績評価の方法

中間テスト：20% 期末テスト：40% 授業への取り組み方：40%

履修にあたっての注意

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。
外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

秋田静男他『イン・ドイチュラント (in Deutschland)』(朝日出版社、2016年、ISBN：978-4-255-25388-6)

参考書

1年次で使用した独和辞典

参考ホームページ

In Deutschland <https://text.asahipress.com/text-web/deutsche/information/> (教科書の本文等の映像や音声
が収録されているページ)

授業のねらい

ドイツ語はきちんと法則にしたがって構成されていますので、とても学びやすい言語です。1年次で得た技能に磨きをかけ、ドイツ語のコミュニケーション能力を高めていきましょう。またドイツ語圏の社会や文化について理解を深め、広い視野から世界を眺める力を伸ばしていきましょう。

到達目標

1. 場面に応じたコミュニケーションのための語彙を習得する。
2. ドイツ語による読み・書きの基礎的な力を身に付け、ドイツ語のホームページ等からの情報収集が可能になる。
3. ドイツ語圏の社会や文化についての知識を増やし、食文化、環境問題、戦争と平和、欧州連合といった多岐にわたるテーマを論じることができるようになる。
4. ドイツ語検定4級程度の文法知識を身につける。

授業方法

- ・教科書の1課分を講義2回で消化するペースで進む。具体的には、文法説明→各課の本文全体練習→本文ペア(グループ)練習→本文グループ発表という流れになる。本文中の登場人物のロールプレイングを積極的にやっていく。
- ・文法事項等の理解度確認のために事後課題(所要時間30分程度)の提出をほぼ毎回課する。
- ・教科書付属の動画・映像資料を活用し、場合によっては補助教材・資料等を配布する。

授業計画

- 第1回 様々な動詞
・ これまでに学んだ動詞と新たな不規則変化動詞を使いこなす
- 第2回 非人称の es
・ 自然現象や心理現象を表現する
・ esを使った慣用表現を用いる
- 第3回 前置詞とその格変化
・ 前置詞の格支配の仕組みを理解する
- 第4回 前置詞(つづき)
・ 注意すべき前置詞の用法
- 第5回 枠構造
・ ドイツ語の基本構造は枠であることを理解する
・ 様々な枠構造について
- 第6回 話法の助動詞その1
・ 英語にそっくりな一連の助動詞たち
- 第7回 話法の助動詞その2
・ 英語との共通点と相違点
・ 助動詞を用いた言い回しが可能になる
- 第8回 これまでのまとめと中間試験
- 第9回 分離動詞
・ 二つに分かれてしまう動詞
・ アルツハイマーについて
- 第10回 分離動詞と非分離動詞
・ 二つに分かれない動詞
・ 時刻表現が使用可能になる
- 第11回 命令形
・ 3種類の命令形について
- 第12回 動詞の3基本形
・ 不定詞ー過去基本形ー過去分詞の3基本形について
- 第13回 現在完了その1
・ 時制の使い分けについて
- 第14回 現在完了その2
・ sein 支配と haben 支配
- 第15回 総復習と期末試験

成績評価の方法

中間テスト：20% 期末テスト：40% 授業への取り組み方：40%

履修にあたっての注意

授業には独和辞書を持参してください。
40人を目的に履修者の調整を行う場合があります。
外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

秋田静男他『イン・ドイチュラント (in Deutschland)』(朝日出版社、2016、ISBN：978-4-255-25388-6)

授業のねらい

中級フランス語は、これまで培ってきたフランス語の知識を活かして、フランス語やフランス文化を理解しようというコンセプトのもとに進められるクラスです。

前期は1年次の復習から始め、仏検4級合格レベルへの足がかりとなる重要な文法を学び、フランス語の基礎力の完成を目指します。後期は今まで学んだフランス語を実践していくことが目的となります。フランス文化をテーマとして、全3回の簡単な発表を行います。授業を通じて、フランス語やフランス文化への興味を各自が深めていくことを目指します。

到達目標

中級フランス語では、1年次から学んできたフランス語を使って自分の意見や感想を表現できるようになること、後期にはフランス語で簡単な発表ができるようになることが目標です。

その目標のために前期は、実用フランス語検定4級合格レベルへの足がかりとなるフランス語力を身につけることを目指します。

授業方法

この授業では、提示されたテーマを理解し、フランス語で自分の考えや意見を表現する練習をします。

その目標のために、前期は実用フランス語検定4級合格への足がかりをつけることに軸足を置いた授業を展開します。

また、並行してDVDや資料を用いて、フランス文化の学習もしていきます。

授業内で課される提出プリントは、添削して返却し、授業内にて解説します。不定期に課される宿題が予復習に代わることがありますが、基本的には毎回授業終了時に次回の予習内容を指示するので、準備すること（予定所要時間30分ほど）、復習については、当日学習した内容を再確認すること（予定所要時間30～60分ほど）を想定していますが、所要時間はあくまで目安です。詳しくは授業内にて説明します。

授業計画

- 第1回 1) オリエンテーション
2) 1年次のフランス語復習
- 第2回 1) 仏検4級を目指して：比較級・最上級
2) フランス・フランス語圏について
- 第3回 1) 仏検4級を目指して：代名動詞、非人称構文
2) フランスの学校・教育事情(1)
- 第4回 1) 仏検4級を目指して：さまざまな疑問文(1)
2) フランスの日本語学習
- 第5回 1) 仏検4級を目指して：さまざまな疑問文(2)
2) フランスの映画
- 第6回 1) ここまでの文法のまとめ
2) DVD鑑賞
- 第7回 1) 中間学習チェック
2) フランスの音楽
- 第8回 1) 仏検4級を目指して：複合過去(1)
2) フランスの世界遺産
- 第9回 1) 仏検4級を目指して：複合過去(2)
2) フランスの日本文化受容、ジャパンエキスポ
- 第10回 1) 仏検4級を目指して：半過去、感想を言う
2) マンガでフランス語
- 第11回 1) 仏検4級を目指して：複合過去と半過去の使い分け
2) フランスの家族、結婚事情
- 第12回 1) 仏検4級を目指して：近接未来、近い将来の予定を話す
2) フランスの暦
- 第13回 1) 仏検4級を目指して：単純未来、夏休みの予定を話す
2) フランスのバカンス事情
- 第14回 1) ここまでの文法のまとめ
2) DVD鑑賞
- 第15回 前期全体のまとめ、期末テスト

成績評価の方法

以下の基準で成績を評価します。

授業への参加態度、ペア・グループ作業、宿題・プリントなどの提出物、中間学習チェック：50%
期末テスト：50%

履修にあたっての注意

出席と授業への参加態度を重視します。一緒に楽しんで参加できる方を歓迎します。
毎回授業には、今までに使ったフランス語教科書を必ず持参してください。
40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。
外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書・参考書に関する備考

指定の教科書はありませんが、毎回1年次に使用した教科書を必ず持参してください。
その他適宜プリントを配布します。
辞書や参考書については授業にて随時紹介します。

授業のねらい

中級フランス語は、これまで培ってきたフランス語の知識を活かして、フランス語やフランス文化を理解しようというコンセプトのもとに進められるクラスです。

後期中級フランス語はこれまで培ってきたフランス語を実践していくことが目的となります。フランス文化をテーマとして、全3回の簡単な発表を行います。

授業を通じて、フランス語やフランス文化への興味を各自が深めていくことを目指します。

到達目標

この授業では、フランス語を使って自分の意見や感想を表現できるようになること、最終的には簡単な発表ができるようになることが目標です。

後期はこれまで学んだフランス語とフランス文化の知識を用いて、全3回の発表にチャレンジします。そのために必要な情報の検索方法や必要な文法をさらに学びながら、簡単なながらもフランス語での発表を成功させることを目指します。

授業方法

後期の授業では、提示されたテーマを理解し、フランス語で自分の考えや意見を表現する練習をして、発表へと進みます。

発表に必要なさまざまな手段を学び、発表を完成させるためのフランス語をさらに学習していきます。

授業内で課される提出プリントは、添削して返却し、授業内にて解説します。不定期に課される宿題が予復習に代わる場合がありますが、基本的には毎回授業終了時に次回の内容を指示するので、準備すること（予定所要時間30分ほど）、復習については、当日学習した内容を再確認すること（予定所要時間30～60分ほど）を想定していますが、所要時間はあくまで目安です。詳しくは授業内にて説明します。

授業計画

- 第1回 前期の復習：夏休みの出来事を話す
- 第2回 ・発表(1)準備：「パリで行きたい場所を発表する」パリのカルティエ（地区）を知る
・DVD鑑賞
- 第3回 発表(1)準備：「パリで行きたい場所を発表する」～発表原稿作成
- 第4回 発表(1)：「パリで行きたい場所を発表する」発表実施、発表聞き取り
- 第5回 発表(2)準備：フランスの食文化を知る～カフェで注文する
- 第6回 発表(2)準備：フランスの飲食店のいろいろ～レストランで注文する
- 第7回 発表(2)準備：「ピザを注文する」～発表スキット作成（ロールプレイ型発表）
- 第8回 発表(2)：「ピザを注文する」ペアでロールプレイ実施、発表聞き取り
- 第9回 ・ここまでのまとめ
・DVD鑑賞
- 第10回 インターネットのフランス語：メールのフランス語、検索の方法
- 第11回 発表(3)：「フランス地方都市への旅行計画」、フランスの地方都市を知る～発表箇所を決定
- 第12回 発表(3)：「フランス地方都市への旅行計画」発表方法、手順
- 第13回 ・発表(3)：「フランス地方都市への旅行計画」発表原稿・レジュメ中間確認
・フランスのノエル
・DVD鑑賞
- 第14回 発表(3)：「フランス地方都市への旅行計画」発表原稿・レジュメ最終確認、リハーサル
- 第15回 発表(3)：「フランス地方都市への旅行計画」発表実施、発表聞き取り

成績評価の方法

以下の基準で成績を評価します。

授業への参加態度、ペア・グループ作業、宿題・プリントなどの提出物：25%

発表（全3回）：各25%（計75%）

履修にあたっての注意

出席と授業への参加態度を重視します。一緒に楽しんで参加できる方を歓迎します。

授業には今までに使ったフランス語教科書やノートは必ず持参してください。辞書については授業内にて指示します。

40人を目的に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書・参考書に関する備考

指定の教科書はありませんが、これまでに使用した教科書やノートは必ず持参してください。

また、適宜プリントを配布します。

辞書や参照物については授業内にて指示します。

授業のねらい

地理、歴史、教育、政治・経済、信仰、日常生活、言語、伝統文化など、多様な観点から日本の姿が紹介された文章の読解を通じて、日本の社会、歴史、文化を客観的にみつめなおすとともに、それとの比較において、フランスの社会、歴史、文化に対する関心を高めていくことが本講義のねらいとなります。

到達目標

辞書を用いてフランス語の長文が読めるようになる。
日本についてフランス語で説明ができるようになる。

授業方法

各課ごとに担当を決め、自身の担当箇所を音読、和訳してもらいます。
授業で扱った内容についてフランスとの比較を行い、日本語で発表してもらいます。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
フランス語であいさつ・自己紹介
- 第2回 日本の首都概説①
- 第3回 日本の首都概説②
- 第4回 江戸から東京へ①
- 第5回 江戸から東京へ②
- 第6回 東京オリンピック 1964-2020 ①
- 第7回 東京オリンピック 1964-2020 ②
- 第8回 日本の高等教育①
- 第9回 日本の高等教育②
- 第10回 日本の経済と政治①
- 第11回 日本の経済と政治②
- 第12回 日本人の信仰①
- 第13回 日本人の信仰②
- 第14回 日仏比較①
- 第15回 日仏比較②

成績評価の方法

平常点（70%）、発表（30パーセント）で評価を行います。

履修にあたっての注意

仏和辞典は各自必ず持参してください（電子辞書も可）。
40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

ジェローム・ルボワ、井上櫻子『日本再発見！』（白水社、2016、ISBN：978-4-560-06122-0）

授業のねらい

地理、歴史、教育、政治・経済、信仰、日常生活、言語、伝統文化など、多様な観点から日本の姿が紹介された文章の読解を通じて、日本の社会、歴史、文化を客観的にみつめなおすとともに、それとの比較において、フランスの社会、歴史、文化に対する関心を高めていくことが本講義のねらいとなります。

到達目標

辞書を用いてフランス語の長文が読めるようになる。
日本についてフランス語で説明ができるようになる。

授業方法

各課ごとに担当を決め、自身の担当箇所を音読、和訳してもらいます。
授業で扱った内容についてフランスとの比較を行い、日本語で発表してもらいます。

授業計画

- 第1回 日本人の日常生活①
- 第2回 日本人の日常生活②
- 第3回 四季と年中行事①
- 第4回 四季と年中行事②
- 第5回 日本語①
- 第6回 日本語②
- 第7回 昔ながらの東京①
- 第8回 昔ながらの東京①
現代的な東京①
- 第9回 現代的な東京②
- 第10回 浮世絵①
- 第11回 浮世絵②
- 第12回 歌舞伎①
- 第13回 歌舞伎②
- 第14回 日仏比較①
- 第15回 日仏比較②

成績評価の方法

平常点（70%）、発表（30パーセント）で評価を行います。

履修にあたっての注意

仏和辞典は各自必ず持参してください（電子辞書も可）。
40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

ジェローム・ルボワ、井上櫻子『日本再発見！』（白水社、2016、ISBN：978-4-560-06122-0）

授業のねらい

既に中国語初級で勉強した経験を持つものを対象とし、現代中国さまざまな現実を触れながら、初級なしに中級レベルの文法や語彙の取得。初級中国語で学んだ基礎知識を、特に日本語人が間違いやすい発音と文法項目の確認、会話練習によって、より正しい文法を使った発話能力の向上を目指します。

到達目標

1. 中国語検定試験 3 級に合格あるいはそれに準ずるに必要な言語能力を取得する。やや高度な文法事項をわかりやすくする。
2. 中国語の児童文学程度の文章を読める。日本の社会・文化について中国語で簡単に紹介できる。

授業方法

基本的に教科書に沿って進んでいくが、教科書に触れていない文法項目や日常用語など必要に応じ補充教材やビデオなどで紹介する場合もある。授業中で話題ごとに積極的な発問したり、答えたりすることによって、会話能力の向上を目指していく。さらに観光客などに会話を話かける宿題、Youtube などで自学した中国語歌の発表する宿題を出す予定です。

授業計画

- 第1回 復習やガイダンス
- 第2回 第1課 自我介绍
- 第3回 第1課 文法：1 前置詞「对」、2 名詞の前の「的」
- 第4回 第2課 我的家庭
- 第5回 第2課 文法：1 動詞形容詞の前の「地」 2. 比較用法
- 第6回 第3課 互联网
- 第7回 第3課 文法：1 疑問詞の呼応表現 2. 「一点儿也不/没」
- 第8回 復習とテスト
- 第9回 第4課 约会
- 第10回 第4課 文法：1. 持続を表す「着」 2. 複合方向補語 3. 動詞の重ね型の完了形
- 第11回 第5課 温泉旅行
- 第12回 第5課 文法：1 結果補語 2. 存現文
- 第13回 第6課 我的爱好
- 第14回 第6課 文法：1 可能補語 2. 「一……就……」
- 第15回 復習と試験

成績評価の方法

到達目標 1 に測定する試験 (50%)、到達目標 2 を測定する小テスト授業への参加状況及び態度・姿勢・意欲・積極的に発話する (30%) で評価する。

履修にあたっての注意

履修者は積極的な準備及び復習が必要である。小テスト含め、事前準備の必要な内容や課題などについては、教員から随時に指示する。粘り強く取り込むことが大事である。

40 人を目的に履修者の調整を行う場合がある。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

劉穎 柴森 小澤 正人『2 冊めの中国語 購読クラス』(白水社、2017、ISBN : 978-4-560-06927-1)

教科書・参考書に関する備考

新し教科書なので、履修者全員が購入する必要がある。

辞書は特に指定しませんが、スマホなどの関連 APP をお勧めします。

授業のねらい

既に中国語初級で勉強した経験を持つものを対象とし、現代中国さまざまな現実に触れながら、初級なしに中級レベルの文法や語彙の取得。初級中国語で学んだ基礎知識を、特に日本語人が間違いやすい発音と文法項目の確認、会話練習によって、より正しい文法を使った発話能力の向上を目指します。

到達目標

1. 中国語検定試験 3 級に合格あるいはそれに準ずるに必要な言語能力を取得する。やや高度な文法事項をわか
2. 中国語の児童文学程度の文章を読める。日本の社会・文化について中国語で簡単に紹介できる。

授業方法

基本的に教科書に沿って進んでいくが、教科書に触れていない文法項目や日常用語など必要に応じ補充教材やビデオなどで紹介する場合もある。授業中で話題ごとに積極的な発問したり、答えたりすることによって、会話能力の向上を目指していく。さらに観光客などに会話を話かける宿題、Youtube などで自学した中国語歌の発表する宿題を出す予定です。

授業計画

- 第1回 前期内容の復習
- 第2回 第7課 交朋友
- 第3回 第7課 文法：1「是…的」、2 状態補語
- 第4回 第8課 聚餐
- 第5回 第8課 文法：1 疑問視の不定用法 2. 可能補語
- 第6回 第9課 鬧鐘
- 第7回 第9課 文法：1 受け身文 2. 動詞の後の「給」
- 第8回 復習とテスト
- 第9回 第10課 打工
- 第10回 第10課 文法：1. 動量補語 2. 離合詞
- 第11回 第11課 寒假
- 第12回 第11課 文法：1「有」の兼語文 2. 使役動詞「让」
- 第13回 第12課 留学
- 第14回 第12課 文法：「有」の連動文 2. 「把」の文
- 第15回 復習と試験

成績評価の方法

到達目標 1 に測定する試験 (50%)、到達目標 2 を測定する小テスト授業への参加状況及び態度・姿勢・意欲・積極的に発話する (30%) で評価する。

履修にあたっての注意

履修者は積極的な準備及び復習が必要である。小テスト含め、事前準備の必要な内容や課題などについては、教員から随時に指示する。粘り強く取り込むことが大事である。

40 人を目途に履修者の調整を行う場合がある。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

劉穎 柴森 小澤 正人『2冊めの中国語 購読クラス』(白水社、2017、ISBN：978-4-560-06927-1)

教科書・参考書に関する備考

新し教科書なので、履修者全員が購入する必要がある。

辞書は特に指定しませんが、スマホなどの関連 APP をお勧めします。

授業のねらい

この授業は、すでに1年間中国語を学んだ人を対象にしています。中国語の基礎をしっかりと固めるために、初級クラスで学習したことをもう一度ふりかえり、自信をもって使えるように練習しながら、新しい表現も少しずつ学んでいきます。併せて、日本で中国語を使う場面を想定して、簡単な会話や語彙を学び、実生活のなかで使える中国語をおぼえていきます。とくに音読の繰り返しを通じて、中国語のメロディーとリズムを鍛え上げることを重視します。また、言語の背景にある中国語圏の社会や文化についても適宜紹介し、理解を深めていきます。

到達目標

1. 正確な発音と声調で中国語を話すことができる。
2. 中国語の基本的な語彙や文法、表現法（中国語検定準4級～4級程度）を、自信をもって運用することができる。

授業方法

- ・ 授業は、基本的に教科書に沿って行ない、おおよそ2回で1課進むペースで展開します。1課の学習は、説明編と練習編に分かれます。説明編では、「文法ポイント」を中心に基本文法の復習と補充をおこないます。練習編では、「本文」を使って会話を学び、「セクション」「ドリル」で語彙を増やします。
- ・ 語学学習においては、習ったことを反復して体に覚え込ませることがもっとも大切です。事後学習として、お手本の音声に合わせて発音練習を繰り返し、教科書を丸ごと暗記するように努めてください（1日10分の練習を毎日行なうことが望ましい）。学習のペースメーカーとして、1課が終わるごとに、小テスト（習った単語や文章の聴き取り。10問程度）をおこないます。
- ・ 小テストのフィードバック：答案を返却するとともに、解答と解説を配布する。
- ・ 発音テストのフィードバック：採点の詳細と当日の録音を開示する（希望者のみ）。
- ・ 筆記テストのフィードバック：解答と解説を配布する。また、採点の詳細を開示する（希望者のみ）。

授業計画

- 第1回 ガイダンス／ウォーミングアップ
 第2回 第5課(1)：説明（日本到着―成田空港）
 第3回 第5課(2)：練習 / 第6課(1)：説明（ホテルチェックイン）
 第4回 第6課(2)：練習 / 第7課(1)：説明（夜景が綺麗）
 第5回 第7課(2)：練習 / 第8課(1)：説明（電車で）
 第6回 第8課(2)：練習
 第7回 第9課(1)：説明（化粧品売り場で）
 第8回 第9課(2)：練習
 第9回 第10課(1)：説明（花火大会）
 第10回 第10課(2)：練習
 第11回 第11課(1)：説明（日本の雑貨）
 第12回 第11課(2)：練習
 第13回 第12課(1)：説明（おいしい和牛をどうぞ）
 第14回 第12課(2)：練習
 第15回 まとめ／発音テスト

成績評価の方法

- ・ 筆記テスト（学期末に実施。到達目標1、2を測定する）（50%）
 - ・ 発音テスト（学期末に実施。到達目標1を測定する）（25%）
 - ・ 小テスト（1課終了ごとに実施。到達目標2を測定する）（25%）
- によって評価します。

履修にあたっての注意

外国語の上達には、語彙と基本例文のストックを増やすことが欠かせません。授業であつかった単語や例文は、基本的に暗記するものだと心得てください。

40人を目標に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

相原茂・朱怡穎『二一八オ！ ニッポン——ふりむけば、中国語。』（朝日出版社、2018、ISBN：978-4-255-45301-9）

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてプリントを配布します。

参考書

中国モダニズム研究会『中国現代文化 14 講 (ドラゴン解剖学 登竜門の巻)』(関西学院大学出版会、2014、ISBN : 4862831672)

中国モダニズム研究会『中華文化スター列伝 (ドラゴン解剖学 竜の子孫の巻)』(関西学院大学出版会、2016、ISBN : 486283227X)

守屋宏則『やさしくくわしい中国語文法の基礎』(東方書店、1995、ISBN : 4497944387)

丸尾誠『基礎から発展まで よくわかる中国語文法』(アスク、2010、ISBN : 4872177541)

王亜新『中国語の構文』(アルク、2011、ISBN : 4757420560)

相原茂・石田知子・戸沼市子『Why?にこたえるはじめての中国語の文法書 新訂版』(同学社、2016、ISBN : 978-4-8102-0034-8)

参考ホームページ

中国語基本音節表 http://www.ch-texts.org/contents_onsetsu.html (関西大学中国語教材研究会による発音独習コンテンツ)

E テレ「テレビで中国語」 <https://cgi2.nhk.or.jp/gogaku/chinese/tv/> (授業と併せて見れば、学習効果倍増。ラジオ講座もあります)

中国語検定協会 <http://www.chuken.gr.jp/> (学習のペースメーカーとして。年 3 回受験可能)

授業のねらい

この授業では、すでに「中国語演習Ⅰ」を履修した人を対象にしています。引き続き、初級クラスで学習したことをもう一度ふりかえり、自信をもって使えるように練習しながら、少しずつ新しい表現を学んでいきます。併せて、日本で中国語を使う場面を想定して、簡単な会話や語彙を学び、実生活のなかで使える中国語をおぼえていきます。とくに音読の繰り返しを通じて、中国語のメロディーとリズムを鍛え上げることを重視します。また、言語の背景にある中国語圏の社会や文化についても適宜紹介し、理解を深めていきます。

到達目標

1. 正確な発音と声調で中国語を話すことができる。
2. 中国語の基本的な語彙や文法、表現法（中国語検定準4級～4級程度）を、自信をもって運用することができる。

授業方法

- ・ 授業は、基本的に教科書に沿って行ない、おおよそ2回で1課進むペースで展開します。1課の学習は、説明編と練習編に分かれます。説明編では、「文法ポイント」を中心に基本文法の復習と補充をおこないます。練習編では、「本文」を使って会話を学び、「セクション」「ドリル」で語彙を増やします。
- ・ 語学学習においては、習ったことを反復して体に覚え込ませることがもっとも大切です。事後学習として、お手本の音声に合わせて発音練習を繰り返し、教科書を丸ごと暗記するよう努めてください（1日10分の練習を毎日行なうことが望ましい）。学習のペースメーカーとして、1課が終わるごとに、小テスト（習った単語や文章の聴き取り。10問程度）をおこないます。
- ・ 小テストのフィードバック：答案を返却するとともに、解答と解説を配布する。
- ・ 発音テストのフィードバック：採点の詳細と当日の録音を開示する（希望者のみ）。
- ・ 筆記テストのフィードバック：解答と解説を配布する。また、採点の詳細を開示する（希望者のみ）。

授業計画

- 第1回 第13課(1)：説明（日本の人気デザート）
 第2回 第13課(2)：練習 / 第14課(1)：説明（着物体験）
 第3回 第14課(2)：練習
 第4回 第15課(1)：説明（温泉に入る）
 第5回 第15課(2)：練習
 第6回 第16課(1)：説明（日帰りバスツアー）
 第7回 第16課(2)：練習
 第8回 第17課(1)：説明（日本人と漫画）
 第9回 第17課(2)：練習
 第10回 第18課(1)：説明（歌舞伎鑑賞）
 第11回 第18課(2)：練習
 第12回 第19課(1)：説明（お土産を買う）
 第13回 第19課(2)：練習
 第14回 第20課：説明（別れ）
 第15回 まとめ／発音テスト

成績評価の方法

- ・ 筆記テスト（学期末に実施。到達目標1、2を測定する）（50%）
 - ・ 発音テスト（学期末に実施。到達目標1を測定する）（25%）
 - ・ 小テスト（1課終了ごとに実施。到達目標2を測定する）（25%）
- によって評価します。

履修にあたっての注意

外国語の上達には、語彙と基本例文のストックを増やすことが欠かせません。授業であつかった単語や例文は、基本的に暗記するものだと心得てください。

40人を目標に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

相原茂・朱怡穎『二一八オ！ニッポン——ふりむけば、中国語。』（朝日出版社、2018、ISBN：978-4-255-45301-9）

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてプリントを配布します。

参考書

中国モダニズム研究会『中国現代文化 14 講（ドラゴン解剖学 登竜門の巻）』（関西学院大学出版会、2014、ISBN：4862831672）

中国モダニズム研究会『中華文化スター列伝（ドラゴン解剖学 竜の子孫の巻）』（関西学院大学出版会、2016、ISBN：486283227X）

守屋宏則『やさしくくわしい中国語文法の基礎』（東方書店、1995、ISBN：4497944387）

丸尾誠『基礎から発展までよくわかる中国語文法』（アスク、2010、ISBN：4872177541）

王亜新『中国語の構文』（アルク、2011、ISBN：4757420560）

相原茂・石田知子・戸沼市子『Why?にこたえるはじめての中国語の文法書 新訂版』（同学社、2016、ISBN：978-4-8102-0034-8）

参考ホームページ

中国語基本音節表 http://www.ch-texts.org/contents_onsetsu.html（関西大学中国語教材研究会による発音独習コンテンツ）

E テレ「テレビで中国語」 <https://cgi2.nhk.or.jp/gogaku/chinese/tv/>（授業と併せて見れば、学習効果倍増。ラジオ講座もあります）

中国語検定協会 <http://www.chuken.gr.jp/>（学習のペースメーカーとして。年3回受験可能）

授業のねらい

場面に即して中国語を繰り出す力を身につけることを目的とする。
そのために、文法知識を学び中国語の構造を理解したうえで、をクイックレスポンス能力を養う。

到達目標

1. アルバイトなどで必要とされる定番の中国語表現を学び、使えるようにする。
2. 基本会話に必要な中国語を自分で組み立てられるようにする。
3. 中国語の運用に必要な基本的文法知識、リスニング、リーディング、スピーキング力を身につける。

授業方法

教科書の2課～4課分を一まとまりとして2回の授業で学習していく。1回目は文法事項を確認し、基本フレーズを学ぶ。2回目は場面設定に基づき、定番フレーズが実際の会話でどう使われるかを学び、ロールプレイを行う。

後半（第8回以降）に、前半で学んだ内容に基づき、事後課題として作文（5往復程度の会話）の提出を課する。添削した後、参考例と共に返却する。

授業計画

- | | |
|------|---------------------------------------------------------|
| 第1回 | ガイダンス、教科書第1～3課：おもてなし、数字、支払い・免税手続き
文法：助動詞「可能、不可能の表現」 |
| 第2回 | 教科書第1～3課：応用練習
会話：デパートでの買物 |
| 第3回 | 教科書第4～7課：依頼・注意、衣料品店、靴店、コンビニ・スーパー
文法：命令文（命令、要求、禁止、勧告） |
| 第4回 | 教科書第4～7課：応用練習
会話：コンビニでの買物 |
| 第5回 | 教科書第8～10課：レストラン、注文を受ける、居酒屋
文法：使役表現 |
| 第6回 | 教科書第8～10課：応用練習
会話：居酒屋での注文 |
| 第7回 | 教科書第11～13課：空港での出迎え、乗り物に乗る、日程と注意事項
文法：結果補語 |
| 第8回 | 教科書第11～13課：応用練習
会話：空港での出迎え |
| 第9回 | 教科書第14～15課：声かけ、集合時間の確認・道案内
文法：仮定表現 |
| 第10回 | 教科書第14～15課：応用練習
会話：友達を買物に連れていく |
| 第11回 | 教科書第16～18課：食事、買い物、病気・けが・災害
文法：比較 |
| 第12回 | 教科書第16～18課：応用練習
会話：バイキングを食べに行く |
| 第13回 | 教科書第19～20課：ホテル、見送り
文法：様態補語 |
| 第14回 | 教科書第19～20課）、応用練習
会話：チェックイン（ホテル） |
| 第15回 | 復習（教科書第1～20課） |

成績評価の方法

到達目標1は会話能力を測定する毎回の授業で行うロールプレイ（20%）、到達目標2は作文能力を測定する中国語作文及びそれを使った美演（20%）、到達目標3は総合力を測定する期末試験（60%）により評価する。

履修にあたっての注意

教科書本文のシャドウイングを毎日10分以上行うのを習慣とすること。

教科書

札幌中国語工房『中国語で PERAPERERA 北海道』（北海道新聞社、2017、ISBN：9784894538528）

授業のねらい

場面に即して中国語を繰り出す力と、何かを説明する力を身につけることを目的とする。
そのために、文法知識を学び中国語の構造を理解し、さらに定番表現に慣れることで、クイックレスポンス能力を養う。

到達目標

1. アルバイトなどで必要とされる定番の中国語表現を学び、使えるようにする。
2. 基本会話に必要な中国語を自分で組み立てられるようにする。
3. 中国語の運用に必要な基本的文法知識、リスニング、リーディング、スピーキング力を身につける。

授業方法

教科書の 2 課を一まとまりとして 2 回の授業で学習していく。1 回目は文法事項を確認し、基本フレーズを学ぶ。2 回目は場面設定に基づき、定番フレーズが実際の会話でどう使われるかを学び、ロールプレイを行う。
後半（第 8 回以降）に、前半で学んだ内容に基づき、事後課題として作文（5 往復程度の会話）の提出を課する。添削した後、参考例と共に返却する。

授業計画

- | | |
|--------|---------------------------------------------------------------|
| 第 1 回 | ガイダンス、教科書第 21～22 課：お土産ハンティング、100 円ショップ探検
文法：逆説の呼応表現 |
| 第 2 回 | 教科書第 21～22 課：応用練習
会話：お土産を買う |
| 第 3 回 | 教科書第 23～24 課：ドラッグストアで宝探し、家電量販店攻略法
文法：処置文 |
| 第 4 回 | 教科書第 23～24 課：応用練習
会話：ドラッグストアで日用品を買う |
| 第 5 回 | 教科書第 25～26 課：場外市場でカニ定め、デパ地下パトロール
文法：可能補語 |
| 第 6 回 | 教科書第 25～26 課：応用練習
会話：デパ地下で買物 |
| 第 7 回 | 教科書第 27～28 課：回転寿司パラダイス、ラーメン極みの一杯
文法：関連副詞 |
| 第 8 回 | 教科書第 27～28 課：応用練習
会話：ラーメン横丁でラーメンを食べる |
| 第 9 回 | 教科書第 29～30 課：ビールはやっぱり北海道、まだまだあるある北海道の美味
文法：状態の持続を表すアスペクト助詞 |
| 第 10 回 | 教科書第 29～30 課：応用練習
会話：ビール園でジンギスカン |
| 第 11 回 | 教科書第 31～32 課：北海道の地理・歴史、アイヌ民族
文法：結果補語 |
| 第 12 回 | 教科書第 31～32 課：応用練習
会話：北海道を紹介する |
| 第 13 回 | 教科書第 33～34 課：札幌、小樽
文法：定番フレーズ |
| 第 14 回 | 教科書第 33～34 課：応用練習
会話：札幌を案内する |
| 第 15 回 | 復習（教科書第 21～34 課） |

成績評価の方法

到達目標 1 は会話能力を測定する毎回の授業で行うロールプレイ（20%）、到達目標 2 は作文能力を測定する中国語作文及びそれを使った美演（20%）、到達目標 3 は総合力を測定する期末試験（60%）により評価する。

履修にあたっての注意

教科書本文のシャドウイングを毎日 10 分以上行うのを習慣とすること。

教科書

札幌中国語工房『中国語で PERAPERERA 北海道』（北海道新聞社、2017、ISBN：9784894538528）

授業のねらい

『中級韓国語』は、『初級韓国語 I・II』を修了、あるいは韓国語を1年間(90分授業を30回程度)学んだ学生向けの授業です。この授業では初級韓国語を通して身に着けた韓国語能力を、言語の4機能(話す・聞く・書く・読む)の面においてより発展させることを目標とします。新しく学習する様々な語彙と文法、表現を用い、自分の考えや言いたいことを韓国語でさらに表現できるようになることを目指します。

到達目標

1. 日常生活に関する事柄や個人的な関心事(趣味、学校生活、旅行等)について、ある程度準備をすれば韓国語でやり取りすることができる。
2. 身近な話題について書かれた、平易で短い韓国語文章を読み取ることができる。
3. 韓国の社会・文化・生活習慣に関するより深い知識を持っている。

授業方法

授業は教科書に沿って行います。授業の前半では簡単な文法事項の説明、文型練習を中心に行い、授業の後半ではその日のテーマと場面に沿ったペアワークや小グループ活動を中心に行います。授業は主に韓国語で進めま(一部日本語)。

授業計画

- 第1回 ①ガイダンス
②初級内容の復習1
- 第2回 初級内容の復習2
- 第3回 小テスト1(初級内容の語彙・文法等)
Unit 11. 余暇活動①
・語彙:「余暇活動関連表現」「余暇活動の場所」
・文法・文型:「～するつもりです」「～しに行く・来る」
・文化:「韓国人の余暇活動ベスト5」
- 第4回 Unit 11. 余暇活動②
- 第5回 Unit 11. 余暇活動③
Unit 12. 交通①
・語彙:「交通手段」「交通手段の利用」「乗り場」
・文法・文型:「～で(手段・道具)」「～から～まで」
・文化:「韓国人がよく利用する交通手段」
- 第6回 小テスト2(Unit11の語彙・文法等)
Unit 12. 交通②
- 第7回 Unit 12. 交通③
- 第8回 確認評価
フィードバック
- 第9回 韓国の文化体験(映画など)
- 第10回 Unit 13. 韓国語学習①
・語彙:「学習関連表現」「授業によく使われる命令表現」「比較」
・文法・文型:「不規則動詞・形容詞」「否定表現」
・文化:「韓国語学習に関するアンケート」
- 第11回 Unit 13. 韓国語学習②
- 第12回 Unit 13. 韓国語学習③
Unit 14. 約束①
・語彙:「約束関連表現」「同意・断りの表現」
・文法・文型:「～ませんか」「～たいです」
・文化:「韓国人の待ち合わせに遅れたときの言い訳ベスト5」
- 第13回 小テスト3(Unit13の語彙・文法等)
Unit 14. 約束②
- 第14回 Unit 14. 約束③
- 第15回 期末テスト
フィードバック

成績評価の方法

「到達目標」の1、2の達成度を測る試験の結果(60%)、小テストの結果(30%)、授業への参加状況(10%)、により評価を行います。

履修にあたっての注意

会話が中心となる授業ですので、積極的に声を出して参加することが要求されます。テキストなどの指定箇所を必ず予習・復習（それぞれ1時間程度）した上で、授業に臨んでください。40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

金昌九『テーマで学ぶ韓国語』（駿河台出版、2018、ISBN：978-4-411-03117-4）

参考書

イ・ヒジャ『韓国語文法語尾・助詞辞典』（スリーエー、2010、ISBN：978-4-88319-519-0）

参考ホームページ

金先生の韓国語_初級 <https://quizlet.com/class/4429424/>（語彙練習サイト）

授業のねらい

『中級韓国語Ⅱ』は、『中級韓国語Ⅰ』を修了あるいは90分授業を45回程度受講した学生向けの授業です。この授業ではこれまでの韓国語授業を通して身に着けた韓国語能力を、言語の4機能（話す・聞く・書く・読む）の面においてより発展させることを目標とします。新しく学習する様々な語彙と文法、表現を用い、自分の考えや言いたいことを韓国語でさらに表現できるようになることを目指します。

到達目標

1. 身近な話題（習慣、出来事等）について、平易な韓国語を用いて情報や意見を交換することができる。
2. 身近な話題に関して書かれた平易で短い韓国語文章を理解し、必要な情報を読み取ることができる。
3. 韓国の社会・文化・生活習慣に関するより深い知識を持っている。

授業方法

授業は教科書に沿って行います。授業の前半では簡単な文法事項の説明、文型練習を中心に行い、授業の後半ではその日のテーマと場面に沿ったペアワークや小グループ活動を中心に行います。授業は主に韓国語で進めます（一部日本語）。

授業計画

- 第1回 ①ガイダンス
②事前学習内容の確認
- 第2回 Unit 15. 買い物①
・語彙：「ファッションに関する表現」「色」
・文法・文型：「こ・そ・あ」「いくらですか」
・文化：「韓国の大学生が特別な日にもらいたいプレゼント」
- 第3回 Unit 15. 買い物②
- 第4回 Unit 15. 買い物③
- 第5回 小テスト1 (Unit 15の語彙と文法等)
Unit 16. 季節と天気①
・語彙：「季節」「自然災害」
・文法・文型：「～て」「～けど」
・文化：「今日の韓国の天気」
- 第6回 Unit 16. 季節と天気②
- 第7回 Unit 16. 季節と天気③
- 第8回 確認テストとフィードバック
- 第9回 Unit 17. 体と健康①
・語彙：「身体部位」「病気と症状」「治療」
・文法・文型：「敬語」「どこが具合悪いですか」
・文化：「健康な食習慣のための必要なこと」
- 第10回 Unit 17. 体と健康②
- 第11回 Unit 17. 体と健康③
- 第12回 小テスト2 (Unit 17の語彙と文法等)
Unit 18. 恋愛と結婚①
・語彙：「人生と出会い」「性格」「外見」
・文法：「連体形（現在）」
- 第13回 Unit 18. 恋愛と結婚②
- 第14回 Unit 18. 恋愛と結婚③
- 第15回 学習内容のまとめ
期末テスト

成績評価の方法

「到達目標」の1、2の達成度を測る試験の結果（60%）、小テストの結果（20%）、授業への参加状況（20%）、により評価を行います。

履修にあたっての注意

会話が中心となる授業ですので、積極的に声を出して参加することが要求されます。テキストなどの指定箇所を必ず予習・復習（それぞれ1時間程度）した上で、授業に臨んでください。40人を目標に履修者の調整を行う場合があります。

教科書

金昌九『テーマで学ぶ韓国語』（駿河台出版、2018、ISBN：978-4-411-03117-4）

参考書

イ・ヒジャ『韓国語文法語尾・助詞辞典』（スリーエー、2010、ISBN：978-4-88319-519-0）

参考ホームページ

金先生の韓国語 <https://quizlet.com/class/4429424/>（語彙練習サイト）

47741

韓国語演習 I

担当教員：松田由紀

1単位 前期

授業のねらい

初級韓国語で学んだ知識を発展させ、さらに複雑な会話文が表現できるようになる。

到達目標

上称形（～ムニダ）の活用を理解し、様々な助詞を覚えることでより複雑な文を作ることができる。

授業方法

教科書にしたがって、本文の暗記、言い換え練習、練習問題（辞書使用）と進みます。また、ビデオや映画を鑑賞し、セリフの聞きとりを行います

授業計画

- 第1回 イントロダクション、1年生の復習
- 第2回 第16課 どこ行くのですか(1)
- 第3回 第16課 どこ行くのですか(2)
- 第4回 第17課 駅から家まで(1)
- 第5回 第17課 駅から家まで(2)
- 第6回 さまざまな助詞を使った作文練習
- 第7回 第18課 ちょっとお尋ねします(1)
- 第8回 第18課 ちょっとお尋ねします(2)
- 第9回 映画鑑賞、ヒアリング練習(1)
- 第10回 映画鑑賞、ヒアリング練習(2)
- 第11回 第19課 おいくつでいらっしゃいますか?(1)
- 第12回 第19課 おいくつでいらっしゃいますか?(2)
- 第13回 口述テストの準備
- 第14回 口述テスト
- 第15回 前期のまとめ

成績評価の方法

定期試験 50%、小テスト（口述テスト等含む）20%、授業への取り組み方 30%で判断する。

履修にあたっての注意

初級韓国語受講済みであることが望ましい。辞書は毎回必携のこと。欠席は半期4回まで。遅刻3回で欠席1回にカウントします。

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

高島淑郎『書いて覚える初級朝鮮語』（白水社、2002、ISBN：978-4-560-00581-1）

油谷幸利『ポケットプログレッシブ韓日韓辞典』（小学館、2013、ISBN：978-4095061429）

47751

韓国語演習Ⅱ

担当教員：松田由紀

1単位 後期

授業のねらい

韓国語演習Ⅰで学んだ知識を発展させ、さらに複雑な会話文が表現できるようになる。また細かい助詞も含め簡単な文を聞き取る。

到達目標

略待上称形（～ヨ）の活用を理解し、尊敬・否定・過去形などを習得して韓国映画のセリフなどを一部聞き取ることができる。

授業方法

教科書にしたがって、本文の暗記、言い換え練習、練習問題（辞書使用）と進みます。また、ビデオや映画を鑑賞し、セリフの聞きとりを行います。また学習用DVDを鑑賞し、実践的な会話文を暗記します。

授業計画

- 第1回 イントロダクション、前期の復習
- 第2回 第20課 好きではありません(1)
- 第3回 第20課 好きではありません(2)
- 第4回 第21課 好きですか(1)
- 第5回 第21課 好きですか(2)
- 第6回 第22課 いらっしゃいませ(1)
- 第7回 第22課 いらっしゃいませ(2)
- 第8回 第23課 いついらっしゃいましたか?(1)
- 第9回 第23課 いついらっしゃいましたか?(2)
- 第10回 略待上称形（～ヨの形）のまとめ、作文練習
- 第11回 映画鑑賞、ヒアリング練習
- 第12回 映画鑑賞、ヒアリング練習
- 第13回 口述テストの準備
- 第14回 口述テスト
- 第15回 後期のまとめ

成績評価の方法

定期試験 50%、小テスト（口述テスト等含む）20%、授業への取り組み方 30%で判断する。

履修にあたっての注意

辞書は毎回必携のこと。欠席は半期4回まで。遅刻3回で欠席1回にカウントします。

40人を目途に履修者の調整を行う場合があります。

外国語の上達には継続的な学習が不可欠です。必ず十分な予習をした上で毎回の授業にのぞみ、授業後も与えられた課題を含む復習をしっかりと行うよう心がけてください。

教科書

高島淑郎『書いて覚える初級朝鮮語』（白水社、2002、ISBN：978-4-560-00581-1）

油谷幸利『ポケットプログレッシブ韓日韓辞典』（小学館、2013、ISBN：978-4095061429）

授業のねらい

1 年生の時に基礎韓国語を履修した学生、および同程度の韓国語の学習能力を持つ学生を対象とします。「書く・読む・聞く・話す」という 4 技能を総合的に学習し、それを通して自分の意志を確実に伝える韓国語コミュニケーション能力を目指します。また、様々な日常生活場面において、自然な会話表現ができるようにし、実践的な能力を身に付けていきます。

到達目標

1. 「読む・聞く・話す・書く」といった総合的な技能を高めることを目標とする。
2. 様々な場面に応じたコミュニケーション能力を身に付く。
3. 実践的な韓国語能力を習得する。

授業方法

- ・基本的には指定のテキストに従って授業を行うが、必要に応じて補足資料を配布する。
- ・毎回、2 人ないしは、2 以上のグループワークによる授業を取り入れる。
- ・実践的な会話を習得する場面を多く実施することにする。
- ・この授業は、前回学んだことの復習と次回学ぶ学習内容を予習することを前提とする。

授業計画

- 第 1 回 オリエンテーション
- 第 2 回 韓国語初級レベルの復習（初級文法、発音、表現）
- 第 3 回 自己紹介（その 1）。印象的でわかりやすい自己紹介文を作り、発表する。
- 第 4 回 第 1 課 空港に出迎え～再会のあいさつ（指定テキスト p 8～）
- 第 5 回 第 2 課 部屋探し～状況をよりわかりやすく表現する（指定テキスト p14～）
- 第 6 回 第 3 課 自己紹介（その 2）～自分のことを話す（指定テキスト p20）
- 第 7 回 一日の日課に関する作文練習
- 第 8 回 一日の日課に関する口頭発表
- 第 9 回 第 4 課 ソンミンの家で～目上の人への話しかた、尊敬の表現（指定テキスト p26～）
- 第 10 回 第 5 課 帰り道～様子から推測、判断する（指定テキスト p32～）
- 第 11 回 まとめ～第 1 課から第 5 課まで
- 第 12 回 中間テスト
- 第 13 回 作文及び発表
- 第 14 回 第 6 課 百日記念日～素直な気持ちを表明する（指定テキスト p40～）
- 第 15 回 第 7 課 引っ越しパーティの日～注意や指示をする（指定テキスト p46～）

成績評価の方法

授業参加態度及び授業への参加状況 20%、定期期末テスト 80%による総合評価

履修にあたっての注意

- ・この授業は、前回学んだことの復習と次回に学ぶ学習内容を予習することを前提とする。
- ・受講する学生のレベルや授業進度によっては、授業計画通りに行わない可能性がある。

教科書

金順玉・阪堂千津子『もっとチャレンジ！韓国語』（白水社、2009、ISBN：978-4-560-01780-7）

授業のねらい

1 年生の時に基礎韓国語を履修した学生、および同程度の韓国語の学習能力を持つ学生を対象とします。「書く・読む・聞く・話す」という 4 技能を総合的に学習し、それを通して自分の意志を確実に伝える韓国語コミュニケーション能力を目指します。また、様々な日常生活場面、において、自然な会話表現ができるようにし、実践的な能力を身に付けていきます。

到達目標

1. 「読む・聞く・話す・書く」といった総合的な技能を高めることを目標とする。
2. 様々な場面に応じたコミュニケーション能力を身に付ける。
3. 文章表現のポイントを学び、正しく相手に伝えることのできる文章作成法を学ぶ。

授業方法

- ・基本的には指定のテキストに従って授業を行うが、必要に応じて補足資料を配布する。
- ・毎回、2 人ないしは、2 以上のグループワークによる授業を取り入れる。
- ・実践的な会話を習得する場面を多く実施することにする。
- ・この授業は、前回学んだことの復習と次回学ぶ学習内容を予習することを前提とする。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 第8課 汽車に乗って出かけ～やりもらいの表現 (指定テキスト p52～)
- 第3回 第9課 村の風景～説明や描写 (指定テキスト p58～)
- 第4回 第10課 ソンミンさんをお訪ね～忠告やアドバイス (指定テキスト p64～)
- 第5回 まとめ～第6課から第10課まで
- 第6回 作文 (その1) : 一週間の予定
- 第7回 第11課 下宿に帰って～他人の話を伝える (指定テキスト p72～)
- 第8回 第12課 診察を受ける～許可と禁止 (指定テキスト p78～)
- 第9回 中間テスト
- 第10回 映画鑑賞
- 第11回 K-pop (韓国語で歌う)
- 第12回 作文 (その2) : 自由テーマ
- 第13回 第13課 和解～友だちことばで楽しくなる (指定テキスト p84～)
- 第14回 第14課 悲しみよ、さようなら～コミュニケーションの幅を広げる (指定テキスト p90～)
- 第15回 作文 (その3) : 将来の夢

成績評価の方法

授業参加態度及び授業への参加状況 20%、定期期末テスト 80%による総合評価

履修にあたっての注意

- ・この授業は、前回学んだことの復習と次回に学ぶ学習内容を予習することを前提とする。
- ・受講する学生のレベルや授業進度によっては、授業計画通りに行わない可能性がある。

教科書

金順玉・阪堂千津子『もっとチャレンジ! 韓国語』(白水社、2009、ISBN : 978-4-560-01780-7)

授業のねらい

この授業では、少なくとも2年間、ドイツ語をすでに学んだ人を対象として、より進んだドイツ語の能力を身につけるための発展的な訓練を行います。基礎的な文法事項を復習しながら、複雑な文章に親しみ、表現力の養成に力点を置きます。発音指導もできるだけ行います。比較的少人数の授業になることが予想されますので、効率よくドイツ語力をアップさせることができるでしょう。

到達目標

この授業を受講すれば、ドイツ語の知識はこれからの皆さんの人生でかならず生き続けるはずで、ヨーロッパの言語・歴史・文学・文化をより深く知りたい人は、ぜひ受講してください。

授業方法

下記の初中級者向けの総合教材を使用します。初級文法事項を確認しながら、ややむずかしい内容に移行していきます。前期は会話表現を中心に、日常的なトピックを扱います。

教室ではCDによる録音教材を利用しながら、授業を進めていきます。皆さんの教科書にもCDがついていますので、家庭学習で活用してください。

授業計画

- 第1回 導入
- 第2回 Willkommen in Leipzig 規則動詞、語順、疑問文
- 第3回 Willkommen an der Uni Leipzig 名詞の性、冠詞、格
- 第4回 Essen 複数形、不規則動詞、否定冠詞
- 第5回 Familie 所有冠詞、前置詞
- 第6回 Thomaskirche 話法の助動詞、人称代名詞、命令文
- 第7回 Was hast du gestern gemacht? 3基本形、完了形、過去形、分離・非分離動詞
- 第8回 Einkaufen 非人称の表現、形容詞
- 第9回 Einkaufen 再帰代名詞
- 第10回 Weihnachten 指示代名詞、関係代名詞
- 第11回 Weihnachten 不定詞、zu-不定詞
- 第12回 Ausflug 受動態
- 第13回 Ausflug 序数詞
- 第14回 Abschied 接続法(1)
- 第15回 Abschied 接続法(2)

成績評価の方法

授業への参加態度(80%)とごく簡単な試験(20%)で評価します。予習して授業に参加していれば、まったく心配する必要はありません。

履修にあたっての注意

もっとドイツ語をやってみよう！という気持ちさえあれば、十分です。

教科書

田原憲和 他『ドイツ語プラスアルファ コミュニケーション』(郁文堂、2018、ISBN: 9784261012682)

06491**上級ドイツ語Ⅱ**

担当教員：清水 誠

1単位 後期

授業のねらい

この授業では、少なくとも2年間、ドイツ語をすでに学んだ人を対象として、より進んだドイツ語の能力を身につけるための発展的な訓練を行います。基礎的な文法事項を復習しながら、複雑な文章に親しみ、表現力の養成に力点を置きます。発音指導もできるだけ行います。比較的少人数の授業になることが予想されますので、効率よくドイツ語力をアップさせることができるでしょう。

到達目標

この授業を受講すれば、ドイツ語の知識はこれからの皆さんの人生でかならず生き続けるはずです。ヨーロッパの言語・歴史・文学・社会をより深く知りたい人は、ぜひ受講してください。

授業方法

下記の初・中級者向けの総合教材を使用します。初級文法事項を確認しながら、ややむずかしい内容に移行していきます。後期は文章表現を中心に、文化的なトピックを扱います。

教室ではCDによる録音教材を利用しながら、授業を進めていきます。皆さんの教科書にもCDがついていますので、家庭学習で活用してください。

授業計画

- 第1回 導入
- 第2回 地理と気候
- 第3回 食べ物と飲み物
- 第4回 ドイツ語という言葉
- 第5回 ドイツの大学
- 第6回 休暇と趣味
- 第7回 治安
- 第8回 教育システム
- 第9回 政治システム
- 第10回 歴史
- 第11回 音楽
- 第12回 宗教
- 第13回 ドイツの分割
- 第14回 EUとヨーロッパ
- 第15回 外国人、難民、移民

成績評価の方法

授業への参加態度（80%）とごく簡単な試験（20%）で評価します。予習して授業に参加していれば、まったく心配する必要はありません。

履修にあたっての注意

もっとドイツ語をやってみよう！という気持ちさえあれば、十分です。

教科書

斎藤太郎 他『知りたいドイツ語』（朝日出版社、2018、ISBN：9784255254036）

授業のねらい

すでにフランス語を最低 2 年間学んだ学生を対象に、フランス語の読解力と会話力を高めることをめざします。フランスの歴史・地理・経済・社会・教育等に関する時事的なトピックを紹介する中級教科書をメインに副教材として会話参考書を併用して、初・中級レベルの知識（仏検 3 級までに相当）の復習をし、その定着をめざします。

フランス語そのものを実際に使っていくことが、その背景にあるフランス（語圏）についての知識を豊かにすることにつながれば幸いです。

到達目標

1. 日常会話の基本的な決まり文句や定型表現がすぐ口について出るようにする。
2. 基礎的な文法事項（仏検 5～4 級程度）の復習を含む各種練習問題を自力で解くことができる。
3. 自分で辞書を引いて、フランスの時事的なテーマを扱ったテキストを読解することができる。

授業方法

毎回の授業は演習形式による 2 部構成です。第 1 部では市販の会話参考書を使って、あいさつやお礼・お詫びなどコミュニケーションの基本表現と、欲求や依頼・勧誘・申し出といった意志を伝えるための表現パターンを学びます。I「基本会話編」の途中までを毎回 1 課ずつ進めます。授業では主に会話の発話練習と学生どうしによるロールプレイをおこないます。予習の段階で付属 CD-ROM を活用した基本的な発話練習を済ませ、各課の解説やワンポイントアドバイスを熟読しておくことが求められます（授業中により多くの時間を個別の発音指導にあてるため）。第 2 部は時事フランス語の読解で、受講生が事前に決めた分担にしたがって教科書を輪読形式で訳読していきます。教科書前半からの計 7 課を、1 課につき 2 回程度の授業で読み進めていく予定ですが、受講生の理解度と反応をみて柔軟に調整します。復習のために簡単な小テストを数回おこない、答えは採点して次の回に返却します。

授業計画

- 第 1 回 ガイダンス、イントロダクション
 第 2 回 会話(1)：こんにちは／さようなら、読解(1)：フランスのスタートアップス [経済]
 第 3 回 会話(2)：私は～です、読解(2)：前回のつづき
 第 4 回 会話(3)：ありがとう、読解(3)：フランスの学費 [教育]
 第 5 回 会話(4)：ごめんなさい、読解(4)：前回のつづき
 第 6 回 会話(5)：すみませんが／えっ？、読解(5)：フランスの就活 [経済]
 第 7 回 会話(6)：～ですか？、読解(6)：前回のつづき
 第 8 回 会話(7)：～が欲しいのですが、読解(7)：ニースとカンヌ [歴史/地理]
 第 9 回 会話(8)：～してください、読解(8)：前回のつづき
 第 10 回 会話(9)：～はいかがですか？、読解(9)：ドルドーニュ地方のイギリス人 [社会]
 第 11 回 会話(10)：～しましょうか？、読解(10)：前回のつづき
 第 12 回 会話(11)：～してもいいですか？、読解(11)：ルルド [歴史/地理]
 第 13 回 会話(12)：～しなければなりません、読解(12)：前回のつづき
 第 14 回 会話(13)：身元や特徴・様態などを尋ねる、読解(13)：ヴォルテールと寛容 [歴史/思想]
 第 15 回 会話(14)：好き嫌いを述べる、読解(14)：前回のつづき

成績評価の方法

授業への参加状況と小テスト（計 3 回程度）を含む平常点（80%）および定期試験（筆記と実技）の成績（20%）による総合評価とします。

平常点重視ですが、必要な予習をしたうえで授業に参加しているかぎり心配無用です（必要な予習をしていないことが明らかな場合を除き、間違えたからといって平常点を減点するようなことはありません）。

就活関連のやむを得ない欠席については、事前連絡があった場合には考慮します。

2018 年度春季（6 月中旬）の仏検 3 級（以上）の合格者には、その得点に応じて最終的な成績評価の際に加点します。

履修にあたっての注意

「上級」の授業ですが使用教材は初・中級レベルです。「もっとフランス語を勉強したい」という意欲のある方たちの受講を歓迎します。比較的少人数の授業になることが予想されますが、みんなで楽しく（リラックスしつつ適度な緊張感も持って）やってみましょう。時事フランス語の訳読担当者は、付属 CD を活用して読みの練習もしておくように（テキストの朗読も平常点に反映されます）。仏検 3 級以上の既修得者は、初回ガイダンス時に申し出てください。

教科書

倉方秀憲『今すぐ話せる！いちばんはじめのフランス語会話』（ナガセ（東進ブックス）、2017、ISBN：9784890857135）

加藤晴久/ミシェル・サガズ『時事フランス語 2018 年度版』（朝日出版社、2018、ISBN：9784255352817）

教科書・参考書に関する備考

いずれの教科書も CD 付きなので予習・復習に大いに活用してください。仏和辞典（電子辞書または有料アプリ可）は必ず用意して毎回持参してください。参考書は授業の中で適宜紹介します。

参考ホームページ

学内巡礼の旅 第2回 http://www.fujjoshi.ac.jp/pilgrim/index2014_01/（藤女子のルルド）

授業のねらい

すでにフランス語を最低2年間学んだ学生を対象に、フランス語の読解力と会話力を高めることをめざします。フランスの歴史・政治・社会・文化・日仏関係等に関する時事的なトピックを紹介する中級教科書をメインに副教材として会話参考書を併用して、初・中級レベルの知識（仏検3級までに相当）の復習をし、その定着をめざします。

フランス語そのものを実際に使っていくことが、その背景にあるフランス（語圏）についての知識を豊かにすることにつながれば幸いです。

到達目標

1. フランス旅行の実際の場合で役立つ表現や語句を使いこなせるようにする。
2. 基礎的な文法事項（仏検4～3級程度）の復習を含む各種練習問題を自力で解くことができる。
3. 自分で辞書を引いて、フランスの時事的なテーマを扱ったテキストを読解することができる。

授業方法

毎回の授業は演習形式による2部構成です。第1部は市販の会話参考書を使って、フランス旅行でのさまざまな場面で使われる表現や語彙を覚えて、会話の幅を広げていきます。Iの終わりから始めてII「実践会話編」の最後までで毎回1課ずつ進めます。授業では主に会話の発話練習と学生どうしによるロールプレイをします。予習の段階で付属CD-ROMを活用した基本的な発話練習を終え、各課の解説やワンポイントアドバイスを熟読しておくことが求められます（授業中により多くの時間を個別の発音指導にあてるため）。第2部は時事フランス語の読解で、受講生が事前に決めた分担にしたがって輪読形式で訳読していきます。教科書後半からの計7課を、1課につき2回程度の授業で消化していく予定ですが、受講生の理解度と反応をみて柔軟に調整します。最終回ではマクロン大統領就任演説の読解にも挑戦する予定です。復習のために簡単な小テストを数回おこない、答えは採点して次の回に返却します。

授業計画

- 第1回 (ミニ・ガイドンス)
会話(1)：意見や判断を述べる、読解(1)：ジャン・モネ [歴史/政治]
- 第2回 会話(2)：さまざまな場面での挨拶、読解(2)：前回のつづき
- 第3回 会話(3)：ホテルのフロントで、読解(3)：移民危機 [EU/政治]
- 第4回 会話(4)：ルームサービス、読解(4)：前回のつづき
- 第5回 会話(5)：地下鉄に乗る、読解(5)：フランスにおける歴史責任問題 [歴史/政治]
- 第6回 会話(6)：道を尋ねる、読解(6)：前回のつづき
- 第7回 会話(7)：美術館を見学する、読解(7)：警察と憲兵隊 [制度]
- 第8回 会話(8)：レストランで(1)、読解(8)：前回のつづき
- 第9回 会話(9)：レストランで(2)、読解(9)：ライドシェア [社会]
- 第10回 会話(10)：ブティックで、読解(10)：前回のつづき
- 第11回 会話(11)：バッグをなくす、読解(11)：神学校生 [宗教]
- 第12回 会話(12)：病気、読解(12)：前回のつづき
- 第13回 会話(13)：ホテルのチェックアウト、読解(13)：バンド・デシネ [文化/フランス・日本]
- 第14回 会話(14)：搭乗手続き、読解(14)：前回のつづき
- 第15回 読解(15)：マクロン大統領就任演説 [特別資料]

成績評価の方法

授業への参加状況と小テスト（計3回程度）を含む平常点（80%）および定期試験（筆記と実技）の成績（20%）による総合評価とします。

平常点重視ですが、必要な予習をしたうえで授業に参加しているかぎり心配無用です（必要な予習をしていないことが明らかな場合を除き、間違えたからといって平常点を減点するようなことはありません）。

就活関連のやむを得ない欠席については、事前連絡があった場合には考慮します。

2018年度秋季（11月中旬）の仏検3級（以上）の合格者には、その得点に応じて最終的な成績評価の際に加点します。

履修にあたっての注意

時事フランス語の訳読担当者は、付属CDを活用して読みの練習もしておくように（テキストの朗読も平常点に反映されます）。とくに厳冬期の遅刻で小テストの未受験が重ならないよう気をつけましょう。

教科書

倉方秀憲『今すぐ話せる！いちばんはじめのフランス語会話』（ナガセ（東進ブックス）、2017、ISBN：9784890857135）

加藤晴久/ミシェル・サガズ『時事フランス語 2018 年度版』（朝日出版社、2018、ISBN：9784255352817）

教科書・参考書に関する備考

最終回の特別資料については教員が別途配布します。仏和辞典（電子辞書または有料アプリ可）は必ず用意して毎回持参してください。参考書は授業の中で適宜紹介します。

授業のねらい

この授業は、今の中国社会で何が話題となっているかを知りたいと希望する人を対象に、初～中級の授業を通じて身につけた中国語の文法や語彙の知識をさらに深め、中国語の文章を読む力がつき、リスニング力を高め、会話内容をもっと深めることをねらいとしている。

到達目標

1. より複雑な文法を習得し、より複雑な内容を表現できるようになる。
2. 中国に関する特定のトピックについての情報を収集することができる。
3. 中国社会を理解できるようになる。

授業方法

原則として、教科書に沿って授業を行う。テキストの文章を参加者が分担して解説し、意見を述べ合う。リスニング力をつけるために、授業の最初には、補助的に DVD、CD、テープの教材も取り入れる。定期的に会話、リスニングの小テストを行い、中国語による表現力を確認する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス、アンケート実施
 第2回 第1課 教育的公平（教育の公平）(1) “因（为）～（而）…” (2) 動詞+ “不起” (3) “由” (4) 兼語文(5) “什么”
 第3回 第1課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第4回 第2課 就業难（就職難）(1) “在～方面” (2) “而” (3) “把” 構文(4) “宁愿～也…” (5) “既～又…”
 第5回 第2課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第6回 第3課 年轻人婚恋观的变化（若者の結婚恋愛観の変化）(1) “在～上” (2) “不仅～还…” (3) “除了～（以外）” (4) “虽然～但…” (5) “并不～”
 第7回 第3課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第8回 第4課 房奴（ローン奴隷）(1) “～下去” (2) “～起来” (3) “要” (4) 進行形(5) “来” + 動詞（句）
 第9回 第4課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第10回 第5課 众多的股民（多くの個人投資家）(1) “才” (2) “即使～也…” (3) “一～就…” (4) “连～也（都）…” (5) “好像～（似的）”
 第11回 第5課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第12回 第6課 城市里的消费热（都市の消費ブーム）(1) 様態補語(2) “…，以～” (3) “只要～（就）…” (4) “令人”
 第13回 第6課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第14回 第1～6課 総復習
 第15回 口述テスト

成績評価の方法

定期テスト 50%、小テスト 30%、口述テスト 20%

履修にあたっての注意

授業中に行う解説をスムーズに進行するため、文法、語彙などの予習をしてくること。

教科書

孟広学 本間史『変化する中国』（白水社、2016年3月、ISBN：978-4-560-06922-6）

授業のねらい

この授業は、前期に続き、今の中国社会で何が話題となっているかを知りたいと希望する人を対象に、初～中級の授業を通じて身につけた中国語の文法や語彙の知識をさらに深め、中国語の文章を読む力がつき、リスニング力、会話内容をもっと深めることをねらいとしている。

到達目標

1. より複雑な文法を習得し、より複雑な内容を表現できるようになる。
2. 中国に関する特定のトピックについての情報を収集することができる。
3. 中国社会を理解できるようになる。

授業方法

原則として、教科書に沿って授業を行う。テキストの文章を参加者が分担して解説し、意見を述べ合う。リスニング力をつけるために、授業の最初には、補助的に DVD、CD の教材も取り入れる。定期的に会話、リスニングの小テストを行い、中国語による表現力を確認する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス、前期の復習
 第2回 第7課 考碗族（考碗族）(1)持続を表わす“着”(2)“不但～而且…”(3)“就”
 第3回 第7課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第4回 第8課 保姆（家政婦）(1)“是～的”(2)可能補語(3)“因为～”(4)“A比B～”
 第5回 第8課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第6回 第9課 民以食为天（民は食をもって天となす）(1)“只是”(2)“不再”(3)連動文(4)“会”
 第7回 第9課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第8回 第10課 “80后”与“养儿防老”（「80后」と「子供を育てて老後に備える」）(1)“到～为止”(2)“以～为…”(3)“或～或…”(4)“被”
 第9回 第10課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第10回 第11課 养老危机（老後の危機）(1)“将”(2)“可能”(3)“如果～的话”(4)前の動詞が“有/没有”である連動文(5)“愿意”
 第11回 第11課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第12回 第12課 公益活动在中国（中国におけるボランティア活動）(1)“像”(2)“当～时”(3)“之所以”(4)“直到～才…”
 第13回 第12課の練習問題、文章内容の確認、発展
 第14回 第7～12課 総復習
 第15回 口述テスト

成績評価の方法

定期テスト 50%、小テスト 30%、口述テスト 20%

履修にあたっての注意

授業中に行う解説をスムーズに進行するため、文法、語彙などの予習をしてくること。

教科書

孟広学 本間史『变化する中国』（白水社、2016年3月、ISBN：978-4-560-06922-6）

授業のねらい

この授業では、韓国語の基本文法や語彙について十分な知識（2年間の韓国語授業を着実にやってきた程度）があることが前提となっています。お互いの考えや気持ちなどを韓国語を使って伝え合うコミュニケーション能力を養うことが目的で、特に「読む」「話す」能力を伸ばすことに重点を置きます（旧韓国語能力試験 3 - 4 級水準を目指します）。

到達目標

1. 身近な話題・知的な話題について、平易な韓国語で情報交換や意見交換、プレゼンテーションをすることができる。
2. 身近な話題に関する比較的短い記事やレポート、資料等の要旨を理解し、必要な情報を読み取ることができる。
3. 韓国の社会・文化・生活習慣について深い知識を持っている。

授業方法

この授業は基本的にすべて韓国語で行います。授業は基本的に指定テキスト（ハンドアウト）のテーマに沿って進めますが、テーマによっては新聞記事や映像資料も用います。授業の前半では語彙と文法を簡単に確認した上でテキストの読解を中心に行い、後半ではペアワークや小グループ活動、およびプレゼンテーションを主に行います。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 第1課 余暇と娯楽①
- 第3回 第1課 余暇と娯楽②
- 第4回 第2課 季節と自然環境①
- 第5回 第2課 季節と自然環境②
- 第6回 第3課 ファッションと買い物①
- 第7回 第3課 ファッションと買い物②
- 第8回 確認テストおよびフィードバック
- 第9回 第4課 身体と健康①
- 第10回 第4課 身体と健康②
- 第11回 第5課 旅行と観光地①
- 第12回 第5課 旅行と観光地②
- 第13回 第6課 食べ物と飲料①
- 第14回 第6課 食べ物と飲料②
- 第15回 復習およびプレゼンテーション

成績評価の方法

「到達目標」1、2の到達度を計る試験の結果（50%）、授業への参加状況（50%）、により評価を行います。

履修にあたっての注意

- ・会話と読解を中心に行う授業です。授業への積極的な参加が要求されます。
- ・テキスト等の指定箇所を、必ず予習・復習（それぞれ1時間程度）した上で授業に臨んでください。
- ・授業計画は、第1回授業の結果によっては変更する可能性があります。

教科書

なし

参考書

カン・ヒョン八他『韓国語教育文法』（ハングルパーク、2016、ISBN：978-89-5518-389-4-03710）

06831

上級韓国語Ⅱ

担当教員：金 昌九

1単位 後期

授業のねらい

上級レベルの学習者にふさわしい日常的・社会的テーマを取り上げ、それぞれのテーマで使用される典型的な表現を習得します。多様なテーマについて韓国語でコミュニケーションをとる能力を養うことを目標とします。特に「読む」「話す」能力を伸ばすことに重点をおきます（旧韓国語能力試験3級～4級を目指します）。

到達目標

1. 日常的な話題、社会問題や時事問題について読み、必要な情報を取り出すことができる。
2. 社会問題や時事問題について意見交換や議論、プレゼンテーションをすることができる。
3. 韓国の社会・文化・生活習慣について深い知識を持っている。

授業方法

この授業は基本的にすべて韓国語で行います。授業は基本的に指定テキスト（ハンドアウト）のテーマに沿って進めますが、テーマによっては新聞記事や映像資料も用います。授業の前半では語彙と文法を簡単に確認した上でテキストの読解を中心に行い、後半ではペアワークや小グループ活動、およびプレゼンテーションを主に行います。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 第7課 学校と教育①
- 第3回 第7課 学校と教育②
- 第4回 第8課 仕事と職業①
- 第5回 第8課 仕事と職業②
- 第6回 第9課 住居環境①
- 第7回 第9課 住居環境②
- 第8回 復習および確認テスト
- 第9回 第10課 コンピューターと通信①
- 第10回 第10課 コンピューターと通信②
- 第11回 第11課 気分と感情①
- 第12回 第11課 気分と感情②
- 第13回 12課 他人との関係①
- 第14回 12課 他人との関係②
- 第15回 期末テスト・まとめ

成績評価の方法

「到達目標」1、2の到達度を計る試験の結果（50%）、授業への参加状況（50%）、により評価を行います。

履修にあたっての注意

- ・会話と読解を中心に行う授業です。授業への積極的な参加が要求されます。
- ・テキスト等の指定箇所を、必ず予習・復習（それぞれ1時間程度）した上で授業に臨んでください。

教科書

なし

参考書

カン・ヒョンハ『韓国語教育文法』（ハングルパーク、2016、ISBN：978-89-5518-389-4-03710）

人間生活学科専門科目

550001

共生社会への招待

担当教員：伊井義人 他

2単位 前期

授業のねらい

日々生活していると、多様な性格、価値観、生活習慣をもつ人たちと出会う。そして、その様々な人たちと協働で「何か」を作り上げていく必要がある。それは、大学での生活でも例外ではない。そのような多様な人たちと共生する作法を、現代家政、社会福祉、プロジェクトマネジメントのそれぞれの立場から提案するのが授業のねらいである。

到達目標

- ・日々生活するには、多様な特性を持った人々と付き合う必要が有ることを知識として理解する。
- ・自分の特性を他者に伝えることができる。
- ・他者の話すことがらに耳を傾けることができる。

授業方法

- ・グループワーク
- ・講義

授業計画

- 第1回 イントロダクション、自己紹介、大学における多様性を理解する
- 第2回 自分の周囲に存在する多様性との共生への気づき
- 第3回 世界における宗教的多様性と共生社会
- 第4回 世界における文化的多様性と共生社会
- 第5回 「現代家政（衣領域）から見た共生社会」①
- 第6回 「現代家政（食領域）から見た共生社会」②
- 第7回 「現代家政（住領域）から見た共生社会」③
- 第8回 「社会福祉から見た共生社会」①
- 第9回 「社会福祉から見た共生社会」②
- 第10回 「社会福祉から見た共生社会」③
- 第11回 「プロジェクトマネジメントから見た共生社会」①
- 第12回 「プロジェクトマネジメントから見た共生社会」②
- 第13回 「プロジェクトマネジメントから見た共生社会」③
- 第14回 社会における多様性と共生するための作法とは
- 第15回 最終レポートと提出

担当教員：伊井義人・阿部包・内田博・岡崎由佳子・田中宏実・長尾順子・船木幸弘・松田剛史・丸山正三・和田雅子

成績評価の方法

- ・各領域ごとの小レポート 30%
- ・グループ発表 30%
- ・最終レポート 40%

履修にあたっての注意

- ・自分の個性だけでなく、他の履修者の個性も認めつつ、積極的にディスカッションやグループワークに参加してください。

教科書・参考書に関する備考

適宜参考資料を提示します。

授業のねらい

ボランティア体験の多くは、行事化された学生としての奉仕的活動が主であり、「やらされる」感の強い活動となっていて、特に、清掃活動、募金活動、そして施設訪問活動などは「ボランティア」を狭義にしていこうと思われず。

本講では、ボランティアの意味や意義、そして豊かな活動から学びうる様々な価値を発見して、人や社会に関わり自己成長することの喜びを実際体験をとおして学ぶことを目的とします。主体的に体験から学ぶことをとおして、人としてのあり方や社会のあり方に関わる課題を捉え、「体験」と「学習」の深化と「社会貢献」への糸口を検討・協議しながら見出します。

到達目標

社会の様々な問題に気づき、その解決方法の一つとして選んだボランティア活動に主体的に取り組む。

なお、ボランティア活動は2箇所ないし3箇所程度が望ましい。

- (1) ボランティア活動は、学生自らが情報にアプローチして選択し、活動先と交渉してから実際に取り組むことで、自らの社会課題を明らかにすることと、ポジティブに取り組むことで、ボランティアが持つ本来の「価値としての学び」を体得する。
- (2) 学生各自の体験活動から学び得たことの課題把握や解決の糸口を見出すことができる。
- (3) 主体的な活動やグループワークを通して、具体的な問題事例を研究し支援のあり方などが発表できる。

授業方法

この授業は、「体験すること」と「学習すること」を主たる柱にし、全15回を5回ごと3期に分けて展開する。

第1期目は、この授業のねらいや基本的な進め方をガイダンスしながら、学生が興味関心のある問題に対して、ボランティアするための情報収集やニーズへのアプローチについて学習し、実際に課外学習として取り組み、その結果を持ち帰りグループワークの中で確認する。

第2期では、グループワークで第1期に確認した事柄について、「ふりかえり」修正を加えながら、新たな課題に挑む。活動先の選択と承諾を得て、課外で実践する。その結果を持ち帰り、グループワークを通しながら、ボランティアについて考えるとともに人間や社会のあり方について、問題意識を共有する。

第3期は、第2期目で共有した問題意識をさらに深めるために、継続するか新たな活動に変更するかは自己判断とし、その成果物を持ってグループワークを展開する。

その後、この授業で学び得たことを「期末レポート」として作成して、全体の中で発表する。

なお、活動先には「活動の証明」の交付を依頼すること。また、その依頼（お願い）から個々の学生としてのボランティア活動を始めていく。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
 - ・この授業のねらいや目標、そして進め方や活動の仕方
- 第2回 ボランティア活動の内容と情報収集について
 - ・活動のバリエーションから興味関心のある内容を選ぶ
 - ・ニーズの情報をいかに収集し、マッチングするための方法について考える
- 第3回 第1期目のボランティア活動の開始
 - ・実際にボランティア活動に取り組む（情報収集や相手先への依頼、実際の活動や成果を把握する）
- 第4回 第1期目のボランティア活動の継続
 - ・実際にボランティア活動に取り組む（情報収集や相手先への依頼、実際の活動や成果を記録する）
- 第5回 体験を共有するグループワーク(1)
 - ・第1期目の活動から学び得たことを交流し、次の活動のためのヒントを見出す
- 第6回 第2期目の活動に向けて、どのような目的でどのような活動を行うのか、個々計画を立てる
 - ・個々のボランティアへの興味関心を高め、それに見合う活動計画づくりを行う
- 第7回 第2期目のボランティア活動の開始
 - ・実際にボランティア活動に取り組む（計画した活動と実践の違いを見出す）
- 第8回 第2期目のボランティア活動の継続
 - ・実際にボランティア活動に取り組む（計画した活動と実践の違いを見極める）
- 第9回 体験を共有するグループワーク(2)
 - ・第2期目の活動から学び得たことを交換し、改善点や課題点などを協議する
- 第10回 第3期目のボランティア活動の計画づくり
 - ・これまでの学習を「ふりかえり」ながら、どのような視点で新たな計画を考えたのか発表する
- 第11回 第3期目のボランティア活動の開始
 - ・実際にボランティア活動に取り組む（情報収集や相手先への依頼、実際の活動や成果を把握する）
- 第12回 第3期目のボランティア活動の継続
 - ・実際にボランティア活動に取り組む（情報収集や相手先への依頼、実際の活動や成果を記録する）

第13回 体験を共有するグループワーク(3)
・第3期目の体験をふりかえる(グループワーク)

第14回 全体協議

第1期から第3期までのボランティア活動と「ボランティア観」をふりかえる

第15回 まとめ(今後、一人ひとりの人や社会の問題との関わりを考える)
・個々の体験と学び・成果の共有(レポート作成・全体発表)

成績評価の方法

1. 第1期、第2期、第3期のボランティア活動の実践報告書(60%)
 2. まとめの期末レポート(30%)
 3. グループワーク等の参加状況(10%) により評価する。
- なお、特別な事情を除いて、3回のボランティア体験は必須とする。

履修にあたっての注意

ボランティア活動先では、言葉遣いや態度、挨拶など本校の学生としての礼節をわきまえること。また、“もしも”に備えるためにボランティア保険(年500円程度)に加入すること。(市社会福祉協議会)

参考ホームページ

学内掲示ボランティア情報(花川キャンパス)
石狩市社会福祉協議会
札幌市社会福祉協議会ボランティアセンター

550101

衣食住生活のルーツ 担当教員：長尾順子・岡崎由佳子・木脇奈智子・田中宏実 2単位 前期

授業のねらい

この講義は、異なる研究分野に所属する4人の教員が、家政学に関わるテーマについて各々の専門分野から講義します。生活という皆さんにとって身近な事象を、多角的な視点からみる姿勢を養い、生活課題を発見する力を身につけてもらうことを目指します。

到達目標

衣食住家族生活に関わるテーマの広がりを理解し、生活を総合的に捉える視点を身につけることができる。

授業方法

- ・オムニバス形式による講義を行います。
- ・各講義の担当者によって、ビデオやパワーポイントを用いたり、必要な資料などを配布します。
- ・毎回講義の終わりにミニレポートを書くことを原則とします。
- ・受講後は講義内容を自分の生活に反映できるかどうか考えてみてください（所要時間45分程度）。
- ・質問は、受けた教員が担当する講義の際に、口頭で回答します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス／衣のルーツ（長尾）
- 第2回 家族のルーツ（木脇）
- 第3回 食のルーツ（岡崎）
- 第4回 住のルーツ（田中）
- 第5回 西洋・日本における家族のルーツ（木脇）
- 第6回 洋服のルーツ（長尾）
- 第7回 洋食のルーツ（岡崎）
- 第8回 洋風建築のルーツ（田中）
- 第9回 和服のルーツ（長尾）
- 第10回 和食のルーツ（岡崎）
- 第11回 日本建築のルーツ（田中）
- 第12回 ルーツから現代へ－家族関係学－（木脇）
- 第13回 ルーツから現代へ－食物学－（岡崎）
- 第14回 ルーツから現代へ－住居学－（田中）
- 第15回 ルーツから現代へ－被服学－（長尾）

成績評価の方法

ミニレポートの評価100%として到達目標を測定する。

履修にあたっての注意

授業計画の前後を関連させて自宅学習を行ってください。

授業のねらい

我々の暮らす都市に関連する身近な課題をとりあげる。平易に解説・講義するので、住んでいる「まち」を見つめ直すきっかけとする。

北海道の開拓と都市化、そして、都市化によって生じる人口問題、人間活動による大気汚染、上水道の整備、ゴミの増加とその対策、などの課題を札幌市の場合を実例にして考える。

また、電力を中心としたエネルギーの供給と使用について考える。

そして、自分の故郷や将来住みたい街についての将来ビジョンについても考える。

到達目標

1. 都市化と都市開発について、札幌冬季オリンピック誘致などに関連させて、自身の考えをまとめて説明できる。
2. 都市化に関連した環境問題を少なくとも一つ挙げて論じることができる。
3. 生活とエネルギーとの関係について多面的に論じ、さまざまな発電方法（電力供給）について、科学的根拠を基に論じることができる。
4. 自身の出身の市町村の生活環境について説明して、さらに将来ビジョンを提案できる。

授業方法

毎回、資料を配布して、その内容について、スライドや板書によって講義する。

授業計画欄にキーワードを「 」で記す。講義内容と時間配分を（ ）に%で記す。

小テストなどの実施による時間配分変更の場合がある。

都合によって、講義の順番に変更がある場合があります。毎回、ポータルサイトでお知らせしますので、確認してください。

事前学習：「 」に示した2つのキーワードについて、書物などによって「言葉の意味」を調べておいて欲しい。

事後学習：授業の最後とポータルサイトに毎回、簡単な「宿題」を提示しますので次回に提出してもらいます。

授業計画

- 第1回 はじめに
「人口増加」「応仁の乱」
人口増加と都市化（50%）、首都圏（20%）、札幌圏（30%）
- 第2回 北海道開拓
「島義勇」「1972年」
北海道開拓の歴史(50)、札幌圏の近代化(30)、市町村の花・木・鳥(20)
- 第3回 札幌市の都市化
「政令指定都市」「JR 札幌駅」
札幌冬季オリンピックと都市化(50)、札幌圏の交通網の発展(30)、地下街(10)、2回目の冬季オリンピック誘致(10)
- 第4回 都市大気(1)札幌圏の大気状況
「100万台」「PM2.5」
自動車台数と大気汚染(50)、大気汚染の監視(30)、世界の都市の大気汚染(20)
- 第5回 都市大気(2)ヒートアイランド
「アルベド」「緑被率」
ヒートアイランドの原因(30)、東京のヒートアイランド対策(50)、札幌のヒートアイランド対策(20)
- 第6回 都市の水環境(1)上水道と下水道
「200リットル」「BOD」
札幌圏の降水量と貯水(50)、配水の問題(20)、下水の浄化(20)、水環境保全の日常の取り組み(10)
- 第7回 都市の水環境(2)水道水と市販ボトル水
「CaとMg」「硬度60」
飲料水の水質基準(40)、市販ボトル水と地質(50)、海洋深層水(10)
- 第8回 都市とエネルギー(1)電気と生活
「オール電化」「500万kw」
生活と電化製品(40)、必要な電力量(30)、発電の仕組み(30)
- 第9回 都市とエネルギー(2)原子力発電
「20ミリシーベルト」「核廃棄物」
原子力発電のメリットとリスク(70)、福島第一原発事故のその後(30)
- 第10回 都市とエネルギー(3)電力供給
「10,000基」「札幌ドーム600個」
自然エネルギーによる発電：風力(30)、太陽光(20)、シェールガス・メタン(20)、地熱(10)、バイオガス(10)、そ

- その他(10)
- 第11回 消費社会と低炭素社会
「エシカルコンシューマー」「フードマイレージ」
消費者の意識とライフスタイル(30)、食糧自給率と消費(30)、ごみ問題と法制度(40)
- 第12回 まちづくり(1)景観
「31m」「キノルド記念館」
札幌市と京都市の景観条例(50)、景観づくりの考え方(20)、札幌の文化遺産保護(30)
- 第13回 まちづくり(2)シンボルとビジョン
「1869年：明治2年」「2001年：平成13年」
札幌市のシンボル(30)、大通、大型施設とイベント(20)、札幌市10年のビジョン(50)
- 第14回 都市と災害
「56災害」「ハザードマップ」
ゲリラ豪雨と対策(30)、雪害対策(30)、札幌直下型地震の可能性(20)、ハザードマップ(20)
- 第15回 まとめ：将来に向けて
課題発表会：4-5名単位のグループで作成したスライドを用いて、「都市環境」についてのプレゼンテーション

成績評価の方法

授業への取り組み(40%)、
講義キーワードの理解度を測るための小テスト(30%)
到達目標に関連した課題1または2、そして3と4に関する3つの課題のレポート(30%)で評価する。

履修にあたっての注意

自身の住んでいる市町村の開拓の歴史について考える機会にして欲しい。将来の「まち」の発展について、受講者自らが問題点に気づいて、自発的に課題を発信して欲しい。新聞、テレビなどからの情報に触れて都市生活の環境を見つめる態度を培って欲しい。

*都合によって、講義の順番が変わることがあります。

教科書・参考書に関する備考

教科書：なし。毎回プリントを配布する。
参考書：講義の中で紹介する。

授業のねらい

私たちは、社会の高齢化や少子化、男女共同参画、環境問題など 21 世紀にたくさんの問題を抱えている。社会の急速な動きに対し、自分らしさを失わずに生きていくにはどうしたらいいだろうか。その答えを見つけるための様々な基礎知識から最新情報までを学ぶ。

到達目標

現代社会における生活経営のポイントを理解することができる。
自らの生活マネジメントや人生設計について考えることができる。

授業方法

講義を中心とするが、ワークショップを行い意見を発表しあうこともある。

授業計画

- 第 1 回 生活経営とは何か：
男女共同参画社会の生活経営
- 第 2 回 家族を考える：
(1)変容する家族
- 第 3 回 家族を考える：
(2)ゆれる男女役割と家族
- 第 4 回 女性が働く：
アンパイドワークとパイドワーク
- 第 5 回 経済を整える：
(1)ライフステージと家庭経済
- 第 6 回 経済を整える：
(2)社会の変化と家庭経済の変容
- 第 7 回 消費社会を生きる：
コンシューマリズムの確立
- 第 8 回 環境と共生する：
地球環境問題の現在
- 第 9 回 環境と共生する：
消費者の自覚と責任
- 第10回 情報を生かす：
情報リテラシーと生活
- 第11回 子どもと育つ：
(1)子どもを持つ・持たない・持てない
- 第12回 子どもと育つ：
(2)子育てを楽しむ
- 第13回 子どもと育つ
(3)性と生殖に関する健康と権利
- 第14回 老いを楽しむ：
ウェルエイジング社会の中で
- 第15回 支えあって生きる：
私たちの生活とリスクマネジメント

成績評価の方法

小テスト（理解度を問うもの）を 3 回行なう予定である（90%）。そのほかに、授業中に記入するコメントカードを成績の対象とする（10%）。

履修にあたっての注意

必修科目のため、出席回数には注意すること。

教科書

臼井和江『21 世紀の生活経営』（同文書院、2001、ISBN：978-4-8103-1244-7）

教科書・参考書に関する備考

参考書は授業の中で紹介します

授業のねらい

現代の社会生活に深く関係する「社会福祉」について体系的に理解することを目的とする。今日的な社会福祉の理念、社会福祉のあゆみ（史的変遷）の理解を基盤とし、社会福祉の制度・サービスとの関連について学ぶ。また、社会福祉の相談援助の意義や方法に関する基本的枠組の理解と、社会福祉専門職（社会福祉士）の実際の役割について具体的事例を通して学ぶ（職業指導含む）。

到達目標

1. 社会福祉を自らの生活に照らして考えることができる。
2. 社会福祉の分野、制度・サービスの概要を理解し、説明することができる。
3. 社会福祉の相談援助の実際を理解することができる。
4. 社会福祉の専門職としての倫理や基本的態度の重要性について理解することができる。

授業方法

- ・講義形式（パワーポイント使用）を中心とする。
- ・第2回～第11回の授業時に、到達目標1に関するリアクションペーパー（15分程度）を求められることがある。
- ・第12回～第14回の授業時に、到達目標3・4に関するリアクションペーパー（20分程度）をを求める。
- ・第11回授業時にレポートについての説明、第14回授業時にリアクションペーパーの結果のフィードバックを行う。
- ・授業終了時に次回講義に必要な予習事項（所要時間30分程度）、復習事項（所要時間30分程度）を指示する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
現代社会と社会福祉 1) 社会福祉の分野
- 第2回 現代社会と社会福祉 2) 社会福祉の基本的考え方 (1)社会福祉の原理
- 第3回 現代社会と社会福祉 3) 社会福祉の基本的考え方 (2)社会福祉の対象（ニーズ）
- 第4回 現代社会と社会福祉 4) 社会福祉の基本的考え方 (3)社会福祉の機能
- 第5回 社会福祉のあゆみ 1) 法律による社会福祉（イギリス・日本）
- 第6回 社会福祉のあゆみ 2) 自発的社会福祉（イギリス・日本）
- 第7回 社会福祉の制度・サービスの理解 1) 社会保障と社会保険、公的扶助
2) 社会福祉基礎構造改革と福祉サービス
- 第8回 社会福祉の制度・サービスの理解 3) 医療保険、年金保険
- 第9回 社会福祉の制度・サービスの理解 4) 介護保険、雇用保険、労災保険
- 第10回 社会福祉の分野と制度・サービスの関連性の理解
1) 高齢者福祉、障がい者福祉、児童福祉・学校（スクール）ソーシャルワーク
2) 地域福祉、医療福祉、司法福祉
- 第11回 社会福祉の相談援助場面と制度・サービスの関連性の理解
個別支援（個別相談機関）と地域支援・地域づくり場面
- 第12回 社会福祉の相談援助場面の実際
1) 児童相談所における社会福祉士による支援の実際
到達目標3・4に関するリアクションペーパー
- 第13回 社会福祉の相談援助場面の実際
2) 医療機関における社会福祉士（MSW）による支援の実際
到達目標3・4に関するリアクションペーパー
- 第14回 社会福祉の相談援助場面の実際
3) 地域包括支援センターにおける社会福祉士による支援の実際
到達目標3・4に関するリアクションペーパー
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標1・3・4：リアクションペーパー 50%
到達目標2：レポート 50%
の合計100%で評価する。

履修にあたっての注意

- ・学科必修科目であるが、社会福祉の諸課題に関心を持ち、十分な予習・復習をした上で受講すること。
- ・社会福祉士国家試験受験資格指定科目であり、2年次以降の社会福祉士国家試験受験資格取得に必要なソーシャルワーク実習・演習科目の前提履修科目である。

-
- ・教員免許（福祉）の必修科目である。
 - ・全講義の3分の1以上欠席した学生は、評価対象とはせず単位を認定しません。
 - ・授業の進め方、留意点、評価方法の詳細は、初回のオリエンテーションで説明を行うため、欠席しないよう留意すること。

教科書

山縣文治・岡田忠克編『よくわかる社会福祉 第11版』（ミネルヴァ書房、2016、ISBN：9784623076765）

教科書・参考書に関する備考

指定した教科書のほか、講義に必要な資料をハンドアウトするので、各自ファイリングし予習・復習に活用すること。
参考書は、授業時にリファレンスを行う。

授業のねらい

ソーシャルワーク（相談援助）の基本的な知識と技術について、ワークショップを通して実践的に習得する。

到達目標

1. ソーシャルワーク（相談援助）に携わる積極的な学習姿勢をもち、自ら考え主体的に行動することができる。
2. ソーシャルワーカーに必要な資質を高め、ソーシャルワーク（相談援助）場面で活用できる基礎的なスキルを習得することができる。

授業方法

- ・ 個別指導ならびに集団指導（ワークショップ）、具体的な面接場面を想定したロールプレイング等の演習形態をとります。
- ・ リアクションペーパーやレポートに関して授業時にフィードバックを行います。

授業計画

- 第1回 自己覚知(1)自己紹介・他者紹介
- 第2回 自己覚知(2)ライフヒストリー
- 第3回 自己覚知(3)自分のコミュニケーションパターンの把握
- 第4回 自己覚知(4)価値観の多様化の理解
- 第5回 自己覚知(5)自己開示とフィードバック
- 第6回 基本的なコミュニケーション技術の理解(1)コミュニケーションと人間関係
- 第7回 基本的なコミュニケーション技術の理解(2)コミュニケーションの本質的理解
- 第8回 基本的なコミュニケーション技術の理解(3)言語・非言語コミュニケーションスキルの理解
- 第9回 基本的なコミュニケーション技術の理解(4)基本的コミュニケーションスキルの理解
- 第10回 基本的な面接技術の理解(1)インタビュー技法の理解
- 第11回 基本的な面接技術の理解(2)インタビュー技法ロールプレイ
- 第12回 基本的な面接技術の理解(3)観察技法の理解
- 第13回 基本的な面接技術の理解(4)観察技法ロールプレイ
- 第14回 基本的な面接技術の理解(5)面接ロールプレイ
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 及び 2 について、演習参加度（50%）、リアクションペーパー・レポート（50%）により評価する。

履修にあたっての注意

- ・ 社会福祉専修の必修科目である。
- ・ 2年次以降の社会福祉士国家試験受験資格取得に必要なソーシャルワーク実習指導Ⅰ、ソーシャルワーク実習Ⅰ、ソーシャルワーク演習Ⅰの前提科目となる。
- ・ 「体験を通じた学び」が中心となるので、受講に当たっては、学生の主体的な参加（発言や討議、ロールプレイへの参加）を求める。よって欠席しないように留意すること。

教科書・参考書に関する備考

使用しない。適宜、プリントを配布する。

授業のねらい

子どもの生活実態と取り巻く環境の全体像、1. 子どもを取り巻く社会環境（都市化・核家族化・少子化・晩婚化・学歴・経済格差・遊びの変化等）、2. 子どもと社会問題（いじめ・不登校・非行・暴力等）、3. 子どもと家庭問題（DV・虐待・貧困等）を理解する。

子どもの「権利」について理解する。

日本の子どもを取り巻く福祉制度のあゆみ（歴史）を理解する。

日本の子どもを取り巻く諸問題を解決するための支援方法について理解する。

到達目標

到達目標1～児童家庭福祉の歴史、児童家庭の生活実態や福祉ニーズ、児童福祉に関わる法制度、政策、施策の知識を身に着けることを目標とします。

到達目標2～保護が必要な子どもの状況を理解し、現代の社会的養護の形態（施設的養護、家庭的養護）の現状と課題を理解することを目的とします。

授業方法

授業は講義形式でプロジェクターを使用します。次回の授業までの課題を提供し、授業内で発表してもらう場合があります。各回の理解度を確認するために授業の感想を書く、演習課題に対して、自己の意見を発表してもらう場合があります。授業の最後に質問に答える時間をもちます。

授業計画

- 第1回 ◎ガイダンス ◎「子どもと福祉」とは何か
・「児童」とは??児童の定義 ・児童(子ども)を表す用語と年齢範囲 ・児童福祉とは何か
- 第2回 ◎日本の児童福祉の歴史の変遷Ⅰ
・近代以前の時代における児童保護 ・児童保護のはじまり ・戦争中の子どもたち
- 第3回 ◎日本の児童福祉の歴史の変遷Ⅱ
・戦後直後の児童福祉 ・児童福祉法の成立
- 第4回 ◎日本の児童福祉の歴史の変遷Ⅲ
・権利主体としての子ども(子どもの権利条約)
- 第5回 ◎日本の児童福祉の歴史の変遷Ⅳ
・都市集中化 ・核家族化 ・少子化問題(高学歴化・晩婚化・労働問題・待機児童問題)
- 第6回 ◎日本の児童福祉の歴史の変遷Ⅴ
・現代社会の子どもを取り巻く環境(遊びの変化・いじめ・不登校・非行問題・児童虐待)
- 第7回 ◎日本の児童福祉の歴史の変遷～まとめ
・様々な社会情勢から18歳成人を考える
- 第8回 ◎児童福祉施設の理解Ⅰ
・児童福祉施設とは ・児童福祉施設の種類 ・入所退所の仕組み ・施設運営費
- 第9回 ◎児童福祉施設Ⅱ
・養護系の施設と障がい系の施設
- 第10回 ◎児童福祉施設Ⅲ
・施設の小規模化 ・児童福祉施設の課題
- 第11回 ◎児童福祉の関連施策
・児童福祉法 ・児童福祉法の改正 ・児童福祉の関連施策(児童扶養手当法・母子保護法、母子及び寡婦福祉法)
- 第12回 ◎要保護児童と社会的養護
・多様に使われる「養護」 ・要保護児童 ・社会的養護 ・権利としての社会的養護 ・子どもの養護体系 ・社会的養護を担う児童福祉施設 ・国際的にみた社会的養護
- 第13回 ◎里親制度Ⅰ
・里親制度とは ・里親制度の四種類
- 第14回 ◎里親制度Ⅱ
・里親の要件と原則 ・里親制度の課題
- 第15回 ◎まとめと試験

成績評価の方法

到達目標1を測定する小テストと提出物(20%)、到達目標2を測定する試験(50%)、授業への参加状況(30%)により評価します。

履修にあたっての注意

授業中の私語はしないでください。レジメを配布するので、各自でファイリングするなど自己管理をするようにしてください。

全講義の3分の1以上の欠席の学生は、評価対象とはせず、単位を認定しません。
社会福祉士国家試験資格の指定科目です。

教科書・参考書に関する備考

教科書は特に指定しません。参考書は講義の中で紹介します。

授業のねらい

少子・高齢社会の我が国では、高齢者を取り巻く環境や状況を理解することが現代社会を理解するための大切な要素の一つとなっています。本科目では高齢者を理解するために身体的・精神的・社会的特性について理解します。また、現代社会における高齢者問題について、人口構造、家族形態、地域社会の変化などの理解も深めます。さらに、高齢者を取り巻く環境や状況を理解し高齢者福祉の理念・目的を押さえつつ、高齢者の福祉・介護ニーズを把握し、介護保険制度を中心とする法制度との関連性から高齢者福祉施策の全体像を理解することをねらいとします。

到達目標

1. 高齢者の生活実態について、多方面から理解することができる。
2. 高齢者福祉の発展過程を歴史展開から理解することができる。
3. 高齢者の生活や支援に関する法律・施策を理解することができる。

授業方法

本講義は、毎回配布する資料を中心とする講義形式で展開します。到達目標に対応して3回のリアクションペーパーを提出していただきます。事前学習として講義時に示す課題に取り組みます。また、事後学習では講義時に配布した資料や紹介した資料・文献を活用して取り組むこととします。また、確認テストは最終回に返却し、内容の確認と解説を行います。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
 - ・少子高齢社会とは
 - ・「老い」「高齢者」とは
- 第2回 高齢者の生活実態やこれを取り巻く社会情勢(1)
 - ・高齢者の身体的・精神的・社会的な特性
- 第3回 高齢者の生活実態やこれを取り巻く社会情勢(2)
 - ・生涯発達とエイジング
 - ・エイジズム
- 第4回 高齢者の生活実態やこれを取り巻く社会情勢(3)
 - ・少子高齢化と社会的問題
- 第5回 高齢者の生活実態やこれを取り巻く社会情勢(4)
 - ・高齢者と家族
- 第6回 高齢者福祉制度の発展過程(1)
 - ・老人福祉法制定以前までの高齢者福祉のあり方
- 第7回 高齢者福祉制度の発展過程(2)
 - ・老人福祉法制定以降の高齢者福祉施策
- 第8回 高齢者関連法制度(1)
 - ・高齢者関連法制の体系
 - ・高齢社会対策基本法
- 第9回 高齢者関連法制度(2)
 - ・老人福祉法
 - ・高齢者の医療の確保に関する法律
- 第10回 高齢者関連法制度(3)
 - ・高齢者虐待防止法
 - ・高齢者、障害者の移動等の円滑化に関する法律
 - ・高齢者の居住の安定確保に関する法律
- 第11回 介護保険制度の概要(1)
 - ・制度創設の背景と経緯、基本的性格
- 第12回 介護保険制度の概要(2)
 - ・介護保険法の制定と改正過程
 - ・保険者と被保険者
- 第13回 高齢者の生活と高齢者福祉施策
- 第14回 授業の振り返り・確認テスト
- 第15回 高齢者福祉論のまとめ

成績評価の方法

授業への参加状況 (30%)、リアクションペーパー (5%×3回)、確認テスト (55%) により評価します。

履修にあたっての注意

特定の教科書を使用しないため、毎回の講義で配布する資料を保管し、学習の材料としてください。

教科書・参考書に関する備考

教科書：特定の教科書は使用しません。毎回、講義資料を配布します。

参考書：講義内で適宜紹介します。

授業のねらい

ソーシャルワーク（相談援助）の専門職である社会福祉士（及び精神保健福祉士）の役割と意義について理解します。また、ソーシャルワークの概念と範囲、理念やソーシャルワークにおける権利擁護の意義、専門職に求められる知識・価値を理解し、ソーシャルワークの学びに関する基礎を身につけ、ソーシャルワークに興味・関心をいだくことができることを目指します。

到達目標

1. ソーシャルワークの定義や社会福祉士などの専門職の役割を説明することができる。
2. ソーシャルワークの形成過程について説明することができる。
3. ソーシャルワークの理念について説明することができる。

授業方法

基本的に講義形式により、以下の内容で進めます。

事前学習（2時間程度）として授業前に教科書の該当箇所を読んでおくことを求めます。また、事後学習（2時間程度）として専門用語等について教科書指定している辞典を活用して確認することを求めます。

到達目標を測定する試験（3回）については、採点後の授業で返却し、内容の確認を行います。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
・ソーシャルワークとは何か
- 第2回 社会福祉士及び精神保健福祉士の理解
・資格特性と専門性
- 第3回 社会福祉士の役割と意義(1)
・社会福祉専門職の属性条件
- 第4回 社会福祉士の役割と意義(2)
・専門職が求められる社会的背景
- 第5回 ソーシャルワーク（相談援助）の定義と構成要素(1)
・国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）の定義
・ソーシャルワークの概念と範囲
- 第6回 ソーシャルワーク（相談援助）の定義と構成要素(2)
・ソーシャルワークの知識・技術・価値
・ソーシャルワークの構成要素
- 第7回 到達目標1についての試験
ソーシャルワーク（相談援助）の形成過程(1)
・ソーシャルワークの源流、基礎確立期
- 第8回 ソーシャルワーク（相談援助）の形成過程(2)
・ソーシャルワークの発展期
・ソーシャルワークの展開期
- 第9回 ソーシャルワーク（相談援助）の形成過程(3)
・ソーシャルワークの統合化とジェネラリスト・ソーシャルワーク
- 第10回 到達目標2についての試験
ソーシャルワーク（相談援助）の理念(1)
・ソーシャルワーク実践と価値
- 第11回 ソーシャルワーク（相談援助）の理念(2)
・ソーシャルワーク実践と権利擁護
- 第12回 ソーシャルワーク（相談援助）の理念(3)
・クライアントの尊厳と自己決定、自立支援
- 第13回 ソーシャルワーク（相談援助）の理念(4)
・ノーマライゼーションと社会的包摂
- 第14回 ソーシャルワーク（相談援助）の理念(5)
・まとめ
到達目標3についての試験
- 第15回 総括

成績評価の方法

授業への参加状況（20%）、到達目標1を測定する試験（20%）、到達目標2を測定する試験（30%）、到達目標3を測定する試験（30%）により評価する。

履修にあたっての注意

社会福祉士受験資格取得の必須科目です。

教科書

社会福祉士養成講座編集委員会『新・社会福祉士養成講座 6 相談援助の基盤と専門職』（中央法規出版、2015、ISBN：978-4-8058-5102-9）
山縣文治、柏女霊峰他『社会福祉用語辞典』（ミネルヴァ書房、2013、ISBN：978-4-623-06543-1）

教科書・参考書に関する備考

参考書：講義で紹介する。

授業のねらい

本講義では、プロジェクトマネジメントの基本的な概念を学び、成功へ導くプロジェクトを実践するために必要な考え方や技法を学びます。プロジェクトという用語は聞いたことがあるかもしれませんが、実際に使ったことはないかもしれません。たとえばオープンキャンパスでチームを作ってイベントを開催する、地元や学校の祭を運営する、仲間と社会の課題解決のための活動を実践する—すべてはプロジェクトととらえることができ、これらは一定の期間の下で行われます。このようにプロジェクトマネジメントとは、ひとつの活動や事業等に対して、目標を明確にしていきながら、プロジェクトを運営し、設定した期限内に目標を達成することにより事業を終了させ、そして事後評価を行うまでの一連の管理プロセス全体のことを指します。そのようなプロセスを履修者は、知識として学び、簡単な体験もらうことが本講義のねらいです。

到達目標

- ・プロジェクトマネジメントの基本的考えを理解できるようになります。
- ・プロジェクトを企画するための創造的な思考を獲得できるようになります。
- ・プロジェクトマネジメントを実践するために、コミュニケーション（リーダーシップ、積極的態度、協調性等）が重要であることを理解できるようになります。
- ・プロジェクトマネジメントの基本的な実践を通して、プロジェクトマネージャーの重要性を学びます。

授業方法

- ・講義形式
- ・グループ学習

授業計画

- 第1回 ガイダンス
プロジェクトマネジメントの基本①全体概要
- 第2回 プロジェクトマネジメントの基本②歴史
- 第3回 プロジェクトマネジメントの基本③プロジェクトマネージャー
- 第4回 プロジェクトマネジメントの基本④コミュニケーション
- 第5回 プロジェクトマネジメントの基本⑤成功と失敗
- 第6回 プロジェクトマネジメントの基本⑥企画・提案
- 第7回 プロジェクトマネジメントの実践①企画を考え、企画書を書く
- 第8回 プロジェクトマネジメントの基本⑦計画
- 第9回 プロジェクトマネジメントの実践②企画にそって計画書を作成する
- 第10回 プロジェクトマネジメントの基本⑧実行
- 第11回 プロジェクトマネジメントの実践③計画書にそってプランを実行する
- 第12回 プロジェクトマネジメントの基本⑨事後評価
- 第13回 プロジェクトマネジメントの実践④事後評価を活かして次の企画を考える
- 第14回 ふりかえり（リフレクション）
- 第15回 講義内での「リフレクション」を基にしたレポート作成、提出

成績評価の方法

プレゼンテーション発表 50%、レポート提出 50%

履修にあたっての注意

積極的な講義への参加を希望します。

教科書

『グローバル人材に贈るプロジェクトマネジメント』2013、ISBN：978-4862831392

教科書・参考書に関する備考

『プロジェクトマネジメント基礎演習』と同じ教科書が指定されています。
その他、推奨参考文献については授業中に紹介します。

参考書

近藤哲生『はじめてのプロジェクトマネジメント』（日本経済新聞社、2005）
飯田剛弘『童話でわかるプロジェクトマネジメント』（秀和システム、2017）
米澤創一『プロジェクトマネジメント的生活のススメ』（日経BP社、2017）
長谷川義幸『きぼうのつくりかた：国際宇宙ステーションのプロジェクトマネジメント』（地人書館、2018）

授業のねらい

コミュニケーションは、人間生活にとって必要不可欠です。しかし、人間生活の向上はよりよい人間関係によるものと考えられますが、誰もがコミュニケーション（人間関係）に悩むことがあります。

本講は、人間生活で重要なヒューマンコミュニケーション（人間関係）の基本的なスキルの理解・促進と、生活の質（QOL）向上に必要な対人コミュニケーション能力を培う人間生活学科固有の共通専門科目です。授業をとおして、効果的なコミュニケーションを体験から学び、さまざまな人間関係の現実を的確に捉える感性と生活の質（QOL）への貢献力を培います。

到達目標

現実を的確に捉え、生活の質（QOL）の向上をはかる上で必要なコミュニケーションスキルを培います。

- ・人間生活に携わるユニバーサルな姿勢と、自ら考え主体的に行動する人としての態度を身に着けます。
- ・人間的な成長を実感し、生活の質（QOL）向上に貢献するコミュニケーションを楽しむことができる。

授業方法

本講では、コミュニケーション（人間関係）の実際体験を楽しみながら学びます。履修者が主体的に学べるように、行動科学的な学習場面（ラボラトリー方式の体験学習）の設計者がファシリテーターを担っていきます。また、学生同士の主体的な学習姿勢とコミュニケーション能力を涵養するために、現代社会の現実を的確に捉えるための教材を活用し、各回の授業を「説明、演習、ふりかえり」の手順で展開します。

なお、毎回の授業は、受講者の状況によって内容の一部を変更する場合があります。

※各回の授業内容は「学習ジャーナル」として自宅学習で整理する（所要時間 40 分程度）こと、並びに教科書の該当部分をノート整理する（所要時間 40 分程度）と効果的です。また、事前提示・配付する「ルーブリック」を参考に、各回の「学習ジャーナル」の自己評価を（記入）添付して提出してください。「学習ジャーナル」に添えて提出された「ルーブリック」は朱書き評価を加えて翌週に返却します。

授業計画

- 第1回 コミュニケーションとは何かを体験から学ぶ（第1回～第6回）－
人と人が知り合うこと『私の窓』
- 第2回 人が持つ枠組みとコミュニケーション『自己概念と成長』『私は誰？』『私が直面する15の課題』
- 第3回 自分が大切にしている『価値観』に気づく『私の仕事と生活の価値観（私マップ）』
- 第4回 人間関係に潜む『価値観（好き・嫌い）』が人間関係に落とす光と影『クルーザー物語』
- 第5回 わかちあうコミュニケーションの検討『流れ星』『One way・Two wayのコミュニケーション』
- 第6回 対人コミュニケーションの自己検討『対人コミュニケーションの棚卸し』
- 第7回 対人コミュニケーション理論・技術の基礎的理解（第1回～第6回の「ふりかえり」）－
体験から学んだこと（ふりかえりの技法）
- 第8回 対人コミュニケーションの実際と理論・技術の基礎的理解（第8回～第14回）－
思い込みがコミュニケーションに及ぼす影響『第一印象』
- 第9回 グループのコミュニケーション（体験）から学ぶ『匠の里』
- 第10回 コミュニケーションにおける『話す、聴く、観る』
- 第11回 コミュニケーションにおける『話す、聴く』『わかる（五段階情報整理活用法）』
- 第12回 『わかる』という人が人を理解すること『青山玲子さんのケース』
- 第13回 感情表出のさまざま『感情とのつきあい方』『体験から学ぶ 効果的なコミュニケーション』
- 第14回 『聴く』技法と『関わり・話しかけ方』のコツ『面談シミュレーション』『3つのきく』の実践
- 第15回 まとめ：体験から学んだこと『話す、聴く』とサインとしてのからだ
自己開示とフィードバック（『自分の話し方、きき方』『私の心の窓』&『フィードバック』）

成績評価の方法

総合評価を1. 及び2. によって行います。

1. 到達目標の測定を行う学習ジャーナル・レポート（60%）
2. 授業参加度（40%）

履修にあたっての注意

- ・履修者は、コミュニケーションや人間関係に関心がある人、若しくは教職及び対人援助職を目指す人です。
- ・科目の設置目的及び使用教室の関係で履修者数を制限する場合があります（決定：第1講）。
- ・日常生活の「ふりかえり」と主体的に学ぶ履修姿勢が期待されます。

教科書

船木 幸弘『Off-JTに活用する人間関係づくりトレーニング』（金子書房、2017、ISBN：9784760821761）

教科書・参考書に関する備考

- ・この科目と『人間関係と心理（2年）』は、同じ教科書が指定される予定です。

参考書

星野欣生『人間関係づくりトレーニング』（金子書房、2011、ISBN：97847608230251）

550321**プロジェクトマネジメント基礎演習**

担当教員：和田雅子

2単位 後期

授業のねらい

本講義では、プロジェクトマネジメントを実践的に学んでいきます。ひとつの活動や事業に対して、目標を明確にしていきながら、プロジェクトを運営し、設定した期限内に目標を達成することで、事業を終了させ、事後評価を行うという一連の管理プロセス全体が、プロジェクトマネジメントです。この考えをもとに、自らプロジェクトを企画し、立ち上げ、実際に運営、終了させ、事後評価まで行っていきます。こうした一連の講義への積極的な参加と体験を通して、課題を解決していく力とリーダーシップを学んでいきます。

到達目標

- ・プロジェクトマネジメントについて説明できるようになります。
- ・自ら企画してプロジェクトをマネジメントできるようになります。
- ・プロジェクトマネジメントの体験を通して、社会に貢献できる能力を身につけられます。

授業方法

- ・講義
- ・グループ学習

授業計画

- 第1回 ガイダンス
グループわけ
講義：プロジェクトマネジメント基礎演習
- 第2回 アイスブレイク
講義：いろいろなプロジェクトマネジメント
実習：企画会議①
- 第3回 講義：プロジェクトマネジメントに必要な技能
実習：企画会議②
- 第4回 講義：プレゼンテーションスキル
実習：企画発表、決定、準備、到達目標の確認
- 第5回 事例研究（学外研修）－プロジェクト見学
- 第6回 実習：プロジェクト実施（キックオフミーティング、連携企業とのプラン確認、調整）
- 第7回 実習：プロジェクト実施（業務推進、担当者間での業務進捗確認）
- 第8回 実習：プロジェクト実施（業務推進、プロジェクト進行管理）
- 第9回 中間成果発表（チーム発表、課題発見）
実習：プロジェクト実施（業務推進、課題解決にむけた調整）
- 第10回 実習：プロジェクト実施（業務推進、プロジェクト進行管理）
- 第11回 実習：プロジェクト実施（業務推進、プロジェクト進行管理）
- 第12回 実習：プロジェクト実施（プロジェクト成果発表のための準備）
- 第13回 プロジェクト成果発表（グループ発表）
- 第14回 プロジェクト終結ミーティング、自己評価（リフレクション）
- 第15回 まとめ
レポート、プレゼン資料一式提出

成績評価の方法

プロジェクトに積極的に参加し、プロジェクトメンバーとして役割を果たしている 50%、
中間発表 10%、成果発表 30%、最終的な成果物の品質 10%

履修にあたっての注意

- ・本講義は積極的にプロジェクトに参加し、チームワークでプロジェクトを推進していきます。積極的な授業参加を希望します。

教科書

關谷武司他『グローバル人材に贈るプロジェクトマネジメント』（関西学院大学出版会、2013、ISBN：978-4862831392）

授業のねらい

快適で安全な生活を送るために必要な知識を衣服の視点から学び、被服設計や被服選択の基礎となる理論の理解を目指します。さらに、環境に配慮した衣生活に向けて実践的な態度を身につけ、消費者としての役割を考えます。

到達目標

1. 快適で健康的な衣環境の条件を理解し、説明ができる。
2. 衣生活を多面的に捉えることができる。
3. 環境に配慮した衣生活を送るために、消費者としての役割を考える。

授業方法

- ・健康で着心地のよい衣服について科学的な観点から講義をおこない、受講者とともに、実生活での応用や配慮点を考えながら、授業をすすめていきます。
- ・受講前に教科書の該当ページを読んでおいてください（所要時間 45 分程度）。
- ・受講後は講義内容を自分の衣生活に反映できるかどうか考えてみてください（所要時間 45 分程度）。
- ・リアクションペーパーで受けた質問は、次回授業初めに口頭で回答します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 衣服に求められる役割
- 第3回 衣服素材(1) 天然繊維
- 第4回 衣服素材(2) 化学繊維
- 第5回 衣服素材(3) 糸と布
- 第6回 衣服素材の性能
- 第7回 装いによる気候調節
- 第8回 衣服の品質と管理(1) 衣料品の表示
- 第9回 衣服の品質と管理(2) 衣服の汚れの種類と洗濯
- 第10回 衣服の品質と管理(3) 洗濯用洗剤の種類と界面活性剤
- 第11回 衣服の品質と管理(4) 衣服の仕上げと保管
- 第12回 衣生活と環境問題
- 第13回 VTR 視聴：ファスト・ファッションについて
- 第14回 アパレル産業のしくみ
- 第15回 まとめと試験

成績評価の方法

到達目標 1、2、3 を測定する授業ごとのリアクションペーパーの記述（20%）および期末試験（80%）により評価します。

履修にあたっての注意

教科書は必ず購入してください。

教科書

岡田宣子『ビジュアル衣生活論』（建帛社、2010、ISBN：9784767914459）

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてプリントを配布します。

授業のねらい

現代の食に関する問題は複雑、多岐にわたっている。本講義の目的は、自然環境や社会環境の変化と現代の食生活との関係について学び、そこから生じてくる問題を見つけ出ししていくことである。

到達目標

- 1 食生活学と食品衛生学に関する基本的な知識を身に付けることができる。
- 2 食生活の実践や家庭科食領域における教育実践への応用について検討することができる。

授業方法

家族と食生活、食料経済および食品衛生に関する内容を、講義形式で進めていきます。受講者には毎回、食生活学や食品衛生学に関する事前・事後課題を出します（所要時間 40 分程度）。毎回の課題については、講義内に口頭で解説し、内容に応じて資料を配布します。質問については、次回の講義で資料を用いて口頭で回答します。

授業計画

- 第1回 食生活の概念
- 第2回 食生活の変化(1)：家族と食生活
- 第3回 食生活の変化(2)：内食・中食・外食
- 第4回 食生活の変化(3)：食品の生産・流通・消費
- 第5回 食生活の変化(4)：食品工業
- 第6回 食生活の変化(5)：食に関する情報
- 第7回 食生活と安全性(1)：食品の保存
- 第8回 食生活と安全性(2)：細菌性食中毒
- 第9回 食生活と安全性(3)：食品添加物
- 第10回 食生活と安全性(4)：環境汚染物質による食品汚染
- 第11回 食生活と安全性(5)：輸入食品と遺伝子組換え食品
- 第12回 食生活と安全性(6)：食物アレルギー
- 第13回 食生活と安全性(7)：食品の安全管理
- 第14回 健全な食生活への展望
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 を測定する試験（80%）および、到達目標 2 を測定する小レポート（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

資料を配布しますので、各自でノートを作成してください。

教科書・参考書に関する備考

教科書：使用しません。
参考書：テーマに沿って、講義の中で随時紹介します。

授業のねらい

健康で快適な住環境のあり方について、人間および住居単位から都市環境スケールまでの住環境の課題を整理し、住生活向上のための基礎的な知識を学び、現代生活における住環境に関する知識の習得を目指す。

到達目標

1. 住環境に関心を持つ。
2. 住環境の成り立ちや現代生活における課題に気づく。
3. 住環境問題改善の取り組みに関する知識を習得し、今後の自分自身の生活に活用できるようになる。

授業方法

教科書およびパワーポイントを用い講義形式で進める。個別活動やグループ活動を用いた実践やプレゼンテーションをすることがある。毎回テーマに関連する事例を紹介し理解を深める。授業では、事前学習として次回行う授業内容に関わる教科書の該当ページを読んでくるように求める場合がある。理解度を把握するための小テストを実施する。

授業計画

- 第1回 住環境とは何か
- 第2回 住まいの歴史と風土(1)世界のなかの日本の住まい
- 第3回 住まいの歴史と風土(2)日本の中の北海道の住まい（間取り）
- 第4回 住まいの歴史と風土(3)日本の中の北海道の住まい（外観と性能）
- 第5回 第1回～4回までのまとめ
- 第6回 住まいと環境(1)住環境の課題と点検
- 第7回 住まいと環境(2)快適な音環境づくりについて
- 第8回 住まいと環境(3)快適な熱環境づくりについて
- 第9回 住まいと環境(4)これからの住環境づくりについて
- 第10回 住政策と法律
- 第11回 住まいの安全
- 第12回 住まいの選択方法
- 第13回 現代社会の住環境づくり(1)住まいとインテリア
- 第14回 現代社会の住環境づくり(2)まちづくり
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標1を測定するために毎回コメントカードを記入する(20%)。到達目標2を測定するために小テストをおこなう(30%)。到達目標3を測定するために試験(50%)により評価する。

履修にあたっての注意

積極的な態度で参加してください。
授業内容は受講者の反応や状況に応じて変更される場合があります。
提出物を提出していない場合は放棄したものとみなします。

教科書

小澤紀美子編『豊かな住生活を考える－住居学』（彰国社）

教科書・参考書に関する備考

適宜プリントを配布し、関連する文献を提示する。

授業のねらい

- ①相談援助における権利擁護の意義と範囲の理解をする
- ②相談援助にかかる専門職の概念と範囲及び専門職倫理を理解する
- ③総合的かつ包括的な援助と多職種連携の意義と内容を理解する

到達目標

- ①社会福祉専門職の意義と役割について説明できる
- ②権利擁護の意義と範囲について具体的な問題を列挙し説明ができる
- ③専門職倫理に基づく判断や行動の在り方について説明ができる
- ④包括的援助のための多職種連携について具体的に説明できる

授業方法

講義形式で行う。

毎回の授業でアナウンスする事前・事後課題に対し、それぞれ取り組む（45分～90分程度）

授業計画

- 第1回 インTRODククション
相談援助における専門職の概念と範囲① 福祉行政等における専門職の機能と構造
- 第2回 相談援助における専門職の概念と範囲② 民間の施設・組織における専門職の機能と役割
- 第3回 相談援助における専門職の概念と範囲③ 医療分野で働く専門職の機能と役割
- 第4回 相談援助における専門職の概念と範囲④ 司法福祉分野で働く専門職の機能と役割
- 第5回 相談援助における専門職の概念と範囲⑤ スクールソーシャルワーカーの機能と役割
- 第6回 専門職倫理と倫理的ディレンマ① 専門職倫理の概念
- 第7回 専門職倫理と倫理的ディレンマ② 倫理綱領の意義と内容
- 第8回 専門職倫理と倫理的ディレンマ③ ソーシャルワーク実践における倫理綱領の活用の方法
- 第9回 専門職倫理と倫理的ディレンマ④ 倫理的ディレンマが生じる構造とそれへの対処
- 第10回 専門職倫理と倫理的ディレンマ⑤ 倫理的ディレンマの事例検討①
- 第11回 専門職倫理と倫理的ディレンマ⑥ 倫理的ディレンマの事例検討②
- 第12回 相談援助における権利擁護の意義 専門家によるクライアントへの権利侵害
- 第13回 総合的かつ包括的な援助と多職種連携 ジェネラリストの視点と包括的援助の意義と内容
- 第14回 相談援助における権利擁護の意義と範囲の理解、相談援助にかかる専門職の概念と範囲及び専門職倫理を理解、総合的かつ包括的な援助と多職種連携の意義と内容を理解に関するまとめ
- 第15回 まとめ
ソーシャルワークとはなにか

成績評価の方法

到達目標を測定する試験（85%） 授業への参加状況（15%）により評価する

履修にあたっての注意

新聞やニュースで取り上げられる社会福祉問題に関心を持ち、専門職が担うべき役割について考える習慣をまとめる

教科書

社会福祉士養成講座編集委員会編『相談援助の基盤と専門職』（中央法規、2015、ISBN：978-4-8058-5102-9）
『社会福祉用語辞典』（ミネルヴァ）

授業のねらい

人間生活学科の効果的な学びの意義は、人間の生活を知識や技術の体系と、社会や人との関わりという観点から必要な技法を体験的に学び獲得していくことにあります。

この授業では、自分の将来を設計（キャリア形成）していく技法として、頭（脳）の使い方、学び方を「学ぶ力」、学んだことを「活用する力」の基盤づくりをねらいとしています。具体的には、思考の整理力と論理的な思考を身に着けて、発想を豊かさで記憶力を高めていく力を培います。

到達目標

1. 自分の将来を設計する（キャリア形成）のための技法として、「マインドマップ」を活用することができる。
2. 想像（imagination）と連想（association）を用いて自分の考えを整理し、発想を豊かに思考できる。
3. 複雑な概念をコンパクトに整理・表現し、素早く理解しできる。
4. 読みやすい文章の構成（テーマ・結論・理由・背景・まとめ）ができる。

授業方法

授業では、実際に「Mind Map」の書き方・活用法を学びながら、大学生生活・就職・人生（キャリア形成）について考えていきます。これまでの自分と将来・人生目標を「Mind Map」を活用して考えることをとおして、頭（脳）の「使い方」、学び方を「学ぶ力」、学んだことを「活用する力」の基盤づくりを体験しながら学んでいきます。

各回の課題に積極的に取り組むとともに、自宅で行う事後学習が効果的なキャリア形成に求められます。

授業計画

- 第1回 オリエンテーションーキャリア形成のための論理的思考と想像的思考法「Mind Map」ー言葉の使い方「言葉の3つのレベル」
- 第2回 自分の考えや文章を整理・作成するための論理的思考ー基礎技法としての「Mind Map」を活用して『自己PR文』を作成するー
- 第3回 大学生生活・就職・人生（キャリア形成）を考えるための論理的思考ー基礎技法としての「Mind Map」で『一週間の予定』を作成するー
- 第4回 頭（脳）の「使い方」、学び方を「学ぶ力」を活かすための論理的思考ー基礎技法としての「Mind Map」で『人生の幸せ』をイメージするー
- 第5回 学んだことを「活用する力」のための論理的思考ー基礎技法としての「Mind Map」を活用して自分の『考え』を文章化するー
- 第6回 文章構成のための論理的思考ー「5W2H」で説明するー
- 第7回 文章構成のための論理的思考ー「テーマ・結論・理由・背景・まとめ」ー
- 第8回 【まとめ】自己理解と論理的思考

成績評価の方法

到達目標を測定するための提出物 60%、授業への参加度 40%

履修にあたっての注意

第1回「オリエンテーション」は『デザイン思考の技法』と合同で開催し、第2回以降の開講日が示されます。各回で示された課題に取り組むことが、自宅学習となる場合があります。また、提出された課題は、各回の時間中に担当教員による添削指導を行います。

参考書

渋谷文武『マインドマップ 内定術』（日本経済新聞出版社、2010、ISBN：9784532316594）
新田祥子『練習 15分論理力トレーニング』（日本能率協会マネジメントセンター、2008）

551411

デザイン思考の技法

担当教員：内田 博・和田雅子

1単位 後期

授業のねらい

社会やそこに生きる人びとが抱える問題を解決して、社会に新しい価値を提供するための技法のひとつがデザイン思考です。ここでは、デザイン思考の基礎をワークショップ形式の授業で身につけてもらうことを狙っています。

到達目標

デザイン思考を用いて、問題を発見し解決する態度を身につけることができる。

授業方法

ワークショップ形式で進めます。必要な場合にのみ、簡単なブリーフィングを行います。

授業計画

- 第1回 デザイン思考とは何か
- 第2回 ニーズを知る 観察
- 第3回 ニーズを知る 共感と洞察
- 第4回 問題点とゴールを定める
- 第5回 アイデアを作る
- 第6回 アイデアを形にする
- 第7回 アイデアを評価する
- 第8回 まとめ

成績評価の方法

リファレンスペーパーや発表の内容によって評価する（100%）

履修にあたっての注意

グループでの取り組みがほとんどを占めます。欠席するとグループ活動を阻害することに留意してください。

教科書・参考書に関する備考

こちらで資料を用意します。

授業のねらい

1. 体験型の学習（学修）活動に関心を持ち、その意義や効果について主体的に考える時間とする。
2. 自らが意見を持ち、受講者相互に議論し、批判し、協力し、参画しながら新たな気づきや学びを深める場とする。

到達目標

1. 体験的な学習（学修）の意義と効果について理解することができる。
2. 学びの場としての効果的なワークショップ活動のあり方を主体的かつ協働的に考えることができる。

授業方法

1. 授業では以下の場面を多く設定する。
 - ・受講者参加型ですすめる学習場面
 - ・自分で学びをふりかえり、相互に気づきや学びを共有する場面
 - ・学んだことを活かしてプログラムをつくる場面
 - ・新たな知識や経験をインプットする場面
2. 事前・事後の学習としては以下に対応する意識を高くもつこと
 - ・本時およびそれまでに学習した内容に関する情報の収集とまとめ
 - ・資料等の読み込みや自己の意見形成をするなど、次時の学習内容や活動に関する事前準備

授業計画

- 第1回 人が「学ぶ」ということ① ～自己の学びの経験から～
 第2回 経験と知識 ～学びを紐解く～
 第3回 体験的で能動的な学習機会とは何か
 第4回 人が「学ぶ」ということ② ～体験的で能動的な学習から～
 第5回 ワorkshop概論① ～ワークショップとは何か～
 第6回 ワorkshop概論② ～ワークショップという学びのスタイル～
 第7回 ワorkshop・スタイル① ～学習的な見地から～
 第8回 ワorkshop・スタイル② ～技能修得やスキルアップの見地から～
 第9回 ワorkshop・スタイル③ ～議論や合意形成の見地から～
 第10回 ワorkshop・スタイル④ ～アートや表現活動の見地から～
 第11回 ワorkshop・スタイル⑤ ～まちづくりの見地から～
 第12回 学びの場を創るということ ～誰のために、何のために、なぜするのか～
 第13回 学びの場をファシリテートするということの実際／ワークショップの可能性と留意すべきこと
 第14回 ワorkshopによる学びの場を評価する ～PDCA サイクルは活かせるか？～
 第15回 人が成長する場としての体験的で能動的な学習機会と「ワークショップ」

成績評価の方法

- ・学習内容の理解に向けて主体的に取り組むパフォーマンス（認知度）（30%）・・・目標1に対応
- ・能動的かつ協働的に学習活動へと取り組むパフォーマンス（参加度）（30%）・・・目標2に対応
- ・レポートや各種学習成果に関する提出物（学修度）（40%）・・・目標1. 2. に対応（アドバンス）

履修にあたっての注意

- ・本講義の意味をしっかりと意識した者が受講すること。
- ・授業に主体的かつ能動的に参加できる者の受講を基本とする。
- ・授業準備がなされていることを前提とした授業時間であることを十分留意して学習に臨むこと。

教科書

中野民夫『ワークショップ—新しい学びと創造の場』（岩波新書、2001、ISBN：4004307104）

教科書・参考書に関する備考

その他随時書籍や資料を紹介する。

授業のねらい

家計と国民経済との関連、家計収入、衣食住などの消費支出、物価や税金など経済活動の諸側面の実態について知識・理解を深める。

到達目標

国民経済との関わりの中なかで、家庭の経済活動を位置づけて捉えることができる。
家計における収入・支出構造及び物価や税金に関する基礎的知識を身につけることができる。
国民経済の動きに関心を持つことができる。

授業方法

講義形式。毎回授業の最後に小テストにより理解度を確認しながら進める。
受講者は、事後学習として、小テストの課題を必ず復習しておくこと。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 経済活動の主体、家庭の経済活動の特徴
- 第3回 国民経済と家庭経済
- 第4回 家庭の収入 1) 収入の分類 2) 収入の格差 3) 実収入の推移
- 第5回 家庭の収入 4) 家庭の収入に影響する要因
- 第6回 支出 1) 価格と価値 2) 価格の決まり方 3) 効用
- 第7回 支出 4) 限界効用逓減の法則と家庭経済
- 第8回 支出 5) 支出の分類 6) 食料費支出とエンゲル法則、食料費支出内訳
- 第9回 支出 7) 住居費 8) 被服及び履物費
- 第10回 現代家族の家計構造 1) 住宅ローン返済世帯の家計 2) 高齢無職世帯の家計
- 第11回 物価 1) 価格と物価 2) 物価指数の算式
- 第12回 物価 1) ラスパイレスの算式 2) 物価指数の種類 3) 物価の動向
- 第13回 税金 1) 税の種類 2) 税負担の実態
- 第14回 税金 3) 税負担の実態と税負担感の大きさ
- 第15回 総括 家計と国民経済との関連についてまとめる

成績評価の方法

知識・理解…毎回の授業の最後に授業時間内に獲得した知識についての理解度を小テストする。
それをもとに最終試験をおこなう (70%)
関心・意欲…授業への参加状況 (30%)

履修にあたっての注意

家庭科教員免許状の取得希望者は教科に関する選択科目

参考書

講義時に紹介

授業のねらい

江戸時代の生活思想からスタートし、明治、大正、戦中期までの生活研究の流れをたどりながら、第二次大戦前の日本人の生活がどのように形成されてきたのかについて理解を深めるのがねらいである。
さらに生活研究の一方法である考現学の研究方法について紹介し、現代生活の課題に関心をむける。

到達目標

戦前のわが国における生活研究の流れについて理解することができる。
考現学の研究方法により現代世相を捉えることができる。

授業方法

講義形式。考現学のレポート作成にあたっては個別指導を含む。現代人の暮らし方に関して常に関心をむけて授業に参加してください。

授業計画

- 第1回 ガイダンス ……生活を研究するとは (レポート：現代日本人の生活問題)
- 第2回 (1)江戸時代の生活思想
- 第3回 (2)明治時代の生活思想
- 第4回 (3)明治時代の生活思想 ……20年代以降「家庭の和楽」を中心に
- 第5回 (4)大正時代の生活研究 ……森本厚吉の生活改善
- 第6回 (5)戦時体制下の生活研究 ……大熊信行の生活科学 (レポート：「家庭論」について)
- 第7回 (6)第二次大戦直後の生活研究 ……欲望と購入と生活構造
- 第8回 (7)第二次大戦直後の生活研究 ……エンゲル線の変曲と生活構造
- 第9回 (8)生活構造の6つの側面 ……時間・空間・手段・金銭・役割・規範
- 第10回 (9)生活空間構造
- 第11回 (10)生活手段構造
- 第12回 (11)生活財の保有状況と家庭の景観
- 第13回 (12)考現学とは ……レポート課題の提出
- 第14回 (13)考現学によって現代生活の諸相を捉えてみよう (レポート課題の個別指導)
- 第15回 総括 ……生活について学ぶということは (人間生活学科で学ぶこと)

成績評価の方法

講義時における小レポート及び考現学の手法により現代世相を捉えたレポートの提出 (70%)。授業への参加状況 (30%)。

参考書

講義時に紹介

授業のねらい

シャツブラウスとハーフパンツの製作を通じて、衣服縫製の基礎と縫製機器の基礎的取扱い方法を習得し、立体構成を理解する。また習得した技術を活かして自らの力でバッグ製作ができるようになる。

到達目標

1. 洋裁の基本的な理論や縫製技術を習得できる。
2. 洋服の基本的な構成例として、シャツブラウスとハーフパンツの構成を理解し、製作できる。
3. 1、2の成果として、配布資料に示される手順でもって、自らの力でバッグ製作ができる。

授業方法

- ・毎回の授業は、全体説明と数度のデモンストレーションをおこなう。
- ・事前に配布したプリントの内容を把握しておくこと（所要時間 30～45 分程度）。
- ・授業時間内で進められなかった課題は、次回の授業までに各自で授業計画どおり進めること（所要時間 60 分程度）。
- ・提出課題については、コメントをつけて返却する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス、裁縫用具の説明、身体計測
教材について
教材に適した生地と糸の説明
- 第2回 パンツの製作(1) パターン作成
パンツの製作(2) 裁断
パンツの製作(3) 印付け
ミシンの使い方と練習
- 第3回 ロックミシンの使い方と練習
パンツの製作(4) 脇縫い
パンツの製作(5) 股下縫い
パンツの製作(6) ウエスト縫い
- 第4回 パンツの製作(7) 裾縫い
パンツの製作(8) ゴム通し
パンツの製作(9) 仕上げ
シャツブラウスの製作(1) パターン作成
- 第5回 シャツブラウスの製作(2) 裁断
シャツブラウスの製作(3) 印付け
- 第6回 シャツブラウスの製作(4) 前立て
シャツブラウスの製作(5) 肩縫い
- 第7回 シャツブラウスの製作(6) 衿作り
- 第8回 シャツブラウスの製作(7) 衿付け
- 第9回 シャツブラウスの製作(8) 袖のぐし縫い
シャツブラウスの製作(9) 袖つけ
- 第10回 シャツブラウスの製作(10) 袖下縫い
シャツブラウスの製作(11) 脇縫い
シャツブラウスの製作(12) 裾の始末
- 第11回 シャツブラウスの製作(13) ボタンホール
シャツブラウスの製作(14) ボタン付け
シャツブラウスの製作(15) 仕上げ
- 第12回 バッグ製作(1) バッグづくり
- 第13回 バッグ製作(2) 組紐づくり
- 第14回 パンツ、シャツブラウス、バッグ提出
まとめ
- 第15回 作品返却
ファッションショー

成績評価の方法

到達目標 1、2、3 を測定する実習への取り組み方（50%）および作品（50%）により評価する。

履修にあたっての注意

- ・初回授業は必ず出席してください。無断欠席をした場合、履修を認めません。
- ・受講者の人数制限は 30 名とし、希望者多数の場合は「衣環境論」「衣生活学」単位取得者を優先とします。
- ・裁縫道具は大学で貸出します。
- ・パンツとシャツブラウスの生地とミシン糸は各自で購入してください。説明を初回授業で行います。
- ・欠席は 15 回のうち 3 回までとし、4 回以上休んだ場合単位認定は認めません。
- ・進度に遅れが生じたり欠席した場合は、空き時間を利用して各自で実習の遅れを取り戻し次回に臨んでください。
- ・宿題が課される場合があります。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてプリントを配布する。

授業のねらい

食べ物と人の体との相互作用、すなわち栄養という現象を理解することは、日々の生活を健康に過ごす上で重要な役割を果たす。この講義では、炭水化物、脂質、タンパク質、無機質、ビタミンといった栄養素や、栄養素以外の成分（非栄養成分）の働きを理解した上で、各ライフステージに応じた栄養素摂取や疾病と栄養との関わりについて学ぶことを目的とする。また、家庭科教育の食領域における各栄養素の学習内容について考察する。

到達目標

- 1 栄養学に関する基本的な知識を身に付けることができる。
- 2 講義で取り上げる各テーマについて、自分の考えを述べることができる。
- 3 家庭科教育の食領域における各栄養素の学習内容について検討することができる。

授業方法

五大栄養素の働き、ライフサイクルと栄養に関する内容を中心に、講義形式で進めていきます。受講者には毎回、栄養素の内容に関する事前・事後課題を出します（所要時間 40 分程度）。毎回の課題については、講義内に口頭で解説し、内容に応じて資料を配布します。質問については、次回の講義で資料を用いて口頭で回答します。

授業計画

- 第1回 栄養学の意味、意義および歴史の変遷
- 第2回 炭水化物の栄養と代謝
- 第3回 脂質の栄養と代謝
- 第4回 タンパク質の栄養と代謝
- 第5回 無機質の栄養
- 第6回 ビタミンの栄養
- 第7回 非栄養成分の機能
- 第8回 消化と吸収
- 第9回 エネルギー代謝
- 第10回 食事摂取基準
- 第11回 ライフサイクルと栄養摂取(1)：乳幼児期、学童期
- 第12回 ライフサイクルと栄養摂取(2)：青年期、成人期
- 第13回 ライフサイクルと栄養摂取(3)：高齢期
- 第14回 食生活と健康との関わり
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 を測定する試験（80%）および、到達目標 2 と 3 を測定するレポート（20%）により評価します。

履修にあたっての注意

資料を配布しますので、各自でノートを作成してください。

教科書

城田知子 他『イラスト栄養学総論』（東京教学社、2016、ISBN：978-4-8082-6048-4）

教科書・参考書に関する備考

参考書：講義時に紹介します。

授業のねらい

高校までに学んだ調理の知識や技術を、調理科学、食文化、食品学および栄養学の観点から捉え直し、これからの食生活における調理の意義を学習することが本実習の目的である。また、食べる人の健康状態や家庭経済的な視点を取り入れた食事づくりを検討し、実践する。さらに、中学校・高等学校における調理実習の実施に関する総合的能力を養う。

到達目標

- 1 調理に関する基本的な知識と技術を身に付け、生活に応用させることができる。
- 2 味の基本味や出汁の役割について理解することができる。
- 3 食べる人の健康状態を配慮して食事計画を立てることができる。

授業方法

下記の内容に沿って、基本的にグループで実習を進めていきます。
受講者には毎回、実習内容（調理科学、食文化の内容を含む）に関する事前・事後課題（ノート作成、所要時間 45分～60分程度）を出します。
レポート課題と提出ノートについては、採点后に返却します。

授業計画

- 第1回 基本動作の解説と諸注意
- 第2回 素材の科学と調理法(1)：だしの取り方
- 第3回 素材の科学と調理法(2)：米の取り扱い方
- 第4回 素材の科学と調理法(3)：寒天やゼラチンの取り扱い方
- 第5回 素材の科学と調理法(4)：魚の取り扱い方
- 第6回 献立料理(1)：中国料理の構成と盛り付け
- 第7回 献立料理(2)：西洋料理の構成と盛り付け
- 第8回 献立料理(3)：日本料理の構成と盛り付け
- 第9回 クリスマス料理
- 第10回 貧血の予防を考慮した料理
- 第11回 消化のよい料理
- 第12回 栄養計算について
- 第13回 生活習慣病の予防を考慮した料理
- 第14回 調理技術の確認と実技試験
- 第15回 調理器具の手入れと管理

成績評価の方法

到達目標 1 と 2 を測定する実習への取り組み (30%) と実技試験 (30%)、および到達目標 1 から 3 を測定するノート及びレポート提出 (40%) により評価する。

履修にあたっての注意

グループ学習が主体になります。途中放棄のないようにしてください。実習時には白衣、三角巾を着用してください。無断欠席、遅刻、白衣・三角巾の未着用は減点の対象となります。プリントを配布しますが、各自で実習ノートを作成してください。
受講者の人数制限は 45 名とします。

教科書

香川明夫 監修『七訂食品成分表』（女子栄養大学出版社、2018）

参考書

河野友美『コツと科学の調理辞典』（医歯薬出版株式会社、2001、ISBN：9784263702642）
山崎清子『NEW 調理と理論』（同文書院、2011、ISBN：9784810313956）

授業のねらい

住まいの内と外のあり様は、人の生き方、地域、生活文化など人間生活の諸側面に相互に影響してくるものである。この授業では、諸側面の豊かな関係性をつくりだす基礎的な住居計画の知識と方法を習得することを目指す。

到達目標

1. 住環境にかかわる相互関係および諸課題について理解し関心を持つ。
2. 住居計画の取り組みについての知識を習得する。
3. 設計製図のための基礎的知識と技術の習得をする。

授業方法

住居計画の知識や方法についての講義、設計製図の実践、実際の建築・まちづくり現場で行っている住居計画に関する講義などを通して学んでいく。授業内容に関係する教科書の該当箇所を事前に読んできてもらう場合がある。

授業計画

- 第1回 住居計画とは何か
- 第2回 ライフサイクル・ライフスタイルと住まい
- 第3回 住空間の構成原理
- 第4回 設計製図とは 線の引き方・製図のルール
- 第5回 住居の製図 1
- 第6回 住居の製図 2
- 第7回 住居の製図 3
- 第8回 住居の製図 4
- 第9回 住居計画の立て方：子どもと住まい
- 第10回 住居計画の立て方：住まいのしつらえ、住みこなし
- 第11回 住居計画の立て方：高齢者と住まい
- 第12回 住居計画についての体験学習：住民参加と住環境整備
- 第13回 住居計画についての体験学習：まち歩き
- 第14回 住居計画についての体験学習：課題の整理
- 第15回 住居計画についての体験学習：課題の発表

成績評価の方法

到達目標 1、2 を測定するために、授業終了時に行うコメントカードやレポートの内容により評価する（60%）。
到達目標 3 を測定するために、提出された図面により評価する（40%）。

履修にあたっての注意

住環境論を履修していることが望ましい。
授業は出席状況および体験や対話を重視しながら進めます。積極的な態度で参加してください。
授業内容は受講者の反応や状況に応じて変更される場合がある。
受講者の人数制限は 40 名とし、希望者多数の場合は教職受講者を優先とする。

教科書・参考書に関する備考

- ・適宜プリントを配布し、関連する文献を提示する。
- ・住環境論で使用した「豊かな住生活を考える－住居学」（小澤紀美子編、彰国社）を使用するときがある。

授業のねらい

この講義では、豊かに住まう環境のデザインについて、物理的な面から実現する方策（しくみ・ルール）と、住まい手である人々が取り組む活動（まちづくり）との両面から紐解きます。可能な限り多くの具体事例を挙げる講義を通じ、居住環境の創出・形成ならびに持続・更新に欠かせない多岐に渡るデザインの意味と役割について、正しく理解してもらうことを目指します。

到達目標

1. 居住環境の課題や問題点を自ら発見し、解決策や改善策について多様な視点から考えられるようになる
2. 居住環境デザインは、物理的なデザインに加えて人々の繋がりでのデザインも重要であることを理解する
3. 日常の身近な居住環境さえも、多くの人々の知恵と行動により成立していることを理解する
4. 自らの行動も居住環境の豊かさを左右する可能性があることを理解する

授業方法

毎回の講義はおもにパワーポイントを用いて行います。

資料は適宜配布します。重要項目を空欄にし、書き込むことで完成する穴埋め式の資料とする場合もあります。

理解の程度と出欠の確認のため、毎回の講義の最後に 10 分程度の時間を確保し、ミニテストまたはミニレポートに取り組んで事前・事後学習のポイントを把握してもらいます。

授業計画

- 第1回 居住環境デザインとは（ガイダンス）
- 第2回 居住環境をデザインするために（現状をとらえるための手法・方法）
- 第3回 住まい方を読みとく（住まい方調査の事例を通じて）
- 第4回 良好な居住環境を求めて（居住環境を構成する要素を紐解く）
- 第5回 居住環境の質を担保するために（考え方、地域地区制度、地区計画、建築協定、公開空地など）
- 第6回 まちなみ景観の仕立て（まちなみ景観を成立させるもの、具体例を交えて）
- 第7回 住宅地の暮らしとデザイン（住宅地計画の系譜、身近な住宅地の地域デザインなど）
- 第8回 暮らしとみどり（公園の役割と機能、緑の量のはかり方など）
- 第9回 まちをつくりだす（土地区画整理事業の仕組みと特徴、具体例を交えて）
- 第10回 まちを再生する（都市再開発事業の仕組みと特徴、具体例を交えて）
- 第11回 まちづくりのこれまでとこれから（小樽、函館など、まちづくりの成立、これまでの変遷、今後の展開）
- 第12回 地域文化とまちづくり（旭川、恵庭、旧産炭地など、まちづくりと地域文化の関係について）
- 第13回 まちづくりワークショップとは（地域で取組むまちづくりの出発点、ワークショップを体験）
- 第14回 まちづくり活動事例紹介（その都度、関わっているまちのまちづくり事例をご紹介します）
- 第15回 居住環境デザインのあり方（まとめ）

成績評価の方法

到達目標の測定には、毎回のミニテストやミニレポートの回答・記載内容から講義への参加状況・姿勢の判断に 3 割相当を割りあて、最後に行うテストまたはレポート課題の評価を 7 割相当として配分します。

【留意事項】ミニレポートは記載内容を吟味し、明らかに的外れなものや不誠実なものはマイナス側に評価します。

履修にあたっての注意

居住環境は私たちの身の回りの空間および暮らしの総体です。

日常の場面はおおよそ見過ごしがちですが、ふと感じる「一体感のある地域の印象」や「快適な過ごしやすさ」、あるいは「使い勝手の自然さ」などは、居住環境がデザインされた成果かもしれません。意欲を持って受講されるなら、受講回数が増えるたび、日常の見え方が少しずつ変わっていきます。日常こそ感性豊かに過ごしてください。

教科書・参考書に関する備考

身の回りの人々が歩く、座る、話す、時を過ごす様子は、その人が居る場所の状態と、近くにいる他の人々から、少なからぬ影響を受けています。単なる人間観察を超えて、それぞれの行為の背景や理由を推察することを持続してみてください。その持続を経て見つけ出したある種のルールは、それぞれの皆さんが居住環境をデザインする際のオリジナルな参考書になっていきます。

ここにある参考書はその持続を興味深く後押ししてくれる代表的なものです。

参考書

エドワード・T・ホール『隠れた次元』（みすず書房、1970、ISBN：978-4622004639）

ハーバード・A・サイモン『システムの科学』（パーソナルメディア、1999、ISBN：978-4893621672）

後藤春彦『まちづくりオーラルヒストリー』（水曜社、2005、ISBN：978-4880651422）

山崎亮『コミュニティデザイン』（学芸出版社、2011、ISBN：978-4761512866）

日本建築学会『まち建築』（彰国社、2014、ISBN：978-4395320103）

授業のねらい

人間生活のあり方を考える上で、「健康に生きる」ことは基本的な主題のひとつである。人の健康は、その社会のあり方と切り離しては考えられない。本講義では、各年代層における生活実態とそこに存在する生活課題を整理し、健康な生活及び健康な社会を築きあげていく生活主体として育つ我々人間に必要と考えられる「生活健康科学」の基礎的な学習をすることを目的とします。

到達目標

個人、家族、地域の個性性を踏まえたうえで、それぞれの生活課題と健康づくりについて自分の考えを交えて論じることができる。

授業方法

講義形式で行います。「虫の目、鳥の目、魚の目」を意識して、自分自身や家族の健康とは何か、さらに地域の健康、施策に反映する視点は何かを学びます。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 健康の概念－健康と社会、ICFの概念
- 第3回 現代社会とストレス、メンタルヘルス
- 第4回 母子の生活と健康づくり
- 第5回 成人の生活と健康づくり
- 第6回 高齢者の生活と健康づくり
- 第7回 身体障害者の生活と健康づくり
- 第8回 知的障害者、精神障害者の生活と健康づくり
- 第9回 難病療養者の生活と健康づくり
- 第10回 生活環境と健康
- 第11回 我々が生活する北国における生活環境課題と健康
- 第12回 健康づくりの支援
- 第13回 運動と健康
- 第14回 運動のメカニズム
- 第15回 日常生活と運動

成績評価の方法

授業への参加状況 50% 取り組み姿勢 50%として、到達目標を測定します。

履修にあたっての注意

講義中の私語に注意して下さい。
(私語がひどい場合、席を指定制とします)

教科書・参考書に関する備考

適宜紹介いたします。

授業のねらい

この授業は、発達理論と子どもの様々な側面の発達を理解するとともに、障害のある児にかかわっていく上で必要な、その病理や障害特性といった基礎的な知識を学習し、関わる上での留意点や援助のあり方を学習します。さらに、それらの子どもたちを取り巻く環境や支援体制における現状や問題点についても学習します。

到達目標

- ・子どもの様々な発達の側面を説明できる。
- ・発達障害の代表的な疾患とその特徴を説明でき、かかわる上での留意点や援助の仕方をイメージできる。

授業方法

5回目までは障害について、発達の理論や発達の側面について講義中心に実施し、6回目以降は障害のある児について障害特性と関わる上での留意点などを講義と視聴覚教材を用いながら進めていきます。

講義後の復習を行うことはもちろんのこと、子どもの病気が障がいに興味をもてるよう、関連書物や報道に着目してください。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
障害について
- 第2回 発達の理論について1
- 第3回 発達の理論について2
- 第4回 子どもの様々な発達の側面について(1)：運動、言語、認知など
- 第5回 子どもの様々な発達の側面について(2)：社会性、遊び、日常生活動作など
- 第6回 障害のある児の障害特性と関わる上での留意点(1)：精神遅滞1
- 第7回 障害のある児の障害特性と関わる上での留意点(1)：精神遅滞2
- 第8回 障害のある児の障害特性と関わる上での留意点(4)：肢体不自由1
- 第9回 障害のある児の障害特性と関わる上での留意点(4)：肢体不自由2
- 第10回 障害のある児の障害特性と関わる上での留意点(5)：自閉症スペクトラム障害1
- 第11回 障害のある児の障害特性と関わる上での留意点(5)：自閉症スペクトラム障害2
- 第12回 障害のある児の障害特性と関わる上での留意点(7)：その他の発達障害1
- 第13回 障害のある児の障害特性と関わる上での留意点(7)：その他の発達障害2
- 第14回 障害を持つ児を取り巻く環境と支援体制について
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標の測定は、試験 70%、授業への参加状況 30%で評価する

授業のねらい

本授業では、生活の構成要素を理解し、障害のなかでも脳血管障害における日常生活活動の支援について基礎的知識を習得することを目指す。また、障害者の生活が如何なるものであるか、障害者の手記等から学ぶ。

到達目標

- ・日常生活活動、生活関連活動、生活の質について説明できる。
- ・ICF の考え方やアセスメントについて説明できる。
- ・生活を支援する職種、またチームアプローチについて説明できる。
- ・脳血管障害の障害像をふまえ、その支援方法を説明できる。
- ・障害者の視点からみた生活について考察することができる。

授業方法

本講義は、毎回配布する資料を中心とした講義形式とし、テキストやその他の参考文献をふまえて展開する。成績評価レポートの課題は授業内で提示する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション ～ 日常生活活動、生活関連活動、生活の質
- 第2回 ICF の考え方とアセスメント、生活支援、チームアプローチ
- 第3回 脳血管障害の生活と支援(1)：疾患と障害像
- 第4回 脳血管障害の生活と支援(2)：身じたく（整容、衣服の着脱）、食事
- 第5回 脳血管障害の生活と支援(3)：入浴・清潔保持、排泄、睡眠
- 第6回 脳血管障害の生活と支援(4)：基本動作、介護とボディメカニクス
- 第7回 脳血管障害の生活と支援(5)：移動（車椅子、杖）、移乗、家事
- 第8回 障害者の視点からみた生活について

成績評価の方法

到達目標を測定する課題レポートの作成（70%）、授業への参加状況（30%）、により評価します。

履修にあたっての注意

授業は講義形式で行うが、各回終了後に各自で学習内容を確認し、また事前に指示された予習・事前学習事項を学習したうえで次回授業に参加すること。

教科書・参考書に関する備考

適宜、資料を配付し、参考書・資料を紹介する。

授業のねらい

社会的に支援の必要性が増している高齢者の特性や認知症、各種の障害について理解を深める。高齢者に関しては、高齢期に多い疾病や認知症の症状・ケア、医療・福祉・支援施策、などを学ぶ。また、障害に関しては障害の種類や障害のとらえ方、関連法規や支援のあり方を学ぶ。これらを通して高齢者や障害者の支援に関わる基礎的知識の習得を目指す。

到達目標

- ・人の成長、発達における心理や運動機能の変化について説明できる。
- ・老年期の定義、老化に伴う心身の変化と日常生活への影響を説明できる。
- ・高齢者に多い疾病や認知症の生活への影響や医療・福祉・支援施策を説明できる。
- ・障害の種類や原因、生活機能障害・障害のとらえ方、障害者の生活の特性について論じることができる。
- ・地域の支援体制や関連職種との連携・協働、家族へのあり方を論じることができる。

授業方法

講義形式により、誕生から老年期に至る各期の成長・発達や心身の変化を確認する。次に、老年期の身体面・心理面の特徴や疾患、医療福祉施策、認知症、障害者が抱える主要な障害の種類やとらえ方及び支援の進め方・あり方について学習する。

毎回、授業終了時に復習・確認してほしいポイント（所要時間 30 分程度）、ならびに次回の授業テーマと予習・事前学習事項（所要時間 30 分程度）を指示する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション ～ 人間の成長・発達と心身の変化
- 第2回 老年期の理解と日常生活、身体面・心理面の変化
- 第3回 高齢者と健康、高齢者に多い疾病と医療・福祉・支援施策
- 第4回 認知症の理解(1) 疾患（中核症状と周辺症状）、治療・ケア・予防・支援
- 第5回 認知症の理解(2) 心の変化と生活面への影響、認知症を取り巻く状況
- 第6回 障害の理解(1) 障害の種類と原因、生活機能障害・障害のとらえ方
- 第7回 障害の理解(2) 障害者の生活（含む、事例）、心理、ノーマライゼーション・リハビリテーション
- 第8回 関係法規と地域の支援体制、福祉保健医療職の連携・協働、家族への支援

成績評価の方法

説明に係わる到達目標を測定する課題レポートの作成（30%）、論考に係わる到達目標を測定する課題レポートの作成（30%）、授業への参加状況（40%）により評価する。

履修にあたっての注意

授業は講義形式で行うが、各回終了後に各自で学習内容を確認し、また事前に指示された予習・事前学習事項を学習した上で次回授業に参加すること。

教科書・参考書に関する備考

適宜、資料を配布し、参考書・資料を紹介する。

授業のねらい

児童福祉論Ⅰで学んだ基礎的な知識をもとに、現代の社会問題とされる児童虐待について詳しく学ぶことを目的とします。児童虐待の現状を学び、児童虐待を受けた子どもの状況や、虐待をしてしまう親の心理について理解を深めます。又、トラウマとの関係、児童虐待の要因とされる、子どもの貧困、ひとり親への施策、DV等を学びます。演習では、児童虐待死亡事故からその要因について検証し、意見を聴取することをします。

到達目標

到達目標1～児童虐待の状況、虐待の兆候、虐待を受けた子どもの状況や心理、親の状況等を理解できるようになる。

到達目標2～児童虐待の様々な要因を理解し、被虐待児童とその保護者に対する援助計画を作成できるようになる。

授業方法

授業は講義形式でプロジェクターを使用します。次回の授業までの課題を提供し、授業内で発表してもらう場合があります。各回の理解度を確認するために授業の感想を書く、演習課題に対して、自己の意見を発表してもらう場合があります。授業の最後に質問に答える時間をもちます。

授業計画

- 第1回 ◎ガイダンス ◎児童虐待の定義
・ガイダンス ・児童虐待の定義
- 第2回 ◎児童虐待の現状
・児童虐待の四分類 ・児童虐待の現状
- 第3回 ◎児童虐待防止法
・児童虐待防止法の内容 ・児童虐待防止法の改正
- 第4回 ◎児童虐待死亡事故
・児童虐待死亡事故の現状 ・児童虐待死亡事故の事例
- 第5回 ◎児童虐待と児童相談所
・児童虐待相談件数が増加している要因 ・児童相談所の役割
- 第6回 ◎児童虐待は何を生み出すのかⅠ
・児童虐待が発達に与える影響 ・虐待を受けた子どもの心理と対人関係の問題
- 第7回 ◎児童虐待は何を生み出すのかⅡ
・なぜ子ども虐待に解離が生じるのか ・トラウマと虐待 ・トラウマを癒す
- 第8回 ◎児童虐待に気づく兆候
・児童虐待に気づく兆候 ・被虐待児童に対する支援
- 第9回 ◎児童虐待と子どもの貧困
・子育て家族をめぐる貧困の現状 ・子ども虐待と貧困 ・要保護児童の貧困ケース
- 第10回 ◎児童虐待の要因と虐待する親Ⅰ
・子ども虐待の要因 ・虐待してしまう親
- 第11回 ◎児童虐待の要因と虐待する親Ⅱ
・新たに発見された児童虐待 ・食事を与えない親
- 第12回 ◎児童虐待への対応
演習～被虐待児童とその保護者に対する援助計画
- 第13回 ◎児童虐待とアタッチメント障害Ⅰ
・愛着障害（アタッチメント障害） ・愛着不全による共感性の欠如
- 第14回 ◎児童虐待とアタッチメント障害Ⅱ
・児童虐待は第四の発達障害
- 第15回 ◎まとめの授業

成績評価の方法

到達目標1を測定する試験を(50%)、到達目標2測定する小テストと提出物を(20%)、授業への参加状況(30%)により評価します。

履修にあたっての注意

児童福祉論Ⅰを受講済みが望ましい。授業中の私語はしないでください。レジュメを配布するので、各自でファインリングするなど自己管理をするようにしてください。

全講義の3分の1以上の欠席の学生は、評価対象とはせず、単位を認定しません。

教科書・参考書に関する備考

教科書は特に指定しません。参考書は授業の中で紹介します。

授業のねらい

本講義では、障害者福祉の発展過程を通して、現在の障害者福祉の基本的な考え方を学ぶ。とりわけ障害者の権利について国内外の動向を抑えつつ、障害者の権利条約や障害者差別解消法の意義を考える。また、多様な障害の様態と生活ニーズを知り、障害のある人の生活を支える各種の制度やサービスを理解する。

到達目標

- 1) 障害のある人の支援に関する基本的理念や考え方を理解し説明できる。
- 2) 障害のある人の権利と合理的配慮について理解できる。
- 3) 多様な障害の特徴と生活ニーズがわかる。
- 4) 障害のある人の生活支援に関係する法制度等を、国内外における障がい者福祉の発展過程と関連づけて説明できる。
- 5) 障害のある人の生活支援に関係する現行の制度とサービス内容が説明できる。

授業方法

講義形式で行う。まず障害者福祉の基本的理念や考え方を学び、障害福祉の歴史と制度の発展過程、現行の制度とサービスについて学ぶ。

毎回穴埋め式プリントを配布する。内容が多く、覚える用語も多いので、テキストの該当箇所を事前に読んでから授業に臨むことを求める。授業後は復習問題(所要時間 30 分程度)をポータルサイトの講義連絡を通じて配信するので、次回の授業時に提出してもらおう。提出された復習問題は採点して返却する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
障害者と優生思想・社会防衛思想
- 第2回 障害をどう捉えるかー医学モデルと社会モデル、ICFの捉え方
- 第3回 障害福祉の基本的理念と考えーノーマライゼーション、自立、エンパワメント等
- 第4回 障害者の権利ー障害者権利条約と障害者差別解消法
- 第5回 障害福祉の歴史
- 第6回 障害者基本法
- 第7回 身体障害と身体障害者福祉法
- 第8回 知的障害と知的障害者福祉法
精神障害と精神障害者保健福祉法
- 第9回 発達障害と発達障害者支援法
- 第10回 障害者総合支援法 1ー概要とサービス体系、支給決定プロセス、介護給付と訓練等給付
- 第11回 障害者総合支援法 2ー補装具と日常生活用具、自立支援医療、地域生活支援事業
- 第12回 障害者総合支援法 3ー相談支援
- 第13回 障害児の施策(サービスと相談支援)
- 第14回 障害者総合支援法 4ー障害福祉計画、苦情解決と審査請求、専門職の役割
- 第15回 障害者と教育
障害者と就労

成績評価の方法

到達目標 1 から 5 を期末の筆記試験 (70%)、各回の復習課題 (30%) で測り評価する

履修にあたっての注意

私語は慎んでください。授業環境が保持できない場合は座席指定します。
テキストや配布資料等をよく読み予習復習をしっかりとってください。またわからない時には積極的に質問してください。

教科書

社会福祉士養成講座編集委員会『新・社会福祉士養成講座 14 障害者に対する支援と障害者自立支援制度(第5版)』(中央法規、最新、ISBN: 9784805851074)

参考書

七木田敦・安田友康編著『事例で学び、実践に活かす障害者福祉』(保育出版社、2013、ISBN: 9784938795689)
小川喜道・杉野昭博編著『よくわかる障害学』(ミネルヴァ書房、2016、ISBN: 9784623076444)

参考ホームページ

厚生労働省 障害者福祉 http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/index.html (障害者福祉に関する施策全般)
障害保健福祉研究情報システム <http://www.dinf.ne.jp/> (障害者の保健・福祉に関わる研究を支援するための情報サイト)

授業のねらい

高齢者福祉論Ⅱでは、高齢者を取り巻くケアに着目し、介護の対象や求められるケア理念について理解するとともに、介護保険制度を中心とした、高齢者に関わる施策や介護・福祉等のサービス体系の理解を深めることを目指します。

また、高齢者虐待や終末期ケアなど、超高齢社会のわが国が抱える様々な課題を認識した上で、地域包括ケアシステムなどこれからの高齢者福祉について考えていきます。

到達目標

- ・ケア概念を軸として、介護の対象や内容及びその理念、倫理を論考し、基本的な考え方や方法について理解できるようにする。
- ・これまでの高齢者政策の系譜をふまえた上で、介護保険制度を中心とした高齢者施策を高齢者の「住まいとケア」という視点でとらえ直し、現状と課題が把握できるようになる。
- ・高齢者の人権擁護という観点から認知症ケア・高齢者虐待への対応を考える他、終の棲家・終末期ケアなどといったトピックスを通して、それらに対応する具体的な方策について検討できるようになる。

授業方法

本講義は、毎回配布する資料を中心とした講義形式とし、授業内容に合わせた文献やその他の資料をふまえて展開します。全ての授業後に授業に対するリアクションペーパーを提出いただきます。リアクションペーパーに書かれた質問等への回答は、次回の授業時間内にフィードバックします。

毎回配布する資料を中心に講義を進め、最終日に授業内容を理解しているかどうかの確認テストを行います。配布資料がテスト範囲となりますので、学習の材料にしてください。授業内では適宜関連する時事問題や文献・資料等を紹介します。事前・事後学習（各30～60分）に役立てることを期待します。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション：授業のねらいと進め方
- 第2回 高齢者に対するケアの理念とは
- 第3回 家族によるケア・家族介護の現状
- 第4回 あなたは老後どこで暮らしたいですかー高齢者に対する住まいとケアー
- 第5回 介護保険制度とサービス1ー居宅サービスを中心にー
- 第6回 介護保険制度とサービス2ー地域密着型サービスを中心にー
- 第7回 介護保険制度とサービス3ー地域支援事業と総合事業ー
- 第8回 施設で暮らす高齢者に対するケア
- 第9回 終の棲家を考えるー終末期ケア・看取りー
- 第10回 地域で住み続けるために1ー自治体全体で高齢者を支えるー
- 第11回 地域で住み続けるために2ー高齢者ケアを担う人たちー
- 第12回 いつだって心は生きているー認知症ケアを通してー
- 第13回 高齢者の人権をまもるー高齢者虐待の現状と権利擁護ー
- 第14回 地域包括ケアシステムの深化に向けて
- 第15回 授業の振り返り・確認テスト

成績評価の方法

授業への参加状況（30%）、到達目標を測定するための確認テスト（70%）により評価します。

※授業への参加状況とは、単なる出席状況ではなく、毎講義終了後に提出するリアクションペーパーへの記入状況など、授業への主体的参加状況を指しています。

履修にあたっての注意

- ・全講義3分の1以上の欠席者は、評価対象とせず単位を認定しません。
- ・特定の教科書を使用しないため、毎回の講義で配布する資料を保管し、学習の材料としてください。
- ・授業への参加状況は、毎回の講義終了後に提出するリアクションペーパーで確認します。
- ・事前に「高齢者」「介護保険」などに関わる新聞記事やニュースを通して理解を深めるとともに、授業内で紹介した文献等を活用して事後学習してください。

教科書・参考書に関する備考

- ・教科書：特定の教科書は使用しません。毎回講義資料を配布します。
- ・参考書：講義内で適宜紹介します。

授業のねらい

これからの社会福祉は「地域福祉」に焦点をおいて展開されます。「地域福祉」とはいったいどのようなものなのか、なぜ今日的課題として重要視されるのか、「地域で生活すること」を軸とした地域福祉の原理、政策、実践に繋がる理論を学びます。特に地域福祉の基本的考え方（人権尊重、権利擁護、自立支援、地域生活支援、地域移行、社会的包摂等）について、地域福祉の主体と対象（社会福祉協議会、民生委員、共同募金会、ボランティア、NPO、町内会・自治会等）の学びを通して、地域福祉の理論と実践の融合及び理解の促進を目指します。

到達目標

1. 地域福祉の基本的考え方（人権尊重、権利擁護、自立支援、地域生活支援、地域生活移行、社会的包摂等）について理解を踏まえ、自身の見解を見出すことができる。
2. 地域福祉の主体と対象、組織、団体、専門職の役割と実際の理解を通して、今後の課題に関する考察ができる。
3. 地域福祉の基礎理論、基本的考え方、主体と対象、実践組織・団体、専門職の役割に関する知識を体得できる。

授業方法

- ・本講義は、より実りある学習のために、学生の反応（リアクションペーパー）を結果を踏まえて展開する予定です。
- ・予習：受講者は、事前に配布されたレジュメを熟読した上で授業に参加してください（学習時間 30 分）。
- ・復習：また、学びを深化させるために、事後学習でも配布済みのレジュメを積極的に活用してください（学習時間 30 分）。
- ・学外実習のために公欠となる学生は、予め配布済みの当該箇所のレジュメを活用して自習を進めておくこと
- ・リアクションペーパーの結果等（55%）については授業時間内にフィードバックを行う

授業計画

- 第1回 ガイダンス「地域福祉の理論と方法」の学び方 ～なぜ“地域福祉”は難しいとされるか～
- 第2回 社会福祉分野における地域福祉の基本的考え方(1)地域福祉の枠組み・捉え方
- 第3回 社会福祉分野における地域福祉の基本的考え方(2)地域福祉の概念
- 第4回 社会福祉分野における地域福祉の基本的考え方(3)地域福祉理論の発展過程：イギリス（戦前）
- 第5回 社会福祉分野における地域福祉の基本的考え方(4)地域福祉理論の発展過程：日本（戦前）
- 第6回 地域福祉における公私（行政・民間）関係(1)公私関係とは
- 第7回 地域福祉における公私（行政・民間）関係(2)公私分離の原則と公私協同の原則
- 第8回 地域福祉における公私（行政・民間）関係(3)ボランティアセクターの役割
- 第9回 地域福祉の推進主体と対象および組織、団体、専門職の役割(1)社会福祉協議会
- 第10回 地域福祉の推進主体と対象および組織、団体、専門職の役割(2)共同募金会
- 第11回 地域福祉の推進主体と対象および組織、団体、専門職の役割(3)民生委員・児童委員
- 第12回 地域福祉の推進主体と対象および組織、団体、専門職の役割(4) NPO
- 第13回 地域福祉の推進主体と対象および組織、団体、専門職の役割(5)ボランティア
- 第14回 地域福祉の推進主体と対象および組織、団体、専門職の役割(6)当事者団体等
- 第15回 地域福祉理論の課題と総括

成績評価の方法

- 到達目標 1・2 →リアクションペーパー（55%）
 到達目標 3 →筆記試験（45%）
 により評価します。

履修にあたっての注意

1. この授業は単位稼ぎにはなじみません。
2. リアクションペーパー（出席カード裏書等）を講義の進捗状況を踏まえながら求めます。
3. 全講義の3分の1以上欠席者は、評価対象とせず、単位を認定しません。
4. 本授業の成績評価方法は、2年次生向けの内容としています。3・4年次生が履修する場合は別途定めますので、必ず初回授業のオリエンテーションで説明を受けてください。

教科書・参考書に関する備考

*特に指定しませんが、授業時に必要なレジュメを毎回配布する予定です。

以下、主要な参考文献を提示します。

参考書

- 岡村重夫『地域福祉論』（光生館、1974）
岡村重夫『社会福祉原論』（全国社会福祉協議会、1990）
倉沢進・秋元律郎編著『町内会と地域集団』（ミネルヴァ書房、1991）
牧里毎治・杉岡直人・森本佳樹編『ビギナーズ地域福祉』（有斐閣アルマ、2013）
山口稔『社会福祉協議会理論の形成と発展』（八千代出版、2000）
三塚武男『住民自治と地域福祉』（法律文化社、1992）
阿部志郎『地域福祉の思想と実践』（海声社、1986）
嶋田啓一郎編『地域福祉の思想と理論』（ミネルヴァ書房、1980）
阿部志郎・右田紀久恵・永田幹夫他編『地域福祉教室』（有斐閣、1980）
岩間伸之・原田正樹著『地域福祉援助をつかむ』（有斐閣、2012）

授業のねらい

社会調査は、様々な角度から社会の姿を見るうえで不可欠であるが、結果を正しく理解するためには、調査の実施方法や分析などの結果の提示に関する知識も必要となる。本科目では、インタビューやアンケートに代表される社会調査、および分析の具体的な手法を身につけ、それぞれの特徴を理解することをねらいとする。また、社会調査において調査対象の人権・権利に対する配慮は欠くべからざるものであるが、社会福祉の分野では特に重要となる。そのため、福祉職として求められる社会調査における倫理の在り方についても理解を深めていく。

到達目標

1. 社会調査の意義と目的を理解する
2. 量的調査及び質的調査の特徴を理解する
3. 統計法の概要、ITを活用した社会調査とデータの分析方法を理解する
4. 個人情報保護をはじめとする社会調査の倫理に関する知識を身につける

授業方法

講義では毎回レジュメを配布し、テキストと併用して行います。

予習・復習は、毎回1時間程度を目安とします。

次回の講義内容については、テキストの該当箇所を指示するので、内容を確認しておくこと。

試験・レポートについては、実施後に解説用の資料を配布する予定です。

授業計画

- 第1回 社会調査の意義と目的
社会調査の歴史を概観しつつ、社会調査の目的や基礎を学ぶ。
- 第2回 社会調査と統計法
様々な公的統計の存在と、統計法などの社会調査に関する法規について学ぶ。
- 第3回 社会調査の方法
量的調査・質的調査のそれぞれの特徴と調査手法について学び、調査目的や調査対象に合わせた調査方法の選び方について理解を深める。
- 第4回 全数調査と標本調査
全数調査と標本調査の概要と相違点、標本調査におけるサンプリングと検定の手法を学ぶ。
- 第5回 社会調査のデザイン
調査目的に合わせた仮説の構築及び概念化と操作化、測定方法（変数化）について学ぶ。
- 第6回 量的調査の手法 ①量的調査の手法
複数ある量的調査の実施方法を学び、配布と回収までを含めた方法論についての理解を深める。
- 第7回 量的調査の手法 ②アンケート（質問紙）の作成
アンケートで使用する質問を作成する上での様々な注意点を学び、質問の順序やアンケートの構成が調査結果に与える影響について理解を深める。
- 第8回 量的調査の手法 ③ データの点検
クリーニング・コーディングなどの、回収した調査票を適切にデータ化するために必要なプロセスについて学ぶ。
- 第9回 量的調査の手法 ④ 調査結果の集計と分析
得られたデータを適切に整理・分析する方法を学び、その結果をわかりやすく提示する手法について理解を深める。
- 第10回 質的調査の手法 ①インタビューと観察法
量的調査に対する質的調査の特性を理解するとともに、インタビューや観察法などの代表的な質的調査の手法を学ぶ。
- 第11回 質的調査の手法 ②データの記録
質的調査によって得られるデータの記録について、質的調査の実践例を通して理解を深める。
- 第12回 質的調査の手法 ③データの整理と分析
グラウンデッドセオリーなど質的調査の結果を適切に解釈する手法を学ぶ。
- 第13回 ITの活用①
文献・資料の検索、調査の実施、データの整理や分析といった、社会調査の各プロセスにおけるITの活用方法について学ぶ。
- 第14回 ITの活用②
統計ソフトを用いた集団間比較や多変量解析などのデータ分析の手法を学ぶ。
- 第15回 社会調査と倫理
学問的な意味での調査倫理と社会調査、特に社会福祉調査に特有の倫理的配慮について理解を深める。

成績評価の方法

授業への参加状況（30%）、定期試験（50%）、レポート（20%）により判断する。

履修にあたっての注意

他の履修者に対する迷惑行為は厳に慎むこと。

教科書

社会福祉士養成講座編集委員会『新・社会福祉士養成講座 5. 社会調査の基礎（第3版）』（中央法規、2013、ISBN：978-4-805-83760-3）

教科書・参考書に関する備考

毎回の講義でレジュメと参考資料を配布します。
また、講義時には各回の内容に合わせて参考資料や URL を提示する予定です。

参考書

轟亮・杉野勇（編）『入門・社会調査法（第3版）』（法律文化社、2017、ISBN：978-4-589-03817-3）
福祉臨床シリーズ編集委員会（編）『社会福祉士シリーズ5 社会調査の基礎（第3版）』（弘文堂、2016、ISBN：978-4-335-61173-5）

授業のねらい

この授業は、社会保障制度や社会福祉制度の利用に関して、「法律」という観点からの知識を整理するための時間となります。はじめに、「契約」に関する基礎知識を学んだ上で、判断能力が不十分な人を支援するための重要な仕組みである「成年後見制度」に関して、その目的、利用手続、種類を学びます。

また、相談援助を行う者の知識として必要となる、民法（主に親族法や相続法など）や行政法（特に行政救済法）、社会福祉関連法の基礎的知識を身につけることを目指します。

法律分野であり、馴染みの低いテーマのようにも見える分野ですが、実際には私たちの生活に密着した内容を含む部分が多く、これらをできるだけ簡潔な言葉で説明ができるようにするため、講義では、単に「聴く」だけでなく、自ら「説明する」機会を多くもつように配慮しながら丁寧に進行していきます。

到達目標

- 1 成年後見制度について、次の内容を説明できる。
 - ①成年後見制度の全体像（創設の背景や目的など）
 - ②法定後見制度と任意後見制度の違い
 - ③成年後見制度の利用手続
 - ④法定後見制度の類型ごとの支援の仕組み
 - ⑤法定後見制度による支援内容の具体的事例
 - ⑥成年後見制度に関連する仕組み（日常生活自立支援事業など）
- 2 親族法の基礎的事項を説明できる。
- 3 相続の仕組みや遺言制度の基礎的事項を説明できる。
- 4 クーリングオフやその他の消費者保護の仕組みについて説明できる。
- 5 不服申立てと行政訴訟について、その違いと優先関係について説明ができる。
- 6 虐待の防止に関して、どのような法的整備がなされているかを説明できる。

授業方法

講義形式で進行します。制度の基本的な仕組みをパンフレットや新聞記事などの各種資料から学び、テキストの事例等を用いてその具体的な内容を説明します。講義を「聞く」ことだけにとどめず、聞いた内容を自らが「説明する」機会をできるだけ多く設けるよう、配慮します。授業計画の前後に関連させていく、自宅学習を行って下さい。

授業計画

- 第1回 講義の全体説明
民法（契約法概論）
- 第2回 成年後見制度（制度創設の背景・制度の概要）
- 第3回 成年後見制度（法定後見制度と任意後見制度）
- 第4回 成年後見制度（申立手続）
- 第5回 成年後見制度（法定後見制度の類型と成年後見人等の職務）
- 第6回 成年後見制度（日常生活自立支援事業等）
- 第7回 民法（消費者契約法、特定商取引法）
- 第8回 民法（親族法）
- 第9回 民法（相続・遺言）
- 第10回 虐待の防止の仕組み
- 第11回 行政法（総則）
- 第12回 行政法（行政不服審査法・行政事件訴訟法）
- 第13回 行政法（行政手続法）
- 第14回 個人情報の保護
- 第15回 憲法（基本的人権）・全体のまとめ

成績評価の方法

到達目標の各項目を測定する試験（80%）、授業への参加状況（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

複雑な制度について、自分の言葉で説明できる力をつけることが本講義の目的のひとつです。

教科書

福田幸夫・森長秀・編『権利擁護と成年後見制度〔第4版〕』（株式会社弘文堂、2018）

授業のねらい

心身機能と身体構造及び様々な疾病や障害の概要について、人の成長及び発達や日常生活との関係を踏まえて理解する。

到達目標

- ・国際生活機能分類（ICF）の基本的考え方と概要について論述することができる。
- ・リハビリテーションの概要について論述することができる。

授業方法

講義形式で行います。DVD や PP などの資料を活用します。身体機能や疾病が生活能力にどう影響するかイメージできるように進めていきます。授業計画を関連させていく自宅学習を行ってください。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 人の心身の発達と老化
- 第3回 人の心身機能と身体構造の概要 ～ 筋・骨格系
- 第4回 人の心身機能と身体構造の概要 ～ 呼吸・循環・排泄系
- 第5回 人の心身機能と身体構造の概要 ～ 神経（精神含む）・感覚・内分泌系
- 第6回 国際生活機能分類（ICF）の基本的考え方と概要 ～ 国際障害分類から国際生活機能分類への変遷
- 第7回 国際生活機能分類（ICF）の基本的考え方と概要 ～ ICF を構成する各概念について
- 第8回 国際生活機能分類（ICF）の基本的考え方と概要 ～ ICF をもとに我々の生活を考えてみると
- 第9回 健康の捉えかた・定義
- 第10回 社会福祉の対象となる疾病や障害の概要 ～ 代表的な疾病の概要（精神疾病を除く）
- 第11回 社会福祉の対象となる疾病や障害の概要 ～ 代表的な障害の概要（精神障害を除く）
- 第12回 社会福祉の対象となる疾病や障害の概要 ～ 精神疾病と精神障害、精神疾患の診断・統計マニュアルの概要
- 第13回 医療や保健の現状
- 第14回 リハビリテーションの概要 ～ リハビリテーションの概念と範囲、実際
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況及び取り組み姿勢 50%、毎授業の際のレポート 50%として到達目標を測定して評価します。

履修にあたっての注意

私語が多い場合、席を指定制にします。

参考書

黒田研二ほか編著『MINERVA 社会福祉士養成テキストブック「人体の構造と機能及び疾病」』（ミネルヴァ書房）

授業のねらい

近年の福祉施策、とくに障害者、生活保護世帯等に対して就労による自立は喫緊の課題として位置づけられており、就労支援施策制度の改正、創設の動きは活発である。こうした就労支援の動きの中で、相談援助活動をどう展開していくかが問われている。本科目では、就労支援に関わる制度・施策、各領域別の就労支援を理解し、先駆的な取り組みを紹介することにより就労支援の視点を養うことをねらいとする。

到達目標

1. 就労することの意義について理解する。
2. 相談援助において必要となる視点、各種の就労支援制度について理解する。
3. 各領域別の就労支援の課題および展開方法を理解する。
4. 就労支援に関わる専門職、組織、団体および実践（連携等）について理解する。

授業方法

授業は講義形式で展開するが、実践等を学ぶため VTR などの視聴覚教材も活用し、レポートとしてまとめる。毎回の講義時にレジメを配付する。毎回リアクションペーパーに記入し、受講者自ら講義内容を振り返り、感想等をまとめる。質問については授業内で回答し、また感想や意見等も幾つか紹介し共有を図りたい。レジメ内容を復習し、授業計画の前後を関連させて次回の講義に臨むこと。期末テストについては、解答例・解説資料をテスト終了後にポータルを活用し配布する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
働くことの意味（レポート作成）
- 第2回 雇用・就労の動向と労働施策の概要
- 第3回 労働法規の概要
- 第4回 障害者の就労の現状と就労支援の概要
- 第5回 障害者福祉施策における就労支援の実際
- 第6回 障害者雇用施策における就労支援の実際
- 第7回 低所得者の就労の現状と就労支援の実際
- 第8回 視聴覚学習（レポート作成）、期末テスト

成績評価の方法

主に到達目標 2、3、4 に関する期末テスト 50%、主に到達目標 1、2 に関するレポート 15%、授業への参加状況（リアクションシート含）35%により評価する。

履修にあたっての注意

社会福祉士受験資格取得の必須科目
ソーシャルワーク実習等で欠席した場合は、後日欠席分のレジメを受け取り、学習をすること。

教科書・参考書に関する備考

教科書：講義時に資料を配付する。

参考書

社会福祉士養成講座編集委員会『就労支援サービス 第4版 新・社会福祉士養成講座 18』（中央法規出版、2016年、ISBN：9784805853047）
社団法人日本社会福祉士会『ソーシャルワーク視点に基づく就労支援実践ハンドブック』（中央法規出版、2010年、ISBN：9784805832455）

参考ホームページ

雇用 http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/index.html（厚生労働省 雇用に関する政策等）

授業のねらい

罪を犯した人は、一定の司法手続きを経て社会に戻ってくるが、これらの人々を社会がどのようにして受け入れていくかが社会問題となっている。犯罪者というレッテルをはられたハンディキャップを負った人たちの社会復帰を促進するためには、居住、就労、人とのつながりといった支援が必要で、司法と福祉の連携が課題とされている。本科目では少年犯罪や刑事司法の法的な手続き、処遇など刑事政策における更生保護制度の全体を理解するだけでなく、福祉的支援の必要性および支援の実際について学ぶことをねらいとする。

また、高齢者や障害者の犯罪（医療観察法を含む）についても理解し、その支援の必要性と法のあり方について検討したい。

到達目標

1. 相談援助活動において必要となる更生保護制度について理解する。
2. 更生保護に関わる刑事司法・少年司法分野で活動する組織、団体及び専門職について理解する。
3. 社会的支援としての福祉的関わり（刑事司法・少年司法分野の機関等との連携のあり方）について理解する。
4. 高齢者や障害者の犯罪の実態および支援について理解する。

授業方法

授業は講義形式で展開し、実情・実践等を学ぶためVTRなどの視聴覚教材も活用し、レポートとしてまとめる。

毎回の講義時にレジュメを配付する。毎回リアクションペーパーに記入し、受講者自ら講義内容を振り返り、感想等をまとめる。質問は次回講義時に回答、感想・意見についても幾つか紹介し、共有を図る。

レジュメ内容を復習し、授業計画の前後を関連させて次回の講義に臨むこと。

期末テストの解答例・解説資料はテスト終了後にポータルを活用し配布する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
イントロダクション 犯罪と更生保護
- 第2回 刑事司法の実情（犯罪動向等）と更生保護制度の全体像の理解
- 第3回 更生保護の沿革と刑事司法の中の更生保護
- 第4回 更生保護の対象と内容（仮釈放等）
更生保護の現状（高齢者犯罪等）
- 第5回 保護観察制度と更生緊急保護
- 第6回 更生保護における犯罪被害者等施策、犯罪予防活動等
更生保護制度の関係機関・役割
- 第7回 触法障害者の理解と支援、医療観察制度の概要と支援の実際
- 第8回 視聴学習（レポート作成）、期末テスト

成績評価の方法

主として到達目標1、2に関する期末テスト50%、主として到達票3、4に関するレポート15%、および授業への参加状況（リアクションペーパー含）35%により評価する。

履修にあたっての注意

社会福祉士受験資格取得の必須科目

教科書・参考書に関する備考

教科書：講義時に資料を配付する。

参考書

社会福祉士養成講座編集委員会『新・社会福祉士養成講座 20 更生保護制度 第4版』（中央法規出版、2017年、ISBN：9784805854334）

辰野文理『要説 更生保護 第2版』（成文堂、2016年、ISBN：9784792351762）

参考ホームページ

「更生保護」とは http://www.moj.go.jp/hogo1/soumu/hogo_hogo01.html（法務省 更生保護について）

授業のねらい

本講義では、相談援助における人と環境の交互作用に関する理論や相談援助の対象を理解し、対象者が最善の利益を獲得出来るよう、さまざまな実践モデルとアプローチを知識として獲得することを目的とする。

到達目標

- ・ ソーシャルワークを構成するものや相談援助の対象を理解できるようになる。
- ・ ソーシャルワークを「人と環境の交互作用」から理解できるようになる。
- ・ ソーシャルワークの機能や役割を理解した上で、「実践モデル」の考え方と多様な「アプローチ」の基礎について、その内容を知識として定着できるようになる。

授業方法

本講義は、毎回配布する資料を中心とした講義形式とし、テキストやその他の参考文献をふまえて展開します。全ての授業後に授業に対するリアクションペーパーを提出いただきます。リアクションペーパーに書かれた質問等への回答は、次の授業時間内にフィードバックします。

毎回配布する資料を中心に講義を進め、最終日に授業内容を理解しているかどうかの確認テストを行います。配布資料がテスト範囲となりますので、学習の材料にしてください。授業内では適宜関連する時事問題や文献・資料等を紹介します。事前・事後学習（各 30～60 分）に役立てることを期待します。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション -改めて、ソーシャルワークとは何か-
- 第2回 ソーシャルワークの構成要素 1 -ソーシャルワークを構成するもの-
- 第3回 ソーシャルワークの構成要素 2 -ソーシャルワークという木-
- 第4回 相談援助における対象理解 1 -ソーシャルワークの対象は誰か-
- 第5回 相談援助における対象理解 2 -個人・家族・集団・地域-
- 第6回 ソーシャルワークにおけるニーズ
- 第7回 ソーシャルワークの機能と役割
- 第8回 人と環境に介入するソーシャルワーク
- 第9回 ソーシャルワーク実践理論とは
- 第10回 ソーシャルワークの実践モデル
- 第11回 さまざまな実践アプローチ 1 -心理社会的アプローチ・機能的アプローチ-
- 第12回 さまざまな実践アプローチ 2 -問題解決アプローチ・行動変容アプローチ・課題中心アプローチ-
- 第13回 さまざまな実践アプローチ 3 -危機介入アプローチ・エンパワメントアプローチ・ナラティブアプローチ-
- 第14回 さまざまな実践アプローチ 4 -実存主義アプローチ・フェミニストアプローチ・解決指向アプローチ-
-ほか-
- 第15回 全体総括と確認テスト

成績評価の方法

授業への参加状況（30%）、到達目標を測定するための確認テスト（70%）により評価します。

※授業への参加状況とは、単なる出席状況ではなく、毎講義終了後に提出するリアクションペーパーへの記入状況など、授業への主体的参加状況を指しています。

履修にあたっての注意

- ・ 社会福祉士国家試験受験資格取得のための必須科目です
- ・ 全講義 3分の1以上の欠席者は評価対象とせず、単位を認めません
- ・ 授業への参加状況は、毎回の講義終了後に提出するリアクションペーパーで確認します
- ・ 事前学習では、教科書や、社会福祉士受験資格に関わるその他の科目と関連させながら学習を進めて下さい。事後学習では、各回の配布資料や授業内で取り上げた文献等を学習の材料として下さい。

教科書

社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座 7 相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』（中央法規、2015、ISBN：978-4805851036）

社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座 8 相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』（中央法規、2015、ISBN：978-4805851043）

教科書・参考書に関する備考

- ・ 教科書はソーシャルワーク論Ⅰ～Ⅵで共通して使用します。すでに購入している人は新たに購入する必要はありません。
- ・ その他の参考書は講義内で適宜紹介します。

授業のねらい

ソーシャルワーク（相談援助）の過程とそれに関わる知識と技術について体系的に理解する。ソーシャルワークにおける援助関係のあり方及び面接技術などの理解を通して、対人援助の技法を学ぶ。さらに、同様の過程に基づくケアマネジメントについて理解する。

到達目標

- 1 ソーシャルワーク（相談援助）の価値と理念について理解を深める。
- 2 ソーシャルワークの展開過程が理解でき、実践できるための専門性を習得する。
- 3 ソーシャルワークにおける面接技術を体系的に理解する。
- 4 ケアマネジメント手法について、実践的に理解する。

授業方法

本講義は、ソーシャルワーク論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに続く科目である。既習科目を前提に授業を進めるため、事前の復習が望まれる。授業は、配布資料に基づき講義形式で行う。適宜受講生への質問を行うため、積極的な学習姿勢が求められる。また、グループでの検討など演習による体験的学習も行う。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション ～ソーシャルワークとは（復習をかねて）
- 第2回 支援過程（プロセス）の全体像と援助関係の形成
- 第3回 ケースの発見とインボランタリーなクライアントへの関わり
- 第4回 インテーク（受理面接）
- 第5回 アセスメント(1) 情報収集とアセスメント計画
- 第6回 アセスメント(2) 情報の整理と分析
- 第7回 アセスメント(3) 総合評価
- 第8回 目標設定及び契約、計画策定
- 第9回 実施、評価、終結及びフォローアップ
- 第10回 効果測定の方法
- 第11回 ジェネラリストソーシャルワークとしての地域展開
- 第12回 地域課題に取り組むソーシャルワーク手法
- 第13回 ソーシャルワークにおける面接技法の体系
- 第14回 ケアマネジメント手法を活用した地域生活の総合的支援
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況（リアクションペーパーの内容）30%、グループ演習の取組 20%、試験 50%として到達目標を測定し、総合評価する。

履修にあたっての注意

- ・社会福祉士受験資格取得の必須科目となる
- ・15講の講義全体でソーシャルワーク過程を学ぶため、極力欠席をしないこと

教科書

社会福祉士養成講座編集委員会『新・社会福祉士養成講座7「相談援助の理論と方法Ⅰ」』（中央法規）

教科書・参考書に関する備考

ソーシャルワーク論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと同様のテキストを使用するため、新たな購入は必要としない

授業のねらい

ソーシャルワーク（相談援助）の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められるソーシャルワーク（相談援助）の知識と技術について実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てて行く能力を身につけることができることを目指します。

到達目標

- ・ 援助を必要とする事象を理解することができる。
- ・ 具体的な事例の検討や援助場面を想定したロールプレイングなどの演習形態の学習により、ソーシャルワーク論などの関連講義の理解を深めるとともに、援助実践の場で活用できる援助技術を身につける。
- ・ 事例をとおしてソーシャルワーク（相談援助）の対象を理解することができる。

授業方法

毎回単元に関する解説をした後、ロールプレイやグループワークを行います。演習ですので学生の積極的な参加が求められます。

また、シラバスを参照してソーシャルワーク論で学んだことを振り返る事前学習（1時間程度）を行うとともに配布される資料を基に事後学習（1時間程度）を行うことをもとめます。

クラス毎に到達目標に関するレポート課題が提示されます。課題についての振り返り等は、授業の中で行います。

授業計画

- 第1回 援助を必要とする事態の理解(1)：アイマスクによる視覚遮断
 第2回 援助を必要とする事態の理解(2)：車いす使用
 第3回 援助を必要とする事態の理解(3)：振り返り
 第4回 基本的な面接・観察技術の習得(1)：面接・観察技法とは
 第5回 基本的な面接・観察技術の習得(2)：面接ロールプレイ1（促し・言い換え・繰り返し・要約の技法）
 第6回 基本的な面接・観察技術の習得(3)：面接ロールプレイ2（質問・解釈・共感の技法）
 第7回 記録の技法(1)：記録の意義、表現の多様性と使い分け
 第8回 記録の技法(2)：記録の形式と方法、マッピング技法
 第9回 ソーシャルワーク（相談援助）の展開過程の理解(1)：インテーク
 第10回 ソーシャルワーク（相談援助）の展開過程の理解(2)：アセスメント
 第11回 ソーシャルワーク（相談援助）の展開過程の理解(3)：プランニング
 第12回 ソーシャルワーク（相談援助）の展開過程の理解(4)：支援の実施
 第13回 ソーシャルワーク（相談援助）の展開過程の理解(5)：モニタリング
 第14回 ソーシャルワーク（相談援助）の展開過程の理解(6)：効果測定
 第15回 ソーシャルワーク（相談援助）の展開過程の理解(7)：終結とアフターケア
 第16回 ソーシャルワークの価値と倫理に関する理解(1)：専門的価値と倫理
 第17回 ソーシャルワークの価値と倫理に関する理解(2)：倫理的ディレンマ
 第18回 ソーシャルワークの価値と倫理に関する理解(3)：倫理綱領の理解
 第19回 ソーシャルワーカーの役割の理解(1)：ソーシャルワーカーのさまざまな役割
 第20回 ソーシャルワーカーの役割の理解(2)：直接サービス提供、サービス・資源の結合
 第21回 ソーシャルワーカーの役割の理解(3)：サービス提供システムの改善・強化、資源の開発役割
 第22回 ソーシャルワーク（相談援助）の対象理解(1)：児童虐待に関する事例
 第23回 ソーシャルワーク（相談援助）の対象理解(2)：高齢者の地域生活支援に関する事例
 第24回 ソーシャルワーク（相談援助）の対象理解(3)：障がい者の就労支援に関する事例
 第25回 ソーシャルワーク（相談援助）の対象理解(4)：家庭内暴力に関する事例
 第26回 ソーシャルワーク（相談援助）の対象理解(5)：低所得者支援に関する事例
 第27回 ソーシャルワーク（相談援助）の対象理解(6)：ホームレス支援に関する事例
 第28回 ソーシャルワーク（相談援助）の対象理解(7)：社会的排除に関する事例
 第29回 ソーシャルワーク（相談援助）の対象理解(8)：権利擁護に関する事例
 第30回 ソーシャルワーク（相談援助）に関わる知識・技術のまとめ

成績評価の方法

演習参加度（50%）、到達目標を測定するレポート（50%）による評価。

履修にあたっての注意

1. 本科目は、社会福祉士国家試験受験資格取得の必須科目である。
2. 本科目は、原則として1年時開講の「ソーシャルワーク演習Ⅰ」の単位を修得していることが前提となる。
3. 本科目は、必ず「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」「ソーシャルワーク実習Ⅰ」と併行履修すること。

教科書・参考書に関する備考

使用しない。適宜、プリントを配布する。

授業のねらい

社会福祉の相談援助実習の意義を理解し、相談援助実習に望む心構えや姿勢を自覚して準備に取り組みます。また、個別指導並びに集団指導を通じて、講義で学んだ知識、技術等を具体的にかつ実際的に理解し、実践的な技術等の体得するための準備学習を行います。そして、社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得します。

到達目標

1. 相談援助実習の意義を説明することができる
2. 相談援助実習に求められる基本的な技術について説明することができる
3. 配属実習で学んだ実習成果を、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる

授業方法

- ・全体とクラスに分かれての授業があります。クラス展開でのワークショップや口頭発表場面では、学生の主体的な参加が求められます。
- ・全体指導については、事前学習（2時間程度）として指定のテキスト（実習の手引き）を熟読して授業に臨んでください。
- ・クラス展開の際は、事前および事後学習（各2時間程度）用のワークシート活用について、クラス担当教員の指導に従い学習をすすめてください。
- ・実習に関する技術の確認 OSCE (1)及び(2)、実習に関する知識の確認 CBT (1)及び(2)については、クラス担当教員が返却し内容の確認を行います。

授業計画

- 第1回 相談援助実習の基本的理解
 第2回 相談援助実習の意義
 第3回 配属実習領域の基本的理解(1)：児童福祉領域
 第4回 配属実習領域の基本的理解(2)：知的障がい者福祉
 第5回 配属実習領域の基本的理解(3)：身体障がい者福祉領域
 第6回 配属実習領域の基本的理解(4)：高齢者福祉領域
 第7回 配属実習施設・地域社会の理解(1)：配属実習施設の領域理解
 第8回 配属実習施設・地域社会の理解(2)：配属施設の理解
 第9回 配属実習施設・地域社会の理解(3)：配属施設の地域理解
 第10回 事前見学
 第11回 個別実習課題作成指導（個別に内容を確認する）(1)
 第12回 個別実習課題作成指導（個別に内容を確認する）(2)
 第13回 実習における個人のプライバシーの保護と守秘義務、個人情報保護法の理解
 第14回 実習に関する技術の確認 OSCE (1)
 第15回 実習に関する知識の確認 CBT (1)
 第16回 実習記録の内容及び方法に関する理解、実習スーパービジョンに関する理解
 第17回 実習スーパービジョン（教員による実習巡回指導を含む）(1)
 第18回 実習スーパービジョン（教員による実習巡回指導を含む）(2)
 第19回 実習スーパービジョン（教員による実習巡回指導を含む）(3)
 第20回 実習スーパービジョン（教員による実習巡回指導を含む）(4)
 第21回 実習スーパービジョン（教員による実習巡回指導を含む）(5)
 第22回 実習スーパービジョン（教員による実習巡回指導を含む）(6)
 第23回 事後学習指導—前半実習の振り返り・課題の整理（各自前半実習報告を行う）(1)
 第24回 事後学習指導—前半実習の振り返り・課題の整理（各自前半実習報告を行う）(2)
 第25回 事後学習指導—前半実習の振り返り・課題の整理（各自前半実習報告を行う）(3)
 第26回 事後学習指導—前半実習の振り返り・課題の整理（各自前半実習報告を行う）(4)
 第27回 事後学習指導—前半実習の振り返り・課題の整理（各自前半実習報告を行う）(5)
 第28回 後半実習に向けての事前学習指導
 第29回 実習に関する技術の確認 OSCE (2)
 第30回 実習に関する知識の確認 CBT (2)

成績評価の方法

到達目標 1、2、3 について
 実習事前事後学習及び授業への参加状況（30%）
 実習報告プレゼンテーション（30%）
 CBT、OSCE（40%）
 により評価します。

履修にあたっての注意

1. 本科目は、社会福祉関係施設に赴く相談援助実習の事前学習・事後学習・総括等を主眼としており、必ず「ソーシャルワーク実習Ⅰ」及び「ソーシャルワーク演習Ⅱ」を併行履修すること。
2. 本科目と「ソーシャルワーク実習Ⅰ」は、一体的に実施して成績評価する。
3. 本科目は、社会福祉論Ⅰ・Ⅱ、児童福祉論Ⅰ、高齢者福祉論Ⅰ、ソーシャルワーク論Ⅰ・Ⅱ、ソーシャルワーク演習Ⅰを単位修得済みでなければ履修できない。

教科書

『ソーシャルワーク実習の手引き（2018-2019年度版）』（藤女子大学）

教科書・参考書に関する備考

教科書：『ソーシャルワーク実習の手引き』（2018-2019年度版）（藤女子大学）を初回に配布する。

参考書

社会福祉用語辞典
地域福祉辞典
社会福祉小六法

授業のねらい

1. 社会福祉関係機関・施設における相談援助実習を通して、相談援助に関わる知識と技術について具体的かつ実際に理解し実践的な技術等を体得します。
2. 社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得します。
3. 関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解します。

到達目標

1. 相談援助実践に求められる基本的な実践能力を理解し、実行することができる。

授業方法

社会福祉施設等への配属実習です。実習期間中、相談援助実習指導担当教員は原則週1回の巡回指導等を行います。そこでは下記の事項について学生及び実習指導者との連絡調整を密に行い、学生の実習状況についての把握とともに実習中の個別指導を行います。

授業計画

※学生は次に掲げる事項について、実習指導者による指導を受けるものとする。

【実習目標・内容】

- 1) 利用者やその関係者・施設・事業者・機関・団体等の職員、地域住民やボランティア等との基本的なコミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成
 - 2) 利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成
 - 3) 利用者やその関係者（家族・親族・友人等）との援助関係の形成
 - 4) 利用者やその関係者（家族・親族・友人等）への権利擁護及び支援（エンパワメント含）とその評価
 - 5) 多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実践
 - 6) 社会福祉士としての職業倫理、施設・事業者・機関・団体等の職員の就業などに関する規定への理解と組織の一員としての役割と責任への理解
 - 7) 施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の実践
 - 8) 地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等であることへの理解と具体的な地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解
- ※ただし、教員免許状（福祉）取得希望者は、「免許法施行規則に定める科目区分」における「社会福祉総合実習」の対応科目として、指定された社会福祉施設において、上記【実習内容・目標】1）～8）の他に「介護実習」を含むものとする。

※なお、次に掲げる事項について十分留意すること。

【実習形態】

・実習生を受け入れる社会福祉関係機関や施設と実習時期を調整し、11.5日間、90時間の実習を連続する2週間の間に行う。

【実習に関わる学習指導】**1) 実習オリエンテーション・事前学習**

- ・併行して履修する「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」においてオリエンテーション及び事前学習を行う。
- ・予め実習生の個別実習課題や希望学習事項を実習指導者に連絡し、実習開始時に実習計画の提示と課題の確認を行う。

2) 実習中の学習指導

- ・実習施設における行動や学習は、実習指導者または実習指導者が指示する関係スタッフの了解や指導のもとに取り組む。
- ・実習中は実習記録ノート（記載方法は別途指導）を作成し、指導を受ける際に活用する。
- ・実習の途中で担当教員が巡回指導を行う。
- ・実習終了時には、実習指導者が実習生と面談して講評と実習後の学習課題の助言・指導を行う。

3) 事後学習と総括

- ・実習終了後に「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」において実習成果・課題の整理を行い、実習報告、前半実習レポートの作成を行う。

成績評価の方法

到達目標1について

相談援助実習指導者による評価（20%）

巡回指導時の状況（実習態度・課題への取り組み）（30%）

前半実習報告会及び前半実習レポート（50%）

により評価します。

履修にあたっての注意

1. 本科目は社会福祉関係機関や施設に赴いて取り組む相談援助実習であり、必ず併行して「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」「ソーシャルワーク演習Ⅱ」を履修すること。
2. 本科目と「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」は、一体的に実施して成績評価する。
3. 社会福祉士国家試験受験資格に規定された“23 日間・180 時間以上”に則るため、本科目ではその 1/2 の日数・時間数（11.5 日間・90 時間）を充てて行う。
4. 社会福祉士国家試験受験資格を取得するには、残りの 1/2（11.5 日間・90 時間）に相当する「ソーシャルワーク実習Ⅱ」を履修しなければならない。
5. 従って、事情や理由を問わず欠席・遅刻・早退等による実習日数・時間の縮減はできない。実習中も健康状態に十分留意し、利用者や関係者の迷惑にならないよう実習指導者や教員との連絡や相談に基づいて行動すること。
6. 教員免許（「福祉」）の取得を目指す場合は、介護実習を含む。
7. 本科目は、社会福祉論Ⅰ・Ⅱ、児童福祉論Ⅰ、高齢者福祉論Ⅰ、ソーシャルワーク論Ⅰ・Ⅱ、ソーシャルワーク演習Ⅰを単位修得済みでなければ履修できない。

教科書

『ソーシャルワーク実習の手引き（2018-2019 年度版）』（藤女子大学）

教科書・参考書に関する備考

教科書：『ソーシャルワーク実習の手引き』（2018-2019 年度版）（藤女子大学） 他

授業のねらい

本講は、コミュニティが意味するもの、人とひとの「つながり」によって形成されるコミュニティへの参加・貢献に必要な知識を人間生活のさまざまな話題（諸問題）から学修し知識を培っていく地域環境系のアクティブラーニング科目です。

本講をとおして、人とひとのつながり（特にソーシャルキャピタル）への着目しながらコミュニティの今日的意義を検討し、以後の学修・研究のための基礎づくりをねらいとしています。

到達目標

1. 豊かな人間生活を創り出すうえで重要な人とひとのつながりの方（アイデア）を持つ。
2. 提示する資料から要点をまとめて、人間生活の実際を説明する
3. 現代コミュニティへの参加貢献に必要なコミュニティのあるべき姿を提言する。

授業方法

“無縁社会”と呼ばれる昨今、信頼に基づく人と人の「つながり」に着目し、多様な分野から注目されているコミュニティの諸問題（特に、大規模災害－東日本大震災－の被災地に着目）への取り組みやソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の研究などを概観する。

豊かな人間生活を創り出すうえで重要な知識と人とひとの「つながり」のアイデアを、さまざまな研究成果を基に検討し、地域環境分野の科目として人間生活における協調的行動の舞台であるコミュニティの諸問題に向き合う自らの考えと姿勢を培う。

この授業についての自宅学習は、予め提示された資料の整理・要約を、事後学習では後半に行うプレゼンテーションに向けて準備を行うと効果的である。

授業計画

- 第1回 人間にとってのコミュニティ：講義のねらいと進め方、人間の生活と人のつながり
大規模自然災害と人間生活
- 第2回 人間生活とコミュニティ
「コミュニティと日本人の社会認識の違い」
- 第3回 コミュニティのさまざまⅠ：コミュニティの概念・特性と世間 1
「世間の縛りとコミュニティづくりの隘路」
- 第4回 コミュニティのさまざまⅡ：コミュニティの概念・特性と世間 2
「世間と空気の相関性とその意識下の生き方」
- 第5回 基本的な地域集団とコミュニティ：町内会、地縁型コミュニティ（近所の底力）とネットワークコミュニティづくりの実際「コミュニティづくりと町内会活動の活性化」
- 第6回 コミュニティと人のつながり：人が集うことの時間的意義と場所性
- 第7回 市民の社会参加とコミュニティ①：コミュニティづくりと市民活動が果たす役割（プランニング）
コミュニティづくりをプランニングする「コミュニティ・コアステーションを創る」
- 第8回 市民の社会参加とコミュニティ②：コミュニティ・プランをプレゼンする
- 第9回 コミュニティの人間関係Ⅰ：人のつながりと社会問題 1（無縁社会とネットワーク）
- 第10回 コミュニティの人間関係Ⅱ：人のつながりと社会問題 2（格差社会とコミュニティ意識）
- 第11回 コミュニティとソーシャルキャピタル：問題解決を高める力（人とひとのつながり）
- 第12回 人のつながりとコミュニティ：信頼のメカニズム
「集団と社交ネットワーク（個人の帰属意識を生む最も強力な資産）」
- 第13回 コミュニティ・スタディⅠ（プレゼンテーション①）：コミュニティの状況に向き合う目的とテーマ
- 第14回 コミュニティ・スタディⅡ（プレゼンテーション②）：コミュニティの状況に向き合うアイデアの発表
- 第15回 人間生活とコミュニティ：協調的行動の舞台としてのコミュニティのあり方

成績評価の方法

試験は行わない。

到達目標の達成度の計測するコミュニティスタディ（プレゼンテーション 50%）・レポート（30%）、及び授業への参加状況（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

- ・地域環境系の科目としてのフィールドワーク入門（前期）及びボランティア論（前期）、プレゼンテーション（前期）の履修者が望ましい。
- ・コミュニティに関連する研究は様々広範なものであること、コミュニティリアリズムの醸成のために授業計画内容の一部を変更による（ゲストスピーカー招致）講義を予定していること、並びに履修者自身のプレゼンテーションが最終課題となる。

教科書・参考書に関する備考

必要な参考書及び資料等は、講義で適宜紹介する。

参考書

ジェラード・デランティ著／山之内靖・伊藤茂訳『コミュニティ』（NTT 出版、2006）
広井良典『コミュニティを問い直す』（ちくま新書、2009）
稲葉陽二編『ソーシャル・キャピタルの潜在力』（日本評論社、2008）
issyu + design project『地域を変えるデザイン』（英治出版、2011）
安田雪『パーソナルネットワーク』（新曜社、2011）

授業のねらい

日本の中の多様性、とくに「衣食住」を文献資料、絵画資料から探求する。将来、地域と連携した福祉、学校教育を目指している人で生活史、文化史の知識や利用を希望する人を対象とする。身近な生活と文化から共生の知識を身につけることを目的とする。

到達目標

- 1 人間の持っている多様性を物質文化、文献資料の両側面から知識を身につけ、他者理解に役立てるため、歴史資料の利用方法を修得する。
- 2 日常生活にある文化の来歴を探求することで、地域社会との係わりを考える機会とする。到達目標1の他者理解をふまえ、生活と文化の多様性から自己の社会における役割を文章で表現できることを目標とする。

授業方法

講義形式で行う。前半（第7回まで）は基礎的な日本地理や歴史の確認と知識の把握、後半（第8回以降）は基礎知識を応用して文献資料、絵画資料から生活と文化を読み解いていく。

中間レポートの課題に、博物館・美術館等の見学を課す。レポートは授業評価に含まれる。

また毎回の授業では、受講者の理解度を確認するため適宜小テスト、発問を行うので積極的な授業参加が求められる。

最終段階では、授業で学んだ知識をもとに穴埋め問題と記述で構成されたテストを実施する。

毎回の課題については、授業内に口頭で解説し、解説資料を配布する。中間レポートと期末テストについては採点后に答案を返却し、到達目標の確認を行う。

授業計画

- 第1回 ガイダンスー日本の中の多様性・北海道の中の多様性
- 第2回 日本の中の多様性(1)ー風土が形成する文化：世界の中の日本
- 第3回 日本の中の多様性(2)ー風土が形成する文化：日本の中の北海道
- 第4回 日本の中の多様性(3)ー風土が形成する文化：北海道の中の私たち
- 第5回 日本の中の多様性(4)ー「衣」からみる生活
- 第6回 日本の中の多様性(5)ー「食」からみる文化
- 第7回 日本の中の多様性(6)ー「住」からみる気候
- 第8回 北海道の中の多様性(1)ーアイヌ文化と絵画資料
- 第9回 北海道の中の多様性(2)ーアイヌ文化と文献資料
- 第10回 北海道の中の多様性(3)ー「アイヌ絵巻」をよむ①
- 第11回 北海道の中の多様性(4)ー「アイヌ絵巻」をよむ②
- 第12回 北海道の中の多様性(5)ー雪と暮らす：民具から知る生活史①
- 第13回 北海道の中の多様性(6)ー雪と暮らす：民具から知る生活史②
- 第14回 北海道の中の多様性(7)ー工芸品からみる文化史①
- 第15回 北海道の中の多様性(8)ー工芸品からみる文化史②

成績評価の方法

本授業の到達目標である共生と多様性の理解に関する試験（50%）、博物館・美術館等の文化施設見学に関する中間レポート（20%）、参加状況（30%）、により評価する。

履修にあたっての注意

初回のガイダンスをうけ、授業内容を確認したうえで受講すること。

授業は基本的に講義形式で行うが、授業内容を理解したか確認するため随時指名して発言を求める。

教科書・参考書に関する備考

教科書は独自に作成したプリントを使用。授業時に（もしくは本学ポータルサイトの「講義連絡」等を通じてPDF形式で）配布する。

参考書については、必要に応じて随時指示する。

授業のねらい

「国際化」「グローバル化」が進み、世界はますます「多様性」に満ちあふれています。モノや人、技術の交流により、「多様性」の中身自体も一層多様化してきています。しかし、多様な背景をもった人々の交流が進むにつれ、言語や文化をはじめとするさまざまな「ちがい」に起因する争いや差別、偏見が少なくなったかと問われれば、誰もが即座に否定するのではないのでしょうか。

この授業では、わたしたちが住む世界にあふれる「多様性」について、みなさんと一緒に考えます。わたしたちは日々、どのような「ちがい」に向き合っているのでしょうか。また、どのような「ちがい」は認められて、どのような「ちがい」は許せないと感じるのでしょうか。世界のさまざまな文化や言語を題材に、「多様性」に向き合い、それを受け容れる態度を身につける必要性について考えてみたいと思います。

到達目標

- (1)多様なレベル・視点から人々の「多様性」について考えることを通して、自分なりの定義を持つことができる。
- (2)グループで議論・協働するスキル、異文化理解力、プレゼンテーション・スキルを伸ばすことができる。
- (3)グループで考えたことを自らの言葉でまとめる力を伸ばすことができる。

授業方法

この授業は、担当者による講義・話題提供のほか、受講者同士のグループワーク、ディスカッション、グループによるプレゼンテーション等により構成されます。授業全体をとおして、グループによる討論およびプレゼンテーションの実施を複数回予定していますが、そのためのグループ分けは担当者が行います。また、ゲストスピーカーによる講義を予定しています。

【事前学習について】

- ・定期的に課題を出します。必ず準備の上、授業に参加してください。
- ・受講者個人の学習を管理し、かつグループ活動を円滑に行うため授業時間外に自身の意見や情報の発信が求められます。
- ・授業、グループワーク等への積極的な参加を期待します。

【グループワークについて】

- ・授業に遅れる際、休む際には必ず担当教員・同じグループのメンバーに連絡してください。グループの評価が個人の評価にも反映されます。同じグループのメンバーに迷惑をかけることのないよう、気をつけてください。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション・自己紹介
- 第2回 データに見る世界の「多様性」
- 第3回 世界各国における女性の地位と役割を考える
- 第4回 ゲストスピーカーによる講義（予定）
- 第5回 「多様性」の定義とその許容範囲①：「文化」のちがいは乗り越えられるのか
- 第6回 「多様性」の定義とその許容範囲②：世界におけるさまざまな「文化」
- 第7回 「多様性」の定義とその許容範囲③：発表・ふりかえり
- 第8回 言語の「多様性」を考える①：オーストラリアの事例から
- 第9回 言語の「多様性」を考える②：世界各国における英語教育事情
- 第10回 言語の「多様性」を考える③：発表・ふりかえり
- 第11回 身近な「多様性」を考える①：日本社会における「国際化」「グローバル化」
- 第12回 ゲストスピーカーによる講義（予定）
- 第13回 身近な「多様性」を考える②：移民・難民の受け入れに伴うメリット・デメリット
- 第14回 身近な「多様性」を考える③：発表・ふりかえり
- 第15回 授業全体のふりかえりとレポートの構想発表

成績評価の方法

評価は、①通常の授業（そのための準備・復習時間含む）への積極的参加、授業内での提出物の提出・内容、授業外でのメール等での意見提出等（40%）、②三回のグループ発表（30%、グループの評価および個人の貢献度）、到達目標(3)を測定する③約1,600字の最終レポート（30%）に基づき行う。

履修にあたっての注意

グループワークの多い授業です。同じグループのメンバーに迷惑をかけることのないよう、授業に遅れる・休む際には、必ず連絡をしてください。みなさんの積極的な参加が求められます。

授業のねらい

ボランティアの理念やその意義と社会的役割を、様々な社会的状況の中での市民としての責務と人権擁護の立場を踏まえ、人間の社会的な営みの中で展開されているボランティアな実践から具体的に学ぶ。

1. ボランティア学習の人間教育を担う教育的価値と、社会変革を促す市民的活動について理解する。
2. 日本という風土の中で展開されてきたボランティア活動とその考え方の歪さを理解する。
3. 社会福祉を推進するために求められるボランティアな生き方と活動のあり方を、事例を通して学ぶ。
4. 市民（自己）教育としての福祉教育とボランティアについて、深い関心を持ち自らの生き方をふりかえる。
5. 世界の虐げられた子どもたちの人権問題を直視し、その支援のあり方について考え、常にグローバルな問題に関心を持ち、問題意識を喚起させる。

到達目標

この授業の一つひとつを通して、「わたし」が社会や人をどのように認識し、ボランティアについてどのように考えてきたのかを明らかにしながら、今後どのように生きていくのかを自問自答する。そして、よりよい生き方について考える力を身に付ける。さらに、期末課題の小論文で、学んだことを糧にしながら、自己表明することができる。また、「ボランティアと人権」との関連について理解を深めるために、政治的・社会的問題についての関心を高め“社会力”を身につけることができる。

授業方法

個々の授業計画のテーマに即したボランティアな活動事例について、個々の考え方を基底として、グループワークを中心に考え方を深める。また、個々のレポートやノートをもとに協議しながら、同世代の者たちの考え方を知った上で、さらなる主体的な学習を展開し、問題意識を高める。それらの内容（自宅学習課題の提示）についても評価対象とする。

また、課した自宅学習レポートなどは、返却の際に評価したコメントを添える。

授業計画

- 2年次
- 人間生活学科専門科目
- 第1回 オリエンテーション
「あなたにとってボランティアとは何か？」
 - 第2回 「めだかのめく」に見るステレオタイプ化された貧しい福祉観
 - 第3回 ロールプレーイング「おまえ、もう学校に来るな！」
～ハンセン病問題に見る人権侵害の実態～
 - 第4回 グループワーク1「ボランティア拒否宣言」に見るボランティアの姿1
～詩文を2分割し、グループワークをしながら、ボランティアの本質に迫る
 - 第5回 グループワーク2「ボランティア拒否宣言」から学ぶボランティアの姿2
～詩文の後半をグループで読解し、全体協議の後、個々ボランティアの本質について考えをまとめる
 - 第6回 グループワーク3「どちらがボランティア？」
～ボランティアの概念を打ち破る実際の活動の深さを見出す
 - 第7回 “負けないぞう！”に見る災害復興に寄与する被災者ボランティアの生き方
～阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本大地震に見るボランティアなまちづくりに学ぶ
 - 第8回 ボランティアと奉仕の違いをわきまえる
～学校でのボランティア活動の弊害を考える
 - 第9回 ボランティア恋愛論「ボランティアと恋愛、この似て非なるものとは？」
～なぜという疑問から、恋愛との相関性を考える
 - 第10回 ボランティア失恋論「ボランティアと失恋、ここにある人としての学びとは何か？」
～ボランティアの理念とその目的とは何か～討論「なぜ若者たちにボランティアは必要か！」
～講義の中から見えてきた社会参画としてのボランティアの役割を考える～
 - 第11回 ボランティアのパラドックス
～善魔、そしてボランティアの葛藤とは何か～
 - 第12回 海外支援のカタチ
～タイ少数民族の悲哀を直視することから始める
 - 第13回 マララ・ユスフザイのメッセージに学ぶ
～過酷な環境の中で生きる子どもたちとそれを支援するボランティアな活動を提起しよう！
 - 第14回 コミュニティづくりとボランティア
～高齢者・障がい者の在宅ケアと地域づくりを考える
 - 第15回 まとめ「わたしとボランティア」（小論文の発表とディスカッション）
事前に提出された小論文をグループで紹介しながら、自己発信する

成績評価の方法

出席 3 分の 2 以上を評価対象とする。
授業後のワークシート 40%、ホームワーク 30%、期末課題小論文 30%を総合的に評価する。
ただし、ワークシートは授業中に使用されるものであり、得られる評価も出席者のみである。
評価の変更については、事前に学生に周知する。

履修にあたっての注意

ホームワークの課題は、教科書の論文から提示される。授業外でしっかり熟読すること。
また、期末小論文のテーマと論立ては事前にレクチャーする。
本講義に併せて、プレゼンテーション（前期）、コミュニティ論（後期）を履修することが望ましい。

教科書

鳥居一頼『子どもと学ぶボランティア』（大阪ボランティア協会、2008、ISBN：978-4-87308-058-1）

教科書・参考書に関する備考

授業内容によって、別途教材資料を用意する。

授業のねらい

- ・自然環境や人口・環境についての初歩的な野外調査を体験的に実施する。
- ・比較的身近な環境を対象に、その実態・現状把握のためのデータ収集と整理の方法を学習する。
- ・統計データ、調査データから図表や地図を作成し、プレゼンテーションに到る一連の流れを学習する。

到達目標

- ・対象を客観化し、抽象化したモデルとして把握できる。
- ・地理や統計データのデータ処理ができる。
- ・第三者に問題を伝えるための、コミュニケーション技法を修得する。

授業方法

授業は、講義、フィールドワーク（野外での調査）、スタジオワーク（PC室での制作）、学生によるプレゼンテーション（講評を含む）から構成し展開していきます。

事前学習としては、配布資料及び関連資料を十分に読み込み、フィールドワークの対象地について調べる。

授業で指示された事項に基づいて、事後学習としてのデータを作成整理し、データベース化する（フィールドに出て、入門的な調査活動を行って、個々の資料づくりを行う）。

授業計画

- 第1回 インTRODクダクシヨン
フィールドワークについての概論、具体的な事例の紹介
(土地・空間・人体などの「観察」の基本)
- 第2回 社会調査法（入門）
各種統計の読み方（人口、就学児童、高齢者等）とデータ整理法
(エクセル入力→地域社会の統計データの整理)
- 第3回 社会調査法（量的調査）
標本調査と全数調査→地域社会のデータを例に、集計、データフレームの作成
- 第4回 地域調査（石狩本町訪問）準備学習あり（第5回との集中授業）
ケーススタディとしての石狩の地域環境史発掘→植生参与観察とデータ収集
(地域の歴史的施設の訪問調査)
- 第5回 地域調査（石狩本町訪問）準備学習あり（第4回との集中授業）
ケーススタディとしての石狩の地域環境史発掘→植生参与観察とデータ収集
(地域の歴史的施設の訪問調査)
- 第6回 地図情報の活用（データ処理）
(地理情報システム（GIS）、国土地理院、当該自治体)
- 第7回 発表（Power Point：第4・5・6回分のまとめ）・講評
- 第8回 社会調査法（質的調査）
学内における調査を実施（課題提出あり）
(アンケート、聞き取り調査、ライフストーリーの方法→調査票の作成)
- 第9回 データ処理
石狩の発展をデーター化
(人口、産業、教育等のデータベースを用いて定量的・定性的に表示→地図、統計表、分析図の作成)
- 第10回 産業遺産実施調査（第11回との集中授業、気候状況次第で変更あり）
石狩の産業等の歴史
(明示から昭和期)の産業遺産（油田、湿原調査→地形、河川、植生等のデータ収集）
- 第11回 産業遺産実施調査（第11回との集中授業、気候状況次第で変更あり）
石狩の産業等の歴史
(明示から昭和期)の産業遺産（油田、湿原調査→地形、河川、植生等のデータ収集）
- 第12回 データ処理
石狩一帯の自然環境、集落、産業遺産をデーター化
(収集データの整理、画像、図表、テキストなどの報告、図表化→地図、植生図等への投影を含む書となす→ハンドアウトの作成)
- 第13回 発表（第10回11回12回分のまとめPower Point）・講評
- 第14回 フィールド・ディスカッション（第15回との集中）
石狩浜の自然環境・生態系についての補足調査並びに野外での討論
- 第15回 フィールド・ディスカッション（第14回との集中）
石狩浜の自然環境・生態系についての補足調査並びに野外での討論

成績評価の方法

到達目標の達成度を測る発表（60%）第7回、13回、ならびに提出物（40%）8回の課題により評価します。

履修にあたっての注意

・石狩の実地調査にあたっては午後を通して授業を行いますので、開講日に注意してください（アルバイト等はいれないようにしてください）。定員は40名とします。
また、2年前期の「ボランティア論」の履修、また後期の「コミュニティ論」「フィールドスタディ」、3年次以降の「フィールドワーク A および B」を履修予定とすることが推奨されます。

教科書・参考書に関する備考

授業中に指示します。

授業のねらい

本講ではフィールドワーク（訪問取材）に必要なノウハウについて体験をとおして学修・体得する。実際に地方公共団体に赴いて、市民の暮らしを支える地方公共団体が担う（教育や産業、地域振興、社会福祉などの）取り組み・事業の実際と市民の生活課題を捉え、課題解決に向けて検討する。特に、地方行政が取り組む事業の把握・理解をとおして教室では得られない実際体験と知識を蓄積し、以後の学修・研究に必要な基盤づくりとして「汎用的能力」「プレゼンテーション力」の向上を促していく。

到達目標

- ・社会貢献に必要な課題発見力・分析力・計画実行能力・コミュニケーション能力の涵養。
- ・フィールドワークの基礎的手法の修得とプレゼンテーション力の体得。
- ・社会集団・組織活動への貢献力をグループ活動の体験・蓄積で培う。
- ・地方公共団体の役割と機能、地域課題と事業・取り組みの理解。
- ・公務員、教員を目指す者及び地域社会への貢献を目指す履修者の基礎力向上を促す。

授業方法

地方公共団体（石狩市）が実際に取り組む事業・業務を対象にフィールドワークを（包括協定に基づいて）実施するアクティブラーニング科目です。

地方公共団体（行政等）とのコミュニケーションや協働事業への取り組みをとおして、フィールドワーク（参与観察、インタビュー等）の企画立案、行政機関の実際を取材・調査した結果の編集・報告までの一連の作業を実践します。特に、グループを編成して行う主体的な学修行動に基づいて作業一連の計画的な進行を促していく授業展開を予定しています。

自宅学習では、予め提示された資料の整理・要約を、事後学習ではプレゼンテーションに向けた準備が効果的です。

*各回ではグループ学修（屋外活動を含む）となるため、個々の自主的な事前準備が必要な場合があります。

授業計画

- 2年次
- 人間生活学科専門科目
- 第1回 インTRODクダクション（授業の進め方、フィールドワークの意義）
 - 第2回 フィールド選定のための情報資料収集（ゲスト：石狩市）
 - 第3回 フィールドと課題の選定、グループ分け
－グループ内役割検討：訪問・情報収集・プレゼン準備・記録報告など－
 - 第4回 フィールドワーク（前半）の技法－基本姿勢、実施計画－
 - 第5回 フィールドワーク（前半）の準備－取材内容、取材方法－
 - 第6回 フィールドワーク（前半）の模擬訓練*（グループ内点検）
 - 第7回 フィールドワーク実践（前半）*（グループの計画に沿った現地訪問取材）
－石狩市との協議により実施－
 - 第8回 フィールドワーク（前半）のまとめ－中間プレゼンテーション－
 - 第9回 フィールドワーク（後半）の技法－基本姿勢、実施計画－
 - 第10回 フィールドワーク（後半）の準備－取材内容、取材方法－
 - 第11回 フィールドワーク（後半）の模擬訓練*（グループ間の相互点検）
 - 第12回 フィールドワーク実践（後半）*（グループの計画に沿った現地訪問取材）
－石狩市との協議により実施－
 - 第13回 全体まとめ：報告書の編集作成とプレゼンテーションの準備
 - 第14回 全体まとめ：プレゼンテーション（取材訪問を中心に）
 - 第15回 全体まとめ：プレゼンテーション（報告書を中心に）

成績評価の方法

到達目標の達成度を計測するプレゼンテーション（70%）、授業への参加状況（30%）により評価する。

履修にあたっての注意

- ・フィールドワークの実践能力の基盤づくりを希望する者の履修を想定している。
- ・主体的な態度と自ら参加計画・実行する姿勢、コミュニケーション力・チームワークを体得する前向きな姿勢が必要。
- ・本講は、石狩市と本学の包括協定に基づいて教室外においてフィールドワークを実施する。
- ・現地フィールドワークの日程は、授業時間内を基本としているが異なる時間帯の場合もある。

教科書・参考書に関する備考

必要な資料・参考書などについては、授業において適宜紹介する。

参考書

宮内泰介『自分で調べる技術市民のための調査入門』（岩波書店、2004）

新田祥子『練習 15 分 論理力トレーニング教室』（日本能率協会マネジメントセンター、2008、ISBN：9784820745419）

佐藤郁哉『フィールドワークの技法 問いを育てる、仮説をきたえる』（新曜社、2002）

参考ホームページ

北海道石狩市公式ホームページ <http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/>（訪問前後調査に活用する）

540111

キャリアデザイン 担当教員：内田博・船木幸弘・和田雅子・外崎由香 2単位 前期

授業のねらい

人間生活学科の学びの根本は、生活デザイン能力を高めることです。この授業では、自分自身の将来を素材にして、マインドマップの活用法を学び、それを用いて、大学生生活・就職・人生について考えてもらいます。それによって、これからの学びの方向を明確にすること、自分の将来像を描いていくことが、授業の狙いです。自分の生活デザイン能力が高まる。

到達目標

マインドマップを活用できる。

授業方法

前半は個人のワーク、後半は講述型授業＋ワークを組み合わせる授業を行います。各回の課題に取り組む事後学習が自宅学習として求められます。

授業計画

- 第1回 なぜ、キャリアデザインが必要か
 - 第2回 マインドマップとは
 - 第3回 マインドマップを描く1 基礎技法を学ぶ
 - 第4回 マインドマップを描く2 明日の予定を画く
 - 第5回 マインドマップを描く3 自己PR文の作成
 - 第6回 一週間の予定を作ってみよう
 - 第7回 幸せマインドマップ
- 達成度によってはマインドマップの書き方に関する授業を増やすことがあります。
以下、授業を聞いてから、マインドマップを描く
- 第8回 人間生活学科の学びと皆さんの将来
 - 第9回 働くことと自分らしさ
 - 第10回 企業社会の変容と働き方の変化
 - 第11回 産業・職業
 - 第12回 新しい働き方 ディーセント・ワーク、社会的企業
 - 第13回 結婚の経済学
 - 第14回 子育て
 - 第15回 まとめ
- 順番は変わることがあります。

成績評価の方法

到達目標を測定するための提出物 80%、講評 20%

履修にあたっての注意

2・3回目、4・5回目は2時間連続で行う予定です。そのため変則的な開講になります。課題が多い授業なので、自習が必要です。

授業のねらい

- キャリアデザイン、自分のキャリア形成に向けて自己表現の技法を学ぶことがねらいです。
- ・スタジオワーク、グループワークなどの技法を身に着ける。
 - ・問題意識の検証から提案に至る一連の流れを体験的に学習する。
 - ・社会に向けた発信を強く意識して、自身の社会貢献への認識を涵養する。
 - ・プレゼンテーションのツールとしてコンピュータ処理技法を集中的に学ぶ。

到達目標

- ・問題を的確に整理して第三者に提示できる。
- ・自分自身を社会貢献に向けた表現ができる。
- ・プレゼンテーション技法を活用した発表ができる。

授業方法

講義（スライドを用いてヴィジュアルに示す）、PCを用いたスタジオワーク、プレゼンテーションから授業を構成して展開します。個人作業を中心に、必要に応じてグループワーク（数人単位での作業）を行います。

授業開始に先立ち、修得するPCスキルを整理し、パワーポイントのスキルを向上を目指します。

授業後は、学習したプレゼンテーションのスキルを、さまざまな機会での発表等に生かすような意識を涵養します。

授業計画

- 第1回 インTRODククション
プレゼンテーションとは（誰のために何を伝えるか）
プレゼンテーションの事例紹介
- 第2回 プレゼンで使用使用するアプリケーションの紹介、活用法：
（Power Pointの扱い方）ポートフォリオ作成（自己アピール）。
- 第3回 人前で話す心得
（第一印象・身だしなみ・話し方のコツ・発表の仕方など）
- 第4回 プレゼンテーションの組み立て方（ニーズ：企業が欲しがる人になる）
（視覚的な表現法、基礎）
- 第5回 発表（自己照会・プレゼンテーション）：企業面接を想定した自己紹介、講評
- 第6回 プレゼンテーション技法（色彩とデザインの手法習得）
- 第7回 メディアの種類と分析方法
情報収集と整理・概念化、課題の整理と方向付け
- 第8回 メディア活用法、編集法
（課題：藤女子大学の高校生向けのPRを考える）
- 第9回 発表（メディア活用法・プレゼンテーション）：藤女子大学のPR
- 第10回 企業分析
（求められる人材と商品企画・準備）
- 第11回 企業分析
（課題：既存商品の分析と人材開発）
- 第12回 発表（企業分析・プレゼンテーション）
- 第13回 新商品企画（市場動向調査）
- 第14回 新商品企画（調査報告書の制作、担当者の技能・能力の把握）
- 第15回 発表（新商品企画・プレゼンテーション）、講評

成績評価の方法

到達目標の測定を行う小課題・成果物（50%）・発表（50%）により評価する。

履修にあたっての注意

- ・小課題が毎回出ることになるので、事後学習をしっかりと行う習慣を身に着けるように心がけること。
- ・発表・提出課題の制作は相応の時間を要するものなので、各自がそのための時間を確保する工夫が必要です。
- ・「センス」（美的感覚・発想力）を涵養する機会でもあるので、良い事例を調べて、常にセンスを磨く心構えが必要です。
- ・発表は、事前準備を必要とすることであることから、必要に応じて教員のアドバイスを求めるのがよい。
- ・スタジオワークをベースとなる授業なので、スムーズに作業ができる体制で授業に臨むこと。
- ・評価は、履修生も参加する、自分と他者の成果・完成度を比較することで、さらに上を目指しことができます。
- ・企業活動、広報ツールといったものに常に関心を向けていく心がけましょう。

教科書・参考書に関する備考

その都度、指示します。

授業のねらい

職場・組織という集団（グループ）活動にはコミュニケーションが必要不可欠です。しかし、よりよい人間関係を築きながら貢献することが求められますが、実際には誰もがコミュニケーション（人間関係）に悩むことがあります。

人間生活学科固有のキャリア形成を担う本講では、ヒューマンコミュニケーション（人間関係）の理解と必要なコミュニケーション能力を培っていきます。特に、組織・職場で起こるさまざまな人間関係を的確に捉え、必要な知識と技術を学ぶとともに、「組織の中の人」として「成熟した関係づくり」に貢献できる感性をもつ人材としてのキャリア形成をねらっています。

到達目標

- ・「組織の中の人」として現実を的確に捉え、自ら考え主体的に行動する技能を身に着ける。
- ・「成熟した関係づくり」に貢献する上で必要な組織人としての感性を培う。
- ・集団作業で起こるさまざまな事柄に気づき、適確な行動ができる。
- ・職場や社会に「貢献する」姿勢としてのキャリア意識を育む。

授業方法

本講では、キャリア形成に必要なコミュニケーション（人間関係）の実際体験を楽しみながら学びます。そのために、行動科学的な学習場面（ラボラトリー方式の体験学習）の設計者がファシリテーターとして実践的に展開されます。

特に、「組織の中の人」として自ら主体的に学ぶ姿勢を涵養し、「成熟した関係づくり」に貢献するために必要な技能の習得と、そこで起こるさまざまな人間関係の現実を的確に捉えて貢献できる能力を備える人材を、つぎの授業計画によって培っていくアクティブラーニング科目です。なお、受講者の状況によって授業内容の一部を変更する場合があります。

※各回の授業内容は自宅学習として「学習ジャーナル」を整理する（所要時間 40 分程度）こと、並びに教科書の該当部分のノート整理を行う（所要時間 40 分程度）と効果的です。

授業計画

「組織の中の人」としてのコミュニケーションの実践*（第1～5講）

- 第1回 自分探し・集団の中の自分に気づく「ライフ・サークルの創造と私マップづくり」
- 第2回 影響を与える・活動する中で起きるさまざまな影響関係（課題解決型エクササイズ）
- 第3回 先入観・固定観念とコミュニケーション（思い込み・コンセンサス）
- 第4回 人がひとを理解する・自分のマネジメントのスタイル（グループディスカッション「よくある事例の検討」）
- 第5回 集団とのかかわり・関係の成長ということ「私の対人関係（社会）地図」
集団（グループ）における「成熟した関係づくり」重要なコミュニケーションの実践*（第6～10講）
- 第6回 影響を受ける・影響を与える・私の実際を把握する（課題解決型エクササイズ）
- 第7回 説得する・コンセンサス法と人間関係づくり「私が大切にしていること」
- 第8回 お互いさまのフィードバック（個人の気づき「フィードバック（7つの問い）」）
- 第9回 グループが変わる体験（課題解決型エクササイズ）
- 第10回 成熟したチームづくり体験（課題解決型・アクション系エクササイズ）
「社会に貢献する」の姿勢と、集団（グループ）内の主体的な行動の実践*（第11～14講）
- 第14回 協力することを考える・協働することから学ぶ1（無言の集団作業）
- 第12回 チームワークを考える・協働する2（マネジャーと無言の集団作業）
- 第13回 課題別チーム実習
- 第14回 決める・葛藤とのつきあい方（「サバイバル」なことから学ぶ）
- 第15回 まとめ：支える・お互いさまの心「言葉のプレゼント」

成績評価の方法

到達目標の測定を行う学修ジャーナル・レポート（60%）と授業参加度（40%）により評価する。
なお、学修ジャーナル・レポート評価基準用の「ルーブリック」を提示しますので、参考にして取組むようにしてください。

履修にあたっての注意

- ・科目のねらい及び使用教室の状況によって、履修者数を以下の条件で制限する（決定：第1講）場合があります。
- ・フィールドワーク入門及びフィールドスタディ、プレゼンテーション、コミュニティ論、ボランティア論など、アクティブラーニング系科目を可能な範囲で平行履修すると、より効果的です。

教科書

船木幸弘『O f f - J T に活用する人間関係づくりトレーニング』（金子書房、2017、ISBN：9784760821761）

教科書・参考書に関する備考

・この科目の教科書は『人間関係と心理（3年）』と同じものが指定される予定です。

参考書

星野欣生『職場の人間関係づくりトレーニング』（金子書房、2008、ISBN：9784760826148）

授業のねらい

この演習では、2年前期の人間生活学概論で身につけた課題発見力を具体化していくことを目指します。生活科学・社会福祉・地域環境の3分野すべての演習を体験することで、自分自身にとってより専門的な学びの軸となるものを発見し、3年次以降のゼミ選択の参考にしてください。

どの区分の演習でも、演習という学びの方法、レジュメの作成、報告の仕方、討論の場面など基礎的な内容は共通しています。

到達目標

- 1 人間生活学科での学びの軸を見出すことができる
- 2 3年次以降のゼミ、卒業研究のための準備ができる

授業方法

皆さんをA、B、Cの3グループに分けます。どのグループに属するかは4月に発表します。

Aグループ

生活科学：第1～第5週、社会福祉：第6～第10週、地域環境：第11～第15週の順で各分野の演習を体験します。

Bグループ

社会福祉：第1～第5週、地域環境：第6～第10週、生活科学：第11～第15週の順で各分野の演習を体験します。

Cグループ

地域環境：第1～第5週、生活科学：第6～第10週は、社会福祉：第11～第15週の順で各分野の演習を体験します。

各分野の教員はABCのどのグループにも同一の内容を提供します。各分野での演習の進め方（グループ全体で行うのか、さらに細かくグループを分けるのかなど）については、それぞれの分野の教員の指示に従ってください。発表のための自習が必須です。

授業計画

第1回	ガイダンス	Aグループ：生活科学	Bグループ：社会福祉	Cグループ：地域環境
第2回	演習	Aグループ：生活科学	Bグループ：社会福祉	Cグループ：地域環境
第3回	演習	Aグループ：生活科学	Bグループ：社会福祉	Cグループ：地域環境
第4回	演習	Aグループ：生活科学	Bグループ：社会福祉	Cグループ：地域環境
第5回	演習	Aグループ：生活科学	Bグループ：社会福祉	Cグループ：地域環境
第6回	ガイダンス	Aグループ：社会福祉	Bグループ：地域環境	Cグループ：生活科学
第7回	演習	Aグループ：社会福祉	Bグループ：地域環境	Cグループ：生活科学
第8回	演習	Aグループ：社会福祉	Bグループ：地域環境	Cグループ：生活科学
第9回	演習	Aグループ：社会福祉	Bグループ：地域環境	Cグループ：生活科学
第10回	演習	Aグループ：社会福祉	Bグループ：地域環境	Cグループ：生活科学
第11回	ガイダンス	Aグループ：地域環境	Bグループ：生活科学	Cグループ：社会福祉
第12回	演習	Aグループ：地域環境	Bグループ：生活科学	Cグループ：社会福祉
第13回	演習	Aグループ：地域環境	Bグループ：生活科学	Cグループ：社会福祉
第14回	演習	Aグループ：地域環境	Bグループ：生活科学	Cグループ：社会福祉
第15回	演習	Aグループ：地域環境	Bグループ：生活科学	Cグループ：社会福祉

担当教員：内田博・岡崎由佳子・小沼春日・木村晶子・木脇奈智子・田中宏実・長尾順子・船木幸弘・松田剛史・丸山正三・若狭重克・和田雅子

成績評価の方法

演習への積極的な参加（発表、討論など）100%として、到達目標の測定によって評価します。

授業のねらい

現代の家族の在り方について、その変容、制度、法律、多様性などについて理解し「ひとつではない家族の在り方」について学ぶ。

到達目標

多様な家族について中立性の視点から理解することができる。
家族の変化や、子育て、介護、男女の役割の変化などを理解することができる。

授業方法

講義形式を基本とする。映像を用い、感想やコメントを求めることもある。

授業計画

- 第1回 家族とは何か(1)
あなたの家族は誰ですか？
- 第2回 家族とは何か(2)
家族の変容（古代から江戸時代まで）
- 第3回 家族とは何か(3)
家制度から夫婦家族制度へ
- 第4回 家族の中の男女共同参画(1)
家族役割
- 第5回 家族の中の男女共同参画(2)
夫婦別姓をめぐる3年
- 第6回 多様化する家族(1)
ひとり親家族とその課題
- 第7回 多様化する家族(2)
父子家庭とその課題
- 第8回 多様化する家族(3)
里親と里子
- 第9回 多様化する家族(4)
ステップファミリー
- 第10回 多様化する家族(5)
同性パートナーシップ婚
- 第11回 多様化する家族(6)
シェアハウスに住む仲間たち
- 第12回 離婚をめぐる諸問題
- 第13回 子育てをめぐる諸問題
- 第14回 介護をめぐる諸問題
- 第15回 再び・あなたの家族は誰ですか？
家族の役割とその限界について

成績評価の方法

中間テスト（30%）、学期末テスト（50%）、授業中の課題（20%）をもって評価する。

履修にあたっての注意

授業外の予習復習を求めます。

教科書・参考書に関する備考

授業中に紹介します。

授業のねらい

消費行動の変化と消費者問題の歴史的展開、消費者保護から消費者主権、消費者保護のための立法について学習する。

「消費者基本法」を中心に消費者の権利と責任について考える。

消費者被害の実態と対処する諸法律について理解する。

到達目標

消費者問題が発生する背景について理解できる。

「消費者保護基本法」から「消費者基本法」への改正とその趣旨を理解できる。

消費者の権利と責任について理解できる。

授業方法

講義形式。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 1. 消費者問題の発生
- 第3回 2. 経済の発展と消費者問題
- 第4回 3. わが国の消費者問題
- 第5回 4. 消費者運動(1) ……世界の消費者運動の展開
- 第6回 5. 消費者運動(2) ……日本の消費者運動の展開
「消費者保護基本法」から「消費者基本法」へ
- 第7回 6. 商品テストの役割
- 第8回 7. 企業における消費者対応
- 第9回 8. 消費者被害と救済 ……購入時の消費者被害
- 第10回 9. 消費者被害と救済 ……「特定商取引法」とクーリングオフ、「消費者契約法」
- 第11回 10. 消費者被害と救済 ……使用時の消費者被害と「製造物責任法」
- 第12回 11. クレジット社会と消費者信用
- 第13回 12. 若者や高齢者と消費者問題
- 第14回 13. 情報化社会の消費者問題
- 第15回 14. まとめ ……これからの消費者行動、消費者の権利と責任

成績評価の方法

基礎的知識の獲得について試験する（70%）。授業への参加状況で評価する（30%）。

参考書

講義時に紹介

参考ホームページ

講義時に紹介

授業のねらい

衣服素材である繊維、糸、布の構造や化学的特性に関する材料実験、および洗浄実験、染色実習をとおして、衣生活分野の実験的素養を習得する。また各実験・実習結果の分析・考察から、快適で安全な衣生活を創造する力を養うことを目的とする。

到達目標

- 1：衣生活分野の実験技術を身に着けることができる。
- 2：衣服材料の物理・化学的性質を説明できる。

授業方法

- ・授業のはじめに実験方法を説明し、その後は班で実験を行います。
- ・次週の授業開始時にレポートや作品を提出します。
- ・レポートや作品は、コメントをつけて返却します。
- ・受講前に配布プリントの該当箇所を読んでおいてください（所要時間 45 分程度）。
- ・受講後は実験内容を自分の衣生活に反映できるかどうか考えてみてください（所要時間 45 分程度）。

授業計画

- 第1回 ガイダンス、実験器具・機器の取り扱い、レポートの書き方
羊毛に関する実習(1) 選毛
羊毛に関する実習(2) 洗浄
- 第2回 羊毛に関する実習(3) 染色
- 第3回 羊毛に関する実習(4) 紡糸
- 第4回 羊毛に関する実習(5) 撚り止め
- 第5回 羊毛に関する実習(6) 織物製作
- 第6回 羊毛に関する実習(7) 不織布製作
- 第7回 繊維に関する実験(1) 化学繊維の製造
- 第8回 繊維に関する実験(2) 顕微鏡による形態観察
- 第9回 布に関する実験(1) 布の吸水性
- 第10回 布に関する実験(2) 布の保温性
- 第11回 洗濯に関する実験(1) 界面活性剤の作用
洗濯に関する実験(2) 洗浄力測定
- 第12回 洗濯に関する実験(3) 各種洗浄条件下における洗浄力測定
- 第13回 染色に関する実習(1) ろうけつ染め 下絵、ろう置き
- 第14回 染色に関する実習(2) ろうけつ染め 浸し染め、脱ろう、貼り付け
- 第15回 作品発表、工程表作成、まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 を測定する授業への取り組み方（40%）、到達目標 2 を測定するレポート・作品（60%）により評価します。

履修にあたっての注意

- ・初回授業には必ず出席してください。無断欠席の場合履修を認めません。
- ・2018年4月末～5月上旬に行われる羊の毛刈り体験への参加が望ましい。
- ・「衣環境論」「衣生活学」を履修の上、受講してください。
- ・実験中は、白衣を着用してください。白衣は初回から持参すること。
- ・レポートは必ず次回の授業開始時に提出すること。遅れた場合は減点とします。
- ・受講者の人数制限は12名とします。
- ・授業時間は実験の進度によって延長する場合があります。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて、プリントを配布します。実験ノートを用意してください。

参考書

酒井豊子他『被服科学実験』（三共出版、1982、ISBN：978-4-7827-0110-2）

授業のねらい

大裁ち女物単衣長着（浴衣）の製作を通じて、和裁の基礎と和裁用具の基礎的取扱い方法を習得する。また平面構成と日本独特の色柄や模様配置について理解する。

到達目標

1. 和裁の基本的な理論や縫製技術を習得できる。
2. 和裁の基本的な構成例として、大裁ち女物単衣長着（浴衣）の構成を理解し、製作できる。

授業方法

- ・ 毎回の授業は、全体説明と数度のデモンストレーションをおこなう。
- ・ 事前に配布したプリントの内容を把握しておくこと（所要時間 30 分程度）。
- ・ 授業時間内で進められなかった課題は、次回の授業までに各自で授業計画どおり進めること（所要時間 60 分程度）。
- ・ 提出課題について、コメントをつけて返却する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス、和裁用具の説明、平面構成について
採寸、各自サイズ計算
反物、糸についての説明
- 第2回 手縫いの練習
浴衣の製作(1) 反物の地直し
浴衣の製作(2) 反物の見積り
浴衣の製作(3) 反物の柄合わせ
浴衣の製作(4) 裁断
- 第3回 浴衣の製作(5) 身頃印つけ
浴衣の製作(6) 背縫い
- 第4回 浴衣の製作(7) 力布作成
浴衣の製作(8) 力布とりつけ
浴衣の製作(9) 脇縫い
- 第5回 浴衣の製作(10) 脇かくしじつけ
浴衣の製作(11) 脇耳ぐけ
- 第6回 浴衣の製作(12) 衤柄合わせ
浴衣の製作(13) 衤裁断
浴衣の製作(14) 衤下三つ折りぐけ
- 第7回 浴衣の製作(15) 衤とりつけ
浴衣の製作(16) 衤耳ぐけ
浴衣の製作(17) 裾三つ折りぐけ
浴衣の製作(18) つま先仕上げ
- 第8回 浴衣の製作(19) 袖柄合わせ
浴衣の製作(20) 袖印つけ
浴衣の製作(21) 袖下
浴衣の製作(22) 袖の丸みの始末
- 第9回 浴衣の製作(23) 袖口三つ折りぐけ
浴衣の製作(24) 袖つけ
浴衣の製作(25) 袖ふり耳ぐけ
- 第10回 浴衣の製作(26) 衤柄合わせ
浴衣の製作(27) 衤印つけ
浴衣の製作(28) 衤つけ
- 第11回 浴衣の製作(29) 三つ衤芯始末
浴衣の製作(30) 衤中とし
浴衣の製作(31) 衤先の始末
- 第12回 浴衣の製作(32) 衤本ぐけ
浴衣の製作(33) 共衤つけ
- 第13回 浴衣の製作(34) 門止め
浴衣の製作(35) 仕上げ
作品提出
- 第14回 着装
たたみ方
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1、2、3 を測定する実習への取り組み方 (50%) および作品 (50%) により評価する。

履修にあたっての注意

- ・ 初回授業は必ず出席してください。無断欠席をした場合、履修を認めません。
- ・ 初回の講義で反物の説明をします。それを受けてから反物を購入してください。
- ・ 受講者の人数制限は 10 名とし、希望者多数の場合は「衣環境論」「衣生活学」「被服構成学実習 A」の単位取得者を優先とします。
- ・ 裁縫道具は大学で貸出します。
- ・ 欠席は 15 回のうち 3 回までとし、4 回以上休んだ場合単位認定は認めません。
- ・ 進度に遅れが生じたり欠席した場合は、各自で空き時間を利用して実習の遅れを取り戻し次回に臨んでください。
- ・ 宿題が課される場合があります。

教科書・参考書に関する備考

実習用テキストを授業初回に配布する。

授業のねらい

米、小麦、乳製品、野菜、果物といった身近な食品材料を使用し、それらに含まれている主要成分の定性・定量実験を行うことで、食品の基本的な性質を理解することを目的とする。また、家庭科教育の食領域における実験内容への応用についても検討する。

到達目標

- 1 食品の性質に関する基本的な知識を身に付けることができる。
- 2 食品の定性・定量実験に関する基本的な技術を身に付けることができる。
- 3 家庭科教育の食領域における実験内容への応用について検討することができる。

授業方法

下記の内容に沿って、基本的にグループで実験を行っていきます。

受講者には毎回、実験内容に関する事前・事後課題（レポート作成、所要時間 45 分～60 分程度）を出します。毎回のレポート課題については、採点后に返却し、内容に応じて口頭で解説します。

授業計画

- 第1回 実験上の一般的な注意事項
- 第2回 糖の定性実験
- 第3回 糖の定量実験
- 第4回 アミノ酸の分離検出
- 第5回 タンパク質の定量実験
- 第6回 加工食品の調製と脂質に関する実験(1)：乳製品の調製と脂質の抽出
- 第7回 加工食品の調製と脂質に関する実験(2)：乳製品中の脂質の定量
- 第8回 果物と乳製品の酸度と糖度の測定
- 第9回 野菜類の脂溶性色素の分離検出
- 第10回 食品の色素変化と着色料に関する実験
- 第11回 牛乳に含まれるタンパク質の等電点と小麦粉のグルテンに関する実験
- 第12回 果物中の食物繊維に関する実験
- 第13回 食品関連施設の見学(1)：大豆製品関連施設
- 第14回 食品関連施設の見学(2)：乳製品関連施設
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 と 2 を測定する実験への取り組み（50%）および、毎回の授業で課する、到達目標 1 と 3 を測定するレポート提出（50%）により評価します。

履修にあたっての注意

プリント・資料を配布します。各自で実験ノートを作成してください。

実験時には白衣を着用してください。

受講者の人数制限は 16 名とします。

授業のねらい

人間生活学科のさまざまな科目で学んできたことを駆使しながら、快適な住環境や住生活について具体的に考える。自宅を実測し図面を作り、住空間にある必要な機能や寸法を学ぶ。建築家による設計例について学習し、住宅設計に関する理解を深める。

到達目標

1. 住宅の機能についての知識を習得する。
2. 寸法感覚を身につける。
3. 住環境の良い点や課題点を把握する力を習得する。
4. 自分が考える住まい像について具体的に表現することができる。

授業方法

講義形式で国内外の住宅設計の具体的な事例について学ぶ。事前に自宅（自室）の寸法を測定し、それをもとに製図をする。学んできたことを活用して、理想の住まいについて考えていく。

授業計画

- 第1回 住居計画演習とは何か
- 第2回 建築の歴史
- 第3回 建築家と住まい
- 第4回 住まいの分析：住まい歴と自分の住まいの現状把握
- 第5回 住まいの分析：平面図の作成
- 第6回 住まいの分析：平面図の作成
- 第7回 住まいの分析：設備・家具寸法の把握
- 第8回 住まいの分析：展開図の作成
- 第9回 住まいの分析：展開図の作成
- 第10回 住まいの分析：展開図の作成
- 第11回 住まいの計画：理想の住まいについて考える
- 第12回 住まいの計画：エスキスを作成する
- 第13回 住まいの計画：エスキスを作成する
- 第14回 住まいの計画：図面の作成
- 第15回 発表

成績評価の方法

到達目標 1. 2. 3 を測定するために、提出された図面により評価する（70%）。到達目標 4 を測定するために理想の住まいについて考え、プレゼンテーションを行い、発表内容を評価する（30%）。

履修にあたっての注意

住居計画を履修していることをこの授業の履修条件とする。
授業では体験や対話を重視しながら進めます。積極的な態度で学んでほしい。
建築物やまちづくりの現場見学などを行う場合もある。
授業内容は受講者の反応や状況に応じて変更される場合がある。

教科書・参考書に関する備考

- ・授業中に適宜プリントを配布する。
- ・住環境論で使用した「豊かな住生活を考える－住居学」（小澤紀美子編、彰国社）を使用するときがある。

授業のねらい

住居計画演習Ⅰで学んだことを応用しながら、実際に自分で住居を計画していく。住居計画のさまざまな手法を実践し、設計やプレゼンテーションする力を養う。

到達目標

1. 設計のための手法の習得。
2. 自分が考える住まい像を製図・模型・デザインソフト・プレゼンテーション用ボードで表現することができる。
3. 自分が考えた住まいについて口頭で相手に伝わるようにプレゼンテーションができる。

授業方法

与えられた設計条件に従って、具体的な住まいの案を考える。住宅設計図・住宅模型・デザインソフトによるイメージ図・プレゼンテーションボードの作成を行い、最終的に設計案を発表する。事前に資料を集めることがある。決められた時間内で作業が終わらない場合は、授業時間以外にも作業をすることが求められる。

授業計画

- 第1回 住居計画演習とは何か
- 第2回 住まいの設計(1)：住居プランの作成・平面図
- 第3回 住まいの設計(1)：平面図
- 第4回 住まいの設計(1)：平面図・展開図
- 第5回 住まいの設計(2)：デザインソフトを用いた制作・表現
- 第6回 住まいの設計(2)：デザインソフトを用いた制作・表現
- 第7回 住まいの設計(2)：デザインソフトを用いた制作・表現
- 第8回 住まいの設計(3)：模型の制作
- 第9回 住まいの設計(3)：模型の制作
- 第10回 住まいの設計(3)：模型の制作
- 第11回 住まいの設計(3)：模型の制作
- 第12回 住まいの設計(4)：プレゼンテーションボードを用いた制作・表現
- 第13回 住まいの設計(4)：プレゼンテーションボードを用いた制作・表現
- 第14回 住まいの設計(4)：プレゼンテーションボードを用いた制作・表現
- 第15回 発表・講評

成績評価の方法

到達目標1、2を測定するために、提出物により評価する(70%)。到達目標3を測定するために発表会を行い、内容を評価する(30%)。

履修にあたっての注意

住居計画および住居計画演習Ⅰを履修していること。
授業では体験や対話を重視しながら進めます。積極的な態度で学んでほしい。
授業内容は受講者の反応や状況に応じて変更される場合がある。

教科書・参考書に関する備考

- ・授業中に適宜プリントを配布する
- ・住環境論で使用した「豊かな住生活を考える－住居学」(小澤紀美子編、彰国社)を使用するときがある。

授業のねらい

家庭科で扱う衣食住と社会や消費活動に関する技術的背景は、極めて多岐の分野とレベルにわたる。この内容を電気・情報・エネルギーと環境の視点から捉えなおし、相互の因果関係や背景などを確認しながら効率的に整理する。そして高齢化社会や環境課題そして人工知能や IoT に対して持続可能で展望のある社会を築いていく参加者としての目を養うことを目的とする。

到達目標

1. 基礎的な科学的知識を確認することによって、事象の因果関係を質的・量的イメージを持って整理する。
2. 新たな技術や科学的知見を興味を持って受け止め、それが社会に及ぼす影響等を適切に評価できる。
3. 近未来の社会に参加する姿勢と展望を持つことができる。

授業方法

講義形式で行い、一部シミュレーションなどを取り扱う。講義では参考サイトやシミュレーション・ソフトやアプリなどを紹介していくので、自宅学習で確認しておく。またいくつかのテーマを取り上げて、グループ討議して発表を行うとともに、ICT を利用した家庭科教材の作成についても触れる。

授業計画

- 第1回 家庭電気 1
本講義の目的、電気と単位、電気電子の基本法則
- 第2回 家庭電気 2
電気と安全性、家庭電化製品の安全性
- 第3回 家庭電気 3
生活と電気、介護・福祉と電気
- 第4回 家庭電気 4
情報機器とコミュニケーション
- 第5回 環境とエネルギー 1
生活とエネルギー、環境、地球温暖化、COP21
- 第6回 環境とエネルギー 2
HEMSとスマートハウス、循環社会、水素社会
- 第7回 情報と生活技術 1
HEMSとバイタルデータ、生体情報モニター、血管 viewer
- 第8回 情報と生活技術 2
産業ロボット、介護ロボット、遠隔診断
- 第9回 情報と生活技術 3
情報とセキュリティ、地域防災 緊急避難情報
- 第10回 AIとDeep Learning 1
センサ、自動運転
- 第11回 AIとDeep Learning 2
画像認識、機械学習
- 第12回 AIとDeep Learning 3
ニューラルネット、人工知能、IoT
- 第13回 ICT教育 1
ICT教育環境、e-learning、LMS、教育クラウド
- 第14回 ICT教育 2
栄養素教材の共同作成
- 第15回 ICT教育 3
栄養素教材の相互評価、AI社会のグループ討論

成績評価の方法

毎回の授業で提出する受講カードの裏に授業の感想や質問を記入したものを10点法で評価し、それを積算したものを20%、課題提出を30%、定期テストを50%として到達目標を測定して評価する。

履修にあたっての注意

授業は基本的には講義形式で行い、電子テキストを配布するので事前学習を心掛ける。内容が広範にわたるため、前回の授業で生じた疑問点などを毎回確認する。またグループ討議やプレゼンテーションを行うときには積極的に参加すること。

参考書

中島利誠『生活と技術』（コロナ社、2002、ISBN：978-4-339-07807-7）

授業のねらい

この講義では、乳幼児期から学童期の子どもの成長と病気・障害をテーマとして扱い、健康や発達、子育て、保育について理解することをねらいます。また、子どもの健全な発達・育成を支える親の役割や、保育の重要性、医療機関・地域社会の果たす役割を認識し、子どもとの適切な関わり方や子育て支援のあり方について関心が持てるよう目指します。

到達目標

- ・乳幼児期から学童期の子どもの発達の流れについて理解する。
- ・育児や保育方法の具体例について理解する。

授業方法

各テーマに基づき、視聴覚教材を用いた講義を展開していきます。スライドの配布はしませんので、自分が重要であると思うことをその都度ノートに記載してもらいます。

講義後の復習を行うことはもちろんのこと、子どもの発達全般に興味をもてるよう、関連書物や報道に着目してください。

授業計画

- 第1回 心と体の健康とは
- 第2回 子どもの心身の発達 1 運動機能
- 第3回 子どもの心身の発達 2 手の機能
- 第4回 子どもの心身の発達 3 視覚機能
- 第5回 子どもの心身の発達 4 視覚機能
- 第6回 子どもの心身の発達 5 摂食機能
- 第7回 子どもの遊び
- 第8回 情動の発達
- 第9回 心と体の問題
- 第10回 子どもの問題行動
- 第11回 具体的な育児 沐浴
- 第12回 具体的な育児 哺乳
- 第13回 保護者の健康
- 第14回 子どもを取り巻く社会資源
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

筆記試験（70%）、授業への参加度（30%）として、到達目標を測定して評価する。欠席回数が1/3を超えた者に対しては、受験資格を認めない。

授業のねらい

現代の先端医療に関する倫理的・道徳的諸問題を取り上げながら、その背景に潜む私たちの死生観や人間観、価値観の課題を考察する。

人間の出生に関連する先端医療とその倫理的問題のほか、現在もっとも医療現場で緊急の課題となっている終末期医療の問題も取り上げる。これらの多くは実は、受講生自身が数年後に自分自身の問題として直面するであろう課題でもある。

到達目標

1. 生命倫理に関する基本的な知識を獲得し、具体的な問題について理解を深めることができる。
2. 生命倫理の諸問題を通して、死生観や人生観といった大きな問題を考察できる。

授業方法

講義形式で行うが、同時に、多くの映像資料等、実際の状況がよく分かる資料を活用しながら授業をすすめる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 日本における医療倫理問題としてのハンセン病
- 第3回 生命倫理の歴史
- 第4回 生命倫理の原理・原則
- 第5回 出生前診断(1)
- 第6回 出生前診断(2)
- 第7回 出生前診断(3)
- 第8回 生殖補助医療技術（不妊治療）
- 第9回 生殖補助医療技術（第三者が関わってくる倫理的に問題のあるケース）
- 第10回 代理出産・提供卵子による体外受精
- 第11回 治療中止の問題 1
- 第12回 治療中止の問題 2
- 第13回 治療中止の問題 3
- 第14回 選択肢としてのホスピス
- 第15回 試験と総括

成績評価の方法

試験（60%）、授業への参加状況・授業中の態度（40%）により評価する。なお、欠席は1回5点ずつ減点する。また、試験については到達目標を測定するための評価基準を詳細に明示し、それにもとづき厳正に採点する。

履修にあたっての注意

1回目の授業で成績評価や履修上の注意点について詳しいオリエンテーションを行うので、受講を考えている者は必ず第1回目に出席すること。

なお、毎回の授業の準備等は特に要しないが、人間の生死を扱う授業であるからこそ真摯な態度で受講されたい。受講者には大人としての節度ある態度を求め、授業中の私語やメール、内職等を禁じ、それらをしている場合は即退室させ、欠席扱いとする。

教科書

盛永ほか『看護学生のための生命倫理』（丸善出版、2012）

授業のねらい

本講義では、カウセリングの理論および諸技法を学び、ロールプレイによる模擬面接を実際に体験することを通じて、カウセリングの意義について理解を深め、対人援助者としての基本的態度を養うことを目的とする。

到達目標

カウセリングの諸技法について説明できる。
セラピストクライアント関係を理解した上で適切な応答を選択することができる。
対人援助者に必要とされる資質について説明できる。

授業方法

スライドと映像資料を提示しつつ、ペアワーク、グループワーク、事例検討を行う。
事前に授業計画で示した内容について自分なりのイメージを膨らませて授業に臨んで下さい。
事後学習として授業内で紹介した技法と普段のコミュニケーションとの違いを対比してもらいます。

授業計画

- 第1回 カウセリングの理念
- 第2回 カウセリングの構造
- 第3回 カウンセラーの倫理
- 第4回 カウセリングの歴史
- 第5回 来談者中心カウセリングの理論と技法
- 第6回 精神分析的カウセリングの理論と技法
- 第7回 認知行動カウセリングの理論と技法
- 第8回 インテーク面接の進め方
- 第9回 発達障害のカウセリング
- 第10回 家族関係のカウセリング
- 第11回 依存症のカウセリング
- 第12回 スクールカウセリングの実際
- 第13回 キャリアカウセリングの実際
- 第14回 電話カウセリングの実際
- 第15回 まとめと最終試験

成績評価の方法

授業内での提出物（30%）、授業への参加状況（10%）、学期末試験（60%）により到達目標を測定し評価する。

履修にあたっての注意

必要に応じてロールプレイを行います。私的な悩み事やトラウマを解消する場ではありませんので、あくまで模擬体験であることを了解した上で受講して下さい。

教科書・参考書に関する備考

授業内で参考図書を随時紹介していく。

参考書

楡木満生・田上不二夫編『カウセリング心理学ハンドブック[上巻]』（金子書房、2011、ISBN:978-4-7608-9441-3）

授業のねらい

『地域での生活を支える』という今日の地域福祉の課題に照らし、地域社会を基盤とした地域福祉の実践方法・諸技術の意義、体系、理論について講義する。また、具体的な実践活動展開事例を活用した帰納的な学びを通じて、地域における専門職の役割についての理解を深めます。

到達目標

1. コミュニティワークを中心とした地域福祉実践方法を体系的に理解・説明することができる
2. 地域社会のアセスメントの視点と方法を理解し、説明することができる
3. ネットワーキング（多職種・他機関との連携を含む）の意義と方法及び専門職の役割と実際の理解を踏まえ、推進方法に関する自身の考えを説明することができる
4. 地域福祉の推進方法（ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発、福祉ニーズの把握方法、サービス評価方法等を含む）及び専門職の役割についての理解を踏まえ、その推進方法に関する課題を指摘することができる
5. 地域福祉実践方法の理論（イギリス・アメリカ・日本）に関する知識を体得できる
6. 地域福祉推進方法（アセスメント、記録、ネットワーキング、計画、サービス評価方法、ニーズ把握法）に関する知識を体得できる

授業方法

- ・本講義は、より実りある学習のために、学生の反応（リアクションペーパー）を結果を踏まえて展開する予定です。
- ・予習：事前に配布されたレジュメにを熟読した上で授業に参加してください。（学習時間 30分）
- ・復習：学びを深化させるために、事後学習でも配布済みのレジュメを積極的に活用してください。（学習時間 30分）
- ・リアクションペーパーの結果（50%）について、授業時にフィードバックを行う予定です。

授業計画

- 第1回 コミュニティワークの具体的展開事例を通じた専門職の役割
(1)ニーズ発見（福祉ニーズの把握方法）
- 第2回 コミュニティワークの具体的展開事例を通じた専門職の役割
(2)情報収集（多職種・他機関との連携、ネットワーキング）
- 第3回 コミュニティワークの具体的展開事例を通じた専門職の役割
(3)活動主体の組織化（社会資源の活用・調整・開発方法）
(4)アセスメントと援助方針
- 第4回 コミュニティワークの具体的展開事例を通じた専門職の役割
(5)プランニング
(6)介入（実践）
(7)評価
- 第5回 地域福祉実践方法と専門職の役割(1)地域社会のアセスメント
- 第6回 地域福祉実践方法と専門職の役割(2)地域集団・組織のアセスメント 1) 集団・組織を考える
- 第7回 地域福祉実践方法と専門職の役割(2)地域集団・組織のアセスメント 2) 町内会・自治会組織を考える
- 第8回 地域福祉実践方法と専門職の役割(3)記録・可視化の方法と実際
- 第9回 地域福祉実践方法と専門職の役割(4)ネットワーキングの意義と方法・実際
- 第10回 地域福祉実践方法と専門職の役割(5)地域福祉計画における住民参加の方法・実際
- 第11回 地域福祉実践方法と専門職の役割(6)福祉サービスの評価方法と実際
- 第12回 地域福祉実践方法と専門職の役割(7)福祉ニーズ把握方法と実際
- 第13回 地域福祉の方法論の発展過程(1)イギリス（戦後）
- 第14回 地域福祉の方法論の発展過程(2)アメリカ・日本（戦後）
- 第15回 地域福祉の理論と方法の課題（まとめ）

成績評価の方法

到達目標 1、2、3、4 → リアクションペーパー（50%）
到達目標 5、6 → 筆記試験（50%）
により評価します。

履修にあたっての注意

1. この講義は単位稼ぎにはなじみません
2. 全講義の3分の1以上の欠席者は、評価対象とせず単位を認定しません。
3. 本科目履修にあたって、前提として「地域福祉の理論と方法Ⅰ」を履修しておくことが望ましい。

教科書・参考書に関する備考

*特に指定しませんが、授業時に必要なレジユメを配布する予定です。
以下、参考文献を提示します。

参考書

マレー・ロス著・岡村重夫訳『コミュニティ・オーガニゼーション 理論・原則と実際 改訂版』(全国社会福祉協議会、1968)
牧賢一『コミュニティオーガニゼーション概論 社会福祉協議会の理論と実際』(全国社会福祉協議会、1961)
日本地域福祉学会編『日本の地域福祉』
公益財団法人日本生命済生会『地域福祉研究』
田端光美『イギリス地域福祉の形成と展開』(有斐閣、2003)
筒井のり子『ボランティア・コーディネーター その理論と実際』(大阪ボランティア協会、1992)
藤井博志『コミュニティワークスキルアップ講座―事例検討法と記録法―』(美巧社、2009)
伊賀市社会福祉協議会『社協の底力』(中央法規出版、2008)
藤井博志監修・宝塚市社会福祉協議会『市民がつくる地域福祉のすすめ方』(全国コミュニティライフサポートセンター、2015)
岩間伸之・原田正樹著『地域福祉援助をつかむ』(有斐閣、2012)

授業のねらい

社会に内在する貧困・低所得をめぐる諸状況を構造的に捉え、現代社会の多面的、複合的課題の理解を行う。さらに、「社会的排除」の構造的理解とそれらへの政策対応や実践のありかたについて考える。

到達目標

- ①低所得階層のおかれている諸状況について説明することができる。
- ②生活保護制度や他の関連制度について説明することができる。
- ③自立支援プログラムの意義と実際及び課題に関して概説できる。

授業方法

講義形式で行う。また、社会に内在する様々な事象の理解のために、視覚教材や事例等を用いる。事後学習に関して、毎回の課題のアナウンスをもとに（所要時間 45 分から 90 分程度）自己学習を実施することを課す。

授業計画

- 第1回 インTRODクシヨン
公的扶助の概念
ナシヨナルミニマムの理解
- 第2回 貧困・低所得問題と社会的排除
- 第3回 貧困・低所得問題の現代的課題
- 第4回 公的扶助の歴史
- 第5回 生活保護制度の仕組み① 原理原則／保護の種類と内容方法
- 第6回 生活保護制度の仕組み② 被保護者の権利義務、不服申し立て
- 第7回 生活保護制度の仕組み③ 生活保護制度の財源・予算
- 第8回 最低生活保護基準と生活保障水準
- 第9回 生活保護の動向
- 第10回 低所得者対策の概要① 生活困窮者自立支援制度
- 第11回 低所得者対策の概要② 生活福祉資金制度、社会手当、その他の低所得者対策
- 第12回 低所得者対策の概要③ ホームレス対策の現状と課題
- 第13回 生活保護の実施運営体制と関係機関・団体
生活保護における自立支援
- 第14回 低所得者に対する支援と生活保護制度に関するまとめ
- 第15回 貧困・低所得者に対する相談援助

成績評価の方法

到達目標を測定するための試験（85%）、授業への参加状況（15%）により評価する

履修にあたっての注意

毎回、授業終了時においてアナウンスされたテキスト予習範囲を読んでおくこと

教科書

社会福祉士養成講座編集委員会編『低所得者に対する支援と生活保護制度』（中央法規出版、2016、ISBN：978-4-8058-5303-0）
大友芳恵『低所得高齢者の生活と尊厳軽視の実態』（法律文化社、2013、ISBN：978-4-589-03520-2）

授業のねらい

本講では、介護の基礎的な理解に加え、認知症、終末期ケア、住環境等にふれ、介護を必要とする人に対する生活支援の知識と技術の一部を学ぶ。それらを通して現代社会における多様な介護問題に対する関心を高め、介護を必要とする人に対する支援を理解することを目的とする。

到達目標

1. 介護福祉における基本的な視点が理解でき、利用者の立場で考えられる。
2. 介護技術の演習に積極的に参加し、知識と技術を得ることができる。
3. 現代社会の介護問題に関心を持ち、介護を必要とする人に対するよりよい支援を考えられる。

授業方法

- ・講義形式であるが一部演習を行う。介護の基礎的な理解（総論）の後、具体的な生活支援技術（演習含む）および認知症、終末期、住環境、障害者のケアなど各論を学ぶ。
- ・演習は学生同士で行い、演習後は気づきや学びのミニレポートを提出してもらう。また、DVDなどの視聴覚教材を使用し、理解を深める。
- ・ミニレポートは講義内で返却し、必要に応じて解説・コメントする。
- ・期末レポートはポータルサイトから提示する。その他授業に関する連絡はポータルサイトの講義連絡で行う。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
介護福祉について－概念と機能
- 第2回 介護の理念および倫理
- 第3回 介護の対象と介護サービス
- 第4回 介護の目的と介護に必要な視点
- 第5回 介護予防
- 第6回 生活環境を整える
- 第7回 人間の身体の動きと移動の介護【演習あり】
- 第8回 食事の介護【演習あり】
- 第9回 排泄の介護
- 第10回 身体の清潔の介護【演習あり】
- 第11回 衣服の着脱の介護【演習あり】
- 第12回 認知症の医学的理解
- 第13回 認知症の症状とケア
- 第14回 障がいのある人の介護
- 第15回 終末期の介護
まとめ

成績評価の方法

期末レポート 50%（到達目標 1・3）、ミニレポート 40%（到達目標 1・2）、授業への参加および取り組み状況 10%として評価する。

履修にあたっての注意

演習には積極的に参加して下さい。当日の準備など事前に案内するので、指示に従って授業に臨んで下さい。演習後に随時、感想などを求めますので積極的に発言して下さい。提出するレポート・ミニレポート等はすべて評価対象となります。

教科書・参考書に関する備考

授業時にプリントを配布する。欠席時のプリントは次回以降申し出ること。参考書は必要に応じて追加提示する。

参考書

西村洋子編『最新介護福祉全書第3巻 介護の基本』（メヂカルフレンド社、2017、ISBN：9784839231668）
川島みどり『イラストで理解する 初めての介護－心と技術』（中央法規、2015、ISBN：978-4-8085-3519-7）
社会福祉士養成講座編集委員会『新・社会福祉士養成講座 13 高齢者に対する支援と介護保険制度 第5版』（中央法規、2016、ISBN：978-4-8058-5301-6）

授業のねらい

社会福祉を学ぶ者として「精神障害者」に対する医療・保健・福祉などの視点および考え方を身につけ、必要な基礎知識を総合的に学習することを目的とする。

到達目標

精神保健及び福祉をめぐるさまざまな課題に関心を示し、それらについて学生自身の考えを述べるができる。

授業方法

各テーマを講義形式にて教授する。授業計画を関連させていく自宅学習を行って下さい。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 精神保健とは、精神保健福祉とは
- 第3回 精神障害の基礎知識(1)? 統合失調症?
- 第4回 精神障害の基礎知識(2)? 気分障害?
- 第5回 精神障害者処遇の歴史
- 第6回 精神保健福祉法および関係法規
- 第7回 精神障害者の人権
- 第8回 精神障害リハビリテーション(1)
- 第9回 精神障害リハビリテーション(2)
- 第10回 精神障害リハビリテーション(3)
- 第11回 障害を抱えて地域で生きるということ
- 第12回 地域精神保健活動
- 第13回 脱施設化? 精神科病院から地域へ?
イタリアの事例から 映画「人生ここにあり」(1)
- 第14回 脱施設化? 精神科病院から地域へ?
イタリアの事例から 映画「我らここにあり」(2)
- 第15回 精神保健の課題と支援
- 第16回 精神保健福祉論のまとめ

成績評価の方法

到達目標を測るために単位認定試験；90%、授業参加度；10%として到達目標を測定して評価します。

履修にあたっての注意

1. 毎回統一されたサイズのレジユメを配付するのでファイリングを要する
2. 社会福祉士国家試験受験を目指すものは本科目の履修を推奨する

教科書・参考書に関する備考

参考書などは講義の中で紹介する

授業のねらい

近年、福祉領域全般において健康問題への配慮など、保健と医療の連携が重要とされるなかで、ソーシャルワーカーの役割も多種多様なものとなっている。保健医療分野におけるソーシャルワーカーの実際の業務を中心として、起源、歴史、制度やシステムの理解、実践内容や援助展開など基本概念を学ぶ。

到達目標

1. 相談援助過程で必要となる医療保険制度や保健医療サービスについて理解できる。
2. 保健医療サービスにおける専門職の役割と実際、多職種協働について理解できる。

授業方法

保健医療分野のソーシャルワークの基本概念から実際の業務内容にいたるまで、講義形式で展開していきます。毎回の授業では、適宜レジュメ、資料を配布します。次回の授業時まで配布資料等にて復習および事前学習課題に取り組んでください。

授業計画

- 第1回 医療ソーシャルワークとは
- 第2回 医療ソーシャルワークの基本概念
- 第3回 保健医療分野におけるソーシャルワーク
- 第4回 医療ソーシャルワーカーの業務と役割(1)業務の概要
- 第5回 医療ソーシャルワーカーの業務と役割(2)業務指針の理解
- 第6回 医療ソーシャルワーカーの業務と役割(3)チーム医療における役割
- 第7回 ソーシャルワーカーの倫理
- 第8回 医療ソーシャルワークの歴史(1)諸外国の歴史
- 第9回 医療ソーシャルワークの歴史(2)日本の歴史
- 第10回 医療保険制度
- 第11回 診療報酬制度
- 第12回 ソーシャルワーク援助の展開(1)急性期
- 第13回 ソーシャルワーク援助の展開(2)回復期
- 第14回 ソーシャルワーク援助の展開(3)慢性期
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

試験 50%、課題提出 20%、授業への参加状況 30%として到達目標を測定して評価します。

履修にあたっての注意

社会福祉関連科目を受講していることを前提とした内容となります。

授業のねらい

現在の福祉の動向は、いかにして個人の尊厳を保持しつつ地域生活の持続を図るか、というところにあります。本講義では、地域生活支援を主題に、ソーシャルワークにおいて必要とされる社会資源の把握やネットワーク化、利用者の生活の質を高める記録のあり方等について学びます。

到達目標

1. 社会資源や地域生活支援のためのネットワーク化の理論、記録や ICT 等の活用について理解を深め、地域生活を支援するソーシャルワーカーにとって必要なスキルを説明できる。
2. 問題解決の主体を理解した上で、ソーシャルワーカーが個人、家族、小集団・組織、地域社会をシステムとして捉え、ネットワークを構築する意義を説明することができる。

授業方法

講義形式で理論を中心とした展開としますが、地域包括支援センター等の現場実践を一般化した事例を用い、現場を意識できるように展開します。そのため授業計画の記述の該当部分の事前学習を行ってください。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
本講義のねらいと展開について説明し、現在の福祉理念を共通認識します。
- 第2回 地域生活を支援するためのアウトリーチ
自ら援助を求めない(求める環境にない)人への働きかけとしてのアウトリーチの必要性について理解します。
教科書の該当部分について事前学習してください。
- 第3回 地域生活を支援するための社会資源の活用(1)社会資源とは何か
地域生活継続にあたり何らかの困難を抱えた人を支援するためには、さまざまな社会資源を活用し支援を展開していきます。本講では社会資源について、基本的な考え方を理解します。
教科書の該当部分について事前学習してください。
- 第4回 地域生活を支援するための社会資源の活用(2)社会資源の活用について
困りごとを抱えた人を支援する際に活用する社会資源について、さまざまな特徴を持った資源から、どのような社会資源を活用することで、その困りごとを解決することに繋がるのかを理解します。それらを通じ個人と環境の調整の意味について理解します。
教科書の該当部分について事前学習をしてください。
- 第5回 地域生活を支援するための社会資源の活用(3)ソーシャルアクションについて
社会資源の整備が十分ではないと判断した時、ソーシャルワーカーは既存の社会資源に働かかけたり、新たな社会資源開発に係わっていくこととなります。その一方法としてのソーシャルアクションについて理解します。
教科書の該当部分について事前学習をしてください。
- 第6回 地域における社会資源のネットワーク化(1)コーディネーションの目的と意義について
困りごとを抱えた人の生活を支えるために、地域におけるさまざまな社会資源が断片化することなく、有効に結びついている必要があります。また、必要な社会資源を確保するためにはソーシャルワーカー自身が他の機関や専門職と連携・協働していかなければなりません。その技法としてのコーディネーションについて理解を深めます。
教科書の該当部分について事前学習をしてください。
- 第7回 地域における社会資源のネットワーク化(2)ネットワーキングの目的と意義について
地域におけるさまざまな専門機関や専門職と地域住民等との連携場面における、各機関の主体的なつながり方の基盤となるネットワーキングについて理解をふかめます。
教科書の該当部分について事前学習をしてください。
- 第8回 地域生活を支援するための集団を活用した相談援助(1)集団の意義と活用
個人にとって身近な環境である小集団(グループ)を意図的に活用した支援について理解を深めます。不特定多数のメンバーが集まった単なるグループ活動ではなく、小集団(グループ)を活用した専門的な技術や体系について理解します。
教科書の該当部分について事前学習をしてください。
- 第9回 地域生活を支援するための集団を活用した相談援助(2)自助グループへの理解
自助グループから体験的知識に基づき提供される援助と、専門職の専門的知識の違いを理解した上で、自助グループへの理解と支援について学びます。
教科書の該当部分について事前学習をしてください。
- 第10回 相談援助における記録(1)記録の意義と方法
ソーシャルワーカーが専門職として活用する記録の必要性を理解し、記録を活用する目的と記録の種類との関連について理解します。
教科書の該当部分について事前学習をしてください。

- 第11回 相談援助における記録(2)記録の情報化と記録の実際
ソーシャルワーカーが活用する記録の種類と様式、活用方法を具体的に理解し、IT化した場合の倫理上の留意点、情報開示等について理解します。
教科書の該当部分について事前学習してください。
- 第12回 地域援助と個人情報保護(1)個人情報保護法と個人情報
個人の情報を業務の基礎として支援を展開するソーシャルワーカーには、個人情報の取り扱いについての十分な配慮と専門的な対応が求められます。その取り扱いについて個人情報保護法を中心に学びます。
教科書の該当部分について事前学習してください。
- 第13回 相談援助と個人情報保護(2)福祉現場における個人情報保護の課題
個人の生活と権利を守るための情報保護とその活用について事例を基に学びます。
教科書の該当部分について事前学習してください。
- 第14回 相談援助における ICT の活用
情報を活用するための手段である ICT（情報通信技術）の発展と普及は、福祉分野においても、業務の効率化やサービス向上を目的に積極的に活用が図られています。一方で個人情報保護やセキュリティ上の問題などの新しい課題も拡大しています。本講では、相談援助における ICT の活用を理解します。
教科書の該当部分について事前学習してください。
- 第15回 これまでの授業をふり振り返り、学習した内容について基本的な事項の確認を行います。

成績評価の方法

授業への参加状況（発言・発表・リアクションペーパー）（30%）、到達目標 1 を測定する小レポート（20%）、自宅目標 2 を測定するレポート・理解成熟度テスト（50%）

履修にあたっての注意

社会福祉士受験資格取得の必須科目になります。授業の前後にテキスト部分を学習し、理解を深め、能動的に参加してください。

教科書

社会福祉士養成講座編集委員会編集『『相談援助の理論と方法Ⅰ』（新・社会福祉士養成講座 第7巻）』（中央法規出版、2015）
社会福祉士養成講座編集委員会編集『『相談援助の理論と方法Ⅱ』（新・社会福祉士養成講座 第8巻）』（中央法規出版、2015）

教科書・参考書に関する備考

その他、必要に応じて使用するプリントを配布します。

授業のねらい

本講義は、社会福祉士国家試験受験資格取得のための指定科目の一つである『相談援助の理論と方法』で教育されるべき内容の(1)「スーパービジョン」、(2)「事例分析」、(3)「相談援助の実際」について学ぶ。

講義では以上の三つの柱について解説するとともに、具体的な事例を基に検討する。履修学生は、ソーシャルワーク（相談援助）におけるスーパービジョンの基本的な枠組みと方法、事例分析の意義・方法を学ぶとともに、具体的な相談援助事例および相談援助実習での事例を検討することにより、知識と実践方法の習得を目指す。

到達目標

- ・ ソーシャルワークにおけるスーパービジョンについて理解し、説明することができる。
- ・ 事例とは何かがわかり、事例研究ができる。

授業方法

基本的に講義形式で展開するが、事例および相談援助の実際においては演習的な授業形態を採ることもある。

授業計画に関連させていく自宅学習（予習・復習）が必要となる。

毎回リアクションペーパーを提出してもらい、質問を含め、感想・意見なども適宜紹介し、共有化する。

レポートの採点基準については、あらかじめ伝達する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
ソーシャルワークにおけるスーパービジョンの意義、定義
- 第2回 スーパービジョンの目的
- 第3回 スーパービジョンの構成要素、倫理、歴史的展開
- 第4回 スーパービジョンの機能
- 第5回 スーパービジョンの方法（形態）と課題
- 第6回 スーパービジョンとコンサルテーション
レポート作成①（実習におけるスーパービジョンを構造的に理解し、振り返る）
- 第7回 事例とは何か（意味と方法）
- 第8回 事例分析の目的と意義
- 第9回 事例分析の方法
- 第10回 事例研究の進め方
- 第11回 事例研究の実際（アセスメント）
- 第12回 事例の三層構造
レポート作成②（三層構造による事例の理解）
- 第13回 相談援助の実際(1)：機関・分野別の相談援助事例の概観
- 第14回 相談援助の実際(2)：障害者の相談援助 事例検討
- 第15回 総括
スーパービジョンと事例検討における、今後の展望
期末レポート

成績評価の方法

授業への参加状況・当日の授業内容に関するリアクションペーパー（30%）
到達目標を測定するレポート（中間レポート2回20% 期末50%）で評価する。

履修にあたっての注意

- ・ 社会福祉士国家試験受験資格取得の必須科目
- ・ 下位学年の社会福祉士の指定科目（ソーシャルワーク実習を含）履修していることが望ましい。
- ・ 履修済みのソーシャルワーク論の内容を十分に復習しておくこと

教科書

社会福祉士養成講座編集委員会『新・社会福祉士養成講座 8 相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』（中央法規、2015、ISBN：978-4-8058-3255-4）

教科書・参考書に関する備考

教科書のほかにレジュメを配付する

参考書：適宜、講義で紹介する

授業のねらい

ソーシャルワーク（相談援助）の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められるソーシャルワーク（相談援助）に係る知識と技術について、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。

更に学生個々人の主体的な学びを通じ、実際に行動できるためのコンペテンシー（知識・技術・判断力）の習得を目指す。

到達目標

1. 具体的な事例の検討や援助場面を想定したロールプレイングなどの演習形態の学習により、ソーシャルワーク各論などの関連する講義の理解を深めるとともに、援助実践の場で活用できる援助技術の応用力を習得する。
2. 総合的包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に関わる具体的な相談援助事例を体系的に理解し、必要な諸スキルを体得する。

授業方法

- ・ 個別並びに集団指導（ワークショップ）を通して、多様な事例（ビネット）についての課題や問題点を各自が自分なりに考え、その後グループで意見を出し合い、理解を深め共有する。
- ・ 更に相談援助場面などのロールプレイングを通して、援助者としての資質養成やソーシャルワーク（相談援助）技能の習得を、グループ形式による学習（ケーススタディ、自由討議など）を中心に展開する。

授業計画

- 第1回 ソーシャルワーク（相談援助）事例(1)アウトリーチに関する演習：社会的排除に関する事例
- 第2回 ソーシャルワーク（相談援助）事例(2)アウトリーチに関する演習：虐待（高齢者・児童）事例
- 第3回 ソーシャルワーク（相談援助）事例(3)アウトリーチに関する演習：家庭内暴力・DV 事例
- 第4回 ソーシャルワーク（相談援助）事例(4)アウトリーチに関する演習：低所得者・ホームレス事例
- 第5回 ソーシャルワーク（相談援助）事例(5)アウトリーチに関する演習
：日常生活自立支援事業・成年後見制度事例（認知症高齢者・知的障害者・精神障害者）
- 第6回 ソーシャルワーク（相談援助）事例(1)チームアプローチに関する演習：社会的排除に関する事例
- 第7回 ソーシャルワーク（相談援助）事例(2)チームアプローチに関する演習：虐待（高齢者・児童）事例
- 第8回 ソーシャルワーク（相談援助）事例(3)チームアプローチに関する演習：家庭内暴力・DV 事例
- 第9回 ソーシャルワーク（相談援助）事例(4)チームアプローチに関する演習：低所得者・ホームレス事例
- 第10回 ソーシャルワーク（相談援助）事例(5)チームアプローチに関する演習
：日常生活自立支援事業・成年後見制度事例（認知症高齢者・知的障害者・精神障害者）
- 第11回 ネットワーキングに関する演習(1)社会的排除に関する事例
- 第12回 ネットワーキングに関する演習(2)虐待（高齢者・児童）事例
- 第13回 ネットワーキングに関する演習(3)家庭内暴力・DV 事例
- 第14回 ネットワーキングに関する演習(4)低所得者・ホームレス事例
- 第15回 ネットワーキングに関する演習(5)日常生活自立支援事業・成年後見制度事例
（認知症高齢者・知的障害者・精神障害者）
- 第16回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(1)地域住民に対するアウトリーチ
- 第17回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(2)地域社会・住民に対するニーズ把握
- 第18回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(3)地域福祉計画策定における住民参加の技法；BS 法と KJ 法
- 第19回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(4)地域福祉計画策定における住民参加の技法；BW 法と 7 × 7 法
- 第20回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(5)社会資源の活用・調整・開発
- 第21回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(6)サービスの評価
- 第22回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(7)ボランティアコーディネーション（基礎編）
- 第23回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(8)ボランティアコーディネーション（応用編）
- 第24回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(9)災害時のボランティア活動支援とボランティアコーディネーション
- 第25回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(10)地域を基盤とした福祉教育
- 第26回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(11)学校を基盤とした福祉教育（前半）
- 第27回 地域福祉の基盤整備と開発に関する演習(12)学校を基盤とした福祉教育（後半）
- 第28回 ソーシャルワーク（相談援助）実習の成果に関する演習（前半）
- 第29回 ソーシャルワーク（相談援助）実習の成果に関する演習（後半）
- 第30回 まとめ

成績評価の方法

1. 到達目標 1、2 について、グループ運営、トレーニングへの参与度・意欲 (50%)、リアクションペーパー・レポート (50%) によりで評価します。
2. 全講義の 3 分の 1 以上欠席した場合は不可とします。

履修にあたっての注意

1. 本教科は、原則として 1 年次開講の「ソーシャルワーク演習Ⅰ」、2 年次開講の「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」「ソーシャルワーク実習Ⅰ」「ソーシャルワーク演習Ⅱ」の前提科目であり、これらの科目の単位を履修していることが前提となる。但し編入生はこの限りでない。
2. 本教科の履修は、「ソーシャルワーク実習指導Ⅱ」及び「ソーシャルワーク実習Ⅱ」と併行するものとし、何れか一方の履修は認めない。

教科書・参考書に関する備考

教科書・参考書 特に指定はしない。必要に応じて授業時にリファレンスしていく予定。

授業のねらい

ソーシャルワーク（相談援助）実習の意義を理解し、実習に望む心構えや姿勢を自覚して準備に取り組む。また、社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。

到達目標

- ・利用者に対する援助過程を理解し、インテーク、アセスメント、プランニング、モニタリング、エバリュエーションができる
- ・利用者と目的に応じて面接することができる
- ・利用者の家族について理解することができる
- ・利用者のグループを支援すること（ソーシャル・グループ・ワーク）ができる
- ・地域の視点から実践できる
- ・記録を実践できる
- ・事例研究を実践できる
- ・スーパービジョンの種類・役割・機能・媒体を説明することができ、スーパービジョン関係を活用することができる
- ・基本的人権について考え、専門職倫理に関する理解し、倫理上のディレンマ解決方法を考察することができる
- ・これらを専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる

授業方法

個別指導並びに集団指導を通じて、講義で学んだ知識、技術等を具体的にかつ実際に理解し、実践的な技術等の体得するための準備学習を行う。

そのために、自主的または指示された事前学習・事後学習の確実な遂行が求められる。

授業計画

- 第1回 ソーシャルワーク（相談援助）実習の総合的理解
- 第2回 個別・グループ学習(1)
後半実習個別課題作成（後半実習個別課題の添削指導を個人・グループで行います）
- 第3回 個別・グループ学習(2)
後半実習個別課題作成（後半実習個別課題の添削指導を個人・グループで行います）
- 第4回 個別・グループ学習(3)
後半実習個別課題作成（後半実習個別課題の添削指導を個人・グループで行います）
- 第5回 実習スーパービジョン（巡回指導を含む）(1)
（教員・実習担当者と学生の三者によるスーパービジョンを行います）
- 第6回 実習スーパービジョン（巡回指導を含む）(2)
（教員・実習担当者と学生の三者によるスーパービジョンを行います）
- 第7回 実習スーパービジョン（巡回指導を含む）(3)
（教員・実習担当者と学生の三者によるスーパービジョンを行います）
- 第8回 実習スーパービジョン（巡回指導を含む）(4)
（教員・実習担当者と学生の三者によるスーパービジョンを行います）
- 第9回 実習スーパービジョン（巡回指導を含む）(5)
（教員・実習担当者と学生の三者によるスーパービジョンを行います）
- 第10回 実習スーパービジョン（巡回指導を含む）(6)
（教員・実習担当者と学生の三者によるスーパービジョンを行います）
- 第11回 グループ学習(1)対象者理解の視点
- 第12回 グループ学習(2)関係形成技術や関わり方に関する自己評価と課題の明確化
- 第13回 グループ学習(3)実習施設・機関、実習職種に関する理解度の評価と課題の明確化
- 第14回 グループ学習(4)施設・機関における基本的援助技術の理論的背景に関する理解
- 第15回 グループ学習(5)実習ケース研究の評価と課題の明確化
- 第16回 クラス内実習報告会(1)
（クラス毎に実習生による実習成果の発表会をオムニバス形式で行います）
- 第17回 クラス内実習報告会(2)
（クラス毎に実習生による実習成果の発表会をオムニバス形式で行います）
- 第18回 クラス内実習報告会(3)
（クラス毎に実習生による実習成果の発表会をオムニバス形式で行います）
- 第19回 クラス内実習報告会(4)
（クラス毎に実習生による実習成果の発表会をオムニバス形式で行います）
- 第20回 クラス内実習報告会(5)

- (クラス毎に実習生による実習成果の発表会をオムニバス形式で行います)
- 第21回 クラス内実習報告会(6)
(クラス毎に実習生による実習成果の発表会をオムニバス形式で行います)
- 第22回 個別・グループ学習 実習報告書作成(1)
(実習成果及び事後学習内容を踏まえた実習報告書の作成・添削指導を個別に行います)
- 第23回 個別・グループ学習 実習報告書作成(2)
(実習成果及び事後学習内容を踏まえた実習報告書の作成・添削指導を個別に行います)
- 第24回 グループ演習 全体報告会企画・報告書編集(1)
(報告会企画担当、報告書編集担当のグループに分かれてワークショップ形式で行います)
- 第25回 グループ演習 全体報告会企画・報告書編集(2)
(報告会企画担当、報告書編集担当のグループに分かれてワークショップ形式で行います)
- 第26回 グループ演習 全体報告会企画・報告書編集(3)
(報告会企画担当、報告書編集担当のグループに分かれてワークショップ形式で行います)
- 第27回 グループ演習 全体報告会企画・報告書編集(4)
(報告会企画担当、報告書編集担当のグループに分かれてワークショップ形式で行います)
- 第28回 ソーシャルワーク(相談援助)実習全体報告会(1)
(全学生による実習先毎のグループ発表をオムニバス形式で行い、実習担当者からの総評をいただきます)
- 第29回 ソーシャルワーク(相談援助)実習全体報告会(2)
(全学生による実習先毎のグループ発表をオムニバス形式で行い、実習担当者からの総評をいただきます)
- 第30回 ソーシャルワーク(相談援助)実習全体報告会(3)
(全学生による実習先毎のグループ発表をオムニバス形式で行い、実習担当者からの総評をいただきます)

成績評価の方法

実習事前事後学習及び授業への参加状況(40%)、実習報告プレゼンテーション(30%)、実習報告集(30%)により評価します。

履修にあたっての注意

1. 本科目は、社会福祉関係施設に赴くソーシャルワーク(相談援助)実習の事前学習・事後学習・総括等を主眼としており、必ず「ソーシャルワーク実習Ⅱ」及び「ソーシャルワーク演習Ⅲ」を併行履修すること。
2. 本科目と「ソーシャルワーク実習Ⅱ」は、一体的に実施して成績評価する。

教科書

ソーシャルワーク実習の手引き(2017-2018年度版)(藤女子大学)

参考書

社会福祉用語辞典
地域福祉辞典
社会福祉小六法

授業のねらい

ソーシャルワーク（相談援助）の知識と技術にかかわる他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助にかかわる知識・技術について、実践的に習得する。

到達目標

- ・社会福祉関係機関・施設における相談援助実習を通して、相談援助に関わる知識と技術について具体的かつ実践的に理解し実践的な技術等が体得できる。
- ・社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる基礎的能力を習得できる。
- ・関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解し、自身の考察を交えて論じることができる。

授業方法

- ※学生は次に掲げる事項について、実習指導者による指導を受けるものとする。
- ※ソーシャルワーク実習指導担当教員は、巡回指導等を通して、次に掲げる事項について学生及び実習指導者との連絡調整を密に行い、学生の実習状況についての把握とともに実習中の個別指導を行う。

授業計画**【実習目標・内容】**

- 1 利用者やその関係者・施設・事業者・機関・団体等の職員、地域住民やボランティア等との基本的なコミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成
- 2 利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成
- 3 利用者やその関係者（家族・親族・友人等）との援助関係の形成
- 4 利用者やその関係者（家族・親族・友人等）への権利擁護及び支援（含、エンパワメント）とその評価
- 5 多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際
- 6 社会福祉士としての職業倫理、施設・事業者・機関・団体等の職員の就業などに関する規定への理解と組織の一員としての役割と責任への理解
- 7 施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の実際
- 8 地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等であることへの理解と具体的な地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解

※なお、次に掲げる事項について十分留意すること。

【実習形態】

・実習生を受け入れる社会福祉関係機関や施設と実習時期を調整し、11.5日間、90時間の実習を連続する2週間の間に行う。

【実習に関わる学習指導】

- 1 実習オリエンテーション・事前学習
 - ・併行して履修する「ソーシャルワーク実習指導Ⅱ」においてオリエンテーション及び事前学習を行う。
 - ・予め実習生の個別実習課題や希望学習事項を実習指導者に連絡し、実習開始時に実習計画の提示と課題の確認を行う。
- 2 実習中の学習指導
 - ・実習施設における行動や学習は、実習指導者または実習指導者が指示する関係スタッフの了解や指導のもとに取り組む。
 - ・実習中は実習記録ノート（記載方法は別途指導）を作成し、指導を受ける際に活用する。
 - ・実習の途中で担当教員が巡回指導を行う。
 - ・実習終了時には、実習指導者が実習生と面談して講評と実習後の学習課題の助言・指導を行う。
- 3 事後学習と総括
 - ・実習終了後に「ソーシャルワーク実習指導Ⅱ」において実習成果・課題の整理を行い、実習報告、前半実習レポートの作成を行う。

成績評価の方法

ソーシャルワーク実習指導者による評価（20%）、巡回指導時の状況（実習態度・課題への取り組み）（30%）、後半実習報告会及び実習報告書（50%）により評価します。

履修にあたっての注意

1. 本科目は社会福祉関係機関や施設に赴いて取り組む相談援助実習（ソーシャルワーク実習）であり、必ず併行して「ソーシャルワーク実習指導Ⅱ」「ソーシャルワーク演習Ⅲ」を履修すること。

-
-
2. 本科目と「ソーシャルワーク実習指導Ⅱ」は、一体的に実施して成績評価する。
 3. 社会福祉士国家試験受験資格に規定された“23日間・180時間以上”に則るため、本科目ではその1/2の日数・時間数（11.5日間・90時間）を充てて行う。
 4. 社会福祉士国家試験受験資格を取得するには、あらかじめ1/2（11.5日間・90時間）に相当する「ソーシャルワーク実習Ⅰ」を履修しなければならない。
 5. 従って、事情や理由を問わず欠席・遅刻・早退等による実習日数・時間の縮減はできない。実習中も健康状態に十分留意し、利用者や関係者の迷惑にならないよう実習指導者や教員との連絡や相談に基づいて行動すること。

教科書

ソーシャルワーク実習の手引き（2017-2018年度版）

参考書

日本社会福祉教育学校連盟・全国社会福祉協議会『新社会福祉施設〔現場実習〕指導マニュアル』

授業のねらい

人間を「社会的動物」とよぶことがあるように、個人の心理や行動は、社会のあり方や他者との関係性と深く結びついています。この科目では「個人と社会」にまつわる諸問題について心理学の観点から解説していきます。

到達目標

授業目標は次の2点です。

1. 社会的存在としての自己について理解を深める。
2. 社会問題についての認識を深め、心理学的観点からの解決策を考えることができる。

授業方法

基本的に講義形式で進めますが、そのほかに簡単な心理学実験や現実の社会問題に関するグループワーク等も行う予定です。また、毎回シャトルカードを使用し、質問の受けつけや授業理解度の確認を行います。

授業計画を関連させていく自宅学習を行って下さい。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション 社会心理学とはなにか
- 第2回 社会的認知(1) ステレオタイプの形成
- 第3回 社会的認知(2) ステレオタイプへの対処
- 第4回 社会的認知(3) 対人魅力の規定要因
- 第5回 対人コミュニケーション(1) コミュニケーションの過程
- 第6回 対人コミュニケーション(2) 効果的なコミュニケーション
- 第7回 対人コミュニケーション(3) コミュニケーションの障害
- 第8回 対人行動(1) 協同と競争の心理
- 第9回 対人行動(2) 援助行動の促進と抑制
- 第10回 対人行動(3) 攻撃行動のメカニズム
- 第11回 集団と個人(1) リーダーシップ
- 第12回 集団と個人(2) 組織行動
- 第13回 社会的環境(1) 文化と自己
- 第14回 社会的環境(2) キャリアデザイン
- 第15回 社会的環境(3) 現代社会とストレス

成績評価の方法

学期末に行う筆記試験（50%）と授業への取り組み方（50%：授業内の発言やシャトルカードの内容）により、到達目標の到達度を評価します。60%の到達度が合格ラインです。

履修にあたっての注意

基本的な受講マナー（遅刻をしない、私語をしない、携帯電話を使用しないなど）を守れない学生の受講は禁じます。

教科書・参考書に関する備考

教科書は指定せず、毎回、レジユメを配布します。

参考書

土肥伊都子『自ら挑戦する社会心理学』（保育出版社、2014）

授業のねらい

学生としてのキャリア形成は、日常的な身の周り（「天然資源」）から学ぶ姿勢を身近な人間関係に貢献する知識とスキルとして身に付けて、人間理解に基づくキャリアとして実現・形成していくことが大切です。

本講は人間関係の中で起こるさまざまな事柄の理解を深め、組織活動や社会活動に参加するために履修者自身が「挑発的な課題」「フィードバック」「発達支援的な人間関係」を活用できるようにアクションラーニング（個人の成長）の促進をねらいます。

到達目標

- ・日常的な「天然資源からキャリアを形成する姿勢を涵養する。
- ・発達支援的な人間関係づくりを体験をとおして学び、日常的かつ継続的な学習スタイルを身につける。
- ・社会や組織の中で存在し、自律的に学ぶ姿勢を身につける。

授業方法

本講はキャリア形成に必要な人間関係の実際体験を楽しみながら学びキャリア形成を促していくアクティブラーニング科目です。特に、学習場面（ラボラトリー方式の体験学習）の設計者が、大学生としてのキャリア形成と「成熟した関係づくり」に必要なスキルの習得と、さまざまな人間関係の現実から自ら主体的に学ぶ姿勢を促進し、社会に貢献していくためのキャリア形成を、つぎの授業計画によって培います。

授業内容は「学習ジャーナル」として整理する（所要時間 30 分程度）こと、並びに教科書の該当部分をノート整理する（所要時間 50 分程度）と効果的です。

授業計画

- 第1回 インTRODクション「ライフ・キャリア・レインボー」ーキャリア形成とライフステージー
- 第2回 キャリアの形成とトランジション（人生の転機）ーことが起きて"自分と向きあう"ー
- 第3回 職業的自己概念とキャリアの意思決定ーキャリア選択を行うスキル（職業的成熟）ー
- 第4回 人間の基本行動と"バイアス"ーキャリア選択に影響を与える思考ー
- 第5回 直感に頼らない「学習の動機づけ」ーキャリア選択により刺激とパフォーマンスー
- 第6回 キャリア選択を行うための基本機能とフィードバックー助けになるということー
- 第7回 キャリアの形成に影響を与える心の問題ー見抜く力と「わかる」ということー
- 第8回 人がヒトに「かかわる」スタイルと影響関係ーキャリア発達への影響ー
- 第9回 支える役割関係とキャリア発達ー人がヒトに「かかわる」という影響関係ー
- 第10回 キャリア発達における信頼と人間関係ーことの本質を見抜く着眼点ー
- 第11回 目に見えない職場の構造と思考スタイルーキャリア発達における役割思考ー
- 第12回 キャリア発達の中で起こる役割行動ー時を共にする職場づくりー
- 第13回 時を共にするプロセス思考ーキャリア選択を行う中で起こることー
- 第14回 キャリア選択における意思決定の特徴ー直感・感情とは異なる「きめる（意思決定）」ー
- 第15回 人間関係の「親密さ」と判断ーキャリア選択における有用な判断ー

成績評価の方法

到達目標の測定を行う学習ジャーナル・レポート（60%）と授業参加度（40%）による総合評価を行います。また、学修ジャーナル・レポート評価基準用の「ルーブリック」を事前に提示します。

履修にあたっての注意

- ・使用教室の状況によって、履修者数を以下の条件で制限する（決定：第1講）場合があります。
- ・キャリア形成のための重要な事柄を体験的に学ぶ専門科目ですから、休まずに取組むようにしてください。

教科書

船木幸弘『Off-JT に活用する人間関係づくりトレーニング』（金子書房、2017、ISBN：9784760821761）

参考書

ディヴィット・マクレイニー『思考のトラップ 脳があなたをダマす 48 のやり方』（二見書房、2014）

授業のねらい

なぜ人は学ばなければならないのか。学び続けなければならないのか。何のために。その問いに近づくためには、現状の社会課題を的確に把握し、状況の認識力を高めることが必然である。いかなるときも、人を貶める力にはその知恵で抗い、弱者を守る盾となる学問は、時に武器であらねば民主主義社会は構築できない。自らの学びの本質を見つめ直し、さらなる学びへとそのモチベーションを昇華させることが、“いま”求められている。学びの本質を見極めていくことが、豊かな人間形成を保障し、さらに誰もが幸せに生きる社会を創るための行動原理となる。

その教育基盤となる「生涯学習」に関わる現代的課題とその“学び”について考えていきたい。

到達目標

現代の生涯学習課題を授業で取り上げながら、個々の理解を深めるとともに、その課題にどのように向き合っているのかを、自分の力で考え抜くことができる“ひと”になることを求めたい。

そのためにも、自分の考えを自分の言葉でしっかりと相手に伝える“メッセージ力”を高めるために、事前学習レポートを元に論じる力を身につけることができる。

授業方法

授業計画に示した個々のテーマに即した現代の生涯学習課題について、事例を事前に提示し予習（概ね1時間程度）を踏まえながら、その事前学習を踏まえたグループワークを中心に個々の考えを論じ交流しながら深めていく。その上で、本時の学習のまとめを個々に行い、それらの内容についても評価対象とする。

また、課題レポートや資料をもとに協議することで、同世代の者の考えを知った上で、現代の社会認識を確かなものとし、さらなる主体的な学習へと発展させるべく問題意識を高める。

さらに評価したレポートなどは、返却の際にコメントを添える。

授業計画

- 3年次
- 第1回 オリエンテーション
「学ぶことは しゃあせか」
～当たり前学ぶことが保障されているながら学ばない・学べない日本の子どもたちは不幸か？」
- 第2回 「わかる」ということ
～知るといふこととわかるということの違いとは何か～情報氾濫の時代に生きる者たちが、その中で判断不能の事態を認識できずに「わかったふり」をすることのむなしさとはなにか？
- 第3回 学ぶ場と学びすゝたち～生涯学習と現代的な社会課題
なぜ人は学び続けなければならないのか、学ぶことと生きることの課題を見出しながら、どのように課題にトライするのかを考える（4回以降、具体的な現代的課題に向き合い問題意識を高める）
- 第4回 18歳選挙権と成人を考える
～女性が参政権を得たことの歴史的な意義と現代の若者の参政意識の希薄さ
- 第5回 子どもの貧困と教育格差の広がり
～貧困による教育の機会を奪われる子どもたちの実態を知る
- 第6回 子どもの権利条約は日本で保障されているのか
～学校教育の中で取り残される子どもたち
- 第7回 ブラックバイトの現実を検証する～働くことと学業の両立を考える
実際にブラックであるにも関わらず、労働を強いられている実態から、「労働契約」とはなにか、基本的なことから学ばなければ、事態を認識できないし解決はおぼつかない
- 第8回 原発の再稼働と戻れぬ汚染地帯を考える～福島原発“廃炉”への取り組み
- 第9回 マララ・ユスフザイからのメッセージ
～女性の教育は平和の礎であり、彼女の力強い教育へのメッセージを共感的に理解し受容する
- 第10回 結婚しない若者が増えることでどのような社会問題が起こっているのか！
～生涯独身であることで世の中はどのように変わっていくのだろうか？
現代の高齢社会の問題を直視しなければ、危難を背負う世代が君たちだ
- 第11回 診られる力を育てる
～北海道発 医療と教育の新しい取り組みから、自らのいのちと健康を守ることと医療の今後の在り方について考える
- 第12回 情報化社会の孤独と弊害
～匿名社会の歪みと簡単に非難に屈してまう「空気」を醸成することの怖さを知る
- 第13回 笑顔でバイバイと手をふり橋から落とされた幼子の帰らぬいのちを忘れてはならない
～家庭が健全に維持できない事態の中で虐待や子育ての孤立が多く不幸を招く社会問題に向き合い、親になることの社会的意味についても考えていく
- 第14回 「まっすぐなまなざし」が見たい
～経営困難小学校での“普通の子”の慈悲と寛容から、どこでも起こりえる子どもの問題を直視することで、「学び」環境の在り方を考える

第15回 いまだからこそ「ユネスコの学習権」の意味を考える
～学びの“本質”とはなにか？をいまいちど確認する

成績評価の方法

次回の授業資料を事前に読みレポートを作成することで、授業に臨むことを前提に、到達目標を測定するレポートと授業後レポートのセット（70%）とし、併せてグループ協議・授業への参加状況（30%）を評価する。グループ協議は、事前に自分の考えをもって参加することが、授業への主体的な発言と傾聴を促し、評価の対象となる。評価に変更がある場合は、事前に学生に周知する。

履修にあたっての注意

3分の2以上の出席で評価対象とする。事前レポートを必ず期日までに提出すること。
現代的課題について、講座中に重大な社会的問題が起こった場合には、臨機応変にシラバスのテーマを変更する。実習などで履修出来ない場合は、事後に必ず課題レポートを提出すること。

教科書・参考書に関する備考

教材・資料は独自に作成したプリントを使用する。
授業時に配布する。

授業のねらい

この講義は、女性と労働に関するさまざまな事柄を社会科学の視点からの見方を学ぶと共に、女性労働の現状について理解し、考察することを目的とする。

到達目標

労働に関する知識を基礎として、女性労働の現状を踏まえ、自身の将来や職業について考え、デザインするための基礎が身に付く。

授業方法

講義とディスカッションの形式をとる。また、働く女性を取り巻く現状について理解するために、授業計画の前後を関連させていく自宅学習を行っていくために新聞・雑誌等の記事を利用する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 経済学からみた女性と労働(1)：概念整理
- 第3回 経済学からみた女性と労働(2)：基礎理論
- 第4回 「労働力の女性化」を学ぶ
- 第5回 グループディスカッション(1)～家事労働とケア・ワーク
- 第6回 女性の職場進出(1)：概要
- 第7回 女性の職場進出(2)：現状
- 第8回 女性と雇用(1)：社会制度
- 第9回 女性と雇用(2)：雇用機会
- 第10回 女性と雇用(3)：雇用形態
- 第11回 グループディスカッション(2)：「女性の管理職」について考える
- 第12回 ライフスタイルと労働(1)：男女の格差の実状を知る
- 第13回 ライフスタイルと労働(2)：女性が働きやすい職場とは
- 第14回 グループディスカッション(3)：「働くこと」の意味を考える
- 第15回 総括

成績評価の方法

授業への取り組み方（30%）、グループ・ディスカッションへの取り組み方（30%）、複数回の小テストまたはレポート（40%）によって到達目標を測定して評価します。

履修にあたっての注意

復習は、授業内容を振り返り、更に関心のある事柄について調べることでより知識を深めてほしい。他の学生の授業参加の障害となるような行為は厳禁。

教科書・参考書に関する備考

講義に際し、講師作成のプリントを配布する予定。参考書については、この他にも講義の折、適宜指示する。

参考書

- 竹中恵美子（編）『労働とジェンダー』（明石書店、2001）
- 海老原嗣生『女子のキャリア』（筑摩書房、2012）
- 竹信三恵子『家事労働ハラスメント：生きづらさの根にあるもの』（岩波書店、2013）

授業のねらい

女性の社会的地位や役割を歴史的に考察し、その変遷を辿りつつ、女性と社会とのかかわりや家庭における女性の役割について熟考する。日本の女性の生き方を学び、過去と現代とを比較して、どのような点が大きく変わってきたのか、また、男女の社会における役割の変化によって女性はどういう選択ができるのかなどについて考察し、現代における新たな問題点を意識する。

到達目標

女性である自分を意識し、女性特有の役割とはなにかを深く考える。
各自の女性像を築き上げ、相互に分かち合えるようになる。
今後の社会における女性の役割や働きについて考察する。

授業方法

講義終了時に、次回の内容について説明し、関連した箇所に目を通しておくよう指示する。また同時にその日の内容について確認する。

パワー・ポイントを使用しながら、西欧および日本の女性の歴史について講義してゆく。
時代ごとの特徴から始めて、現代社会における女性に関する問題を学んでゆく。

授業計画

- 第1回 イントロダクション
これまでの女性の地位・置かれた状況などについて
なぜ今女性論が必要なのか
- 第2回 西欧における女性の歴史(1)：古代社会から中世社会における女性の姿
女性が崇められた古代からマージナルな存在へとされた時代
- 第3回 西欧における女性の歴史(2)：近世から20世紀初頭における女性の戦い
フランス革命と女性たち
- 第4回 西欧における女性の歴史(3)：近世から20世紀初頭における女性の戦い
イギリスにおける運動
- 第5回 日本における女性の歴史(1)：古代社会から平安期までの女性の生活
- 第6回 日本における女性の歴史(2)：武家社会における女性たち
- 第7回 日本における女性の歴史(3)：一般民衆の女性の生活
映像を通して当時の女性たちの生活を知る
- 第8回 日本における女性の歴史(4)：明治期・大正期における女性
津田梅子・与謝野晶子・平塚らいてうなどを中心に
- 第9回 現代社会における女性の問題 (1)
女性と社会、特に「ジェンダー・職業」について考える
- 第10回 現代社会における女性の問題 (2)
男女の格差、女性のおかれている環境改善について
- 第11回 世界の女性の現状
(1) 中東地域各地の女性差別問題
(2) アジア地域の女性差別問題
- 第12回 日本社会と諸外国との比較
女性と社会 (少子化・育児・仕事について考える)
北欧諸国の取り組みについて知る
- 第13回 女性としての特徴と役割を活かす
母性 女性が得意な分野 脳の働きなど
- 第14回 講義内容についてのディスカッション
- 第15回 講義内容の総括

成績評価の方法

到達目標を測定するためのテスト 60% 授業への参加状況 40% により「評価する」。

履修にあたっての注意

各自が女性であることを意識し、積極的に「女性」のとらえ方や「女性像」についてのディスカッションに参加する。
また、テキストやその他の参考資料を読んで各自が勉強する。

教科書

ねりま 24 条の会『ジェンダーからみた日本女性の歴史』(ねりま 24 条の会、2005、ISBN : 9784750321769)

教科書・参考書に関する備考

教員が作成したプリントや映像を使用する

参考書

伊藤セツ他『女性学』(同文書院、1998年、ISBN : 4-8103-1193-7)

授業のねらい

本講義では、地域によって異なる世界の女性の実態について学び、生活・経済・社会など多様な側面から構造的に理解を深める。

到達目標

日本を含めた世界各地の女性の社会的地位や役割、生活環境、経済活動、地域の組織的・相互扶助的な取り組み等に関する歴史を学び現状を理解する。これらについて、様々な問題点や課題、これまでの変化や学ぶべきことを、自ら考え、見つけ出し、そして発言する力を身につける。

授業方法

毎回配布するレジュメや資料、パワーポイント、DVD等を用いて、世界各国の事例を基に学習しながら、グループディスカッションと小プレゼン、小レポートに取り組む。またグループディスカッションの準備として、関連文献やニュース、新聞等で情報収集することが求められる。積極的に自宅学習を行ってください。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 ジェンダーの基礎知識
- 第3回 発展途上国と先進国における女性：経済・生活・社会的地位
- 第4回 各地の事例(1)アフリカにおける女性のエンパワーメント支援
- 第5回 各地の事例(2)バングラデシュの工場労働者
- 第6回 各地の事例(3)越境する東南アジアの家事労働者
- 第7回 各地の事例(4)中国の社会変化と女性
- 第8回 中間総括ディスカッション
- 第9回 各地の事例(5)イラン・イスラーム共和国の政策体系と女性
- 第10回 各地の事例(6)イスラームの現代医療と生命倫理
- 第11回 変化の最前線(1)変わりゆく結婚制度：ヨーロッパの現状
- 第12回 変化の最前線(2)家事労働とテクノロジーを考える
- 第13回 日本の取り組み：「ジョキコン」って何？
- 第14回 総括ディスカッション
- 第15回 成果の発表、スタディガイド

成績評価の方法

小レポート（毎回の授業で書くリアクションペーパー）：45%
 グループディスカッション（受講生同士のピアレビューで評価）：30%
 到達目標を測定する小プレゼン（グループ毎の発表を評価）：25%

履修にあたっての注意

世界各地の問題に興味があり、グループディスカッションに積極的に取り組む学生の参加を期待する。

教科書・参考書に関する備考

教科書は特に指定しない。参考書は授業中に適宜紹介していく。

授業のねらい

近年、日本国内でも「社会的起業／企業」が社会的認知度を高めるなか、特に NPO 法人（特定非営利活動法人）が急速に増加し、福祉、教育、まちづくり、環境などの多様な分野で活躍をみせている。

本科目では、市民社会の形成に重要な役割を担う NPO 法人について、制度化の経緯と社会的意義、制度・仕組み、設立要件、運営状況などに関する学習を通じて、市民活動の基盤形成や事業展開の有効性について認識を深める。

到達目標

- ・社会的起業／企業、NPO（民間非営利組織）の関係概念を説明できる。
- ・日本の民間非営利法人制度（公益法人制度や NPO 法人制度など）の制度、設立要件、運営方法について説明できる。
- ・NPO 法人の活動分野、事業展開の特徴を説明できる。
- ・社会的起業／企業や NPO の市民社会における役割や活動分野の多様性について論じることができる。

授業方法

講義形式により、大きくは以下の 3 部に分けて授業を進める。

①関係概念の整理

②公益法人制度を中心とする日本の非営利法人制度の歴史

③NPO 法人制度の成立過程、同制度の概要、運営の現状・課題など

このほか、具体的な事例にそって、様々な分野における NPO 法人の活動に関する知見を広め、今後の課題や将来展望を整理する。必要に応じ、資料映像等を視聴する。

受講に当たっては、事前学習として下記の参考書をはじめとする本科目の関係文献の通読をお願いするとともに、事後学習として毎回の授業での配布レジュメ・資料の復習をお願いします。

授業計画

- 第 1 回 オリエンテーション
- 第 2 回 概念整理① 社会的起業／企業および NPO の定義について
- 第 3 回 概念整理② 社会的起業／企業の現状
- 第 4 回 公益法人制度について① 旧制度の概要と問題点
- 第 5 回 公益法人制度について② 公益法人制度改革
- 第 6 回 公益法人制度について③ 新公益法人制度
- 第 7 回 公益法人制度について④ サードセクターと第 3 セクター
- 第 8 回 公益法人制度について⑤ 公益法人制度改革の顛末
- 第 9 回 NPO 法人制度について① NPO 法の制定のプロセス
- 第 10 回 NPO 法人制度について② 制度の概要・特徴
- 第 11 回 NPO 法人制度について③ 認定 NPO 法人制度と 2011 年改正
- 第 12 回 NPO 法人制度について④ NPO 法人の現状と運用上の課題
- 第 13 回 NPO 法人制度について⑤ 監督の課題
- 第 14 回 NPO 法人制度について⑥ NPO 法人の今後の展望
- 第 15 回 まとめ－社会的企業／企業と市民社会

成績評価の方法

授業への参加状況（30%）を踏まえた上で、授業時間外学修への取り組み状況（20%）、到達目標を測定する期末課題レポート（50%）によって評価します。

履修にあたっての注意

特になし。当然ながら、授業中の私語は厳禁。

教科書・参考書に関する備考

教科書は特に指定しません。毎回、レジュメを配付します。

参考書

雨森孝悦『テキストブック NPO－非営利組織の制度・活動・マネジメント [第 2 版]』（東洋経済新報社、2012、ISBN：978-4-492-10026-4）

田尾雅夫＋吉田忠彦『非営利組織論』（有斐閣、2009、ISBN：978-4-641-12389-2）
小島廣光『政策形成とNPO法－問題、政策、そして政治』（有斐閣、2003、ISBN：4-641-16186-0）
辻山幸宣（監修） 正木浩司（編著）『改革渦中の自治体公益法人』（公人社、2012、ISBN：978-4-86162-084-3）
北沢栄『公益法人－隠された官の領域』（岩波書店、2001、ISBN：4-00-430726-0）
山内直人『NPO入門＜第2版＞』（日本経済新聞社、2004、ISBN：4-532-11016-5）

参考ホームページ

内閣府 NPO ホームページ <https://www.npo-homepage.go.jp/>
公益法人 information https://www.koeki-info.go.jp/pictis_portal/koeki/pictis_portal/common/portal.html

授業のねらい

グローバル化の時代において、日本と海外の地域経済にはどのような特徴があるのか？なぜ経済現象は場所によって差が生じるのか？なぜ地域経済を活性化させる必要があるのか？このような問いかけの一つ一つに答えを出していくことが、地域経済論を学習する目的である。

到達目標

地域経済に対する捉え方・考え方を理解する。
なぜ地域によって経済現象は異なるのかという問いに対して解説できる。
講義で取り上げた題材をもとにして、身近な地域（北海道）の経済問題に対する自分なりの考え方を主張できる。
日本や北海道だけでなく世界各国の地域経済に関する知識も習得する。

授業方法

講義内容は主にパワーポイントを用いながら解説し、日本と韓国の事例を中心に取り上げながら、グループ・ディスカッション及びプレゼンテーションを実施する。また授業内容に関連するDVD視聴覚教材も適宜活用する。

事前・事後学習としては、英語の資料を使うので、次回の講義資料を毎回事前に読んで予習することが必要である。復習課題も適宜出題する。さらに経済ニュースを日頃から意識的に読むことを勧める。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、地域経済論の概要
- 第2回 地域経済の発展モデル及びグループ・ディスカッション（課題1）
- 第3回 地域文化ビジネスが国家経済に与える影響及びグループ・ディスカッション（課題2）
- 第4回 日本と海外の地域間経済格差その1及びグループ・ディスカッション（映像感想文1）
- 第5回 日本と海外の地域間経済格差その2及びグループ・ディスカッション（課題3）
- 第6回 国家間、地域間の人的・経済的交流その1及びグループ・ディスカッション（映像感想文2）
- 第7回 国家間、地域間の人的・経済的交流その2及びグループ・ディスカッション（課題4）
- 第8回 日本と海外の地方経済の現状と課題その1及びグループ・ディスカッション（映像感想文3）
- 第9回 日本と海外の地方経済の現状と課題その2及びグループ・ディスカッション（課題5）
- 第10回 「地域経済」に関する自由研究調査プレゼンテーションその1（テーマ：北海道の産業とその特徴・北海道経済の発展）及びディベート
- 第11回 「地域経済」に関する自由研究調査プレゼンテーションその2（テーマ：日本における地域格差の分析・地方創生に関する提案）及びディベート
- 第12回 「地域経済」に関する自由研究調査プレゼンテーションその3（テーマ：日本各地の地元企業・世界各国に進出する日本の地方企業）及びディベート
- 第13回 「地域経済」に関する自由研究調査プレゼンテーションその4（テーマ：世界各国・地域の労働市場・教育市場）及びディベート
- 第14回 「地域経済」に関する自由研究調査プレゼンテーションその5（テーマ：世界各国・地域の経済政策・経済発展モデル）及びディベート
- 第15回 総括、期末試験

成績評価の方法

- 映像感想文：15%（3回×5%）
 期末試験：25%
 課題：20%（5回×4%）
 自由研究調査のプレゼンテーション：20%
 研究調査発表者のプレゼンテーション内容に対するレポート：20%

履修にあたっての注意

課題や研究調査は、書籍、新聞、雑誌、インターネット等から関連記事や文章を読んで作成し、発表してもらう。

授業のねらい

日本でも長年にわたって地方分権の推進と地方自治・市民自治の拡充が断続的に進められるなか、地域の行政機能にして自治体である地方公共団体のあり方が問われている。

本科目では、地方公共団体／地方自治体である都道府県および市町村の歴史、機構、日本の地方制度・自治制度の特徴、関係制度の改革・開発について学ぶことを通して、民主主義社会と地方自治の関係やそのあるべき方向性について考えることができる知識の獲得を目指す。

到達目標

- ・日本における「地方公共団体」の定義について説明できる。
- ・都道府県および市町村の成立史について説明できる。
- ・現代日本の地方公共団体の基本的な機構、地方自治制度の特徴について説明できる。
- ・戦前・戦後の北海道の独自性について説明できる。
- ・近年の地方制度改革・分権改革の流れ、地方自治体における自治の仕組みの開発の流れについて説明できる。

授業方法

講義形式により、大きく分けて以下の3部構成で授業を進める。

- ①現行体制の成立に至るまでの都道府県・市町村の歴史
- ②現代日本の地方自治制度の特徴
- ③近年（1990年代以降）の国による制度改革と自治体による制度開発の流れ、新たな自治制度の特徴についてこのほか、必要に応じ、資料映像等の視聴を行う。

受講に当たっては、授業時間外学修として下記の参考書をはじめとする本科目の関係文献の通読をお願いするとともに、事前・事後学習として毎回の授業での配布レジюме・資料の復習をお願いします。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 日本国憲法と地方公共団体の関係
- 第3回 市町村の制度史
- 第4回 都道府県の制度史
- 第5回 北海道の地方制度史
- 第6回 「地方自治法」の成立
- 第7回 戦後日本の地方自治制度の形成
- 第8回 現行「地方自治法」の概要① 基本原則
- 第9回 現行「地方自治法」の概要② 機構
- 第10回 地方財政
- 第11回 戦後北海道の特徴① 北海道開発行政
- 第12回 戦後北海道の特徴② 北方領土問題
- 第13回 自治体の成長と自治の実質化
- 第14回 現代日本の自治体の課題
- 第15回 まとめ－これからの地方自治

成績評価の方法

授業への参加状況（30%）を踏まえた上で、時間外学修への取り組み状況（20%）、到達目標を測定するための課題レポート（50%）によって評価します。

履修にあたっての注意

特になし。当然ながら、授業中の私語は厳禁。

教科書・参考書に関する備考

教科書は特に指定しません。毎回、レジюмеを配布します。

参考書

- 西尾勝『行政学 〔新版〕』（有斐閣、2001、ISBN：4-641-04977-7）
 松沢裕作『町村合併から生まれた日本近代－明治の経験』（講談社、2013、ISBN：978-4-06-258566-8）
 松下圭一『市民自治の憲法理論』（岩波書店、1975、ISBN：4-00-410042-9）
 松下圭一『日本の自治・分権』（岩波書店、1996、ISBN：4-00-430425-3）
 神原勝『市民自治の制度開発』（北海道町村会、1997、ISBN：なし）
 林宜嗣『地方財政』（有斐閣、1999、ISBN：4-641-08630-3）

参考ホームページ

総務省＞地方自治制度 http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/bunken/

授業のねらい

この授業では、現代社会の経済的側面について理解を深めるとともに、経済学の基礎的知識を修得し、各自が自分なりの視点から社会や経済を見る目を養うことを目指す。

到達目標

経済学的な考え方を身につけることで、現代社会に対する多角的な視点を持つことができる。また、社会における経済的な事柄について社会科学的な視点を取り入れ、自分なりの考察をすることができる。

授業方法

トピックごとに講義とグループ・ワークを行う。随時、受講生の質疑と議論のセッションを設けて、議論と講義内容の理解を深める。授業計画の前後を関連させていく自宅学習を行って下さい。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 資本主義経済の歴史的展開
- 第3回 戦後世界経済の歩み
- 第4回 戦後日本経済の歩み
- 第5回 グループ・ワーク：貨幣について考える
- 第6回 経済社会の情報化・サービス化・グローバル化
- 第7回 日本の産業構造と日本型経営システム
- 第8回 日本の雇用構造
- 第9回 日本の財政と社会保障
- 第10回 家計とその仕組み
- 第11回 生活時間：労働時間と余暇時間
- 第12回 消費者問題と消費者権利
- 第13回 生活保障と持続可能な社会
- 第14回 グループ・ワーク：倫理的消費について考える
- 第15回 総括

成績評価の方法

授業への取り組み方（20%）、グループ・ワークへの取り組み方（20%）、到達目標を測定するための複数回の小テスト（30%）、レポート（30%）

履修にあたっての注意

日頃から新聞やニュースなどに触れ、現実経済に起こっているさまざまな事象に関心を持つこと。復習は、授業内容を振り返り、さらに関心のある事柄について調べることでより知識を深めてほしい。他の学生の授業参加の障害となるような行為は厳禁。

教科書・参考書に関する備考

講義に際し、講師作成のプリントを配布する。参考書については、授業の進捗に合わせ、適宜紹介する。

参考書

- SGCIME 編 青才高志他『現代経済の解説』（御茶の水書房、2013）
- 角田 修一『概説生活経済論』（文理閣、2010）
- 経済学史学会 ほか編『古典から読み解く経済思想史』（ミネルヴァ書房、2012）

授業のねらい

本講は、身近な地域で実際に人々が生活活動する現場に赴いて社会的課題の多面的な調査分析や人々との対話をとおり、教室では得られない知識と貴重な経験を積むこと、地域の課題への対応などの社会貢献「ノウハウ」を体得し、プレゼンテーション力の向上と以後の学修・研究のための基礎づくりを目的とする。

到達目標

- ・フィールドワークの手法とプレゼンテーション力を体得する。
- ・地域社会の課題解決への貢献と市民が担う活動を理解する。
- ・社会貢献に必要な課題発見力・分析力・計画実行能力・コミュニケーション能力を体得する。

授業方法

フィールドワークは、石狩市内の市民（NPO 法人）が行う活動に着目して実施します。

行政、市民等とのコミュニケーションや協働を通じて、文献や講義だけでは学べない地域社会の課題についてのフィールドワーク（参与観察、インタビュー等）の企画立案から、取材・調査結果に基づく問題解決・提案までの一連の作業実践を、履修者の主体的な参加を促しながらつぎの授業計画によって進めていきます。

この授業についての自宅学習及び事後学習は、後半に行うプレゼンテーションに向けて準備を適宜進めていくことが効果的である。

*なお、各回の授業は（屋外学修形式を含む）自主的作業など授業時間帯以外にも調査活動などが生じる場合がある。

授業計画

- 第1回 イントロダクション（授業の進め方、フィールドワークの意義）
 第2回 フィールド選定のための情報資料収集（ゲスト：石狩市）
 第3回 フィールドと課題の選定、グループ分け
 第4回 フィールドワークの準備と技法（基本姿勢、取材方法、ノーツ）
 第5回 フィールドワーク実践（前半）*（グループの計画に沿った現地訪問を行う）
 第6回 フィールドワーク実践（前半）*（グループの計画に沿った第5回とは別の現地訪問を行う）
 第7回 フィールドワーク実践（前半）*（グループの計画に沿った第5・6回とは別の現地訪問を行う）
 第8回 フィールドワーク実践（前半）*（グループの計画に沿った第5・6・7回とは別の現地訪問を行う）
 第9回 中間まとめ：再構成
 第10回 フィールドワーク（後半）*（グループの計画に沿った現地訪問を必要に応じて行う）
 第11回 フィールドワーク（後半）*（グループの計画に沿った第10回とは別の現地訪問を行う）
 第12回 全体まとめ：報告書作成とプレゼンテーションの準備
 第13回 全体まとめ：報告書作成とプレゼンテーションの作成
 第14回 プレゼンテーション（取材訪問を中心に）：招致：石狩市役所職員数名
 *受講者数によっては、石狩市との協議により計画の一部を変更する場合がある。
 第15回 プレゼンテーション（報告書を中心に）

成績評価の方法

達成目標を計測する計画書・報告書（35%）、プレゼンテーション（35%）、授業態度・参加度（30%）により評価する。

履修にあたっての注意

- ・本講は、石狩市内をフィールドに毎年実施していて関係者から好評価を得ている専門科目です。この授業の成果は、石狩市から期待されているので、その期待に応えるべく主体的な学修参加姿勢で履修することが望ましい。
- ・履修対象は「フィールドワーク入門（2年前期）」又は「フィールドスタディ（2年後期）」の単位修得者・履修者に限定する。
- ・現地フィールドワークの日程は、授業時間と異なる時間帯に設定される場合がある。
- ・「フィールドワーク B（来年度）」の履修条件は、本講の履修者が望まれる。

教科書・参考書に関する備考

必要な資料・参考書などについては、授業において適宜紹介する。

参考書

- 佐藤郁哉『フィールドワーク 書を持って街に出よう』（新曜社、1992）
 佐藤郁哉『フィールドワークの技法 問いを育てる、仮説をきたえる』（新曜社、2002）

541201

プロジェクトマネジメント

担当教員：内田 博・和田雅子

2単位 後期

授業のねらい

プロジェクトマネジメントとは、期限内に目標を実現するために、資金や人員やその他の資源を動員し、目標に向かう工程を管理・調整することです。経営学や政策科学の分野で多用される技法ですが、生活科学にも無縁ではありません。この授業では、就活などの生活目的や QOL の向上に資する目的を実現するために必要なプロジェクトマネジメントの技法について学びます。

到達目標

諸条件を考慮して生活目標を定めることができる。
生活目標を実現するために資源と工程を管理できる。
工程管理の力を社会でも活かすことができる。
その知見を他者に伝えることができる。

授業方法

事前事後学習を前提として、座学とワークの両方を含む形で授業を進行させます。両方のバランスは授業開始後調整します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 プロジェクトマネジメントとは
- 第3回 プロジェクトマネジメントに必要なこと 1
- 第4回 プロジェクトマネジメントに必要なこと 2
- 第5回 プロジェクトの立ち上げ
- 第6回 プロジェクトの要件定義 1
- 第7回 プロジェクトの要件定義 2
- 第8回 工程表
- 第9回 インターミッション
- 第10回 プロジェクトを実行しよう 1
- 第11回 プロジェクトを実行しよう 2
- 第12回 プロジェクトを実行しよう 3
- 第13回 プロジェクトを実行しよう 4
- 第14回 成果発表
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加 20%、ならびに到達目標を測定するための発表 30%、レポート 50%

履修にあたっての注意

自分の生活の工程管理ができる学生の受講が望ましい。

教科書・参考書に関する備考

資料を適宜配布し、必要な文献等は授業中に指示する。

授業のねらい

本演習では、これまで教職課程科目などで学習してきた「教育」に関する知識や関心を深めていくことを目指している。ただし、「教育」＝「学校」としては捉えず、家庭や地域社会で行われるインフォーマルな教育も考察の範疇に含める。その際には、文献購読のみならず、可能な限り、実際に学校などに赴き、そこで教育に関する「感性」を養っていきたい。

到達目標

- ・様々な資料を分析し、それらをまとめ、発表する技能を修得することができる。
- ・グループワークやフィールドワークに親しむことができる。
- ・学外の方々と、意見交換をし、何かを成し遂げることができる。
- ・卒業論文作成のための基礎技能を修得する。

授業方法

- ・本演習では、どのように研究を進めていくかの基本的なスキルを習得する。そのため、ゼミ全体で一つのテーマについて扱う。
- ・教室内での文献購読だけではなく、授業時間外で大学内のフィールド（中学校や社会教育施設など）に赴き、現地調査の方法を学ぶ。
- ・テーマ毎に履修者は下調べをしておくこと。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション+興味のある教育分野の発表
- 第2回 資料検索の方法1：図書館
- 第3回 資料検索の方法2：インターネット
- 第4回 レジユメの作り方
- 第5回 データの分析方法1：量的データ
- 第6回 データの分析方法2：質的データ
- 第7回 文献講読1：教育学基礎文献
- 第8回 文献講読2：教育時事文献
- 第9回 文献講読3：ゼミ生の関心のあるテーマの文献
- 第10回 グループ研究のテーマの討論と決定
- 第11回 グループ研究1：問題設定を確定する
- 第12回 グループ研究2：研究方法を決める（研究倫理について）
- 第13回 プレゼンテーションの方法：レジユメやポスターを使った方法
- 第14回 プレゼンテーションの方法：プレゼンソフトの使い方
- 第15回 中間報告会
- 第16回 夏季休業中の成果発表会（グループ研究）
- 第17回 教育時事1：北海道の教育ニュース
- 第18回 教育時事2：日本の教育ニュース
- 第19回 教育時事3：世界の教育ニュース
- 第20回 個人研究テーマの討論と決定
- 第21回 個人研究と経過報告1：途中経過について
- 第22回 個人研究と経過報告2：研究方法の吟味
- 第23回 個人研究と経過報告3：研究目的の明確性の吟味
- 第24回 論文の作成方法1：図表の書き方
- 第25回 論文の作成方法2：註の書き方
- 第26回 文章の検討会1：「てにをは」について
- 第27回 文章の検討会2：論理的な文章について
- 第28回 個人研究の成果発表
- 第29回 報告書の作成
- 第30回 4年次における卒業研究計画の発表

成績評価の方法

1. グループ研究への参加度（25%）
2. 個人研究への取り組み（25%）
3. 発表（25%）
4. 報告書（25%）

履修にあたっての注意

1. 日常生活で普通に過ごしていたら見過ごしてしまう「当たり前」のことに疑問を持つように心がけて下さい。
2. 文章・発表などで自分の考えを伝える努力をして下さい。
3. 日々、教育に関心を持って下さい。

教科書・参考書に関する備考

参考書については、適宜、紹介します。

授業のねらい

生活文化や生活経済に関する各自の関心や知見を発表と討論を通じて深め、卒論に向けた準備を行う。

到達目標

卒論を書く準備ができる。

授業方法

皆さんが率先して発表し議論するかたちで進めます。教員はコーディネーターの役割を果たします。

授業計画

- 第1回 打ち合わせ
- 第2回 何をテーマとしたいか。発表と討論1回目
- 第3回 何をテーマとしたいか。発表と討論2回目
- 第4回 何をテーマとしたいか。発表と討論3回目
- 第5回 テーマに即した発表の準備：書式等
- 第6回 個別発表と討論1回目
- 第7回 個別発表と討論2回目
- 第8回 個別発表と討論3回目
- 第9回 卒論に向けた工程の確認、場合によってはテーマ変更に関する打ち合わせ
- 第10回 個別発表と討論4回目
- 第11回 個別発表と討論5回目
- 第12回 個別発表と討論6回目
- 第13回 個別発表と討論7回目
- 第14回 個別発表と討論8回目
- 第15回 個別発表と討論9回目
- 第16回 後期の打ち合わせ
発表順の調整、テーマ変更の打ち合わせ
- 第17回 レポート発表とディスカッション1
卒論のテーマ決定に向けて、その内容に即したレポート発表をおこなう。
- 第18回 レポート発表とディスカッション2
卒論のテーマ決定に向けて、その内容に即したレポート発表をおこなう。
- 第19回 レポート発表とディスカッション3
卒論のテーマ決定に向けて、その内容に即したレポート発表をおこなう。
- 第20回 レポート発表とディスカッション4
卒論のテーマ決定に向けて、その内容に即したレポート発表をおこなう。
- 第21回 レポート発表とディスカッション5
卒論のテーマ決定に向けて、その内容に即したレポート発表をおこなう。
- 第22回 レポート発表とディスカッション6
卒論のテーマ決定に向けて、その内容に即したレポート発表をおこなう。
- 第23回 発表順の調整等の打ち合わせ、工程の再確認
- 第24回 レポート発表とディスカッション7
- 第25回 レポート発表とディスカッション8
- 第26回 レポート発表とディスカッション9
- 第27回 レポート発表とディスカッション10
- 第28回 レポート発表とディスカッション11
- 第29回 レポート発表とディスカッション12
- 第30回 4年次に向けての具体的指導と個別相談

成績評価の方法

発表 80%、討論 20%

履修にあたっての注意

欠席するとその回の得点はゼロになります。

授業のねらい

卒業研究の準備として、食物領域に関連する文献の講読、討論を行う。文献の検索、調査および実験の方法などを理解し、研究を行うための基礎的知識を習得する。これらの過程を通して、各自の研究テーマを設定できるようにする。

到達目標

- 1 食物学に関する文献について解説し、自分の考えを述べることができる。
- 2 実験研究の手法を理解し、実行することができる。
- 3 卒業研究のテーマを設定することができる。

授業方法

- ・食物領域に関連する専門書の輪読と、実験研究を行います。
- ・基本的に受講者の発表、質疑、討論をもとに進めていき、この過程を通して卒業論文のテーマを見つけていきます。
- ・毎回の演習では、受講者にレジュメ作成やデータ整理に関する事前・事後課題を出します（所要時間 60 分程度）
- ・課題については、演習内に口頭で解説します。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション
 第2回 食物学研究のトピックス
 第3回 プレゼンテーションの方法について
 第4回 研究方法別文献紹介(1) 栄養素の働き
 第5回 研究方法別文献紹介(2) 時間栄養学
 第6回 研究方法別文献紹介(3) 腸内環境
 第7回 個人発表と討論(1) 栄養素の消化と吸収
 第8回 個人発表と討論(2) フィトケミカルの働き
 第9回 個人発表と討論(3) 食事と体内時計
 第10回 個人発表と討論(4) 朝食と夜食
 第11回 個人発表と討論(5) プロバイオティクス
 第12回 個人発表と討論(6) プレバイオティクス
 第13回 レポートの作成方法について
 第14回 課題レポートの作成(1) 目的と方法
 第15回 課題レポートの作成(2) 結果と考察
 第16回 後期オリエンテーション
 「研究倫理」について－「藤女子大学研究倫理基準」の内容を理解する
 第17回 実験方法の理解(1) 実験計画の立て方
 第18回 実験方法の理解(2) 実験器具の使い方
 第19回 実験方法の理解(3) 実験機器の使い方
 第20回 実験方法の理解(4) 糖質の測定
 第21回 実験方法の理解(5) 脂質の測定
 第22回 統計処理の理解(1) 実験データの整理
 第23回 統計処理の理解(2) パラメトリック検定とノンパラメトリック検定
 第24回 統計処理の理解(3) 多重比較検定
 第25回 統計処理の理解(4) 図と表の作成
 第26回 研究計画書の作成(1) 文献・資料の検索方法
 第27回 研究計画書の作成(2) 引用の方法
 第28回 研究計画書の作成(3) 研究テーマの設定
 第29回 研究計画書の作成(4) プレゼンテーション資料の作成
 第30回 研究計画の発表

成績評価の方法

- 到達目標 1 を測定する発表内容・レポート (40%)
 到達目標 2 を測定する実験への取り組み (40%)
 到達目標 3 を測定する研究計画書 (20%)

履修にあたっての注意

発表準備、討論およびレポート作成の過程で、疑問点や新たな課題を見出すことができるよう心がけてください。

教科書・参考書に関する備考

教科書：指定しません。
 参考書：演習の中で随時紹介します。

授業のねらい

4年次の卒業論文作成に必要な基礎的知識・研究方法（文献調査、地域アセスメント、インタビュー調査、参与観察等）の理解を進めることを目指します。

到達目標

1. 事象を多角的に検討できる
2. 他者との意見交換を踏まえ、より深く洞察できる
3. 分析を通して論理的思考力を体得できる
4. 研究方法（特に質的調査法）を習得できる

授業方法

- ・テーマ範囲は「社会福祉実践の情報化に関する研究」もしくは「地域福祉の理論と方法に関する研究」と広くしますが、社会福祉に関する各学生の関心事項を中心にテーマを絞っていく予定です。
- ・授業形態は「グループ学習」を基礎とし、調査の実施・分析・報告を行う予定です。

授業計画

- 第1回 卒業研究に向けての必要な知識の理解(1)研究の意義と研究倫理
- 第2回 卒業研究に向けての必要な知識の理解(2)調査種類及び方法
- 第3回 質的調査についての必要な知識の理解(1)質的調査の意義と方法
- 第4回 質的調査についての必要な知識の理解(2)GTA法の意義と方法
- 第5回 インタビューテーマ及び対象者の選定
- 第6回 インタビューガイドの作成(1)原案作成
- 第7回 インタビューガイドの作成(2)完成
- 第8回 インタビュー調査計画の立案
- 第9回 インタビュー調査計画の完成
- 第10回 インタビュー調査実施(1)1か所目調査実施
- 第11回 インタビュー調査実施(2)2か所目調査実施
- 第12回 インタビュー調査実施(3)3か所目調査実施
- 第13回 トランスクリプション(1)下書き
- 第14回 トランスクリプション(2)完成
- 第15回 調査結果の分析(1)ディメンションの検討
- 第16回 調査結果の分析(2)ディメンション及びプロパティの検討
- 第17回 調査結果の分析(3)プロパティの検討
- 第18回 調査結果の分析(4)プロパティ及びラベルの検討
- 第19回 調査結果の分析(5)ラベルの検討
- 第20回 調査結果の分析(6)ラベル及びカテゴリーの検討
- 第21回 調査結果の分析(7)カテゴリーの検討
- 第22回 調査結果の分析(8)カテゴリー及びカテゴリー間の関係に関する検討
- 第23回 調査結果の分析(9)概念関係の検討
- 第24回 調査結果の分析(10)概念関係の検討とまとめ
- 第25回 調査報告書の執筆分担案作成
- 第26回 調査報告書の作成(1)下書き
- 第27回 調査報告書の作成(2)校正
- 第28回 調査報告書の作成(2)完成
- 第29回 調査結果報告（プレゼンテーション）
- 第30回 卒業研究計画書の(1)作成（研究目的、研究方法、作成スケジュール）、社会福祉関連施設見学勉強会

成績評価の方法

到達目標（1、2、3、4）について、授業への参加状況・グループ参加度（50%）、情報収集能力（10%）、調査報告書（30%）、プレゼンテーション（10%）により評価します。

履修にあたっての注意

1. ゼミ運営（ゼミの進行、発表者決定、レジュメ作成）は学生主体としますので、積極的な受講（参画）を期待しています。
2. 卒業研究計画書に関しては、春季（2月・3月）も集団指導を行います。
3. 学外における見学勉強会を開催することを予定しています。積極的な学習姿勢を求めます。

参考書

- 根本博司・高倉節子・高橋幸三郎『初めて学ぶ人のための社会福祉調査法』（中央法規、2003）
久田則夫『社会福祉の研究入門』（中央法規、2003）
Uwe Flick（小田博志・山本則子・春日常他訳）『Qualitative Forschung(質的調査入門)』（春秋社、2001(2003)）
酒井聡樹『これから論文を書く若者のために』（共立出版、2003）
波平恵美子・道信良子『質的研究 Step by Step』（医学書院、2006）
田垣正晋『これからはじめる医療・福祉の質的研究入門』（中央法規、2008）
木下康二『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』（弘文堂、2007）

授業のねらい

このゼミでは、各自が関心のある領域を見つけ、卒論に結びつくテーマを絞ってゆくことがねらいである。主に、人間学・哲学・宗教・女性に関する分野の中から選択する。また、文献の調べ方、論文の書き方や形式などについてもよく理解できるようにする。そして、テキストを批判的に読むことを学び、自分の意見と照らし合わせながら、読み進むことに心がける。

このようなステップを経て、卒業論文の作成に向けて、各自のテーマを選定してゆく。

到達目標

- ・要約の仕方の技術を身につける
- ・的確な発表ができる能力を向上させる
- ・他者の意見聞き、コメントできる力をつける

授業方法

最初の数回はディスカッションのトピックスとなる具体例を教員が提示し、全員で話し合う。その後、2人ずつの発表者により授業を進める。

事前に、次回の予定を知らせ、準備するように指示する。

授業計画

- 第1回 ゼミについての全体ガイダンス
- 第2回 図書館にてオリエンテーション・文献の調べ方を学ぶ
- 第3回 いろいろな地域で起きている問題やそれにかかわる女性問題を学ぶ
研究倫理について知ろう（藤女子大学研究倫理規程を参考に）
- 第4回 教員が具体例をプリントして配布し、それについて要約し、発表する
- 第5回 各回2名ずつが調べた内容を発表し、それに基づいてディスカッションする
- 第6回 各回2名ずつが調べた内容を発表し、それに基づいてディスカッションする
- 第7回 各回2名ずつが調べた内容を発表し、それに基づいてディスカッションする
- 第8回 各回2名ずつが調べた内容を発表し、それに基づいてディスカッションする
- 第9回 レポートが一巡したところで教員がコメントする
- 第10回 それぞれのテーマに沿って、2回目の発表をする
- 第11回 それぞれのテーマに沿って、2回目の発表をする
- 第12回 それぞれのテーマに沿って、2回目の発表をする
- 第13回 それぞれのテーマに沿って、2回目の発表をする
- 第14回 教員からのコメントをする
- 第15回 夏休み中の課題について説明する そろそろ卒論を意識して、領域を絞る
- 第16回 後期のガイダンス
- 第17回 論文とは何かについて、また、論文の書き方について説明する
- 第18回 要約だけではなく、序論・本論・結論の構成を意識しながら、レポートを作成し、発表する
- 第19回 各自が卒業論文を意識して、より具体的な発表を行う
- 第20回 卒論のテーマを絞るようにこころがけ、その内容に即した資料を集める（個人指導）
- 第21回 卒論に向けて、目標を定める（個人指導）
- 第22回 卒論に向けて、目標を定める（個人指導）
- 第23回 教員からのコメント
- 第24回 3回目の発表とディスカッション
- 第25回 3回目の発表とディスカッション
- 第26回 3回目の発表とディスカッション
- 第27回 3回目の発表とディスカッション
- 第28回 卒論の内容についての個人指導と打ち合わせ
- 第29回 卒論の内容についての個人指導と打ち合わせ
- 第30回 4年次の卒論に向けての具体的な指導と個人面談

成績評価の方法

発表の仕方・レポートの内容 60% 授業への参加状況 40%により評価する。

履修にあたっての注意

学生は、参考文献を自主的に調べ、資料を多く収集すること。

テーマは多岐に亘ることが予想されるが、異なる分野でも互いの意見をよく聞き、各自の視野を広げるよう心がける。

教員は、少人数制の指導を重視する。

教科書・参考書に関する備考

教員が作成したプリント等、必要に応じて配布する。

授業のねらい

卒業研究の基礎をつくることを目的に、文献を読みディスカッションすることを通して文献検索や研究の視点、研究方法を学ぶ。

到達目標

- ・ 文献を通じて研究の視点をみにつけることができる
- ・ 自らの意見を言語化して発表することができる
- ・ 卒業研究のテーマをみつける

授業方法

ゼミ形式とする。選書した文献を輪読し、報告者はレジメを作成し報告し全員でディスカッションを行う。受講生の関心に応じて学外でのフィールドワークを行う。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 選書と分担
- 第3回 ①レジメ報告とディスカッション
- 第4回 ②レジメ報告とディスカッション
- 第5回 ③レジメ報告とディスカッション
- 第6回 ④レジメ報告とディスカッション
- 第7回 中間まとめとディスカッション
- 第8回 ⑤レジメ報告とディスカッション
- 第9回 ⑥レジメ報告とディスカッション
- 第10回 ⑦レジメ報告とディスカッション
- 第11回 ⑧レジメ報告とディスカッション
- 第12回 文面のまとめと研究方法
- 第13回 フィールド調査企画
- 第14回 フィールド調査活動（例：石狩市児童館など）
- 第15回 前期の総括
- 第16回 後期オリエンテーション
- 第17回 図書館文献検索セミナー
- 第18回 図書館文献検索（グループ学習室）
- 第19回 図書館文献検索（グループ学習室）
- 第20回 図書館文献検索（グループ学習室）
- 第21回 ①卒業研究報告とディスカッション
- 第22回 ②卒業研究報告とディスカッション
- 第23回 ③卒業研究報告とディスカッション
- 第24回 ④卒業研究報告とディスカッション
- 第25回 ⑤卒業研究報告とディスカッション
- 第26回 ⑥卒業研究報告とディスカッション
- 第27回 ⑦卒業研究報告とディスカッション
- 第28回 ⑧卒業研究報告とディスカッション
- 第29回 卒業研究に向けて（研究とは何か、卒業研究の意義など）
- 第30回 一年の総括。卒業研究のテーマや挑戦したいこと

成績評価の方法

文献購読と発表。討論などについて総合的に評価する。

履修にあたっての注意

出席を重視する。授業時間外の予習復習を求める。

教科書・参考書に関する備考

授業中に紹介する

授業のねらい

卒業研究へ向けて基礎的な力を養う。具体的には文献購読、研究の方法の学習、ゼミ発表などを行う。またグループ活動や事例見学などを行い、知識や実践力を身につけていく。

到達目標

1. 文献や事例についてまとめ、解説ができる。
2. 自分の考えをまとめて発表できる。
3. 研究手法について知り、研究計画を立てることができる。

授業方法

- ・文献購読では、各自が購読したものを事前にまとめ発表し、課題について討議する。
- ・事例研究では、一つの事例について深く探求し、課題を発見し解決策について討議する
- ・研究論文の発表では、各テーマに沿って研究論文を集め、内容や調査方法等について紹介する。
- ・提示したテーマについてワークショップ形式のグループワークを行う。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 研究とは：研究課題の設定、調査方法、分析方法、まとめ方等
- 第3回 文献購読と発表(1)
- 第4回 文献購読と発表(2)
- 第5回 文献購読と発表(3)
- 第6回 グループワーク(1) 各テーマについての情報収集
- 第7回 グループワーク(2) 課題の分析
- 第8回 グループワーク(3) 発表
- 第9回 文献購読と発表(4)
- 第10回 文献購読と発表(5)
- 第11回 文献購読と発表(6)
- 第12回 事例研究(1)
- 第13回 事例研究(2)
- 第14回 事例研究(3)
- 第15回 前期のまとめ
- 第16回 研究成果発表会(1)
- 第17回 研究成果発表会(2)
- 第18回 資料の検索方法 図書館
- 第19回 研究論文：個別発表(1)
- 第20回 研究論文：個別発表(2)
- 第21回 研究論文：個別発表(3)
- 第22回 研究論文：個別発表(4)
- 第23回 研究論文：個別発表(5)
- 第24回 研究論文：個別発表(6)
- 第25回 研究論文：個別発表(7)
- 第26回 研究論文：個別発表(8)
- 第27回 研究論文：個別発表(9)
- 第28回 研究課題のテーマ発表(1)
- 第29回 研究課題のテーマ発表(2)
- 第30回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1. 2 を測定する発表内容と討議への参加状況 (70%)、および到達目標 3 を測定する研究計画に関する提出物 (30%) により評価する。

履修にあたっての注意

- ・住環境論および住居計画を履修していること。
- ・発表者は発表資料の事前準備、発表者以外は討議に参加するための事前準備を行い、積極的な発言や探究心をもった態度で取り組むことを求める。

教科書・参考書に関する備考

適宜資料を配布する。

授業のねらい

卒業研究に必要な基礎的な方法と技術を習得することを目的とし、先行研究の収集、講読、報告、検討する力を養う。

到達目標

1. 先行研究を探し、内容を理解し、報告することができる。
2. 最新の研究動向を知り、問題点を導き出し、各自が研究テーマを設定できる。
3. 各自のテーマに沿った的確な研究方法を採用することができる。

授業方法

- ・前期は、研究の進め方について学ぶために与えられたテーマの先行研究を探し、まとめ、報告をする。報告ではレジュメを作成し、全員で疑問点や論理展開などについて議論する。
- ・後期は、各自が選んだテーマをもとに同様に進めていく。
- ・毎回の演習では、受講者にレジュメ作成に関する事前・事後課題を出す（所要時間 60 分程度）
- ・毎回の課題については、演習内で解説し、必要に応じて資料を配布する。

授業計画

- 第1回 前期ガイダンス
- 第2回 研究論文とは：調査方法、分析方法、研究倫理について
- 第3回 資料検索のしかた：図書館ガイダンス
- 第4回 課題文献講読と報告(1) 先行研究の理解と位置づけ
- 第5回 課題文献講読と報告(2) 先行研究の批判的な検討
- 第6回 個人報告(1)
- 第7回 個人報告(2)
- 第8回 個人報告(3)
- 第9回 資料の調べ方(1) 文献、絵画
- 第10回 資料の調べ方(2) 実物資料、インタビュー
- 第11回 発表練習(1) レジュメの書き方
- 第12回 発表練習(2) ポスターの書き方
- 第13回 各自のテーマ報告・検討(1)
- 第14回 各自のテーマ報告・検討(2)
- 第15回 前期のまとめ
- 第16回 後期ガイダンス
- 第17回 個別報告：関心のあるテーマの報告(1)
- 第18回 個別報告：関心のあるテーマの報告(2)
- 第19回 個別報告：先行研究と位置づけ(1)
- 第20回 個別報告：先行研究と位置づけ(2)
- 第21回 個別報告：研究方法の検討(1)
- 第22回 個別報告：研究方法の検討(2)
- 第23回 個別発表(1)
- 第24回 個別発表(2)
- 第25回 個別発表(3)
- 第26回 個別発表(4)
- 第27回 研究計画書の作成(1)
- 第28回 研究計画書の作成(2)
- 第29回 研究計画書の作成(3)
- 第30回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1、2、3 を測定する授業への参加状況（40%）、発表（40%）、ディスカッション（20%）により評価します。

履修にあたっての注意

積極的・意欲的に取り組んでいくことを期待します。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてプリントを配布します。

授業のねらい

人間生活を人的集合体（グループ、組織や企業並びにコミュニティ）における体験（学習）活動としてエコロジカルな視点から捉え、これらの活動で起こるさまざま（人間関係・社会形成に関わること）を学修し、それぞれの興味・関心を涵養する。

卒業研究・論文の準備としてのグループマネジメントと基礎知識（人間関係に関わる事項）を実践的に学修するとともに、場（学習・研修）の設計・運営技能の修得をとおして、人間関係をエコロジカルな視点から幅広く理解するキャリアを培っていく。

到達目標

- ・人間関係をエコロジカルな視点から幅広く理解するファシリテーター観を培う
- ・人間関係に関わる事項を中心として、組織マネジメントに必要な知識を習得する
- ・場の設計（話し合い）・運営技能（ボランティア活動、人間関係トレーニング）の実際を体感する

授業方法

場の設計・運営（話し合い、ボランティア活動、人間関係トレーニング）技能は、演習時間内の実践計画のトレーニングに加えて、エコロジカルな視点から行うボランティア活動の企画・実践をとおしてキャリアを形成します。

なお、各回では、授業における取り組み及び授業以外の活動などからデータを収集し、実践法の基礎を学び、報告レポートとしてまとめていく。学生自身が取り上げたい人間生活の研究テーマも積極的に扱う。

授業計画

- 第1回 インTRODククション
－「研究倫理（基準内容）」について、グループ活動の企画・実践に向けて（人的集合体における人間関係のありよう）の検討－
- 第2回 体験から学ぶということと、集団活動の中で起きること
～チームづくり・人間関係の構築に向けたグループ体験の取り組みの企画検討～
- 第3回 体験から学ぶということと、集団活動の中で起きること
～さまざまなアプローチとファシリテーターとしての姿勢の検討～
- 第4回 集団活動で起こるさまざまなこと（人間関係）への興味・関心の整理検討・意識化
～組織づくりと具体的なグループ体験活動の企画検討～
- 第5回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（授業における取り組み及び授業以外の活動などでデータを収集し、実践法の基礎を学び、レポートとしてまとめていく。学生自身が取り上げたい人間生活の研究テーマも扱う）
- 第6回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第7回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第8回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第9回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第10回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第11回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第12回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第13回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）

- 第14回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
-人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他-
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第15回 体験(前期)を踏まえた人間関係の興味・関心の整理と(仮)研究テーマ設定(マインドマップ)
- 第16回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
-人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他-
(ボランティア活動やフィールドワークなどのデータを収集し、研究倫理(基準内容)について学びながらレポートとしてまとめていく。学生自身が取り上げたい人間生活の研究テーマを扱う)
- 第17回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
-人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他-
(以降、前回の内容を継続的に取り組む)
- 第18回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
-人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他-
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第19回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
-人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他-
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第20回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
-人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他-
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第21回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
-人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他-
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第22回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
-人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他-
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第23回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
-人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他-
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第24回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
-人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他-
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第25回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
-人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他-
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第26回 体験(後期)を踏まえた人間関係の興味・関心の整理
- 第27回 体験(前期・後期)を踏まえた実践報告書の作成
- 第28回 卒業研究テーマの発表と研究計画書の作成:基本計画(案)づくり
- 第29回 卒業研究テーマの発表と研究計画書の作成:基本計画(報告)
- 第30回 総括

成績評価の方法

授業への参加度(40%)、発表・報告書(60%)

履修にあたっての注意

どのような場面でも人間関係に貢献できる自ら考え行動する人間力の向上を目指して、人間関係トレーニングやさまざまなアプローチ、フィールドワーク(ボランティア活動の企画実践、必要に応じてゼミ合宿・視察などの学生による自主性を培う)に親しむなど、グループ体験をとおして楽しみながらキャリアを形成してほしい。

教科書・参考書に関する備考

教科書:授業で紹介する。

参考書:必要に応じて紹介する。

授業のねらい

1. PBL・プロジェクト型の学習（学修）活動に関心を持ち、その意義や効果について主体的に考える時間とする。
2. 自らが意見を持ち、受講者相互に議論し、批判し、協力し、参画しながら新たな気づきや学びを深める場とする。
3. 卒業研究に向けて必要となる基礎的な能力や態度をはぐくむ機会とする。

到達目標

1. プロジェクトベースの学習（学修）や事業の意義について深く追究することができる。
2. 学習・事業の企画・実践・評価活動を主体的かつ協動的に展開することができる。
3. 効果的な学びや事業の展開に必要な「基礎スキル」および「学びに向う高い意識」を獲得することができる。

授業方法

- ・主体的な受講者による協動的な学習時間の経営（進行）。
- ・自己の学びをふりかえり、相互に気づきや学びを共有。
- ・新たに獲得した知見や能力を活用した学びの実践。
- ・たくさん失敗することをおススメする。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 自己を認識する① ～わたしは何かできるのか、何をしたいのか～
- 第3回 プレ・プロデュース活動「お花見」① ～企画してみる～
- 第4回 プレ・プロデュース活動「お花見」② ～実践してみる～
- 第5回 プレ・プロデュース活動「お花見」③ ～評価から改善へ～
- 第6回 自己を認識する② ～何ができたか、何がしたいのか、何が必要なのか～
- 第7回 自己を認識する③ ～社会とかわる自己をみつめる～
- 第8回 フィールドワークⅠ「NPO体験」① ～未知の世界にふれる～
- 第9回 フィールドワークⅠ「NPO体験」② ～質的調査を体験する～
- 第10回 フィールドワークⅠ「NPO体験」③ ～調査データを整理する～
- 第11回 フィールドワークⅠ「NPO体験」④ ～調査データを分析する～
- 第12回 フィールドワークⅠ「NPO体験」⑤ ～調査結果を可視化する～
- 第13回 フィールドワークⅠ「NPO体験」⑥ ～何がわかったか・わからなかったか、それは何だったか～
- 第14回 PBL（プロブレム／プロジェクト・ベースド・ラーニング）Ⅰ「問題解決」① ～「問題」とは何か～
- 第15回 PBLⅠ「問題解決」② ～「問題」を発見する～
- 第16回 PBLⅠ「問題解決」③ ～「問題」は問題としてそこにあるか～
- 第17回 PBLⅠ「問題解決」④ ～その「問題」は解決が必要か、それは何故か～
- 第18回 PBLⅠ「問題解決」⑤ ～本当の「問題」は何であったか～
- 第19回 自己を認識する④ ～わたしが求めているものは何か～
- 第20回 フィールドワークⅡ「ベンチマーク」① ～スケジューリング～
- 第21回 フィールドワークⅡ「ベンチマーク」② ～ヒアリング～
- 第22回 フィールドワークⅡ「ベンチマーク」③ ～情報整理～
- 第23回 フィールドワークⅡ「ベンチマーク」④ ～プレゼンテーション～
- 第24回 自己を認識する⑤ ～わたしが追究したいのは何か、そしてそれは何故なのか～
- 第25回 PBLⅡ「プロジェクト」① ～課題はコンセンサスを得られるか～
- 第26回 PBLⅡ「プロジェクト」② ～課題にコミットできるのか～
- 第27回 PBLⅡ「プロジェクト」③ ～プロジェクトをブラッシュアップする～
- 第28回 PBLⅡ「プロジェクト」④ ～プロジェクトは価値を生み出し得るか～
- 第29回 PBLⅡ「プロジェクト」⑤ ～プロジェクト評価～
- 第30回 自己を認識する⑥ ～わたしの研究活動をプロジェクトする～

成績評価の方法

- ・学習内容の理解に向けて主体的に取り組むパフォーマンス（認知度）（30%）・・・目標1に対応
- ・能動的かつ協動的に学習活動へと取り組むパフォーマンス（参加度）（30%）・・・目標2に対応
- ・レポートや各種学習成果に関する提出物（学修度）（40%）・・・目標1. 2. に対応（アドバンス）

履修にあたっての注意

- ・授業に主体的・能動的かつ協働的に参加できる者の受講を基本とする。
- ・フィールドワークやPBLなどで学外で活動する機会が多い。
- ・講義日時以外（休日含む）での活動もある。
- ・学習活動や今後の研究活動に必要となるスキルや作法等の修得については講義内で随時織り込む。
- ・講義や活動に向けた事前準備は受講者の責任において意識をもって臨むことが必要。
- ・失敗は大歓迎。しっかりとした準備と評価がなされた失敗は次の大きな成長を生みます。
- ・安心して失敗ができる学習環境を受講者みんなで作りたい。

教科書・参考書に関する備考

教科書・参考書含め、資料や関連書籍は随時紹介する。

授業のねらい

児童家庭およびスクールソーシャルワーク、保健医療分野におけるソーシャルワーク、生活困窮者支援に関わるソーシャルワーク等を研究範囲とし、文献研究、調査及びフィールドワークから課題発見と支援方法を探索する。演習クラスの取り組みによって、研究倫理と基本的研究スキルを身につけることをねらいとする。

到達目標

- ①自身の研究テーマが見つかる
- ②研究倫理を備え基本的研究スキルが身につく
- ③研究テーマについて他者との議論を重ね、多角的に論議する姿勢が身につく
- ④自身及びグループの取り組みを適切にまとめ効果的に発表できる

授業方法

授業内における、ガイダンス、報告・発表、グループ討議、個別指導を行う。
 学外授業では、フィールドワークとして対象に対する訪問、聞き取り、調査を実施する。
 また、課題の進捗に合わせ、授業時間以外に個人とグループの活動が必要となる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 児童家庭およびスクールソーシャルワークに関するトピック提示
論点探索及び議論
- 第3回 保健医療分野におけるソーシャルワークに関するトピック提示
論点探索及び議論
- 第4回 生活困窮者支援に関わるソーシャルワークに関するトピック提示
論点探索及び議論
- 第5回 近隣市町村を対象とした地域アセスメント(1)
アセスメント計画（アセスメント対象を焦点化）
- 第6回 近隣市町村を対象とした地域アセスメント(2)
資料探索
- 第7回 近隣市町村を対象とした地域アセスメント(3)
探索資料を整理し、気になる点や課題を探索する
- 第8回 近隣市町村を対象とした地域アセスメント(4)
フィールドワーク（探索対象に対する聞き取り）
- 第9回 近隣市町村を対象とした地域アセスメント(5)
アセスメント情報を地域マップとして作成する
- 第10回 研究倫理演習
- 第11回 文献研究演習(1)
個人の関心テーマから文献探索し、レビュー報告をまとめる
- 第12回 文献研究演習(2)
個人の関心テーマから文献探索し、レビュー報告をまとめる
- 第13回 文献研究演習(3)
個人の関心テーマから文献探索し、レビュー報告をまとめる
- 第14回 グループ調査テーマの検討
- 第15回 調査テーマに関する先行研究調査
- 第16回 先行研究レビューのグループ発表
- 第17回 インタビュー調査に関するガイダンス
- 第18回 調査計画の作成
- 第19回 調査課題の検討
インタビューガイドの作成
調査対象との連絡・調整
- 第20回 インタビュー模擬演習
- 第21回 インタビュー実施
- 第22回 インタビュー内容の文字起こし
- 第23回 結果分析(1)
- 第24回 結果分析(2)
- 第25回 分析結果に対する検討（グループ討議）
- 第26回 調査報告書の作成(1)
- 第27回 調査報告書の作成(2)
文章校正

-
- 第28回 調査報告書の作成(3)
発表レジュメの作成
第29回 調査発表
第30回 卒業研究計画の発表

成績評価の方法

1. 各回の課題に対する取り組み (30%/到達目標②を測定)
2. グループ研究の取り組み、発表と報告書作成含む (50%/到達目標③④を測定)
3. 個人研究の取り組み (20%/到達目標①を測定)

履修にあたっての注意

グループ学習やフィールドワークを実施するため、個人の取り組みや行動が他者に影響します。責任ある行動を意識してください。

教科書

授業内で資料を配布します。

教科書・参考書に関する備考

参考書については、適宜紹介します。

授業のねらい

文献の探索・講読、レジユメの作成、フィールドワーク、発表をおこない研究法を修得します。また、卒業研究に向けて個々の問題意識を整理し、研究テーマを設定することを目標とします。

到達目標

1. 各自の関心や問題意識に沿った文献探索・資料収集をおこない、報告することができる。
2. 1. にもとづいて研究計画を立案することができる。

授業方法

関心のあるテーマについて個別・グループによる資料作成・報告等を行いながら展開する。また、サブゼミを編成しサブゼミ毎にインタビュー等のフィールドワークを行い、研究法についても学びます。

事前学習としては、関心のあるテーマ等についての資料収集や文献探索及び精読を日常的に行うこと及び報告前の準備（10時間程度）を求めます。事後学習は、授業内で行ったことの補足（3時間程度）をしておくことを求めます。

個別・グループによる資料作成・報告の内容については、授業の中で助言・指導を行うとともに、次回までの課題を明示しながら進めていきます。

授業計画

- 第1回 ガイダンス（演習の展開及び研究倫理について）
- 第2回 個別テーマに関する文献講読、レジユメ作成、報告・討議（1回につき2名が報告する）(1)
- 第3回 個別テーマに関する文献講読、レジユメ作成、報告・討議（1回につき2名が報告する）(2)
- 第4回 個別テーマに関する文献講読、レジユメ作成、報告・討議（1回につき2名が報告する）(3)
- 第5回 個別テーマに関する文献講読、レジユメ作成、報告・討議（1回につき2名が報告する）(4)
- 第6回 文献検索の方法（図書館ガイダンス）
- 第7回 各自の関心に基づきサブゼミを編成
- 第8回 サブゼミテーマに関する意見交換
- 第9回 サブゼミ研究(1)：先行研究調査
- 第10回 サブゼミ研究(2)：先行研究の報告1
- 第11回 サブゼミ研究(3)：先行研究の報告2
- 第12回 サブゼミ研究(4)：先行研究の報告3
- 第13回 サブゼミ研究(5)：先行研究の報告4
- 第14回 サブゼミ研究(6)：リサーチクエストの検討1
- 第15回 サブゼミ研究(7)：リサーチクエストの検討2
- 第16回 サブゼミ研究(8)：研究テーマの検討
- 第17回 サブゼミ研究(9)：研究テーマの決定
- 第18回 フィールドワーク(1)：インタビューの準備1
- 第19回 フィールドワーク(2)：インタビューの準備2
- 第20回 フィールドワーク(3)：インタビュー
- 第21回 フィールドワーク(4)：インタビューの分析1
- 第22回 フィールドワーク(5)：インタビューの分析2
- 第23回 サブゼミ論作成に向けて＜論文作成の方法＞
- 第24回 サブゼミ論構成の検討
- 第25回 サブゼミ論構成の確定
- 第26回 サブゼミ論作成(1)：論文骨子の報告
- 第27回 サブゼミ論作成(2)：論文報告
- 第28回 卒論研究計画書作成に向けて
- 第29回 卒論研究計画書作成
- 第30回 総括

成績評価の方法

参加状況（40%）、到達目標を測定するレジユメの内容・報告（30%）、サブゼミ論（30%）による評価する。

履修にあたっての注意

各自が主体的に学ぶことが求められます。積極的に文献を読み、資料・情報を収集することを期待しています。

教科書・参考書に関する備考

授業で紹介する。

授業のねらい

21世紀のグローバル社会の下で、さまざまな情報が世界を駆け抜けています。情報を取り扱う広報の果たす役割も、ますます重要になってきています。伝えるメディアも、従来の新聞、テレビなどの「マス」媒体から、SNSやWebサイトなど瞬時に世界を駆け抜けるソーシャルネットワークが台頭し、多様になっています。このようにメディアがグローバル化、そして個人化する中で、その特徴を理解し、社会で適確なコミュニケーションをとるために求められる広報とはどのようなものがあるのでしょうか。また女性が広報、メディアに果たす役割はどのようなものがあるのでしょうか。講義と実践を通して広報メディアについて学んでいきます。

到達目標

- ・ 広報、メディアの基本概念を理解できます。
- ・ メディアリテラシーの学習を通して、社会に有効な情報を理解できます。
- ・ 広報の専門的能力の獲得を通して、社会で実践できる能力が身につきます。

授業方法

- ・ 講義形式
- ・ グループワーク

授業計画

- 第1回 ガイダンス
広報メディア概論 1 広報とは何か
- 第2回 広報メディア概論 2 広報の機能と分類
- 第3回 広報メディア概論 3 メディアリテラシー
- 第4回 広報メディア概論 4 多様化するメディア
- 第5回 広報メディア概論 5 クラウドファンディングを活用した広報
- 第6回 広報メディア概論 6 広報の歴史
- 第7回 学外研修（企業研修）
- 第8回 企業広報
企画の立て方
- 第9回 行政広報
- 第10回 医療広報
- 第11回 学術広報
- 第12回 伝える技法：文章
- 第13回 伝える技法：写真
- 第14回 伝える技法：デザイン、イラスト
- 第15回 小レポート作成
- 第16回 広報の技法：リリース
- 第17回 広報の技法：記者会見
- 第18回 広報の技法：取材
- 第19回 広報の技法：企画
- 第20回 広報の技法：コミュニケーション
- 第21回 広報プロジェクト：企画会議
- 第22回 広報プロジェクト：企画会議
- 第23回 広報プロジェクト：準備
- 第24回 広報プロジェクト：作成
- 第25回 広報プロジェクト：作成
- 第26回 広報プロジェクト：作成
- 第27回 広報プロジェクト：作成
- 第28回 広報プロジェクト：発表、ふりかえり
- 第29回 卒業論文テーマ発表
- 第30回 まとめ
レポート提出

成績評価の方法

プレゼンテーション発表 30%、レポート 20%、チームワーク 30%、最終的な成果物の品質 20%

履修にあたっての注意

本講義は広報チームをつくり、チームワークで広報業務を推進する実践的な講義です。積極的な授業参加を希望します。

教科書

スコット・カトリップ他『体系パブリック・リレーションズ』（ピアソン・エデュケーション、2008、ISBN：978-4894716476）

猪狩誠也『日本の広報・PR100年－満鉄からCSRまで』（同友館、2011、ISBN：978-4496047732）

日本パブリックリレーションズ協会『2点すべてのイメージを見る 改訂版 広報・PR 概論』（同友館、2012、ISBN：978-4496048753）

井上綾乃 他『広報・PR 担当者のためのデザイン入門』（ビー・エヌ・エヌ新社、2017、ISBN：978-4802510479）

教科書・参考書に関する備考

・その他、必要な参考文献については授業中に紹介します。

参考ホームページ

日本広報学会 <http://jscs.jp/>

日本パブリックリレーションズ協会 <http://prsj.or.jp/>

授業のねらい

日本国内では、2016年より、社会保障・税番号制度、いわゆるマイナンバー制度の運用が始まり、情報通信技術（ICT）の発展を背景として利便性・効率性の向上が喧伝される一方、個人番号等の個人情報の情報漏洩によるプライバシー侵害、公権力による個人の管理・監視の強化など、様々なリスクの増大があらためて指摘されている。

本科目では、日本における個人管理の諸制度の歴史、目的、方法、問題性について学ぶことを通じて、今日の監視社会化の事象や実相を見る目を養い、民主主義社会における公権力と個人のあるべき関係について考える力を養う。

到達目標

- ・日本における個人管理の関係制度の概要や特徴について説明できる。
- ・プライバシー権、個人情報保護法の概要や特徴について説明できる。
- ・日本の個人番号制度の特徴を説明できる。
- ・監視社会化の問題性を説明できる。

授業方法

講義形式により、大きくは以下の3部構成で授業を進める。

- ①日本における国家の個人管理の関係制度（戸籍制度、住民基本台帳制度、在留外国人の管理制度など）について
- ②プライバシー権の確立・変容と個人情報保護法制の歴史および日本の個人情報保護法制について
- ③番号制度の導入の歴史と現代日本における監視社会化の実相について

このほか、必要に応じ、資料映像等の視聴を行う。

受講に当たっては、授業時間外学習として下記の参考書をはじめとする本科目の関係文献の通読をお願いするとともに、事前・事後学習として毎回の授業での配布レジュメ・資料の復習をお願いします。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 国による個人管理の必要性と問題性
- 第3回 戸籍制度
- 第4回 住民基本台帳制度について① 制度の概要・特徴
- 第5回 住民基本台帳制度について② 住基ネット
- 第6回 在留外国人の管理制度
- 第7回 プライバシー権の展開
- 第8回 個人情報保護法の世界史
- 第9回 日本の個人情報保護法制について① 現行法の制定のプロセス
- 第10回 日本の個人情報保護法制について② 現行法の概要・特徴
- 第11回 監視社会化の現状
- 第12回 日本の個人番号制度について① 日本の番号制度の歴史
- 第13回 日本の個人番号制度について② 住基ネット差止訴訟
- 第14回 日本の個人番号制度について③ マイナンバー制度
- 第15回 まとめ—個人情報とプライバシーをめぐる現況

成績評価の方法

授業への参加状況（30%）を踏まえた上で、授業時間外学修への取り組み状況（20%）、期末課題レポート（50%）によって評価します。

履修にあたっての注意

特になし。当然ながら、授業中の私語は厳禁。

教科書・参考書に関する備考

教科書は指定しません。毎回、レジュメを配布します。

参考書

堀部政男『プライバシーと高度情報化社会』（岩波書店、1988、ISBN：4-00-430014-2）

齋藤貴男『プライバシー・クライシス』（文藝春秋、1999、ISBN：4-16-660023-0）
岡村久道『個人情報保護法の基礎知識』（日本経済新聞社、2005、ISBN：4-532-11048-3）
東浩紀＋大沢真幸『自由を考える－9・11以降の現代思想』（日本放送出版協会、2003、ISBN：4-14-001967-0）

参考ホームページ

総務省＞住民基本台帳等 http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/daiyo/gaiyou.html
個人情報保護委員会 <http://www.ppc.go.jp/>
内閣官房＞マイナンバー <http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/bangoseido/>

授業のねらい

色彩学やデザインなど非言語コミュニケーションツールをベースに、ユニバーサルデザインについて学びます。ユニバーサルデザインと一般的なデザインの差異、各企業のユニバーサルデザイン取組事例の検討、実際にプロダクトに触れて体験し、自らがユニバーサルデザインとは何か、について考えていきます。

到達目標

事例を参考に、問題点抽出と解決策を導き出します。グループワークも行いながら、単なるデザインではなく、誰もが使いやすく、かつ、デザインにも優れたものについて考えます。そのための色彩学基礎も習得できます。

授業方法

授業は講義形式で進めますが、グループワークによる体験や、プレゼンテーションを含みます。高齢者疑似体験、ユニバーサル商品使用体験、車椅子による学内調査を行い、ユニバーサルデザインの本質を体験しながら考え、学びます。
 ※通常はコンピュータ室での授業になりますが、明るい場所で色を見る必要性があるため、第2～5回は教室が変更になります。
 ※カラーデザイン検定、色彩検定、パーソナルカラー検定など色彩学の検定を目指す方への対応も行います。

授業計画

- 第1回 ガイダンス ユニバーサルデザイン概論
 ～バリアフリー・ユニバーサルデザイン・グッドデザインの違い～
- 第2回 色彩学から考察したユニバーサルデザイン事例
 色彩感覚トレーニング
- 第3回 被服に活用するユニバーサルカラーデザイン 演習①
 パーソナルカラー診断の取り組み
- 第4回 被服に活用するユニバーサルカラーデザイン 演習②
 パーソナルカラー診断の取り組み
- 第5回 各企業の取り組み事例 <その1>ファッションデザイン
 高齢者・障がい者を対象とした被服について
- 第6回 色覚特性者や高齢者への取り組み
 視覚の特徴や変化と色覚特性者が見えやすい色、見え方の体験
- 第7回 各企業の取り組み事例 <その2>インテリアデザイン
 車椅子体験 学内のUD調査
- 第8回 各企業の取り組み事例 <その3>プロダクトデザイン
 UD商品を実際に使用
- 第9回 デザインにおける色彩戦略と色彩心理
 使いやすさだけではUDは定着しない、その理由とは？
- 第10回 ユニバーサルデザインについて考える
 議論の方法、レポートとプレゼンテーション方法の解説
- 第11回 ユニバーサルデザインについて考える
 グループワーク①
- 第12回 ユニバーサルデザインについて考える
 グループワーク②
- 第13回 プレゼンテーション発表
- 第14回 色彩とデザインの実戦トレーニング
- 第15回 ユニバーサルデザイン総まとめ

成績評価の方法

授業への参加 (30%)、レポート (50%)、プレゼンテーション発表 (20%)

履修にあたっての注意

演習①②ではファッション雑誌、はさみ、のりを持参。
 また、生活の中で触れるデザインや色彩に関心を持つように心がけてください。

教科書

外崎由香『楽しく学べるカラーワークブック』（北海道カラーデザイン研究室、2016、ISBN：9784908446689）

教科書・参考書に関する備考

教科書類については第 1 回のガイダンスで説明します。
また、必要に応じて授業内で紹介。随時プリント配布。

参考書

A・F・T 公式テキスト編集委員会『A・F・T 色彩検定公式テキスト 3 級編』（AFT 企画、2010、ISBN：978-4-901257-18-3）
栗田正樹『増補改訂版 色弱の子を持つすべての人へ 20 人にひとりの遺伝子』（北海道新聞社、2016、ISBN：978-4-89453-827-6）

516711

生活と宗教

担当教員：阿部 包

2単位 後期

授業のねらい

この授業は、宗教が人間の生活にどのように影響を及ぼしてきたかについて確認しようとするものです。生きることと宗教は、近年まで密接に結びついていました。世界各地の人々の文化の背景や基礎には宗教があり、それが伝統的価値観の重要な構成要素でもありました。

この時間では、主としてユダヤ教、キリスト教、そして日本の生活と宗教に関連する題材を取り上げ、宗教が日常生活に大きな影響を与えてきたことを再確認します。

到達目標

- ・人間が生きていく上で宗教的感性が重要なことに気づき、自分の身の回りの体験を基にそれを説明できる。
- ・日常生活の中からキリスト教、神道、仏教や他の宗教の影響を探し出し、それを説明できる。

授業方法

人間の生活と宗教との関わりを、具体的な事象などの例を示しながら、主としてユダヤ教、キリスト教、日本の宗教およびその文化について、授業計画に従って、確認し解説してゆきます。受講者は、日常生活の中で生活と宗教との接点に関する情報収集を心掛けること。

授業計画

- 第1回 イントロダクション：生活と宗教、生きること・死ぬことと宗教
- 第2回 ユダヤ人とその生活～歴史体験に基づく種々の祭り
- 第3回 ユダヤ人の生活と宗教(1)：食事規定とその様々な影響、ほか
- 第4回 ユダヤ人の生活と宗教(2)：安息日規定とシナゴーク、ゲッター、ほか
- 第5回 ユダヤ人の生活と宗教(3)：イディッシュ語世界の音楽が伝えるもの～ホロコーストとレジスタンス～
- 第6回 ユダヤ人の生活と宗教(4)：ユデオ・エスパニョル語世界の音楽が伝えるもの～改宗か追放か～
- 第7回 キリスト教徒とその生活(1)～典礼暦に基づいて
- 第8回 キリスト教徒とその生活(2)～秘跡に基づいて
- 第9回 キリスト教と多神教、多くの名前を持つ神、ほか
- 第10回 日本人の生活とキリスト教の影響
- 第11回 「聖なるもの」に対する畏敬の念、スピリチュアルへの感性
- 第12回 日本人の生活と宗教(1)：ライフサイクル、通過儀礼
- 第13回 日本人の生活と宗教(2)：葬送、いのちの受け渡し、ともに生きる、スピリチュアル・ケア、チャプレン、ターミナル・ケア、グリーフ・ケア
- 第14回 アイヌの人々の生活と宗教：多くのカムイに抱かれて生きる、いのちの恵み
- 第15回 まとめ～生活の中に宗教を探る

成績評価の方法

授業への積極的参加（質問など：40%）、課題：レポート（60%）によって総合的に評価する。

履修にあたっての注意

自分の身の回りの宗教の痕跡・残滓を探してメモしておき、授業で発言しよう。

教科書・参考書に関する備考

教科書は特にないが、授業中に参考資料（印刷物）を配布することがある。参考書も授業の中で紹介する。

参考ホームページ

適宜紹介する。

授業のねらい

私たちの生活は、法・制度を基盤として様々な活動を展開し、制度に基づく種々のサービスを利用することで基本的な生活が保障されている。ソーシャルワーカーは、このような法・制度の仕組みを捉えることが専門的活動を展開するための基本的知識となる。

本講義では、戦後日本の福祉政策と展開を学び、行政の仕組み、財政の働き、福祉行政組織と団体、専門職、専門機関について学ぶ。また、各種福祉計画について目的と特徴を捉え、ソーシャルワーカーが福祉計画にどのように関与していくかを検討する。

到達目標

- ①行政の仕組み、財政の働き、福祉行政組織と団体、専門職、専門機関について理解できる。
- ②各種福祉計画の意義、内容について具体的に理解できる。
- ③ソーシャルワーカーとして福祉計画に関与する視点と方法を理解できる。
- ④社会福祉士国家試験で問われる知識を習得できる。

授業方法

スライドを用いた講義を基本とする。毎回、授業理解の確認のため、国家試験問題等を用いた小テストを実施する。福祉計画の事例検討については、小グループによる討議・発表を行う。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
ソーシャルワーカーとして、福祉行財政と福祉計画を学ぶ意義
- 第2回 日本の福祉政策の展開と福祉計画
- 第3回 行政の仕組み(1)
行政の骨格、社会福祉と法制度
- 第4回 行政の仕組み(2)
福祉行政の組織、社会福祉基礎構造
- 第5回 福祉財政の働き
- 第6回 福祉行政の組織・団体と専門職の役割(1)
行政機関による相談体制、専門諸機関
- 第7回 福祉行政の組織・団体と専門職の役割(2)
地域の相談システム、行政福祉専門職
- 第8回 社会福祉計画の目的と意義
- 第9回 社会福祉計画の理論と技法～福祉計画策定演習(1)
- 第10回 社会福祉計画の理論と技法～福祉計画策定演習(2)
- 第11回 社会福祉計画の実際(1)
地域福祉計画
- 第12回 社会福祉計画の実際(2)
介護保険事業計画等の高齢者に関わる計画
- 第13回 福祉計画の実際(3)
障害福祉計画等の障害者に関わる計画
- 第14回 福祉計画の実際(4)
次世代育成支援計画等の子どもに関わる計画
- 第15回 15回の学習内容のまとめ

成績評価の方法

- 各回の小テスト (30%/到達目標④を測定)
 小グループによる演習 (20%/到達目標③を測定)
 期末試験 (50%/到達目標①②を測定)

履修にあたっての注意

行財政は、内容的に難しい(とっつきにくい)印象を持ちますが、確実な知識として定着が求められます。そのため、必ず復習を行ってください。また、資料はテキストだけではなく、法律や制度、ホームページ上の行政資料に目を通して確認するようにしてください。

教科書

社会福祉士養成講座編集委員会『新・社会福祉士養成講座 10 福祉行財政と福祉計画（第5版）』（中央法規、2017、ISBN：978-4-8058-5430-3）

教科書・参考書に関する備考

教科書とは別にプリントを配布します。

参考ホームページ

財務省/日本の財務関係資料 http://www.mof.go.jp/budget/fiscal_condition/related_data/201704.html
総務省/地方財政白書 http://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/hakusyo/

授業のねらい

この授業は、日本における社会保障システムの概要を理解するとともに、とくに公的医療保険制度の特徴と問題点を把握することで、これからの社会保障のあり方について考えを深めるためのものです。

到達目標

社会福祉とは異なる社会保障の特徴を理解できる。
医療・労災保険をめぐる諸問題に対処するための基礎知識を得る。

授業方法

事前にフルペーパーをダウンロードしてもらいます。資料を解説し、補足を加えるかたちで授業を進めます。伝統的な知識伝達型授業です。授業計画の前後を関連させていく、自宅学習を行ってください。

授業計画

- 第1回 社会保障の概念
- 第2回 社会保障の理念と歴史（救貧法）
- 第3回 社会保障の理念と歴史（マルサスと救貧法批判）
- 第4回 社会保障の理念と歴史（ロバート・オウエンと工場法）
- 第5回 社会保障の理念と歴史（ドイツにおける社会政策の展開）
- 第6回 社会保障の理念と歴史（社会政策から経済政策へ）
- 第7回 社会保障の理念と歴史（ニューディールとビッグ・レーバの構築）
- 第8回 社会保障の理念と歴史（ケインズと戦後福祉国家）
- 第9回 社会保障の理念と歴史（ケインズと戦後福祉国家）
- 第10回 社会保障の理念と歴史（新マルサス主義と北欧の福祉国家）
- 第11回 ケインズ主義的社会福祉国家における社会保障の機能と意味
- 第12回 社会保障制度の概要（医療保険、介護保険、労災保険）
- 第13回 社会保障制度の概要（年金保険、医療保険、介護保険）
- 第14回 社会保障制度の概要（医療保険、介護保険、労災保険）
- 第15回 社会保障制度の概要（医療保険、介護保険、労災保険）

成績評価の方法

出席率によって受験資格を与え、到達目標を測定するレポート試験（100%）で評価する。

履修にあたっての注意

フルペーパーをネット配信するので事前にダウンロードしておくこと

教科書・参考書に関する備考

<https://sites.google.com/site/ucd2006jp/>にフルペーパーがあります。

参考書：厚生労働白書

特に平成23年版は有益です。

参考ホームページ

<https://sites.google.com/site/ucd2006jp/>

授業のねらい

日本における社会保障システムの危機の様相を理解し、危機が集中的に現れている年金制度についてその特徴をおさえる。

到達目標

社会保障の危機を踏まえて、将来の生活をデザインすることができる。

授業方法

事前にフルペーパーをダウンロードして自宅学習をしてもらいます。それに解説を加えながら進める知識伝達型授業です。

授業計画

- 第1回 ケインズ主義的戦後福祉国家の解体
- 第2回 社会保険の危機
- 第3回 福祉ミックス論と第三の道
- 第4回 福祉ミックス論と第三の道
- 第5回 保険とは何か
- 第6回 日本の民間保険と公的施策との関係（年金保険）
- 第7回 日本の民間保険と公的施策との関係（医療・介護保険）
- 第8回 日本の年金保険制度（歴史）
- 第9回 日本の年金保険制度（基礎年金）
- 第10回 日本の年金保険制度（国民・厚生）
- 第11回 日本の年金保険制度（国民・厚生）
- 第12回 日本の年金保険制度（共済）
- 第13回 日本の雇用保険制度
- 第14回 日本の雇用保険制度
- 第15回 社会保障の実施体制と専門職

成績評価の方法

出席率によって受験資格を与え、到達目標を測定するレポート試験（100%）で評価する。

履修にあたっての注意

<https://sites.google.com/site/ucd2006jp/>にフルペーパーがあるので事前にダウンロードしておくこと

教科書・参考書に関する備考

<https://sites.google.com/site/ucd2006jp/>
参考書：厚生労働白書 特に平成23年版

参考ホームページ

<https://sites.google.com/site/ucd2006jp/>

授業のねらい

福祉サービスの組織と経営は、関連諸制度及び法改正に伴い、多様な変化と質の向上が求められています。福祉サービス利用者のニーズ充足と利益確保の視点から、福祉の組織はどのように運営され、経営はどのような戦略・戦術のもと実践されているのかについて学びます。

到達目標

- 1 福祉施設の組織や経営の基礎理論について、その概要と枠組みが理解できる。
- 2 福祉施設の運営管理の手法を理解し、実態や課題について考察できる。

授業方法

講義形式を中心としながら、個人ワーク・グループディスカッションを交えながら展開します。前半は、福祉の組織や法人格及び基礎理論など、運営管理の総論を押さえます。5回目以降は、高齢者福祉施設を題材にして、運営管理の各論とそれぞれの実態や課題について考察していきます。社会福祉士国家資格必須科目のため、事前学習として養成講座テキスト（60分）、事後学習は講義で配布するプリント（45分）を中心に予習・復習していきます。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
(講義のねらいと動機づけ・福祉施設経営論の枠組み)
- 第2回 福祉サービスの経営管理と法人格
(経営管理の枠組み・社会市場における経営環境と制度・法人の基本形態)
- 第3回 福祉サービスに関わる組織や団体
(社会福祉法人・NPO法人・医療法人・営利法人 等)
- 第4回 福祉サービス経営の基礎理論
(経営戦略・事業計画・組織構造・運営管理の基礎)
- 第5回 福祉サービス運営管理(1)
(サービス管理・マーケティング・サービス評価)
- 第6回 福祉サービス運営管理(2)
(苦情解決・リスクマネジメントのあり方)
- 第7回 福祉サービス運営管理(3)
(人事管理と人材育成)
- 第8回 福祉サービス運営管理(4)
(労務管理と労働関係法令)
- 第9回 福祉サービス運営管理(5)
(収益管理・収入編「介護報酬シュミレーション」)
- 第10回 福祉サービス運営管理(6)
(会計管理と財務管理、収益管理・支出編)
- 第11回 福祉サービス運営管理(7)
(施設運営のコスト管理と投資計画の考え方)
- 第12回 福祉サービス運営管理(8)
(福祉と法律～権利擁護・契約行為・利用者事故と法的責任)
- 第13回 法人経営の展望と課題
(社会福祉法人改革と組織ミッション)
- 第14回 社会福祉専門職と福祉経営
(専門職論と経営の価値葛藤 等)
- 第15回 総括・レポート及び理解習熟度テスト

成績評価の方法

- (1)授業への参加状況 30%
- (2)到達目標1を測定するリアクションペーパー 20% (6回・11回終了後に2回提出)
- (3)到達目標2を測定するレポート・理解習熟度テスト 50% (15回目に実施)

履修にあたっての注意

理解を促進するため、講義中にセッションを交えて展開します。能動的な受講姿勢を期待します。初回授業の際に座席を指定します。

教科書・参考書に関する備考

特に教科書は指定しません。授業ごとにプリントを配布します。以下は参考文献・資料とします。

参考書

- 社会福祉士養成講座編集委員会『新・社会福祉士養成講座 11 福祉サービスの組織と経営・第5版』（中央法規、2017.2）
- 小笠原泰・渡辺智之『2050年老人大国の現実』（東洋経済新報社、2012.10）
- 浦野正男編著『社会福祉施設経営管理論 2016』（全国社会福祉協議会、2016）
- YNI 総合コンサルティンググループ『施設トップのためのわかりやすい福祉経営』（中央法規、2007.2）
- 社団法人日本社会福祉士会『新・社会福祉援助の共通基盤第2版上・下』（中央法規、2009.4）
- 松本剛一『高齢者施設の運営～社会福祉法人の使命と経営の狭間で～』（介護新聞連載、2011.1）
- 宮内 威 他『新社会福祉法人会計基準「財務諸表の作成と情報開示のポイント」』（全国社会福祉協議会、2015.11）

授業のねらい

「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ・Ⅱ」、「ソーシャルワーク実習Ⅰ・Ⅱ」及び「ソーシャルワーク演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の学習成果を踏まえ、さらに実習に取り組んで多様な援助関係・環境のもとで実習指導を受けることを通じて、ソーシャルワークの専門性の深化と実践能力の習得を目指す。

到達目標

- ・卒業後の進路として社会福祉の専門職に携わる上で必要な専門知識・技術及び関連知識の内容を説明できる。
- ・実習指導者の指導のもとに、専門知識・技術及び関連知識を実際に活用し、相談援助業務に必要な資質・能力・技術を習得するとともに、職業倫理を学び、社会福祉の専門職としての自覚に基づく行動能力を培う。
- ・具体的な援助活動を専門的援助技術として概念化・理論化し体系だてる能力を涵養するとともに、関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解する。

授業方法

学生は次に掲げる事項について、実習指導者による指導を受けるものとする。
事前学習としては、「ソーシャルワーク実習Ⅰ・Ⅱ」の振り返りと自身の課題整理を行うこと。事後学習は、「テーマ研究B」で実習報告等を実施するが、関連するソーシャルワーク論の内容を確認しておくことを求めます。

授業計画**【実習目標・内容】**

- 1) 利用者やその関係者・施設・事業者・機関・団体等の職員、地域住民やボランティア等との基本的なコミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成
- 2) 利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成
- 3) 利用者やその関係者（家族・親族・友人等）との援助関係の形成
- 4) 利用者やその関係者（家族・親族・友人等）への権利擁護及び支援（エンパワメント含）とその評価
- 5) 多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実践
- 6) 社会福祉士としての職業倫理、施設・事業者・機関・団体等の職員の就業などに関する規定への理解と組織の一員としての役割と責任への理解
- 7) 施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の実践
- 8) 地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等であることへの理解と具体的な地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解

※なお、次に掲げる事項について十分留意すること。

【実習形態】

・実習生を受け入れる社会福祉関係機関や施設と実習時期を調整し2週間の間に行う。

【実習に関わる学習指導（「テーマ研究B」で行う）】

- 1) 事前学習
 - ・実習開始前に担当教員より個別オリエンテーションを行う。
 - ・予め実習生の個別実習課題や希望学習事項を実習指導者に連絡し、実習前または実習開始時に実習計画の提示と課題の確認を行う。
- 2) 実習中の学習指導
 - ・実習施設における行動や学習は、実習指導者または実習指導者が指示する関係スタッフの了解や指導のもとに取り組む。
 - ・実習中は実習記録ノート（記載方法は別途指導）を作成し、指導を受ける際に活用する。
 - ・実習終了時には、実習指導者が実習生と面談して講評と実習後の学習課題の助言・指導を行う。
- 3) 事後学習と総括
 - ・実習終了後に学習成果・課題の整理を行い、実習報告プレゼンテーション及び実習報告書の作成を行う。
 - ・実習担当者による評価及び自己評価等を踏まえた総括的評価を行う。

【実習配属に関する留意点】

- 1) 本科目履修希望者に対して、履修登録前年度（11月～1月）の期間に担当教員と履修意向に関する事前面接を行い、その面接結果を踏まえて配属先の調整を行う。
- 2) 配属先の日程・プログラム調整等を行う必要がある場合、必要に応じて履修登録前年度中に学生自身による事前打ち合わせ等の訪問を行うことがある。
- 3) また、配属予定先（実習先）から履修登録前年度中に課題を課されることがある。

成績評価の方法

到達目標に関する現場実習指導者による評価（50%）、事前学習及び事後学習（30%）、実習報告書（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

1. 本科目は、「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ・Ⅱ」、「ソーシャルワーク実習Ⅰ・Ⅱ」及び「ソーシャルワーク演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の学習成果を踏まえ、社会福祉の専門性の深化を目指すための「専門実習」として位置付けられている。
2. 従って、実習先及び担当教員により履修希望学生の学習成果が不十分と判断された場合、希望する実習先への配属が困難となることがある。
3. 実習中も健康状態に十分留意し、利用者や関係者の迷惑にならないよう実習指導者や教員との連絡や相談に基づいて行動すること。
4. 「テーマ研究B」を併行履修すること。

教科書・参考書に関する備考

配属専門領域に応じた参考書を随時リファレンスする予定。

授業のねらい

地域の特色や固有資源を、都市計画・建築・観光資源などの視点から考察します。
北海道から、本州・国外へ対象地域を広げ、歴史的・地理的背景を概観した後、具体的な開発政策の目標について理解を深めることを目的としています。
各地域の問題、文化と技術、産業構造など広く論じた後、行政や自治体、団体、企業、などの事例考察も行います。

到達目標

- ・地域への「参加」の視点を獲得すること。
- ・社会人として議論が出来るように、グループディスカッション技術と発信能力も高める。
- ・グローバルな視点から人間の生活環境を知り、分析できるようになる。

授業方法

講義形式で毎回時の課題をパワーポイントを使用し提示。その後、講義内容について興味関心、疑問が沸いた事柄についてディスカッションを行う。他者と自分の意見の違いを知ること、幅広い視点を持つ。また考察した内容をTED形式にまとめて発表することで発信能力も高める。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
・講義内容についての説明
・地域環境デザインとは？
- 第2回 北海道の視点①
2018年は蝦夷地から北海道へ命名され150年の節目の年になる。本州とは異なる都市形成を歴史的背景から考察し、現在の北海道や石狩市、札幌市の成立ちについて検証する。
- 第3回 北海道の視点②
地元である北海道を広く世界の中での位置づけを行い、その歴史の固有性、寒冷地としての特徴、自然環境などを概観する。その中で人口減少（過疎）問題、多文化共生問題、異文化との接触等について触れる。
- 第4回 日本の国土政策
江戸期以来の我が国の国土政策を概観し、鎖国から開港、殖産興業を経てアジアのパワーになりながらも大戦によって国土の思想を大きく変えた経緯を振り返る。第二次大戦後の高度成長とその後の国土計画に着目し、今日の日本の方向を知る。
- 第5回 ケーススタディ 漁業のマチ 石狩市厚田
石狩市北部に位置する厚田を対象として行われた一連の調査を下敷きに、先住民集落から始まったその歴史、集落形成、漁港としての発展を振り返り、今日の少子高齢化現象、限界集落化問題を論じ、再生の可能性を探る。（レポート出題）
- 第6回 ケーススタディ 農業・酪農のマチ 名寄市・中標津町
農業の名寄市、酪農の中標津町の集落形成の歴史と現在について考察を深める。それぞれの課題を抽出し、行政・自治体・団体・企業の取り組みを検証する。
- 第7回 ケーススタディ 炭鉱のマチ 歌志内市・岩見沢市・三笠市・夕張市・釧路市
石炭による集落の発展と衰退、歴史と現在、観光資源について考察を深める。それぞれの課題を抽出し、行政・自治体・団体・企業の取り組みを検証する。
- 第8回 ケーススタディの検証 これまでのまとめ
これまでの講義内容をまとめて、グループディスカッションを行う。
興味関心、疑問事項を5分間のプレゼン内容にまとめて検証を行う。※時期的に就職活動との関連性も有り。
- 第9回 災害と復興
世界各地で発生する災害（人災・天災）について概観し、そこで発生する生活環境の破壊、混乱に対していかなる方策が有効であるか、いくつかの事例を通して検証する。
- 第10回 観光資源の考察
札幌市（雪まつりの成立ちと現状、羊ヶ丘になぜクラーク像があるのか？など身近な事例検証）
行政・自治体・企業などから見た地域環境デザインとは何かを深める。
- 第11回 観光資源の考察
小樽市（北のウォール街、インバウンド向け施策など身近な事例検証）、本州の歴史地区との比較検証。
行政・自治体・企業などから見た地域環境デザインとは何かを深める。
- 第12回 観光資源の考察
国外から見た日本・北海道とは？
行政・自治体・企業などから見た地域環境デザインとは何かを深める。

第13回 国外からの視点

世界のそれぞれの文化圏には固有の文化を示す有形・無形のさまざまな遺産が存在する。文化の継承発展を目的とした遺産の評価、その保護のために方策についてさまざまな事例をグローバルな角度から紹介する。地域の文化と技芸の掘り起こし、記録（アーカイブ化）、その持続のための仕組みなどについて広く論ずる。

第14回 これまでのまとめ

講義の中から興味関心・疑問に思ったことへのディスカッションとプレゼンテーション技法について。

第15回 最終プレゼンテーション

第14回の内容をプレゼンテーションと行い、さらに深める。

成績評価の方法

プレゼンテーション・レポート（60%）、グループディスカッション（40%）

履修にあたっての注意

4年後期ですので、社会人としての視点を積極的に持ってください。

教科書・参考書に関する備考

授業中に適時紹介します。

参考書

野田邦弘『文化政策の展開 アーツ・マネジメントと創造都市』（学芸出版社、2014、ISBN：978-4761525705）
佐々木雅幸・川井田祥子・萩原雅也『創造農村：過疎をクリエイティブに生きる戦略』（学芸出版社、2014、ISBN：978-4-7615-2570-5）
三宅理一『境界線から考える都市と建築』（鹿島出版会、2017、ISBN：978-4-306-04652-8）

授業のねらい

前半は戦前の北海道を素材に、後半は戦後日本を素材に、経済開発あるいは経済成長と女性の生活との関わりについて考察します。それを通して、女性の生き方の当たり前がいかに変化したのか、またしていないのかを理解する。

ディプロマポリシーのうち態度・志向性に関する部分を育成する。

到達目標

歴史が暗記物でないことがわかる。

過去の女性の生活を通して現代の生活を振り返ることができる。

過去と現在を通じて、経済発展における女性の境遇の共通点と相違点を理解できる。

授業方法

基本的には講義を予定していますが、受講生の人数によって参加型の双方向性を重視した授業形態をとります。その場合、欠席のために参加機会を失った受講生の単位取得は望めません。

事前に資料を配布するので、よく理解してから授業にのぞむこと。

授業計画

- 第1回 ガイダンス（内田）
- 第2回 北海道の幕末から明治初年における女性の地位（内田）
アイヌの女性と和人の女性
- 第3回 明治初期：開拓移民と女性（内田）
- 第4回 明治初期：開拓移民と女性（内田）
- 第5回 農村女性の生活誌（木脇）
- 第6回 北海道開拓使と殖産興業政策（内田）
- 第7回 工業化と女性、戦争体制と（内田）
- 第8回 戦後民法改正と女性の地位（内田）
- 第9回 高度成長と専業主婦の時代（内田）
- 第10回 学歴の高度化と女子教育の展開（木脇）
- 第11回 高度成長の終わりと女性解放運動
- 第12回 労働力の女性化、女性の労働力化、均等法
- 第13回 新自由主義と女性
- 第14回 人口政策と女性（木脇）
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

出席率によって受験資格を与え、到達目標を測定するための期末試験（100％）で評価する。

履修にあたっての注意

授業時間の倍の自習時間を授業進行の前提とします。

教科書・参考書に関する備考

必要な資料は、コピー、映像等で用意する。

授業のねらい

東南アジアを中心とする世界各国の経済・社会・政治・歴史について、フィリピンの事例も取り入れながら、体系的に学習する。そして多面的かつグローバルな視野を持って、国際経済を理解する。

到達目標

国際経済に関する理解を深め、東南アジアから見えてくる世界各国の社会・経済の発展と、そのあるべき姿について、各自が問題関心を持ち、自ら考える能力を身につける。

授業方法

主に講義形式で、近現代の世界経済・社会・政治・国際関係の概要について、板書を中心に解説する。このため本講義専用ノートの準備が必要である。また授業内容に関するリアクションペーパーも適宜提出してもらう。授業計画の前後を関連させる自宅学習を行って下さい。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 戦後のアジア経済
- 第3回 アジア経済の政治的特徴
- 第4回 アジアの民主化と経済成長
- 第5回 アジアの工業化と産業政策(1)
- 第6回 アジアの工業化と産業政策(2)
- 第7回 グローバル化とアジア通貨危機(1)
- 第8回 グローバル化とアジア通貨危機(2)
- 第9回 グローバル化と世界金融危機(1)
- 第10回 グローバル化と世界金融危機(2)
- 第11回 世界金融危機と日本経済
- 第12回 ケーススタディ：フィリピンの社会経済(1)
- 第13回 ケーススタディ：フィリピンの社会経済(2)
- 第14回 ケーススタディ：フィリピンの社会経済(3)
- 第15回 授業のまとめ、復習テスト

成績評価の方法

平常点（授業への参加状況、リアクションペーパー）：40%、到達目標を測定するための復習テスト：60%

履修にあたっての注意

板書が中心で、復習テストも板書内容の中から出題するので、無欠席の志で臨まないと授業についていくのが難しいと思われる。積極的な授業参加を期待する。

授業のねらい

この授業では一般に「国際協力論」と呼ばれる内容を扱う。一般に国際協力や開発援助と呼ばれている分野を中心に、そこで活動する国家、国際機関、NGO、企業などの役割や相互関係を学習する。国際協力をより立体的に理解するために、(1)背景としての貧困や紛争などの南北格差の現実(2)開発の手段としての政府 ODA や国連のイニシアチブ(3)NGOのネットワークによるボランティア活動の展開、の3点を軸に国際協力のアクターと活動がもつ可能性と限界を、理論と事例の双方から包括的に検討する。また、多様な地域の現場の問題や活動などをとりあげ、日本のNGOや国内ボランティアも取り上げる。

到達目標

この授業の目的は、日本において漠然と「与える側」の論理から一方的に語られることが多い国際協力を、さまざまなアクターの活動と実態を学習する中で、より多面的・客観的に理解することを目標としている。具体的には、国家・国際機関・NGOなどがどのような分野で、どのような異なる役割を担い、相互に関係しているのかを理解すると同時に、その学習の中から現代の世界に山積する多くの問題の現実に触れ、現在どのような対応がなされ、将来なされるのかについての基本的知識を得ることである。また、国際協力を通じた日本と世界のつながりについての基礎的認識の確立ができるようになることである。

授業方法

講義を軸としながら、開発援助に関連する国家・国際機関・NGOレベルのフィールドで活動する人々のドキュメンタリーで事例を考察し、青年海外協力隊など開発援助に実際に参加した体験者のお話を直接聞くなどして、多角的に開発援助の実態を理解する。Webサイトや動画など、学生が自分でも調べ学習することができるリソースを紹介し活用することで、レポート課題や定期試験で行う小論文作成への自己学習も促す。事前学習は30分程度、毎回のテーマについて自らの関心事や問題意識を定め、事後学習は課題として出させるレポートなどの作成に、授業中に提示されたリソースを活用して1時間程度の作業を行ってもらう。

授業計画

- 第1回 ・イントロダクション～激動の世界と開発援助
戦後日本は戦争の反省から、外交の柱をODAを中心とした国際協力、いわゆる「平和外交」に据えた。日本にとって、世界にとって、開発援助とは何か？を考える。
- 第2回 ・戦後日本の国際協力の哲学
緒方貞子、元国連難民高等弁務官と戦争の記憶。日本の戦後と日本人の開発援助へのかかわりを紛争・難民問題に世界に先駆けて取り組んだ緒方氏の哲学から学ぶ。
- 第3回 ・開発援助の図式
国際貢献と国際協力の違い。紛争への軍事的介入は是か非か？ ODAとは何か。ドナー国、途上国、国連、NGO、企業…開発援助を「見るための道具」を整理する。
- 第4回 ・戦後日本のODAとJICA
世界銀行やIMFに次ぐ予算規模を持つ日本のJICA。その前身が小さな組織だったことは知られていない。日本のODAとJICAの活動の変遷から、日本の開発援助を考える。
- 第5回 ・青年海外協力隊の活動
元青年海外協力隊員から、日本の若者によるアフリカのフィールドでの活動についてのお話を聞く。
- 第6回 ・国連の歴史と組織
戦後の開発援助でその役割を増大する国連。その国連の成り立ちと、構造について開発援助の視点から考察する。
- 第7回 ・開発援助のフォーラムとしての国連の変容
経済社会理事会から、IMFや世界銀行などの金融機関を中心としたワシントン・コンセンサスへ、国連での開発援助の在り方の変遷を俯瞰する。
- 第8回 ・国連で活躍する日本人
WFP(世界食糧計画)で活躍する日本人職員などの事例を中心に、国連の各機関での仕事の実際について学習する。
- 第9回 ・NGOの発生と展開
日本はNGO後進国とも言われるが、世界レベルでのNGOの歴史とその意義について、具体的NGOの活動から考察する。
- 第10回 ・NGOの現代的展開(世界のNGO)
どのような国際NGOが分野別にあるのか、具体的なNGOの活動や歴史などを学習し、市民による開発援助へのかかわりを学ぶ。
- 第11回 ・NGOの現代的展開(日本のNGO)
かつてはNGO後進国とも言われた日本だが、東アジア地域を中心に着実にその活動の範囲と幅を広げている。日本のNGOの活動についてまとめる。
- 第12回 ・NGOで活躍する日本人
医療系NGOを事例に、世界各地の発展途上国で活躍する日本人の事例を学習する。

-
- 第13回 ・ ソーシャル・ビジネス
ビジネスは貧困を救うのか？センのソーシャル・ビジネスの哲学と実践を中心に、単なる援助ではないビジネス的アプローチの開発に迫る。
- 第14回 ・ 先進国の民主政治と開発援助
欧米を中心とした先進国の民主主義、市民社会が開発援助の領域における地球市民社会の形成に果たす役割を俯瞰する。
- 第15回 ・ 日本の市民社会と開発援助
戦後日本の社会運動や民主主義の変遷を軸に、開発援助との日本の市民のかかわりの過去・現在・未来の展望を考察する。

成績評価の方法

レポート課題の提出状況と内容(40%)、到達目標を測定する小論文試験(60%)

履修にあたっての注意

開発援助を中心とした国際協力の取り組みと実態に関心のある全ての学生を歓迎します。国際関係論や国際政治の基礎知識があることが望ましいが必須ではない。開発援助を契機に世界の諸問題や日本のあり方などを真剣に考える姿勢が求められる。講義内容に関連する自主調査、レポートなどが求められる。

教科書・参考書に関する備考

参考書については、各回のテーマに関連するものを随時授業内で提示する。

参考ホームページ

JICA-国際協力機構 <https://www.jica.go.jp/>(日本政府の開発援助機関)
国連広報センター <http://www.unic.or.jp/>(国際連合の日本語の窓口)
国際協力 NGO センター <http://www.janic.org/>(日本の国際協力 NGO の窓口)

541411

テーマ研究 A 担当教員：田中宏実・岡崎由佳子・木脇奈智子・長尾順子 2単位 前期

授業のねらい

これまでに人間生活学科で学んできた知識の総合化を図り、応用へと展開できる力を育むことを目的とする。人間生活学科のカリキュラムの中で家族の生活・福祉、生活の安全、持続可能な社会と生活等といったテーマをとりあげ、複数の教員指導のもとに各専門分野の知見を直接結びつけて学習する方法をとる。

到達目標

1. 本演習の目的を理解し、各テーマに対する十分な知見を表現できる。
2. 演習時に積極的に課題を提案し、それに関して思考を深めることができる。
3. グループワークに積極的に参加、意見交換し、プレゼンテーションできる。

授業方法

講義形式により基礎知識の確認をし、それをもとに各テーマに対するグループ討論、ワークショップ、まとめとしてプレゼンテーションを行う。授業で学んだことをもとに最終レポートに取り組み。事前学習としてこれまでで大学四年間で学んだ生活科学に関わる学びを振り返る課題を出す場合がある。

授業計画

- | | | |
|------|-------|------------------------------------|
| 第1回 | ガイダンス | ：この授業がめざすもの |
| 第2回 | テーマ1 | ：家族の生活と福祉 1) 基礎知識 |
| 第3回 | テーマ1 | ：家族の生活と福祉 2) 生活時間 |
| 第4回 | テーマ1 | ：家族の生活と福祉 3) 生活支援 |
| 第5回 | テーマ1 | ：家族の生活と福祉 4) 住生活 |
| 第6回 | テーマ1 | ：家族の生活と福祉 5) 衣生活 |
| 第7回 | テーマ1 | ：家族の生活と福祉 6) 食生活 |
| 第8回 | テーマ2 | ：生活者の安全と安心～防災の視点から 1) 住生活から考える防災 |
| 第9回 | テーマ2 | ：生活者の安全と安心～防災の視点から 2) 衣生活から考える防災 |
| 第10回 | テーマ2 | ：生活者の安全と安心～防災の視点から 3) 食生活から考える防災 |
| 第11回 | テーマ2 | ：生活者の安全と安心～防災の視点から 4) 家族の安全を守る防災体験 |
| 第12回 | テーマ3 | ：持続可能な社会と生活環境問題 1) 将来の家族像と住生活環境 |
| 第13回 | テーマ3 | ：持続可能な社会と生活環境問題 2) 将来の衣生活と食生活環境 |
| 第14回 | テーマ3 | ：持続可能な社会と生活環境問題 3) 将来の人間生活について考える |
| 第15回 | 総括 | |

成績評価の方法

到達目標1を測定するための最終レポートの内容(50%)、到達目標2、3を測定するためのグループ活動への参加状況(25%)、プレゼンテーションの仕方(25%)により評価する。

なお、個別課題演習の場合は、報告レポート(50%)とプレゼンテーション(50%)で評価する。

履修にあたっての注意

生活科学の学びの集大成になる内容です。授業では講義のほか、グループ活動、ディスカッション、体験活動などを行いますので積極的に参加して下さい。

教科書

使用しない

教科書・参考書に関する備考

参考書：適宜、紹介する

授業のねらい

ソーシャルワーク（相談援助）の知識と技術にかかわる科目（「ソーシャルワーク実習Ⅰ・Ⅱ」など）での学びを前提として、「ソーシャルワーク実習Ⅲ」の事前・事後学習をとおしてソーシャルワーカーに求められる専門的な知識・技術を習得し、社会福祉の支援活動における総合的な実践力を身につけることを目的とする。

到達目標

1. ソーシャルワーカーに求められる資質、技能、価値・倫理、自己に求められる課題把握等、社会福祉の支援活動の総合的に対応できる専門的な能力を身につける。
2. 社会福祉領域の施設・機関等における支援活動を、専門的技術として概念化・理論化し論じることができる。

授業方法

集団指導及び個別指導をとおして社会福祉の支援活動における専門的技術を体得するための準備を行い、併行して履修する「ソーシャルワーク実習Ⅲ」と関連づけて専門的技術として概念化・理論化する。

事前学習としては、シラバスを参照して当該授業の準備（関連科目の振り返りや資料収集）を行うことを求めます（所要時間 45～90 分程度）。事後学習は、実習報告プレゼンテーション及び報告書作成に向けて実習内容の振り返りや資料整理をしておくことを求めます（所要時間 45～90 分程度）。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
「ソーシャルワーク実習Ⅰ・Ⅱ」の到達と専門的技術習得に向けての学びかたの確認
- 第2回 テーマ別学習(1)
実習施設・機関の領域についての理解（学習内容の報告と教員による指導・助言）
- 第3回 テーマ別学習(2)
実習施設・機関の理解（学習内容の報告と教員による指導・助言）
- 第4回 テーマ別学習(3)
実習施設・機関におけるソーシャルワークの理解（学習内容の報告と教員による指導・助言）
- 第5回 個別課題検討(1)
実習個別課題の添削指導
- 第6回 個別課題検討(2)
実習個別課題の添削指導
- 第7回 個別課題検討(3)
実習個別課題の添削指導
- 第8回 スーパービジョン(1)
教員、実習指導者、学生によるスーパービジョン
- 第9回 スーパービジョン(2)
教員、実習指導者、学生によるスーパービジョン
- 第10回 グループ学習
学生相互による実習経験の共有
- 第11回 実習報告プレゼンテーションの準備
プレゼンテーション内容についての個別指導
- 第12回 実習報告プレゼンテーション(1)
- 第13回 実習報告プレゼンテーション(2)
- 第14回 実習報告書作成(1)
実習報告書の添削指導
- 第15回 実習報告書作成(2)
実習報告書の添削指導

成績評価の方法

授業全般への参加状況（30%）、到達目標を測定する実習報告プレゼンテーション（30%）、実習報告書（30%）により評価する。

履修にあたっての注意

1. 「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ・Ⅱ」及び「ソーシャルワーク実習Ⅰ・Ⅱ」の単位を取得していること。
2. 「ソーシャルワーク実習Ⅲ」を併行履修すること。
3. 各回終了後に各自で学習内容を確認し、課題や指示された予習・事前学習事項を準備したうえで次回授業に参加すること。

授業のねらい

生活を思想や文化の面から考察する発展科目です。受講生個人がテーマを設定し、教員がそれをサポートすることで、生活研究能力の高度化を目指します。

到達目標

独自の文化的・思想的視角から生活を評価することができる。

授業方法

発表及び討論

授業計画

- 第1回 打ち合わせ テーマの設定準備
- 第2回 テーマ設定に関する議論
- 第3回 発表と討論
- 第4回 発表と討論
- 第5回 発表と討論
- 第6回 発表と討論
- 第7回 発表と討論
- 第8回 発表と討論
- 第9回 発表と討論
- 第10回 発表と討論
- 第11回 発表と討論
- 第12回 発表と討論
- 第13回 発表と討論
- 第14回 発表と討論
- 第15回 総括

成績評価の方法

発表と討論の内容

授業のねらい

中学・高等学校家庭・福祉の教員免許取得希望者を対象とし、教師をめざすにあたっての必要な基礎的知識の確認を重ねながら、自分の教師像を描き、それをプレゼンテーションできるようになることをねらいとする。

到達目標

- ・学習指導要領の解説をとおして、教科の学習内容、指導上の留意点について理解できる。
- ・教科の教科書を通して学習内容のポイントを理解できる。
- ・教育の実際の姿を客観的に捉え、考察できる。
- ・教師として必要な力を多角的に考え、身につけることができる。
- ・自分の教師像をもち、それを他者に伝えることができる。

授業方法

講義およびディスカッション、個別指導を含む。受講者は、教員になる自覚を持って積極的に授業に参加してください。教科書、指導要領解説等に事前に目を通しておくこと。事後学習として、本授業の内容や採用試験の過去問等をくり返し復習することが大切です。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
この授業の趣旨と方法について
- 第2回 教師に必要な力～家庭科教育の特徴～
- 第3回 学習指導要領のポイント解説(1) 次期学習指導要領を見据えた学力
- 第4回 学習指導要領のポイント解説(2) 家庭科における教科目標・科目の目標、指導上の留意事項
- 第5回 教科書における学習ポイント (家庭科)
- 第6回 教育学をもう一度振り返る (教育史・教育方法の基礎)
- 第7回 教師になるために知っておくべき教育法規
- 第8回 子どもとの関係性を築くための心理学(学習・発達心理学)
- 第9回 教育時事から学ぶ学校の現状
- 第10回 特別支援教育と学習
- 第11回 教員採用試験における自己推薦書の作成方法
- 第12回 個別面接を通して自分の意思を表明する
- 第13回 集団面接において自分の意見を表明する
- 第14回 集団面接を通して自分と他者の意見を調整する
- 第15回 自分の授業の型を作る (模擬授業演習)

成績評価の方法

授業内での小テスト (30%) およびディスカッションでの発言内容 (70%) によって到達目標を測定し評価する。

履修にあたっての注意

教職課程の履修者に限る

教科書・参考書に関する備考

参考書は、適宜紹介する。

授業のねらい

社会福祉士国家試験の受験予定者を対象として、ソーシャルワーカーに求められる基本的な知識・技術を確認する。わが国の社会保障や社会福祉の全体像をふまえて、変更が早まっている社会福祉の各分野における法制度を概括し、とくに、最近の制度改正やニーズ・運用の動向について学習する。

到達目標

・社会福祉士国家試験（4年次2月実施）に合格できるレベルの学力を身につける

授業方法

- ・初回オリエンテーションの説明と配付資料から到達目標の確認と課題の理解に努める。
- ・授業は講義形式を基本とする。
- ・第4回以降の授業を3クールに分け、最重要項目を中心に反復的・螺旋的な指導を行う。
- ・毎回授業終了時に復習・確認してほしいポイント（1科目あたり所要時間30分程度）、ならびに次回の授業テーマと予習・事前学習事項（1科目あたり所要時間60～90分程度）を指示する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 社会福祉士国家試験出題傾向と対策 1) 共通科目
- 第3回 社会福祉士国家試験出題傾向と対策 2) 専門科目
<1クール目>
- 第4回 人体の構造と機能及び疾病
心理学理論と心理的支援
社会理論と社会システム
現代社会と福祉
地域福祉の理論と方法
福祉行財政と福祉計画
社会保障
- 第5回 低所得者に対する支援と生活保護制度
保健医療サービス
権利擁護と成年後見制度
社会調査の基礎
福祉サービスの組織と運営
相談援助の基礎と専門職
相談援助の理論と方法
- 第6回 高齢者に対する支援と介護保険制度
障害者に対する支援と障害者総合支援
児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度
就労支援サービス、更生保護制度
到達目標についての試験(1)
- 第7回 試験(1)の振り返りとフィードバック
<2クール目>
- 第8回 人体の構造と機能及び疾病
心理学理論と心理的支援
社会理論と社会システム
現代社会と福祉
地域福祉の理論と方法
社会保障
- 第9回 低所得者に対する支援と生活保護制度
保険医療サービス
権利擁護と成年後見制度
社会調査の基礎
福祉サービスの組織と運営
相談援助の基礎と専門職
相談援助の理論と方法
- 第10回 高齢者に対する支援と介護保険制度
児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度
就労支援サービス、更生保護制度
到達目標についての試験(2)

-
- 第11回 試験(2)の振り返りとフィードバック
<3クール目>
- 第12回 人体の構造と機能及び疾病
心理学理論と心理的支援
社会理論と社会システム
現代社会と福祉
地域福祉の理論と方法
社会保障
- 第13回 低所得者に対する支援と生活保護制度
保険医療サービス
権利擁護と成年後見制度
社会調査の基礎
福祉サービスの組織と運営
相談援助の基礎と専門職
相談援助の理論と方法
- 第14回 高齢者に対する支援と介護保険制度
児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度
就労支援サービス、更生保護制度
到達目標についての試験(3)
- 第15回 試験(3)の振り返りとフィードバック

成績評価の方法

理解度試験（100％）で評価する。
なお、国家試験の模擬試験受験は単位修得の必須条件である。

履修にあたっての注意

- ・ 予習及び復習を十分に行うこと

教科書・参考書に関する備考

初回オリエンテーション時に資料を配付し、テキストおよび推奨図書を紹介する

授業のねらい

この授業では、宗教および思想に関わる分野で、受講者各自が研究テーマを設定した上で、研究計画を立て、必要な文献を収集し、それらの読解と分析に基づく考察およびディスカッションをとおして、各自が自分の卒業研究を一つの論文にまとめ上げるスキルを身に着けることを目指す。担当教員は、その都度、必要な助言と課題を与え、成果の発表まで導く。

到達目標

- ・テーマの設定、研究計画の立案、文献収集、読解と分析、考察へと着実に自分の能力を高めることができる。
- ・研究の過程で、収集した文献資料に照らして、テーマをより具体的かつ狭い範囲に絞込み、論文に仕上げる事ができる。

授業方法

受講生の報告に基づいて、適切な助言を与えながら進めて行く。常に書物・論文・ネット情報等に当たって、自分のテーマに関わる情報を収集する貪欲さを求めます。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション
- 第2回 情報収集と読解について
- 第3回 情報の分析と考察について
- 第4回 研究と論文について（論文の文章、体裁、著作権などの初歩、研究上の倫理）
- 第5回 卒業研究のテーマ設定
- 第6回 関連資料の収集・整理、追加資料の収集・整理および報告(1)
- 第7回 関連資料の収集・整理、追加資料の収集・整理および報告(2)
- 第8回 関連資料の収集・整理、追加資料の収集・整理および報告(3)
- 第9回 卒業論文の構成の検討：報告および意見交換
- 第10回 卒業論文の目次案の提出と検討：報告及び意見交換
- 第11回 論文の体裁、本文、引用、要約、パラグラフ、脚注、参考資料等について、研究倫理について
- 第12回 各自による収集資料の読解・分析・考察に基づく指導(1)
- 第13回 各自による収集資料の読解・分析・考察に基づく指導(2)
- 第14回 各自による収集資料の読解・分析・考察に基づく指導(3)
- 第15回 中間報告および夏季休業中の課題提示
- 第16回 後期オリエンテーションおよび卒業研究に関する進捗状況報告
- 第17回 卒業研究のテーマおよび論文構成の再検討
- 第18回 PCによる卒論執筆段階での指導(1)
- 第19回 PCによる卒論執筆段階での指導(2)
- 第20回 PCによる卒論執筆段階での指導(3)
- 第21回 論文の体裁、本文、引用、要約、パラグラフ、脚注、参考資料等に関する実際の指導
- 第22回 卒業論文の全体構成の再確認と最終修正（章立て、節立て、タイトル等）
- 第23回 卒業論文および要旨の作成（個別指導含む）(1)
- 第24回 卒業論文および要旨の作成（個別指導含む）(2)
- 第25回 卒業論文および要旨の作成（個別指導含む）(3)
- 第26回 卒業論文および要旨の作成（個別指導含む）(4)
- 第27回 卒業論文および要旨の作成（個別指導含む）(5)
- 第28回 卒業論文および要旨の提出
- 第29回 卒業論文発表に向けた資料作成
- 第30回 卒業研究発表

成績評価の方法

授業への積極的参加（20%）、情報収集・読解・分析力（20%）、発表（20%）、卒業研究成果（40%）

履修にあたっての注意

受講生自らが演習を運営する積極性が必要。日常的な情報収集し、常に疑問・質問を用意する姿勢を持つこと。

教科書・参考書に関する備考

各自のテーマに沿って受講生が探し出してきた情報の中から適切なものを選んで使用する。

参考ホームページ

適宜助言する。

授業のねらい

本演習では、これまで教職課程科目などで学習してきた「教育」に関する知識や関心を深めていくことを目指している。その際には、文献購読のみならず、実際に教育の場に赴き、そこで教育に関する「感性」を養っていききたい。

到達目標

- ・様々な資料を分析し、それらをまとめ、発表する技能を修得することができる。
- ・グループワーク・フィールドワークに親しむことができる。
- ・卒業論文作成のための論理的思考ができる。
- ・A 1版のポスターを通して、自らの卒業論文を要約することができる。

授業方法

- ・前半部分では、ゼミ生全体で、論文の書き方を習得する。そのため、講義形式に加え、文章の検討会を毎週実施する。そのため、配布資料の準備は必須となる。
ただし、教育実習などが前期には随時入るため、個別指導もありうる。
- ・後半部分では、毎週、一定程度の論文を書き進め、それをゼミ全体で講評しあう。
また、卒業論文の完成後は、ポスター作りの方法を習得するため、ワークショップ形式でゼミを進めていく。

授業計画

第1回	前期
第1回	オリエンテーション+卒業論文テーマの決定
第2回	第2回 先行研究の分析1：教育学の基礎文献
第3回	第3回 先行研究の分析2：関心のあるテーマ
第4回	第4回 先行研究に関する発表
第5回	第5回 研究目的の設定1：テーマを見つけ出す
第6回	第6回 研究目的の設定2：テーマを深め、目的を固める
第7回	第7回 データの収集と分析1：データ収集方法
第8回	第8回 データの収集と分析2：量的データ
第9回	第9回 データの収集と分析3：質的データ
第10回	第10回 論文の書き方（研究倫理）
第11回	第11回 論文構成の検討1：目次を作る
第12回	第12回 論文構成の検討2：目次を吟味する
第13回	第13回 論文構成の検討3：論文の一貫性を確認する
第14回	第14回 プレゼンテーションの方法
第15回	第15回 中間報告会
第16回	後期
第16回	夏季休業中の成果発表会1：概要発表
第17回	第17回 夏季休業中の成果発表会2：研究方法発表
第18回	第18回 夏季休業中の成果発表会3：結論発表
第19回	第19回 テーマに関する最新動向の検討1：日本の動向
第20回	第20回 テーマに関する最新動向の検討2：世界の動向
第21回	第21回 個人研究と経過報告1：途中経過について
第22回	第22回 個人研究と経過報告2：研究方法の吟味
第23回	第23回 個人研究と経過報告3：研究目的の明確性の吟味
第24回	第24回 論文の作成方法1：図表の書き方
第25回	第25回 論文の作成方法2：註の書き方
第26回	第26回 文章の検討会1：「てにをは」について
第27回	第27回 文章の検討会2：論理的な文章について
第28回	第28回 卒業論文の要旨・ポスターの書き方
第29回	第29回 卒業研究のポスター発表会
第30回	第30回 卒業論文の製本と輪読

成績評価の方法

- ・演習内での発表内容（50%）
- ・自らの卒業論文を要約したポスター（50%）

履修にあたっての注意

1. 日常生活で普通に過ごしていたら見過ごしてしまう「当たり前」のことに疑問を持つように心がけて下さい。
2. 文章・発表などで自分の考えを伝える努力をして下さい。
3. 日々、教育に関心を持って下さい。

教科書・参考書に関する備考

参考書については、各人のテーマなどによって、適宜、紹介します。

授業のねらい

各自のテーマにしたがって、卒業研究を完成させる。

到達目標

自分の卒業研究を素材に、下級生に対して授業をおこなうことができるだけの、論理的思考力、説得的なプレゼン能力を身につける。

授業方法

皆さんが率先して発表し議論するかたちで進めます。教員はコーディネーターの役割を果たします。

授業計画

- 第1回 打ち合わせ、研究倫理について
- 第2回 個別発表 (一回二名)
- 第3回 個別発表 (一回二名)
- 第4回 個別発表 (一回二名)
- 第5回 個別発表 (一回二名)
- 第6回 個別発表 (一回二名)
- 第7回 個別発表 (一回二名)
- 第8回 個別発表 (一回二名)
- 第9回 個別発表 (一回二名)
- 第10回 個別発表 (一回二名)
- 第11回 個別発表 (一回一名)
- 第12回 個別発表 (一回一名)
- 第13回 個別発表 (一回一名)
- 第14回 個別発表 (一回一名)
- 第15回 個別発表 (一回一名)
- 第16回 打ち合わせ
- 第17回 個別発表 (一回一名)
- 第18回 個別発表 (一回一名)
- 第19回 個別発表 (一回一名)
- 第20回 個別発表 (一回一名)
- 第21回 個別発表 (一回一名)
- 第22回 個別発表 (一回一名)
- 第23回 個別発表 (一回一名)
- 第24回 個別発表 (一回一名)
- 第25回 個別発表 (一回一名)
- 第26回 個別発表 (一回一名)
- 第27回 個別発表 (一回一名)
- 第28回 個別発表 (一回一名)
- 第29回 個別発表 (一回一名)
- 第30回 個別発表 (一回一名)

成績評価の方法

討論への参加 (30%)、発表 (70%)

履修にあたっての注意

自分で考えること。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて指示する。

授業のねらい

各自の研究テーマに沿って卒業研究を行うことで、研究の計画、研究の遂行、論文作成および研究発表を行う能力を身につけることを目標とする。

到達目標

- 1 卒業研究のテーマに沿って資料収集とデータの整理を行うことができる。
- 2 プレゼンテーション能力を向上させることができる。
- 3 研究論文を作成することができる。

授業方法

卒業研究のテーマに関する発表、質疑、討論を行い、そこで得られた課題を踏まえて論文を作成していきます。毎回の演習では、レジュメと論文作成に関する事前・事後課題を出します（所要時間 90 分程度）。課題については、演習内に口頭で解説します。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション
- 第2回 研究計画(1) 研究目的の検討
- 第3回 研究計画(2) 研究方法の検討
- 第4回 テーマ発表のための資料作成
「研究倫理」について—「藤女子大学研究倫理基準」の内容を理解する
- 第5回 テーマ発表
- 第6回 関連資料の収集・整理
- 第7回 参考文献の講読
- 第8回 研究の遂行(1) 実験スケジュールの確認
- 第9回 研究の遂行(2) 実験方法の確認
- 第10回 研究の遂行(3) 試薬と器具の準備
- 第11回 研究の遂行(4) 成分の分離と抽出
- 第12回 研究の遂行(5) 実験機器を用いた測定
- 第13回 研究の遂行(6) 実験データの整理
- 第14回 研究の遂行(7) 統計処理
- 第15回 研究の遂行(8) 図表の作成
- 第16回 後期オリエンテーション
- 第17回 論文タイトルと章立ての検討
- 第18回 引用・参考文献の書き方について
- 第19回 卒業論文の作成(1) 研究目的の書き方について
- 第20回 卒業論文の作成(2) 研究目的の作成と経過報告
- 第21回 卒業論文の作成(3) 研究方法の書き方について
- 第22回 卒業論文の作成(4) 研究方法の作成と経過報告
- 第23回 卒業論文の作成(5) 研究結果の書き方について
- 第24回 卒業論文の作成(6) 研究結果の作成と経過報告
- 第25回 卒業論文の作成(7) 考察の書き方について
- 第26回 卒業論文の作成(8) 考察の作成と経過報告
- 第27回 卒業論文の作成(9) 要旨と発表資料の作成方法について
- 第28回 卒業論文と要旨の提出
- 第29回 卒業論文発表のための資料作成
- 第30回 卒業論文発表会

成績評価の方法

到達目標 1 と 2 を測定する発表内容 (50%)
到達目標 3 を測定する論文内容 (50%)

履修にあたっての注意

論文完成に向けて目標を定め、主体的に取り組んでください。

教科書・参考書に関する備考

教科書：指定しません。
参考書：演習の中で各自のテーマに応じて随時紹介します。

授業のねらい

3年次の人間生活学研究演習の成果を踏まえ、各自のテーマに沿って論文作成するために必要な知識や技術を活用する。具体的には、調査としての「文献研究」や「フィールド調査（インタビュー・参与観察、地域アセスメント等）」の展開を通して、研究方法の理解の深化及び4年間の学びの集大成としての卒業論文の完成を目指します。

到達目標

1. 具体性、重要性、調査可能性、実現可能性、倫理性等を考慮した調査設問を設定できる
2. 社会福祉に関する論文の有効な利用の仕方を体得できる
3. 社会福祉専門職として必要な知識を生産することができる

授業方法

・前期「文献調査報告」については、各自卒業研究テーマに沿った文献を選択・収集し、研究成果の発表・討議を中心とします。分担者はレジュメを作成の上発表し、全員で討議する形式とします。
・後期は文献調査、フィールド調査結果を合わせた研究発表を個別指導を中心に展開する予定です。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、研究倫理について
- 第2回 研究計画書の検討（テーマ、論文構成等の検討）
- 第3回 研究テーマに応じた文献調査報告(1)研究計画書に関するグループディスカッション
- 第4回 研究テーマに応じた文献調査報告(2)研究計画書に関するグループディスカッション
- 第5回 研究テーマに応じた文献調査報告(3)研究計画書に関するグループディスカッション
- 第6回 研究テーマに応じた文献調査報告(4)研究計画書に関するグループディスカッション
- 第7回 研究テーマに応じた文献調査報告(5)研究計画書に関するグループディスカッション
- 第8回 研究テーマに応じた文献調査報告(6)研究計画書に関するグループディスカッション
- 第9回 研究テーマに応じた文献調査報告(7)研究計画書に関するグループディスカッション
- 第10回 研究テーマに応じた文献調査報告(8)研究計画書に関するグループディスカッション
- 第11回 卒業研究論文骨子案作成
- 第12回 フィールド調査計画立案
- 第13回 フィールド調査(1)実施
- 第14回 フィールド調査(2)実施
- 第15回 フィールド調査結果まとめ
- 第16回 卒業研究論文中間報告(1)発表と討議
- 第17回 卒業研究論文中間報告(2)発表と討議
- 第18回 卒業研究論文中間報告(3)発表と討議
- 第19回 卒業研究論文中間報告(4)発表と討議
- 第20回 卒業研究論文作成(1)個別指導
- 第21回 卒業研究論文作成(2)個別指導
- 第22回 卒業研究論文作成(3)個別指導
- 第23回 卒業研究論文作成(4)個別指導
- 第24回 卒業研究論文作成(5)個別指導
- 第25回 卒業研究論文作成(6)個別指導
- 第26回 卒業研究論文作成(7)個別指導
- 第27回 卒業研究論文作成(8)個別指導
- 第28回 卒業研究論文要旨作成(1)個別指導
- 第29回 卒業研究論文要旨(2)作成個別指導
- 第30回 卒業研究論文提出
- 31回目以降に社会福祉士国家試験対策を行う

成績評価の方法

到達目標（1、2、3）については、授業への参加状況・グループ参与度（20%）、情報収集能力（20%）、報告内容（20%）、卒業研究成果（40%）として評価します。

履修にあたっての注意

- ・社会福祉士国家試験現役合格を目指すゼミ生（全員）を対象に国家試験対策を行うため、卒業論文は遅くとも11月中旬までに提出を求めます。
- ・ゼミ運営（ゼミの進行、発表者決定、レジュメ作成）は学生主体としますので、積極的な受講（参画）を期待しています。

教科書・参考書に関する備考

各自の研究テーマに応じて、随時リファレンスしていく予定です。

授業のねらい

この授業では、卒業研究演習を基に、卒業論文を作成に役立つように要旨のまとめ方や発表の仕方が上達することを狙いとする。また、プレゼンテーションの方法も工夫し、わかりやすい説明ができるようにする。意見交換を自由に行い、互いの相違も受け入れる姿勢を学ぶ。

到達目標

- ・より早く文章の内容を理解し、要約して自分のことばで説明できる力をつける。
- ・将来、どのような企業や職場でも的確に内容を伝えることができる力をつける。
- ・パソコンの操作を習得するよう努める。

授業方法

前期は卒論の内容を1回に二人ずつ発表する形式をとる。毎回、学生たちがその回のテーマについてディスカッションし、相互の意見を交換する。

卒論制作にあたってパソコンの操作の指導をする。

毎回、次回の予定を確認し、準備するよう指示する。

授業計画

- 第1回 ガイダンスおよび研究倫理について説明する（「藤女子大学研究倫理規準」の内容について説明する）
 第2回 図書館の使い方・文献の集め方等の説明
 第3回 卒論の進め方・書き方についての説明
 第4回 卒論のテーマ設定・アウトラインについて、個人面談をする
 第5回 テーマを設定する
 図書館などで資料を集める
 第6回 2～3人が論文の内容とアウトラインを報告し、相互に意見交換を行う
 第7回 2～3人が論文の内容とアウトラインを報告し、相互に意見交換を行う
 第8回 2～3人が論文の内容とアウトラインを報告し、相互に意見交換を行う
 第9回 卒論の構成の再検討をする（アウトラインに沿って、個人指導をする）
 第10回 卒論の構成の再検討をする（アウトラインに沿って、個人指導をする）
 第11回 卒論の構成の再検討をする（アウトラインに沿って、個人指導をする）
 第12回 パソコン室で操作などの説明をする
 第13回 パソコン室で操作や文献の整理の仕方を説明する
 第14回 章の立て方、結論の導き方など、構想をよく練る
 第15回 夏休み中にすべきことを指示する
 第16回 卒論の進捗状況を報告する
 第17回 各自の中間発表を行う
 第18回 各自の中間発表を行う
 第19回 各自の中間発表を行う
 第20回 パソコン室にて各自の卒論を個人指導する
 第21回 パソコンを使用しての指導（パソコン室にて個人指導する）
 第22回 パソコンを使用しての指導（パソコン室にて個人指導する）
 第23回 脚注の付け方、参考文献の付け方など卒論全体の構成を指導する
 第24回 全体構成を再度チェックする
 第25回 卒論の最終チェックをする
 第26回 卒論の最終チェックをする
 第27回 卒論の仕上げ・提出
 第28回 卒論発表会の準備およびポスターコンテストについての説明をする
 第29回 卒論発表会の準備
 第30回 卒論発表会を行う

成績評価の方法

発表の仕方・内容 60%、授業への参加状況 40%により評価する。

履修にあたっての注意

学生は他の発表も注意深く聞き、ディスカッションに積極的に参加するよう努める。卒論のテーマを早目に具体化し多くの文献を使って、論文をまとめる努力をする。

教員としては、個人指導を重視する。

教科書

河野哲也『レポート・論文の書き方入門』（慶応義塾大学出版会、2002年、ISBN：4-7664-0698-2）

教科書・参考書に関する備考

教科書：『論文の書き方』等のテキストを使用する。また、必要に応じてプリントを配布する。

この授業では教員が用意したプリントを使用したり、発表者がプリントを用意する。

参考書：必要に応じて授業中に紹介する。

授業のねらい

卒業研究のテーマにそって研究の計画をたて、論文作成へ向けて調査や文献の検索をし、分析・考察を重ね、論文を作成する力を身につける。

到達目標

1. 研究のために必要なデータや資料を収集する力を身につける。
2. データや資料を分析・考察しまとめる力を身につける。
3. 自分の考えを発表することができる。

授業方法

各自の卒業研究のテーマや内容に関連して、受講者が事前に準備した資料をもとに議論する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 卒業論文の進め方と研究倫理について
- 第3回 各自のテーマと卒業論文の構成についての発表
- 第4回 先行研究の調査法について
- 第5回 各テーマごとの発表と関連資料の講読
- 第6回 各テーマごとの発表と関連資料の講読
- 第7回 各テーマごとの発表と関連資料の講読
- 第8回 各テーマごとの発表と関連資料の講読
- 第9回 各テーマごとの発表と関連資料の講読
- 第10回 各テーマごとの発表と関連資料の講読
- 第11回 研究の中間のまとめ：資料作成
- 第12回 研究の中間のまとめ：資料作成
- 第13回 研究の中間のまとめ：資料作成
- 第14回 研究の中間のまとめ：資料作成
- 第15回 研究の中間発表
- 第16回 研究の中間発表
- 第17回 各テーマごとの研究データの分析方法について
- 第18回 各テーマごとの研究データの分析方法について
- 第19回 各テーマごとの研究データの分析方法について
- 第20回 各テーマごとの研究データの分析方法について
- 第21回 各テーマごとの研究データの分析方法について
- 第22回 各テーマごとの研究データの分析方法について
- 第23回 論文の執筆 研究の背景
- 第24回 論文の執筆 研究の目的
- 第25回 論文の執筆 研究データの整理・分析
- 第26回 論文の執筆 総合考察
- 第27回 論文の執筆 結論
- 第28回 論文の完成
- 第29回 卒業研究発表の準備
- 第30回 卒業研究発表

成績評価の方法

到達目標 1. 2 を測定するために授業での発表内容および参加状況 (50%)、到達目標 3 を測定するために発表内容 (50%) により評価する。

履修にあたっての注意

卒業論文作成へ向けて意欲的に取り組むこと。毎回、発表をもとめるので、事前に発表資料と発表方法について準備しておく必要がある。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて紹介する。

授業のねらい

卒業研究のテーマを確定し、各自のテーマに沿って卒業論文を完成させる。

到達目標

1. 卒業研究の遂行に必要な文献の収集、整理ができる。
2. 先行研究を正しく読み解き、自身の研究に反映できる。
3. 研究論文を完成させることができる。
4. 卒業研究をもとにプレゼンテーションができる。

授業方法

- ・各自のテーマに関する発表、意見交換を行い、得られた課題をふまえて論文を作成する。
- ・毎回の演習では、論文作成に関する事前・事後課題を出す（所要時間 90 分程度）。
- ・毎回の課題については、演習内で解説し、必要に応じて資料を配布する。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション：研究倫理について
- 第2回 卒業研究テーマの確定と、論文構成の検討
- 第3回 研究計画の作成
- 第4回 研究計画の検討
- 第5回 先行研究の収集・整理・分析(1)
- 第6回 先行研究の収集・整理・分析(2)
- 第7回 研究の遂行(1)
- 第8回 研究の遂行(2)
- 第9回 研究の遂行(3)
- 第10回 研究の遂行(4)
- 第11回 研究の遂行(5)
- 第12回 研究の遂行(6)
- 第13回 研究の遂行(7)
- 第14回 中間発表のための資料作成
- 第15回 研究課題の整理と中間発表
- 第16回 後期オリエンテーション
- 第17回 卒業論文のタイトルと章立て
- 第18回 卒業論文の作成(1)
- 第19回 卒業論文の作成(2)
- 第20回 卒業論文の作成(3)
- 第21回 卒業論文の作成(4)
- 第22回 卒業論文の作成(5)
- 第23回 卒業論文の作成(6)
- 第24回 卒業論文の作成(7)
- 第25回 卒業論文の作成(8)
- 第26回 卒業論文の作成(9)
- 第27回 要旨の作成
- 第28回 卒業論文と要旨の提出
- 第29回 卒業論文発表会のための資料作成
- 第30回 卒業論文発表会

成績評価の方法

到達目標 1、2、3、4 を測定する卒業研究成果により評価します。

履修にあたっての注意

卒業論文作成に向けて、主体的に取り組んでください。

教科書・参考書に関する備考

教科書：なし

参考書：各自のテーマに応じて随時紹介します。

授業のねらい

エコロジカルな視点から人間生活を人的集合体（グループ、組織や企業並びにコミュニティ）における体験（学習）活動と捉え、活動で起こるさまざま（人間関係・社会に関わること）を学修し、それぞれの興味・関心を涵養する。

卒業研究・論文の準備としての基礎知識（人間関係に関わる事項）とグループマネジメントを実践的に学修するとともに、人間関係の場の設計・トレーニング（学習・研修）運営技能の修得をとおしてキャリアを形成し、エコロジカルな視点から幅広く人間関係を理解するファシリテーター観を培っていく。

到達目標

- ・エコロジカルな視点から人間関係を幅広く理解するファシリテーター観と女性観を培う
- ・人間関係に関わる事項を中心として、組織マネジメントの必要な知識を習得する
- ・場の設計・運営技能を修得する（ボランティア活動、人間関係トレーニング）

授業方法

場の設計・運営（ボランティア活動、人間関係トレーニング）技能の修得は、演習時間内の実践計画トレーニングに加えて、エコロジカルな視点からボランティア活動の企画・実践をとおして学修する。また、マインドマップ・パワーポイントなどの活用方法を適宜実践的に学修を進める。つぎの授業計画では人間関係を幅広く理解するファシリテーター観を培っていく。

なお、各回の受講者による実践は、予め各回ごと担当者を決めて行う。学生自身が取り上げたい人間生活の研究テーマも扱うことで、各自の卒業研究の促進を促していく。また、授業における取り組み及び授業以外の活動などからデータを収集し、実践法の基礎を学び、レポート（報告書）としてまとめていく。したがって、自宅学習では各回の内容を「学習ジャーナル」としての整理すること、報告書資料のための準備を行うと効果的である。

授業計画

- 第1回 演習Ⅰ（3年次）を踏まえた人間関係の興味・関心の整理と（仮）研究テーマ設定
－「研究倫理（基準内容）について」人的集合体における人間関係のありよう－
- 第2回 体験から学ぶということと、集団活動の中で起きること
～チームづくり・人間関係の構築に向けたグループ体験の取り組みの企画検討～
- 第3回 体験から学ぶということと、集団活動の中で起きること
～さまざまなアプローチとファシリテーターとしての姿勢の検討～
- 第4回 集団活動で起こるさまざまなこと（人間関係）への興味・関心の整理検討・意識化
～組織づくりと具体的なグループ体験活動の企画検討～
- 第5回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（授業における取り組み及び授業以外の活動などでデータを収集し、実践法の基礎を学び、レポートとしてまとめていく。学生自身が取り上げたい人間生活の研究テーマも扱う）
- 第6回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第7回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第8回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第9回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第10回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第11回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第12回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）
- 第13回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験*（受講者によるファシリテーター実践）
－人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他－
（前回の内容を継続的に取り組む）

- 第14回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
ー人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他ー
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第15回 体験(前期)を踏まえた人間関係の興味・関心の整理と研究テーマの設定・中間報告(プレゼンテーション)
- 第16回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
ー人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他ー
(ボランティア活動やフィールドワークなどのデータを収集し、研究倫理(基準内容)「研究法の基礎」を学びながらレポートとしてまとめていく。学生自身が取り上げたい人間生活の研究テーマを扱う)
- 第17回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
ー人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他ー
(以降、前回の内容を継続的に取り組む)
- 第18回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
ー人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他ー
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第19回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
ー人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他ー
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第20回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
ー人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他ー
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第21回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
ー人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他ー
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第22回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
ー人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他ー
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第23回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他ー
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第24回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
ー人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他ー
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第25回 さまざまなアプローチの基礎技能の理解とグループ体験* (受講者によるファシリテーター実践)
ー人間関係トレーニング、ホールシステムアプローチ他ー
(前回の内容を継続的に取り組む)
- 第26回 体験(後期)を踏まえた人間関係の興味・関心の整理
- 第27回 体験(前期・後期)を踏まえた実践報告書の作成
- 第28回 体験(前期・後期)を踏まえた実践報告書の作成
- 第29回 卒業後の社会貢献について
- 第30回 総括(ディスカッション)

成績評価の方法

到達目標の達成度を測る発表・報告書(60%)、授業への参加度(40%)により評価します。

履修にあたっての注意

どのような場面でも人間関係について貢献できるように自ら考え行動する人間力の向上を目指して、人間関係トレーニングやさまざまなアプローチ、フィールドワーク(ボランティア活動の企画実践、必要に応じてゼミ合宿・視察などの学生による自主的性を培う)に親しむことなど、楽しく学修してほしい。

教科書・参考書に関する備考

教科書：授業で紹介する。

参考書：必要に応じて紹介する。

授業のねらい

「社会福祉演習」で立案した研究計画に基づき、テーマに即した研究方法を選択し論文作成に向けての課題に取り組みます。その中で、社会福祉学における研究テーマと研究方法の関係について理解するとともに、研究方法を修得し、研究倫理について学びます。

また、社会福祉士国家試験科目の理解を深めます。

到達目標

- ・研究に必要な手続きに基づき、論文を書くことができる。
- ・社会福祉士国家資格に求められる知識を身につけることができる。

授業方法

各自の研究テーマに基づき、前期はゼミでの報告前に事前学習として行う文献調査等及びレジュメ作成（10時間程度）と報告によって行います。報告後は、教員の指示に従い事後学習（5時間程度）を求めます。後期は、研究の進捗状況報告、論文作成の個別指導を授業外に進めるとともに、授業では国家試験対策の学習を進めます。

国家試験対策は、授業内で配布するスケジュールをもとに各自が出題基準等について計画的に事前学習（10時間程度）を行い資料作成を行います。授業では、資料に基づき報告を行い、それに対して教員が助言する形で進めていきます。事後学習としては、過去問題等（2時間程度）に取り組むことを求めます。

授業計画

- 第1回 ガイダンス<演習の展開方法について>
 第2回 研究課題の設定と研究計画の検討
 第3回 先行研究レビューおよび研究倫理について
 第4回 先行研究分析（必要に応じて一人が複数回報告する）(1)
 第5回 先行研究分析（必要に応じて一人が複数回報告する）(2)
 第6回 先行研究分析（必要に応じて一人が複数回報告する）(3)
 第7回 各自のテーマについて文献の精読、資料収集、レジュメ作成、報告・討議（1回につき2名が報告する）(1)
 第8回 各自のテーマについて文献の精読、資料収集、レジュメ作成、報告・討議（1回につき2名が報告する）(2)
 第9回 各自のテーマについて文献の精読、資料収集、レジュメ作成、報告・討議（1回につき2名が報告する）(3)
 第10回 各自のテーマについて文献の精読、資料収集、レジュメ作成、報告・討議（1回につき2名が報告する）(4)
 第11回 調査の実施
 第12回 データの整理
 第13回 データの分析
 第14回 論文構成の検討
 第15回 論文構成の確定
 第16回 論文作成個別指導、社会福祉士国家試験対策＊（論文個別指導は適宜行います。国試対策1回につき2名が担当します）(1)
 第17回 論文作成個別指導、社会福祉士国家試験対策＊（論文個別指導は適宜行います。国試対策1回につき2名が担当します）(2)
 第18回 論文作成個別指導、社会福祉士国家試験対策＊（論文個別指導は適宜行います。国試対策1回につき2名が担当します）(3)
 第19回 論文作成個別指導、社会福祉士国家試験対策＊（論文個別指導は適宜行います。国試対策1回につき2名が担当します）(4)
 第20回 論文作成個別指導、社会福祉士国家試験対策＊（論文個別指導は適宜行います。国試対策1回につき2名が担当します）(5)
 第21回 論文作成個別指導、社会福祉士国家試験対策＊（論文個別指導は適宜行います。国試対策1回につき2名が担当します）(6)
 第22回 論文作成個別指導、社会福祉士国家試験対策＊（論文個別指導は適宜行います。国試対策1回につき2名が担当します）(7)
 第23回 論文作成個別指導、社会福祉士国家試験対策＊（論文個別指導は適宜行います。国試対策1回につき2名が担当します）(8)
 第24回 論文作成個別指導、社会福祉士国家試験対策＊（論文個別指導は適宜行います。国試対策1回につき2名が担当します）(9)
 第25回 卒論提出
 第26回 社会福祉士国家試験対策＊（1回につき2名が担当します）(1)

-
- 第27回 社会福祉士国家試験対策* (1回につき2名が担当します) (2)
第28回 社会福祉士国家試験対策* (1回につき2名が担当します) (3)
第29回 社会福祉士国家試験対策* (1回につき2名が担当します) (4)
第30回 総括

*国家試験対策は、各科目の要点整理・報告、問題作成・解説等を行います。

成績評価の方法

参加状況 (50%)、到達目標を測定するレジュメの内容及び報告 (50%) により評価する。

履修にあたっての注意

卒業論文作成のスケジュールを念頭において、自己管理をしっかりすること。
自らの研究であることを自覚し、主体的に取り組むこと。

教科書・参考書に関する備考

適宜紹介する。

授業のねらい

宗教もしくは思想に関心を持つ受講生が各自でテーマを設定し、それに沿って収集した各種情報を読解し、分析する過程で絞り込んだテーマについて考察を深め、最終的な成果を卒業研究としてまとめる。

到達目標

- ・テーマを探究可能な規模に絞り込める。
- ・全体の構成をまとめることができる。
- ・簡潔な文体で、主張したいことを批評的に表現できる。

授業方法

受講生と相談しながらテーマを設定し、授業計画に従って、卒業論文としてまとめて行けるように適宜助言を与える。受講生自ら提案する姿勢が重要である。日常的に担当教員と相談しながら作業を進めること。

授業計画

卒業研究演習の進行と並行して進める。

- 1 前期オリエンテーション
- 2～3 情報に関する個別指導
- 4 研究・論文とはどのようなものか
- 5 卒業研究のテーマの考察
- 6～8 各自のテーマに沿った資料の収集・整理、リスト作成
- 9 卒業研究（論文）の構成の考察
- 10 卒業研究（論文）の目次（章立て・節立て等）の考察
- 11～14 執筆に向けた個別指導
- 15 進捗状況中間報告(1)
- 16 進捗状況中間報告(2)
- 17 卒業研究（論文）のテーマ、構成等の再検討
- 18～25 執筆経過に沿った個別指導
- 26 卒業研究（論文）の草稿提出
- 27 草稿に関する考察と修正助言
- 28 卒業研究（論文）の提出
- 29～30 プレゼンテーション資料の作成

成績評価の方法

個別指導への積極的な参加（30%）、問題意識・理解力・構成力（20%）、卒業研究の内容（50%）

履修にあたっての注意

資料収集、構想、読解、考察、執筆等、いずれもどんどん自分で先へ進める意欲を持続すること。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じ、その都度助言する。

参考ホームページ

必要に応じ、その都度助言する。

授業のねらい

これまでの演習や教職課程などを通して学んできた「教育学」に関する内容を、文章を通して、どのように人に伝えるかを学ぶ。

到達目標

- ・論理的な文章を書くことができる。
- ・学校教育に関わる事象を正しく理解し、論を展開することができる。

授業方法

- ・履修者による発表。
- ・発表に対する討議。そのため、発表者は配布資料の準備が必須となる。
- ・担当教員による補足説明。

授業計画

○授業方法と授業計画

卒業研究演習の授業を通して、卒業研究論文の作成を進める。

具体的には、卒業研究演習で、研究方法、研究内容の検討を行う。

そして、卒業研究では、「自分の伝えたい内容が、文章として本当に表現できているのか」を、担当教員との個別指導、履修者同士の相互評価を通して、確認していきたい。

前期は「研究の枠組み」を決定し、後期は「研究論文の文章」を作成していく。

成績評価の方法

卒業論文の内容：100%

履修にあたっての注意

卒業論文は、四年間の学習の集大成です。簡単に妥協せずに、他人ではなく、何よりも自分自身を納得させるまで、研究論文を追求していく学生に履修してもらいたいと考えています。

教科書・参考書に関する備考

随時、提示します。

授業のねらい

卒業研究の完成をめざす。あわせて、卒業研究に基づくプレゼンテーションを行う。

到達目標

論理的な文章構成力が身につく。的確な表現力が身につく。

授業方法

数回の中間発表、担当教員との面談を繰り返しながら、卒論の完成をめざす。
したがって、発表しない、相談にこない場合は自動的に留年することになります。

授業計画

- 1 日程調整
- 2 個別面談
- 3 個別面談
- 4 個別面談
- 5 個別面談
- 6 個別面談
- 7 個別面談
- 8 個別面談
- 9 個別面談
- 10 個別面談
- 11 個別面談
- 12 個別面談
- 13 個別面談
- 14 個別面談
- 15 個別面談
- 16 日程調整
- 17 論文指導
- 18 論文指導
- 19 論文指導
- 20 論文指導
- 21 論文指導
- 22 論文指導
- 23 論文指導
- 24 論文指導
- 25 論文指導
- 26 論文指導
- 27 プレゼン資料の作成
- 28 プレゼン資料の作成
- 29 プレゼン資料の作成
- 30 プレゼン資料の作成

成績評価の方法

面談への積極的な参加（50%）、卒業研究の内容（50%）

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて指示する。

542114

卒業研究

担当教員：岡崎由佳子

4単位 通年

授業のねらい

各自で設定した研究テーマに沿って研究を進め、卒業論文を作成する。また研究論文作成に必要な資質や能力を習得する。

到達目標

卒業論文を作成することができる。

授業方法

個別指導を中心に進めていきます。

受講者には毎回、論文作成に関する事前・事後課題を出します（所要時間 90 分程度）。

課題については口頭で解説し、内容に応じて資料を配布します。

目安となる日程は下記のとおりです。

授業計画

- 4月 研究倫理の確認、テーマ発表
- 5月 文献の精読、資料収集
- 6月 実験、調査の実施
- 7月 実験、調査の実施
- 8月 実験、調査の実施
- 9月 データ分析、論文作成
- 10月 論文作成
- 11月 論文作成
- 12月 15日 卒業論文・要旨提出締め切り

成績評価の方法

到達目標を測定するために、論文内容（70%）と研究への取り組み（30%）により評価します。

授業のねらい

社会福祉学範囲の各自の研究テーマに応じて、「なぜ論文を書くのか（知識の生産）」、「論文の利用方法」等を、学生自身の「卒業論文作成」という体験を通しての理解を目指します。

到達目標

1. 具体性、重要性、調査可能性、実現可能性、倫理性等を考慮した調査設問を設定できる
2. 社会福祉に関する論文の有効な利用の仕方を体得できる
3. 社会福祉専門職として必要な知識を生産することができる

授業方法

個別指導を中心としますが、おおむね下記のスケジュールとなる予定です。

授業計画

- 4月 論文構成の検討
- 5月 文献研究及び情報収集・調査準備
- 6月 文献研究及び情報収集・調査準備
- 7月 文献研究及び情報収集・調査実施
論文骨子案作成
- 8月 卒業論文中間発表
調査実施
調査結果分析
- 9月 論文作成個別指導
- 10月 論文作成個別指導
- 11月 論文作成個別指導
- 11月中旬 論文最終校正及び提出

成績評価の方法

到達目標（1、2、3）について、研究プロセス（50%）、研究成果（50%）により評価します。

履修にあたっての注意

- ・学生・教員（地域福祉の理論と方法、福祉情報、メソ・ソーシャルワーク）の関心領域の相互の歩み寄り、また学生と教員、ゼミ生間の信頼関係を最も重要視しております。
- ・卒業論文の中間発表を8月又は9月実施予定とします。

教科書・参考書に関する備考

各自のテーマに沿って適宜リファレンスする予定です。

授業のねらい

この授業は、各自の卒業論文の作成に必要な資料や文献を調べ方に慣れ、それらをもとに論文に仕上げてゆくことを目指す。論文の意味を理解して、感想文や単なる意見文とは異なることを意識し、根拠を挙げ、結論に結びつけてゆく。

到達目標

- ・卒論の構成を熟慮する。
- ・論旨がわかりやすいように文章を書くことを目指す。
- ・パソコンの操作を習得するよう努力する。

授業方法

卒業論文のための資料や文献の研究を進め、要約の仕方、引用や参照の仕方を指導し、テーマを絞ってゆく。また、定期的な個別指導によって、一人ひとりの論文の構成や内容を詳しく指導してゆく。卒論制作にあたってパソコンの操作の指導をする。毎回、次回の予定を確認し、準備をしてくるように指示する。

授業計画

- 4月・5月 文献・資料の収集 データ収集 研究倫理について説明する
 6月 論文の構成について考える
 7月 進捗状況を見る
 中間発表をする
 8月・9月 メールを通して質問を受け、アドバイスを送る
 10月 論旨に沿って構成を再構築する
 文章校正をする
 11月 論文の最終校正
 脚注や参考文献を仕上げる
 12月15日 提出

成績評価の方法

論旨の展開 30%、独創性 30%、説得力 20%、構成 20%

履修にあたっての注意

学生は、早目に資料を集め、参考文献の充実をはかる。論旨を明確にすることに心がけ、たくさんのかんことを盛り込むのではなく、具体的で論旨が明確な文になるようにする。
 教員は、少人数制の指導を重視する。

教科書

河野哲也『レポート・論文の書き方入門』（慶応義塾大学出版会、2002年、ISBN：4-7644-0698-2）

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてプリントを配布する。

授業のねらい

卒業研究のテーマについて研究を進め、論文を作成する。

到達目標

1. 人間生活学にかかわる様々な諸課題を発見・探究し、課題を解決するための提案ができる。
2. 論文を作成するための計画をたて遂行することができる。
3. 人にわかりやすく考えを伝える表現ができる。

授業方法

各自のテーマに基づいて、事前に準備した資料をもとに研究指導を進める。個別指導が中心となる。

授業計画

卒業研究演習の授業と合わせて進めていく。

<前期>

テーマの決定

論文の構成

資料収集

調査の実施

中間報告会

<後期>

調査データの分析

論文作成

卒業論文の提出

卒業論文発表会

成績評価の方法

到達目標 1. 2 を測定するために論文の内容（70%）を評価する。

到達目標 3 を測定するために、卒業論文発表会における発表内容（30%）で評価する。

542118

卒業研究

担当教員：長尾順子

4単位 通年

授業のねらい

各自の設定したテーマに沿って研究を遂行し、卒業論文を完成させる。また、研究内容をもとにプレゼンテーションを行う。

到達目標

卒業論文を完成させることができる。

授業方法

個別指導を中心に進めていきます。

授業計画

- 4月：テーマを確定する。
- 5月：論文の構成を立てる。
- 6月：先行研究を収集し、整理する。
- 7月：中間発表
- 8月：先行研究を収集し、整理する。
- 9月～：論文の構成にもとづいて論文を執筆する。
必要に応じて個別指導を行う。
- 11月中旬：論文の下書き提出。
- 12月15日：卒業論文・要旨提出締め切り
- 1月中旬：卒業論文発表会

成績評価の方法

論文内容（80%）、研究への取り組み方（20%）

授業のねらい

各自が設定した研究テーマの論理的探究と研究計画の作成を経て、卒業論文を作成する。

到達目標

- ・ 人間生活や諸活動に貢献できる探究能力の涵養
- ・ 論理的な思考と調査分析方法・文章表現の体得
- ・ 計画的な遂行能力の醸成

授業方法

各自が設定する研究テーマに即した指導を個別に行います。

授業計画

〈前期〉

- ・ 研究倫理（基準内容）
- ・ 研究テーマの設定
- ・ 研究方法の検討
- ・ 研究計画の作成
- ・ 文献、資料の収集整理
- ・ 論文構成の検討
- ・ 調査計画
- ・ 論文骨子の作成
- ・ 論文中間発表の準備

〈夏季休業中〉

- ・ 卒業論文中間発表会
- ・ 調査計画・実施
- ・ 調査結果の集計

〈後期〉

- ・ 調査結果の分析
- ・ 文献の精読、資料の分析
- ・ 研究の進捗状況報告
- ・ 研究計画の変更
- ・ 論文（下書き）筆耕開始
- ・ 論文（下書き）提出
- ・ 卒業論文の完成
- ・ 卒業論文・要旨の提出
- ・ 卒業論文発表会

成績評価の方法

到達目標の達成度は、研究内容・成果（70%）、取り組み姿勢（30%）により評価します。

履修にあたっての注意

マインドマップを用いて論文の章建て及び論点整理・分析などが行えるスキルが必要である。また、基本的に毎週 必要な指導を受けることになるので、研究は自ら主体的に取り組むこと。

教科書・参考書に関する備考

各自の研究テーマに応じた指導・指示は、指定時間帯に適宜行う。

授業のねらい

これまでの学習を前提に各自が研究計画を策定し、研究テーマに適する研究方法の選択し論文を作成することを目指します。また、研究倫理についても理解します。

到達目標

1. 研究テーマを設定し、計画的に作業を遂行することができる
2. 資料収集を行い、分析することができる。
3. 論文を整理、構成し、作成することができる。

授業方法

卒業研究演習での取り組みと関連させつつ、個別指導を中心に進めます。

授業計画

前期

- ・研究課題の設定と研究計画の策定
- ・各自のテーマに関する文献の探索・精読、資料収集・整理
- ・論文のアウトライン作成

後期

- ・研究の進捗状況整理、報告
- ・卒業論文中間報告書作成、報告
- ・本文作成と推敲
- ・論文の完成

成績評価の方法

到達目標 1 及び 2 を測定する研究への取り組み方 (30%)、到達目標 3 を測定する論文 (70%) により評価する。

履修にあたっての注意

卒業研究演習の展開とは別に、スケジュールをしっかりと管理すること。

教科書・参考書に関する備考

個別に指示する

食物栄養学科専門科目

授業のねらい

本科目は、管理栄養士課程における導入教育で、自ら栄養学の歴史を学び、社会における管理栄養士の使命や役割および活動分野の理解を通して、管理栄養士を目指す気持ちを育む。

到達目標

1. 人々の健康の維持・増進に寄与してきた食事・栄養の役割を説明できる。
2. 健康の維持・増進、疾病の予防・治療における管理栄養士の役割を、医療、福祉、行政、企業、学校等の分野別に説明できる。
3. 栄養学の発展と我が国の管理栄養士の歴史、生命倫理、職業倫理について概説できる。

授業方法

原則として、講義形式で行う。
 前もって教科書に目を通しておくこと。毎時間、小レポートを提出する（10分位）。
 質問等には、担当教員が対応する。
 事前学習は、教科書の授業に関連する部分を読むことである。
 事後学習は、プリントを見直して復習することである。

授業計画

担当教員：菊地和美・池田隆幸・大西正男・小山田正人・岸知子・隈元晴子・高橋博・田中洋子・中川幸恵・中河原俊治・藤井義博・松坂裕子・三田村理恵子・村田まり子

教員名	内容
第1回 松坂	栄養学の歴史
第2回 三田村	管理栄養士の歴史
第3回 田中洋	管理栄養士の使命と役割：(1) 医療施設・福祉施設
第4回 菊地	管理栄養士の使命と役割：(2) 学校・行政
第5回 村田	管理栄養士の使命と役割：(3) 企業・社会が要請する管理栄養士とは
第6回 隈元	栄養士法・健康増進法、その他の法令
第7回 岸	国民栄養の現状～国民健康・栄養調査を中心に～
第8回 高橋	世界の多様な食文化：共通点と差異
第9回 小山田	食べ物・食生活・健康を考える。(1) 現代医学と生活習慣病
第10回 中川	食べ物・食生活・健康を考える。(2) 低栄養・過栄養
第11回 大西	食べ物・食生活・健康を考える。(3) 栄養の視点
第12回 中河原	食べ物・食生活・健康を考える。(4) 食品の視点
第13回 池田	食べ物・食生活・健康を考える。(5) 食品衛生学的視点
第14回 藤井	管理栄養士としての生命倫理と職業倫理
第15回 菊地	グループワーク・レポート

成績評価の方法

到達目標を評価する各時間およびグループワークでのレポート（85%）、授業への参加状況（15%）により評価する。

履修にあたっての注意

前もって教科書に目を通しておくこと。

教科書

田中平三・中村丁次 編著『栄養学概論－栄養のプロへの第一歩として－』（同文書院、2013）

授業のねらい

この教科は管理栄養士に必要とされる教育内容の中の「社会・環境と健康」に相当するものであり、広い領域にわたる社会医学を学ぶこととなります。

健康とは何か、そして人間の健康を規定する要因としての社会・環境に関する基礎知識を学びます。また人々の健康状態とその規定要因を測定・評価し、健康の保持増進や疾病予防に役立てる基本的な考え方とその取り組みについて理解することが出来るようになることを目指します。

到達目標

この教科は管理栄養士の国家試験科目であり、管理栄養士に必要とされる基準、レベルが示されています。この授業を通じて広い知識と技術を学び、結果としては管理栄養士として社会で活躍できるレベルを達成する。

授業方法

原則として、講義形式で行う。

受講にあたり必要な事前作業：各疾患臓器についての解剖生理学の復習

受講にあたり必要な事後作業：各授業で扱った領域について管理栄養士国家試験の過去出題問題を解くこと

授業計画

以下の各項目は大項目、() 内の項目は中項目を示しています。

- 第1回 社会と健康 (健康の概念、公衆衛生の概念、公衆衛生・予防医学の歴史)
- 第2回 社会と健康 (健康の概念、公衆衛生の概念、公衆衛生・予防医学の歴史)
- 第3回 環境と健康 (生態系と人々の生活、環境汚染と健康影響、環境衛生)
- 第4回 環境と健康 (生態系と人々の生活、環境汚染と健康影響、環境衛生)
- 第5回 環境と健康 (生態系と人々の生活、環境汚染と健康影響、環境衛生)
- 第6回 健康、疾病、行動に関わる統計資料 (保健統計、人口静態統計、人口動態統計、生命表、傷病 統計)
- 第7回 健康、疾病、行動に関わる統計資料 (保健統計、人口静態統計、人口動態統計、生命表、傷病 統計)
- 第8回 健康、疾病、行動に関わる統計資料 (保健統計、人口静態統計、人口動態統計、生命表、傷病 統計)
- 第9回 健康状態・疾病の測定と評価 [疫学] の概念、疫学指標とバイアスの制御、疫学の方法、スクリーニング、根拠 (エビデンス) に基づいた保健対策 (EBM)、疫学研究と倫理
- 第10回 健康状態・疾病の測定と評価 [疫学] の概念、疫学指標とバイアスの制御、疫学の方法、スクリーニング、根拠 (エビデンス) に基づいた保健対策 (EBM)、疫学研究と倫理
- 第11回 健康状態・疾病の測定と評価 [疫学] の概念、疫学指標とバイアスの制御、疫学の方法、スクリーニング、根拠 (エビデンス) に基づいた保健対策 (EBM)、疫学研究と倫理
- 第12回 健康状態・疾病の測定と評価 [疫学] の概念、疫学指標とバイアスの制御、疫学の方法、スクリーニング、根拠 (エビデンス) に基づいた保健対策 (EBM)、疫学研究と倫理
- 第13回 生活習慣 (ライフスタイル) の現状と対策 (健康に関連する行動と社会、身体活動・運動、喫煙行動、飲酒行動、睡眠・休養・ストレス、歯科保健行動)
- 第14回 生活習慣 (ライフスタイル) の現状と対策 (健康に関連する行動と社会、身体活動・運動、喫煙行動、飲酒行動、睡眠・休養・ストレス、歯科保健行動)
- 第15回 生活習慣 (ライフスタイル) の現状と対策 (健康に関連する行動と社会、身体活動・運動、喫煙行動、飲酒行動、睡眠・休養・ストレス、歯科保健行動)

成績評価の方法

管理栄養士国家試験のレベルを達成しているか、筆記試験 (100%) によって評価します。

履修にあたっての注意

健康問題に関して、社会において実際に起こっている出来事を、予防医学の視点で学ぶ実践的な領域です。学生にとってはかなり難しい教科ではありますが、社会におけるシステムを知らないことには社会で活躍できないこととなります。真剣に取り組むことを期待します。指定する教科書は毎回の授業で使用するので、必ず持参してください。

教科書

田中平三 他『社会・環境と健康 改訂第5版』(南江堂、2017)

参考書

(財) 厚生統計協力『国民衛生の動向 2017/2018』(2017)

授業のねらい

管理栄養士に必要な専門科目の「食品学」「栄養学」「生化学」などを履修する上で、食品や人体に含まれている有機化学物である脂質・糖質・たんぱく質などの構成成分やそれらの化学構造を理解する必要がある。これらの物質の名称を含めた基本的な性質を、自ら解説できるような知識を身につけることがこの講義の「ねらい」である。

到達目標

管理栄養士課程で必要な基本的有機化学を理解できる。さらに、授業内で解説した物質の名称、化学構造が記述できるようになる。

授業方法

テキストと配付資料を中心に講義を進めるが、演習問題は、自習して解く。わからないことは図書館で調べたり、友達に聞いたり、教員に質問する。

事前学習は、教科書を読み、演習問題を解くことである。

事後学習は、教科書、資料（プリント）を見直して復習することである。

授業計画

前半は身近にある簡単な飽和有機化合物の基礎的知識を理解する（1-7講）。

後半は、食品や生体中に存在する不飽和有機化合物、飽和炭化水素の基礎的知識を理解する（8-15講）。

第1回 最も簡単な化合物、構造式の書き方と構造異性体

第2回 飽和炭化水素 アルカン：プロパンガス、ガソリン、ローソクなど

第3回 11種類の有機化合物について理解すること・頭にいれること

第4回 簡単な飽和有機化合物：アルカンの誘導体(1)ハロアルカン、アミン：クロロホルム、四塩化炭素など

第5回 簡単な飽和有機化合物：アルカンの誘導体(2)アルコール：エチルアルコール、メチルアルコールなど

第6回 簡単な飽和有機化合物：アルカンの誘導体(3)多価アルコール：グリセリンなど

第7回 1～5のまとめ（中間試験）

第8回 不飽和有機化合物(1)カルボニル化合物、カルボン酸

第9回 不飽和有機化合物(1)エステル、アルケン

第10回 芳香族炭化水素とその化合物(1)

第11回 芳香族炭化水素とその化合物(2)

第12回 芳香族炭化水素とその化合物(3)

第13回 生化学・栄養学・食品学とのつながり(1)

第14回 生化学・栄養学・食品学とのつながり(2)

第15回 まとめと試験

成績評価の方法

小テストの提出（30%）、中間および最終試験（70%）により評価します。

履修にあたっての注意

2年生以降の生化学、栄養学、食品学など専門科目の基礎となるものであるので、内容をよく理解し、自主的に勉強することが重要である。特に、高校で化学Ⅱを履修してこなかった人にとっても理解できるように、進めていくが、必ず、毎回、自宅又は図書館で30分は復習すること。

教科書

立屋敷 哲『補訂版 生命科学・食品学・栄養学を学ぶための有機化学 基礎の基礎』（丸善出版、平成24年、ISBN：978-4-621-07720-7）

参考書

高橋吉孝・辻 英明『栄養科学シリーズ NEXT 基礎有機化学』（講談社、ISBN：978-4-06-155357-6）

授業のねらい

ヒトなどの生物体およびその構成単位である細胞は、栄養素を外界より取り入れて化学エネルギーや自身の構成成分その他に転換し、様々な生活活動を行っている。この活動は生命現象と呼ばれ、その根底にある物質の変化の過程を、化学の知識および手法を用いて、分子レベルで解明することが生化学の目的である。したがって、生化学は栄養学の基礎となる学問の中で、量的にも質的にも最も重要な分野といえる。1 年次前期の「有機化学」にひきつづき、1 年次後期の「生化学 A」では主として人体の構成物質（糖質、脂質、アミノ酸・タンパク質、核酸など）の種類、構造、性質および機能について学ぶ。

到達目標

生体分子全般の構造と機能の特徴を理解し、その生理的意義・役割を化学的に説明できる。

授業方法

この科目では、「生化学」の中の生体成分の化学（物質生化学）を中心に講義します。教科書の内容に従って配布資料とスライドを用いて講義を進めますので、事前に教科書の該当ページと配布資料を読んでおくことを求めます。

なお、項目ごとに、簡単な課題（宿題）を出しますので、事後学習として 1 時間程度は授業内容の確認を行って下さい。なおその提出物を返却する際に解答や補足説明を行います。また、期末試験後には解答例を配布します。

授業計画

- 第 1 回 はじめに：生化学とは（生化学では何を学ぶか）
- 第 2 回 細胞の基本構造：細胞膜と細胞内小器官の構造と機能
- 第 3 回 水の特性と生体内での役割
- 第 4 回 アミノ酸・タンパク質の構造と機能(1)アミノ酸の種類、構造および性質
- 第 5 回 アミノ酸・タンパク質の構造と機能(2)ペプチドとその性質
- 第 6 回 アミノ酸・タンパク質の構造と機能(3)タンパク質の構造、分類および性質
- 第 7 回 酵素(1)酵素の種類と酵素反応の性質
- 第 8 回 酵素(2)補因子と補酵素、ならびに酵素反応論
- 第 9 回 酵素(3)酵素活性の調節と反応阻害
- 第 10 回 糖質の構造と機能(1)単糖類と二糖類
- 第 11 回 糖質の構造と機能(2)多糖類と複合糖質
- 第 12 回 脂質の構造と機能(1)分類および脂肪酸とトリアシルグリセロール
- 第 13 回 脂質の構造と機能(2)複合脂質とステロイド
- 第 14 回 核酸の構造と機能：ヌクレオチド、DNA、RNA、遺伝子、ゲノムなど
- 第 15 回 まとめ：

成績評価の方法

期末試験の成績（60%）、課題の成績（30%）および授業への参加状況（10%）により評価します。

履修にあたっての注意

1 年次の「生物科学 A・B」、「はじめての化学」および「有機化学」を履修し、よく理解しておくことが重要です

教科書

大塚 譲 他『新スタンダード栄養・食物シリーズ 2 生化学』（東京化学同人、2014 年、ISBN：978-4-8079-1662-7 C3377）

教科書・参考書に関する備考

上記の教科書の他に、下記の参考書や図書館にある関連図書も活用して学習してください。

参考書

- 蘭田 勝『栄養科学イラストレイテッド 生化学』（羊土社、2012）
- Pelly, J.W. 著 堅田利明ら訳『生化学』（東京化学同人、2010）
- 村松陽治ら著『エキスパート管理栄養士養成シリーズ 生化学[第 2 版]』（化学同人、2012）
- 佐々木康人ら著『人体の構造と機能及び疾病の成り立ち 1. 生化学』（第一出版、2012）
- 永井竜児ら著『基礎生化学－健康・疾病とのつながり－』（アイ・コーポレイション、2013）
- 加藤秀夫ら著『栄養科学シリーズ 栄養生化学 人体の構造と機能』（講談社サイエンティフィック、2012）

授業のねらい

解剖生理学は、ノーベル生理学・医学賞のもとになる学問であり、人体の構造と機能の理解はノーベル賞につながる。しかし解剖生理学は工夫なくしては理解がむづかしい。摂取する人間を理解できないと、栄養・栄養素の理解は役に立たない。そこで解剖生理学 A では3つの工夫をこらした授業を進める。第一に、クエスチョンを解きながら教科書で自学自習をする。第二に、講義は自学自習を支援するために行う。第三に、講義後の復習用に配布する復習問題解答集をワークブックとして活用する。

到達目標

- (1)講義前の予習、講義後の復習という学修スタイルを身につける。
- (2)充実したリアクションペーパーを書くことができる。
- (3)授業の第1回に配布する復習問題解答集を用いて、自習問題を作成するワークブック作りができる。
- (4)復習問題解答集から出題する学期末試験の問題に正しく答えることができる。

授業方法

毎回、授業前に教科書を読んで予習をする。配布プリントに基づいてパワーポイントを用いて進める。質問は随時受け付けて回答する。講義で学んだことについて、リアクションペーパーを毎回提出する。リアクションペーパーに記載された質問については授業開始時に回答する。そして授業後は、復習問題集解答集を活用して自習問題を作成するワークブック作りで理解を深める。復習問題解答集から学期末試験の出題を行ない、理解度をチェックする。そして試験の解答結果について解説することでさらなる理解を促す。

授業計画

- 第1回 人体：オリエンテーション（復習問題解答集のワークブック作成法）
- 第2回 化学の基礎
- 第3回 細胞
- 第4回 組織
- 第5回 皮膚と膜
- 第6回 骨格
- 第7回 関節
- 第8回 骨格筋
- 第9回 筋の運動
- 第10回 心臓
- 第11回 血管
- 第12回 血液の成分
- 第13回 止血機構・血液型
- 第14回 リンパ系
- 第15回 生体防御機構

成績評価の方法

成績評価は、リアクションペーパー 20%、ワークブック 30%、試験 50%により行う。

履修にあたっての注意

毎回、教科書で授業部分と授業配布プリントを予習してから授業に参加すると、理解度が確実に高まる。作成したワークブックは、第14回の授業時に提出する。

教科書

エレイン N マリーブ『人体の構造と機能 第4版』（医学書院、2015）

教科書・参考書に関する備考

毎回、授業後に復習として、復習問題解答集を活用してワークブック作りをすると試験前にあわてなくてすむ。

授業のねらい

解剖生理学は、ノーベル生理学・医学賞のもとになる学問であり、人体の構造と機能の理解はノーベル賞につながる。しかし解剖生理学は工夫なくしては理解がむづかしい。摂取する人間を理解できないと、栄養・栄養素の理解は役に立たない。そこで解剖生理学 A では3つの工夫をこらした授業を進める。第一に、クエスチョンを解きながら教科書で自学自習をする。第二に、講義は自学自習を支援するために行う。第三に、講義後の復習用に配布する復習問題解答集をワークブックとして活用する。

到達目標

- (1)講義前の予習、講義後の復習という学修スタイルを身につける。
- (2)充実したリアクションペーパーを書くことができる。
- (3)授業の第1回に配布する復習問題解答集を用いて、自習問題を作成するワークブック作りができる。
- (4)復習問題解答集から出題する学期末試験の問題に正しく答えることができる。

授業方法

毎回、授業前に教科書を読んで予習をする。配布プリントに基づいてパワーポイントを用いて進める。質問は随時受け付けて回答する。講義で学んだことについて、リアクションペーパーを毎回提出する。リアクションペーパーに記載された質問については授業開始時に回答する。そして授業後は、復習問題集解答集を活用して自習問題を作成するワークブック作りで理解を深める。復習問題解答集から学期末試験の出題を行ない、理解度をチェックする。そして試験の解答結果について解説することでさらなる理解を促す。

授業計画

- 第1回 神経組織
- 第2回 神経系
- 第3回 視覚・聴覚・平衡覚
- 第4回 化学的感覚
- 第5回 内分泌系とホルモン
- 第6回 内分泌腺
- 第7回 呼吸器系
- 第8回 呼吸生理学
- 第9回 消化器系の構造
- 第10回 消化器系の機能
- 第11回 代謝
- 第12回 泌尿器系
- 第13回 水・電解質平衡と酸塩基平衡
- 第14回 生殖器系
- 第15回 発生学

成績評価の方法

成績評価は、リアクションペーパー 20%、ワークブック 30%、試験 50%により行う。

履修にあたっての注意

毎回、教科書で授業部分と授業配布プリントを予習してから授業に参加すると、理解度が確実に高まる。作成したワークブックは、第14回の授業時に提出する。

教科書

エレイン N マリーブ『人体の構造と機能 第3版』(医学書院)

教科書・参考書に関する備考

毎回、授業後に復習として、復習問題解答集を活用してワークブック作りをすると試験前にあわてなくてすむ。

授業のねらい

この授業は、食品化学の基礎として植物性食品、動物性食品の化学成分の栄養的特徴を学ぶ。また、各成分の食品の種類、部位、加工方法による変化を理解し、それぞれの食品について深い知識を持ち、品質を見抜く能力（鑑別能力）を習得する。

到達目標

植物性食品および動物性食品に含まれる化学成分を栄養的に特徴づけることが出来る。

授業方法

講義形式により、教科書とプリントを用いて進める。

はじめに、前回の復習および質問に答える（5～10分）。事前のプリント課題は受講者に回答を求めた後、理解を深めるためにスライド等を用いて解説する。毎回最後にリアクションペーパーを配布して（5～10分）、理解度を把握する。

事前学習は、教科書を読み、プリント課題を行うことである。

事後学習は、プリントを見直して復習することである。

授業計画

- 第1回 序：食品化学と他の専門科目（栄養学、生化学、食品加工学等）との関連性
- 第2回 穀類(1)：こめの種類と性状、成分と機能および品質
- 第3回 穀類(2)：こむぎ・おおむぎ・そばの種類と性状、成分と機能および品質
- 第4回 いも類：いも類の種類と性状、成分と機能および品質
- 第5回 豆類と種実類：豆類・種実類の種類と性状、成分と機能および品質
- 第6回 野菜類：野菜類の種類と性状、成分と機能および品質
- 第7回 果実類：果実類の種類と性状、成分と機能および品質、渋柿の渋味成分の形態
- 第8回 きのご類と藻類：きのご類・藻類の種類と性状および品質、きのごの香味成分とその発現機構
- 第9回 肉類：肉類の性状と栄養、肉の熟成と成分変化および品質
- 第10回 乳類：牛乳の化学成分と性状および品質
- 第11回 卵類：卵類の化学成分と性状および品質
- 第12回 魚介類：魚介類の分類と種類、鮮度の評価、血合い肉と普通肉の性状と栄養
- 第13回 油脂類：植物油脂と動物油脂の特徴と変敗防止
- 第14回 調味料・香辛料：甘味料の種類と性状および品質
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定する2回の試験（80%）、授業への参加状況（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

事前にプリントを配布するので、教科書で予習をしながらプリントの空欄を埋めておくこと。随時指名して発言を求めするので、しっかりと学習した上で授業に参加すること。

教科書

荒川義人『食べ物と健康Ⅰ』（三共出版、2017）

中河原俊治『食べ物と健康Ⅱ』（三共出版、2017）

授業のねらい

食品学基礎実験では、日常的な食品を材料とした定量実験・定性実験をとおして、食品成分の化学的性質の研究がどのような方法で行われるのかということを理解することを目的としています。

その食品の持つ化学的、生物学的、あるいは物理学的特徴を理解することは、食品を提供する立場の管理栄養士にとってより本質的な選択を可能とします。

食品学基礎実験は一般的な化学実験のトレーニングでもあり、化学実験の初歩的な技法を学びます。これはまた今後開講される食品衛生学実験、食品成分分析実験、栄養化学実験などの基礎となります。

到達目標

1. 食品、あるいは生体を材料とした実験研究に必要な基礎的な実験手技を身につけている。
2. 食品、あるいは生体を材料とした実験研究に必要な濃度計算ができる。
3. 食品、あるいは生体を材料とした実験研究に必要な基礎的な実験原理を説明できる。
4. 実験結果の公表の手段のひとつであるレポートを正しい様式で書くことができる。
5. 実験結果の公表の手段のひとつであるポスター作成とそのプレゼンテーションを簡潔に分かりやすく行うことができる。

授業方法

身近な食品を製造しその製造法を学び、あるいは特徴的な成分を抽出分離し、化学的性質について考察する。班ごとに協同して実験を行う。

毎回の実験の開始前に事前学習として各自「プレレポート」を作成し、実験後は一定の時間内に各自でレポートを作成する。

中間2回と期末に班ごとに実験結果に関するポスター作成とプレゼンテーションを行う。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：食品学基礎実験の目的とレポートの書き方/プレゼンテーションの方法
 第2回 実験器具などの解説。実験上の諸注意
 1. たんぱく質の性質1 グルテンの分離（教科書 p.22）
 2. たんぱく質の性質2 乳たんぱく質（グルテン）の分離 p.24
 第3回
 第4回 3. たんぱく質の性質3 卵白の酵素分解
 第5回 プレゼンテーション1；実験1、2、3に関するプレゼンテーション
 第6回 4. 炭水化物の性質1 マーメレードの製造とペクチン
 第7回 5. 炭水化物の性質2 でんぷんの分離と分類 p.46
 第8回 6. 炭水化物の性質3 還元糖の確認 p.48
 第9回 プレゼンテーション2；実験4、5、6に関するプレゼンテーション
 第10回 7. ミネラルウォーターのおいしさ1 キレート滴定による全硬度測定 p.61
 第11回 8. ミネラルウォーターのおいしさ2 キレート滴定によるカルシウム濃度測定 p.62
 第12回 9. 食品の水溶性色素 ナスのアントシアニン p.64
 第13回 10. 食品の褐変反応1 非酵素的褐変反応 p.73・リンゴの酵素的褐変反応 p.76
 第14回 プレゼンテーション3；実験7、8、9、10に関するプレゼンテーション
 第15回 筆記試験/化学構造式の意味（講義）

成績評価の方法

レポート（80%）、プレゼンテーション（10%）と筆記試験（10%）によって評価する。

履修にあたっての注意

食品の化学的性質・特徴を理解するためには、高校化学の十分な理解が必須です。

とくに溶液の濃度計算や有機化学が基礎になるので十分に身につけておかなければなりません。

実験を始める前に実験原理、安全上の注意など講義をする。事前に教科書、実験マニュアルを良く読んでおくこと。

また、食べ物を扱うので、上履きを用意し、実験室には土足で入らないこと。

白衣を着用し、実験のまえによく手を洗う。

教科書

青柳ら『食品学実験』（建帛社、2016、ISBN：978-4-7679-0381-1）

授業のねらい

調理現象を科学的に究明し、その中から法則性を見出し、その法則性に沿ってさまざまな食品素材を栄養・安全・嗜好の面から有効に調理する方法を学び、理論と実践との両面から調理を深く理解することを目標とする。また、食品の調理と生体利用性、食事設計と食事様式、調理と生活環境、調理と食文化などについて理解を深めていく。食材の調理科学的特性を学び、調理学に関する知識を身につけてもらうことを目的とする。

到達目標

到達目標1：調理の意義や調味操作、食品の調理特性を理解することができる。
到達目標2：食品の調理科学的特性について、文献を取り上げながら、レポートなどに明確に説明・討議することができる。

授業方法

原則として、1回につき1テーマを取り上げながら、講義形式により、進めていく。
毎回の授業では、国家試験章末問題に関する事前課題（5問、所要時間50分程度）の課題を課す。授業時間内に理解度確認のための小テスト・レポートを実施する。事後学習としてレポートを作成する（所要時間50分程度）。課題については、授業内で口頭で解説し、資料を配付する。期末テストについても、採点后に解答例・解説資料を配付する。

授業計画

- 第1回 調理科学とは：調理の意義、食物摂取行動における調理、調理の社会化と大量化
- 第2回 食生活と調理の構造と変化：食生活と調理の変遷、現代の食生活の問題点、世界の食形態と食文化
- 第3回 食物の嗜好性と生体における役割：食物のおいしさ、味覚の構造、味の諸性質と生体での役割
- 第4回 味の相互作用、おいしさに影響するその他の要因、官能検査
- 第5回 食事設計と栄養：食事設計の基本知識、献立作成と栄養、食品成分表の理解と活用
- 第6回 調理操作：調理操作の分類、加熱以外の調理操作
- 第7回 非加熱調理操作（冷蔵、冷凍、解凍）
- 第8回 加熱調理操作（湿式加熱、乾式加熱、マイクロ波加熱）、調理機器
- 第9回 食品の調理特性と生体利用性(1)植物性食品
- 第10回 食品の調理特性と生体利用性(2)植物性食品：豆類
- 第11回 食品の調理特性と生体利用性(3)動物性食品：肉類・魚介類
- 第12回 食品の調理特性と生体利用性(4)成分抽出素材、その他の食品
- 第13回 調理と安全：調理における安全性（調理器具の安全性と排気ガス）
- 第14回 調理と栄養：調理による栄養効果、植物性食品と動物性食品の調理による栄養効果
- 第15回 調理と環境：台所、調理場、厨房と地球環境、地球温暖化と省エネルギー、生活系ごみ

成績評価の方法

到達目標1を測定する期末テスト（70%）、到達目標2を測定する小テスト・レポート等（20%）、授業への参加状況（10%）により、評価する。

履修にあたっての注意

レポートの内容について、しっかりと学習した上で授業に参加すること。

教科書

『New 調理と理論』（同文書院、2011）
『食べ物と健康 IV』（三共出版、2015）

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。

授業のねらい

食品素材の調理科学的特性と調理機器による調理操作を実習を通して実践的に学び、調理現象を科学的な見地から考察する能力を養う。また、日本料理、西洋料理、中国料理等の実習を通して食事構成、食事様式、栄養評価等を学び、日常の食事に対応できる能力を養うことをねらいとする。北海道産食材の調理科学的特性を学び、調理学に関する知識や調理科学実験を活用しながら、実習でを身につけてもらうことを目的とする。

到達目標

到達目標 1：代表的な日本料理、西洋料理、中国料理について、知識と技能を理解し、明確に説明することができる。

到達目標 2：代表的な日本料理、西洋料理、中国料理について、調理することができる。

授業方法

原則として、1 回につき 1 テーマを取り上げながら、実習形式により、進めていく。

受講にあたり、事前学習として次の回のレシピについて、調理操作を確認する（所要時間 20 分程度）。事後学習では、実習した献立内容をレポート・栄養価計算を提出する（所要時間 60 分程度）。レポートは、返却後、実習内で解説し、資料を配付する。期末テストは、返却後、実習内で解説し、資料を配付する。

授業計画

- 第 1 回 調理ガイダンスと講義：調理の意義と目的、レポートの作成法、栄養価計算 の算出方法、計量、包丁の扱い方
- 第 2 回 日本料理の基礎(1)主食
- 第 3 回 日本料理の基礎(2)汁物とだしの取り方
- 第 4 回 日本料理の基礎(3)揚げ物と炒め物
- 第 5 回 日本料理の基礎(4)煮物と蒸し物
- 第 6 回 西洋料理の基礎(1)ポタージュ
- 第 7 回 西洋料理の基礎(2)メインディッシュ
- 第 8 回 西洋料理の基礎(3)デザート
- 第 9 回 西洋料理の基礎(4)テーブルマナー
- 第10回 中国料理の基礎(1)前菜
- 第11回 中国料理の基礎(2)炒菜
- 第12回 中国料理の基礎(3)炸菜
- 第13回 中国料理の基礎(4)点心
- 第14回 北海道の郷土料理
- 第15回 北海道の行事食

成績評価の方法

到達目標 1 を測定する期末テスト (50%)、到達目標 2 を測定するレポート (20%)、実習への参加状況 (30%) により、評価する。

履修にあたっての注意

身支度を整え、授業開始 5 分前には着席していること。実習ごとのレポートは栄養価計算を含め、しっかりと学習すること。

教科書

『七訂食品成分表』（女子栄養大学）
『調理のためのベーシックデータ（第 5 版）』（女子栄養大学）
宮下朋子『新調理学実習』（同文書院）

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。

授業のねらい

調理実習Ⅰを基本とし、さらに応用調理としての実習や行事食、郷土料理などの実習を通して多様な食品を生かした調理法や食事構成、食文化等についての知識を深める。また、健康を保持・増進するための立案献立実習等により、食事のあり方についても実践的に学ぶことをねらいとする。北海道産食材の調理科学的特性を学び、調理学に関する知識や調理科学実験を活用しながら、実習でを身につけてもらうことを目的とする。

到達目標

到達目標1：代表的な日本料理、西洋料理、中国料理について、知識と技能を理解し、明確に説明することができる。

到達目標2：代表的な日本料理、西洋料理、中国料理について、調理することができる。

授業方法

原則として、1回につき1テーマを取り上げながら、実習形式により、進めていく。

受講にあたり、事前学習として次の回のレシピについて、調理操作を確認する（所要時間20分程度）。事後学習では、実習した献立内容をレポート・栄養価計算を提出する（所要時間60分程度）。レポートは、返却後、実習内で解説し、資料を配付する。期末テストは、返却後、実習内で解説し、資料を配付する。

授業計画

- 第1回 行事食献立(1)正月料理
- 第2回 行事食献立(2)クリスマス料理
- 第3回 行事食献立(3)
- 第4回 西洋料理(1)：イタリア料理
- 第5回 中国料理(1)：点心
- 第6回 中国料理(2)：点心
- 第7回 実技試験：切り方試験
- 第8回 高齢者の食事：粥
- 第9回 郷土料理(1)北海道の食
- 第10回 郷土料理(2)乳製品の利用
- 第11回 行事食の献立(3)寿司
- 第12回 行事食の献立(4)北海道米の利用
- 第13回 行事食の献立(5)北海道産小麦の利用
- 第14回 西洋料理(2)：スペイン料理
- 第15回 韓国料理

成績評価の方法

到達目標1を測定する期末テスト(50%)、到達目標2を測定するレポート(20%)、実習への参加状況(30%)により、評価する。

履修にあたっての注意

身支度を整え、授業開始5分前には着席していること。実習ごとのレポートは栄養価計算を含め、しっかりと学習すること。

教科書

- 宮下朋子『新調理学実習』（同文書院）
- 『食品成分表』（女子栄養大学）
- 『調理のためのベーシックデータ』（女子栄養大学）

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。

授業のねらい

微生物は、皮膚や口腔の常在菌や腸内細菌との共生、食中毒や感染の原因として、我々の健康に密接に関与している。また、醸造・発酵にとどまらず、その代謝系や遺伝子を使ったバイオテクノロジーおよび浄水などに広く利用されている。さらには、微生物の惑星である地球で営まれている微生物の環境への働きについて概説し、微生物の理解を深めるとともに人間との関わりを理解することを目指す。

到達目標

- ①微生物の一般的な構造、機能を理解し、代表的な微生物の名前からその性質を説明できる。
- ②微生物の増殖や食品との関係および制御方法について理解し、説明できる。

授業方法

講義は、配布したプリント内容に沿って PC & 液晶プロジェクターを使用し進める。質問は随時受け付けるが、授業カードに記載された質問については、授業開始時に回答する。事前にシラバスをよく見て、次回の内容を教科書を読み、内容を把握した上で授業に臨むこと。授業後、内容について e-learning の問題を 1 週間以内に解答しながら復習すること。その達成度については成績評価の一部とする。期末試験を行い、終了後解説し理解を促す。

授業計画

- 第1回 微生物の歴史：人と微生物の出会いからバイオテクノロジーへ
- 第2回 食品と微生物：我々の周りにはどんな微生物がいるのか
- 第3回 真菌類（カビ）の種類と性質
- 第4回 真菌類（酵母とキノコ）の種類と性質
- 第5回 細菌の種類、形態、グラム染色
- 第6回 グラム陰性細菌
- 第7回 グラム陰性細菌（腸内細菌）、グラム陽性菌（乳酸菌）
- 第8回 グラム陽性細菌（芽胞形成菌、その他）
- 第9回 ファージ、ウイルス、リケッチア
- 第10回 微生物の増殖、測定方法
- 第11回 微生物と食中毒・感染症
- 第12回 食品中の微生物
- 第13回 発酵食品
- 第14回 環境と微生物
- 第15回 まとめと補足説明

成績評価の方法

毎回の授業カードにおける授業参加度（10%）および e-learning (http://e-learn.venus.fujijoshi.ac.jp/fuku_ninsyou.asp) における問題解答状況（10%）と試験の成績（80%）で評価する。

履修にあたっての注意

授業は担当者が作成したプリントを用いて実施するが、下記の参考書も参考し幅広い知識を身につけるよう努力すること。

教科書・参考書に関する備考

講義は担当者が作成したプリントを用いて実施する。

参考書

木村光編『食品微生物学』（培風館）
 村尾沢夫ほか『くらしと微生物』（培風館）
 東 匡伸編『シンプル微生物学』（南江堂）

参考ホームページ

Laboratory of Food Microbiology <http://www.fujijoshi.ac.jp/~shokuei/ikeda.html>（授業資料など）
 e-learning http://e-learn.venus.fujijoshi.ac.jp/fuku_ninsyou.asp（復習用 e-learning）

授業のねらい

1年生前期に行った微生物学の知識を基礎に、微生物が極めて身近に存在し、我々の生活に密接に関わっていることを体験・理解する。また、加工食品は食品衛生法で定められている微生物規格に合格するものであることが要求されるので、微生物検査手法を習得するとともに微生物による食品の腐敗や醗酵を理解する。

到達目標

微生物取り扱い法および検査法の学習を通じて食品衛生検査技術を習得すると共に、微生物に対する理解を深めることにより、微生物を正しく取扱い、正確に検査することができる。

授業方法

実験開始前の講義室における授業は、配布したプリント内容に沿って板書等で実験内容・手技を説明する。予め配布したプリントの該当ページを読んで、実験の目的を把握してから臨むこと。説明終了後、実験室に移動し実験手技をデモンストレーションしたのち、実験開始となる。実験終了後、レポートは教員による説明、教科書および参考図書を参照し、原則結果が出た日に提出すること。レポートはルーブリックを基準として評価し、次回に返却する。試験を行った際には、時間内に解説し理解を促す。

授業計画

- 第1回 微生物実験に使う主な器具と装置、標準寒天培地の分注と滅菌
- 第2回 空中落下細菌の測定、細菌の顕微鏡観察、純粋分離
- 第3回 手の汚染調査、普通染色の練習、斜面培地への培養
- 第4回 肉や魚の微生物と加熱処理
- 第5回 一般生菌数測定法、グラム染色法
- 第6回 一般生菌数の計測、大腸菌、ブドウ球菌をグラム染色法で観察
- 第7回 大腸菌群（発酵管を用いる方法）
- 第8回 大腸菌群の測定とEMB培地への塗抹
- 第9回 大腸菌をグラム染色観察し普通寒天培地へ純粋分離、拭き取り試験の摂取
- 第10回 拭き取り試験結果の観察、バイオテストのキットの接種
- 第11回 バイオテスト観察と菌の同定、発酵乳中の乳酸菌数の測定（希釈平板）
- 第12回 乳酸菌数の測定と観察
- 第13回 口腔細菌の観察、分離菌アミラーゼの試験
- 第14回 アミラーゼの結果観察
- 第15回 フードスタンプの菌観察、カビ類の理解と観察

成績評価の方法

実験室における態度、実験技術の熟練度、実験内容の理解度（以上20%）および毎回の実験毎のレポート（80%）で評価する。レポートは、配布したルーブリックに従って評価する。理解度をチェックするための試験を行った場合には、試験の点数とレポート点の合計（80%）で評価する。

履修にあたっての注意

実験中に疑問を生じたときには、直ちに質問して、事故発生を未然に防ぐよう注意すること。自分の頭を使い体で覚えるのが実験である。レポートは特別指示が無い限り実験当日必ず提出すること。

教科書・参考書に関する備考

講義は担当者が作成したプリントを用いて実施する。

参考書

増田修一編著『健康と食の安全を考えた食品衛生学実験』（アイ・ケイ・コーポレーション、2013、ISBN：978-4-87492-346-0 C3077）
 一般財団法人日本食品分析センター編著『ビジュアル版 食品衛生検査法 手順とポイント』（中央法規出版（株）、2013、ISBN：978-4-8058-3911-9 C3047）
 春田三佐夫ほか編著『目で見る食品衛生検査法』（中央法規出版（株）、1989、ISBN：4-8058-0632-X C3043）
 杉田純多 他編『新版 微生物学実験法』（講談社サイエンティフィク、1999、ISBN：4-06-153425-4 C3045）

参考ホームページ

Laboratory of Food Microbiology <http://www.fujijoshi.ac.jp/~shokuei/ikeda.html>（授業資料掲載サイト）

授業のねらい

この授業は、臨床栄養学、公衆栄養学などの応用系科目を理解するために必要である栄養学の知識を身につけることを目的としています。具体的には、栄養の基本的概念およびその意義、健康の保持・増進、疾病の予防・治療における栄養の役割、エネルギーおよび栄養素の代謝とその生理的意義を理解することを目指します。そのためには、摂取した食品の栄養成分が生体の構成成分としての栄養素へ代謝変換され、さらに臓器間の連携によって体内で栄養素相互の変換が行われるという一連の栄養代謝を全体像として捉えることが必要です。

到達目標

消化・吸収と体内動態までを体系づけ、栄養素の作用や体内相互変換および機能性、個体におけるエネルギー代謝等の生理的意義を理解できる。

授業方法

座学の講義形式で行います。

事前課題として、教科書を読んできてください（所要時間 30 分程度）。

理解度を確認するために、授業終了前の 10 分程度で、毎回小テストを行います。小テストは実施後に解説を行い、後日返却します。

復習として、小テストで間違えた問題に関する部分を、ノートにまとめてください（所要時間 30 分から 60 分程度）。

さらに、各章ごとにポイントをノートにまとめてください（所要時間 60 分程度）。ノートは 15 回の講義終了後に提出してください。採点后に返却します。期末試験については、実施後に口頭で解説を行います。

授業計画

- 第 1 回 栄養の概念(1)栄養の定義、栄養と健康・疾患
- 第 2 回 栄養の概念(2)遺伝形質と栄養の相互作用
- 第 3 回 栄養素の構造と機能(1)タンパク質
- 第 4 回 栄養素の構造と機能(2)糖質
- 第 5 回 栄養素の構造と機能(3)脂質
- 第 6 回 栄養素の構造と機能(4)ビタミン、ミネラル、核酸
- 第 7 回 摂食行動 空腹感と食欲、食事のリズムとタイミング
- 第 8 回 消化・吸収と栄養素の体内動態(1)消化・吸収の基本概念
- 第 9 回 消化・吸収と栄養素の体内動態(2)栄養素別の消化・吸収
- 第10回 消化・吸収と栄養素の体内動態(3)食物繊維・難消化性糖質の作用
- 第11回 水・電解質の栄養的意義 水の出納、電解質代謝と栄養
- 第12回 エネルギー代謝(1)エネルギー代謝の概念、エネルギー消費量
- 第13回 エネルギー代謝(2)臓器別エネルギー代謝、エネルギー代謝の測定法
- 第14回 摂食行動と消化・吸収のまとめ
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定するための期末試験（80%）と課題ノートの提出（20%）により評価します。

履修にあたっての注意

「有機化学」「解剖生理学」「生化学」と関連づけて勉強し、理解を深めてください。授業計画をもとに予習・復習を行い、疑問点は積極的に質問をしてください。

教科書

奥 恒行、柴田克己『基礎栄養学』（南江堂、2015、ISBN：978-4-524-25825-3）

教科書・参考書に関する備考

教科書に沿った内容のプリントを、毎回配布します。

授業のねらい

健康の保持・増進、生活の質（QOL）向上に寄与する、健康的な食行動の形成を目指すことを目的として、栄養教育の概念、マネジメントサイクル（アセスメント、教育計画、実施、評価）などの基礎知識の理解をめざす。

到達目標

栄養教育に関する理論やモデルにもとづき、効果的な教材や媒体、手法などを用いて栄養教育プログラムを立案し、実践するまでの一連の流れについて理解することができる。

授業方法

各回スライド、教科書、配布資料等を用いた講義形式の授業。テキストを事前に読み、ノートに要約する（事前学習：30分）。授業で学んだ行動科学等を用いて、事例検討を行う（事後学習：30分）。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション・栄養教育の概念
- 第2回 行動科学と栄養教育(1) オペラント学習理論、健康信念モデル
- 第3回 行動科学と栄養教育(2) 計画的行動理論、行動変容ステージモデル
- 第4回 行動科学と栄養教育(3) 社会的学習理論
- 第5回 行動科学と栄養教育(4) ソーシャルサポート、ストレスとコーピング
- 第6回 行動科学と栄養教育(5) コミュニティオーガニゼーション
- 第7回 行動科学と栄養教育(6) プリシード・プロシードモデル、その他の理論
- 第8回 栄養カウンセリングの基本
- 第9回 栄養カウンセリングの応用（DVD 視聴含む）
- 第10回 栄養教育のマネジメントサイクル(1) アセスメント（DVD 視聴含む）
- 第11回 栄養教育のマネジメントサイクル(2) 栄養教育プログラムの作成（DVD 視聴含む）
- 第12回 栄養教育のマネジメントサイクル(3) 栄養教育の実施（DVD 視聴含む）
- 第13回 栄養教育のマネジメントサイクル(4) 栄養教育の評価
- 第14回 栄養教育のマネジメントサイクル(5) 見直し・改善
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況（10%）、試験（90%）

履修にあたっての注意

この授業を履修していなければ、2年前期の栄養教育論Ⅱを受講することができないため、気をつけること。

教科書

武見ゆかり、赤松利恵『栄養教育論—理論と実践』（医歯薬出版、2013年、ISBN：978-4-263-70987-0）

授業のねらい

この授業は、皆さんがこれから専門的に学ぶ生化学や栄養学等を完全にマスターするために必要な「化学の基礎」を学ぶことを目的としています。高等学校化学の基礎から、大学初年級の内容を取り上げ、これらと無機物質と有機物質の関連についての授業内容になります。これから大学で学ぶ専門分野への架け橋となる授業になりますので、皆さんの授業計画に従って学び、より深い学習に心がけ、大学への「科学の基礎」を身につけることを期待しています。

到達目標

- ・物質の変化を化学式、化学反応式を使って正確に計算し、記述することができる。
- ・イオンや分子の立体的な構造を化学結合と関連づけて理解し、記述し説明することができる。
- ・標準的な化学問題を、基礎知識により思考し解くことができる。
- ・授業内容に関連した「化学事象」について考察し、説明することができる。

授業方法

- ・講義形式で行う。
- ・テキストをベースに授業を展開し、化学的な思考力と量的関係の理解を深める。
- ・物質の構造や化学変化の事象について、演習により、化学的思考力に幅と深さをつける。
- ・毎回の授業の最後に演習問題を解き、その解答用紙の提出を課する。返却された解答用紙に基づき 60 分程度の復習をすることが理解を深めることとなる。事前学習は、教科書 (or プリント) の授業に関連する部分を読むことである。事後学習は、演習問題を見直して復習することである。

授業計画

第1回	I	物質の構造
	1	物質の探求と物質の構成粒子、元素記号、化学式、電子配置と周期表
第2回	2	電子配置とイオンのなりたち、共有結合のしくみ
第3回	3	共有結合と分子、分子の形と極性、物質量の計算 有機化合物の基本的な分子の構造と性質
第4回	4	化学反応式と物質量、式量、分子量とモルの計算
第5回	5	化学反応式と量的関係、溶液の濃度と量的関係
第6回	6	化学結合と結晶 無機化合物の分類と性質
第7回	II	物質の状態
	1	物質の状態変化と気体の性質
第8回	2	溶液とイオン・分子の極性と溶解
第9回	3	希薄溶液の性質、沸点上昇、凝固点降下、浸透圧
第10回	III	物質の変化
	1	化学反応と熱、化学反応の速さ
第11回	2	化学平衡と平衡の移動、反応の進み方、酸・塩基と pH
第12回	3	酸と塩基、中和反応と pH の変化
第13回	4	酸化還元反応と酸化数、電子の移動
第14回	5	酸化還元反応と金属のイオン化傾向、電池と電気分解
第15回	6	化学の量的関係、計算のまとめ

成績評価の方法

学期末に行う試験 (60%)、課題の提出及び小テスト取り組み (40%) により評価します。

履修にあたっての注意

授業内容をしっかり理解し、化学式、反応式とその量的関係を自在に使えるように演習を積んでください。これらを基本として興味関心を深めて、発展的に学び、食物や栄養について幅広い専門性を身につけてください。

教科書

井口・木下他『これだけはおさえたい化学』(実教出版、2013/10、ISBN：978-4-407-31988-0)

教科書・参考書に関する備考

高等学校で学習した「化学基礎」、「化学」の教科書があれば参考になる。

授業のねらい

この授業では、文章を作成する為の基礎的な能力を身に付けることを目的とします。学生生活では、実験・授業などで「文章でまとめて報告する」機会が増えます。そして、それは社会人になった後も続きます。そのため、文章を正確に作り上げることは、皆さんにとって重要な能力だと考えます。この授業では、主にレポートを対象とし、それを作成するために必要な能力を修得するためのトレーニングを行います。

到達目標

1. レポートとして適切な語を用い、正確な文で構成されたレポートをを作ることができる。
2. 与えられた課題を理解し、そこから 400 字程度の基礎的なレポートを適切に作成することができる。

授業方法

授業では、文章作成のための重要な概念を講義形式で説明します。基本的に前時の内容を踏まえて展開するので、事前学習としてそれまでの内容を復習しておくこと。また、次回の文章作成のテーマを予告するので、そのテーマに関して構想を練っておくこと（所要時間 20 分程度）。また、授業内容を定着させるため、事後学習として、文章作成を指示します（所要時間 30 分程度）。作成した文章の提出を課します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 レポート作成の基本(1)：レポートに関する基礎的事項
- 第3回 レポート作成の基本(2)：レポートにふさわしい語を用いる
- 第4回 レポート作成の基本(3)：正確な文を作る
- 第5回 レポート作成の基本(4)：簡潔な表現を用いる
- 第6回 文章作成の練習(1)：文章を読み、そこから考えたことをまとめる
- 第7回 分かりやすく書くための基本(1)：必要な情報を出す
- 第8回 分かりやすく書くための基本(2)：レポートで避けるべき表現を学ぶ
- 第9回 分かりやすく書くための基本(3)：パラレリズムを意識する
- 第10回 文章作成の練習(2)：情報を分かりやすく説明する
- 第11回 情報を整理する(1)：パラグラフの仕組みを理解する
- 第12回 情報を整理する(2)：パラグラフを活用する
- 第13回 情報を整理する(3)：主題を意識して文章を作成する
- 第14回 文章作成の練習(3)：テーマに対する自分の意見を述べる
- 第15回 総括

成績評価の方法

授業への取り組み方（30%）、授業における課題（70%）により評価します。

履修にあたっての注意

課題の提出は厳守する態度で参加してください。文章を書く作業が中心となるので、必要に応じて、辞書・電子辞書を各自用意しておくことを勧めます。

教科書・参考書に関する備考

教科書：なし

特別に教科書は用意しません。毎回テーマに併せてプリントを配布します。

参考書：必要に応じて、授業中に紹介・説明します。

授業のねらい

この授業では、レポートを対象とし、論理的に伝える文章を作成することを目的とします。文章表現の基礎的技術に加え、さらに高度な技術を学び、情報をわかりやすく表現する方法を身につけることを目指すものです。今後進級した際、また、社会に出た際に、複雑で長い文章に取り組むことが増えると考えます。そのための手助けとなるものだと考えます。

到達目標

1. 自分の思考や情報を整理して、相手にわかりやすく伝えることができる。
2. 与えられた課題を理解し、そこから2000字程度のレポートを作成することができる。
3. 他者の意見やデータを活用して、自分の意見を説得力を高めて伝えることができる。

授業方法

授業では、文章作成のための重要な概念を講義形式で説明します。基本的に前時の内容を踏まえて展開するので、事前学習としてそれまでの内容を復習しておくこと。また、次の文章作成のテーマを予告するので、そのテーマに関して構想を練っておくこと（所要時間20分程度）。また、授業内容を定着させるため、事後学習として、文章作成を指示します（所要時間30分程度）。作成した文章の提出を課します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 論の展開(1)：つなぎの言葉と論理関係を理解する
- 第3回 論の展開(2)：一貫性のあるレポートを作成する
- 第4回 客観性を高める(1)：他資料を用いる際の注意点を理解する
- 第5回 客観性を高める(2)：引用、注を活用する
- 第6回 文章作成の練習(1)：アイデアを整理し、構想して書く
- 第7回 文章作成の練習(2)：展開を意識して書く
- 第8回 文章作成の練習(3)：序論・本論・結論で構成されたレポートを作成する
- 第9回 レポートの作成(1)：文章を分節化する
- 第10回 レポートの作成(2)：問題点を発見する
- 第11回 レポートの作成(3)：レポートの目的と方法を設定する
- 第12回 レポートの作成(4)：グラフや表を用いる際の注意点を理解する
- 第13回 レポートの作成(5)：グラフや表をレポートに組み込む
- 第14回 レポートの作成(6)：得られたデータをもとに考察をする
- 第15回 総括

成績評価の方法

授業への取り組み方（30%）、授業における課題（70%）により評価します。

履修にあたっての注意

課題の提出は厳守する態度で参加してください。文章を書く作業が中心となるので、必要に応じて、辞書・電子辞書を各自用意しておくことを勧めます。また、基本的な文章作成技術を習得している前提で授業を展開するので、文章表現演習Ⅰと併せて履修することを勧めます。

教科書・参考書に関する備考

教科書：なし

特別に教科書は用意しません。毎回テーマに併せてプリントを配布します。

参考書：必要に応じて、授業中に紹介・説明します。

授業のねらい

この教科は管理栄養士に必要とされる教育内容の中の「社会・環境と健康」に相当するものであり、広い領域にわたる社会医学を学ぶこととなります。

わが国で多発している主要疾患の疫学的分析に基づいて、疾病予防対策について理解することができるようになることを目指します。さらに、我が国において施行されている保健・医療・福祉制度や関連法規について、基礎的知識を理解し、社会で実際に活用できるように目指します。

到達目標

この教科は管理栄養士の国家試験科目であり、管理栄養士に必要とされる基準、レベルが示されています。

この授業を通じて広い知識と技術を学び、結果としては管理栄養士として社会で活躍できるレベルを達成する学力を持つ。

授業方法

原則として、講義形式で行う。

受講にあたり必要な事前作業：各疾患臓器についての解剖生理学の復習

受講にあたり必要な事後作業：各授業で扱った領域について管理栄養士国家試験の過去出題問題を解くこと

授業計画

- 第1回 主要疾患の疫学と予防対策（がん、循環器疾患、代謝疾患）
- 第2回 主要疾患の疫学と予防対策（骨・関節疾患、感染症）
- 第3回 主要疾患の疫学と予防対策（精神疾患、その他の疾患、自殺・不慮の事故・虐待・暴力）
- 第4回 社会保障の概念、保健・医療・福祉における行政の仕組み
- 第5回 医療制度
- 第6回 社会保障の体系と公的保険制度
- 第7回 福祉制度
- 第8回 地域保健
- 第9回 母子保健
- 第10回 成人保健
- 第11回 高齢者保健
- 第12回 介護・地域包括ケア
- 第13回 産業保健
- 第14回 学校保健
- 第15回 国際保健

成績評価の方法

管理栄養士国家試験のレベルを達成しているか、筆記試験（100%）によって評価します。

履修にあたっての注意

病気に関して具体的に学ぶこととなります。また実際に国において施行されている社会保障制度について学ぶこととなります。実践的な授業内容ではありますが、2年生としては難しいところもあります。しかし管理栄養士が社会で活躍するときに必要な専門知識が得られるので、真剣に学んで欲しいものです。テキストは毎回使用するので、必ず持参してください。持ってこなければ授業にはついてこれません。

教科書

田中平三 他『社会・環境と健康 改訂第5版』（南江堂、2017）

参考書

（財）厚生統計協会『国民衛生の動向 2017/2018』

授業のねらい

1 年次後期の「生化学 A」に続いて、2 年次前期の「生化学 B」では人体における糖質、脂質、アミノ酸、核酸およびタンパク質の代謝経路について学習する。その後、代謝調節の仕組みを各種ホルモン等の働きに基づいて理解し、これらの協調により人体全体の活動が支えられて恒常性が維持される仕組みを理解する。

到達目標

糖質、脂質、アミノ酸、核酸およびタンパク質の代謝経路とそれらの相互関係、ならびに調節の仕組みを理解して化学的に説明できる。

授業方法

教科書の内容に従って配布資料とスライドを用いて講義を進めますので、事前に該当する教科書のページを読んでおくことを求めます。この科目では、「生化学」の中の代謝生化学（動的生化学）が中心になります。

なお、項目ごとに、簡単な課題（宿題）を出しますので、事後学習として 1 時間程度は授業内容の確認を行って下さい。なお、期末試験や課題の提出物は採点后に戻します。その際、解答や補足説明を行います。

授業計画

- 第 1 回 はじめに： 代謝の概要、同化と異化など
- 第 2 回 糖質の代謝 (1) 解糖系
- 第 3 回 糖質の代謝 (2) TCA 回路と糖新生
- 第 4 回 糖質の代謝 (3) グリコーゲン代謝、血糖の調節およびペントースリン酸回路
- 第 5 回 糖質の代謝 (4) 電子伝達系と酸化的リン酸化
- 第 6 回 脂質の代謝 (1) 脂質の体内動態、ならびに脂肪酸の貯蔵と動員
- 第 7 回 脂質の代謝 (2) 脂肪酸の分解と合成
- 第 8 回 脂質の代謝 (3) 多価不飽和脂肪酸の代謝と機能
- 第 9 回 脂質の代謝 (4) トリアシルグリセロールと複合脂質の合成
- 第 10 回 脂質の代謝 (5) コレステロール代謝
- 第 11 回 アミノ酸・タンパク質の代謝 (1) アミノ基と炭素骨格の代謝
- 第 12 回 タンパク質・アミノ酸の代謝 (2) 生理活性アミンの合成および代謝異常
- 第 13 回 タンパク質・アミノ酸の代謝 (3) タンパク質の合成
- 第 14 回 核酸の代謝：ヌクレオチドとプリン塩基・ピリミジン塩基の代謝
- 第 15 回 まとめ： 各栄養素の代謝相関、代謝制御など

成績評価の方法

期末試験の成績（60%）、課題の成績（30%）および授業への参加状況（10%）により評価します。

履修にあたっての注意

1 年次の「生物科学 A・B」、「はじめての化学」および「有機化学」を履修し、よく理解しておくことが重要です。

教科書

大塚 譲 他『新スタンダード栄養・食物シリーズ 2 生化学』（東京化学同人、2014 年、ISBN：978-4-8079-1662-7 C3377）

教科書・参考書に関する備考

上記の教科書の他に、下記の参考書も活用して学習してください。

参考書

- 蘭田 勝『栄養科学イラストレイテッド 生化学』（羊土社、2012）
- Pelly, J. W. 著 堅田利明ら訳『生化学』（東京化学同人、2010）
- 村松陽治ら著『エキスパート管理栄養士養成シリーズ 生化学[第 2 版]』（化学同人、2012）
- 佐々木康人ら著『人体の構造と機能及び疾病の成り立ち 1. 生化学』（第一出版、2012）
- 永井竜児ら著『基礎生化学－健康・疾病とのつながり－』（アイ・コーポレーション、2013）
- 加藤秀夫ら著『栄養科学シリーズ 栄養生化学 人体の構造と機能』（講談社サイエンティフィック、2012）

授業のねらい

解剖生理学実験は、解剖生理学 A、B で学んだ人体の構造と機能についての知識と理解をより深めるために行う。小グループでの協力のもとに全感覚を動員して解剖生理学を学び（ホップ）、課題に答えることで問題解決能力を身につけ（ステップ）、実験レポートを完成させる（ジャンプ）ことにより、総合的な学習経験を身につけることを目指す。

到達目標

各実験において、(1)実験内容を正しく理解すること、(2)実験を正しく実施すること、(3)実験結果を実験ワークブックプリントに適切に記載すること、(4)実験ワークブックプリントの問に答えること。

授業方法

- 1 予習では、実験ワークブックプリントを読んで、実験のテーマを理解する。
 - 2 各回の実験の前に、まず実験の仕方についての説明を受ける。
 - 3 実験結果は、実験ワークブックプリントに記載する。そして考察しながら実験ワークブックプリントの課題に答えることで、それを完成させる。
 - 4 学期末に、実験ワークブックを提出する。
- 事前学習は、実験ワークブックプリントを読むことである。事後学習は参考書の関連部位を読んで実験ワークブックプリントを見直して復習することである。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション・骨密度計測
- 第2回 人体模型の観察
- 第3回 血圧の測定、毛細血管抵抗性試験
- 第4回 ラットの解剖
- 第5回 血液塗抹標本の作成・観察、浸透圧による赤血球容積の変化の観察
- 第6回 嗅覚の実験
- 第7回 神経学の実験（小脳機能、脊髄反射、皮膚感覚、聴覚、重量感覚）
- 第8回 味覚の実験（舌の味覚地図の作成、味覚の左右差の観察）
- 第9回 栄養評価のための身体計測
- 第10回 簡易熱量計を用いた安静時エネルギー代謝量の計測
- 第11回 臨床検査（血液検査、尿検査）
- 第12回 臨床検査結果説明
- 第13回 発汗の視覚化
- 第14回 唾液の実験（緩衝能、でんぷんの消化、分泌速度、味覚への影響）
- 第15回 札幌医科大学標本館見学（学外実習）

成績評価の方法

成績評価は、毎回の実験への参加の積極性の評価（50%）と学期末に提出した実験ワークブックの評価（50%）によって行なう。

履修にあたっての注意

解剖生理学の全体像を、解剖生理学 A（ホップ）、解剖生理学 B（ステップ）、解剖生理学実験（ジャンプ）の3ステップで学ぶので、解剖生理学 A、B のワークブックプリントと教科書「人体の構造と機能」を持って来るようにしましょう。そして実験に積極的に参加すると、驚くほど力（経験的学習力、分析力、表現力）がつくので、積極的に授業に参加する。

教科書・参考書に関する備考

実験ワークブックプリントを予め配付する。

参考書

エレイン N. マリーブ『人体の構造と機能』（医学書院）

授業のねらい

疾病医療学では、管理栄養士課程教育における、「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」領域のうち、疾病に関する部分を扱い、主要疾患の成因、病態、診断及び治療についての基礎的知識を習得する。

疾病医療学 A は、疾病の発生機構（原因、発生過程、進展、帰結）を系統的に理解すること、消化器疾患、循環器疾患、腎・尿路疾患の主要な疾患の概要を理解する。

到達目標

- ・細胞傷害、炎症、腫瘍、遺伝子異常と疾患、加齢に伴う変化、個体の死についての重要なキーワードについて、概説できる。
- ・消化器疾患、循環器疾患、腎・尿路疾患の主要な疾患について、原因、病態生理、症候、診断、治療を概説できる。

授業方法

原則として、講義形式で行う。

受講にあたり必要な事前作業：各疾患臓器についての解剖生理学の復習

受講にあたり必要な事後作業：各授業で扱った領域について管理栄養士国家試験の過去出題問題を解くこと

授業計画

- 第1回 疾病の成り立ち 1
加齢に伴う変化（分子レベルの老化、臓器レベルの老化、老年症候群）
- 第2回 疾病の成り立ち 2
疾患に伴う変化（炎症と創傷治癒、変性、壊死、アポトーシス）
- 第3回 疾病の成り立ち 3
疾患に伴う変化（萎縮・肥大、化生、異形成）
- 第4回 疾病の成り立ち 4
疾患に伴う変化（良性腫瘍、悪性腫瘍、発癌のメカニズム、がん遺伝子、がん抑制遺伝子、がんの増殖・浸潤・転移・播種）
- 第5回 疾病の成り立ち 5
疾患に伴う変化（個体における死）
- 第6回 消化器系疾患の成因・病態・診断治療の概要(1)消化管について I
- 第7回 消化器系疾患の成因・病態・診断治療の概要(1)消化管について II
- 第8回 消化器系疾患の成因・病態・診断治療の概要(2)肝、胆、膵について I
- 第9回 消化器系疾患の成因・病態・診断治療の概要(2)肝、胆、膵について II
- 第10回 循環障害、循環器系疾患の成因・病態・診断・治療の概要(1)
- 第11回 循環障害、循環器系疾患の成因・病態・診断・治療の概要(2)
- 第12回 循環障害、循環器系疾患の成因・病態・診断・治療の概要(3)
- 第13回 腎尿路系疾患の成因・病態・診断・治療の概要(1)
- 第14回 腎尿路系疾患の成因・病態・診断・治療の概要(2)
- 第15回 腎尿路系疾患の成因・病態・診断・治療の概要(3)

成績評価の方法

到達目標に示した項目について、管理栄養士国家試験のレベルを達成しているか、筆記試験（100%）によって評価します。

履修にあたっての注意

この科目は、人間の全身に関する病態を理解することを目標としているため、内容は非常に多く、真剣に学ばなければ授業内容を理解することが非常に難しい。臨床医学、臨床栄養の基礎となる教科であることを理解し、それらの教科と統合的に学習することが望まれる。また、必ず授業直後に復習することが大切である。

教科書

竹中優 編著『人体の構造と機能および疾病の成り立ち 疾病の成因・病態・診断・治療 第2版』（医歯薬出版、2011）

教科書・参考書に関する備考

教科書のうち、「臨床栄養認定管理栄養士のためのガイドブック」は、臨床栄養学の授業でも使用します。

参考書

田中清（編集）『Visual 栄養学テキスト 人体の構造と機能および疾病の成り立ち III 疾病の成り立ち』（中山書店、2017、ISBN：978-4-521-74286-1）

鈴木吉知、丸山道生、藤谷順子、石川祐一（監修）『臨床栄養認定管理栄養士のためのガイドブック』（東京医学社、2016）

授業のねらい

疾病医療学 B では、①疾患診断と疾患治療の概要、②栄養障害と代謝疾患、③内分泌系疾患、④神経系疾患について講義する。摂取する人間を理解できないと、栄養・栄養素の理解は役に立たないことから、疾患を持つ患者について理解を深める。そして疾患を持つ患者の健康回復、健康維持、健康増進を支援するために必要な疾患の知識や医療の考え方を身につける。

到達目標

疾患の知識、医療の考え方、疾患を持つ患者を理解するとともに、疾患を持つ患者を支援するための方法を身につける。

授業方法

配布プリントに基づいてパワーポイントを用いて進める。教科書の授業に関連する部分と配布プリントを読むことで事前学習をする。質問は随時受け付けて回答する。リアクションペーパーに記載された質問については授業開始時に回答する。授業配布プリントの内容から作成した復習問題により復習をする。この復習問題から学期末試験の出題を行ない、理解度をチェックする。そして試験の解答結果について解説することでさらなる理解を促す。

授業計画

- 第1回 疾患診断の概要 1：問診・診察
- 第2回 疾患診断の概要 2：栄養診察
- 第3回 疾患診断の概要 3：徴候・臨床検査
- 第4回 疾患治療の概要 1：冷え症の種類と診断
- 第5回 疾患治療の概要 2：冷え症の治療計画、実施、評価
- 第6回 疾患治療の概要 3：冷え症の予防法
- 第7回 疾患治療の概要 4：緩和医療、終末期ケア
- 第8回 栄養障害と代謝疾患 1：肥満
- 第9回 栄養障害と代謝疾患 2：肥満関連疾患
- 第10回 栄養障害と代謝疾患 3：先天性代謝異常
- 第11回 内分泌系疾患 1：原発性アルドステロン症
- 第12回 内分泌系疾患 2：慢性腎不全と二次性副甲状腺機能亢進症
- 第13回 内分泌系疾患 3：バセドウ病と橋本病
- 第14回 神経系疾患：筋委縮性側索硬化症
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

成績評価は、リアクションペーパー 20%、学期末の試験 80%にて行う。

履修にあたっての注意

毎回、わかりやすい授業資料を配布する。授業と並行して教科書の関連部分を読むことで授業の理解を一層深めるようにする。

教科書

竹中優『人体の構造と機能および疾病の成り立ち 疾病の成因・病態・診断・治療 第2版』（医歯薬出版社）

授業のねらい

膨大な種類の食品成分について化学構造に基づく特徴として分類し、食品の一次機能、二次機能として体系的に理解し、習得する。

また、食品中の化学成分の加熱や酸化による変化と、その結果、それが人体に影響を与える要因となることについて体系的に理解し、習得する。

到達目標

1. 食品成分の特徴について、化学構造式を用いて説明できる。
2. 食品成分の化学的特徴に基づき、食品の一次機能、二次機能を説明できる。

授業方法

教科書と配付資料をもとに講義を進めます。

事前の夏休み前に示す予習課題を中心に十分な事前学習を行い、予習ノートにまとめてください（期末に提出します）。

毎回、講義の冒頭に食品成分の化学構造と予習内容に関する小テスト（Quiz）を行います。

講義では、予習時に理解が不十分であった項目を中心に完全に習得します。

毎回、復習を行い、理解を深めます。e-learning を用いて当日 22 時までには講義内容に関する質問等を提出することとします。

授業計画

第1回	食品と化学	
第2回	食品の一次機能	1. 水分と極性成分
第3回	食品の一次機能	2. たんぱく質；アミノ酸とペプチド
第4回	食品の一次機能	3. たんぱく質の変化
第5回	食品の一次機能	4. 炭水化物；単糖類、少糖類
第6回	食品の一次機能	5. 多糖類；でんぷん、食物繊維
第7回	食品の一次機能	6. 脂質；脂肪酸と複合脂質
第8回	食品の一次機能	7. 脂質；自動酸化
第9回	食品の二次機能	1. 色素成分 1 脂溶性色素
第10回	食品の二次機能	2. 色素成分 2 水溶性色素
第11回	食品の二次機能	3. 呈味成分 1 甘味 酸味 塩味
第12回	食品の二次機能	4. 呈味成分 2 苦味 旨味 辛味
第13回	食品の二次機能	5. 香気成分
第14回	食品の二次機能	6. 酵素的褐変と非酵素的褐変
第15回	食品の二次機能	7. テクスチャー

成績評価の方法

筆記試験（小テストを含む）（90%）

予習ノート、e-learning 質問提出（10%）

履修にあたっての注意

食品の性質・特徴が、それが含む成分の化学構造によって成立することを講義します。したがって高校化学・生物、とくに有機化学の十分な知識が必須で、講義が始まるまでによく学習しておかなければなりません。

<事前課題>

夏休み中に、指定教科書 p. 1～14 を十分に学習し、化学構造式から分子式を導き、分子量が求められるように準備をしておいてください（この内容について第一回講義の冒頭に確認試験を行います）。

同時に予習課題についても夏休み前に提示するので十分に事前学習しておいてください。

毎回の講義に関する予習復習として各 90 分以上の学習が目安です。

教科書

中河原俊治他『食べ物と健康Ⅱ第2版 食品の機能』（三共出版、2017、ISBN：978-4-7827-0747-0）

授業のねらい

食品の一般成分である水分、脂質、たんぱく質、炭水化物、灰分の定量・定性分析を行い、食品分析の化学的、物理的方法を習得する。また、嗜好成分のひとつである色素成分の分離・同定法や官能評価法についても学ぶ。実験操作の基本についての技術の習得を心がける。

到達目標

- ・食品の一般成分の分析方法を理解出来る。
- ・食品中のさまざまな成分に関する定量・定性実験を行うことにより、「食品についての理解」を深めることが出来る。

授業方法

- ・毎回、実験の前に30～40分間、実験講義をする。プリントは事前に配布するので必ず読んでおくこと。事前学習は、配布されたプリントを読むことである。
- ・実験終了後、期限までにレポートを提出する。事後学習は、実験内容をレポートにまとめることである。
- ・質問等に対しては、レポート返却時に解説する。

授業計画

次の a)、b) を平行して行う。

- 第1回 a) 食品の一般成分 b) 食品成分の性質等の実験
食品の一般分析と実験上の注意（講義）、器具の扱い方
- 第2回 a) 水分の定量 b) 試薬の調製
- 第3回 a) 水分の定量 b) 酸の定量
- 第4回 a) 灰分の定量 b) リン酸の定量
- 第5回 a) 灰分の定量 b) カルシウムの定量
- 第6回 a) 脂質の定量 b) ケン化価(1)
- 第7回 a) 脂質の定量 b) ケン化価(2)
- 第8回 a) たんぱく質の定量 b) たんぱく質の定性
- 第9回 a) たんぱく質の定量
- 第10回 a) 糖の定量 b) 糖の定性
- 第11回 b) 天然色素の分離・同定
- 第12回 b) 合成色素の分離・同定
- 第13回 b) 官能試験と評価方法
- 第14回 b) 食品の物理的評価方法ーレオロジーとテクスチャー
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を評価する毎回のレポート提出（80%）、授業への参加状況（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

事前にプリントを配布するので、項目・内容を予習しておくこと。

教科書・参考書に関する備考

前もってプリントを配布する。

授業のねらい

食品衛生法では、第1条でその目的を「食品の安全性の確保のために公衆衛生の見地から必要な規制その他の措置を講ずることにより飲食に起因する衛生上の危害の発生を防止し、もって国民の健康の保護を図る」と定めている。そこで、食の安全に関する知識を深め理解力を高めると共に、現状把握能力を磨き、安全に食品を提供することのできる能力を身につけることを目的とする。

到達目標

食品の安全を理解し、食品衛生法および食品行政、食中毒、経口感染症、人畜共通感染症および寄生虫症について知識を有し、これらの項目について安全に食品を取り扱うことができる。

授業方法

教科書及び配布したプリント内容に沿って PC & 液晶プロジェクターを使用し進める。質問は随時受け付けるが、授業カードに記載された質問については、授業開始時に回答する。事前にシラバスをよく見て、次回の内容を教科書およびプリントを読み、内容を把握した上で授業に臨むこと。授業後、内容について e-learning の問題を1週間以内に解答しながら復習すること。その達成度については成績評価の一部とする。期末試験を行い、終了後解説し理解を促す。

授業計画

- 第1回 食品の安全性
- 第2回 食品衛生法と食品衛生行政
- 第3回 HACCP 概論（安全な食品を提供するために）
- 第4回 食中毒発生状況と予防の歴史
- 第5回 細菌性食中毒の種類(1)：感染型食中毒、感染毒素型食中毒
- 第6回 細菌性食中毒の種類(2)：毒素型食中毒、ウイルス食中毒他
- 第7回 自然毒食中毒の種類：動物性自然毒、植物性自然毒
- 第8回 経口感染症の種類と発生状況及び予防
- 第9回 経口感染症（赤痢、コレラ、腸チフス、パラチフスなど）
- 第10回 人畜共通感染症の種類と発生状況および予防
- 第11回 人畜共通感染症（炭疽、ブルセラ、牛結核、豚丹毒、野兔病など）
- 第12回 寄生虫症の種類と発生状況および予防
- 第13回 寄生虫症（野菜果物、肉類から感染する寄生虫）
- 第14回 寄生虫症（魚、手指から感染する寄生虫、その他）
- 第15回 まとめと補足説明

成績評価の方法

毎回の授業カードによる授業参加度（10%）および e-learning (http://e-learn.venus.fujijoshi.ac.jp/fuku_nin-syou.asp) における問題解答状況（10%）と試験の成績（80%）で評価する。

履修にあたっての注意

食品の安全は広い領域の知識を必要とする応用学問である。講義は担当者が作成したプリントおよび教科書を用いて実施するが、下記の参考書等も活用し幅広い知識を身につけてほしい。

教科書

池田隆幸 編著『食べ物と健康Ⅴ 食品衛生学（第2版）』（三共出版（株）、2016、ISBN：978-4-7827-0749-4）

教科書・参考書に関する備考

教科書を中心に講義を行い、補足説明が必要なときにはプリントを配布する。

参考書

- 川井英雄ほか『食べ物と健康 食品の安全性と衛生管理』（医歯薬出版、2004、ISBN：978-4-263-70445-5）
- 細貝祐太郎ほか『新食品衛生学要説』（医歯薬出版、2004、ISBN：4-263-70447-9）
- 清水 潮『食品微生物の科学』（幸書房、2001、ISBN：4-7821-0179-1）
- 仲西寿男 監修『食品由来感染症と食品微生物』（中央法規出版（株）、2009、ISBN：978-4-8058-3228-8）

参考ホームページ

Laboratory of Food Microbiology <http://www.fujijoshi.ac.jp/~shokuei/ikeda.html>（授業資料掲載サイト）
e-learning http://e-learn.venus.fujijoshi.ac.jp/fuku_nin-syou.asp（復習用 e-learning サイト）

授業のねらい

この授業は、臨床栄養学、公衆栄養学などの応用系科目を理解するために必要である栄養学の知識を身につけることを目的としています。具体的には、栄養とは何かその意義について理解することを目的とし、健康保持・増進、疾病予防における栄養の役割を学びます。

到達目標

糖質、脂質、タンパク質代謝では、特に食後と食間期の代謝の違いとそれに伴って起こる代謝調節の全体像について理解できる。ビタミン、ミネラルについては、栄養学的な機能および作用について理解できる。

授業方法

座学の講義形式で行います。
事前課題として、教科書を読んでください（所要時間 30 分程度）。
理解度を確認するために、授業終了前の 10 分程度で、毎回小テストを行います。小テストは実施後に解説を行い、後日返却します。
復習として、小テストで間違えた問題に関する部分を、ノートにまとめてください（所要時間 30 分から 60 分程度）。さらに各章ごとにポイントをノートにまとめてください（所要時間 60 分程度）。ノートは、15 回の講義終了後に提出してください。採点后に返却します。
期末テストに関しては、実施後に口頭で解説を行います。

授業計画

- 第 1 回 タンパク質代謝の概要
- 第 2 回 タンパク質の栄養(1)タンパク質の体内代謝、タンパク質の栄養価
- 第 3 回 タンパク質の栄養(2)アミノ酸の臓器間輸送、アミノ酸の代謝、他の栄養素との関係
- 第 4 回 糖質代謝の概要
- 第 5 回 糖質の栄養(1)糖質の体内代謝
- 第 6 回 糖質の栄養(2)血糖とその調節、エネルギー源としての作用
- 第 7 回 糖質の栄養(3)他の栄養素との関係、食物繊維の生理効果
- 第 8 回 脂質代謝の概要
- 第 9 回 脂質の栄養(1)脂質の体内代謝、脂質の臓器間輸送
- 第 10 回 脂質の栄養(2)貯蔵エネルギーとしての利用、コレステロール代謝の調節
- 第 11 回 脂質の栄養(3)摂取する脂質の量と質の評価、他の栄養素との関係
- 第 12 回 ビタミンの栄養(1)ビタミンの構造と機能、ビタミンの代謝と栄養学的機能
- 第 13 回 ビタミンの栄養(2)ビタミンの生体利用度、他の栄養素との関係
- 第 14 回 ミネラルの栄養 無機質の機能と栄養、他の栄養素との関係
- 第 15 回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定するための期末試験（80%）と課題ノートの提出（20%）により評価します。

履修にあたっての注意

「有機化学」「解剖生理学」「生化学」と関連づけて勉強し、理解を深めてください。
「基礎栄養学 A」の内容を覚えてきてください。
授業計画をもとに予習・復習を行い、疑問点は積極的に質問をしてください。

教科書

奥 恒行、柴田克己『基礎栄養学』（南江堂、2015、ISBN：978-4-524-25825-3）

教科書・参考書に関する備考

1 年次後期の基礎栄養学 A の教科書を継続使用。
毎回、プリントを配布します。

63401

応用栄養学 A 担当教員：隈元晴子・小山田正人・坪田 恵・八島絵美 2単位 後期

授業のねらい

食事摂取基準について理解することができる。

また、ライフステージ以外の応用栄養学分野として、ストレス環境や高温・低温環境、低圧・高圧環境などにおける生理学的変化と栄養管理について理解し、特殊環境下におかれたときの対応について理解することを目指す。

到達目標

食事摂取基準の目的および策定の基本方針や各指標の活用方法について理解し、説明することができるようになる。一連の栄養マネジメント過程を学ぶことによって、個人および集団の栄養ケアに対し必要な基本的能力を習得する。

授業方法

スライド、教科書、配布資料等を用いた講義形式の授業（4名の教員によるオムニバス形式）。

受講するにあたり、テキストを事前に読み込むこと（事前学習：30分）、授業で学んだことをノートにまとめる（事後学習：30分）。

授業計画

- 第1回 食事摂取基準総論(1)基本的な考え方（隈元）
- 第2回 食事摂取基準総論(2)エネルギー必要量（隈元）
- 第3回 食事摂取基準総論(3)推定平均必要量、推奨量、目安量（隈元）
- 第4回 食事摂取基準総論(4)耐容上限量、目標量（隈元）
- 第5回 食事摂取基準総論(5)活用の理論（隈元）
- 第6回 食事摂取基準各論(1)たんぱく質（八島）
- 第7回 食事摂取基準各論(2)脂質、炭水化物（八島）
- 第8回 食事摂取基準各論(3)ビタミン（八島）
- 第9回 食事摂取基準各論(4)ミネラル（八島）
- 第10回 スポーツ栄養(1)（小山田）
- 第11回 スポーツ栄養(2)（小山田）
- 第12回 環境と栄養(1)ストレス、睡眠（隈元）
- 第13回 環境と栄養(2)特殊環境（隈元）
- 第14回 食事摂取基準まとめ(1)（坪田）
- 第15回 食事摂取基準まとめ(2)（坪田）

成績評価の方法

試験（運動とスポーツ・特殊環境 30%、総論 30%、各論 30%）、レポート（5%）、授業への参加状況（5%）により評価します。

履修にあたっての注意

栄養教育論、公衆栄養学、臨床栄養学などの基盤となる大切な教科書であるので、必ず復習をして知識の定着をすること。そのためにも積極的に質問するなどして、疑問点はその場で解決しておくこと。

教科書

佐々木敏、菱田明『日本人の食事摂取基準 2015年版』（第一出版、2014年、ISBN：978-4-8041-1312-8）
鈴木公、木戸康博『食事摂取基準第2版－理論と活用－』（医歯薬出版、2015年、ISBN：978-4-263-70993-1）
木戸康博・真鍋祐之『管理栄養士養成課程におけるモデルコアカリキュラム準拠 第3巻 応用栄養学 ライフステージ別・環境別』（医歯薬出版、2012年、ISBN：978-4-263-70983-2）

63411

応用栄養学 B

担当教員：隈元晴子・岸 知子・八島絵美

2単位 前期

授業のねらい

人のライフステージごとの身体状況や栄養状態、健康な対象者に必要な栄養管理の基本や栄養アセスメントの理論と方法について理解を深める。

到達目標

妊娠や出産、成長段階から高齢者まで、人体の構造や機能の変化に伴う栄養状態等の変化について、他の教科(生化学や基礎栄養学など)と関連づけて考えることができるようになり、栄養状態の評価・判定(栄養アセスメント)の基本的考え方を習得することを目標とする。

授業方法

各ライフステージについてスライド、教科書、配布資料等を用いた講義形式の授業(3名の教員によるオムニバス形式)。

履修するにあたり、テキストを事前に読み込むこと(事前学習:30分)、授業で学んだことをノートにまとめる(事後学習:30分)。

授業計画

- 第1回 妊娠期・授乳期1 (岸)
- 第2回 妊娠期・授乳期2 (岸)
- 第3回 妊娠期・授乳期3 (岸)
- 第4回 乳児期・幼児期1 (岸)
- 第5回 乳児期・幼児期2 (岸)
- 第6回 乳児期・幼児期3 (岸)
- 第7回 学童期・思春期1 (隈元)
- 第8回 学童期・思春期2 (隈元)
- 第9回 学童期・思春期3 (隈元)
- 第10回 成人期・更年期1 (八島)
- 第11回 成人期・更年期2 (八島)
- 第12回 成人期・更年期3 (八島)
- 第13回 高齢期1 (八島)
- 第14回 高齢期2 (八島)
- 第15回 高齢期3 (八島)

成績評価の方法

試験(90%)、授業への参加状況(10%)により評価します。

履修にあたっての注意

栄養教育論、公衆栄養学、臨床栄養学などの基盤となる大切な教科であるので、必ず復習をして知識の定着をすること。そのためにも積極的に質問するなどして、疑問点はその場で解決しておくこと。

教科書

木戸康博・真鍋祐之『管理栄養士養成課程におけるモデルコアカリキュラム準拠 第3巻 応用栄養学 ライフステージ別・環境別』(医歯薬出版、2012年、ISBN:978-4-263-70983-2)

授業のねらい

応用栄養学 A・B で学んだ各ライフステージ（妊娠期、授乳期、乳児期、幼児期、学童期、成人期、高齢期）の特徴や機能変化などに基づき、個々に応じた栄養ケア・マネジメントを展開できる技能を演習・実習を通して修得する。

到達目標

妊娠、発育・発達、加齢などの機能変化に応じた健康増進、疾病の一次予防のための献立作成、調理、および栄養評価ができる。

授業方法

1つのライフステージについて演習を2回、調理実習を1回実施する。演習では、そのステージに特徴的な身体的・栄養学的要素について学び、実際に献立作成を行う。実習では、演習で作成した献立またはモデル献立を用いて調理実習を行う。

事前学習として、「応用栄養学」や「栄養教育論」で学んだ理論を復習しておくこと。

事後学習として、各ライフステージに対応した栄養ケア・マネジメントの方法について考察したレポートを提出してもらう（所要時間1時間程度）。レポートは、内容を評価した後、返却する。

授業計画

- 第1回 妊娠期・授乳期（演習）：栄養ケアの特徴（岸）
- 第2回 妊娠期・授乳期（演習）：実施献立の作成（岸）
- 第3回 妊娠期・授乳期（実習）：調理実習（岸）
- 第4回 乳児期・幼児期（演習）：栄養ケアの特徴（岸）
- 第5回 乳児期・幼児期（演習）：実施献立の作成（岸）
- 第6回 乳児期・幼児期（実習）：調理実習（岸）
- 第7回 学童期・思春期（演習）：栄養ケアの特徴（岸）
- 第8回 学童期・思春期（演習）：実施献立の作成（岸）
- 第9回 学童期・思春期（実習）：調理実習（岸）
- 第10回 成人期・更年期（演習）：栄養ケアの特徴（八島）
- 第11回 成人期・更年期（演習）：実施献立の作成（八島）
- 第12回 成人期・更年期（実習）：調理実習（八島）
- 第13回 高齢期（演習）：栄養ケアの特徴（八島）
- 第14回 高齢期（演習）：実施献立の作成
- 第15回 高齢期（実習）：調理実習（八島）

成績評価の方法

成績は、実習への参加状況（30%）、レポート（40%）、その他提出物（30%）で評価する。

教科書

木戸康弘、真鍋祐之『応用栄養学 ライフステージ別・環境別』（医歯薬出版、2015、ISBN：978-4-263-70983-2）

教科書・参考書に関する備考

「応用栄養学 B」で使用する教科書を、この授業でも使用する。

授業のねらい

応用栄養学、栄養教育論、臨床栄養学、給食経営管理論につながる基本的スキルの習得を目指します。

到達目標

1. アセスメントについての知識を身につけることができる。
2. 食事調査や食行動調査をもとに、クライアントのアセスメントができる。
3. アセスメント結果をもとに、ケアプランの作成ができる。

授業方法

座学の講義を中心に行います。
事前課題として、献立作成に関する課題を出します（所要時間 30 分程度）
事後課題として、日本食への理解を深める課題や、献立作成に関する課題を出します（所要時間 1 時間程度）
課題レポートに関しては、1～3 の到達目標に近づくまで再提出を求めます。
栄養管理実習と連動させ、目標の到達を目指します。

授業計画

- 第1回 PDCA サイクルについて
食材の秤量、目測の重要性
- 第2回 アセスメントとケアプランについて、献立作成の際のポイント
- 第3回 行動記録調査、食事調査の実際
- 第4回 食事調査（調査スキル）(1)
(本人の食事調査：24 時間思い出し法、BDHQ-簡易型自記式食事歴法質問票)
- 第5回 食事調査（調査スキル）(2)
(本人の行動記録調査：PAL や TEE の計算等)
- 第6回 食事調査（インタビュースキル）(1)
(クライアントの食事調査・行動記録調査)
- 第7回 食事調査（インタビュースキル）(2)
(クライアントの食事を定量化し、評価する)
- 第8回 食事調査—定量化、栄養評価スキル
(クライアントのアセスメント、ケアプランの作成)
- 第9回 アセスメントと評価
(クライアントのアセスメントとケアプランをもとに、クライアントの食事内容を修正)
- 第10回 アセスメントと評価
(クライアントのアセスメントとケアプランをもとに、プレゼンテーションシートを作成)
- 第11回 カウンセリング DVD 視聴
- 第12回 プレゼンテーションシートの発表
- 第13回 クライアントのアセスメント、プレゼンテーションシートの見直し(1)
- 第14回 クライアントのアセスメント、プレゼンテーションシートの見直し(2)
(調味%、食品の目測等、基本的事項の確認)
- 第15回 まとめ：三田村、八島

成績評価の方法

到達目標 1 の測定方法は、試験（70%）とします。
到達目標 2、3 の測定方法は、プレゼンテーションの準備とその内容（30%）で行います。

履修にあたっての注意

栄養管理実習と関連付けて、課題に取り組んでください。

教科書

武見ゆかり、赤松利恵『栄養教育論—理論と実践』（医歯薬出版、2013）

教科書・参考書に関する備考

教科書は、「栄養教育論」（1 年次）で使用したものとします。
応用栄養学で使用する教科書も、参考にしてください。
応用栄養学—ライフステージからみた人間栄養学 第 9 版、森基子、玉川和子、澤順子、2012、医歯薬出版

授業のねらい

応用栄養学、栄養教育論、臨床栄養学、給食経営管理論につながる基本的スキルの習得を目指します。

到達目標

1. 献立作成に必要な知識や技術を身につける。
2. クライアントに望ましい食事を提案できる。
3. 栄養ケアマネジメントの際に必要な資料を作成できる。

授業方法

栄養アセスメントに関する実習を中心に、調理実習を数回行います。

事前課題として、栄養管理論とリンクした献立作成に関する課題を出します（所要時間 30 分程度）。提出後にコメントを入れて返却します。事後課題として、日本食への理解を深める課題や、献立作成に関する演習課題を出します（所要時間 1 時間程度）。提出後にコメントを入れて返却します。実技試験や筆記試験、課題に関しては、実施後に解説を行います。

授業計画

- | | |
|------|--------------------------------------------------------------------------------|
| 第1回 | 基本的調理スキル(1)
(食品の秤量、定量化スキル)
調理実習室で行います。 |
| 第2回 | 基本的調理スキル(2)
(乾物の秤量、調味パーセントについて)
調理実習室で行います。 |
| 第3回 | 基本的調理スキル(3) 日本食献立について
(一汁三菜形式、調味パーセントの確認)
調理実習室で行います。 |
| 第4回 | 基本的調理スキル(4)日本食献立の実習
(標準食としての分量や味の確認)
調理実習室で行います。 |
| 第5回 | 栄養アセスメント実習
献立作成の基礎(1) 望ましい食生活と日本食 |
| 第6回 | 栄養アセスメント実習
献立作成の基礎(2)日本食献立の作成 |
| 第7回 | 栄養アセスメント実習 望ましい食生活の提案
各自の献立を調理、評価
調理実習室で行います。 |
| 第8回 | 栄養アセスメント実習 望ましい食生活の提案 その2
主菜、副菜、副々菜の量とバランスを中心に、各自の献立を修正
(目測値や調理パーセントの確認) |
| 第9回 | 栄養アセスメント実習 望ましい食生活の提案 その3
修正した献立の調理と評価
調理実習室で行います。 |
| 第10回 | 献立作成に関するまとめ、調理技術調査
調理実習室で行います。 |
| 第11回 | 栄養ケアマネジメント実習 行動記録調査と食事調査 (ききとりと数値化、定量化) |
| 第12回 | 栄養ケアマネジメント実習 アセスメント～ケアプランの作成(1) 望ましい食生活の提案 |
| 第13回 | 栄養ケアマネジメント実習 アセスメント～ケアプランの作成(2) 望ましい食生活の提案 |
| 第14回 | 栄養ケアマネジメント実習 グループ発表 プレゼンテーション(1) |
| 第15回 | 栄養ケアマネジメント実習 グループ発表 プレゼンテーション(2) |

成績評価の方法

到達目標 1 は、実技と筆記試験（50%）によって評価します。

到達目標 2、3 は、課題への取組（20%）と、課題の提出（20%）、グループ発表の内容（10%）によって、評価します。

履修にあたっての注意

栄養管理論（講義）と関連づけて、課題に取り組んでください。

教科書・参考書に関する備考

プリントを配布します。

栄養教育論、応用栄養学で使用する教科書を参考にしてください。

授業のねらい

健康の保持・増進、生活の質（QOL）向上に寄与する、健康的な食行動の形成を目指すことを目的として、ライフステージ別の栄養教育の特徴と留意事項を学び、個人および集団を対象とした栄養教育の実践に向けての基礎知識を得ることをめざす。

到達目標

ライフステージ別の栄養教育の理論にもとづき、効果的な教材や媒体、手法などを用いて個人および集団栄養教育プログラムを立案し、実践するまでの一連の流れについて理解することができる。

授業方法

各回スライド、教科書、配布資料等を用いた講義形式の授業。日本人の食事摂取基準（2015年版）と健康日本21（第二次）、国民健康栄養調査をもとに、ライフステージごとの特徴をまとめる（事前学習：30分）。ライフステージごとに、栄養教育プログラムを作成する（事後学習：30分）。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 個人を対象とした栄養教育(1)
- 第3回 個人を対象とした栄養教育(2)
- 第4回 集団を対象とした栄養教育（DVD視聴含む）(1)
- 第5回 集団を対象とした栄養教育（DVD視聴含む）(2)
- 第6回 ライフステージ別栄養教育（妊娠期・授乳期）
- 第7回 ライフステージ別栄養教育（幼児期）
- 第8回 ライフステージ別栄養教育（学童期）
- 第9回 ライフステージ別栄養教育（思春期・青年期）
- 第10回 ライフステージ別栄養教育（成人期）
- 第11回 ライフステージ別栄養教育（高齢期）
- 第12回 ライフステージ別栄養教育まとめ
- 第13回 アスリート、障がい者を対象とした栄養教育
- 第14回 食環境づくりと栄養教育
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況（10%）、試験（90%）

教科書

武見ゆかり、赤松利恵『栄養教育論—理論と実践』（医歯薬出版、2013年、ISBN：978-4-263-70987-0）

教科書・参考書に関する備考

テキストは栄養教育論Ⅰと同じものを使用する。

授業のねらい

人体の構造・機能と栄養代謝との関係を理解するとともに、各疾患の病態に応じた栄養食事療法と、栄養アセスメント、管理目標の設定、栄養食事療法の効果・判定をできるようにする。

到達目標

疾患の概要を理解し各疾患における栄養ケア、栄養指導プランが作成できる。

授業方法

講義方式で行う。疾患ごとに講義を行うが、すでに学んだ解剖生理学、基礎栄養学などを復習し、組織・器官および栄養についての知識を呼び戻した上で、授業に臨むこと。授業終了後には、疾患の特徴、栄養療法の特徴について復習すること。

授業計画

- 第1回 代謝・内分泌疾患の栄養ケア(1)骨粗しょう症、糖尿病
- 第2回 代謝・内分泌疾患の栄養ケア(2)脂質異常症、肥満症
- 第3回 代謝・内分泌疾患の栄養ケア(3)先天性代謝異常、ウイルソン病、糖原病、甲状腺機能亢進症・低下症
- 第4回 消化器疾患の栄養ケア(1)胃・十二指腸潰瘍、潰瘍性大腸炎、クローン病
- 第5回 消化器疾患の栄養ケア(2)肝臓疾患
- 第6回 消化器疾患の栄養ケア(3)胆石症、胆嚢炎、慢性膵炎
- 第7回 循環器疾患の栄養ケア(1)高血圧、虚血性心疾患、心不全
- 第8回 腎疾患の栄養ケア(1)糸球体腎炎、ネフローゼ症候群
- 第9回 腎疾患の栄養ケア(2)慢性腎不全と慢性心不全、糖尿病腎症
- 第10回 呼吸器疾患の栄養ケア(1)慢性閉塞性肺疾患
- 第11回 血液疾患の栄養ケア(1)鉄欠乏貧血、
- 第12回 婦人科疾患の栄養ケア
- 第13回 免疫疾患の栄養ケア(1)食物アレルギー、自己免疫疾患
- 第14回 摂食障害関連(1)心因性の摂食障害、認知症、ALS、摂食・嚥下障害
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況 30% 試験（期末試験）70%

履修にあたっての注意

解剖生理学、基礎栄養学、生化学で習得した知識が臨床栄養の基礎となります。しっかりと復習しながら授業に臨んでください。

教科書

編集 本田佳子『Visual 栄養学テキスト 臨床栄養学Ⅱ各論』（中山書店、2016）
佐藤和人 本間健 小松龍史『エッセンシャル臨床栄養学 第8版』（医歯薬出版、2016）

教科書・参考書に関する備考

糖尿病や腎臓疾患は栄養指導・栄養管理には欠かせない疾患であるため最新の治療・診療ガイドを用い最新情報を習得することは重要です。

参考書

『糖尿病治療ガイド 2016-2017』（文光堂）
『CKD 診療ガイド 2012』（東京医学社）
『動脈硬化性疾患予防のための脂質異常症治療ガイド』（株式会社杏林舎）

授業のねらい

医療における一次予防、二次予防、三次予防の実践に向け管理栄養士の役割は重要である。保健、医療、介護を一体的に捉えて包括的に栄養ケア・マネジメントをするには、総合的な診療能力やチーム医療の重視が求められる。疾患予防および治療そして健康増進の観点から管理栄養士の役割とその活動について学ぶ。

到達目標

栄養ケアの概念を理解し、栄養アセスメント、栄養ケアプランの実施、症候や各ライフステージでの栄養ケアを説明できるようにする。臨床領域で求められる管理栄養士の役割が説明できる。

授業方法

講義方式で行う。平日頃、新聞報道などに目をとおり医療制度に関心を持ちながら、授業前には公衆衛生学等で学んだ地域医療にかかわる医療政策・医療保険制度・介護保険制度について復習し授業を受講すること。

授業終了時には、各種制度における管理栄養士の役割・かかわり方について復習し、まとめを作成すること。

授業計画

- 第1回 栄養ケアの基礎①臨床栄養学の意義
- 第2回 栄養ケアの基礎②医療と臨床栄養
- 第3回 栄養ケアの基礎③福祉・介護と臨床栄養
- 第4回 栄養アセスメント①栄養アセスメントの意義、栄養アセスメントの方法
- 第5回 栄養アセスメント①栄養アセスメントの実際（臨床診査、臨床検査）
- 第6回 栄養アセスメント①栄養アセスメントの実際（身体計測、摂食状況）
- 第7回 栄養ケアプランの実施①栄養ケアプランの目標、栄養ケアプランの作成
- 第8回 栄養ケアプランの実施②栄養ケアの実施（静脈栄養法、経腸栄養法、経口栄養法）
- 第9回 栄養ケアプランの実施③栄養教育、栄養カウンセリング
- 第10回 栄養ケアプランの実施④特別用途食品、保健機能食品、栄養ケアと薬物療法
- 第11回 栄養ケアプランの実施⑤モニタリングと評価
- 第12回 症候への栄養ケア 発熱、ビタミン欠乏症、下痢、便秘、褥瘡
- 第13回 新生児時期・乳幼児期の栄養ケア
- 第14回 回復を促す栄養ケア
- 第15回 終末期の栄養ケア

成績評価の方法

授業への参加状況 30% 試験（期末試験）70%

履修にあたっての注意

病院に勤める管理栄養士の役割は多岐に渡っています。管理栄養士の実務を理解し、栄養ケアの側面からどのような知識の習得が必要なのか考えてみましょう。

症例を通し、実際にイメージすることで、管理栄養士の役割が具体的に理解できるようになります。

教科書

編集 本田佳子『Visual 栄養学テキスト 臨床栄養学Ⅱ総』（中山書店、2016）
 佐藤和人 本間健 小松龍史『エッセンシャル臨床栄養学 第8版』（医歯薬出版、2016）
 鈴木吉知 丸山道生 藤谷順子 石川祐一『臨床栄養認定管理栄養士のためのガイドブック』（東京医学社、2016）

授業のねらい

傷病者の病態に基づいた適切な栄養管理が行えるように、栄養補給法および、食事療法の実際の技術を学び、調理・供食を通して栄養ケア技術を習得する。

到達目標

各疾患・病態に応じた、栄養ケア計画（食品の選択及び献立作成・調理・栄養評価）ができる

授業方法

実習・演習形式

事前学習として教科書で予習を行う（所要時間 1 時間）

事後学習として授業で学んだことを復習し、レポートにまとめ提出する（所要時間 2 - 3 時間）

レポートは添削を行い返却する

授業計画

- 第 1 回 入院時食事療法制度と治療食・献立作成
- 第 2 回 糖尿病食品交換表を使用した糖尿病献立作成
- 第 3 回 エネルギーコントロール食（糖尿病） 供食実習
- 第 4 回 軟菜食（術後食の実際） 供食実習
- 第 5 回 CKD（慢性腎臓病） 献立作成
- 第 6 回 CKD（慢性腎臓病） 供食実習
- 第 7 回 脂質コントロール食（慢性膵炎・他） 献立作成
- 第 8 回 治療食の展開 献立作成
- 第 9 回 脂質コントロール食（慢性膵炎・他） 供食実習
- 第 10 回 易消化食（炎症性疾患） 献立作成
- 第 11 回 献立展開・自主献立① 供食実習
- 第 12 回 献立展開・自主献立② 供食実習
- 第 13 回 栄養アセスメントの実際①（問診・食事調査）
- 第 14 回 栄養アセスメントの実際②（身体計測・栄養スクリーニング）
- 第 15 回 病院における管理栄養士の役割・まとめ

成績評価の方法

実習への参加状況 10%、課題レポート 40%、試験 50%

履修にあたっての注意

調理科学、調理実習、臨床栄養学などの授業で学んだ知識を身につけ授業に臨んでください

教科書

本田佳子『栄養食事療法の実習 栄養ケアマネジメント 第 11 版』（医歯薬出版、2016）

日本糖尿病学会編『糖尿病食事療法のための食品交換表第 7 版』（文光堂、2013）

黒川清、中尾俊之『腎臓病食品交換表第 9 版』（医歯薬出版、2016）

授業のねらい

国・地域等、社会に存在する健康・栄養状態の現状と課題を理解するとともに、健康増進・疾病予防を目的として実施されている国の健康・栄養政策と、これら政策の根拠となっている健康栄養関連法規について学ぶ。

到達目標

1. 公衆栄養の概念とその特徴を説明できる。
2. 日本における健康・栄養状態を社会環境の変化と関連づけて経時的に説明できる。
3. 国の健康・栄養政策を栄養関連法規とあわせて説明できる。

授業方法

1. 授業は、講義形式で行う。
2. 授業内容の理解度を測定するため、小テストを行う（2回）。
3. 事前学習として、関連科目である「公衆衛生学」の復習しておくこと。
4. 事後学習として、教科書の章ごとの演習問題を解くこと（所要時間1時間程度）。
5. 小テスト・期末試験については、採点後に答案を返却し、解答例を配布する。

授業計画

- 第1回 公衆栄養学の概念と公衆栄養活動
- 第2回 健康・栄養問題の現状と課題(1) 人口構成、健康状態の変化
- 第3回 健康・栄養問題の現状と課題(2) 食事の変化
- 第4回 健康・栄養問題の現状と課題(3) 食生活、食環境の変化
- 第5回 健康・栄養問題の現状と課題(4) 諸外国の健康・栄養問題の現状
- 第6回 栄養政策(1) 公衆栄養関連法規①
- 第7回 栄養政策(2) 公衆栄養関連法規②
- 第8回 栄養政策(3) 管理栄養士・栄養士制度
- 第9回 栄養政策(4) 国民健康・栄養調査
- 第10回 栄養政策(5) 実施に関連する指針、ツール
- 第11回 栄養政策(6) 健康日本 21
- 第12回 栄養政策(7) 食育推進基本計画
- 第13回 栄養政策(8) 特定健診・特定保健指導
- 第14回 栄養政策(9) 諸外国の健康・栄養政策
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

成績は、試験（80%）、小テスト2回（20%）で評価する。

教科書

由田克士・押野榮司『カレント公衆栄養学（第3版）』（建帛社、2016、ISBN：978-4-7679-0555-6）

教科書・参考書に関する備考

毎回、プリントを配布する。

授業のねらい

給食は、特定多数人に対し健康の保持・増進および QOL の向上を目的に、計画的かつ継続的に行われる食事提供です。給食経営管理論 I では、給食の基本的な考え方やその方法の習得を目指します。

到達目標

- ・給食の定義がわかる。
- ・利用者の適正な熱量や栄養素量を算出できる。
- ・安全・安心な食事提供の基本的な考え方や方法がわかる。

授業方法

教科書と配布資料を用い、スライドによる講義形式で進めていきます。
 授業前に教科書の該当ページを読んでおくことを求めます。
 事後学習では、授業で配布した資料を見直してください。到達目標を測定する試験および小テストについては、採点后に答案を返却し、解答例・解説を示します。

授業計画

- 第1回 給食の概念
給食の目的と役割
- 第2回 給食経営管理の概念
給食とマーケティング
- 第3回 給食経営と組織
- 第4回 栄養・食事管理
栄養・食事のアセスメント
- 第5回 食事の計画・献立の機能
- 第6回 献立作成基準と食品構成
- 第7回 給食経営における品質管理
- 第8回 原価管理・食材料の購入と管理
- 第9回 大量調理の方法と技術
- 第10回 給食の安全・衛生
- 第11回 大量調理施設衛生管理マニュアル
- 第12回 危機管理
- 第13回 施設・設備管理
- 第14回 給食の人事管理
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定する試験および小テスト（70%）、授業への参加状況（30%）で評価する。

履修にあたっての注意

管理栄養士・栄養士としての基本業務を学ぶ教科です。また、給食経営管理実習等の履修には、本教科の単位取得済が要件です。

教科書

片山直美、原正美編『給食経営管理論』（株式会社みらい、2018、ISBN：978-4-86015-439-4）

参考書

日本給食経営管理学会監修『給食経営管理用語辞典（第2版）』（第一出版、2015、ISBN：978-4-8041-1339-5）
 富田 教代他『給食施設のための献立作成マニュアル第9版』（医歯薬出版、2016、ISBN：978-4263706596）
 医療情報科学研究所『栄養士・管理栄養士のためのなぜ?どうして? 4: 給食経営管理論』（メディックメディア、2015、ISBN：978-4896325867）

参考ホームページ

日本食品標準成分表 2015 年版（七訂） 追補 2017 年 http://www.mext.go.jp/a_menu/syokuhinseibun/1399459.htm
 大量調理施設衛生管理マニュアル <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11130500-Shokuhinanzenu/0000168026.pdf>
 「日本人の食事摂取基準」（2015 年版） http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryoku/kenkou/eiyoku/syokuji_kijyun.html

授業のねらい

給食運営や関連の資源を総合的に判断し、栄養面、安全面、経済面全般のマネジメントを行う能力の習得を目指します。

到達目標

- ・利用者への適正な食事計画の立案・運営ができる。
- ・給食経営管理実習ⅠおよびⅡを円滑に行うための知識、実践力を身につける。

授業方法

1 から 7 講目までは、管理栄養士国家試験ガイドラインに沿って、受講者が予習用課題を発表し、それについて解説をしていきます。該当課題について解説ができるように準備することを求めます。

8 から 14 講目は、3 年次に開講される給食経営管理実習に向け実践的な演習形式で進めていきます。

事後学習では、授業で使用した資料等を見直してください。到達目標を測定する試験および小テストについては、採点后に答案を返却し、解答例・解説を示します。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
管理栄養士国家試験ガイドライン
- 第2回 給食の概念
- 第3回 給食経営管理の概念
- 第4回 栄養・食事管理
- 第5回 給食経営における品質管理
- 第6回 給食の安全・衛生
- 第7回 給食の施設・設備・人事管理
- 第8回 食事計画(1)：栄養管理・目標設定
- 第9回 食事計画(2)：原価管理
- 第10回 食事計画(3)：作業管理
- 第11回 食事計画(4)：献立の作成
- 第12回 給食の運営(1)：グループワーク
- 第13回 給食の運営(2)：グループワーク
- 第14回 食事計画(5)：プレゼンテーション
- 第15回 給食経営管理論のまとめ
給食経営管理実習Ⅰの予行演習

成績評価の方法

到達目標を測定する試験及び小テスト（50%）、授業への参加状況（50%）で評価する。

履修にあたっての注意

給食経営管理論Ⅰで学んだ理論をもとに講義をします。復習をしておいてください。

給食経営管理実習等の履修には、本教科の単位取得が要件です。

グループワークが多くなるので、各自責任と誠意をもって臨んでください。

教科書

片山直美、原正美編『給食経営管理論』（株式会社みらい、2018、ISBN：978-4-86015-439-4）

参考書

日本給食経営管理学会『給食経営管理用語辞典（第2版）』（第一出版、2015、ISBN：978-4-8041-1339-5）

富田 教代他『給食施設のための献立作成マニュアル第9版』（医歯薬出版社、2016、ISBN：978-4263706596）

医療情報科学研究所『栄養士・管理栄養士のためのなぜ? どうして? 4: 給食経営管理論』（メディックメディア、2015、ISBN：978-4896325867）

参考ホームページ

日本食品標準成分表 2015 年版（七訂） http://www.mext.go.jp/a_menu/syokuhinseibun/1365297.htm

大量調理施設衛生管理マニュアル http://www.n-bento.or.jp/pdf/manual_kai.pdf

授業のねらい

管理栄養士の基本的知識は、科学的根拠に基づくものでなければなりません (Evidence-Based Nutrition)。栄養学、食品学、生化学分野などにおける科学的根拠は、一般に学術論文として英語で発信されています。だから最新の科学的知見を入手するためには、それら学術論文を読みこなすことが必要です。

しかしながら学術論文の英語にはいくつかの専門的な特徴があるので、それらに慣れておくことが重要です。そこで栄養学、食品学分野の比較的平易な総説の英語に接し、学術論文の読解力を身に付けるトレーニングを行います。

これは3年後期から始まる卒業演習等でそれぞれの専門分野における学術文献を読みこなすための準備となります。

到達目標

1. 栄養学・食品学等における専門用語を理解している。
2. 栄養学・食品学等における比較的平易な英文総説を読みこなすことができ、内容を適切な日本語で表現できる。

授業方法

Adventures in Food and Nutrition (C. Byrd-Bredbenner 著)、2007 からいくつかのトピックスを採り上げます。

演習形式を主体として、文の構造、科学的な表現への翻訳方法、ならびにその内容の解説を行います。

<事前・事後学習>

テキストプリントを予め配付しますので、授業計画に沿って次の項目をノートに整理しておいてください。

1. 単語の読み方 (特にアクセントの位置を確認) 2. 単語の意味 (文意にふさわしい訳語の検討) 3. 文の直訳 4. 文の内容

また、復習として、授業でとりあげた項目について、食品化学や基礎栄養学、生化学の教科書を用いて、その内容をノートに整理してください。

授業計画

- 第1回 科学英語解読法：科学英語の理解の仕方、解読法を概説
- 第2回 Fabulous Fruits (1)
- 第3回 Fabulous Fruits (2)
- 第4回 Fabulous Fruits (3)
- 第5回 Versatile Vegetables (1)
- 第6回 Versatile Vegetables (2)
- 第7回 Versatile Vegetables (3)
- 第8回 Great Grains (1)
- 第9回 Great Grains (2)
- 第10回 Marvelous Meat and Poultry (1)
- 第11回 Marvelous Meat and Poultry (2)
- 第12回 Marvelous Meat and Poultry (3)
- 第13回 A Career to consider (1)
- 第14回 A Career to consider (2)
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

読解演習 75%と課題レポート 25%で評価します。

履修にあたっての注意

手持ちの英和辞典、または電子辞書を持参してください。

教科書・参考書に関する備考

事前にプリントを配布します。

参考書

浜田京三『英語リーディングの技術』(ベレ出版)

授業のねらい

科学関係の英語の文章を正確に理解し、専門関連の文章に慣れることを目指す。将来、外国語の文献や説明書などを読む機会があると思われるので、その準備として学ぶ。

到達目標

科学関連の英語を読むことが出来る。

授業方法

- ・栄養素の化学および食事と関連する病気について書かれたテキスト（プリントを事前に配布）を輪読形式で読み進めていく。
- ・事前のプリント課題は、受講者が訳し、食品学、栄養学などと関連づけて説明する。
- ・事前学習は、プリント（英語）を訳すことである。
- ・事後学習は、プリントを見直して復習することである。

授業計画

- 第1回 Vitamins
- 第2回 Thiamin, Fat-soluble vitamins
- 第3回 Minerals
- 第4回 Fats
- 第5回 Fatty foods
- 第6回 Carbohydrates
- 第7回 Digestion and absorption of carbohydrates
- 第8回 Function of carbohydrates
- 第9回 Carbohydrates foods
- 第10回 Proteins
- 第11回 Digestion and absorption of proteins
- 第12回 Diet and cancer
- 第13回 Osteoporosis
- 第14回 Causes and effects of obesity
- 第15回 Aging

成績評価の方法

到達目標を測定する毎回の予習と内容理解（80%）、授業への参加状況（20%）で評価する。

履修にあたっての注意

予め予習をしてきて、文章の内容を説明する。
英和辞典（手持ちのもの）を持参すること。

教科書・参考書に関する備考

事前にプリントを配布する。

64411

学校栄養教育 I

担当教員：菊地和美・今野邦彦・三塚真理子

2単位 後期

授業のねらい

子どもたちが将来にわたって健康に生活していけるようになるためには、子どもたちに対する食に関する指導を充実し、望ましい食習慣の形成を促すことが重要である。子どもの食に関する指導に対して各自なりの新たな興味や問題意識を持つことができるよう目指す。教育実習にむけて学んできた栄養教諭に関する業務内容ならびに北海道産食材を用いた学校給食について、知識と技能を理解し、身につけることを目的とする。

到達目標

授業で取り上げたうちの「食に関する指導」について指導案を作成し、その指導が出来る。

到達目標1：栄養教諭に関する知識を身につけ、学校給食を活用した授業計画を理解することができる。

到達目標2：指導案を作成し、模擬授業を行い、指導方法を討議することができる。

授業方法

学校給食を教材として機能を最大限に活用した「食に関する指導」が展開できることを踏まえ、学校における「食に関する指導」が学校教育活動全体で行えることが理解されるように、実践事例を入れながら展開していく。講義・一部演習形式で行う。各自、「食に関する指導案」の作成・模擬授業を行うこととして、討論を行う。

発表者はプレゼンテーションの方法や役割分担によって討論をまとめていく力を養う。

(ゲストスピーカーにより、講義・演習で学ぶ) 受講にあたって、事前学習として各自レジュメ・指導案を作成し、人数分印刷して準備しておくことを課題とする(所要時間60分程度)。事後学習としてふりかえり・レポートを作成する(所要時間60分程度)。指導案・レポートは、演習内で口頭により、解説し、資料を配付する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション 学校における食育の推進の必要性
- 第2回 学校における食育の推進について 栄養教諭の役割
- 第3回 食に関する指導に係る全体計画の作成
- 第4回 学校給食を生きた教材とした食育の推進
- 第5回 食に関する指導案のたて方
- 第6回 発達に応じた食に関する指導と食生活教材
- 第7回 実践演習1：給食の時間における食に関する指導 食に関する指導案作成(3～5分)
- 第8回 各教科等における食に関する指導の展開 食に関する指導の展開；家庭、技術・家庭
- 第9回 各教科等における食に関する指導の展開 食に関する指導の展開；体育、保健体育
- 第10回 各教科等における食に関する指導の展開 食に関する指導の展開；道徳、特別活動等
- 第11回 実践演習2：給食時間における食に関する指導 学生が作成した指導案と食に関する指導の展開、相互批評など
- 第12回 特別支援学校における食に関する指導の展開(今野)
- 第13回 学校・家庭・地域が連携した食育の推進
- 第14回 個別的な相談指導の進め方
(1)食物アレルギーを有する児童生徒 (2)肥満傾向にある児童生徒 (3)痩身傾向にある児童生徒
- 第15回 実践演習3：食に関する指導案作成(45分授業)
まとめと課題

成績評価の方法

到達目標1を測定する小レポート・レジュメ(30%)、到達目標2を測定する「食に関する指導案」作成(40%)、授業への参加状況(30%)により、評価する。

履修にあたっての注意

教育専門職(栄養教諭)を目指すものとしての自覚をもって、自ら課題を持ち、意欲的に学ぶこと。レジュメやレポート・「食に関する指導案」の内容について、しっかりと学習した上で授業に参加すること。

教科書

文部科学省『食に関する指導の手引：第一次改訂版』(東山書房、2010)
文部科学省『小学校学習指導要領』(東洋館出版、2018)
文部科学省『小学校学習指導要領解説家庭編』(東洋館出版社、2018)

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。

授業のねらい

疾病医療学では、管理栄養士課程教育における、「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」領域のうち、疾病に関する部分を扱い、主要疾患の成因、病態、診断及び治療についての基礎的知識を習得する。

疾病医療学 C では、呼吸器疾患、運動器疾患、妊娠と分娩・妊娠合併症、血液系疾患、免疫・アレルギー疾患、感染症について、主要な疾患の概要を理解する。

到達目標

呼吸器疾患、運動器疾患、妊娠と分娩・妊娠合併症、血液系疾患、免疫・アレルギー疾患、感染症の主要な疾患について、原因、病態生理、症候、診断、治療を概説できる。

授業方法

原則として、講義形式で行う。

受講にあたり必要な事前作業：各疾患臓器についての解剖生理学の復習

受講にあたり必要な事後作業：各授業で扱った領域について管理栄養士国家試験の過去出題問題を解くこと

授業計画

- 第1回 呼吸器疾患 1 (小山田)
呼吸器系の構造と機能の復習と COPD (慢性閉塞性肺疾患)
- 第2回 呼吸器疾患 2 (小山田)
気管支喘息
- 第3回 呼吸器疾患 3 (小山田)
気管支炎・肺炎、肺結核
- 第4回 運動器疾患 1 (小山田)
骨粗鬆症、骨軟化症、くる病
- 第5回 運動器疾患 2 (小山田)
変形性関節症、フレイルティ(虚弱)、サルコペニア、ロコモティブシンドローム
- 第6回 妊娠と分娩・妊娠合併症 1 (小山田)
生殖と発生
- 第7回 妊娠と分娩・妊娠合併症 2 (小山田)
妊娠高血圧症候群、妊娠糖尿病
- 第8回 血液系疾患 1 (小山田)
貧血
- 第9回 血液系疾患 2 (小山田)
出血性疾患
- 第10回 血液系疾患 3 (小山田)
白血病
- 第11回 免疫・アレルギー疾患 1 (藤井)
アレルギー疾患
- 第12回 免疫・アレルギー疾患 2 (藤井)
自己免疫疾患
- 第13回 免疫・アレルギー疾患 3 (藤井)
免疫不全
- 第14回 感染症 1 (藤井)
感染症総論
- 第15回 感染症 2 (藤井)
感染症各論

成績評価の方法

到達目標に示した項目について、管理栄養士国家試験のレベルを達成しているか、筆記試験 (100%) によって評価します。

履修にあたっての注意

この科目は、人間の全身に関する病態を理解することを目標としているため、内容は非常に多く、真剣に学ばなければ授業内容を理解することが非常に難しい。臨床医学、臨床栄養の基礎となる教科であることを理解し、これらの教科と統合的に学習することが望まれる。また、必ず授業直後に復習することが大切である。

教科書

竹中優 編著『人体の構造と機能および疾病の成り立ち 疾病の成因・病態・診断・治療 第2版』(医歯薬出版、2011)

参考書

田中清 (編集)『Visual 栄養学テキスト 人体の構造と機能および疾病の成り立ち III 疾病の成り立ち』(中山書店、2017、ISBN : 978-4-521-74286-1)

授業のねらい

食生活の中で加工食品の占める割合は極めて高く、多くの種類がある。加工法も従来型および科学技術の進歩による新規加工法まで、多くの方法が利用されており、それらに対する知識と理解が必要である。そこで、この授業では主に農産物、畜産物、水産物、発酵食品などの加工法とその原理を理解し、加工・保存過程での栄養成分の変化について学ぶことを目的とする。

到達目標

食品の加工・保存法およびその過程での食品の成分変化を理解出来る。

授業方法

講義形式により、教科書とプリントおよびスライドを用いて進める。

はじめに、前回の復習および質問に答える（5～10分）。事前の課題（プリント課題）は受講者に回答を求めた後、理解を深めるためにスライド等を用いて解説する。毎回最後にリアクションペーパーを配布して（5～10分）、理解度を把握する。

事前学習は、教科書を読み、プリント課題を行うことである。

事後学習は、プリントを見直して復習することである。

授業計画

- 第1回 序：食品加工の意義・目的および食品の特性
- 第2回 食品の保蔵(1)：水分活性、乾燥、塩蔵、糖蔵
- 第3回 食品の保蔵(2)：燻煙、低温、加熱、品質保持剤、CA貯蔵、MA貯蔵
- 第4回 食品加工の操作：物理的操作、化学的操作、生物的操作
- 第5回 食品加工と成分変化：変化の要因、食品成分の影響
- 第6回 農産加工：穀類、豆類、いも類、野菜類、果実類
- 第7回 畜産加工：乳と乳製品、食肉と食肉製品、卵製品
- 第8回 水産加工：水産加工原料の特徴と管理、乾製品、塩蔵品、練り製品
- 第9回 発酵食品：アルコール飲料、発酵調味料
- 第10回 調味料および嗜好食品(1)：調味料、甘味料、塩
- 第11回 調味料および嗜好食品(2)：香辛料、嗜好飲料
- 第12回 食用油脂：油脂の採油、精製、油脂の加工
- 第13回 インスタント食品および機能性食品：冷凍食品、レトルトパウチ食品
- 第14回 食品の包装と流通・表示
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定する2回の試験（80%）、授業への参加状況（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

事前にプリントを配布するので、教科書で予習しながらプリントの空欄（課題）を埋めておくこと。随時指名して発言を求めするので、しっかりと学習した上で授業に参加すること。

教科書

菅原龍幸『三訂 食品加工学』（建帛社、2015）

授業のねらい

食べ物は、一次機能（栄養性）や二次機能（嗜好性）のほかに、生体の恒常性維持や生理機能の調節作用を持っており、近年、それらの作用機作が明らかになってきています。これら三次機能として理解される生体機能調節作用は、活性酸素に対する生体防御系や免疫系、分泌系、神経系など多様な生体機能に関与していることが知られており、特定保健用食品（トクホ）など新しい食品としても普及してきています。

食品機能論では、前半で食品表示法に規定される制度の概要について解説し、後半では生体調節機能が見いだされた食品成分について生体調節の機能別に解説し、健康維持に有益な食品の特徴と疾病予防に対する役割を理解できるように講義を行ないます。

クリッカーを用いたアクティブラーニングにより、他の学生の考え方や勉強ぶりを知ることができ、授業参加への意欲を高めます。

これらを通して完全な理解が得られるまで何度でも指導しますので、社会に貢献できる管理栄養士としての基礎学力をしっかりと身につけてほしいと考えています。

到達目標

1. 保健機能食品（栄養機能食品・特定保健用食品・機能性表示食品）・特別用途食品について、表示の規格を含め説明できる。
2. 食品成分の生体調節機能について、化学構造をイメージしながら例を挙げて説明できる。
3. クライアントからの食品の機能性についての質問に対し、科学的に、分かりやすく説明できる。

授業方法

原則として教科書に沿って進めます。パワーポイントを用いた講義形式ですが、途中で双方向授業の手法を取り入れます。

食品の生体調節機能について、成分の化学構造と特徴、及びその作用機作について、現段階で解明されていることと、未だ解明されていないことを明確にしながら解説します。

事前に講義内容を示すので、教科書と合わせて十分に予習し、予習ノート作成により、基本的な知識を確認しておくことが重要です。

授業の途中でアクティブラーニングアプリであるレスポ（朝日ネット）を用いた双方向授業を行います。スマホを所有していれば事前に以下のサイトよりアプリをダウンロードし、マニュアルをよく読んでおいてください。

<https://respon.jp>

スマホでない場合は、ブラウザから回答できます。<https://go.respon.jp> 講義内容を復習し、次回確認テストで理解度を調べます。予習・復習にはそれぞれ 90 分以上が求められます。

これは授業時間内に指示します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：食品機能論とはどのような学問であるのか？授業の概要（アクティブラーニング）説明と科目の位置付け
- 第2回 保健機能食品と機能性食品 1：保健機能食品とはなにか。栄養機能食品
- 第3回 保健機能食品と機能性食品 2：保健機能食品とはなにか。食品表示基準
- 第4回 保健機能食品と機能性食品 3：保健機能食品とはなにか。特定保健用食品
- 第5回 保健機能食品と機能性食品 4：保健機能食品とはなにか。機能性表示食品
- 第6回 保健機能食品と機能性食品 5：特別用途食品
- 第7回 保健機能食品と機能性食品 6：いわゆる健康食品
- 第8回 保健機能食品、いわゆる健康食品等の利用について；グループワーク
- 第9回 消化吸収促進と代謝改善機能
- 第10回 難消化、吸収阻害および微生物活性機能：食物繊維・難消化性オリゴ糖のはたらき
- 第11回 脂質関連代謝機能 1：イコサノイド
- 第12回 脂質関連代謝機能 2：ジアシルグリセロール、中鎖脂肪酸の機能
- 第13回 酵素阻害機能：レニン・アンジオテンシン系の酵素阻害による血圧調節、酵素活性化による抗がん作用とはどういうことか
- 第14回 免疫系におよぼす機能：アレルギー表示、PR たんぱく質と無農薬作物
- 第15回 特別講義：食品企業等より研究開発分野で活躍する講師を招き、特定保健用食品などの研究開発の実際について講義していただく。

成績評価の方法

筆記試験（90%）、予習ノート・課題の提出（10%）

履修にあたっての注意

- ・予習をしよう。教科書やプリントを事前によく読んで予習ノートを作成しまとめてください。予習を行うことは授業の理解を飛躍的に深めます。そして質問すべき項目が明確になります。
- ・クリッカーを用いて Quiz に回答してください。十分予習しておくで適切な回答を提出することができます。
- ・復習をしよう。復習して分からないところを明確にすると質問しやすくなります。
- ・細分化されたさまざまな授業科目がそれぞれつながっていて、それらを総合的に捉えて人の健康を理解する、という考え方を学ぶ姿勢で取り組もう。
- ・食品成分については食品化学 A・B、生体への作用を理解するには生化学が基礎となるので、これらを十分に身に付けておかないと授業の理解に支障が出る可能性があります。

教科書

青柳康夫編著『改訂食品機能学第3版』（建帛社、2016、ISBN：978-4-7679-0579-2）

授業のねらい

栄養生化学実験の目的は、生化学の知識の基となった基本的な実験を自ら体験することにより、生化学反応の原理に対する理解を深めるとともに、生化学の将来の発展に対応できるような「生化学的なもの見方」を会得することにあります。

本実験実習は、実験操作法のプリント（テキスト）に従って実施しますが、各操作が何を目的としているかを常に考え、明確に理解して行われなくてはなりません。また、このことが、実験中の事故を防ぐことにもつながります。この実験科目の特徴は定量分析が多いことにあり、測定して得られた数値からの計算法や有効数字の取り扱い方、および単位の付け方を学ぶこととなります。実験結果を表やグラフにしてよく考察し、レポートとしてまとめる技術を習得することも期待します。

到達目標

1. 物質の化学的性質を理解して取り扱うこと、数値に単位を付けること、実験結果を定量的に扱うことができる。
2. 生体成分に関する基礎的な生化学的実験を自ら立案して実施し、結果をとりまとめる能力を身に着ける。

授業方法

実験を始める前の各実験項目・内容の説明は、分担して履修する学生が予めプリントや専門書を調べて行います。そのためには1時間程度の事前学習が必要です。なお、必要な補足説明と注意事項を担当教員が伝えます。また、受講者全員が事前に配布されている資料の該当ページを読んでおくことを求めます（所要時間30分程度）。本実験実習では、6名程度からなるグループで協同して行うことが基本となりますが、実験結果は各自で詳細に記録してレポートを作成します。そのためには、1時間程度の事後学習が必要となります。

レポートは採点后に返却し、その際に注意事項、問題点などを伝えます。

なお、本実験科目は後期後半（11月上旬）から始まり、3コマ連続で10回行います。

授業計画

- 第1回 栄養生化学実験に関する諸注意、実験器具・装置の使い方、レポートのまとめ方などの指導
- 第2回 酵素反応の基礎実験(1) 反応生成物の定量、検量線の作成およびpHの影響
- 第3回 酵素反応の基礎実験(2) 経時変化と酵素濃度の影響
- 第4回 酵素反応の基礎実験(3) ミカリエス定数と最大反応速度の測定ならびに阻害定数の測定
- 第5回 タンパク質の実験(1) ゲル濾過法によるタンパク質とアミノ酸の分離およびタンパク質の定量
- 第6回 タンパク質の実験(2) ペプシンによるタンパク質の分解と分解物のゲル濾過による分画
- 糖質の実験(1) ラット肝臓グリコーゲンの分離
- 第7回 糖質の実験(2) ラット肝臓グリコーゲンの定量：絶食ラットと摂食ラットとの比較
- 第8回 核酸の実験(1) ラット肝臓からの核酸の抽出精製
- 脂質の実験(1) 動物組織脂質の抽出と精製
- 第9回 核酸の実験(2) ラット肝臓中の核酸の定量
- 脂質の実験(2) リン脂質の定量とケイ酸 TLC による脂質の分離・同定
- 第10回 核酸と遺伝子関連分野での最新情報に関する講義、ならびにまとめと片付け
- 第11回 3コマ連続の実験実習になりますので、10回までの授業計画で実施します。
- 第12回 同上
- 第13回 同上
- 第14回 同上
- 第15回 同上

成績評価の方法

実験の区切りで提出するレポートの内容（70%）、分担して説明する実験内容の理解度（10%）および実験への取り組み状況（20%）で評価する。

履修にあたっての注意

プリントと生化学の教科書で十分に予習し、実験を始める前に実験の目的や実験方法を理解して説明できるように準備することが必要となります。実験衣着用など安全面の注意をよく守って「安全第一」を旨としてください。なお、実験実習室は土足厳禁ですので上履き（スニーカーやナースサンダル）が必要です。

授業のねらい

栄養教育論や食行動論で学んだ理論をもとに、さまざまなライフステージの対象者（幼児期、学童期、思春期、妊娠期、成人期、高齢期）や、シチュエーションにおける栄養アセスメントやプログラムの作成と実践、評価法を体験的に習得することを旨とする。

到達目標

これまでに学んできたさまざまな理論をもとにして、効果的な教材や媒体、手法などを用いて栄養教育プログラムを立案し、実践することができるようになること。

授業方法

前半5回までは講義と演習を通じて、栄養教育に必要な栄養マネジメントの具体的な方法について学ぶ。6～8回目まではグループごとの模擬授業に向けてのディスカッションや指導案、媒体作成などを行い、9回目から各グループごとに60分の模擬授業を発表する。事前学習として、健康日本21（第二次）や国民健康栄養調査をはじめとする既存の資料を読み込み、ライフステージごとの特徴を把握する（30分）。事後学習として、レポート等による考察を行う（30分）。詳細については、第1回目のオリエンテーションにて指示する。

授業計画

- 第1回 実習オリエンテーション、栄養アセスメントの実践（量的情報収集1：アンケートの作成・実施）
- 第2回 栄養アセスメントの実践（量的情報収集2：アンケートの分析）
- 第3回 栄養アセスメントの実践（質的信息収集1：インタビュー、逐語記録の作成）
- 第4回 栄養アセスメントの実践（質的信息収集2：分析、課題抽出）
- 第5回 栄養アセスメントの結果に基づく計画の立案（指導案の作成）
- 第6回 各ライフステージ別の対象者に向けたプログラムの作成1（グループディスカッション）
- 第7回 各ライフステージ別の対象者に向けたプログラムの作成2（グループディスカッション）
- 第8回 各ライフステージ別の対象者に向けたプログラムの作成3（グループディスカッション）
- 第9回 成人期：60分間の模擬授業（発表と評価）
- 第10回 高齢期：60分間の模擬授業（発表と評価）
- 第11回 妊娠期：60分間の模擬授業（発表と評価）
- 第12回 思春期：60分間の模擬授業（発表と評価）
- 第13回 学童期：60分間の模擬授業（発表と評価）
- 第14回 幼児期：60分間の模擬授業（発表と評価）
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

レポートの提出（50%）、実習への取り組み（30%）、課題の提出（20%）

履修にあたっての注意

実習の特性上、時間外にも取り組む必要性が生じることがある。グループ内で相互に協力してプログラムを完成させること。

参考書

佐藤香苗、杉村留美子『マスター栄養教育論実習』（建帛社、2016年、ISBN：978-4-7679-0567-9）

授業のねらい

管理栄養士の仕事は、健常者から傷病者、乳児から高齢者へと多様な対象において栄養ケアを実践する対人業務です。様々なライフステージの対象者とより良い関係を構築するためには、対象者との信頼を基盤とした関わりが重要です。コミュニケーション技法を学び、望ましい対人関係の形成を参加型体験学習を通して学び、全人的ケアが出来る管理栄養士を目指します。

到達目標

- ・様々なライフステージを対象とし、それぞれの望ましい対人関係を理解できる。
- ・学外の実習に臨むに当たり、学生個々人の対人における課題を把握できる。

授業方法

グループワークなどを中心とした 演習形式で進めていきます。
オリエンテーション時にファイルを配布するので、各自事前学習をしておくこと。
体験した事項をレポートにまとめ、事後学習をすること。

授業計画

担当教員：村田まり子・隈元晴子・田中洋子・高橋真由美・杉浦篤子

- 第1回 オリエンテーション 自分を知る（自己発見）ワーク
- 第2回 対人関係とマナー(1)：社会人として大切なこと
接遇5原則
- 第3回 対人関係とマナー(2)：電話対応
身だしなみのチェックポイント
- 第4回 文章表現コミュニケーション(1)：履歴書、礼状など
- 第5回 文章表現コミュニケーション(2)：報告書の作成
- 第6回 コミュニケーションスキル(1)カウンセリング
- 第7回 コミュニケーションスキル(2)交流分析
- 第8回 コミュニケーションスキル(3)自己表現
- 第9回 コミュニケーションスキル(4)主体性の発揮
- 第10回 コミュニケーション媒体の作成技法(1)：栄養教育に活用出来る指導媒体の作成①
- 第11回 コミュニケーション媒体の作成技法(2)：栄養教育に活用出来る指導媒体の作成②
- 第12回 地域保健分野における対人関係：地域住民とのかかわり方
- 第13回 福祉分野における対人関係：入所者とのかかわり方
- 第14回 臨床分野における対人関係：傷病者等とのかかわり方
- 第15回 臨地実習における対人関係を通してのまとめ

成績評価の方法

授業への主体的参加状況（50%）および課題レポート（提出状況およびレポート内容）（50%）により評価します。

履修にあたっての注意

遅刻、欠席をせず継続的に出席すること。
参加型体験授業ですので、積極的な授業参加を望みます。
クラスによって、開催順が異なることがあります。

授業のねらい

病院に勤める管理栄養士として、疾病の予防・治療に欠かすことのできない栄養教育を行う上での必要な知識と技術を学ぶことを目的とする。その上で、個人を対象とした栄養教育の際に必要な「カウンセリング技法」を身につけ、対象者自らの行動変容により食生活を改善するための方法論を学び、栄養カウンセリングを実践できる能力を養う。

到達目標

栄養教育を行うために必要なカウンセリングに関する知識や技術について修得する（知識）。
個人を対象とした栄養教育の際に必要な「カウンセリング技法」を身につける（技能）。

授業方法

講義とロールプレイで知識と技術を学ぶ。
栄養士として、対象者に苦痛や不安、不満を与えず、対象者との信頼関係を構築し対象者に対して支援援助ができる栄養指導ならびに栄養相談を学んでいく。
前半の第5回目までは、教科書をもとに講義形式にて栄養指導に必要な知識と技術について学ぶ。第6回目からは、糖尿病患者、腎臓病患者、透析導入患者、担癌患者の症例をもとに栄養アセスメント・ケアプランの作成後、効果的な栄養指導を実施するための指導案（レポート）を各自作成する。事前学習として、今まで学んだ臨床栄養 A、C の復習を十分行う。事後学習として、各自作成したレポートによる演習・考察を行う。詳細については、第1回目のオリエンテーションにて指示する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
栄養教育におけるカウンセリングの位置づけ
- 第2回 栄養教育に必要な栄養カウンセリングスキル
栄養カウンセリングに必要なカウンセリング理論
- 第3回 心理アセスメント
栄養教育に関係が深い疾病や健康に関する保健行動
- 第4回 カウンセリングに必要な食行動理論
- 第5回 ライフステージと食行動の特徴
栄養カウンセリングの応用
- 第6回 カウンセリングの技法と栄養教育への応用(1)
症例を通して総合実習（栄養カウンセリング実習）－糖尿病患者
- 第7回 カウンセリングの技法と栄養教育への応用(2)
症例を通して総合実習（栄養カウンセリング実習）－糖尿病患者
- 第8回 カウンセリングの技法と栄養教育への応用(3)
症例を通して総合実習（栄養カウンセリング実習）－腎臓病患者
- 第9回 カウンセリングの技法と栄養教育への応用(4)
症例を通して総合実習（栄養カウンセリング実習）－腎臓病患者
- 第10回 カウンセリングの技法と栄養教育への応用(5)
症例を通して総合実習（栄養カウンセリング実習）－透析導入患者
- 第11回 カウンセリングの技法と栄養教育への応用(6)
症例を通して総合実習（栄養カウンセリング実習）－透析導入患者
- 第12回 カウンセリングの技法と栄養教育への応用(7)
症例を通して総合実習（栄養カウンセリング実習）－担癌患者
- 第13回 カウンセリングの技法と栄養教育への応用(8)
症例を通して総合実習（栄養カウンセリング実習）－担癌患者
- 第14回 カウンセリングの技法と栄養教育への応用(9)
総合討論
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業への主体的参加状況（40%）、課題レポート（提出状況およびレポート内容）（40%）、ミニテスト（20%）

履修にあたっての注意

授業を通して、自分が他者と誠実に関わることができる人格成長を目指して、自己研鑽をする気持ちを持って望んでください。ロールプレイング（役割演習）を実施する事前授業で必要な注意事項や、自宅学習の範囲を指示しますので、演習（実習）までに必ず予習をしておいてください。

教科書

小松啓子、大谷貴美子『栄養カウンセリング論第2版』（講談社サイエンティフ、2009）

授業のねらい

臨床栄養学 B では、解剖生理学の知識に基づいて、生体の疾病、障害は臓器間コミュニケーションとその不良という理解を身につけるとともに、栄養は臓器間コミュニケーション不良を改善する直接、間接の要因であるという理解を身につける。

到達目標

臓器間コミュニケーション、臓器間コミュニケーション不良、臓器間コミュニケーション不良を改善する直接、間接の要因について理解するとともに、臓器間コミュニケーション不良を改善する方法論を身につける。

授業方法

配布プリントに基づいてパワーポイントを用いて進める。教科書の授業に関連する部分と配布プリントを読むことで事前学習をする。質問は随時受け付けて回答する。リアクションペーパーに記載された質問については授業開始時に回答する。授業配布プリントの内容から作成した復習問題により復習をする。この復習問題から学期末試験の出題を行ない、理解度をチェックする。そして試験の解答結果について解説することでさらなる理解を促す。

授業計画

- 第 1 回 臓器間コミュニケーションから見た臨床栄養学
- 第 2 回 体液と臓器間コミュニケーション
- 第 3 回 低体温症
- 第 4 回 熱中症
- 第 5 回 脱水症
- 第 6 回 消化器疾患と栄養～消化管に生じる主な疾患～
- 第 7 回 「消化器疾患と栄養～管理栄養士として生を支える～」
- 第 8 回 補液の方法
- 第 9 回 心不全
- 第 10 回 肝不全
- 第 11 回 糖尿病の合併症
- 第 12 回 摂食障害
- 第 13 回 慢性膵炎
- 第 14 回 腎不全
- 第 15 回 まとめ

成績評価の方法

成績評価は、リアクションペーパー 20%、試験 80%で行う。

履修にあたっての注意

毎回、授業配布資料に基づいて講義をおこなうが、必ず関連する教科書の部分を読んで授業内容の理解を深めるようにする。

教科書

竹中 優 編『人体の構造と機能および疾病の成り立ち 疾病の成因・病態・診断・治療 第 2 版』（医歯薬出版、2011）

教科書・参考書に関する備考

教科書は、4 年次の高齢者健康論においても使用する。授業では赤字のキーワードを中心に理解する。授業では独自のプリントを配布する。

授業のねらい

臨床領域の管理栄養士に必要な知識と技術の統合を図る。傷病者や障害者に対する栄養ケアの重要性を理解し、栄養ケア・マネジメントおよび栄養サポート、チーム連携の在り方について学ぶ。

到達目標

傷病者や障害者に対する栄養アセスメント、栄養ケアプランが作成できる。

授業方法

講義方式で行う。第2回目以降の授業については、講義前に授業ポイントの資料を配布するので、授業前によく読み理解しておくこと。

臨床場面で求められる管理栄養士のスキルを理解するために、講義終了後レポート課題の提出を課する。

授業計画

- 第1回 医療・介護保険制度における管理栄養士の役割
- 第2回 栄養ケア・マネジメントにおける栄養・食事療法①
- 第3回 栄養ケア・マネジメントにおける栄養・食事療法②
- 第4回 栄養ケア・マネジメントにおける栄養アセスメント・栄養ケアプラン①
- 第5回 栄養ケア・マネジメントにおける栄養アセスメント・栄養ケアプラン②
- 第6回 栄養ケア・マネジメントにおける栄養食事指導①
- 第7回 栄養ケア・マネジメントにおける栄養食事指導②
- 第8回 栄養補給法の選択（経口栄養法・経腸栄養法・経静脈栄養法）
- 第9回 生活習慣病複合疾患と栄養ケア
- 第10回 糖尿病性腎症の栄養ケア・栄養指導・チーム連携
- 第11回 消化器疾患術後の疾患の栄養ケア
- 第12回 呼吸器疾患の栄養ケア
- 第13回 虚弱高齢者への栄養ケア・マネジメントの実際
- 第14回 チーム医療、栄養サポートチーム
- 第15回 在宅栄養管理、訪問栄養食事指導の実際

成績評価の方法

授業で課するレポート課題 40% 試験（期末試験）60%

履修にあたっての注意

臨床栄養学 A、B、C および臨床栄養学実習Ⅱで学んだ事項を復習して授業に臨むこと。

教科書

渡邊早苗 寺本房子 松崎政三『新しい臨床栄養管理』（医歯薬出版）

授業のねらい

患者の病態、栄養状態を把握し、適切な栄養ケアの実践に向けての実践的技術の習得を目的とする。医療機関で実際に行われている栄養管理・栄養ケアを想定して実践的なスキルを身につける。

到達目標

各疾患・病態に応じた、栄養ケアプランが作成できる

授業方法

実習・演習形式

事前学習として教科書で予習を行う（所要時間1時間）

事後学習として授業で学んだことを復習し、レポートにまとめ提出する（所要時間1時間）

レポートは理解度を確認後返却する

授業計画

- 第1回 栄養スクリーニングの実際
- 第2回 栄養アセスメントの実際
- 第3回 栄養ケアプランの実際①
- 第4回 栄養ケアプランの実際②
- 第5回 問題指向型医療記録（POMR）と栄養管理実施報告書の記録
- 第6回 糖尿病の栄養ケア・栄養指導の展開①
- 第7回 糖尿病の栄養ケア・栄養指導の展開②
- 第8回 肝臓病の栄養ケアの実際（調理実習を含む）
- 第9回 慢性腎臓病の栄養ケア・栄養指導の展開
- 第10回 栄養補給法（経静脈栄養・経腸栄養）
- 第11回 高齢者に対する栄養ケア①（摂食・嚥下障害）
- 第12回 高齢者に対する栄養ケア②（摂食・嚥下障害）（調理実習を含む）
- 第13回 治療食献立作成（献立の展開）
- 第14回 消化器がん術後の栄養ケア・個別対応食の実際（調理実習を含む）
- 第15回 医療機関における栄養管理実務の実際

成績評価の方法

グループワーク参加状況 10%、課題レポート 30%、試験 60%

履修にあたっての注意

今まで授業で学んだ知識を統合し、臨床場面での応用力を身につけていきます。グループワークを通じてスキルアップを目指します。

教科書

渡邊早苗・寺本房子・笠原賀子・松崎政三 編『新しい臨床栄養管理』（医歯薬出版、2010）

授業のねらい

集団の栄養状態を把握・評価するために必要となる栄養疫学の基礎を習得する。また、健康増進計画作成、公衆栄養プログラムを展開する上で基礎となる地域の健康・栄養状態のアセスメント、公衆栄養プログラムの評価方法を中心に、公衆栄養マネジメントの考え方について理解する。さらに、公衆栄養マネジメントの考え方に基づき、国・地域が実施する公衆栄養プログラムがどのように展開されているかを学ぶ。

到達目標

1. 栄養疫学の考え方にに基づき、食事摂取量の測定方法と評価方法を理解できる。
2. 地域の健康・栄養状態のアセスメント方法、公衆栄養プログラムの評価方法を理解し、公衆栄養マネジメントサイクルについて説明できる。
3. 国・地域が実施している公衆栄養プログラムを説明できる。

授業方法

1. 授業は、講義形式で行う。
2. 授業内容の理解度を測定するため、小テストを行う（第 5 回目、第 10 回目予定）。
3. 事前学習として、関連科目である「公衆衛生学」の復習をしておくこと。
4. 事後学習として、教科書の章ごとに練習問題の課題を出す（所要時間 1 時間程度）。
5. 小テスト・期末試験については、採点後に答案を返却し、解答例を配布する。

授業計画

- 第 1 回 公衆栄養マネジメント(1) 公衆栄養マネジメントの概要、公衆栄養アセスメント①
- 第 2 回 公衆栄養マネジメント(2) 公衆栄養アセスメント②
- 第 3 回 公衆栄養マネジメント(3) 公衆栄養プログラムの計画、実施、評価
- 第 4 回 公衆栄養プログラムの展開(1) 集団特性格プログラム① 母子
- 第 5 回 公衆栄養プログラムの展開(2) 集団特性格プログラム② 成人
- 第 6 回 公衆栄養プログラムの展開(3) 集団特性格プログラム③ 高齢者
- 第 7 回 公衆栄養プログラムの展開(4) 地域特性に応じたプログラム
- 第 8 回 公衆栄養プログラムの展開(5) 食環境づくりに関するプログラム
- 第 9 回 栄養疫学(1) 栄養疫学の概要、指標
- 第 10 回 栄養疫学(2) 栄養疫学の研究方法
- 第 11 回 栄養疫学(3) 食事調査方法①
- 第 12 回 栄養疫学(4) 食事調査方法②
- 第 13 回 栄養疫学(5) 食事摂取量の評価
- 第 14 回 栄養疫学のまとめ
- 第 15 回 まとめ

成績評価の方法

成績は、試験（80%）、小テスト 2 回（20%）で評価する。

教科書

古野純典、伊達ちぐさ、吉池信男 編集『公衆栄養学（改訂第 5 版）』（南江堂、2017、ISBN：978-4-524-26166-6）

教科書・参考書に関する備考

毎回、プリントを配布する。
「公衆栄養学 A」と同じ教科書を使用する。

参考書

佐々木 敏『わかりやすい EBN と栄養疫学』（同文書院、2010、ISBN：978-4-524-26166-6）

授業のねらい

集団を対象とした健康・栄養状態のアセスメント方法、食事調査データのまとめ方、公衆栄養プログラムおよび健康栄養関連計画立案の実際について学び、公衆栄養活動の実践に必要な技術を身につける。

到達目標

1. 既存の統計資料を活用し、集団の健康・栄養状態をアセスメントできる。
2. 食事調査データの見方を理解し、食事調査結果を集団の栄養状態のアセスメントに活用できる。
2. 集団の健康・栄養状態のアセスメント結果から健康・栄養課題を抽出することができ、課題解決を目的として公衆栄養プログラムおよび健康栄養関連計画立案することができる。

授業方法

1. 講義およびグループワークにより学習を進める。
2. 統計資料からのデータ収集および食事調査データ分析は、コンピューター室を利用して行う。
3. レポート課題については、採点后に返却する。
4. 事前にエクセルの基本的な操作方法を修得しておくこと。
5. 事後学習として、食事調査データ分析・まとめの課題を出す（所要時間2時間程度）。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
公衆栄養アセスメント(1) 統計資料について
- 第2回 情報収集と活用方法
- 第3回 公衆栄養アセスメント(2) 統計資料からのデータ収集と健康課題抽出①
- 第4回 公衆栄養アセスメント(3) 統計資料からのデータ収集と健康課題抽出②
- 第5回 公衆栄養アセスメント(4) まとめ
- 第6回 健康栄養関連計画作成(1) プリシード・プロシードモデルの活用
- 第7回 健康栄養関連計画作成(2) 計画作成と評価方法
- 第8回 公衆栄養プログラム作成(1) 海外の事例を通して①
- 第9回 公衆栄養プログラム作成(2) 海外の事例を通して②
- 第10回 集団における栄養状態のアセスメント方法(1) 食事調査データ作成
- 第11回 集団における栄養状態のアセスメント方法(2) 食事調査データ分析
- 第12回 集団における栄養状態のアセスメント方法(3) 食事調査データ分析のまとめ
- 第13回 公衆栄養活動の実際(1) 公衆栄養活動の拠点見学
- 第14回 公衆栄養活動の実際(2) 行政機関における管理栄養士業務について
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

成績は、授業の参加状況（40%）、レポート（60%）で評価する。

履修にあたっての注意

臨地実習に関連する科目であることから、出欠・遅刻は十分気をつけること。

教科書

古野純典、伊達ちぐさ、吉池信男『公衆栄養学（改訂第5版）』（南江堂、2017、ISBN：978-4-524-26166-6）

教科書・参考書に関する備考

「公衆栄養学」で使用される教科書を、この授業でも使用する。
適宜、プリントを配布する。

63731

地域栄養学

担当教員：岸 知子

1単位 後期後半

授業のねらい

公衆栄養学実習での経験を基に、公衆栄養分野における実践活動学、地域栄養学、応用栄養学で学んだ知識・技術を統合し、公衆栄養分野の実践活動における知識・技術への理解を深めるとともに、今後の課題について考えることができる。

到達目標

1. 公衆栄養学実習の経験を振り返り、実践活動に必要な知識・技術について理解を深める。
2. 公衆栄養学実習の経験、これまでに学んだ知識に基づき、公衆栄養における実践活動の課題について自分自身の考えを述べるることができる。

授業方法

1. 授業は、講義、発表、ロールプレイ、討議により進める。
2. 事前学習として、公衆栄養学実習で学んだことを整理しておくこと。
3. 課題レポートは、採点后、返却する。
4. 事後学習として、返却した課題レポートの内容を見直し復習を行うこと。

授業計画

- 第1回 行政栄養士業務指針について
- 第2回 公衆栄養学実習で学んだこと(1) 発表と討議①
- 第3回 公衆栄養学実習で学んだこと(2) 発表と討議②
- 第4回 事例から学ぶ公衆栄養活動(1) ロールプレイと討議① (母子)
- 第5回 事例から学ぶ公衆栄養活動(2) ロールプレイと討議② (成人)
- 第6回 事例から学ぶ公衆栄養活動(3) 健康栄養関連計画
- 第7回 公衆栄養活動に役立つ情報源
公衆栄養活動の課題と展望
- 第8回 まとめ

成績評価の方法

成績は、授業への参加状況 (40%)、レポート (60%) により評価する。

履修にあたっての注意

公衆栄養学実習を履修した学生の参加が望ましい。

教科書・参考書に関する備考

適宜、プリントを配布する。

授業のねらい

実際の給食運営管理に必要なテーマで、実施・観察・調査状況をその都度評価します。これにより臨地実習に連携させ、教育効果を高めることを目指します。

到達目標

- ・立案した食事計画に沿って、献立の標準化および総合品質など大量調理の運営ができる。
- ・それぞれの作業体系の実際が理解できる。

授業方法

栄養管理・作業管理・食材管理・衛生管理・経営管理など一連の作業体系業務をグループ毎に交替で行い、大量調理と食事サービス業務などについて模擬的に実習を行います。各担当について、該当日にスムーズに担当業務を運営できるように予習をしておくことを求めます。また、終了後は、実習日誌を作成し、提出して下さい。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(1)献立班
- 第3回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(2)下処理班
- 第4回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(3)補助班
- 第5回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(4)食育班
- 第6回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(5)献立班記録
- 第7回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(6)下処理班記録
- 第8回 各特定給食施設給食の食事計画
- 第9回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(1)献立班
- 第10回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(2)下処理班
- 第11回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(3)補助班
- 第12回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(4)食育班
- 第13回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(5)献立班記録
- 第14回 各班毎に給食の提供ならびに作業体系業務(6)下処理班記録
- 第15回 非常時における給食の運営およびまとめ

成績評価の方法

提出帳票類の内容（50%）、実習への主体的参加状況（30%）、利用者の満足度による評価（20%）で評価する。

履修にあたっての注意

自己管理に留意すること。特に給食提供の際、体調や身支度には十分な配慮をすること。グループワークが多くなるので、各自責任と誠意をもって実習すること。

教科書・参考書に関する備考

実習ファイルの配布

参考書

文部科学省スポーツ青少年局学校健康教育課『学校給食調理従事者研修マニュアル』（学健書院、2015、ISBN：978-4762408847）

殷塚婦美子『イラストでみるはじめての大量調理』（学健書院、2014、ISBN：978-4762408823）

63841

給食経営管理論Ⅲ

担当教員：村田まり子

1単位 後期後半

授業のねらい

給食経営管理論ⅠおよびⅡを基本として、フードシステムの視点から管理栄養士の役割について事例を用い提示し、議論を深めます。

到達目標

- ・地域における食支援体制のための外食産業・給食デリバリーサービスの役割を説明できる。
- ・ライフスタイルに応じた外食・中食等の適切な利用法について提案できる。

授業方法

講義形式および演習形式で進めていきます。給食経営管理論ⅠおよびⅡの復習をしておいてください。事後学習では授業で使用した資料等を見直してください。

授業計画

- 第1回 フードシステムにおける「給食」
- 第2回 外食産業と管理栄養士(1)営業給食・集団給食
- 第3回 札幌市中央卸市場見学
- 第4回 セントラルキッチンの計画と運用
- 第5回 セントラルキッチン見学
- 第6回 給食とマーケティング(1)マーケティングの基本・マーチャンダイジング
- 第7回 給食とマーケティング(2)総合品質と顧客満足度・マーケティングリサーチ
- 第8回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定する課題に対する発表方法および技術（70%）、演習への参加状況（30%）により評価する。

履修にあたっての注意

PCを多用しますので、操作方法に慣れておいてください。

参考書

定司哲夫『医療・介護法人のためのセントラルキッチンの計画と運用』（幸書房、2013、ISBN：978-4782103746）

参考ホームページ

大量調理施設衛生管理マニュアル <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11130500-Shokuhinanzentu/0000168026.pdf>
日本食品標準成分表 2015年版（七訂）追補 2017年 http://www.mext.go.jp/a_menu/syokuhinseibun/1399459.htm

授業のねらい

専門分野を横断して、栄養評価や管理が行える総合的能力を養うことを目標とします。臨地実習に先立ち、それぞれの 実習の目的・内容・方法などのオリエンテーションを行います。臨地実習が円滑かつ効果的に行われるように事前教育として位置づけます。

到達目標

- ・臨地実習先の概要について説明ができる。
- ・管理栄養士の職務とかかわる他職種との相互関係を職務内容と関連づけて明確に説明ができる。
- ・自己課題を設定することができる。

授業方法

原則として、臨地実習に関わる3領域（臨床・公衆・給食）の課題を取り上げながら、分野ごとに演習形式により進めていきます。事前学習として各領域関連の授業の復習を行い（所要時間2時間程度）授業に臨んで下さい。事後学習として授業終了後、学んだ内容をレポートにまとめ提出してください。（所要時間1～2時間程度）

授業計画

担当教員：田中洋子・岸知子・隈元晴子・中川幸恵・三田村理恵子・村田まり子

- 内容：1 オリエンテーション
2 事前準備（目的の設定）
3 事前準備状況確認
4 課題などのレポート作成

演習回数：

- 1 全体オリエンテーション①（管理栄養士・栄養士を取り巻く社会状況と総合演習のねらい・各領域の担当者）
 - 2 全体オリエンテーション②（実習の目的、目標の理解、心構え、準備の徹底など）
 - 3～14 臨地実習に向けて 各領域の演習を行う（日程は臨地実習の日程に応じて展開する）
 - ・臨床栄養学実習Ⅲ(1)～(6)
 - ・公衆栄養学実習または給食経営管理実習Ⅱ(1)～(6)
 - 15 全体オリエンテーション③事前指導のまとめ（報告書作成の意義）
- 補 事前準備状況発表会

成績評価の方法

到達目標を測定する課題発表（70%）、授業への主体的参加状況（30%）により評価する。

履修にあたっての注意

臨地実習各領域毎の復習を行い、関連付けておく。また事前準備を的確におこなうこと。

教科書・参考書に関する備考

資料：随時、プリントを配布する。
参考書：各教科の教科書を参考にすること。

参考ホームページ

臨地実習及び校外実習の実際（2014年版） <http://dietitian.or.jp/data/download/pdf/h26rinchi-ma00all.pdf>

63911

総合演習 B

担当教員：田中洋子 他

1単位 後期後半

授業のねらい

専門分野を横断して、栄養評価や管理が行える総合的能力を養うことを目標とします。臨地実習終了後、事後教育としてそれぞれの実習先ごとに報告書を作成し、報告会で発表・討議をします。各々の実習目的を達成し、事前学習と臨地実習を統合させ、管理栄養士業務を理解することをねらいとします。

到達目標

- ・管理栄養士の職務と関わる他職種との相互関係を職務内容と関連づけて明確に説明することができる。
- ・臨地実習報告書に基づき発表・討議ができる。

授業方法

原則として、臨地実習に関わる3領域（臨床・公衆・給食）の課題を取り上げながら、分野ごとに演習形式により進めていきます。事前学習として各領域関連の授業の復習を行い（所要時間2時間程度）授業に臨んで下さい。事後学習として授業終了後、学んだ内容をレポートにまとめ提出してください。（所要時間1～2時間程度）

授業計画

担当教員：田中洋子・岸知子・隈元晴子・中川幸恵・三田村理恵子・村田まり子

- 内容：
- 1 臨地実習事後指導
 - 2 礼状の送付
 - 3 課題などのレポート作成・報告書の作成
 - 4 実習終了後の報告会

演習回数：

- 1 オリエンテーション
- 2～13 臨地実習事後教育 各領域の演習を行う
 - ・臨床栄養学実習Ⅲ (1)～(6)
 - ・公衆栄養学実習または給食経営管理実習Ⅱ(1)～(6)
- 14 臨地実習に向けて 管理栄養士実務実習
- 15 報告会

成績評価の方法

実習先の評価（50%）、到達目標を測定する実習報告書（50%）により評価する。

履修にあたっての注意

臨地実習各領域毎の復習を行い、関係付けておく。また、事前準備を的確におこなうこと。報告会は12月上旬に、食物栄養学科2年生・3年生合同で開催する予定です。

教科書・参考書に関する備考

資料：随時、プリントを配布する。
参考書：各教科の教科書を参考にすること。

参考ホームページ

「臨地実習及び校外実習の実際（2014年版）」 <http://dietitian.or.jp/data/download/pdf/h26rinchi-ma00all.pdf>

授業のねらい

病院実習を通して、病院における管理栄養士の役割、業務、チーム連携などについて学び、適切な栄養管理を行うために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図る。

到達目標

医療機関における管理栄養士の役割を理解し、栄養・食事療法のプラン作成ができる

授業方法

講義・演習・実習

事前学習として今まで学んだ臨床栄養学領域の内容をノートにまとめる

事後学習として病院実習のまとめ（自主研究）を作成し期日までに提出する

授業計画

担当教員：田中洋子・中川幸恵・泉真理子・永洞香苗・野原純子・西條祥子

医療施設における栄養管理部門の位置づけと管理栄養士の役割

食事療養に関わる医療保険のシステム

入院時栄養管理の実際

入院・外来における栄養教育の実際

患者接遇・コミュニケーションの実際

他職種とのチーム連携

臨床において管理栄養士が修得すべきスキルの実際

大量調理を踏まえた治療食事提供の実際

成績評価の方法

臨地実習施設指導者の評価（80%）臨地実習ノート（20%）に基づき評価

履修にあたっての注意

今まで授業で学んだ知識を復習し、積極的に取り組みましょう

63931

公衆栄養学実習

担当教員：岸 知子・隈元晴子・飯田久美子

2単位 通年

授業のねらい

公衆栄養における課題発見、解決等の実際の事業に触れ、栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要な専門的知識と技術の統合を図る。

到達目標

1. 保健医療・福祉に関わる行政機関の機能・役割を理解できる。
2. 地域保健における行政栄養士の役割を理解できる。
3. 他機関、他職種との連携・協働について理解できる。
4. 地域住民への支援方法について理解できる。

授業方法

事前指導・臨地実習、事後指導を行う。

事前学習として公衆栄養学、応用栄養学、栄養教育論等、関連する教科の復習をしておくこと。

事後学習として、実施施設ごとに報告書を作成し、提出すること。

授業計画

1. 事前指導（実習に向けての準備）
 - (1)オリエンテーション
 - (2)実習先の担当者との打ち合わせ
 - (3)課題の選定
 - (4)課題達成への準備
2. 臨地実習
 - ・管轄する地域の概況について
 - ・公衆衛生行政及び地域保健活動について
 - ・行政栄養士業務の概要について
 - ・保健所栄養士業務について（講義および実践・見学）
 - ・市町村栄養士業務について（講義および実践・見学）
 - ・実習カンファレンス
3. 事後指導（臨地実習の振り返り）
 - (1)課題のまとめ
 - (2)プレゼンテーション

成績評価の方法

事前の準備（20%）、実習施設の評価（30%）、実習ノート（50%）

履修にあたっての注意

公衆栄養学 A、公衆栄養学 B、給食経営管理論 I、給食経営管理論 II を履修済み（または履修中）であること。
公衆栄養学、応用栄養学その他関連する教科をしっかりと復習し、理解したうえで臨むこと。

63941

給食経営管理実習Ⅱ 担当教員：村田まり子・菊地和美・三田村理恵子 2単位 通年

授業のねらい

特定給食施設の現場において栄養士業務を体験することで、給食の役割について習得し、栄養士の重要性を理解します。事前学習を確実にを行い、給食の特性と意義を知り、栄養学的配慮と特定給食経営技術を身につけることを目指します。

到達目標

臨地実習後、体験した栄養士の職務について、社会的な役割および責任に関して報告書を作成し、明確に説明できる。

授業方法

この科目は、各自課題・テーマを取り上げながら、実習形式（臨地実習）により、進めていきます。小学校、給食センター、自衛隊、福祉施設等において、1施設1～複数名で計2週間の臨地実習を行います。給食経営管理関係科目で学んだことをしっかり復習して臨んでください。終了後は報告書を提出して下さい。

授業計画

1. 事前計画（学内）
 - 1) オリエンテーション
 - 2) 事前打ち合わせ
 - 3) 献立作成演習
 - 4) 栄養教育指導案作成演習
2. 小学校、給食センター、自衛隊、福祉施設等における実習
 - 1) 給食の運営・給食経営に関する講義
 - 2) 大量調理実務実習
 - 3) 特定給食施設に関する事務・実務実習
 - 4) 栄養管理、衛生管理、作業管理、経営管理
 - 5) 自主研究
3. 総合評価会（学内）

成績評価の方法

実習先の評価（50%）、到達目標を測定する実習報告書（50%）により評価する。

履修にあたっての注意

栄養士としての社会的責任を十分に自覚して行動してほしい。

教科書・参考書に関する備考

参考書：各関連科目の教科書

64421

学校栄養教育Ⅱ

担当教員：菊地和美・隈元晴子・村田まり子

2単位 前期

授業のねらい

食に関する指導の充実は、「生きる力」の基礎となる健康と体力を育むほか、食文化の継承、社会性の涵養などの効果も期待できる。栄養教諭の役割を認識し、指導内容や指導の在り方、指導方法を具体的な事例により研究し、専門性を高めることができるよう目指す。教育実習にむけて学んできた栄養教諭に関する業務内容ならびに北海道産食材を用いた学校給食について、知識と技能を理解し、身につけることを目的とする。

到達目標

- 到達目標1：栄養教諭に関する知識を身につけ、学校給食を活用した授業計画を理解することができる。
到達目標2：指導案を作成し、模擬授業を行い、指導方法を討議することができる。

授業方法

栄養教諭として授業を立案し、学級活動、給食時間、教科および総合的な学習の時間における学級担任や教科担任と連携した食の指導を行うことができるよう模擬授業を中心に展開する。講義・一部演習形式で行う。各自、「食に関する指導案」の作成・模擬授業を行うこととして、討論を行う。

(ゲストスピーカーにより、講義・演習で学ぶ) 受講にあたって、事前学習として各自レジュメ・指導案を作成し、人数分印刷して準備しておくことを課題とする(所要時間60分程度)。事後学習としてふりかえり・レポートを作成する(所要時間60分程度)。指導案・レポートは、演習内で口頭により、解説し、資料を配付する。

授業計画

- 第1回 はじめに ～「学校栄養教育Ⅱ」の概要、食に関する指導と栄養教諭
第2回 学校給食と衛生管理(村田)
第3回 学校における食に関する指導の指導案作成
第4回 指導案にもとづく模擬授業1(家庭科との連携)
第5回 指導案にもとづく模擬授業2(保健との連携)
第6回 指導案にもとづく模擬授業3(理科との連携)
第7回 指導案にもとづく模擬授業4(社会との連携)
第8回 指導案にもとづく模擬授業5(食文化)
第9回 指導案にもとづく模擬授業6
第10回 指導案にもとづく模擬授業7
第11回 指導案にもとづく模擬授業8
第12回 指導案にもとづく模擬授業9
第13回 指導案にもとづく模擬授業10
第14回 指導案にもとづく模擬授業11(隈元)
第15回 まとめと課題 ～教育実習「栄養教育実習Ⅱ」に向けて

成績評価の方法

作到達目標1を測定する小レポート・レジュメ(30%)、到達目標2を測定する「食に関する指導案」作成(40%)、授業への参加状況(30%)により、評価する。

履修にあたっての注意

学校栄養教育Ⅰを履修していること。
主体的な取り組み、積極的な態度をもって授業に望むこと。レジュメや指導案の内容について、しっかりと学習した上で授業に参加すること。

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。

授業のねらい

卒業研究に関係のある原著論文（英語）を読み、プリントにまとめ発表する。最新の食品微生物学、発酵学およびバイオテクノロジーの知識、理解を高め、人前で自分が調べてきたこと、自分の考えなどをまとめ発表する能力およびディスカッション能力を育成する。

到達目標

研究テーマの如何に関わらず、選んだ研究論文を正しく理解し、紹介することができる。

授業方法

1. 文献発表
1回の演習では、担当する学生1名が、自分の研究に関係のある英語論文、または興味を持っているテーマに関する英語論文を作成した資料を用いて60分間で説明し、教員を含めた全員でその発表内容に伴うディスカッションを30分間行う。演習履修者の人数にもよるが、1人年に2～3回の発表を予定している。事前に発表担当者は作製した資料を全員に配布し、担当以外の学生は予め読んでから出席すること。終了後、ディスカッションの内容をまとめること。
2. 研究報告
4月-12月の月1回、卒業研究の進捗状況を報告書を作成しプレゼンテーションと、実験内容についての技術的および研究の進め方などの戦術的なディスカッションを行う。

授業計画

- 第1回 卒業研究における、研究倫理について解説する。文献検索および発表の方法について、例を示しながら説明およびプレゼンテーションを行う。
- 第2回 担当者による文献発表及びディスカッション
- 第3回 担当者による文献発表及びディスカッション
- 第4回 全員による研究報告会
- 第5回 担当者による文献発表及びディスカッション
- 第6回 担当者による文献発表及びディスカッション
- 第7回 担当者による文献発表及びディスカッション
- 第8回 全員による研究報告会

成績評価の方法

選択した論文、発表方法、発表技術（50%）と聞き手側としてのディスカッション能力（40%）および参加状況（10%）で判断します。

履修にあたっての注意

必ず卒業研究と同時に履修すること。

教科書・参考書に関する備考

教科書：過去に先輩達が残してくれた発表資料など。

授業のねらい

公衆衛生、公衆栄養問題への関心を深め、学ぶことが本授業のねらいである。

到達目標

- ・卒業し社会人となったときに周りの人々に信頼されるような職業人となるための知識を身につける。
- ・身の回りで起こっている健康・栄養に関する出来事に興味を持ち、問題を発見できる。
- ・文献を検索し、資料を整理し、必要に応じて調査研究の計画を立案する能力を身につける。

授業方法

演習形式で行う。
事前学習として、論文の要旨を読んでおく。
事後学習として、扱った論文の重要点を箇条書きでまとめる。

授業計画

- 第1回 8回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(1) 研究倫理についても扱う
- 第2回 8回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(2)
- 第3回 8回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(3)
- 第4回 8回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(4)
- 第5回 8回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(5)
- 第6回 8回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(6)
- 第7回 8回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(7)
- 第8回 8回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(8)

成績評価の方法

ゼミへの参加状況(50%)と、討議への参加状態(50%)によって評価する。

履修にあたっての注意

授業のように時間割だけに拘束されるものではないだけに、自主性と積極性が求められる。社会問題などもテーマとして扱うだけに、真剣な取り組みが必要である。

授業のねらい

調理科学に関する研究や地域栄養活動に関する研究について、最新の文献を取り上げながら、発表をとおして理解を深め、学ぶことをねらいとしている。テーマについては、北海道産食材の調理科学的特性を学び、調理学に関する知識や調理科学実験の技能を身につけてもらうことを目的とする。

到達目標

到達目標 1：調理科学に関する知識を身につけ、それを応用して調理科学実験ならびに調理に関する調査研究を理解することができる。

到達目標 2：文献を取り上げながら、プレゼンテーションを行い、討議することができる。

授業方法

原則として、1 回につき 1 テーマを取り上げながら、講義および演習形式により、進めていく。

各自、卒業研究関連文献紹介を行うこととして、内容をまとめた要旨の作成、発表、討論を行う。

発表者はプレゼンテーションの方法や役割分担によって討論をまとめていく力を養う。

(ゲストスピーカーにより、演習で学ぶ) 受講にあたって、事前学習として文献を読み、各自レジュメを作成し、人数分印刷して準備しておくことを課題とする (所要時間 60 分程度)。事後学習としてレポートを作成する (所要時間 60 分程度)。1～5 文献講読、6～7 調理科学に関する講義・実験、8 研究倫理。レポートは、演習内で口頭により、解説し、解説資料を配付する。

授業計画

第 1 回 文献講読 (共通 1) 過年度卒業報文の講読

第 2 回 文献講読 (共通 2) 文献検索

第 3 回 文献講読 (共通 2) 調理科学に関する文献の講読

第 4 回 文献講読 (各自 1) アンケート調査

第 5 回 文献講読 (各自 2) 北海道産食材に関する報告書

第 6 回 調理科学に関する講義・調理科学実験 1

第 7 回 調理科学に関する講義・調理科学実験 2

第 8 回 調査計画、「研究倫理」について－「藤女子大学研究倫理基準」の内容を知ろう

成績評価の方法

到達目標 1 を測定する卒業演習に取り組むレジュメの作成・発表 (30%)、到達目標 2 を測定するレポート作成 (40%)、授業への参加状況 (30%) により、評価する。

履修にあたっての注意

卒論発表会には必ず出席すること。レジュメやレポートの内容について、しっかりと学習した上で授業に参加すること。

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。

参考書：各自関連教科書、学術雑誌 (日本調理科学会誌) を授業内で指示する。

授業のねらい

卒業研究に取り組むにあたって、文献検索の方法、論文の読み方、発表方法について学ぶ。

到達目標

1. 論文の構造を理解し、研究背景、方法、結果、考察を論文から読みとることができる。
2. 論文内容を要約して、わかりやすく発表することができる。

授業方法

1. 授業は、講義、発表、討議により進める。
2. 論文の要約発表の際には、発表資料を作成すること。
事前学習として発表者は授業で発表する論文を精読し、その内容をわかりやすく資料にまとめること。
事後学習として、ディスカッションの内容を踏まえて論文を再読し、論文内容の理解を深めること。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、研究倫理
- 第2回 文献検索の方法
- 第3回 文献検索
- 第4回 論文の読み方
- 第5回 論文発表とディスカッション(1)
- 第6回 論文発表とディスカッション(2)
- 第7回 論文発表とディスカッション(3)
- 第8回 論文発表とディスカッション(4)

成績評価の方法

成績は、授業への参加状況（20%）、発表内容（80%）で評価する。

履修にあたっての注意

地域住民の健康・栄養問題について関心のある学生の参加を望む。

教科書・参考書に関する備考

適宜、プリントを配布する。

授業のねらい

栄養教育を行う際には、対象集団の社会的背景を把握し、栄養課題を整理して、個人要因、環境要因を分析することが大切である。地域住民や特定の対象集団に介入するにあたり、さまざまな現状について理解することをねらいとする。

到達目標

関連する論文、書籍などを用いて、地域が抱える問題点に目を向け、解決策を考えようとする姿勢を身につけること。プレゼンテーションやディスカッションを通じて自分自身の考えを伝えることや他者の考えを理解することを通じ、関連分野の知識を深めるとともに表現力を身につけること。

授業方法

テーマに関連する文献を収集し、パワーポイントにまとめ、プレゼンテーションを行う。各回 2 名ずつ発表者となり、発表後全員でディスカッションを行う。毎回、既存のデータを用いてテーマに沿った情報収集を行い(事前学習：60分)、文献を読み議論した結果を統合し、ノートにまとめる(事後学習：60分)。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(研究倫理についての理解を含む)
- 第2回 コンピュータによる文献検索の方法
- 第3回 テーマに関連する文献のプレゼンテーションとディスカッション(1)
- 第4回 テーマに関連する文献のプレゼンテーションとディスカッション(2)
- 第5回 テーマに関連する文献のプレゼンテーションとディスカッション(3)
- 第6回 テーマに関連する文献のプレゼンテーションとディスカッション(4)
- 第7回 テーマに関連する文献のプレゼンテーションとディスカッション(5)
- 第8回 まとめ

成績評価の方法

演習への参加の態度(60%)、プレゼンテーション(資料作成と発表力、質疑応答などを含む：40%)

履修にあたっての注意

自主的かつ積極的な態度で臨むこと。

授業のねらい

臨床領域における卒業研究にむけて、文献の探し方、論文の読み方、発表方法などを学ぶ

到達目標

論文を読んで、プレゼンテーションを行い、ディスカッションができる
卒業研究で取り組むテーマをみつけることができる

授業方法

卒業研究に関連のある文献を読み、内容をまとめ発表し、ディスカッションを行う
事前課題として発表者は発表時に使用する資料を作成する（所要時間 2 - 3 時間）発表者以外は予め文献を読んでおく
事後課題としてディスカッション内容をまとめ提出する（所要時間 1 時間）

授業計画

- 第 1 回 オリエンテーション及び研究倫理について
- 第 2 回 文献検索方法・論文の読み方について
- 第 3 回 文献検索・内容の検討
- 第 4 回 文献講読①
- 第 5 回 文献講読②
- 第 6 回 文献発表・各自内容をまとめ発表①
- 第 7 回 文献発表・各自内容をまとめ発表②
- 第 8 回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況（40%）、発表及びディスカッションへの取り組み態度（60%）

履修にあたっての注意

自主的・積極的な参加を望みます

教科書・参考書に関する備考

参考書はその都度紹介します

授業のねらい

臨床領域における卒業研究に向けて、文献の検索、論文の読み方、発表方法などを学ぶ。

到達目標

文献の検索方法がわかる。
文献の内容を理解し、その内容をディスカッションにて自分の意見を伝え理解を得ることができる。
研究テーマの決定ができる。

授業方法

卒業研究に関係のある文献を読み、内容をまとめ発表し、ディスカッションを行う。
文献発表の際、担当者は予め文献を読み、資料を作成し前日には他学生に配布すること。担当者以外は、配付された資料を読んで、質問を持って演習時間に望むこと。終了後は、ディスカッションの内容を各自まとめること。
同様に卒業演習テーマの検討の際、担当者は演習テーマをプレゼン資料としてまとめ、前日には他学生に配布すること。担当者以外は、配付された資料を読んで、質問を持って演習時間に望むこと。終了後は、ディスカッションの内容を各自まとめること。

授業計画

- 第1回 オリエンテーションおよび研究倫理について
- 第2回 文献検索：各自で行う
- 第3回 文献検索：内容の検討
- 第4回 文献発表1
- 第5回 文献発表2
- 第6回 卒業演習テーマの実際を検討する（給食管理と栄養管理分野の共通）
- 第7回 卒業演習テーマの実際を検討する（栄養指導と栄養管理分野の共通）
- 第8回 卒業研究テーマの決定

成績評価の方法

授業への参加状況（40%）、発表内容（60%）

履修にあたっての注意

臨床栄養に関して興味をもっている学生を望む

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて参考書を紹介する。

授業のねらい

卒業研究に関連した先行研究は学術論文として英文で公表されることが一般的である。そこで学術論文の英文になれるために、身近な食べ物や健康に関する比較的平易な英語文献に親しみ、十分に読みこなせるようにしよう。
食品化学の内容が化学英語としてどのように表現されるのかを理解しよう。

到達目標

1. 英語文献を読み、内容を簡潔に紹介できる。
2. 目的に応じた適切な英文の学術文献を各種データベースを用いて検索し、手に入れることができる。

授業方法

授業では、テキストに沿って輪読し、参加者はそれに対し活発な議論を行うことによって互いに食品化学関連分野の理解を深める。

一文ずつ、正確に解釈し、内容については食品化学や生化学で学んだ項目の復習として解説します。

<事前・事後学習>

テキストプリントを予め配付しますので、授業計画に沿って次の項目をノートに整理しておいてください。

1. 単語の読み方（特にアクセントの位置を確認）
2. 単語の意味（文意にふさわしい訳語の検討）
3. 文の直訳
4. 文の内容

また、復習として、授業でとりあげた項目について、食品化学や基礎栄養学、生化学の教科書を用いて、その内容をノートに整理してください。

授業計画

- 第1回 ガイダンス；演習の方法、研究倫理基準の遵守、専門用語の解説、文献検索の説明など
 第2回 You are What You Eat 1
 第3回 You are What You Eat 2
 第4回 Fats and Oils: Part of the Lipid Family 1
 第5回 Fats and Oils: Part of the Lipid Family 2
 第6回 Carbohydrates - Sweet and Starchy 1
 第7回 Carbohydrates - Sweet and Starchy 2
 第8回 データベース検索方法（図書館の利用）

成績評価の方法

内容に関する理解の程度（50%）、議論への参加の程度（50%）

履修にあたっての注意

学術文献は英文文献とし、卒業研究の遂行に伴って日常的に学術文献を読む習慣をつけてほしい。英文に慣れるには、たとえば好きな映画や小説などの原作、原書を読んでいくことによって長文に親しむのもよい方法です。

教科書・参考書に関する備考

Chemistry in Context - Applying Chemistry to Society, 8th Ed. (American Chemical Society) から Chapter 11 Nutrition: Food for Thought
を事前に配布します。

授業のねらい

卒業研究 I では、食べ物と栄養の古くて深い意味の再発見を行うことにより、食育の方法論を身につける。そのために宮澤賢治の童話作品「どんぐりと山猫」を読むことで、宮澤賢治の「すきとおったほんとうのたべもの」を深く理解する。宮澤賢治の食事観を通じて古代人の食事観に触れることで、食べ物と栄養の根本がコミュニケーションと self-help にあることを理解する。

到達目標

「すきとおったほんとうのたべもの」、宮澤賢治の食事観、古代人の食事観、コミュニケーション、self-help について理解するとともに、宮澤賢治の作品を用いた食育の方法論を身につける。

授業方法

宮澤賢治の童話作品「どんぐりと山猫」を読んで、ディスカッションを行なう。必要に応じて他の資料も適宜配布し説明を行う。

授業計画

- 第 1 回 研究倫理
- 第 2 回 宮澤賢治はどういう人か
- 第 3 回 どんぐりと山猫：9 月 19 日
- 第 4 回 どんぐりと山猫：里、谷、山
- 第 5 回 どんぐりと山猫：山猫とどんぐり
- 第 6 回 どんぐりと山猫：山猫と一郎
- 第 7 回 どんぐりと山猫：一郎とどんぐり
- 第 8 回 まとめ

成績評価の方法

成績評価は、演習への参加の積極性（100%）に基づいて行なう。

履修にあたっての注意

ゼミ生には、将来の栄養士、管理栄養士としての自覚が必要。

教科書・参考書に関する備考

資料・プリントを適宜配布する。

6461a

卒業演習 I

担当教員：松坂裕子

0.5 単位 後期後半

授業のねらい

卒業研究を進めるにあたって、文献の探し方、論文の読み方、発表方法などを学ぶ。

到達目標

- ・ 学術論文（主に英語）を読んで、まとめることができる。
- ・ 卒業研究で取り組むテーマをみつけることができる。
- ・ 分かりやすいプレゼンテーションすることができる。

授業方法

卒業研究に関係のある文献を読み、プリントにまとめて、発表し、ディスカッションを行う。
分かりやすいプレゼンテーションを行う。
事前学習は、文献を読み、まとめることである。
事後学習は、文献内容を復習することである。

授業計画

- 第1回 演習内容の説明および研究倫理について
- 第2回 文献検索(1)：各自で行う
- 第3回 文献検索(2)：内容の検討および決定
- 第4回 文献発表：日本語の文献を読み、発表する(1)
- 第5回 文献発表：日本語の文献を読み、発表する(2)
- 第6回 文献発表：英語の文献を読み、発表する(3)
- 第7回 文献発表：英語の文献を読み、発表する(4)
- 第8回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況（20%）、発表内容（80%）により評価する。

履修にあたっての注意

積極的な参加を望みます。

教科書・参考書に関する備考

参考書をその都度紹介します。

授業のねらい

栄養教育に関する研究の課題設定、研究方法、評価方法などについて学び、さらに栄養教育の実践で役立つ栄養学の知識、理解を深めることを目指します。

到達目標

1. 研究に必要な資料や専門分野の文献を検索することができる。
2. 資料をわかりやすくまとめることができる。
3. 相手に伝わるプレゼンテーションができる。
4. 発表後に活発な質疑応答ができる。

授業方法

基本的に、受講者が作成した資料をもとに発表、討論を行います。

事前課題として、発表時に使用するレジュメを作成します（所要時間 1-2 時間程度）。

レジュメ作成に当たっては、個別に指導をします。

各自の発表後は、全員からの質疑に答えます。発表時に受けた質問に答えられなかった場合は、復習をして発表をします（所要時間 60 分程度）

各自の発表後に、教員より内容や方法論について次回のプレゼンテーションに役立つような助言をしますので、参考にしてプレゼンテーション力を身につけてください。

授業計画

第 1 回 オリエンテーション、研究倫理について

第 2 回 栄養学に関する資料、文献の検索方法について

第 3 回 栄養統計学について(1)

第 4 回 栄養統計学について(2)

第 5 回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(1)

第 6 回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(2)

第 7 回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(3)

第 8 回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(4)

成績評価の方法

到達目標 1-3 の測定方法は、プレゼンテーションの方法や内容（30%）、レジュメの提出（20%）により行います。

到達目標 4 の測定方法は、授業への参加態度（50%）とします。

履修にあたっての注意

資料の準備には、時間をかけ、早めの取組を心掛けてください。

授業のねらい

1. フードシステムの概要や動向について最新の文献等から学ぶ。
 2. “管理栄養士だからできるフードビジネス”を調査・研究する。
- の2点を目的とし、栄養管理をフードシステムの手法からアプローチします。

到達目標

- ・文献の検索方法がわかる。
- ・論文等を購読し、その内容をプレゼンテーションできる。

授業方法

1. 2回は、研究テーマに基づくオリエンテーションを行います。以後、各自フードシステムに関連した論文や資料についてプレゼンおよびディスカッションを行います。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション：「研究倫理」について
- 第2回 文献検索の方法（ネット、図書館の利用）
- 第3回 フードシステムに関する文献等の検索、プレゼンおよびディスカッション①
- 第4回 フードシステムに関する文献等の検索、プレゼンおよびディスカッション②
- 第5回 フードシステムに関する文献等の検索、プレゼンおよびディスカッション③
- 第6回 フードシステムに関する文献等の検索、プレゼンおよびディスカッション④
- 第7回 フードシステムに関する文献等の検索、プレゼンおよびディスカッション⑤
- 第8回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定する選択論文等のプレゼン力（50%）、討議内容および参画状況（50%）により評価する。

履修にあたっての注意

ホウ（報告）、レン（連絡）、ソウ（相談）は、確実に行うこと。
積極的に自分の課題を見出し、解決に向けて行動すること。

教科書・参考書に関する備考

資料等配布

授業のねらい

他国に先駆けて超高齢社会を実現した日本における管理栄養士には、高齢者の健康長寿と QOL を見据えた栄養管理が求められている。高齢者健康論のねらいは、高齢者の生理学的な特徴と高齢者の疾病と障害を理解するとともに、管理栄養士として高齢者の支援に必要な臨床的知識、技能、態度を修得する。

到達目標

高齢者の生理学、高齢者の疾病と障害を理解するとともに、高齢者の支援に必要な臨床的知識、技能、態度を理解して、よい高齢者支援の方法を身につける。

授業方法

配布プリントに基づいてパワーポイントを用いて進める。教科書の授業に関連する部分と配布プリントを読むことで事前学習をする。質問は随時受け付けて回答する。リアクションペーパーに記載された質問については授業開始時に回答する。授業配布プリントの内容から作成した復習問題により復習をする。この復習問題から学期末試験の出題を行ない、理解度をチェックする。そして試験の解答結果について解説することでさらなる理解を促す。

授業計画

- 第1回 人類の歴史と超高齢社会
- 第2回 震災関連疾患、震災関連死と高齢者
- 第3回 高齢者の疾病・障害の診断学
- 第4回 自律神経、疾病、加齢
- 第5回 加齢と栄養
- 第6回 加齢と臓器機能
- 第7回 老年症候群
- 第8回 フレイルティー、ロコモティブ症候群
- 第9回 サルコペニア
- 第10回 アルツハイマー病、その他の認知症
- 第11回 がん細胞の特徴、がん予防、高齢者
- 第12回 高齢者の緩和ケア、ケアの連続性
- 第13回 健康寿命と性差
- 第14回 長生法と長寿法
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

リアクションペーパー 20%と試験 80%により評価する

履修にあたっての注意

毎回、授業配布資料に基づいて講義を行うが、必ず関連する教科書の部分を読んで授業内容の理解を深めるようにする。

教科書

竹中 優 編『疾病の成因・病態・診断・治療』（医歯薬出版）

教科書・参考書に関する備考

毎回の授業と並行して、必ず関連する教科書の部分、とくに赤字のキーワードを中心によく読んで授業内容の理解を深めるようにする。

授業のねらい

運動・スポーツは、人々の健康（well-being）や生活の質（Quality of life, QOL）に影響を及ぼす重要な要因のひとつである。管理栄養士として、これから多様な分野で働く皆さんにとって、運動生理学・スポーツ栄養学を学ぶことは、必ず役に立つと考えられる。また、2020年の東京オリンピックをひかえ、スポーツ栄養は将来の管理栄養士の専門職として注目される。そのため、本科目では、運動全般についての理論（運動の功罪、運動時の生理的特徴とエネルギー代謝）、スポーツ栄養マネジメント・公認スポーツ栄養士についての概要を学ぶ。

到達目標

1. 運動の功罪について説明できる。
2. 運動時の生理的特徴とエネルギー代謝について、運動時の呼吸・循環応答、体力、運動トレーニングを含めて、説明できる。
3. 運動とスポーツ栄養マネジメントについて、糖質摂取・たんぱく質摂取、水分・電解質補給、スポーツ貧血、食事内容と摂取のタイミング、運動時の食事摂取基準の活用、ウェイトコントロールと運動・栄養、栄養補助食品の利用を含めて、概説できる。
4. 公認スポーツ栄養士について説明できる。

授業方法

本科目は、4年生後期の選択科目であるため、管理栄養士課程で学修してきた栄養学全般の知識・スキルなど多様な能力を外に向かって表現する機会として、講義形式だけでなく、ゼミ形式も統合した授業方法とする。

事前学習は、各々の回の授業内容に相当する教科書の項目を熟読する。

事後学習は、最終レポートをまとめるときに使用できるように、各回の授業内容をA4、1枚に要約する。

授業計画

- 第1回 Why exercise??なぜ運動なのか？（沖田 孝一）
- 第2回 運動の欠点について（沖田 孝一）
- 第3回 運動時のエネルギー供給・代謝（有酸素運動と無酸素運動とは？）（沖田 孝一）
- 第4回 骨格筋・神経（筋線維型・筋収縮のメカニズム）（沖田 孝一）
- 第5回 運動時の呼吸と循環（沖田 孝一）
- 第6回 最大酸素摂取量、嫌気性代謝閾値とは？（沖田 孝一）
- 第7回 からだを作るトレーニング（持久系、筋力トレーニング）（沖田 孝一）
- 第8回 究極を求めるトレーニング（特殊なトレーニング：低酸素、加圧など）（沖田 孝一）
- 第9回 スポーツ・運動におけるエネルギー・栄養素の働き（小山田正人）
- 第10回 運動時の食事摂取基準の活用（小山田正人）
- 第11回 食事内容と摂取のタイミング、ウェイトコントロールと運動・栄養、栄養補助食品（サプリメント）・ドーピング（小山田正人）
- 第12回 運動種目別の栄養管理（小山田正人）
- 第13回 ジュニア期、シニア期のスポーツ・運動栄養（小山田正人）
- 第14回 公認スポーツ栄養士（小山田正人）
- 第15回 総括（小山田正人）

成績評価の方法

授業への意欲・積極的参加を40%、最終課題に関するレポートを60%として、評価する。

教科書

山本順一郎（編）『運動生理学』（化学同人、2014、ISBN：078-4-7598-1245-9）

参考書

加藤秀夫・中坊幸弘・中村亜紀（編）『スポーツ・運動栄養学』（講談社、2015、ISBN：978-4-06-155383-5）

授業のねらい

摂食障害（拒食症、過食症）は、体重管理に厳格な社会文化が大いに関与し、かつ治る病気である。この授業では、摂食障害の認知行動療法についての知識を修得する。認知行動療法は、原因よりも病気を持続させているプロセスと精神病理に注目す方法であり、(1)その精神病理を維持している過程の定式化の作成、(2)認知の変化を促すために患者の行動変化の援助、(3)そして自らその変化の効果と意味を吟味することから成り立っている。このような行動変化から先に入って、それから考え方の修正に至るといった認知行動療法の方法を身につける。

到達目標

摂食障害（拒食症、過食症）のプロセスと精神病理とについて理解するとともに、認知行動療法による対処方法を身につけ、それを部分的に使うことでダイエット行動における認知やその他の行動における認知をベストにするための self help に役立てることができる。

授業方法

配布プリントに基づいてパワーポイントを用いて進める。質問は随時受け付けて回答する。リアクションペーパーに記載された質問については次回の授業開始時に回答する。授業配布プリントの内容から作成した復習問題により復習をする。この復習問題から学期末試験の出題を行ない、理解度をチェックする。そして試験の解答結果について解説することでさらなる理解を促す。

授業計画

- 第1回 ダイエット行動、摂食障害、認知行動療法の歴史
- 第2回 摂食障害の認知行動療法の戦略と手順：良好な治療関係の確立、節約の原理
- 第3回 自己観察食行動記録の確立とその吟味
- 第4回 食行動問題の教育、規則正しい食生活の確立
- 第5回 排出行動への対処法：代償的排出行動、非代償的排出行動
- 第6回 満腹感とその対処法、過剰運動とその対処法
- 第7回 自己評価において他の生活領域の強化方法
- 第8回 体形確認と体形忌避への対処法
- 第9回 肥満感への対処法
- 第10回 摂食障害の思考態度の特徴
- 第11回 摂食障害の思考態度の除去方法と代替行動
- 第12回 出来事による食行動変化への対処法、問題解決法の訓練
- 第13回 嫌な気分による食行動変化に対する対処と気分不耐性に対する対処法
- 第14回 治療終結の心配への対処法、進歩の維持と再発予防
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

リアクションペーパー 20%、試験 80%

履修にあたっての注意

管理栄養士の卵として、摂食障害患者の認知の歪みは決して他人事ではなく、大なり小なり現代人の課題であるという認識をもって授業に参加して認知行動療法の方法論を身につける。

授業のねらい

食の安全について最近の動向を理解し、食品の規格・基準と表示についての知識を習得する。食品の加工や安全性確保のため使用されている食品添加物の種類、用途、安全性について述べ、安全に対する正しい知識を習得する。食品の腐敗・汚染について理解し、安全に食品を取り扱うための食品管理方法を身につける。

到達目標

食と安全論 A と合わせ、食品の腐敗・変敗や、食品への食品添加物、残留農薬の混入など食品衛生監視員および食品衛生管理者としての必要な知識を習得するとともに、食品を安全に取り扱うことができる。

授業方法

「食と安全論 A」で使用した教科書および配布したプリント内容に沿って PC & 液晶プロジェクターを使用し進める。質問は随時受け付けるが、授業カードに記載された質問については、授業開始時に回答する。事前にシラバスをよく見て、次回の内容を教科書を読み、内容を把握した上で授業に臨むこと。授業後、内容について e-learning の問題を 1 週間以内に解答しながら復習すること。その達成度については成績評価の一部とする。期末試験を行い、終了後解説し理解を促す。

授業計画

- 第 1 回 最新の食品衛生法、食中毒統計と食品における問題点
- 第 2 回 化学性食中毒の種類：時代と共に原因物質は変化している
- 第 3 回 食品中の有害汚染物質
- 第 4 回 食品添加物の概要：その功罪と適切な利用法
- 第 5 回 食品の表示・規格
- 第 6 回 食品添加物の安全性試験
- 第 7 回 食品添加物各論 1 (保存料、殺菌料、酸化防止剤など)
- 第 8 回 食品添加物各論 2 (着色料、調味料、甘味料など)
- 第 9 回 食品の腐敗
- 第 10 回 食品の保存と変質防止法：生物的方法、物理的方法、化学的方法
- 第 11 回 食品の包装、異物混入と衛生上の危害
- 第 12 回 水の安全確保
- 第 13 回 HACCP の実現と食品取り扱い従事者および家庭の衛生管理
- 第 14 回 遺伝子組み換え作物と表示の問題
- 第 15 回 まとめおよび補足説明

成績評価の方法

毎回の授業カードによる授業参加度 (10%) および e-learning (http://e-learn.venus.fujijoshi.ac.jp/fuku_nin-syou.asp) における問題解答状況 (10%) と試験の成績 (80%) で評価する。

履修にあたっての注意

履修に当たっては食と安全論 A を前もって見直しておくこと。講義は担当者が作成したプリントおよび教科書を用いて実施するが、下記の参考書も活用してほしい。

教科書

池田隆幸 編著『食べ物と健康 V 食品衛生学 (第 2 版)』(三共出版 (株)、ISBN : 978-4-7827-0749-4)

教科書・参考書に関する備考

教科書は「食と安全論 A」の教科書を使用する。必要な部分は担当者が作成したプリントを用いて実施する。

参考書

川井英雄編集『食べ物と健康 食品の安全性と衛生管理』(医歯薬出版、2004、ISBN : 978-4-263-70445-)
 中村好志、西島基弘 編著『食品安全学』(同文書院、2005、ISBN : 978-4-8103-1391-8)
 厚生省食品保健・乳肉衛生・食品化学課共編『食品衛生関係法規集』(中央法規出版 (株))

参考ホームページ

Laboratory of Food Microbiology <http://www.fujijoshi.ac.jp/~shokuei/ikeda.html> (授業資料掲載サイト)
 e-learning http://e-learn.venus.fujijoshi.ac.jp/fuku_nin-syou.asp (復習用 e-learning サイト)

授業のねらい

これまでの農水畜産食品の開発は、それぞれの栄養成分や加工特性に対応した加工技術によって美味しく栄養価が高く、加えて消費者のニーズに向かって発展してきた。1991年、これらの素材の個性に加えて食品の持つ機能性を謳った特定保健用食品が生まれ、2015年には機能性のエビデンスがあれば届け出で済む機能性表示食品制度が発足した。食品開発論では、農産食品、水産食品、畜産食品、発酵食品の持つ個性とその機能性を理解し、新たな食品を開発することのできる基礎能力を身につける。

到達目標

- ①食品開発に必要な農畜水産物それぞれの栄養成分、加工特性および食品成分機能について深く理解していること。
- ②機能性表示食品等の特別用途食品や保健機能食品などの食品の開発手順についても理解していること。

授業方法

担当者が作成したプリントを使い、PC + プロジェクターで資料を提示する講義形式の授業である。事前にシラバスをよく見て、次回の内容について食品化学 A・B、食品加工学等の教科書の該当部分を読み、内容を把握した上で授業に臨むこと。担当者の最後の講義に小テストを行う、または課題を出すのでレポートを提出すること。終了後、解説を行う。レポートは返却する。事後は配布されたプリントと授業内容をノートにまとめること。

授業計画

担当教員：池田隆幸・中河原俊治・小宮山誠一・中川良二・八十川大輔・吉川修司

- 第1回 農産食品の開発：米・小麦の生産と加工適性を解説する。(担当：小宮山誠一)
- 第2回 農産食品の開発：馬鈴薯・豆類の生産と加工適性を解説する。(担当：小宮山誠一)
- 第3回 農産食品の開発：野菜・果実の生産と加工適性を解説する。
終了後、小テストを行う。(担当：小宮山誠一)
- 第4回 畜産食品の開発：乳製品に関して、その原料特性、関連法令を解説する。代表的な乳製品について、その製法、ポイント等を紹介する。(担当：八十川大輔)
- 第5回 畜産食品の開発：食肉製品に関し、その歴史や原料特性、関係法令について概説する。
代表的な食肉製品について、その製法、ポイント等を紹介する。(担当：八十川大輔)
- 第6回 畜産食品の開発：第3回目道総研で開発した畜産食品を事例として紹介し、新製品開発に必要なポイントを解説する。終了後、小テストを行う。(担当：八十川大輔)
- 第7回 水産食品の開発：～原料、加工～
水産食品の開発上、把握しておくべき原料特性、必要となる加工技術、品質劣化要因とその対策について学ぶ。(担当：吉川修司)
- 第8回 水産食品の開発：～機能性食品、危害回避(アレルギー、異物混入)～
水産食品の機能性成分と開発上考慮すべき事、表示のルールについて学ぶ。水産食品加工におけるアレルギー、異物の混入、およびそれらの対策について学ぶ。(担当：吉川修司)
- 第9回 水産食品の開発：～製品開発の具体例(着想から製品化まで)～
水産食品の開発・製品化の実例をとおして、製品開発の発想から製品化、プロモーションまでの流れを知る。最後に水産食品開発に関する小テストを実施します。(担当：吉川修司)
- 第10回 発酵食品の開発：発酵食品の特性と加工技術について(発酵食品の種類とその原料、製法などについて学ぶ)(担当：中川良二)
- 第11回 発酵食品の開発：発酵食品の開発と機能性について(発酵食品の健康機能性とそれを高める加工技術について学ぶ)(担当：中川良二)
- 第12回 発酵食品の開発：発酵食品の新展開(高い機能性を有する発酵食品の開発事例、トピックスを紹介する)、終了後小テストを行う。(担当：中川良二)
- 第13回 機能性食品の開発：事例紹介1(担当：中河原俊治)
- 第14回 機能性食品の開発：事例紹介2
終了後、課題についてレポートを提出する。(担当：中河原俊治)
- 第15回 食品開発の事例紹介
終了後、小テストあるいは課題についてレポートを提出する。(担当：池田隆幸)

成績評価の方法

担当者毎に小テストあるいはレポート80%、授業参加度で20%評価する。担当者の評価を担当時間を考慮し評価する。

履修にあたっての注意

食品化学 A、B、食品加工学、食品機能学該当部分を復習の上履修すること。

参考書

長尾精一編『小麦の科学』（朝倉書店）
いも類振興会編集『ジャガイモ事典』（全国農村教育協会）
日本豆類協会『新 豆類百科』（日本豆類協会）
阿部宏喜 編『魚介の科学』（朝倉書店）
永井 毅『食品加工が一番わかる』（技術評論社）
河岸宏和『ビジュアル図解 食品工場の仕組み』（同文館出版）
伊藤肇躬『肉製品製造学』（光琳）
伊藤肇躬『乳製品製造学』（光琳）
木村利昭『ミルク&チーズサイエンス』（デーリイマン社）
西田 博『異物防除と食品衛生』（中央法規）

授業のねらい

栄養素と生体との関わりである栄養学の基礎をより深く理解すること。

到達目標

栄養素の役割や病態との関連を、遺伝子や細胞のレベルで理解することを目標とする。

授業方法

毎回、授業内容を示す図をいれたプリントを配布して、講義で説明し、プリントに内容を書き込ませることに
より、理解を深める工夫をして講義を進める。また、質問を促す。

事前学習は、教科書の授業に関連する部分を読むことである。

事後学習は、プリントを見直して復習することである。

授業計画

- 第1回 以下の15講を予定している
食品と体、恒常性（ホメオスタシス）維持、味覚の分子機構
- 第2回 体内情報伝達系－ホルモンと神経、パラクライン因子
- 第3回 細胞の機能調節 受容体とシグナル伝達
- 第4回 栄養と遺伝子 遺伝子発現の調節
- 第5回 食欲の調節
- 第6回 消化と吸収／消化管ホルモン
- 第7回 糖吸収の分子機構／糖尿病：2型糖尿病
- 第8回 血糖値の調節機構／インスリンシグナル
- 第9回 脂質吸収と脂肪酸の生理作用
- 第10回 コレステロール代謝（合成、異化の制御）とリポタンパク質代謝
- 第11回 肥満 エネルギー代謝調節と褐色脂肪細胞
メタボリックシンドロームとアディポサイトカイン 白色脂肪細胞の秘密
- 第12回 ペプチドと体たんぱく質合成の調節
アミノ酸センサー（mTOR）とたんぱく質合成
- 第13回 カルシウムと骨代謝 イソフラボンの生理作用
- 第14回 鉄吸収調節の分子機構
- 第15回 脂溶性ビタミンと遺伝子発現調節
老化の分子機序

成績評価の方法

筆記試験成績 80%、授業への参加態度 20%

履修にあたっての注意

基礎科目、特に基礎栄養学と生化学ををよく復習しておくこと

教科書

金本龍平『エキスパート 管理栄養士養成シリーズ 分子栄養学』（化学同人）

授業のねらい

臨床現場において実践的に求められる臨床栄養学の知識スキル（病院で実際に使用される用語や検査等の基本的知識、病院で実際に行っている栄養管理や栄養指導状況）を習得する。

到達目標

病院並びに高齢者施設で求められる臨床栄養のスキル習得

医療に携わる管理栄養士の業務は、施設の規模や組織内での職位など、環境によりそのニーズは異なり、管理栄養士に求められる役割は多種多様です。管理栄養士がチーム医療の一員として、効果的に機能するには、スキルの高い医療に関する知識に加え、医師を含めた他職種や患者・家族のからの社会的評価は重要です。

病院並びに高齢者施設に勤める管理栄養士として、患者・家族のために役立てる能力を身につけ、「知識・技術・倫理の面で信頼できる専門職」を目指すことができる。

臨床現場での管理栄養士業務の実際を知ることができる。

授業方法

講義形式－授業全般は教科書に沿って進める。

チーム医療での管理栄養士の役割等を各診療科に分け学習する。

第1～3回目までは、当日資料を配布した授業となるので、特に予習は必要ないが、1,000文字程度のレポートを提出。

第4～15回目までは、教科書に基づいて授業を進めるので、前もって読んでおくこと。

事後学習として症例を提示するので、学んだ内容と合わせレポートにまとめ提出する。

授業計画

- 第1回 臨床現場で求められる臨床管理栄養士像（診療報酬、介護報酬含む）
- 第2回 他職種とのかかわり（給食管理業務従事者、医師、看護師、薬剤師等）
- 第3回 チーム医療とは何か
- 第4回 糖尿病に関わる栄養指導業務に必要な知識
- 第5回 糖尿病患者の栄養管理及び栄養指導業務（入院と外来の違い）
- 第6回 腎臓病（CKD患者）に関わる栄養指導業務に必要な知識
- 第7回 腎臓病（CKD）の栄養管理及び栄養指導業務（入院、外来、透析の違い）
- 第8回 循環器患者の栄養管理及び栄養指導業務（入院、外来の違い）
- 第9回 がん患者に対する栄養管理及び栄養指導業務 1
- 第10回 がん患者に対する栄養管理及び栄養指導業務 2
- 第11回 がん患者に対する栄養管理及び栄養指導業務 3
- 第12回 高齢者患者に対する栄養管理及び栄養指導業務
- 第13回 消化器全般に対する栄養管理及び栄養指導業務
- 第14回 小児の栄養管理及び栄養指導業務
- 第15回 医療連携、クリティカルパス、医療安全の基本的な知識

成績評価の方法

レポート（症例提示）100%

教科書

鈴木杏知 丸山道生 藤谷順子 石川祐一『臨床栄養認定管理栄養士のためのガイドブック』（東京医学社、2016）

授業のねらい

食品とは、一般に、そのまま飲食できるもの、または加工・調理することで飲食できるものの総称である。講義では、これら食品の流通経済（生産・分配・消費の全過程とそれらに関わる各主体間の関係）を具体的に説明する。あわせて、管理栄養士国家試験およびフードスペシャリスト資格認定試験の関連領域を重点的に説明し理解を深める。

到達目標

1. 食品ごとに異なる商品特性と流通の仕組みを理解すること、
2. 給食経営管理の最先端の動向を知ること、
3. 管理栄養士国家試験、フードスペシャリスト資格認定試験に備えた知識を身につけることが到達目標である。

授業方法

毎回パワーポイントを使用し、講義形式で行う。またほぼ毎回、講義内容の確認のための小テストを行う。受講にあたり、事前・事後学習としてフードスペシャリスト資格認定試験の過去問題等を学んでおくこと。

授業計画

- 第1回 講義ガイダンス
①授業のねらい ②管理栄養士養成課程における食品流通経済論
③食品・栄養をめぐる関心の高まりと諸問題 ④テキストと参考文献について
- 第2回 食品流通経済論の課題
①食生活変貌の諸要因 ②「食品」と「流通」と「経済」
- 第3回 日本の食料需給構造（その1）
①食料の供給構造（食料需給表の見方） ②食料自給率の計算方法の基本
- 第4回 日本の食糧需給構造（その2）
①品目別自給率 ②供給熱量自給率 ③その他の自給率の計算方法
- 第5回 食生活の変遷と特徴
①需要面（家計、家族関係） ②供給面（食品産業など）
- 第6回 食料の生産・流通構造
①食料の流通経路の特徴 ②卸売市場流通
- 第7回 食肉、水産物の市場と流通構造
①流通経路の特徴 ②トレーサビリティシステム
- 第8回 食料品の小売流通と業態
①食料品小売の業態 ②スーパー・コンビニ業態伸張の背景
- 第9回 食品小売業としての生協／マーケティング
①小売業ランキング ②生協と生協業態 ③マーケティング
- 第10回 マーケティングの4P戦略
①マーケティングの主体 ②4Pとは何か
- 第11回 流通経済の視点から見た食品の安全性
①HACCPとISO ②環境問題
- 第12回 外食産業との展開と特徴
①外食の歴史 ②外食産業の市場規模と中食
- 第13回 学校給食と栄養士
①日本における学校給食 ②学校給食の食材料と献立の変化 ③地産地消型学校給食
- 第14回 集団給食と栄養士業務
①集団給食の種類 ②栄養士の労働実態
- 第15回 21世紀の食生活の展望
①永続的なフードシステムとは ②人類の未来の食事は何か

成績評価の方法

毎回の授業で課する、主として到達目標1、3を測定する小テスト（50%）、および、学期末に行う到達目標1、2を測定するテスト形式のレポート（50%）により評価する。

履修にあたっての注意

管理栄養士国家試験における流通経済関連問題の説明をするので、関心のある学生は受講してほしい。

教科書・参考書に関する備考

教科書は特に指定しないが、『食の本棚』『問われる食育と栄養士』はなるべく入手してほしい。

参考書

佐藤信『明日の協同を担うのは誰か』（日本経済評論社、2014、ISBN：978-4-8188-2302-0）
内藤重之・佐藤信『学校給食における地産地消と食育効果』（筑波書房、2010、ISBN：978-4-8119-0365-1）
河合知子『管理栄養士になる方法』（筑波書房、2010、ISBN：978-4-8119-0376-7）
河合知子・佐藤信・久保田のぞみ『問われる食育と栄養士』（筑波書房、2006、ISBN：978-4-8119-0308-0）
河合知子『食の本棚』（幻冬舎ルネッサンス新書、2013、ISBN：978-4-7790-6086-1）

参考ホームページ

佐藤信 WEB SITE <http://city.hokkai.or.jp/~ks9570/> (科目担当教員のホームページ)

授業のねらい

専門分野を横断して、栄養評価や管理が行える総合的能力を養うことを目標とします。3年次の臨地実習で学んだことを基礎として、管理栄養士に必要なスキルを習得するための、事前教育として位置付けます。

到達目標

管理栄養士の職務や他職種との関わりについて理解できる。
学びたいテーマを主体的に考え、実習計画を考えることができる。

授業方法

演習形式で行う。事前・事後課題の提出を課す（所要時間 60-90 分程度）。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 実習先施設の調査・管理栄養士の業務①
- 第3回 // ②
- 第4回 衛生管理①
- 第5回 // ②
- 第6回 自主研究課題の設定①
- 第7回 // ②
- 第8回 事前課題への取り組み①
- 第9回 // ②
- 第10回 // ③
- 第11回 事業所管理栄養士の業務について
- 第12回 実習に向けて プレゼンテーション①
- 第13回 // ②
- 第14回 // ③
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標について、作成したプレゼンテーションの内容より評価を行う（100%）。

63852

給食経営管理実務演習

担当教員：三田村理恵子

1単位 前期

授業のねらい

専門分野を横断して、栄養評価や管理が行える総合的能力を養うことを目標とします。3年次の臨地実習で学んだことを基礎として、管理栄養士に必要なスキルを習得するための、事前教育として位置付けます。

到達目標

管理栄養士の職務や多職種との関わりについて理解できる。
学びたいテーマを主体的に考え、実習計画を考えることができる。

授業方法

演習形式で行う。事前・事後課題の提出を課す（所要時間 60-90 分程度）

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 実習先施設の調査・管理栄養士の業務 その1
- 第3回 実習先施設の調査・管理栄養士の業務 その2
- 第4回 衛生管理 その1
- 第5回 衛生管理 その2
- 第6回 自主研究課題の設定 その1
- 第7回 自主研究課題の設定 その2
- 第8回 事前課題への取り組み その1
- 第9回 事前課題への取り組み その2
- 第10回 事前課題への取り組み その3
- 第11回 保育所管理栄養士の業務について
- 第12回 実習に向けて プレゼンテーション その1
- 第13回 実習に向けて プレゼンテーション その2
- 第14回 実習に向けて プレゼンテーション その3
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標について、作成したプレゼンテーションの内容より評価を行う（100%）

63961

管理栄養士実務実習 担当教員：三田村理恵子・田中洋子・中川幸恵・村田まり子 1単位 通年

授業のねらい

臨床実習で学んだことを基礎とし、臨床等の現場で管理栄養士の様々な業務を実習を通じて経験することで、管理栄養士に必要なスキルを習得する。実習中に学びたいテーマを主体的に考え、実習計画を具体的に考えることで実践的に学ぶ。

到達目標

臨床等の現場で求められている管理栄養士の役割りについて理解できる。

授業方法

演習および学外での実習：学外実習前の事前学習、学外実習、実習後のまとめ
事前学習に関しては、担当教員と相談をしながら各自学習を進めます。
実習後は、実習ノートやレポートをまとめて提出してください。後日コメントを入れて返却します。
実習後は、報告会を実施します。事後学習として取り組み、その内容とプレゼンテーションについては、担当教員が指導します。

授業計画

- ・実務実習で学びたいテーマの決定
- ・実習テーマに沿った事前学習
- ・実習テーマに沿った実習計画の作成
- ・実習先の指導者との実習にむけての調整
- ・実務実習
- ・実務実習後の考察
- ・今後の課題の検討
- ・実習成果の発表

成績評価の方法

実習前および実習後の自己学習の状況 (40%)
実習成果 (40%)
実習指導者の評価 (20%)

履修にあたっての注意

実習の遂行に当たっては主体的に取り組むこと

授業のねらい

受講生は将来、管理栄養士として高度な統計データ解析を何らかのソフトウェアを用いて行なうことになる。本講義により統計学的な考え方をまず身につけ、分析結果を正しく解釈できることを目指す。

到達目標

- ・統計データの意味を理解できる。
- ・母集団や標本などの基礎的な概念を説明できる。
- ・標本抽出を伴う統計的推測法(推定・仮説検定)を説明できる。

授業方法

講義の前半に内容の解説、後半に演習を行なう。講義の終わりに演習課題を提出する。時間内に解けなかった課題は、次回の講義で提出すること。

事前学習として、次回講義の部分の教科書を読むこと。

事後学習として、演習課題をもう一度、やること。

授業計画

- 第1回 栄養科学と統計学
- 第2回 データの種類
- 第3回 度数分布図と代表値
- 第4回 データの散布度
- 第5回 正規分布
- 第6回 標本集団か5母集団を推定する
- 第7回 検定の考え方
- 第8回 2標本の平均値の比較
- 第9回 3つ以上の群の平均値の比較
- 第10回 2つの変数の相関
- 第11回 2つの変数の回帰分析
- 第12回 多変数の関係
- 第13回 研究デザインとクロス集計
- 第14回 クロス集計表の解析
- 第15回 クロス集計表の応用と生存

成績評価の方法

演習 30点、期末試験 70点の合計 100点で評価する。

履修にあたっての注意

エクセルの基本的な使い方をあらかじめ修得していることが望ましい。

教科書

鈴木良雄・廣津信義『基礎統計学』（講談社サイエンティフィック、2012、ISBN：978-4-06-155348-4）

参考書

柳井久江『4 Step エクセル統計 第4版』（星雲社、2015、ISBN：978-4434211621）

授業のねらい

この授業は、現代の「食」を取り巻く環境が大きく変化してきていることから、料理を提供する場面において快適な「食事空間」を演出し提供しなければなりません。そのためには、洗練された感性（五感）と関連分野の総合的な基礎知識が必要になります。

そこで、料理、メニュー、食卓、食空間を含めた食のコーディネートを行うために、食文化、メニュープランニング、テーブルウェアの知識と演出方法、食事スタイル、サービス手法（ホスピタリティ「おもてなしの心」）などの基礎知識について理解出来るよう目指します。

到達目標

講義のみならず演習を通して、食に関するコーディネートに必要な知識・技能の修得と実践力を養い、更に明確に説明することができる。

授業方法

原則として、一定の食卓ルールに則った適切なサービスとマナー、及び「食空間」をコーディネートするために必要なテーブルウェア（和・洋の食器、グラス、カトラリー、フィギュア）など、現物を使用し、実際に手に触れ、各々の違いを見極めながら講義形式及び食卓の演出（テーブルコーディネート）のデモンストレーションを体験する。

フードコーディネート論は、食文化から料理様式（メニュー）、食空間のコーディネート、フードマネジメント、食卓のサービス&マナーと範囲が広く、また日本語としても聞きなれていない言葉が多いです。事前に教科書を良く読み理解しておく必要があります。事後学習としては、更に知識として習得出来たかを確認するため復習すること。

授業計画

- 第1回 フードコーディネートとは
- 第2回 フードコーディネートの基本理念
- 第3回 食事の文化(1)：日本の食事の歴史
- 第4回 食事の文化(2)：外国の食事
- 第5回 食空間のコーディネート(1)：食空間のコーディネートの基礎
- 第6回 食空間のコーディネート(2)：食事空間のコーディネート
- 第7回 食空間のコーディネート(3)：カラーコーディネート
- 第8回 食卓のコーディネート(1)：日本料理の食卓のコーディネート
- 第9回 食卓のコーディネート(2)：中国・西洋料理の食卓のコーディネート
- 第10回 食卓のコーディネート(3)：スタイル別の食卓のコーディネート
- 第11回 メニュープランニング(1)：料理様式とメニュー開発の基礎
- 第12回 メニュープランニング(2)：中国・西洋料理様式
- 第13回 食卓のサービスとマナー
- 第14回 フードマネジメント
- 第15回 食企画の実践コーディネート

成績評価の方法

到達目標を測定するために期末試験 50%、授業への参加状況 30%、実習 20%により評価する。

履修にあたっての注意

フードスペシャリストは、「食」に関する総合的・体系的な知識・技術を身につけ、豊かで安全かつバランスのとれた「食」を提案できる力を持つ「食」の専門職である。協会が実施する認定試験（12月中～下旬）に合格するよう意欲的に学んで欲しい。

テーブルウェア（食器・食具）など、現物を使用するため、細心の注意と白手袋の用意をする。

教科書

（公社）日本フードスペシャリスト協会『新版フードコーディネート論』（建帛社、ISBN：978-4-7679-0440-5）

教科書・参考書に関する備考

資料は随時配布する。

参考書：篠原ミツコのテーブルコーディネート集

授業のねらい

フードスペシャリストは、食物栄養学科において食に関する専門職として公益社団法人「日本フードスペシャリスト協会」から認定された資格である。

この授業ではフードスペシャリストの業務内容や専門性を理解するとともに、資格認定までに履修する各教科の内容を身につけることができる。また、フードスペシャリスト認定試験概要や就業後の心構えを認識することをねらいとする。フードスペシャリストに関して、最新の文献を取り上げながら、理解を深め、学ぶことを目的としている。

到達目標

到達目標 1：フードスペシャリストの業務内容や専門性について、明確に説明することができる。

到達目標 2：フードスペシャリストに関する知識を身につけ、討議することができる。

授業方法

授業方法は、オムニバス形式でテーマを取り上げながら、講義形式により、進めていく。毎回の授業では、事前・事後課題（所要時間 30 分程度）を課す。課題は、授業内で解説し、その資料を配布する。また、授業時間内に理解度確認のための小テストを実施する。テストは、採点後に答案を返却し、解答例を配付する。

授業計画

担当教員：菊地和美・池田隆幸・中河原俊治・松坂裕子・村田まり子・森重正也

- 第1回 フードスペシャリストとは：(菊地)
- 第2回 フードスペシャリスト資格認定試験の概要・模擬試験：(森重)
- 第3回 人類と食物（第2章：食品加工・保存技術史など）：(森重)
- 第4回 フードスペシャリスト資格認定試験の模擬試験：(森重)
- 第5回 現代日本の食生活（第5章：環境と食など）：(森重)
- 第6回 専門フードスペシャリスト（食品開発）の模擬試験：(森重)
- 第7回 個別食品の鑑別（第4章：個別食品の鑑別など）：(森重)
- 第8回 世界の食、日本の食：(菊地)
- 第9回 食品の鮮度と熟度、鑑別検査の概要および食べ物の安全性と消費者の保護（池田）
- 第10回 食品の品質規格と表示：(池田)
- 第11回 食物学に関する内容：(中河原)
- 第12回 食品機能論に関する内容：(中河原)
- 第13回 食品産業・食品流通の役割：(村田)
- 第14回 フードスペシャリストの役割と展望（村田）
- 第15回 食品の官能評価：(松坂)

成績評価の方法

到達目標 1 を測定するために小テスト（50%）、授業への参加状況（20%）により、評価する。

到達目標 2 を測定するためにレポート（30%）により、評価する。

履修にあたっての注意

フードスペシャリストは、「食」に関する総合的・体系的な知識・技術を身につけ、豊かで安全かつバランスのとれた「食」を提案できる力を持つ「食」の専門職である。協会が実施する認定試験（12月中～下旬）に合格するよう意欲的に学んで欲しい。レポートの内容について、しっかりと学習した上で授業に参加すること。

教科書

（公社）日本フードスペシャリスト協会『フードスペシャリスト論（四訂3版）』（建帛社、2016）

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。

参考ホームページ

公益社団法人日本フードスペシャリスト協会 <http://www.jafs.org/>

授業のねらい

入学以来学んできた専門科目のほとんどの授業は数多くの細目別に独立した科目として行われてきた。この演習ではこれらの科目を関連した数科目ごとに区分し、各区分に含まれる教科の基礎的知識を短期間にまとめて見直すことにより、総合的に理解することを目的とする。このことにより、卒業後職務として行う管理栄養士の実務や研究の場において直面する問題を解決するための潜在能力の向上を図ることをねらいとする。この演習 I では、特に基礎の基礎の復習に重点をおき、講義形式で、出題頻度の高い最重要項目を中心に指導する。

到達目標

後期の演習 II の習得とあわせて、卒業直後にある管理栄養士国家試験に合格できるレベルの学力を身につける。そうした基礎的な能力を持つ管理栄養士として、社会の広い分野において活躍できる。

授業方法

演習形式で行う。

事前学習は、授業に関連する科目の教科書・プリントを読むことである。

事後学習は、過去問・配布されたプリントを復習することである。

授業計画

担当教員：菊地和美・池田隆幸・大西正男・小山田正人・岸知子・隈元晴子・田中洋子・中川幸恵・中河原俊治・藤井義博・松坂裕子・三田村理恵子・村田まり子・八島絵美

- 第1回 社会・環境と健康(公衆衛生学 小山田)(国家試験の内容として新たに加わった大項目についての補充)
- 第2回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (1) (物質生化学 大西)
- 第3回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (2) (代謝生化学 大西)
- 第4回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (3) (内分泌学 藤井)
- 第5回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (4) (病理学総論 A 小山田)
- 第6回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (5) (病理学総論 B 小山田)
- 第7回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (6) (病理学各論 A 小山田)
- 第8回 食べ物と健康 (1) (食と安全論 A 池田)
- 第9回 食べ物と健康 (2) (食と安全論 B 池田)
- 第10回 食べ物と健康 (3) (食品化学 B 中河原)
- 第11回 食べ物と健康 (4) (食品化学 A 松坂)
- 第12回 食べ物と健康 (5) (食品加工学 松坂)
- 第13回 食べ物と健康 (6) (食品機能学 中河原)
- 第14回 食べ物と健康 (7) (調理科学 菊地)
- 第15回 食べ物と健康 (8) (調理科学 菊地)
- 第16回 基礎栄養学 (1) (基礎栄養学 三田村)
- 第17回 基礎栄養学 (2) (基礎栄養学 三田村)
- 第18回 基礎栄養学 (3) (基礎栄養学 三田村)
- 第19回 応用栄養学 (1) (応用栄養学 隈元)
- 第20回 応用栄養学 (2) (応用栄養学 八島)
- 第21回 栄養教育論 (栄養教育論 隈元)
- 第22回 臨床栄養学 (1) (臨床栄養学 田中)
- 第23回 臨床栄養学 (2) (臨床栄養学 田中)
- 第24回 臨床栄養学 (3) (臨床栄養学 中川)
- 第25回 臨床栄養学 (4) (臨床栄養学 中川)
- 第26回 臨床栄養学 (5) (疾病と代謝 藤井)
- 第27回 公衆栄養学 (1) (公衆栄養学 A 岸)
- 第28回 公衆栄養学 (2) (公衆栄養学 B 岸)
- 第29回 給食経営管理論 (1) (給食経営管理論 村田)
- 第30回 給食経営管理論 (2) (給食経営管理論 村田)

成績評価の方法

理解度試験(100%)で評価する。

尚、国家試験の模擬試験受験は単位習得の必要条件である。

履修にあたっての注意

授業を有効に活用するために予習、復習を充分に行うこと。この授業の進行に伴ってこれを補習する授業を実施するので必ず受けること。
なお、順番は変更することがある。

教科書・参考書に関する備考

各時間に資料が配布される。

授業のねらい

入学以来学んできた専門科目のほとんどの授業は数多くの細目別に独立した科目として行われてきた。この演習ではこれらの科目を関連した数科目ごとに区分し、各区分に含まれる教科の基礎的知識を短期間にまとめて見直すことにより、総合的に理解することを目的とする。このことにより、卒業後職務として行う管理栄養士の実務や研究の場において直面する問題を解決するための潜在能力の向上を図ることをねらいとする。この演習Ⅱでは、特に基礎の復習に重点をおき、講義形式で、出題頻度の高い最重要項目を中心に指導する。

到達目標

前期の演習Ⅰの習得とあわせて、卒業直後にある管理栄養士国家試験に合格できるレベルの学力を身につける。そうした基礎的な能力を持つ管理栄養士として、社会の広い分野において活躍できる。

授業方法

演習形式で行う。

事前学習は、授業に関連する科目の教科書・プリントを読むことである。

事後学習は、過去問・配布されたプリントを復習することである。

授業計画

担当教員：菊地和美・池田隆幸・大西正男・小山田正人・岸知子・隈元晴子・田中洋子・中川幸恵・中河原俊治・藤井義博・松坂裕子・三田村理恵子・村田まり子・八島絵美

第1回 社会・環境と健康（公衆衛生学 小山田）（国家試験の内容として新たに加わった大項目についての補充）

第2回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (1) (物質生化学 大西)

第3回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (2) (代謝生化学 大西)

第4回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (3) (内分泌学 藤井)

第5回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (4) (病理学総論 A 小山田)

第6回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (5) (病理学総論 B 小山田)

第7回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち (6) (病理学各論 A 小山田)

第8回 食べ物と健康 (1) (食と安全論 A 池田)

第9回 食べ物と健康 (2) (食と安全論 B 池田)

第10回 食べ物と健康 (3) (食品化学 B 中河原)

第11回 食べ物と健康 (4) (食品化学 A 松坂)

第12回 食べ物と健康 (5) (食品加工学 松坂)

第13回 食べ物と健康 (6) (食品機能学 中河原)

第14回 食べ物と健康 (7) (調理科学 菊地)

第15回 食べ物と健康 (8) (調理科学 菊地)

第16回 基礎栄養学 (1) (基礎栄養学 三田村)

第17回 基礎栄養学 (2) (基礎栄養学 三田村)

第18回 基礎栄養学 (3) (基礎栄養学 三田村)

第19回 応用栄養学 (1) (応用栄養学 隈元)

第20回 応用栄養学 (2) (応用栄養学 八島)

第21回 栄養教育論 (栄養教育論 隈元)

第22回 臨床栄養学 (1) (臨床栄養学 田中)

第23回 臨床栄養学 (2) (臨床栄養学 田中)

第24回 臨床栄養学 (3) (臨床栄養学 中川)

第25回 臨床栄養学 (4) (臨床栄養学 中川)

第26回 臨床栄養学 (5) (疾病と代謝 藤井)

第27回 公衆栄養学 (1) (公衆栄養学 A 岸)

第28回 公衆栄養学 (2) (公衆栄養学 B 岸)

第29回 給食経営管理論 (1) (給食経営管理論 村田)

第30回 給食経営管理論 (2) (給食経営管理論 村田)

成績評価の方法

理解度試験（100％）で評価する。

尚、国家試験の模擬試験受験は単位習得の必要条件である。

履修にあたっての注意

授業を有効に活用するために予習、復習を充分に行うこと。この授業の進行に伴ってこれを補習する授業を実施するので必ず受けること。

なお、順番は変更することがある。

教科書・参考書に関する備考

各時間に資料が配布される。

授業のねらい

卒業研究に関係のある原著論文（英語）を読み、プリントにまとめ発表する。最新の食品微生物学、発酵学およびバイオテクノロジーの知識、理解を高め、人前で自分が調べてきたこと、自分の考えなどをまとめ発表する能力およびディスカッション能力を育成する。

到達目標

研究テーマの如何に関わらず、選んだ研究論文を正しく理解し、紹介することができる。

授業方法

1. 文献発表

1回の演習では、担当する学生1名が、自分の研究に関係のある英語論文、または興味を持っているテーマに関する英語論文を作成した資料を用いて60分間で説明し、教員を含めた全員でその発表内容に伴うディスカッションを30分間行う。演習履修者の人数にもよるが、1人年に2～3回の発表を予定している。事前に発表担当者は作製した資料を全員に配布し、担当者以外の学生は予め資料を読んでから出席すること。終了後ディスカッションの内容をまとめること。

2. 研究報告

4月-12月の月1回、卒業研究の進捗状況を報告書を作成しプレゼンテーションと、実験内容についての技術的および研究の進め方などの戦術的なディスカッションを行う。

授業計画

第1回 卒業研究における、研究倫理について解説する。また、卒業研究に関する文献検索および論文発表の方法について、例を示しながら説明およびプレゼンテーションを行う。

第2回 担当者による文献発表及びディスカッション

第3回 担当者による文献発表及びディスカッション

第4回 全員による研究報告会

第5回 担当者による文献発表及びディスカッション

第6回 担当者による文献発表及びディスカッション

第7回 担当者による文献発表及びディスカッション

第8回 全員による研究報告会

第9回 担当者による文献発表及びディスカッション

第10回 担当者による文献発表及びディスカッション

第11回 担当者による文献発表及びディスカッション

第12回 全員による研究報告会

第13回 担当者による文献発表及びディスカッション

第14回 担当者による文献発表及びディスカッション

第15回 担当者による文献発表及びディスカッション

第16回 全員による研究報告会

第17回 担当者による文献発表及びディスカッション

第18回 担当者による文献発表及びディスカッション

第19回 担当者による文献発表及びディスカッション

第20回 全員による研究報告会

第21回 担当者による文献発表及びディスカッション

第22回 担当者による文献発表及びディスカッション

第23回 全員による研究報告会

成績評価の方法

選択した論文、発表方法、発表技術（50%）と聞き手側としてのディスカッション能力（40%）および参加状況（10%）で判断します。

履修にあたっての注意

卒業研究と同時に履修することを強く希望します。

教科書・参考書に関する備考

教科書：過去に先輩達が残してくれた発表資料など。

授業のねらい

卒業研究において食品や生体組織中の脂質分析や脂質機能に関する研究を行うために必要な専門的知識と分析技術を学術論文・総説や実験書から学ぶ。また、主として英文の原著論文を精読して十分に理解した上で、その概要をプリント、スライドなどの形式でまとめて発表し、相互に討論する能力を育てる。同時に、各自の実験結果を整理して発表する能力を高める。

到達目標

1. 生化学や栄養学分野の英文論文や総説を理解して説明できることを目標とする。
2. 英文による原著論文に記載されている脂質関連の最新の研究成果を紹介することができる。

授業方法

ゼミ方式で行うのを原則とします。また、教員からの一方向型ではなく、学生と教員が共に学び合う双方向型の授業方法とします。内容は、文献や総説の紹介および実験結果報告からなります。事前に配布された資料をよく読んで上で演習に参加することが求められます。したがって、事前学習には少なくとも30分は必要になります。また、毎回の演習後に学習・理解した内容を小レポートとして提出することを求めます(所要時間30分程度)。

授業計画

- 第1回 はじめに(その1)：論文検索・文献調査のやり方や発表方法などについての説明
 第2回 はじめに(その2)：先行研究の調査法および研究倫理についての説明
 第3回 3回目以降はセミナー形式による文献紹介(1)
 (文献発表では、各自が予め選んだ原著論文や解説・総説を精読し、その内容を理解した上で、教員を含めた本演習履修者に対して説明することになります。その後、発表内容についての討論が始まります。論文発表は、一人、年2回を基本とします。)
- 第4回 4回目以降は3回目と同様に文献紹介(2)
 第5回 4回目以降は3回目と同様に文献紹介(3)
 第6回 4回目以降は3回目と同様に文献紹介(4)
 第7回 4回目以降は3回目と同様に文献紹介(5)
 第8回 4回目以降は3回目と同様に文献紹介(6)
 第9回 4回目以降は3回目と同様に文献紹介(7)
 第10回 4回目以降は3回目と同様に文献紹介(8)
 第11回 4回目以降は3回目と同様に文献紹介(9)
 第12回 4回目以降は3回目と同様に文献紹介(10)
 第13回 4回目以降は3回目と同様に文献紹介(11)
 第14回 4回目以降は3回目と同様に文献紹介(12)
 第15回 実験結果報告と討論(1)
 第16回 実験結果報告と討論(2)
 第17回 実験結果報告と討論(3)
 第18回 実験結果報告と討論(4)
 第19回 実験結果報告と討論(5)
 第20回 実験結果報告と討論(6)
 第21回 3～14回と同じですが、適宜、実験結果報告を組み込みます。(1)
 第22回 21回と同じですが、適宜、実験結果報告を組み込みます。(2)
 第23回 21回と同じですが、適宜、実験結果報告を組み込みます。(3)

成績評価の方法

授業への積極的な取り組み(50%)、質疑応答への参加(20%)、作成した発表資料の内容(30%)により評価します。

履修にあたっての注意

卒業研究と合わせて履修することを期待します。また、本演習においては全員の発言を求めますので、事前に配布された資料の内容をしっかりと予習した上で参加することになります。

教科書・参考書に関する備考

必要な参考資料は、適宜、配布します。

授業のねらい

公衆衛生、公衆栄養問題への関心を深め、学ぶことが本授業のねらいである。

到達目標

- ・卒業し社会人となったときに周りの人々に信頼されるような職業人となるための知識を身につける。
- ・身の回りで起こっている健康・栄養に関する出来事に興味を持ち、問題を発見できる。
- ・文献を検索し、資料を整理し、必要に応じて調査研究の計画を立案する能力を身につける。

授業方法

演習形式で行う。
事前学習として論文の要旨を読んでおく。
事後学習として、扱った論文の重要点を箇条書きでまとめる。

授業計画

- 第1回 10回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。初回として、「研究倫理」も扱う。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(1)
- 第2回 10回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(2)
- 第3回 10回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(3)
- 第4回 1年間、23回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(4)
- 第5回 10回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(5)
- 第6回 10回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(6)
- 第7回 10回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(7)
- 第8回 10回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(8)
- 第9回 10回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(9)
- 第10回 10回にわたって自由な発想に基づいて、種々の健康・栄養問題について学び、英語で書かれた専門書や雑誌から栄養・健康問題に関する論文を読む。
内容をまとめ、発表する。他の人の発表に対して、積極的に討論に参加する。(10)
- 第11回 健康問題、栄養問題、社会問題、環境問題などについて話題を見つけて解説する。これは日本語であっても良い。必要であれば、文献調査をし問題の解決を模索する。(1)
- 第12回 健康問題、栄養問題、社会問題、環境問題などについて話題を見つけて解説する。これは日本語であっても良い。必要であれば、文献調査をし問題の解決を模索する。(2)
- 第13回 健康問題、栄養問題、社会問題、環境問題などについて話題を見つけて解説する。これは日本語であっても良い。必要であれば、文献調査をし問題の解決を模索する。(3)
- 第14回 健康問題、栄養問題、社会問題、環境問題などについて話題を見つけて解説する。これは日本語であっても良い。必要であれば、文献調査をし問題の解決を模索する。(4)
- 第15回 健康問題、栄養問題、社会問題、環境問題などについて話題を見つけて解説する。これは日本語であっても良い。必要であれば、文献調査をし問題の解決を模索する。(5)
- 第16回 健康問題、栄養問題、社会問題、環境問題などについて話題を見つけて解説する。これは日本語であっても良い。必要であれば、文献調査をし問題の解決を模索する。(6)
- 第17回 健康問題、栄養問題、社会問題、環境問題などについて話題を見つけて解説する。これは日本語であっても良い。必要であれば、文献調査をし問題の解決を模索する。(7)

-
- 第18回 健康問題、栄養問題、社会問題、環境問題などについて話題を見つけて解説する。これは日本語であっても良い。必要であれば、文献調査をし問題の解決を模索する。(8)
- 第19回 健康問題、栄養問題、社会問題、環境問題などについて話題を見つけて解説する。これは日本語であっても良い。必要であれば、文献調査をし問題の解決を模索する。(9)
- 第20回 健康問題、栄養問題、社会問題、環境問題などについて話題を見つけて解説する。これは日本語であっても良い。必要であれば、文献調査をし問題の解決を模索する。(10)
- 第21回 上記について、資料をつけて記録として整理する。(1)
- 第22回 上記について、資料をつけて記録として整理する。(2)
- 第23回 上記について、資料をつけて記録として整理する。(3)

成績評価の方法

ゼミへの参加状況 (50%) と、討議への参加状態 (50%) によって評価する。

履修にあたっての注意

授業のように時間割だけに拘束されるものではないだけに、自主性と積極性が求められる。社会問題などもテーマとして扱うだけに、真剣な取り組みが必要である。

授業のねらい

調理科学に関する研究や地域栄養活動に関する研究について、最新の文献を取り上げながら、発表をとおして理解を深め、学ぶことをねらいとしている。テーマについては、北海道産食材の調理科学的特性を学び、調理学に関する知識や調理科学実験の技能を身につけてもらうことを目的とする。

到達目標

到達目標1：調理科学に関する知識を身につけ、それを応用して調理科学実験ならびに調理に関する調査研究を理解することができる。

到達目標2：文献を取り上げながら、プレゼンテーションを行い、討議することができる。

授業方法

原則として、1回につき1テーマを取り上げながら、講義および演習形式により、進めていく。

各自、卒業研究関連文献紹介を行うこととして、内容をまとめた要旨の作成、発表、討論を行う。

発表者はプレゼンテーションの方法や役割分担によって討論をまとめていく力を養う。

(ゲストスピーカーにより、演習で学ぶ) 受講にあたって、事前学習として文献を読み、各自レジュメを作成し、人数分印刷して準備しておくことを課題とする(所要時間60分程度)。事後学習としてレポートを作成する(所要時間60分程度)。1～2文献講読、3～5調理科学に関する講義・実験、6研究倫理、7～13アンケート調査、14～23調理科学実験、演習、プレゼンテーション、レポート作成。レポートは、演習内で口頭により、解説し、解説資料を配付する。

授業計画

- 第1回 文献講読(共通1) 過年度卒業報文の講読
- 第2回 文献講読(共通2) 調理科学に関する文献の講読
- 第3回 調理科学に関する講義・実験1：色調について
- 第4回 調理科学に関する講義・実験2：官能検査について(順位法・評点法)
- 第5回 調理科学に関する講義・実験3：食品の物性測定
- 第6回 「研究倫理」について－「藤女子大学研究倫理基準」の内容を知ろう
- 第7回 プレゼンテーション(共通) アンケート調査1
- 第8回 プレゼンテーション(共通) アンケート調査2
- 第9回 プレゼンテーション(共通) アンケート調査3
- 第10回 プレゼンテーション(共通) アンケート調査4
- 第11回 プレゼンテーション(共通) アンケート調査5
- 第12回 プレゼンテーション(共通) アンケート調査6
- 第13回 プレゼンテーション(共通) アンケート調査7
- 第14回 プレゼンテーション(各自) 調理科学実験結果1
- 第15回 プレゼンテーション(各自) 調理科学実験結果2
- 第16回 プレゼンテーション(各自) 調理科学実験結果3
- 第17回 プレゼンテーション(各自) 調理科学実験結果4
- 第18回 プレゼンテーション(各自) 調理科学実験結果5
- 第19回 プレゼンテーション(各自) 調理科学実験結果6
- 第20回 プレゼンテーション(各自) 調理科学実験結果7
- 第21回 プレゼンテーション(各自) 調理科学実験結果8
- 第22回 プレゼンテーション(各自) 調理科学実験結果9
- 第23回 プレゼンテーション(各自) 調理科学実験結果10

成績評価の方法

到達目標1を測定する研究に取り組むレジュメの作成(30%)、到達目標2を測定する卒業演習プレゼンテーション(40%)、授業への参加状況(30%)により、評価する

履修にあたっての注意

卒論発表会には必ず出席すること。レジュメやレポートの内容について、しっかりと学習した上で授業に参加すること。

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。

参考書：各自関連教科書、学術雑誌(日本調理科学会誌)を授業内で指示する。

授業のねらい

論文の精読、要約発表を通じて論理的思考の修得とプレゼンテーション能力の向上を目指す。また、卒業研究で取り組むテーマの背景設定、研究結果の考察に必要な論文の収集と理解に必要な知識と技能を修得する。

到達目標

1. 卒業研究のテーマに関係のある論文を読んで理解し、その内容を要約して発表することができる。
2. 研究内容を十分に理解し、研究結果を相手が理解できるようにわかりやすく発表することができる。
3. 自分の考えを理論立てて述べるすることができる。

授業方法

1. 卒業論文の作成、発表に必要な基礎的知識について講義を行う。
2. 卒業研究テーマに関する論文を読み、その内容を資料にまとめてわかりやすく発表し、ディスカッションを行う。
3. 卒業研究で実施した調査研究データをまとめて中間発表し、ディスカッションを行う。
事前学習として、自分の卒業論文に関連する論文を収集し、内容を要約して整理すること。
事後学習として、ディスカッションで出た意見をまとめ、卒業論文の考察を深めるための資料を作成すること。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、研究倫理
- 第2回 栄養統計(1)
- 第3回 栄養統計(2)
- 第4回 文献検索
- 第5回 文献収集・資料収集
- 第6回 論文発表とディスカッション(1)
- 第7回 論文発表とディスカッション(2)
- 第8回 論文発表とディスカッション(3)
- 第9回 論文発表とディスカッション(4)
- 第10回 論文発表とディスカッション(5)
- 第11回 論文発表とディスカッション(6)
- 第12回 論文発表とディスカッション(7)
- 第13回 論文発表とディスカッション(8)
- 第14回 調査研究データの解析結果の発表とディスカッション(1)
- 第15回 調査研究データの解析結果の発表とディスカッション(2)
- 第16回 調査研究データの解析結果の発表とディスカッション(3)
- 第17回 調査研究データの解析結果の発表とディスカッション(4)
- 第18回 調査研究データの解析結果の発表とディスカッション(5)
- 第19回 調査研究データの解析結果の発表とディスカッション(6)
- 第20回 論文作成の基礎知識(1)
- 第21回 論文作成の基礎知識(2)
- 第22回 研究結果発表方法(1)
- 第23回 研究結果発表方法(2)

成績評価の方法

成績は、授業への参加状況（50%）、発表内容（50%）で評価する。

履修にあたっての注意

積極的な取り組みを求める。

教科書・参考書に関する備考

適宜、プリントを配布する。
参考書の紹介も行う。

授業のねらい

本授業は、3年次の卒業演習Ⅰでの学びを基盤に、卒業研究に必要な知識や技術を習得することを目的として行う。

到達目標

1. テーマに沿った文献を収集し、整理することができる。
2. 調査から得られたデータを分析、考察し、結論へと導くことができる。
3. 発表や研究内容についてディスカッションすることができる。

授業方法

ゼミ形式と個別指導方式を組み合わせ、テーマに沿った文献収集、調査、プレゼンテーション、ディスカッションを行う。また、卒業研究をまとめるにあたって必要な研究技法について、講義、演習を行う。

毎回、既存のデータを用いてテーマに沿った情報収集を行い（事前学習：60分）、文献を読み議論した結果を統合し、ノートにまとめる（事後学習：60分）。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション
- 第2回 研究倫理についての理解
- 第3回 研究テーマの検討
- 第4回 研究の背景と目的の検討
- 第5回 研究方法の検討
- 第6回 データ分析方法の検討
- 第7回 卒業論文構成（目次）の検討
- 第8回 文献発表とディスカッション(1)
- 第9回 文献発表とディスカッション(2)
- 第10回 文献発表とディスカッション(3)
- 第11回 文献発表とディスカッション(4)
- 第12回 文献発表とディスカッション(5)
- 第13回 文献発表とディスカッション(6)
- 第14回 テーマに基づいた調査の準備
- 第15回 前期のまとめ
- 第16回 後期オリエンテーション
- 第17回 調査結果の集計
- 第18回 調査結果の分析
- 第19回 先行研究の検討
- 第20回 研究の考察
- 第21回 卒業研究のまとめとプレゼンテーションおよびディスカッション(1)
- 第22回 卒業研究のまとめとプレゼンテーションおよびディスカッション(2)
- 第23回 卒業研究のまとめとプレゼンテーションおよびディスカッション(3)

成績評価の方法

到達目標3については演習への参加の態度（50%）で、到達目標1、2については卒業論文の内容（50%）において評価する。

履修にあたっての注意

自主的かつ積極的な態度で臨むこと。

授業のねらい

臨床領域に関する課題設定、研究方法、評価方法などを学ぶ。さらに、研究成果発表のスライド作成とプレゼンテーション方法、研究報告書の作成方法について理解を深める。

到達目標

- ・卒業研究のテーマに関係のある論文を読んで、まとめることができる。
- ・研究内容をわかりやすくプレゼンテーションすることができる。

授業方法

- ・文献を読み、その内容をまとめてプレゼンテーションを行い、ディスカッションする。
- ・卒業論文の作成、プレゼンテーションに向け、必要な技法を学ぶ。事前課題として発表者は発表時に使用する資料を作成する（所要時間2-3時間）。発表者以外は予め文献を読んでおく。また、卒業論文作成に必要な文献も呼んでおく。事後課題として、授業で学んだこと、卒業論文作成に必要なデータ等を、ノートにまとめる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション及び研究倫理
- 第2回 文献検索の方法
- 第3回 文献検索(1)
- 第4回 文献検索(2)
- 第5回 論文発表とディスカッション(1)
- 第6回 論文発表とディスカッション(2)
- 第7回 調査・研究のための技術習得(1)
- 第8回 調査・研究のための技術習得(2)
- 第9回 調査・研究のための技術習得(3)
- 第10回 調査・研究のための技術習得(4)
- 第11回 調査データの分析・解析技術の習得(1)
- 第12回 調査データの分析・解析技術の習得(2)
- 第13回 調査データの分析・解析技術の習得(3)
- 第14回 研究計画作成(1)
- 第15回 研究計画作成(2)
- 第16回 調査実施(1)
- 第17回 調査実施(2)
- 第18回 調査実施(3)
- 第19回 データ整理(1)
- 第20回 データ整理(2)
- 第21回 卒業研究に関するプレゼンテーション及びディスカッション(1)
- 第22回 卒業研究に関するプレゼンテーション及びディスカッション(2)
- 第23回 卒業研究まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況（40%）、発表及びディスカッションへの取り組み態度（60%）

履修にあたっての注意

自主的・積極的な参加を望みます

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて参考書を紹介する。また、プリントを配布する。

授業のねらい

臨床領域に関する課題設定、研究方法、評価方法などを学ぶ。さらに、研究成果発表のスライド作成とプレゼンテーション方法、研究報告書の作成方法について理解を深める。

到達目標

- ・卒業研究のテーマに関係のある論文を読んで、まとめることができる。
- ・研究内容をわかりやすくプレゼンテーションすることができる。

授業方法

- ・文献を読み、その内容をまとめてプレゼンテーションを行い、ディスカッションする。
- ・卒業論文の作成、プレゼンテーションに向け、必要な技法を学ぶ。事前課題として発表者は発表時に使用する資料を作成する（所要時間2-3時間）。発表者以外は予め文献を読んでおく。また、卒業論文作成に必要な文献も呼んでおく。事後課題として、授業で学んだこと、卒業論文作成に必要なデータ等を、ノートにまとめる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション及び研究倫理
- 第2回 文献検索の方法
- 第3回 文献検索(1)
- 第4回 文献検索(2)
- 第5回 論文発表とディスカッション(1)
- 第6回 論文発表とディスカッション(2)
- 第7回 調査・研究のための技術習得(1)
- 第8回 調査・研究のための技術習得(2)
- 第9回 調査・研究のための技術習得(3)
- 第10回 調査・研究のための技術習得(4)
- 第11回 調査データの分析・解析技術の習得(1)
- 第12回 調査データの分析・解析技術の習得(2)
- 第13回 調査データの分析・解析技術の習得(3)
- 第14回 研究計画作成(1)
- 第15回 研究計画作成(2)
- 第16回 調査実施(1)
- 第17回 調査実施(2)
- 第18回 調査実施(3)
- 第19回 データ整理(1)
- 第20回 データ整理(2)
- 第21回 卒業研究に関するプレゼンテーション及びディスカッション(1)
- 第22回 卒業研究に関するプレゼンテーション及びディスカッション(2)
- 第23回 卒業研究まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況（40%）、発表及びディスカッションへの取り組み態度（60%）

履修にあたっての注意

自主的・積極的な参加を望みます

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて参考書を紹介する。また、プリントを配布する。

授業のねらい

管理栄養士には Evidence-Based Nutrition (EBN) の理解が不可欠です。現代においてそれらの evidence は科学の手法を用いて得られるものであるから、科学の分野における世界共通語である英語で作成された学術文献の購読を通して研究倫理や科学的な思考法を学び、その論理の組み立てを体得します。

文献検索や学術文献の利用、ならびにプレゼンテーションは一種の技術であるため、それらを会得するには一定のトレーニングを行えばよいのであり、文献紹介を通してさまざまな栄養情報の中から evidence となるものを見分ける力を養い、プレゼンテーションの方法を習得します。

このようなトレーニングは、研究倫理基準を遵守し、卒業研究において自ら evidence を構築することにかならず役立ちます。

到達目標

1. 目的に応じた適切な英文学術文献を検索し、手に入れることができる。
2. 学術文献を購読し、内容を簡潔なプレゼンテーションを作成し紹介できる。

授業方法

各回1～2名がパワーポイント等を用いて卒業研究テーマと関連した学術文献を紹介する。発表者はもとより、参加者は事前に配付される文献や資料をよく理解しておくよう準備が必要です。参加者はそれに対し活発な議論を行うことによって互いに関連分野の理解を深める。事後学習として関連項目を食品化学、生化学、基礎栄養学、食品機能論で学んだ事項と結びつけておくこと。

月末には、卒業研究の中間報告を行い、議論を通して理解を深める。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：研究倫理基準の遵守文献の検索と紹介の方法
- 第2回 文献検索の実際
- 第3回 機器分析.
- 第4回 文献紹介と論議 1.
- 第5回 文献紹介と論議 2.
- 第6回 文献紹介と論議 3.
- 第7回 テーマ検討 1.
- 第8回 文献紹介と論議 4.
- 第9回 文献紹介と論議 5.
- 第10回 文献紹介と論議 6.
- 第11回 テーマ検討 2.
- 第12回 文献紹介と論議 7.
- 第13回 文献紹介と論議 8.
- 第14回 文献紹介と論議 9.
- 第15回 文献紹介と論議 10.
- 第16回 卒業研究の中間報告と論議
- 第17回 文献紹介と論議 11.
- 第18回 文献紹介と論議 12.
- 第19回 文献紹介と論議 13.
- 第20回 文献紹介と論議 14.
- 第21回 テーマ検討 3.
- 第22回 文献紹介と論議 15.
- 第23回 文献紹介と論議 16.

成績評価の方法

選択した文献の内容に関する理解の程度 (50%)、学問への積極性の程度 (50%)

履修にあたっての注意

学術文献は英文文献とし、卒業研究の遂行に伴って日常的に学術文献を読む習慣をつけてほしい。英文に慣れるには、たとえば好きな映画や小説などの原作、原書を読んでいくことによって長文に親しむのもよい方法です。

授業のねらい

体重管理に厳格な社会文化が大いに関与している治る病気である摂食障害（拒食症、過食症）及び世界中で流行しているダイエット行動の理解を通じて、近代人の認知的食行動についての理解を深める。

到達目標

体重管理に厳格な社会文化、摂食障害（拒食症、過食症）、ダイエット行動について理解し、認知的食行動についての理解を深めるとともに、大脳新皮質による認知機能の発達した現代人の行動的特徴について理解する。

授業方法

摂食障害（拒食症、過食症）及びダイエット行動についての文献を読み、プリントにまとめてわかりやすい発表を行う。ディスカッションを行なう。事前学習は、配布資料を読むことである。事後学習は授業でのディスカッションを通して資料の内容の理解を深めることである。

授業計画

- 第1回 研究倫理について
- 第2回 文献検索の方法について
- 第3回 文献検索の実施
- 第4回 論文の構造について
- 第5回 プレゼンテーションの方法について
- 第6回 文献発表と質疑応答 1
- 第7回 文献発表と質疑応答 2
- 第8回 文献発表と質疑応答 3
- 第9回 文献発表と質疑応答 4
- 第10回 文献発表についての反省と検討
- 第11回 プレゼンテーションについての反省と検討
- 第12回 文献発表と質疑応答 5
- 第13回 文献発表と質疑応答 6
- 第14回 文献発表と質疑応答 7
- 第15回 前期の文献発表とプレゼンテーションのまとめと後期の研究テーマのオリエンテーション
- 第16回 研究テーマの絞り込み
- 第17回 研究テーマに基づいたプレゼンテーションとディスカッション 1
- 第18回 研究テーマに基づいたプレゼンテーションとディスカッション 2
- 第19回 研究テーマに基づいたプレゼンテーションとディスカッション 3
- 第20回 研究テーマに基づいたプレゼンテーションとディスカッション 4
- 第21回 研究テーマに基づいたプレゼンテーションとディスカッション 5
- 第22回 研究テーマに基づいたプレゼンテーションとディスカッション 6
- 第23回 まとめ

成績評価の方法

成績評価は、演習への参加の積極性、発言の明瞭性、発言内容の正確性、発言内容の妥当性（100%）に基づいて行います。

履修にあたっての注意

ゼミ生には、栄養士、管理栄養士の卵としての自覚が必要です。

教科書・参考書に関する備考

資料・プリントを適宜配布する。

授業のねらい

卒業演習Ⅰに引き続き、卒業研究を進めるにあたって、論文の読み方、研究報告書の作成方法、発表方法などを学ぶ。

到達目標

- ・英語の学術論文を読んで、まとめることができる。
- ・わかりやすいプレゼンテーションができる。

授業方法

- ・卒業研究（植物性食品の抗酸化性など）に関係のある文献（主に英語）を読み、プリントにまとめて、わかりやすく発表する。
- ・卒業研究の中間報告も行う。
- ・ディスカッションを通して内容の理解を深める。
- ・事前学習は、文献（英語）を読み、訳して、まとめることである。
- ・事後学習は、文献内容を復習することである。

授業計画

- 第1回 演習内容の説明および研究倫理について
 第2回 文献検索(1)：各自で行う
 第3回 文献検索(2)：内容の検討および決定
 第4回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(1)
 第5回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(2)
 第6回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(3)
 第7回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(4)
 第8回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(5)
 第9回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(6)
 第10回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(7)
 第11回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(8)
 第12回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(9)
 第13回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(10)
 第14回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(11)
 第15回 文献発表（前期）：英語の文献を読み、発表する(12)
 第16回 卒業研究中間報告：パワーポイントを用いて発表し、ディスカッションする。(1)
 第17回 卒業研究中間報告：パワーポイントを用いて発表し、ディスカッションする。(2)
 第18回 卒業研究中間報告：パワーポイントを用いて発表し、ディスカッションする。(3)
 第19回 卒業研究中間報告：パワーポイントを用いて発表し、ディスカッションする。(4)
 第20回 卒業研究中間報告：パワーポイントを用いて発表し、ディスカッションする。(5)
 第21回 卒業研究中間報告：パワーポイントを用いて発表し、ディスカッションする。(6)
 第22回 卒業研究中間報告：パワーポイントを用いて発表し、ディスカッションする。(7)
 第23回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況（20%）、発表内容（80%）により評価する。

履修にあたっての注意

積極的な参加を望みます。

教科書・参考書に関する備考

参考書をその都度紹介します。

授業のねらい

栄養教育に関する研究の課題設定、研究方法、評価方法などについて学び、さらに栄養教育の実践で役立つ栄養学の知識、理解を深めることを目指します。

到達目標

1. 研究に必要な資料や専門分野の文献を検索することができる。
2. 資料をわかりやすくまとめることができる。
3. 相手に伝わるプレゼンテーションができる。
4. 発表者に質問をして、各自の理解を深めることができる。

授業方法

基本的に、受講者が作成した資料をもとに発表、討論を行います。

発表担当は、前期2回、後期1回の予定です。

発表に際して事前しっかりと調べて、レジュメを作成します（所要時間2-3時間程度）。

レジュメに関しては、個別に指導します。

各自の発表後に、全員からの質問に答えます。発表時に対応できなかった質問については調べて、後日説明をします（所要時間1時間程度）。各自の発表後に、教員より内容や方法論について次回のプレゼンテーションに役立つような助言をしますので、参考にしてプレゼンテーション力を身につけてください。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、研究倫理、研究課題の設定、報文の書き方など(1)
- 第2回 研究課題の設定、報文の書き方など(2)
- 第3回 各自の研究に関わる栄養統計学について
- 第4回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(1)
- 第5回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(2)
- 第6回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(3)
- 第7回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(4)
- 第8回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(5)
- 第9回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(6)
- 第10回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(7)
- 第11回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(8)
- 第12回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(9)
- 第13回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(10)
- 第14回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(11)
- 第15回 栄養学に関する資料、文献の検索、各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(12)
- 第16回 卒業研究に関する各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(1)
- 第17回 卒業研究に関する各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(2)
- 第18回 卒業研究に関する各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(3)
- 第19回 卒業研究に関する各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(4)
- 第20回 卒業研究に関する各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(5)
- 第21回 卒業研究に関する各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(6)
- 第22回 卒業研究に関する各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(7)
- 第23回 卒業研究に関する各自のプレゼンテーションおよびディスカッション(8)

成績評価の方法

到達目標1-3を測定する方法は、プレゼンテーションの方法と内容(30%)、レジュメの提出(20%)とします。到達目標4を測定する方法は、授業への参加態度(50%)とします。

履修にあたっての注意

資料の準備には、時間をかけ、早めの取組を心掛けてください。

授業のねらい

健康増進法、栄養士法などの法改正とともに、給食を取り巻く環境及び経済状況は変化しています。アウトソーシングが進み、給食経営の委託化や、新システムの導入など、給食の経営は大きな変革の時期を迎えています。これからの管理栄養士は利用者対象のアセスメントに始まる栄養管理とともに、マーケティングやシステム構築などの手法を取り入れた経営感覚を持つことが求められています。

そこで、1. フードビジネスの概要や動向について最新の文献等から学ぶ。2. “管理栄養士だからできるフードビジネス”を調査・研究する。の2点を目的とし、栄養管理をフードシステムの手法からアプローチします。

到達目標

- ・文献の検索方法がわかる。
- ・調査結果の解析ができる。
- ・研究課題をまとめることができる。

授業方法

演習形式で行います。各自のテーマを持ち寄り、学生と教員が共に学びあう双方型の授業を展開していきます。選択した論文では、各自その論文及び発表用資料を人数分印刷し準備してください。毎回の資料をまとめ、ファイルの作成をしてください。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション：「研究倫理」について
- 第2回 文献検索の方法（ネット、図書館の利用）
- 第3回 文献検索（地域の食、産業、農産物）
- 第4回 文献検索（調査法）
- 第5回 選択した論文の発表および討論(1)
- 第6回 選択した論文の発表および討論(2)
- 第7回 選択した論文の発表および討論(3)
- 第8回 選択した論文の発表および討論(4)
- 第9回 選択した論文の発表および討論(5)
- 第10回 論文作成の基礎知識(1)
- 第11回 論文作成の基礎知識(2)
- 第12回 アンケート調査等研究方法の検討：品質管理
- 第13回 アンケート調査等研究方法の検討：顧客満足度調査
- 第14回 調査実施・集計：地域の食材（野菜）に関すること
- 第15回 調査実施・集計：地域の食材（果物）に関すること
- 第16回 調査実施・集計：地域の食材（その他）に関すること
- 第17回 調査研究データ結果の発表と討論(1)
- 第18回 調査研究データ結果の発表と討論(2)
- 第19回 調査研究データ結果の発表と討論(3)
- 第20回 調査研究データ結果の発表と討論(4)
- 第21回 調査研究データ結果の発表と討論(5)
- 第22回 卒業研究の発表と討議
- 第23回 卒業研究の発表と討議

成績評価の方法

到達目標を測定する卒業論文の内容(50%)、選択した論文等のプレゼン力(30%)、討議内容および参画状況(20%)により評価する。

履修にあたっての注意

積極的に自分の課題を見出し、解決に向けて行動すること。

教科書・参考書に関する備考

適宜資料配布

授業のねらい

研究の進め方を学習し、自分の研究に関連した文献などの情報収集と利用、実験データのまとめと発表行い、最後に一つの論文として完成する。一年間の卒業研究を行うことで、これまで勉強してきた知識を総合的かつ有機的に関連させ、知識を生かした問題解決能力を育成する。

到達目標

自ら考え、先行論文や教員の指摘に従って研究を遂行でき、自ら行った研究をまとめ他者に分かりやすく伝えることができる。

授業方法

講義ではありませんので、随時個別あるいはテーマ毎に指導を行います。

授業計画

講義ではありませんので、随時任意に指導を行います。
現在のテーマです。

1. 赤ワイン熟成に働く乳酸菌の解析（生化学的、遺伝学的）
＜美味しい！ワインを作る研究・・・ワインも作る！ブドウも育てる！＞
2. ポリフェノール類を体に吸収しやすくする乳酸菌の探索
＜乳酸菌でもっと体によいポリフェノールを作ろう！＞
3. 植物由来乳酸菌から抗菌性物質（バクテリオシン）を見つけ出す
＜安全な食品を作るために乳酸菌を利用しよう＞
4. 石狩市内の植物などからワイン用酵母を探し出す！

これらの大きなテーマから、学生の数に合わせて個別の研究テーマを設定し、日々研究指導を行う。終了時には、研究発表、論文記述の指導を行い、研究報告のまとめを行う。

成績評価の方法

研究への取り組み態度（60%）と研究発表内容（40%）から判断します。

履修にあたっての注意

微生物実験が好きな人が望ましい。研究室には、原則毎日来て実験すること。日々実験及び論文の収集と精読に専念すること。

教科書・参考書に関する備考

過去の先輩達が残してくれた卒業論文や実験室にある実験書など。

授業のねらい

食品や生体組織に含まれる脂質成分、特にスフィンゴ脂質などの機能性脂質の分子種レベルでの分析と生体利用性の解明を目指す研究課題を中心にして卒業研究を進める。この科目を通して、機器分析の操作法や実験結果のとりまとめ方も習得する。

到達目標

期間内で行える研究課題を見つけ、その研究目的を実証・解決にするための生化学的な実験を行い、その成果を取りまとめて考察できることを目標とする。

授業方法

食品や動物臓器に含まれる脂質の分析を中心とした実験課題を共に考え、分析機器の扱いなどを伝授しながら卒業研究実験と研究成果のとりまとめを指導します。

授業計画

1～15. 食品脂質や生体脂質に関する一般的な分析法を習得するとともに、取り組む研究課題の背景や目的について、関連する文献を調査して理解を深める。
16～30. 身近な加工食品や食材に含まれる脂質成分の栄養的な特徴や機能性について実験を行う。その結果を先行研究の内容と比較して考察し、卒業研究報告を作成して発表する。

成績評価の方法

卒業研究への取り組み（80%）と研究成果内容（20%）による評価を行います。

履修にあたっての注意

化学実験を繰り返して続けることができる学生が履修することを望みます。

授業のねらい

思春期におけるスポーツ栄養や DOHaD (Developmental Origins of Health and Disease) に関するデータやエビデンスを理解し、それらをもとにした実践活動を行うことにより、科学的根拠に基づく栄養学 [evidence-based nutrition (EBN)] の基本を身につける。

到達目標

- ・生活活動調査の実践するための知識と技能を身につける。
- ・食事調査の実践するための知識と技能を身につける。
- ・栄養指導のためのプレゼンテーション能力を身につける。
- ・栄養・健康に関する情報をどのようにして得、評価するかを説明できる。
- ・科学的根拠に基づいた(スポーツ)栄養学 (evidence-based nutrition) 研究を実践するための知識と技能を身につける。

授業方法

ゼミ形式を主体として、栄養勉強会等による実践活動と発表の準備、質問票調査の実施、データ入力、結果及び考察を行う。

授業計画

1. 研究課題
 - (1)ジュニアサッカーチームの栄養教育
 - (2)高校野球部の栄養改善の支援栄養指導の実際
 - (3) DOHaD 理論にもとづく教育を通じた公衆衛生活動
2. 研究内容
 - ・生活活動調査の実践
 - ・食事調査の実践
 - ・DOHaD 理解についての質問票調査の実施
 - ・科学的根拠に基づいた(スポーツ)栄養学 (evidence-based nutrition) の実践
 - ・栄養・健康に関する情報をどのようにして得、評価するかを学ぶ。
 - ・プレゼンテーション能力を身につける。
 - ・栄養・健康に関する情報をどのように伝えるかを学ぶ。
 - ・食事に関する勉強会でのプレゼンテーションの実践(選手、保護者等とのコミュニケーション)
 - ・チームワークによって研究をまとめる。
 - ・調査結果をまとめ、ディスカッションしながら、分析・考察していく過程を学ぶ。
 - ・研究倫理について理解し、実践する。

成績評価の方法

討論・発表(50%)と論文作製への参加状況(50%)によって評価します。
尚、12月下旬に開催される卒業研究発表会への参加(開始から終了まで)は単位習得の必須条件です。

履修にあたっての注意

- 本研究は、以下のような学生を対象とします。
- ・公衆栄養活動の実践を体験したい人
 - ・深く学び、究めることが好きな人
 - ・チームでひとつの目標に向かってがんばれる人
 - ・将来に向けて、栄養に関する科学的情報を得る能力を身につけたい人
 - ・栄養に関する正しい情報を、人々に広く伝える能力を身につけたい人

授業のねらい

卒業研究報文作成を目指して、アンケート調査を計画し、実施、解析した上、課題を探ることを目標としている。卒業研究を通して、質問紙調査方法を学ぶことや調理科学的実験、官能検査などの手法も取り入れて考察し、まとめていく力を養うことをねらいとする。テーマについては、北海道産食材の調理科学的特性を学び、調理学に関する知識や調理科学実験の技能を身につけてもらうことを目的とする。

到達目標

到達目標1：調理学に関する知識を身につけ、それを応用して調理科学実験ならびに調理に関する調査研究を理解することができる。

到達目標2：調査結果を取り上げながら、プレゼンテーションを行い、明確に説明し、討議することができる。

到達目標3：卒業研究報文を作成できる。

授業方法

原則として、1回につき1テーマを取り上げながら、講義と演習形式により、進めていく。

各自、卒業研究関連文献紹介を行うこととして、内容をまとめた要旨の作成、発表、討議を行う。

発表者はプレゼンテーションの方法や役割分担によって討議をまとめていく力を養う。

(ゲストスピーカーにより、演習で学ぶ) 受講にあたって、事前に各自レジュメを作成し、人数分印刷して準備しておくことを課題とする(所要時間60分程度)。事後学習としてレポートを作成する(所要時間60分程度)。1～5講読、6～15講義、16研究倫理、17～20実験、21～27演習、28～30卒業研究報文作成。レポートは、演習内で口頭により、解説し、解説資料を配付する。

授業計画

- 1 文献講読(共通1) 過年度卒業報文 講読
- 2 文献講読(共通2) 文献検索
- 3 文献講読(各自1) 調理学に関する文献 講読
- 4 文献講読(各自2) アンケート調査について文献講読
- 5 文献講読(各自3) 報告書
- 6 調理学に関する調査：質問紙調査法について
- 7 調査方法について
- 8 調査計画について
- 9 調査実施・集計・解析について
- 10 調理科学：官能検査法について(SD法)
- 11 調理科学：官能検査法について(2点比較法)
- 12 調理科学：官能検査法について(3点比較法)
- 13 調理科学：官能検査法について(1対比較法)
- 14 調理科学：官能検査法について(配偶法)
- 15 調理科学：官能検査法について(順位法・評点法)
- 16 「研究倫理」について－「藤女子大学研究倫理基準」の内容を知ろう
- 17 調理科学実験：調理と味・香りに関する実験
- 18 調理科学実験：食品の色調測定
- 19 調理科学実験：食品の物性測定
- 20 調理科学実験：調理学に関する基礎実験
- 21 調査の実施：演習
- 22 官能検査の実施：演習
- 23 調査の集計・解析：演習
- 24 調査結果を活かした資料の作成(各自1) アンケート調査結果
- 25 調査結果を活かした資料の作成(各自2) 官能検査結果
- 26 プレゼンテーション(各自1) 学内試食会結果
- 27 プレゼンテーション(各自2) 地区分析結果
- 28 卒業研究報文の作成1 アンケート調査結果
- 29 卒業研究報文の作成2 調理科学実験結果
- 30 卒業研究報文の作成3 官能検査結果

成績評価の方法

到達目標1を測定する研究に取り組むレジュメの作成・発表(30%)、到達目標2を測定する卒業研究に関するプレゼンテーション・授業への参加状況(30%)、到達目標3を測定する卒業報文作成(40%)により、評価する。

履修にあたっての注意

卒論発表会には必ず出席すること。レジュメやレポートの内容について、しっかりと学習した上で授業に参加すること。

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。

参考書：各自関連教科書、学術雑誌(日本調理科学会誌)を授業内で指示する。

授業のねらい

地域住民における健康・栄養課題に着目した調査研究を通じて、将来、調査研究に取り組む際に必要となる基礎的な技能を習得する。

到達目標

1. 調査研究の計画立案、実施方法について説明できる。
2. 卒業論文を作成することができる。

授業方法

1. 地域住民を対象として、栄養摂取等に関するフィールド調査を実施する。
2. フィールド調査で得られたデータをもとに、地域住民の健康増進を図るためにどのような公衆栄養活動が必要かについて考察する。

授業計画

研究テーマ（調査フィールド：石狩市）

- ①食物へのアクセス環境に関する調査
- ②食事と生活習慣病に関する調査
- ③栄養教育の実施および評価

- ・オリエンテーション、研究倫理について
- ・研究計画書の作成
- ・関連文献のレビュー、資料収集と整理
- ・フィールド調査
- ・栄養教育の実施
- ・データ整理と考察
- ・卒業論文作成、発表資料作成

成績評価の方法

成績は、研究への取組み状況（50%）、卒業論文（50%）で評価する。

履修にあたっての注意

調査研究の実施、卒業論文作成には、根気よく取組む姿勢が必要となる。また、自ら考え、行動する態度が求められる。

授業のねらい

食生活や健康に関連するさまざまな社会問題に焦点をあて、解決するための方策を考え、実行し、評価できる能力を身につけることをめざす。

到達目標

1. 研究テーマを設定することができる。
2. 研究計画をたて、それに沿った調査・介入を行うことができる。
3. 研究成果を卒業論文にまとめることができる。

授業方法

テーマごとにフィールドワーク、データの解析、ディスカッションなどを行い、卒業論文を完成させる。

授業計画

1. おもな研究テーマ
 - (1)麻生地域におけるコミュニティカフェの役割と可能性に関する研究
 - (2)ひとり親家庭のこどもに対する学習および食生活支援に関する研究
2. 「活動および研究内容」
 - ・学習支援団体への参加（学習支援、食事支援、ミーティングへの参加など）
 - ・コミュニティカフェの運営（調査等含む）
 - ・本学または施設等における料理教室の企画・開催、ボランティア活動など
 - ・食事調査の実施および食習慣等に関するインタビュー、アンケート調査
 - ・各地の商店街調査、インタビューなど
 - ・栄養教育の際に効果的な媒体の作成
 - ・栄養教育またはイベントに必要な献立の作成と試作
 - ・研究のまとめ（論文作成）と発表

成績評価の方法

到達目標1、2については研究への参加意欲と積極性（50%）で、到達目標3については卒業論文（50%）において評価する。

履修にあたっての注意

学外のさまざまな施設での活動が多くなるため、マナーを十分まもり調査・研究にあたること。

64707

卒業研究

担当教員：田中洋子

6単位 通年

授業のねらい

卒業研究を通じて、Evidenc-Based Nutrition (EBN) に根ざした管理栄養士としての専門性を高める能力を養うことをめざす。

到達目標

研究を通して栄養評価技法、医療コミュニケーションなどを学び実践的スキルを獲得し、臨床現場で管理栄養士としての専門性を発揮できる能力を修得する。

授業方法

演習および研究フィールドでの調査

授業計画

研究内容テーマ

「慢性腎不全患者及び血液透析患者の栄養障害に関する研究」

「入院患者における栄養障害に関する研究」

- ・医療施設の慢性腎不全患者及び血液透析患者の患者背景、身体計測、体組成、栄養状態、摂取栄養量を調査する。
- ・データの解析、まとめ、考察
- ・プレゼンテーション資料作成
- ・研究成果のまとめ（論文作成）

成績評価の方法

研究への取り組み態度（50%）

論文の完成度評価（50%）

履修にあたっての注意

医療従事者としての責務とマナーに留意し研究に臨むこと。

教科書・参考書に関する備考

参考書などその都度紹介します。

64708

卒業研究

担当教員：中川幸恵

6単位 通年

授業のねらい

卒業研究を通じて、Evidenc-Based Nutrition (EBN) に根ざした管理栄養士としての専門性を高める能力を養うことをめざす。

到達目標

研究を通して栄養評価技法、医療コミュニケーションなどを学び実践的スキルを獲得し、臨床現場で管理栄養士としての専門性を発揮できる能力を修得する。

授業方法

演習および研究フィールドでの調査

授業計画

研究内容テーマ

「担がん患者の味覚変化の傾向と解析に基づく栄養管理効果－食事摂取量と栄養状態の検討」に関する研究
「食事に関するアンケート調査結果からの『患者が望む病院食』の検討」に関する研究

- ・ データの解析、まとめ、考察
- ・ プレゼンテーション資料作成
- ・ 研究成果のまとめ（論文作成）

成績評価の方法

研究への取り組み態度（50%）
論文の完成度評価（50%）

履修にあたっての注意

医療従事者としての責務とマナーに留意し研究に臨むこと。

教科書・参考書に関する備考

参考書などその都度紹介します。

授業のねらい

管理栄養士には Evidence-Based Nutrition (EBN) の理解が不可欠ですが、その evidence がどのようにして構築されているのかを体験的に理解することが卒業研究のねらいです。

卒業研究では創造的な研究テーマに参画し、研究倫理や実験手技の基本を確認しながら、科学的方法論を用いてデータを取得し、その解析に取り組むことによって自ら新しい知見に到達します。

その結果、その研究が現代の栄養学における新たな evidence を提供することにつながれば素晴らしいことです。

到達目標

1. 研究テーマに関して、研究倫理規準に則して何を研究したのか、どのような原理に基づいて、どのように行ったのか、その結果得られたものは何かなど概要を説明できる
2. これらのことを簡潔にまとめた科学論文を作成できる

授業方法

2018年度は、研究倫理や実験動物の取り扱い技術を学んだ後、ペポカボチャ種子などを研究材料とし、動物や培養細胞を用いた脂質代謝研究を中心に、HPLC 定量法など機器分析の取扱を学び食品機能学的実験を実施します。

授業計画

- 1 研究テーマと研究方法の概要、研究倫理規準の理解
- 2～8 実験手技の習得、基礎実験
- 9～15 データの取得
- 16～22 データの解析
- 23～30 解析結果のまとめと研究発表、卒業研究論文作成

成績評価の方法

提出された卒業論文 (80%)、卒業研究への取り組み方 (20%)

授業のねらい

研究テーマを卒業論文に結実させる。その過程において、自己管理能力と創造的思考力を身につける。

到達目標

- (1)卒業研究で採りあげたテーマについて研究を実施する。
- (2)研究成果について効果的なプレゼンテーションを実施する。
- (3)研究成果を卒業論文としてまとめる。

授業方法

摂食障害（拒食症、過食症）やダイエット行動には、体重管理に厳格な社会文化が大いに関与している。これらの認知的食行動の特徴の理解を深めることで、食育や栄養カウンセリングの方法が充実したものになる。その方法として認知行動療法による対処方法を身につけ、それを部分的に使う。また自らの認知をベストにするための self help に役立てる。これらを念頭に置いて授業を進める。

授業計画

- 1 研究テーマの決定（5月）：各自が希望する研究テーマを持ち寄り、担当教員との話し合いで最終決定します。
- 2 研究の実施（5月－10月）：研究活動の実施
- 3 研究結果のまとめ（10月－11月）：研究結果の図表化
- 4 論文の作成（11月－12月）：研究結果を文章として表現
- 5 研究発表（12月）：研究成果を学科内の発表会にて発表

成績評価の方法

研究過程への参加の積極性評価（50%）と完成した卒業論文の完成度評価（50%）。

履修にあたっての注意

栄養士、管理栄養士の卵としての自覚が必要。

教科書・参考書に関する備考

資料・プリントを適宜配布する。

授業のねらい

この卒業研究を通じて、研究の進め方、実験計画の立て方、分析機器の取り扱い方法、データの整理、実験結果のまとめ方を習得する。

到達目標

卒業論文を完成出来る。

授業方法

近年、生体内において活性酸素種が脂質過酸化などの悪影響を引き起こし、さまざまな病因や老化などに関与していることが明らかになってきている。このような生体内での活性酸素による障害を防ぐという期待から、食品中に含まれる抗酸化物質が注目されている。そこで、この研究では、植物性食品を対象に抗酸化物質を探索しながら、評価法や単離精製方法などを習得する。また、抗酸化物質の食品加工への利用も検討する。

授業計画

- ・文献の収集
- ・基礎（予備）実験
- ・本実験
- ・データの整理
- ・章構成
- ・報文作成など

成績評価の方法

研究への取り組み（50%）と卒業論文（50%）で評価する。

履修にあたっての注意

実験を始めたら一定期間連続的に行う必要があります。また、時間的にも長時間を要することもありますので、原則として、毎日研究室に来る心構えが必要です。

教科書・参考書に関する備考

参考書などをその都度紹介します。

授業のねらい

卒業研究を通して、問題を発見し解決するための能力を養うことを目指します。

到達目標

1. 研究テーマに関して、アセスメント、計画、実施、評価を行い、その結果をプレゼンテーションすることができる。
2. 成果を報文にまとめることができる。

授業方法

調査研究では、施設（保育園や小学校）での学外実習を通して、テーマに沿って調査を行います。
実験研究では、生活習慣病の予防につながる食生活の提案や商品開発を行い、血糖値を測定することで、評価を行います。

授業計画

オリエンテーションでは、各自の研究テーマを決め、研究倫理についての説明を行います。

研究テーマ

「保育園における食育支援活動」

「望ましい食生活の実践に向けた食育活動－血糖値の測定による評価－」

「保育園における食育支援活動」

- * 保育士、保護者を対象とした食育に関する調査
- * 園児とその保護者を対象とした食育支援活動
- * 保育園給食の栄養管理

「望ましい食生活の実践に向けた食育活動－血糖値の測定による評価－」

- * 健康メニュー、加工食品の開発
- * 日本型食生活の評価
- * 食べ合わせや食べ方等による血糖値の変化を調査する

成績評価の方法

到達目標 1 の測定方法は、研究への取り組み姿勢（50%）

到達目標 2 の測定方法は、卒業報文の提出とその内容（50%）とします。

授業のねらい

地域に根ざしたコミュニケーション・マーケティングについて調査・研究する。
 “管理栄養士だからできるフードビジネス”をフードシステムの手法からアプローチする。

到達目標

テーマごとに研究し、その成果を卒業論文としてまとめる。

授業方法

それぞれ採択したテーマに沿い、下記項目の実施より体験及び知見を深め、フィールドワーク・演習などを行います。

授業計画

研究テーマ

- ・「乾燥加工法を用いた農産物」の調理加工および広報活動
- ・6次化推進としてのマーケティング

それぞれのテーマごとにPDCAサイクルに則り、おこなう

1 オリエンテーション（起業塾等への参加）

2～20 各自体験・調査、

21～23 地域のイベントへ参加・調査

24～30 調査集計・解析 論文のまとめ

成績評価の方法

到達目標を測定する卒業論文の内容(50%)、選択した論文等のプレゼン力(30%)、討議内容および参画状況(20%)により評価する。

履修にあたっての注意

地域の「食」を生業としている方々とのかかわりが多くなります。社会的ルールを守り、積極的かつ誠実な態度で臨んでください。

教科書・参考書に関する備考

適宜資料配布

保育学科専門科目

授業のねらい

近代教育は 17～18 世紀の西欧にはじまる、固有の歴史的背景のなかで成立した。西欧に発したこの近代教育は、世界を席卷することになるが、それは〈教育〉の様々にあり得た可能性のうちのひとつでしかない。今後、近代教育を克服し、改革していくにあたって、〈教育〉の新しい形を模索していくことが求められる。まずは近代教育の問題がどこにあるかを知り、学校文化の自明性を相対化し、しなやかで、強靱な教師の資質・能力を獲得することをめざす。

到達目標

- 本講義は〈教育（education）〉に関する理念を歴史的、思想的展開を講述することをテーマとする。
- (1) 〈教育〉理念の展開について把握し、現行法における学習権保障について知見を得る。
 - (2) 近代学校教育成立について歴史的知見を得た上で、学校教育を通して子どもの学びをいかに支援し、子どもの発達を助長する援助が可能か検討する。
 - (3) 学校文化の特性について自覚し、将来、教壇に立つことを想定して、自らの教師の〈芯〉をどのように見出せるか、言語化できるようになる。

授業方法

講義形式でおこなう。なお、理解を深めるために、配布するプリント等での予習・復習を行った上で受講すること。

授業計画

- 第 1 回 ガイダンス（本講義で扱われる諸テーマについて概観する）
- 第 2 回 憲法・教育基本法体制からみた教育を受ける権利と理念
- 第 3 回 〈教育〉の字源—甲骨文字に遡る〈教〉と〈育〉の由来
- 第 4 回 〈education〉の語源—education の起源は能力を引き出すことか？
- 第 5 回 近代学校空間の変遷史(1)—寺子屋から明治維新の近代学校まで
- 第 6 回 近代学校空間の変遷史(2)—西欧における—斉教授の誕生とその功罪
- 第 7 回 学校体罰の歴史とその克服—ジョン・ロックの体罰論とその迷宮
- 第 8 回 学校における声と文字(1)—学校の起源としての文字文化
- 第 9 回 学校における声と文字(2)—声の文化に生きる人々と学びの声の復権
- 第 10 回 近代家族と子ども観の変遷(1)—グリム童話「白雪姫」の書き換え
- 第 11 回 近代家族と子ども観の変遷(2)—〈子ども〉の発見と近代情愛家族の成立
- 第 12 回 〈子ども〉の発見の歴史—ジャン・ジャック・ルソー『エミール』
- 第 13 回 〈大人〉の発見と教師の特異性—一次世代育成を一手に担う〈大人〉
- 第 14 回 〈教師=大人〉の変容のために—子ども=未熟、大人=完成図式を超えて
- 第 15 回 講義のまとめと確認テスト

成績評価の方法

授業時に実施する確認テスト（40%）及びコメントペーパーによる評価（20%）
第 15 回講義終了後に実施する最終試験（40%）

授業のねらい

この講義は、保育士課程の「保育の本質・目的に関する科目」であり、同時に幼稚園教職課程の「教育の基礎理論に関する科目」、本学科専門必修科目でもある。保育学の基礎的事項を学ぶと同時に、様々な角度から「保育」をみつめ、保育の本質や保育職の専門性、人間とは何かという根本的な問いを共に考える時とする。

到達目標

- 1 子どもの発達と保育の意義を理解する。
- 2 保育の基本・保育内容と方法の基本的原理を理解する。
- 3 保育の思想と歴史の変遷を理解する。
- 4 保育の動向と今後の課題を考察する。

授業方法

プリントやDVD、教科書等を用いた講義形式で行う。講義は主に次の3領域となる。(1)保育の意義や本質を理解するための発達の学び、(2)保育の今後を考察するための保育制度や歴史的学習、(3)保育方法の基本的原理。講義中に、目標の到達度をはかる課題を実施し、今後の学習の指針とする。

また、事前・事後学習として各種メディアに目を通し、子どもの発達と子どもを取り巻く環境に関するレポート提出を課す。

授業計画

- 第1回 はじめに－保育を学ぶとは？子どもとは？－
講義の概要と成績評価・試験・レポート・講義外学習について
- 第2回 人間発達の独自性－動物との比較・共通点と相違点－
- 第3回 人間発達の独自性と保育の意義－可能性とは？－
- 第4回 成長と発達課題－育てる・育てられることについて考える－
- 第5回 保育制度と保育の動向－保育の法的基盤と現状－
- 第6回 保育思想と欧米の保育史(1)－歴史を学ぶ意義、古代－
- 第7回 保育思想と欧米の保育史(2)－中世～近代「子どもの発見」エラスムス、コメニウスの教育観－
- 第8回 保育思想と欧米の保育史(3)－児童中心主義とフレーベル、ルソー、ペスタロッチの子ども観－
- 第9回 保育思想と欧米の保育史(4)－近代以降、産業革命と保育施設、オーベルラン、オーエンの教育観－
- 第10回 保育思想と欧米の保育史(5)－新教育から現代へ、モンテッソリー、デューイ、シュタイナーの教育観及び現代の多様な保育展開－
- 第11回 保育思想と日本の保育史－明治以前から現代へ－
- 第12回 保育内容と保育方法の基本原則－保育の基本と子ども理解－
- 第13回 保育現場の課題と保育の質－保育を見るまなざし、労働としての保育、そして・・・－
- 第14回 今後の保育と保育の本質を考える－歴史・基本原則を振り返り、今後を展望する－
- 第15回 おわりに－あらためて保育と子どもについて考える－
到達目標に対する評価と課題、今後の学習に向けて

成績評価の方法

到達度を測定する課題とその後の自己課題評価(70%)により到達目標2、3を、学期末に提出するレポート(30%)により到達目標1、4を評価する。

履修にあたっての注意

講義の他に、事前・事後学習として子どもや保育に関するニュース等各種メディアに目を通し、子どもの発達と子どもを取り巻く環境に関して考える習慣をつけること。

授業計画は、社会状況や履修者の興味・関心によって実施順を入れ替える場合がある。

教科書

子どもと保育総合研究所代表森上史朗監修『最新保育資料集 2018』(ミネルヴァ書房、2018、ISBN：978-4-7679-0440-59784623075133)

吾田富士子編『保育者・教育者のための 保育原理・初等教育原理 (仮題)』(八千代出版、2018、発行予定)

教科書・参考書に関する備考

その他、必要に応じて資料を配布します。

授業のねらい

発達心理学 I は、人間の発達（特に幼児期・児童期までの発達）を学ぶことを目的とした授業です。保育者になるには、子どもがあることがらをどのように理解しているのか、何に興味があるのか、何ができるのかなど、子どもの発達段階を把握することが必要です。さらに、自分の担当している子どもがどのような発達段階にあるかだけでなく、子どものこれまでの発達過程やこれからの発達過程を理解しておくことも求められます。この授業では、人間の認知・記憶・社会性などの側面を取り上げ、それらの発達について学ぶことで、子どもの発達について理解を深めます。

到達目標

1. 発達心理学に関する基本的な知識を身につけること
2. 認知・記憶・社会性に関する実験例や行動例について、心理学用語を用いて説明できること
3. 授業で取り上げた内容と自分の体験を結び付けて考えることができること

授業方法

1～4回の授業で1つのトピックを取り上げ、トピックにまつわる実験例の紹介・理論の説明などを行いながら、授業を進めていきます。

授業前には、授業内容に関することがらについて自分の経験を振り返る調べる・自分の考えをまとめる・資料を読む・資料を探すなどの予習課題に取り組んでください。授業後は、パソコンを用いて授業内容をまとめた穴埋め式のノートを作成し、授業内容を復習してください。また、穴埋め式のノートには、その日の授業の感想や考えたことなども盛り込むようにしましょう。予習・復習に必要な時間の目安は、あわせて2～3時間です。なお、予習課題の発表・予習課題と復習課題の提出は、ポータルサイトを使用します。

テスト実施後、模範解答の確認と授業内容のまとめを行います。自分の理解度を確認するようにしてください。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：授業内容の説明・授業の進め方と評価の方法についての確認
- 第2回 発達のとらえ方：発達心理学で用いられる研究方法・生涯発達・さまざまな発達の側面
- 第3回 発達の要因：遺伝説・環境説・輻輳説・相互作用説
- 第4回 身体と言語の発達：人間の身体発達の特徴・言語の獲得
- 第5回 認知の発達(1)：乳児の視覚・味覚・嗅覚・感覚間協応
- 第6回 認知の発達(2)：自己認知・対人認知・心の理論
- 第7回 認知の発達(3)：ピアジェの発達段階説(1)
- 第8回 認知の発達(4)：ピアジェの発達段階説(2)
- 第9回 記憶と概念の発達(1)：幼児期の記憶・記憶能力
- 第10回 記憶と概念の発達(2)：概念の水準・子どもの概念の理解
- 第11回 感情の発達：感情の種類と分化・感情が生じる仕組み・感情表出とその理解
- 第12回 社会性の発達(1)：遊びの分類・遊びの中で起こること
- 第13回 社会性の発達(2)：友人関係の発達
- 第14回 幼児期以降の発達：エリクソン・ハヴィガーストの発達段階説
- 第15回 まとめとテスト

成績評価の方法

到達目標 1・2の達成度を測定するテスト（1回：90%）、到達目標 1・2・3の達成度を測定する予習・復習への取り組み（10%）によって評価します。

履修にあたっての注意

特になし。

教科書・参考書に関する備考

参考となる書籍・ホームページは、ポータルサイトを通して紹介します。

参考書

無藤隆・大坪治彦・岡本祐子『よくわかる発達心理学 第2版』（ミネルヴァ書房、2004、ISBN：9784623053797）
内田伸子『よくわかる乳幼児心理学』（ミネルヴァ書房、2008、ISBN：9784623050000）
柏木恵子『子どもも育つ おとなも育つ 発達の心理学』（萌文書林、2012、ISBN：9784893471765）

授業のねらい

この授業では、障害そのものについて考えることから始め、次に特別支援教育の意義とシステムについて、さらに特別支援教育の対象となる幼児児童生徒の実態とその教育的対応について、理解を深めることをねらいとする。

到達目標

1. 障害について基本的事項を理解し、問題意識を持って考えることができる。
2. 特別支援教育の意義・基本的事項について理解することができる。
3. 特別支援教育の対象となる幼児児童生徒の実態とその教育的対応について理解することができる。

授業方法

講義形式で行う。

授業前は、授業計画に基づいて各自予習をすること（所要時間 30 分程度）。

毎回の授業の最後に小レポートを課し、これを授業への参加状況として評価する。

授業後は、配布したプリントについて復習し、理解を深めること（所要時間 30 分程度）。

小レポートでの質問等については、次回の授業で解説する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
障害とは（障害観とその変遷、ICIDH、ICF）
- 第2回 障害児教育の歴史と制度
- 第3回 特殊教育から特別支援教育への転換
- 第4回 特別支援教育の実際（知的障害）
- 第5回 特別支援教育の実際（自閉症スペクトラム障害）
- 第6回 特別支援教育の実際（高機能自閉症、アスペルガー症候群）
- 第7回 特別支援教育の実際（学習障害、注意欠陥多動性障害）
- 第8回 中間のまとめ
- 第9回 特別支援教育の実際（肢体不自由）
- 第10回 特別支援教育の実際（重症心身障害）
- 第11回 特別支援教育の実際（視覚障害）
- 第12回 特別支援教育の実際（聴覚障害、言語障害）
- 第13回 特別支援教育の実際（病弱、てんかん）
- 第14回 特別支援教育の実際（ライフステージに応じた教育）
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 に関する授業への参加状況（50%）、到達目標 2・3 に関する試験（50%）、により評価する。

履修にあたっての注意

必修科目です。

教科書・参考書に関する備考

教科書なし。プリントを配布します。
参考書は、講義の中で随時紹介します。

授業のねらい

本講義は「知的障害（知的発達障害）」の特性に関する知識を身につけることで、障害を持つ子供を理解するための基盤とすることをねらいとします。また、この知識に基づいた発達や教育における支援について概要を学びます。また、支援の計画を立てる際に、具体的な発達のアセスメントに基づいた適切な手だてを検討できるようになることを目指します。

到達目標

1. 知的障害の特性と教育的支援の基本事項を理解する。
2. 知的障害の特性を踏まえて、生活場面や教育場面における支援方法を考案することができる。

授業方法

講義形式で進める。

事前学習として、講義中に提示する教科書の該当箇所について読むこと（4～8 p、所要時間 45 分程度）。講義は既読であることを前提に進めます。事後学習として、講義中に提示されたキーワードについて、自分なりのまとめを作成すること（設題 1～2 問、所要時間 45 分程度）。また、発展的な調査を行うことも期待します。これらのまとめについては、学期末にレポートとしての提出をし、成績評価の対象とします。

毎回の課題については、授業内で口頭で解説し、解説資料を配布します。

レポートを通した質問事項についても同様とします。個別の回答・各回のレポート返却は行いませんので、必要に応じて各自でコピーを保存してください。

中間試験、期末試験に関しては、採点后に答案を返却し、解答例・解説資料を配布します。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 知的障害の定義および発達の特性(1)
- 第3回 そもそも「知的能力」とは何か
- 第4回 「特別なニーズに対応する」教育とはどういうことか
—認知心理学的な「記憶」概念から検討する—
- 第5回 知的障害、および障害は「改善」「治療」すべきものか
—遺伝的多様性の観点から検討する—
- 第6回 知的障害に関連するその他の障害
- 第7回 知的障害の定義および発達の特性(2)
—ここまでの講義を踏まえた再検討—
- 第8回 特殊教育と特別支援教育
- 第9回 知的障害を持つ人の教育をめぐる法律とその運用に関する諸問題
- 第10回 特別なニーズに対応する教育の一例（言語）
- 第11回 アセスメントに基づく教育方法の検討(1)
- 第12回 アセスメントに基づく教育方法の検討(2)
- 第13回 支援の継続性と支援の場に関する問題について
- 第14回 包括的、多角的支援の重要性（きょうだい、家庭、地域）
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 を測定する講義内での中間試験（20%）、期末試験（30%）、到達目標 2 を測定するレポート（30%）、および発表・発言・授業のまとめに関するレポート提出による授業への参加状況（20%）によって評価します。

履修にあたっての注意

特別支援学校教諭免許取得の必修科目です。

教科書

有馬正高『知的障害のことがよくわかる本』（講談社、2007、ISBN：978-4062594165）

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてプリントの配布を行います。

参考ホームページ

文部科学省：知的障害教育 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/004/003.htm（このページに限らず、文部科学省が提供する情報は講義中にも提示します。）

授業のねらい

この授業は、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に記述されている内容をベースに、事例や実践を交えながら幼稚園・保育所で展開されている保育は、どのような根拠のもとに行われているのかを理解することを目的として行う。また、各要領・指針に示されている5領域の保育内容を意識した教材研究を実際に行うことで、理論と実践を結びつけ、最終的には保育内容を総合的にとらえることができることを目指す。

到達目標

- 1、遊びを通しての総合的な指導の意義と教師の役割を説明することができる
- 2、保育内容5領域のねらい及び内容の概要を説明することができる
- 3、保育内容（5領域）のねらいを意識した教材研究と保育内容の立案ができる
- 4、模擬保育を通して、ねらい及び内容に沿って総合的に指導する力と保育を改善する視点を身につけることができる

授業方法

この授業は演習科目であるため、グループワークや発表などを中心に行っていく。前半では幼稚園教育の基本や5領域のねらいと内容、指導計画の基本的な考え方を学ぶ。後半では前半での学びを基盤として、教材研究、指導計画の立案と模擬保育を行い、幼児教育の基本的な考え方を実践的に理解していく。なお、各授業ではビデオや写真などの視聴覚教材の活用や具体的な事例を示し、学生が幼児の姿や幼稚園での教育を具体的にイメージしながら理解できるようにする。

授業の最後に次回までに準備してくる事前学習課題（30分程度）を課し、その課題を用いながら、毎回の授業を展開していく。また、授業後には配布プリントやノートを参考にして授業内容を復習しておくことを求める（30分程度）。なお、毎回の課題は簡単なコメントをつけて次回に返却する。レポート課題および提出作品は、採点后にコメントをつけて返却する。

授業計画

- 第1回 幼児教育の基本とは—幼稚園教育要領・保育所保育指針 第一章総則から読み取る
- 第2回 遊びを通じた総合的な指導とは
- 第3回 幼児教育と子ども理解
- 第4回 保育内容5領域のねらいと内容
- 第5回 乳幼児の発達と指導計画
- 第6回 保育における評価
- 第7回 乳幼児の発達に即した教材研究(1)絵本やお話し
- 第8回 乳幼児の発達に即した教材研究(2)手遊びと簡単なゲーム
- 第9回 乳幼児の発達に即した教材研究(3)製作
- 第10回 5領域の内容を基盤とした遊びの指導案立案(1)グループワークによる指導案立案
- 第11回 5領域の内容を基盤とした遊びの指導案立案(2)指導計画の分かち合い
- 第12回 模擬保育(1)ゲームや身体を使った遊び
- 第13回 模擬保育(2)製作
- 第14回 模擬保育のふりかえり
- 第15回 現代社会と幼児教育 幼小接続の視点から

成績評価の方法

到達目標1と2を測定するレポートのルーブリック評価（50%）到達目標3を測定する授業内で作成する指導案（20%）、到達目標4を測定する模擬保育ふりかえり小レポート（30%）で評価する。

履修にあたっての注意

意欲的に授業に参加することを望む。遅刻や欠席のないように。

教科書・参考書に関する備考

教科書：なし
適宜、プリントを配布し、それにしたがって授業を進める。

授業のねらい

幼児期における豊かな感受性の芽生えと育成のために、音楽表現活動は非常に大きな役割を担っている。この時期に音楽の楽しみを感知し愛好する心を養い、情操豊かに成長する礎となるような音楽表現活動を行えるよう、保育者にとって、自身の音楽表現の資質の向上と充実は不可欠である。そのために保育者は音と楽譜の基本的ルールである「楽典」を学び、それを実践で生かすために音感・読譜を学習する「ソルフェージュ」を学ぶ必要がある。また現場で使う童謡も加えて、音楽表現活動に直接役立たせることを目指す。

到達目標

「楽典」や「ソルフェージュ」を学ぶことで、読譜能力を養い高め、楽譜から曲の音楽的内容を察知し把握できるようになる。音楽を表現するための基礎的知識と基礎的能力を身につける。それらが豊かな音楽表現に発展することを可能にする。

授業方法

授業では「楽典」を中心に、「ソルフェージュ」、「歌唱」も行ないます。「楽典」は下記の内容を学び、「ソルフェージュ」は「楽典」の進度に合わせてコールユーブンゲンや伴奏付新曲また童謡等も扱い、随時多様なトレーニングを行ないます。なお、配布されたプリントを用いて復習を行い、理解を深めておくこと。

授業計画

- 第1回 楽典：五線と音部記号・音名と変化記号 ソルフェージュ：2度の音程（コールユーブンゲン）
- 第2回 楽典：音符と休符について ソルフェージュ：2度の音程とリズム（コールユーブンゲン・新曲視唱）
- 第3回 楽典：拍子について ソルフェージュ：3度の音程（新曲視唱）
- 第4回 楽典：音程（幹音の音程） ソルフェージュ：3度の音程と付点（新曲視唱）
- 第5回 楽典：音程（派生音を含む音程） ソルフェージュ：3度の音程とシンコペーション（コールユーブンゲン）
- 第6回 楽典：音程（復習） ソルフェージュ：4度の音程（コールユーブンゲン）
- 第7回 楽典：音階（長音階） ソルフェージュ：4度の音程（新曲視唱）
- 第8回 楽典：音階（短音階） ソルフェージュ：短調（新曲視唱）
- 第9回 楽典：音階（近親調） ソルフェージュ：複合拍子（童謡）
- 第10回 楽典：音階（移調） ソルフェージュ：複合拍子（童謡）
- 第11回 楽典：音階（復習） ソルフェージュ：5度の音程（コールユーブンゲン・新曲視唱）
- 第12回 楽典：和音（三和音） ソルフェージュ：5度の音程（新曲視唱・童謡）
- 第13回 楽典：和音（属七の和音とコードネーム） ソルフェージュ：転調（コールユーブンゲン・新曲視唱）
- 第14回 楽典：和音（復習） ソルフェージュ：（復習）
- 第15回 総括及び確認

成績評価の方法

「楽典」の筆記テスト90%、授業への参加状況10%

履修にあたっての注意

音楽表現のために非常に重要な基本を学習する授業で、全員が理解できるように組み立てて指導しますが、分からない時は必ず質問し、楽しみながらも充実した時間にしてください。

教科書

小林美実『こどものうた200』（(株)チャイルド本社、2010年、ISBN：978-4-8054-8100-4 C2037）

教科書・参考書に関する備考

『こどものうた200』、その他毎時間、プリント・楽譜を配布。

授業のねらい

幼稚園教育要領、保育所保育指針に言う「表現」で、保育者に何が求められているのかを知り、制作を通して幅広い経験をする。子どもたちの表現を導くためには、導く側が表現を十分に知っておくこと、体験しておくことが大切であり、自分自身の活動を一つ一つ積み重ねることを目的とする。

到達目標

保育学科での造形表現としての授業は、自己に表現力を育てる土台となるものであり、美術が苦手、嫌いな人は、特にここで改めて、表現するための手段としての造形に向き合い、まずは体験、経験し、つくりだす喜びを味わうことが目標である。また、想像力を働かせて発想や構想し、様々な表し方を工夫することも目標として大切にしたい。

授業方法

5つの表現活動（造形遊び、絵に表す、立体に表す、工作に表す、鑑賞する）をいろいろな素材、材料を使って制作し、子どもに育てたい資質や能力など踏まえた授業内容とする。また、材料や用具等の扱いや支援のポイント等についても具体的に示す授業内容とする。事前学習として様々な素材についての下調べを課す。また、制作は授業内で完成しないものも多いため、事後学習として作品を仕上げることを課す。

授業計画

- 第1回 授業に関してのオリエンテーション
- 第2回 造形遊び 新聞紙を使って体全体で楽しむ
- 第3回 造形遊び いろいろな材料をもとにローラーなどを使って体全体で楽しむ
- 第4回 絵に表す 写したものの形や色から思いついたことを表す
- 第5回 絵に表す いろいろな形の紙から思いついたことをかく(1)
- 第6回 絵に表す いろいろな形の紙から思いついたことをかく(2)
- 第7回 立体に表す 紙粘土でいろいろな食べものの形を思い浮かべてつくる
- 第8回 立体に表す 箱を組み合わせて思いついたものをつくる(1)
- 第9回 立体に表す 箱を組み合わせて思いついたものをつくる(2)
- 第10回 工作に表す 紙を切っているいろいろな形の飾りをつくる
- 第11回 工作に表す 風で回る仕組みをもとに楽しく遊ぶものをつくる
- 第12回 鑑賞する 形のおもしろさに気付く
- 第13回 鑑賞する 材料を集めて見ることや飾ることを楽しむ
- 第14回 子どもに適した表現を考える 形・色・素材・場など、表現素材を通じて自己の表現開拓につながる制作をする
- 第15回 子どもに適した表現を考える 制作完了

成績評価の方法

授業への取り組み（40%）、制作状況（20%）、作品（40%）

履修にあたっての注意

授業では、身近にある素材や材料を用いることもあり、普段から集めておくことが望ましい。

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。

授業のねらい

幼児教育、保育現場では、子どもたちの様々な活動時に保育者が鍵盤楽器を演奏することがあります。その為、この授業では鍵盤楽器の代表的存在である、ピアノの演奏能力を身につけるための基礎的な技術習得を行なうことがねらいとなります。また、弾き歌いの技術習得を視野に入れ、童謡などの子ども向けの歌に多く接する演習も行います。

到達目標

マンツーマンのレッスンや集団での演習を通し、基礎的なピアノ演奏技術を習得し、最低限、授業で取り上げた曲のうち1曲を高水準で演奏することができることを到達目標とします。

授業方法

担当教員：新海節・相原啓寿・石田まり子・石橋克史・佐藤奈都美・須藤尚美・曾根崎直子・鷹木真理子・辻千絵

※複数の教員による授業となります。

本授業はピアノレッスンと集団での演習により展開します。ピアノレッスンでは、学生のピアノ学習経験の有無によりその演奏技術にばらつきがある為、学生各自のピアノ技術のレベルに応じた指導を受けることとなります。そのため、ピアノレッスンに関しては統一した授業計画を示すことは難しいですが、以下に、ピアノ学習初心者における基本的な授業計画を示します。各教員より学生各自に応じた音楽的指導や課題設定を行いますので、それを基に事前事後学習（計80分程度）を行ってください。

授業計画

- 第1回 全体オリエンテーション及び担当教員オリエンテーション
- 第2回 レッスン：初心者の為の基礎的練習（バイエルピアノ教則本より4、6、7、14番）
集団演習：楽典（長音階、短音階について）
- 第3回 レッスン：初心者の為の基礎的練習（バイエルピアノ教則本より16、26、29番）
集団演習：ソルフェージュ（2度音程、3度音程）
- 第4回 レッスン：初心者の為の基礎的練習（バイエルピアノ教則本より31、38、39番）
集団演習：楽典（近親調について）
- 第5回 レッスン：初心者の為の基礎的練習（バイエルピアノ教則本より40、48、66番）
集団演習：ソルフェージュ（長調、短調）
- 第6回 レッスン：初心者の為の基礎的練習（バイエルピアノ教則本より100、104番）
集団演習：楽典（移調について）
- 第7回 レッスン：初心者の為の基礎的練習（かわいいおともだち、グレーの小さなロバ）
集団演習：ソルフェージュ（4度音程）
- 第8回 レッスン：初心者の為の基礎的練習（ブルグミュラー25の練習曲より「すなおな心」）
集団演習：楽典（移調に関する事項の確認）
- 第9回 レッスン：初心者の為の基礎的練習（ブルグミュラー25の練習曲より「アラベスク」）
集団演習：ソルフェージュ（5度音程）
- 第10回 レッスン：初心者の為の基礎的練習（ブルグミュラー25の練習曲より「無邪気」）
集団演習：楽典（三和音について）
- 第11回 レッスン：初心者の為の基礎的練習（小さなロマンス）
集団演習：ソルフェージュ（複合拍子）
- 第12回 レッスン：発表会形式の総括のための準備（各自の演奏曲の選曲）
集団演習：楽典（属七の和音について）
- 第13回 レッスン：発表会形式の総括のための準備（各自の演奏曲の練習）
集団演習：ソルフェージュ（転調）
- 第14回 レッスン：発表会形式の総括のための準備（各自の演奏曲のまとめ）
集団演習：楽典及びソルフェージュを踏まえた歌唱表現
- 第15回 総括（発表会形式による演奏）

成績評価の方法

到達目標測定のための実技試験（80%）、授業への主体的参加状況（20%）により評価を行う。

履修にあたっての注意

ピアノの演奏技術向上のためには日々の練習が欠かせません。その為、毎日の練習を怠らず地道に努力してください。

教科書

新海節 田中宏明 編『ほどよいレベルで弾ける 保育者のためのピアノ&童謡曲 60』(圭文社、2015)
小林美実 編『こどものうた 200』(チャイルド本社、1975)

教科書・参考書に関する備考

基本的には上記の教科書を使用しますが、他の童謡やピアノ小品など、学生各自のピアノ技術のレベルに応じた楽曲を提示する場合があります。

授業のねらい

幼児期の身体活動は、生涯にわたって必要な多くの運動機能の基となる多様な動きを獲得する非常に重要な時期である。また、幼児期の運動は、意欲的な心の育成、社会適応力の発達、そして認知能力の発達の上でも大変重要とされている。本科目では、幼児期の身体活動をともなう運動あそびについて総合的・実践的に学習する。授業では身体の調和的な発達を促す具体的な身体活動について学びながら、子どもの特性に合わせた運動環境の構築、援助方法、および安全対策について、正しい知識と技術を身につけていく。

到達目標

学期終了までに、以下のスキル・能力の獲得を目指す。

- (1)保育者として、子どもの年齢や発育・発達状況に合わせた適切な運動あそびを提示できる
- (2)身体の基礎を作る幼児期の運動発達の特徴と運動あそびのかかわりについて理解する
- (3)実際の保育場面における安全対策と運動に適した基本的な援助技術を習得する

授業方法

この科目は、体育館で実施し、学生自身が身体活動を通して具体的な実践方法を学ぶ。そのため、運動ができる服装での参加が必要である。授業ではグループごとに運動あそびの内容について、援助方法も含めた提案も行っていく。授業は配布プリントをもとに進行する。なお、配布される資料などをもとに、復習を行い、理解を深めておくこと。

授業計画

- 第1回 授業内容・履修に際してのガイダンス、グループ分け
- 第2回 幼児期の運動あそびの基礎知識① 幼児にとつての運動の意義
- 第3回 幼児期の運動あそびの基礎知識② 運動あそびの提示と援助
- 第4回 用具を使用しない運動あそび① 日常的に行う基本の運動
- 第5回 用具を使用しない運動あそび② マットの上での運動
- 第6回 ボールを使った運動あそび① ひとりで行うボール運動
- 第7回 ボールを使った運動あそび② 集団でのボール運動
- 第8回 縄・輪を使った運動あそび
- 第9回 マット・鉄棒を使った運動あそび
- 第10回 跳箱をつかった運動あそび
- 第11回 身近な素材を使用した運動あそび① タオル・新聞紙・ダンボールを利用した運動
- 第12回 身近な素材を使用した運動あそび② 環境を利用した運動
- 第13回 人とかかわる運動あそび① 親子で触れ合う運動
- 第14回 人とかかわる運動あそび② 友だちと触れ合う運動
- 第15回 全体の振り返りとまとめ

成績評価の方法

成績は発表（40%）、レポート（30%）、毎回の課題提出（30%）を総合して評価する。

履修にあたっての注意

体育館での身体活動をともなう授業であるため、運動のできる服装と上靴を用意すること。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜、プリントを配布しそれにしたがって授業を進める。

参考書

杉原隆・河邊貴子『幼児期における運動発達と運動遊びの指導』（ミネルヴァ書房）

授業のねらい

幼児期の身体活動は、生涯にわたって必要な多くの運動機能の基となる多様な動きを獲得する非常に重要な時期である。また、幼児期の運動は、意欲的な心の育成、社会適応力の発達、そして認知能力の発達の上でも大変重要とされている。本科目では、前期に引き続き、幼児期の身体活動をともなう運動あそびについて総合的・実践的に学習する。授業では身体の調和的な発達を促す具体的な身体活動について学びながら、子どもの特性に合わせた運動環境の構築、援助方法、および安全対策について、知識と技術を身につけていく。

到達目標

学期終了までに、以下のスキル・能力の獲得を目指す。

- (1)音楽に合わせた運動あそびの楽しさを伝えることができるようになる
- (2)身体表現作品の創作・発表を通して、子どもの身体活動の重要性を理解する
- (3)仲間と協働して作品づくりや発表を行うことができるようになる

授業方法

この科目は、体育館で実施し、学生自身が身体活動を通して具体的な実践方法を学ぶ。そのため、運動ができる服装での参加が必要である。授業ではグループごとに運動あそびの内容について、援助方法も含めた提案も行っていく。授業は配布プリントをもとに進行する。なお、配布される資料などをもとに復習を行い、理解を深めておくこと。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：幼児期の表現活動について
- 第2回 幼児期の身体表現の基礎理論
- 第3回 音楽に合わせて動く①：ウォーキングとステップ
- 第4回 音楽に合わせて動く②：音楽に合わせた体操
- 第5回 音楽に合わせて動く③：ダンス
- 第6回 絵本をもとにした身体表現①：絵本の選択とストーリーの検討
- 第7回 絵本をもとにした身体表現：作品の創作と用具の準備
- 第8回 絵本をもとにした身体表現③：リハーサル、作品発表会、映像記録
- 第9回 おゆうぎの創作①：参考 VTR の鑑賞
- 第10回 おゆうぎの創作②：曲・衣装の選択
- 第11回 おゆうぎの創作③：舞台構成についての検討
- 第12回 おゆうぎの創作④：振り・衣装確認
- 第13回 おゆうぎの創作⑤：総練習の映像記録（作品の最終確認）
- 第14回 おゆうぎ発表：映像記録
- 第15回 まとめと振り返り

成績評価の方法

成績は実技発表（70%）、レポート（30%）を総合して評価する。

履修にあたっての注意

体育館での身体活動をともなう授業であるため、運動のできる服装と上靴を用意すること。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜、プリントを配布しそれにしたがって授業を進める。

授業のねらい

今日、私たちが社会生活を営む上で、社会福祉は必要不可欠な存在として位置づけられている。社会福祉は、社会的要因の影響を受けて発生した社会生活上の諸問題に対応する、専門的な社会サービスの体系を意味している。社会生活上の諸問題には、格差、貧困、社会的不平等、保育や介護などの多くの生活問題が含まれる。本講義では、利用者（消費者）の立場から社会福祉の身近な事例を取り上げ、福祉問題の概要、内容やしぐみ、課題などについて解説する。

到達目標

1. 社会福祉の意義と理念の概要を理解することができる。
2. 社会生活上の諸問題や人権問題を深く理解することができる。
3. 社会福祉の法と実施体制の概要を理解することができる。
4. 各分野（児童・家庭、障害、高齢、地域など）の福祉施策の概要を理解することができる。
5. 社会保障制度の概要を理解することができる。

授業方法

講義形式により授業を展開する。

授業計画（シラバス）に記載された内容について、新聞、資料、講義用プリント、テキストなどを基に、事前・事後学習しておくことが望ましい。事前学習課題は、毎週講義の前に新聞やニュース、テキストなどで該当する箇所の疑問点（問題点）などを調べておくこと。事後学習課題は、講義中に配布された資料や解説された内容を踏まえて、再度プリント、資料、テキストなどを基に振り返りを行うこと。目安となる時間数は、各回 45 分～90 分程度。

また、講義において試験などのフィードバックを行う。

授業計画

- | | | |
|------|----------------|---------------------------------------|
| 第1回 | 現代社会の変化と社会福祉 | ：授業の説明、少子高齢社会、家族の動向、社会的不平等などを学ぶ |
| 第2回 | 社会福祉の意義と理念 | ：語義の変遷、一般的概念、基本理念などを学ぶ |
| 第3回 | 社会福祉の意義と理念 | ：語義の変遷、一般的概念、基本理念などを学ぶ |
| 第4回 | 社会福祉の史的発展② | ：アメリカと日本の社会福祉の歴史を学ぶ |
| 第5回 | 社会福祉の法と実施体制 | ：法体系、実施体制、財政の概要を学ぶ |
| 第6回 | 社会福祉と児童・家庭の問題① | ：児童福祉の概念、子育て支援対策（保育対策）と子どもの貧困問題の概要を学ぶ |
| 第7回 | 社会福祉と児童・家庭の問題② | ：ひとり親家庭対策（DV 問題）と母子保健対策の概要を学ぶ |
| 第8回 | 社会福祉と児童・家庭の問題③ | ：子どもの虐待防止対策と社会的養護の問題の概要を学ぶ |
| 第9回 | 社会福祉と障害児・者の問題 | ：障害児・者の福祉動向、福祉対策などの概要を学ぶ |
| 第10回 | 社会福祉と高齢者の問題 | ：高齢者の定義と福祉動向、福祉対策などの概要を学ぶ |
| 第11回 | 社会福祉と貧困の問題 | ：生存権、公的扶助、生活保護制度の概要を学ぶ |
| 第12回 | 社会福祉と地域福祉の推進 | ：地域福祉の動向、社会福祉協議会の活動、利用者保護制度の概要を学ぶ |
| 第13回 | 相談援助活動と社会福祉専門職 | ：相談援助活動の体系、福祉専門職制度の概要を学ぶ |
| 第14回 | 日本の社会保障制度 | ：年金保険、医療保険、介護保険などの社会保障制度の概要を学ぶ |
| 第15回 | 講義全体のまとめ | ：全体のまとめと試験などのフィードバックを行う |

成績評価の方法

各到達目標を測定する試験（80%）、授業への参加状況（20%）、により評価する。

履修にあたっての注意

授業は基本的には講義形式で行うが、授業中に事前学習課題や事後学習課題の内容などに関して、随時指名して発言を求めらるので、事前学習課題や事後学習課題の内容について学習した上で授業に参加すること。

教科書

鈴木幸雄編著『改訂 現代の社会福祉』（中央法規出版、2018）

教科書・参考書に関する備考

講義で使用するプリント、統計資料などは適宜配布する。

授業のねらい

現代社会における子どもと家庭の状況をふまえながら「保育と福祉」の関連について考える。そのうえで子ども家庭福祉の理念・歴史・法律について理解を深めるとともに、子ども家庭施策の現状と課題、児童の権利擁護、児童福祉機関について学び、福祉を担う保育士としての役割と責任について習得することを目的とする。

到達目標

- 1 子ども家庭福祉の意義と歴史について理解できる。
- 2 子ども家庭福祉の制度や実施体系の知識を身につける。
- 3 子ども家庭福祉の現状と課題について理解できる。
- 4 子ども家庭福祉と保育との関連性について理解できる。

授業方法

教科書を中心に講義形式で授業を展開する。事前学習として教科書指定箇所の熟読を課す（所用時間 30 分程度）。毎回配布する資料に事後学習の課題を示すので各自で取り組むこと（所要時間 20 分程度）。また、課題レポート提出により各自の理解度についての確認をする（2～3 回程度）。レポート課題については、授業時に口頭で説明する。

授業計画

- 第1回 「子どもについて」「子どもと家庭を取り巻く現状」
- 第2回 子どもの権利－子どもの歴史と権利条約
- 第3回 子ども家庭福祉の歴史
- 第4回 子ども家庭福祉に関する制度と法体系
- 第5回 子ども家庭福祉の実施機関
- 第6回 児童福祉施設について
- 第7回 子育て支援サービス
- 第8回 母子保健サービス
- 第9回 保育サービス
- 第10回 児童虐待防止とドメスティック・バイオレンス
- 第11回 社会的養護
- 第12回 ひとり親家庭への福祉
- 第13回 障がいのある子どもの福祉
- 第14回 情緒障害・少年非行問題
- 第15回 子ども家庭福祉の専門職と連携

成績評価の方法

到達目標 1～4 を測定する試験（60％） 到達目標 1～3 を測定する課題提出（20％） 参加状況（20％）

履修にあたっての注意

保育士は子ども家庭福祉の専門家であることを自覚して授業に臨んでください。

教科書

櫻井奈津子『保育と児童家庭福祉』（みらい、2016年、ISBN：978-4-86015-384-7）

教科書・参考書に関する備考

講義に関連する参考図書・資料等は随時紹介する。

授業のねらい

本科目では人間生活の基本である健康・体力・身体活動に関する知識を学ぶとともに、これらを積極的に高め、いく態度や能力を養うことを目的としている。身体活動の意義や健康に関する諸問題を科学的に理解することは、現在の学生生活には必要不可欠である。また、将来の社会生活における健全な生活実践へ向け、豊かで充実したライフスタイルを確立するための知識と技能を習得することも目的のひとつである。

到達目標

学期終了までに、以下のスキル・能力の獲得を目指す。

- (1)自己のライフスタイル(運動・栄養・休養)を評価し、自らの健康の維持・管理ができる
- (2)健康を阻害する要因を知り、その予防法と改善法が理解できる
- (3)身体活動や運動が人間の健康やQOLに果たす役割を理解することができる
- (4)安全で効果的な運動処方の実践のために、運動の種類・強度・頻度・持続時間が理解できる
- (5)栄養素の消化・吸収・代謝過程や栄養所要量が理解できる

授業方法

授業は配布プリントやスライドの資料をもとに進行する。体組成・心拍数・血圧の測定などを実施し、自らの身体や生活習慣への意識を高めながら、効果的な運動実践に取り組むことにより、健康の維持・増進に関する正しい知識理解や実践力を身につけることを目指す。

授業計画

- 第1回 授業内容・履修に際してのガイダンス
- 第2回 運動と健康
- 第3回 食生活と健康
- 第4回 肥満とダイエット
- 第5回 筋の種類と構造
- 第6回 心肺機能と呼吸
- 第7回 子どもの発育発達と運動
- 第8回 運動による認知機能の向上
- 第9回 ストレスと運動のかかわり
- 第10回 静的ストレッチと動的ストレッチの実践と効果
- 第11回 高齢者の健康と運動
- 第12回 生活習慣・運動習慣のチェックと課題の設定
- 第13回 運動実践の計画方法
- 第14回 運動実践の評価と今後の生活スタイルの改善に向けて
- 第15回 全体のまとめ

成績評価の方法

この科目は講義が中心の授業であるが、成績は2回のレポート(40%)と毎回の課題提出(60%)を総合して評価する。欠席が多い場合は評価対象にならない。

履修にあたっての注意

科目にかかわる内容の基礎的知識をつけるには、予習・復習が重要であり、上記の授業計画の欄に記載の内容に予め目を通し、前授業の内容を復習した上で出席すること。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜プリントを配布し、それにしたがって授業を進める。

参考書

名取礼二『健康・体力づくりハンドブック』(大修館書店)

授業のねらい

人の心の深層について、さまざまな視点から考える。幼稚園現場であろうが保育園であろうが、人と人との関わりは変わりなく展開する。本講では人の心のやや深いところに焦点を当て、知識学習のみならず、精神分析、分析心理学、人間主義的アプローチ、認知行動的アプローチ等の実際にふれ、可能な限りの体験学習を介在させ展開する。主にパーソナリティに焦点をあて、臨床事例を絡ませつつ、心の援助について受講生と共に考え、人間そのものについての理解を深めていく。視聴覚素材を多用し、当事者の生の声を可能な限り聴く。家族支援にも重きを置き、現状の把握と援助者の課題について探求する。

到達目標

施設保育士の場合は、高齢者とのふれあいもあることから、講義の対象を生涯発達とし、大きな視点で人の心の深層に迫る。受講生は「生涯発達に関わる人の心の変容」「病いや障害の機序」「心理的視点からの援助方法」等について学ぶことにより心理臨床諸理論と心理療法技術を身につける。到達目標1は「知識の獲得」、到達目標2は「応用力」である。

授業方法

視聴覚素材を用いた講義とするが、体験学習も織り交ぜ、臨場感のある授業としたい。

授業計画

- 第1回 臨床心理学の概説を行う。臨床心理学の歴史、そして今日の現状について学ぶ。時代を反映して、人格変容および災害や犯罪等に絡む心的外傷後ストレス障害について検討し、広い視点から人間の心の変遷を見つめる。
- 第2回 フロイトの精神分析を主題とし、個人的無意識の世界を探索。人は誕生後、いかにして“人”となっていくのか、なぜ他の生き物と人間は違うのか、幼児～小学生くらいまでの人間成長について考えるヒントを得る。
- 第3回 個人的無意識のみならず、集団的無意識を発見したユングの分析心理学について学ぶ。なぜ人は他者と心を分かち合えるのか、なぜ人は自分と同じような態度をとったり行動するのか・・・心の世界は謎が多い。ひとつひとつ解き明かしていく。
- 第4回 カウンセリングを体系化したロジャーズの来談者中心療法について学ぶ。「対話」「共感」「純粋性」「自己一致」などがキーワードとなる。カウンセリングでは体験学習（ロールプレイ）を展開する。人の気持ちになって自分を見つめるトレーニングを取り入れる。
- 第5回 刺激-認知-行動を絡ませる認知行動療法について学ぶ。まるでアートのような認識の枠組みで、人間の心の何がどの程度描けるのかを考える。3-5回講義のまとめとして、心理療法の3つの潮流についてまとめの作業を行う。
- 第6回 人間は何のために生きようとするのか。人が生きる動機づけについて、マズローの「欲求5段階説」について具体的資料をもとに学ぶ。そののち人間を生涯発達の観点から広くとらえ、この点を強調したエリクソンの生涯発達理論について検討する。
- 第7回 いわゆる「神経症（不安障害）」について学ぶ。不安感は困りごとではなく、人が生きる上でなくてはならないものである。不安感が湧くからこそ人は身構えることができる。これが自己の安全につながったりする。不安の長短について、適応障害や恐怖症等から学ぶ。
- 第8回 思春期は発達加速現象により、小学生の中ごろから始まると言われている。思春期は疾風怒濤の時期とも呼ばれ、心に関する合理的な説明が困難となる時期でもある。反抗、無抵抗、矛盾、虚偽、顕示など、心の振幅が大きくなる。その機序について、一つの事例から学ぶ。
- 第9回 第1回から第8回までのまとめと補足を質疑応答を交えて行う。そののちに、確認テストを実施し、受講生の学習の定着を図る。
- 第10回 思春期後半から出現する「統合失調症」について、幅広い観点から深める。神経学的機序および心理療法の視点などから、病気と家族との関わりについて、当事者研究の成果も取り入れ学びを深める。
- 第11回 自閉症スペクトラム症、注意欠陥多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）等の障害をもつ子どもに焦点を当て、心理療法の視点からその心の動きに迫る。何がどうなり、こうなるのか・・・発達障害の領域はこの問いの繰り返しである。子どもたちの心のありようについて学びを深める。
- 第12回 高齢者心理臨床、認知症など、脳器質性障害について学ぶ。人は高齢により、長い時間をかけて身に着けた記憶力、判断能力および身体能力をそぎ落としていくが、それは幼児が無から何かを心に刻み付けていく発達過程の逆を辿っているのではない。その難しさについて学ぶ。
- 第13回 心理アセスメントⅠ。主に質問紙法を用いた心理検査について学ぶ。今日多くの心理検査が作成され適用されているが、大げさなセッティングを要しない質問紙法検査は、多忙な保育現場でも有効である。実際の個人体験を踏まえて解説する。
- 第14回 心理アセスメントⅡ。主に投映法を用いた心理検査について学ぶ。今日多くの心理検査が作成され適用されているが、実際に利用されている投映法検査はそんなに多くはない。多忙な保育現場でも有効なものを、実際の個人体験を交えながら学ぶ。

第15回 第10回から第14回までの学習について振り返り、まとめと総括を質疑応答を交えて行う。そのうち、確認テストを実施する。

成績評価の方法

2回の確認テスト(80%)より、2つの到達目標についての定着を確認する(各 $40\% \times 2 = 80\%$)、授業への参加状況(20%)により評価する。

履修にあたっての注意

講義の前に各回の講義内容を確認し、事前に関連文献(著書や論文、新聞記事など)にあたる。講義後はノートを見ながら復習を行う。確認テスト前に配布される「キーワード集」により、知識の定着を図るようにする。

教科書・参考書に関する備考

教科書は使用しません。毎回、講義に関連する資料を配布します。関連文献については、各回講義の中で紹介します。

参考書

日本心理臨床学会編『心理臨床学事典改訂版』(培風館、1992、ISBN: 4-563-05680-4 C3511)
小山充道編著『必携臨床心理アセスメント』(金剛出版、2008、ISBN: 978-4-7724-1045-8 C3011)
小山充道『自分描画法の基礎と臨床』(遠見書房、2016、ISBN: 978-4-86616-020-7 C3011)

授業のねらい

現代の子どもたちがおかれている様々な状況をとおしてその実態を明らかにしていく。その中で「子ども文化」について考察をしていく。とりわけ、子どもが自ら作り出す遊び、長く伝えられてきた文化的財産、大人が子どもに関わり生み出された社会的現象や事物、歴史的に見て新たに生じてくるもの、失われてしまったものなど、子どもに関わる文化財を意識してとらえてみたい。

到達目標

1. 子ども文化への理解を深め、社会の中で子どもの健全な発達はどうあるべきか考察できるようになる。
2. 活動を通して遊びの楽しさや有用性を実感することができる。

授業方法

主に講義形式によるテーマの解説になるが、グループごとにテーマに沿った討議をしたり、体を動かす活動をしたりする。グループごとに学生の前で絵本の読み聞かせを行うことも考えている。

授業計画

- 第1回 「子ども文化」とは何か ～子ども文化の視点、要素
- 第2回 遊びの歴史1 ～文化としての遊び、遊びと道具
- 第3回 遊びの歴史2 ～遊びの変化をどうとらえるか
- 第4回 子どもを取り巻く社会の変化
- 第5回 伝承遊び むかし遊びにふれる1 ～「あやとり」のおもしろさにふれる
- 第6回 伝承遊び むかし遊びにふれる2 ～「こま回し」のおもしろさにふれる
- 第7回 伝承遊び むかし遊びにふれる3 ～「けん玉」のおもしろさにふれる
- 第8回 伝承遊び むかし遊びについて4 ～「竹馬」のおもしろさにふれる
- 第9回 伝承遊び むかし遊びについて5 ～「わらべうた」について
- 第10回 伝承遊び むかし遊びについて6 ～伝承遊び・むかし遊びのまとめ
- 第11回 絵本1 ～ことばとあそびについて考える
- 第12回 絵本2 ～絵本ソムリエ 絵本を選んであげよう
- 第13回 絵本3 ～絵本の読み聞かせについて
- 第14回 絵本4 ～絵本の読み聞かせ ワークショップ
- 第15回 「子ども文化」のまとめ

成績評価の方法

小テスト 20% 修了レポート 60% 授業参加度 20%

履修にあたっての注意

授業によっては体を動かす活動もあります。動きやすい服装での参加をお願いします。

教科書・参考書に関する備考

講義の資料等については必要に応じて配付します。参考文献については講義の中で紹介していきたいと考えています。

参考書

川勝泰介・生駒幸子・浅岡靖央『ことばと表現力を育む児童文化』（萌文書林、2013、ISBN：4893471880）

70711

子ども家庭福祉論Ⅱ（障害児） 担当教員：小川恭子・吉田孝子 2単位 後期

授業のねらい

今日の「子ども家庭福祉問題」の中から障害児問題を中心に障害児が抱える現状や地域での連携・福祉サービスの役割と課題を理解し、家庭福祉専門職としての役割を学ぶ。また、障害児保育の考え方、保護者支援の方策を学ぶ。

到達目標

- 1 保育士として理解しておかなければならない「障害児問題」の現状、地域連携の必要性、福祉サービスの役割と課題を知ることができる。
- 2 障がいのある子どもへの保育者としての基本姿勢、援助の進め方を学び専門性を身につける。
- 3 保護者（親）への支援として障がい受容のプロセスを知り、保護者が抱える問題を知ることができる。

授業方法

教科書を中心に講義形式で授業を展開する。事前学習として教科書指定箇所の熟読（所用時間 30 分程度）、事後学習として振り返りシート（所用時間 20 分程度）の提出を課す。またレポート提出により、各自の理解度についての確認をする。

授業計画

- 第1回 ライフステージを見通した障害のある人の歩み
- 第2回 障害児保育の基本
- 第3回 障害の理解と支援 (1)発達障害・知的障害・言語障害
- 第4回 障害の理解と支援 (2)肢体不自由・聴覚障害・視覚障害・病弱・重複障害
- 第5回 発達を目指したさまざまな連携 (1)地域・専門職と
- 第6回 発達を目指したさまざまな連携 (2)福祉施設と支援活動
- 第7回 個別の支援計画 (1)内容
- 第8回 個別の支援計画 (2)実際
- 第9回 小学校との接続 (1)通常学級・通級・特別支援学級
- 第10回 小学校との接続 (2)特別支援学校小学部
- 第11回 思春期・青年期に向けて
- 第12回 障害のある子どもの保護者（親）への支援
- 第13回 障害児保育・教育の歴史的変遷
- 第14回 インクルーシブ教育と合理的配慮
- 第15回 これからの障害児保育を考える

成績評価の方法

到達目標 1～3 を測定する試験（60%） 到達目標 2 を測定するレポートおよび振り返りシート提出（20%） 授業への参加状況（20%）

履修にあたっての注意

主体的な学びを創るために事前学習、振り返りシートによって自己理解度を確かめよう。

教科書

小林徹・栗山宣夫編『ライフステージを見通した障害児の保育・教育』（みらい、2017年、ISBN：978-4-86015-389-2）

授業のねらい

社会的養護を必要とする子どもとその家族の状況を理解した上で、子どもの権利を尊重した児童養護の基本原則および日本における社会的養護の制度・内容・現状・問題点等について学ぶことを目的とする。また、現代の保育士に要求される児童虐待対応について、虐待の発生予防・早期発見からその後のケア、および親子の再統合支援に至る機関連携の方法について理解を深めることを目指す。

到達目標

- 1 社会的養護の意義と歴史について理解できる。
- 2 子どもの権利擁護についての理解できる。
- 3 児童福祉施設に入所中の児童とその保護者への援助方法について理解できる。
- 4 児童虐待の対応方法について理解を深めることができる。

授業方法

教科書を中心に講義形式で授業を展開する。事前学習として教科書指定箇所の熟読を課す（所用時間 30 分程度）。毎回配布する資料に事後学習の課題を示すので各自で取り組むこと（所要時間 20 分程度）。また、課題レポート提出により各自の理解度についての確認をする（2～3 回程度）。レポート課題については、授業時に口頭で説明する。

授業計画

- 第1回 社会的養護児童が生じる背景とは
- 第2回 子どもの権利擁護
- 第3回 子ども虐待(1)定義とその内容、児童虐待が生じる背景
- 第4回 子ども虐待(2)予防・発見・対応・機関連携
- 第5回 社会的養護の意義と歴史
- 第6回 社会的養護の制度や実施体系
- 第7回 家庭養護について
- 第8回 施設養護について
- 第9回 施設養護の特質と基本原理
- 第10回 施設養護の実際(1)（日常生活および自立支援）
- 第11回 施設養護の実際(2)（治療的支援）
- 第12回 施設養護の実際(3)（家族・地域との関係調整）
- 第13回 社会的養護とソーシャルワーク
- 第14回 児童福祉施設の運営管理
- 第15回 今後の社会的養護のあり方

成績評価の方法

到達目標 1～4 を測定する試験（60%） 到達目標 3～4 を測定する課題提出（20%） 授業への参加状況（20%）

履修にあたっての注意

「子ども家庭福祉論Ⅰ」の授業内容を関連づけることで、より学習効果が期待できます。

教科書

小池由佳/山縣文治編著『社会的養護』（ミネルヴァ書房、2016年、ISBN：9784623076567）

授業のねらい

これからの社会を担う子どもたちに求められる資質・能力を育成するために必要な教育方法や情報化への対応等に関する基礎的な知識・技能を身に付ける。

到達目標

- 1) 幼児期における遊びや学びに関する基礎的な知識を理解する。
- 2) 保育計画を作成する方法を身につける。
- 3) 幼児教育における ICT 活用や家庭との連携のあり方を理解する。

授業方法

学校教育の目的に応じた学習を成立するための、授業や保育内のコミュニケーションを支援する環境や方法、情報機器の活用等について取り上げる。なお、理解を深めるために配布するプリント等での予習・復習を行った上で受講すること。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション ～これまでに会った教師、保育、授業を振り返って
- 第2回 幼児期の遊びと学び
- 第3回 「学ぶ」や「学力」をいかに捉えるか
- 第4回 学力テストからみえる学びのつながり
- 第5回 保育計画を作成するにあたって
- 第6回 保育環境の構成とデザイン
- 第7回 保育実践の基盤となる教師の「観」
- 第8回 よりよい保育の展開と教師の力量向上
- 第9回 保育の改善と園内研修
- 第10回 保育実践の記録・記述
- 第11回 情報化社会の子ども
- 第12回 学校・家庭・地域の連携と教師の役割
- 第13回 幼児教育と ICT 活用
- 第14回 メディアが変わる 保育が変わる
- 第15回 まとめ・テスト

成績評価の方法

テスト：40点、課題（授業中・授業外）50点、授業時のリフレクションノート：10点

履修にあたっての注意

特になし。

教科書

文部科学省『幼稚園教育要領 平成29年告示』（フレーベル館、2017、ISBN：9784577814222）

教科書・参考書に関する備考

授業内で適宜紹介します。

授業のねらい

この科目は幼稚園教諭の教職課程の「教職の意義等に関する科目」である。

幼児教育に携わる保育職の意義や役割・職務内容を学び、保育経験者の声を聞きながら、保育者を目指す自身の進路についても考える時としたい。

人は人との関わりなしには生きられない存在である。子どもの内面世界にふれ、子どもが自分の世界を創り上げていく過程を知り、その過程に寄り添う親や保育者の人間としての基本的な関係のありようを、保育という観点から理解する。また、親や保育者の役割と苦悩を知る中で、支えあう関係性とは何かを理解する。そして、この学びを通して履修者自身が、保育者をめざす一人の人間として自身と向き合うことも経験する。

到達目標

- 1 保育職の意義や役割・職務内容を理解し、保育者の専門性の諸説を理解する
- 2 保育職に求められるものと今後の方向性を考える
- 3 子どもや保護者の視点から保育者の存在意義を考え、関係性の中の保育者を考察する
- 4 保育職を学ぶ自身について考える

授業方法

基本は講義形式であるが、体育館やグラウンドで体を動かしながらの授業内容や講演も予定している。また、毎時課題提出があり、課題によっては事前準備や事後学習も必要になる。また、期末には保育職に関するレポート課題の提出を課す。

授業計画

- 第1回 はじめに
- 第2回 保育者の専門性とは?: 諸説と保育の質
- 第3回 保育職の役割・職務内容・保育者集団と倫理観
- 第4回 保育者の役割と子どもの心理(1): 行事の実践計画の中から
- 第5回 保育者の役割と子どもの心理(2): 行事の実践・経験の中から
- 第6回 保育者の役割と子どもの心理(3): 配慮点・留意点・優先順位から見えること
- 第7回 保育者の育ちと研鑽(1)自己評価と他者の目に映る自分
- 第8回 講演(1): 保育経験者の立場から
- 第9回 講演(2): 親の立場から
講演(3): その他の立場から
- 第10回 保育者の育ちと研鑽(2)子ども・保護者・同僚・他職の中から
- 第11回 子どもの理解と保育者
保護者理解と保育者
- 第12回 保育者の専門性と総合性
- 第13回 保育職に求められるものと今後の方向性
- 第14回 保育職を学ぶ自身の課題
- 第15回 おわりに

成績評価の方法

到達目標 1・3 は毎回の課題 (50%) の中から、到達目標 2・4 はレポート課題 (50%) により評価する。

履修にあたっての注意

教室だけではなく、体育館や屋外で行なう場合があるので、動きやすい服装で参加のこと。また、毎時、原稿用紙 A 4 縦 (横書き) を持参すること。事前事後学習課題についても随時求めるので、学習すること。

教科書

井上孝之編『子どもと共に育ちあうエピソード保育者論』((株)みらい、2016、ISBN: 978-4-86015-362-5C3037)

授業のねらい

教育心理学 I は、人間の学習・記憶・動機づけなどについて学ぶことを目的とした授業です。私たちの生活は、さまざまな学習の積み重ねによって成立しています。「学習」という言葉からは「勉強」がイメージされるかもしれませんが、食事をする・遊ぶ・友達と楽しく会話をするといったことも、私たちは学習することによってできるようになっていくのです。また、学習をする際は、これまでの失敗経験・成功経験の記憶やできるようになりたいという動機づけなどが大きく影響しています。このように、学習・記憶・動機づけは、人間の行動と密接な関係があり、子どもを理解する上でも重要なことからいえます。

到達目標

1. 教育心理学に関する基本的な知識を身につけること
2. 学習・記憶・動機づけなどに関する実験例や行動例について、心理学用語を用いて説明できること
3. 授業で取り上げた内容と自分の体験を結び付けて考えることができること

授業方法

2～4回の授業で1つのトピックを取り上げ、トピックにまつわる実験例の紹介・理論の説明などを行いながら、授業を進めていきます。また、研究によって明らかにされていることを実感できるように、いくつかの実験も予定しています。

授業前には、授業内容に関することからについて自分の経験を振り返る・自分の考えをまとめる・資料を読む・資料を探すなどの予習課題に取り組んでください。授業後は、パソコンを用いて授業内容をまとめた穴埋め式のノートを作成し、授業内容を復習してください。また、穴埋め式のノートには、その日の授業の感想や考えたことなども盛り込むようにしましょう。予習・復習に必要な時間の目安は、あわせて2～3時間です。なお、予習課題の発表・予習課題と復習課題の提出は、ポータルサイトを使用します。

テスト実施後、模範解答の確認と授業内容のまとめを行います。自分の理解度を確認するようにしてください。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：授業内容の説明・授業の進め方と評価の方法についての確認
- 第2回 学習(1)：条件づけ
- 第3回 学習(2)：条件づけに関する現象・さまざまなタイプの学習
- 第4回 学習(3)：練習の効果
- 第5回 学習(4)：問題解決
- 第6回 記憶(1)：記憶の種類
- 第7回 記憶(2)：記憶と再生に関する現象
- 第8回 記憶(3)：忘却
- 第9回 動機づけ(1)：動機づけの役割・分類方法
- 第10回 動機づけ(2)：さまざまな動機づけ
- 第11回 動機づけ(3)：フィードバックと動機づけの関連
- 第12回 動機づけ(4)：結果の認知と動機づけの関連
- 第13回 知能(1)：知能の種類
- 第14回 知能(2)：知能の測定方法
- 第15回 まとめとテスト

成績評価の方法

到達目標 1・2の達成度を測定するテスト（1回：80%）、到達目標 1・2・3の達成度を測定する授業で行う予習を前提とする課題（10%）、到達目標 1・2・3の達成度を測定する予習・復習への取り組み（10%）によって評価します。

履修にあたっての注意

授業中に、実験を行うことがあります。途中からの参加はできません。遅刻をしないように、特に注意してください。また、授業で行う予習を前提とする課題を実施する回については、予告をしません。普段から予習・復習にきちんと取り組み、欠席のないようにしてください。

教科書

鎌原雅彦・竹綱誠一郎『やさしい教育心理学 第4版』（有斐閣、2015、ISBN：464122059X）

教科書・参考書に関する備考

参考となる書籍・ホームページは、ポータルサイトを通して紹介します。

参考書

子安増生・田中俊也・南風原朝和・伊東裕司『ベーシック現代心理学 6 教育心理学（新版）』（有斐閣、2003、ISBN：4641086826）

山内光哉・春木豊『グラフィック学習心理学 行動と認知』（サイエンス社、2001、ISBN：4781909779）

授業のねらい

この科目は保育士課程の「保育の対象の理解に関する科目」である。

実際の乳幼児の姿と保育者の援助、自身の保育実践の中から、子どもの心身の発達と保育における発達援助について学ぶ演習科目である。「乳幼児・障害児実習」と連動させながら、実践的に幼児理解を行う。また、必要な援助や保育技術を立案し、「実習」での実践を通して反省・評価を行ない具体的な援助を学ぶ。理論から実践、実践から理論へという一連の流れから、子どもとはどのような存在か、そしてその子ども達の成長発達を促す役割を果たす保育者にはどのような力が必要なのかを、実践を通して理解することが最終的な目標である。

到達目標

- 1 子どもの心身の発達と保育における発達援助・保育実践について理解を深める。
- 2 生活と遊びを通して学ぶ子どもの経験や学習過程を理解する。

授業方法

子どもの発達や心理に即した保育の立案と実習準備を行い、実習経験によって得られた子ども観や発達観を振り返り、実習でのビデオ視聴を通して、個々の子どもの心理や集団保育における配慮点を学び、保育者に必要な子どもの理解を深める。「乳幼児・障害児実習」での担当クラス毎のグループ学習と全体での学びの中で授業を進める。したがって授業計画はグループにより順番が異なるので注意すること。

授業内で行えることは一部であり、子どもの発達に応じた実習案や教材研究の見直し、話し合い等は事前・事後学習で行うこととなる。計画的に進めること。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：授業の構成と進め方
- 第2回 子どもの発達と保育実践
- 第3回 子ども理解における発達の把握と個人差
- 第4回 発達過程に応じた保育と発達の連続性
- 第5回 子ども相互のかかわりと関係作り
- 第6回 自己主張と自己統制
- 第7回 子ども集団と保育環境
- 第8回 生活や遊びを通じた学びの過程
- 第9回 基本的生活習慣の獲得と発達援助
- 第10回 自己の主体性の形成と発達援助
- 第11回 発達課題に応じた援助やかかわり
- 第12回 身体感覚を伴う多様な経験と環境との相互作用
- 第13回 就学支援と幼小連携
- 第14回 発達援助における協働と現代社会の保育課題
- 第15回 生涯にわたる生きる力の基礎を培う

成績評価の方法

到達目標1～2は以下により評価する。

保育の立案・実習準備、振り返りへの取り組み（80%）、提出物（20%）

履修にあたっての注意

実習と連動して行う科目のため、グループでの活動が多くなる。話し合いの機会や調べる・考える等の時間も多くなる。より良いものを求めて意見交換をすることを惜しまず、主体的・積極的な授業参加を期待する。授業だけではなく、事前事後に必要な課題を行うこと。

教科書

金子龍太郎・吾田富士子監修『保育に役立つ！子どもの発達がわかる本』（ナツメ社、2011）

授業のねらい

児童や養育者の「心（精神）の健康」に関して学問的に学び、適切ななかかわりについて考える。子どもや保護者が示す多様な心（精神）の症状や行動を、心理学・社会心理学（文化人類学）・社会学などの行動諸科学から多面的に深く理解し、保育専門職者の立場から臨床発達心理学的な介入と支援を実際に行っていく方法について学修することを目的とする。

到達目標

1. 社会関係（対人関係）において対象者が示す心（精神）の症状とメカニズムを根拠をもって理解できる。
2. 心（精神）の健康の問題に関する知見や理論を身につけ、妥当な対処方法を考えることができる。
3. 行動をつかさどる心（精神）が健康であることの意義を理解し、科学的な対人援助技術を実践できる。

授業方法

動画・写真・図・漫画・挿絵といった視聴覚教材を中心に構成したスライド（パワーポイント）を用いた講義と、それに伴う実践的な演習を行う。教科書（1冊）と参考書（10冊）の紹介に加え、スライドをプリントアウトした資料及び関連資料はかなりの量にのぼるため、目を通していただく事前・事後学習は不可欠となる。また、一回の講義毎に「気づき・学び」等を記したレスポンスカードの提出を求めるところから、その作成過程においても学習事項の定着をはかってほしい。記載された内容はすべて読み込んだ上で、講義に関連づけながらコメントし、随時、質問にも応じ、フィードバックしていく。

授業計画

- 第1回 現代社会と精神保健：社会の変化と心の健康
- 第2回 心と行動の理解(1)：心の健康と脳科学
- 第3回 心と行動の理解(2)：心と症状行動との関係
- 第4回 心と行動の理解(3)：心の健康維持
- 第5回 心の発達と心の健康(1)：良好な環境での学び
- 第6回 心の発達と心の健康(2)：心を健康にする介入
- 第7回 心の発達と心の健康(3)：心を健康にする遊び指導
- 第8回 心の発達と心の健康(4)：アタッチメント（愛着）の生涯発達
- 第9回 心の発達と心の健康(5)：健康な心の生涯にわたる発達の支援
- 第10回 人間関係と心の健康(1)：社会関係（家族・仲間集団等）における心の成長
- 第11回 人間関係と心の健康(2)：心理療法（カウンセリング・家族療法等）による心の健康回復
- 第12回 危機と心の健康(1)：クライシスに対するコンサルテーションと専門職連携（IPW）/連携教育（IPE）
- 第13回 危機と心の健康(2)：心の健康を蝕む情緒・社会性の問題（虐待・非行等）の予防
- 第14回 危機と心の健康(3)：一次障害（神経発達症等）と二次障害の予防
- 第15回 危機と心の健康(4)：心理的ストレスへの対処（コーピング）

成績評価の方法

到達目標1・到達目標2・到達目標3を測定する試験（60%）、到達目標1・到達目標2・到達目標3を測定する授業毎のレスポンスカードの記述内容（20%）、エクササイズ等への主体的参加状況（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

集中講義により行う。

精神的健康を促すための実際的な指導法を習得していただく活動では動きやすい服装での積極的な参加をお願いする。

教科書

陳省仁・古塚孝・中島常安（編著）・糸田尚史（著）他『子育ての発達心理学』（同文書院、2003、ISBN：9784810312805）

教科書・参考書に関する備考

講義では教科書（『子育ての発達心理学』）と配布資料を使用する。試験ではその両方から出題する。授業時間外での主体的学修を期待し、本講義と関連のある下記の参考書（コミックス・絵本・専門書）以外にも、精神保健に関係するDVD映像（洋画・邦画・ドキュメンタリー等）を多数紹介する。

参考書

- 樹村みのり『樹村みのり作品集 [子ども編] 悪い子』(ヘルスワーク協会、1999、ISBN : 4938844079)
- 萩尾望都『イグアナの娘』(小学館、2000、ISBN : 4091913814)
- こうの史代『夕凧の街 桜の国』(双葉社、2004、ISBN : 4575297445)
- 宮本輝(選)・住出知代(著)他『父の目方』(光文社、2004、ISBN : 4334974457)
- 西村香英『まんまるねこダイナ』(小学館、2005、ISBN : 4097278010)
- あきやまただし『さかさのこもりくん』(教育画劇、2006、ISBN : 4774607010)
- 小山充道(編著)・糸田尚史(著)他『必携 臨床心理アセスメント』(金剛出版、2008、ISBN : 4772410457)
- 坂本健(編著)・糸田尚史(著)・小川恭子(著)他『子どもの社会的養護』(大学図書出版、2011、ISBN : 9784903060743)
- 五十嵐隆(総編集)・平岩幹男(編著)『改訂第2版 小児科臨床ピクシス2 発達障害の理解と対応』(中山書店、2014、ISBN : 9784521739687)
- 北海道日本ハムファイターズ選手会(著)・堀川真(絵)『もりのやきゅうちーむ ふぁいたーず』(北海道新聞社、2015、ISBN : 9784894538061)

授業のねらい

現代家族とその生活に関わる基礎的な知識の獲得と生活課題への関心の喚起。

到達目標

家族にかかわる基礎的用語を理解できる。

第二次大戦後のわが国における家族の動向（家族構成、家族規模、消費革命、中流意識など）について理解できる。

生活時間や家事労働に関する課題に関心を持つ。

授業方法

講義形式。受講者は講義時に紹介する参考文献をもとに常に復習しておくこと。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 家族・家庭・世帯の基礎知識 (1)家族とは？、家族の要件
- 第3回 家族・家庭・世帯の基礎知識 (2)家族形態・家族制度
- 第4回 家族・家庭・世帯の基礎知識 (3)世帯と家庭
- 第5回 社会変動と家族の動向 (1)「家」制度の廃止と民主的な家族の形成
- 第6回 社会変動と家族の動向 (2) 核家族化とその要因 ……世帯規模、世帯構成の変化
- 第7回 社会変動と家族の動向 (3) 高度経済成長と消費革命
- 第8回 社会変動と家族の動向 (4) 中流意識の問題点
- 第9回 家族周期 (1) B.S.Rowntree の家族周期
- 第10回 家族周期 (2) 家族周期モデルの変容
- 第11回 生活時間 (1) 生活時間調査 …… エネルギー消費量の算出 (レポート課題の提出有)
- 第12回 生活時間 (2) 日本人の生活時間の実態
- 第13回 生活時間 (3) 現代女性の生活時間・青少年・高齢者の生活時間
- 第14回 家事労働の特質
- 第15回 主婦論争と女性の生き方

成績評価の方法

家族に関する基礎的な知識の理解について試験（70％）によって評価する。また授業中のレポート課題の提出により授業への参加状況（30％）も評価する。

参考書

講義時に紹介

授業のねらい

少子高齢化、核家族化、経済不況による共働き家庭の増加などの社会的環境の変化により、子育て家庭を取り巻く状況は様々な問題や課題を抱えている。本授業は、家族および社会のこのような現状と課題を理解し、現在の家族に対する支援の方法、特別な支援を要する家族への支援の方法や、地域の資源、制度や連携の方法について学ぶ。

到達目標

1. 家族とは何かについて、家族の歴史や他国の実情を踏まえ理解する。
2. 現在の多様な家族形態と其中で育つ子どもの現状と対策について知る。
3. 特別な支援を必要とする家族への支援の方法を知る。

授業方法

授業では配付される講義資料とスライドを中心に進める。適宜ワークシートや事例等を用いて、グループ討議も展開する。授業終了時には次回の準備学習を課す（所用時間 30 分程度）。また事後指導としてテーマごとに課題レポート等の提出を課す。課題については授業時に口頭で説明する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
本授業の概略、歴史や文化に見える家族形態から家族とは何かについて考える
- 第2回 様々な家族形態から家族の機能役割を知る
家族の神話、家族の現実
- 第3回 家族のアセスメント(1)
ジェノグラム・エコマップ
- 第4回 家族のアセスメント(2)
家族歴、生育歴、ライフストーリーワーク
- 第5回 相談・援助者の役割と基本的態度
- 第6回 子育てと家族支援のための法律
児童福祉法、児童憲章、子どもの権利条約、発達障害者支援法他
- 第7回 家族への支援の実際(1)
ペアレントトレーニング他
- 第8回 家族への支援の実際(2)
家族面接、家族療法他
- 第9回 特別なニーズを持つ家族の援助(1)
育てにくい子ども、障害
- 第10回 特別なニーズを持つ家族の援助(2)
一人親家庭、ステップファミリー
- 第11回 特別なニーズを持つ家族の援助(3)
児童虐待、ドメスティックバイオレンス
- 第12回 特別なニーズを持つ家族の援助(4)
アルコール、依存症、精神疾患
- 第13回 子育ての家庭を支援する具体的な制度
母子保健、経済的支援他
- 第14回 保育者が家族を支援するときに重要な視点
クレーム対応、危機介入、関係機関との連携他
- 第15回 まとめ
総括、家庭支援の今後のあり方と支援の方向

成績評価の方法

到達目標 1～3 を測定するレポート 50%、授業への取り組み姿勢・参加意欲 30%、提出物 20%、により評価する。期末レポートについては答案を返却し、解答例解説資料を配付する。

教科書・参考書に関する備考

教科書・参考書は、必要に応じて随時指示する。

授業のねらい

肢体不自由児の主要な疾患や肢体不自由児の心理・生理・病理について、特に、様々な障害が重複で出現している脳性麻痺児を中心に基礎知識を中心に基礎知識を学習し、実習し、肢体不自由児に適切な支援ができる教員としての資質を培うことを目指す。

到達目標

肢体不自由児が実生活でどのような不自由を持っているか、遊びや学習でどのような支障をきたしているのか実感し理解を深めること

授業方法

授業は、座学と体験実習、イメージ実習、グループ討議など具体的、実践的に行う。
事前学習課題を提示し、予習・復習・レポート課題を課す。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 実習：肢体不自由児の運動・動作・車椅子体験
- 第3回 実習：車椅子体験の討議・報告
- 第4回 肢体不自由児の概念
- 第5回 肢体不自由の原因とおもな起因、疾患
- 第6回 実習と討議：体のしくみとその生理
- 第7回 実習と討議：体のしくみとその病理
- 第8回 実習：肢体不自由の感覚・知覚障害
- 第9回 ビデオと実習：正常運動発達
- 第10回 実習と討議：肢体不自由児の発達
- 第11回 脳性まひのタイプ別症状
- 第12回 実習とビデオ：重症児の問題
- 第13回 実習と討議：摂食
- 第14回 肢体不自由児の心理的支援、社会的・制度的課題
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況 30%、授業態度 20%、試験&レポート 50%

履修にあたっての注意

本授業は、実習を多く取り入れる。車椅子操作実習、摂食障害等に関する実習を取り入れる。実習内容によってはスカートで受講する学生は、ズボンを準備すること、各自にお弁当の準備等の用意をしてほしい事柄があるので留意すること。実習は、天候に左右されることがあるので、若干、予定が変更があると予想される教科書

教科書

日本聴能士言語士協会編『アドバンスシリーズ コミュニケーション障害の臨床3 脳性麻痺』（協同医書）

参考書

- 高橋長男『体の地図帳』（講談社）
- 五味重春『脳性まひ』（医歯薬出版）
- 江草安彦編『重症心身障害児療育マニュアル』（医歯薬出版）
- 文部省『肢体不自由児の養護・訓練の指導』（文部省）
- 筑波大学付属桐が丘特別支援学校編『肢体不自由児の養護・訓練の指導』（ジアース教育新社、2008）

授業のねらい

この授業では、知的障害児教育における教育課程の編成、指導の実際について、理解を深めることをねらいとする。

到達目標

1. 知的障害児教育の基本的事項について理解し、問題意識を持って考えることができる。
2. 知的障害児教育の教育課程や指導の実際について理解し、説明することができる。

授業方法

講義形式で行う。

授業前は、授業計画に基づいて各自予習をすること（所要時間 30 分程度）。

毎回の授業の最後に小レポートを課し、これを授業への参加状況として評価する。

授業後は、配布したプリントについて復習し、理解を深めること（所要時間 30 分程度）。

小レポートでの質問等については、次回の授業で解説する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
知的障害とは
- 第2回 知的障害児教育の歴史
- 第3回 知的障害児教育の教育課程
- 第4回 知的障害児教育の実際（生活単元学習）
- 第5回 知的障害児教育の実際（作業学習）
- 第6回 知的障害児教育の実際（日常生活の指導、遊びの指導）
- 第7回 知的障害児教育の実際（教科別の指導）
- 第8回 知的障害児教育の実際（自立活動）
- 第9回 中間のまとめ
- 第10回 知的障害児教育の実際（関連する障害）
- 第11回 知的障害児教育の実際（個別の教育支援計画、個別の指導計画）
- 第12回 知的障害児教育の実際（学習指導案）
- 第13回 知的障害児教育の実際（就学前教育、進路指導・キャリア教育）
- 第14回 知的障害児教育の実際（特別支援学級、通級指導）
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 に関する授業への参加状況（50%）、到達目標 2 を測定する試験（50%）により評価する。

履修にあたっての注意

特別支援学校教諭免許状取得の必修科目です。

教科書・参考書に関する備考

教科書なし。プリントを配布します。

参考書は、講義の中で随時紹介します。

授業のねらい

本講義は「知的障害（知的発達障害）」の特性に関する知識を身につけることで、障害を持つ子供を理解するための基盤とすることをねらいとします。また、この知識に基づいた発達や教育における支援について概要を学びます。また、支援の計画を立てる際に、具体的な発達のアセスメントに基づいた適切な手だてを検討できるようになることを目指します。

到達目標

- ・ 知的障害の特性と教育的支援の基本事項を理解する。
- ・ 知的障害の特性を踏まえて、生活場面や教育場面における支援方法を考案することができる。

授業方法

講義形式で進める。

事前学習として、講義中に提示する教科書の該当箇所について読むこと（4～8 p、所要時間 45 分程度）。講義は既読であることを前提に進めます。事後学習として、講義中に提示されたキーワードについて、自分なりのまとめを作成すること（設題 1～2 問、所要時間 45 分程度）。また、発展的な調査を行うことも期待します。これらのまとめについては、学期末にレポートとしての提出をし、成績評価の対象とします。

毎回の課題については、授業内で口頭で解説し、解説資料を配布します。

レポートを通じた質問事項についても同様とします。個別の回答・各回のレポート返却は行いませんので、必要に応じて各自でコピーを保存してください。

中間試験、期末試験に関しては、採点后に答案を返却し、解答例・解説資料を配布します。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 知的障害の定義および発達の特性(1)
- 第3回 そもそも「知的能力」とは何か
- 第4回 「特別なニーズに対応する」教育とはどういうことか
— 認知心理学的な「記憶」概念から検討する —
- 第5回 知的障害、および障害は「改善」「治療」すべきものか
— 遺伝的多様性の観点から検討する —
- 第6回 知的障害に関連するその他の障害
- 第7回 知的障害の定義および発達の特性(2)
— ここまでの講義を踏まえた再検討 —
- 第8回 特殊教育と特別支援教育
- 第9回 知的障害を持つ人の教育をめぐる法律とその運用に関する諸問題
- 第10回 特別なニーズに対応する教育の一例（言語）
- 第11回 アセスメントに基づく教育方法の検討(1)
- 第12回 アセスメントに基づく教育方法の検討(2)
- 第13回 支援の継続性と支援の場に関する問題について
- 第14回 包括的、多角的支援の重要性（きょうだい、家庭、地域）
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 を測定する講義内での中間試験（20%）、期末試験（30%）、到達目標 2 を測定するレポート（30%）、および発表・発言・授業のまとめに関するレポート提出による授業への参加状況（20%）によって評価します。

履修にあたっての注意

特別支援学校教諭免許取得の必修科目です。

教科書

有馬正高『知的障害のことがよくわかる本』（講談社、2007、ISBN：978-4062594165）

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてプリントの配布を行います。

参考ホームページ

文部科学省：知的障害教育 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/004/003.htm（このページに限らず、文部科学省が提供する情報は講義中にも提示します。）

授業のねらい

この授業では、肢体不自由とは何か、肢体不自由児の特性、肢体不自由児の教育的支援についての理解を深めることをねらいとする。

到達目標

1. 肢体不自由の基本的事項について理解し、問題意識を持って考えることができる。
2. 肢体不自由児の特性について記述し、説明することができる。

授業方法

講義に加え、実習を行う。

授業前は、授業計画に基づいて各自予習をすること（所要時間 30 分程度）。

毎回の授業の最後に小レポートを課し、これを授業への参加状況として評価する。

授業後は、配布したプリントについて復習し、理解を深めること（所要時間 30 分程度）。

小レポートでの質問等については、次回の授業で解説する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
肢体不自由とは（定義、原因）
- 第2回 身体の構造と機能
- 第3回 実習：身体の構造と機能
- 第4回 姿勢と運動
- 第5回 実習：姿勢と運動
- 第6回 運動発達
- 第7回 実習：運動発達
- 第8回 中間のまとめ
- 第9回 脳性麻痺 1
- 第10回 脳性麻痺 2
- 第11回 筋ジストロフィー
- 第12回 脊髄損傷、二分脊椎、切断、骨関節疾患
- 第13回 実習：肢体不自由児の姿勢と運動
- 第14回 補装具、車いす
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 に関する授業への参加状況（50%）、到達目標 2 に関する試験（50%）、により評価する。

履修にあたっての注意

特別支援学校教諭免許状取得の選択科目です。

実習の際はジャージなど動きやすい服装を用意してください。スカートでの受講は認めません。

教科書・参考書に関する備考

教科書なし。プリントを配布します。

参考書は、講義の中で随時紹介します。

授業のねらい

この科目は、幼稚園教員免許・保育士資格の取得に関わる必修科目である。子どもたちをとり巻く「環境」と子どもたち自身の「健康」について相互関係の観点から学ぶことを目的とする。

到達目標

子どもをとりまく自然環境・園内環境と子どもに働きかけることによって起こりうる現象について、体験を通して推測することが出来る。

授業方法

実践とつなげた考えを持てるように、講義と演習を混合した形で展開します。特に自然・運動に関する分野は、できるだけ戸外活動を主に展開します。また、毎回授業での経験から、環境との関係を考察するレポートを提出します。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
授業の展開、評価の仕方、グループ活動の説明を聞き、授業の流れを理解する。
- 第2回 幼稚園教育要領・保育所保育指針と領域「環境」及び保育内容「環境」の関係について
幼稚園や保育所での生活における「環境」「健康」の捉え方について学ぶ。
- 第3回 自然体験教育の体験1 ～子どもたちの現状～
- 第4回 自然体験教育の体験2 ネイチャーゲーム体験1
- 第5回 自然体験教育の体験3 ネイチャーゲーム体験2
- 第6回 自然体験教育の体験4 幼児向け自然活動
- 第7回 自然体験教育の体験5 ネイチャークラフト1
- 第8回 自然体験教育の体験6 ネイチャークラフト2
- 第9回 自然体験教育の体験7 幼児期の自然体験教育・授業まとめ
- 第10回 環境と身体運動1 手先の技術(ハサミ・のりなど)を伴った遊びと環境への配慮
- 第11回 環境と運動遊び(2): 全身を使った遊びと環境(場所・時間・器具)への配慮
安全環境と安全教育
- 第12回 環境と健康1 飼育栽培と指導計画
- 第13回 環境と健康2 アレルギーと食育、家庭との連携
- 第14回 環境と健康3 冬の行事とあそび
- 第15回 保育内容環境と健康のまとめと振り返り

成績評価の方法

毎回の提出物(小レポート)の評価合計(50%)とレポート(50%)で成績評価とします。

履修にあたっての注意

学則で決められた欠席日数を厳守します。自分で欠席状況を管理してください。
受講者は、返却されたレポートや提示された資料の箇所をあらかじめ読んで、授業に臨むこと。
活動によって時間が変更になります。詳しい日程については第1回目の授業時に提示します。

教科書

能條歩『人と自然をつなぐ教育～自然体験教育学入門～』(NPO 法人北海道自然体験サポートセンター、2014年、ISBN: 978-4990594305)

教科書・参考書に関する備考

教科書については、授業の中で説明し購入します。

参考書

能條歩『人と自然をつなぐ教育Ⅱ～自然体験教育の実践～』(NPO 法人北海道自然体験サポートセンター、2015年、ISBN: 978-4990594329)

授業のねらい

この授業では、保育内容5領域のうち、「言葉」と「人間関係」に焦点をあて、それぞれのねらいを達成する保育を展開するために必要な事柄を学ぶ。子どもの言語発達と子どもをとりまく人間関係は密接に関係していることを子どもの遊びの場面や生活の場面を取り上げながら学ぶことによって、保育内容は相互に関連しあっていることを確認する。多くの授業で事例やビデオ教材等を用いることにより、子どもの姿を具体的に想像しながら、保育者となるために必要な知識である保育内容についての理解を深めていく。

到達目標

1. 保育内容言葉と人間関係のねらいや内容はどのようなものが説明することができる
2. 乳幼児期の言葉と人間関係の発達過程を述べるができる
3. 子どもの社会性を伸長させるような人と関わる体験や、人と豊かな交わりを持つための言語習得を保障していくために必要な保育環境について述べるができる

授業方法

前半は子どもの言語発達や人間関係、認知発達について、保育の場面と照らし合わせながら考えていく。後半は、実際の保育の場面で見られる事例を示しながら、保育内容を構成していく際には、保育者はどのような点に留意すべきであるかを考える。

第1回目より、次回授業のトピックに関する事前学習（30分程度）を課し、その内容を各回の授業に取り入れながら進めていく。また、授業後には配布したプリントやノートを参考にして授業内容の復習をすることを求める（30分程度）。なお毎回の課題は次回の授業時に簡単なコメントをつけて返却する。また期末試験については、採点后に模範解答と共に返却する。

授業計画

- 第1回 保育内容とは何か・保育内容言葉と保育内容人間関係のねらいと内容
- 第2回 乳幼児の言葉の発達と人間関係 乳児
- 第3回 乳幼児の言葉の発達と人間関係 乳児～未満児
- 第4回 乳幼児の言葉の発達と人間関係 3歳児
- 第5回 乳幼児の言葉の発達と人間関係 4、5歳児
- 第6回 文字と言葉遊び
- 第7回 保育内容と指導案の作成
- 第8回 幼児理解の重要性
- 第9回 自尊感情の育成と思いやりの心
- 第10回 総合的に指導するとは
- 第11回 自立と協同
- 第12回 道徳感情・規範意識の育成
- 第13回 幼児の喜びや悲しみとは
- 第14回 保育者の役割とは
- 第15回 保育内容言葉と人間関係まとめ

成績評価の方法

毎回提出してもらう課題（30%）、到達目標1から3を測定する試験（70%）により評価する。

履修にあたっての注意

子どもの姿を想像しながら授業を受けることで、保育内容への理解を深めることができることを目指すため、授業態度については特に気を付けて欲しい。

教科書・参考書に関する備考

適宜プリントを配布する。

授業のねらい

この授業では、保育内容としての子どもの音楽表現活動について理解し、それらの表現活動を行なう際、保育者として必要となる基礎的な音楽能力を習得することをねらいとしています。

到達目標

幼児教育、保育という視点を基に様々な音楽表現活動を行い、それらの活動を通し、子どもたちの感性や表現力、創造性をどのように促すことができるかを理解し、それに伴う音楽的能力・技術を習得することができる。

授業方法

この授業では、子どもの音楽表現とその音楽表現を導くために保育者として必要な音楽的技術、能力に関して、実践を交えながら学んでいきます。また、授業ごとに手遊び発表やコードネームを用いた奏法・作編曲法の学習も行います。手遊び、コード奏法、その他、様々な課題を出しますので、毎回の授業内容を基に事前事後学習（計80分程度）を行ってください。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 ・保育者に必要な音楽的表現能力について（幼児と音楽）
・手遊び発表のためのグループ作成
- 第3回 ・保育者に必要な音楽的表現能力について（歌唱表現技術に関して）
・グループごとに手遊び発表
- 第4回 ・保育者に必要な音楽的表現能力について（うたあそび・手遊び）
・グループごとに手遊び発表
・移調について（説明）
- 第5回 ・表現するためのテクニックとは何か
・グループごとに手遊び発表
・移調について（課題確認）
- 第6回 ・保育者に必要な音楽的表現能力について（リトミックの理論）
・グループごとに手遊び発表
・和声進行について（説明）
- 第7回 ・保育者に必要な音楽的表現能力について（リトミックの基礎演習）
・グループごとに手遊び発表
・和声進行について（課題確認）
- 第8回 ・保育者に必要な音楽的表現能力について（リトミックの実践演習）
・グループごとに手遊び発表
・和声進行を用いた簡易作曲法（説明）
- 第9回 ・保育者に必要な音楽的表現能力について（打楽器を用いた合奏）
- 第10回 ・保育者に必要な音楽的表現能力について（ハンドベルを用いた合奏練習）
・グループごとに手遊び発表
・和声進行を用いた簡易作曲法（課題確認）
- 第11回 ・保育者に必要な音楽的表現能力について（ハンドベルを用いた合奏発表）
・グループごとに手遊び発表
・非和声音について
- 第12回 ・あそびと音楽活動（活動のねらいを考える）
・グループごとに手遊び発表
・簡易編曲法（説明）
- 第13回 ・あそびと音楽表現（音楽を主体とした活動）
・グループごとに手遊び発表
・簡易編曲法（課題確認）
- 第14回 ・あそびと音楽表現（音そのものを主体とした活動）
・グループごとに手遊び発表
・簡易編曲法（課題発表）
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標測定のための試験（60%）、到達目標達成のための課題への取り組み（20%）、授業への主体的参加状況（20%）により評価を行う。

履修にあたっての注意

実技が中心となるので、意欲的に取り組んでください。また、課題が多いので、しっかりと事前事後学習を行い、授業に備えてください。
授業進行の妨げになるような行為がある場合、退学を命じることがありますので、従ってください。

教科書

小林美実『こどものうた 200』（チャイルド本社、1975）

新海節 田中宏明『ほどよいレベルで弾ける 保育者のためのピアノ&童謡曲 60』（圭文社、2015）

授業のねらい

造形制作活動を通して、幅広い経験をする。子どもたちの表現を導くために、基本となる絵の具の基礎技術を知るなど、自分自身の活動を一つ一つ積み重ねることを目的とする。

到達目標

保育学科での造形表現としての授業は、1年生での授業を土台として、さらに自己に表現力を育て造形マインドを形成することを目標とする。また、制作をするとき、何を作るかをなかなか決められないことが多く見受けられるので、日常少しでも描くことを取り入れることを目標とする。

授業方法

前半の授業は、造形表現をしていく上での基本的な作業が中心となる内容である。造形の技法書などを図書館などで参考に見ておくと理解が早まる。(30分程度) 後半は、グループで制作するものが多くなるので、欠席に注意する。子どもたちのコミュニケーション能力にかかわるものとなるので、絵本、童話、昔話などを事前に調べておくとよい。また制作は授業内で完成しないことも多いため、事後学習として作品を仕上げることを課す。

授業計画

- 第1回 表現の多様性を知る。ガイダンス
絵の具の基礎技法(1)
基礎技法を使った実際例
- 第2回 絵の具の基礎技法(2)
グラデーション、ドリッピング
- 第3回 絵の具の基礎技法(3)
スクラッチ、パチック、フロッタージュ
- 第4回 絵の具の基礎技法(4)
ステンシル、スタンプング、スパッターリング
- 第5回 絵の具の基礎技法(5)
カラーペイスト（フィンガーペイント）、デカルコマニー
- 第6回 絵の具の基礎技法(6)
コラージュ（フォトモンタージュ）
- 第7回 基礎技法を使った作品制作
- 第8回 様々な表現法 紙による体験
- 第9回 様々な表現技術 紙芝居、ペーパーサート
- 第10回 グループによる表現作品 制作(1)パネルシアター
グループ分け、題材探し
- 第11回 グループによる表現作品 制作(2)パネルシアター
制作
- 第12回 グループによる表現作品 制作(3)パネルシアター
制作
- 第13回 作品発表 リハーサル、発表(1)
- 第14回 作品発表 発表(2)
- 第15回 作品発表 発表(3)

成績評価の方法

授業への取り組み（40%）、制作状況（30%）、作品（30%）

履修にあたっての注意

水彩絵の具、クレヨン、造形筆、パレットの用意
グループでの活動、制作も多数行うので、特に出席、チームワークを心がけること

教科書・参考書に関する備考

授業の中で独自に作成したプリントを配付する。

76601

児童文学

担当教員：久保田知恵子

2単位 後期

授業のねらい

絵本を含む児童文学は、やさしい言葉で書かれているが、深い意味をもった大人も読む価値のある文学である。本講義ではまず、そのような豊かな質をそなえる児童文学の誕生と発展の歴史をたどる。また、すぐれた作品を取り上げ、その内容を具体的に解説することで、子どもの本の価値を明らかにすることを目的とする。

到達目標

- 1、子どもの本への理解を深めること。
- 2、保育の現場で行われる絵本の読み聞かせに行かせること。

授業方法

原則として講義形式をとるが、図書館に読んで欲しい児童文学（絵本を含む）を設置しておくので、1200字程度にまとめた感想文をレポートとして提出してもらいます。

また、講義時に講義内容についての簡単な感想を書いてもらうこともあります。

児童文学に関する理解を深めるために、たくさんの本を読むことを事前・事後学習とします。

授業計画

- 第1回 児童文学とは何かー誕生とその背景
- 第2回 グリムの昔話① グリム兄弟と童話集の特徴
- 第3回 グリムの昔話② グリム童話を読む
- 第4回 アンデルセン童話① アンデルセンの生涯と文学的特徴
- 第5回 アンデルセン童話② アンデルセン童話を読む
- 第6回 イギリス絵本① 絵本の誕生とイギリス絵本の黄金期まで
- 第7回 イギリス絵本② ピーターラビットシリーズを中心に
- 第8回 アメリカ絵本① 草創期～発展期
- 第9回 アメリカ絵本② 黄金期その1
- 第10回 アメリカ絵本③ 黄金期その2
- 第11回 日本の絵本
- 第12回 物語と子どもの成長① 0歳から3歳頃まで
- 第13回 物語と子どもの成長② 3、4歳頃から小学校低学年まで
- 第14回 物語と子どもの成長③ 高学年から
- 第15回 バリアフリー絵本

成績評価の方法

到達目標を測る読書レポート（60%）、授業への参加状況（40%）により評価します。

履修にあたっての注意

図書館に設置した児童文学の指定図書を読み、レポートを提出してもらいます。

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを配布。参考文献については、必要に応じて講義時に紹介します。

授業のねらい

「演劇的手法」を使ったコミュニケーションワークショップ形式を主とした授業です。演劇では身体、音楽、造形、言語など多くの表現技術が必要となります。絵本や昔話から「上演」を企画し、力を合わせ、子どもたちの前で実行できる技術を身につけます。

到達目標

「苦手を克服し、他者と円滑なコミュニケーションがとれる（仲間、上司、生徒、そしてその親）人間となる」ことを目標とします。

授業方法

「アクティビティ」として今、全国で話題になっている自己表現法と、仲間とひとつのものを創りあげる「インプロゲーム」から、表現する楽しさを学び合います。15回の授業では多くのことを学びますので、それぞれの活動内容を踏まえ、事前事後学習（計60分程度）を行ってください。

授業計画

- 第1回 「バースディチェーン」から自分の性格を学ぶ。
一対一の表現ゲームからスタートします。
- 第2回 「コミュニケーション上手の3K」。相槌は会話のレギュレーターについて。
- 第3回 「五感のチェック」で自分を知りましょう。
言語が使えないとしたら、あなたは思いを何で伝えますか？
- 第4回 「やりとりを止めるもの」。どうして私たちの会話は、途中で止まってしまうのでしょうか？
- 第5回 「好意の返報性」について考えます。絵本の中にも、たくさんの「好意の返報性」があります。
- 第6回 「ういろう売りのセリフ」について学び、実際に声に出してみます（絵本が出版されました）。
- 第7回 オノマトペ（擬音語・擬声語・擬態語）。
どうして絵本の中には、こんなにオノマトペがあふれているのでしょうか。
- 第8回 「表現力を豊かにする7つのポイント」を知って、読み・語り聞かせのプロを目指しましょう。
- 第9回 絵本「きつねのおきゃくさま」の立体化。
台本にして演じてみると、、、？
- 第10回 「パントマイムの扉」「進む」というゲームから、チャレンジする心を育てていきます。
- 第11回 絵本「こぎつねコンとこだぬきポン」を立体化。台詞に加え、BGM、歌を入れると、なんとミュージカルに！
- 第12回 俳優になって、「こぎつねコンとこだぬきポン」を演じてみましょう。
- 第13回 ミニオペレッタを創ろう！①
グループに別れ、稽古します。
- 第14回 ミニオペレッタを創ろう！②
音楽、ちょっとしたダンスを入れ、セットもつくりま。
- 第15回 ミニオペレッタを創ろう！③
グループごとに取り組んだ成果を発表します。

成績評価の方法

期末レポート60%、授業への取り組み（グループの一員としての協力、その態度等）40%

履修にあたっての注意

実際に身体を動かす場面が多くあります。動きやすいスタイルで参加して下さい。

授業のねらい

保育者として教育、保育現場で必要とされる音楽スキルの中で、鍵盤楽器などによる子どもの歌の弾き歌いの技術はその必要性が高い。その為、この授業ではピアノを用いて、より実践的な子どもの歌の伴奏法や弾き歌いのための技術を身に付けることをねらいとする。

到達目標

マンツーマンのレッスンなどを通して、子どもの歌を中心とした弾き歌いの技術を習得し、授業で取り上げた曲のうち数曲をレパートリーとすることができる。

授業方法

担当教員：新海節・相原啓寿・相原真美・石橋克史・大高紫乃・小杉恵・佐藤奈都美・須藤尚美・曾根崎直子・辻千絵・若狭玲衣

※複数教員により授業を行う。

本科目では、学生のピアノ学習の進捗状況によりその演奏技術にばらつきがある為、学生各自のピアノ技術のレベルに応じた楽譜を使用し、主に個人レッスンを通して各自の進捗に準じた指導を受けることとなる。その為、統一した授業計画を示すことは難しいが、以下にピアノ学習初心者における基本的な授業計画を示す。教員より学生各自に応じた音楽的指導及び課題設定を行うので、それを基に事前事後学習（計 80 分程度）を行うこと。

授業計画

- 第1回 全体オリエンテーション及び担当教員オリエンテーション
- 第2回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（まつぼっくり）
- 第3回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（おべんとう）
- 第4回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（はをみがきましょう）
- 第5回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（おかえりのうた）
- 第6回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（しゃぼんだま）
- 第7回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（チューリップの伴奏付け）
- 第8回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（とんぼのめがね）
- 第9回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（たまばたさま）
- 第10回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（おつかいありさん）
- 第11回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（ゆき）
- 第12回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（ふしぎなポケット）
- 第13回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（どんぐりころころ）
- 第14回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（こぎつねの伴奏付け）
- 第15回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（おはようのうた）
- 第16回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（さよならのうた）
- 第17回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（おかあさん）
- 第18回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（大きな古時計）
- 第19回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（アイアイ）
- 第20回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（あめふりくまのこ）
- 第21回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（犬のおまわりさん）
- 第22回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（大きなたいこ）
- 第23回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（山の音楽家）
- 第24回 子どもの歌の弾き歌い基礎的練習（おなかのへるうた）
- 第25回 発表会形式の総括のための準備（各自の曲の選曲）
- 第26回 発表会形式の総括のための準備（各自の曲の伴奏練習）
- 第27回 発表会形式の総括のための準備（各自の曲の歌唱練習）
- 第28回 発表会形式の総括のための準備（各自の曲を音楽表現の観点から練習）
- 第29回 発表会形式の総括のための準備（各自の曲のまとめ）
- 第30回 総括（発表会形式による演奏）

成績評価の方法

到達目標測定のための実技試験（80%）、授業への主体的参加状況（20%）により評価を行う。

履修にあたっての注意

ピアノの演奏レベル向上のためには日々の練習が欠かせない。その為、毎日の練習を怠らず地道に努力すること。

教科書

新海節 田中宏明 編『ほどよいレベルで弾ける 保育者のためのピアノ&童謡曲 60』(圭文社、2015)
小林美実 編『こどものうた 200』(チャイルド本社、1975)

教科書・参考書に関する備考

上記の教科書に掲載されていない童謡、簡易楽譜など、各自のピアノ技術のレベルに応じた楽譜をその都度指示する場合がある。

授業のねらい

子どもたちの造形を援助し、引き出すためにはまず指導する側が幅広い経験を重ねることが大切となる。自身のオリジナリティの世界を広げるためのいろいろな活動を行う。

到達目標

造形することの面白さ、楽しさを、自分の土台となる、「造形マインド」を持てるようになること。選択授業である事もあり、美術が苦手な人、嫌いな人もじっくりと造形に向きあって、まずは体験すること、経験擦る事を目標とする。

授業方法

様々な画材を使った制作。

制作を通して感じた事、考えた事が、次の制作へとつながり、アイデアが生まれるので、毎回何かを作ります。制作をするために様々な素材の下調べや作品を仕上げる時間を事前・事後学習として課します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス。子どもの造形について、表現の多様性についてなど、自分を解放するために。
- 第2回 ワークショップ「ひとつがたくさん」Ⅰ
4人一組になって、一つの作品を作る
- 第3回 ワークショップ「ひとつがたくさん」Ⅱ カラーコピーして、絵本に仕立てる
- 第4回 色鉛筆の基礎Ⅰ 色鉛筆と紙の組合せ いろいろな紙との相性
色鉛筆の性質を知る 好きな物を描いてみる
- 第5回 色鉛筆の基礎Ⅱ 水性色鉛筆 水彩紙とは
- 第6回 色鉛筆の基礎Ⅲ 油性色鉛筆 使用する道具と紙一版面を知る
- 第7回 紙を使って（子どもに適した体験） 紙版画・スチレン版画
- 第8回 紙版画・スチレン版画 刷り一準備・道具・適した絵の具・後片付け
- 第9回 アクリル絵の具 エリック・カールになってみようⅠ
色紙作り
- 第10回 エリック・カールⅡ 色紙から作るコラージュ
- 第11回 エリック・カールⅢ 完成
- 第12回 2019年用カレンダー作りⅠ 仕掛け絵本から 仕掛けのいろいろ
- 第13回 仕掛けのあるカレンダー制作Ⅱ 仕掛け絵本を参考に
- 第14回 仕掛けのあるカレンダー制作Ⅲ
- 第15回 合評 全作品を振り返る

成績評価の方法

作品の提出（50%）、制作姿勢（30%）、授業への取り組み（20%）

履修にあたっての注意

各自必要な道具をまず準備をすること、授業への取り組みかた、後片付けなどにも注意を払う
絵の具などが必要になります

授業のねらい

この科目は幼児の理解と保育者の援助の実際を、「乳幼児・障害児実習」と連動させながら実際の子どものふれあい、実習での実践を通して学ぶ演習科目である。具体的には「実習」でふれた子どもの姿から心身の発達を確認する等、実践的な場面を通して幼児の理解を深める。また、幼児に必要な援助や活動を立案し「実習」での実践を通して反省・評価を行ない具体的な援助方法を学ぶ。

到達目標

1. 遊びや生活場面における幼児期の子どもの特徴を説明することができる
2. 幼児期の子どもの成長発達を促す保育者の援助の仕方のポイントを列挙できる

授業方法

学年を4つのグループに分け、配属される幼稚園・保育園のクラスごとに、乳幼児・障害児実習に向けての準備を行い、実習後に振り返りを行うことを通して、幼児の理解を深め、その援助方法を学んでいく。実習準備にあたっては、この授業時間以外にも、指導案の作成、実習に向けての準備など、たくさんの事前・事後学習の時間を要する。

期末に提出するレポートはコメントをつけて返却する。

授業計画

以下の予定であるが、グループによって異なる。

- 第1回 ガイダンス：授業の構成と進め方
- 第2回 子どもの発達と生活
- 第3回 子どもの発達と遊び
- 第4回 子どもの発達と援助
- 第5回 実習指導案の作成方法
- 第6回 指導計画の立案・教材研究(1)：幼稚園実習1回目
- 第7回 実習の評価・反省と次回立案(1)：幼稚園実習2回目
- 第8回 実習の評価・反省(1)
- 第9回 指導計画の立案・教材研究(2)：保育所実習1回目
- 第10回 実習の評価・反省と次回立案(2)保育所実習2回目
- 第11回 実習の評価・反省(2)
- 第12回 実際の子どもの姿と援助：設定保育場面
- 第13回 実際の子どもの姿と援助：自由遊びや生活場面
- 第14回 実習全般の振り返り
- 第15回 理論と実践の関係性について

成績評価の方法

実習準備への取り組み状況（30%）、到達目標1と2を測定するレポート（70%）により評価する。

履修にあたっての注意

実習と連動して行う科目のため、グループでの活動が多くなる。人に流されず、主体的・積極的な参加を期待する。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてプリントを配布する。

授業のねらい

この科目は、藤幼稚園と羊ヶ丘藤保育園の協力の下で、実際の子どもや保育者とかかわり、大学で学んだ諸理論を実習を通して具体的に総合的に体験し、その理解を深めることを目的とする。実践にあたっては、「幼児理解と援助」「保育の心理学」と連動し、大学内で指導計画の立案・教材研究等を行い、園での実習をもとに研究・反省等を行うといった一連の流れの中で、子どもを理解し、具体的な保育技術・方法や保育者に必要な知識・技術等を修得する。

到達目標

- 1 見学・観察・実習を通して、乳幼児の発達や生活、保育の理解を深め、集団における指導や個別援助の基本的技術などの実践力を身につける
- 2 気になる子どもや障がい児の行動、統合保育の実際から、子どもの心理や発達を理解し、個と集団の問題や具体的な援助のあり方を考察する

授業方法

現場での実習はグループ毎に行い、通年で同じクラスを担当する。具体的な実施方法は授業内で配布する「藤女子大学人間生活学部保育学科藤幼稚園・羊ヶ丘藤保育園 2017 年度乳幼児・障害児実習手引き」に拠る。

実習担当でないグループは、大学での演習となる。また、実習が始まる 5 月までの期間と、実習終了後の 12 月以降は、大学でガイダンスや振り返り等を全体で行う。

授業計画は、実習の始まる 5 回目以降はグループ毎に幼稚園・保育所での実習及び大学での演習となるため、順番が異なる。

また、授業内で行えることは一部であり、子どもの発達に応じた実習案や教材研究の見直し、話し合い等は事前・事後学習で行うこととなる。さらに、慣れない環境で体調を崩しやすく、実習日誌の記載は事後学習となるため、心身の健康に十分留意して実習に臨み、計画的に進めること。

授業計画

- 第 1 回 ガイダンス：実習の構造と進め方、グループ分け
- 第 2 回 実習園の理解と実習の心構え
- 第 3 回 指導計画の立案方法
- 第 4 回 障がい児理解と統合保育
- 第 5 回 幼稚園実習(1) 縦割り保育、絵本・紙芝居
- 第 6 回 幼稚園実習(2) 手遊び
- 第 7 回 大学での演習(1) 立案・教材研究
- 第 8 回 大学での演習(2) 実践演習と計画の見直し
- 第 9 回 保育所実習(1) 自由遊び・昼食・午睡の子どもの姿と生活
- 第 10 回 保育所実習(2) 保育者の保育と子ども発達
- 第 11 回 大学での演習(3) 保育教材の活用、絵本・紙芝居・お話・素話
- 第 12 回 大学での演習(4) 子どもの興味関心を高める手遊び・ペープサート
- 第 13 回 大学での演習(5) 保育者の技能、製作活動
- 第 14 回 前期実習を通しての学びのまとめ
- 第 15 回 後期実習に向けてガイダンス
- 第 16 回 幼稚園実習(3) 4-5 歳児の運動遊び、絵本等の実践
- 第 17 回 幼稚園実習(4) 製作、絵本等の実践
- 第 18 回 幼稚園実習(5) 4-5 歳児の運動遊び、絵本等の実践
- 第 19 回 大学での演習(6) 各クラスの子どもの発達に応じた製作教材の研究
- 第 20 回 大学での演習(7) 各クラスの子どもの発達に応じたカード遊び・体を使った遊び・音楽遊びの研究
- 第 21 回 大学での演習(8) 集会での人形劇・楽器演奏・合唱・手品・演劇・ラインダンス等の研究
- 第 22 回 保育所実習(3) 製作、集会での発表、障がい児保育と統合保育の実践
- 第 23 回 保育所実習(4) 音楽遊び・表現活動、乳児・未満児保育の実践
- 第 24 回 保育所実習(5) 運動遊び・表現活動、お話、影絵・劇・楽器演奏の実践
- 第 25 回 大学での演習(9) 礼状の書き方
- 第 26 回 大学での演習(10) 反省と評価、研究と工夫の大切さ
- 第 27 回 大学での演習(11) プレイバルーン、カードゲーム等の実践と体験
- 第 28 回 大学での演習(12) シフォン布等様々な教材を使った保育実践と体験
- 第 29 回 乳幼児・障害児実習全体の講評
- 第 30 回 実習報告会

成績評価の方法

到達目標 1～2 共に、以下により評価する。
実習への取り組み (50%)、日誌・指導案・教材等の提出物 (50%)

履修にあたっての注意

実習は日々の貴重な保育の時間をお借りして行うため、学生であっても子どもにとっては、ひとりの「保育者」であるという自覚と責任ある行動が必要である。。子どもとかかわる機会を大切に、積極的な態度で臨むとともに、体調管理に努め、欠席のないようにすること。やむを得ず欠席をした場合には、後日補講をします。事前準備・事後の記録整理を行うこと。

教科書

金子龍太郎・吾田富士子監修『保育に役立つ！子どもの発達がわかる本』（ナツメ社、2011）

教科書・参考書に関する備考

「藤女子大学人間生活学部保育学科藤幼稚園・羊丘藤保育園 2017 年度乳幼児・障害児実習手引き」

授業のねらい

この授業は、実際に子どもや保護者と直接かかわりながら、子育て支援の必要性や子育て支援の実際について学びを深めることを目的としています。この演習は大学での授業であると同時に、参加される保護者や子どもたちにとっては「子育て支援の場のひとつ」となっています。それを念頭におき、「子育て支援（理論）」での学びをふまえながら、子ども、保護者に対する支援的なかかわりを実践していきます。

到達目標

1. 親子にかかわり、必要な支援について考えることができる。
2. 保護者がかかえる問題を読み取る努力をしたり、対応を考えることができる。
3. 子育て支援の実際について理解する。

授業方法

保育実習室において、演習形式でおこないます。

事前・事後学習として、日頃より子どもや子育てに関するトピックについての情報を得ておくこと。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
授業の特性、15回の進め方と評価、子育て支援の実際・日程・諸注意等
- 第2回 子育て支援実践に向けての準備(1)環境構成等
- 第3回 子育て支援実践に向けての準備(2)企画と具体的な準備
- 第4回 子育て支援の実際(1)出会いの場
- 第5回 子育て支援の実際(2)前回の反省をふまえて
- 第6回 子育て支援演習(1)ふりかえりと保護者とのかかわりにむけて
- 第7回 子育て支援の実際(3)保護者への自己紹介
- 第8回 子育て支援の実際(4)保護者対応を視野にいれて
- 第9回 子育て支援演習(2)保護者対応のふりかえりと戸外活動にむけて
- 第10回 子育て支援の実際(5)戸外遊び①危険に注意して
- 第11回 子育て支援の実際(6)戸外遊び②遊びの広がり留意して
- 第12回 子育て支援演習(3)戸外遊びのふりかえりと水遊び・施設見学にむけて
- 第13回 子育て支援の実際(7)水遊び
- 第14回 子育て支援施設見学（見学先未定）
- 第15回 まとめ
前期実践の反省と後期にむけて

成績評価の方法

到達目標1～3：演習への参加状況（80%）、学期末のレポート（20%）で評価する。

履修にあたっての注意

学外から子どもや保護者が参加する演習であるため、演習への責任のある参加姿勢を重視する。学外者への対応には十分な配慮が求められることや、時間外の準備がある場合があることを理解しておくこと。なお、演習の特性により受講生数の制限があります。

授業のねらい

この授業は、子育て支援Ⅰ（演習）に引き続き、子どもや保護者と直接かかわりながら、子育て支援の必要性や子育て支援の実際について学びを深めることを目的としています。この演習は大学での授業であると同時に、参加される保護者や子どもたちにとっては「子育て支援の場のひとつ」となっています。それを念頭におき、「子育て支援（理論）」ならびに「子育て支援Ⅰ（演習）」での学びをふまえながら、子ども、保護者に対する支援的なかかわりの実践を深めていきます。「子育て支援Ⅰ（演習）」を受講する学生は原則として受講してください。

到達目標

1. 子育て支援の実践に主体的に関わることができる。
2. 子育て支援の理論と実践を結びつけて考えることができる。

授業方法

保育実習室において、演習形式で行います。

事前・事後学習として、日頃より子どもや子育てに関するトピックについての情報を得ておくこと。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション 後期演習の進め方および準備・企画
- 第2回 子育て支援の実際(1)親子との再会
- 第3回 子育て支援の実際(2)保護者の話の傾聴
- 第4回 子育て支援演習(1)保護者との話のふりかえりと秋の親子遊びにむけて
- 第5回 子育て支援の実際(3)秋の親子遊び
- 第6回 子育て支援演習(2)秋の親子遊びのふりかえりと保護者との茶話会にむけて
- 第7回 子育て支援の実際(4)学生企画による保護者との茶話会
- 第8回 子育て支援演習(3)保護者との茶話会ふりかえりと子育て支援講座にむけて
- 第9回 子育て支援の実際(5)子育て支援講座
- 第10回 子育て支援演習(4)クリスマス会にむけて
- 第11回 子育て支援の実際(6)クリスマス会
- 第12回 子育て支援演習(5)活動のふりかえりとディスカッション
- 第13回 子育て支援演習(6)家族に関する記録・子育て支援演習記録のまとめ
- 第14回 地域の子育て支援の場への参加
- 第15回 まとめ 1年間の反省および総括

成績評価の方法

到達目標1を測定する事前・事後指導を含めた演習への参加状況（80%）、到達目標2を測定するレポート（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

受講にあたっては、前期の演習を履修し単位認定されていることが条件になる。前期と同様、演習への参加状況および通常点を重視する。時間外に活動の準備をする時間が必要であるため、主体的にそれらにかかわる態度で臨むこと。なお、演習の特性により受講生数の制限があります。

授業のねらい

心理学調査法は、心理学において用いられる研究方法と調査を実施する際に必要な配慮について学ぶことを目的とした授業です。私たちは、わざわざ調査を行わなくても「○○ちゃんはいつもこの遊びをしている・○○さんは授業のときによく発言する」など、他者の行動を理解することができます。ところが、このような理解には、個人的な思い込みや偏見などが影響をしている場合もあります。しかし、保育者には、そういった主観的な理解ではなく、子どもの行動を客観的に理解することが求められます。観察法・面接法といった研究方法を学ぶことは、保育者に求められる子どもの行動を客観的に理解する能力を高めることにもつながります。

到達目標

1. 人間の行動を客観的に記録するために注意すべき点を理解し、それらを考慮した調査が実施できること
2. 得られたデータについて、客観的かつ多面的に考察できること

授業方法

1～2回目は、調査に関する全般的なことがらについて説明を行います。3回目以降は、調査方法ごとに「調査方法の説明・調査の計画・調査の実施・結果の分析・考察・発表」という流れで授業を進めていきます。

調査内容を検討する回では、事前に調査案（用いる課題・調査場面など）を準備してください。また、調査期間中は、グループごとに、授業時間外での調査・発表準備などに取り組むことが必要です。予習・復習に必要な時間の目安は、調査案に関する回ではあわせて1～2時間、調査を実施する回では合わせて3～4時間、分析・発表準備の回では合わせて2～3時間です。

発表資料・レポート・予習復習として提出されたものは、コメントをつけて返却します。分かりやすい資料を作るコツや、自分の分析力・論述力を確認するための手がかりとしてください。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：授業内容の説明・授業の進め方と評価の方法についての確認
- 第2回 さまざまな調査方法：調査をする意味・調査方法の紹介・倫理的な配慮の重要性
- 第3回 観察法(1)：観察法の種類・結果のまとめ方
- 第4回 観察法(2)：観察法の練習
- 第5回 実験場面の観察(1)：観察法の流れ・実験内容の検討
- 第6回 実験場面の観察(2)：予備調査・調査内容の決定
- 第7回 実験場面の観察(3)：調査の実施・分析
- 第8回 実験場面の観察(4)：結果の考察
- 第9回 実験場面の観察(5)：調査結果の発表
- 第10回 自然場面の観察(1)：調査の流れ・調査内容の検討
- 第11回 自然場面の観察(2)：予備調査・調査内容の決定
- 第12回 自然場面の観察(3)：調査の実施・分析・考察
- 第13回 自然場面の観察(4)：調査結果の発表
- 第14回 面接法(1)：面接法の種類と方法
- 第15回 面接法(2)：面接法を用いた研究の紹介

成績評価の方法

到達目標1・2の達成度を測定するグループ活動への参加状況（5～9回目分と10～13回目分：各20%）、到達目標1・2の達成度を測定する予習・復習への取り組み（40%）個人ごとのレポート（5～9回目分と10～13回目分：各10%）によって評価します。また、個人レポート課題発表時に提示するレポートの形式は、厳守してください。

履修にあたっての注意

この授業では、授業内・授業外で行うグループでの活動に積極的に取り組むことが求められます。そのため、体調が思わしくないときや特別な事情を除いて欠席せず、積極的に参加することを受講の条件とします。また、成績評価におけるグループでの活動への参加状況の占める割合が高いので、欠席が多い場合、単位を修得することが難しくなります。なお、実験室の数の都合により、受講人数を12名程度に制限します。4月のガイダンス期間中に受講についての説明会を行いますので、受講を希望する方は必ず説明会に参加して下さい。説明会に参加の方は、この講義を受講することはできません。

参考書

松浦均・西口利『観察法・調査的面接法の進め方』（ナカニシヤ出版、2008、ISBN：9784779502903）
 中澤潤・大野木裕明・南博『心理学マニュアル 観察法』（北大路書房、1997、ISBN：9784762820762）
 三浦麻子『なるほど！心理学研究法』（北大路書房、2017、ISBN：4762829668）

70251

キリスト教保育 担当教員：大室道夫・渡邊 浩・田中かおる・辻 淑江 2単位 前期

授業のねらい

人は死を迎えるときまで、生きる意味を問い続けなければならない。知識と身体の成長が著しい幼児の生活を援助するためには、生きる意味を問い続ける精神的な価値を追い求める保育者の存在が求められる。各自が考えていくための材料提供を行う。

現役牧師としての立場から保育・保護者教育に具体的に関与してきた田中は、キリスト教保育の基盤である聖書を通して、聖書の間観・教育観に触れ、そこからキリスト教保育の視点を展開していく。

到達目標

- ・キリスト教精神の幼稚園、保育園などへの関心が高まる。
- ・幼児理解や幼児教育に対する考えを深めたいという意欲を持つことが出来る。
- ・自分と向き合うことが出来、自己肯定感を持つことが出来る。

授業方法

毎回の資料を配布しレポートを提出していただきます。また、配布資料を元に復習し次の講義に臨むことを求めます。

1～7：講義と保育現場での実践例から、キリスト教と保育の関係の具体化を図る。

8～15：8月に集中講義として講義形式で以下の内容を行う。

授業計画

- 第1回 生活とキリスト教1「歴史的な視点から」
- 第2回 生活とキリスト教2「教育的な視点から」
- 第3回 生活とキリスト教3「保育者としての視点から」
- 第4回 キリストの教えと園生活の実際1
- 第5回 キリストの教えと園生活の実際2
- 第6回 キリストの教えと園生活の実際3
- 第7回 キリストの教えと園生活の実際4
生き方を学んでいる幼児に応えるキリスト教保育
- 第8回 キリスト教保育とは(1)日本の保育界に与えたキリスト教の影響
- 第9回 聖書における人間観(1)神に造られた人間(天地創造物語)
- 第10回 聖書における人間観(2)人間の問題(アダムとエバ)
- 第11回 聖書における人間観(3)人間の問題(カインとアベル)
- 第12回 聖書における人間観(4)神の救いと約束(箱舟物語)
- 第13回 聖書における人間観(5)神の導き(ヨセフ物語)
- 第14回 聖書における人間観(6)神の期待(主イエス・キリストの生涯と教え)
- 第15回 キリスト教保育とは(2)『改定キリスト教保育指針』に学ぶ

成績評価の方法

渡邊・辻・田中のそれぞれの成績評価を合算する。

毎回小レポート、および授業後にテーマを与え、授業内容をふまえた考察をするレポートがある。

小レポート50%、レポート50%で評価する。

履修にあたっての注意

- ・キリスト教精神に基づく保育とは何かについて、教育実習の振り返りをしておくこと。(山田・辻)
- ・本学の理念に深く関連するキリスト教保育とは何かを思考し、どのように実践に生かせるかを考えてほしい。出席および授業参加態度を重視する。(田中)

教科書

日本聖書協会『『聖書』-新共同訳-』(1988)

教科書・参考書に関する備考

(田中)

- ・必要に応じて授業で資料を配布する。
- ・『聖書』-新共同訳- (日本聖書協会、1988)：購入は自由、又は手持ちの物でも可
- ・『改訂キリスト教保育指針』(キリスト教保育連盟)：履修者は全員購入

参考書

キリスト教保育連盟『新キリスト教保育指針』(2010年)

授業のねらい

学校制度を形作っている行財政のしくみおよび教育制度と法規に関する理解を深めるとともに、現代における子どもや若者を支える社会のしくみについて考えることをねらいとする。特に、日本の学校教育がどのような理念のもとに成立したのか、また、今日の教育政策がどのような経緯を経てきたのかについて取り上げる。また、今日的な課題として、子どもの貧困や格差による社会的排除について取り上げ、検討する。

到達目標

以下の3点を到達目標とする

- ①教育行財政、制度および法規にかんする理解を深め、他者に説明することができる。
- ②子ども・若者を取り巻く社会的課題について理解し、自分の考えを述べることができる。
- ③社会的な課題解決に向けた具体的な実践事例について理解し、自分なりの解決策を考えることができる。

授業方法

講義形式による解説のほか、特定のトピックについて履修者によるディスカッションおよびグループワークなどを行い、自分の意見の発表を求める。なお、各回の授業の前には、あらかじめ示されたトピックについて教科書や参考書等を読み、その項目に対する理解を深めておくこと。授業終了後については、授業中のメモ等を振り返り、理解を深め、自分なりの考えをまとめておくこと

授業計画

- 第1回 オリエンテーション（教育制度を学ぶ意味・授業の進め方と諸注意など）
- 第2回 近代における公教育の成立過程
- 第3回 日本における公教育の成立
- 第4回 戦後の教育行政と日本国憲法
- 第5回 教育基本法の成立と改訂
- 第6回 教育委員会制度の成立とその改訂
- 第7回 教育委員会制度と教育行財政
- 第8回 教育を受ける権利と公教育制度
- 第9回 義務教育と高校教育
- 第10回 教育過程と学習指導要領
- 第11回 教職員制度と教員の仕事
- 第12回 学校を支える教職員と施設
- 第13回 子どもの権利条約と学校の課題
- 第14回 学校教育をとりまく課題（児童福祉・非行防止・就学援助など）
- 第15回 講義のまとめと論文試験

成績評価の方法

到達目標①に関する小レポート1回（30%）、到達目標②および③に関わるグループ発表（20%）、授業レスポンスシート（10%）、論文試験（40%）

履修にあたっての注意

授業は講義形式を主とするが、グループワーク、ディスカッションなどの主体的な活動を取り入れるので、事前事後の準備が必要となる。また、教育制度に関する具体的な課題等について、普段から関心を持ち資料の収集等を行っておくこと。

教科書・参考書に関する備考

教科書は特に指定しないが、講義の大部分は以下の参考書に基づくものとする。事前事後の学修のために購入することをすすめる。

参考書

横井敏郎 編『教育行財政－子ども・若者の未来を拓く－』（八千代出版、2014、ISBN：978-4-8429-1633-0）

授業のねらい

カウセリングは現在における対人援助の基本的な手法である。しかし、どのような援助技法もその適用にあたっては、その効用と共に限界が伴う。この認識を欠けば、援助の効果を上げないばかりか逆に問題や混乱を大きくしかねない。そのため、カウセリングを含めた心理療法を理論的に理解し、その適用範囲及び限界を学ぶ。その他の具体的な対人援助の方法も学び、実践場面で活用できる知識の習得を目指す。

到達目標

- 1 臨床心理学と心理療法の基礎的知識を習得する。
- 2 子どもや保護者との面談や相談で必要となる援助者としての態度（カウセリングマインド）等の実践的スキルを身に付ける。
- 3 教育・福祉・医療の現場などで行われている心理的ケア・地域支援の実際を知る。

授業方法

授業では配付される講義資料とスライドを中心に進める。また、カウセリングの実際をより具体的に理解するために、適宜ワークシート、心理テスト、事例等を用いてグループ討議も展開する。授業終了時には次回の準備学習を課す（所用時間 30 分程度）。また事後指導としてテーマごとに課題レポート等の提出を課す。課題については授業時に口頭で説明する。

授業計画

- 第1回 子どもの不適応行動・問題行動の考え方の基本
教育的課題、発達の視点、様々な症状の心理学的意味、因果関係、困難事例
- 第2回 子どもの不適応問題・問題行動への対応の基本
初期症状の把握、基礎障害や二次障害の理解、困難事例
- 第3回 子どもを理解するための心理学的な基礎①発達と発達障害
発達段階、発達上の負因、特に言語コミュニケーション能力の評価
- 第4回 子どもを理解するための心理学的な基礎②心理テスト（質問紙法）
KIDS、エゴグラム、文章完成法等
- 第5回 子どもを理解するための心理学的な基礎③心理テスト（投影法）
PF スタディー、バウムテスト、ロールシャッハテスト、箱庭等
- 第6回 教育相談での心理アセスメントと心理的援助の見立て
テストバッテリー、発達評価、支援計画
- 第7回 カウセリングの実際
傾聴・受容・明確化などのカウセリング技法や姿勢の理解
- 第8回 保護者対応の実際
保護者、家族機能のアセスメント、対処方法
- 第9回 子どもを支援するための組織的対応
校内の相談体制、組織マネジメント
- 第10回 子どもを支援するための機関連携
医療、心理、福祉、司法等の外部機関の理解と効果的な連携のあり方
- 第11回 その他の心理療法、心理教育的支援
遊戯療法、箱庭療法、ソーシャルスキルトレーニング、セカンドステップ等
- 第12回 教育相談の実際①
事例検討（不登園、不登校）
- 第13回 教育相談の実際②
事例検討（虐待、非行）
- 第14回 カウセリングの意義と限界、危機介入
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1～3 測定するレポート 50%、授業への取り組み姿勢・参加意欲 30%、提出物 20%、により評価する。期末レポートについては答案を返却し、解答例解説資料を配付する。

履修にあたっての注意

カウセリングの実際の体験的な理解を促すために、随時ワークシートや心理テストの体験、事例等を用いてグループ討議等の参加型の授業とするので積極的に参加して欲しい。

教科書・参考書に関する備考

各授業に必要な資料は配布する。また、各授業の中で関連書籍を紹介して行く。

授業のねらい

教育者・保育者に求められるカリキュラムマネジメントに必要な知識、「学習指導要領」「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」における教育課程に対する基本的な考え方を理解する。そのうえで、学齢期や幼児期の子どもにふさわしい生活の構成について考える。

到達目標

1. 学習指導要領を基盤として各教育機関で編成される教育課程の意義を理解する。
2. 小学校と就学前教育（幼稚園・保育所・認定子ども園）での教育課程のとらえ方の違いについて理解する。
3. 教育課程編成の上での基本原理について理解する。
4. 教育課程と指導計画、教科・領域、発達過程や学年などを理解し、全体をトータルした視点でのマネジメントの意義を理解する。

授業方法

講義の中で、適宜、課題提出や形成的評価をはさみながら理解向上をはかります。
授業内容の理解を深めるために教科書や配布資料などを用いて予習・復習を行っておくこと。

授業計画

- 第1回 はじめに－教育課程とは何か、教育の場の整備と教育実践の基準
- 第2回 「学習指導要領」「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の位置づけと教育課程の編成の目的
- 第3回 「学習指導要領」「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂の変遷と社会的背景・思想
- 第4回 教育課程編成の基本原理－子どもの資質・能力育成
- 第5回 教育目標、保育実践と教育課程－
- 第6回 教育課程と長期計画・短期計画
- 第7回 教育課程と子どもの実態、教科・領域と学年・発達の視点
- 第8回 カリキュラムの実際(1)－課題活動と生活、自発活動
- 第9回 カリキュラムの実際(2)－行事のあり方と問題点
- 第10回 カリキュラムの実際(3)－飼育・栽培が持つ特徴と指導計画
- 第11回 指導計画の実際(1)－ねらいと評価について
- 第12回 指導計画の実際(2)－指導上の留意点について
- 第13回 評価と指導要録について
- 第14回 カリキュラム・マネジメントとカリキュラムの評価
- 第15回 おわりに－さまざまなカリキュラムとこれからの教育

成績評価の方法

到達度を測定する課題（70%）及び、数回の形成的評価の実践（30%）により到達目標1～4を評価します。

教科書

井上孝之編『子どもと共に育ちあうエピソード保育者論』（(株)みらい、2016）

参考書

吾田富士子編『保育者・教育者のための保育原理・初等教育原理－来るべき未来のために』（八千代出版、2018 刊行予定）

授業のねらい

この講義では子育て支援が必要な背景について、子どもや家族を取り巻く社会の変化を中心に理解し、現代の社会において子育て支援がどの様に行われており、どのような課題があるのかについて学習する。また、この授業での学習内容は、子育て支援Ⅰ・Ⅱ（演習）で実際に実践することで、子育て支援を行うための知識や技術を深める

到達目標

1. 子育て支援が必要な理由について社会的な背景をもとに論じることができる。
2. 社会の中でどのような子育て支援の取組が行われているか論じることができる。

授業方法

本授業は講義を中心として行うが、授業テーマにそった内容について、適宜質問等を行う。
授業の前には、その回のテーマに沿った内容について調べ学習を行い自分の考えをまとめておくこと。

授業計画

- 第1回 子育て支援とは何か 本授業の目的と学習の内容
- 第2回 子どもを持つことの意味の変化
- 第3回 子育て支援の社会的な背景(1)子ども数と世帯規模の変化
- 第4回 子育て支援の社会的な背景(2)子育て不安・子育て困難
- 第5回 子育て支援の社会的な背景(3)専業主婦と就業母
- 第6回 子育て支援の社会的な背景(4)育児の孤立化
- 第7回 子育て支援の社会的な背景(5)児童虐待
- 第8回 子育て支援の社会的な背景に関するまとめと小レポート
- 第9回 子育て支援法の推移(1)エンゼルプランから次世代育成支援対策推進法まで
- 第10回 子育て支援法の推移(2)子ども子育て支援新制度
- 第11回 利用者支援事業と地域子育て拠点事業
- 第12回 北海道および札幌市の現状
- 第13回 子育て支援に求められる姿勢
- 第14回 子育て支援の課題
- 第15回 全体のまとめ ー子育て支援の目的ー

成績評価の方法

毎回の授業のレスポンスカード（20%）、中間小レポート（20%）、筆記試験（60%）

履修にあたっての注意

授業にあたり事前にキーワード検索等の課題を出すので、事前に学習すること。
後期の子育て支援論も履修すること。

教科書・参考書に関する備考

授業では資料を配布する。また、参考図書は各回の授業において周知する。

授業のねらい

この講義では、前期の一般的な子育て支援の理論を踏まえ、父親の子育て、配慮が必要な子育て、諸外国における子育て支援等、子育て支援のいわば応用編について取りあげ学習する。特に支援の対象を絞り行う子育て支援については、困難なケースも取りあげ、どの様な配慮と支援のあり方が望ましいかについて理解を深める。

到達目標

1. 父親の子育てと支援のあり方について論じることができる。
2. 配慮が必要な家庭への子育て支援について論じることができる。
3. 諸外国の子育て支援と日本の子育て支援について理解することができる。

授業方法

本授業は講義を中心として行うが、授業テーマにそった内容について、適宜質問等を行う。
授業の前には、その回のテーマに沿った内容について調べ学習を行い自分の考えをまとめておくこと。

授業計画

- 第1回 前期のふりかえりと後期の学習内容
- 第2回 父親の子育て(1)歴史にみる父親の子育て
- 第3回 父親の子育て(2)父親の役割
- 第4回 父親の子育て(3)ワークライフバランスと子育て
- 第5回 父親の子育て(4)父親に対する子育て支援とは
- 第6回 配慮が必要な家庭への子育て支援(1)ひとり親家庭
- 第7回 配慮が必要な家庭への子育て支援(2)子どもや保護者の障がい
- 第8回 配慮が必要な家庭への子育て支援(3)貧困家庭
- 第9回 配慮が必要な家庭への子育て支援(4)児童虐待
- 第10回 父親の子育てと配慮が必要な家庭への支援のまとめと小レポート
- 第11回 諸外国の子育て支援(1)北欧
- 第12回 諸外国の子育て支援(2)北米
- 第13回 子育て支援と男女共同参画
- 第14回 子育て支援の意義と今後の課題(1)子育て支援の目的
- 第15回 子育て支援の意義と今後の課題(2)子育て支援のシステム

成績評価の方法

毎回の授業のレスポンスカード（20%）、中間小レポート（20%）、筆記試験（60%）

履修にあたっての注意

前期の子育て支援Ⅰを履修していること。
授業にあたり事前にキーワード検索等の課題を出すので、事前に学習すること。

教科書・参考書に関する備考

授業では資料を配布する。また、参考図書は各回の授業において周知する。

授業のねらい

発達心理学Ⅱは、青年期から老年期までの人間の発達を学ぶことを目的とした授業です。発達心理学Ⅰでは、幼児期・児童期の発達を中心に学びました。しかし、保育者が関わるのは子どもだけではありません。子どもの周りには、青年期・成人期・老年期の人間が存在し、子どもに影響を与えています。そのため、世代ごとのライフイベントや陥りやすい心理状態などを知り、幼児期以外の年代の人間の発達について理解を深めておくことが必要です。また、自分自身の将来について考えるためにも、青年期以降の発達について学ぶことは重要といえます。

到達目標

1. 青年期以降の心理面の変化について、各時期におけるライフイベントと関連づけながら説明できること
2. 青年期以降の発達について、発達段階間のつながりという観点から説明できること

授業方法

3～4回の授業で1つのトピックを取り上げ、トピックにまつわる実験例の紹介・理論の説明などを行いながら、授業を進めていきます。また、授業では、装具を用いた妊婦体験・高齢者体験を行います。

授業前には、授業内容に関することからについて自分の考えをまとめる・資料を読む・資料を探すなどの予習課題に取り組んでください。各年代の人々の姿をイメージする（身近な人物のことを思い浮かべる・取り上げる世代の人物が登場する映画を見たり、小説を読んだりする）ことも、予習として大切です。また、授業後は、授業で取り上げたことからについて整理したり、配布した資料・論文などを読むなどして、授業内容を復習してください。予習・復習に必要な時間の目安は、あわせて1～3時間です。なお、予習課題の発表・予習課題と復習課題の提出は、ポータルサイトを使用します。

テスト実施後、模範解答の確認と授業内容のまとめを行います。自分の理解度を確認するようにしてください。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：授業内容の説明・授業の進め方と評価の方法についての確認
- 第2回 青年期(1)：青年期の特徴
- 第3回 青年期(2)：自我同一性
- 第4回 青年期(3)：性役割
- 第5回 青年期(4)：親子関係
- 第6回 成人期(1)：職業の選択
- 第7回 成人期(2)：結婚による変化
- 第8回 成人期(3)：親になることによる変化
- 第9回 中年期(1)：身体と知的能力の変化・中年期の危機
- 第10回 中年期(2)：子どもの巣立ちや定年退職による変化
- 第11回 中年期(3)：ライフイベントと自我同一性の関連
- 第12回 老年期(1)：身体の変化
- 第13回 老年期(2)：認知・感情・パーソナリティの変化
- 第14回 老年期(3)：心身の変化への対処・死に対する態度
- 第15回 まとめとテスト

成績評価の方法

到達目標1・2の達成度を測定するテスト（1回：70%）、到達目標1・2の達成度を測定する予習・復習への取り組み（30%）によって評価します。

履修にあたっての注意

特になし。

教科書・参考書に関する備考

参考となる書籍・ホームページは、ポータルサイトを通して紹介します。

参考書

柏木恵子『子どもも育つ おとなも育つ 発達の心理学』（萌文書林、2012、ISBN：9784893471765）
無藤隆・大坪治彦・岡本祐子『よくわかる発達心理学 第2版』（ミネルヴァ書房、2004、ISBN：9784623053797）

授業のねらい

子どものアセスメントの基礎理論と方法について、体験的な理解を図る。次に、その理解とともに生育歴や家族歴等の社会調査を加えて子どもの総合的な理解に至る方法を学ぶ。加えて、ソーシャルワークやカウンセリングの基礎理論と方法を学び、アセスメントの教育相談での活用について修得する。教育相談の多くは発達障害への理解を要するため、発達障がいの基礎的な障がい像を整理し、教育相談や進路相談の実際、就学相談、関係機関との連携などについて学ぶ。

到達目標

- 1 生徒の理解のための、行動観察、社会調査、心理アセスメントの方法を知る。
- 2 社会的自立、職業的自立に向けた長期的視点に立った発達段階と発達支援の方法を知る。
- 3 生徒指導及びキャリア教育のための、個別指導及び集団指導、支援計画の作成方法と知る。
- 4 保護者対応、組織的対応、地域社会や関係機関との連携について理解する。

授業方法

授業では配付される講義資料とスライドを中心に進める。また、生徒指導及び進路指導、キャリア教育の実際をより具体的に理解するために、心理テストの体験、教育現場の具体的事例を用いてのグループ討議も展開する。授業終了時には次回の準備学習を課す（所用時間 30 分程度）。また事後学習としてテーマごとに課題レポート等の提出を課す。課題については授業時に口頭で説明する。

授業計画

- 第1回 児童生徒をめぐる今日的課題
- 第2回 生徒指導、進路指導及びキャリア教育の意義と関係
- 第3回 特別活動・体験活動等と生徒指導、進路指導及びキャリア教育
- 第4回 生徒理解の方法①問題行動の背景
- 第5回 生徒理解の方法②個性、発達障害と二次障害
- 第6回 社会的自立のための長期的展望に立った発達段階や発達課題
- 第7回 個別の指導目標、支援計画、生涯に渡るキャリア形成、ポートフォリオの活用
- 第8回 指導の基本的な姿勢（関係性、個の尊重、自己洞察、カウンセリングマインド他）
- 第9回 教育活動全体を通じた全体指導、集団指導、個別指導の方法
- 第10回 生徒指導の実践①「いじめ」「不登校」「暴力」
- 第11回 生徒指導の実践②「ネット」「性的問題」「虐待」
- 第12回 進路指導・キャリア教育の実践「コミュニケーション障害」
- 第13回 学校における組織的な指導体制、生徒指導、進路指導、キャリア教育の進め方
- 第14回 関係機関、制度、関係法令等
- 第15回 学校と家庭・地域社会・関係機関との連携の具体的方法

成績評価の方法

到達目標 1～4 を測定するレポート 50%、授業への取り組み姿勢・参加意欲 30%、提出物 20%、により評価する。期末レポートについては答案を返却し、解答例解説資料を配付する。

履修にあたっての注意

できるだけ事例を通して体験的に理解を求める。それぞれの気づきを重視した学習を期待する。

教科書・参考書に関する備考

各授業で必要な資料は配布する。また、各授業の中で関連書籍を紹介して行く。

参考書

小学校学習指導要領

授業のねらい

この授業では、子どもの発育と発達、主な疾病の特徴について基本的な知識を修得することを目的とする。

到達目標

1. 子どもの発達・発育の特徴を述べるができる。
2. 発達障害や心の健康に関する問題について、配慮すべき点を述べるができる。
3. 子どもに起こりうる主な疾患とその予防法、適切な対応を述べるができる。

授業方法

講義形式で授業を行う。各回の授業においては、自主的な事前・事後学修(それぞれ1時間程度)が求められる。また、期末試験については試験結果を開示するとともに、解説資料を配付する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
子どもの発育・発達(1)わたしたちの体
- 第2回 子どもの発育・発達(2)身体発育
- 第3回 子どもの発育・発達(3)運動機能の発達 (4)精神機能の発達
- 第4回 子どもの発育・発達(5)生理機能の発達 (6)感覚器の発達
- 第5回 子どもの生活環境と精神保健
- 第6回 発達障害の子どもたち
- 第7回 子どもの心の健康とその課題
- 第8回 子どもの食と栄養
- 第9回 子どもの健康状態の把握
- 第10回 主な疾病の特徴(1)新生児の疾患、先天性疾患
- 第11回 主な疾病の特徴(2)呼吸器・循環器・消化器の疾患
- 第12回 主な疾病の特徴(3)アレルギー・免疫・腎・泌尿器の疾患
- 第13回 主な疾病の特徴(4)中枢神経系・その他の疾患
- 第14回 主な疾病の特徴(5)感染症
- 第15回 子どもの疾病の予防と適切な対応
まとめ

成績評価の方法

期末試験(100%)にて評価する。

教科書

鈴木美枝子 編著『これだけはおさえたい! 保育者のための子どもの保健 I 第3版』(創成社、2015、ISBN: 9784794480712)

参考書

松田博雄・金森三枝 編『基本保育シリーズ10 子どもの保健 I』(公益財団法人 児童育成協会、2016、ISBN: 9784805852101)

授業のねらい

現代社会において子どもを取り巻く環境はめまぐるしく変化している。本講義はめまぐるしく変化する環境における保育士養成のための必修科目となっている。子どもの心身の健康増進を図る保健活動の意義を理解し、子どもを取り囲む環境及び衛生管理並びに安全管理、健康及び安全の実施体制についての知識を身につけることを目的としている。

到達目標

1. 子どもの心身の健康増進を図る保健活動の意義を理解する。
2. 子どもの健康に関わる衛生管理について知識を身につける。
3. 子どもの健康に関わる安全管理について理解して、考察することができる。
4. 現代社会における子どもの健康問題や地域保健活動等について理解して、考察することができる。

授業方法

講義形式で行う。テキストの購読等による事前・事後学習（それぞれ 60 分程度）を課す。レポート課題については、講義途中で提示し、採点後解答例の解説等を行う。期末課題については、試験を実施し、採点後に解答例の解説等を行う。理解度の把握は、適宜確認用紙を用いる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション こどもの健康と保健の意義：講義の概要について説明します。子どもの健康と保健の意義について学びます。
- 第2回 健康の概念と健康指標：健康とはどういうことかを考え、健康の概念について学びます。また、健康のレベルの測定に用いられている様々な指標について学びます。
- 第3回 保健統計：子どもに関する様々な統計資料から読み取れることを考えます。
- 第4回 地域における保健活動：出生率や少子化の現状について学び、地域における保健活動について理解を深めます。
- 第5回 環境整備の意義：子どもの生活環境整備の意義について学びます。
- 第6回 現場における衛生管理1：生活環境に関して、主に空気環境について学びます。
- 第7回 現場における衛生管理2：生活環境に関して、主に温度や湿度などの温熱環境について学びます。
- 第8回 現場における衛生管理3：生活環境に関して、主に水の衛生と環境について学びます。
- 第9回 現場における衛生・安全管理：こどもの生活環境における安全管理とその対策について学び、ディスカッション等を通して理解を深めます。
- 第10回 食品衛生：食中毒統計をもとに食品衛生について学び、個々の食中毒についての理解を深めます。
- 第11回 アレルギーと食品安全：アレルギーと食品安全について学び、公表されている資料を通して理解を深めます。場合によってはディスカッション等も行います。
- 第12回 生活習慣と健康1：生活習慣と健康について学び、子どもにとっての生活習慣の意義について考えます。
- 第13回 生活習慣と健康2：生活習慣と健康について学び、子どもにとって良好な生活習慣について考えます。
- 第14回 生活環境と精神保健：子どもの生活環境と精神保健に関して、現代社会における健康問題を含めて理解を深めます。
- 第15回 まとめと振り返り：子どもを取り囲む生活環境について考え、まとめと振り返りを行います。期末評価として試験を実施します。

成績評価の方法

ディスカッション等での発言などの積極性（20%）、途中の課題評価（10%）にて、主に到達目標の3及び4の測定を行う。期末の評価（70%）にて、到達目標の1から4の測定を行う。

履修にあたっての注意

授業は基本的には講義形式で行うが、授業中ディスカッション等を課すことがある。発言や発表を求めることがあるので、事前に示す課題についての学習を求める。途中の課題評価は適宜レポートなどの提出によって行う。シラバスの内容は大まかな内容を示しており、履修者の理解度やその時々々のニュース・トピックス等により変更もあり得る。半期の講義を通じて到達目標へ達するものであり、受講にあたっては遅刻や欠席のないようにすることを求める。

教科書

鈴木美枝子編著『これだけはおさえたい！保育者のための「子どもの保健Ⅰ」（第3版）』（創成社、2015年、ISBN：978-4-7944-8071-2）

教科書・参考書に関する備考

出版社の都合により改訂される可能性がある。関連する図書として、これだけはおさえない！保育者のための「子どもの保健Ⅱ」、鈴木美枝子編著、創成社、2014年、978-4-7944-8057-6がある。

参考書

巷野悟郎『子どもの保健 第7版』（診断と治療社、2017年、ISBN：9784787822949）

巷野悟郎・高橋悦二郎 編『保育の中の保健』（萌文書林、2006年、ISBN：978-4-89347-151-2）

参考ホームページ

子ども・子育て支援 http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/kosodate/（厚生労働省、子ども・子育て支援、地域子育て支援拠点事業について）

授業のねらい

小児期は、将来成人し社会人となった時の「こころ」と「からだ」の健康の基礎を形成する重要な一時期である。このような考えを基本に、この授業では子供の保育と健康管理に必要な基本的知識及び技術について学ぶ。

到達目標

1. 小児期の成長発達過程と健康について
2. 小児期の健康問題に関するヘルスアセスメントが実施できる。
3. 乳幼児の日常生活援助（食事、睡眠、清潔、衣服の着脱、他）が安全に実施できる。
4. 小児期に見られる健康障害、事故と影響要因について説明できる。
5. 小児に対する応急措置、救急蘇生法に関して、効果を確認しながら実施できる。
6. 施設における保育活動と保育士の役割について概説できる。

授業方法

下記の主題に基づいて、講義、演習、実習を行なう。

具体的な技術習得方法：

- (1)技術を構成する基本要素、基礎的知識を理解する。
- (2)講義内容をもとに実習計画を作成し、実践する。
- (3)対象の条件を考慮して援助方法に応用する。
- (4)実践内容を検討、考察する。
- (5)事前・事後学習として、教科書や配布資料等を用いて予習・復習を行うこと。

授業計画

- 第1回 生命誕生、乳幼児の成長発達と保育の概要について知る。
演習：VTRの視聴とグループディスカッション
- 第2回 子供の健康およびヘルスアセスメントについて知る(1)。
子供の成長発達のプロセスと評価技術を理解する。
- 第3回 子供の健康およびヘルスアセスメントについて知る(2)。
身体計測、バイタルサインズの測定技術について習得する。
- 第4回 子供の健康およびヘルスアセスメントの方法について知る(3)。
実習：身体計測、バイタルサインズの測定
- 第5回 子供の生活援助技術について知る(1)。
基本的生活習慣の自立と保育技術について理解する。
- 第6回 子供の生活援助技術について知る(2)。
基本的生活習慣の自立と保育技術を修得する。
実習：乳児の抱き方、沐浴、衣服の着脱
- 第7回 子供の生活援助技術について知る(3)。
子供の保健行動と指導方法を理解する。
実習：手洗法
- 第8回 家庭での応急措置、救急蘇生法について知る(1)。
子供の行動特性と事故、子供に多い症状と対応について理解する。
- 第9回 家庭での応急措置、救急蘇生法について知る(2)。
保育施設における応急措置技術について理解する。
- 第10回 家庭での応急措置、救急蘇生法について知る(3)。
子供の行動特性と事故、ならびに応急措置技術を習得する。
実習：包帯法・移動介助法・蘇生法・他
- 第11回 施設における保育活動について検討する(1)。
子供の健康問題に対する計画・実践・評価のプロセスについて理解する。
- 第12回 施設における保育活動について検討する(2)。
子供の健康問題に対する計画・実践・評価のプロセスについて理解する。
問題事例検討（GW）
- 第13回 施設における保育活動について検討する(3)。
子供の健康問題に対する計画・実践・評価のプロセスについて理解する。
- 第14回 検討事例に関する発表会(1)
- 第15回 検討事例に関する発表会(2)

成績評価の方法

授業への参加状況（30%）、レポートの提出状況（70%）を総合的に評価する。

教科書

高内正子『子どもの健康と保健演習ガイド』（建帛社、2018）

授業のねらい

保育を通して食育をどのように進めていくことができるのか、生活の中での子どもの「食を営む力」への理解と、その支援方法を習得する。「食育」の必要性、国の施策、保育所での保育と連動した「食育」のあり方、また家庭・地域との連携の方法、そして、その具体的な方法について実践例を参考にしながら、自ら計画・実践し、評価する力を養う。

到達目標

- ・「保育所保育指針」の内容をふまえ、保育士として子どもの身体状況や栄養状態に応じた食生活の支援ができる。

授業方法

- ・子どもの成長段階に応じた食生活を理解し、食生活の諸問題とその対処法について考えることができるよう展開する。
- ・食育のテーマを一つ選び、対象年齢を決めて指導案を作成し、食育教材を作り、クラスで発表し、相互評価を行う。毎回の授業では、受講者に子どもの食と栄養に関する事前・事後課題の提出を課す(所要時間 20分程度)。また、授業時間内に理解度確認のためのレポートを実施する。毎回の課題については、授業内で口頭にて解説し、解説資料を配布する。期末テストについては、採点后に答案を返却し、解答例・解説資料を配布する。

授業計画

- 第1回 子どもの健康と食生活の意義(1)子どもの心身の健康と食生活(隈元)
- 第2回 子どもの健康と食生活の意義(2)子どもの食生活の現状と課題(石田)
- 第3回 栄養と食品に関する基礎的知識(1)栄養の基本的概念と栄養素の働き(岸)
- 第4回 栄養と食品に関する基礎的知識(2)日本人の食事摂取基準と食品の基礎知識(隈元)
- 第5回 栄養と食品に関する基礎的知識(3)献立作成と調理の基本(岸)
- 第6回 子どもの発育・発達と栄養生理(1)子どもの発育と発達(石田)
- 第7回 子どもの発育・発達と栄養生理(2)子どもの栄養と生理①(石田)
- 第8回 子どもの発育・発達と栄養生理(3)子どもの栄養と生理②(石田)
- 第9回 子どもの発育・発達と食生活(1)授乳期(石田)
- 第10回 子どもの発育・発達と食生活(2)離乳期(石田)
- 第11回 子どもの発育・発達と食生活(3)幼児期(石田)
- 第12回 特別な配慮を要する子どもの食と栄養(1)疾病および体調不良の子どもへの対応(石田)
- 第13回 特別な配慮を要する子どもの食と栄養(2)食物アレルギーがある子どもへの対応(石田)
- 第14回 特別な配慮を要する子どもの食と栄養(3)障害がある子どもへの対応(石田)
- 第15回 前期のまとめ(石田)
- 第16回 子どもの発育・発達と食生活(4)学童期・思春期(隈元)
- 第17回 子どもの発育・発達と食生活(5)妊娠期(岸)
- 第18回 食育の基本と内容(1)食育における養護と教育の一体性(隈元)
- 第19回 食育の基本と内容(2)食育の内容と計画および評価(隈元)
- 第20回 食育の基本と内容(3)食育のための環境(隈元)
- 第21回 食育の基本と内容(4)地域の関係機関や職員間の連携(隈元)
- 第22回 食育の基本と内容(5)食生活指導および食を通じた保護者への支援(隈元)
- 第23回 食育の基本と内容(6)食育の指導案作成とグループワーク(隈元)
- 第24回 家庭や児童福祉施設における食事と栄養(1)家庭における食事と栄養(岸)
- 第25回 家庭や児童福祉施設における食事と栄養(2)児童福祉施設における食事と栄養(隈元)
- 第26回 世界の子どもの食生活(隈元)
- 第27回 幼児の食に関する指導：グループ発表(1)(隈元)
- 第28回 幼児の食に関する指導：グループ発表(2)(隈元)
- 第29回 幼児の食に関する指導：グループ発表(3)(岸)
- 第30回 幼児の食に関する指導：グループ発表(4)(岸)

成績評価の方法

期末試験(30%)、レポート(30%)、授業への参加状況(10%)、実践発表(30%)により評価する。

履修にあたっての注意

専門職を目指すものとしての自覚をもって、自ら課題を持ち、意欲的に学ぶこと。

教科書

小川雄二『子どもの食と栄養演習(第4版)』(建帛社、2018)

授業のねらい

この授業では、障害のある子ども（乳児・幼児・児童・生徒）について、教育と医療・療育の両面から理解を深めることをねらいとします。

到達目標

1. 特別支援学校の教育的支援の基礎を理解することができる。
2. 特別支援学校における教育実習の基礎を理解することができる。
3. 特別支援学校（聴覚障害）及び難聴・言語障害特別支援学級や通級による指導における教育課程編成が理解できる。
4. 聴覚言語障害児のコミュニケーション指導について、その目的や内容を理解できる。

授業方法

担当者2名のオムニバス講義形式で行う。

今野の担当回では、前半で、特別支援学校全般にわたる教育課程、指導計画についての講義・演習を行う。後半は、障害児教育実習に向けた講義・演習を中心に進める。

原田の担当回では、特に、インクルーシブ教育下にある聴覚障害教育・言語障害教育の現状を概説する。この中で、教育課程（指導内容・指導方法）、各発達段階におけるコミュニケーション指導、早期教育について学ぶ。授業は、学習上の助言、ディスカッション、パワーポイント等により資料提示しながら進める。

授業前は、授業計画に基づいて各自予習をすること（所要時間30分程度）。

授業の最後に小レポートを課し、これを授業への参加状況として評価する。

授業後は、配布したプリントについて復習し、理解を深めること（所要時間30分程度）。

小レポートでの質問等については、次回の授業で解説する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション（今野・原田）
- 第2回 特別支援学校の教育課程（今野）
- 第3回 特別支援学校の指導計画（今野）
- 第4回 自立活動の指導（今野）
- 第5回 聴覚障害の教育課程、教科教育（原田）
- 第6回 聴覚障害児の心理とコミュニケーション手段（原田）
- 第7回 聴覚障害児の聴覚の活用（人工内耳を中心に）（原田）
- 第8回 軽度・中等度難聴児・一側性難聴（原田）
- 第9回 聴覚言語障害児の療育と指導（原田）
- 第10回 聴覚言語障害教育における情報保障（原田）
- 第11回 インクルーシブ教育システム・海外の聴覚障害教育（原田）
- 第12回 障害児教育実習に向けて1（教育実習の概要）（今野）
- 第13回 障害児教育実習に向けて2（学習指導）（今野）
- 第14回 障害児教育実習に向けて3（生活指導）（今野）
- 第15回 障害児教育実習に向けて4（まとめ）（今野）

成績評価の方法

到達目標1・2の達成度をみるレポート（40%）、到達目標3・4の達成度をみるレポート（40%）、授業への参加状況（発表・態度）（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

特別支援学校教諭免許状取得の選択科目です。

教科書

文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚部・小学部・中学部）』（開隆堂出版、2018）

文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）』（開隆堂出版、2018）

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所『特別支援教育の基礎基本（新訂版）』（ジヤース教育新社、2015、ISBN：978-4863712973）

筑波大学特別支援教育研究センター、安藤隆男『講座特別支援教育3 特別支援教育の指導法【第2版】』（教育出版、2016、ISBN：978-4316804149）

教科書・参考書に関する備考

授業中に適宜、参考書の紹介、関係資料を配布する。

授業のねらい

我が国は、障害のある子どもの教育について、共生社会の形成に向けてインクルーシブ教育システムを構築するための特別支援教育の推進が喫緊の課題となっている。国内外の動向も踏まえ、特別支援教育に関する現状(教育課程、指導の実際等)や課題(環境整備、専門性等)を包括的に把握し、今後の特別支援教育の展望・方向性について学ぶことをねらいとする。

到達目標

1. 我が国の障害児教育(特別支援教育)の歴史について理解できる。
2. インクルーシブ教育システムの内容(学習指導要領・教育課程)について理解できる。
3. 各障害種に対応した特別支援教育(障害特性、指導内容・方法)について理解できる。

授業方法

授業は、学習上の助言、ディスカッション、パワーポイント等により資料提示しながら進める。
授業内容の理解を深めるために、配布される資料を用いて、予習・復習を行うこと。

授業計画

- 第1回 障害児教育の歴史 就学義務施行前から養護学校義務制施行後
- 第2回 インクルーシブ教育システム 障害者の権利条約、中教審報告
- 第3回 インクルーシブ教育システム 合理的配慮、基礎的環境整備、多様な学びの場・学校間連携
- 第4回 インクルーシブ教育システム 特別支援教育の対象、個別の教育支援計画
- 第5回 インクルーシブ教育システム 学習指導要領と教育課程
- 第6回 特別支援学校の教育 特別支援学校(知的障害)
- 第7回 特別支援学校の教育 、特別支援学校(肢体不自由)
- 第8回 特別支援学校の教育 特別支援学校(病弱・身体虚弱)
- 第9回 特別支援学校の教育 特別支援学校(視覚障害)
- 第10回 特別支援学校の教育 特別支援学校(聴覚障害)
- 第11回 特別支援教育 発達障害
- 第12回 特別支援教育 言語障害、重複障害
- 第13回 障害のある子どもと家族支援
- 第14回 障害のある子どもと関係機関連携
- 第15回 試験と今後の特別支援教育のまとめ

成績評価の方法

授業の参加状況(発表・態度)(20%)、レポート試験(80%)

教科書

国立特別支援教育総合研究所『特別支援教育の基礎・基本(新訂版)』(シアーズ新社、2015、ISBN：978-4-86371-297-3 C3037)

授業のねらい

障害のある子どもに臨床心理学的援助を行うのに必要な基本的知識を理解する。各障害の定義（状態像）・アセスメントの方法について、解説し、発達の視点からみた障害のもつ意味ならびに障害のある子どもの心理学的援助のあり方について、考察する。

到達目標

- (1)障害のもつ意味について、理解する。
- (2)各障害の定義（状態像）を明確に理解する。
- (3)各障害に特有の発達の課題を理解する。
- (4)各障害における問題解決のための心理学的援助のあり方を理解する。

授業方法

15回ですべての障害を取り上げ、各障害の基本的アプローチを理解するプログラム形式の授業を行う。毎回、小レポートを提出してもらう。

授業内容の理解を深めるため、教科書や配布資料を用いて予習、復習を行うこと。

授業計画

- 第1回 乳幼児における障害と支援
乳幼児期における障害への気づきとその支援を取り上げ、早期発見・早期療育の重要性を説明する。
- 第2回 視覚障がい児の理解と心理的援助
視覚障害とは何か。視覚障害のアセスメント、心理的特性、心理的援助について、理解する。
- 第3回 聴覚障がい児の理解と心理的援助
聴覚障害とは何か。聴覚障害のアセスメント、心理的特性、心理的援助について、理解する。
- 第4回 知的障がい児の理解と心理的援助(1)
知的障害とは何か。知的障害のアセスメント、心理的特性、心理的援助について、理解する。
- 第5回 知的障がい児の理解と心理的援助(2)
知的障害とは何か。知的障害の心理アセスメント、発達援助法について、理解する。
- 第6回 運動障がい児の理解と心理的援助
運動障害とは何か。運動障害のアセスメント、心理的特性、心理的援助について、理解する。
- 第7回 病弱児の理解と心理的援助
病弱とは何か。病弱のアセスメント、心理的特性、心理的援助について、理解する。
- 第8回 言語障がい児の理解と心理的援助
言語障害とは何か。言語障害のアセスメント、心理的特性、心理的援助について、理解する。
- 第9回 情緒障がい児の理解と心理的援助
情緒障害とは何か。情緒障害のアセスメント、心理的特性、心理的援助について、理解する。
- 第10回 発達障がい児の理解と心理的援助
発達障害とは何か。発達障害のアセスメント、心理的特性について、理解する。
- 第11回 発達障がい児の理解と心理的援助（ADHD）
ADHDとは何か。ADHDのアセスメント、心理的特性、心理的援助について、理解する。
- 第12回 発達障がい児の理解と心理的援助（自閉症スペクトラム障害）
自閉症スペクトラム障害とは何か。自閉症スペクトラム障害のアセスメント、心理的特性、心理的援助について、理解する。
- 第13回 発達障がい児の理解と心理的援助（LD 学習障害）
学習障害とは何か。学習障害のアセスメント、心理的特性、心理的援助について、理解する。
- 第14回 重度・重複障がい児の理解と心理的援助
重度・重複障害とは何か。重度・重複障害のアセスメント、心理的特性、心理的援助について、理解する。
- 第15回 家族支援と障害の理解
家族や本人がどのように障害を理解するのかがきわめて重要な課題である。また地域社会における家族支援について、考察する。

成績評価の方法

参加状況・態度 60%、課題提出 40%

履修にあたっての注意

障害のある子どもに対する基本的な視点、障害があるかないかを考える以前に子どもであることを忘れないこと。そして、子どもが自分のことをどう思っているかを理解すること。

教科書

石部元雄・柳本雄次『特別支援教育－理解と推進のために－』（福村出版、2011、ISBN：9784571121159）

参考書

東篠吉邦・大六一志・丹野義彦『発達障害の臨床心理学』（東京大学出版会、2010、ISBN：9784130111256）

75771

病弱児の心理・生理・病理

担当教員：三野絵美

2単位 前期

授業のねらい

教育・保育の現場で高頻度に遭遇する病気について深く理解し、病気を患う児及び家族の心理を学ぶ。その上で、家庭及び社会的な対応や教育・保育の重要性を考える。

到達目標

各疾患について、学生が我が事として対応法を模索することができる。

授業方法

総論で病弱児一般の心理やトータルケアを学んだ後、高頻度に遭遇する主な疾患について実例を交えて提示します。自分ならどう対応するか、考えて下さい。また、事前・事後学習として配布された資料等をを用い予習・復習を行って下さい。

授業計画

- 第1回 総論 病弱児の定義、児を取り巻く環境・支援
- 第2回 病気の子どもの心理および病気が発達に与える影響、親の心理
- 第3回 アタッチメントの発達段階とその重要性、分離不安
- 第4回 病気の子どもと親のトータル・ケア（医療保育を含め）
- 第5回 各論 胎児・周産期におこる病気・障がい（遺伝的疾患、染色体異常、異常分娩等）
- 第6回 出生後の養育状況・環境・病気による障がい（中途障がい）
- 第7回 発達障害への理解
- 第8回 肢体不自由の成因および支援
- 第9回 アレルギー性疾患
- 第10回 小児がん、血液疾患
- 第11回 慢性腎疾患、心疾患
- 第12回 糖尿病、自己免疫疾患
- 第13回 神経、精神疾患
- 第14回 心身症
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

本試験 70%＋小試験 30%

授業のねらい

この授業では、肢体不自由児教育における教育課程編成、指導の実際について、理解を深めることをねらいとする。

到達目標

1. 肢体不自由児教育の基本的事項について理解し、問題意識を持って考えることができる。
2. 肢体不自由児教育の教育課程や指導の実際について理解し、説明することができる。

授業方法

講義に加え、実習を行う。

授業前は、授業計画に基づいて各自予習をすること（所要時間 30 分程度）。

毎回の授業の最後に小レポートを課し、これを授業への参加状況として評価する。

授業後は、配布したプリントについて復習し、理解を深めること（所要時間 30 分程度）。

小レポートでの質問等については、次回の授業で解説する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
肢体不自由児教育の歴史
- 第2回 肢体不自由児教育の教育課程
- 第3回 身体の使い方
- 第4回 実習：身体の使い方
- 第5回 肢体不自由児教育の実際（自立活動、特に身体の動き）
- 第6回 肢体不自由児教育の実際（コミュニケーション、各教科等）
- 第7回 実習：身体の動き、コミュニケーション、各教科等への支援
- 第8回 中間のまとめ・教育実習について
- 第9回 肢体不自由児教育の実際（重度重複障害児、重症心身障害児）
- 第10回 実習：重度重複障害児、重症心身障害児への支援
- 第11回 肢体不自由児教育の実際（訪問教育、外部専門家）
- 第12回 肢体不自由児教育の実際（個別の教育支援計画、個別の指導計画、関係機関との連携）
- 第13回 肢体不自由児教育の実際（学習指導案）
- 第14回 肢体不自由児教育の実際（就学前教育、進路指導・キャリア教育）
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 に関する授業への参加状況（50%）、到達目標 2 に関する試験（50%）、により評価する。

履修にあたっての注意

特別支援学校教諭免許状取得の必修科目です。

実習の際はジャージなど動きやすい服装を用意してください。スカートでの受講は認めません。

教科書・参考書に関する備考

教科書なし。プリントを配布します。

参考書は、講義の中で随時紹介します。

授業のねらい

この授業は、病気の種類とその実態をはじめ、入院児童生徒の心理的特性（主に精神的変化）や、病弱養護学校、院内学級の状況と学校、家庭、病院等の関係について取り上げ、病弱児童生徒の心理状況を把握することができることを目指します。

到達目標

- ・ 様々な病気を患っている児童生徒に対する感想などを述べることができる。
- ・ 病弱児童生徒の心理状況の把握から、その支援の在り方を考えることができる。

授業方法

プレゼンテーションによる講義形式で、スライドを基にした配付資料や動画などを参考に授業を進めます。毎回の授業では、授業者に病弱教育に関する事前・事後課題（小レポート形式）の提出を求めます。最終の授業では、授業で学んだ内容に関する課題レポートの作成を行います。

授業計画

- 第1回 インTRODクシヨソ
- 第2回 病気の子供たちの困り感
- 第3回 病気の子供への教育的支援
- 第4回 病気の子供の不安やストレス
- 第5回 学校教育における病弱教育の場
- 第6回 学校教育における病弱教育の位置
- 第7回 白血病とその実態
- 第8回 腎臓病、気管支喘息、てんかん
- 第9回 入院児童生徒の学習のようす
- 第10回 入院児童生徒の生活のようす
- 第11回 院内学級の実態
- 第12回 学校・学級と保護者の関係
- 第13回 こころの病
- 第14回 病弱教育の歴史
- 第15回 まとめ、レポートの作成

成績評価の方法

レポート（40%）、授業への参加状況（30%）、小レポート（30%）により評価します。

履修にあたっての注意

「特別支援学校（知的障害、肢体不自由、病弱）教諭免許」の取得を考えている者は受講してください。

教科書・参考書に関する備考

その都度、講義の中で資料等を配布します。

授業のねらい

この授業は、保育所保育指針・幼稚園教育要領に記述されている内容をベースに、事例や実践を交えながら幼稚園・保育所で展開されている保育は、どのような根拠のもとに行われているのかを理解することを目的として行う。また、保育内容を意識した教材研究を実際に行うことで、理論と実践を結びつけ、最終的には保育内容を総合的にとらえることができることを目指す。

到達目標

1. 保育内容を構成する際におさえておかななくてはならない基本とは何かを説明することができる
2. 保育内容を考える際に必要な視点とは何かを説明することができる
3. 保育内容（5領域）のねらいを意識した保育内容を立案できる
4. ねらいを意識した教材を準備することができる
5. 保育教材に自分なりの工夫を加え、丁寧に作成することができる
6. 自分が立案した保育教材を客観的に評価することができる

授業方法

この授業は演習科目であるため、グループワークや発表などを中心に行っていく。また、毎回の授業で次回までに準備してくる事前学習課題（30分程度）を課し、その課題を用いながら、毎回の授業を展開していく。また、授業後には配布プリントやノートを参考にして授業内容を復習しておくことを求める（30分程度）。

なお、毎回の課題は簡単なコメントをつけて次回に返却する。レポート課題および提出作品は、採点后にコメントをつけて返却する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション 保育内容とは
- 第2回 保育の基本とは
- 第3回 遊びを通して学ぶとは
- 第4回 子ども理解と保育内容
- 第5回 人的環境と保育内容
- 第6回 保育内容5領域のねらいと内容 幼稚園教育要領・保育所保育指針の比較から
- 第7回 5領域を意識した遊びの立案
- 第8回 グループワーク：5領域を意識した遊びの立案
- 第9回 保育内容を深める遊びや文化財(1)：絵本
- 第10回 保育内容を深める遊びや文化財(2)：ゲーム
- 第11回 保育内容を深める遊びや文化財(3)：製作
- 第12回 保育内容と教材研究：道具を使ったお話しのかちあい1
- 第13回 保育内容と教材研究：道具を使ったお話しのかちあい2
- 第14回 保育内容と教材研究：短い時間でできる活動
- 第15回 現代の保育の課題と保育内容

成績評価の方法

到達目標1と2を測定するレポートのルーブリック評価（50%）、到達目標3を測定する授業7回、8回で考えるグループ課題の内容（20%）、到達目標4と5を測定する授業12回目、13回目で行う保育教材わかちあいの作品（20%）、到達目標6を測定する作品に関するふりかえりシートの記述内容（10%）で評価する。

履修にあたっての注意

意欲的に授業に参加することを望む。遅刻や欠席のないように。

教科書・参考書に関する備考

教科書：なし

適宜、プリントを配布し、それにしたがって授業を進める。

授業のねらい

幼児期は生涯にわたる心身の健康の基礎を養うためにとても重要な時期と言える。本科目では、子どもたちが生涯にわたって健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養うことができるようになるため、保育者がどのような援助の仕方や環境の整備をしていくかを学ぶ。特に、幼稚園教育要領および保育所保育指針における心身の健康に関する領域「健康」に示された観点から、子どもの生活リズム、生活習慣、安全、あそび、食育などについて具体的な取組の事例や客観的データから、園生活のあり方、保育者の子どもとの関わり方、家庭との連携について探求する力を身に付けることが目的である。また、現代の子どもをとりまく環境の中で、健全な心身の発達を阻害する要因の把握や対処についての基礎を理解することも目的の一つとなる。

到達目標

学期終了までに、以下のスキル・能力の獲得を目指す。

- (1)発達年齢に応じた健康で安全な生活を営む力を身につけていくための保育のあり方が理解できる
- (2)獲得した知識や技能を活用し、保育場面での課題を解決する実践ができる
- (3)現代の子どもを取り巻く環境を把握した上で、必要な保育のあり方を思考できる

授業方法

子どもを取り巻く問題を、主に身体的活動場面、生活習慣場面に焦点を当てて解説していく。授業は主に講義形式+アクティブラーニングの形式を取るため、受講者の主体的な参加が必要となる。各自が講義前に講義内容について情報収集（予習）を能動的に行っていることを前提に講義を展開する。また、主体的な学習を促進するためにディスカッションを行い、学生それぞれの学びを共有する。授業では毎回、最課題を与えられ、学生はレスポンスカードと共に提出する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション：保育内容「健康」の意義
- 第2回 幼児期の心身の発達と健康
- 第3回 保育内容「健康」と幼児理解
- 第4回 生活環境と生活習慣
- 第5回 食生活と食育
- 第6回 安全環境と安全教育
- 第7回 疾病と救急対応
- 第8回 遊び環境と運動遊び
- 第9回 保育計画とフィードバック
- 第10回 遊びを通じた健康
- 第11回 運動遊びの実践方法
- 第12回 健康における保育者の役割
- 第13回 健康問題にかかわる家庭との連携
- 第14回 幼児の運動能力低下をまねく要因と環境
- 第15回 まとめ：心身ともに健康な子どもを育む保育とは

成績評価の方法

毎回の授業で提出される課題（60%）と、到達目標を測定する2回のレポート（40%）で評価する。

履修にあたっての注意

毎回の授業で課す課題の内容について発表を求めながら授業を進行していくので、課題にしっかりと取り組んだうえで授業に参加すること。また配布されたプリントや資料は、まとめて保存しておくこと。

教科書・参考書に関する備考

適宜、プリントを配布しそれにしたがって授業を進める。

参考書

杉原隆・湯川秀樹『新保育シリーズ 保育内容 健康』（光生館）

授業のねらい

この科目は、幼稚園教諭一種免許状取得のための選択科目の一つである。

保育内容（言葉と人間関係）で学んだ基礎知識や実習経験をふまえ、子どもを中心とした人間関係の視座を広げ、保育内容としての人間関係を深めることを目的とする。具体的には各自が自ら課題をみつけ、それを追求し、互いの学びを通して子どもをめぐる人間関係や保育者、保育のあり方を考察する時を持つ。さらにこの過程を通して子どもを見る専門的視点や、保育をとらえなおす試みを模索する。

到達目標

- 1 子ども・保護者を含め人間関係のあり方を掘り下げ、テーマを決めてまとめ、発表する。
- 2 子どもをめぐる人間関係や保育者、保育のあり方を考察する。

授業方法

前半は講義形式、中間派講義と並行してグループ討議が中心となるため、主体的に参加すること。また、授業計画は履修者の人数などにより変更になる可能性があるので注意のこと。

課題研究については事前学習が必要になる。初回に配付する資料によって、あらかじめ準備をすること。日ごろから子どもや保育に関する情報に関心を持って過ごすこと。

授業計画

- 第1回 はじめに
- 第2回 子ども人間関係の発達
- 第3回 思いやりと自律：社会的行動と自己の発達
- 第4回 社会的ルール：自己主張と自己抑制
- 第5回 仲間関係：協同的遊びと協同的学び
- 第6回 エピソード記録とビデオ映像から人間関係を考察する(1)子育て支援
- 第7回 エピソード記録とビデオ映像から人間関係を考察する(2)0. 1. 2歳児の生活
- 第8回 エピソード記録とビデオ映像から人間関係を考察する(3)異年齢の遊び
- 第9回 エピソード記録とビデオ映像から人間関係を考察する(4)3. 4. 5歳児の生活と活動
- 第10回 子どもをめぐる人間関係を考察する：保護者との関係
- 第11回 課題研究(1)テーマ決定・分析
- 第12回 課題研究(2)発表準備
- 第13回 課題研究(3)発表(1)
- 第14回 課題研究(4)発表(2)
- 第15回 おわりに

成績評価の方法

到達目標1は課題研究（50%）、到達目標2はレポート（50%）で評価する。

履修にあたっての注意

主体的な態度で参加し、積極的に課題研究などに取り組むこと。

教科書・参考書に関する備考

なし。必要な時に資料を配付する。

授業のねらい

乳幼児の園での生活や遊び場面を通して、園の人的・物的環境が子どもに与える影響について理解することを第一の目的とする。その上で、子どもの成長発達をうながす遊びを保障する保育環境を整えていくための配慮点を考えることを第二の目的とする。さらに幼児が小学校以降の教育につながる「数」や「文字」を環境から学んでいく姿を通して、小学校以降の教育の基礎が幼児教育にあることを理解する。

到達目標

1. 子どもの遊びと環境がどのように関連しているのかを述べることができる
2. 子どもの遊びを支える環境を構成する際の留意点を列挙することができる
3. 子どもの遊びや生活に「数」や「文字」習得の基礎があることを事例を用いて説明できる

授業方法

子どもの遊びや生活と環境の関係性を、様々な遊び場面を通して解説していく。一方的な講義だけではなく、グループでの話し合いなども適宜いれながら、授業を行う。1回目の授業から最後に課題（次回の授業に関連した内容の課題・所要時間 30分程度）を与え、次回の授業の最後にレスポンスカードと共に提出する。また、授業後には配布したプリントやノートを参考にして授業内容の復習をすることを求める（30分程度）。なお毎回の課題と期末のレポートは、採点したのちにコメントをつけて返却する。

授業計画

- 第1回 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における保育内容環境とは
- 第2回 子どもの遊びと環境 1 時間の長さや遊び
- 第3回 子どもの遊びと環境 2 物的環境と遊び
- 第4回 子どもの遊びと環境 3 人的環境と遊び
- 第5回 子どもの遊びと環境 4 自然や動植物と遊び
- 第6回 子どもの遊びと環境 5 ごっこ遊び
- 第7回 集団生活を支える環境
- 第8回 係や当番活動と環境
- 第9回 遊びや生活と数 1 数唱・計算
- 第10回 遊びや生活と数 2 順番・交代
- 第11回 遊びや生活と数 3 長さ・量
- 第12回 遊びや生活と文字 読む
- 第13回 遊びや生活と文字 書く
- 第14回 文字や数に関する教材
- 第15回 保育環境と子どもの育ち

成績評価の方法

到達目標を測定するための期末レポート（70%）と授業への参加状況（30%）で評価する。

教科書・参考書に関する備考

適宜プリントを配布します。

参考書

幼稚園教育要領
幼保連携型認定こども園教育・保育要領
保育所保育指針

授業のねらい

- (1)前年に身につけた技術（絵本の読み・語りきかせ、群読、パントマイム等）に加え、卒業後、それぞれの活動の場で、子どもたちの興味を惹き、自ら行動できる身体づくりを目指します。
- (2)総合表現は、「体験して学習する」授業です。まずやってみる＝行動する。子どもたちの遊びに対する様々な欲求に、演劇的表現を使って臨機応変に対応できる身体と、そして技術を身につけます。

到達目標

物怖じせず、自分から積極的に物事に取り組み、表現できる精神と身体を持つことができる。

授業方法

昨年、後期に履修した表現ワークショップがベースになります。

腹話術（台本づくりから人形との会話まで）、ペープサート、シルエットシアター（影絵劇）へと、少しずつアップしながら指導していきますので、取り組んだ内容の復習をしっかりと行ってください。台本作成や大道具製作等に時間がかかりますので、しっかりと計画を立てて進めるようにしてください。

授業計画

- 第1回 「承認」を、結果・行為・存在に分けて考えます。
腹話術の会話の中に、それを生かします。
- 第2回 人形との会話（台本）をつくります。腹話術の発声訓練、リアクションで笑いを取る方法を学びあいます。
- 第3回 腹話術（人形との対話）を、ひとりずつ発表します。
- 第4回 人形劇に学ぶ。民話「コロボック」（ロシアのパンの冒険物語）の台本を読んでみましょう。
- 第5回 人形劇台本「ある森の物語」を読んで、キャラクター、舞台装置（シカケ）を描いてみましょう。
- 第6回 ペープサートは日本の伝統芸術？歌のおねえさんになって、しりとりうたを演じてみましょう。
- 第7回 ペープサートと、その台本をつくり、グループで発表します。役割の分担を考えましょう。
- 第8回 シルエットシアター（影絵劇）。ペープサートをすこし発展させて、「夢の世界」を作ってみましょう。
- 第9回 シルエットシアターならではの表現方法を生かした「台本」を作ってみましょう。
- 第10回 キャラクター、演者を決め、製作に入ります。
- 第11回 各グループで制作した影絵を、実際に上演してみます。アクシデントから学ぶことがたくさんあると思います。
- 第12回 日本のむかしばなし「三枚のおふだ」のワンシーンを、今まで学んできた技術を使って上演するには？
- 第13回 それぞれのグループで脚色し、練習します①
- 第14回 練習日②
- 第15回 アイデアを生かした「三枚のおふだ」、上演です。

成績評価の方法

期末レポート 60%、授業への取り組み（グループの一員としての協力、その態度等） 40%

履修にあたっての注意

実際に身体を動かす場面が多くあります。動きやすいスタイルで参加して下さい。

授業のねらい

障害とは何かについて理解を深める。様々な障害のある子どもの発達の特徴を知り、障害を持つことの生きにくさについて学び、保育者や教員に求められる直接的な支援の姿勢や方法、保護者への対応及び地域との連携による支援の実践的な知識の習得を目指す。

到達目標

- 1 発達障害別による発達の経過・症状・特性について理解する。
- 2 発達障害のある子ども自身への支援、保護者への支援のあり方について理解する。
- 3 診断はされていないが、支援を必要とする子どもの特徴と対応について理解する。
- 4 支援を必要とする子ども達を支えるネットワーク、福祉機関や医療機関等の役割や連携について理解する。
- 5 子どもを支援する際に必要な、情報収集力、調整力、説明力、行動力等を養う。

授業方法

講義を中心とするが、テーマ事に様々な症例を紹介し、具体的な困難事例のグループによる検討を中心とした体験的な学び合いも展開する。授業終了時には次回の準備学習を課す（所用時間30分程度）。また事後指導としてテーマごとに課題レポート等の提出を課す。課題については授業時に口頭で説明する。

授業計画

- 第1回 総論「障害とは」
障害の概念、障害の国際的な標準と日本の現状、この授業が目指すもの。
- 第2回 乳幼児における支援の現状
母子保健、乳幼児健康診査、早期発見と療育、保育所幼稚園での支援、就学相談
- 第3回 学校教育における支援の現状
「特別支援教育」の学校制度や教育職員免許制度、従来の理念や制度、現状
- 第4回 肢体不自由児の理解と支援
障害の概要、脳性まひ等の原因や特徴、心理的な発達特性、援助の基本
- 第5回 視覚障害児・聴覚障害児の理解と支援
障害の概要、制度の変遷、言語発達や行動の特徴、心理的な発達特性、援助の基本
- 第6回 病弱児の理解と支援
障害の概要、制度の変遷、心理的な発達特性、援助の基本等
- 第7回 知的障害児の理解と支援(1)
障害の概要、診断基準、その原因、分類、心理的な発達特徴
- 第8回 知的障害児の理解と支援(2)
援助の基本、保育所学校等での留意点、事例
- 第9回 自閉スペクトラム症（ASD）の理解と支援(1)
障害の概要、原因、成長にともなう変化や特性
- 第10回 自閉スペクトラム症（ASD）の理解と支援(2)
基本的な支援方法、保育所や学校での留意点、事例
- 第11回 注意欠如・多動症（ADHD）と限局性学習症（LD）
診断の要件や基準、発達経過、行動特徴、心理的な発達特徴、援助の基本、事例
- 第12回 文化的或いは複合的な不利を被った子どもへの理解と支援
貧困等や母国語の違い、愛着障害を有する等の状態にある子どもの理解と支援
- 第13回 乳幼児期の個別のニーズに応じた支援の実際
個々の発達特性に応じた支援計画
- 第14回 学校教育場面での支援の実際
個々の発達特性に応じた指導計画と教育課程、教育相談、学内連携
- 第15回 支援のための多機関ネットワーク
教育、福祉、医療それぞれの機関の役割や限界、連携のあり方

成績評価の方法

到達目標1～4を測定するレポート50%、授業への取り組み姿勢・参加意欲30%、提出物20%、により評価する。期末レポートについては答案を返却し、解答例解説資料を配付する。

履修にあたっての注意

随時、グループ討議等の参加型の授業とするので積極的に参加して欲しい。

教科書・参考書に関する備考

各授業に必要な資料は配布する。また、各授業の中で関連書籍を紹介して行く。

授業のねらい

「子ども家庭福祉」領域では伝統的かつ中核的役割を担ってきた入所型児童福祉施設の実践を題材としながら、社会的養護にかかわるソーシャルワークの知識・技術とその応用について理解した上で、各児童福祉施設の養護内容と保育士の役割を学ぶことを目的とする。また、施設養護の実践を通して家族支援、地域支援について考察する。

到達目標

- 1 施設養護の特性が理解できる。
- 2 児童福祉施設における日常生活支援、自立支援、家族支援の内容が理解できる。
- 3 社会的養護にかかわるソーシャルワークの方法と技術を習得する。
- 4 児童福祉施設の保育士の役割が理解できる。
- 5 児童自立支援計画を作成する能力を習得する。

授業方法

演習科目であるため、事例検討、ロールプレイ、グループ討議等をおりまぜながら授業を展開する。授業終了時には次回の準備学習を課す（所用時間 30 分程度）。また、事後指導としてテーマごとに課題レポート等の提出を課す。レポート課題については、授業時に口頭で説明する。

授業計画

- 第1回 施設養護の実際 (1)施設養護のプロセス
- 第2回 施設養護の実際 (2)入所時および日常生活支援
- 第3回 施設養護の実際 (3)子どもの権利を守る取り組み
- 第4回 施設養護の実際 (4)被虐待児への理解と支援
- 第5回 施設養護の実際 (5)家族支援・地域支援
- 第6回 施設養護の実際 (6)自立支援
- 第7回 施設養護の実際 (7)児童自立支援計画の作成
- 第8回 ソーシャルワークに関わる知識・技術 (1)マッピング
- 第9回 ソーシャルワークに関わる知識・技術 (2)ケースマネジメント
- 第10回 ソーシャルワークに関わる知識・技術 (3)面接技法
- 第11回 施設の特性と養護内容 (1)乳児院、母子生活支援施設
- 第12回 施設の特性と養護内容 (2)児童養護施設
- 第13回 施設の特性と養護内容 (3)福祉型障害児入所施設、医療型障害児入所施設
- 第14回 施設の特性と養護内容 (4)児童自立支援施設、児童心理治療施設
- 第15回 児童福祉施設における支援者の資質と倫理

成績評価の方法

到達目標 1～3 を測定する試験（60％） 到達目標 1～5 を測定する課題提出（40％）

履修にあたっての注意

「子ども家庭福祉論Ⅰ・Ⅱ」「社会的養護」の内容についてしっかりと復習した上で授業に参加すること。

教科書・参考書に関する備考

教科書は使用しない。必要に応じてプリントを配布する。

参考書

吉田真理『社会的養護内容』（萌文書林、2016年、ISBN：978-4-89347-226-7）

76571

子どもと表現

担当教員：新海 節・杉浦篤子

2単位 後期

授業のねらい

この授業では主に、造形・音楽視点から、子どもの表現活動における諸知識を学ぶ。幼児の心身の発達に即した造形活動、音楽活動とは何か、また、それらの指導はどのような配慮が必要であるのかを子どもの造形的・音楽的発達過程や様々な教育法、歴史的観点、さらに実践などを通して考察していく。

到達目標

子供の造形的・音楽的表現活動に課する様々な知識を習得し、幼児教育、保育の視点からこれらの活動を考察することができる。

授業方法

以下の内容を主に講義形式より学んでいく。チーム・ティーチングのため、順番が前後することがある。授業ごとに課題を与えることもあり、円滑に授業を行うためには、授業外での事前事後学習（計60分程度）が必要となる。

授業計画

- 第1回 子ども表現 オリエンテーション
子どもとの関わりとは何か
音楽とは何か（世界共通の言語なのか、その必要性はなにか）
- 第2回 子供の発達過程と音楽（子どもの聴く活動について）
- 第3回 子供の発達過程と音楽（子どものうたう活動について）
- 第4回 日本における幼児音楽教育の歴史（明治から戦前まで）
- 第5回 日本における幼児音楽教育の歴史（戦後）
- 第6回 世界の幼児音楽教育（ダルクローズ）
- 第7回 世界の幼児音楽教育（オルフ・コダーイ）
- 第8回 子どもの音楽性を助長する音楽表現について（演奏を聴き、表現を考える）
- 第9回 子どもの表現とは（児童画の発達、段階の意味、日本の美育教育の歴史）
- 第10回 児童画の発達（造形の原理 表出期）
テキストからグループ研究 発表
- 第11回 児童画の発達（造形の原理 構成期）
テキストからグループ研究 発表
- 第12回 児童画の発達（造形の原理 再現期）
テキストからグループ研究 発表
- 第13回 児童画の発達（子どもと色彩 教師・親の役割）
- 第14回 世界の幼児教育（レジジョ・エミリアの造形・シュタイナーのフォルメン）
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定する課題 60% 授業への取り組み 40% により評価する

履修にあたっての注意

資料は講義に際して準備するが、子どもの造形・音楽活動に関する文献に関心に向けておき、意欲的に授業に臨むこと。

教科書・参考書に関する備考

その他、必要に応じて、適宜、プリントなどの資料を提供する。

参考書

鬼丸吉弘『創造的人間形成のために』（勁草書房）

授業のねらい

保育者として教育、保育現場で必要とされる音楽スキルの中で、楽器を用いた音楽表現の技術はその必要性が高い。これまで「ピアノ基礎演習」、「幼児歌曲伴奏法」などの授業を通してピアノ演奏における基礎的な技術や実践的な伴奏法、弾き歌いなどを学んできたが、それらを踏まえ、この授業ではピアノを用いて、各自のより優れた演奏技術、音楽性向上を目指し、学生各自の希望する技術習得に応じた音楽表現法を身に付けることをねらいとする。

到達目標

マンツーマンのレッスンなどを通して、ピアノ演奏、子どもの歌を中心とした弾き歌いの技術を習得し、最低限、授業で取り上げた曲のうち1～2曲を高水準で演奏することができる。

授業方法

担当教員：新海節・相原啓寿・相原真美・石田まり子・石橋克史・大高紫乃・佐藤奈都美・須藤尚美・辻千絵・道下暁・若狭玲衣

※複数教員による授業である。

本科目では、学生のピアノ学習の進捗状況によりその演奏技術にばらつきがある為、学生各自のピアノ技術のレベルに応じた楽譜を使用し、個人レッスンやグループレッスンを通して各自の進捗に準じた指導を受けることとなる。その為、統一した授業計画を示すことは難しいが、以下に基本的な授業計画を示す。教員より学生各自に応じた音楽的指導及び課題設定を行うので、それを基に事前事後学習（計80分程度）を行うこと。

授業計画

- 第1回 全体オリエンテーション及び担当教員オリエンテーション
- 第2回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（フランスの古い歌：チャイコフスキー）
- 第3回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（アラベスク：ブルグミュラー）
- 第4回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（ラデツキー行進曲：J. シュトラウス）
- 第5回 弾き歌い技術習得の為の練習（せんせいとおともだち）
- 第6回 弾き歌い技術習得の為の練習（おんまはみんな）
- 第7回 弾き歌い技術習得の為の練習（とんでったバナナ）
- 第8回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（タランテラ：ブルグミュラー）
- 第9回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（貴婦人の乗馬：ブルグミュラー）
- 第10回 中間発表会準備（各自、発表する曲の選曲）
- 第11回 中間発表会準備（各自、選曲した曲の練習）
- 第12回 中間発表会準備（各自、選曲した曲のまとめ）
- 第13回 中間発表会
- 第14回 弾き歌い技術習得の為の練習（世界中のこどもたちが）
- 第15回 弾き歌い技術習得の為の練習（となりのトトロ）
- 第16回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（ギロック：海の風景）
- 第17回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（みじかいお話：カバレフスキー）
- 第18回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（ギロック：森の妖精）
- 第19回 弾き歌い技術習得の為の練習（思い出のアルバム）
- 第20回 弾き歌い技術習得の為の練習（バスごっこ）
- 第21回 弾き歌い技術習得の為の練習（こどりのうた）
- 第22回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（ソナチネ：クーラウ）
- 第23回 弾き歌い技術習得の為の練習（そうだったらいいのにな）
- 第24回 弾き歌い技術習得の為の練習（やぎさんゆうびん）
- 第25回 発表会形式の総括のための準備（各自の曲の選曲）
- 第26回 発表会形式の総括のための準備（各自の曲の譜読み）
- 第27回 発表会形式の総括のための準備（各自の曲の練習）
- 第28回 発表会形式の総括のための準備（各自の曲を音楽表現の観点から練習）
- 第29回 発表会形式の総括のための準備（各自の曲のまとめ）
- 第30回 総括（発表会形式による演奏）

成績評価の方法

到達目標測定のための実技試験（80%）、授業への主体的参加状況（20%）により評価を行う。

履修にあたっての注意

ピアノの演奏レベル向上のためには日々の練習が欠かせない。その為、毎日の練習を怠らず地道に努力すること。

教科書

新海節 田中宏明『ほどよいレベルで弾ける 保育者のためのピアノ&童謡曲 60』（圭文社、2015）
小林美実 編『こどものうた 200』（チャイルド本社、1975）

教科書・参考書に関する備考

ピアノ曲、こどものうた、簡易楽譜など、各自のピアノ技術のレベルに応じた楽譜をその都度指示する場合がある。

授業のねらい

「幼稚園教育要領をふまえて「造形・表現」を具体的に実現できるように、自分自身の造形する力を増加させる。子どもたちの感性、造形感覚を引き出すためには、指導者の表現力と多彩な素材を知っておくことが求められる。いろいろな体験をしておくことが必要となるので、経験を積んでいくことをねらいとする。

到達目標

保育学科での造形の授業は、苦手からの脱出も一つの目標である。自分の中に造形力を育て、子どもたちと向き合える事の土台とする。造形が好きな人はさらにその力を高め、苦手な人は、まずは取り組んでみることで、そして楽しめるようになることを到達目標とする。

授業方法

制作が中心となる、いろいろな素材、材料を使用。
題材として、絵本、童話、昔話なども素材とすることが多いので、事前・事後学習として日常的に目を通し、幅広く知っておいてほしい。

授業計画

- 第1回 ガイダンス。保育内容（表現）をどのように具体化していくか。子どもの造形発達を考慮して考える。
- 第2回 描けないをなくすために I 「多色ボールペン」を使って描くイラスト
- 第3回 描けないをなくすために II 「多色ボールペン」を使って 園だよりの作成
- 第4回 描けないをなくすために III 「水彩絵の具」を使って描く 小物のコツ
- 第5回 描けないをなくすために IV 「水彩絵の具」を使って描く 風景のコツ
- 第6回 素材としての牛乳パック I 「パズル」を制作
- 第7回 素材としての牛乳パック II① 「くるくる絵本」を制作 導入
- 第8回 素材としての牛乳パック II② 「くるくる絵本」 完成
- 第9回 手遊びと共に一形にする（材料選び） 軍手・靴下・スポンジ・紙・その他の発見
- 第10回 絵本制作 1 自分の一冊をつくる（誰にでも作れる絵本から始めよう）
物語を考える
- 第11回 絵本制作 2 材料選び 制作
- 第12回 絵本試作 3 制作
- 第13回 絵本制作 4 制作
- 第14回 絵本制作 5 制作 本として仕立てる
- 第15回 合評、全作品を振り返る

成績評価の方法

授業への取り組み（30%）、制作姿勢（30%）、作品の提出（40%）目標への到達度を評価

履修にあたっての注意

準備や後片付けにも留意すること。
道具入れ、絵の具など、描画材料が必要となります。

授業のねらい

乳幼児・障害児実習をふまえ、さらに子ども理解を深めるとともに、幼稚園の環境や1日の生活の流れを理解し、幼稚園教諭の仕事について学ぶことを目的とする。実習は学外の幼稚園で4週間行う。4週間のなかで、観察実習、参加実習、指導計画の立案・実施などを行い、幼稚園教諭に必要な力が何であるかということを知る。4週間継続して同じ園で生活することによって、乳幼児・障害児実習では学ぶことのできなかつた、子どもや園の職員との関係性のむすび方や、長期的な保育計画のあり方などを考える機会になることを期待する。

到達目標

1. 幼稚園教諭として必要な力、特に実践力を身につける
2. 子どもの状況にあった指導計画を立案することができる
3. 子ども・他の保育者との関係性をむすぶことができる
4. 幼稚園における子どものよりよい生活とはどのようなものかを述べるができる

授業方法

この授業は、学外の幼稚園で4週間の実習（4単位）と学内での事前・事後指導（1単位）で構成される。事前指導では、幼稚園という場の理解、実習内容の理解、指導計画の立て方等を学ぶ。また実習を想定した教材研究も行う。事後指導では、実習で学んだことの整理や今後の課題を明確化していく作業を行う。教材研究は授業外の時間を使って行うことを求める。提出された教材には、コメントをつけて返却する。

授業計画

事前指導では以下の内容について理解する

- 1 幼稚園の性格と特徴
 - 2 幼稚園実習の意義と内容
 - 3 実習における子どもの活動
 - 4 指導計画の立案
 - 5 日誌等記録の仕方
- 4週間で以下のことについて学ぶ

- 1 幼稚園の役割
- 2 幼稚園の教育方針
- 3 幼稚園の生活の流れ
- 4 幼稚園に通う子どもの理解
- 5 幼稚園の保育内容
- 6 幼稚園教諭としての子どもへの接し方
- 7 子どもの遊びの捉え方
- 8 指導計画の立案・実施
- 9 幼稚園教諭の職務内容
- 10 実習日誌の書き方

事後指導では以下の内容についての整理をする

- 1 実習で学んだことは何か
- 2 幼稚園という場と子どもの育ち
- 3 今後の自己課題

成績評価の方法

到達目標を実習園の評価（50%）、実習日誌（20%）、課題レポート（30%）で評価する。

履修にあたっての注意

貴重な日々の保育の現場をお借りして実習を行うということを頭におき、ひとりの保育者として責任ある行動をとること。長期間子どもと接することのできる貴重な時間であるので、何でも積極的な態度でのぞむこと。体調管理には充分気をつけて、欠席のないように気をつける。

教科書・参考書に関する備考

テキスト：なし

事前指導・事後指導の際には、プリントを配布し、それに基づき授業を進める。

授業のねらい

福祉施設実習 I の事前・事後指導のための科目である。福祉施設実習 I の対象施設として、乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所、児童養護施設、児童心理治療施設、児童自立支援施設等がある。事前指導では自分が実習を行う実習施設の特性と社会的役割、利用児・者の特性、施設保育士の役割を学び、実習に向けた準備をすることを目的とする。また、事後指導では実習を振り返り新たな課題や学習目標を明らかにすることを旨とする。

到達目標

- 1 福祉施設実習の意義・目的が理解できる。
- 2 福祉施設実習の内容を理解し、自らの課題を明確にすることができる。
- 3 実習施設における利用児・者の権利擁護について理解できる。
- 4 事後指導を通して、新たな課題や学習目標を明らかにすることができる。

授業方法

福祉施設実習 I に参加するための準備教育である。グループ学習を交えながら、主に講義形式で授業を展開する。授業終了時には次回の準備学習を課す（所用時間 30 分程度）。また、課題レポート提出により各自の理解度についての確認をする。レポート課題については、授業時に口頭で説明する。

授業計画

- 第 1 回 ・福祉施設実習の目的・意義
・福祉施設の実習実施計画
・福祉施設実習に関する書類について
- 第 2 回 ・福祉施設の概観
・福祉施設実習内容
- 第 3 回 実習施設の予備知識 (1) (グループ学習)
- 第 4 回 実習施設の予備知識 (2) (グループ発表)
- 第 5 回 福祉施設実習の実際 (1) 児童養護施設
- 第 6 回 福祉施設実習の実際 (2) 知的障害児施設
- 第 7 回 福祉施設実習の実際 (3) 児童発達支援施設
- 第 8 回 福祉施設実習の実際 (4) 母子生活支援施設社
- 第 9 回 ・福祉施設実習日誌の書き方
・福祉施設実習計画の作成
- 第 10 回 福祉施設実習の心構え
- 第 11 回 実習の振り返り (1) 実習報告書の作成、実習の自己評価
- 第 12 回 実習の振り返り (2) (グループディスカッション)
- 第 13 回 実習報告会 (1)
- 第 14 回 実習報告会 (2)
- 第 15 回 実習体験パンフレットの作成、個別事後指導

成績評価の方法

到達目標 3～4 を測定する提出物 (60%) 授業への参加状況 (40%)

履修にあたっての注意

福祉施設での実習にむけて重要な指導を行うため、欠席をしないこと。欠席が多い場合は、実習取りやめとします。

教科書

施設実習ガイドライン

78611

福祉施設実習 I

担当教員：小川恭子・矢野 潤・吉田孝子

2単位 後期

授業のねらい

乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所、児童養護施設、児童心理治療施設、児童自立支援施設等の施設実習を通し、利用児・者一人一人が抱える状況について理解を深めるとともに、福祉施設の目的と機能、利用児・者および家族への支援方法、施設保育士の役割と業務内容について学ぶことを目的とする。

到達目標

- 1 児童福祉施設等の役割や機能を説明できる。
- 2 観察や利用児・者への関わりを通して、利用児・者の言動が理解できる。
- 3 利用児・者および家族へのかかわり方について理解できる。
- 4 施設保育士の業務や職業倫理を理解できる。

授業方法

学外の実習施設にて10日間の実習を行う。

授業計画

- 1 実習期間は10日間である。原則として、実習時間は職員の勤務時間に準ずる
- 2 実習内容
 - i 施設の役割と機能
 - (1)施設の生活と1日の流れを理解する。
 - (2)施設の役割と機能を理解する。
 - ii 入所（利用）児・者理解
 - (1)入所（利用）児・者の観察とその記録から言動の意味を理解する。
 - (2)入所（利用）児・者の個々に応じた援助技術や方法を習得する。
 - iii 養護内容・生活環境
 - (1)入所（利用）児・者の支援内容について理解する。
 - (2)入所（利用）児・者の最善の利益を保障するための配慮を学ぶ。
 - (3)入所（利用）児・者の家族支援の実際について理解する。
 - (4)健康管理、安全対策について学ぶ。
 - iv 計画と記録
 - (1)支援計画を理解する。
 - (2)実習日誌や実習記録を通し自己理解を深める。
 - v 専門職としての保育士の役割と倫理
 - (1)保育士の業務内容、職員間のチームワークのあり方について学ぶ。
 - (2)保育士の役割と職業倫理について学ぶ。

成績評価の方法

実習日誌（40％） 到達目標1～2を測定する自己評価レポート（20％） 実習施設の評価（40％）

履修にあたっての注意

福祉施設には様々な訓練・療育・養育等を受けている方々が生活（利用）をしています。実習生として学ばせていただいている立場であることを理解し、誠実な態度で実習に臨んでください。

教科書

施設実習ガイドライン

授業のねらい

この授業では自分の「考えを相手に伝える」ためのルールやマナーを学び、それらを用いて文章を作成したり、豊かな言語表現の力を身に付けたりすることを目的としている。言葉を磨き、物事を幅広くとらえる力を付け、論理的な思考を身に付けることは、大学での演習発表、レポート作成、卒業論文などに重要な要素となるばかりではなく、社会でも必要とされる力である。本授業をとおして社会生活に必要なスキルを高めてほしいと考える。

到達目標

1. 相手に失礼にならない、社会的マナーに沿った文章を作成することができる。
2. 自分の考えを正しく相手に伝える文章を作成することができる。

授業方法

授業の前半は講義での説明となる。後半は実際に文章作成、プレゼンテーションなど演習形式で展開する。原則として毎回課題を設定しその提出を求める。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 文の構造の基礎を知る
- 第3回 敬語の枠組みを学ぶ
- 第4回 お礼の手紙を作成する
- 第5回 履歴書の歴史を知り実際に作成する
- 第6回 自己推薦文1 自己推薦文の特徴、形式を知る
- 第7回 自己推薦文2 友達の自己推薦文を作成する
- 第8回 レポートの作成1 作文・小論文・レポート・卒業論文の違い 文章の構成について
- 第9回 レポートの作成2 レポート・論文作成の基本、適切な表現
- 第10回 レポートの作成3 資料の探し方と使い方、表やグラフの活用 引用の仕方
- 第11回 レポートの作成4 レポートの作成
- 第12回 発表方法1 発表の基本について 何を相手に伝えるか 五つの言語意識に沿って考える
- 第13回 発表方法2 プレゼンテーション原稿の作成
- 第14回 発表方法3 相手に伝える効果的なプレゼンテーション
- 第15回 まとめ プレゼンテーション交流会

成績評価の方法

課題 30% レポート 50% 授業参加状況 20%

履修にあたっての注意

毎回課題を出します。提出は厳守してください。辞書、電子辞書の持ち込みは自由とします。

授業のねらい

子どもの不適応行動の理解や発達を支援するためには、適切な心理アセスメントが必要となる。現在の相談機関で用いられている知能検査や発達検査及び性格検査を紹介し、その特徴と実施方法、背景となる理論や解釈上の留意点を学び、心理検査の結果を適切に理解し現場で応用できる実践的な知識の習得を目指す。

到達目標

- 1 知能検査と発達検査を中心に、性格検査やその他の検査等、医療機関や相談機関等で一般的に用いられる検査の実際を知る。
- 2 検査の背景となる発達理論、解釈上の留意点を学び、心理検査の結果を読み解く力を身につける。
- 3 事例を通して、実際の保育現場や教育現場で心理検査の結果を活用する方法について理解する。

授業方法

授業では配付される講義資料とスライドを中心に進める。随時、心理検査を实际体験しながら理解を深める。実際の事例を通じて、子どもの心理状態を推測し、支援につなげる方法について学ぶ。グループによる討議も適宜実施する。授業終了時には次回の準備学習を課す（所用時間 30 分程度）。また事後指導としてテーマごとに課題レポート等の提出を課す。課題については授業時に口頭で説明する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
心理検査とは何か、心理検査の歴史、心理検査への批判、心理検査の効用と限界
- 第2回 発達の理論の概要
ピアジェ・ヴィゴツキー・エリクソン他、成熟優位説、学習説、相互作用説、野生児の真偽、発達指数の考え方
- 第3回 発達検査の実際
遠城寺式発達検査、津守・稲毛精神発達質問紙、乳幼児発達スケール Kids、グッドイナフ人物画知能検査他
- 第4回 知能の理論の概要
知能や知能指数の考え方、知能の遺伝説と環境説、知能構造、知能障害
- 第5回 知能検査の実際①
WISC-IV知能検査、田中ビネー式知能検査他
- 第6回 知能検査の実際②
新版 K 式発達検査、K-ABC II、新版 K 式発達検査他
- 第7回 性格の理論の概要
性格（類型論、力動論、特性論）、性格の形成
- 第8回 性格検査の実際①
バウムテスト、P-F スタディー、ロールシャッハ・テスト
- 第9回 性格検査の実際②
絵画統覚検査 TAT、文章完成法 SCT、エゴグラム他
- 第10回 その他の心理検査
ベンダーゲシュタルトテスト、クリペーツテスト、概念発達検査他
- 第11回 その他子どもの心理世界を探る方法
箱庭、ライフストーリーワーク他
- 第12回 心理検査から子どもの発達や心理世界を紐解く 事例①
言葉の遅れ、多動、緘黙
- 第13回 心理検査から子どもの発達や心理世界を紐解く 事例②
虐待、愛着障害
- 第14回 心理検査から子どもの発達や心理世界を紐解く 事例③
非行、不登校、ひきこもり
- 第15回 心理検査、知能検査、性格検査他の活用の方法と問題点

成績評価の方法

到達目標 1～3 を測定するレポート 50%、授業への取り組み姿勢・参加意欲 30%、提出物 20%、により評価する。期末レポートについては答案を返却し、解答例解説資料を配付する。

教科書・参考書に関する備考

各授業で必要な資料は配布する。また、各授業の中で関連書籍を紹介して行く。

授業のねらい

保育学研究演習は、自分が人間のどのような側面に関心を持っているかを明らかにし、それらが心理学的な研究においてどのように研究されているのかを理解することを目的とした演習です。また、それらを達成するために、アイデアの出し方・論文の検索方法・論文の読み方など、研究を行う上で必要な技術を獲得することも目的の1つとしています。

到達目標

1. アイディアの出し方・論文の検索方法・論文の読み方などの基本的な技術を身につけること
2. 自分の関心のあることがらを明確にし、学術用語を用いて説明できること
3. 先行研究で明らかになっていることがらについて、その概要を解説できること

授業方法

前期は、研究を進めるために必要な技術を身につけることに重点を置いています。後期は、それぞれのテーマによって論文を読み、それをまとめたものを発表するという形式で演習を進めていきます。

演習前は、論文を読むこと・発表用のレジュメを作成することなどが重要です。演習後は、発表内容を振り返り、新たな文献を読んだり、ブレインストーミングをするなどして、考えを整理し、自分が本当に関心を持っている内容とはどのようなことなのか、追究してください。予習・復習に必要な時間の目安は、あわせて1～3時間です。

発表内容などについては、その都度、講評を行いますので、次回の発表に反映させるようにしてください。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：演習の進め方などの確認
- 第2回 研究をはじめするための準備(1)：研究とは何かを理解する・研究の際の倫理的配慮について学ぶ
- 第3回 研究をはじめするための準備(2)：アイデアを出す方法を理解する
- 第4回 研究をはじめするための準備(3)：アイデアを出す方法を実践する
- 第5回 研究をはじめするための準備(4)：アイデアをまとめる方法を理解する
- 第6回 研究をはじめするための準備(5)：アイデアをまとめる方法を実践する
- 第7回 研究をはじめするための準備(6)：自分の関心のあることがらを整理し、発表する
- 第8回 研究テーマの設定(1)：学術用語について学ぶ
- 第9回 研究テーマの設定(2)：文献検索の方法を確認する・関心のあることがらに関連する書籍を検索する
- 第10回 文献発表(1)：書籍を読み、発表する(グループ1)
- 第11回 文献発表(2)：書籍を読み、発表する(グループ2)
- 第12回 文献発表(3)：書籍を読み、発表する(グループ3)
- 第13回 文献発表(4)：書籍を読み、発表する(グループ4)
- 第14回 文献発表のまとめ：読んだ書籍の内容を整理する・関心のあることがらについて再検討する
- 第15回 論文の検索(1)：論文の検索方法を確認する
- 第16回 論文の検索(2)：関心のあることがらに関連する論文を検索する
- 第17回 論文の読み方(1)：論文の構成や読み方について理解する
- 第18回 論文の読み方(2)：質問紙法を用いた論文を読む
- 第19回 論文の読み方(3)：実験法を用いた論文を読む
- 第20回 文献発表(5)：論文を読み、その内容を発表する(グループ1)
- 第21回 文献発表(6)：論文を読み、その内容を発表する(グループ2)
- 第22回 文献発表(7)：論文を読み、その内容を発表する(グループ3)
- 第23回 文献発表(8)：論文を読み、その内容を発表する(グループ4)
- 第24回 文献発表(9)：論文を複数読み、その内容を発表する(グループ1)
- 第25回 文献発表(10)：論文を複数読み、その内容を発表する(グループ2)
- 第26回 文献発表(11)：論文を複数読み、その内容を発表する(グループ3)
- 第27回 文献発表(12)：論文を複数読み、その内容を発表する(グループ4)
- 第28回 1年間のまとめ(1)：これまでに読んだ書籍・論文の内容を整理する
- 第29回 1年間のまとめ(2)：卒業研究のテーマについて発表する(グループ1)
- 第30回 1年間のまとめ(3)：卒業研究のテーマについて発表する(グループ2)

成績評価の方法

到達目標1の達成度を測定する2～9回目と15～19回目における取り組みと発表内容(30%)、到達目標2・3の達成度を測定する10～14回目と20～27回目における発表内容(50%)、到達目標1・2・3の達成度を測定する最終レポート(20%)によって評価します。

履修にあたっての注意

自分の発表がないときにも、文献の検索や論文を読むなど、積極的に研究テーマに取り組んでください。

授業のねらい

この演習は、研究のための文献検索、資料集め、文献の要約と多角的な視点での内容理解、研究方法の把握など、卒業研究に向けての基本的な作業を通して、保育学研究について学びます。参加者の関心に見合った課題を設定し、実際に資料を集め、要旨作成、発表、ディスカッションなどを通して研究の面白さや難しさを経験する。調査や統計処理の方法についても学ぶ。後期は、各自の研究テーマを見つけ、次年度の卒業研究の下準備として先行研究調査やプレ調査に取り組みます。必要に応じてキャンパスの外で現場見学を行ったり、外部の方の話をうかがう。

また、研究と同時に畑での作物作り（畑起しから収穫まで）、大学祭での調理までの一連の作業を通して「いのち」「食育」についての体験的学びを年間を通して行う。

到達目標

- 1 文献講読により保育研究の一端にふれ、内容を考察する。
- 2 研究のための手続きを経験し、卒業研究のテーマを考える。
- 3 フィールドにて現場の現状を、畑作業を通して自然環境やいのち、食育について体験的に理解する。

授業方法

文献講読と文献検索・要旨作成・発表とディスカッション、及び畑作業やキャンパス外の様々場へ出向いて学習するフィールドワークが中心となる。最終回には各自の課題に応じたレポート（卒業研究の先行研究となるもの）を提出する。

授業計画は、天候や現場の都合等によっても異なるため、順番が入れ替わることがある。

授業内でできることは一部であり、要旨作成や発表準備、フィールドワークのための情報収集等は事前学習となる。計画的に進めること。

授業計画

- 第1回 はじめに
- 第2回 研究テーマについて－素朴な疑問と研究の方向性/畑起し
- 第3回 先行研究調査(1)：文献検索と資料集め
- 第4回 先行研究調査(2)：本学図書館での情報収集とその他の検索
- 第5回 先行研究調査(3)：多様な情報収集方法・フィールドワーク/堆肥・肥料播き
- 第6回 文献の要約と理解(1)：要旨作成/種まき
- 第7回 文献の要約と理解(2)：発表とディスカッション
- 第8回 研究テーマの絞込みと研究倫理について
研究倫理について学び、「藤女子大学研究倫理基準」を理解する
- 第9回 仮説と研究方法(1)：研究計画/草刈
- 第10回 仮説と研究方法(2)：調査方法と統計処理
- 第11回 仮説と研究方法(3)：統計処理の実際
- 第12回 仮説と研究方法(4)：結果と考察
- 第13回 研究方法の反省点と新たな研究課題
- 第14回 フィールド見学
- 第15回 文献の批判的理解と多角的視点
前期のまとめと後期のガイダンス
- 第16回 課題研究(1)：先行研究と研究テーマ/収穫
- 第17回 課題研究(2)：文献要約と理解・要旨作成
- 第18回 課題研究(3)：要旨発表・グループディスカッション
- 第19回 課題研究(4)：要旨発表・グループディスカッション/調理・大学祭にて販売
- 第20回 課題研究(5)：要旨発表・グループディスカッション
- 第21回 課題研究(6)：研究テーマの絞込み
- 第22回 課題研究(7)：仮説と研究計画・研究方法の検討
- 第23回 課題研究(8)：仮説と研究計画・研究方法の検討、調査方法
- 第24回 課題研究(9)：仮説と研究計画・研究方法の検討、現地調査
- 第25回 課題研究(10)：情報収集、現地調査準備
- 第26回 課題研究(11)：情報収集、統計
- 第27回 課題研究(12)：結果と考察
- 第28回 課題研究(13)：反省点と研究課題
- 第29回 課題研究(14)：多角的視点
- 第30回 課題研究(15)：卒業研究に向けて

成績評価の方法

到達目標 1 は、レジュメ・発表・ディスカッション（30%）、到達目標 2 は、情報収集・調査への取組とレポート（30%）、到達目標 3 は畑作業やフィールド見学への取組状況（40%）で評価する。

履修にあたっての注意

次年度の卒業研究を踏まえた演習となるため、主体的・積極的な参加が必要となる。

教科書・参考書に関する備考

保育学関連資料、本学卒業生の卒業論文など必要に応じて紹介する。

授業のねらい

子どもの造形的発達を踏まえ、保育者として必要な造形表現における基礎的な力を付けること、造形活動における学びの過程を捉えることを目的として行う。また、保育と造形の関連性を理解し、子どもの制作活動を支援（援助）し、支えることができる造形を得意とする保育者を養成する。

到達目標

- 1 造形表現の基礎知識を理解することができる。
- 2 文献、ディスカッション、フィールドワーク等を通して、造形表現における学びの過程を意識した指導法を身に付けることができる。
- 3 実践事例の検討を通しながら、指導計画の作成ができる。

授業方法

前期は、造形表現の基礎知識の習得や保育と造形の関連性について、文献講読等を主にしながら、ディスカッション・発表等を行う。後期は、実践事例の検討をしながら、指導計画の作成を行い、各自の関心テーマに沿って、卒業研究のテーマを探る。なお、フィールドワークとして、幼稚園や保育園、小学校低学年の保育（授業）参観を予定している。

事前学習は、授業計画に基づいて各自予習すること（60分程度）。事後学習は、習得したことをまとめたり、ディスカッションで見えてきたことをまとめたりしたレポートの提出を課す（60分程度）。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、演習の進め方
- 第2回 造形表現の基礎知識の習得(1)造形表現の意味と役割
- 第3回 造形表現の基礎知識の習得(2)材料を軸とした造形活動
- 第4回 造形表現の基礎知識の習得(3)環境を通した造形活動
- 第5回 造形表現の基礎知識の習得(4)イメージをもとにした造形活動
- 第6回 造形表現の基礎知識の習得(5)鑑賞活動
- 第7回 文献講読とディスカッション(1)
- 第8回 文献講読とディスカッション(2)
- 第9回 文献講読とディスカッション(3)
- 第10回 文献講読とディスカッション(4)
- 第11回 文献講読とディスカッション(5)
- 第12回 文献講読とディスカッション(6)
- 第13回 文献講読とディスカッション(7)
- 第14回 文献講読とディスカッション(8)
- 第15回 前期の振り返りとまとめ
- 第16回 後期オリエンテーション、演習の進め方
- 第17回 フィールドワーク(1)幼稚園
- 第18回 フィールドワーク(2)保育園
- 第19回 フィールドワーク(3)小学校低学年
- 第20回 実践事例検討とディスカッション(1)
- 第21回 実践事例検討とディスカッション(2)
- 第22回 実践事例検討とディスカッション(3)
- 第23回 指導計画の作成(1)
- 第24回 指導計画の作成(2)
- 第25回 研究論文に関する文献講読
- 第26回 研究論文に関する文献のまとめとレジュメ作成
- 第27回 卒業研究のテーマを探る
- 第28回 卒業研究のテーマの絞り込み
- 第29回 卒業研究発表会への参加
- 第30回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定するためのレポート(30%)・指導計画作成(20%)、演習への参加状況(50%)

履修にあたっての注意

造形表現における学びの過程を意識した指導をテーマとしているので、子どもの造形発達について、各自が課題意識と意欲を持って積極的に参加することを期待する。

授業のねらい

昨年3月に保育所保育指針、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領が改訂され、幼児教育と小学校教育との円滑な接続を一層推進していくことが示されました。この演習では、「幼児教育と小学校教育の接続のあり方」をテーマとし、それぞれの校種における指導の共通点と相違点を明確にするとともに、校種間の接続に関わる現状や課題、そして改善のための手立て等を研究します。

到達目標

- 1 文献を講読し、論点を整理して発表することができる。
- 2 ゼミメンバーと討論することを通して、協働して学ぶ姿勢を身に付ける。

授業方法

前期は、研究を進めるにあたっての基礎知識を理解することに重点を置き、研究発表の要旨等を講読し、整理して発表します。後期は、テーマに沿った論文を講読し、まとめたものを発表し討論します。ゼミを進めながら、これまで学んできたことを整理し、自己課題を見つけてください。事前・事後学習として文献を熟読し、まとめていくことを課す。

授業計画

- 第1回 ガイダンス 演習の進め方
- 第2回 幼保小連携の基礎知識(1) 幼児教育と小学校教育の概要
- 第3回 幼保小連携の基礎知識(2) 生活科の概要
- 第4回 幼保小連携の基礎知識(3) 幼児教育と小学校教育の接続の具体
- 第5回 研究発表要旨の講読とディスカッション(1) 資料を講読し、整理して発表する
- 第6回 研究発表要旨の講読とディスカッション(2) 資料を講読し、整理して発表する
- 第7回 研究発表要旨の講読とディスカッション(3) 資料を講読し、整理して発表する
- 第8回 研究発表要旨の講読とディスカッション(4) 資料を講読し、整理して発表する
- 第9回 研究発表要旨の講読とディスカッション(5) 資料を講読し、整理して発表する
- 第10回 研究発表要旨の講読とディスカッション(6) 資料を講読し、整理して発表する
- 第11回 研究発表要旨の講読とディスカッション(7) 資料を講読し、整理して発表する
- 第12回 研究発表要旨の講読とディスカッション(8) 資料を講読し、整理して発表する
- 第13回 幼児教育と小学校教育の接続の現状について
- 第14回 幼児教育と小学校教育の接続の課題について
- 第15回 前期の振り返りとまとめ
- 第16回 文献の検索について
- 第17回 文献の講読とディスカッション(1) 選択した文献を講読し、内容をまとめて発表する
- 第18回 文献の講読とディスカッション(2) 選択した文献を講読し、内容をまとめて発表する
- 第19回 文献の講読とディスカッション(3) 選択した文献を講読し、内容をまとめて発表する
- 第20回 文献の講読とディスカッション(4) 選択した文献を講読し、内容をまとめて発表する
- 第21回 文献の講読とディスカッション(5) 選択した文献を講読し、内容をまとめて発表する
- 第22回 文献の講読とディスカッション(6) 選択した文献を講読し、内容をまとめて発表する
- 第23回 文献の講読とディスカッション(7) 選択した文献を講読し、内容をまとめて発表する
- 第24回 文献の講読とディスカッション(8) 選択した文献を講読し、内容をまとめて発表する
- 第25回 研究課題の設定について(1) 研究テーマの設定の仕方
- 第26回 研究課題の設定について(2) 研究テーマを探る
- 第27回 研究課題の設定について(3) 研究テーマ発表1
- 第28回 研究課題の設定について(4) 研究テーマ発表2
- 第29回 研究課題の設定について(5) 研究の見通しの策定
- 第30回 1年間の振り返りとまとめ

成績評価の方法

到達目標1を測定するための発表内容(50%) 到達目標2を測定するための議論への参加状況(50%)

履修にあたっての注意

自らの考えをしっかりと持ち、発言することはもちろんですが、他者の意見を理解し、ディスカッションする姿勢も大切にしてほしいです。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて資料を配付します。

授業のねらい

子育て不安や児童虐待などが大きな社会問題となっている現代、子どもに関わる専門職者には、子どもに対するケアのほか、家族に対する支援や子育てしやすい地域環境づくりが求められている。本演習では、そのために必要とされるソーシャルワークの知識・技法を生かしながら子どもへの保育、家族支援、地域環境づくりに対応できる専門技術や課題解決の力を深めることを目的とする。また、事例検討・施設見学・文献購読・グループ発表・ディスカッション等を通して、各自の研究テーマを明確にし、発展的に4年次の卒業論文作成へとつなげることを目指す。

到達目標

- 1 ソーシャルワークの意味とプロセスが理解できる
- 2 保育とソーシャルワークの関連が理解できる
- 3 各自の関心や問題意識を明確にすることができる

授業方法

前期は主にソーシャルワークの基礎知識や保育とソーシャルワークとの関連性について、事例検討・文献購読等を通して考える。後期は各自の関心テーマにそって、レジュメ作成・発表・ディスカッション等を行う。なお、フィールドワークとして社会的養護施設や相談機関の訪問を予定している。

授業終了時には次回の準備学習を課す(所用時間60分程度)。また、課題レポート提出により各自の理解度についての確認をする。レポート課題については、授業時に資料を配布し説明する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、演習の進め方
- 第2回 資料調査法(図書館ガイダンスとして実施予定)および研究倫理について
- 第3回 ソーシャルワークの基礎知識の修得 (1)価値と倫理
- 第4回 ソーシャルワークの基礎知識の修得 (2)ケースマネジメント
- 第5回 ソーシャルワークの基礎知識の修得 (3)マッピング技法
- 第6回 文献講読とディスカッション (1)保育ソーシャルワークの基礎理論
- 第7回 文献講読とディスカッション (2)保育ソーシャルワークと保育実践
- 第8回 文献講読とディスカッション (3)保育ソーシャルワークと保護者支援
- 第9回 文献講読とディスカッション (4)保育ソーシャルワークと関係機関との連携
- 第10回 文献講読とディスカッション (5)保育所における保護者支援
- 第11回 文献講読とディスカッション (6)幼稚園における保護者支援
- 第12回 文献講読とディスカッション (7)児童福祉施設における保護者支援
- 第13回 文献講読とディスカッション (8)保育ソーシャルワークと保育者の資質
- 第14回 文献講読とディスカッション (9)ソーシャルワーク論から保育が学ぶもの
- 第15回 文献講読とディスカッション (10)保育ソーシャルワーカーの可能性
- 第16回 後期オリエンテーション、研究分野に関するテーマを探る
- 第17回 フィールドワーク (1)児童福祉施設①
- 第18回 フィールドワーク (1)児童福祉施設②
- 第19回 フィールドワーク (2)相談機関
- 第20回 事例検討(ソーシャルワークの基礎知識の応用) (1)児童虐待
- 第21回 事例検討(ソーシャルワークの基礎知識の応用) (2)非行
- 第22回 事例検討(ソーシャルワークの基礎知識の応用) (3)貧困
- 第23回 課題検討 (1)研究テーマに関する文献を読む
- 第24回 課題検討 (2)研究テーマに関する文献をまとめる
- 第25回 課題検討 (3)まとめた文献のレジュメを作成する
- 第26回 課題検討 (4)研究テーマの発表(2~3名)
- 第27回 課題検討 (5)研究テーマの発表(2~3名)
- 第28回 課題検討 (6)研究テーマの発表(2~3名)
- 第29回 課題検討 (7)研究テーマの発表(2~3名)
- 第30回 卒業研究発表会への参加

成績評価の方法

到達目標2~3を測定する発表(30%)・レポート(30%) 授業への参加状況(40%)

履修にあたっての注意

子ども・家庭に関する諸問題を通し、現代家族が持ち合わせる脆弱さやその背景を理解し、自分達にできることをととも考えていきます。したがって、本科目では他の意見を尊重する姿勢や討議等への積極的な参加・協力を求めます。

授業のねらい

この演習は「あそび」への様々な関わりをとおして、各自の研究のテーマを模索することを目的としています。したがって、あそびに関わる文献に当たることや、先行研究を見つけていくことだけでなく、実際に活動をしなが互いの考えが広がり深まることを願っています。

到達目標

1. 子どもの「あそび」に関わる文献を読み、報告することができる。
2. 「あそび」の活動を通して体験したことを、文献等と結び付けて説明することができる。
3. 各自の関心や問題意識を明確にすることができる。

授業方法

この演習はゼミ形式で行います。文献の購読や課題のまとめ等は個人で行う活動ですが、グループやチームで協力しながら行う活動もあります。事前・事後学習として、文献を読みこむことやまとめることを課します。

授業計画

- | | | |
|------|------------------------------------|--------------------|
| 第1回 | 演習のねらいや進め方 | |
| 第2回 | 資料検索について（図書館ガイダンスとして実施予定）、研究倫理について | |
| 第3回 | 「子どもとあそび」(1)：あそびの大切さ | |
| 第4回 | 「子どもとあそび」(2)：あそびの歴史 | |
| 第5回 | 「子どもとあそび」(3)：子どものあそびの現状 | |
| 第6回 | あそびの実際(1)：屋内でのあそび | 伝承あそび（けん玉、あやとり、こま） |
| 第7回 | あそびの実際(2)：屋内でのあそび | 伝承あそび（けん玉、あやとり、こま） |
| 第8回 | あそびの実際(3)：屋内でのあそび | 伝承あそび（けん玉、あやとり、こま） |
| 第9回 | あそびの実際(4)：屋内でのあそび | 伝承あそび（けん玉、あやとり、こま） |
| 第10回 | あそびの実際(5)：屋外でのあそび | 自然物を利用した造形あそび |
| 第11回 | あそびの実際(6)：屋外でのあそび | 自然物を利用した造形あそび |
| 第12回 | あそびの実際(7)：屋外でのあそび | 自然物を利用した造形あそび |
| 第13回 | あそびの実際(8)：屋外でのあそび | 自然物を利用した造形あそび |
| 第14回 | あそびの実際(9)：屋外でのあそび | 自然物を利用した造形あそび |
| 第15回 | 前期のふりかえりとまとめ | |
| 第16回 | 後期演習の進め方 | |
| 第17回 | 卒業研究について：論文とは 研究の進め方 心構え | |
| 第18回 | 文献の検索について：関心のある文献を探してみる | |
| 第19回 | 文献報告と討議(1)：文献の要約と説明、討議 | |
| 第20回 | 文献報告と討議(2)：文献の要約と説明、討議 | |
| 第21回 | 研究論文購読と討議(1)：論文を読み合い討議する | |
| 第22回 | 研究論文購読と討議(2)：論文を読み合い討議する | |
| 第23回 | 研究論文購読と討議(3)：論文を読み合い討議する | |
| 第24回 | あそびの実際(10)：屋内でのあそび | 百人一首（木かるた） |
| 第25回 | あそびの実際(11)：屋内でのあそび | 百人一首（木かるた） |
| 第26回 | あそびの実際(12)：雪、こおり、風を使ったあそび | |
| 第27回 | あそびの実際(13)：雪、こおり、風を使ったあそび | |
| 第28回 | 1年間のまとめ(1)：各自の関心と問題意識を明確にする。 | |
| 第29回 | 1年間のまとめ(2)：各自の関心と問題意識を明確にする。 | |
| 第30回 | 1年間のまとめ(3)：各自の関心と問題意識を明確にする。 | |

成績評価の方法

到達目標 1～3 に関わる発表（30%）・レポート（30%） 授業への参加状況（40%）

履修にあたっての注意

討議の際は積極的に自分の考えを述べるのが大切です。また、協力して作り上げることの達成感をみんなで味わうために、活動に対する前向きな気持ちが求められます。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じてその都度紹介していきます。

授業のねらい

子どもは一人一人個性を持ち、障害も個性の一つと考えることができる。一人一人の子どもが実生活場面で体験する心理世界は異なる。主に心理学的な方法や理論を用いて、子どもの体験する心理世界を探り、子どもの示す不適応行動の意味や支援の方法について学ぶ。事例検討、文献講読、それぞれ興味のあるテーマの発表、全体のディスカッション等で演習を進める。心理臨床的な視点や理論を学び、卒業論文作成のための心理学的な研究方法についても学ぶ。

到達目標

- 1 心理学の理論を用いて子どもの行動の説明ができる
- 2 心理学的な研究方法を知る
- 3 各自の関心や問題意識を明確にすることができる

授業方法

前期は主に臨床心理学や心理療法、心理測定法の基礎知識を習得し、様々な不適応行動との関連性について、事例検討・文献講読等を通して考える。後期は各自の関心テーマにそって、レジュメ作成・発表・ディスカッション等を行う。授業終了時には次回の準備学習を課す(所用時間 60分程度)。また、課題レポート提出により各自の理解度についての確認をする。レポート課題については、授業時に資料を配布し説明する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、演習の進め方
- 第2回 文献検索の方法および研究倫理について
- 第3回 臨床心理学の基礎知識の習得(1)発達理論
- 第4回 臨床心理学の基礎知識の習得(2)精神分析、実存主義他
- 第5回 臨床心理学の基礎知識の習得(3)認知行動論他
- 第6回 臨床心理アセスメントの習得(1)知能検査
- 第7回 臨床心理アセスメントの習得(2)人格検査
- 第8回 臨床心理アセスメントの習得(3)その他の検査
- 第9回 臨床心理アセスメントの習得(4)箱庭
- 第10回 事例検討又は文献講読とディスカッション(1)アセスメントと支援
- 第11回 事例検討又は文献講読とディスカッション(2)発達障害の理解
- 第12回 事例検討又は文献講読とディスカッション(3)発達障害の支援
- 第13回 事例検討又は文献講読とディスカッション(4)児童虐待
- 第14回 事例検討又は文献講読とディスカッション(5)不登校
- 第15回 事例検討又は文献講読とディスカッション(6)非行
- 第16回 後期オリエンテーション、研究分野に関するテーマを探る
- 第17回 論文の書き方の留意点
- 第18回 量的研究の方法－統計的な分析方法の基礎
- 第19回 質的研究の方法－ケーススタディー等の方法
- 第20回 研究テーマに関する文献講読とディスカッション(1)
- 第21回 研究テーマに関する文献講読とディスカッション(2)
- 第22回 研究テーマに関する文献講読とディスカッション(3)
- 第23回 研究テーマに関する文献講読とディスカッション(4)
- 第24回 研究テーマに関する文献講読とディスカッション(5)
- 第25回 研究テーマに関する文献講読とディスカッション(6)
- 第26回 研究テーマに関する文献講読とディスカッション(7)
- 第27回 卒業研究のテーマ設定と研究計画(1)
- 第28回 卒業研究のテーマ設定と研究計画(2)
- 第29回 卒業研究発表会への参加
- 第30回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定するために授業への参加発言状況(50%)、発表内容(50%)で評価する。

履修にあたっての注意

対話を重視します。他の意見を尊重する姿勢や討議等への積極的な参加・協力を求めます。

授業のねらい

特別支援教育や障害をテーマとした演習を行う。特別支援教育や障害に関する文献（書籍・研究論文）の講読・報告・討議、卒業研究の準備（各自のテーマ設定、関連する論文の検索、先行研究のまとめ、各種の研究法についての学習、進捗状況の発表）を通して、特別支援教育についての理解を深めることをねらいとする。

到達目標

1. 特別支援教育に関する文献を読み、報告することができる。
2. 卒業研究に向けて、テーマ設定ができる。

授業方法

報告・発表と、それをもとにした討議を中心に進める。

履修者全員による集団活動も行う。

随時、学校見学・施設見学・交流も行う。

授業前は、授業計画に基づいて各自予習をすること（所要時間 30 分程度）。

授業後は、配布したプリントについて復習し、理解を深めること（所要時間 30 分程度）。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション
- 第2回 文献講読の方法
- 第3回 文献講読と討議 1
- 第4回 文献講読と討議 2
- 第5回 文献講読と討議 3
- 第6回 文献講読と討議 4
- 第7回 文献講読と討議 5
- 第8回 文献講読と討議 6
- 第9回 文献講読と討議 7
- 第10回 文献講読と討議 8
- 第11回 研究論文講読と討議 1
- 第12回 研究論文講読と討議 2
- 第13回 研究論文講読と討議 3
- 第14回 研究論文講読と討議 4
- 第15回 前期のまとめ
- 第16回 後期オリエンテーション
- 第17回 卒業研究に向けて
研究倫理
- 第18回 卒業研究のテーマについて
- 第19回 論文検索の方法
- 第20回 研究法 1
- 第21回 研究法 2
- 第22回 研究法 3
- 第23回 研究法 4
- 第24回 卒業研究のテーマ発表と討議 1
- 第25回 卒業研究のテーマ発表と討議 2
- 第26回 卒業研究のテーマ発表と討議 3
- 第27回 卒業研究のテーマ発表と討議 4
- 第28回 卒業研究のテーマ発表と討議 5
- 第29回 卒業研究発表会への参加
- 第30回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1・2 に関わる、授業への参加状況（100%）、により評価する。

履修にあたっての注意

卒業研究との連携を前提に演習を進めます。

教科書・参考書に関する備考

教科書・参考書は、必要に応じて提示します。

授業のねらい

この授業のねらいは二点あります。

第一に「ピアノ演奏や歌唱、合奏などを通して各自の音楽表現を追求すること」です。幼児の音楽的感性を育むためには、まず、自己の音楽的感性を高めることが必要となります。そのため、各自の興味のある実践的な音楽表現活動を通して音楽的感性を磨いていくことを目的としています。

第二に「幼児の音楽教育や子どもと音楽の関係など、主に保育者としての音楽分野の研究を行なうこと」です。これは卒業研究の前段階として、様々な角度から子どもと音楽について論理的に学ぶことを目的としています。

到達目標

- ・ 各自、興味のある楽器や歌唱による音楽表現習得過程を通して、豊かな音楽性を身に付けることができる。
- ・ 演奏発表を通して、他者と音楽による感動を共有することができる。
- ・ 卒業研究に向け、各自、必要なスキルを身に付けることができる。
- ・ 卒業研究に向け、各自、テーマを設定することができる。

授業方法

この授業では、前期に演奏発表に向けての準備、練習、発表を行ない、後期に卒業研究を行うための準備をしていきます。この授業では、授業外の学びが必要となります。事前学習（60分程度）として譜読み、演奏解釈、文献講読など、事後学習（60分程度）は教員からの音楽的指導の理解、協議事項に関するまとめ、レポート作成などが必要となりますので、各自、しっかりと取り組むようにしてください。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 音楽表現法概観
- 第3回 演奏発表の内容の協議
- 第4回 演奏発表の担当区分の協議
- 第5回 演奏発表準備（曲の選定）
- 第6回 演奏発表準備（楽曲研究）
- 第7回 演奏発表準備（構成の協議）
- 第8回 演奏発表準備（楽曲練習、レッスン）
- 第9回 中間発表
- 第10回 演奏発表のための構成、担当区分の再確認
- 第11回 演奏発表準備（楽曲練習）
- 第12回 演奏発表準備（レッスン）
- 第13回 演奏発表最終準備
- 第14回 演奏発表会
- 第15回 演奏発表反省会
- 第16回 論文作成方法について
- 第17回 研究の進め方について
- 第18回 参考文献の収集法及び研究倫理について
- 第19回 先行研究（音楽教育の実践的研究）に関する講読・レジュメ作成
- 第20回 先行研究（音楽教育の実践的研究）に関する報告・討議
- 第21回 先行研究（音楽教育の理論的研究）に関する講読・レジュメ作成
- 第22回 先行研究（音楽教育の理論的研究）に関する報告・討議
- 第23回 共通テーマによるグループ研究（テーマの選定）
- 第24回 共通テーマによるグループ研究（調査など）
- 第25回 共通テーマによるグループ研究（発表資料など作成のための準備）
- 第26回 共通テーマによるグループ研究（発表資料などの作成）
- 第27回 共通テーマによるグループ研究（発表）
- 第28回 卒業研究のテーマに関する討議
- 第29回 卒業研究テーマに基づいた研究計画書発表・討議
- 第30回 まとめ

成績評価の方法

授業への主体的参加状況（50%）、到達目標を測定するためのレポートなどの課題への取り組み方（50%）により評価します。

履修にあたっての注意

少人数の演習ですので、各自、積極的に課題に取り組んでください。また、円滑に授業を行うために、しっかりと事前事後学習に取り組んでください。

教科書・参考書に関する備考

随時、参考書、文献、楽譜を提示します。

授業のねらい

保育学研究演習は、保育者として必要な力をつけること、保育を研究的にとらえる力をつけることを目的として行う。前期には、実践的なプログラム作りを通して、ゼミメンバーで協力をしてひとつのを行うために必要な力を養う。また後半は、保育研究のために必要な知識や技術を身につけていくとともに、物事を多角的な見方ができる姿勢を養う。最終的には、保育を行う上で、物事を多角的に捉え、保育を創造していく力の基礎をつけるとともに、理論的な物事の考え方の基礎を育むことを目標とする。

到達目標

1. 自分の得意な分野を活かしながらゼミメンバーと協力して子ども向けプログラムの作成に貢献する
2. ひとつのトピックを多角的に捉え、それに対して議論することができる

授業方法

前期は、親子体験プログラムの実施に向けての準備を行う。

後期は、研究に必要な基礎知識をつけ、研究に必要な技術や方法を学んでいくとともに、ひとつのトピックについて議論する機会を持つ。前期の準備に関しては授業以外の時間を割く必要があることを理解しておくこと。また後期には、各自興味のあるトピックに関する発表準備を課題とする。発表準備には、授業外の事前学習が必要となる。

後期の個人発表に対しては、毎回、良かった点と課題を口頭でフィードバックする。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 演習への取り組みに関する合意形成
- 第3回 体験プログラムのテーマ設定
- 第4回 テーマに関する基礎知識の収集
- 第5回 テーマに関する基礎知識の分かち合い
- 第6回 体験プログラム作成(1)：役割分担の決定
- 第7回 体験プログラム作成(2)：プログラムの流れの決定
- 第8回 体験プログラム作成(3)：プログラム表の作成・プログラムに必要な教材等作成
- 第9回 体験プログラム作成(4)：必要な道具等の選定・教材等の作成
- 第10回 体験プログラム作成(5)：道具借用の手配・教材等の作成
- 第11回 体験プログラム作成(6)：教材の活用練習
- 第12回 体験プログラム作成(7)：当日の流れの確認
- 第13回 体験プログラム予行演習
- 第14回 体験プログラムの実施
- 第15回 体験プログラム実施に関する反省会
- 第16回 後期オリエンテーション
- 第17回 保育学研究の方法
- 第18回 文献検索の方法
- 第19回 文献検索・要旨の作成の方法
- 第20回 要旨の作成
- 第21回 研究論文をもとにした議論（1回につき2名が報告）(1)
- 第22回 研究論文をもとにした議論（1回につき2名が報告）(2)
- 第23回 研究論文をもとにした議論（1回につき2名が報告）(3)
- 第24回 研究論文をもとにした議論（1回につき2名が報告）(4)
- 第25回 量的調査の方法
- 第26回 質的調査の方法
- 第27回 卒業研究のテーマを探る
- 第28回 卒業研究のテーマの絞り込み
- 第29回 卒業研究発表会への参加
- 第30回 まとめ

成績評価の方法

到達目標1を測定するためのプログラム作成に対する参加状況（50%）、到達目標2を測定するための発表内容と議論への参加状況（50%）で評価する。

履修にあたっての注意

授業内容の性格上、個々が意欲的に取り組まなければ、学びの充実につながらない。そのため遅刻や欠席のないように、各自が意欲的態度で臨むように。少人数形式なので、受身ではなく積極的に発言することや行動することを求めます。

授業のねらい

保育学研究演習は、保育者として必要な知識や技能を身に付けること、保育や教育を科学的に捉える目を養うことを目的として行う。

前期では、幼児の発育発達と身体活動にかかわるトピックについて、文献検索の方法やまとめ方、調査・分析の方法など、卒業研究に結びつく内容を具体的に学んでいく。後期は、前期での学習内容を踏まえた上で、ゼミ学生それぞれの興味やテーマに沿った調査を協力幼稚園・保育園で実施し、それぞれの研究としてまとめる。

到達目標

この授業では下記の力を付けることを目標とする。

- (1)ゼミメンバーが協働して課題に取り組む態度と姿勢を身に付ける
- (2)テーマに対して科学的に考察し研究する力を身に付ける

授業方法

前期は、研究を進めるための基礎的な知識や方法について学びながら、それぞれのテーマについてのディスカッションを実施する。

後期は、研究に必要な具体的な技法について、実践を通して学んでいながら、各自の研究テーマについてのまとめを行う。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション・全体スケジュールの確認
- 第2回 演習への取り組みに関する合意形成
- 第3回 各自のテーマ設定
- 第4回 テーマに関する基礎知識の収集
- 第5回 テーマに関する基礎知識についての共有
- 第6回 ディスカッション(1)：身体活動と健康
- 第7回 ディスカッション(2)：身体活動と認知機能
- 第8回 ディスカッション(3)：環境と発育発達
- 第9回 ディスカッション(4)：運動遊びの効果
- 第10回 ディスカッション(5)：子どもの体力と生活
- 第11回 ディスカッション(6)：運動指導のメリット・デメリット
- 第12回 保育学研究法の基礎
- 第13回 文献検索の方法とまとめ方
- 第14回 要旨の作成
- 第15回 前期の振り返りとまとめ
- 第16回 後期オリエンテーション
- 第17回 研究方法の基礎①：質的調査
- 第18回 研究方法の基礎②：量的調査
- 第19回 調査の具体的計画づくり
- 第20回 調査プログラムの検討
- 第21回 幼稚園・保育園での調査実施①
- 第22回 幼稚園・保育園での調査実施②
- 第23回 幼稚園・保育園での調査実施③
- 第24回 調査の振り返りと反省
- 第25回 卒業研究のテーマ設定とスケジュールリング
- 第26回 卒業研究に向けたリサーチクエストの設定
- 第27回 卒業研究に向けた研究方法・研究手法の検討
- 第28回 卒業研究のテーマの絞り込み
- 第29回 卒業研究発表会への参加
- 第30回 まとめ

成績評価の方法

到達目標を測定するために議論への参加状況（60%）、発表内容（40%）で評価する。

履修にあたっての注意

学生のテーマに沿った学習が主となるため、各自が課題意識を持って参加することが不可欠となる。授業では遅刻や欠席のないことはもちろん、各自が意欲的態度で参加することを期待する。

授業のねらい

保育者・教育者としての確かな実践力を身につけるために、発達や教育の基礎理論を学ぶことを目的とする。また、我が国のインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の視点から、障害のある子どもや保護者の現状と課題を把握し、保育のねらいや保育内容等について討議し、保育者に求められる基本的な資質の向上を目指す。

到達目標

- (1)インクルーシブ教育システム及び特別支援教育に関する文献・論文を読み、適切な解釈ができる。
- (2)卒業研究に向けて、研究課題の設定ができる。

授業方法

- (1)インクルーシブ教育システムや特別支援教育をテーマとした演習を行う。
- (2)関連文献（書籍・研究論文）の講読を基に、発表、ディスカッションを中心に進める。
- (3)随時、学校・施設見学を行う。
- (4)事前・事後学習として文献の読み込みとまとめの作業を課す。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション
- 第2回 文献講読の方法
- 第3回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第4回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第5回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第6回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第7回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第8回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第9回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第10回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第11回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第12回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第13回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第14回 研究論文・文献講読、発表及びディスカッション
- 第15回 前期のまとめ
- 第16回 後期オリエンテーション
- 第17回 卒業研究に向けて、研究倫理
- 第18回 研究法(1)
- 第19回 研究法(2)
- 第20回 研究法(3)
- 第21回 研究法(4)
- 第22回 研究法(5)
- 第23回 卒業研究課題の発表及びディスカッション
- 第24回 卒業研究課題の発表及びディスカッション
- 第25回 卒業研究課題の発表及びディスカッション
- 第26回 卒業研究課題の発表及びディスカッション
- 第27回 卒業研究課題の発表及びディスカッション
- 第28回 卒業研究課題の発表及びディスカッション
- 第29回 卒業研究発表会への参加
- 第30回 まとめ（全授業からトピックを取り出し、総合解説）

成績評価の方法

- ・発表、討論、レポートで総合的に判断する。
- ・受講態度（発表、課題提出）20%、レポート 80%

履修にあたっての注意

卒業研究との連動を踏まえて演習を進める。

教科書

教科書・参考書は、必要に応じて提示する

教科書・参考書に関する備考

適宜、研究論文・文献を紹介し、配付する。

授業のねらい

カウセリングは現在における対人援助の基本的な手法である。しかし、どのような援助技法もその適用にあたっては、その効用と共に限界が伴う。この認識を欠けば、援助の効果を上げないばかりか逆に問題や混乱を大きくしかねない。そのため、カウセリングを含めた心理療法を理論的に理解し、その適用範囲及び限界を学ぶ。その他の具体的な対人援助の方法も学び、実践場面で活用できる知識の習得を目指す。

到達目標

- 1 臨床心理学と心理療法の基礎的知識を習得する。
- 2 子どもや保護者との面談や相談で必要となる援助者としての態度（カウセリングマインド）等の実践的スキルを身に付ける。
- 3 教育・福祉・医療の現場などで行われている心理的ケア・地域支援の実際を知る。

授業方法

授業では配付される講義資料とスライドを中心に進める。また、カウセリングの実際をより具体的に理解するために、適宜ワークシート、心理テスト、事例等を用いてグループ討議も展開する。授業終了時には次回の準備学習を課す（所用時間 30 分程度）。また事後指導としてテーマごとに課題レポート等の提出を課す。課題については授業時に口頭で説明する。

授業計画

- 第1回 子どもの不適応行動・問題行動の考え方の基本
教育的課題、発達の視点、様々な症状の心理学的意味、因果関係、困難事例
- 第2回 子どもの不適応問題・問題行動への対応の基本
初期症状の把握、基礎障害や二次障害の理解、困難事例
- 第3回 子どもを理解するための心理学的な基礎①発達と発達障害
発達段階、発達上の負因、特に言語コミュニケーション能力の評価
- 第4回 子どもを理解するための心理学的な基礎②心理テスト（質問紙法）
KIDS、エゴグラム、文章完成法等
- 第5回 子どもを理解するための心理学的な基礎③心理テスト（投影法）
PF スタディー、バウムテスト、ロールシャハテスト、箱庭等
- 第6回 教育相談での心理アセスメントと心理的援助の見立て
テストバッテリー、発達評価、支援計画
- 第7回 カウセリングの実際
傾聴・受容・明確化などのカウセリング技法や姿勢の理解
- 第8回 保護者対応の実際
保護者、家族機能のアセスメント、対処方法
- 第9回 子どもを支援するための組織的対応
校内の相談体制、組織マネジメント
- 第10回 子どもを支援するための機関連携
医療、心理、福祉、司法等の外部機関の理解と効果的な連携のあり方
- 第11回 その他の心理療法、心理教育的支援
遊戯療法、箱庭療法、ソーシャルスキルトレーニング、セカンドステップ等
- 第12回 教育相談の実際①
事例検討（不登園、不登校）
- 第13回 教育相談の実際②
事例検討（虐待、非行）
- 第14回 カウセリングの意義と限界、危機介入
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1～3 測定するレポート 50%、授業への取り組み姿勢・参加意欲 30%、提出物 20%、により評価する。期末レポートについては答案を返却し、解答例解説資料を配付する。

履修にあたっての注意

カウセリングの実際の体験的な理解を促すために、随時ワークシートや心理テストの体験、事例等を用いてグループ討議等の参加型の授業とするので積極的に参加して欲しい。

教科書・参考書に関する備考

各授業で必要な資料は配布する。また、各授業の中で関連書籍を紹介して行く。

授業のねらい

この講義は、幼稚園・保育所の園長経験を持つ2人の先生によるオムニバス形式の講義である。立場の異なる先生方の講義を通して、幼稚園・保育所という保育機関における管理・運営の重要性、園を管理・運営する視点を学ぶ。

- <幼稚園園長の立場から>東
- <保育所園長の立場から>吉田

到達目標

保育者として理解していなければならない幼稚園、保育園の管理・運営の実際について学ぶことができる。

授業方法

2人の教員がオムニバス方式で担当する。授業方法は講義形式でおこなう。

受講者は、講義内容の理解を深めるために、毎回配布された資料を読み直し、次の講義に参加することを求めます。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
1年生から学習してきた内容を、管理職としての視点から見直すことの意義について
- 第2回 法制度・行政(幼稚園)
・学校教育法及び幼稚園設置基準
・子ども・子育て支援新制度と幼児教育
・都道府県と市町村との関係
- 第3回 園の経営管理(幼稚園)
・私学助成を受ける幼稚園の運営
・施設型給付を受ける幼稚園の運営
・少子高齢社会での幼児教育の今後について
- 第4回 園と関係諸機関との連携
・地域の幼児教育センター的機能
・誕生から小学校につなげる接続・連携のあり方
- 第5回 園の理念(建学の精神)と運営
・独自性と公教育との関係
・幼児教育・保育の社会的意味
・理念を具体的な言葉として発信する必要性
- 第6回 望ましい保育者集団のあり方
・専門家集団としての同僚性
・長期的視点に立ったキャリア形成
・毎日の保育の省察と実践
- 第7回 親(保護者)との関係
・園と家庭の情報共有(子どもの育ちを中心に)
・共通理解から協働へ
・情報の取り扱いと小学校(他機関)への引き継ぎ
- 第8回 障害児保育
・障害者差別解消法と保育現場の実情
・アセスメントと保育実践
・家庭や関係機関との連携と個別の支援計画
・インクルーシブ教育が保育の可能性を広げる
- 第9回 法制度・行政(保育所)
・行政機関
・法制度
・子ども・子育て支援制度
- 第10回 施設設備と最低基準(保育所)・園の経営管理
・児童福祉施設最低基準
・認可保育園の運営費・補助金
・「運営規定」
- 第11回 園と関係諸機関との連携
・市町村(児童相談所、保険センター等を含む)、
・園医、小学校、保育団体等
- 第12回 園の理念(設立精神)と運営
・保育園の公的責任と今日的役割
・保育園の理念・方針・目標・課程・計画

-
- 第13回 保育者集団の管理・運営
- ・適正な経営、組織づくり
 - ・職員の資質、専門性の向上、
 - ・自己評価と第三者評価など
- 第14回 親（保護者）との関係
- ・相互信頼・協力関係
 - ・苦情処理、個人情報保護、守秘義務
- 第15回 障害児保育
- ・障がい児は宝（ノーマライゼーション、ウェルビーイング）
 - ・専門機関との連携

成績評価の方法

レポート（100%）：幼稚園における園経営についての理解 50%、保育園における園経営についての理解 50%

履修にあたっての注意

オムニバス形式の講義であることから、講義の関連性については整理して講義に臨むことが求められる。分からないことは積極的に質問して確認すること。

教科書・参考書に関する備考

教科書は使用しないが、参考文献は講義中に随時紹介する。

授業のねらい

教育心理学Ⅱは、学習者間や教師と学習者間の関係性などが学習に与える影響について学ぶことを目的とした授業です。教育心理学Ⅰでは、個人の学習・記憶・動機づけについて学習しました。しかし、人間の学習は、個人内で完結するものではなく、教師や友達といった他者の存在からも影響を受けています。このようなクラス内で生じる心理学的な現象について学ぶことは、子どもを個別にとらえるという視点に加え、子どもを集団の中の1人としてとらえるという視点をはぐくむことにつながります。また、この授業では、教育方法・評価の目的や方法についても取り上げます。学習者だけでなく、教育方法・評価方法などの視点も取り入れ、教育・学びとは何かについて理解を深めます。

到達目標

1. 学習の文脈・場面に注目し、人間が学習する際に生じることがらについて説明できること
2. 実習などで経験したことがらについて、教育心理学的な視点で分析し、考察できること

授業方法

2～4回の授業で1つのトピックを取り上げ、トピックにまつわる実験・理論・論文の紹介などを行いながら、授業を進めていきます。また、トピックに関連することがらについて、実習などでの子どもの様子や子どもと保育者の関係性を教育心理学的にとらえなおすため、受講生同士で議論も行います。

授業前には、授業内容に関することがらについて実習での経験を振り返る・自分の考えをまとめる・資料を読む・資料を探すなどの予習課題に取り組んでください。また、授業後は、授業で取り上げたことがらについて、自分の経験と関連づけながら整理した小レポートを作成し、授業内容を復習してください。予習・復習に必要な時間の目安は、あわせて1～3時間です。なお、予習課題の発表・予習課題と復習課題の提出は、ポータルサイトを使用します。

レポートは、コメントと評価をつけて返却します。自分の分析力・論述力を確認する手がかりとしてください。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：授業内容の説明・授業の進め方と評価の方法についての確認
- 第2回 学級集団(1)：集団形成の目的と集団の機能
- 第3回 学級集団(2)：集団でいることがもたらす影響
- 第4回 学級集団(3)：集団の測定方法
- 第5回 人間関係(1)：リーダーシップ
- 第6回 人間関係(2)：教師や保育者の子どもに対する認知
- 第7回 人間関係(3)：教師や保育者の言葉かけ
- 第8回 人間関係(4)：子ども同士の関係
- 第9回 学習方法(1)：授業・活動の進め方
- 第10回 学習方法(2)：授業内容・活動内容の提示方法
- 第11回 学習方法(3)：保育場面における発見学習
- 第12回 評価(1)：評価の種類・方法
- 第13回 評価(2)：評価の際に生じる評価者や被評価者への影響
- 第14回 小学校への移行(1)：小1プロブレム・保幼小の連携
- 第15回 小学校への移行(2)：保育士／幼稚園教諭／小学校教諭の認識の違い・まとめ

成績評価の方法

到達目標1・2の達成度を測定するレポート(1回：50%)、到達目標1・2の達成度を測定する予習・復習への取り組み(50%)によって評価します。

履修にあたっての注意

レポート課題発表時に提示するレポートの形式は、厳守してください。また、議論には積極的に参加してください。

教科書

鎌原雅彦・竹綱誠一郎『やさしい教育心理学 第3版』(有斐閣、2005、ISBN：4641124585)

教科書・参考書に関する備考

参考となる書籍・ホームページは、ポータルサイトを通して紹介します。

参考書

- 子安増生・田中俊也・南風原朝和・伊東裕司『ベーシック現代心理学 6 教育心理学（新版）』（有斐閣、2003、ISBN：4641086826）
- 高村和代・安藤史高・小平英志『保育のためのやさしい教育心理学』（ナカニシヤ出版、2009、ISBN：9784779503160）
- 西口利文・高村和代『教育心理学』（ナカニシヤ出版、2010、ISBN：9784779504778）
- 森敏昭・淵上克義・青木多寿子『よくわかる学校教育心理学』（ミネルヴァ書房、2010、ISBN：4623056422）

75801

病弱児教育

担当教員：前野哲重

2単位 前期

授業のねらい

この授業は、病弱養護学校や院内学級等に在籍する児童生徒の病気特性及び病弱教育の実態などについて解説するとともに、特別支援教育の教育課程を説明する中で、障がい特性に応じた指導の在り方について取り上げ、病弱児童生徒への支援の在り方についての専門性を高めることを目指します。

到達目標

- ・「障がい」に対する考えや「障がいのある人」への思いなどを述べるができる。
- ・「特別支援教育」の理念をおさえて、個々の児童生徒に対する支援について考えることができる。

授業方法

プレゼンテーションによる講義形式で、スライドを基にした配付資料や動画などを参考に授業を進め、ワークショップによるグループ協議などにより回答します。毎回の授業では、授業者に特別支援教育に関する事前・事後課題（小レポート形式）の提出を求めます。また、演習問題に取り組みせ、病弱教育に関する課題に対するレポートの作成を行います。

授業計画

- 第1回 インTRODククション
- 第2回 特別支援教育の概要（病弱教育の位置づけ）
- 第3回 特別支援教育（病弱教育）における指導内容と方法
- 第4回 特別支援教育（病弱教育）の指導の実際
- 第5回 障がいの特性に応じた教育課程（4領域と各教科）
- 第6回 障がいの特性に応じた教育課程（各指導の形態）
- 第7回 個別指導計画及び個別の教育支援計画
- 第8回 特別支援教育 教育実習に向けて
- 第9回 病弱教育の概要と病弱・身体虚弱の概念
- 第10回 病弱教育の歴史的考察
- 第11回 白血病などの特性とその理解
- 第12回 腎臓病、気管支喘息の特性とその実態
- 第13回 てんかん等の特性とその理解
- 第14回 病弱教育の現状と課題
- 第15回 まとめ、レポートの作成

成績評価の方法

レポート（40%）、授業への参加状況（30%）、小レポート（30%）により評価します。

履修にあたっての注意

特別支援学校で教育実習を行う予定になっている者は必ず受講してください。

教科書・参考書に関する備考

その都度、講義の中で資料等を配布します。

75841

視覚・聴覚障害児の心理・生理・病理 担当教員：原田公人 1単位 前期前半

授業のねらい

視覚障害・聴覚障害の概念、基礎的理解（目・耳の構造と機能、代表的疾患、眼疾患・耳疾患に伴う視覚障害、聴覚障害の特徴、コミュニケーション、精神保健、教育的対応等）について解説する。特に、心理では視覚障害・聴覚障害から派生する心理特性、生理では視機能・聴能発達上の課題、病理では視覚認知・聴覚認知と医療的リハビリテーションについて学ぶ。

到達目標

1. 視覚・聴覚の構造、機能について理解できる。
2. 視覚障害児、聴覚障害児に対する諸検査の目的・方法について理解できる。
3. 視覚障害児・聴覚障害児の心理特性について理解できる。

授業方法

学習上の助言、ディスカッション、パワーポイント等により資料提示しながら進める。
授業内容の理解を深めるために教科書や配布資料で予習・復習を行うこと。

授業計画

- | | | |
|-----|---------------------|---------------------------------|
| 第1回 | 視覚障害生理 | 視覚器の解剖 |
| 第2回 | 視覚障害生理 | 視機能及びその評価 |
| 第3回 | 視覚障害病理 | 眼疾患 視覚障害心理 |
| 第4回 | 視覚障害心理 | 視覚認知の形成及び教育 |
| 第5回 | 聴覚障害病理 | 耳（聴覚）の解剖、耳疾患の病理 |
| 第6回 | 聴覚障害生理 | 聴覚の機能 |
| 第7回 | 聴覚障害心理 | 軽度・中等度難聴、一側性難聴児、重度聴覚障害児の心理特性と指導 |
| 第8回 | 試験と視覚・聴覚障害の心理特性のまとめ | |

成績評価の方法

レポート試験（80%）、授業の参加状況（発表・態度）（20%）

教科書

国立特別支援教育総合研究所『特別支援教育の基礎・基本（新訂版）』（シアーズ新社、2015、ISBN：978-4-86371-297-3 C3037）

教科書・参考書に関する備考

授業中に適宜、参考書の紹介、関係資料を配布する。

75851

重複・発達障害児の心理・生理・病理 担当教員：鈴木真知子 2単位 前期

授業のねらい

重複障害・発達障害（LD、ADHD、自閉症、言語障害を含む）の主要な疾患や心理・生理・病理および適切な支援方法の理解を深める。

到達目標

重複障害・発達障害のある子どもたちの生理、病理、心理を学ぶことで障害児の発達や行動、生活についての理解を深める

授業方法

講義形式を中心に進め、理解を深めるためにゲストスピーカーによる現状の理解を深める。
また、その実態把握のための施設見学及び報告会を行い、卒後の実践力を高めていく。
事前学習課題を提示し、予習・復習・レポート課題を課す。

授業計画

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 重複障害の概念
- 第3回 主な起因疾患（脳性麻痺、筋ジストロフィーなど）
- 第4回 重複障害の心理（健康、感覚、生活）
- 第5回 重複障害の心理（運動・探索）
- 第6回 重複障害のある子どもの実態把握(1) 視覚・聴覚など感覚障害と重複障害
- 第7回 重複障害のある子どもの実態把握(2) 肢体不自由・知的障害など重複障害か
- 第8回 発達障害の概念
発達障害（自閉症）の生理・病理 1
- 第9回 発達障害（LD、ADHD、言語障害）の生理・病理 2
- 第10回 発達障害児の子どもの心理 2（感覚・知覚、コミュニケーション・運動）
- 第11回 発達障害のある子どもの実態把握(1) LD・言語障害 編
- 第12回 発達障害のある子どもの実態把握(2) ADHD・行動障害 編
- 第13回 重複障害のある子どもの実態把握(3) 自閉症 編
- 第14回 重複障害児と発達障害児の個別指導計画について
- 第15回 総括

成績評価の方法

レポート評価（70%）、授業への参加状況（30%）

履修にあたっての注意

特別支援学校教諭免許取得の必修科目

教科書・参考書に関する備考

教科書は指定しないが、講義は、主として参考書の中から応用し組み立てて実施。従って、参考書を、自主的に読破することを前提として行う。

参考書

- M. I. ボスナー、M. E. レイクル『脳を観る』（日本サイエンス社、1997）
- サリー、シェイウイツサリー、シェイウイツ『読み書き障害のすべて』（PHP、2006）
- 浅野昭久・昌子武司『自閉症の言語獲得』（教育出版、1998）
- 和田秀樹『虐待の心理学』（KKベストセラーズ、2001）
- ウタ・フリス『自閉症の謎を解く』（東京書籍、1991）
- 正高信男『天才脳は発達障害から生まれる 2009』（PHP、2009）
- 次良丸睦子・五十嵐一枝『発達障害児の臨床心理学 2002』（北大路書房、2002）
- 北住映二、尾本和彦、藤島一郎『子どもの摂食嚥下障害』（永井書店、2007）
- ナンシー、フィニー『脳性まひの家庭療育』（医歯薬出版、1999）
- 日本小児神経学会社会活動委員会『医療的ケア研修テキスト』（クリエイツかもがわ、2007）

授業のねらい

1. 視覚障害の基礎的知識（視機能、実態等）について説明できる。
2. 視覚障害児の各発達段階における指導と課題等について説明できる。
3. 聴覚障害の基礎知識（きこえの仕組み、聴覚伝導路等）を説明できる。
4. 聴覚障害教育における指導法について、その目的や内容を理解する。

到達目標

視覚障害教育・聴覚障害教育史、インクルーシブ教育体制における教育、特別支援学校の学習指導要領と教育課程、自立活動、早期教育、教科指導、コミュニケーション、キャリア教育・職業教育、ICT、授業に必要な知識や技能と基礎的な事項、発達段階及び障害の程度に応じた指導について理解する。

授業方法

学習上の助言、ディスカッション、パワーポイント等により資料提示しながら進める。
授業内容の理解を深めるため、教科書や配布資料を用いて予習・復習を行うこと。

授業計画

- 第1回 障害児教育史（視覚障害、聴覚障害他）
- 第2回 視覚・聴覚障害児の心理発達、自己概念形成
- 第3回 視覚障害教育における早期療育（早期教育）と指導、家族支援
- 第4回 視覚障害児のキャリア教育（進路指導）、職業教育
- 第5回 聴覚障害児の言語獲得過程、コミュニケーション手段
- 第6回 聴覚障害児の言語指導法
- 第7回 聴覚障害教育における教科教育、キャリア教育（進路指導）、職業教育
- 第8回 試験と今後の視覚・聴覚障害児教育のまとめ

成績評価の方法

レポート試験（80%）、授業の参加状況（発表・態度）（20%）

教科書

国立特別支援教育総合研究所『特別支援教育の基礎基本（新訂版）』（ジアーズ新社、2015、ISBN：978-4-86371-297-3 C3037）

教科書・参考書に関する備考

授業中に適宜、参考書の紹介、関係資料を配布する。

75871

重複・発達障害児教育総論

担当教員：今野邦彦

2単位 前期

授業のねらい

この授業では、重複障害・発達障害（LD、ADHD、自閉症、アスペルガー症候群を含む）の概念や障害の特性および教育課程について、理解を深めることをねらいとする。

到達目標

1. 重複障害児・発達障害児の基本的事項について理解し、問題意識を持って考えることができる。
2. 重複障害児・発達障害児の教育課程や指導の実際について理解し、説明することができる。

授業方法

講義形式を中心に行う。

随時、施設見学も行う予定。

授業前は、授業計画に基づいて各自予習をすること（所要時間 30 分程度）。

授業後は、配布したプリントについて復習し、理解を深めること（所要時間 30 分程度）。

小レポートでの質問等については、次回の授業で解説する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 重複障害児の生理・病理
- 第3回 重複障害児の心理・教育
- 第4回 重複障害児教育の教育課程
- 第5回 重複障害児教育の実際
- 第6回 重複障害児の施設見学報告
- 第7回 発達障害児の教育課程
- 第8回 発達障害児の家庭教育
- 第9回 発達障害児の生涯教育
- 第10回 発達障害児の社会的処遇
- 第11回 発達障害児教育の実際
- 第12回 大人の発達障害
- 第13回 発達障害と虐待
- 第14回 発達障害児の施設見学報告
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 に関する授業への参加状況（40%）、到達目標 2 に関する発表（30%）・レポート（30%）、により評価する。

履修にあたっての注意

特別支援学校教諭免許状取得の必修科目です。

教科書・参考書に関する備考

教科書はなし。プリントを配布します。

下記の参考書を参照しますので、持っていない場合は用意してください。

参考書

文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚部・小学部・中学部）』（教育出版、2009）

文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）』（海文堂出版、2015）

授業のねらい

保育内容の研究（言葉）は、言葉がもたらす影響・言葉の発達などについて学ぶことを目的とした授業です。授業では、実習などで経験した子どもや保育者の言葉を取り上げ、研究結果と照らし合わせていきます。このように、これまでの経験に理論的な裏付けを行いながら整理していくことで、言葉に関する理解を深めます。また、言葉の多様性・言葉の機能といった内容について学ぶことも、この授業の目的の1つです。私たちは、さまざまな言葉を使っていること・言葉は場面によって意味や機能が異なること・言葉によってさまざまな内容が伝達できることなどについて学ぶことは、自分自身のコミュニケーションや、よりよいコミュニケーションについて考えるきっかけとなるといえます。

到達目標

1. 子どもや保育者の言葉について、授業で説明した内容と関連づけながら説明できること
2. 自分や他者の発した言葉について、関心を持ち、客観的に分析できること
3. 授業で取り上げた内容と自分の体験を結び付けて考えることができること

授業方法

2～4回の授業で1つのトピックを取り上げ、トピックにまつわる実験・理論・論文の紹介などを行いながら、授業を進めていきます。また、授業では、グループ活動なども予定しています。

授業前には、授業内容に関することから自分の経験を振り返る・自分の考えをまとめる・資料を読む・資料を探すなどの予習課題に取り組んでください。また、授業後は、授業で取り上げたことから自分の経験と関連づけながら整理した小レポートを作成し、授業内容を復習してください。配布した資料・論文などを読むことも大切です。予習・復習に必要な時間の目安は、あわせて2～3時間です。なお、予習課題の発表・予習課題と復習課題の提出は、ポータルサイトを使用します。

提出された課題などについては、コメントと評価をつけて返却します。課題で求められていることへの理解度・論述力などを確認する手がかりとしてください。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：授業内容の説明・授業の進め方と評価の方法についての確認
- 第2回 さまざまな言葉(1)：言葉の形式と種類
- 第3回 さまざまな言葉(2)：文化による違いと共通性
- 第4回 言葉がもたらすもの(1)：言語の学習への影響
- 第5回 言葉がもたらすもの(2)：行動への影響
- 第6回 言葉がもたらすもの(3)：伝わる／伝わらないということ・コミュニケーションに対する動機づけ
- 第7回 言語発達と大人の働きかけ(1)：言語発達とコミュニケーションの基盤となるもの
- 第8回 言語発達と大人の働きかけ(2)：大人からの働きかけ・育児語
- 第9回 話し言葉の発達(1)：話し言葉以前の言葉・身振りによる言葉
- 第10回 話し言葉の発達(2)：名詞などを覚える過程・説明能力の発達・子どもの嘘
- 第11回 話し言葉の発達(3)：遊び場面における言葉
- 第12回 書き言葉と文章理解の発達(1)：文字の書き方・読み方の発達
- 第13回 書き言葉と文章理解の発達(2)：文字が伝える内容
- 第14回 書き言葉と文章理解の発達(3)：文章の書き方の発達
- 第15回 書き言葉と文章理解の発達(4)：文章の読み方の理解

成績評価の方法

到達目標1・2・3の達成度を測定するレポート（1回：50%）、到達目標3の達成度を測定する授業で行う予習を前提とする課題（20%）、到達目標1・2・3の達成度を測定する予習・復習への取り組み（30%）によって評価します。

履修にあたっての注意

この講義では、グループ活動を予定しています。講義を聞くだけでなく、授業内での活動にも積極的に参加してください。また、レポート課題発表時に提示するレポートの形式は、厳守してください。なお、授業で行う予習を前提とする課題を実施する回については、予告をしません。普段から予習・復習にきちんと取り組み、欠席のないようにしてください。

教科書・参考書に関する備考

参考となる書籍・ホームページは、ポータルサイトを通して紹介します。

授業のねらい

乳児期は人格形成の土台となる大切な時期である。本科目では、乳児に寄り添うことができるよう具体的な保育内容を理解し、実践力も身に付けることをねらいとする。また、乳児保育の歴史について理解を深め、現代における現状と課題について理解する。

到達目標

- 1・乳児保育の現状と課題、役割について理解できる。
- 2・3歳未満児の発達を理解し、各年齢（月齢）に応じた具体的な関わりやあそびを考察できる。
- 3・乳児保育における子育て支援について理解できる。

授業方法

講義を中心としながら、内容に応じて実技やグループワークも取り入れる。

確認のための小テスト及びレポート課題、プリント提出を行う。内容によっては事前事後学習が必要となり、詳細については授業内で随時説明する。

授業計画

- 第1回 ガイダンスー乳児保育の基本的内容についてー
- 第2回 乳児保育の理念と意義
- 第3回 乳児保育の歴史の変遷
- 第4回 保育所における乳児保育の現状と課題(1)ー乳児にとっての集団保育とはー
- 第5回 保育所における乳児保育の現状と課題(2)ー家庭的保育・小規模保育の実態ー
- 第6回 乳児保育における保育者の役割
- 第7回 乳児保育における応答的な関わりとは
- 第8回 発達と具体的な保育内容(1)ー乳児期・基本的な関わりー
- 第9回 発達と具体的な保育内容(2)ー乳児期・あそびの内容や環境ー
- 第10回 発達と具体的な保育内容(3)ー1歳以上3歳未満児・基本的な関わりー
- 第11回 発達と具体的な保育内容(4)ー1歳以上3歳未満児・あそびの内容や環境ー
- 第12回 乳児保育における5領域
- 第13回 乳児保育における子育て支援の役割と内容
- 第14回 保育者同士の連携とは
- 第15回 まとめー乳児保育の素晴らしさー

成績評価の方法

小テスト（40％）レポート、プリント課題（30％）授業への参加状況（30％）により評価する。

履修にあたっての注意

積極的な参加を期待する。

教科書

「保育に役立つ！子どもの発達がわかる本」（ナツメ社、ISBN：4816351094）

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて資料を配布する。

授業のねらい

1年から3年までのさまざまな科目を振り返って、科目のつながりを考えながら「遊び」と「生活」について追求します。さらに、幼児期から児童期のつながりについて考察し、「遊び」の教育的意義を理解し深めていきます。

到達目標

- ・ 幼児の「遊び」と「生活」の関係性を理解する。
- ・ 「遊び」と「生活」をもとに幼児期と児童期のつながりを理解する。

授業方法

幼児の「遊び」と「生活」は、これまでの学びとどのようにつながっているのか、討論や実践を通して確認していきます。授業内容への理解を深めるために、毎回のふりかえりを個々で行っておくこと。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 「生活」から保育を考察する(1) 幼児の家庭生活と地域環境
- 第3回 「生活」から保育を考察する(2) 基本的な生活習慣の形成
- 第4回 「生活」から保育を考察する(3) 食事
- 第5回 「生活」から保育を考察する(4) 季節や行事
- 第6回 「遊び」から保育を考察する(1) 自然環境
- 第7回 「遊び」から保育を考察する(2) 健康
- 第8回 「遊び」から保育を考察する(3) 感性や表現
- 第9回 「遊び」から保育を考察する(4) 身近なもの・ひと・こと
- 第10回 「遊び」から保育を考察する(5) 言葉
- 第11回 「遊び」から保育を考察する(6) 発達
- 第12回 保育から就学に向けて
- 第13回 児童期の「遊び」と「生活」について(1) 遊びと学び
- 第14回 児童期の「遊び」と「生活」について(2) 生活科の役割
- 第15回 まとめと振り返り

成績評価の方法

毎回の振り返りシート（70%） 授業の参加状況（30%）

履修にあたっての注意

遊びを体験することを通して、幼児と共に生活する保育者としての役割を意識してください。また、仲間と協働的に学びながら自分の考えを深めていってください。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて配付します。

授業のねらい

これまでのピアノレッスンや弾き歌い指導により習得した演奏表現法を踏まえ、主にピアノを用いた演奏表現を通して、学生各自のさらなる演奏技術、音楽的能力を向上させることをねらいとする。

到達目標

マンツーマンのレッスンなどを通して、ピアノ演奏、子どもの歌を中心とした弾き歌いの技術を習得し、最低限、授業で取り上げた曲のうち1～2曲を高水準で演奏することができる。

授業方法

担当教員：新海節・石橋克史・大高紫乃・須藤尚美・曾根崎直子・辻千絵・若狹玲衣

※複数教員による授業である。

本科目では、学生のピアノ学習の進捗状況によりその演奏技術にばらつきがある為、学生各自のピアノ技術のレベルに応じた楽譜を使用し、個人レッスンやグループレッスンを通して各自の進捗に準じた指導を受けることとなる。その為、統一した授業計画を示すことは難しいが、以下に基本的な授業計画を示す。教員より学生各自に応じた音楽的指導及び課題設定を行うので、それを基に事前事後学習（計80分程度）を行うこと。

授業計画

- 第1回 全体オリエンテーション及び担当教員オリエンテーション
- 第2回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（紡ぎ歌：エルメンライヒ）
・楽譜に忠実に演奏する
- 第3回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（紡ぎ歌：エルメンライヒ）
・曲想を捉え、表現豊かに演奏する
- 第4回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（バッハ：メヌエット）
・楽譜に忠実に演奏する
- 第5回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（バッハ：メヌエット）
・ポリフォニー音楽を十分理解して演奏する
- 第6回 弾き歌い技術習得の為の練習（大きな古時計）
・楽譜に忠実に演奏する
- 第7回 弾き歌い技術習得の為の練習（大きな古時計）
・歌詞の内容を理解し、表現豊かに演奏する
- 第8回 弾き歌い技術習得の為の練習（おなかのへるうた）
・楽譜に忠実に演奏する
- 第9回 弾き歌い技術習得の為の練習（おなかのへるうた）
・歌詞の内容を理解し、表現豊かに演奏する
- 第10回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（ソナチネ：ベートーヴェン）
・楽譜に忠実に演奏する
- 第11回 ピアノ演奏技術習得の為の練習（ソナチネ：ベートーヴェン）
・曲想を捉え、表現豊かに演奏する
- 第12回 発表会形式の総括のための準備（各自の演奏曲の譜読み）
- 第13回 発表会形式の総括のための準備（各自の演奏曲の練習）
- 第14回 発表会形式の総括のための準備（各自の演奏曲を音楽表現的観点からの考察）
- 第15回 総括（発表会形式による演奏）

成績評価の方法

到達目標測定のための実技試験（80%）、授業への主体的参加状況（20%）により評価を行う。

履修にあたっての注意

ピアノの演奏レベル向上のためには日々の練習が欠かせない。その為、毎日の練習を怠らず地道に努力すること。

教科書

新海節 田中宏明『ほどよいレベルで弾ける保育者のためのピアノ&童謡曲60』（圭文社、2015）
小林美実『子どものうた200』（チャイルド本社、1975）

教科書・参考書に関する備考

ピアノ曲、こどものうた、簡易楽譜など、各自のピアノ技術のレベルに応じた楽譜をその都度指示する。

授業のねらい

素材、材料の吟味と教材研究を行い、自分の中に造形マインドを築くことを目的とする。
造形の持つ力や幅広さをを見つけ出すために様々な制作を試みる。

到達目標

いろいろなテーマに沿って、素材、材料を見つけ出し、発想や構想、創造的な技能を駆使し、制作することができるようになることを目指す。また、子どもの造形発達を中心に、制作とその条件を考えながら、自分の造形力をつける。

授業方法

身の回りにある素材、材料の特徴を生かし、いろいろな技法を通して表現の仕方を学び取り、感じたことや考えたことを作品として制作する。授業をスムーズに進行させるために事前・事後に自主的に制作することもある。(30分程度)

授業計画

- 第1回 授業に関してのオリエンテーション
15回の授業で使用する材料、用具について
造形マインドについて
- 第2回 破いた紙の形から思いついたことを、紙を貼ったり、描き加えたりして絵に表す
- 第3回 紙皿などの円形の紙を生かした起き上がりこぼしをつくる
- 第4回 チラシを細く丸めて、繋いで、体全体を使いオブジェをつくる
- 第5回 くしゃくしゃにした紙を膨らませたり、ねじったり、縛ったりして「ともだち」をつくる
- 第6回 画用紙とはさみを使って、はさみのアートをつくる
- 第7回 ビニル袋を使って遊べるものをつくる
- 第8回 段ボール片でオブジェをつくる
- 第9回 飛び出す仕組みを基にして、伝えたいことが楽しく伝わるカードをつくる
- 第10回 とろとろ絵の具でかく
- 第11回 ストローを組み合わせてつくった動く仕組みを基に動くおもちゃをつくる
- 第12回 集めた材料を使って絵に表す
- 第13回 ケント紙とカッターナイフを使ってオリジナルタワーをつくる(1)
- 第14回 ケント紙とカッターナイフを使ってオリジナルタワーをつくる(2)
- 第15回 子どもに適した表現を考えて遊びの造形を制作する

成績評価の方法

制作態度・進め方 (50%)、作品 (50%)

履修にあたっての注意

いろいろな題材があるので、材料、道具の準備を心がけておくことが望ましい。
子どもの造形発達について、予習、確認をしておくこと、より適切な制作をすることができる。

教科書・参考書に関する備考

授業の中で独自に作成したプリントを配付する。

授業のねらい

児童やその保護者と日常的に関わる保育士に対して、地域における子育て支援において大きな期待が寄せられています。そのため本講義では実際に関係を築きながら保護者の相談援助を担うための準備をすること、および問題を抱える子育て家庭への支援チームのメンバーとして機能できるように学ぶことをねらいとします。相談援助とは何を重視し、どのように児童と保護者に関わるべきなのか、具体的な事例を使って学生同士のディスカッションを重視した演習によって学習していくこととします。

到達目標

児童や保護者の相談を担当することへの準備性において、取り組みを担う心構えができていることを目指します。具体的には以下の目標に到達するように授業を進めます。

1. 相談援助の概要について理解します。
2. 相談援助の方法と技術について理解します。
3. 相談援助の具体的展開について理解します。
4. 保育におけるソーシャルワークの応用と事例分析を通して対象への理解を深めます。

授業方法

- 1 「相談援助」の授業内容および展開方法等について説明を行います。
- 2 テーマについてグループで協議します。
- 3～15 テーマについてグループ協議します。

基本的に継続して一つの事例を使用するため、授業前には前回の事例の展開と授業のポイント（必要なスキルと基礎知識）を読み返すという準備を行って次の授業に臨むことが望まれます。また、各回のテーマごとに授業後に実施するスキルトレーニングの成果をもって次回の授業で報告していただきます。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 自己理解 相談援助を行う自分についての理解
- 第3回 ソーシャルワークの展開過程の学習 ①児童福祉事例が「ケース」になるまで
- 第4回 ②インテーク前まで
- 第5回 ③インテーク面接、インテーク段階とは
- 第6回 ④アセスメントした情報を記録する
- 第7回 ⑤アセスメントツールを使いこなす：エコマップから分かることとは
- 第8回 ⑥エコマップ作成の準備：情報をまとめる
- 第9回 ⑦エコマップの作成1
- 第10回 エコマップの作成2と発表
- 第11回 ⑧アセスメントのまとめ
- 第12回 ⑨支援計画作成
- 第13回 ⑩計画実施とモニタリング
- 第14回 ⑪ケースの終結
- 第15回 相談援助のまとめ

成績評価の方法

授業への参加状況（60%）、レポート・授業後のフィードバック用紙の記入（40%）演習を含んだ授業のため出席を重視します。ほかに単元ごとのレポート課題を授業時に適宜提示する予定です。試験は実施しません。

履修にあたっての注意

参加型である演習中心の授業のため、自分の考えを表現しつつ他の学生の意見から学ぶという姿勢が必要とされます。一緒に学ぶメンバーは、自分の学習を助けてくれるパートナーでもあるのです。お互いを尊重しながら学びを共有するという関係性の意味を考えながら参加するようにしてください。

教科書・参考書に関する備考

授業時に適宜指示します。

授業のねらい

昨今の核家族化や養育者の孤立化、育児不安などにより、本来家族がもっている子どもを健やかに育む機能が脆弱化している場合がある。そのような状況において、親子と日常的に密に関わることが多い保育士が保護者を含めた家族を支援していくことでより効果的な子育て支援が行われると考えている。これまでの子どもの健やかな発達への促しに加えて、養育者にとっても一緒に子育てについて考えてくれる専門性をもつ存在であると保育士が認識されることが今後は望まれる。養育者の側に身近な支援者がいるということが、結果として児相虐待の予防にも繋がると考えている。

到達目標

- ①現代の子育て事情を把握し、家族の生活状況を理解できる。
- ②乳幼児期の子どもの心身の発達に関するアセスメントの方法を学び、考えることができる。
- ③保護者の相談に対して親身になって話を聴く態度を育む。
- ④相談内容への解決に向けての支援を述べるができる。
- ⑤各関係機関の役割を理解し、連携する方法を具体的に説明できる。

授業方法

実際の子育て相談を事例として提示しながら、具体的な支援方法を検討する。その上で、授業に参加した生徒同士でディスカッションを重ねる。また、適宜、意見を発表し問題解決に向けて主体的に考えられる態度を育む。以上に加えて、授業終了時に感想文を書き、理解度を確認しながら講義を進めたいと考えている。

なお、配布される資料を用いて復習を行い、理解を深めておくこと。

授業計画

- 第1回 家族とは？
- 第2回 現代の子育て事情
- 第3回 子どもへの行動観察と親子関係
- 第4回 子どもへの関わり方の視点 ～絵本の読み聞かせ・食生活から見えてくるもの～
- 第5回 子どもの表現と大人の関わり ～感情と行動のエクササイズ～
- 第6回 子育て支援① 児童家庭支援センターのケースから
- 第7回 子育て支援② 児童養護施設のケースから
- 第8回 子育て支援③ 医療臨床でのケースから
- 第9回 子育て支援④ 保育場面における気になる子への関わりと親支援
- 第10回 発達相談
- 第11回 育児不安、虐待相談
- 第12回 親への心理教育・ペアレントトレーニング
- 第13回 子どもの見立てと親支援のあり方
- 第14回 他機関連携と専門性
- 第15回 相談援助のまとめ

成績評価の方法

最終試験を実施し、事例理解についてはレポート提出を行います。成績は最終試験結果（40%）、提出レポート内容（40%）、および講義へのかかわり（20%）で評価します。

履修にあたっての注意

対人援助者に必要とされる資質養成を授業目的としていることから、体験学習ではプライバシーについて配慮しますが、ある程度自分自身が他者にあらわなることを了解の上で受講してください。

教科書・参考書に関する備考

使用しない。授業にあたっては毎回講義に関わる講義資料を配布し、さらに視聴覚資料をもとに講義を展開します。その際、必要とされる関連文献については随時紹介します。

参考書

笠師千恵・小橋明子『相談援助 保育相談支援』（中山書店、2014）

授業のねらい

幼稚園実習Ⅰで学んだことをふまえて、さらに幼児理解を深めるとともに保育者として必要な力の習得を目指す。自分はこの実習で何を学び何を得たいのか、明確な研究課題を設定し、その課題を達成するために子どもとどのようなかわり方をするのが望ましいのかを常に意識しながら実習にのぞむ。毎日の実習を振り返り、課題を達成するために何が必要か、日々研究を重ねる態度を身につけることもこの実習の目的である。

到達目標

1. 自分で設定した研究課題に関する成果をまとめる
2. 幼稚園の役割について多面的に述べるができる

授業方法

学外の幼稚園で2週間の実習を行う。

実習に行く前に、追究する研究課題についての検討を行い、研究テーマを決定する。実習中には日常の業務を行う中で、設定した研究課題に取り組む。実習終了後には、その成果をレポートとして提出する。

提出されたレポートについての口頭試問を行い、結果に対するフィードバックを行う。

授業計画

- 1 実習事前面接
実習園で何を課題として2週間過ごすのかを明確にする
実習で特に何についてを学ぶのか、テーマを決める
- 2 実習課題について800字程度のレポートを作成する
- 3 実習園での実習（2週間）
実習園との打ち合わせにしたがって、実習を行うと共に、研究課題に取り組む
- 4 実習事後面接
2週間の学びについて報告する
研究課題についてレポートを提出する

成績評価の方法

到達目標を測定するために実習園の評価（40%）と実習レポート（60%）で評価する。

履修にあたっての注意

幼稚園実習Ⅰを履修後、希望者が受講できる。貴重な日々の保育の現場をお借りして実習を行うということを頭におき、ひとりの保育者として責任ある行動をとること。自分なりの目的をもって主体的に実習を行うこと。体調管理には充分気をつけて、欠席のないように気をつける。

授業のねらい

この講義は、保育士課程の「保育実習」に含まれる科目であり、保育所実習 I を履修する者は事前にこの科目を履修しなければならない。

乳幼児・障がい児実習をふまえ、保育所実習 I では保育所でのさらなる実習を通して、現代の子どものおかれている状況や保育所の役割等を理解する。また、子ども、保育者や職員の方々等多くの人たちとの貴重な出会いを通して、自分のものの見方、考え方、保育者としての資質が問われ、自身の進路について考える機会ともなる。このような実習に臨むにあたり、実習の意義や目的、子どもの発達や保育に関する知識やこれまでに修得した基本的な技術を確認する。また、子どもや保育者だけでなく、大学の教員や助手等との連絡も必要になるため、実習の全体像の理解も深める。

到達目標

- 1 保育実習の意義・目的や実習の全体像を理解する。
- 2 実習の内容を理解し、自らの課題を明確にする。
- 3 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について理解する。
- 4 実習の計画・実践・観察・記録・評価の方法や内容について具体的に理解する。

授業方法

講義、演習、個別面談や乳幼児・障害児実習のビデオを振り返るだけでなく、必要に応じて保育経験者の講義も受け、総合的に理解できるよう授業を展開する。

講義の中で最新の保育動向にも触れるが、各種メディアを通して保育や子どもに関する情報を知るよう努力するとともに、これまでの実習で得た自己課題について、克服するための事前・事後学習を計画的に行うこと。

授業計画

- 第1回 はじめに：ガイダンス
実習の概要
- 第2回 保育の最新動向と実習スケジュール：進路選択と就職活動を視野に入れて
- 第3回 保育実習の意義・目的：実習の全体像の理解
- 第4回 実習の内容と課題の明確化：幼稚園・福祉施設実習を踏まえて
- 第5回 実習準備1：身上書の記載と事前訪問
- 第6回 実習に際しての留意事項：子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務
- 第7回 実習生としての心構え：保育経験者の講義から
- 第8回 乳幼児・障害児実習の振り返り
- 第9回 実習の計画と記録1：実習における計画と実践
- 第10回 実習の計画と記録2：実習における観察・記録・評価
- 第11回 実習準備2：実習中の実践の教材研究・指導案
- 第12回 実習準備3：実習中の記録の視点とポイント
- 第13回 実習準備4：実習担当教員との連絡・実習中の諸注意と不慮の事故対応等
- 第14回 実習準備5：事後の注意点
- 第15回 おわりに：まとめ

成績評価の方法

適宜、自己課題や講演の感想等提出課題を課す。到達目標1～4の全てを提出課題（100%）で評価する。

履修にあたっての注意

主体的に授業を受け、実習に対する具体的なイメージや計画を持つよう努力するとともに、自己課題克服に向けての努力を授業外でも行うこと。事前準備事後課題についても学習すること。

教科書・参考書に関する備考

「藤女子大学人間生活学部保育学科 2018 年度保育士養成課程版保育所実習の手引き」を参考とする。

参考書

吾田富士子編『保育者・教育者のための保育原理・初等教育原理（仮第）』（八千代出版、2018 出版予定）

授業のねらい

この授業は、保育士課程の「保育実習」に含まれる科目であり、保育所実習Ⅱを履修した者は事後にこの科目を履修しなければならない。

保育所実習Ⅱを踏まえ、現場での自己の学びを整理し、他実習生の学びの報告から自己評価を行い、あらたな課題や学習目標を明確にし、社会人として、保育者としての自身の進路を考える時とする。また、多様な保育の現状を知り、求められる保育者像と保育所の課題について考察する。さらに、最近の保育研究と4年間の講義や実習経験から、保育について考える時とする。

到達目標

- 1 実習での学びの整理と自己評価を行い、新たな課題や学習目標を明確にする。
- 2 他実習生の報告を聞き、多様な保育の現状を知り、今後の保育や求められる保育者について考える。
- 3 最近の保育研究から、あらためて保育の魅力と課題、これからの保育と人間学について考察する。

授業方法

演習科目であり、個別活動と全体での学びの時間がある。前半は実習の整理や報告、他者の報告を聞いたり個別面談を通して、自己課題を明確にし、進路を考える機会とする。後半は最近の保育研究に触れ、保育やこれからの子どもの教育について展望し、保育者となる準備の時とする。実習の整理や自己評価、報告等については課題提出を課す。また、期末レポートにおいて、これからの保育についての考察に取り組む。

授業の中で随時指名して発言を求める。そのため、事前事後学習の中で、広く社会の出来事に関心を持ち、あらためて社会の中における保育の意義や、子どもの置かれている状況について、考えを広め、深めて参加すること。

授業計画

- 第1回 はじめに－保育所実習Ⅱ講評と今後について－
授業の概要と成績評価・レポート・講義外学習について
- 第2回 実習での学びの整理と報告－実習経験の客観化－
- 第3回 実習報告1－他者の報告から、自己の経験を整理し直す－
- 第4回 実習報告2－他者の報告から、多様な保育展開を知り、子ども理解を深める－
- 第5回 実習報告3－他者の報告から保育所保育の課題を考える－
- 第6回 客観的評価評価と自己課題の再構築－面談を通して今後の目標を考える－
- 第7回 保育士の専門性と職業倫理－ディスカッションを通して－
- 第8回 保育研究とこれからの保育保育の実践と今後の課題
- 第9回 保育研究とこれからの保育保護者支援と地域との連携
- 第10回 保育研究とこれからの保育保育の動向と今後の保育の方向性
- 第11回 保育研究とこれからの保育
- 第12回 社会における保育の意義
- 第13回 子どものおかれている状況を考える
- 第14回 キャリア形成と保育－女性として、保育者として、人間として－
- 第15回 おわりに－まとめにかえて－

成績評価の方法

毎回の授業で課する提出物（80％）で到達目標1、2を、学期末に提出するレポート（20％）により到達目標3を評価する。

履修にあたっての注意

授業開始時には既に進路を考え、実際に就職活動をしている者もいると思われるが、保育を4年間学んだ社会人となることを踏まえ、授業の中で随時指名して発言を求める。そのため、事前事後学習の中で、広く社会の出来事に関心を持ち、あらためて社会の中における保育の意義や、子どもの置かれている状況について、考えを広め、深めて参加すること。

教科書・参考書に関する備考

特に使用しない。

参考書

子どもと保育総合研究所編『子どもを「人間としてみる」ということ』（ミネルヴァ書房、2013、ISBN：978-4-623-06799-2-C3036）
吾田富士子編『保育者・教育者のための保育原理・教育原理（仮題）』（八千代出版、2018 出版予定）

授業のねらい

保育所実習 I は保育士資格取得のための必修科目である。道内の保育所で 10 日間の実習を行う。乳幼児・障がい児実習をふまえ、保育所でのさらなる実習を通して、現代の子どものおかれている状況や保育所の役割等を理解する。また、子ども、保育者や職員の方々等多くの人たちとの貴重な出会いを通して、自分のものの見方、考え方、保育者としての資質が問われ、自身の進路について考える機会ともなる。

到達目標

- 1 子どもとかわり信頼関係を築く。
- 2 保育者の指導を受けながら、保育者の業務と役割を理解し、実践する。
- 3 保育者の助言を受けながら、保育を実践する。
- 4 子どもとの個別のかかわりや集団保育の中で、保育所の役割を知る。
- 5 これまでの学びと実際の保育実践の違いを知り、保育についてあらためて考える。

授業方法

現場での保育所実習 I は大学での保育所実習指導 I と連動している。また、現場への事前訪問や、大学の実習担当教員や助手との連絡等様々な関係者との調整の中で実施される。

授業計画

実習計画は園によって異なる。概ね以下の経験ができるよう計画されている。

実習ガイダンス：初日あるいは事前訪問時

- (1) 集団としての保育の 1 日の生活内容と生活リズムの体得
- (2) 養護および生活指導面における保育士としての態度および技術の習得
- (3) 乳幼児の安全および疾病防止などに対する配慮と臨機応変的措置の実践
- (4) 遊びと 5 領域の関連を考慮した展開とさまざまな保育形態の実践
- (5) 日案の理解と立案、準備、実践、評価
- (6) 保育士の職務内容、チームワーク、労働条件の体験的理解
- (7) 家庭、地域社会との関係の実践的理解
- (8) 実習日誌の記録
- (9) 対象となる子どもの観察と理解

※全年齢クラスでの実習及び固定クラスでの実習の両方の場合がある。

成績評価の方法

到達目標 1～4 は、以下により評価する。

実習評価（実習園）50%、提出物（日誌・レポート・自己評価）50%

履修にあたっての注意

子どもの保育はそれ自体目的なものであり、また繰り返しのきかない 1 回きりのものであって、常に最善の方法で行なわれなければならない。実習生であっても子どもにとっては「保育士」であるという自覚と責任を持ち、担当保育士の指導を受けながら全力を尽くして実習に臨むこと。また、慣れない環境で体調を崩しやすく、実習日誌の記載や保育準備、教材研究等は帰宅してからの作業となることが多く、心身の健康に十分留意して実習に臨むこと。

保護者とかかわりや保育士、大学の教員や助手とかかわりもあるため、社会人としての自覚を持った行動をとることも大切である。

教科書・参考書に関する備考

「藤女子大学人間生活学部保育学科 2018 年度保育士養成課程版保育所実習の手引き」を参考とする。

参考書

『最新保育資料集』（ミネルヴァ書房）

授業のねらい

保育所実習Ⅱは保育士資格取得のための選択必修科目である。この実習の10日間は、保育所実習Ⅰと同じ保育所で行い保育実践経験深める。また、保育所実習Ⅰ及び大学での実習指導をふまえ、明らかになった自己課題を追求すると同時に、子どもや保育に関して自分なりに課題を設定し、実習を通して主体的に深め、子どもや保育、保育所についてさらに理解を深めていく。課題に関しては現場の保育者の助言・指導を受けながら、より実践的な理解が得られるよう努力する。

到達目標

- 1 保育所保育を実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得する。
- 2 保育所の社会的役割・機能などを理解し、今日、保育所に求められている事柄も理解する。
- 3 子どもや家庭のニーズに対する理解力、子育てを支援するために必要とされる能力を理解する。

授業方法

現場での保育所実習Ⅱは実習中に大学で行われる実習指導や保育所実習指導Ⅱと連動している。また、大学の実習担当教員や助手との連絡等様々な関係者との調整の中で実施される。

授業計画

実習計画は園によって異なる。概ね以下の経験ができるよう計画されている。

- (1)保育全般に参加し、保育技術を習得する
- (2)子どもの個人差を知り、対応方法を理解する
特に発達の遅れや生活環境に伴う子どものニーズを理解し、その対応について学ぶ
- (3)指導計画の立案、準備、実践、評価
- (4)家庭との連携について保育士の実践から学ぶ
- (5)地域社会に対する理解を深める
- (6)特に関心のある事柄をテーマと定め、子どもや保育に関する理解を深める
- (7)保育者としての自己課題を追求する

実習反省会：最終日

※全年齢クラスでの実習及び固定クラスでの実習の両方の場合がある。

成績評価の方法

到達目標1～3は以下により評価する。

実習評価（実習園）50%、提出物（日誌・レポート・自己評価）50%

履修にあたっての注意

（保育所実習Ⅰと同じ）

教科書

『最新保育資料集』（ミネルヴァ書房）

授業のねらい

福祉施設実習Ⅱの事前・事後指導のための科目である。福祉施設実習Ⅱは、福祉施設実習Ⅰをふまえ、福祉施設の役割、施設保育士としての知識や生活技術、自己課題等について、実践を通してさらに学びを深めるための実習である。そのため、事前指導では実習を円滑に進めていくための知識や技術を習得し、実習内容や実習課題を明確にすることを目的とする。また、事後指導では実習を振り返り施設保育士の専門性について理解を深めるとともに、保育に対する課題や認識を明確にすることを目指す。

到達目標

- 1 福祉施設実習の意義・目的が理解できる。
- 2 実習や既習の教科の内容との関連性をふまえ、保育実践力を身に付ける。
- 3 保育士の専門性と職業倫理について理解できる。
- 4 事後指導を通して、保育に対する課題や認識を明確にすることができる。

授業方法

福祉施設実習Ⅱに参加するための準備教育である。グループ学習を交えながら、主に講義形式で授業を展開する。授業終了時には次回の準備学習を課す（所用時間 30 分程度）。また、課題レポート提出により各自の理解度についての確認をする。レポート課題については、授業時に口頭で説明する。

授業計画

- 第1回 福祉施設実習Ⅱの目的・意義
- 第2回 実習施設についての理解 (1)施設の目的・機能
- 第3回 実習施設についての理解 (2)地域とのかかわり
- 第4回 施設における支援の理解 (1)対象児(者)の理解
- 第5回 施設における支援の理解 (2)かかわり方の検討
- 第6回 施設における支援の理解 (3)家族・保護者支援
- 第7回 施設における支援の理解 (4)個別支援計画
- 第8回 福祉施設実習計画の作成
- 第9回 福祉施設実習日誌の書き方、記録のとり方
- 第10回 福祉施設実習Ⅱの心構え
- 第11回 実習の振り返り（グループディスカッション）
- 第12回 実習報告書作成
- 第13回 実習体験パンフレットの作成
- 第14回 実習報告会
- 第15回 実習自己評価、個別事後指導

成績評価の方法

到達目標 2～3 を測定する提出物（50%） 授業への参加状況（50%）

履修にあたっての注意

福祉施設での実習に向けて重要な指導を行うため、欠席をしないこと。欠席が多い場合には実習を取りやめます。有意義な実習とするために、積極的に実習準備に努めるようにしてください。

教科書

施設実習ガイドライン

授業のねらい

福祉施設実習Ⅰを踏まえ、施設養護に携わる保育士としてさらに高い援助技術や専門的知識を習得することを目的とする。実習を通して、福祉施設の役割や機能についての理解を深めるとともに、そこで生活をする子どものニーズを把握し子どもや家族への支援と対応や職業倫理について実践的に学ぶ。さらに、自己課題を明確にし、施設保育士に必要な資質について理解を深める。

到達目標

- 1 児童福祉施設等の役割や機能を説明できる。
- 2 福祉施設における支援内容や支援方法について理解できる。
- 3 施設保育士の業務や職業倫理を理解できる。
- 4 施設保育士としての自己課題を明確にできる。

授業方法

学外の福祉施設にて10日間の実習を行う。

授業計画

- 1 実習期間は10日間である。原則として、実習時間は職員の勤務時間に準ずる
- 2 実習内容
 - i 施設の役割と機能
 - ii 施設における支援の実際
 - (1)受容し、共感する態度
 - (2)個人差や生活環境に伴う子どものニーズの把握と子ども理解
 - (3)個別支援計画の作成と実践
 - (4)子どもの家族への支援と対応
 - (5)多様な専門職との連携
 - (6)地域社会との連携
 - iii 保育士の多様な業務と職業倫理
 - iv 保育士としての自己課題の明確化

成績評価の方法

到達目標1～4を測定する自己評価レポート（40%） 実習日誌（30%） 実習施設の評価（30%）

履修にあたっての注意

- ・福祉施設実習Ⅰの体験を踏まえ、さらに施設保育士としての専門的知識・技術を得るために行います。将来の進路を念頭に入れながら（福祉施設に就職を希望している学生は履修することが望ましい）、明確な目的意識を持って臨んでください。

教科書

施設実習ガイドライン

78651

障害児教育実習

担当教員：今野邦彦・原田公人・矢野 潤

3単位 通年

授業のねらい

この実習は、特別支援学校教諭一種免許状を取得するためのものである。本学では、幼稚園教諭一種免許状を基礎免許として、所定の単位を取得し、かつ本実習を終了する必要がある。

到達目標

特別支援学校の制度、システム、教育理念、教育目標・内容・方法などについて理解し、教員としての自覚をもって教育実習を行うことができる。

授業方法

学外実習を中心とし、事前・事後指導を行う。
事前・事後指導では、授業への参加状況を重視する。
事前・事後指導については、各自予習復習をすること（所要時間各 30 分程度）。

授業計画

- 事前指導（3回）
 - 特別支援学校の実態
 - 障害のある子どもの教育についての基礎的知識の獲得
 - 教員の一員としての心得
- 各特別支援学校での実習 2 から 3 週間（12 回）
 - 特別支援学校での教育について
 - 個別の指導計画の作成について
 - 子どもの実態の理解について
 - 各クラスに所属し、一人の指導教員につき、基本的な事柄を学び、実習する。
 - 担当の子どもを観察と理解、教育目標の設定、教育内容・方法などについて
 - 研究授業の準備と実施
 - 研究授業反省会・審査
- 事後指導（1回）

実習の反省と成果の報告

成績評価の方法

到達目標に関わって、実習日誌（30%）、特別支援学校評価（30%）、大学側評価（40%）、により評価する。大学側評価では、事前・事後指導への参加状況、提出物の内容と期限厳守、教員への連絡・報告を重視する。

履修にあたっての注意

特別支援学校の実習生受け入れには制限があり、希望者全員が実習出来るとは限りません。

教科書

文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚部・小学部・中学部）』（教育出版、2009、ISBN：978-4-316-30016-0）
文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）』（海文堂出版、2015、ISBN：978-4-303-12432-8）

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて資料配布、文献紹介します。

授業のねらい

この授業では、4年間の教職課程において学んできた事（保育内容の指導力に関する事項、幼児理解に関する事項、使命感・責任感・教育的愛情に関する事項、社会性や対人関係能力に関する事項）をさまざまなワークを通して振り返る。その上で、保育者になることの位置づけや確認を行う。

到達目標

1. 幼児理解の仕方を再確認し、幼児を理解する際に必要な視点を述べることができる
2. グループワークを通して、様々な意見から物事を多面的にとらえる力を身につける
3. 保育者になるにあたって自分の課題がどこにあるのかを述べるができる

授業方法

この授業は、教科・保育内容の指導に関する事項、幼児児童生徒理解に関する事項、使命感・責任感・教育的愛情等に関する事項、社会性や対人関係能力に関する事項の大きく分けて4つから構成されている。授業は主にグループワークを中心として行う。グループワークに関する課題を事前に与え、その課題をもって授業に参加することを課する。

提出された課題は、コメントをつけて返却する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーションこの授業の目的・進め方について 4年間の学びを振り返る
- 第2回 保護者への対応・危機管理
- 第3回 幼児理解のためのグループワーク① ー絵本「14匹シリーズ」を通して 場面を読み取る
- 第4回 幼児理解のためのグループワーク② ー絵本「14匹シリーズ」を通して 読み取りの分かち合い
- 第5回 幼児理解のためのグループワーク③ ー絵本「14匹シリーズ」を通して 全体の分かち合い
- 第6回 保育における記録① 記録の種類
- 第7回 保育における記録② 子どもの学びの記録作成
- 第8回 伝える力を育む スピーチ
- 第9回 チームビルディング① 個をひらく
- 第10回 チームビルディング② グループの協力
- 第11回 保護者に伝える① おたよりの書き方
- 第12回 保護者に伝える② クラスたよりを書いてみよう
- 第13回 保護者に伝える③ クラス便りの分かち合い
- 第14回 私の保育観 グループワーク
- 第15回 レポート作成 私の保育観

成績評価の方法

到達目標を測定するために、授業内で提出する課題（60%）と最後に課すレポート課題（40%）に基づき、評価を行う

履修にあたっての注意

グループワークを中心とした演習科目のため、各自が主体性をもち積極的に授業に参加すること。またやむを得ず欠席をすることなどがあった場合は、グループ活動に支障がないよう、グループメンバーへの連絡等を行うこと。

授業のねらい

卒業研究演習では、3年次の保育学研究演習での学びを基礎とし、卒業研究に取り組みます。この演習の目的は、物事を着実に進める能力（すべきことがらを把握する・目標を立て実行する・目標を修正する・時間を管理するなど）を身につけ、提出期限までに卒業研究を提出することです。こういった能力は、卒業後の生活においても必要とされるものです。卒業研究への取り組みを通して、研究能力に加えて、これらの能力も高めてほしいと思います。

到達目標

1. 卒業研究を提出期限までに提出できること
2. 自分で研究のスケジュールを管理しながら計画的に卒業研究を進めること

授業方法

受講者全員に共通することについては、講義形式で演習を進めます。その他のことについては、個別指導が中心となります。調査を実施しない場合、先行研究のレビュー・問題と目的部分の再検討は2～22回まで、考察は23～28回目までとなります。

演習前には、自分が設定した次回までの目標を達成できるよう、研究を進めておくことが求められます。また、毎回、その週の取り組みについて講評を行いますので、演習後には、指摘された問題点を修正しておくことが必要です。予習・復習に必要な時間の目安は、2～4時間です。

授業計画

- 第1回 卒業研究を行うための準備：1年間の計画をたてる・研究の際の倫理的配慮について学ぶ
- 第2回 先行研究のレビュー(1)：先行研究を読み、まとめる
- 第3回 先行研究のレビュー(2)：先行研究のまとめを充実させる
- 第4回 先行研究のレビュー(3)：レビューの章の構成を完成させる
- 第5回 問題と目的部分の検討(1)：問題と目的を明確にする
- 第6回 問題と目的部分の検討(2)：設定した目的に基づき、先行研究を検索しなおす
- 第7回 問題と目的部分の検討(3)：問題と目的部分を完成させる
- 第8回 調査の計画(1)：調査対象者や質問内容など、具体的な調査の計画を立てる
- 第9回 調査の計画(2)：質問紙を作成する・実験用具の準備をする
- 第10回 調査の計画(3)：質問紙を完成させる・実験用具の準備を終える
- 第11回 調査の実施(1)：調査先の検討を行う
- 第12回 調査の実施(2)：調査先への依頼・日程などの調整を行う
- 第13回 調査の実施(3)：調査を実施する
- 第14回 調査の実施(4)：質問紙を回収する・調査を実施する
- 第15回 調査の実施(5)：データの入力方法について理解する
- 第16回 前期のまとめ：年間計画（後期分）を再調整する
- 第17回 データの分析(1)：分析方法について検討する
- 第18回 データの分析(2)：データの分析を行う
- 第19回 データの分析(3)：データの分析を行い、主要な結果をまとめる
- 第20回 データの分析(4)：図・表を作成する
- 第21回 データの分析(5)：統計の表記方法などについて理解する
- 第22回 データの分析(6)：結果部分を執筆する
- 第23回 考察(1)：結果の解釈をする
- 第24回 考察(2)：結果の解釈とデータの追加分析を行う
- 第25回 考察(3)：結果と仮説を対応づける
- 第26回 考察(4)：先行研究と自分の研究結果を対応づける
- 第27回 考察(5)：考察の方向性を定める
- 第28回 考察(6)：考察部分を執筆する
- 第29回 要旨集のための原稿執筆(1)：卒業研究要旨集の原稿の下書きを提出する
- 第30回 要旨集のための原稿執筆(2)：卒業研究要旨集の原稿を提出する

成績評価の方法

到達目標1・2の達成度を測定するため、毎回、その週に進めた内容の報告と次週の作業計画を発表してもらいます。成績は、卒業論文提出前までの毎回の作業計画の達成度（100%）によって評価します。ただし、単位の認定は、卒業研究の単位認定を前提とします。

履修にあたっての注意

卒業研究演習は卒業研究のための演習です。そのため、卒業研究と同時に履修してください。

教科書

日本心理学会『執筆・投稿の手びき（2015年改定版）』（社団法人日本心理学会、2015）

授業のねらい

この科目は卒業研究作成のための演習であり、目的も卒業研究と同じである。

4年間の実習や学びの集大成として、自分の興味関心を深め、必要な調査や統計処理も実践しながらひとつの課題を追求し、論文や作品として集約することが卒業研究である。この授業では研究のテーマを定め、文献検索、資料集め、研究方法の検討をし、卒業研究の基本的な作業を各自実践する。中間発表において要旨作成、発表をし、ディスカッションなどを通して研究の方向性を再検討したり、研究の面白さや難しさを経験することとなる。問題意識を持ち、その解決のためにどのような方法があるのかを実践しながら学び、課題解決の力や他者に理解されるような表現力等を身につけることを目的とする。

到達目標

- 1 卒業研究作成
- 2 論理性、論旨の明確さ、的確な手法と表現力の習得。

授業方法

研究テーマに沿った研究方法・文献の紹介を行うため、各自の研究テーマに沿った研究実践と研究発表・ディスカッションが中心の演習となる。

授業内で行えることは一部であり、卒業研究のための一連の作業・研究等は事前・事後学習となる。計画的に進めること。

授業計画

- 第1回 はじめに
- 第2回 研究テーマについて：素朴な疑問と研究の方向性
- 第3回 先行研究調査(1)：文献検索と資料集め
- 第4回 先行研究調査(2)：そのほかの情報収集方法・フィールドワーク
- 第5回 先行研究調査(3)：文献要約と理解
- 第6回 文献の要約と理解(1)：要旨作成
- 第7回 文献の要約と理解(2)：発表とディスカッション
- 第8回 研究テーマの絞込み(1)：仮説と研究方法・研究計画
- 第9回 研究テーマの絞込み(2)：調査方法と統計処理
- 第10回 プレ調査(1)：質問紙作成と統計処理の実際
- 第11回 プレ調査(2)：結果と考察
- 第12回 中間発表会(1)：要旨発表・ディスカッション
- 第13回 中間発表会(2)：要旨発表・ディスカッション
- 第14回 研究方法の反省点と新たな研究課題
- 第15回 文献の批判的理解と多角的視点
- 第16回 課題研究(1)：先行研究と研究テーマ
- 第17回 課題研究(2)：研究倫理の重要性「藤女子大学研究倫理基準」の内容を知る
- 第18回 課題研究(3)：実践と個別指導
- 第19回 課題研究(4)：実践と個別指導
- 第20回 課題研究(5)：実践と個別指導
- 第21回 課題研究(6)：実践と個別指導
- 第22回 課題研究(7)：要旨発表・ディスカッション
- 第23回 課題研究(8)：要旨発表・ディスカッション
- 第24回 課題研究(9)：仮説と研究計画・研究方法の修正と再検討
- 第25回 課題研究(10)：新たな情報収集
- 第26回 課題研究(11)：情報収集で明らかになったこと
- 第27回 課題研究(12)：結果と考察
- 第28回 課題研究(13)：反省点と新たな研究課題
- 第29回 卒論発表
- 第30回 おわりに：まとめにかえて

成績評価の方法

到達目標1～2共に、先行研究検索・要約、調査等各種方法による研究へのアプローチ、考察、卒論発表、ディスカッション等一連の研究への取り組み(100%)で評価する。

履修にあたっての注意

「卒業研究演習」は、「卒業研究」のための演習のため、この2科目は同時に履修しなければならない。(この科目の単位の認定は、卒業研究の単位認定を前提とする。)

研究は個別指導が中心であるが、週に一度、他者の研究や自身の研究を確認し、説得力のある研究手法や表現力、多角的視点について互いに切磋琢磨しながら研究を進めることとなる。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて随時指示する。

授業のねらい

卒業研究は、「論文」、「制作」のいずれかを選択。

各自が関心のあるテーマを選定し、テーマに従って先行研究などの文献をまず見つけ出すこと、読み込むとはどういうことか、現場へ出向くことなども含め、調査、考察、論理的思考力を付けることを目指す。

到達目標

毎週の積み重ねが力を付けることの早道であり、確実に歩みを進めることを大事にしながら、テーマに沿った思考、創造的な技能、知識、表現力などを獲得し、卒業研究を作成することを目標とする。

授業方法

各自が卒業研究のテーマを踏まえ、論を構築していくための土台作りをする。

先行研究、資料となる文献を見つけ出し、検討を加える。アンケートの作り方、論文の書き方などを演習形式で進める。

週1回のゼミを大切にし、自分のテーマに沿った検討結果を持参する。自学時間 60 分。

授業計画

- 第1回 ガイダンス 各自テーマの検討
- 第2回 文献検索の方法 図書館にて
- 第3回 卒業論文全体の把握（目的、目標）
執筆要領説明 参考・引用文献などの書き方
研究倫理についての説明
- 第4回 先行論文の検索 見つけた論文の分析
- 第5回 有効な文献検索・先行論文検討
- 第6回 卒業論文全体についての章立て
- 第7回 各自テーマの最終チェック 検討
- 第8回 中間報告 テーマ
- 第9回 先行研究、文献再検討
- 第10回 アンケートがあればその目的、方法
- 第11回 アンケート 作成、依頼
- 第12回 アンケート配付、回収方法の検討
- 第13回 章立て、書き出し
- 第14回 調査、文献検索
- 第15回 アンケート回収・分析
- 第16回 休暇中の報告・中間発表
- 第17回 アンケート文責結果発表
- 第18回 文献検索・執筆
- 第19回 執筆 検討
- 第20回 執筆 検討
- 第21回 中間報告
- 第22回 執筆 検討
- 第23回 執筆 検討
- 第24回 最終段階 考察に向けて
- 第25回 最終段階 考察・まとめ
- 第26回 中間報告
- 第27回 考察・まとめ最終検討
- 第28回 提出
- 第29回 要旨書き方説明
- 第30回 発表

成績評価の方法

自己研鑽の足跡としての中間での報告(40%)、卒業研究の取り組み方(60%)
単位の認定は、卒業研究の単位認定を前提とします。

履修にあたっての注意

「卒業研究演習」は、「卒業研究」のための演習です。従って、この2科目は同時に履修しなければならない。提出に向けて、年間配分を把握し、計画的に行動することを心がけること。

授業のねらい

これまで演習等の学びを振り返り、自分の興味関心の対象や課題に対する考え方を明確にし、研究方法や研究倫理について学びます。その上で卒業論文作成に向けてテーマを設定し、文献を講読したり、調査を実施したりしながらまとめていきます。

到達目標

- 1 卒業研究に必要な資料を収集し分析することができる。
- 2 研究テーマに沿って論を組み立てることができる。

授業方法

前半は、各自が研究テーマの設定と研究計画の策定を行い、必要な文献を収集したり、調査を計画したりします。後半は、それぞれの研究計画にしたがい、文献をまとめたり、調査を実施し分析したりして論を組み立て、卒業論文を作成していきます。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション
- 第2回 「研究倫理」について
- 第3回 論文の書き方について
- 第4回 研究計画の作成(1) 研究の動機
- 第5回 研究計画の作成(2) 研究の目的
- 第6回 研究計画の作成(3) 研究の構成
- 第7回 研究計画の作成(4) 論文作成までの見通し
- 第8回 先行研究の調査分析(1) 文献資料の収集
- 第9回 先行研究の調査分析(2) 文献資料のまとめ
- 第10回 先行研究の調査分析(3) 発表
- 第11回 調査の計画(1) 計画の立案
- 第12回 調査の計画(2) 調査の依頼
- 第13回 調査の計画(3) 調査の準備
- 第14回 調査の実際
- 第15回 前期のまとめ
- 第16回 後期オリエンテーション
- 第17回 調査のまとめ(1) データの分析 1
- 第18回 調査のまとめ(2) データの分析 2
- 第19回 卒業論文作成に関する指導(1) 結果の解釈
- 第20回 卒業論文作成に関する指導(2) 論の組み立て
- 第21回 卒業論文作成に関する指導(3) 考察
- 第22回 卒業論文作成に関する指導(4) 中間報告 1
- 第23回 卒業論文作成に関する指導(5) 中間報告 2
- 第24回 卒業論文作成に関する指導(6) 修正
- 第25回 卒業論文作成に関する指導(7) 今後の課題
- 第26回 卒業論文要旨の作成(1)
- 第27回 卒業論文要旨の作成(2)
- 第28回 発表とディスカッション(1)
- 第29回 発表とディスカッション(2)
- 第30回 1年間のまとめ

成績評価の方法

到達目標 1～2 を測定するための研究内容 (70%) 授業への参加状況 (30%)
単位の認定は、卒業研究の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

卒業研究演習は、卒業研究のための演習です。そのため、卒業研究と同時に履修してください。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて配付します。

授業のねらい

3年次の保育学研究演習の成果を踏まえ、卒業論文作成に向けてテーマを設定し文献研究・社会調査等に取り組む中で、自らの課題意識及び課題に対する主張を明確にするとともに、研究方法および研究倫理について学ぶことを目的とする。

到達目標

- 1 卒業研究作成に必要な文献、資料収集の方法を理解し実践できる。
- 2 研究テーマを具体的に構成することができる。
- 3 卒業研究論文作成に必要な論理的思考ができる。

授業方法

前半は、各自がテーマに沿って、文献・資料収集・調査等を行い、報告し、全体での討議を重ねる。後半は個別指導が主となる。授業終了時には次回の準備学習を課す（所用時間 60～90 分程度）。また、レポート提出・報告を通し各自の理解度についての確認をする。レポート・報告内容に関しては、その都度コメントする。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション
年間計画の作成
論文の書き方および研究倫理について
- 第2回 研究計画の検討 (1)研究の背景(動機)を検討する
- 第3回 研究計画の検討 (2)研究の目的(成果)を検討する
- 第4回 研究計画の検討 (3)研究テーマ・論文構成(目次)を検討する
- 第5回 研究計画の検討 (4)研究の方法を検討する
- 第6回 先行研究の分析 (1)文献・資料を収集する
- 第7回 先行研究の分析 (2)文献・資料を収集する
- 第8回 先行研究の分析 (3)収集した文献・資料をまとめる
- 第9回 先行研究の分析 (4)収集した文献・資料をまとめる
- 第10回 先行研究の発表 (1)発表(4～5名)
- 第11回 先行研究の発表 (2)発表(4～5名)
- 第12回 調査 (1)調査計画(調査内容、対象者、依頼先、調査時期等)の立案
- 第13回 調査 (2)実施(調査依頼も含む)
- 第14回 調査 (3)分析(調査内容を整理し、データ化する)
- 第15回 調査 (4)分析(調査内容を整理し、データ化する)
- 第16回 後期オリエンテーション
後期計画の確認
調査 (5)まとめ(データの分析を行い、結果をまとめる)
- 第17回 調査 (6)まとめ(データの分析を行い、結果をまとめる)
- 第18回 プレゼンテーション (1)研究の進捗状況を報告する(4～5名)
- 第19回 プレゼンテーション (2)研究の進捗状況を報告する(4～5名)
- 第20回 卒業研究論文作成に関する指導 (1)研究テーマを決定する
- 第21回 卒業研究論文作成に関する指導 (2)論文構成を作成する
- 第22回 卒業研究論文作成に関する指導 (3)先行研究をテーマと関連付けて整理する
- 第23回 卒業研究論文作成に関する指導 (4)図表を作成する
- 第24回 卒業研究論文作成に関する指導 (5)調査結果を解釈する
- 第25回 卒業研究論文作成に関する指導 (6)研究結果を評価し、考察を深める
- 第26回 卒業研究論文作成に関する指導 (7)自分なりの結論・主張を明確にする
- 第27回 卒業研究論文作成に関する指導 (8)今後の課題をまとめる
- 第28回 卒業研究論文要旨作成
- 第29回 卒業研究発表 (1)資料作成
- 第30回 卒業研究発表 (2)発表

成績評価の方法

到達目標 1～3 を測定する研究内容 (70%) 授業への参加状況 (30%)
単位の認定は、卒業研究の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

「卒業研究演習」は、「卒業研究」のための演習です。従って、この2科目は同時に履修しなければなりません。

授業のねらい

この授業は卒業研究を行うために必要な知識や技術を学ぶことを目的としています。したがって、文献検索方法、文献の読み方、調査資料のデータ化、分析の方法、論理的な文章の書き方、論文の構成の仕方などを学びます。また、目的を同じにする仲間と語り合うことを通して、自らの考えを広めたり、深めたりすることの喜びを共有することができればと思います。

到達目標

1. 卒業研究論文に必要な文献や資料の収集の仕方を理解し実践することができる。
2. 各自の立てたテーマに沿って研究の枠組みを構成し、卒業研究論文を完成させることができる。
3. 論理的思考ができる。

授業方法

授業はゼミ形式と個人指導形式を並行して行うこととなります。授業前に行う予習や資料等の準備、授業後に行う復習や資料等の整理は、強い気持ちをもって取り組むことが求められます。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション：年間計画の作成
- 第2回 論文の書き方 「研究倫理」※藤女子大学研究倫理規準
- 第3回 研究計画の検討(1)：各自の関心や動機を検討し明らかにする
- 第4回 研究計画の検討(2)：各自の研究の目的を検討し明らかにする。
- 第5回 研究計画の検討(3)：各自の研究のテーマを検討し論文の構成を考える。
- 第6回 研究計画の検討(4)：各自の研究の方法を検討し明らかにする。
- 第7回 先行研究の分析(1)：文献や資料の収集をする。
- 第8回 先行研究の分析(2)：文献や資料の収集をする。
- 第9回 先行研究の分析(3)：収集した文献や資料をまとめる。
- 第10回 先行研究の分析(4)：収集した文献や資料をまとめる。
- 第11回 調査計画の策定(1)：調査計画を立てる。※調査内容、対象者、依頼先、調査時期
- 第12回 調査計画の策定(2)：アンケート、インタビュー内容の検討
- 第13回 調査の実施と集計(1)：※複数回実施する場合もある
- 第14回 調査の実施と集計(2)：
- 第15回 調査の実施と集計(3)：
- 第16回 研究論文の中間発表(1)：研究の進捗状況の発表
- 第17回 研究論文の中間発表(2)：研究の進捗状況の発表
- 第18回 調査結果の分析とデータ化(1)
- 第19回 調査結果の分析とデータ化(1)
- 第20回 研究論文作成に関わる指導(1)：論文の構成を確定する。
- 第21回 研究論文作成に関わる指導(2)：先行研究との関連を整理する。
- 第22回 研究論文作成に関わる指導(3)：図表やグラフ等を整理する。
- 第23回 研究論文作成に関わる指導(4)：研究の結果を考察する。
- 第24回 研究論文作成に関わる指導(5)：自分なりの結論や主張を明らかにする。
- 第25回 研究論文の提出(1)：12月上旬ゼミ締切
- 第26回 研究論文の修正と完成
- 第27回 研究論文の提出(2)：※12月半ば
- 第28回 研究論文要旨集作成(1)：資料の整理、執筆
- 第29回 研究論文要旨集作成(2)：資料の整理、執筆
- 第30回 卒業研究発表：発表と討議

成績評価の方法

到達目標を測定するために課する課題の内容(50%)と、研究への取り組み状況(50%)で評価します。なお、卒業研究演習の単位認定は、卒業研究の単位認定を前提とします。

履修にあたっての注意

「卒業研究演習」は、「卒業研究」のための演習であるので、この2科目は同時に履修しなければなりません。また、少人数で行うので、自主的・協力的態度で臨んで欲しいと思います。

授業のねらい

この授業では、卒業論文作成に向けて演習を行う。保育学研究演習を踏まえ自分の関心のあるテーマに基づいて、文献研究、調査研究、実践研究などを行う。テーマに対する理解を深め、論理的な考え方、文章の書き方、研究方法、分析の仕方などを学ぶ。

到達目標

- 1、卒業研究論文作成に必要な研究方法を理解し実践できる。
- 2、研究テーマを掘り下げ研究計画を具体的に構成することができる。
- 3、論文作成に必要な論理的思考ができる。

授業方法

報告と発表と、それをもとにしたディスカッションを中心に進める。
授業前は、授業計画に基づいて各自予習・準備をすること（所要時間1時間程度）。
授業後は、復習し理解を深めること（所要時間1時間程度）。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション：卒業論文作成の意義とスケジュールの確認
- 第2回 卒業研究テーマの確認
- 第3回 先行研究の要点整理(1)：テーマに関する先行研究の発表
- 第4回 先行研究の要点整理(2)：テーマに関する先行研究の発表
- 第5回 先行研究の要点整理(3)：テーマに関する先行研究の発表
- 第6回 リサーチクエスチョンの設定
- 第7回 「研究倫理」について－「藤女子大学研究倫理規準」
- 第8回 研究方法(1)：量的研究の方法①－統計的な分析方法の基礎
- 第9回 研究方法(2)：量的研究の方法②－質問調査方法他
- 第10回 研究方法(3)：質的研究の方法①－ケーススタディー
- 第11回 研究方法(4)：質的研究の方法②－ナラティブアプローチ他
- 第12回 研究方法(5)：実験による研究方法
- 第13回 テーマに基づく研究方法の検討
- 第14回 テーマに基づいた研究計画と準備
- 第15回 前期まとめ
- 第16回 後期オリエンテーション
- 第17回 論文執筆の留意点
- 第18回 卒業研究論文作成に関する指導(1)
- 第19回 卒業研究論文作成に関する指導(2)
- 第20回 卒業研究論文作成に関する指導(3)
- 第21回 卒業研究論文の進捗状況の報告(1)
- 第22回 卒業研究論文の進捗状況の報告(2)
- 第23回 卒業研究論文の進捗状況の報告(3)
- 第24回 研究結果の考察(1)：考察の発表とディスカッション
- 第25回 研究結果の考察(2)：考察の発表とディスカッション
- 第26回 研究結果の考察(3)：考察の発表とディスカッション
- 第27回 卒論研究論文要旨の作成(1)
- 第28回 卒論研究論文要旨の作成(2)
- 第29回 卒業研究論文発表会用の資料の作成
- 第30回 卒業研究論文発表会準備

成績評価の方法

到達目標に関わる、研究内容・論文作成・発表（70%）、授業への参加状況（30%）、により評価する。卒業研究演習の単位の認定は、卒業研究の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

「卒業研究演習」は、「卒業研究」のための演習です。そのため、2科目とも履修しなければならない。自主的学習と積極的な参加を期待する。

教科書・参考書に関する備考

教科書・参考書は、必要に応じて随時指示する。

授業のねらい

この授業では、卒業論文執筆に向けて演習を行う。自分の関心のあるテーマに基づいて、文献研究、調査研究、実践研究などを行う。そのことによってテーマに対する理解を深め、論理的な考え方、文章の書き方、研究方法、資料の集め方、分析の仕方などを学ぶことをねらいとする。

到達目標

卒業論文を完成し、発表することができる。

授業方法

報告・発表と、それをもとにした討議を中心に進める。
授業前は、授業計画に基づいて各自予習・準備をすること（所要時間 30 分程度）。
授業後は、復習し理解を深めること（所要時間 30 分程度）。

授業計画

- 第1回 前期オリエンテーション
- 第2回 論文の書き方：研究倫理
- 第3回 論文の書き方：テーマ
- 第4回 論文の書き方：目的
- 第5回 論文の書き方：方法
- 第6回 論文の書き方：結果
- 第7回 論文の書き方：考察
- 第8回 論文の書き方：まとめと文献
- 第9回 文献講読：文献研究
- 第10回 文献講読：質問紙研究
- 第11回 文献講読：観察研究
- 第12回 文献講読：面接研究
- 第13回 文献研究：実験研究
- 第14回 統計処理
- 第15回 先行研究の発表
- 第16回 後期オリエンテーション
- 第17回 中間発表①（4名程度）
- 第18回 中間発表②（4名程度）
- 第19回 文献講読：知的障害
- 第20回 文献講読：自閉症
- 第21回 文献講読：高機能自閉症・アスペルガー症候群
- 第22回 文献講読：学習障害・注意欠陥多動性障害
- 第23回 文献講読：肢体不自由
- 第24回 文献講読：重症心身障害
- 第25回 文献講読：視覚障害
- 第26回 文献講読：聴覚障害・言語障害
- 第27回 文献講読：病弱
- 第28回 卒業研究発表①（4名程度）
- 第29回 卒業研究発表②（4名程度）
- 第30回 まとめ

成績評価の方法

到達目標に関わる、研究内容・論文作成・発表（70%）、授業への参加状況（30%）、により評価する。
卒業研究演習の単位の認定は、卒業研究の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

「卒業研究演習」は、「卒業研究」のための演習です。そのため、2科目とも履修登録してください。
自主的な活動を大切にしながら演習を進めます。

教科書・参考書に関する備考

教科書・参考書は、必要に応じて示します。

授業のねらい

この授業は3年次科目「保育学研究演習」での学びを踏まえ、各自が設定したテーマのもと、卒業研究作成のための様々なスキルを身につけ、計画的な研究活動を行うための演習です。

研究活動を通し、各自が、論理的思考、専門的知識、音楽的感性、演奏スキルなどを習得することをねらいとしています。

到達目標

各自のテーマに沿った思考、技術、知識、表現力などを獲得し、卒業研究を作成することができる。

授業方法

原則的に、学生各自のテーマに応じて個別指導を中心とした授業を進めていきます。そのため、統一した授業計画を示すことは難しいですが、以下に基本的な授業計画を示します。学生各自に教員から課題指示や助言を行いますので、それを基に事前事後学習（計150分程度）を行ってください。

授業計画

〈前期〉

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 卒業研究テーマの再検討
研究倫理について
- 第3回 卒業研究テーマの確認
研究計画作成に向けて
- 第4回 研究計画作成
- 第5回 資料収集（文献などの検索）
- 第6回 資料収集（文献などの収集）
- 第7回 資料作成（予備質問調査用紙などの検討）
- 第8回 資料作成（予備質問調査用紙などの作成）
- 第9回 資料作成（予備質問調査などの実施、検討）
- 第10回 資料作成（質問調査用紙などの検討）
- 第11回 資料作成（質問調査用紙などの作成）
- 第12回 資料作成（質問調査などの実施）
- 第13回 資料作成（質問調査などの検討）
- 第14回 研究計画の再検討（後期に向けて）
- 第15回 前期まとめ

〈後期〉

- 第16回 オリエンテーション
- 第17回 先行研究の検討
- 第18回 先行研究の再検討
- 第19回 引用、参考文献の検討
- 第20回 引用、参考文献の再検討
- 第21回 引用、参考文献の整理
- 第22回 論文のアウトライン作成
- 第23回 本文作成作業（全体の20%）
- 第24回 本文作成作業（全体の40%）
- 第25回 中間報告会
- 第26回 本文作成作業（全体の60%）
- 第27回 本文作成作業（全体の80%）
- 第28回 本文作成作業（仕上げ）
- 第29回 卒業論文の校正及び提出
- 第30回 研究要旨作成作業

成績評価の方法

授業への主体的参加状況（40%）、到達目標測定のための課題への取り組み（60%）により評価します。ただし、単位の認定は卒業研究の単位認定を前提とします。

履修にあたっての注意

「卒業研究演習」は、「卒業研究」のための演習です。従って、この2科目は同時に履修しなければなりません。

しっかりとした研究計画を立て、全体を俯瞰しながら、研究活動を意欲的に行なって下さい。なお、事前事後学習を疎かにし、毎回の課題などに十分に取り組めない場合、単位修得が難しくなります。

教科書・参考書に関する備考

随時、適切な文献・楽譜・音源資料を提示します。

授業のねらい

この授業は、卒業研究を行うために必要とされる知識や技術を学ぶことを目的として行う。文献の検索方法、文献の読み込みの仕方、データ収集・分析の方法、文章の書き方、論文の構成の仕方などを、卒業研究の進捗を見ながら随時学ぶ機会とした。卒業研究のテーマは個々によって違うが、グループでディスカッションを行う等する中で、さまざまな角度から自分の研究テーマを追究する目を養うことを目標とする。

到達目標

1. 自分のテーマに関連した書物・先行研究を読み、まとめることができる
2. データから得た結果を多角的にとらえることができる

授業方法

前半はそれぞれのテーマに関連した文献や先行研究の読み込み、研究課題・研究方法に関してグループディスカッションを取り入れながら深めていく。後半は、それぞれの研究を進めていくための演習を行う。卒業研究と連動する科目のため、各自のテーマと卒業研究の進行状況に沿った課題を毎回課す。

毎回課した課題については、その都度指導を行う。

授業計画

- 第1回 卒業論文作成の流れと研究倫理に関する説明
- 第2回 文献のまとめ方
- 第3回 先行研究の検索と読み込み(1)：テーマに関する先行研究の発表（3名ほど）
- 第4回 先行研究の検索と読み込み(2)：テーマに関する先行研究の発表（3名ほど）
- 第5回 先行研究の検索と読み込み(3)：テーマに関する先行研究の発表（3名ほど）
- 第6回 先行研究のまとめ方
- 第7回 研究課題の絞り込み
「研究倫理」について－「藤女子大学研究倫理規準」とは
- 第8回 研究方法(1)：量的研究方法について
- 第9回 研究方法(2)：質的研究法について
- 第10回 テーマに基づく研究方法の検討
- 第11回 質問紙調査用紙の作成方法
- 第12回 インタビュー調査の方法
- 第13回 テーマに基づいた調査の準備
- 第14回 データ処理の方法(1)：エクセルへの入力
- 第15回 データ処理の方法(2)：エクセルでの計算
- 第16回 論文執筆の留意点
- 第17回 調査結果の整理(1)：全体の傾向
- 第18回 調査結果の整理(2)：研究課題に対する分析方法の検討
- 第19回 調査結果の整理(3)：研究課題に対する分析
- 第20回 調査結果の整理(4)：研究課題に対する分析のまとめ
- 第21回 研究結果の要旨作成
- 第22回 調査結果中間発表(1)：量的調査
- 第23回 調査結果中間発表(2)：質的調査
- 第24回 論文執筆の際の留意事項
- 第25回 研究結果の考察(1)：考察の発表とディスカッション
- 第26回 研究結果の考察(2)：考察の発表とディスカッション
- 第27回 卒論要旨作成の方法
- 第28回 卒論発表会用スライドの作成方法
- 第29回 卒論発表会の練習
- 第30回 要旨の作成、卒論発表会準備

成績評価の方法

到達目標を測定するために、毎回課する課題の内容（50%）と研究への取り組み状況（50%）で評価する。なお、卒業研究演習の単位の認定は、卒業研究の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

「卒業研究演習」は、「卒業研究」のための演習であるので、この2科目は同時に履修しなければならない。少人数で行うので、自主的・積極的態で臨んで欲しい。

授業のねらい

この授業では、卒業研究を行うために必要とされる知識や技術を学ぶことが目的である。文献の探し方・読み方、データ収集・分析方法、理論的な文章の書き方、論文の構成の仕方などをメンバーと共に学ぶ。各メンバーのテーマについてディスカッションを行いながら、自分のテーマについて研究していく。

到達目標

この授業では下記の力を身につけることを目標とする。

- (1)自分のテーマに関連した書物・先行研究を読み、まとめることができるようになる
- (2)収集したデータを科学的に分析し、結果を客観的にとらえることができる
- (3)自らの研究テーマや取組について分かりやすく説明することができる

授業方法

前半は、各自のテーマに関連した文献や先行研究を読み、要点について発表を行う。後半は、それぞれの研究を進めていくための演習を行う。卒業研究と連動する科目のため、各自のテーマと卒論進行状況に沿った課題を毎回課す。

授業計画

- 第1回 卒業論文作成の意義とスケジュールの確認
- 第2回 文献の検索方法とまとめ方
- 第3回 先行研究の要点整理(1)：テーマに関する先行研究の発表
- 第4回 先行研究の要点整理(2)：テーマに関する先行研究の発表
- 第5回 先行研究の要点整理(3)：テーマに関する先行研究の発表
- 第6回 リサーチクエスチョンの設定
- 第7回 研究倫理について
- 第8回 研究方法(1)：量的研究方法について
- 第9回 研究方法(2)：質的研究法について
- 第10回 テーマに基づく研究方法の検討
- 第11回 質問紙調査用紙の作成方法
- 第12回 インタビュー調査の方法
- 第13回 テーマに基づいた調査の計画と準備
- 第14回 データ処理の方法(1)：データ入力と整理
- 第15回 データ処理の方法(2)：データ解析
- 第16回 論文執筆の留意点
- 第17回 調査結果の整理(1)：全体の傾向
- 第18回 調査結果の整理(2)：研究課題に対する分析方法の検討
- 第19回 調査結果の整理(3)：研究課題に対する分析
- 第20回 調査結果の整理(4)：研究課題に対する分析のまとめ
- 第21回 研究結果の要旨作成
- 第22回 調査結果中間発表(1)：量的調査
- 第23回 調査結果中間発表(2)：質的調査
- 第24回 論文執筆の際の留意事項
- 第25回 研究結果の考察(1)：考察の発表とディスカッション
- 第26回 研究結果の考察(2)：考察の発表とディスカッション
- 第27回 卒論要旨作成の方法
- 第28回 卒論発表会用スライドの作成方法
- 第29回 卒論発表会の練習
- 第30回 要旨の作成、卒論発表会準備

成績評価の方法

到達目標を測定するために、課題の内容（50%）と研究への取り組み状況（50%）で評価する。
なお、卒業研究演習の単位の認定は、卒業研究の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

「卒業研究演習」は、「卒業研究」のための演習であるので、この2科目は同時に履修しなければならない。
少人数で行うので、自主的・積極的態度で臨んで欲しい。

授業のねらい

卒業研究を行うために必要とされる知識や技術を学ぶことが目的とする。このために、問題意識、文献検索の方法、調査法（分析）、論文構成、論文作成等を、発表とディスカッションを通して、個々の研究目的を達成するための演習を行う。

到達目標

- (1)自分で設定した研究課題に即して、計画性をもって、研究を進めることができる。
- (2)発表やディスカッションを通して、論理的思考を深めることができる。
- (3)研究成果として、卒業論文を作成することができる。

授業方法

原則的に、各自の研究テーマに即して個別指導を中心とした授業を進める。

前半は、問題意識を確立し、必要な文献を収集し、発表とディスカッションを通して、科学論文の理解を深める。

後半は、研究計画（方法）に即して、データ収集、分析を行い、発表とディスカッションを通して、卒業論文を作成する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、研究の進め方（学習過程）、研究倫理
- 第2回 問題意識の形成、複数論文の相互関係の理解
- 第3回 問題意識の形成、複数論文の相互関係の理解
- 第4回 問題意識の形成、複数論文の相互関係の理解
- 第5回 「はじめに」「対象と方法」「結果」「考察」「結論」部分の概念化
- 第6回 「はじめに」「対象と方法」「結果」「考察」「結論」部分の概念化
- 第7回 論文作成までの運営計画
- 第8回 調査（実験等）計画の立案・推敲
- 第9回 調査（実験等）実施のための依頼と調整
- 第10回 調査（実験等）実施のための周到な準備・実施
- 第11回 結果の記録化
- 第12回 結果の集計法・分析法
- 第13回 結果の集計法・分析法
- 第14回 結果の概括、事実の抽出
- 第15回 結果の文章化（表・グラフの作成）
- 第16回 結果の文章化（表・グラフの作成）
- 第17回 結果の構成・推敲
- 第18回 先行論文の読みなおし（問題意識の概念化、引用部分の抜き書き、研究結果との関連性（整合性）の検討）
- 第19回 先行論文の読みなおし（問題意識の概念化、引用部分の抜き書き、研究結果との関連性（整合性）の検討）
- 第20回 はじめに、考察の文章化
- 第21回 はじめに、考察の文章化
- 第22回 日本語としての文章の推敲、論理構成の推敲
- 第23回 日本語としての文章の推敲、論理構成の推敲
- 第24回 日本語としての文章の推敲、論理構成の推敲
- 第25回 結論の抽出
- 第26回 結論の抽出
- 第27回 論文要旨の作成
- 第28回 論文要旨発表法の構成（パワーポイント、発表原稿作成）
- 第29回 論文要旨発表法の構成（パワーポイント、発表原稿作成）
- 第30回 論文要旨の発表、質疑応答

成績評価の方法

到達目標に即して、研究への取組状況、研究成果で評価する。

なお、卒業研究演習の単位認定は、卒業研究の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

「卒業研究演習」は、「卒業研究」のための演習です。従って、この2科目は同時に履修しなければなりません。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて、研究論文・文献を紹介したり、会計資料を配付する。

授業のねらい

卒業研究では、自分の関心のある研究テーマについて、先行研究を整理し、その問題点を指摘し、調査を行うなどして独自の視点から考察して論文にまとめていきます。このような論文の執筆を通して、読解力・文章表現力・問題点を見出す能力・適切な調査方法や分析方法を選択する能力・分かりやすい文章や図表を作成する能力を高めることが卒業研究の目的です。

到達目標

1. 自分の研究テーマに関連する先行研究について、問題点を指摘しながら概要を説明できること
2. 先行研究に基づき、かつ、独自性のある論文を執筆できること

授業方法

個別指導が中心となります。演習前には、自分が設定した次回までの目標を達成できるよう、研究を進めておくことが求められます。また、演習後には、指摘された問題点を修正しておくことが必要です。

授業計画

- 1～7：文献研究（調査を実施しない場合は1～22まで）
- ・先行研究のまとめ
 - ・問題と目的の設定
- 8～16：調査の実施
- ・調査内容の計画
 - ・質問紙などの準備
 - ・データの入力
- 17～22：データの分析
- ・分析方法の検討
 - ・分析の実施
- 23～30：考察と卒業研究要旨集の原稿作成
- ・考察
 - ・図表の作成
 - ・卒業研究要旨集の原稿作成

成績評価の方法

卒業論文の内容について、到達目標1・2の達成度（100%）という観点から評価します。ただし、単位の認定は、卒業研究演習の単位認定を前提とします。

履修にあたっての注意

上記の日程は、平均的な進め方を示したものです。長期的な調査や複数時点での調査を行う場合や特別支援学校での実習がある場合は、上記とは異なる進め方になります。自分の用いる調査方法や実習の有無を考慮し、先を見通して準備するようにしてください。なお、特別な事情のない限り、調査は前期中に行うようにしてください。また、卒業研究を選択する場合は、卒業研究演習も同時に履修してください。

教科書

日本心理学会『執筆・投稿の手びき（2015年改定版）』（社団法人日本心理学会、2015）

授業のねらい

4年間の実習や学びの集大成として、自分の興味関心を深め、必要な調査や統計処理も実践しながらひとつの課題を追求し、論文や作品として集約することが卒業研究である。この授業では研究のテーマを定め、文献検索、資料集め、研究方法の検討をし、卒業研究の基本的な作業を各自実践する。中間発表において要旨作成、発表をし、ディスカッションなどを通して研究の方向性を再検討したり、研究の面白さや難しさを経験することとなる。問題意識を持ち、その解決のためにどのような方法があるのかを実践しながら学び、課題解決の力や他者に理解されるような表現力等を身につけることを目的とする。

到達目標

- 1 卒業研究作成
- 2 論理性、論旨の明確さ、的確な手法と表現力の習得。

授業方法

各自の個別研究が中心で、適宜、発表・ディスカッションなどを通して研究の方向性を再検討しながら、研究を構築する。授業計画は研究の方向性であって、必ずしもこの順番では進まない。

授業内で行えることは一部であり、卒業研究のための一連の作業・研究等は事前・事後学習となる。計画的に進めること。

授業計画

- 1 はじめに
- 2 研究テーマについて：素朴な疑問と研究の方向性
- 3 先行研究調査(1)：文献検索と資料集め
- 4 先行研究調査(2)：そのほかの情報収集方法・フィールドワーク
- 5 先行研究調査(3)：文献要約と理解
- 6 文献の要約と理解(1)：要旨作成
- 7 文献の要約と理解(2)：発表とディスカッション
- 8 研究テーマの絞込み(1)：仮説と研究方法・研究計画
- 9 研究テーマの絞込み(2)：調査方法と統計処理
- 10 プレ調査(1)：質問紙作成と統計処理の実際
- 11 プレ調査(2)：結果と考察
- 12 中間発表会(1)：要旨発表・グループディスカッション
- 13 中間発表会(2)：要旨発表・グループディスカッション
- 14 研究方法の反省点と新たな研究課題
- 15 文献の批判的理解と多角的視点
- 16 課題研究(1)：先行研究と研究テーマ
- 17 課題研究(2)：研究倫理の重要性「藤女子大学研究倫理基準」の内容を知る
- 18 課題研究(3)：実践と個別指導
- 19 課題研究(4)：実践と個別指導
- 20 課題研究(5)：実践と個別指導
- 21 課題研究(6)：実践と個別指導
- 22 課題研究(7)：要旨発表・グループディスカッション
- 23 課題研究(8)：要旨発表・グループディスカッション
- 24 課題研究(9)：仮説と研究計画・研究方法の修正と再検討
- 25 課題研究(10)：新たな情報収集
- 26 課題研究(11)：情報収集で明らかになったこと
- 27 課題研究(12)：結果と考察
- 28 課題研究(13)：反省点と新たな研究課題
- 29 課題研究(14)：多角的視点の必要性と今後の展望
- 30 課題研究(15)：おわりに

成績評価の方法

到達目標 1～2 共に、論文（100%）で評価する。単位の認定は、卒業研究演習の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

基本的に個別指導が中心であるが、卒業研究演習と連動しながら研究を進める。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて随時示します。

授業のねらい

卒業研究は、「論文」と「制作」がある。

各自のテーマをいかに追求し、考察を加えるかが大切であり、時間をかけ、文献の読み込みなどを積み重ねることをねらいとする。従って、慎重にテーマを選ぶことも大切である。

卒業制作は、卒業論文に相当する作品の質と量が要求される。保育学科の卒業制作であることが大前提であり、完成までの積み上げを重要とする。

到達目標

自分が選んだテーマに沿って、調査、研究を加え、論を積み重ねていくことができるようになることを目標とする。

特に卒業制作を選択した場合は、さらに計画的に進めていくことが重要となることを承知しておくこと。

授業方法

前期：卒業研究演習の時間で各自の内容につき、各自が検討を加え、時には図書館、時にはお互い意見を交わす等とする。

後期：各自曜日時間を決め調査・検討した内容を担当教員と話し合っていく。1週間の結果を出すための自覚時間は60分程度とする。

授業計画

- 4月 オリエンテーションを含め、卒業研究に対する取り決め
各自のテーマ検討・決定、研究倫理の説明
- 5月 先行研究・文献検索
- 6月 卒業研究の構想（アンケートの必要性など）
- 7月 文献における研究・読み込み
- 8月 アンケート調査
- 9月 アンケート調査からの読み込み
- 10～11月 論文書き込み
- 12月 提出
- 1月 卒論発表会

成績評価の方法

テーマの探求、計画性（30%）、完成度（70%）。単位認定は、卒業研究演習の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

卒業研究演習と同時進行していくことが、論文作成は個人指導になるので、計画的に進めていけるように、各自注意すること。

卒業制作の場合、材料などは自己負担である。

授業のねらい

これまで演習等で学んだことを踏まえ、自らの興味関心に基づくテーマを設定し、立案した研究計画に沿って卒業研究を作成することがねらいです。そのために、研究を行うための知識や技能を習得するとともに、研究方法を理解し考察することが求められます。

到達目標

自らテーマを設定し卒業論文を執筆することができる。

授業方法

卒業研究演習と連動させ、個別指導を中心に行いますが、グループでの発表やディスカッションを行うこともあります。

授業計画

- 1～7 ガイダンス
研究倫理について
研究計画の作成について（動機、目的、構成等）
- 8～10 先行研究の調査分析（収集、まとめ）
- 11～15 調査の計画、調査の実際
- 16～18 調査のまとめ
- 19～25 卒業論文の作成
中間報告
- 26～27 卒業論文の要旨作成
- 28～30 卒業論文の発表とディスカッション まとめ

成績評価の方法

論文の内容、発表（70%） 授業への参加状況（30%）
卒業研究の単位認定は卒業研究演習の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

卒業研究演習と連動させながら進めます。

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて配付します。

授業のねらい

3年次の保育学研究演習を踏まえ、学生個々の関心に基づくテーマを自ら設定し、研究計画を立て、調査・文献検索等を行い、卒業研究を作成することを目的とする。また卒業研究作成に必要な基礎的知識と技術を習得し、研究方法の理解を深めることを目指す。

到達目標

- 1 研究テーマに対する自分の考えを主張することができる。
- 2 卒業研究作成に必要な基礎的知識と技術を習得し、論文としてまとめることができる

授業方法

卒業研究演習と連動させながら、個別指導を中心に進める。

授業計画

- | | |
|-------|--------------------------------|
| 1～5 | 研究倫理について
研究計画（目的・方法・構成等）の検討 |
| 6～11 | 先行研究の取集・検討 |
| 12～15 | 調査の計画・実施・分析 |
| 16～19 | 調査結果の検討・まとめ
中間報告 |
| 20～27 | 論文執筆 |
| 28～30 | 研究のまとめ |

成績評価の方法

到達目標 1～2 を測定する論文内容（100%）
単位の認定は、卒業研究演習の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

計画的な取り組みを期待します。

授業のねらい

卒業研究演習での学びを踏まえ、自らの関心に基づくテーマを設定し、卒業研究論文の完成を目指します。そのために、研究計画を練り、それをもとに文献の検索、先行研究の調査、様々な調査活動などを行います。一連の研究活動を通して、論理的思考力、文章執筆力を身に付けることをねらいとします。

到達目標

1. 研究テーマに沿って自分の考えを主張することができる。
2. 卒業研究を作成していくための基礎的な知識と技術を習得し、論文としてまとめることができる。

授業方法

授業の方法は個別の指導が多くなると思いますが、ゼミ全体で交流をしたり、少人数で討議をしながら考えを深めたりする場合もあります。

授業計画

- 第1回 オリエンテーションと卒業研究の進め方
- 第2回 論文の書き方 「研究倫理」について ※藤女子大学研究倫理規準
- 第3回 研究計画の検討(1)
- 第4回 研究計画の検討(2)
- 第5回 研究計画の検討(3)
- 第6回 研究計画の検討(4)
- 第7回 先行研究の収集と分析(1)
- 第8回 先行研究の収集と分析(2)
- 第9回 先行研究の収集と分析(3)
- 第10回 先行研究の収集と分析(4)
- 第11回 調査計画の策定(1)
- 第12回 調査計画の策定(2)
- 第13回 調査計画の実施と集計(1)
- 第14回 調査計画の実施と集計(2)
- 第15回 調査計画の実施と集計(3)
- 第16回 中間発表会(1)
- 第17回 中間発表会(2)
- 第18回 調査結果の分析とデータ化(1)
- 第19回 調査結果の分析とデータ化(2)
- 第20回 執筆計画の作成 ※完成までの見通しを持つ
- 第21回 論文の執筆(1)
- 第21回 論文の執筆(1)
- 第22回 論文の執筆(1)
- 第23回 論文の執筆(1)
- 第24回 論文の執筆(1)
- 第25回 論文の提出(1) ※ゼミ内締切 12月上旬
- 第26回 論文の修正と完成
- 第27回 論文の提出(2) ※12月半ば
- 第28回 論文の要旨作成(1)
- 第29回 論文の要旨作成(2)
- 第30回 卒業研究論文発表会 ※1月末

成績評価の方法

到達目標1・2の達成度という観点で論文の内容を評価します。(100%) なお、単位の認定は卒業研究演習の単位認定を前提とします。

履修にあたっての注意

卒業研究演習と同時進行していきます。見通しを持って自主的に臨む姿勢を大切にしていきたい。

授業のねらい

自分の関心のあるテーマを設定し、卒業論文としてまとめる。テーマに基づいて研究計画を立て、文献研究、調査研究、実践研究などを通してテーマに対する理解を深め、論理的な考え方、文章の書き方、研究方法、資料の集め方、分析の仕方、発表の方法などを学ぶことをねらいとする。

到達目標

- 1、専門的な知識を深める
- 2、研究テーマに対する自分の考えを組み立て主張することができる。
- 3、卒業研究作成に必要な基礎的知識と技術を習得し、論文としてまとめることができる

授業方法

卒業研究演習と連動させながら、個別指導を中心に進める。

授業計画

- 1 オリエンテーション
- 2～6 研究テーマの設定
先行研究・参考文献の収集・検討
- 7～15 研究テーマの絞り込み
研究方法の検討・決定
- 16～20 調査・実践
参考文献の検討・分析
- 21～26 結果の分析・考察・論文執筆
- 27～30 研究のまとめ

成績評価の方法

到達目標 1～3 を測定する論文内容（100%）により評価する。
単位の認定は、卒業研究演習の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

個別指導が中心となる。自主的積極的な取り組みを期待する。

教科書・参考書に関する備考

教科書・参考書は、必要に応じて随時指示する。

授業のねらい

これまでの演習等で学んだことから、自分の関心のあるテーマを設定し、卒業論文としてまとめる。テーマに基づいて研究計画を立て、文献研究、調査研究、実践研究などを通してテーマに対する理解を深め、論理的な考え方、文章の書き方、研究方法、資料の集め方、分析の仕方などを学ぶことをねらいとする。

到達目標

卒業論文を完成し、発表することができる。

授業方法

個別指導を中心に進める。
授業前は、授業計画に基づいて各自準備をすること。
授業後は、指導内容を踏まえて理解を深めること。

授業計画

- 1 オリエンテーション
- 2～5 研究テーマの設定
先行研究・参考文献の収集・検討
- 6～10 研究テーマの絞り込み
研究方法の検討・決定
- 11～15 調査・実践
- 16～20 調査・実践
参考文献の検討・分析
- 21～25 結果の分析・考察・論文執筆
- 26～30 研究のまとめ

成績評価の方法

研究内容・論文作成・発表（70%）、授業への参加状況（30%）により評価する。
単位の認定は、卒業研究演習の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

個別指導が中心となります。上記の日程は一般的な目安です。

教科書・参考書に関する備考

教科書・参考書は、必要に応じて示します。

授業のねらい

各自が「保育学研究演習」及び「卒業研究演習」で選定した研究テーマに基づき、計画的な研究活動を通して論理的思考、専門的知識、音楽的感性、演奏スキルなどを用いて卒業研究を作成することをねらいとします。

なお、卒業研究は「論文」、「演奏」のいずれかとなります。「演奏」を希望する者は、「論文」に相当する質が求められます。

到達目標

各自、十分な準備を基に行った研究結果を示すことができる。

授業方法

各自、教員の指導により研究、執筆する。なお、個別指導が主となる為、以下の大まかな内容で進めていきます。学生各自に教員から課題指示、助言を行いますので、それを基に事前事後学習（計 150 分程度）を行ってください。

授業計画

(前期)

- ・卒業論文及び演奏テーマの確認、再検討
- ・卒業論文及び演奏テーマに関する先行研究・参考文献の収集、検討
- ・調査資料の作成、実施、集計
- ・卒業論文のアウトライン作成
- ・中間報告会
- ・研究倫理について

(後期)

- ・論文執筆作業
- ・演奏準備
- ・演奏発表（録音）及び小論文作成
- ・卒業研究論文完成（提出期限は 12 月 15 日）
- ・卒論要旨集の作成

成績評価の方法

到達目標を測定するために提出された卒業研究内容（100%）

ただし、単位の認定は、「卒業研究演習」の単位認定を前提とします。

履修にあたっての注意

「卒業研究」は「卒業研究演習」と関連のある科目です。従って、この 2 科目は同時に履修しなければなりません。しっかりとした研究計画を立て、全体を俯瞰しながら、研究活動を意欲的に行なって下さい。

教科書・参考書に関する備考

随時、各学生に適した文献、楽譜、音源資料を提示する。

授業のねらい

研究テーマを各受講生がそれぞれの興味に応じて選択し、そのテーマに基づき、調査、研究を行い、論文にまとめる。論文作成を通して、物事を理論的、多面的に捉える力、正しい文章を書く力、人に伝わる文章の組み立てができる力などを養うことを目標とする。

到達目標

1. 研究テーマに関連した文献を読み、まとめることができる
2. 研究によって得たデータを多角的に分析することができる
3. 論旨の通った文章を書くことができる

授業方法

卒業研究演習と連動し、卒業論文を適宜作成していく。

授業計画

- 1 前半は基本的には全員参加のセミナー形式をとる
- 2 研究テーマは、各受講生の興味関心をもとに選定する
- 3 以下を目安に授業を展開する
 - (1)オリエンテーション・研究倫理について
 - (2)研究課題の絞込み・研究方法の決定（5月中旬まで）
 - (3)調査準備・調査・文献の読み込み（5月中旬～9月中旬）
 - (4)結果分析（9月～10月）
 - (5)結果についての中間発表（10月下旬）
 - (6)論文執筆（11月）
 - (7)論文提出（12月）
 - (8)卒業研究発表会（2月）

成績評価の方法

卒業論文の内容（80%）と研究への取り組み状況（20%）で評価する。なお、単位の認定は、卒業研究演習の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

自分の興味・関心に基づいたテーマで研究を行っていくので、どのような方向性をもって論文作成に当たりたいのか、自主的に考える姿勢をもって臨んで欲しい。

授業のねらい

研究テーマを各受講生がそれぞれの興味に応じて選択し、そのテーマに基づいた調査を実施し、論文にまとめる。論文作成を通して、保育や教育についてを科学的・理論的に考える力や人に伝える力を養うことを授業の狙いとする。

到達目標

各自が卒業論文を完成させることを目標とする。

授業方法

卒業研究演習と連動した形で展開する。

授業計画

- 1 前半は基本的には全員参加のセミナー形式をとる
- 2 研究テーマは、各受講生の興味関心をもとに選定する
- 3 以下を目安に授業を展開する
 - (1)オリエンテーション・研究倫理について
 - (2)研究テーマの絞込み・研究方法の決定（5月中旬まで）
 - (3)調査準備・調査・文献の読み込み（5月中旬～9月中旬）
 - (4)結果分析（9月～10月）
 - (5)結果についての中間発表（10月下旬）
 - (6)論文執筆（11月）
 - (7)論文提出（12月）
 - (8)卒業研究発表会（2月）

成績評価の方法

卒業論文の内容（80%）と研究への取り組み状況（20%）で評価する。なお、単位の認定は、卒業研究演習の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

自分の興味・関心に基づいたテーマで研究を行っていくので、どのような方向性をもって論文作成に当たりたいのか、自主的に考える姿勢をもって臨んで欲しい。

授業のねらい

卒業研究を行うために必要とされる知識や技術を学ぶことが目的とする。このために、問題意識、文献検索の方法、調査法（分析）、論文構成、論文作成等を、発表とディスカッションを通して、個々の研究目的を達成するための演習を行う。

到達目標

- (1)卒業研究作成に必要な見識を習得し、論文としてまとめることができる。
- (2)卒業論文を完成し、発表することができる。

授業方法

卒業研究演習と連動させながら、個別指導を中心に進める。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、研究の進め方（学習過程）、研究倫理
- 第2回～第5回 問題意識・目的の形成、構成の検討
- 第6回～第10回 「はじめに」「対象と方法」「結果」「考察」「結論」部分の概念化、調査（実験等）計画の立案・推敲
- 第11回～第15回 結果の記録化、分析法の検討
- 第16回～第19回 中間報告、調査結果の検討・まとめ
- 第20回～第27回 論文執筆（日本語としての文章の推敲、論理構成の推敲）
- 第28回～第30回 研究のまとめ

成績評価の方法

論文の内容（100%）
単位の認定は、卒業研究演習の単位認定を前提とする。

履修にあたっての注意

研究遂行に向けて、個々の自主性・主体性を重視する。

教科書・参考書に関する備考

適宜、関係の研究論文・文献を紹介し、配付する。

教 職 課 程

教職課程（教職に関する科目など）

1 教育職員免許状を取得するためのカリキュラムの概要

教育職員免許状（教員免許と略すこととします）を取得するためには、学生便覧の「教職課程履修要項」に従って免許状取得に必要な単位を修得しなければなりません。ここでは、人間生活学科に係る中等教育および食物栄養学科に係る栄養教育に関して、その概要を説明します。保育学科に係る幼稚園教育および特別支援教育については、学生便覧の「教職課程履修要項」の部分とこの履修ガイドの保育学科の部分を参照してください。

教員免許を取得するために必要な科目は、大きく分けて4つに分かれます。

まず一つめは「施行規則 66 条の 6 に定める科目（省令科目）」と呼ばれるもので、免許の種類や学校種・教科種に関わらず、修得しなければいけない科目です。免許法では4つに区分されており、「日本国憲法」「体育」「外国語コミュニケーション」「情報機器の操作」となります。これに対応する科目が、大学共通科目の科目として配置されています。

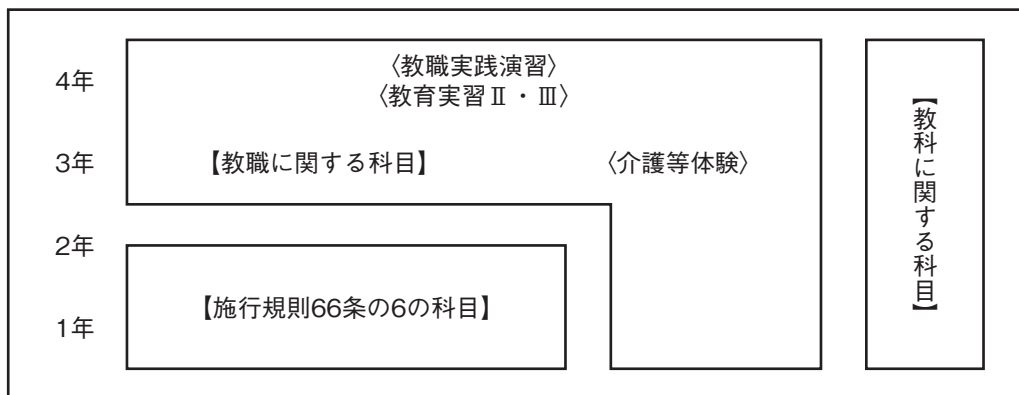
続いて中等教育に関しては「教科に関する科目」、栄養教育に関しては「栄養に係る教育に関する科目」と呼ばれるものです。たとえば、人間生活学科の学生で家庭科の教員になりたければ家庭科の内容を、福祉科の教員になりたければ福祉科の内容を学ばなければなりません。また食物栄養学科の学生で栄養教諭になりたければ、栄養教育に関する内容を学ばなければなりません。すなわち、教諭の種類や学校種・教科種によってそれぞれ違いがあり、本学では「教科に関する科目」は人間生活学科の「専門科目」に、「栄養に係る教育に関する科目」は食物栄養学科の「専門科目」に含まれています。

さらに「教職に関する科目」と呼ばれるものもあります。これも教諭の種類や学校種・教科種によって若干の違いがあります。「教育とはどういうものか」「学校とはどういうものか」「児童生徒の心理はどういうものか」といった理論的な内容から、授業をどのように行えばよいかという「教科教育法」「道徳教育」、さらに、実際の学校で自らが授業を行う「教育実習」などの様々な授業があります。教育実習の名称は、人間生活学科では「教育実習Ⅱ・Ⅲ」といい、4年次に行います。食物栄養学科では「栄養教育実習Ⅱ」といい、3年次に行います。両学科ともに、4年次には、これら大学生活で学んできたものを最終的に総括するために「教職実践演習」を履修することになります。

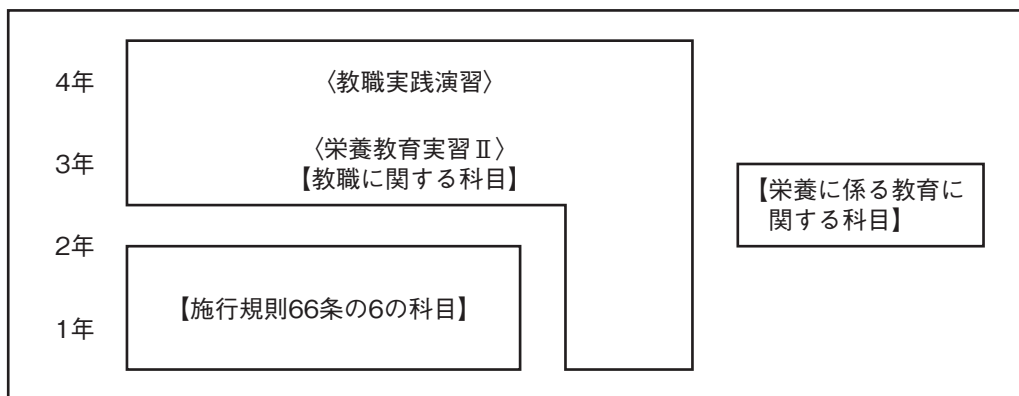
最後に「教科又は教職に関する科目」と呼ばれるものです。これは「教科に関する科目」と「教職に関する科目」と合わせたものとともに、「介護等体験」という科目が入ります。「介護等体験」は、中学校の免許が必要な学生のみが取得することになります。また、人間生活学科の学生は、「発達と心理」（2年後期）がこれに該当します。

これら4種の科目を、1年次から4年次までに少しずつ積み上げて修得していく必要があるのです。それを教諭の種類に応じて図示したのが、図1-1(人間生活学科)、図1-2(食物栄養学科)となります。

【図1-1 教職課程(人間生活学科) 受講の流れ①】



【図1-2 教職課程(食物栄養学科) 受講の流れ①】



2 人間生活学部の「教科に関する科目」履修の流れ

(1) 人間生活学部で修得できる教育職員免許状

人間生活学部で取得できる教育職員免許状の種類は学科ごとに違います。各学科で学修する内容にもとづいて取得できる免許状は決まっているわけです。ですから、逆に言えば、自分の学科以外の免許状を取得することはできないということです。また、各学科で勉強する内容にもとづいているために、「教科に関する科目」などは、各学科の専門科目に含みこまれる形で開講されています(前述)。食物栄養学科に関係する「栄養に係る教育に関する科目」は3において、保育学科に関係する「教科に関する科目」は保育学科全体の説明の部分において記されていますので、ここでは、人間生活学科の「家庭科」「福祉科」の免許取得のための「教科に関する科目」について説明します。

(2) 人間生活学科

人間生活学科で取得できる免許状は、中学校・高等学校家庭、高等学校福祉の三種類です。中学校と高等学校の家庭の「教科に関する科目」は重複しているものが多いです。また、高等学校福祉の「教科に関する科目」は、教員免許ではありませんが、社会福祉士の受験資格と重複しています。

1) 中学校・高等学校家庭

中学校家庭は、免許を取得するための科目区分が「家庭経営学」「被服学」「食物学」「住居学」「保育学」の5つに分かれています。高等学校家庭は、これに「家庭電気機械及び情報処理」が加わり、科目区分は6つとなります。それぞれの科目区分には必ず履修し、単位を修得しなければならない必修科目があります。

以下にそれぞれの科目区分の必修科目に対応する人間生活学科の科目を書きます。科目名の後の（ ）内は開講学年と開講学期です。大学の講義は開講学年・学期が決まっていますが、その上位の学年でも修得することができます。しかしなるべく早めに修得することが大切です。

その必修科目は、家庭経営学では「現代の生活経営」（1年後期）、被服学では「現代衣生活論」（1年前期）「衣造形実習」（2年前期）、食物学では「食品の成分と機能」、「食べ物の材料学」（2年前期）「食生活と栄養」（2年後期）「調理学実習」（2年後期）、住居学では「現代住生活論」（1年後期）「住居計画」（2年前期）、保育学では「子どもの発達と保育」（3年前期）、家庭電気機械及び情報処理では「生活技術」（3年前期）「情報処理」（1年前期）となります。学年ごとにみると、1年後期から2年生にかけて集中的にこれらの科目を履修する必要があることとなります。

これらをすべて修得すると22単位（中学校のみの場合は18単位）となります。「教科に関する科目」は免許ごとに最低20単位以上を修得しなければなりません。中学校家庭の場合は、これらに加え2単位を修得しなければなりません。また、高等学校家庭は、2単位上回っています。しかし、それ以外にも、選択科目が配置されています（選択科目の一覧は『学生便覧』の「教職課程履修要項」にあります）ので、積極的に履修することがのぞましいでしょう。そのうえで、「教職に関する科目」などと合わせて最終的に59単位以上を修得する必要があります。

2) 高等学校福祉

高等学校福祉は、免許を取得するための科目区分が「社会福祉学」「高齢者福祉、児童福祉及び障害者福祉」「社会福祉援助技術」「介護理論及び介護技術」「社会福祉総合実習」「人体構造及び日常生活行動に関する理解」「加齢及び障害に関する理解」の7つです。それぞれの科目区分には必ず履修し、単位を修得しなければならない必修科目があります。

以下にそれぞれの科目区分の必修科目に対応する人間生活学科の科目を書きます。科目名の後の（ ）内は開講学年と開講学期です。大学の講義は開講学年・学期が決まっていますが、その上位の学年でも修得することができます。しかしなるべく早めに修得することが大切です。

その必修科目は、社会福祉学では「社会福祉論」（1年前期）、高齢者福祉、児童福祉及び障害者福祉では「高齢者福祉論」（1年後期）「子どもと福祉」（1年後期）「障害者福祉論」（2年前期）、社会福祉援助技術では「ソーシャルワーク論Ⅰ」（1年前期）、介護理論及び介護技術では「介護福祉論」（3年後期）、社会福祉総合実習では「ソーシャルワーク実習Ⅰ」（2年前後期）、人体構造及び日常生活行動に関する理解では「日常生活活動」（2年後期）、加齢及び障害に関する理解では「加齢と障害」（2年後期）となります。

これらをすべて修得すると15単位となります。「教科に関する科目」は免許ごとに最低20単位以上を修得しなければなりません。そのため、高等学校福祉の場合は、これらに加え5単位を修得しなければなりません。しかし、それ以外にも、選択科目が配置されています（選択科目の一覧は『学生便覧』の「教職課程履修要項」にあります）ので、積極的に履修することがのぞましいでしょう。そのうえで、「教職に関する科目」などと合わせて最終的に59単位以上を修得する必要があります。

3 人間生活学部の「教職に関する科目」履修の流れ

それでは具体的に、「教職に関する科目」の1年次から4年次までの開設の配置状況を見てみます。これは、学生が履修していく流れ（モデル）ともなっています。「中等教育」と「栄養教育」では単位数や配置状況が若干異なりますので、分けて示します。

(1) 中等教育

(1年次)

前期の「教師論」が入門科目として配置されています。「教師とは」ということを中心に学びます。後期には「教育課程研究」があり、「学校で教えるとは」「カリキュラムとは何か」といった点について大まかに学びます。

(2年次)

「教育原理」「教育制度論」「教育心理学Ⅰ・Ⅱ」といった理論系の科目が配置されています。1年次よりも学問的に教育について考察します。また一方で、2年後期から家庭科についての教科教育法が置かれ（4年前期まで）、家庭科の意義や位置づけ、その教育方法について学びます。

(3年次)

「道徳教育」「特別活動」や、具体的な教育指導に関する「生徒指導」「教育相談」といった科目を学びます。また、前期に「教育方法論」が配置されており、教育実習事前指導の前段階の内容を学びます。後期には事前指導である「教育実習ⅠA」があります。福祉科については、教科教育法が置かれています（4年前期まで）。中学校免許取得希望者は、「介護等体験」を実施します。

なお、社会福祉に関する科目を履修している学生は、「介護等体験」の履修が一部免除になる場合があります（詳細は、講義において説明します）。

(4年次)

事前指導である「教育実習ⅠB」が通年で配置されています。ただし、ほとんどの授業は前期にあります。多くの学生が5～6月に教育実習を行いますので、その直前の指導となります。また教育実習から帰ってきて以降は、事後指導の時間ともなります。後期には、教職の総仕上げとして「教職実践演習」があり、4年間の学習を振り返ることになります。

以上をまとめると次のような図2となります。

【図2 教職課程 受講の流れ②】

学年	開講時期	開講科目						
4年	後期	教育実習ⅠB	教職実践演習	教育実習Ⅱ・Ⅲ				
	前期							
3年	後期	教育相談	道徳教育	教育実習ⅠA	教科教育法	介護等体験		
	前期	教育方法論	特別活動	生徒指導				
2年	後期	教育制度論	教育心理学Ⅱ					
	前期	教育原理	教育心理学Ⅰ					
1年	後期	教育課程研究						
	前期	教師論						

(2) 栄養教育

(1年次)

前期の「教師論」が入門科目として配置されています。「教師とは」ということを中心に学びます。後期には「教育方法論」「教育課程研究」があり、「学校で教えるとは」「カリキュラムとは何か」といった点について大まかに学びます。

(2年次)

「教育原理」「教育制度論」「教育心理学Ⅰ・Ⅱ」といった理論系の科目が配置されています。1年次よりも学問的に教育について考察します。後期には「栄養に係る教育に関する科目」である「学校栄養教育Ⅰ」が配置され、栄養教育に関する全般的な事項を学びます。

(3年次)

「道德教育」「特別活動」や、具体的な教育指導に関する「生徒指導（栄養教諭）」「教育相談」といった科目を学びます。また、前期には教育実習事前指導に当たる「栄養教育実習Ⅰ」を学び、さらに「栄養に係る教育に関する科目」である「学校栄養教育Ⅱ」も学んで、栄養教育実習に備えます。後期には本実習として「栄養教育実習Ⅱ」を行います。

(4年次)

4年通年（隔週開講）で、教職の総仕上げである「教職実践演習」が配置されています。3年間の学習を振り返り、不足している部分をさらに勉強することになります。

以上をまとめると次のような図2となります。

【図2 教職課程 受講の流れ②】

学年	開講時期	開講科目				
4年	後期	教職実践演習				
	前期	(栄養教諭)				
3年	後期	教育相談	道德教育	栄養教育実習Ⅱ		
	前期	特別活動	生徒指導 (栄養教諭)	栄養教育実習Ⅰ	学校栄養教育Ⅱ	
2年	後期	教育制度論	教育心理学Ⅱ	学校栄養教育Ⅰ		
	前期	教育原理	教育心理学Ⅰ			
1年	後期	教育課程研究	教育方法論			
	前期	教師論				

授業のねらい

今日、教師という職に実際に就くことは、非常に難しい。その難しい道を歩もうとしている学生に、教師とは何か、実際の教師はどのような仕事しているのか、学校ではどうしているのか、教員の採用状況はどのようなものかなどを講義したい。

到達目標

教師をめざす学生に必要な教職の意義や教師の実際などを理解する。

授業方法

原則として、一回でひとまとまりの内容を行う。講義形式により、教師に関する歴史、もつべき資質、教師をとりまく環境（学級・学校）、採用と任命という順番で授業を進めていきます。事前事後には、配布したプリントの読みなど、復習を中心に学習をお願いします。

ミニレポート課題を2～3回提出してもらいますが、それについては翌週返却し、口頭で解説します。

期末テストについては、後期の「教育課程研究」の第1回目の授業で解説プリントを配布します。

授業計画

- 第1回 教職課程の意味と「教師論」のオリエンテーション
- 第2回 教師論の歴史
- 第3回 現代の教師に求められる資質
- 第4回 VTR「教師誕生」を視聴して
- 第5回 教師のもつべき専門性(1)～教える内容への理解
- 第6回 教師の持つべき専門性(2)～人間性は大事なのだが…
- 第7回 複眼的思考に立つとは？
- 第8回 教師の仕事
- 第9回 学校という制度
- 第10回 学級の編成
- 第11回 学校で何を教えるのか
- 第12回 教員の採用と任命
- 第13回 教師の人権意識－社会的弱者をみつめる目
- 第14回 障害児の学校とその教育内容
- 第15回 まとめ－さらなる教職課程授業へむけて

成績評価の方法

教職に関する科目であるため、出席を重視する。3回より多く欠席したものは不可とする。

欠席した場合にも講義中に課したミニレポートを全て提出することが前提となる。その上で、期末テスト（100点）（100％）を行う。

履修にあたっての注意

将来、教職に従事しようとする強い意志をもつ学生のために設けたものである。すなわち、教員採用試験を受検することが原則である。生半かな態度で受講してもらっては困る。毎回必ず出席のこと。

教科書・参考書に関する備考

教科書：プリント（約50枚配布）を中心にを行い、教科書は使用しない。

参考書

- 佐々木正治編著『新教育原理・教師論』（福村出版、2008年）
- 佐々木正治編著『新中等教育原理』（福村出版、2010年）
- 佐々木正治編『新初等教育原理』（福村出版、2014年）
- 佐藤環編『日本の教育史』（あいり出版、2013年）

授業のねらい

- ・児童生徒が身につけたい能力態度やその指導のあり方について、教育課程編成の観点から主体的に考える時間とする。
- ・自らが意見をもち、受講者相互に議論し、批判し、協力し、参画しながら新たな気づきや学びを深める場とする。

到達目標

1. 教育課程の意義について理解することができる。
2. 効果的な教育課程編成のあり方を主体的かつ協働的に考えることができる。

授業方法

1. 授業では以下の場面を多く設定する。
 - ・受講者参加型ですすめる学習場面
 - ・自己で学びをふりかえり、相互に気づきや学びを共有する場面
 - ・学んだことを活かしてプログラムをつくる場面
 - ・新たな知識や経験をインプットする場面
2. 事前・事後の学習としては以下に対応する意識を高くもつこと
 - ・本時およびそれまでに学習した内容に関する情報の収集とまとめ
 - ・学習指導要領や資料の読み込みなど、次時の学習内容や活動に関する準備

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 わたしの「学校時代」をふりかえる
- 第3回 教育課程とは何か？① -教育課程の定義-
- 第4回 教育課程とは何か？② -教育課程の目的-
- 第5回 教育課程に関する法規
- 第6回 教育課程の歴史 -学習指導要領の変遷-
- 第7回 教育活動をデザインするということ① -各学校種における教育課程-
- 第8回 教育活動をデザインするということ② -教科・領域からみた教育課程-
- 第9回 教育課程の編成と評価
- 第10回 校種間連携と教育課程
- 第11回 学社連携と教育課程
- 第12回 諸外国の教育課程
- 第13回 教育課程をデザインする① -テーマに基づいた教育課程の編成-
- 第14回 教育課程をデザインする② -横断的なカリキュラムを構想する-
- 第15回 教育課程とは何か？③ -学校教育活動と教育課程のかかわりについて考える-

成績評価の方法

- ・学習内容の理解に向けて主体的に取り組むパフォーマンス（認知度）（30%）・・・目標1に対応
- ・能動的かつ協働的に学習活動へと取り組むパフォーマンス（参加度）（30%）・・・目標2に対応
- ・レポートや各種学習成果に関する提出物（学修度）（40%）・・・目標1. 2. に対応（アドバンス）

履修にあたっての注意

- ・児童生徒に対して教育活動に当たることができる免許を取得することの意味をしっかりと意識した者が受講すること。
- ・授業に主体的かつ能動的に参加できる者の受講を基本とする。
- ・授業準備がなされていることを前提とした授業時間であることを十分留意して学習に臨むこと。

教科書

大津尚志、伊藤一雄、伊藤良高、中谷彰『教育課程フロンティア』（晃洋書房、2010年、ISBN：978477102778）
 文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編 平成29年3月』東山書房 2018年4月刊行予定、ISBN：9784827815597

教科書・参考書に関する備考

- ・上記2点の教科書は必須。参考書は必要に応じてよいので、購入はマストではない。
- ・学習指導要領解説特別活動編に関して、中学校以外の免許取得を希望する者は該当する学校種のものも手に入れておくことをおすすめする。(但し、中学校学習指導要領解説特別活動編は全員必須)
- ・その他の参考書については適宜情報提供する。
- ・未発刊の平成29年改訂学習指導要領解説編はweb上で公開されている。本取り扱いについては講義時間内に追って連絡する。

参考書

児島邦宏／佐野金吾『中学校新学習指導要領の展開総則編』（明治図書、2008年、ISBN：9784182575181）

授業のねらい

- ・児童生徒が身につけたい能力態度やその指導のあり方について、教育課程編成の観点から主体的に考える時間とする。
- ・自らが意見をもち、受講者相互に議論し、批判し、協力し、参画しながら新たな気づきや学びを深める場とする。

到達目標

1. 教育課程の意義について理解することができる。
2. 効果的な教育課程編成のあり方を主体的かつ協働的に考えることができる。

授業方法

1. 授業では以下の場面を多く設定する。
 - ・受講者参加型ですすめる学習場面
 - ・自己で学びをふりかえり、相互に気づきや学びを共有する場面
 - ・学んだことを活かしてプログラムをつくる場面
 - ・新たな知識や経験をインプットする場面
2. 事前・事後の学習としては以下に対応する意識を高くもつこと
 - ・本時およびそれまでに学習した内容に関する情報の収集とまとめ
 - ・学習指導要領や資料の読み込みなど、次時の学習内容や活動に関する準備

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 わたしの「学校時代」をふりかえる
- 第3回 教育課程とは何か？① -教育課程の定義-
- 第4回 教育課程とは何か？② -教育課程の目的-
- 第5回 教育課程に関する法規
- 第6回 教育課程の歴史 -学習指導要領の変遷-
- 第7回 教育活動をデザインするということ① -各学校種における教育課程-
- 第8回 教育活動をデザインするということ② -教科・領域からみた教育課程-
- 第9回 教育課程の編成と評価
- 第10回 校種間連携と教育課程
- 第11回 学社連携と教育課程
- 第12回 諸外国の教育課程
- 第13回 教育課程をデザインする① -テーマに基づいた教育課程の編成-
- 第14回 教育課程をデザインする② -横断的なカリキュラムを構想する-
- 第15回 教育課程とは何か？③ -学校教育活動と教育課程のかかわりについて考える-

成績評価の方法

- ・学習内容の理解に向けて主体的に取り組むパフォーマンス（認知度）（30%）・・・目標1に対応
- ・能動的かつ協働的に学習活動へと取り組むパフォーマンス（参加度）（30%）・・・目標2に対応
- ・レポートや各種学習成果に関する提出物（学修度）（40%）・・・目標1、2.に対応（アドバンス）

履修にあたっての注意

- ・児童生徒に対して教育活動に当たることができる免許を取得することの意味をしっかりと意識した者が受講すること。
- ・授業に主体的かつ能動的に参加できる者の受講を基本とする。
- ・授業準備がなされていることを前提とした授業時間であることを十分留意して学習に臨むこと。

教科書

大津尚志、伊藤一雄、伊藤良高、中谷彪『教育課程フロンティア』（晃洋書房、2010年、ISBN：978477102778）
 文部科学省『小学校学習指導要領解説総則編（平成29年7月）』（東洋館出版社、ISBN：9784491034614）

教科書・参考書に関する備考

- ・上記2点の教科書は必須。参考書は必要に応じてよいので、購入はマストではない。
- ・その他の参考書については適宜情報提供する。
- ・未発刊の平成29年改訂学習指導要領解説編はweb上で公開されている。本取り扱いについては講義時間内に追って連絡する。

参考書

寺崎千秋『小学校新学習指導要領の展開総則編』（明治図書、2018年3月刊行予定、ISBN：9784188381229）

授業のねらい

教育方法とは「教育目的を児童・生徒に効果的に伝える技術・手段」とされ、教育という事象の構成要素の一つである。本講義では、教育方法を他の構成要素との関連で以下のように検討する。

- 1 教育者・学習者と方法の関係－「教授中心主義と学習中心主義」「教授＝学習過程」
- 2 教育内容と方法の関係－「学習指導の原理と実際（導入・板書の意義）」「授業と学習指導案」
- 3 教育環境と方法の関係－「学級と一斉教授」「教育の個別化（オープンスクール、コンピュータ教授）」

到達目標

教育の方法について、上記の3点との関係から理解する。

授業方法

- ・原則として1回でひとまとまりのある講義を行う。
- ・内容は、大きく分けて4つにわかれる。1つめは「教育者・学習者と方法の関係」であり（下記の3～4）、2つめは「教育評価」（下記の5～6）、3つめは「教育内容と方法の関係」（下記の7～9）、4つめが「教育環境と方法の関係」（下記の10～14）である。
- ・教育方法の授業であるので、プリント以外に、OHC、ビデオ・DVD・ブルーレイなどの視聴覚機器を用い、さらに電子黒板などの使い方も指導する。
- ・事前事後には、配布したプリントの読みなど、復習を中心に学習をお願いします。

授業計画

- 第1回 栄養教諭への道
- 第2回 講義「教育方法論」のオリエンテーション
－教育における「方法」の位置づけ、「方法」をとらえる3つの視点
- 第3回 教授と学習の考え方－教授中心主義と学習中心主義
- 第4回 教授＝学習過程への統合－子どもの知的好奇心と向上心、「発見学習」の原理と実際
- 第5回 教育評価(1)－測定から評価へ、「結果」から「過程」の評価へ
- 第6回 教育評価(2)－児童指導要録と通信簿
- 第7回 学習指導の原理－学習指導原理の類型（自発性・経験・練習作業・個性化と社会化）
- 第8回 学習指導の実際－学習過程と指導の技術（導入・板書・発問・副教材・まとめ・全体の流れ）
- 第9回 「わかる」ということ－先輩の模擬授業の観察
- 第10回 学級教授の移り変わり－個人指導から一斉指導への展開、「学級で学ぶこと」の意味
- 第11回 オープンスクールとはなにか－授業の個別化
- 第12回 個別化学習の実際と学級の意味－プログラム学習とCAI、ICTと電子黒板（VTR視聴など）
- 第13回 学校をとりまく社会(1)－文部科学省と教育委員会、
- 第14回 学校を取りまく社会(2)－学校を固い組織から柔らかい組織へ改革するとは
- 第15回 講義「教育方法論」のまとめ

成績評価の方法

教職に関する科目であるため、出席点を重視する。

3回より多く欠席したものは不可とする。欠席した場合にも講義中に課したミニレポートを全て提出することが前提となる。その上で、期末テスト（100点）（100%）を行う。

履修にあたっての注意

将来教職に従事しようとする強い意志をもつ学生のために設けた授業である。すなわち、教採試験を受検することが原則である。生半可な態度で受講してもらっては困る。毎回必ず出席のこと。

教科書・参考書に関する備考

教科書：教科書は使用しない。その代わりにプリントを約50枚程度配布する。

参考書

- 文部科学省『小学校学習指導要領』
- 文部科学省『中学校学習指導要領』
- 文部科学省『高等学校学習指導要領』

授業のねらい

「教育を受ける者」から「教育を提供する者」に、履修者自らのまなざしを転換し、「教育や学びとは何か？」という問いに一定の答えを提示することを目指す。

到達目標

1. 教育思想家が、現在の教育にどのような影響を及ぼしているのかを理解できる。
2. 教育において多様な個性をどのように活かすべきかを考えることができる。
3. 教育や学びに関する書籍を、1冊は読む。
4. 今まで当たり前だと思っていた現在進行系の教育事象に対して、疑問を持つことができる。

授業方法

- ・担当教員による説明を主として、講義を進めていく。
- ・講義中、いくつかの論点を担当教員が提示し、それについてグループごとに討議を行う。
テーマは前週の講義内で提示するので履修者は下調べが必要となる。
- ・毎回、所定の用紙に、自分の意見を記述し、講義を終える。
- ・用紙に書かれた内容は、次の講義でフィードバックを行う。

授業計画

- 第1回 インTRODククション(講義内容の説明)
- 第2回 教育の今を考える①：教育時事について
- 第3回 教育の今を考える②：数値データに見る日本の学校教育の現状と課題
- 第4回 教育の今を考える③：数値データに見る世界における日本の学校教育の位置づけ
- 第5回 教育の今を考える④：日本・海外諸国が抱える教育課題とは?学校での多様性の扱い方
- 第6回 教育・学校とは何かを考える①：語源から紐解く教育・学校の定義
- 第7回 教育・学校とは何かを考える②：人に「教育」はなぜ必要なのか
- 第8回 教育・学校とは何かを考える③：「教育」の目的とは何かを考えた人たち
- 第9回 教育・学校とは何かを考える④：「学校」の本当の目的とは何か
- 第10回 教育関連の書籍を通してみる、教育の理想と現実①（ポップ作成）
- 第11回 教育関連の書籍を通してみる、教育の理想と現実②（ポップ作成）
- 第12回 教育関連の書籍を通してみる、教育の理想と現実③（ポップのグループ発表）
- 第13回 教育関連の書籍を通してみる、教育の理想と現実④（ポップの代表発表）
- 第14回 教育・学校・学びとは何か（再考）
- 第15回 総復習と最終テスト

成績評価の方法

1. 毎回の小レポート(20%)
2. ポップ作りと発表(20%)
2. テスト(60%)

履修にあたっての注意

教師論・教育課程研究を履修済みの学生を条件とする。
また、将来的に教職に就くことを目標にしていることが履修の必須条件です。
実習のことを想定し、他の講義より厳格に、原則三回の欠席で不合格となりますので、気をつけて下さい。

教科書・参考書に関する備考

講義内で適宜提示します。

授業のねらい

本講義では、教育心理学領域の基礎理論や最新の知見を通じて、児童生徒の心理を多角的に理解するための理論的枠組みを解説し、多様なニーズに応じた教育実践を行うための引き出しを備えてもらうことを目的とする。

到達目標

教育心理学に関する基礎的な用語を説明できる。
 児童生徒の心の発達過程を理論的な枠組みを用いて説明できる。
 行動問題や障害を個人と環境の相互作用の観点から理解できる。

授業方法

基本的にスライドと映像資料を用いて講義形式にて行うが、適宜ペアやグループに分かれて討議を行う。
 事前に授業範囲に該当する教科書のページを通覧しておいて下さい。
 事後学習として授業内で指定するキーワードに関してノートにまとめておくことを求めます。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション：教育心理学とは何か
- 第2回 学習への行動論的アプローチ：古典的条件づけ、オペラント条件づけ
- 第3回 学習への認知論的アプローチ：観察学習、情報処理過程
- 第4回 個人差：パーソナリティ、知能検査、テスト理論
- 第5回 動機づけ：外発的動機づけ、内発的動機づけ
- 第6回 学習過程：適正処遇交互作用、学習方略
- 第7回 発達と教育：遺伝と環境、発達理論
- 第8回 乳幼児期の発達：運動・ことばの発達、愛着形成
- 第9回 児童期の発達：社会性、仲間関係の発達
- 第10回 青年期の発達：道徳性、アイデンティティの発達
- 第11回 教師と児童生徒：リーダーシップ、学級集団
- 第12回 学校生活への不適応：不登校、いじめ、暴力行為
- 第13回 発達障害の諸相：障害の定義、生物心理社会モデル
- 第14回 発達障害児への支援：特別支援教育、合理的配慮
- 第15回 まとめと最終試験

成績評価の方法

授業内での提出物（30%）、学期末試験（70%）により評価する。

履修にあたっての注意

教育心理学Ⅱを履修する場合、本講義を履修することを強く推奨する。

教科書

西村純一・井森澄江編『教育心理学エッセンシャルズ（第2版）』（ナカニシヤ出版、2010年、ISBN：978-4-7795-0451-8）

授業のねらい

本講義では、集団づくりゲームや心理教育プログラムを実際に体験することを通じて、心理教育的援助サービスの具体的な方法およびその評価プロセスについて理解を深めてもらうことを目的とする。

到達目標

学校現場における心理教育的援助サービスについて理解できる。
機能分析に基づくアセスメントを問題解決に活用できる。
自分自身の価値観を認識した上でオリジナルな教育実践を提案できる。

授業方法

スライドと映像資料を提示しつつ、模擬プログラム、グループワーク、事例検討を行う。
事前に授業計画で示した内容について自分なりのイメージを膨らませて授業に臨んで下さい。
事後学習として授業内で紹介した取組の成果がどのように報告されているかを調べてもらいます。

授業計画

- 第1回 インクルーシブ教育と心理教育的援助サービス
- 第2回 教師に求められるコミュニケーション
- 第3回 集団づくりのためのエクササイズ
- 第4回 スモールステップで課題を分析する
- 第5回 競合バイパスモデルを作成する
- 第6回 学校全体で取り組む行動支援システム
- 第7回 ソーシャルスキル教育の理論と実践
- 第8回 アンガーマネジメントの理論と実践
- 第9回 ストレスマネジメントの理論と実践
- 第10回 食行動変容のための心理教育プログラム
- 第11回 ケースフォーミュレーションの進め方
- 第12回 システム構築と危機対応
- 第13回 多様なニーズに応じた教育実践の紹介
- 第14回 理想の教師像を明確化する
- 第15回 オリジナルの心理教育プログラムを作る

成績評価の方法

授業内での提出物（30%）、授業への参加状況（20%）、学期末レポート（50%）により評価する。

履修にあたっての注意

教育心理学Ⅰの履修を強く推奨する。

教科書・参考書に関する備考

授業内で参考図書を随時紹介していく。

授業のねらい

- ・教育全般に関心を持ち続けるとともに、教育行政制度・教育法規の基礎知識を習得することを目指します。
- ・教員個人では解決できない教育課題があることを認識し、制度・組織としての教育の重要性を知る。

到達目標

1. 日本の学校教育の中の（隠された）目的を理解することができる。
2. 教員として知っておくべき法規を理解する。
3. 教員としてだけでなく、活動的な市民(保護者)としての技能・知識を習得する。
4. 海外の事例を通して、児童生徒の多様性をいかに肯定的に捉える実践が可能かを考えることができる。

授業方法

- ・担当教員による説明を主として、講義を進めていく。
- ・講義中、いくつかの論点を担当教員が提示し、それについてグループごとに討議を行う。
テーマは前週の講義内で提示するので履修者は教科書などを活用した下調べが必要となる。
- ・毎回、所定の用紙に、自分の意見を記述し、講義を終える。
- ・用紙に書かれた内容は、次の講義でフィードバックを行う。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 教育・学校制度の基礎知識
- 第3回 日本と海外の教育制度の比較①（才能児教育の実際）
- 第4回 日本と海外の教育制度の比較②（多様性に対応できる教員養成）
- 第5回 教育法規①～日本国憲法と教育基本法
- 第6回 教育法規②～教員にかかわる法規
- 第7回 教育法規③～子ども・保護者にかかわる法規
- 第8回 中間試験：教育制度と教育法規の復習
- 第9回 公正な学校制度とは何か？①：都市部と地方部の教育の違い
- 第10回 公正な学校制度とは何か？②：家族の所得・文化の違いが教育に及ぼす影響
- 第11回 教育行政①：文部科学省
- 第12回 教育行政②：教育委員会
- 第13回 学校を支える多様な人たち
- 第14回 現在の学校における教育課題とその解決策
- 第15回 現在の学校（大学）における教育課題とは何か

成績評価の方法

1. 毎回の小課題（20%）
2. 中間試験（60%）
3. 教育課題に関するプレゼンテーション（20%）

履修にあたっての注意

教育原理を履修済みの学生を条件とします。

また、将来的に教職に就くことを目標にしていることが履修の必須条件です。

教育実習のことを想定し、他の講義より厳格に、原則として三回の欠席で不合格となりますので、気をつけて下さい。

教科書・参考書に関する備考

参考文献などは適宜提示します。

授業のねらい

- ・わが国における家庭科教育の歴史と特徴を知る。
- ・家庭科教師として必要な力について考える。
- ・家庭科で扱う教材内容に関連する社会情報に常に関心を持ち、資料を収集する。
- ・授業内での活動を通して、家庭科教師としての自己の適性について考える。

到達目標

- ・家庭科教育の歴史と特徴について理解できる。
- ・中学・高校家庭科の目標や学習内容を理解できる。
- ・家庭科の教材内容について関心と理解を深めることができる。

授業方法

講義形式とグループワークおよび発表による。そのための予習復習が必須となる。

授業計画

- 第1回 ガイダンス …… 履修上の諸注意、教科書等の確認、授業評価他
 第2回 1. 家庭科教師に必要な力
 第3回 2. 家庭科教育のめざすもの
 第4回 3. 家庭科教育の特徴
 第5回 4. 家庭科教育の歩み
 第6回 5. 家庭科の教科目標と内容構成 …… 小・中学校における家庭科の内容構成と取扱い
 第7回 6. 高等学校家庭科の教科目標と内容構成
 第8回 7. 高等学校家庭科の指導計画・内容の取扱い
 第9回 8. ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動
 9. 家庭科の学習評価 …… 評価規準と評価基準
 第10回 10. 家庭科の学習指導案を書いてみよう
 第11回 11. 教材を考える (1) 人生すごろく …… 自分の人生設計とライフ・イベント
 第12回 12. 教材を考える (2) 人生すごろく …… グループワーク
 第13回 13. 教材を考える (3) 人生すごろく …… 人生すごろくの作成と発表
 第14回 14. 教材を指導案に取り込もう …… 人生すごろくの指導案をつくる
 第15回 15. 指導案の完成と提出

成績評価の方法

家庭科教育の目標や内容構成、取扱い上の留意事項などに関する理解を小テストで評価する(50%)。指導を組み立てる力を提出した指導案をもとに評価する(30%)。授業全体およびグループワークへの参加態度(20%)。

履修にあたっての注意

- ◎欠席は3回までとし、4回休むと放棄とみなす。
- ◎担当教員への質問等は、時間的余裕を持って行うこと。

教科書

- 文部科学省『中学校学習指導要領解説「技術・家庭科編」』（開隆堂出版、2018）
 文部科学省『高等学校学習指導要領解説「家庭編」』（開隆堂出版、平成22年、ISBN：978-4-304-04166-2）
 鶴田敦子他『授業力UP 家庭科の授業 第2版』（日本標準、2009年、ISBN：978-4-8208-0416-1）
 牧野カツ子他『高等学校教科書「家庭基礎 自立・共生・創造」』（東京書籍、最新版、ISBN：978-4-407-20221-2）
 『中学校技術・家庭科用教科書（家庭分野）』（開隆堂出版（家庭726）、最新版）

教科書・参考書に関する備考

中学校および高等学校学習指導要領解説（家庭編）と高等学校家庭科教科書「家庭基礎」は中等家庭科教育法Ⅱでも使用する。

96431

中等家庭科教育法Ⅲ 担当教員：田中宏実・岡崎由佳子・木脇奈智子・長尾順子 2単位 後期

授業のねらい

高等学校家庭科の学習指導案を作成し、模擬授業を行う。自ら授業目標を設定し、授業計画を作成、使用する教材を検討準備し、模擬授業を行うことで、教育実習の場面を想定した内容に近づける。

到達目標

1. 自らの力で授業計画を作成、教材を準備し、模擬授業を行うことができる。
2. (模擬授業者以外の場合でも) 模擬授業に積極的に参加することができる。

授業方法

最初から3回までは講義形式、4回から14回までは、事前の個別指導を前提に学習指導案を作成し、模擬授業として発表する。受講者がお互いに学び合うことを通じて、家庭科教育のあり方を追求する。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 家庭科教員の現状と心構えについて
- 第3回 学習指導要領「家庭科」の内容及び学習上の留意点
- 第4回 学習指導案を考える 1)住環境
- 第5回 学習指導案を考える 2)衣環境
- 第6回 学習指導案を考える 3)衣環境
- 第7回 学習指導案を考える 3)食環境
- 第8回 学習指導案を考える 4)食環境
- 第9回 学習指導案を考える 5)食環境
- 第10回 学習指導案を考える 6)家族と社会
- 第11回 学習指導案を考える 7)家族と社会
- 第12回 学習指導案を考える 8)家族と社会
- 第13回 学習指導案を考える 9)生活経済
- 第14回 学習指導案を考える 10)生活設計
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標1を測定するために、指導案の作成および模擬授業への取り組み(70%)について評価する。到達目標2を測定するために、自分以外の模擬授業の時も積極的な態度で取り組んでいるのか、観察記録や発言により評価する(30%)。

履修にあたっての注意

- ◎欠席は3回までとし、4回休むと放棄とみなします。
- ◎担当教員との個別事前指導は、時間的余裕を持って行うこと。

教科書・参考書に関する備考

・中等家庭科教育法Ⅰおよび中等家庭科教育法Ⅱで使用した教科書と学習指導要領解説を使います。

授業のねらい

福祉科教育法では、福祉科教員として必要な基本的知識や資質を培うため、教科「福祉」創設の意義と目的、専門教科「福祉」と高等学校福祉科の位置付け、教育課程の編成、指導方法と評価、学習指導案等について学習し、実際に授業を行うための知識や技術を身に付けることを目指します。

到達目標

- ・教科「福祉」創設の意義と目的、専門教科「福祉」と高等学校福祉科の位置付け、教育課程の編成が理解できる。
- ・教科「福祉」の各科目の教育法と目標及び内容を理解できる。

授業方法

- ・基本的に講義形式で進めていきます。
- ・学習指導要領や配布資料を通して各科目の教育方法と目標及び内容について学びます。そのための予習復習が必要となります。
- ・後半でゲストスピーカーを招き、高等学校福祉科における教育実践を学びます。

授業計画

- 第1回 福祉教育の必要性と考え方
- 第2回 福祉教育の歴史
- 第3回 教科「福祉」の創設と意義
- 第4回 教科「福祉」の教育目標と教育課程編成
- 第5回 「社会福祉基礎」の教育方法と目標及び内容
- 第6回 「介護福祉基礎」の教育方法と目標及び内容
- 第7回 「コミュニケーション技術」の教育方法と目標及び内容
- 第8回 「生活支援技術」の教育方法と目標及び内容
- 第9回 「介護過程」の教育方法と目標及び内容
- 第10回 「介護総合演習」の教育方法と目標及び内容
- 第11回 「介護実習」の教育方法と目標及び内容
- 第12回 「こころとからだの理解」の教育方法と目標及び内容
- 第13回 「福祉情報活用」の教育方法と目標及び内容
- 第14回 教科「福祉」の評価
- 第15回 福祉科教諭に求められる資質

成績評価の方法

試験（50%）、授業への参加状況（30%）、レポート等提出物（20%）で評価します。

履修にあたっての注意

二年生までに必要とされる「教職に関する科目」「教科に関する科目」を履修済みであることが望ましいです。欠席は3回までとし、4回休むと放棄とみなします。毎回資料を配布しますので、事前・事後学習として配布資料をよく読んでおいてください。

教科書

『社会福祉基礎』（実教出版）
 『介護福祉基礎』（実教出版）
 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 福祉編』

参考書

介護福祉士養成講座編集委員会編『新・介護福祉士養成講座(1)～(15)』（中央法規）
 大橋謙策編『福祉科指導法入門』（中央法規）
 川廷宗之編『介護教育方法論』（弘文堂）

授業のねらい

道徳教育とは、「正邪・善悪に関する意識を高め、道徳的に行動する力を形成するために行う教育」（下程勇吉編『教育学小事典』、法律文化社）といわれている。この定義づけでは、正邪をどのように判断するのかといった道徳に対する考え方が見えず、また行動する力をどうやって形成すればよいのかという方法についても明らかでない。本講義では、このような状況の中で、実際の道徳教育はどのように行われていくのかを中心に考察する。その際には1990年代から変化してきたとされる日本の道徳教育の方法に留意し、VTR視聴などを行う。

到達目標

道徳教育の歴史と実際について理解する。

授業方法

- ・ 授業を大きく4つに分ける。1つめが道徳などの概念(以下の第1回)、2つめが道徳教育の現状とその理由(第2～6回)、3つめが道徳教育の場面(第7～8回)、4つめが道徳教育の方法(第9～14回)であり、その後で総括(第15回)を行う。
- ・ 2については、道徳で用いられるテキストを解読していく形で講義を行う。
- ・ 4については、2人の道徳教育論を視点として、実際の道徳の授業を分析(ビデオ視聴や読み物教材分析)する。
- ・ 事前事後には、配布したプリントの読みなど、復習を中心に学習をお願いします。

授業計画

- 第1回 道徳とは何か。道徳教育とは何か。
 第2回 道徳教育の現状
 第3回 戦前日本の道徳教育
 第4回 戦中・占領期の道徳教育
 第5回 戦後日本の道徳教育
 第6回 「道徳の時間」はなぜ活用されないのか
 第7回 家庭における道徳教育－道徳性の発達
 第8回 学校における道徳教育－学習指導要領における道徳
 第9回 村井実の道徳教育論－「徳目」の存在根拠を問う－
 第10回 宇佐美寛の道徳教育論－事実が不足する中で「気持ち」を問うな
 第11回 現在の「道徳の授業」実践(1)－「1%のひらめき」(中学校1年)
 第12回 現在の「道徳の授業」実践(2)－「農園の魔法」(小学校4、5、6年)
 第13回 現在の「道徳の時間」実践(3)－「クリーンアップキャンペーンを終えて」(中学校3年)
 第14回 現在の「道徳の時間」実践(4)－「かぎのかかったーりん車ごや」(小学校2年)
 第15回 道徳教育の課題と展望

成績評価の方法

教職に関する科目であるため、出席点を重視する。3回より多く欠席したものは不可とする。欠席した場合にも講義中に課したミニレポートを全て提出することが前提となる。その上で、期末テスト(100点)(100%)を行う。

履修にあたっての注意

将来教職に従事しようとする強い意志をもつ学生のために設けた授業である。すなわち、教採試験を受検することを原則とする。生半かな態度で受講してもらっては困る。毎回必ず出席のこと。

教科書・参考書に関する備考

教科書：プリント(約50枚)を中心に行う。
 参考書：別途指示する。

参考書

文部科学省『小学校学習指導要領』
 文部科学省『中学校学習指導要領』

授業のねらい

道徳教育とは、「正邪・善悪に関する意識を高め、道徳的に行動する力を形成するために行う教育」（下程勇吉編『教育学小事典』、法律文化社）といわれている。この定義づけでは、正邪をどのように判断するのかといった道徳に対する考え方が見えず、また行動する力をどうやって形成すればよいのかという方法についても明らかでない。本講義では、このような状況の中で、実際の道徳教育はどのように行われていくのかを中心に考察する。その際には1990年代から変化してきたとされる日本の道徳教育の方法に留意し、VTR視聴などを行う。

到達目標

道徳教育の歴史と実際について理解する。

授業方法

- ・ 授業を大きく4つに分ける。1つめが道徳などの概念(以下の第1回)、2つめが道徳教育の現状とその理由(第2～6回)、3つめが道徳教育の場面(第7～8回)、4つめが道徳教育の方法(第9～14回)であり、その後で総括(第15回)を行う。
- ・ 2については、道徳で用いられるテキストを解説していく形で講義を行う。
- ・ 4については、2人の道徳教育論を視点として、実際の道徳の授業を分析(ビデオ視聴や読み物教材分析)する。
- ・ 事前事後には、配布したプリントの読みなど、復習を中心に学習をお願いします。

授業計画

- 第1回 道徳とは何か。道徳教育とは何か。
- 第2回 道徳教育の現状
- 第3回 戦前日本の道徳教育
- 第4回 戦中・占領期の道徳教育
- 第5回 戦後日本の道徳教育
- 第6回 「道徳の時間」はなぜ活用されないのか
- 第7回 家庭における道徳教育－道徳性の発達
- 第8回 学校における道徳教育－学習指導要領における道徳
- 第9回 村井実の道徳教育論－「徳目」の存在根拠を問う－
- 第10回 宇佐美寛の道徳教育論－事実が不足する中で「気持ち」を問うな
- 第11回 現在の「道徳の授業」実践(1)－「1%のひらめき」(中学校1年)
- 第12回 現在の「道徳の授業」実践(2)－「農園の魔法」(小学校4、5、6年)
- 第13回 現在の「道徳の時間」実践(3)－「クリーンアップキャンペーンを終えて」(中学校3年)
- 第14回 現在の「道徳の時間」実践(4)－「かぎのかかったーりん車ごや」(小学校2年)
- 第15回 道徳教育の課題と展望

成績評価の方法

教職に関する科目であるため、出席点を重視する。3回より多く欠席したものは不可とする。欠席した場合にも講義中に課したミニレポートを全て提出することが前提となる。その上で、期末テスト(100点)(100%)を行う。

履修にあたっての注意

将来教職に従事しようとする強い意志をもつ学生のために設けた授業である。すなわち、教採試験を受検することを原則とする。生半かな態度で受講してもらっては困る。毎回必ず出席のこと。

教科書・参考書に関する備考

教科書：プリント(約50枚)を中心に行う。

参考書

文部科学省『小学校学習指導要領』
文部科学省『中学校学習指導要領』

授業のねらい

1. 特別活動を通して児童生徒が身につけたい能力態度やその指導のあり方について主体的に考える時間とする。
2. 自らが意見を持ち、受講者相互に議論し、批判し、協力し、参画しながら新たな気づきや学びを深める場とする。

到達目標

1. 特別活動の意義と教育的効果について理解することができる。
2. 教育活動としての効果的なあり方を主体的かつ協働的に考えることができる。

授業方法

1. 授業では以下の場面を多く設定する。
 - ・受講者参加型ですすめる学習場面
 - ・自己で学びをふりかえり、相互に気づきや学びを共有する場面
 - ・学んだことを活かしてプログラムをつくる場面
 - ・新たな知識や経験をインプットする場面
2. 事前・事後の学習としては以下に対応する意識を高くもつこと
 - ・本時およびそれまでに学習した内容に関する情報の収集とまとめ
 - ・学習指導要領や資料の読み込みなど、次時の学習内容や活動に関する準備

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
 第2回 わたしの特別活動をふりかえる
 第3回 人間形成と特別活動の教育的意義
 第4回 特別活動の歴史の変遷
 第5回 特別活動の内容と目標
 第6回 学級活動・ホームルーム活動の実践
 第7回 生徒会活動の実践
 第8回 学校行事の実践
 第9回 人間形成を支える諸理論
 第10回 特別活動の新たな展開
 第11回 特別活動を進めるための指導計画① ー特別活動の指導計画を構想するー
 第12回 特別活動を進めるための指導計画② ー特別活動の指導計画を作成するー
 第13回 特別活動の評価
 第14回 特別活動を進めるための指導計画③ ー特別活動の指導計画を共有するー
 第15回 特別活動という教育活動とは何か？ ー特別活動がもたらす学びをふりかえるー

成績評価の方法

- ・学習内容の理解に向けて主体的に取り組むパフォーマンス（認知度）（30%）・・・目標1に対応
- ・能動的かつ協働的に学習活動へと取り組むパフォーマンス（参加度）（30%）・・・目標2に対応
- ・レポートや各種学習成果に関する提出物（学修度）（40%）・・・目標1. 2. に対応（アドバンス）

履修にあたっての注意

- ・児童生徒に対して教育活動に当たることができる免許を取得することの意味をしっかりと意識した者が受講すること。
- ・授業に主体的かつ能動的に参加できる者の受講を基本とする。
- ・授業準備がなされていることを前提とした授業時間であることを十分留意して学習に臨むこと。

教科書

文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別活動編 平成29年3月』東山書房 2018年4月刊行予定、ISBN：9784827815627

原田恵理子、高橋知己、森山賢一、加々美馨『基礎基本シリーズ③最新特別活動論』（大学教育出版、2016年、ISBN：9784864294041）

教科書・参考書に関する備考

- ・上記2点の教科書は必須。参考書は必要に応じてよいので、購入はマストではない。
- ・学習指導要領解説特別活動編に関して、中学校以外の免許取得を希望する者は該当する学校種のものも手に入れておくことをおすすめする。(但し、中学校学習指導要領解説特別活動編は全員必須)
- ・その他の参考書については適宜情報提供する。
- ・未発刊の平成29年改訂学習指導要領解説編はweb上で公開されている。本取り扱いについては講義時間内に追って連絡する。

参考書

文部科学省『高等学校学習指導要領解説特別活動編』（海文堂出版、2009年、ISBN：9784303126308）
文部科学省『小学校学習指導要領解説特別活動編』（東洋館出版社、2008年、ISBN：9784491031903）
天笠茂『中学校新学習指導要領の展開 特別活動編』（明治図書、2008年、ISBN：9784188443156）

授業のねらい

1. 特別活動を通して児童生徒が身につけたい能力態度やその指導のあり方について主体的に考える時間とする。
2. 自らが見解をもち、受講者相互に議論し、批判し、協力し、参画しながら新たな気づきや学びを深める場とする。

到達目標

1. 特別活動の意義と教育的効果について理解することができる。
2. 教育活動としての効果的なあり方を主体的かつ協働的に考えることができる。

授業方法

1. 授業では以下の場面を多く設定する。
 - ・受講者参加型ですすめる学習場面
 - ・自己で学びをふりかえり、相互に気づきや学びを共有する場面
 - ・学んだことを活かしてプログラムをつくる場面
 - ・新たな知識や経験をインプットする場面
2. 事前・事後の学習としては以下に対応する意識を高くもつこと
 - ・本時およびそれまでに学習した内容に関する情報の収集とまとめ
 - ・学習指導要領や資料の読み込みなど、次時の学習内容や活動に関する準備

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
 第2回 わたしの特別活動をふりかえる
 第3回 人間形成と特別活動の教育的意義
 第4回 特別活動の歴史の変遷
 第5回 特別活動の内容と目標
 第6回 学級活動・ホームルーム活動の実践
 第7回 生徒会活動の実践
 第8回 学校行事の実践
 第9回 人間形成を支える諸理論
 第10回 特別活動の新たな展開
 第11回 特別活動を進めるための指導計画① ー特別活動の指導計画を構想するー
 第12回 特別活動を進めるための指導計画② ー特別活動の指導計画を作成するー
 第13回 特別活動の評価
 第14回 特別活動を進めるための指導計画③ ー特別活動の指導計画を共有するー
 第15回 特別活動という教育活動とは何か？ ー特別活動がもたらす学びをふりかえるー

成績評価の方法

- ・学習内容の理解に向けて主体的に取り組むパフォーマンス（認知度）（30%）・・・目標1に対応
- ・能動的かつ協働的に学習活動へと取り組むパフォーマンス（参加度）（30%）・・・目標2に対応
- ・レポートや各種学習成果に関する提出物（学修度）（40%）・・・目標1. 2. に対応（アドバンス）

履修にあたっての注意

- ・児童生徒に対して教育活動に当たることができる免許を取得することの意味をしっかりと意識した者が受講すること。
- ・授業に主体的かつ能動的に参加できる者の受講を基本とする。
- ・授業準備がなされていることを前提とした授業時間であることを十分留意して学習に臨むこと。

教科書

文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別活動編 平成29年3月』東山書房 2018年4月刊行予定、ISBN：9784827815627

原田恵理子、高橋知己、森山賢一、加々美馨『基礎基本シリーズ③最新特別活動論』（大学教育出版、2016年、ISBN：9784864294041）

教科書・参考書に関する備考

- ・上記2点の教科書は必須。参考書は必要に応じてよいので、購入はマストではない。
- ・学習指導要領解説特別活動編に関して、中学校以外の免許取得を希望する者は該当する学校種のものも手に入れておくことをおすすめする。(但し、中学校学習指導要領解説特別活動編は全員必須)
- ・その他の参考書については適宜情報提供する。
- ・未発刊の平成29年改訂学習指導要領解説編はweb上で公開されている。本取り扱いについては講義時間内に追って連絡する。

参考書

文部科学省『高等学校学習指導要領解説特別活動編』（海文堂出版、2009年、ISBN：9784303126308）
文部科学省『小学校学習指導要領解説特別活動編』（東洋館出版社、2008年、ISBN：9784491031903）
天笠茂『中学校新学習指導要領の展開 特別活動編』（明治図書、2008年、ISBN：9784188443156）

授業のねらい

教育方法とは「教育目的を児童・生徒に効果的に伝える技術・手段」とされる。本講義では、授業方法に記した4つの観点と、学習指導案の作成について、授業を行う。

到達目標

教育の方法について、下記の4点との関係から理解する。

学習指導案について、最低限、形式的な書き方を理解し、作成することができる。

授業方法

- ・原則として1回でひとまとまりの授業をおこない、その流れは次の4つの観点からなる。
- 1、教育者・学習者と方法の関係－「教授中心主義と学習中心主義」「教授＝学習過程」
- 2、教育評価－測定から評価へ、「結果」から「過程」の評価へ、生徒指導要録と通信簿
- 3、教育内容と方法の関係－「学習指導の原理と実際（導入・板書の意義）」「授業と学習指導案」
- 4、教育環境と方法の関係－「学級と斉教授」「教育の個別化（オープンスクール、コンピュータ教授）」
- ・教育方法の授業であるので、プリントはもちろん、OHC・ビデオ・DVD・ブルーレイなどの視聴覚機器を用い、さらに電子黒板などの使い方についても指導する。
- ・事前事後には、配布したプリントの読みなど、復習を中心に学習をお願いします。
- ・第11～13回については指導案のミニレポートを提出してもらいます。翌週には解説プリントとともに返却します。

授業計画

- 第1回 講義「教育方法論」のオリエンテーション
－教育における「方法」の位置づけ、「方法」をとらえる4つの視点
- 第2回 教授と学習の考え方－教授中心主義と学習中心主義
- 第3回 教授＝学習過程への統合－子どもの知的好奇心と向上心、「発見学習」の原理と実際
- 第4回 教育評価 7つの評価（基準と流れにおける評価）
- 第5回 学習指導の原理－学習指導原理の類型（自発性・経験・練習作業・個性化と社会化）
- 第6回 学習指導の実際－学習過程と指導の技術（導入・板書・発問・副教材・まとめ・全体の流れ）
- 第7回 学級教授の移り変わり
－個人指導から斉指導への展開、「学級で学ぶこと」の意味
- 第8回 オープンスクールとは何か－授業の個別化
- 第9回 個別学習の実際と学級の意味
－プログラム学習とCAI（ビデオ視聴など）、ICTと電子黒板
- 第10回 学習指導案とは何か－指導案の意味（算数の授業をもとにして）
- 第11回 学習指導案の作成方法(1)（形式面）
－「He is a good baseball player の使い方」（中学英語）の視聴と指導案の作成
- 第12回 学習指導案の作成方法(2)（形式面から内容面へ）
－「家族会議と購入」（中学家庭）の視聴と指導案の作成
- 第13回 学習指導案の作成方法(3)（内容面）
－「家族会議と購入」（中学家庭）の再視聴と指導案の書き方
- 第14回 「単元の評価基準」と「本時の計画における評価の方法」
- 第15回 講義「教育方法論」のまとめ、そして夏休み課題へ

成績評価の方法

教職に関する科目であるため、出席点を重視する。

3回より多く欠席したものは不可とする。欠席した場合にも講義中に課した指導案作成を全て提出することが前提となる。その上で、期末テスト（100点）（100%）を行う。

履修にあたっての注意

将来教職に従事しようとする強い意志をもつ学生のために設けた授業である。すなわち、教採試験を受検することが原則である。生半可な態度で受講してもらっては困る。毎回必ず出席のこと。

教科書・参考書に関する備考

教科書：プリントを約50枚程度配布する。

参考書

文部科学省『中学校学習指導要領』

文部科学省『高等学校学習指導要領』

授業のねらい

生徒指導の意義と役割を理解し、具体的な個別の対応について考察する。

到達目標

生徒指導の基礎的な概念を理解するとともに、生徒指導が教育活動全体を通じて展開されるものであることを認識し、実践的な指導のあり方を身につけることができる。

授業方法

講義形式と学生による発表・演習等により授業を展開する。

- ・講義形式の授業においては授業で配付したプリントを復習教材として事後学習を行うこと。
- ・発表・演習等においては、発表者などが事前に作成した資料等をもとに発表者以外の学生も事前学習を十分にを行い議論を通して主体的に取り組めるよう授業を展開する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション～生徒指導と児童生徒の成長～
- 第2回 生徒指導の意義と原理
- 第3回 教育課程と生徒指導
- 第4回 教科における生徒指導
- 第5回 児童生徒の心理と児童生徒理解
- 第6回 学校における生徒指導体制
- 第7回 生徒指導のための教員の研修
- 第8回 児童生徒全体への指導
- 第9回 学級担任・ホームルーム担任の指導
- 第10回 個別の課題を抱える児童生徒への対応
- 第11回 問題行動の早期発見と効果的な指導
- 第12回 生徒指導に関する法制度等
- 第13回 学校と家庭・地域・関係機関との連携
- 第14回 進路指導とキャリア教育
- 第15回 生徒指導とキャリア教育

成績評価の方法

レポート（60%）、授業への主体的な取組状況（40%）により評価する。
3回を超える欠席者に対しては、単位を認定しない。

履修にあたっての注意

卒業後、教職に従事しようとする強い意志をもつ学生のために設けたものであることから、教員採用試験を受検することを原則とする。

教科書

文部科学省『生徒指導提要』（教育図書、平成22年）

教科書・参考書に関する備考

参考書：別途指示

参考ホームページ

文部科学省、北海道教育委員会、北海道立教育研究所

97021

生徒指導（栄養教諭）

担当教員：中田 貢

2単位 前期

授業のねらい

生徒指導の意義と役割を理解し、具体的な個別の対応について考察する。

到達目標

生徒指導の基礎的な概念を理解するとともに、教育活動全体を通じて展開される生徒指導への栄養教諭としてのかかり方と実践的な指導のあり方を身につけることができる。

授業方法

講義形式と学生による発表・演習等により授業を展開する。

- ・講義形式の授業においては授業で配付したプリントを復習教材として事後学習を行うこと。
- ・発表・演習等においては、発表者などが事前に作成した資料等をもとに発表者以外の学生も事前学習を十分にを行い議論を通して主体的に取り組めるよう授業を展開する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション～生徒指導と児童生徒の成長～
- 第2回 生徒指導の意義と原理
- 第3回 教育課程と生徒指導
- 第4回 教科における生徒指導
- 第5回 児童生徒の心理と児童生徒理解
- 第6回 学校における生徒指導体制
- 第7回 生徒指導のための教員の研修
- 第8回 児童生徒全体への指導
- 第9回 生徒指導と食に関する指導
- 第10回 個別の課題を抱える児童生徒への対応
- 第11回 問題行動の早期発見と効果的な指導
- 第12回 生徒指導に関する法制度等
- 第13回 学校と家庭・地域・関係機関との連携
- 第14回 進路指導とキャリア教育
- 第15回 生徒指導とキャリア教育

成績評価の方法

レポート（60%）、授業への主体的な取組状況（40%）により評価する。
3回を超える欠席者に対しては、単位を認定しない。

履修にあたっての注意

卒業後、教職に従事しようとする強い意志をもつ学生のために設けたものであることから、教員採用試験を受検することを原則とする。

教科書

文部科学省『生徒指導提要』（教育図書、平成22年）

教科書・参考書に関する備考

参考書：別途指示

参考ホームページ

文部科学省、北海道教育委員会、北海道立教育研究所

授業のねらい

教育相談は、一人一人の生徒の自己実現をめざし、本人または保護者などに、その望ましい在り方を助言することである。

到達目標

教師をめざす学生が教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む）の理論および方法を学ぶことにより、資質の向上を図ることができる。

授業方法

- 講義形式と学生による発表・演習等により、授業を展開する。
- ・講義形式の授業においては、授業で配付したプリントを復習教材として事後学習を行うこと。
 - ・発表・演習等においては、発表者などが事前に作成した資料等をもとに発表者以外の学生も事前学習を十分にを行い議論を通して主体的に取り組めるよう授業を展開する。

授業計画

- 第1回 学校における教育相談の特質
- 第2回 教育相談と生徒指導
- 第3回 教育相談の基本（教育相談の理論（カウンセリングに関する基礎的な知識））
- 第4回 教育相談と生徒理解
- 第5回 学級担任・ホームルーム担任が行う学校教育相談
- 第6回 授業者が行う学校教育相談
- 第7回 個別の課題に対応した教育相談(1)：学業相談
- 第8回 個別の課題に対応した教育相談(2)：いじめ
- 第9回 個別の課題に対応した教育相談(3)：不登校
- 第10回 個別の課題に対応した教育相談(4)：自殺
- 第11回 個別の課題に対応した教育相談(5)：高校中途退学
- 第12回 個別の課題に対応した教育相談(6)：その他の問題行動
- 第13回 個別の課題に対応した教育相談(7)：キャリア・カウンセリング
- 第14回 教師のための教育相談(1)：管理職・養護教諭等との連携
- 第15回 教師のための教育相談(2)：SC・SSW との連携

成績評価の方法

レポート（60%）、授業への取組状況（40%）により評価する。
3回を超える欠席者に対しては、単位を認定しない。

履修にあたっての注意

卒業後、教職に従事しようとする強い意志をもつ学生のために設けたものであることから、教員採用試験を受検することを原則とする。

教科書

文部科学省『生徒指導提要』（教育図書、平成22年）

教科書・参考書に関する備考

参考書：別途指示

参考ホームページ

文部科学省、北海道教育委員会、北海道立教育研究所

授業のねらい

- ・本講義の目的は、教育実習への心構えを確立することにある。また、中学校もしくは高等学校での実習を2～3週間過ごす上での、出来る限りの準備を授業を通して行う。

到達目標

- ・教育実習日誌の書き方を知る。
- ・授業を観察する方法を学び、実践することができる。
- ・実習先の学校の現状を知る。
- ・指導案の書き方を学び、授業を実践することの難しさを感じることができる。
- ・教員採用試験の家庭科の問題をとくことにより、専門知識の習得する。

授業方法

- ・担当教員による説明を主として、講義を進めていく。
- ・講義中、いくつかの論点を担当教員が提示し、それについてグループごとに討議を行う。
- ・毎回、所定の用紙に、自分の意見を記述し、講義を終える。
- ・用紙に書かれた内容は、次の講義でフィードバックを行う。
- ・模擬授業の事前事後打ち合わせは必須となる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション（教育実習とは何かを確認）
- 第2回 教育実習の雰囲気をつかむ（視聴覚教材）
- 第3回 教育実習での自己紹介に挑戦1
- 第4回 教育実習での自己紹介に挑戦2
- 第5回 教育実習校に関する調査・発表1～中学校
- 第6回 教育実習校に関する調査・発表2～高等学校
- 第7回 模擬授業に挑戦1～衣領域 ※教員採用試験の専門教養を参考とする。
- 第8回 模擬授業に挑戦2～食領域 ※教員採用試験の専門教養を参考とする。
- 第9回 模擬授業に挑戦3～住領域 ※教員採用試験の専門教養を参考とする。
- 第10回 模擬授業に挑戦4～福祉領域 ※教員採用試験の専門教養を参考とする。
- 第11回 模擬授業に挑戦5～家族領域など ※教員採用試験の専門教養を参考とする。
- 第12回 授業の観察方法（中学校・家庭科）
- 第13回 授業の観察方法（高等学校・家庭科）
- 第14回 教育実習検討報告会への参加1
- 第15回 教育実習検討報告会への参加2

成績評価の方法

1. 毎回の小課題（30%）
2. 授業観察レポート（25%）
3. 指導案+模擬授業（25%）
4. 三分間スピーチ（10%）
5. 報告会に対する感想（10%）

履修にあたっての注意

三年生前期までに必要とされる「教職に関する科目」「教科に関する科目」を履修済みの学生が望ましい。また、将来的に教職に就くことを目標にしていることが履修の必須条件です。実習のことを想定し、他の講義より厳格に原則として三回の欠席で不合格となりますので、気をつけて下さい。

教科書

北海道私立大学・短期大学教職課程連絡協議会『教育実習の手引（第6版）』（学術図書出版社、2013、ISBN：978-4-7806-0184-8）

授業のねらい

栄養教諭を希望する学生が、学校現場での教育実習に臨むにあたって必要な心構えや実践的・専門的な教職能力を持つことができるよう目指すことをねらいとする。学校給食における北海道産食材の利用について、最新の文献を取り上げながら、発表をとおして理解を深め、食に関する指導方法を身につけてもらうことを目的とする。

到達目標

到達目標 1：栄養教諭ならびに北海道産食材に関する知識を身につけ、それを応用して学校給食を教材とする「食に関する指導」を理解することができる。

到達目標 2：栄養教諭としての使命や職務内容の重要性を理解し、教材（媒体）を取り上げながら、指導案の作成・模擬授業を行い、討議することができる。

授業方法

原則として、1 回につき 1 テーマを取り上げながら、実習形式により、進めていく。

各自、食に関する指導案の作成と模擬授業を行い、討論を行う。

発表者は模擬授業や役割分担によって討論をまとめていく力を養う。

（ゲストスピーカーにより、実習で学ぶ）受講にあたって、事前学習として文献を読み、各自指導案を作成し、人数分印刷して準備しておくことを課題とする（所要時間 60 分程度）。事後学習としてふりかえりレポートを作成する（所要時間 60 分程度）。指導案やレポートは、演習内で口頭により、解説し、資料を配付する。

授業計画

- 1 栄養教育実習に向けて（導入）教育実習の意義、目的、心構え、実習生としてのマナー
- 2 教育課程基準と学校の管理運営体制
- 3 授業観察の方法とその実践 1
- 4 授業観察の方法とその実践 2
- 5 学習指導案 1 ～教材研究、作成・検討の方法～
- 6 学習指導案 2 ～教材研究、作成・検討の方法～
- 7 まとめ ～教育実習に向けて
実習後の提出物（実習ノートや指導案、報告書）、実習の評価の方法～
- 8 実習の反省、問題点の整理、今後の課題の明確化

成績評価の方法

到達目標 1 を測定するレポート・レジュメ作成・発表（30%）、到達目標 2 を測定する「食に関する指導案」作成と模擬授業（40%）、授業への参加状況（30%）により、評価する。

履修にあたっての注意

栄養教諭志望の学生のために設けられたものであり、日頃から教育問題に強い関心をもつことが望まれる。また、栄養教育実習が対外的な活動であることを自覚し、授業に対しても真剣な姿勢で出席して欲しい。レジュメやレポートの内容について、しっかりと学習した上で授業に参加すること。

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。参考書：必要に応じて授業中に紹介・説明します。

授業のねらい

「栄養教育実習Ⅱ」はこれまで修得した理論や技術を小・中学校の教育現場に応用し実践的な体験をとおして検証する実践的な研究である。同時に、教職員として教育実践の場に生かすことのできる指導技術を習得することとともに、児童・生徒に直接触れる場をとおして教育実践への意欲や指導技術、教師として基本的な資質を身につけることをねらいとする。教育実習の理解を深め、学ぶことを目的としている。

到達目標

- 到達目標 1：栄養教諭の職務内容について、教育実習を通して、身につける。
 到達目標 2：栄養教諭の業務を明確に説明でき、討議することができる。
 到達目標 3：栄養教諭実習報告書を作成できる。

授業方法

栄養教育実習として、各自課題・テーマを取り上げながら、集中実習形式により、進めていく。事前学習として課題がある（所要時間 60 分程度）。事後学習として報告書・レポートを作成する（所要時間 60 分程度）。報告書・レポートは、実習内で口頭により、解説し、解説資料を配付する。

授業計画

各実習校において 1 週間の実習を行う。「栄養教育実習Ⅱ」の事前事後指導については、「栄養教育実習Ⅰ」「総合演習 A」において行う。また、栄養教育の内容は、「学校栄養教育Ⅰ・Ⅱ」において、食に関する指導案の作成準備を行う。

「栄養教育実習Ⅱ」の具体的な内容

第 1～5 指導教諭等からの説明

- ・学校経営
- ・校務分掌の理解
- ・服务等

第 6～8 児童及び生徒への個別的な相談・指導の実習

- ・指導、相談の場の参観・補助等

第 9～12 児童及び生徒への教科・特別活動等における指導の実習

- ・学級活動及び給食の時間における指導の参観・補助
- ・教科等における教科担任等と連携した指導の参観・補助
- ・給食放送指導、配膳指導、後片付け指導の参観・補助
- ・児童生徒集会、委員会活動、クラブ活動における指導の参観・補助
- ・指導計画案、指導案の立案作成、教材研究等

第 13～15 食に関する指導の連携・調整の実習

- ・校内における連携・調整（学級担任、研究授業の企画立案、校内研修等）の参観・補助
- ・家庭と地域との連携・調整の参観・補助等、教育実習の守秘義務、危機管理

成績評価の方法

到達目標 1 を測定する実習校から送付される「栄養教育実習成績報告書」（40%）、栄養教育実習で使用した「栄養教育実習日誌」（20%）、到達目標 2 を測定するため、実習への参加状況（10%）、到達目標 3 を測定するため、栄養教育実習Ⅰであらかじめテーマを定めた「栄養教育実習課題レポート・報告書」（30%）、により評価する。

履修にあたっての注意

「学生便覧」の「教職課程履修要項」の中の、特に「教育実習履修の要件・手続き」などを参照のこと。しっかりと学習した上で実習に参加すること。

教科書

- 『中学校保健体育教科書』（東京書籍）
 『中学校家庭科教科書』（東京書籍）

教科書・参考書に関する備考

教科書は、独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。
 教職関係科目の教科書などを実習内で指示する。

授業のねらい

「介護等体験」とは、1998年4月に施行された「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教員職員免許法の特例等に関する法律」で行うことになった、学外での体験のことである。この法律によって、1998年度入学生から、小学校・中学校の教員免許を取得しようとする学生は、特別養護老人ホームなどの社会福祉施設と特別支援学校での介護等体験が義務づけられたのである。

到達目標

実際の体験を通じて、義務教育の現場で働く際に、人としての尊厳をお互いに尊重して社会連帯の意識を深める。

授業方法

介護等体験は、以下に見るように社会福祉施設と特別支援学校での体験である。よって、授業はオリエンテーションのみであり、そこでは講義とともにDVD視聴を行う。

事後において「介護等体験の記録」を書き、体験の総括を行う。

授業計画

介護等体験は、次の内容で構成される。

1) 事前指導

4月上旬 介護等体験に関する説明会
(社会福祉施設での介護等体験の申し込みの仕方の説明など)

?月 特別支援学校での介護等体験のオリエンテーション
(全体のそれと各体験校についてのそれを2度に分けて行う)

7月下旬 社会福祉施設での介護等体験のオリエンテーション

2) 社会福祉施設での介護等体験(5日間)～夏休み・冬休みのいずれかに行う。

3) 特別支援学校での介護等体験(2日間)

事前指導は、時間割にのっておらず、教職課程の授業もしくは、空きコマを利用して行う。これに参加しないものは介護等体験を受けることはできない。社会福祉施設の事前指導は夏休み前に、特別支援学校の事前指導は、体験1ヶ月前頃に行われるのが通常である。

5日間の社会福祉施設での介護等体験は、4月に学生の希望を大学が取りまとめ、北海道社会福祉協議会が体験先・実施時期を決定する。本学での実施時期は原則として、夏休み・冬休みの時期となる。

2日間の特別支援学校での介護等体験は、大学が教育委員会に書類を提出し、体験校と時期が5月中旬以降に決定する。昨年度の場合、6月上旬から10月末にかけて、2つの特別支援学校において6つのグループにわかれて行われた。今年度の場合どうなるのかは今のところ、未定である。

成績評価の方法

終了後、「介護等体験証明書」および「介護体験の記録」を必ず提出する。「介護等体験証明書」の提出を前提にして、「記録」の内容によって成績を判断する(100%)。

履修にあたっての注意

本体験は、教員採用選考検査を受けることを原則として、中学校の教員免許状を取得しようとする学生のために設けたものである。対外活動であることを十分認識し、責任をもった体験をしてほしい。

教科書・参考書に関する備考

参考書：ともに図書館の指定図書に多数あります。

参考書

『介護等体験ガイドブック フィリア』(ジ アース教育新社、2014年)

『第4版 よくわかる社会福祉施設』(全国社会福祉協議会、2015年)

『フィリアⅡ ルールとマナー』(ジ アース教育新社、2014年)

授業のねらい

小・中・高校における家庭科教育の目標と学習内容のつながりをもとに、生活を総合的にとらえた家庭科の授業を組み立てる力を身につける。また指導案作成や模擬授業を通して、学習目標を明確にし、その目標に向けた学習内容を組立てること、及び評価の観点に注目することの必要性を考察していく。

到達目標

- 1 家庭科教育の目標について理解し、指導案の作成に反映できる。
- 2 学習成果をどのように評価するのか考え、指導案作成に明示できる。
- 3 学習指導内容の理解を深めた教材研究と指導案の作成ができる。
- 4 教育実習に向けて模擬授業を組立て、実施することができる。

授業方法

1～3 回目は講義形式、4～15 回目は各自の教育実習の実施時期に対応して、学習指導案と教材作成および、模擬授業を行います。

受講者には、模擬授業の実施に向けて、事前・事後課題を出します（所要時間 90～120 分程度）。課題については、講義内に口頭で解説します。

授業計画

- 第1回 ガイダンス：家庭科は何を学ぶ教科か
- 第2回 小・中・高校家庭科における教育目標・内容の展開
- 第3回 小・中・高校家庭科における教育内容の継続性
- 第4回 学習指導案と研究教材の作成(1)：家族・家庭生活
- 第5回 学習指導案と研究教材の作成(2)：住分野
- 第6回 学習指導案と研究教材の作成(3)：食分野
- 第7回 学習指導案と研究教材の作成(4)：衣分野
- 第8回 学習指導案と研究教材の作成(5)：保育分野
- 第9回 学習指導案と研究教材の作成(6)：消費生活・生活環境分野
- 第10回 模擬授業(1)：家族・家庭生活
- 第11回 模擬授業(2)：住分野
- 第12回 模擬授業(3)：食分野
- 第13回 模擬授業(4)：衣分野
- 第14回 模擬授業(5)：保育分野
- 第15回 模擬授業(6)：消費生活・生活環境分野

成績評価の方法

- 到達目標 1 を測定する授業への参加状況（10%）
 到達目標 2 と 3 を測定する学習指導案と教材の内容（40%）
 到達目標 4 を測定する模擬授業（50%）

履修にあたっての注意

中等家庭科教育法Ⅰ・Ⅱを履修していること。
 これまでに様々な講義、実習及び演習で学んできた、家族、住、食、衣、消費生活等に関する知識をしっかりと活かせるように努めてください。

教科書・参考書に関する備考

参考書：別途指示します。

授業のねらい

福祉科教育法Ⅰの内容を踏まえ、教科「福祉」の各科目の目標と内容を確認するとともに、学習指導案の作成や教材研究・模擬授業等を通して、実際に授業を行うための知識や技能を身に付けることを目指します。

到達目標

- ・教科「福祉」の各科目の目標と内容を理解し、学習指導案を作成し模擬授業等を行うことができる。
- ・他の受講者の模擬授業を評価し、改善点を見つけることができる。

授業方法

- ・教科「福祉」の各科目の目標と内容を理解したうえで、学習指導案を作成し模擬授業等を行います。そのための事前事後打ち合わせが必要となります。
- ・第3回、第4回の授業では、グループ別で学習指導案を作成します。
- ・模擬授業終了後は、教員からのコメント、受講生同士の討議を行います。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 教科「福祉」学習指導の実践例とその分析
- 第3回 教科「福祉」学習指導案作成(1)「社会福祉基礎」グループ別で学習指導案作成
- 第4回 教科「福祉」学習指導案作成(2)「介護福祉基礎」グループ別で学習指導案作成
- 第5回 模擬授業とその評価・討議(1)「社会福祉基礎」
- 第6回 模擬授業とその評価・討議(2)「介護福祉基礎」
- 第7回 模擬授業とその評価・討議(3)「コミュニケーション技術」
- 第8回 模擬授業とその評価・討議(4)「生活支援技術」
- 第9回 模擬授業とその評価・討議(5)「介護過程」
- 第10回 模擬授業とその評価・討議(6)「介護総合演習」
- 第11回 模擬授業とその評価・討議(7)「介護実習」
- 第12回 模擬授業とその評価・討議(8)「こころとからだの理解」
- 第13回 模擬授業とその評価・討議(9)「福祉情報活用」
- 第14回 福祉系高等学校の今後
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況（50%）学習指導案作成、模擬授業（50%）で評価します。

履修にあたっての注意

本講義は「福祉科教育法Ⅰ」を履修していること。

本講義は模擬授業が主になりますので、事前に学習指導案、教材を準備し、必ず点検を受けてください。また、模擬授業の検討時には積極的に発言するよう心掛けてください。

教科書

- 『社会福祉基礎』（実教出版）
- 『介護福祉基礎』（実教出版）
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 福祉編』

参考書

- 介護福祉士養成講座編集委員会編『新・介護福祉士養成講座(1)～(15)』（中央法規）
- 大橋謙策『福祉科指導法入門』（中央法規）
- 川廷宗之『介護教育方法論』（弘文堂）

授業のねらい

学校での教育実習に赴く直前・直後の演習であることを鑑み、心構えだけではなく、これまで習得してきたスキルの確認と定着を図る。また、随時、履修者の教育実習が終了するため、自らの実習を振り返り、自省する。

到達目標

- ・指導案の書き方を確実に定着させる。
- ・実習後、教育実習での研究授業などを振り返り、反省点を発見することができる。

授業方法

- ・担当教員による説明を主として、講義を進めていく。
- ・講義中、いくつかの論点を担当教員が提示し、それについてグループごとに討議を行う。テーマは前週の講義内で提示するので、履修者は下調べをすること。
- ・毎回、所定の用紙に、自分の意見を記述し、講義を終える。
- ・用紙に書かれた内容は、次の講義でフィードバックを行う。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 実習校での授業範囲をもとにした指導案の作成
- 第3回 指導案の検討会
- 第4回 実習に向けた最終確認（スケジュール・校務分掌など）
- 第5回 教育実習に向けた自らの研究テーマの設定
- 第6回 現役学校教員による座談会
- 第7回 お礼状の書き方
- 第8回 教育実習の研究授業の振り返りと検討表(1) ※一回につき2名ごとに実習での研究授業のダイジェストを発表
- 第9回 教育実習の研究授業の振り返りと検討表(2) ※一回につき2名ごとに実習での研究授業のダイジェストを発表
- 第10回 教育実習の研究授業の振り返りと検討表(3) ※一回につき2名ごとに実習での研究授業のダイジェストを発表
- 第11回 教育実習の研究授業の振り返りと検討表(4) ※一回につき2名ごとに実習での研究授業のダイジェストを発表
- 第12回 教育実習の研究授業の振り返りと検討表(5) ※一回につき2名ごとに実習での研究授業のダイジェストを発表
- 第13回 教育実習の研究授業の振り返りと検討表(6) ※一回につき2名ごとに実習での研究授業のダイジェストを発表
- 第14回 教育実習に対する振り返り討論
- 第15回 総括

成績評価の方法

1. 指導案の作成：40%
2. 自らの教育実習に対する検討・反省：60%

履修にあたっての注意

学校での教育実習の直前の講義である。そのため、これまで以上に、自らの状況を真摯に振り返り、実習に臨むまでの時間を有意義に過ごしてほしい。

教科書

北海道私立大学・短期大学教職課程連絡協議会『教育実習の手引（第6版）』（学術図書出版社、2013、ISBN：978-4-7806-0184-8）

教科書・参考書に関する備考

教育実習 I A から継続して使用する。

授業のねらい

「教育実習Ⅱ」はこれまで修得した理論や技術を中学校、高等学校の教育現場に応用し実践的な体験をとおして検証する実践的な研究である。

到達目標

教職員として教育実践の場に生かすことのできる指導技術を習得することとともに、生徒に直接触れる場をとおして教育実践への意欲や指導技術を高めるとともに、教育愛、生徒理解等、教師としての基本的な資質を身につける。

授業方法

ねらいにもあるように、教育実習Ⅱは、教育現場で実際の教育活動を行うものである。そのため、大学における授業は行わずに、すべて実習校での実践となる。

授業計画

実習校での実践はおおよそ、下記のような流れとなる。

- 1 オリエンテーション（第1日目 それ以前に事前オリが行われる場合も多い）
- 2 観察実習（第2日目～ 指導教諭の授業を「観察」することをおして、「授業とは」「教育とは」を分析する実習である。学生は観察実習記録を書くこととなる）
- 3 参加実習（第2日目～ 上記の観察実習とは違い、授業中に「助手さん」的立場で、指導に当たる実習のことである。これについても、参加実習記録を書くこととなる）
- 4 授業実習（おおよそ2週間目～ 実際に教壇に立って、「教師」として授業を行う実習である。事前に「学習指導案」を作成し、それについて指導教諭の指導を受ける。また、事後にも反省を行い、次の授業実習に生かすこととなる）
- 5 研究授業（最終週の終わりあたり 実習校の先生・実習生及び大学教員の前で行う授業実習のこと。教育実習Ⅱの総仕上げとして、1時間の授業を行う。授業終了後には、反省会が開かれるのが普通である）

実習校によって日にちや観察・授業実習の回数は様々である。例えば、観察実習が中心で、授業実習があまり多くない学校がある。一方で、1週目より授業実習が始まり、観察実習はほとんど行わない学校もある。自分の希望と実習校の状況を勘案して、指導教諭と相談の上、上記の流れを決定する。なお、詳しい説明は、「教育実習Ⅰ A・B」で行う。

成績評価の方法

実習校から送付される「教育実習成績報告書」（40%）、教育実習Ⅰであらかじめテーマを定めた「教育実習課題レポート」（30%）、実習で使用した「教育実習日誌」（30%）で評価する。

履修にあたっての注意

『学生便覧』の「教職課程履修要項」の中の、特に「教育実習履修の要件・手続き」などを参照のこと。

授業のねらい

「教育実習Ⅲ」はこれまで修得した理論や技術を中学校の教育現場に応用し実践的な体験をとおして検証する実践的な研究である。

到達目標

教職員として教育実践の場に生かすことのできる指導技術を習得することとともに、生徒に直接触れる場をとおして教育実践への意欲や指導技術を高めるとともに、教育愛、生徒理解等、教師としての基本的な資質を身につける。

授業方法

教育実習Ⅱと同様に、教育現場で実際の教育活動を行うものである。そのため、大学における授業は行わずに、すべて実習校での実践となる。

授業計画

実習校での実践は、教育実習Ⅱと同様でおおよそ、下記のような流れとなる。

- 1 オリエンテーション（第1日目 それ以前に事前オリが行われる場合も多い）
- 2 観察実習（第2日目～ 指導教諭の授業を「観察」することをおして、「授業とは」「教育とは」を分析する実習である。学生は観察実習記録を書くこととなる）
- 3 参加実習（第2日目～ 上記の観察実習とは違い、授業中に「助手さん」的立場で、指導に当たる実習のことである。これについても、参加実習記録を書くこととなる）
- 4 授業実習（おおよそ2週間目～ 実際に教壇に立って、「教師」として授業を行う実習である。事前に「学習指導案」を作成し、それについて指導教諭の指導を受ける。また、事後にも反省を行い、次の授業実習に生かすこととなる）
- 5 研究授業（最終週の終わりあたり 実習校の先生・実習生及び大学教員の前で行う授業実習のこと。教育実習Ⅱの総仕上げとして、1時間の授業を行う。授業終了後には、反省会が開かれるのが普通である）

実習校によって日にちや、観察・授業実習の回数は様々であることは「教育実習Ⅱ」と同様である。

教育実習ⅡとⅢの違いは、取得免許の学校種による。中学校免許を取得する者は、「教育実習Ⅱ」及び「教育実習Ⅲ」を履修すること。高等学校免許のみを取得する者は、必ず「教育実習Ⅱ」を履修し、「教育実習Ⅲ」は選択となる。

よって、中学校免許・高等学校免許双方を取得する者は、「教育実習Ⅱ」「教育実習Ⅲ」の双方を履修することになる。詳しいことは、「教育実習ⅠA」で説明する。

成績評価の方法

実習校から送付される「教育実習成績報告書」(40%)、教育実習Ⅰであらかじめテーマを定めた「教育実習課題レポート」(30%)、実習で使用した「教育実習日誌」(30%)で評価する。

履修にあたっての注意

『学生便覧』の「教職課程履修要項」の中の、特に「教育実習履修の要件・手続き」などを参照のこと。

授業のねらい

本演習は、大学における教職課程の総決算である。そのため、教育実習を含め、四年間の教職課程を振り返り、自らが習得した教員としてのスキルを自ら把握することを目的としている。また、自らの教育実習を客観視するために、地域の施設を訪問し、様々な方々からの助言をいただく機会を設定する。

到達目標

1. 四年間の教職課程で習得したスキルを振り返り、不足点を把握し、今後の進路に繋げることができる。
2. 自らの教育実習と石狩市での様々な実践を比較し、その長所や改善点に関する自分の意見をもち、それらを表現できる。

授業方法

- ・担当教員による説明は最低限に抑え、討議を中心に演習と展開していく。
- ・毎回、所定の用紙に、自分の意見を記述し、演習を終える。テーマは前週の講義内で提示するので、履修者は下調べをすること。
- ・用紙に書かれた内容は、次の演習でフィードバックを行う。
- ・複数回、大学外の石狩市内の施設を訪問する。
- ・模擬授業や報告会の際の事前事後打ち合わせは必須となる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 自らのテーマから教育実習を振り返る。
- 第3回 地域施設を訪問(1)
- 第4回 地域施設を訪問(2)
- 第5回 地域施設を訪問(3)
- 第6回 地域施設を訪問(4)
- 第7回 地域施設の訪問を踏まえた指導案の作成
- 第8回 地域施設の訪問を踏まえた指導案の発表と修正
- 第9回 指導案をもとにした深い学びを意識した模擬授業①
- 第10回 指導案をもとにした深い学びを意識した模擬授業②
- 第11回 指導案をもとにした深い学びを意識した模擬授業③
- 第12回 指導案をもとにした深い学びを意識した模擬授業④
- 第13回 教育実習報告会 ※全員が、10分程度の持ち時間で報告を行う。(1)
- 第14回 教育実習報告会 ※全員が、10分程度の持ち時間で報告を行う。(2)
- 第15回 教育実習報告会 ※全員が、10分程度の持ち時間で報告を行う。(3)

成績評価の方法

1. 指導案：30%
2. 模擬授業：30%
3. 教育実習検討報告会の内容：40%

履修にあたっての注意

学校での教育実習の直後の講義である。そのため、これまで以上に、四年間の教職課程で習得した自らのスキルの長所、そして改善点を、恐れずに見なおしてほしい。
また、地域の施設訪問は、集中的に行うため、日程の調整を必要とすることを念頭に置いてほしい。

教科書・参考書に関する備考

適宜、紹介します。

授業のねらい

栄養教諭として最小限必要な資質・能力が身につけているかどうかを目標とする。子どもたちが将来にわたって健康に生活していけるようにするためには、子どもたちに対する食に関する指導を充実し、望ましい食習慣の形成を促すことが重要である。子どもの食に関する指導に対して各自なりの新たな興味や問題意識を持つことができるよう目指す。教育実習を通して学んできた栄養教諭に関する業務内容ならびに北海道産食材を用いた学校給食について、知識と技能を理解し、身につけることを目的とする。

到達目標

到達目標1：栄養教諭として授業を立案し、学級活動、給食時間、教科および総合的な学習の時間における学級担任や教科担任と連携した食の指導を行うことができる。養護教諭や学級担任と連携して、食物アレルギーなど個別指導ができる。

到達目標2：栄養教諭に関する知識を身につけ、学校給食を活用した授業計画を理解することができ、指導案の作成と模擬授業、履修カルテを活用して討議することができる。

授業方法

一年次より履修を開始した教職課程の授業の内容の理解度・定着度を把握するため、学生の発表を中心に、履修カルテを活用し、授業内容の確認を行う。不足する点があれば補い、教諭として必要な知識・技能、そして態度を習得する。各自、「食に関する指導案」の作成・模擬授業を行うこととして、討議を行う。

発表者はプレゼンテーションの方法や役割分担によって討議をまとめていく力を養う。

（ゲストスピーカーにより、講義・演習で学ぶ）受講にあたって、事前学習として各自レジュメ・指導案を作成し、人数分印刷して準備しておくことを課題とする（所要時間 60 分程度）。事後学習としてふりかえり・レポートを作成する（所要時間 60 分程度）。指導案・レポートは、演習内で口頭により、解説し、資料を配付する。

授業計画

- 第1回 はじめにー教職実践演習の意味ー
これまでの学修をふりかえる(1)ー履修カルテに基づいてー
- 第2回 これまでの学修をふりかえる(2)ー栄養教育実習の反省をもとにー
- 第3回 学生のグループ討議（教職の意義、授業、個別的な相談指導のどの分野について、発表を行うかの検討）
- 第4回 学生の発表(1)教職の意義、栄養教諭の役割・職務内容について
- 第5回 学生の発表(2)教科・特別活動等における食教育方法の課題（板書の構成）
- 第6回 学生の発表(3)教科・特別活動等における食教育方法の課題（板書の構成）
- 第7回 学生の発表(4)教科・特別活動等における食教育方法の課題（副教材の活用）
- 第8回 『学校給食衛生管理基準の解説』（村田）
- 第9回 学校における食に関する指導の指導計画（隈元）
- 第10回 学校給食における体験学習1
- 第11回 地域における体験学習2
- 第12回 模擬授業(1)（低学年）授業者の評価、聞き手の評価を各自提出
- 第13回 模擬授業(2)（中学年）授業者の評価、聞き手の評価を各自提出
- 第14回 模擬授業(3)（高学年）授業者の評価、聞き手の評価を各自提出
- 第15回 おわりにーさらなる栄養教諭教職課程の学習へ（履修カルテ）ー

成績評価の方法

到達目標1を測定する小レポート・レジュメ（30%）、到達目標2を測定する「食に関する指導案」作成（40%）、授業への参加状況（30%）により、評価する。

履修にあたっての注意

栄養教諭のための基礎知識については各自において学習しておくこと。レジュメやレポートの内容について、しっかりと学習した上で授業に参加すること。

教科書・参考書に関する備考

参考書：必要に応じて授業中に紹介・説明する。教科書：独自に作成したプリントを使用。授業時に配付する。

圖書館情報學課程

図書館情報学課程

本学図書館情報学課程は、図書館情報学を学び図書館の専門的業務に従事する「司書」または「司書教諭」となる資格を取得するのに必要な単位を修得するために開設された課程です。

〈司書に関する科目について〉

1. 資格の取得

司書に関する授業科目 25 単位以上を履修した学生には卒業時に図書館情報学課程の修了書が授与されます。

2. 授業科目

- ・ 授業科目は、必修科目と選択科目に分かれています。
- ・ 必修科目はすべて履修しなければなりません。
- ・ 選択科目は「図書館に関する科目」の中から 2 科目 2 単位を必ず履修しなければなりません。更に「図書館に関する科目」、「コミュニケーションに関する科目」、「資料に関する科目」の中から、1 科目 1 単位以上を履修しなければなりません。

3. 選択科目の読み替え科目について

学部、学科の専門科目で学ぶ知識を司書業務でも活用できるようにすること、また、履修単位の負担を軽減することを目的としています。(読み替え科目については、学生便覧に記載された図書館情報学課程の説明を参照してください)

- ・ 学科科目のうち(1)資料や出版流通を扱うもの、(2)コミュニケーションに関わるものとして図書館情報学課程科目の内容にふさわしいものが読み替えられています。
- ・ 読み替え科目は、他学部（場合によっては他学科）の学生は履修できないものもありますので注意してください。
- ・ 読み替え科目は、図書館情報学課程の単位としても、また学科科目の単位としてもカウントされます。

4. 単位を取り残した場合

この課程の履修資格は本学在学中に限ります。したがって卒業時に本課程の単位を修了できなかった者は履修資格を失いますので注意してください。ただし、留年者で本課程を

修了していない受講者は履修の継続が可能です。なお、取得できなかった科目は本課程の当該科目又は他大学の相当科目の科目等履習によって単位取得が可能です。

〈司書教諭に関する科目について〉

1. 資格の取得

司書教諭に関する授業科目 10 単位以上を履修した学生には卒業時に図書館情報学課程の修了書が授与されます。

2. 授業科目

- ・ 授業科目は、必修科目と履修可能な司書に関する科目に分かれています。
- ・ 必修科目はすべて履修しなければなりません。
- ・ 司書に関する科目はすべて任意に履修可能となっており、図書館に関する幅広い知識を得ることができます。

3. 単位を取り残した場合

この課程の履修資格は本学在学中に限ります。したがって卒業時に本課程の単位を修了できなかった者は履修資格を失いますので注意してください。ただし、留年者で本課程を修了していない受講者は履修の継続が可能です。なお、取得できなかった科目は本課程の当該科目又は他大学の相当科目の科目等履習によって単位取得が可能です。

授業のねらい

生涯学習および社会教育の本質と意義の理解を図り、関係する法律や国・地方自治体等の取り組み、学校教育・家庭教育との関連、並びに各種社会教育施設での実践に学びながら、専門的職員の役割や学習活動への支援の基本とその重要性を、具体的事例を通して理解する。

到達目標

なぜ生涯学習が必要なのか、そこで図書館はどのような役割を果たすことができるのかを自分の言葉で説明できるようにすることをめざす。

授業方法

授業は講義形式を中心とし、随所で受講者の体験や考えを引き出し、ディスカッションをまじえながら進めていく。

授業計画

- 第1回 はじめに～図書館情報学と生涯学習概論
- 第2回 生涯学習の理念と生涯学習教育のあゆみ
- 第3回 現代社会における生涯教育の意義と役割
- 第4回 学校教育・社会教育・家庭教育
- 第5回 生涯学習の内容と方法
- 第6回 生涯学習関連施設の役割～公民館など
- 第7回 生涯学習関連施設の役割～図書館
- 第8回 生涯学習関連施設の役割～博物館など
- 第9回 生涯学習における学習情報の種類とその提供
- 第10回 地域社会と学習の場～学習への支援と学習成果の評価と活用
- 第11回 まちづくりと生涯学習～企画発表
- 第12回 地域に根ざした生涯学習の実践～企画発表
- 第13回 生涯学習社会におけるこれからの図書館サービスとその役割～企画発表
- 第14回 生涯学習における図書館員と図書館利用者～企画発表
- 第15回 まとめ～生涯学習社会に向けて

成績評価の方法

定期試験（50％）レポート等の提出物（30％）授業への参加状況（20％）により評価する。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

教科書 とくに使用せず、必要に応じてプリント等を配布する。

参考書 講義の中で紹介する。

授業のねらい

社会の中での図書館の役割・位置を考えます。図書館情報学課程の受講者が学んだことをどのように生かしていくことができるか各自で考えていただく機会とします。

到達目標

- ・社会の中で図書館がどのような役割を担っているのかを理解すること
- ・将来のキャリアと図書館情報学の知識活用方法を考える機会とすること

授業方法

講義形式です。受け身にならないように授業理解を促す課題を毎回課します。

授業計画

- 第1回 図書館とは
- 第2回 図書館の法的基盤と図書館行政
- 第3回 「児童の権利条約」と図書館
- 第4回 図書館の役割(1)国立国会図書館と公共図書館
- 第5回 図書館の役割(2)大学図書館と専門図書館
- 第6回 図書館の役割(3)学校図書館
- 第7回 フィンランドの図書館(1)国立図書館と大学図書館の違い
- 第8回 フィンランドの図書館(2)公共図書館が混雑している理由
- 第9回 図書館で用いられる技術(1)
- 第10回 図書館で用いられる技術(2)
- 第11回 図書館とアーカイブズ
- 第12回 図書館と博物館
- 第13回 図書館に勤務する専門職
- 第14回 図書館情報学の知識が活用される場
- 第15回 社会における図書館の重要性

成績評価の方法

授業参加状況（30%）を重視し、授業時に行う課題（30%）とレポート・試験（40%）などにより評価します。

履修にあたっての注意

授業は休まずに出席してください。履修者の状況により授業内容の変更もあります。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

講義には投影資料および紙資料を用意します。投影資料は学内ネットワークにおいてアクセスできます。

授業のねらい

図書館の設置の根拠となる法律、関連する領域の法律、図書館政策について解説する。さらに読書活動、生涯学習支援、企業や起業家へのビジネス支援のほか、医療改革、司法改革などによる社会制度を実現するため、図書館の制度、経営、人材などの役割について検討する。また情報通信技術の発展と情報電子化の現状を理解し、図書館機能とその経営の意味を考える。

到達目標

現代における図書館制度及びその経営の全体についての理解を深める。
図書館についてその館種毎に自らテーマ研究を行って、その違いを論じあうことができる。

授業方法

授業の前半は以下の授業計画にあるテーマをもとに講義形式で行う。後半は館種別のグループ研究において、各自が関心を持つテーマをもとにグループ毎に研究課題を設定して、その成果を発表することで共有する。

授業計画

- 第1回 図書館の理念と社会的意義
- 第2回 社会の変化と図書館の変遷
- 第3回 ICTの進歩と図書館機能
- 第4回 図書館の経営と資格制度
- 第5回 都道府県立図書館とコミュニティ図書館
- 第6回 母体組織の図書館経営とサービス評価
- 第7回 図書館経営における指定管理者制度の導入
- 第8回 図書館を支える職能団体と学術団体
- 第9回 館種別の図書館機能の特性（グループ研究）(1)
- 第10回 館種別の図書館機能の特性（グループ研究）(2)
- 第11回 館種別の図書館機能の特性（グループ研究）(3)
- 第12回 館種別研究の課題発表（グループ研究）(1)
- 第13回 館種別研究の課題発表（グループ研究）(2)
- 第14回 館種別研究の課題発表（グループ研究）(3)
- 第15回 まとめ（グループ研究の相互評価）

成績評価の方法

授業の参加状況（30%）、定期試験（40%）及び提出物（30%）により総合的に評価する

履修にあたっての注意

グループ研究においては共同企画作業に積極的に協力・参加すること

教科書

今まど子・小山憲司『図書館情報学基礎資料』（樹村房、2016、ISBN：9784883672660）

教科書・参考書に関する備考

授業時に教科書及びプリントを配付する

参考ホームページ

講義の中で適宜紹介する

授業のねらい

今現在の図書館員・図書館業務に必要とされる基礎的な情報技術を習得するため、コンピュータ等の基礎、図書館業務システム、データベース、検索エンジン、電子資料などについて理解し体験します。

到達目標

図書館員として必要な情報技術の基礎を理解することが目標です。

授業方法

授業では、図書館で主に使用される最新技術、コンピュータ及び関連の知識を習得体験していきます。コンピュータの知識がほとんどないことを前提に、担当者が手伝いながらすすめていきます。

授業計画

- 第1回 コンピュータの作成・サーバの準備
- 第2回 ①メールやストレージの使い方 フォルダの作成
②html で自己紹介を書く
- 第3回 図書館の最新技術(1) ①コンピュータのしくみ
- 第4回 図書館の最新技術(2) ②ネットワークのしくみ
- 第5回 図書館の最新技術(3) ③データベースのしくみ
- 第6回 データベースの作成(1) サーバの MySQL にアクセス
- 第7回 データベースの作成(2) サーバの MySQL で検索・データの転送・一括入力など
- 第8回 データベースの作成(3) サーバの MySQL でメタデータを入力・データ作成
- 第9回 データベースの作成(4) サーバの MySQL でオリジナル検索を実際に作成
- 第10回 刊行におけるプログラム利用(1) 電子出版
- 第11回 刊行におけるプログラム利用(2) J-stage など
- 第12回 刊行におけるプログラム利用(3) 体験実習
- 第13回 デジタルアーカイブズの作成(1) 画像の整理と基本の理解
- 第14回 デジタルアーカイブズの作成(2) 各自のテーマで作成
- 第15回 デジタルアーカイブズの作成(3) 各自のテーマで作成

成績評価の方法

授業参加状況 (50%) を重視し、授業時に行う課題 (30%) とレポート (20%) により評価します。

履修にあたっての注意

授業は休まずに出席するようにしてください。

授業内容は履修者の状況により変更する場合があります。授業以外でも情報機器を用い積極的な復習をこころがけてください。

教科書

なし

授業のねらい

今現在の図書館員・図書館業務に必要とされる基礎的な情報技術を習得するため、コンピュータ等の基礎、図書館業務システム、データベース、検索エンジン、電子資料などについて理解し体験します。

到達目標

図書館員として必要な情報技術の基礎を理解することが目標です。

授業方法

授業では、図書館で主に使用される最新技術、コンピューター及び関連の知識を習得体験していきます。コンピュータの知識がほとんどないことを前提に、担当者が手伝いながらすすめていきます。

授業計画

- 第1回 コンピュータの作成・サーバの準備
- 第2回 ①メールやストレージの使い方 フォルダーの作成
②html で自己紹介を書く
- 第3回 図書館の最新技術(1) コンピュータのしくみ
- 第4回 図書館の最新技術(2) ネットワークのしくみ
- 第5回 図書館の最新技術(3) データベースのしくみ
- 第6回 データベースの作成(1) サーバの MySQL にアクセス
- 第7回 データベースの作成(2) サーバの MySQL で検索・データの転送・一括入力など
- 第8回 データベースの作成(3) サーバの MySQL でメタデータを入力・データ作成
- 第9回 データベースの作成(4) サーバの MySQL でオリジナル検索を実際に作成
- 第10回 刊行におけるプログラム利用(1) 電子出版
- 第11回 刊行におけるプログラム利用(2) J-stage など
- 第12回 刊行におけるプログラム利用(3) 体験実習
- 第13回 デジタルアーカイブズの作成(1) 画像の整理と基本の理解
- 第14回 デジタルアーカイブズの作成(2) 各自のテーマで作成
- 第15回 デジタルアーカイブズの作成(3) 各自のテーマで作成

成績評価の方法

授業参加状況 (50%) を重視し、授業時に行う課題 (30%) とレポート (20%) により評価します。

履修にあたっての注意

授業は休まずに出席するようにしてください。授業内容は履修者の状況により変更する場合があります。授業以外でも情報機器を用い積極的な復習をこころがけてください。

教科書

なし

授業のねらい

これまで図書館が扱う資料は、印刷資料に映像資料、マイクロ資料、電子資料など館内所蔵を前提にしたものであったが、20世紀後半からはインターネットが急速に発達しネットワーク情報資源の普及が加速している。こうした背景から、これまでの「図書館資料論」は「図書館情報資源概論」となった。ここでは、その類型と特質、選択・収集・保管、生産と流通などの基礎的な知識を学ぶことが狙いである。

到達目標

- ① 図書館情報資源の類型を挙げ、それぞれの特質を説明できる。
- ② コレクション構築とそのプロセスを理解し、選択・収集・保管において注意すべき点を挙げることができる。
- ③ 情報資源の生産と流通の仕組みを理解し説明できる。
- ④ 図書館が扱う情報資源が変化してきている現状を説明できる。

授業方法

指定テキストを用いて授業を進める

授業計画

- 第1回 図書館情報資源とは何か
- 第2回 図書の類型と特質
- 第3回 図書以外の印刷資料の類型と特質
- 第4回 非印刷資料の類型と特質
- 第5回 電子資料とネットワーク情報資源の類型と特質
- 第6回 政府刊行物と地域資料の類型と特質
- 第7回 専門分野の情報資源と特質
- 第8回 コレクション構築とそのプロセス
- 第9回 資料選択のプロセス
- 第10回 資料収集のプロセス
- 第11回 資料の蓄積・保管のプロセス
- 第12回 コレクションの評価・再編のプロセス
- 第13回 情報資源の生産と流通
- 第14回 情報資源の利活用
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業参加状況（30%）と都度指定する課題（30%）及び定期試験（40%）の総合評価とする。

履修にあたっての注意

事前・事後学習においては、指定された教科書や参考書に限らず、他の文献や資料も参考にすること。

教科書

高山正也『図書館情報資源概論』（樹村房、2012、ISBN：9784883672080）

参考書

馬場俊明『図書館情報資源概論』（日本図書館協会、2012、ISBN：9784820412175）

授業のねらい

情報アクセスを容易にするには情報資源組織化の標準化とその改善工夫が必要です。また対象資料に応じ組織化の方法論などの使い分けの必要も生じます。情報資源組織化の基本を考えます。

到達目標

実務での情報資源組織化の考え方の基本を理解します。情報サービス演習 AB など授業での実習の準備をすることになります。

授業方法

講義形式です。受け身にならないように内容理解を確認する課題を毎回課します。

授業計画

- 第1回 情報資源組織化の目的
- 第2回 情報アクセスと情報資源組織化
- 第3回 目録法の基本
- 第4回 日本目録規則 (NCR)
- 第5回 電子目録とメタデータ
- 第6回 主題組織法
- 第7回 分類法(1)図書の分類の歴史と分類法の種類
- 第8回 分類法(2)日本十進分類法 (NDC) の概要
- 第9回 自然語・シソーラス
- 第10回 件名標目表
- 第11回 書誌コントロール
- 第12回 アーカイブズの分類
- 第13回 アーカイブズの目録作成
- 第14回 アーカイブズの配架と出納
- 第15回 情報資源組織化の意義

成績評価の方法

授業への参加状況 (50%)、レポート (50%) などにより評価します。

履修にあたっての注意

履修に先立ち、日常生活における「資源」の組織化を考えてみましょう。例えば冷蔵庫内の管理では、どのような「組織化」をしているのでしょうか。どうして牛乳が誰でもすぐに取りだせるのでしょうか。考えてみましょう。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

毎回、レジュメを配布する予定です。レジュメの扱いは最初の授業でご説明します。

参考書

田窪直規『改訂 情報資源組織論』（樹村房、2016、ISBN：9784883672592）

j0441・j0442

図書館施設論

担当教員：下田 尊久

1単位 前期：人間生活学部・後期：文学部

授業のねらい

図書館のサービスや活動の場となる施設について、その空間を含めた構成要素をビジュアルな形で考えることによって、これまで学んだ図書館システムの理解をさらに深める。

到達目標

図書館の施設について、その設計に反映できる構成要素を多面的に検証し、これまで学んだ図書館システムの理解を深めることをめざす。

授業方法

テーマを設定し、関心のある図書館あるいは類似の機能を持つ組織について、自ら設定したテーマに基づき訪問又は Web 上で調査し、その結果得られた成果を発表し共有する。

授業計画

- 第1回 はじめに（場としての図書館）
- 第2回 図書館機能と建築計画
- 第3回 構成要素(1)サービス網とサービス水準
- 第4回 構成要素(2)建築規模と動線
- 第5回 構成要素(3)利用、業務と外部の環境
- 第6回 構成要素(4)閲覧・学習スペース
- 第7回 構成要素(5)家具とサイン
- 第8回 構成要素(6)書架・所蔵スペース
- 第9回 構成要素(7)インターネット環境
- 第10回 構成要素(8)危機管理－防災と犯罪防止－
- 第11回 図書館建築事例の検証(1)
- 第12回 図書館建築事例の検証(2)
- 第13回 図書館建築に向けた提案(1)
- 第14回 図書館建築に向けた提案(2)
- 第15回 施設としての図書館（総括）

成績評価の方法

授業参加状況（30%）を重視する。また都度指定する課題（30%）及び最終レポート又は定期試験（40%）を行いその総合評価とする

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

参考文献、参考 web サイトは授業の中で都度紹介する

参考書

植松貞夫『図書館施設論』（樹村房、2014、ISBN：9784883672127）
福本徹『図書館施設特論』（学文社、2012、ISBN：9784762021992）

授業のねらい

図書館サービスは、利用者を対象とする図書館の基本的な機能である。そのサービスを考えることは図書館の存在意義あるいは使命と目的を考えることから始まる。そこでこの授業では、各種図書館のサービス内容を概観し、それぞれのサービスの果たす役割を考察することで図書館の使命に対する理解を深める。

到達目標

図書館の使命とサービスを理解し、図書館サービスの基本的なあり方を自ら論じたり提案したりすることが出来る。

自ら問題設定をしてグループによるテーマ研究を行いその成果を発表する。

授業方法

「図書館制度・経営論」で共有したテーマ研究に基づいて各種図書館が地域社会においてどのような役割を果たしているのか考えていく。

さらに実際に情報提供サービスを検証し、情報マップの作成や各種団体と協働でサービスモデルを提案する。

授業計画

- 第1回 図書館の機能とサービス（グループ研究）
- 第2回 図書館サービスの制度と役割（グループ研究）
- 第3回 図書館の理念とサービス基準（グループ研究）
- 第4回 地域における図書館サービス（グループ研究）
- 第5回 公共経済学からみた図書館サービス
- 第6回 資料提供サービス(1)：意義と概要（グループ研究）
- 第7回 資料提供サービス(2)：種類と内容（グループ研究）
- 第8回 利用者サービス(1)：利用サービス空間の整備
- 第9回 利用者サービス(2)：利用対象者別のサービス
- 第10回 著作権と公共貸与権
- 第11回 利用記録とプライバシーの保護
- 第12回 情報提供サービス(1)：提供情報のマッピング
- 第13回 情報提供サービス(2)：提案内容の展示発表（学内）
- 第14回 情報提供サービス(3)：公開授業によるステークスホルダーへの提案（学外）
- 第15回 成果のまとめ

成績評価の方法

授業参加度（30％）レポート（30％）定期試験（40％）の総合評価とする

履修にあたっての注意

グループ研究の成果をもとに授業内の議論に積極的に参加すること

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜プリント配布

参考書

宮部頼子編『図書館サービス概論』（樹村房、2012、ISBN：9784883672042）

小田光宏編著『図書館サービス論（JLA 図書館情報学テキストシリーズ2/3）』（日本図書館協会、2010、ISBN：9784820409175）

授業のねらい

情報化社会の中で成長する現代の子どもたちにとって図書館はさまざまな本と出会う大切な場所であり、生涯にわたって学ぶ力を身につける場でもある。子どもたちの読書能力や発達状況に応じた児童サービスの役割や意義、方法、児童資料の特性などを学び、実践的な指導法を具体的に考える。

到達目標

- (1) 子どもの発達状況に応じた読書の役割を理解し、児童サービスに対する知識を習得する。
- (2) 児童資料の種類と特性を理解し、子どもと本を結びつける方法を習得する。
- (3) 児童を取り巻く読書環境について学び、発達段階に応じたサービスの実践を通して多様な児童用図書に触れる。

授業方法

乳幼児、児童、ヤングアダルトを対象にした図書館サービスの理念、意義、方法、評価について具体的な事例を通して解説する。グループ別に演習を行う。教科書以外にも必要な資料を提示していく。

授業計画

- 第1回 児童図書館、児童サービスの概要
- 第2回 図書館の発展と子どもの読書活動の動向
- 第3回 児童サービスの資料①—絵本
- 第4回 児童サービスの資料②—フィクション・ノンフィクション
- 第5回 児童資料の形成と管理
- 第6回 児童資料の実際①—資料提供・情報サービス
- 第7回 児童資料の実際②—乳幼児サービス
- 第8回 児童資料の実際③—ヤング・アダルト
- 第9回 児童資料の実際③—特別支援の必要な子どもへのサービス
- 第10回 児童サービスの実際①—読み聞かせ・ストーリーテリング
- 第11回 児童サービスの実際②—ブックトーク他
- 第12回 児童サービスの実際③—書評・ブックリスト
- 第13回 児童サービスの実際④—学習支援としてのレファレンス・サービス
- 第14回 読書環境の整備—運営・施設設備・担当者の役割
- 第15回 読書活動の推進—公共図書館と学校・地域との連携、協力

成績評価の方法

到達目標 1, 2, 3 平常点 (リアクションペーパー・小テスト) 50%
 到達目標 2 は主に演習 (30%)
 到達目標 3 は主にレポートと演習 (20%)

履修にあたっての注意

子どもたちの読書意欲を喚起するにはどのような方法が効果的なのか、問題意識をもって、図書館や書店で事前観察しておくことが望ましい。

教科書

堀川照代 編著『『児童サービス論』(JLA 図書館情報学テキストシリーズⅢ-6) (日本図書館協会、2014)

教科書・参考書に関する備考

講義の中で随時紹介する。

参考書

赤星隆子・荒井督子 編著『児童図書館サービス論』(理想社、2012.4、ISBN: 978-650-01111)

授業のねらい

利用者が図書館において情報・資料に確実にアクセスできるような資料組織化の技術を学びます。主題分析の基礎を学び、日本十進分類法（NDC）を用いた分類演習を行います。

到達目標

図書の主題を把握し、日本十進分類法（NDC）により補助表（固有・一般）を用いて分類記号を付与することができるようになります。

授業方法

配付資料による説明と演習を繰り返し、資料組織化の実際を理解できるように進めます。

授業計画

- 第1回 分類作業の必要性
- 第2回 資料の主題決定
- 第3回 分類作業の実際
- 第4回 NDCの構造を理解する
- 第5回 分類規程の適用
- 第6回 決め方の単純な本の分類をする(1)
- 第7回 決め方の単純な本の分類をする(2)
- 第8回 言語に関する本の分類
- 第9回 地理・歴史に関する本の分類
- 第10回 文学に関する本の分類
- 第11回 複雑な形式をもった本の分類
- 第12回 伝記・作家研究・人物研究の本の分類
- 第13回 複雑な主題をもった本の分類
- 第14回 主題を持たない本の分類
- 第15回 習得内容の確認・試験

成績評価の方法

授業への参加状況（30%）、定期試験と提出物（70%）により総合的に評価します。

履修にあたっての注意

授業内容について状況（履修者の興味関心など）を見て予定を変更することはあります。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

毎回、プリントを配付します。

授業のねらい

21世紀に入り、情報記録の媒体とコミュニケーションツールは多様化し、情報量は膨張し続けている。この授業では図書館などの情報提供の場において利用者が確実かつ効率的に情報にアクセス出来る環境を構築する技術の基礎を学ぶ。図書館において用いられてきた目録規則による組織化の原理と目録作成演習による書誌コントロールの基礎的スキルを身につける。

到達目標

- ①前期の分類法の知識をもとに BSH 等を用いて件名標目を付与することができる。
- ②NCR 等を用いて情報資源の書誌的な把握を適切に行い、第2次水準（標準）のカタログ（目録）を作成することができる。
- ③NACSIS - CAT の目録情報の構成を理解し、項目ごとの情報内容を理解できる。
- ④web 上の情報源におけるメタデータの書誌的な理解ができる。

授業方法

教室内に常備された NCR および BSH を貸与し、演習のツールとして用いることで習熟をはかる。
web 上のマニュアルおよび配付資料により演習を繰り返し、組織化の実際を理解できるように進める。

授業計画

- 第1回 記述目録法の基礎(1)－目録規則
- 第2回 記述目録法の基礎(2)－記述の単位と順序
- 第3回 記述目録法の基礎(3)－書誌的事項の記述の範囲と書誌階層
- 第4回 記述目録法の基礎(4)－主題の取扱と目録作業の実際
- 第5回 記述目録の演習(1)－書誌情報の書き方と書誌事項における区切り記号
- 第6回 記述目録の演習(2)－書誌記述の情報源と記述の順序
- 第7回 記述目録の演習(3)－資料種別による書誌記述の違い I
- 第8回 記述目録の演習(4)－資料種別による書誌記述の違い II
- 第9回 記述目録の演習(5)－NII コーディングマニュアル I
- 第10回 記述目録の演習(6)－NII コーディングマニュアル II
- 第11回 記述目録の演習(7)－NII コーディングマニュアル III
- 第12回 記述目録の演習(8)－件名標目とメタデータ
- 第13回 記述目録の演習(9)－件名標目とメタデータ
- 第14回 記述目録の演習(10)－現代における記述の意味
- 第15回 情報資源の組織化（総括）

成績評価の方法

授業参加状況（30%）と都度指定する課題（30%）及び定期試験（40%）の総合評価とする。

教科書

和中幹雄、山中秀夫、横谷弘美共著『情報資源組織演習 新訂版』（JLA 図書館情報学テキストシリーズ3 / 塩見昇[ほか]編集、10）（日本図書館協会、2016.3）

教科書・参考書に関する備考

教科書のほか教室常備の NCR と BSH 及び web 上にあるマニュアルやプリントを適宜配布し演習を行う。

参考書

- 『BSH 基本件名標目表 第4版』（日本図書館協会、1999、ISBN：4820499122）
『NCR 日本目録規則 1987 版 改訂三版』（日本図書館協会、2006、ISBN：4820406027）

授業のねらい

これまでの学びから図書館サービスを提供する様々な館種、機関、団体における図書館機能および図書館員の役割について考える。また、情報社会における人々の情報収集行動や選択評価に必要な情報リテラシーとは何かを考える。図書館の課題と図書館員に求められる専門性や資質について多角的に考えていく。

到達目標

議論のなかで得られた自ら描く「これからの図書館像」を論理だてて明示することが出来る。

授業方法

授業は、始めにこれまで学んだ図書館の諸相から検討すべき課題を掘り起こし、選んだテーマごとに議論をしていく。

授業計画

- 第1回 現代社会における図書館の環境
- 第2回 図書館があつかう情報資源の多様性
- 第3回 学校教育と図書館
- 第4回 地域社会と図書館
- 第5回 研究活動と図書館
- 第6回 行政と図書館
- 第7回 行政資料の保存
- 第8回 医療サービスと図書館
- 第9回 生涯学習と図書館
- 第10回 裁判員制度と図書館
- 第11回 企業活動と図書館
- 第12回 成果の発表による問題提起と議論(1)
- 第13回 成果の発表による問題提起と議論(2)
- 第14回 成果の発表による問題提起と議論(3)
- 第15回 問題提起と議論の総括

成績評価の方法

授業への参加状況 (30%)、小レポートの提出 (30%)、最終課題 (40%) により総合的に評価する。

履修にあたっての注意

事前に提供する情報資源に事前に目をとおして授業に臨むこと

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

毎回プリントを配布する。

授業のねらい

現行の目録規則である『日本目録規則 1987年版改訂第3版』の改訂版として、『日本目録規則 2018年版』が2018年12月に刊行される予定である。この授業では、目録規則が改訂されるに至った背景と、新しい目録規則によって書誌情報がどのように変わろうとしているのか、を考える。

到達目標

新しい目録規則の特徴を説明できる。
新しい目録データの技術的基礎を理解する。

授業方法

おもに講義とし、随時演習も行う。演習後に解説する。
適宜リアクションペーパーを配布し、質問には次回の授業で回答する。
なお、各回の内容は適宜変更することがあり得る。

授業計画

- 第1回 これまでの目録規則：『国際標準書誌記述 (ISBD)』、『英米目録規則 (AACR 2) 第2版』、『日本目録規則 (NCR) 1987年版』
- 第2回 書誌データの記録：MARC21、CATP
- 第3回 概念モデル：『書誌レコードの機能要件 (FRBR)』
- 第4回 新しい目録規則：『資源の記述とアクセス (RDA)』、『日本目録規則 (NCR) 2018年版』
- 第5回 図書資料の書誌データ
- 第6回 継続資料の書誌データ
- 第7回 和漢古書の書誌データ
- 第8回 音楽資料の書誌データ
- 第9回 映像資料の書誌データ
- 第10回 文書、博物資料の書誌データ
- 第11回 書誌データの記録：XML、RDF
- 第12回 つながるデータ：LOD
- 第13回 書誌データの記録：BIBFRAME
- 第14回 新しい概念モデル：IFLA LRM
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

リアクションペーパー (30%)、適宜実施する小テストとまとめの回でのテスト (70%)

履修にあたっての注意

あらかじめ参考書を読んでおくこと (5時間程度)。理解できないところは授業中およびリアクションペーパーで質問を受け付ける。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

授業時にプリントを配布する。

参考書

上田修一・蟹瀬智弘『RDA 入門』(日本図書館協会、2014、ISBN : 978-4-8204-1319-6)

授業のねらい

記録管理の理解はあらゆる活動の場で必要となります。アーカイブズは本来、記録管理の活動と密接に関わる単語です。授業ではアーカイブズの基本的な考え方を学び、情報アクセス全般の理解を目指します。主に人文社会科学分野の資料を学部生として、将来は図書館員として扱えるようになるだけでなく、日常生活における情報整理に必要とされる考え方の理解も目指します。

到達目標

- ・アーカイブズと図書館の違いを理解すること
- ・日常生活における整理技術の基本を理解すること
- ・情報の整理のされ方を学ぶことで情報アクセスのスキルを向上させること

授業方法

講義形式です。受け身にならないように授業理解を促す課題を毎回課します。

授業計画

- 第1回 アーカイブズとは
- 第2回 アーカイブズと図書館の違い
- 第3回 日常生活とアーカイブズ ファイリングの考え方
- 第4回 カタログの考え方と電子目録
- 第5回 記録のライフサイクルと記録継続論
- 第6回 評価選別理論 「歴史的」資料とは
- 第7回 スウェーデンのアーカイブズ
- 第8回 フィンランドのアーカイブズ
- 第9回 フィンランドの中世カトリック教会断簡資料
- 第10回 アーカイブズ法制 情報公開法の考え方
- 第11回 アーカイブズ法制 個人情報保護法の考え方
- 第12回 アーカイブズ法制 公文書管理法の考え方
- 第13回 国立公文書館所蔵資料の利用
- 第14回 貴重資料の利用(1)
- 第15回 貴重資料の利用(2)

成績評価の方法

授業参加状況（30%）を重視し、授業時に行う課題（30%）とレポート・試験（40%）により評価します。

履修にあたっての注意

授業は休まずに出席してください。履修者の状況により授業内容の変更もあります。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

講義には投影資料および紙資料を用意します。投影資料は学内ネットワークにおいてアクセスできます。

授業のねらい

情報化社会における図書館情報サービスのあり方という視点から今日の図書館を考える。情報探索行動や探索プロセスを踏まえ、レファレンスサービスや情報検索サービスなど伝統的な図書館サービスによる情報ニーズへの対応や現代の情報環境における新たな情報収集行動に対する情報発信サービスについてその有効性を探る。

到達目標

図書館情報学課程で学んできた現代社会における図書館が果たす役割を考える。図書館における情報サービスとは何かについて自分の考えを根拠を持って論じることができるようになること。

授業方法

授業は以下の授業計画にあるテーマをもとに主に講義形式で行うが、なるべく議論なども行えるように時間配分を工夫する。

授業計画

- 第1回 現代社会の情報サービスと図書館
- 第2回 図書館における情報サービスの理念
- 第3回 情報サービスの基礎(1)：レファレンスサービスと利用案内
- 第4回 情報サービスの基礎(2)：レフェラルサービスとカレントアウェアネスサービス
- 第5回 情報サービスの基礎(3)：データベースサービス
- 第6回 情報サービスの展開(1)：利用者支援サービスの可能性
- 第7回 情報サービスの展開(2)：主題情報の専門性に関わるサービスの可能性
- 第8回 情報サービスの展開(3)：情報源の構築と評価
- 第9回 図書館サービスにおける新しい情報源(1)：電子メディア情報源の進化
- 第10回 図書館サービスにおける新しい情報源(2)：学術情報ポータルと機関リポジトリ
- 第11回 情報ニーズと情報検索：情報探索行動と情報検索プロセス
- 第12回 web 情報源(1)インターネット検索基礎
- 第13回 web 情報源(2)インターネット情報源の進化
- 第14回 図書館情報サービスの現状と課題
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業参加度（30%）、中間レポート（30%）及び定期試験または最終課題（40%）の総合評価とする

履修にあたっての注意

授業で取り扱った理論などを紹介する文献についてなるべく多く目を通すように習慣づけてください

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

参考文献および web サイトは、授業のなかで適宜紹介する

授業のねらい

図書館が行う情報サービスに関する知識や技能を実践的に学びます。実際にさまざまな情報資源を活用しつつ、情報検索、事例データベースの作成、レファレンスツールの作成を行うことで、体験を通じて実務能力を高めます。あわせて、必要な情報技術や情報機器の扱い方についても学んでいきます。

到達目標

情報サービスの質を高めるための実践的な力や感覚を身に付けます。
情報機器や各種ツールを活用する力を身に付けます。

授業方法

主に PC 教室で実務演習をし、適宜、成果発表を行います。

授業計画

- 第1回 文献管理ツールの活用
- 第2回 学術情報データベース (1)
- 第3回 学術情報データベース (2)
- 第4回 図書情報の検索 (1)
- 第5回 図書情報の検索 (2)
- 第6回 多言語環境
- 第7回 辞書・文字情報
- 第8回 古典籍・古文書・古写本
- 第9回 歴史・人物
- 第10回 自然科学
- 第11回 地域情報
- 第12回 マルチメディア資料 (1)
- 第13回 マルチメディア資料 (2)
- 第14回 レファレンスツールの作成と相互評価 (1)
- 第15回 レファレンスツールの作成と相互評価 (2)

成績評価の方法

成果発表 (40%)、相互評価 (30%)、参加状況 (30%) によります。

履修にあたっての注意

これまでの図書館情報学課程で学んだ知識や技術を活用し、実際に図書館員になったつもりで実習に臨んでください。主に PC 教室で行いますが、私物パソコンの持ち込みも可能です。各回の内容に関しては、履修者の状況に応じて変更することもあります。

教科書

なし

参考書

原田智子『改訂 情報サービス演習』（樹村房、2016、ISBN：9784883672677）

授業のねらい

前期の内容を踏まえ、後期は、データベースの種類とその特徴を概観し、具体的なテーマ検索によって各々の検索エンジンやデータベースを扱います。図書館における情報提供サービスのために必要なスキルを高めます。

到達目標

後期は、自らの関心に基づき探索テーマの設定をすることが出来るようになること、情報収集に相応しい検索手段を選択し、効率よく使いこなすことが出来る能力を確実にすることをめざします。

授業方法

実習前には必要な説明を行い、繰り返し情報アクセスの練習をしていきます。インターネット環境および学内ネットワークサービスと学内図書館サービスを適宜利用し、その効果的利用法を修得します。必要があれば情報資源組織化の復習を適宜行い、情報アクセスの基本を確認します。

授業計画

- 第1回 図書館における情報サービス
- 第2回 情報検索の基礎(1)：情報検索の対象と検索タイプ
- 第3回 情報検索の基礎(2)：検索における基本的な考え方
- 第4回 情報発信(1)：Web上のデータの仕組み
- 第5回 情報発信(2)：Web上のデータの作成方法
- 第6回 データベース検索の基礎：Webサイトと検索エンジン
- 第7回 データベース検索の応用(1)：図書情報の特徴と利用法
- 第8回 データベース検索の応用(2)：雑誌文献データの検索 ①
- 第9回 データベース検索の応用(3)：雑誌文献データの検索 ②
- 第10回 データベース検索の応用(4)：図書情報の特徴と利用法
- 第11回 データベース検索の応用(5)：新聞記事データの特徴と検索 ①
- 第12回 データベース検索の応用(6)：新聞記事データの特徴と検索 ②
- 第13回 図書館間相互サービスと図書館全体の利用・保存の考え方
- 第14回 情報サービス実践(1)
- 第15回 情報サービス実践(2)

成績評価の方法

授業参加状況 (30%)、授業での課題提出 (30%) 及びレポート2回 (40%) の総合評価とします。

履修にあたっての注意

授業内容について状況を見て予定を変更することはあります。

教科書

なし

授業のねらい

学校図書館は学校で実施されるすべての教育活動と関わりをもっている。学校教育における学校図書館の果たす役割、理念、教育的意義など、学校経営と学校図書館のかかわりに関する基本的事項を学ぶ。また、学校図書館が有効に機能するための専門職員制度、学校図書館を支える法律などについても学ぶ。

到達目標

- ①学校図書館の理念と教育的意義を理解している。
- ②教育行政と学校図書館の関係を理解している。
- ③司書教諭と司書の具体的な任務と職務を理解し説明することができる。
- ④学校図書館活動を理解し説明することができる。

授業方法

講義を中心に、適宜ディスカッションやグループトークなども取り入れる。

授業計画

- 第1回 学校図書館の理念と教育的意義
- 第2回 学校図書館の歴史：日本
- 第3回 学校図書館の歴史：アメリカ・
- 第4回 教育行政と学校図書館
- 第5回 教育行政と学校図書館
- 第6回 教育課程と学校図書館
- 第7回 校内体制の構築と教職員との協働
- 第8回 学校図書館の経営
- 第9回 学校図書館の施設・設備
- 第10回 学校図書館のメディア・情報資源
- 第11回 司書教諭・学校司書の任務と職務
- 第12回 司書教諭・学校司書の任務と職務
- 第13回 学校図書館活動（小・中学校）
- 第14回 学校図書館活動（高等学校・特別支援
- 第15回 学校図書館の課題と展望

成績評価の方法

授業の参加状況（30%）平常点（リアクションペーパー・小テスト）（50%）演習（30%）を総合的に評価する。

履修にあたっての注意

学校図書館に関わるニュースなどはチェックして情報収集しておくこと、

教科書

中村百合子 編著『学校経営と学校図書館（司書教諭テキストシリーズⅡ－1）』（樹村房、2015年、ISBN：978-4-88367-251-6）

参考書

野口武悟・前田稔 編著『改訂新版 学校経営と学校図書館』（放送大学教育振興会、2017年、ISBN：978-4-595-31753）

塩見昇 編著『学校教育と学校図書館（学校図書館論1）新訂3版』（教育史料出版会、2016年、ISBN：978-4-87652-536-2）

授業のねらい

読書は豊かな人間性や世界観などを育む上で重要な役割をはたす。したがって書物などの読書を通して、その魅力にふれることは、社会人としての自己形成を図る上でかなり大きな意味をもつ。そこで本科目では読書活動の重要性や発達段階に応じた読書指導のあり方などを、さまざまな具体的事例を通して学ぶ。同時に読書資料の種類や特性などを理解し、学校図書館やその他の図書館が子どもの読書にはたす役割についても考える。

到達目標

読書の意義を理解し、読書資料や図書館の役割をふまえながら、読書につながる環境をどのように構築したらよいかを考えることができる。

授業方法

講義形式を主とし、各テーマにおよび内容に沿いながら、折にふれ意見交換や個人発表などを行う。

授業計画

- 第1回 講義のねらいと展開
- 第2回 読むということ
- 第3回 現代における読書状況
- 第4回 子どもの読書の現状とその背景
- 第5回 発達段階と読書
- 第6回 学校図書館メディアの種類と特性
- 第7回 読書資料の種類と特性
- 第8回 読書資料をめぐる今日的状況
- 第9回 学校図書館における読書活動の種類と特性
- 第10回 学校図書館における読書活動の可能性
- 第11回 読書指導の方法
- 第12回 家庭、地域、公共図書館その他との連携
- 第13回 生涯学習と図書館
- 第14回 司書教諭の役割
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

定期試験（50％）レポート等の提出物（30％）授業への取り組み方（20％）により評価する。

履修にあたっての注意

自身の読書歴（本・雑誌・新聞その他）およびこれまでにかかわった学校図書館や公共図書館などについての体験をふり返しておく。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

教科書
とくに使用せず、必要に応じてプリント等を配布する。
参考書
講義の中で紹介する。

授業のねらい

情報化が進む現代社会の中で、情報メディアが学校で果たす役割を中心に考えます。レファレンスサービスや情報検索サービスを活用した情報収集と情報発信についても学びます。

到達目標

情報メディアを活用した学校図書館の情報サービス機能と司書教諭の役割について理解し、情報活用能力を高めます。

授業方法

情報検索の練習など活用方法を体験しつつ学びます。

授業計画

- 第1回 学校図書館の情報化
- 第2回 司書教諭とメディア専門職
- 第3回 高度情報化社会における学校図書館
- 第4回 情報メディアの特性と選択
- 第5回 視聴覚メディアの活用
- 第6回 学校図書館における情報の検索(1)
 - ・レフェラルサービスとカレントアウェアネスサービス
 - ・オンライン検索とオンディスク検索
- 第7回 学校図書館における情報の検索(2)
 - ・情報ニーズと情報探索行動
 - ・パスファインダー
- 第8回 データベースと情報検索(1)
 - ・情報探索と情報検索
- 第9回 データベースと情報検索(2)
 - ・情報検索の実際 (NDL - OPAC、CiNii)
- 第10回 インターネットによる情報活用(1)
 - ・検索サイトの利用技術
- 第11回 インターネットによる情報活用(2)
 - ・インターネット利用の問題点
- 第12回 インターネットによる情報発信(1)
 - ・Web サイト上の利用技術
- 第13回 インターネットによる情報発信(2)
 - ・リンク集の作成
- 第14回 インターネットによる情報発信(3)
 - ・学校 Web サイトの作成・公開
- 第15回 学校メディアと著作権

成績評価の方法

授業への参加状況 (30%)、レポート・課題提出 (70%) により総合的に評価します。

履修にあたっての注意

授業内容について状況 (履修者の興味関心など) を見て予定を変更することはあります。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

毎回プリントを配布します。

L0041

学校図書館メディアの構成

担当教員：平井 孝典

2単位 前期

授業のねらい

学校図書館は学校教育において積極的に機能する必要があります。学校図書館におけるメディアの種類やその特性、さらにメディアの組織化（目録、分類）、ファイリング・システムなど一点資料の整理方法・考え方についても学びます。

到達目標

児童・生徒への学習支援及び教職員へのサポートが可能となるように、学校図書館におけるメディアの構成の意味を理解し、活用する技術の基礎を理解します。

授業方法

主として配付資料による講義を展開します。分類については練習もします。

授業計画

- 第1回 情報化社会と学校図書館メディア
- 第2回 学校図書館メディアの種類
- 第3回 学校図書館メディアの構築
- 第4回 学校図書館メディアの組織化
- 第5回 分類法と分類作業(1)分類法の歴史と種類
- 第6回 分類法と分類作業(2)日本十進分類法 (NDC) の概要
- 第7回 図書記号および別置記号
- 第8回 件名法と件名作業(1)件名法の歴史
- 第9回 件名法と件名作業(2)基本件名標目表 (BSH) の概要
- 第10回 目録法および目録の作成 日本目録規則 (NCR) の概要
- 第11回 オンライン蔵書目録 OPAC の考え方
- 第12回 フィンランドにおける学校図書館メディアの活用
- 第13回 ファイリング・システムなど一点資料の整理方法
- 第14回 一点資料の電子目録
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

授業への参加状況 (30%)、試験・提出物 (70%) などにより総合的に評価します。

履修にあたっての注意

授業内容について状況（履修者の興味関心など）を見て予定を変更することはあります。

教科書

なし

授業のねらい

現代社会においては、私たちのまわりを膨大な量と種類の情報がとびかう。そうした環境の中で、必要な課題を見出し、その解決のためにどういう情報をどのように入手、整理し、組み立てて行けばよいのだろうか。メディア活用能力は、まわりに振り回されず主体的に生きる上で、非常に重要な意味をもつ。調べ学習や総合学習などの指導に限らず、自分で調べ、その答えを自ら見出す力の育成は、学習指導の根幹部分につながるといえる。学校図書館の司書教諭として、子どもたちに対してだけでなく、他の教員に対しても有効なサポートが行えるよう、理論にとどまらずさまざまな実践事例を通して学習する。

到達目標

自らテーマを設定し、その問題解決のために学校図書館メディアを活用することができる。その学習などを通して自分と社会との接点を認識することができる。

授業方法

内容に応じて、講義、演習、発表を織りまぜながら展開する。

授業計画

- 第1回 講義のねらいと展開～学習指導と学校図書館
- 第2回 メディアとは何か
- 第3回 メディア活用能力の意義
- 第4回 学校図書館メディアの種類と活用
- 第5回 レファレンスサービスの方法
- 第6回 レファレンスブックの活用
- 第7回 教科指導と学校図書館メディア
- 第8回 調べもの学習と総合学習
- 第9回 学校図書館と地域資料サポート
- 第10回 地域学習と生涯学習
- 第11回 レファレンス演習(1)課題の発見
- 第12回 レファレンス演習(2)情報・資料の活用
- 第13回 レファレンス演習(3)まとめと伝達・保存
- 第14回 レファレンス演習実践
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

定期試験（50%）、レポートなどの提出（30%）、授業への取り組み方（20%）により評価する。

履修にあたっての注意

自分が知りたいことは何か、それを調べるにはどのような方法があるのか、などについて折にふれて考えるようにする。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

教科書
とくに使用せず、必要に応じてプリント等を配布する。
参考書
講義の中で紹介する。

授業のねらい

教育は、家庭教育、学校教育、社会教育をはじめ、さまざまな分野・領域において行われている。その中で学校教育とはどのようなものなのか、多様な事例を通して学ぶ。また現代における学校およびそこの教育において、学校図書館が担う役割と可能性を理解する。

到達目標

学校教育とはどのようなものかを理解する。そのうえで学校図書館はどのような位置づけにあるのかを考え、そこで学校司書が果たす役割について、講義や演習・課題等を通して理解する。

授業方法

講義形式を基本とし、内容項目に応じて演習、発表を織りまぜながら展開

授業計画

- 第1回 はじめに～学校教育とは
- 第2回 学校教育の意義と役割
- 第3回 家庭教育と社会教育
- 第4回 教育行政と学校教育
- 第5回 教育課程と学習指導要領
- 第6回 学校教育における学校図書館の意義と役割
- 第7回 教員を取り巻く状況と学校司書の意義と役割
- 第8回 各種指導への支援と学校図書館
- 第9回 学校教育と地域
- 第10回 学校教育と生涯学習
- 第11回 学校教育に関わる現代的諸課題と学校図書館
- 第12回 学校教育における学校図書館の取り組み～演習(1)
- 第13回 学校教育における学校図書館の取り組み～演習(2)
- 第14回 学校教育における学校図書館の取り組み～演習(3)
- 第15回 まとめ～学校図書館の可能性

成績評価の方法

授業参加状況 (30%) 各種提出物 (30%) 試験または課題レポート (40%)

履修にあたっての注意

自分の小・中・高校時代における学校および学校図書館をふり返る。

教科書・参考書に関する備考

教科書はとくに使用せず、必要に応じて資料を配布
参考書は、講義のなかで紹介する

<https://portal.fujijoshi.ac.jp/campusweb/top.do>